

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第205集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第36集

上栗須寺前遺跡群 III

3区 (藤岡市上栗須寺前)

藤岡扇状地扇端部における古代～中世を中心とした集落址の調査

第1分冊 《本文編》

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第205集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第36集

上栗須寺前遺跡群Ⅲ

3区(藤岡市上栗須寺前)

藤岡扇状地扇端部における古代～中世を中心とした集落址の調査

第1分冊《本文編》

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

序

平成5年3月27日、上信越自動車道・藤岡I・C－佐久I・C間69.5kmが開通いたしました。古代、この道は東山道が拓かれて、都から東国経営のためにもたらされた情報の幹線路として中心的な役割を果たした地域でありました。

そして、今回、開通した上信越自動車道は、群馬・長野両県境の沿線市町村を関越自動車道を経由して首都圏・東京と結ぶ幹線道路として大きな役割を果たす動脈として蘇りました。

当然、この路線の特色として、群馬・長野県境を跨ぐ急峻な山岳地形とともに、路線全体に分布する大量の埋蔵文化財の調査が挙げられることになりました。

発掘調査期間は68か月にもおよび、発掘調査された遺跡は75か所で、発掘面積は約123万㎡、東京ドーム40箇分に相当しました。また、「東の吉野ヶ里」といわれる富岡市の中高瀬観音山遺跡については、日本道路企団の英断により双設トンネルに構造変更して、その保存、活用への道を開いていただきました。

関越自動車道から分岐して初めての遺跡である上栗須寺前遺跡周辺は、旧小野村に属し、中世の御厨として、また近世、藤岡瓦の生産地として知られていました。また北から南に本遺跡を縦断する主要地方道前橋・長瀬線の工事に伴う発掘調査においても古墳時代から中世にかけて多くの埋蔵文化財の存在が明らかにされてきました。

本遺跡の発掘調査は昭和63年度から平成3年度まで継続しました。予想どおり縄文時代から近世・近代まで数多くの遺構と遺物が発見され、記録されました。

調査された資料の整理、報告書作成作業は平成3年度から始まり、三分冊のうちの二分冊が『上栗須遺跡群Ⅰ』『上栗須遺跡群Ⅱ』として上梓いたしました。

今回、最終の報告書として『上栗須遺跡群Ⅲ』が刊行されることになりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまで、日本道路企団東京第二建設局、群馬県教育委員会、藤岡市教育委員会、地元関係者の方々より数々のご指導、ご協力、ご援助をいただきました。ここに深甚なる感謝の意を表すとともに、本報告書が地元の藤岡市、並びに本県の地域史解明の資料として広く活用されることを祈念いたします。

平成8年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

- 1、本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「上栗須寺前遺跡群」の発掘調査報告書である。
- 2、「上栗須寺前遺跡群」は群馬県藤岡市大字上栗須小字寺前を中心に遺跡が分布していたことから命名されたものである。
- 3、本書の「上栗須寺前遺跡群Ⅲ」の調査地番は藤岡市大字上栗須の小字・寺前167、168と小字・寺前244～247、253～257、259、261、263、20～22、26～30、32～34、36の畑地である。
- 4、発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に再委託して実施したものである。
- 5、実際の発掘調査は関越自動車道上越線関連の埋蔵文化財調査を実施するために設置された関越道上越線調査事務所（群馬県多野郡吉井町南陽台3-15-8）が担当した。

6、調査期間および担当者

（期 間）昭和63年度 昭和63年11月14日～昭和64年3月24日

平成元年度 平成元年4月7日～平成2年3月31日

平成2年度 平成2年4月2日～平成3年3月29日

平成3年度 平成3年4月3日～10月25日

（担当者）昭和63年度 須田 茂（専門員） 石塚久則（主任調査研究員） 井上昌美（調査研究員）

平成元年度 岸田治男（専門員） 石塚久則（専門員） 井上昌美（調査研究員）

平成2年度 石塚久則（専門員） 山口逸弘（主任調査研究員） 井上昌美（調査研究員）

平成3年度 石塚久則（専門員） 斎藤利昭（主任調査研究員） 小林 徹（調査研究員）

7、整理期間および担当者

（期 間）平成6年度 平成6年4月1日～平成7年3月31日

平成7年度 平成7年4月1日～平成8年3月31日

（担当者）石塚久則（主幹兼専門員）

8、報告書作成

編 集 石塚久則（主幹兼専門員）

本文執筆 石塚久則（主幹兼専門員）

本文執筆 中束耕志（調査研究第4課長）

本文編 第Ⅱ章 第1節

本文執筆 高島英之（主任調査研究員）

本文編 第Ⅱ章 第2節 第2目

本文執筆 大江正行（主幹兼専門員）

本文編 第Ⅱ章 第2節 第2目

本文執筆 坂井 隆（専門員）

本文編 第Ⅱ章 第3節

本文執筆 宮崎重雄（群馬県立大間々高等学校教諭）

本文編 第Ⅲ章 第1節

本文執筆 藤根 久（パレオ・ラボ）

本文編 第Ⅲ章 第2節

本文執筆 飯島静男（群馬県地質研究会）

本文編 第Ⅲ章 第3節

本文執筆 新倉明彦（主任調査研究員）

本文編 第Ⅱ章 第3節 第3目 G

遺構写真 岸田治男 石塚久則 山口逸弘 斎藤利昭 井上昌美

遺物写真 佐藤元彦（主任技師）

遺物保存処理 関 邦一・土橋まり子・小材浩一・小沼恵子（普及資料課）

スリースペース班 長沼久美子・伊藤淳子・岩淵節子・萩原光枝・立川千栄子

南雲富子・光安文子

報告書作成 阿部由美子・関 正江・萩原鈴代・金子加代・横坂英実・田中のぶ子・高橋桂子

根井美智子・金子ミツ子・橋爪美頼・大沢亜矢子

9、発掘調査には下記の方々の協力があつた。記して謝意を表す次第である。

相場利為	青木秀邦	青木清三	秋山元治	新井 勉	飯島玉吉	石田 貢
石野 鼎	板垣利平治	市川宝作	伊藤啓作	稲葉忠作	内田新作	内田誠一
大竹周一	大山貞一	岡野貞二	小瀬智志	小野里岩男	金田治悦	川島幸三郎
河西三千哉	川端惣太郎	木部 清	木村茂男	久保正雄	窪田圭造	黒沢 明
小泉秀雄	小泉 貢	小暮 暁	小暮卷太	小畑清七	小林松三	佐野勝次郎
斉藤 毅	斉藤守治	斉藤政広	酒井八郎	境原三津夫	設楽明史	須藤治雄
関口八二	高井達雄	高山富二	田島暉男	田村古方	土屋定彦	土屋正市
徳江豊太郎	中山勇次郎	楡井弘彦	野村賢治	橋田威雄	福島 昇	古市忠蔵
細谷文雄	堀越勝定	真下 昭	町田茂夫	松井要一	水科瀬太郎	宮崎安旦
宮嶋義保	百瀬賢一	森村伊勢雄	山田常治	山本 廣	横田義雄	吉田力男
吉野春雄						
新井峰子	天立アグリ	砂盃俊子	石垣幸子	石野ミツエ	石原ヒサ子	石関栄子
伊田ラク	一の瀬栄子	市原良子	井野佳代子	井野みつゑ	入江由起	大塚みつゑ
大谷靖子	岡田早苗	岡本育子	小川公子	小野里イワ	小野里ミト	柏戸なか
加藤明美	金井ソノ	金井とく	金沢カオル	金嶋阪江	上村裕子	川端いくの
川端キヨ子	川浦モト	川田佳子	河野富江	木下シゲ	工藤博子	小坂橋幸
小金沢ツヤ	小林貴美子	小林仲子	斉藤邦枝	斉藤敏子	坂井アキ子	酒井ゆき
作本 潤	桜井はる枝	佐藤富子	佐野慶子	塩原絹代	清水かよ子	清水千代
清水ミツ江	下山きぬ子	鈴木ヤス	鈴木ヨシエ	須藤よしの	関根美江	関端幸子
園部節子	高田みや子	高橋まさ子	田口トシ江	田島八重子	田嶋紀代子	高山和子
田原澄子	塚田より	角田ふじ江	出浦由起子	戸田節子	外山妙子	長井明子
中島マサエ	中曾根美江	中村みどり	奈良あい子	奈良トミ井	奈良富代	奈良芳子
根岸すみ江	橋本ツナヨ	羽鳥かつ江	服部孝子	原田房子	細谷貞子	
細谷友江	細谷ふさ子	堀越美恵子	町田キクエ	町田玲子	松田正子	松原千矢子
水島貞子	宮下美枝子	宮本サトノ	武藤光子	森 利子	森由里子	矢島アイ子
矢端敏子	矢端八重子	山岸とし子	山崎トモエ	横室静枝	吉沢美枝子	吉田悦子
吉田貴恵子	吉原君子	渡辺君江	綿貫智子	遠藤ユキ子		

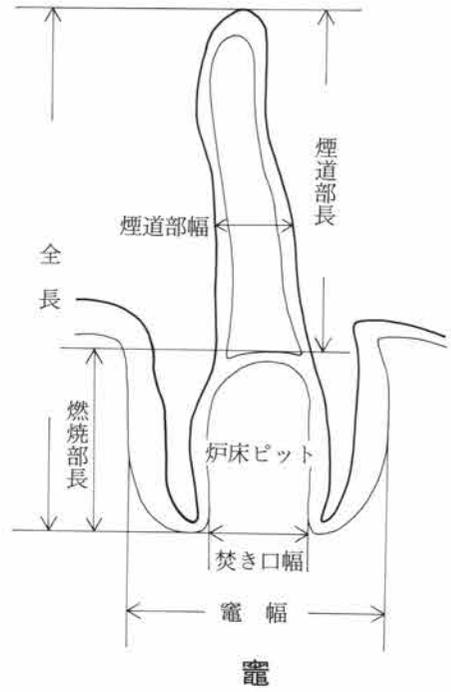
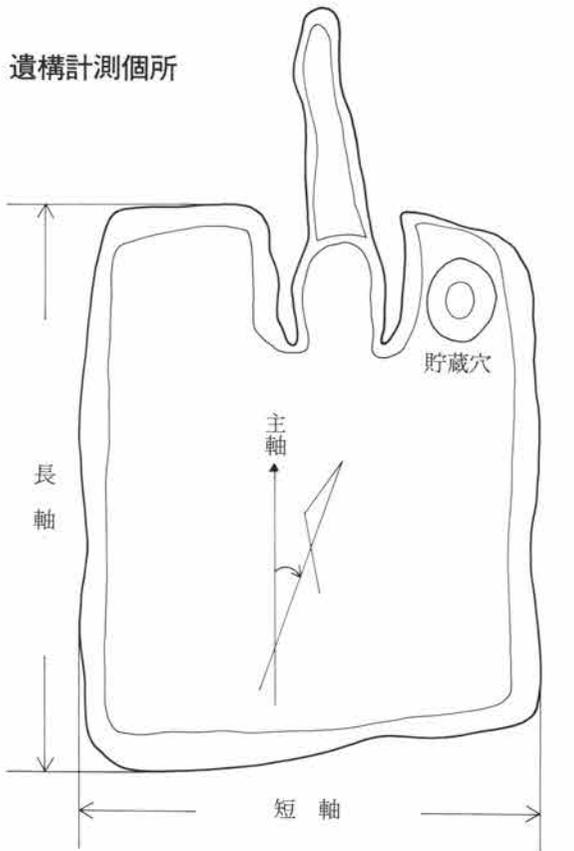
10、報告書作成には下記の方々のご指導・ご教示があつた。記して謝意を表す次第である。

大橋康二	荒川正夫	手塚直樹	足立順司	柴田龍司	浅野晴樹	今平利幸
小野田勝一	小島幸雄	小田由美子	宮本佐知子	宮田 毅	志村 哲	茂木由行
新井 仁						

凡 例

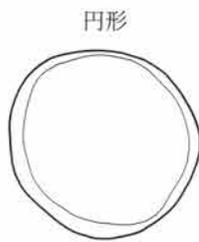
- 1、本報告書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴って事前に発掘調査された7つの発掘調査区の中の第3区の発掘調査報告書で「上栗須寺前遺跡群Ⅲ」と呼ぶ。
- 2、すでに「上栗須寺前遺跡群Ⅰ」では発掘調査区の4、5、6、7区を、「上栗須寺前遺跡群Ⅱ」では発掘調査区の1、2区を報告している。
- 3、発掘調査で出土した遺物のすべては出土位置を全点記録してある。今回の報告ではその時の成果を十分に生かすことができなかつた。これらの遺物や記録類のすべては群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。今後、これらの資料の活用をお願いしたい。
- 4、本遺跡群は藤岡市大字上栗須、篠塚、下大塚、本動堂にまたがる。
- 5、遺跡名については字名のうちで大字寺前を取り上げ「上栗須寺前遺跡群」と総称する。
- 6、本報告書は「上栗須寺前遺跡群」のうちの大字上栗須地区の北半分の調査成果を掲載している。
- 7、「上栗須寺前遺跡群」の発掘区の設定は、国家座標系第Ⅳ系をもとに東西80m×南北60mの大グリッドを設定し、さらに東西、南北を10等分して東西8m×南北6mの小グリッドを最小単位としたものである。グリッドは東西をアルファベットで南北をアラビア数字で呼称し、各調査区グリッドの国家座標における位置は「上栗須寺前遺跡群Ⅰ」の付図の全体図中に記載した。なお発掘調査の詳細については、「上栗須寺前遺跡群Ⅰ」第1分冊本文編に具体的に掲載した。
- 8、本報告書における遺構番号は発掘調査時に各区ごとに通番で付されたものを原則として使用し、遺物番号は整理時に通番でふりなおした。
- 9、挿図中に使用した方位は座標北である。また、竪穴住居の方位については竈付設に直交する軸線の方位を採用した。
- 10、竪穴住居の面積算出については、1/40平面図上でプランメーター（ローラー極式・レンズ式）による2回計測の平均値を使用し、小数点以下3桁は四捨五入してある。
- 11、遺構及び遺物実測図の縮尺と遺構断面図類の標高は、各図中に表示してある。
- 12、表中の土器の色調は、農林省農林水産技術会議事務所・（財）日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。
- 13、遺構の計測値及び記載事項については以下の通りとした。
 - 位置はグリッドの位置を示す。
 - 方位は竈の向きを主軸とし、座標北に対する傾きを示す。
 - 柱穴は住居内に表示し、計測値を表記した。
 - 周溝は掘り込みの有るものについて記入した。
 - 床面は踏みならされた土の状態を文章で表記した。
 - 掘り方は省略してある。
 - 竈位置は付設される各辺での位置を記入し、竈は燃焼部と煙道部の計測値と煙道部への立ち上がり、燃焼部から煙道口部分までの高さなどを記入した。
 - 炉床ピットは竈燃焼部分下層の船底状土坑をさす。

遺構計測個所



住居跡

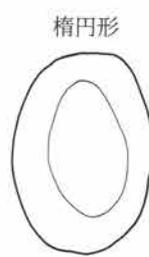
土坑



a



b



c



d

2 時代別遺構の分布

- A 遺構種別 ア 溝・堀
 イ 墓
 ウ 掘立柱建物
 エ 土坑

B 時代ごとの遺構

3 特殊遺物

- A 5921号土坑一括埋納遺物 ア 埋納遺物
 イ 出土状態の特徴
 ウ 他の出土例
- B 5926号土坑一括埋納遺物及び5457号土坑出土銅鏡
 ア 5926号土坑埋納遺物
 イ 出土状態の意味
 ウ 5457号土坑出土鏡
 エ 小結

C 銭 貨

- D その他金属器など ア 銅製伏鉦 (2206)
 イ 鉛銃弾 (2205)
 ウ キセル・ガラス瓶

E 渥美蓮弁文壺 (1398)

F 釣り鐘型瓦灯 (1387)

G 石製品瓦類概観

4 まとめ

- A 地理的特徴 ア 上栗須村 イ 緑野郡
- B 文献資料 ア 中世 イ 近世 ウ 近代
- C 各時代の概観 ア 中世 イ 近世 ウ 近代

第III章 考 察

第1節	上栗須寺前遺跡3区出土の馬歯・馬骨	宮崎重雄	493
第2節	上栗須寺前遺跡3区出土の人骨・人歯	宮崎重雄	496
第3節	群馬県内出土土器類の胎土特性について	藤根 久	498
第4節	上栗須寺前遺跡の岩石	飯島静男	503
第5節	上栗須寺前遺跡の考古学		508

插图目次

第1图	遺跡周辺小字図	2	第60图	56号住居址(1)	89
第2图	発掘区周辺コンタ図	4	第61图	56号住居址(2)竈	90
第3图	発掘区設定図	6	第62图	57号住居址	91
第4图	発掘区設定図	8	第63图	59号住居址	92
第5图	基本土層	18	第64图	60号住居址	94
第6图	石器実測図(1)	22	第65图	61号住居址	95
第7图	石器実測図(2)	23	第66图	62号住居址(1)	96
第8图	1号住居址(1)	26	第67图	62号住居址(2)	97
第9图	1号住居址(2)竈	27	第68图	63号住居址	98
第10图	2号住居址	28	第69图	64号住居址	99
第11图	3号住居址(1)	29	第70图	65号住居址	101
第12图	3号住居址(2)竈	30	第71图	66号住居址(1)	102
第13图	4号住居址	31	第72图	66号住居址(2)竈	103
第14图	5号住居址(1)	32	第73图	67号住居址	104
第15图	5号住居址(2)竈	33	第74图	68号住居址	105
第16图	6A・6B号住居址	35	第75图	69・70号住居址	106
第17图	7号住居址(1)	36	第76图	71号住居址	108
第18图	7号住居址(2)竈	37	第77图	72号住居址	109
第19图	8号住居址	38	第78图	74号住居址	110
第20图	9号住居址	40	第79图	75・76号住居址	111
第21图	11号住居址	41	第80图	77号住居址	112
第22图	12号住居址	42	第81图	78号住居址	114
第23图	13号住居址	43	第82图	79号住居址(1)	115
第24图	14・15号住居址(1)	45	第83图	79号住居址(2)竈	116
第25图	14・15号住居址(2)竈	46	第84图	80・84号住居址(1)	117
第26图	16号住居址	47	第85图	80・84号住居址(2)竈	118
第27图	17・18号住居址(1)	49	第86图	81号住居址	119
第28图	17・18号住居址(2)竈	50	第87图	82・110号住居址	121
第29图	19号住居址	51	第88图	83号住居址(1)	122
第30图	20号住居址	52	第89图	83号住居址(2)竈	123
第31图	22号住居址	53	第90图	85号住居址(1)	124
第32图	24号住居址	56	第91图	85号住居址(2)竈	125
第33图	25・73号住居址	57	第92图	86号住居址	126
第34图	26号住居址	58	第93图	87号住居址	127
第35图	28号住居址	59	第94图	88号住居址	128
第36图	29号住居址	60	第95图	89号住居址	129
第37图	30号住居址	61	第96图	90号住居址	131
第38图	31号住居址	64	第97图	91・93号住居址(1)	132
第39图	32号住居址	65	第98图	91・93号住居址(2)	133
第40图	35A・35B号住居址	66	第99图	92号住居址	134
第41图	34号住居址	67	第100图	94号住居址	135
第42图	36号住居址	68	第101图	96号住居址	136
第43图	37号住居址	69	第102图	97号住居址	137
第44图	38号住居址	71	第103图	98号住居址(1)	140
第45图	40号住居址(1)	72	第104图	98号住居址(2)竈	141
第46图	40号住居址(2)竈	73	第105图	99号住居址	142
第47图	41号住居址	74	第106图	100号住居址	143
第48图	42号住居址	75	第107图	101号住居址	144
第49图	43号住居址	76	第108图	102・106住居址	145
第50图	44号住居址(1)	77	第109图	104・107住居址	146
第51图	44号住居址(2)竈	78	第110图	108号住居址(1)	149
第52图	45号住居址	79	第111图	108号住居址(2)竈	150
第53图	46号住居址	80	第112图	109号住居址	151
第54图	47号住居址	81	第113图	111号住居址(1)	152
第55图	48号住居址	82	第114图	111号住居址(2)竈	153
第56图	49号住居址	84	第115图	116・117号住居址	154
第57图	52号住居址	85	第116图	118号住居址	157
等58图	54号住居址	86	第117图	119号住居址	158
第59图	55号住居址	88	第118图	120号住居址	159

第119图	121·122·123号住居址(1)	160	第181图	178号住居址	229
第120图	121·122·123号住居址(2)竈	161	第182图	179号住居址	230
第121图	124号住居址(1)	162	第183图	180号住居址	231
第122图	124号住居址(2)	163	第184图	181号住居址(1)	233
第123图	125号住居址(1)	166	第185图	181号住居址(2)竈	234
第124图	125号住居址(2)竈	167	第186图	182号住居址	235
第125图	126·127号住居址(1)	168	第187图	184号住居址	236
第126图	126·127号住居址(2)	169	第188图	185号住居址(1)	237
第127图	128号住居址(1)	170	第189图	185号住居址(2)竈	238
第128图	128号住居址(2)竈	171	第190图	186号住居址	239
第129图	130号住居址(1)	172	第191图	187·188号住居址(1)	240
第130图	130号住居址(2)竈	173	第192图	187·188号住居址(2)竈	241
第131图	131号住居址	174	第193图	掘立柱建物址(1)	249
第132图	132·189号住居址	175	第194图	掘立柱建物址(2)	250
第133图	133号住居址	176	第195图	掘立柱建物址(3)	251
第134图	134号住居址(1)	177	第196图	掘立柱建物址(4)	252
第135图	134号住居址(2)竈	178	第197图	掘立柱建物址(5)	253
第136图	135·136·145号住居址(1)	179	第198图	掘立柱建物址土層断面图(1)	254
第137图	135·136·145号住居址(2)	180	第199图	掘立柱建物址土層断面图(2)	255
第138图	137号住居址	182	第200图	掘立柱建物址土層断面图(3)	256
第139图	138号住居址	183	第201图	棚列夷測图	257
第140图	139号住居址	184	第202图	土坑集成图(1)	270
第141图	140号住居址	185	第203图	土坑集成图(2)	271
第142图	141号住居址	186	第204图	土坑集成图(3)	272
第143图	142号住居址	187	第205图	土坑集成图(4)	273
第144图	143号住居址	189	第206图	土坑集成图(5)	274
第145图	144号住居址(1)	190	第207图	土坑集成图(6)	275
第146图	144号住居址(2)竈	191	第208图	土坑集成图(7)	276
第147图	146号住居址	192	第209图	土坑集成图(8)	277
第148图	147号住居址(1)	193	第210图	土坑集成图(9)	278
第149图	147号住居址(2)竈	194	第211图	土坑集成图(10)	279
第150图	148号住居址(1)	195	第212图	土坑集成图(11)	280
第151图	148号住居址(2)竈	196	第213图	土坑集成图(12)	281
第152图	149号住居址	197	第214图	円型周溝墓	282
第153图	150·151号住居址(1)	198	第215图	出土土器種類一覽表	285、286
第154图	150·151号住居址(2)竈	199	第216图	住居址出土遺物 土器(1)	287
第155图	152号住居址	200	第217图	住居址出土遺物 土器(2)	288
第156图	153号住居址	201	第218图	住居址出土遺物 土器(3)	289
第157图	155号住居址	202	第219图	住居址出土遺物 土器(4)	290
第158图	156号住居址	204	第220图	住居址出土遺物 土器(5)	291
第159图	157号住居址(1)	205	第221图	住居址出土遺物 土器(6)	292
第160图	157号住居址(2)竈	206	第222图	住居址出土遺物 土器(7)	293
第161图	158号住居址	207	第223图	住居址出土遺物 土器(8)	294
第162图	159号住居址	208	第224图	住居址出土遺物 土器(9)	295
第163图	160号住居址	209	第225图	住居址出土遺物 土器(10)	296
第164图	161·162号住居址(1)	210	第226图	住居址出土遺物 土器(11)	297
第165图	161·162号住居址(2)竈	211	第227图	住居址出土遺物 土器(12)	298
第166图	163号住居址	212	第228图	住居址出土遺物 土器(13)	299
第167图	164号住居址	213	第229图	住居址出土遺物 土器(14)	300
第168图	165号住居址	214	第230图	住居址出土遺物 土器(15)	301
第169图	166号住居址(1)	215	第231图	住居址出土遺物 土器(16)	302
第170图	166号住居址(2)竈	216	第232图	住居址出土遺物 土器(17)	303
第171图	167号住居址	217	第233图	住居址出土遺物 土器(18)	304
第172图	168号住居址	218	第234图	住居址出土遺物 土器(19)	305
第173图	169号住居址(1)	220	第235图	住居址出土遺物 土器(20)	306
第174图	169号住居址(2)竈	221	第236图	住居址出土遺物 土器(21)	307
第175图	170号住居址	222	第237图	住居址出土遺物 土器(22)	308
第176图	171·172·174号住居址(1)	223	第238图	住居址出土遺物 土器(23)	309
第177图	171·172·174号住居址(2)	224	第239图	住居址出土遺物 土器(24)	310
第178图	173号住居址	225	第240图	住居址出土遺物 土器(25)	311
第179图	175号住居址	227	第241图	住居址出土遺物 土器(26)	312
第180图	177号住居址	228	第242图	住居址出土遺物 土器(27)	313

第243図	住居址出土遺物	土器(28)	314	第305図	遺構出土の中世以降遺物(15)	386
第244図	住居址出土遺物	土器(29)	315	第306図	遺構出土の中世以降遺物(16)	387
第245図	住居址出土遺物	土器(30)	316	第307図	遺構出土の中世以降遺物(17)	388
第246図	住居址出土遺物	土器(31)	317	第308図	遺構出土の中世以降遺物(18)	389
第247図	住居址出土遺物	土器(32)	318	第309図	遺構出土の中世以降遺物(19)	390
第248図	住居址出土遺物	土器(33)	319	第310図	遺構出土の中世以降遺物(20)	391
第249図	住居址出土遺物	土器(34)	320	第311図	遺構出土の中世以降遺物(21)	392
第250図	住居址出土遺物	土器(35)	321	第312図	遺構出土の中世以降遺物(22)	393
第251図	住居址出土遺物	土器(36)	322	第313図	遺構出土の中世以降遺物(23)	394
第252図	住居址出土遺物	土器(37)	323	第314図	遺構出土の中世以降遺物(24)	395
第253図	住居址出土遺物	土器(38)	324	第315図	遺構出土の中世以降遺物(25)	396
第254図	住居址出土遺物	土器(39)	325	第316図	遺構出土の中世以降遺物(26)	397
第255図	住居址出土遺物	土器(40)	326	第317図	遺構出土の中世以降遺物(27)	398
第256図	住居址出土遺物	土器(41)	327	第318図	遺構出土の中世以降遺物(28)	399
第257図	住居址出土遺物	土器(42)	328	第319図	遺構出土の中世以降遺物(29)	400
第258図	住居址出土遺物	土器(43)	329	第320図	遺構出土の中世以降遺物(30)	401
第259図	住居址出土遺物	土器(44)	330	第321図	遺構出土の中世以降遺物(31)	402
第260図	住居址出土遺物	土器(45)	331	第322図	遺構出土の中世以降遺物(32)	403
第261図	住居址出土遺物	土器(46)	332	第323図	遺構出土の中世以降遺物(33)	404
第262図	住居址出土遺物	土器(47)	333	第324図	遺構出土の中世以降遺物(34)	405
第263図	住居址出土遺物	土器(48)	334	第325図	遺構出土の中世以降遺物(35)	406
第264図	住居址出土遺物	土器(49)	335	第326図	遺構出土の中世以降遺物(36)	407
第265図	住居址出土遺物	土器(50)	336	第327図	遺構出土の中世以降遺物(37)	408
第266図	住居址出土遺物	土器(51)	337	第328図	遺構出土の中世以降遺物(38)	409
第267図	溝・土坑出土遺物	土器(1)	338	第329図	遺構出土の中世以降遺物(39)	410
第268図	溝・土坑出土遺物	土器(2)	339	第330図	遺構出土の中世以降遺物(40)	411
第269図	溝・土坑出土遺物	土器(3)	340	第331図	遺構出土の中世以降遺物(41)	412
第270図	溝・土坑出土遺物	土器(4)	341	第332図	遺構出土の中世以降遺物(42)	413
第271図	墨書土器		344	第333図	遺構出土の中世以降遺物(43)	414
第272図	古代瓦(1)		346	第334図	遺構出土の中世以降遺物(44)	415
第273図	古代瓦(2)		347	第335図	遺構出土の中世以降遺物(45)	416
第274図	鉄製品実測図(1)		351	第336図	遺構出土の中世以降遺物(46)	417
第275図	鉄製品実測図(2)		352	第337図	遺構出土の中世以降遺物(47)	418
第276図	鉄製品実測図(3)		353	第338図	遺構出土の中世以降遺物(48)	419
第277図	鉄製品実測図(4)		354	第339図	遺構出土の中世以降遺物(49)	420
第278図	石製品実測図(1)		355	第340図	遺構出土の中世以降遺物(50)	421
第279図	石製品実測図(2)		356	第341図	遺構出土の中世以降遺物(51)	422
第280図	石製品実測図(3)		357	第342図	グリッド出土の中世以降遺物(1)	423
第281図	石製品実測図(4)		358	第343図	グリッド出土の中世以降遺物(2)	424
第282図	石製品実測図(5)		359	第344図	中国陶磁の時期区分と器種変化	425
第283図	石製品実測図(6)		360	第345図	国産陶磁の時期区分と器種変化(1)	426
第284図	石製品実測図(7)		361	第346図	国産陶磁の時期区分と器種変化(2)	427
第285図	紡錘車実測図		362	第347図	国産陶磁の時期区分と器種変化(3)	428
第286図	土錘実測図		363	第348図	国産土器の時期区分と器種変化	429
第287図	鈎帯実測図		364	第349図	中近世の溝・堀	431
第288図	金環実測図		364	第350図	墓坑図(1)	436
第289図	磨製石鏃実測図		364	第351図	墓坑図(2)	437
第290図	石錘実測図		365	第352図	墓坑図(3)	438
第291図	遺構出土の中世以降遺物(1)		372	第353図	墓坑図(4)	439
第292図	遺構出土の中世以降遺物(2)		373	第354図	墓坑図(5)	440
第293図	遺構出土の中世以降遺物(3)		374	第355図	墓坑図(6)	441
第294図	遺構出土の中世以降遺物(4)		375	第356図	墓坑図(7)	442
第295図	遺構出土の中世以降遺物(5)		376	第357図	墓坑図(8)	443
第296図	遺構出土の中世以降遺物(6)		377	第358図	墓坑図(9)	444
第297図	遺構出土の中世以降遺物(7)		378	第359図	墓坑図(10)	445
第298図	遺構出土の中世以降遺物(8)		379	第360図	中近世の時期別遺構分布	447
第299図	遺構出土の中世以降遺物(9)		380	第361図	5250・5921・5926号土坑遺物出土状態	449
第300図	遺構出土の中世以降遺物(10)		381	第362図	石仏実測図	463、464
第301図	遺構出土の中世以降遺物(11)		382	第363図	石仏コンタ図	465、466
第302図	遺構出土の中世以降遺物(12)		383	第364図	板碑実測図(1)	467
第303図	遺構出土の中世以降遺物(13)		384	第365図	板碑実測図(2)	468
第304図	遺構出土の中世以降遺物(14)		385	第366図	石造物実測図(1)	469

第367図	石造物実測図(2)……………	470
第368図	石造物実測図(3)……………	471
第369図	石造物実測図(4)……………	472
第370図	石造物実測図(5)……………	473
第371図	石白類実測図(1)……………	474
第372図	石白類実測図(2)……………	475
第373図	石白類実測図(3)……………	476
第374図	硯実測図……………	477
第375図	石盤実測図……………	478
第376図	中世瓦実測図……………	478
第377図	近世・近代瓦実測図(1)……………	479
第378図	近世・近代瓦実測図(2)……………	480
第379図	近世・近代瓦実測図(3)……………	481
第380図	近世・近代瓦実測図(4)……………	482
第381図	近世・近代瓦実測図(5)……………	483
第382図	旧上栗須村の小字境と調査範囲……………	485
第383図	周辺の古道と城館・寺院跡……………	487
第384図	県内出土土器類の胎土分析……………	501
第385図	桃成の甘い須恵器および埴輪胎土中の粒子組成図 (全分類群を基数とした百分率で表示) ……	502
第386図	鑷川および神流川流域地質図……………	507
第387図	上栗須寺前遺跡と発掘調査された周辺の遺跡……………	511
第388図	浄雲寺山門正面図・側面図(東側)実測図 ……	513、514
第389図	浄雲寺山門平面図実測図 ……	515、516

抄 録

1、発掘調査の概要

今回の発掘調査の報告は発掘調査区を北側から7つに区分して調査した3区の発掘調査報告書である。3区の発掘調査の字は藤岡市大字上栗須小字寺東、大字上栗須小字寺前の二つにまたがり、現存する「浄雲寺」の前面と東側に当たる。本遺跡群を代表する遺跡名の大字、小字名の命名地区でもある。この地域は寺域、住宅地、畑地と混在していた。発掘調査は昭和63年11月に開始され、調査区の買収の進捗にあわせ細切れ状態での作業を余儀なくされた。すべての調査の終了は平成3年の10月まで延長され、延べ3年間にも及んだ。3区とした本調査区の総面積は24,993㎡に及び、A、B、C、D、E、Fの6つの調査小区に区分した。

『上栗須寺前遺跡群』の報告書の名称は各発掘担当者の整理、報告作業の進行順序にあわせて4区～7区までを一括して『上栗須寺前遺跡群Ⅰ』とした。続く1区～2区を『上栗須寺前遺跡群Ⅱ』とした。そして3区のみを『上栗須寺前遺跡群Ⅲ』として本報告書を最終刊行とした。

発掘調査の対象地域は藤岡市街地の北方の小野地区から北西の美土里地区におよぶ。小野地区の1区、2区は鑄川、烏川の氾濫原に北面する地域、3区は藤岡台地の北縁部に当たる。4区～7区は美土里地区で藤岡台地の扇状地の扇尖部にあたり、鮎川の氾濫流路も見られる。藤岡市教育委員会によって本地域は詳細な分布調査がなされており今回の調査はそれらの遺跡の一部分を調査したことになった。藤岡市教育委員会が命名した小野地区No.11遺跡が今回報告の3区に該当する。とくに注目されたのは本地域には珍しい古墳群の南と西の限界を確認したいことと、寺に関する地名から、「浄雲寺」の起源がどのくらい遡れるのかと言う事であった。

2、発掘調査された遺構と遺物

縄文時代	石器の散布	
古墳時代	円形周溝遺構	1基
奈良・平安時代	住居	170軒
	掘立柱建物	15棟
	柵列	2条
中世・近世	溝	71条（時期不確定のものも含む）
	土坑	5629基（時期不確定のものも含む）

3、課 題

古代の住居は170軒と密集して検出され、確定されなかったものの掘立柱建物15棟もこの時期に帰属すると考えている。さらに住居の内の大部分が7世紀～9世紀、それも7世紀に分布の比重が高いことも興味深い。また、現「浄雲寺」周辺の下層構造が「栗須南殿」と考えられる14世紀の大規模な方形居館群であることが坂井氏によって論じられた。大溝の遺構とともに埋納されていた重要文化財級の密教法具の一括品がその考え方を補強しているかのようである。

謝 辞

本報告書3部作のうち『上栗須寺前遺跡群II』の第210図と付図18の図版の「2区 馬埴輪1号馬」が差し違えておりました。

そこで、本書『上栗須寺前遺跡群III』の付図中に補遺として図版を挿入させていただきました。大変御迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

第I章 調査概要

第1節 調査の経緯

上信越自動車道は、路線名を関越自動車道上越線と称しており、首都圏と上州、信州、越後を結ぶ高規格幹線道路である。関越自動車道上越線は東京都練馬区を起点に埼玉県、群馬県、長野県を經由して新潟県上越市に至る総延長282kmの高速道路で、このうち群馬県藤岡市の関越自動車道の分岐点から新潟県上越市に至る延長203kmの区間を上信越自動車道と呼ぶ。

この自動車道は、首都圏と群馬県の西毛、南毛地域、長野県の東信、北信地域を直接結ぶ幹線道路として、また、関越自動車道、中央自動車道、長野自動車道、北陸自動車道を高速道路のネットワークで連結することによって、広域の沿線地域の農産物の市場拡大、地場産業の育成、観光資源の利用等、産業、文化、経済の発展、振興に大きな役割を果たすと期待された。

さらに、上信越自動車道に並行して走る、国道18号、および国道254号の混雑緩和も期待された。

また、第18回の冬季オリンピック競技大会の開催地が長野県の北信地域に決定したことから、地元より早期整備にむけての期待が強くよせられ、埋蔵文化財の調査もこの期待に沿う工事計画に後押しされることとなった。

上信越自動車道は、昭和54年3月2日に整備計画が決定された後、同日付で日本道路公団に対して施工命令が出されている。それから14年の期間をかけて建設が進められ、平成5年3月27日に藤岡ICから、佐久間を開通、供用させている。

上信越自動車道のうち、関越自動車道の分岐点である藤岡ICから更埴JCTまでの118kmについては日本道路公団東京第二建設局が建設を担当し、今回開通した藤岡ICから、佐久間の69.5kmのうち17.6kmを高崎工事事務所が、25.4kmを富岡工事事務所が、26.5kmを佐久工事事務所が工事を実施した。

上信越自動車道の通過する群馬県内の市町村の路線の距離は、関越自動車道との分岐点である藤岡ICを起点として藤岡市は6.3km、吉井町は6.3km、甘楽町は4.3km、富岡市は11.6km、下仁田町は7.3km、妙義町は2.5km、松井田町は19.4km、である。

上信越自動車道の路線は、関越自動車道との分岐点である藤岡ICを起点として、藤岡市は市街地の北側から西側を走り、七興山古墳を北に望む。吉井町は市街地を北側に望む丘陵地上を走り、辛科神社を北に見る。甘楽町は国道254号を北に、南に小幡藩邸を望む。富岡市は市街地の北側の丘陵尾根を走る。北に貫前神社の杜を遠望し、南に群馬サファリワールドを観る。下仁田町の市街地に向かう国道254号は、簗川橋で分かれる。妙義町は市街地を東に、妙義山を西に観ながら北上する。松井田町妙義ICをすぎると国道18号南に並行しながら走りJR横川駅を通過する。この辺りから山は急で線形は険しくなる。横川SAを過ぎると上信越自動車道のランドマークである碓氷橋で国道18号、JR信越線を横切って通過する。景観の素晴らしい赤松沢橋や遠入川橋を通過し碓氷バイパスを跨ぐ。この辺りから裏妙義を望みながら進路は西から南に向かう。碓氷軽井沢IC付近は妙義荒船佐久国定公園の指定地である。大自然のつくりあげた急峻な山並みと近代的なトンネルや橋梁の構造物群の技術の相剋は見るものに感動を与える。碓氷軽井沢ICからは二車線区間となる。この先、技術的に難工事を極めた日暮山トンネルを通過する。群馬県と長野県は標高932m、長さ3998mの八風山トンネルである。この最高、最長のトンネルをぬけると左の眼前に佐久平のパノラマが広がり、右手前方に雄大な浅間山が迫り、佐久ICに到着する。

上信越自動車道の開通区間、群馬県藤岡市から長野県佐久市までの69.5kmの間に発掘調査箇所は75箇所におよぶ。1km弱の間に1遺跡が存在する勘定である。全発掘調査面積123万㎡は道路用地面積約481万㎡のなんと26%を占める事となり、いかにこの地域に遺跡が集中していることが証明された。

発掘調査にあたっては文化庁との協議を昭和61年4月1日付けでおこない、同回答を同年5月1日付けで受取るとともに、用地取得工程と工事工程との調整を計りながら日本道路公団、群馬県教育委員会、長野県教育委員会の三者間で埋蔵文化財の取扱いについて協議し、進行した。

群馬県側においては発掘調査箇所55箇所、約98万㎡について群馬県教育委員会の協力を得て、発掘調査を進めた。群馬県教育委員会では財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、藤岡市遺跡調査会、甘楽町遺跡調査会、富岡市遺跡調査会、下仁田町遺跡調査会、妙義町遺跡調査会、松井田町遺跡調査会に発掘調査の事業を再委託して実施した。

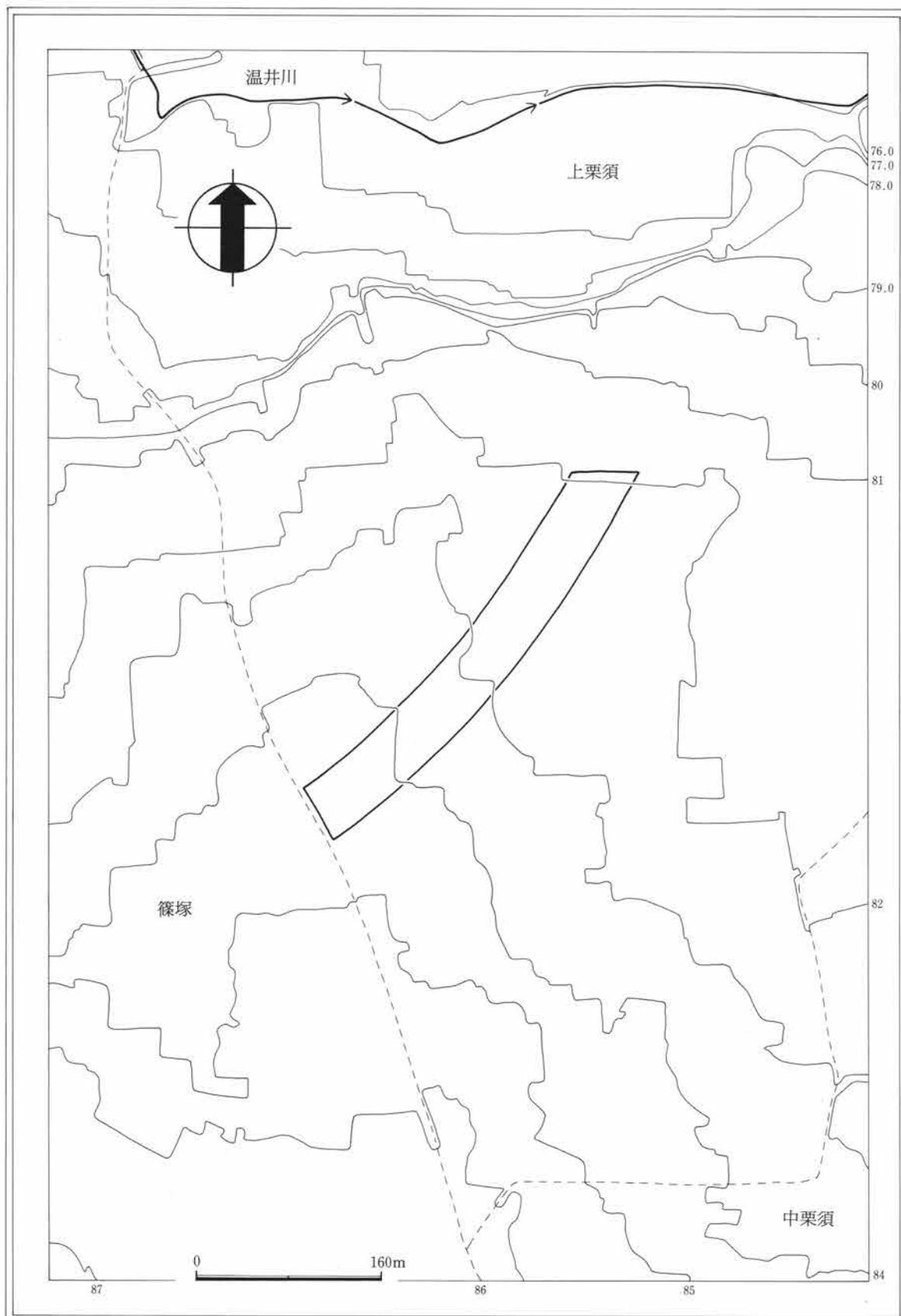
発掘期間は群馬県側が昭和61年4月から平成3年11月までの68ヶ月、長野県側が昭和61年4月から平成2年6月までの51ヶ月であった。

調査した遺跡の数を群馬県の市町村毎にまとめると以下ようになる。藤岡市では寺前遺跡、大御堂遺跡、根岸遺跡、稲荷屋敷遺跡、新堀遺跡の5遺跡である。吉井町では栗崎・八幡遺跡、平野遺跡、多比良遺跡、矢田遺跡、中山遺跡、下條遺跡、植松遺跡、上神保遺跡、羽田倉遺跡、安坪遺跡、そして試掘のみに終わった天引川東遺跡を含む11遺跡である。甘楽町では倉内遺跡、原東遺跡、原西遺跡、早道場遺跡、天神Ⅰ遺跡、天神Ⅱ遺跡、松葉・慈学寺遺跡、西原遺跡、そして試掘調査のみに終わった雄川西遺跡の9遺跡である。富岡市では田篠遺跡、内匠・下高瀬遺跡、中高瀬観音山、西平城遺跡、塩之入城東遺跡、塩之入城遺跡、井出遺跡、前畑遺跡、内出Ⅰ遺跡、丹生城西遺跡、五分一遺跡、千足遺跡、それから試掘調査のみで終わった内出Ⅱ遺跡の13遺跡である。下仁田町では杣瀬遺跡、下鎌田遺跡の2遺跡である。妙義町では八木連Ⅰ遺跡、八木連Ⅱ遺跡、古立Ⅰ遺跡、古立Ⅱ遺跡の4遺跡である。松井田町では八城遺跡、行田Ⅰ遺跡、行田Ⅱ遺跡、行田Ⅲ遺跡、五料Ⅰ遺跡、五料Ⅱ遺跡、高墓遺跡、上ノ平遺跡、萩ノ反遺跡、坂本遺跡、恩賀遺跡の11遺跡である。

それぞれ発掘調査された遺跡に優劣はないが各時代で興味を引いた遺跡を列挙しておきたい。旧石器時代の遺跡は少なく下鎌田遺跡のユニットが挙げられる。縄文時代の集落では行田Ⅰ遺跡が前期104軒の住居址が、行田Ⅱ遺跡からは中期の住居址166軒が検出されている。恩賀遺跡からは石棒製造址が4箇所検出されている。足場が危険との理由で非公開となったが全国的に見ても貴重な調査記録を提供する事となった。

弥生時代の墓址と考えられる土壌が植松遺跡から80基検出されている。いずれも中期前半に位置づくもので竈ノ谷の弥生時代開始の実態を解明するものとして興味深い。また後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓14基が群集する古墳の下層から検出された安坪遺跡がある。後期の大集落としては310軒もの住居址を検出した井出遺跡が挙げられる。古墳時代後期から平安時代の大規模集落は矢田遺跡であろう。尾根筋から傾斜面にかけて740軒もの住居址が継起している。下條遺跡では古墳が調査されている。後期の古墳で墳丘は円墳で規則的に配列された埴輪の調査も綿密で報告書にその成果が生かされている。栗崎・八幡遺跡では丘陵斜面に平安時代の瓦を葺く礎石建物6棟が検出され寺院と考えられた。中世の大規模な遺構として大御堂遺跡、西平城（大島上城）、塩之入城、杣瀬遺跡などがある。

本道路に関する発掘調査は全て記録調査後、削平の予定であったが、中高瀬観音山遺跡は調査担当者の情熱、市民団体の見学会、群馬県、群馬県教育委員会、文化庁の遺跡の重要性からの遺跡保存要望に日本道路公団も迅速に答え、国指定の史跡としての現地保存が決定された。特記するできごとであった。



第2図 発掘区周辺コンタ図

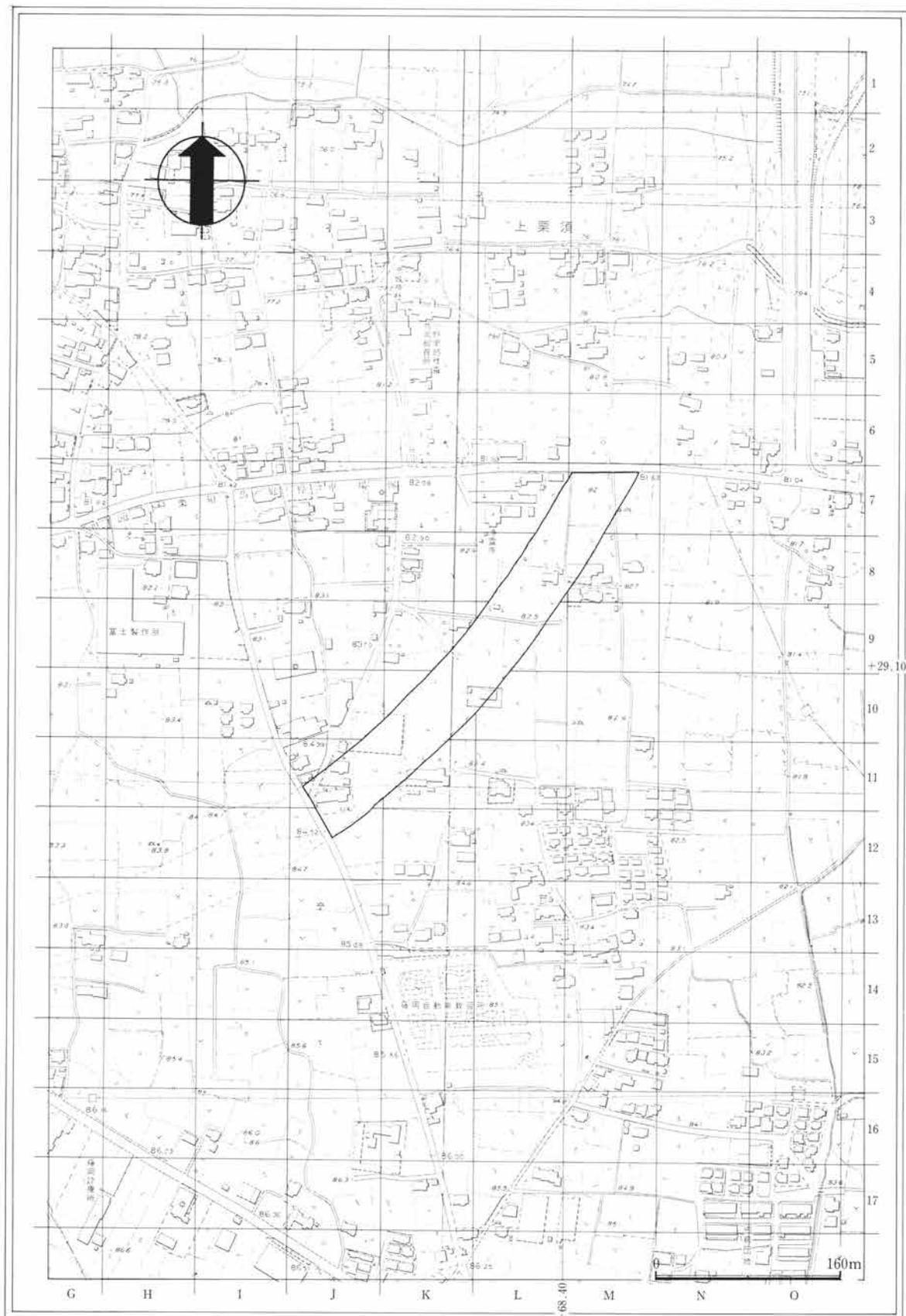
第2節 調査の経過

1 調査の方法

「上栗須寺前遺跡群」の調査に至るまでの事業の経緯と文化財行政の対応についてまとめておく。

- 1972年 上信越自動車道の藤岡～佐久間に基本計画が告示されている。
- 1974年 群馬県教育委員会（文化財保護課）は群馬県（企画部幹線交通対策課）に対して文化財保護法の遵守と国・県・市町村指定の文化財を計画から避けること、今後、文化財に関する事項については群馬県教育委員会（文化財保護課）と協議することを申し入れた。
- 1979年 第八次整備計画が策定され、日本道路公団に施工命令が出された。
- 1979年 日本道路公団は実施計画の認可を受けた。
- 1980年 県文化財保護課は計画予定地域周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を実施した。その成果を含めて県企画部交通対策課から『関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書』がでる。
- 1981年 藤岡 IC から松井田 IC 間の路線を発表した。
- 1982年 松井田 IC から佐久 IC までの路線を発表した。
- 1984年 日本道路公団より群馬県教育委員会に対して埋蔵文化財の詳細な分布調査の依頼がある。
- 1985年 県文化財保護課は分布調査の成果を検討、包蔵地を濃い分布地、淡い分布地、試掘調査を必要とする地域に区分し発掘調査の必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した。さらに県文化財保護課は埋蔵文化財の発掘調査にかかる基本方針を以下のように策定した。
- 1) 発掘調査の終了年度を1990年度とする。
 - 2) 発掘調査の中核機関は群馬県埋蔵文化財調査事業団（埋文事業団）とする。発掘調査が埋文事業団で対応できない部分については調査会方式を導入する。関係する市町村の教育委員会には進捗状況を報告、関係市町村の立場を考慮し協力を仰いでゆく。
 - 3) 埋文事業団の出張所（関越道上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併せて行う。
 - 4) 機関別の対応面積は次のとうりとする。
埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。
調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。
 - 5) 調査の実施方法は日本道路公団東京第二建設局が群馬県教育委員会に対して調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。群馬県教育委員会は群馬県埋蔵文化財調査事業団および、各遺跡調査会等と再委託契約を締結し、調査を実施する。
- 1985年 日本道路公団高崎工事事務所が藤岡市と吉井町の工事を所掌することになる。
- 1986年 群馬県埋蔵文化財調査事業団では関越道上越線調査事務所を開設し、発掘調査を開始する。
- 1991年 群馬県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査は11月の矢田遺跡の調査で全て終了（5年7ヶ月）。
- 1994年 3月で関越道上越線調査事務所を閉所。引き続き整理事業は埋文事業団で継続。
- 1997年 3月で整理事業を終了し、報告書を刊行予定。調査は25年の歳月に及んだ。

今回、私たちが発掘調査に入ることとなった藤岡市には、本自動車道は5.6km通過する。この地域はすでにこの地域の先学たちの郷土史、遺跡分布調査などの考古学調査の蓄積があった。これらの人々の成果の延長



第3図 発掘区設定図

線上に我々の調査も位置づくことを忘れてはならない。地誌を含めてまず概説しておきたい。

通過する地区を小字で列挙しておく。地名に残され、刻まれた歴史がそれぞれの地区の顔付きを事前に読み取ることができるからである。藤岡 IC から通過する大字毎に吉井町まで以下ようになる。

小野地区の大字は森、立石、立石新田、中島、森新田、中、上栗須、中栗須の8地区である。道路の通過する地区は上栗須である。その小字は薬師裏、薬師前、寺前、^{ひろかいどう}広海道である。美土里地区の大字は上大塚、中大塚、下大塚、^{もとゆるぎどう}本動堂、篠塚、上落合の6地区である。道路の通過する地区は、上大塚、中大塚、下大塚、本動堂、篠塚である。各大字の内、道路の通過する小字は以下のようなものである。上大塚の内、小字は道下、道上である。中大塚の内、小字は川原、滝前である。下大塚の内、小字は北原東、北原、久保田、^{なつめ}藁田、^{かみがわ}上川原である。本動堂の内、小字は原屋敷、台、^{にいはり}稲荷屋敷、屋敷前、御伊勢、新堀、佃である。篠塚の内、小字は岡ノ西、^{きつねあな}狐穴、^{したんぶ}四反歩、^{せいだ}夏目、^{せいだ}清太である。平井地区の大字は西平井、東平井、^{みどの}鮎川、^{しろいし}緑埜、白石、三ツ木の6地区である。道路の通過する地区は白石である。その小字は上川原、大御堂、前原、^{かみがわら}上谷戸、根岸、美濃山である。

小野地区には1982年段階の遺跡詳細分布調査では13か所の遺跡、2基の古墳、4基の城址が確認されている。遺跡の時期は藤岡台地の縁辺部と氾濫原を挟む北側の東西に走る微高地上に集中して縄文時代2か所、古墳時代から平安時代まで連続する遺跡11か所が分布している。藤岡台地上に古墳と城址が分布する。美土里地区には1983年段階の遺跡詳細分布調査では16か所の遺跡、21基の古墳、8基の城址が確認されている。南北に走る鮎川を挟んで東に藤岡台地、西に上落合の河岸段丘上がある。時代別に遺跡をみると、縄文時代から平安時代まで連続する遺跡11か所、古墳時代から平安時代の遺跡3か所である。

当地区は古墳に見るものがある。国指定史跡の七興山古墳、県指定史跡の伊勢塚古墳、市指定史跡の平地神社古墳などである。平井地区には1984年段階の遺跡詳細分布調査では縄文時代の遺跡9か所、縄文から平安時代の遺跡20か所、古墳時代から平安時代の遺跡4か所の合計、33か所の遺跡、234基の古墳、4基の城址が確認されている。当地区の遺跡の分布地域は東から藤岡台地上、鮎川を挟む両側の河岸段丘上、そして北原台地の3つの地形に区分される。遺跡の特徴は古墳の数の多さである。1938年の『上毛古墳綜覧』の記録によれば藤岡市の古墳総数1198基のうちの54%に当たる643基が平井地域である。

これらの学問的な成果の上に今回の自動車道の事業計画があり、過去の蓄積を十分踏まえる形での記録保存のために調査が実施されることになった。自動車道路が周知されている遺跡の範囲内を通過するものは以下の如くである。(引用文献は1982『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』藤岡市教育委員会である。)小野地区遺跡詳細分布調査No.11の上栗須・寺前・美土里地区遺跡詳細分布調査No.7の篠塚・夏目で1万2000㎡の分布範囲及び北側に平安時代集落址の大明神遺跡がある。No.8の篠塚・岡ノ西と小字狐穴に広がり、分布範囲は8000㎡に及ぶ。No.9の本動堂・稲荷屋敷は6000㎡の分布範囲で、ほとんど藤岡瓦の原料の粘土層の採掘により土が抜かれている。No.10の本動堂・新堀の分布範囲は6250㎡で縄文時代～平安時代の土器の小破片が少量散布している。平井地区詳細分布調査No.12の白石・根岸、No.13の白石・美濃山、No.14の白石・上谷戸、No.15の白石・上谷戸、No.16の白石・前原である。No.12の南にNo.13の遺跡、No.14の遺跡はその東にある。No.15は台地先端に、No.16は東の低地に分布する。



第4図 発掘区設定図

群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を担当した『上栗須寺前遺跡群』は7つの発掘区に区分してある。

1区は藤岡ICから南南西方向に長さ90m、幅70mの氾濫低地の範囲である。地籍は藤岡市上栗須字薬師裏である。本区に接して南北に走る県道前橋長瀬線バイパスの東側、藤岡台地北縁辺は縄文時代後期の遺跡の小野地区No.8 神明上遺跡が、No.9 谷地遺跡が縄文晩期の遺跡として周知されている。

2区は藤岡台地の北縁辺部で南端は東西に県道下栗須馬庭停車場線によって画されている。長さは200m、幅は60mを測る。地籍は藤岡市上栗須字薬師前と字東口である。薬師裏遺跡の試掘の成果がある。

今回報告の3区は北を県道下栗須馬庭停車場線、南西端は旧藤岡教習所通りまでである。地籍は藤岡市上栗須字寺東、字寺前、字広海道である。調査範囲は長さ380m、幅70mである。この遺跡は小野地区No.11の上栗須・寺前遺跡として周知されおり、表面採集では土師器、須恵器の小破片が散布していた程度であった。調査地中央に位置する浄雲寺の地割は南の字岡の地名とともに多分に中世的と注目していた。

4区は北東を旧藤岡教習所通りで、南西端を県道寺尾・藤岡線までの長さ400m、幅80mの範囲である。地籍は藤岡市篠塚字岡ノ西、狐穴、四反歩、夏目、清太である。

本地域は美土里地区No.8の篠塚岡ノ西、狐穴遺跡の範囲で古墳時代～平安時代時代である。また美土里地区No.7の篠塚夏目遺跡として周知され、その北側にも平安時代の集落址の大明神遺跡がある。特に字夏目の地割は周囲より一段高い。

5区は北東端を県道寺尾・藤岡線、西端を多野産業通りの長さ240m、幅70mの範囲である。地籍は藤岡市大字篠塚字清太、字南薬師、大字下大塚字北原東である。この調査区の東側は美土里地区No.7の篠塚清太遺跡の一部で遺跡の分布は土師器、須恵器の小破片の散布のみであった。

6区は東端を多野産業通り、西端を美土里小学校通りまでの、長さ220m、幅70mの範囲である。地籍は藤岡市大字下大塚字北原、大字本動堂字台である。美土里地区No.9の本動堂原屋敷と台遺跡は縄文時代の遺物は僅少、大部分が土師器と須恵器の小破片である。住宅地の字北原は遺跡の残存が注意された。

7区は東端を美土里小学校通りまで西端を旧増田家具工業通りまでの、長さ260m、幅70mの範囲である。地籍は藤岡市大字本動堂字台、字稻荷屋敷である。この調査区は美土里地区No.9の本動堂稻荷屋敷遺跡である。ほとんど藤岡瓦の原料の粘土層の採掘により土が抜かれている。調査前の分布調査の成果では土師器と須恵器の小破片が少量採集されていた。住宅地として字台の部分は遺跡の遺存が注意されていた。

寺前遺跡群の発掘調査は1986年、関越自動車道上越線調査事務所が開設された翌年の、1988年に開始された。調査担当者は3名（石塚久則、須田 茂、井上昌美）である。1区の氾濫原で縄文時代の包含層の調査は年内に完了した。沖積低地の土層堆積の調査には苦労した。2区は墓地と住宅地の用地取得の遅延から調査区は飛び飛びにならざるをえなかった。3区も未買収のため寺院の裏側と寺院まへの住宅地の東半分の調査区域に限定された。県道を跨ぐため作業員の安全確保に苦労をした。

1989年度は2年目、調査担当者は3名（石塚久則、岸田治男、井上昌美）となった。未買収地域が発掘地域に散らばって広がるために調査区域の確定を含めて4区、5区、6区、7区と試掘に近い調査を実施した。調査は石塚と岸田・井上組の2班に別れざるを得ず、調査内容、安全確保に若干の不安を生じた。

1990年度は調査担当者は6名（石塚久則、山口逸弘、井上昌美、岸田治男、斎藤利昭、船藤 亨）となり2班体制をとった。石塚、山口、井上班は3区を中心に調査を実施した。岸田、斎藤、船藤班は延延800mにわたる5区、6区、7区の未買収地の調査を実施した。

1991年度は調査担当者は3名（石塚久則、斎藤利昭、小林 徹）となり、3区、4区、6区の未買収地の調査を実施した。

第I章 調査概要

周辺の地形をコンター図で表わし、地質と地形の説明をしておきたい。

本遺跡の所在する旧小野地区は北に流れる烏川に面する北から森、立石、立石新田、中島、森新田の立地する「岡之郷面」と呼ばれる完新世に形成された沖積低地で中洲、自然堤防の面で構成されている。中の集落を乗せる完新世に形成された「岡之郷面」と呼ばれる沖積低地で後背湿地の面で構成されている。そして上栗須、中栗須の立地する「藤岡面」と呼ばれる下位段丘でもやや高い微高地の面とやや低い「本動堂面」に区分されている。高位の「藤岡面」は始良 Tn 火山灰が認められる事からその形成は2万年前と考えられる。低位の「本動堂面」は更新世末期頃と考えられている。「藤岡面」は藤岡台地とも呼ばれ、段丘化した扇状地性の段丘が特徴である。この台地は主に鮎川の堆積作用によって形成されたものである寺前遺跡群はこの台地の縁辺からなかほどにかけて位置している。

本遺跡群の今回の発掘区、3区の標高は以下になる。発掘区北端の県道下栗須馬庭停車場線あたりは82m、南西の旧藤岡教習所線あたりは84.5mである。全体的に南西方向から北東方向に緩やかに傾斜している。また旧藤岡教習所線を高位に北西方向に傾斜している。すなわちこの方向に藤岡台地のさらに一段低位の本動堂面の低位の段丘がある。

発掘区の設定は当初の試掘、並びに分布調査の範囲から寺前遺跡群の1区から5区までをカバーできる範囲とした。けれども寺前遺跡群と稲荷屋敷遺跡との350mの間にも遺跡の存在(6区・7区)が確認されたために発掘区の呼称に不自然さが生じた。発掘区設定の基準は国土座標第IX系とした。東限ラインは $Y = -68240$ に西ラインは $Y = -69360$ にとり80mごとに区分して14区画とした。南限ラインは $X = +28800$ 、北限ラインは $X = +29640$ として60mごとに区分して14区画とした。呼称の初めは西ラインから東ラインにA～Nに、北ラインから南ラインに1～14とした。東西80m、南北60mをさらにそれぞれの方向に10分割して最小単位を東西8m、南北6mにした。北西隅のグリッド起点の呼称はA1-00と呼ぶ。平板に20分の1のスケールで平面図を記録する場合便利と考えた結果である。

3区発掘区の設定は北の県道下栗須馬庭停車場線から南西の旧藤岡教習所線までの長さ380m、幅70mで面積約25000 m^2 の範囲である。調査区域は道路、寺院、宅地などが入り組んでおり6つの調査区に細分した。北から順にA区は北の県道下栗須馬庭停車場線から西のM7～M9ラインの東側で三角形の範囲、B区は東のM7～M9ラインから南のK9～M9ラインまで、C区は北のK9～M9ラインから西のK9～K10ライン、南のK10ラインの範囲である。D区は西のK10ライン、北のK10ラインの範囲、E区は東はK9～K10ライン、西はK10～K11ラインの範囲である。F区は、東はK10～K11ライン、西は旧藤岡教習所線までである。

発掘調査の工程は以下ようになった。A区の発掘調査は1988年に終了した。B区の発掘調査は1988年に北半分の区域、1989年と1990年に南半分の区域、1991年には寺の東側の未買収部分の調査で4年間にわたる継続調査であった。C区の発掘調査は1988年に東半分の区域、1989年と1990年には西半分の区域、1991年には未買収部分まで4年間の継続調査、D区の発掘調査は1989年に終了、E区の発掘調査は1988年に東半分の区域、1989年に西半分の区域を実施して終了した。

F区の発掘調査は1988年は東半分、1989年に西半分の2年間で終了した。

2 調査日誌

1988年・昭和63年

11月14日(月) 3区に着手

15日(火) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 16日(水) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 17日(木) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 18日(金) 発掘区掘り下げ
 19日(土) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 21日(月) 表土剥ぎ
 22日(火) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 24日(木) 午前室内作業
 25日(金) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 26日(土) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 28日(月) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 29日(火) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査
 30日(水) M7-13・23・33・43・53・63・73・83・93周辺調査

12月1日(木) 1号住居、2号溝

2日(金) M7-45・46周辺調査
 3日(土) M7-45・46周辺調査
 5日(月) 土坑写真
 6日(火) 1・2土坑 M7-20・45・46周辺調査
 7日(水) M7-14・15・22・62・72, L9-06・16周辺調査
 8日(木) 2・5号住居、4・8号溝
 9日(金) 6A・6B号住居
 10日(土) M7-71周辺調査
 12日(月) 3号住居
 13日(火) 表土掘削
 14日(水) 8号住居、2・3号溝、1号墓
 15日(木) 重機作業、4号住居
 16日(金) M7-31・32周辺調査
 17日(土) M7-31・32周辺調査
 19日(月) 3号溝
 20日(火) M7-63・73
 21日(水) 重機作業、杭打ち
 22日(木) 11号住居
 23日(金) 7号住居
 24日(土) M7-81・82
 26日(月) 仕事納め

1989年・平成元年

1月6日(金) 仕事納め、室内作業

7日(土) M8-41・42周辺調査
 9日(月) 17・18号住居、45号溝
 10日(火) M7-73・83周辺調査
 11日(水) 8号住居
 12日(木) 午前室内作業、杭打ち
 13日(金) 遺物取り上げ
 14日(土) M8-02・12周辺調査
 17日(火) 12号住居
 18日(水) L9-26・36・46・55・56・65・66・75・76・85・86周辺調査
 19日(木) 4号溝
 20日(金) L9-26・36・46・55・56・65・66・75・76・85・86周辺調査
 21日(土) L9-26・36・46・55・56・65・66・75・76・85・86周辺調査
 23日(月) 室内作業
 24日(火) L8-59・66・67・68, M8-50・51・52周辺調査
 25日(水) L8-59・66・67・68, M8-50・51・52周辺調査
 26日(木) 14・15・16号住居、6号溝
 27日(金) L10-70・71周辺調査、3187・5250土坑

28日(土) M8-00・20周辺調査

30日(月) M8-00・20周辺調査

31日(火) L10-50周辺調査

2月1日(水) L10-50周辺調査

2日(木) 34号住居、L9-36~75周辺調査

3日(金) 19・40・41号住居、K10-79・89周辺調査、5844土坑

4日(土) L9-37・38・39・47・48周辺調査

6日(月) 25・73号住居、L9-38~66、L9-38・39周辺調査

7日(火) 午後室内作業

8日(水) E区壁切り、攪乱排土

9日(木) M8-01・11周辺調査

10日(金) K9-58・59・68・69周辺調査

11日(土) K10-37・97周辺調査

13日(月) 91号溝

14日(火) K10-87・97周辺調査

15日(水) 13・35A・35B・38号住居、K10-59・89周辺調査

16日(木) C区拡張作業、9・10号溝

17日(金) 室内作業、重機作業

18日(土) K10-82~86・96~98, K11-08・17・18周辺調査

20日(月) K10-82~86・96~98, K11-08・17・18周辺調査

21日(火) K10-82~86・96~98, K11-08・17・18周辺調査

22日(水) L7-79, K11-14・15・24・25周辺調査

23日(木) 9号住居、16号掘立

24日(金) L7-79, K11-14・15・24・25周辺調査

25日(土) L7-79, K11-14・15・24・25周辺調査

27日(月) L7-79, K11-14・15・24・25周辺調査

28日(火) 杭打ち、K10-75・78周辺調査、23土坑

3月1日(水) 26号住居

2日(木) 12B号溝

3日(金) K10-92, K11-02・12・22・32・42周辺調査

4日(土) K10-92, K11-02・12・22・32・42周辺調査

6日(月) 室内作業

7日(火) 室内作業

8日(水) 室内作業

9日(木) K10-92, K11-02・12・22・32・42周辺調査

10日(金) 48号住居

11日(土) L7-89周辺調査

13日(月) L7-89周辺調査

14日(火) L7-89周辺調査

15日(水) L7-89周辺調査

16日(木) L10-22周辺調査、749・759土坑

17日(金) L10-10周辺調査、129・134・138・141・146土坑

18日(土) 152~155・162・170・601・604土坑

20日(月) 42・43号住居、L10-11周辺調査、173・192・196土坑

22日(水) L10-20, K10-38周辺調査、312・315・396・5456土坑

23日(木) 1号掘立、3土坑、M7-53・63周辺調査

24日(金) L10-00・10, K10-37・38周辺調査、61・642・5457土坑

4月6日(火) 作業準備

7日(水) 作業準備、器材点検

8日(木) 作業準備

10日(月) 19・52号住居、14号溝

11日(火) 室内作業、K11-23・24・53・54・63周辺調査

5・6・7・8・10・13土坑

12日(水) 52・54・60号住居、14号溝

L8-28・38, L10-20周辺調査、5847・5848土坑

13日(木) 52・54・55・71号住居、14号溝

L7-68・69・98, L10-10周辺調査、5245・5846土坑

14日(金) L9-43・44・53・54, L10-21周辺調査

52・54・55・60号住居、101・104・112・115・123土坑

第I章 調査概要

- 15日(土) 2021・2064・2118土坑
17日(月) 52・54・55・61号住居、14号溝、L10-11周辺調査、616・618・623・635土坑
18日(火) 52・54・55・56・61号住居、14号溝
L9-43・44・54、L10-11周辺調査、769・2188・2189土坑
19日(水) 56号住居、L10-01周辺調査
677・683・689～691・694・696土坑
20日(木) 56号住居、L10-01周辺調査
705・714・716・719・721・732・733土坑
21日(金) 59・60号住居、L10-00・22周辺調査
23日(土) 608・643・651・655土坑
24日(日) K10-19周辺調査、1000土坑
25日(火) 56・59・62・65・67号住居
L9-90・91、L10-00・01周辺調査、677土坑
26日(水) 31・32・59号住居、L10-11周辺調査
319・324・325・326土坑
27日(木) 30号住居、L10-11-周辺調査、330土坑
28日(金) 65・68号住居
5月1日(月) L10-02周辺調査、1019・1025土坑
2日(火) K11-12・13・22・23、L8-08周辺調査
6日(土) K11-12・13・22・23、L8-08周辺調査
8日(月) K11-12・13・22・23、L8-08周辺調査
9日(火) K11-12・13・22・23、L8-08周辺調査
10日(水) L10-02・03・12・13周辺調査、1020・1039～1041土坑
11日(木) 室内作業
12日(金) 室内作業
15日(月) 36・64・69・70号住居、L9-03、L10-03・04周辺調査
1031・1535・1538・1542・1543・1545土坑
16日(火) L9-84周辺調査、空撮準備
17日(水) 777・1127・1128・1131土坑、
18日(木) 図面整理
19日(金) 空撮準備
20日(土) 図面整理
22日(月) 36・56号住居
23日(火) 63号住居
24日(水) 44号住居
25日(木) 54・55号住居、9号溝
26日(金) 室内作業
27日(土) L8-27・29・39・49周辺調査
29日(月) 24・44号住居、27・29・31・5459土坑
30日(火) 44・46・47・57・59号住居、K11-43・53周辺調査
31日(水) 重機作業、5号溝、L7-39周辺調査、37土坑
6月1日(木) 重機作業、20号溝
2日(金) L8-06、L9-57周辺調査、15・16・33・34土坑
3日(土) L7-29・39・49・59周辺調査
5日(月) 22号住居、9・12A号溝、5237～5239・5241～5243土坑
6日(火) 12A号溝、L7-58・59・68、K11-04周辺調査、
22・5270土坑
7日(水) 12A号溝、K9-47、K11-04・05周辺調査、991-5213土坑
8日(木) 16号溝、K10-56周辺調査、1402土坑
9日(金) 室内作業
12日(月) 74号住居、16号溝、L9-44～46、L10-04周辺調査
2002・2003・2005・2009・2012土坑
13日(火) C区壁、L7-58、K10-75・85・94・95、K11-04周辺調査
20・21・23・38土坑
14日(水) C区壁、L7-88、L9-94、L10-22周辺調査
1148・1149・1170・5845土坑
15日(木) 室内作業
16日(金) 室内作業、引っ越し
17日(土) 図面整理
19日(月) 引っ越し作業
20日(火) 15号溝、L10-12周辺調査
21日(水) M8-13周辺調査、1153土坑、馬骨出土
22日(木) L7-58・59・68・69、L9-72周辺調査、2・3号墓
1168・2157・2161・2186・5244土坑
23日(金) 室内作業、L9-83・84周辺調査
24日(土) 1175・1179・1181(内)1183土坑
26日(月) L7-57・66・87、L9-93、L10-60周辺調査
1191・1194・1210・1217・1225・1231・1500・5453土坑
27日(火) 室内作業
28日(水) 室内作業
29日(木) 75・76号住居、M8-30・40、L8-49周辺調査
39～42・44・45土坑
30日(金) 77号住居、5863土坑(人骨と環4枚出土)
7月1日(土) L7-58、L10-60周辺調査、1212・1215・1279・1283土坑
3日(月) 室内作業
4日(火) K10-79、L9-93周辺調査
1252・1253・1268・1275・1516・1518・1523・1533土坑
4日(水) 17・18号溝、K10-59・89周辺調査、1201・1308土坑
6日(木) 7・19号溝、L9-63・73・74、L10-03周辺調査、1028・
1031・1039・1041・1059・1060・1510・1511・1544土坑
7日(金) L10-03、K10-47周辺調査、人骨・歯出土
1041・1551土坑
10日(月) 室内作業
11日(火) L9-73、L10-03・28周辺調査、墓坑群
12日(水) L9-73・83周辺調査、959・1176・1187・1552・1561土坑
13日(木) 室内作業
14日(金) M8-30・40周辺調査
15日(土) 図面整理
17日(月) M8-30・40周辺調査
18日(火) M8-30・40周辺調査
19日(水) K10-86・87周辺調査、1750土坑
20日(木) M8-30・40周辺調査
21日(金) 2号掘立
24日(月) 44号住居
25日(火) 44号住居
26日(水) 44・57号住居
27日(木) 44・45・54号住居、室内作業
28日(金) 室内作業
29日(土) J11-69・79・89、K11-31・41・52・80周辺調査
31日(月) J11-69・79・89、K11-31・41・52・80周辺調査
8月1日(火) 室内作業
2日(水) 室内作業
3日(木) J11-69・79・89、K11-31・41・52・80周辺調査
4日(金) J11-69・79・89、K11-31・41・52・80周辺調査
5日(土) J11-69・79・89、K11-31・41・52・80周辺調査
7日(月) K10-78周辺調査、1839土坑
8日(火) K10-87周辺調査
9日(水) K10-85・95周辺調査、1878土坑
10日(木) J11-69・79・89、K11-31・41・52・80周辺調査
11日(金) J11-69・79・89、K11-31・41・52・80周辺調査
14日(月) 図面整理
15日(火) 図面整理
16日(水) 図面整理
17日(木) 午前室内作業、44・45・47・54・59・65号住居
18日(金) 44・47・56・59・65号住居
19日(土) 図面整理
21日(月) J11-69・79・89、K11-80・81周辺調査
22日(火) J11-69・79・89、K11-80・81周辺調査
23日(水) J11-69・79・89、K11-80・81周辺調査
24日(木) J11-69・79・89、K11-80・81周辺調査
25日(金) J11-69・79・89、K11-80・81周辺調査
28日(月) J11-69・79・89、K11-80・81周辺調査
29日(火) K11-21・22・31・32・33・40・41周辺調査

第2節 調査の経過

30日(水) K11-21・22・31・32・33・40・41周辺調査
31日(木) K11-21・22・31・32・33・40・41周辺調査
9月1日(金) K10-19・29周辺調査
2日(土) K11-21・22・31・33・40・41周辺調査
4日(月) 室内作業
5日(火) K11-21・22・31・32・33・40・41周辺調査
6日(水) 室内作業
7日(木) K11-21・22・31・32・33・40・41周辺調査
8日(金) L9-43, L10-12・13周辺調査、1043・1080土坑
11日(月) L9-43・53, L10-13周辺調査
12日(火) 78号住居、22号溝、770・771・779・1565・1572土坑
13日(水) L9-54・55・64・65, L10-04周辺調査、5441土坑
14日(木) 室内作業
16日(土) L9-54・55・64・65, L10-04周辺調査
18日(月) 表土久ぎ、L9-94周辺調査、2000土坑
19日(火) 室内作業、L9-64周辺調査、2124土坑
20日(水) 午前室内作業
21日(木) L9-94周辺調査
22日(金) 室内作業
25日(月) L9-63周辺調査
26日(火) 23・24号溝、M8-52, L9-75周辺調査、47土坑
27日(水) L9-73周辺調査
28日(木) L9-84周辺調査
29日(金) L9-85周辺調査
30日(土) J11-34・44周辺調査
10月2日(月) J11-34・44周辺調査
3日(火) J11-34・44周辺調査
4日(水) 室内作業、92号溝
5日(木) C区3m幅拡幅、99号住居、25・26号溝
L9-73周辺調査、3100・2156土坑
6日(金) 幅杭打ち、L9-83周辺調査、2195・2198土坑
7日(土) 資料整理
9日(月) L9-74周辺調査
11日(水) 室内作業
12日(木) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
13日(金) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
14日(土) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
16日(月) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
17日(火) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
18日(水) 10号溝KKK10-36周辺調査、5921土坑
19日(木) 10号溝、午後室内作業
20日(金) 9・10号溝付近南壁
21日(土) K10-81~87・97・98周辺調査
23日(月) C区拡幅区、10号溝付近、79号住居
24日(火) C区拡幅区、10号溝付近、K11-18周辺調査
25日(水) 4・34号溝、2203土坑
26日(木) 43号溝
27日(金) K10-96, K11-06周辺調査、1997土坑
30日(月) K10-88・89周辺調査
31日(火) 午後室内作業
11月1日(水) L10-14周辺調査、2247土坑
2日(木) 100・102・106号住居、29A・29B030・31号溝
4日(土) L9-56周辺調査、2256・2257・2310土坑
6日(月) L10-23・33周辺調査
7日(火) 17号掘立
8日(水) K10-09・96, K11-45周辺調査、1913・1914・2908土坑
9日(木) L9-28・76周辺調査、2335土坑
10日(金) 49・107号住居、L9-28周辺調査
11日(土) L9-38・47・48・57・58, K10-98, K11-06・07・17・27周辺調査
13日(月) I01号住居、36号溝
14日(火) 104号住居、L9-94・95, K11-04周辺調査、18号掘立

2646・2677・2887土坑
15日(水) 35号溝
16日(木) 109号住居、37号溝
17日(金) 39号溝、K11-26・27・36周辺調査、2621・5712土坑
20日(月) 108号住居
21日(火) 27号溝
22日(水) 38号溝
23日(木) 現地説明会
24日(金) K10-97周辺調査
27日(月) K10-97, K11-07周辺調査、2511土坑
28日(火) K11-07周辺調査
29日(水) K10-09・19周辺調査、793土坑
30日(木) 浄雲寺写真撮影
12月1日(金) 83・85号住居、1242・1601・3100・3129・3130土坑
2日(土) K10-48, L10-51・61周辺調査、人骨(頭蓋骨あり)出土
4日(月) 66号住居、L10-70・71周辺調査、3164・3177土坑
5日(火) 66号住居
6日(水) 66号住居、L10-80・89周辺調査
7日(木) 80・81・82・84号住居、L10-99周辺調査、3268土坑
8日(金) 92・93号住居
9日(土) J11-64・73・74周辺調査
11日(月) J11-64・73・74周辺調査
12日(火) 87号住居、K10-99周辺調査、骨の取り上げ
3368・3369土坑
13日(水) L10-61周辺調査、3128・3126・3188土坑
14日(木) J11-55・65・75周辺調査
15日(金) J11-55・65・75周辺調査
16日(土) 全体写真
18日(月) 88・90号低居
19日(火) J11-55・65・75周辺調査
20日(水) K10-47・56周辺調査、1430土坑
21日(木) L9-08・09・18・19, K10-46周辺調査、7号・8号掘立
22日(金) 2376・3381・3412・5255・5258土坑
25日(月) 111号住居、L9-08・09周辺調査、人骨出土(頭蓋骨)
26日(火) K10-54・55周辺調査、3493・3553土坑、仕事納め

1990年・平成2年

1月4日(水) 仕事始め
5日(金) 作業準備
6日(土) 作業準備
8日(月) K10-64・65・75周辺調査、3522・3537土坑
9日(火) K10-74・75周辺調査
10日(水) K10-78・79・88・89周辺調査
11日(木) 37号住居
12日(金) 10号溝、K10-92, K11-08周辺調査
13日(土) 3655・3665・5235土坑
16日(火) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
17日(水) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
18日(木) K10-98, K11-07・08・17・18・27周辺調査
19日(金) 室内作業
20日(土) 図面整理
22日(月) K10-45・55・65周辺調査
23日(火) 44号溝、K10-55周辺調査、3487・3488・3489・3499土坑
24日(水) J11-15・16・36周辺調査
25日(木) J11-15・16周辺調査
26日(金) 117・118号住居
29日(月) 116・119号住居、K10-36・46周辺調査、3407土坑
30日(火) K10-54・64周辺調査、3559土坑
31日(水) 室内作業
2月1日(木) 室内作業
2日(金) 室内作業

第I章 調査概要

- 3日(土) 室内作業
5日(月) 室内作業
6日(火) K10-73周辺調査
7日(水) 98号住居
8日(木) 97・120号住居
9日(金) 96号住居、K10-73周辺調査、3783土坑
13日(火) K10-84周辺調査、3787土坑
14日(水) K10-37・63・86周辺調査、1467・3802・5851・5862土坑
15日(木) 室内作業
16日(金) 室内作業
17日(土) 室内作業
19日(月) 室内作業
20日(火) 室内作業
21日(水) 42号溝、K10-18・28周辺調査、3803~3807土坑
22日(木) K10-17・27周辺調査
23日(金) K10-16・17・26・27・36・37周辺調査
24日(土) K10-16・17・26・27・36・37周辺調査
26日(月) K10-16・17・26・27・36・37周辺調査
27日(火) 124号住居
28日(水) K10-17周辺調査、5926土坑
- 3月1日(木) K10-16・17・26・27・36・37周辺調査
2日(金) 室内作業
3日(土) K10-16・17・26・27・36周辺調査
5日(月) K10-17・35・45周辺調査、3469土坑
6日(火) 126・127住居
7日(水) 91・110号住居、K10-84周辺調査、5858土坑
8日(木) 89・94・128号住居
9日(金) K10-83周辺調査
10日(土) J11-55・65、K10-63・64・73・74周辺調査
12日(月) 室内作業
13日(火) K10-84・94周辺調査、5679号土坑
14日(水) 86号住居、K10-64周辺調査、5779土坑
15日(木) K10-56・57周辺調査、
923・926~928・930・936・939・949・960土坑
16日(金) 121・122号住居、L8-84周辺調査、3068土坑
17日(土) 資料整理
19日(月) K10-73・74・83・84周辺調査
20日(火) 123号住居
22日(木) 47号溝
23日(金) J11-85、M7-33周辺調査、5461・5464土坑
26日(月) J11-45・55、K10-73周辺調査
27日(火) J11-45・55、K10-73周辺調査
28日(水) J11-45・55、K10-73周辺調査
29日(木) J11-45・55、K10-73周辺調査
30日(金) J11-45・55、K10-73周辺調査
31日(土) J11-45・55、K10-73周辺調査
- 4月2日(月) 資料整理
3日(火) 資料整理
4日(水) 資料整理
5日(木) 資料整理
6日(金) 資料整理
7日(土) 置土の移動
9日(月) 作業開始、K10-93周辺調査
10日(火) 125号住居、K10-82・90・91・92周辺調査、3987土坑
11日(水) 48・49号溝、K10-90・91周辺調査3991土坑
12日(木) K10-82・83・84・92周辺調査
13日(金) K10-82・83・84・92周辺調査
14日(土) 置土の整地
16日(月) 室内作業、F区表土剥ぎ
17日(火) 室内作業
18日(水) 130号住居、J11-23周辺調査、5591土坑
19日(木) K10-72周辺調査
20日(金) K10-72周辺調査
21日(土) 資料整理
23日(月) K10-72周辺調査
24日(火) 282~310・5595・5609・5616・5621・5641土坑
25日(水) L9-53、L10-11、K11-50・59、J11-49・59・64・68周辺調査
26日(木) K9-86・96周辺調査
27日(金) K9-85・95、K10-05周辺調査、3号掘立
- 5月1日(火) K10-04・15・16周辺調査、1583・1586・1596土坑
2日(水) K10-14周辺調査
7日(月) K10-13・14周辺調査
8日(火) K10-24・25周辺調査、4582・4588・4608土坑
9日(水) J11-29、K10-25周辺調査
10日(木) J11-29周辺調査、4030土坑
11日(金) K10-35・44・45周辺調査、3893・4633土坑
14日(月) K9-85・86・87・88周辺調査
15日(火) K9-85・86・87・88周辺調査
16日(水) 50号溝、K11-07周辺調査、1962・1964・1966土坑
17日(木) K9-87周辺調査
18日(金) 131号住居
19日(土) K9-87周辺調査
21日(月) 11号掘立、K9-78・88、K10-06周辺調査
22日(火) 133号住居、4237・5216・5218土坑
23日(水) K10-45周辺調査
24日(木) K10-05・06・15・16周辺調査
25日(金) 135号住居
28日(月) 134号住居、12号掘立
29日(火) 132・137・189号住居
30日(水) 138号住居
31日(木) K10-23・24・34周辺調査
- 6月1日(金) K11-52周辺調査、5458土坑
2日(土) K10-44・54周辺調査
4日(月) K10-34・44周辺調査、6号掘立
5日(火) 51号溝、K10-33・34周辺調査、4793土坑
6日(水) K10-54周辺調査
7日(木) 136号住居
8日(金) 140号住居
11日(月) K10-22・32周辺調査
12日(火) K10-15・16・25周辺調査
13日(水) 141・142・144号住居
14日(木) 139号住居
15日(金) K9-95周辺調査
16日(土) K10-25・26・35・36周辺調査
18日(月) 143号住居
19日(火) 145号住居
20日(水) K10-05周辺調査
21日(木) K10-24・25周辺調査
22日(金) 147号住居
25日(月) K10-24・25周辺調査
26日(火) K10-24・25周辺調査
27日(水) K10-07・08周辺調査
28日(木) 146号住居
29日(金) K10-06・08周辺調査
30日(土) 図面整理
- 7月2日(月) K10-07・08周辺調査
3日(火) 室内作業
4日(水) 室内作業
5日(木) 148号住居、K10-51・61周辺調査、5924土坑
6日(金) K10-34・35周辺調査
7日(土) K10-34・35周辺調査
9日(月) 室内作業
10日(火) K10-34・35周辺調査
11日(水) 引っ越し

第2節 調査の経過

- 12日(木) 室内作業、引っ越し荷物片付け
 13日(金) 室内作業
 16日(月) プレハブ解体
 17日(火) K10-51・61周辺調査
 18日(水) K10-51・61周辺調査
 19日(木) 152号住居
 20日(金) 153号住居
 21日(土) 資料整理
 23日(月) K10-80・81周辺調査
 24日(火) 寺の山門東側の盛土移動
 25日(水) K10-80・81周辺調査
 26日(木) K10-53・63周辺調査
 27日(金) 149・155号住居
 30日(月) 156号住居
 31日(火) 150・151号住居、K10-62周辺調査、4号掘立
- 8月1日(水) 157号住居
 2日(木) K10-42・52・62周辺調査、5号掘立
 3日(金) J10-88・97・99, J11-06・08・09周辺調査
 4日(土) J11-09・18・19, K10-43・52・53・61・62周辺調査
 6日(月) J11-09・18・19, K10-43・52・53・61・62周辺調査
 7日(火) J11-09・18・19, K10-43・52・53・61・62周辺調査
 8日(水) J11-09・18・19, K10-43・52・53・61・62周辺調査
 9日(木) J11-09・18・19, K10-43・52・53・61・62周辺調査
 10日(金) 室内作業
 11日(土) J11-09・18・19, K10-43・52・53・61・62周辺調査
 13日(月) J11-09・18・19, K10-43・52・53・61・62周辺調査
 14日(火) 図面整理
 15日(水) 図面整理
 16日(木) 図面整理
 17日(金) K9-85・86, K10-04・05・06・14・15周辺調査
 18日(土) K9-85・86, K10-04・05・06・14・15周辺調査
 20日(月) K9-85・86, K10-04・05・06・14・15周辺調査
 21日(火) K9-85・86, K10-04・05・06・14・15周辺調査
 22日(水) K9-85・86, K10-04・05・06・14・15周辺調査
 23日(木) K9-85・86, K10-04・05・06・14・15周辺調査
 24日(金) K9-85・86, K10-04・05・06・14・15周辺調査
 27日(月) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
 28日(火) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
 29日(水) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
 30日(木) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
 31日(金) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
- 9月1日(土) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
 3日(月) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
 4日(火) K10-23・24・33・34・43・44周辺調査
 5日(水) 15号掘立
 6日(木) 10・13・14号掘立
 7日(金) 室内作業
 10日(月) 門前地区、9号掘立、K9-69・79周辺調査
 509・5215土坑
 11日(火) 工具整理
 12日(水) 159号住居、L9-50・60・69周辺調査、517・524・527土坑
 13日(木) L9-50周辺調査、535土坑
 14日(金) 室内作業
 17日(月) 図面整理、室内作業
 18日(火) 山門前の調査、158号住居、L9-41・42周辺調査
 19日(水) 160号住居、L9-40周辺調査、537・545・548・559土坑
 20日(木) K9-49, L9-20・30・40周辺調査
 21日(金) K9-49, L9-20・30・40周辺調査
 25日(火) 午前室内作業、161号住居
 26日(水) 室内作業
 27日(木) 163号住居
 28日(金) 164号住居、L9-30・40・41周辺調査
- 29日(土) 549・600・1335・1337土坑
- 10月1日(月) 162号住居
 2日(火) K9-49, L9-30・31・40周辺調査
 3日(水) E区水抜き後、埋め戻し
 4日(木) 165号住居
 5日(金) L9-31周辺調査
 6日(土) K9-99周辺調査
 8日(月) 室内作業
 9日(火) 166号住居
 11日(水) 167号住居
 12日(木) K9-99, K10-09周辺調査
 15日(月) L9-80・90周辺調査、1388・1397・4911・4923土坑
 16日(火) 42・45号溝、L9-52・62, K9-69・89, K10-58周辺調査
 17日(水) L9-42周辺調査、1390・1391・1395・1398土坑
 18日(木) L9-51周辺調査
 19日(金) K10-58・68・78・88, L9-50・51・52・62周辺調査
 20日(土) K10-58・68・78・88, L9-50・51・52・62周辺調査
 22日(月) L9-30・50・51・71・81周辺調査、536土坑
 23日(火) K10-29・39, L10-30周辺調査、4990・5007土坑
 24日(水) L9-52, K10-49, L10-20・21周辺調査、4982土坑
 25日(木) K9-89・99, L10-00・09, K10-09周辺調査
 26日(金) 5080-5082土坑
 29日(月) K10-58・68・78・88, L9-50・51・52・62周辺調査
 30日(火) 室内作業
 31日(水) 55号溝、L9-03・12・13・22・23, K10-29・39周辺調査
- 11月1日(木) L9-13・23・34周辺調査、5100~5104・5108・5110土坑
 2日(金) K10-39・49周辺調査、5107土坑
 5日(月) K10-29・39周辺調査
 6日(火) K10-29・39周辺調査
 7日(水) K10-29・39周辺調査
 8日(木) L10-41周辺調査
 9日(金) K10-29・39周辺調査
 13日(火) K10-29・39周辺調査
 14日(水) 168号住居
 15日(木) K10-29・39周辺調査
 16日(金) K10-29・39周辺調査
 17日(土) 室内作業
 19日(月) K9-39・49周辺調査、5128土坑
 20日(火) 室内作業
 21日(水) L8-05・15・25・34・35・44・45・55・65・75・85・95周辺調査
 22日(木) L8-05・15・25・34・35・44・45・55・65・75・85・95周辺調査
 26日(月) L8-05・15・25・34・35・44・45・55・65・75・85・95周辺調査
 27日(火) L8-05・15・25・34・35・44・45・55・65・75・85・95周辺調査
 28日(水) 室内作業
 29日(木) 室内作業
 30日(金) 室内作業
- 12月1日(土) L8-05・15・25・34・35・44・45・55・65・75・85・95周辺調査
 3日(月) L8-05・15・25・34・35・44・45・55・65・75・85・95周辺調査
 4日(火) L8-05・15・25・34・35・44・45・55・65・75・85・95周辺調査
 5日(水) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
 6日(木) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
 7日(金) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
 10日(月) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
 11日(火) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
 12日(水) 55号溝
 13日(木) 56号溝
 14日(金) 56号溝
 15日(土) 56号溝
 17日(月) 56号溝
 18日(火) 56号溝
 19日(水) 56号溝
 20日(木) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査

第I章 調査概要

21日(金) 室内作業
25日(火) 56号溝、L9-05周辺調査、5850土坑
26日(水) 仕事納め

1991年・平成3年

1月7日(月) 仕事始め、56号溝

8日(火) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
9日(水) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
10日(木) 14号溝、L8-68・78周辺調査、5861土坑
11日(金) 6・56号溝
14日(月) 室内作業
16日(水) 3003土坑(井戸)
17日(木) 56号溝、井戸、杭打ち
18日(金) L9-00・01・05・10・11・12・13・14・15, K9-09・19周辺調査
19日(土) 室内作業
21日(月) 午後室内作業
22日(火) 室内作業
23日(水) 井戸
24日(木) 井戸、3004土坑
25日(金) 井戸
28日(月) 井戸
29日(火) 井戸
30日(水) L8-95・96周辺調査
31日(木) L9-95・96周辺調査

2月1日(金) 近代遺物(瓦、ガラス、陶磁器)

2日(土) 室内作業
4日(月) 午後室内作業
5日(火) 瓦溜り
6日(水) 瓦溜り、56号溝内側周溝
7日(木) 169号住居
8日(金) 171・172号住居、L8-46・56周辺調査、3009・5839土坑
12日(火) 175・177・178号住居
13日(水) L8-53・54・68・69・78・89・L9-07・17・18周辺調査
14日(木) L8-63周辺調査、3012・3026土坑
15日(金) L8-53・54・68・69・78・79・, L9-07・17・18周辺調査
16日(土) 室内作業
18日(月) 午後室内作業
19日(火) 午後室内作業
20日(水) 170号住居、午後室内作業
21日(木) 174号住居、午後室内作業
22日(金) 写真撮影、午後室内作業、L8-64・65周辺調査
25日(月) 56号溝、3014土坑
26日(火) 遺物取り上げ
27日(水) 173号住居
28日(木) 6号溝、L8-64周辺調査、3013土坑

3月1日(金) L8-59・66・67・68, M8-50・51・52周辺調査

2日(土) 室内作業
4日(月) 63・64号溝、L8-58, L9-03周辺調査
3018・5445・5849土坑
5日(火) 62号溝、室内作業、L8-84・94周辺調査、5834土坑
6日(水) 56号溝、L8-54・64, L9-13周辺調査、3015(内)3021土坑
7日(木) 65号溝、L8-53・55周辺調査、3030・3032・5857土坑
8日(金) 3008土坑、山門壊し開始、L8-57周辺調査
11日(月) 室内作業
12日(火) 4・30・33・58・59・66号溝
L8-56, L9-16・26・27周辺調査、3006・3007・3034土坑
13日(水) 60・61号溝、L8-53・54・63・64・65・67周辺調査
3050・3060・3062・5922土坑
14日(木) 58・67A・67B・67C・67D号溝、
3019・3033・3037・3043・3045・3046・3049・3053土坑
15日(金) 全体写真、L8-64・65・85・93・94・95, L9-07・17周辺調査

16日(土) 井戸、L9-10・11・20・21周辺調査

18日(月) 56号溝、3083・3089・5229土坑
19日(火) 56号溝実測
20日(水) L9-00・01・05・10・11~15周辺調査
22日(金) L9-00・01・05・10・11~15周辺調査
25日(月) 図面整理
26日(火) 図面整理
27日(水) 図面整理
28日(木) 図面整理
29日(金) 図面整理

4月3日(水) L9-00・01・05・10・11~15周辺調査

4日(木) L9-00・01・05・10・11~15周辺調査
5日(金) L9-00・01・05・10・11~15周辺調査
6日(土) 表土剥ぎ
8日(月) 作業開始、室内作業
9日(火) 室内作業、山門周辺調査
10日(水) 表土剥ぎ、重機作業
11日(木) 表土剥ぎ、矢板打ち、室内作業
12日(金) 室内作業、L7-95・96, L8-15・25周辺調査
13日(土) 杭打ち、3076・3079土坑
15日(月) 68号溝、L8-05周辺調査、3072・3074・3075・3088土坑
16日(火) 68号溝、5246土坑
17日(水) 68号溝、5246土坑
18日(木) 56号溝検出、L8-25周辺調査、3080・3087・5131土坑
19日(金) 56号溝検出、L9-11周辺調査、5854土坑
20日(土) 図面整理
22日(月) 56号溝、5246土坑
23日(火) 土坑、午後室内作業
24日(水) L9-11・12周辺調査、3085・3086・5246土坑
25日(木) 室内作業
26日(金) L9-00・01・05・10・11・15周辺調査
30日(火) 室内作業、L8-15周辺調査、3095土坑

5月1日(水) 室内作業、L9-12周辺調査、5855-5856土坑

2日(木) 56号溝、室内作業
7日(火) 56号溝、室内作業
8日(水) 56号溝、室内作業
9日(木) 56号溝、室内作業
10日(金) 56号溝、室内作業
13日(月) 室内作業、午後B・C区56号溝発掘
14日(火) B・C区56号溝発掘、室内作業
15日(水) B・C区56号溝発掘、室内作業
16日(木) B・C区56号溝発掘、遺物取り上げ
17日(金) B・C区56号溝、室内作業
20日(月) 室内作業、L9-10周辺調査、5852土坑
21日(火) 56号溝、午後室内作業
22日(水) 56号溝
23日(木) 56号溝、L8-25・35周辺調査、3098・3099・5130土坑
24日(金) 56号溝、L9-11周辺調査、5853土坑
27日(月) 室内作業
28日(火) 写真撮影準備
29日(水) 室内作業
30日(木) 3097土坑
31日(金) 午後室内作業

6月1日(土) 室内作業

3日(月) L9-00・01・05・10・11・15周辺調査
4日(火) 56号溝西橋調査
5日(水) L8-14周辺調査、5140・5141・5145・5146土坑
6日(木) 56・71・71号溝
7日(金) 56号溝、L8-24, L9-12周辺調査
3084・3090~3091・5151・5153・5157・5233土坑
10日(月) 室内作業、L9-01周辺調査、5222土坑
22日(火) L8-34周辺調査、5163・5165・5166・5167・5178・5179土坑

第2節 調査の経過

- 12日(水) 試掘、表土層確認、L8-34周辺調査
5134・5150・5154・5156・5148・5164土坑
- 13日(木) L8-33周辺調査、5135・5137・5161・5162・5186土坑
- 14日(金) L8-43周辺調査、5181・5182・5185土坑
- 15日(土) L8-90・01, L9-00・01周辺調査
- 27日(月) 室内作業
- 18日(火) 179号住居、L9-00・01周辺調査
- 19日(水) L8-81・91, L9-01周辺調査
5187・5188・5190・5191・5251土坑
- 20日(木) 室内作業
- 21日(金) 56・70号溝、L8-44・45周辺調査
3092・3093・5158・5173・5174・5189・5194・5232土坑
- 24日(月) 午後室内作業
- 25日(火) 試掘
- 26日(水) 181号住居、56号溝、L8-92周辺調査、5262土坑
- 27日(木) L8-45・55周辺調査
- 28日(金) L8-90, L9-00周辺調査、5170土坑
- 29日(土) 図面整理
- 7月1日(月) 93号溝KKL8-35周辺調査、3096土坑
- 2日(火) 56号溝コンタ図、73・74号溝
- 3日(水) 180・182号住居
- 4日(木) C区床面調査
- 5日(金) 写真撮影、器材撤収、室内片付け
- 6日(土) L8-34・44, K-19・28・29, L9-10・20・21周辺調査
- 8日(月) B区井戸
- 9日(火) L-8・34・44, K9-19・28・29, L9-10・20・21周辺調査
- 10日(水) 器材撤収
- 11日(木) 器材撤収
- 12日(金) 器材撤収
- 15日(月) 器材搬出開始
- 16日(火) 室内片付け
- 17日(水) 室内作業、搬出作業
- 18日(木) 室内作業、解体作業、重機作業
- 19日(金) 重機作業
- 20日(土) 撤去作業
- 22日(月) 撤去作業
- 23日(火) 撤去作業
- 24日(水) 室内作業
- 25日(木) 室内作業
- 26日(金) 室内作業
- 29日(月) 室内作業
- 30日(火) 室内作業
- 31日(水) 室内作業
- 8月1日(木) 室内作業
- 2日(金) 室内作業
- 3日(土) 室内作業
- 5日(月) 室内作業
- 6日(火) 室内作業
- 7日(水) 室内作業
- 8日(木) 室内作業
- 9日(金) 室内作業
- 12日(月) 室内作業
- 13日(火) 室内作業
- 14日(水) 室内作業
- 15日(木) 室内作業
- 16日(金) 室内作業
- 17日(土) 室内作業
- 19日(月) 現場再開、器材運搬
- 20日(火) 器材運搬
- 21日(水) 図面整理
- 22日(木) 草刈り、室内作業
- 23日(金) 草刈り、室内作業
- 24日(土) 草刈り、室内作業
- 26日(月) 室内作業
- 27日(火) 室内作業
- 28日(水) 室内作業
- 29日(木) 室内作業
- 30日(金) 室内作業、図面整理
- 31日(土) 室内作業、図面整理
- 9月2日(月) 室内作業、図面整理
- 3日(火) 室内作業
- 4日(水) 室内作業
- 5日(木) 室内作業
- 6日(金) 器材運搬
- 7日(土) 器材運搬
- 9日(月) 山門南側掘削開始
- 10日(火) 室内作業
- 11日(水) 室内作業
- 12日(木) K9-27・37周辺調査、5195土坑
- 13日(金) K9-27・37周辺調査
- 17日(火) 72・73号溝、遺物整理
- 18日(水) 室内作業
- 19日(木) 室内作業
- 20日(金) 図面整理
- 21日(土) 図面整理
- 24日(火) 表土剥ぎ、184号住居
- 25日(水) K9-27・37周辺調査
- 26日(木) 重機作業
- 27日(金) 重機作業
- 30日(月) K9-38周辺調査
- 10月1日(火) 室内作業
- 2日(水) 室内作業
- 3日(木) 西側部分拡幅、山門前埋め戻し
- 4日(金) 拡張部分、186号住居
- 5日(土) K9-47・48・57・58周辺調査
- 7日(月) K9-47・48・57・58周辺調査
- 8日(火) 187・188号住居
- 9日(水) 77号溝
- 11日(金) K9-68・78周辺調査
- 14日(月) K9-68・78周辺調査
- 15日(火) 南区掘り下げ
- 16日(水) 42号溝
- 17日(木) 42号溝
- 18日(金) 試掘54号溝設置発掘、185号住居
- 19日(土) 室内作業
- 21日(月) 室内作業
- 22日(火) 室内作業
- 23日(水) 図面実測、補助
- 24日(木) 清掃
- 25日(金) 調査作業完了

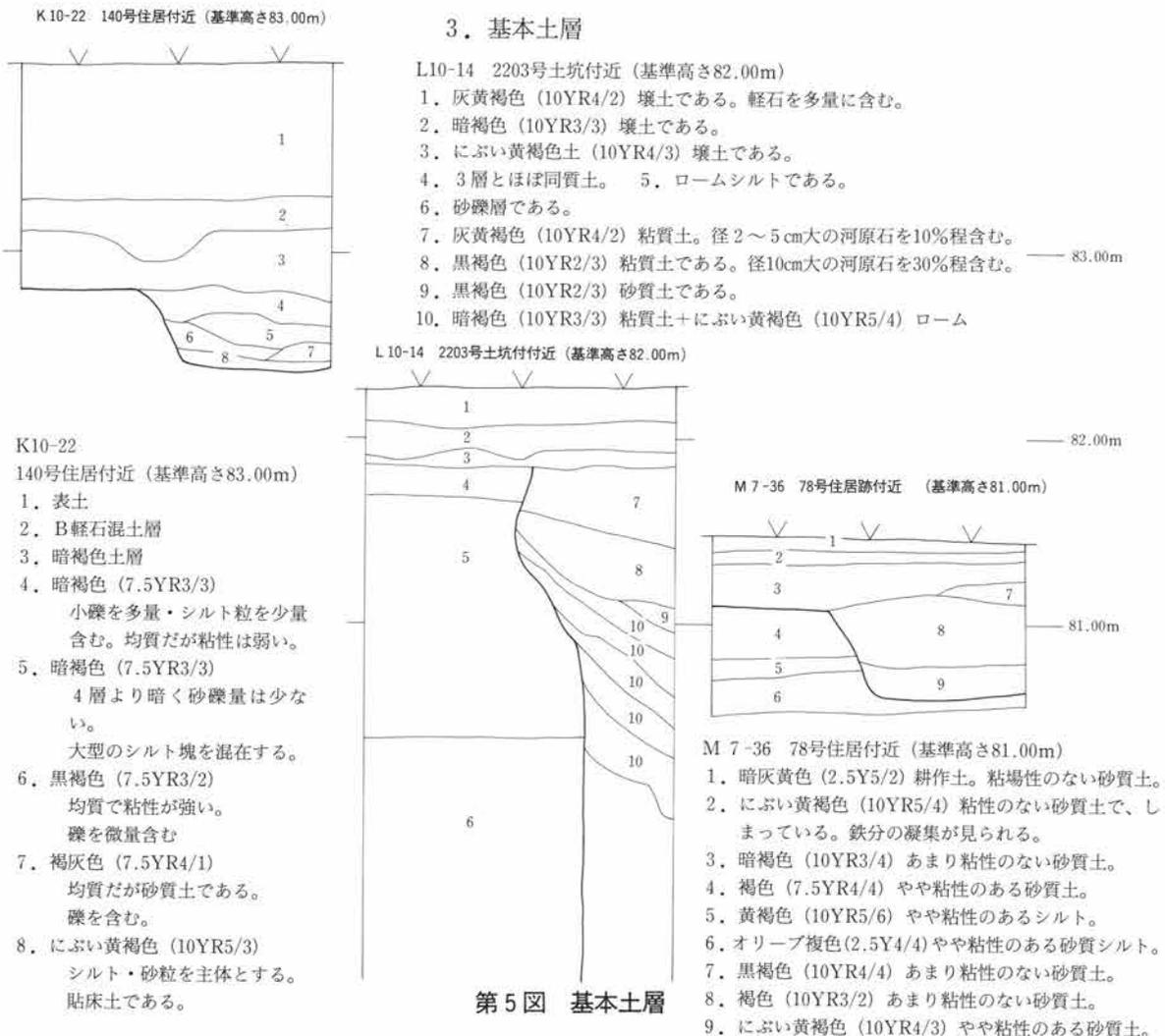
3 基本土層

遺跡群として広域な範囲を調査の対象とする場合、どうしても巨視的・微視的に見た地形、地質学的な検討が必要となる。巨視的な地質学の検討は『上栗須遺跡群I』の第3分冊に掲載の古環境研究所の早田 勉氏のレポート「寺前遺跡の地質調査」や付図の「地形学図」に詳述されている。すでにこの遺跡地周辺の地形学的な調査は、近年では杉原重夫氏による「藤岡市 滝前・滝下遺跡とその周辺の自然」『滝前・滝下遺跡』（1988）に詳しい。この段階で欠けていた点は今回、本遺跡などの立地する段丘低位面の視点を踏えた早田 勉氏による前出のレポートによって補われた事になる。

ここでは微地形レベルのことについてまとめておきたい。本遺跡の立地は河岸段丘上にある。この藤岡地域には高位面から低位面まで「黒熊面」、「緑埜面」、「藤岡面」、「本動堂面」の4面に区分されている。

高位段丘の「黒熊面」は、鮎川左岸の開析の進んだ段丘面である。礫層上面に粘土層が厚く堆積している。この上面には始良 Tn 火山灰が堆積しており、同時期と考えられる碓氷川左岸の段丘との比較検討から南関東の「多摩面」に相当すると考えられている。

中位段丘の「緑埜面」は、鮎川左岸の段丘面で、数mの礫層から構成されている。段丘上面には粘土層が堆積している。この最上面の粘土層中には始良 Tn 火山灰が堆積している。下位段丘の「藤岡面」との比較・



検討から更新世の中頃、南関東の「武蔵面」または「立川面」に相当すると考えられている。

低位段丘の「藤岡面」は藤岡市街地の大部分のせる段丘面である。この段丘面はさらに中洲に相当する「藤岡中洲面」という高位の面と三名湖、笹川の旧河道や後背湿地からなる低位の「藤岡旧河道」の2つからなる。

段丘面を構成する礫層の厚さは数10mを越えるもので、礫層の上面には風成による始良 Tn 火山灰が堆積している。それから考えると藤岡面が離水した時期はおよそ2.5万年前と考えられ、更新世後半の、南関東編年という「立川面」に相当すると考えられている。

低位段丘で「藤岡面」よりさらに一段低い「本動堂面」は鮎川右岸、沖積低地が開ける位置に部分的に認められる。藤岡面より新しいとされるが、地質学の分野でも不明な点が多いらしい。更新世の終りの時期とみられることから、南関東編年という「青柳面」に相当しよう。

この遺跡が乗る藤岡台地の北側には、現在でも中村堰が流れる沖積低地が広がる。この台地前面の後背湿地となる低い沖積低地は「岡之郷後背湿地面」と呼ぶ。その北方、東流する烏川に挟まれて、自然堤防・中洲からなる「岡之郷面」よりも一段高い、「岡之郷中洲面」がある。その形成年代は完新世とされる。

また藤岡中洲面の平坦な基盤面は、立川礫層に相当すると考えられている。この上面に厚い粘土層がのる。かつて新井房夫氏は上部ローム層を鍵層に上・下の粘土層に分けたことがある（「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編 10』1962）。厚く堆積した粘土層の下部粘土層中には中部ローム層上半部の重鉍組成の特徴が対比されている。上部粘土層中には下部に As-BP、上部には As-YP が認められている。これらのことから藤岡面は、立川期以降においても完全に離水しておらず、As-YP 以降の段階になっても砂層の堆積が数度確認されていることから、藤岡台地、特に庚申山西側の扇状地形成における歴史時代の推移を丹念に追う作業が今後、必要となろう。

第3区は考古学の発掘作業上で分類した土層と地質学サイドで検討した分類の呼称と若干の齟齬が見られた。発掘調査中に疑問と考えた層準について、現地で地質学の指摘を受けた部分についてまとめておきたい。

現在の表面土層のほとんどは暗褐色砂層10YR3/4の畑地である（I層）。この層中にテフラの堆積が見られた。このテフラは石質岩片（最大径2mm）、発泡の良好な白色軽石（最大径12mm）が多量に含まれていることから天明3年（1783年）に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A）ということが明らかになった。

畑地（I層）の下層は、旧耕作土層で平均して暗褐色粘質土10YR3/3である（II層）。この層中にもテフラの堆積が見られた。最大径6mmほどの比較的発泡の良い淡褐色軽石が含まれている。層相から天仁元年（1108年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B）ということである。

旧耕作土層（II層）の下層は、黒褐色粘質土層～砂質土層（III層）である。色調は10YR3/2が平均的である。この層の上層からは土師器の遺物が少量出土おり、遺構が確認できるのはこの面からの切り込みである。黒褐色粘質土層～砂質土層（III層）の堆積状態は断面での観察でも多様である。いわゆる藤岡面の高位の部分に相当し、中洲と呼称したものである。

黒褐色砂質土層（III層）の遺構切り込み面より下層に黒褐色砂質シルト層が存在し、層中に発泡の良い径3mmほどの白色軽石が含まれている。軽石の特徴から浅間火山から噴出したものと考えられた。その時点での教示では浅間C軽石または浅間D軽石と考えられた。

少なくとも縄文時代、または古墳時代になっても完全に離水状態になっておらず、当時住みやすい場所であったとはいえない地域と考えられる。何度かの離水・着水の繰り返しによる砂層ついて、または砂礫層の堆積について再度、地質学・地形学と考古学とのあいだで検討し合い、細かな暦年代と地域変遷を組み立てる時

第I章 調査概要

期に来ている。

また、藤岡台地上での発掘調査は藤岡台地＝藤岡粘土の原料生産地の中央部分を発掘していることを度々意識することとなった。遺跡の分布調査図を粘土採取地の図に重ねてみると、その市松模様の範囲の広がりには藤岡市の埋蔵文化財担当の方々の苦労を垣間みる思いであった。すでに多くの重要遺跡の中心部分が粘土掘削により抜け落ちているからである。

三州瓦や淡路瓦に及ぶべくもないが、児玉、藤岡の地域は関東瓦の中心地であつた。とくに藤岡は瓦の生産地というだけでなく、関東各県の瓦業者に原料の粘土を供給する最大の原料生産地としても有名であった。

瓦から地域を見ると先ず奈良時代の上野国分寺瓦の生産が日野金井地区で始まる。その後、中世～近世にかけて上杉、芦田、松平と歴代の領主たちは瓦生産を奨励して、生産地も鮎川上流から下流に移動しながら、近代では粘土の採取地に近接する藤岡市街地に大型なダルマ窯が築かれた。

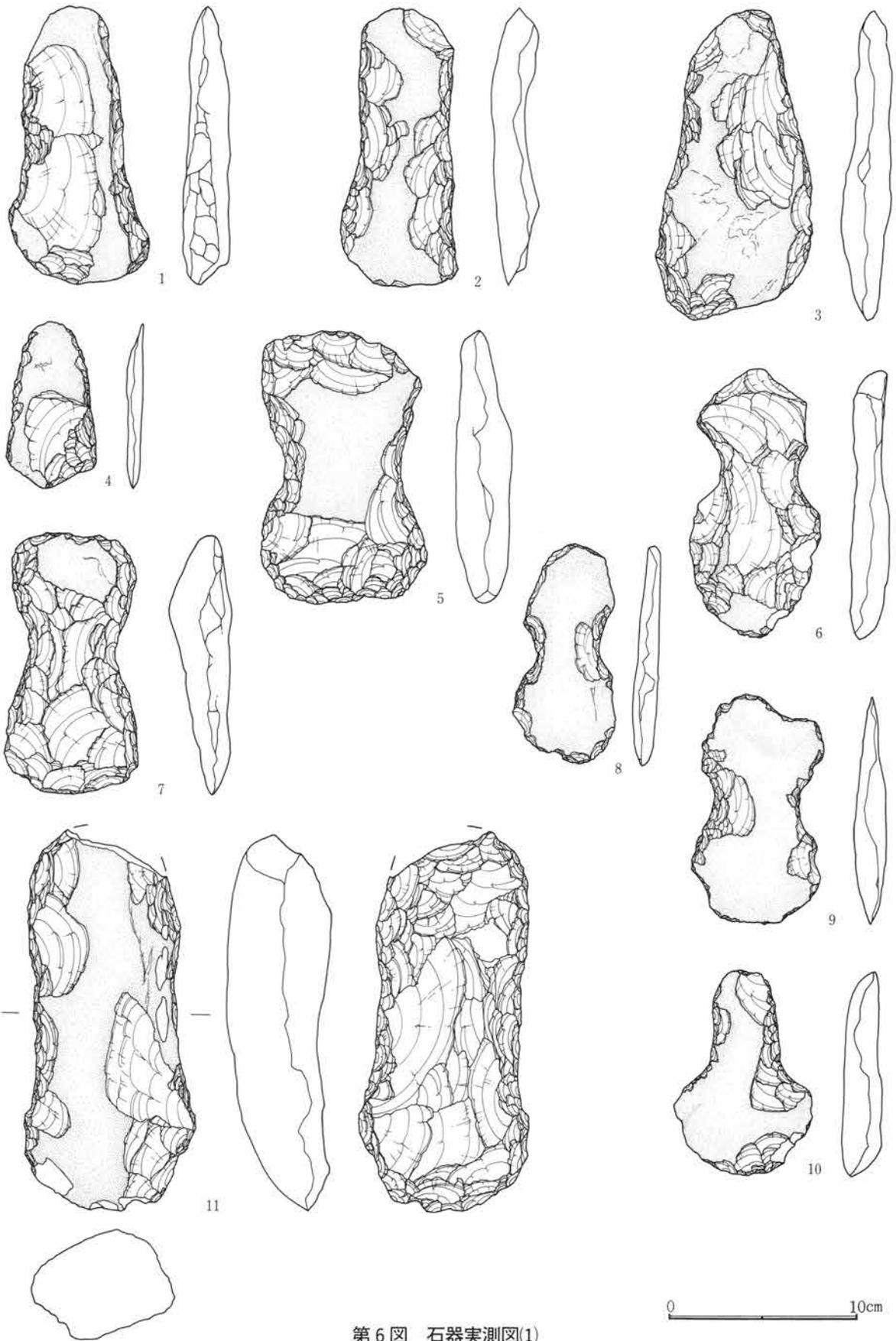
最盛期、施釉系瓦と燻し瓦を合わせた年間生産量は4千万枚、その原料粘土の消費量は16万tといわれる。藤岡粘土の分布は東平井を南端に、西は本動堂、東は現市街地、北は岡之郷まで拡がる。ただ日野金井に分布する古代瓦生産地の粘土採取地は鎭川流域の段丘性粘土（黒熊面）の可能性が高い。

粘土の鉱物組成から見ると、東平井や岡之郷の粘土に含まれる主成分の順位は、石英、緑泥石、セリサイトとなっており、段丘性粘土の分布地である日野金井や吉井町多比良の粘土主成分の順位は、モンモリロン石、石英、カオリナイトである。古代瓦の粘土採取地、生産地、そして消費地の確定作業もさることながら、その前代の古墳時代中期から後期にかけての白石稲荷山古墳、七興山古墳などの築造が物語るように大生産、大消費時代の解明も藤岡粘土の活用を通して可能となるのであろう。その意味で基本土層の調査は重要であると、報告書執筆の段階になって今更ながら痛感している。

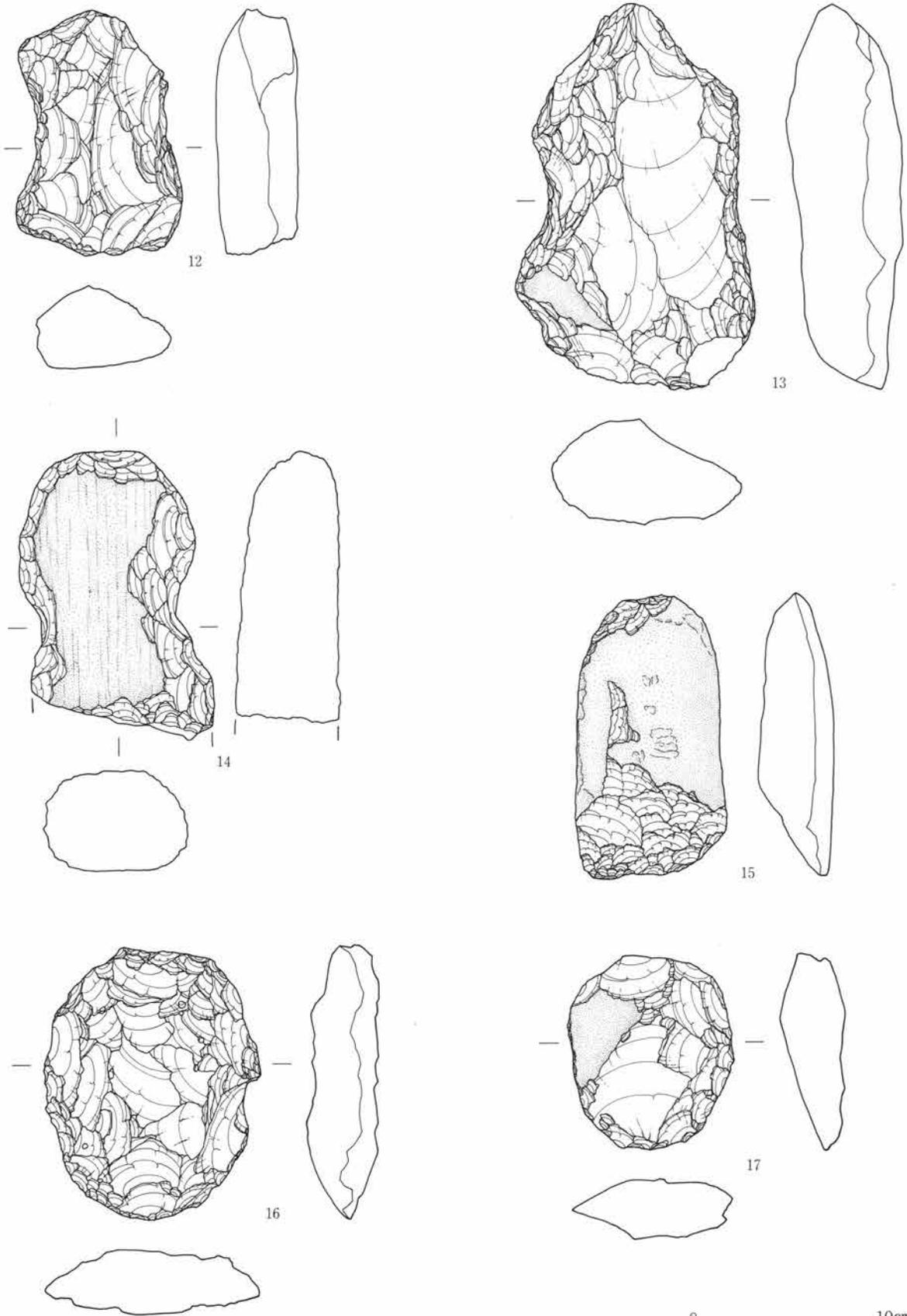
第II章 遺 跡

第1節 縄文時代の石器

No.1は硬質頁岩製の短冊型打製石斧である。3C区K9-19Gr.56号溝 (No.66 石器整理番号S-49185) 出土である。計測値は器長14.3cm、最大幅14.3cm、器厚2.4cm、重量304gである。刃部寄りがやや幅広になり、正面には自然面を残している。No.2は硬質頁岩製の短冊型打製石斧である。3C区L9-14Gr.56号溝 (No.98 S-38317) 出土である。計測値は14.4cm、6.2cm、2.4cm、重量246gである。No.3は硬質泥岩製の撥型打製石斧である。3C区K9-49Gr.(No.157 S-51092) 出土である。計測値は16.0cm、8.2cm、2.6cm、重量335gである。基部上端部にも調整痕が認められる。No.4は硬質泥岩製の短冊型打製石斧である。3区(S-23649) 出土である。計測値は8.5cm、4.7cm、0.8cm、重量47gである。刃部は山形を呈し、正面右側に調整痕が集中している。No.5～9は硬質泥岩製の短冊型打製石斧である。No.5は3B区L7-58Gr.覆土からの出土である。計測値は14.2cm、8.7cm、3.0cm、重量421gである。No.6は3区L9-66Gr.(No.313 S-23035) 出土である。計測値は13.9cm、6.8cm、2.0cm、重量208gである。刃部と基部ともに先端部は、山形に突出している。No.7は3C区L9-28Gr.30号溝 (No.313/S-23034) 出土である。計測値は13.4cm、7.0cm、3.3cm、重量320gである。基部寄りに自然面を残し、最大厚となっている。No.8は3区M7-46Gr.1号溝 (No.58 S-33731) 出土である。計測値は11.4cm、5.4cm、1.3cm、重量92gである。側縁部のみ周辺加工を施している。刃部と基部ともに平面形は丸みを帯びている。No.9は3D区K11-08Gr.1号集石 (No.89 S-37785) 出土である。計測値は11.8cm、6.8cm、1.7cm、重量138gである。No.8と同様に正面には大きく自然面を残している。特に、刃部は丸みを帯びている。No.10は硬質泥岩製の撥型打製石斧である。3C区K9-09Gr.56号溝 (No.16) 出土である。計測値は10.6cm、7.2cm、2.1cm、重量151gである。刃部と基部の右側縁部には調整痕が顕著に認められる。No.11は硬質泥岩製大形の打製石斧である。4B区F14-55Gr.280号土壇 (S-8164) 出土である。計測値は19.7cm、8.9cm、5.6cm、重量1039gである。基部先端部が欠損している。正面の両側縁部に調整加工を施している。No.12は硬質頁岩製の打製石斧である。3D区K11-08Gr.集石 (S-8136) 出土である。計測値は12.5cm、8.5cm、4.2cm、重量570gである。大形打製石斧の使用破損による再製品と推定される。No.13は硬質頁岩製大形の打製石斧である。3C区K9-19Gr.56号溝 (No.67 S-49184) 出土である。計測値は20.7cm、12.2cm、5.9cm、重量1439gである。正面右側には第一次剝離面が認められる。基部先端部は山形を呈している。器体部中央の両側縁部は湾曲している。No.14は緑色片岩製の分銅型打製石斧で刃部は欠損している。3C区L9-11Gr.56号溝 (S-48402) 出土である。計測値は14.8cm、10.0cm、5.4cm、重量1048gである。刃部先端部は丸みを帯び、側縁部のみ調整加工を施している。No.12と同様に再生加工が認められる。No.15は変玄武岩製の磨製石斧である。3C区L9-72Gr.1118号ピット (S-16921) 出土である。計測値は14.4cm、7.8cm、3.9cm、重量638gである。片刃状を呈している。No.16は硬質頁岩製の石核である。3区K10-82Gr. (No.78 S-8137) 出土である。計測値は14.0cm、11.1cm、3.7cm、重量623gである。円盤形を呈し正裏面ともに側縁部全周にわたり剝離痕が認められる。No.17は硬質泥岩製の石核である。3区5100号土壇 (S-37787) 出土である。計測値は10.0cm、8.6cm、3.3cm、重量278gである。



第6図 石器実測図(1)



第7図 石器実測図(2)

第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 遺 構

A 住居址

3区で発掘された竪穴住居址は170軒である。この内、竪穴住居址のみで切り合う軒数は73軒である。

竪穴住居址の43%が切り合っていることになる。この地域では竈が竪穴住居址の東側の片に付設されることでは通有である。東辺のうち竈の付設位置は、切り合いで竈の位置不明を除くと左寄りが7%、中央が19%、右寄りが74%と圧倒的に多いことが解る。

竈を図面の上に置いてみて例えば左右の住居の長さを7とし、天地方向の長さ10に考えると、その比は0.7となる。比の0.7以下の縦長の平面形は全体の4%、そして比が0.8は、全体の9%、比が0.9は、全体の12%、方形の平面形でその比1.0は25%を占める。横長に向かう比が1.1は全体の19%、比が1.2は全体の13%、比が1.3は全体の8%、比が1.4は全体の8%、比が1.5以上は全体の2%を占める。すなわち住居址は平面形が方形1.0とやや横長形1.1~1.2の占める割合は57%と集中している。

住居址の面積は4㎡~74㎡までである。特に8㎡~16㎡までが65%と集中している。小規模なものは4㎡~7㎡が12%、大きなものは17㎡~42㎡が22%を占める。124号住居址は74㎡と飛び抜けて大きく最大規模となる。

発掘区の中でこれらの住居がどのように分布しているのかを概観しておきたい。まず、30㎡以上の面積を大型の住居と考えた場合、171号住居址、180号住居址、182号住居址がL8グリッドの中央部分に集まる。179号住居址はL8グリッドとL9グリッドの西の境界付近に単独で位置する。73号住居址と104号住居址はL9グリッドの東中央に切り合って位置する。166号住居址はK9グリッドとL9グリッドの境界の中央付近に単独で位置する。124号住居址はK10グリッドの北東寄りに単独で位置する。44号住居址はJ11グリッドの南東隅に単独で位置する。79号住居址はJ12グリッドの中央部に単独で位置する。これら大型住居址の分布は住居址どうしが一定の距離や占地に関連があるとは考えられない。

また小型の住居址群と大型の住居址が何等かの相関関係を示すような分布は考えられなかった。

170軒の住居址は3区の発掘区のどの位置に集中しているものか、その傾向を見ておきたい。大きく7つのブロックに分けることができる。北側から見て行く。L7グリッド、L8グリッド、M7グリッド、M8グリッドの4つのグリッドの交点付近を中心に50軒の住居址が集中する。次にL9グリッドの東側に16軒の住居址が集中している。さらに東側に集落が展開すると考えられる。K9グリッド、L9グリッド、の4つのグリッドの接点付近に14軒の住居址が集中する。さらに西側、または南西のブロックに集落が展開すると考えられる。K9グリッド、K10グリッドの2つのグリッドの接点付近に25軒の住居址が集中する。さらに西側または南西側に集落が展開すると考えられる。K10グリッド、K11グリッド、L10グリッド、L11グリッドの4つのグリッドの交点ふきんを中心に12軒の住居址が集中する。さらに東側に集落が展開すると考えられる。J10グリッド、J11グリッド、K10グリッド、K11グリッドの4つのグリッドの交点付近を中心に27軒の住居址が集中する。J11グリッドの西半分を中心に26軒の住居址が集中する。このグループは4区の発掘区方向に展開すると考えられる。

3区1号住居址

遺構 (挿図番号第8・9図)

本住居址はM7-23グリッドで検出され、西6.5mに2号住居址が位置する。本住居の西辺は2号溝が南北方向に横切っている。

規模は長軸3.50m (推定)・短軸3.20m、面積8.382㎡である。主軸方向はN-5°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は45cm、竈幅は90cm、焚き口幅は30cmである。炉床ピットは長軸43cm・短軸39cm、深さ11cmである。

遺物 (挿図番号第216図 写真番号P.L. 45・80)

土師器の甕 (001)・土師器の坏 (002)・須恵器の高盤 (003)・須恵器の瓶 (004) を出土している。

その他に土師器1070g、須恵器460gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。製品は刃器である。

3区2号住居址

遺構 (挿図番号第10図 写真番号P.L. 45)

本住居址はM7-22グリッドで検出され、東6.5mに1号住居址、南3.5mに3号住居址が位置する。

規模は長軸2.55m・短軸2.50m、面積6.344㎡である。主軸方向はN-2°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は90cm、竈幅は96cm、焚き口幅は30cmである。炉床ピットは長軸37cm・短軸37cm、深さ11.5cmである。

遺物 (挿図番号第216図)

土師器の甕 (005)・土師器の坏 (006) を出土している。

その他に土師器184g、須恵器2170gが出土している。

3区3号住居址

遺構 (挿図番号第11・12図 写真番号P.L. 45)

本住居址はL7-22, 32グリッドで検出され、北3.5mに2号住居址、南西5.5mに4号住居址が位置する。

規模は長軸3.90m・短軸3.50m、面積8.516㎡である。主軸方向はN-7°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は98cm、竈幅は90cm、燃焼部長さは58cm、焚き口幅は25cm、煙道部長さは40cm、煙道部幅は25cmである。炉床ピットは長軸85cm・短軸40cm、深さ11cmである。

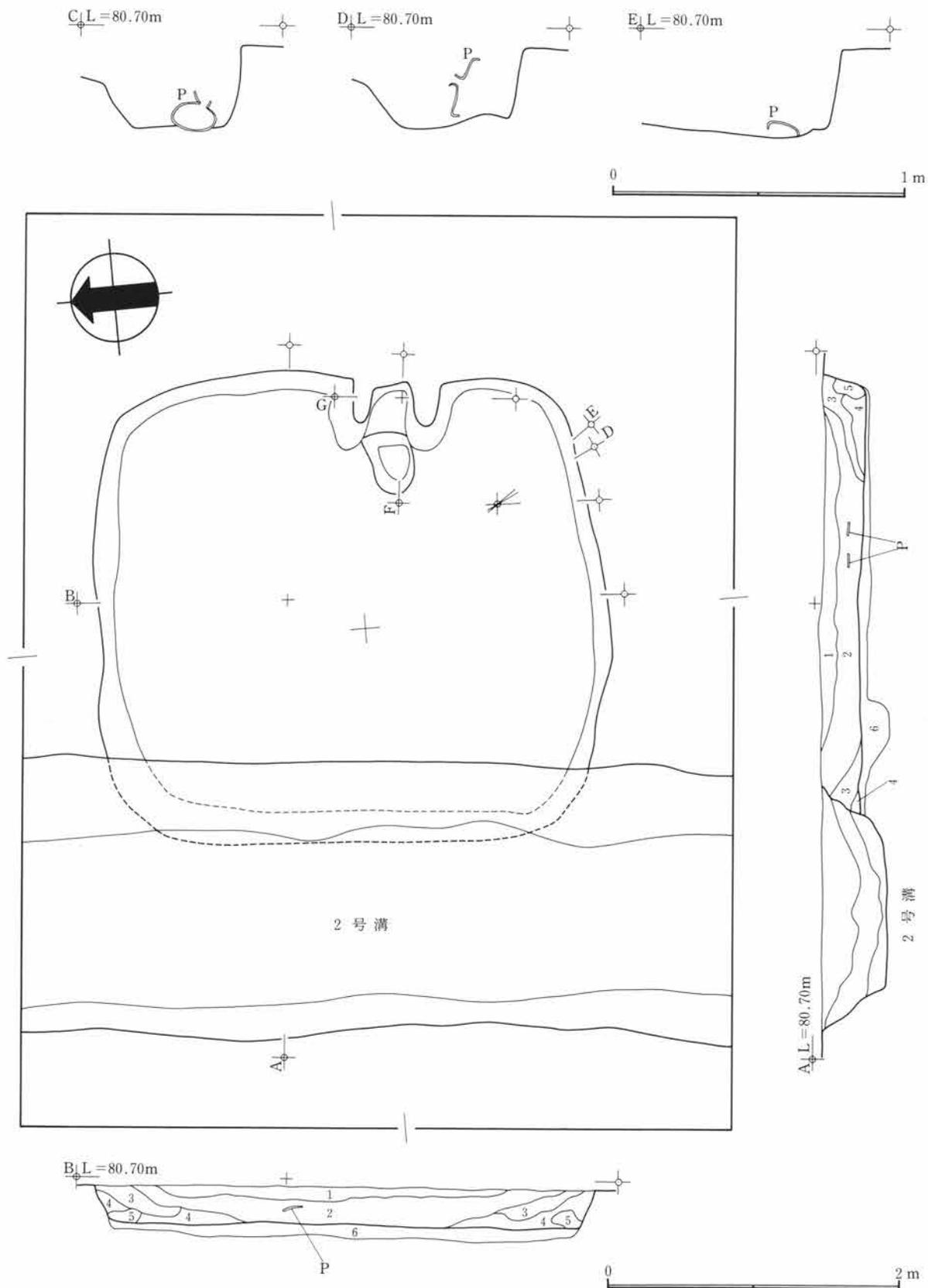
貯蔵穴は長軸78cm・短軸65cm、深さ16cmである。

遺物 (挿図番号第216図 写真番号P.L. 45・80)

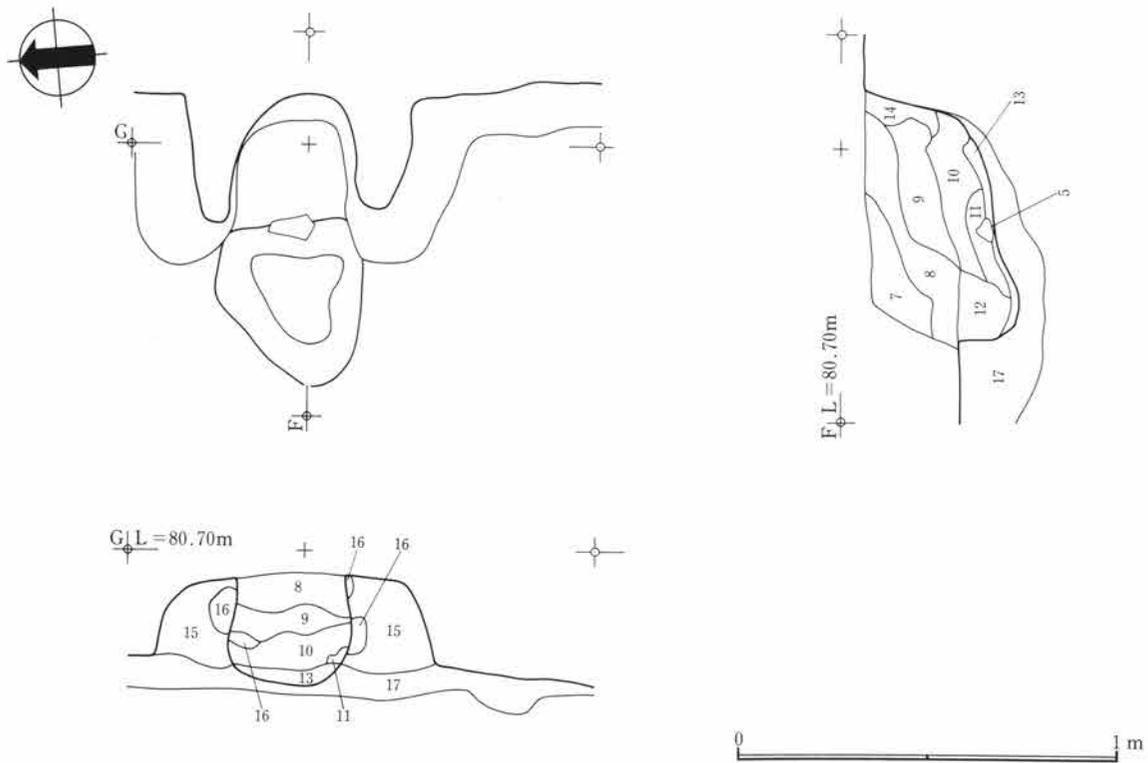
土師器の甕 (007・008)・土師器の坏 (009・010・011・012・013)・須恵器の長頸瓶 (014) が出土している。

その他に土師器2170g、須恵器4gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。鉄製品名は鎌である。



第8図 1号住居址(1)



第9図 1号住居址(2)竈

3区4号住居址

遺構 (挿図番号第13図 写真番号P.L. 45)

本住居址はM7-31, 32グリッドで検出され、北東5.5mに3号住居址、南42.0mに5号住居址が位置する。規模は長軸3.10m・短軸2.95m、面積8.454㎡である。主軸方向はN-1°-Eを示している。

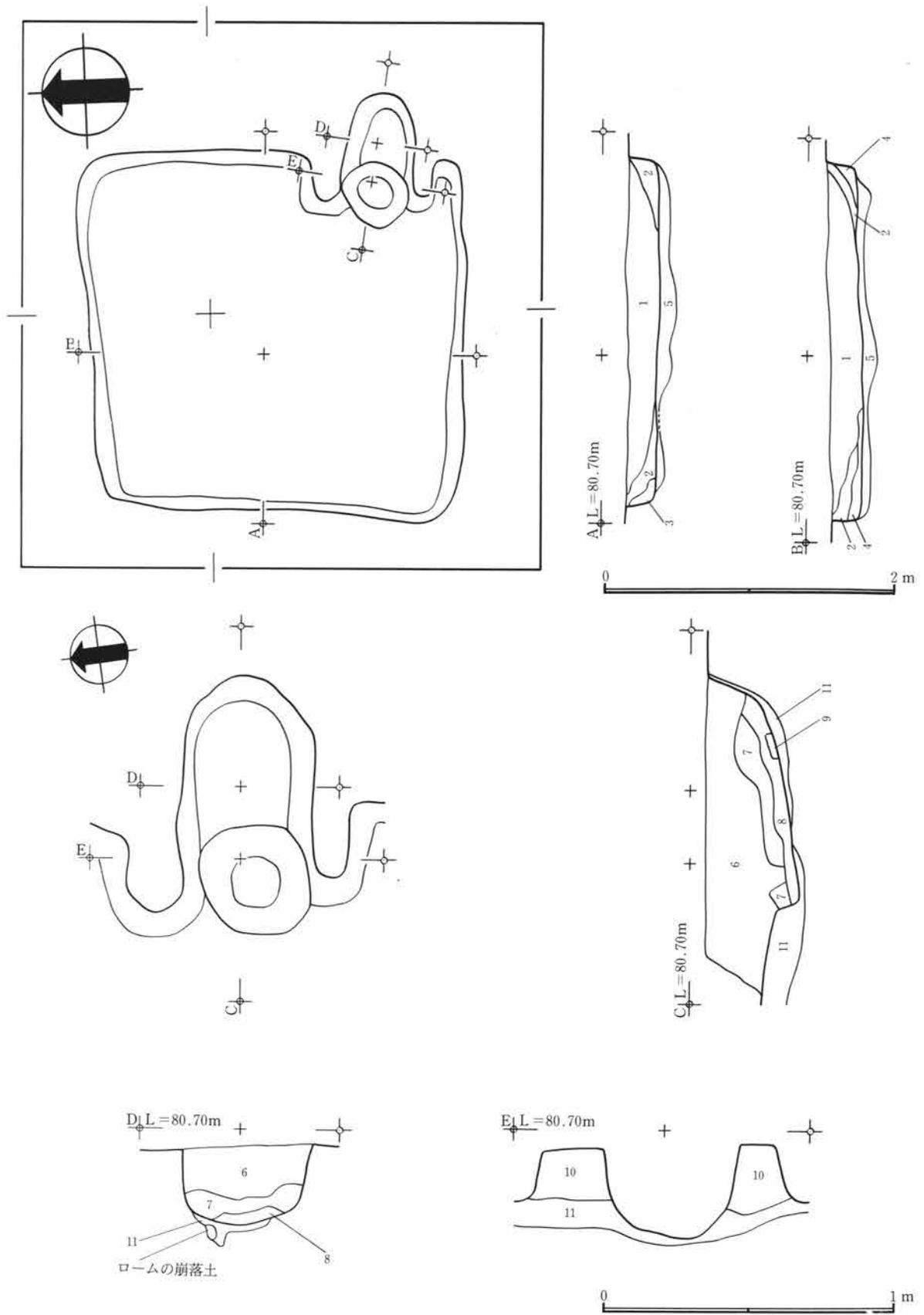
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は168cm、竈幅は102cm、燃焼部長さは25cm、焚き口幅は30cm、煙道部長さは143cm、煙道部幅は17cmである。炉床ピットは長軸54cm・短軸43cm、深さ6cmである。

貯蔵穴は長軸64cm・短軸53cm、深さ11cmである。

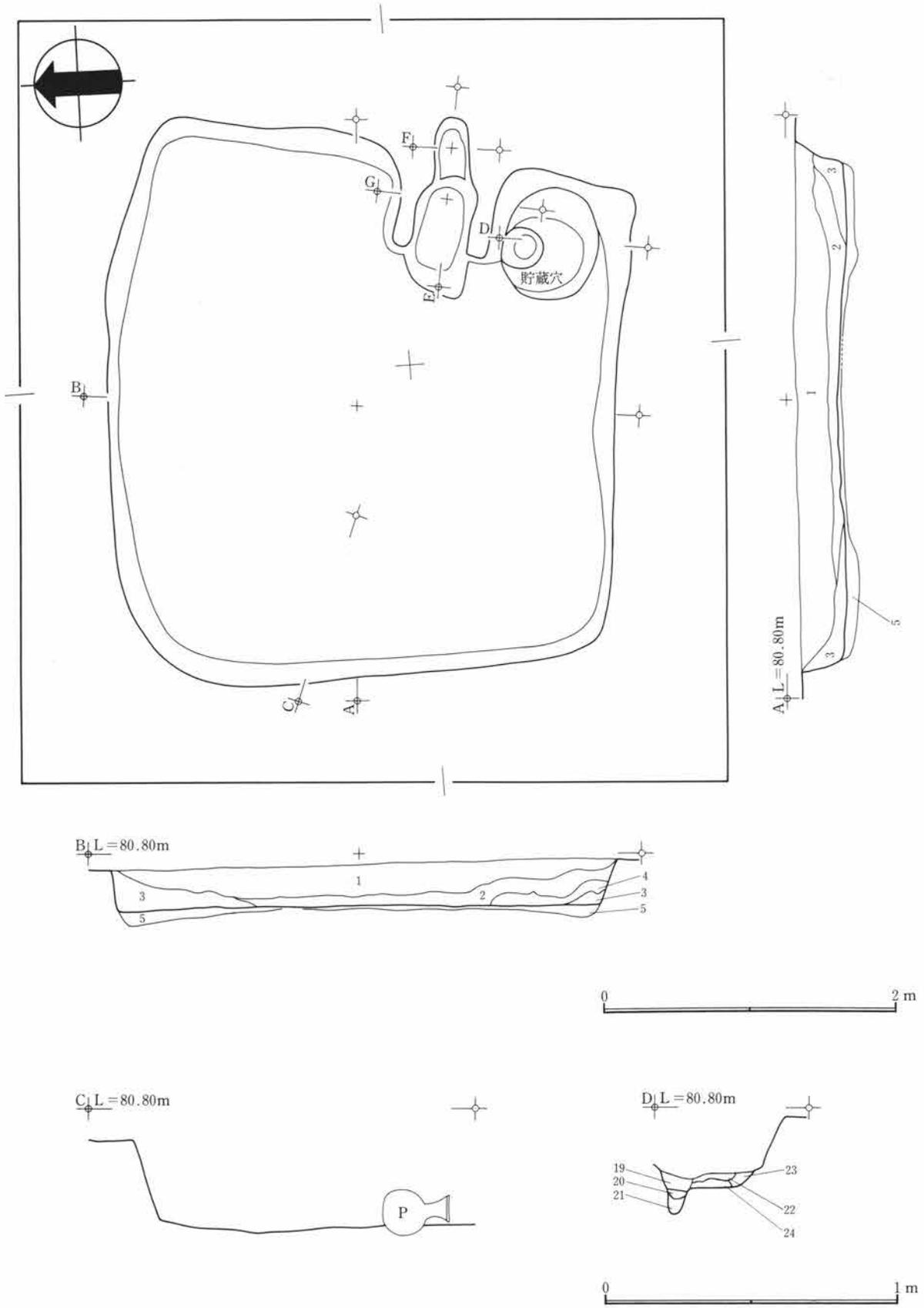
遺物 (挿図番号第217図)

土師器の甕 (015)・須恵器の高坏 (016)・土師器の坏 (017) を出土している。

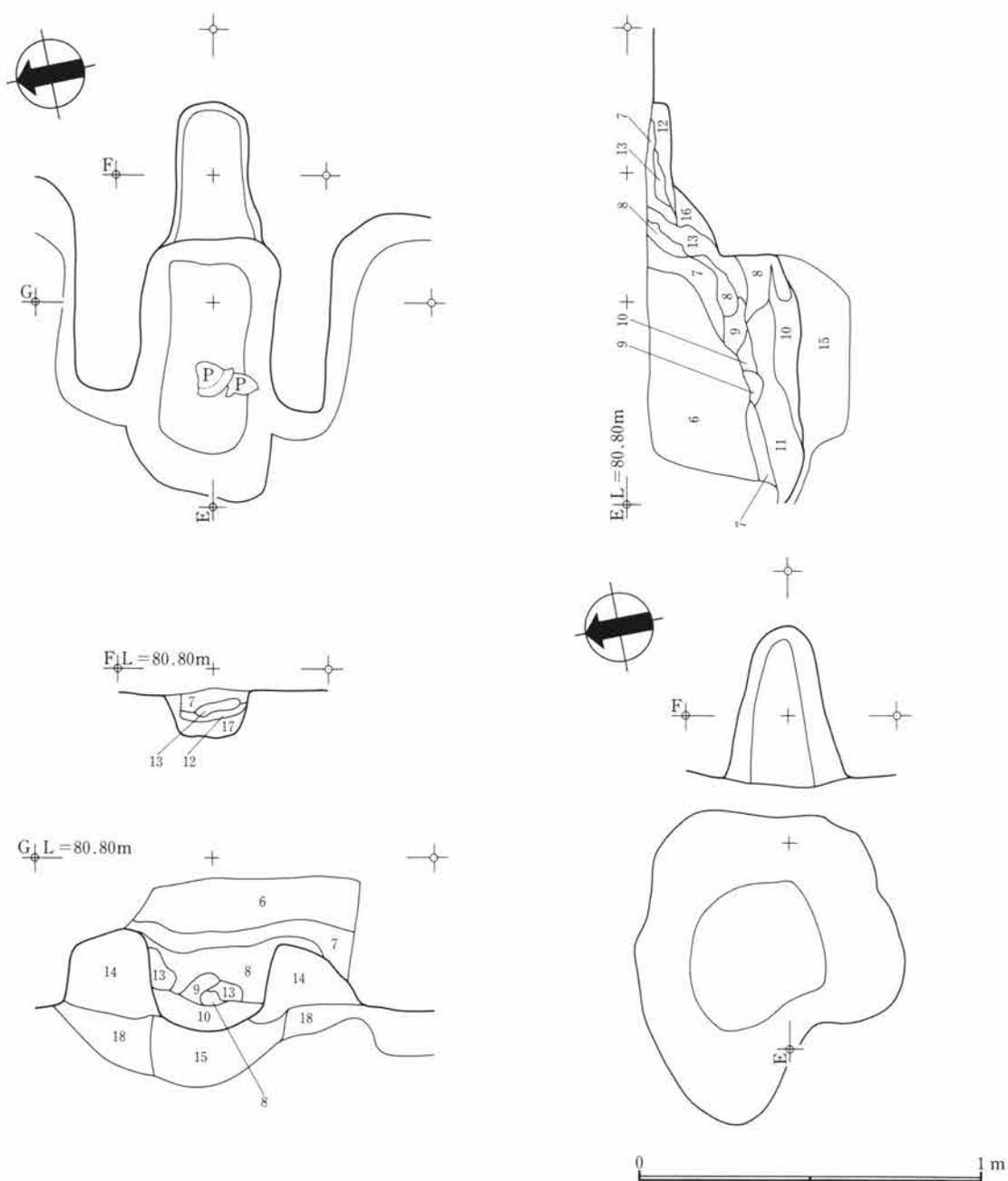
その他土師器111g、須恵器281g、縄文土器1片が出土している。



第10図 2号住居址



第11図 3号住居址(1)



第12図 3号住居址(2)竈

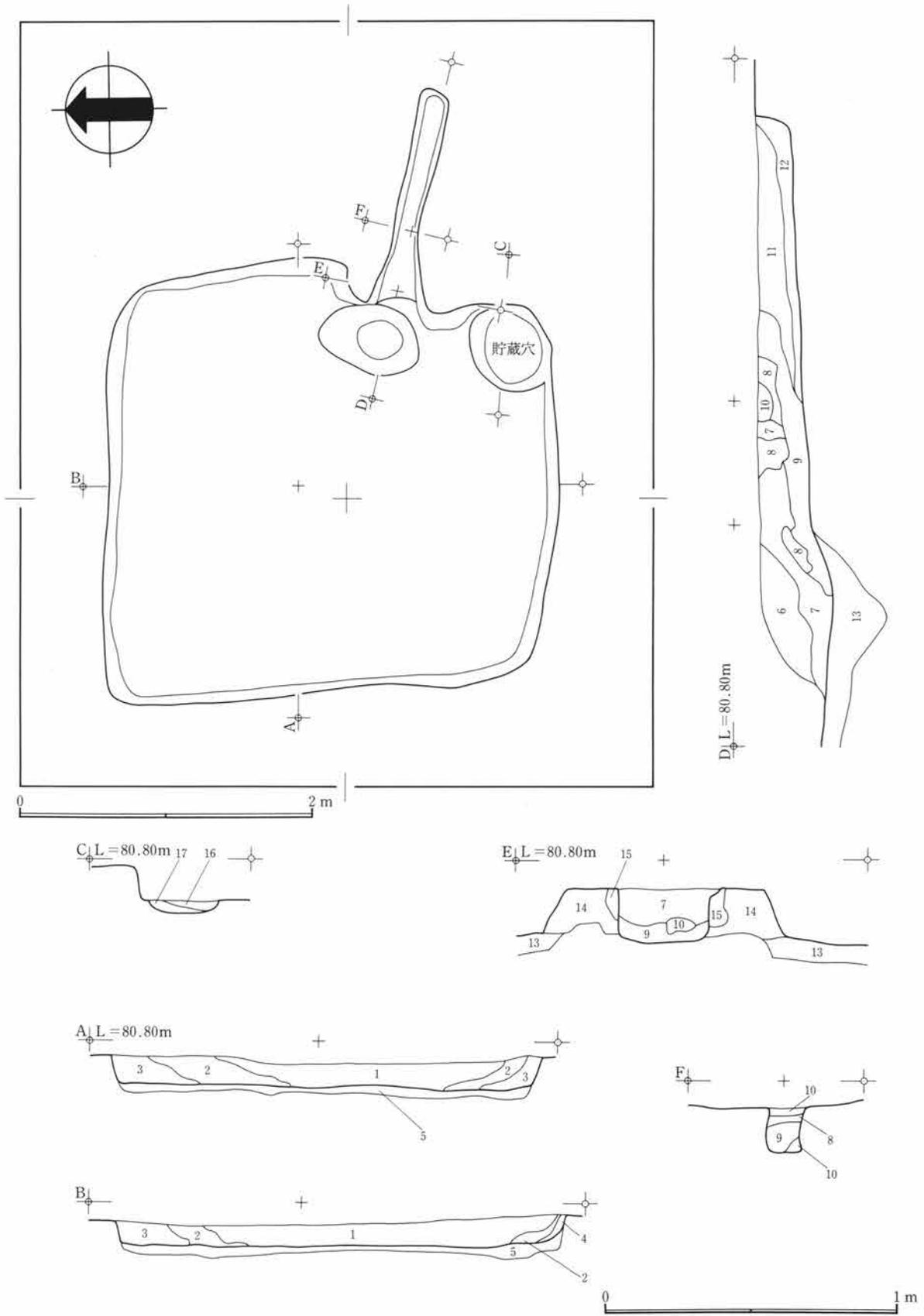
3区5号住居址

遺構 (挿図番号第14・15図 写真番号P L. 45)

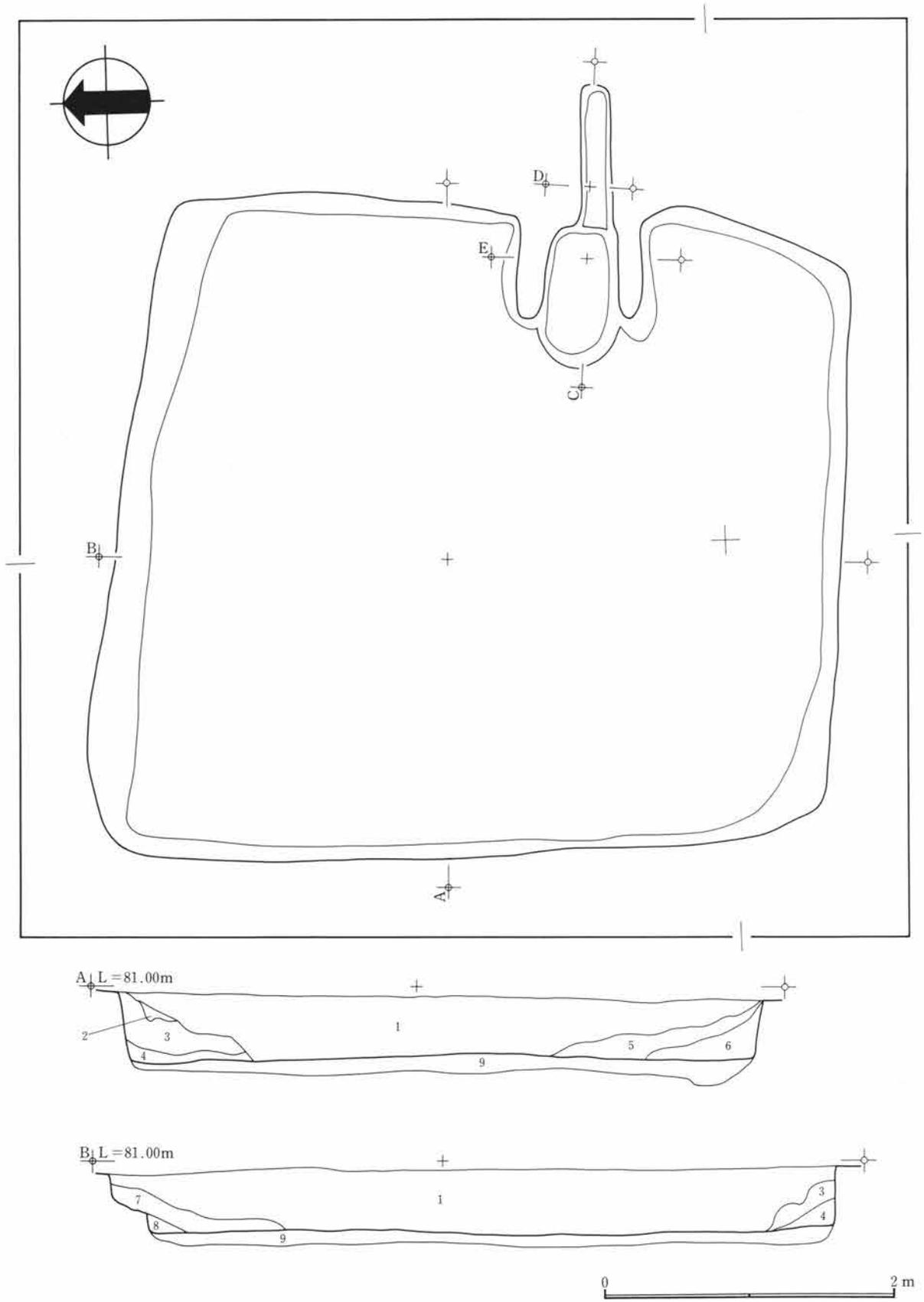
本住居址はM 7-62, 71, 72グリッドで検出され、西6.5mに6 A号住居址、東8.0mに8号住居址が位置する。

規模は長軸5.05m・短軸4.55m、面積9.960㎡である。主軸方向はN-2°-Eを示している。

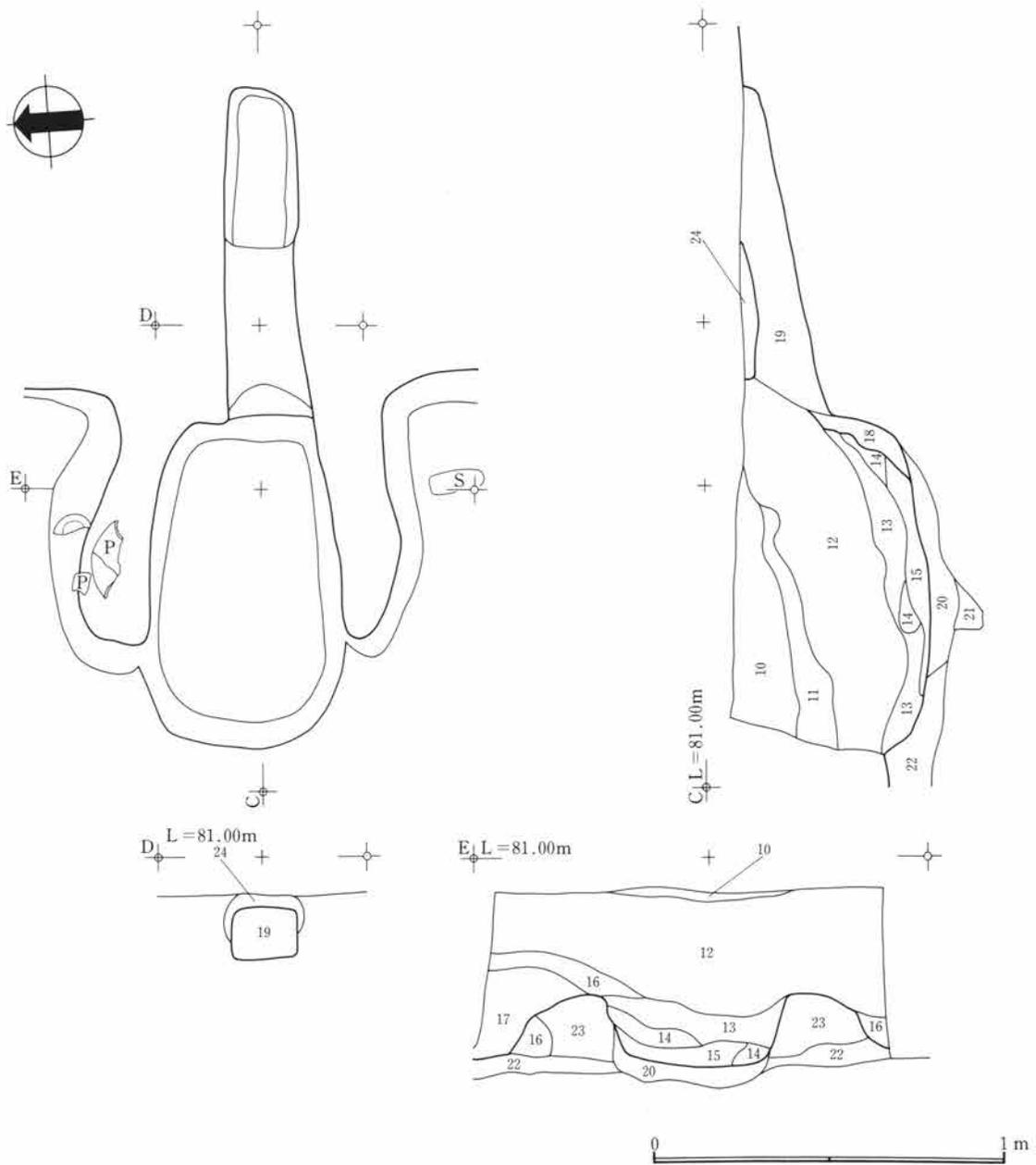
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は168cm、竈幅は107cm、燃焼部長さは83cm、焚き口幅は48cm、煙道部長さは85cm、煙道部幅は22cmである。炉床ピットは長軸95cm・短軸55cm、深さ7cmである。本遺跡では、



第13図 4号住居址



第14图 5号住居址(1)



第15図 5号住居址(2)竈

遺存状態の良い竈である。

遺物 (挿図番号第217図)

土師器の甕 (018・019)・土師器の埴 (020)・土師器の坏 (021)・須恵器の高坏 (022) を出土している。

その他土師器1542g、須恵器48g、縄文土器1片が出土している。

本住居では鉄製品が出土された。製品名は刃器である。

第II章 遺 跡

3区6A号・6B号住居址

遺構 (挿図番号第16図 写真番号P L. 45)

6A号住居址はM7-71グリッドで検出され、東6.5mに5号住居址が位置する。本住居の西辺に6B号住居址が重複し、6B号住居址の竈を壊している。

規模は長軸3.30m・短軸2.65m、面積7.560m²である。主軸方向はN-5°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は57cm、焚き口幅は50cm(推定)である。炉床ピットは長軸16cm・短軸14cm、深さ7cmである。

貯蔵穴は長軸103cm・短軸68cm、深さ13cmである。

6B号住居址はM7-71グリッドで検出され、南東8.0mに7号住居址が位置する。

規模は長軸2.55m・短軸2.32m(推定)、面積4.778m²である。主軸方向はN-3°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は55cm、焚き口幅は68cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかった。

貯蔵穴は長軸88cm・短軸65cm、深さ12cmである。

遺物 (挿図番号第217・218図 写真番号P L. 80)

6A号住居址からは土師器の甕(023・024)・土師器の台付甕(025)・土師器の坏(026)・須恵器の高台付塊(027)・須恵器の高台付坏(028・029)を出土している。

本住居では鉄製品が出土している。製品名は刀子である。

6B号住居址からは土師器の坏(030・031)・須恵器の盤(032)が出土している。

その他土師器4245g、須恵器1240gが出土している。

3区7号住居址

遺構 (挿図番号第17・18図 写真番号P L. 45)

本住居址はM7-81, 82グリッドで検出され、北東7.5mに5号住居址、南15.0mに13号住居址が位置する。

規模は長軸3.95m・短軸3.55m、面積7.518m²である。主軸方向はN-6°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は187cm(推定)、燃焼部長さは95cm(推定)、焚き口幅は62cm(推定)、煙道部長さは92cm、煙道幅は20cmである。炉床ピットは長軸93cm・短軸62cm、深さ6cmである。本遺跡での本住居址の竈の遺存状態は良好である。

床面北壁寄りに炭化物の分布する範囲が検土された。

遺物 (挿図番号第218図)

土師器の坏(033・034・035)・須恵器の坏(036)が出土している。

その他土師器2134g、288gが出土している。

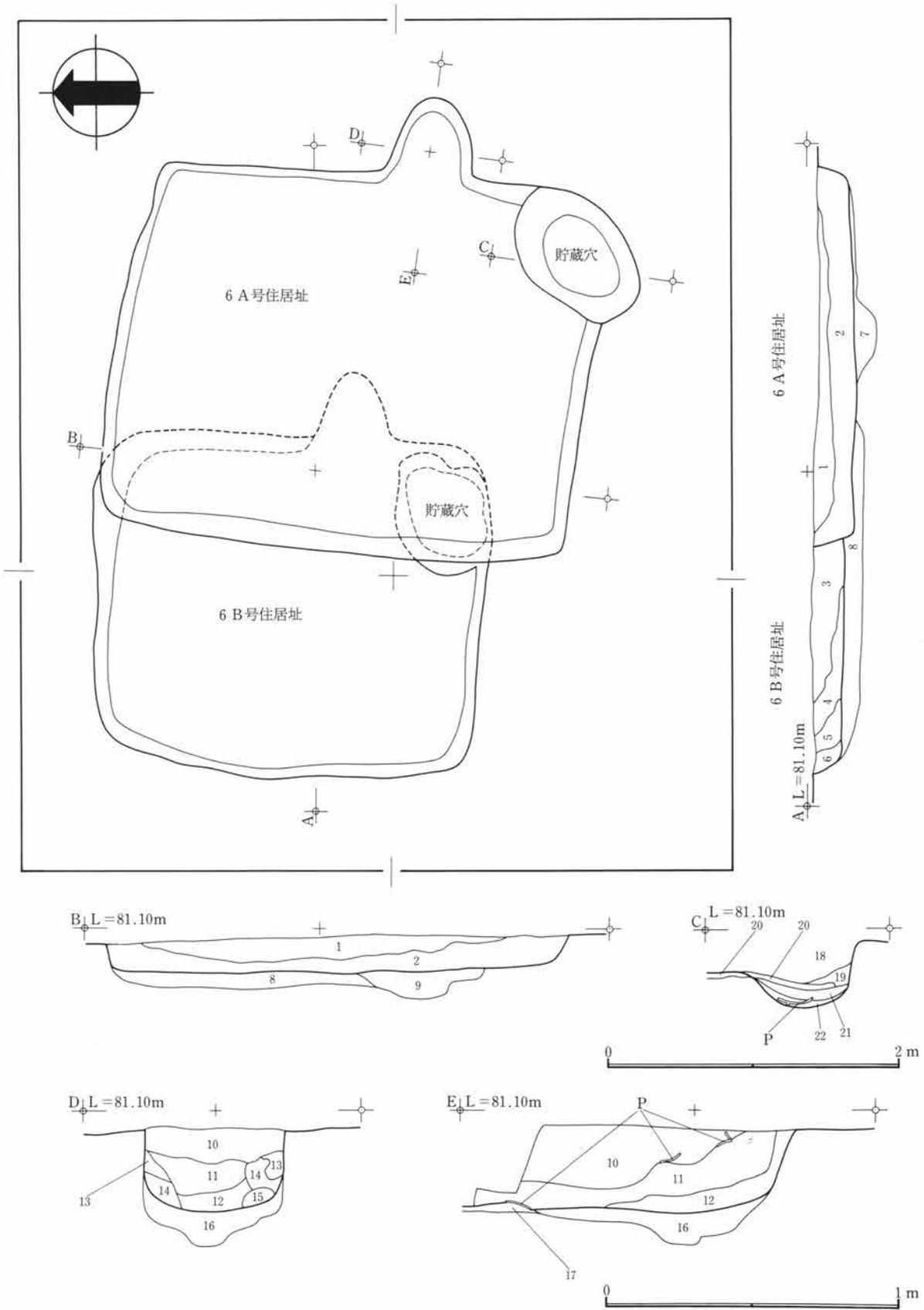
3区8号住居址

遺構 (挿図番号第19図 写真番号P L. 46)

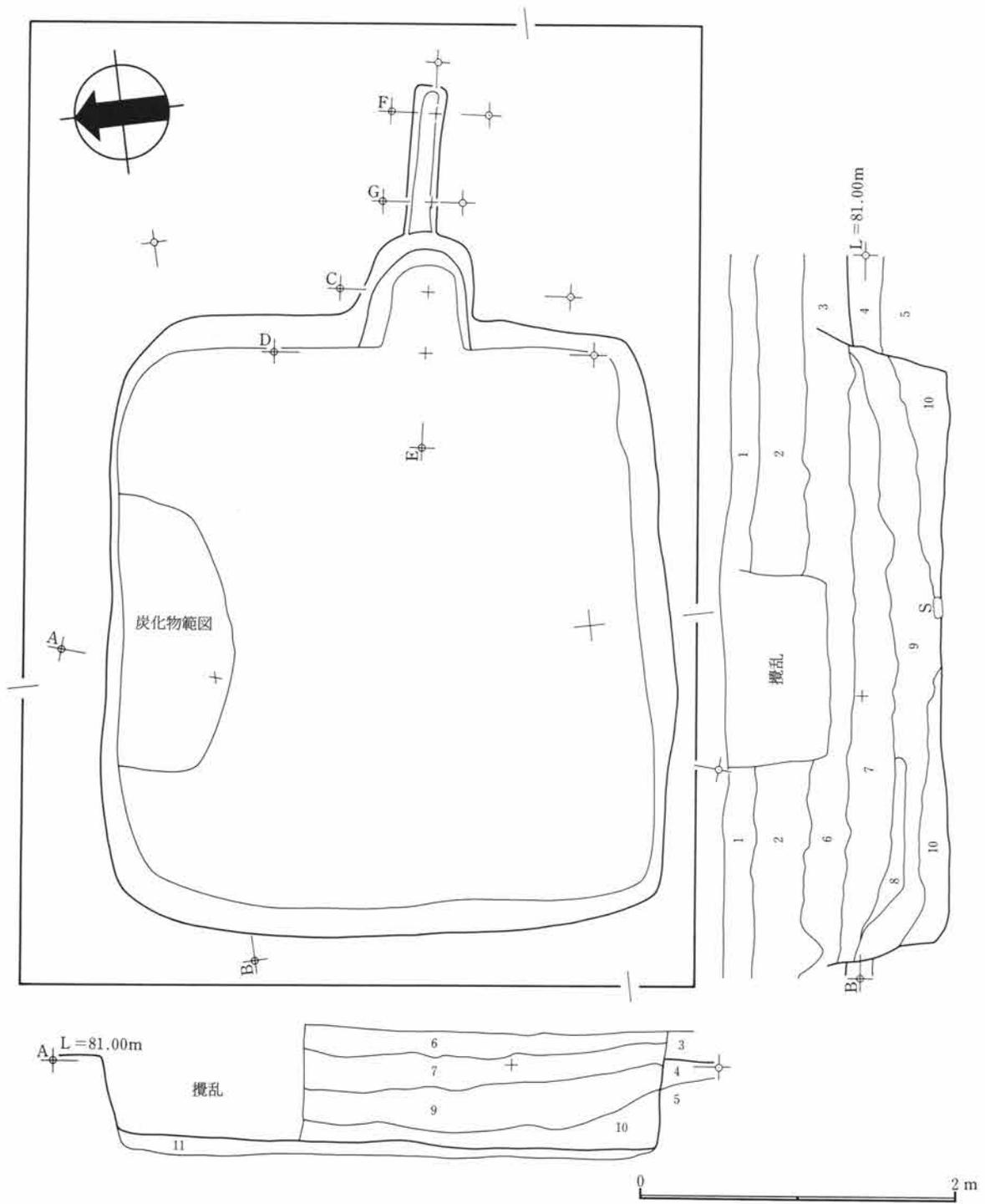
本住居址はM7-73, 83グリッドで検出され、西8.5mに5号住居址、南西13.0mに7号住居址が位置する。北東壁から竈煙道部をかすめて、3号溝が横切っている。また西壁を2号溝が南北に横切って壊す。

規模は長軸4.30m・短軸3.50m(推定)、面積11.252m²である。主軸方向はN-5°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は120cm、竈幅は117cm、燃焼部長さは73cm、焚き口幅は57cm、煙



第16図 6A・6B号住居址



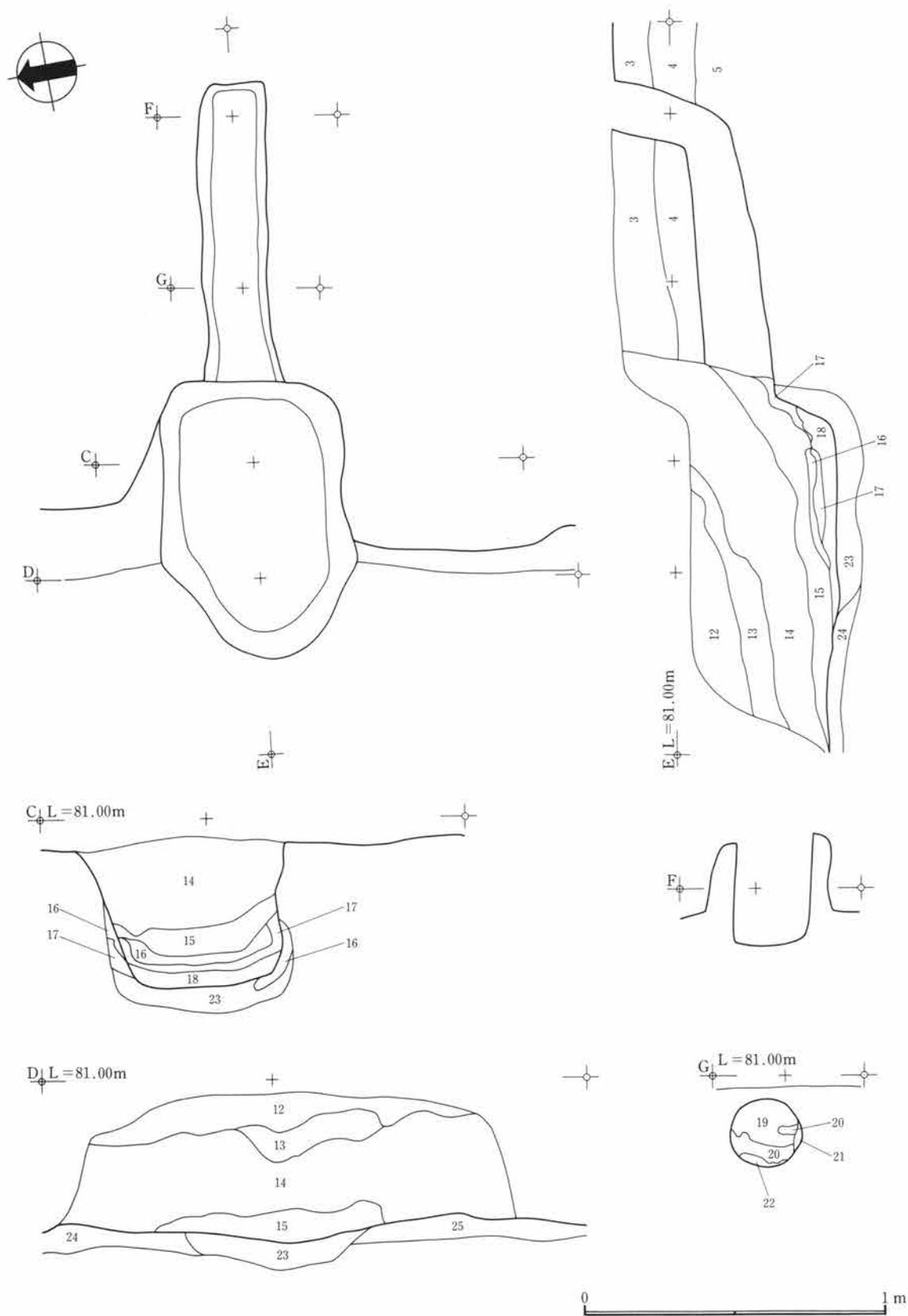
第17図 7号住居址(1)

道部長さは47cm, 煙道部幅は30cmである。炉床ピットは確認されなかった。

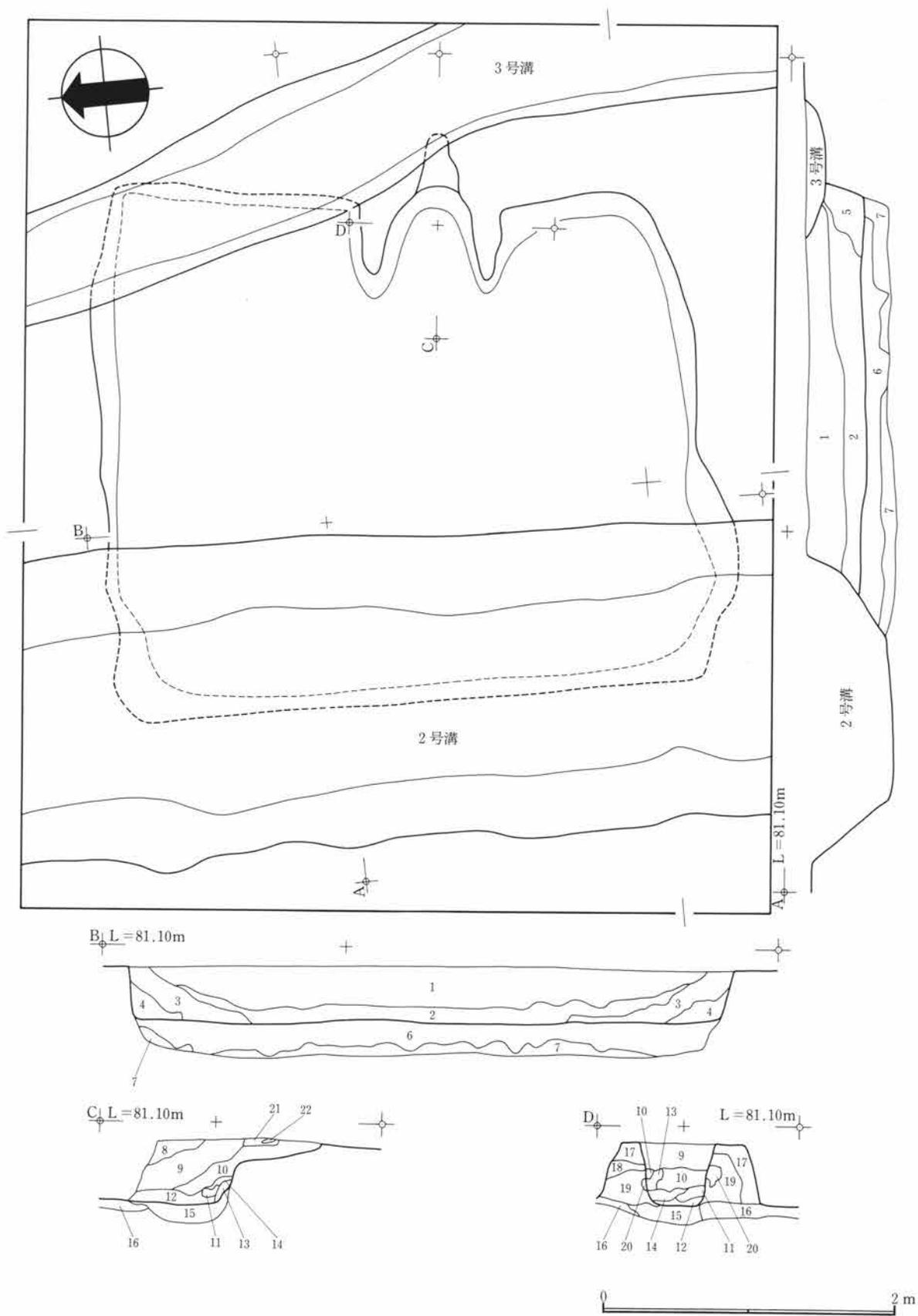
遺物 (挿図番号第218図 写真番号P L. 80)

土師器の甕 (037)・土師器の坏 (038・039)・須恵器の高坏 (040)・須恵器の坏 (041)・須恵器の高台付坏 (042) を出土している。

その他土師器2935g、須恵器270gが出土している。



第18図 7号住居址(2)竈



第19图 8号住居址

3区9号住居址

遺構 (挿図番号第20図 写真番号P L. 46)

本住居址はL 7-79, 89グリッドで検出され、南5.0mに48号住居址、北東13.0mに6 B号住居址が位置する。

規模は長軸3.10m・短軸2.57m, 面積6.476m²である。主軸方向はN-13°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は95cm (推定), 焚き口幅は45cm (推定) である。炉床ピットは長軸90cm・短軸53cm, 深さ6cmである。形状は長円形を呈し、両袖の検出はなかった。

貯蔵穴は長軸60cm・短軸50cm, 深さ17cmである。

遺物 (挿図番号第219図)

土師器の甕 (043)・土師器の坏 (044)・須恵器の壺 (045)・須恵器の高台付塊 (046)・須恵器の坏 (047)・(048)・須恵器の高台付坏 (049)・須恵器の塊 (050) が出土している。

その他に土師器1611g、須恵器496gが出土している。

3区11号住居址

遺構 (挿図番号第21図 写真番号P L. 46)

本住居址はM 8-32, 42グリッドで検出され、西12.0mに19号住居址、北東6.0mに42号住居址が位置する。

規模は長軸3.00m・短軸2.85m, 面積7.658m²である。主軸方向はN-2°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は60cm, 竈幅は102cm, 焚き口幅は33cmである。炉床ピットは確認されなかった。住居址内に竈本体が入る形態である。貼りつけた両袖を持つ。

遺物 (挿図番号第219図)

土師器の坏 (051・052・053・054・055)・須恵器の坏 (056) が出土している。

その他に土師器644gが出土している。

3区12号住居址

遺構 (挿図番号第22図 写真番号P L. 46)

本住居址はM 8-02, 12グリッドで検出され、北西6.0mに13号住居址、南東11.5mに43号住居址が位置する。

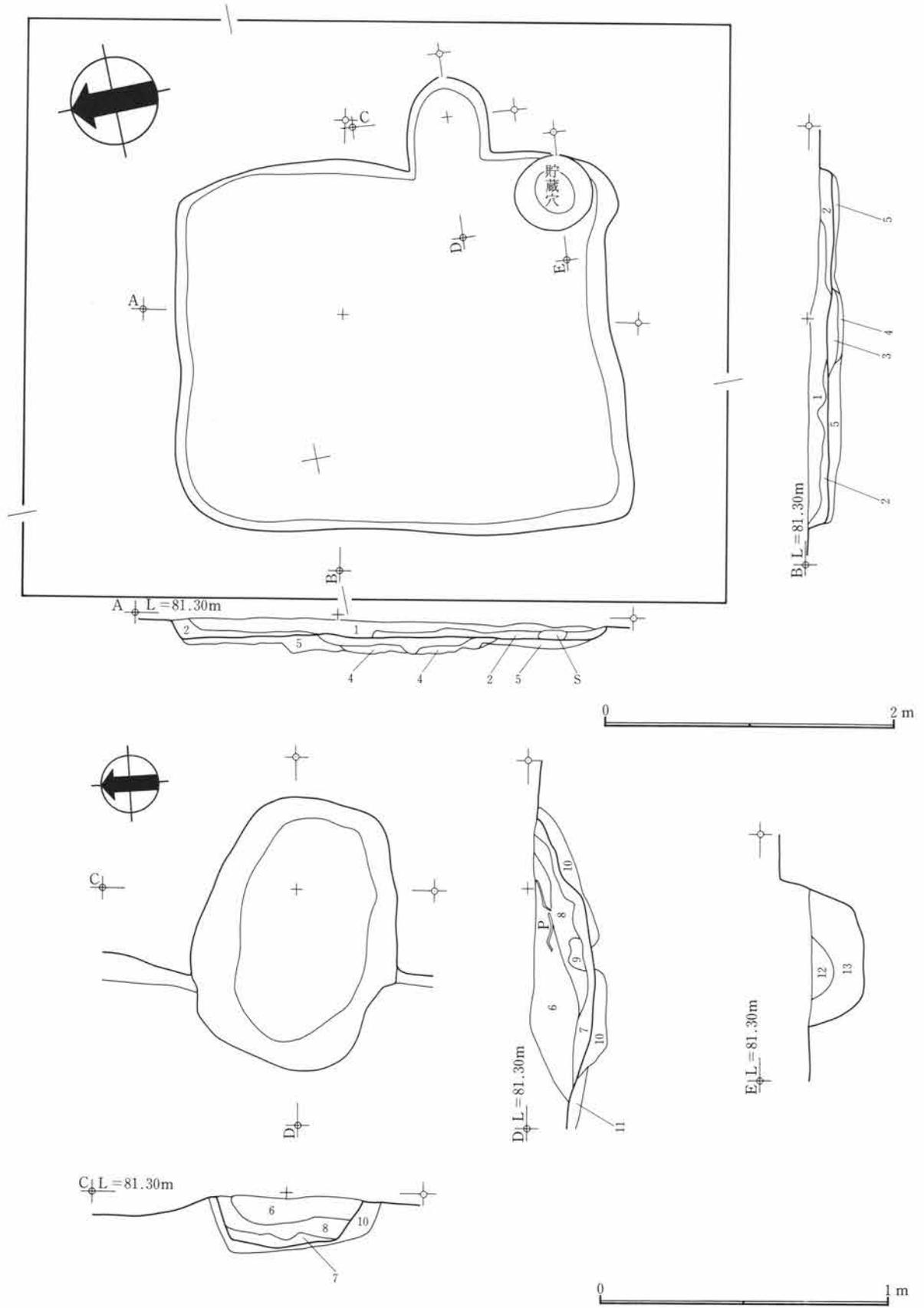
規模は長軸4.34m・短軸3.49m, 面積8.874m²である。主軸方向はN-11°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は98cm, 竈幅は103cm, 燃焼部長さは73cm, 焚き口幅は49cm, 煙道部長さは25cm, 煙道部幅は23cmである。炉床ピットは長軸75cm・短軸52cm, 深さ7cmである。竈本体が住居址内に入る形で左袖の遺存の状態は良い。

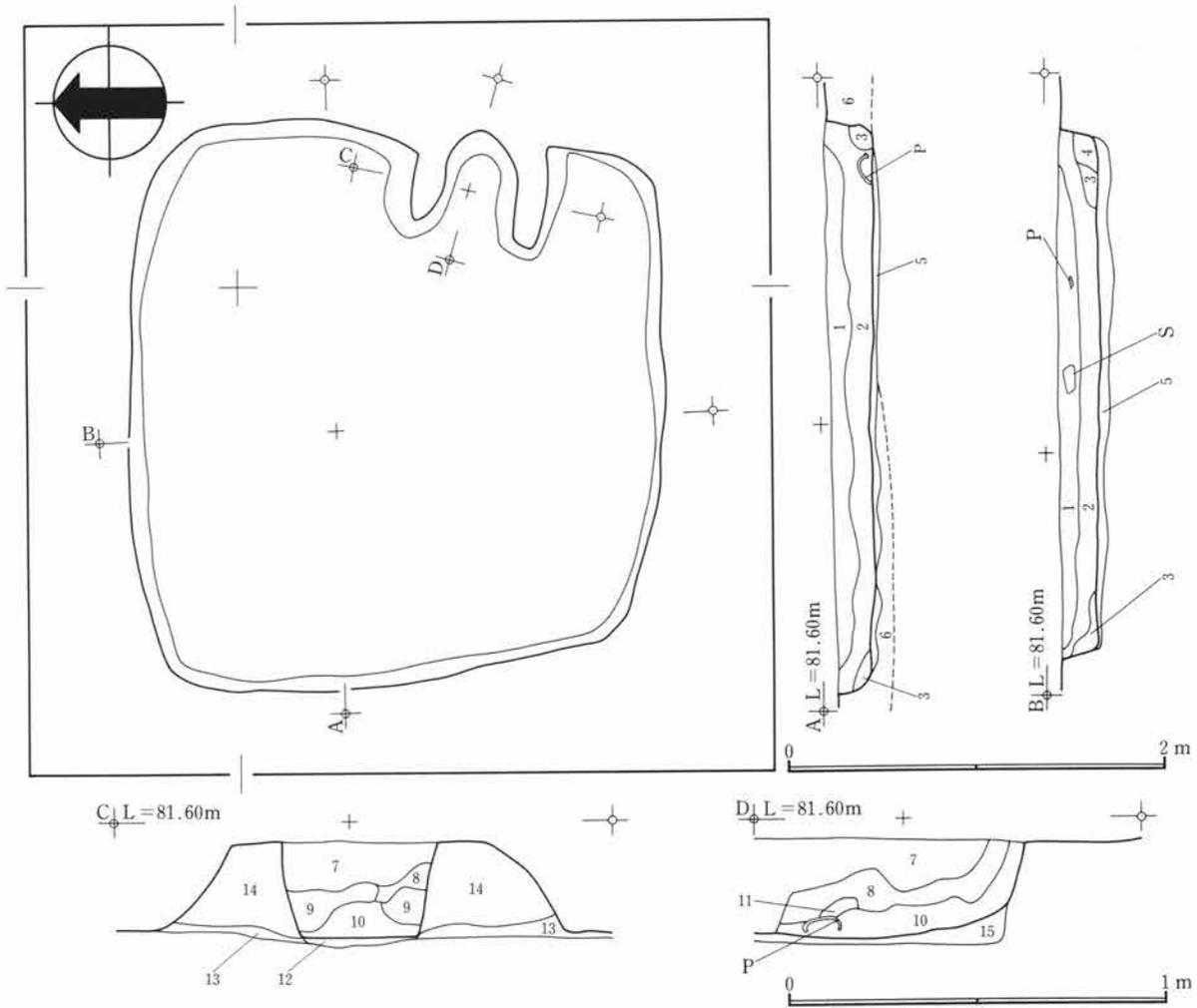
遺物 (挿図番号第220図)

土師器の甕 (057・058)・土師器の坏 (059・060・061・062)・須恵器の壺 (063) を出土している。

その他に土師器4203g、須恵器49gが出土している。砥石が一点出土している。材質は砥沢石である。



第20図 9号住居址



第21図 11号住居址

3区13号住居址

遺構 (挿図番号第23図 写真番号P L. 46)

本住居址はM 8-01, 11グリッドで検出され、南東6.0mに12号住居址、北西8.0mに15号住居址が位置する。

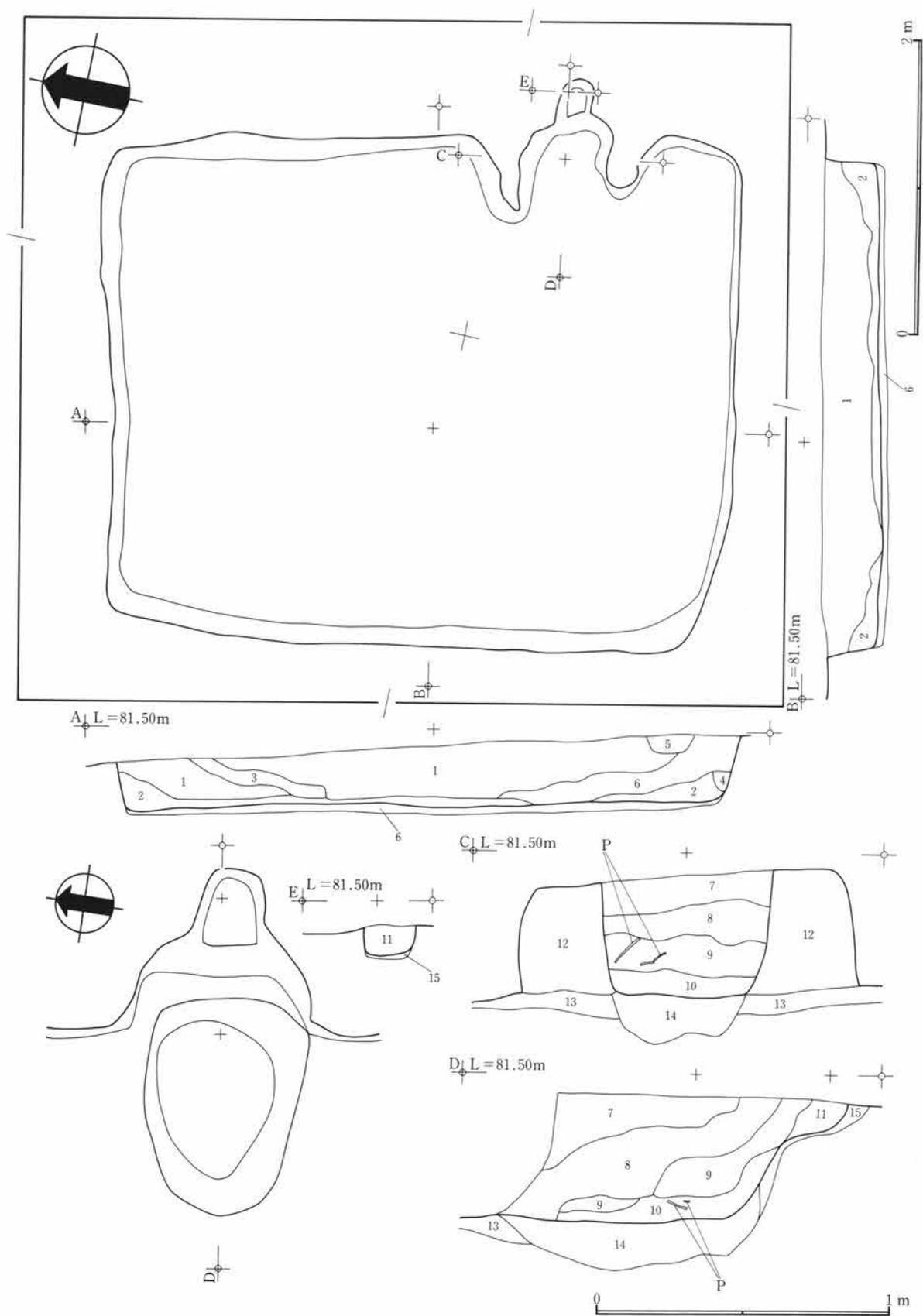
規模は長軸3.00m・短軸2.67m、面積7.738m²である。主軸方向はN-2°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は163cm(推定)、燃焼部長さは129cm(推定)、焚き口幅は52cm(推定)、煙道部長さは34cm、煙道部幅は27cmである。炉床ピットは長軸129cm・短軸65cm、深さ15cmである。竈本体は住居址の外側に突き出て長い。

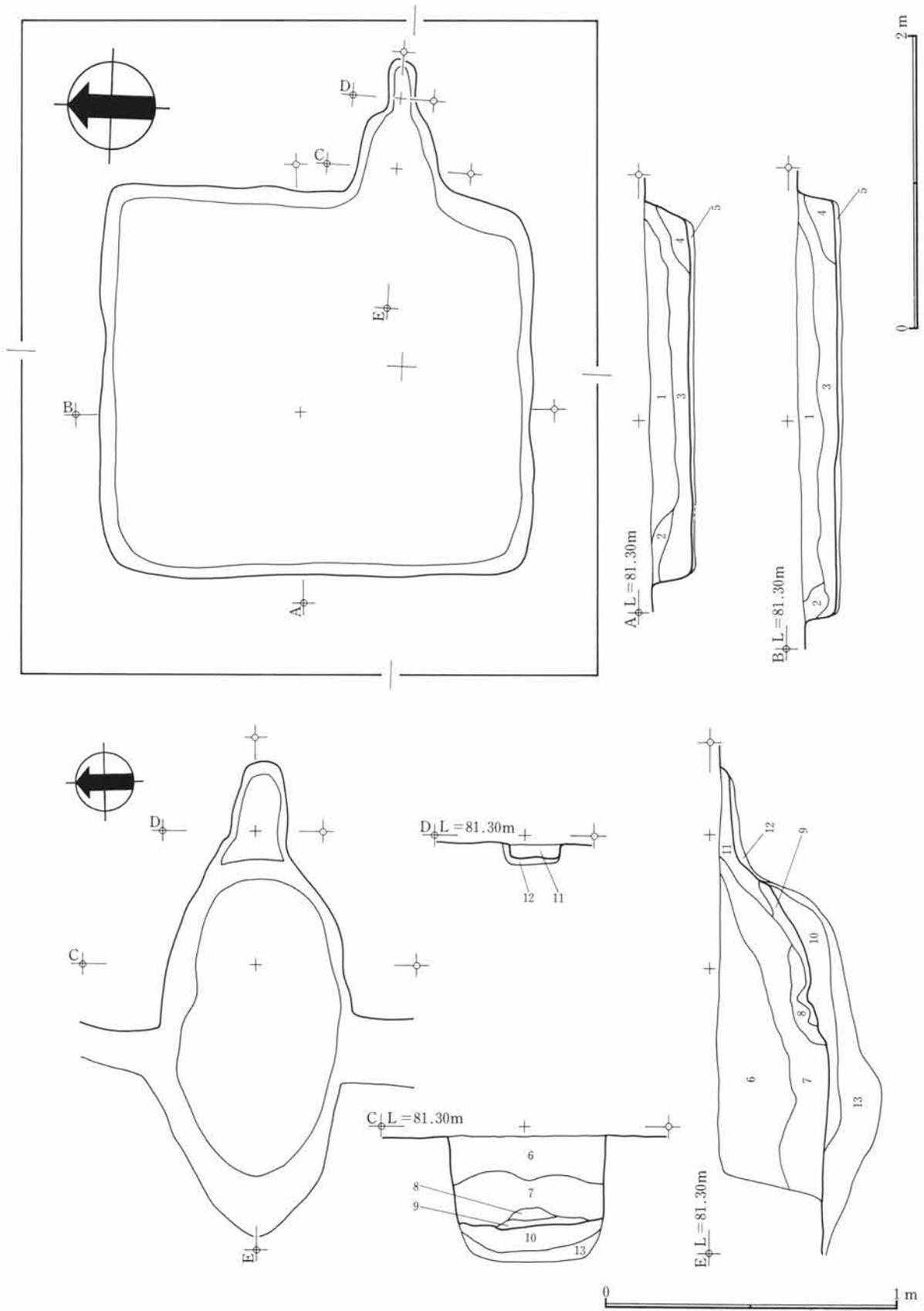
遺物 (挿図番号第220図)

土師器の坏(064)・土師器の塊(065)を出土している。

その他に土師器627g、須恵器208gが出土している。



第22図 12号住居址



第23図 13号住居址

第II章 遺 跡

3区14号住居址

遺構 (挿図番号第24・25図 写真番号P L. 46)

本住居址はM 8-00グリッドで検出され、南東11.0mに13号住居址が位置する。本住居址の東壁に接するように15号住居址が重なる。

規模は長軸4.42m・短軸3.20m・面積11.410m²である。主軸方向はN-7°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は120cm (推定)、焚き口幅は52cm (推定) である。炉床ピットは長軸90cm・短軸75cm、深さ13cmである。

貯蔵穴は長軸60cm・短軸40cm、深さ40cmである。

P 1 は長軸は60cm・短軸45cm、深さ23cmである。

遺物 (挿図番号第220図)

土師器の甕 (066)・須恵器の高台付埴 (067)・灰釉陶器の埴 (068)・須恵器の壺 (069・070) を出土している。

その他に土師器1645g、須恵器1670g、灰釉陶器476gが出土している。

3区15号住居址

遺構 (挿図番号第24・25図 写真番号P L. 46)

本住居址はM 8-00グリッドで検出され、南東8.0mに13号住居址が位置する。本住居址の西壁に14号住居址の竈が住履している。14号住居址より、本住居址が新しい。

規模は長軸3.17m・短軸2.42m (推定)、面積7.548m²である。主軸方向はN-4°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は93cm(推定)、竈幅は81cm、焚き口幅は44cmである。炉床ピットは長軸93cm・短軸54cm、深さ13cmである。

遺物 (挿図番号第221図)

土師器の甕 (071)・須恵器の埴 (072)・灰釉陶器の壺 (073) を出土している。

その他に土師器2246g、須恵器181gが出土している。本住居址では、鉄製品が出土された。製品名は紡錘車である。

3区16号住居址

遺構 (挿図番号第26図 写真番号P L. 46)

本住居址はL 8-29, M 8-20グリッドで検出され、東7.0mに40号住居址、南東9.0mに19号住居址が位置する。

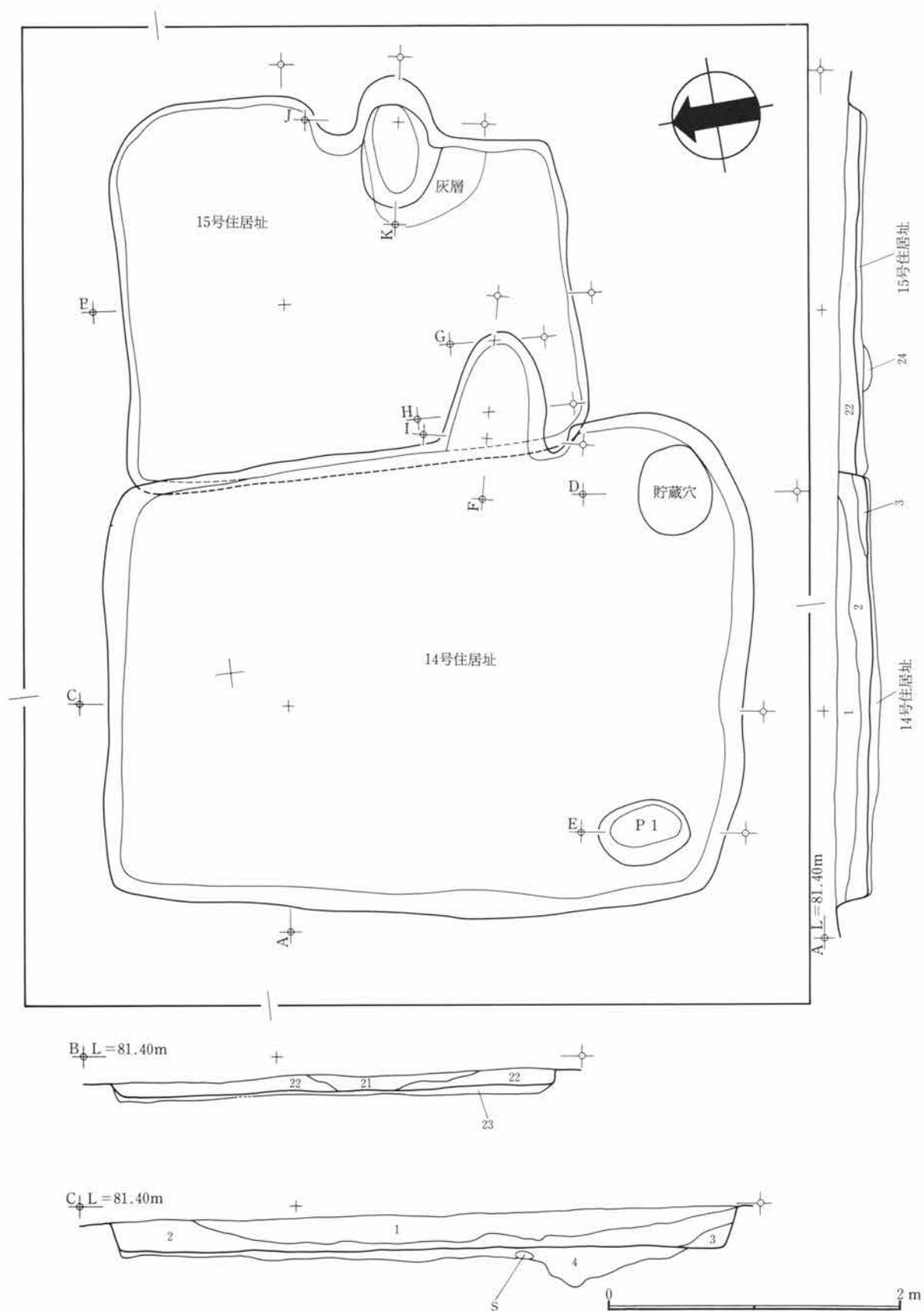
規模は長軸4.17m・短軸3.42m、面積8.788m²である。主軸方向はN-7°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は123cm、燃焼部長さは64cm、焚き口幅は58cm (推定)、煙道部長さは59cm、煙道部幅は35cmである。炉床ピットは長軸94cm・短軸58cm、深さ12cmである。竈の本体が住居址の外形に出る形態。煙道部分も長く残っていた。

遺物 (挿図番号第221図)

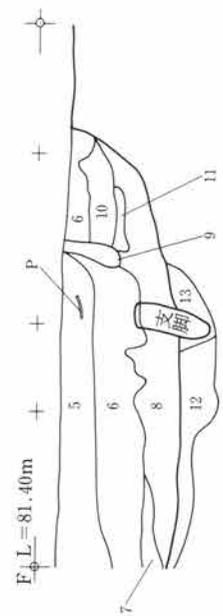
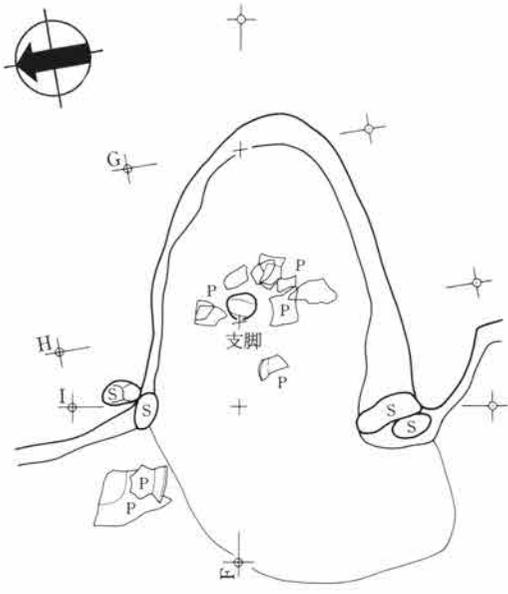
土師器の甕 (074)・土師器の埴 (075・076)・須恵器の高盤 (077)・須恵器の高台付埴 (078)・須恵器の埴 (079) を出土している。

その他に土師器1895g、須恵器783gが出土している。



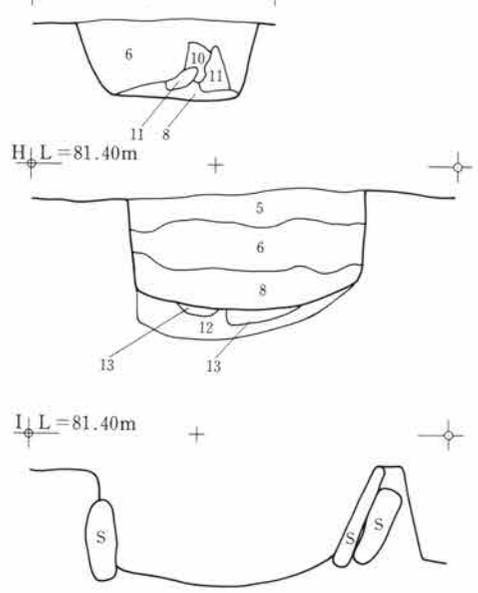
第24図 14・15号住居址(1)

第II章 遺 跡

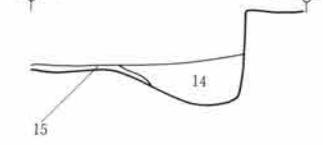


14号住居カマド

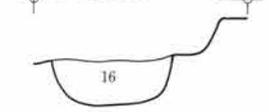
G₁L=81.40m



D₁L=81.40m

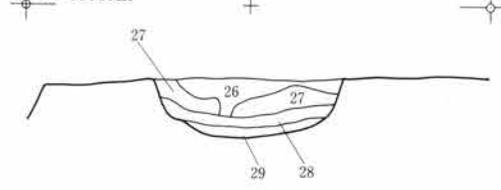


E₁L=81.40m

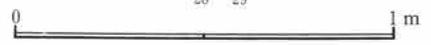
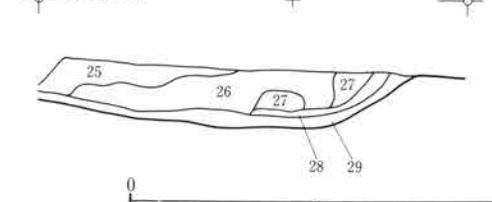


15号住居カマド

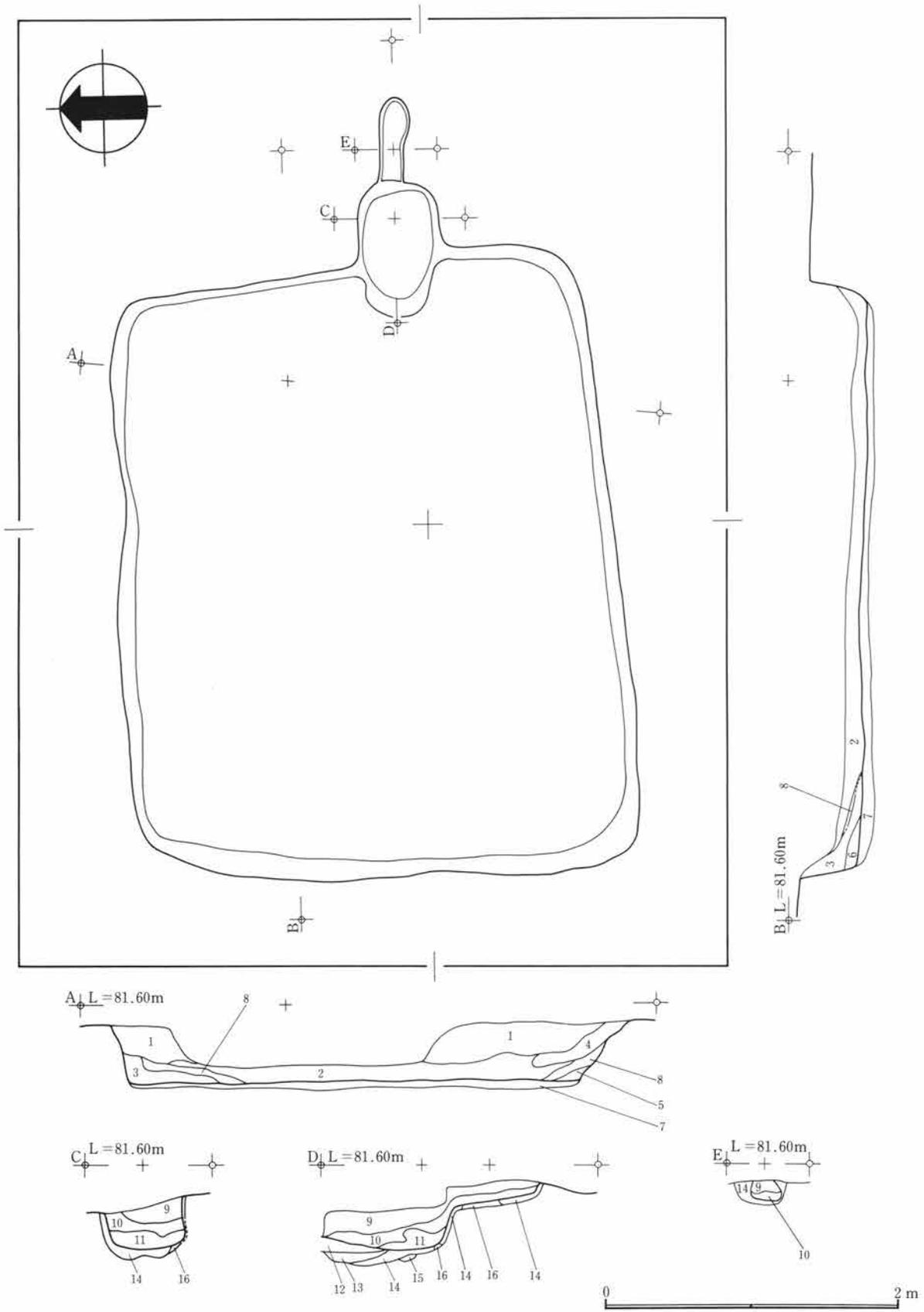
J₁L=81.40m



K₁L=81.40m



第25図 14・15号住居址(2)竈



第26図 16号住居址

3区17号住居址

遺構 (挿図番号第27・28図 写真番号P L. 47)

本住居址はM 8—41, 51グリッドで検出、北8.0mに19号住居址が位置する。北東辺は18号住居址が重複。規模は長軸4.10m・短軸3.30m, 面積13.888m²である。主軸方向はN—3°—Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は111cm (推定), 燃烧部長さは97cm (推定), 焚き口幅は64cm (推定), 煙道部長さは14cm, 煙道部幅は21cmである。炉床ピットは長軸93cm・短軸70cm, 深さ9cmである。

貯蔵穴は長軸63cm・短軸58cm, 深さ13cmである。

遺物 (挿図番号第221図)

土師器の甕 (080)・土師器の坏 (081) を出土している。その他に土師器1571g、須恵器9gが出土している。

3区18号住居址

遺構 (挿図番号第27・28図 写真番号P L. 47)

本住居址はM 8—41グリッドで検出され、北7.0mに19号住居址が位置する。17号住によって破損している。規模は長軸3.15m (推定)・短軸2.35m, 面積7.182m²である。主軸方向はN—1°—Wを示している。

竈全長は45cm, 燃烧部長さは24cm, 焚き口幅は60cm (推定), 煙道部長さは21cm, 煙道部幅は17cmである。

遺物 (挿図番号第222図)

土師器の甕 (082・083)・土師器の坏 (084) を出土している。その他に土師器483gが出土している。

3区19号住居址

遺構 (挿図番号第29図 写真番号P L. 47)

本住居址はM 8—30, 31グリッドで検出され、北6.5mに40号住居址、南7.0mに18号住居址が位置する。規模は長軸3.42m・短軸3.37m, 面積6.666m²である。主軸方向はN—6°—Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は75cm (推定), 焚き口幅は51cm (推定) である。炉床ピットは長軸76cm・短軸63cm・深さ8cmである。

遺物 (挿図番号第222図 写真番号P L. 80)

土師器の甕 (085)・須恵器の高盤 (086)・坏 (087) を出土。その他に土師器1025g、須恵器367gが出土。

3区20号住居址

遺構 (挿図番号第30図 写真番号P L. 47)

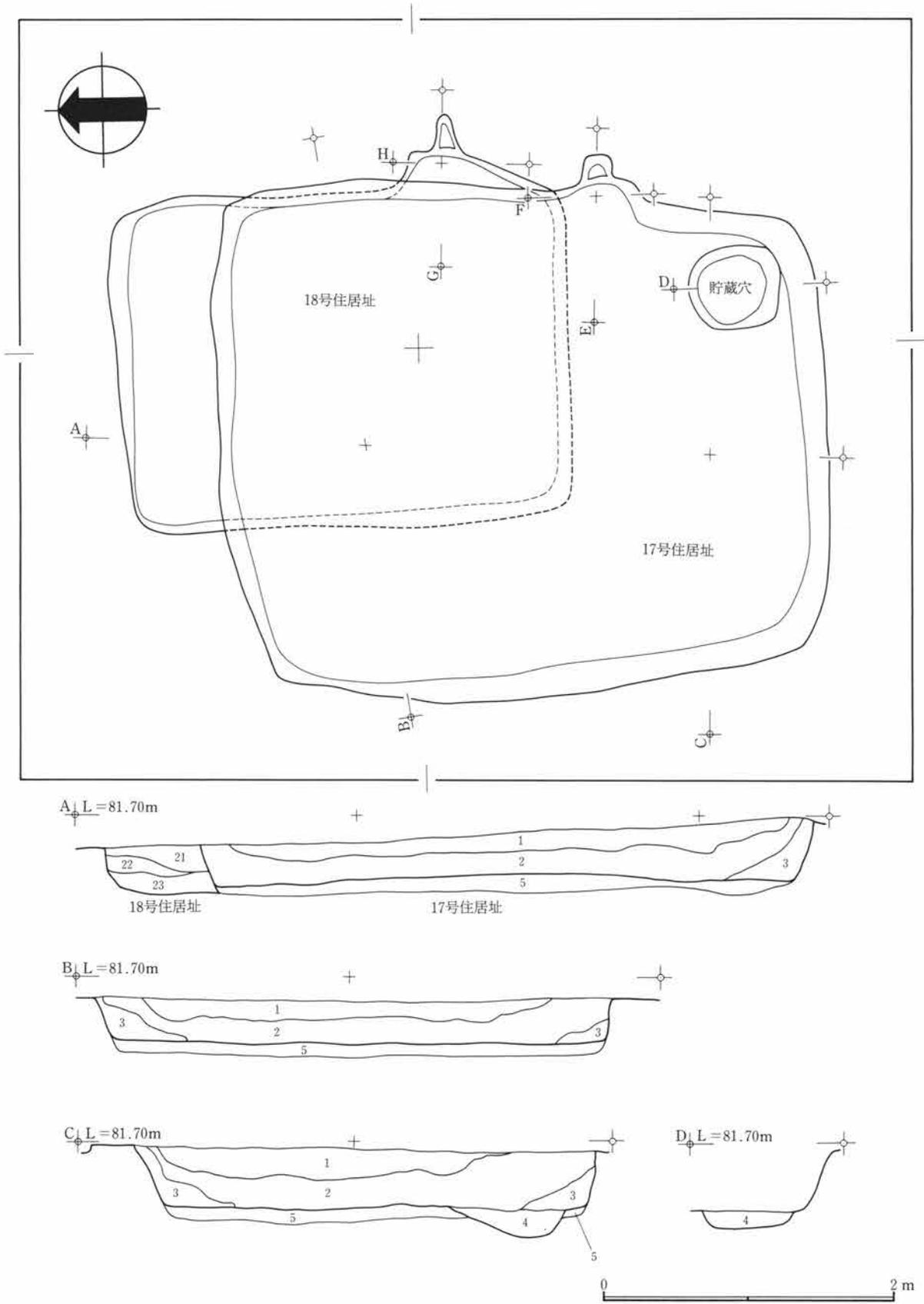
本住居址はL 9—46, 56グリッドで検出され、南6.0mに28号住居址、北東7.0mに24号住居址が位置する。本住居址の西壁に5号溝が切って重複している。

規模は長軸4.60m・短軸3.70m, 面積13.479m²である。主軸方向はN—10°—Eを示している。

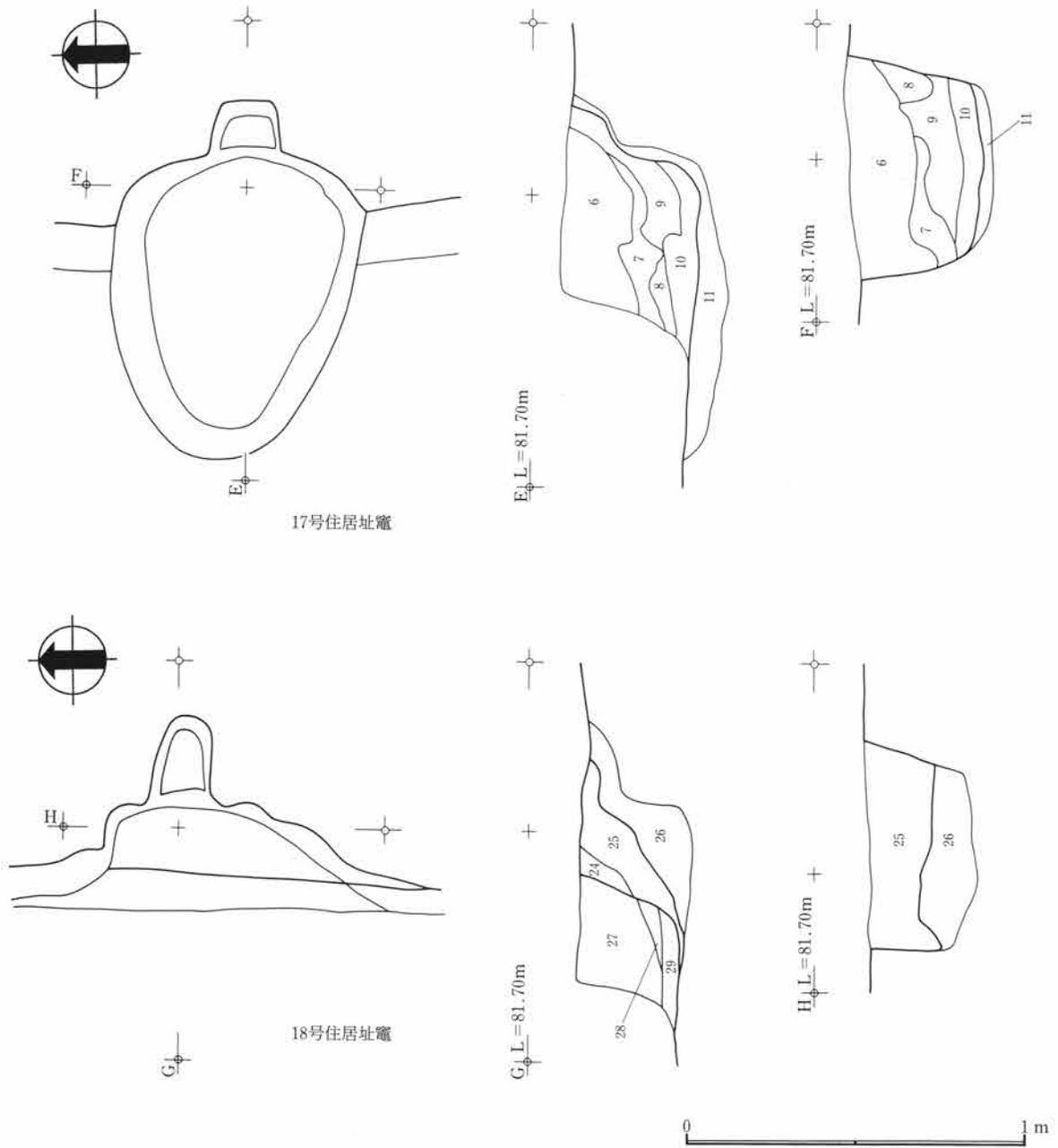
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は127cm, 竈幅は120cm, 燃烧部長さは100cm, 焚き口幅は64cm, 煙道部長さは27cm, 煙道部幅は30cmである。炉床ピットは長軸80cm・短軸48cm, 深さ9cmである。

遺物 (挿図番号第222図)

土師器の甕 (088)・坏 (089)・須恵器の蓋 (090・091・092)・坏 (093・094・096)・壺 (095) を出土している。その他に土師器4580g、須恵器4983g、中世すり鉢1片が出土している。



第27図 17・18号住居(1)



第28図 17・18号住居址(2)竈

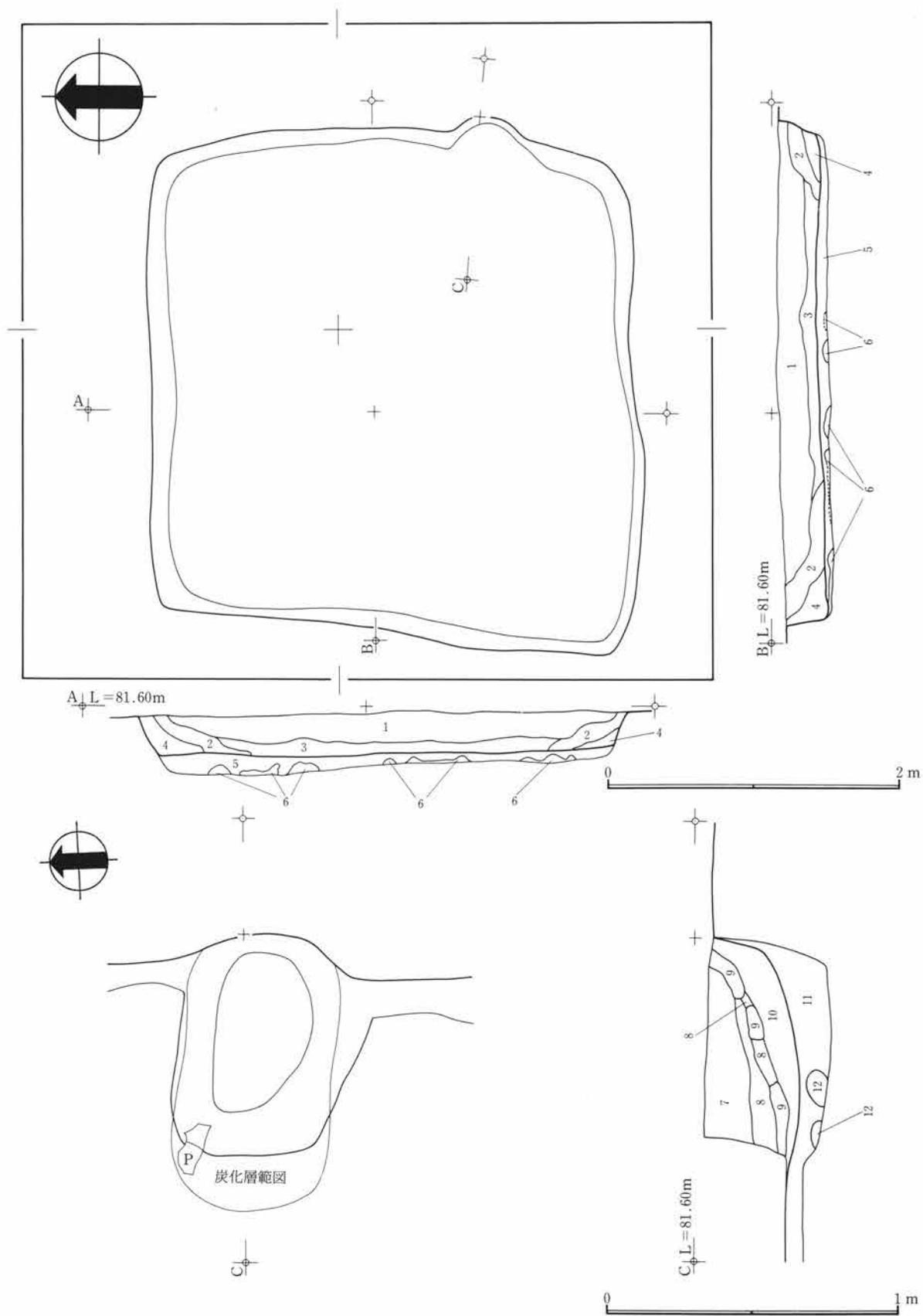
本住居址では鉄製品が出土された。製品名は鎌である。又砥石が一点出土している。材質は砥沢石である。

3区22号住居址

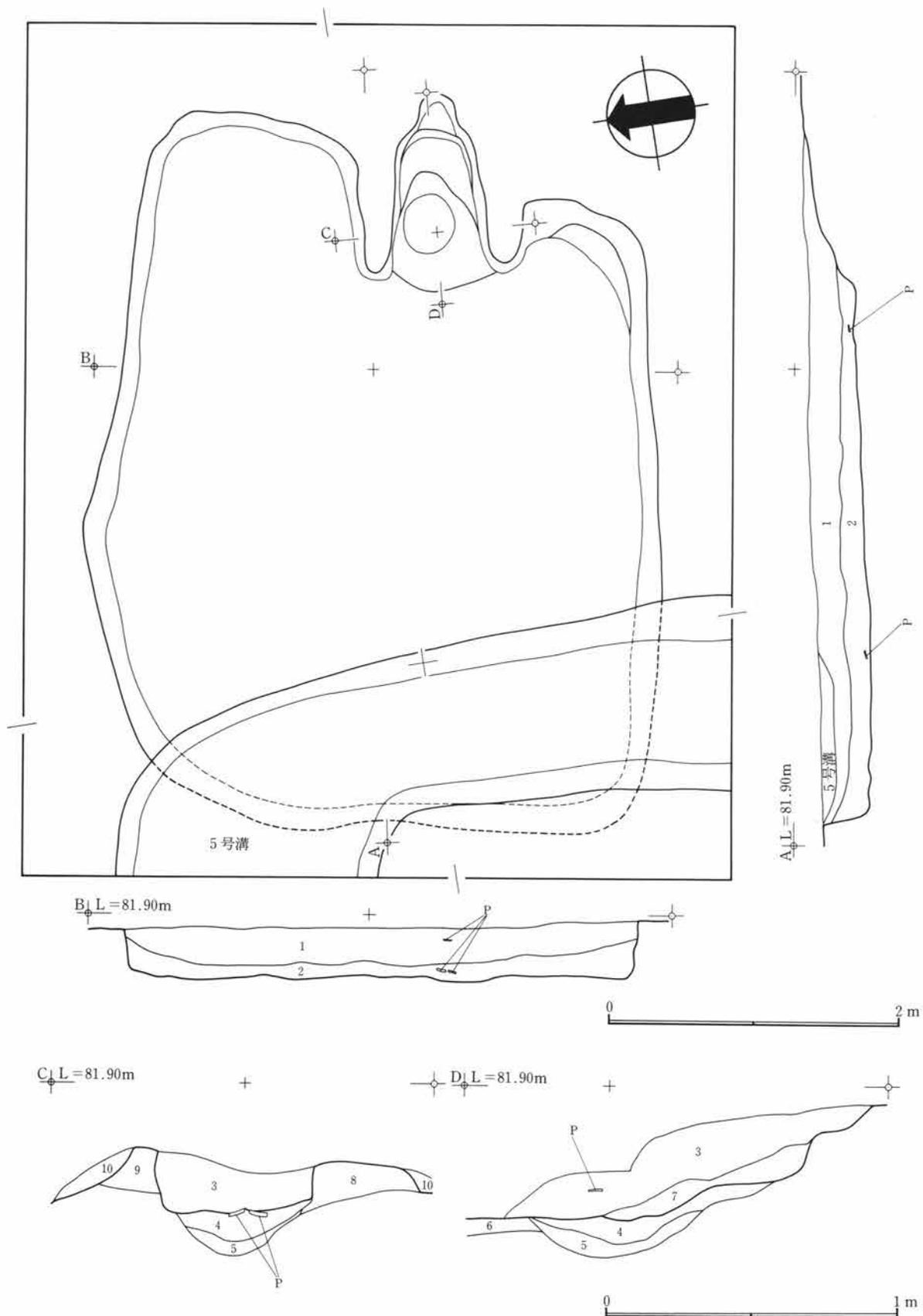
遺構 (挿図番号第31図)

本住居址はL 9—36, 37, 46, 47グリッドで検出され、東5.0mに24号住居址、南5.0mに20号住居址が位置する。

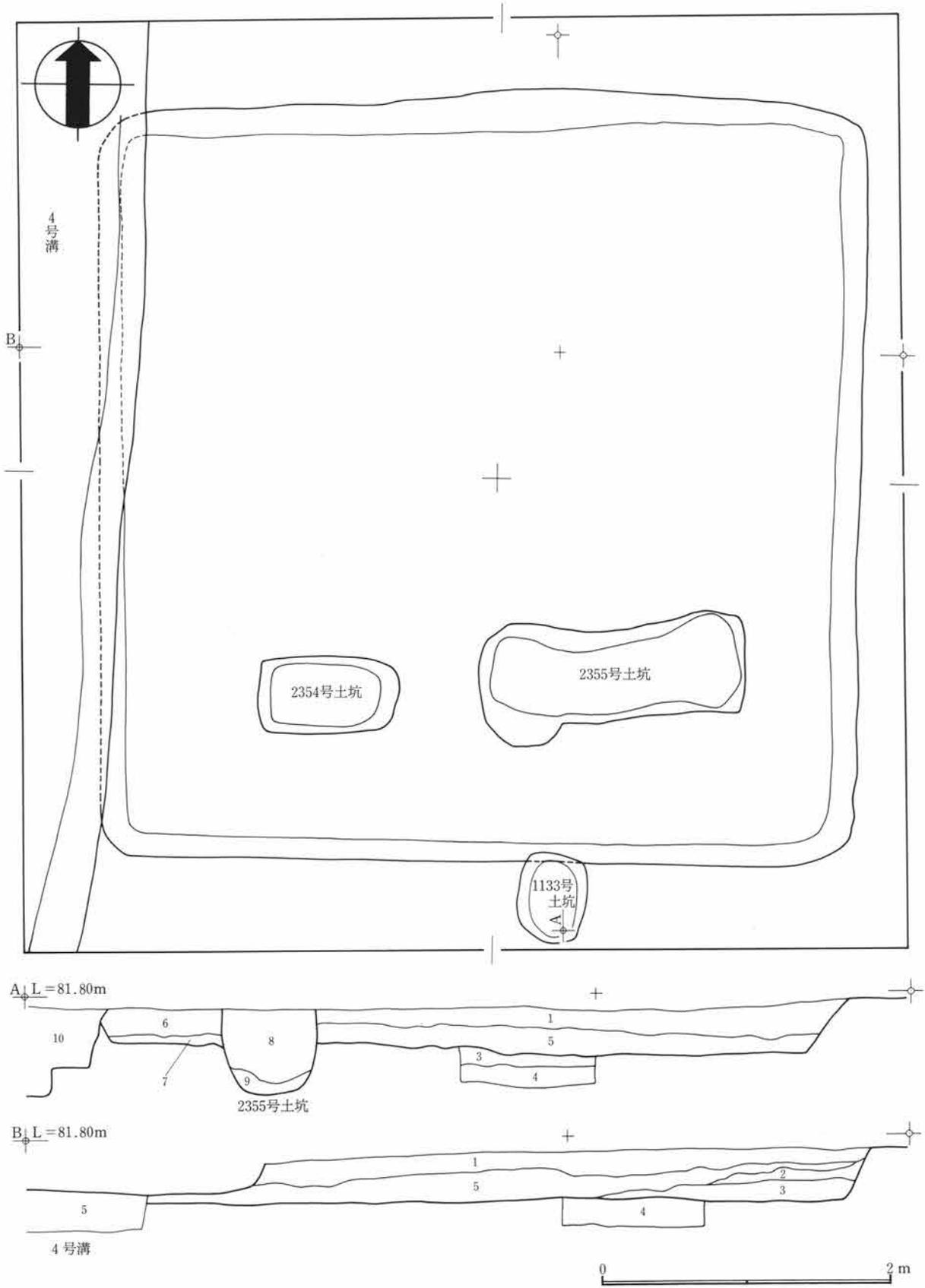
規模は長軸5.45m (推定)・短軸5.35m (推定)、面積24.426 m^2 である。主軸方向はNを示している。竈は確認されなかった。



第29図 19号住居址



第30图 20号住居址



第31図 22号住居址

遺物 (挿図番号第223図)

土師器の甕 (097)・土師器の坏 (098)・須恵器の坏 (099) を出土している。

その他に土師器318g、須恵器2770gが出土している。砥石が一点出土している。材質は砥沢石である。

3区24号住居址

遺構 (挿図番号第32図 写真番号P L. 47)

本住居址はL 9-47グリッドで検出され、西5.0mに22号住居址が位置する。本住居址の北東辺は、5247号土坑と25号住居址が重複している。

規模は長軸4.20m・短軸3.70m、面積15.328m²である。主軸方向はN-20°-Eを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は92cm (推定)、竈幅は117cm、焚き口幅は78cmである。炉床ピットは長軸120cm・短軸73cm、深さ17cmである。貯蔵穴は長軸75cm・短軸40cm、深さ19cmである。

遺物 (挿図番号第223図 写真番号P L. 81)

土師器の坏 (100)・須恵器の蓋 (101)・高坏 (102)・高台付塊 (103)・坏 (104・105・106)・鉢 (107) を出土。

その他に土師器2788g、須恵器1697gが出土している。砥石が一点出土している。材質は砥沢石である。

3区25号住居址

遺構 (挿図番号第33図)

本住居址はL 9-37, 38, 47, 48グリッドで検出され、北東7.0mに49号住居址が位置する。本住居址の西南隅は24号住居によって切られ、北東隅は26号住居址によって切られ、南東隅は73号住居址、107号住居址によって切られている。

規模は長軸5.75m (推定)・短軸5.40m、面積28.224m²である。主軸方向はNを示している。

竈は確認されなかった。

遺物 (挿図番号第224図)

土師器の甕 (108・109)・土師器の坏 (110~114)・須恵器の高台付塊 (115)・須恵器の蓋 (116・117)・須恵器の高台付坏 (118) を出土している。その他に土師器2436g、須恵器877gが出土している。

3区73号住居址

遺構 (挿図番号第33図)

本住居址はL 9-47, 48, 57, 58グリッドで検出され、西6.0mに24号住居址が位置する。(25、26、104、107住と重複)

規模は長軸6.07m (推定)・短軸6.00m (推定)、面積36.690m²である。主軸方向はN-31°-Eを示している。

竈は確認されなかった。

遺物 (挿図番号第239図)

土師器の坏 (348) を出土している。その他に土師器287g、須恵器21gが出土している。

3区26号住居址

遺構 (挿図番号第34図)

本住居址はL 9-37, 38, 47, 48グリッドで検出され、東5.0mに49号住居址が位置する。(25、73住と重複)

規模は長軸4.60m (推定)・短軸4.50m (推定)、面積19.245m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の左寄りに付設される。竈全長は75cm、竈幅は80cm、燃烧部長さは49cm、焚き口幅は50cm、煙道部長さは26cm、煙道部幅は16cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第224図)

土師器の甕 (119)・坏 (120・121・122)・蓋 (123)・須恵器の壺 (124) を出土している。その他に土師器1966g、須恵器1126gが出土している。

3区28号住居址

遺構 (挿図番号第35図 写真番号P L. 47)

本住居址はL 9-66グリッドで検出され、北6.0mに20号住居址が位置する。(29住と重複)

規模は長軸4.50m・短軸3.75m、面積14.578m²である。主軸方向はNを示している。

竈は西壁の左寄りに付設される。竈全長は70cm、竈幅は99cm、焚き口幅は55cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第225図)

土師器の甕 (125)・土師器の台付甕 (126)・土師器の坏 (127~130)・須恵器の壺 (131)・須恵器の蓋 (132) を出土している。

その他に土師器5606g、須恵器1026gが出土している。本住居址では鉄製品が出土している。製品名は不明である。

3区29号住居址

遺構 (挿図番号第36図 写真番号P L. 47)

本住居址はL 9-66, 67, 76, 77グリッドで検出され、北10.0mに20号住居址が位置する。(28住と重複)

規模は長軸4.00m・短軸3.55m、面積13.232m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は85cm、焚き口幅は50cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第225図)

土師器の台付甕 (133)・土師器の坏 (134)・須恵器の蓋 (135・136) を出土している。

その他に土師器2511g、須恵器318g、縄文土器5片、中世すり鉢250gが出土している。

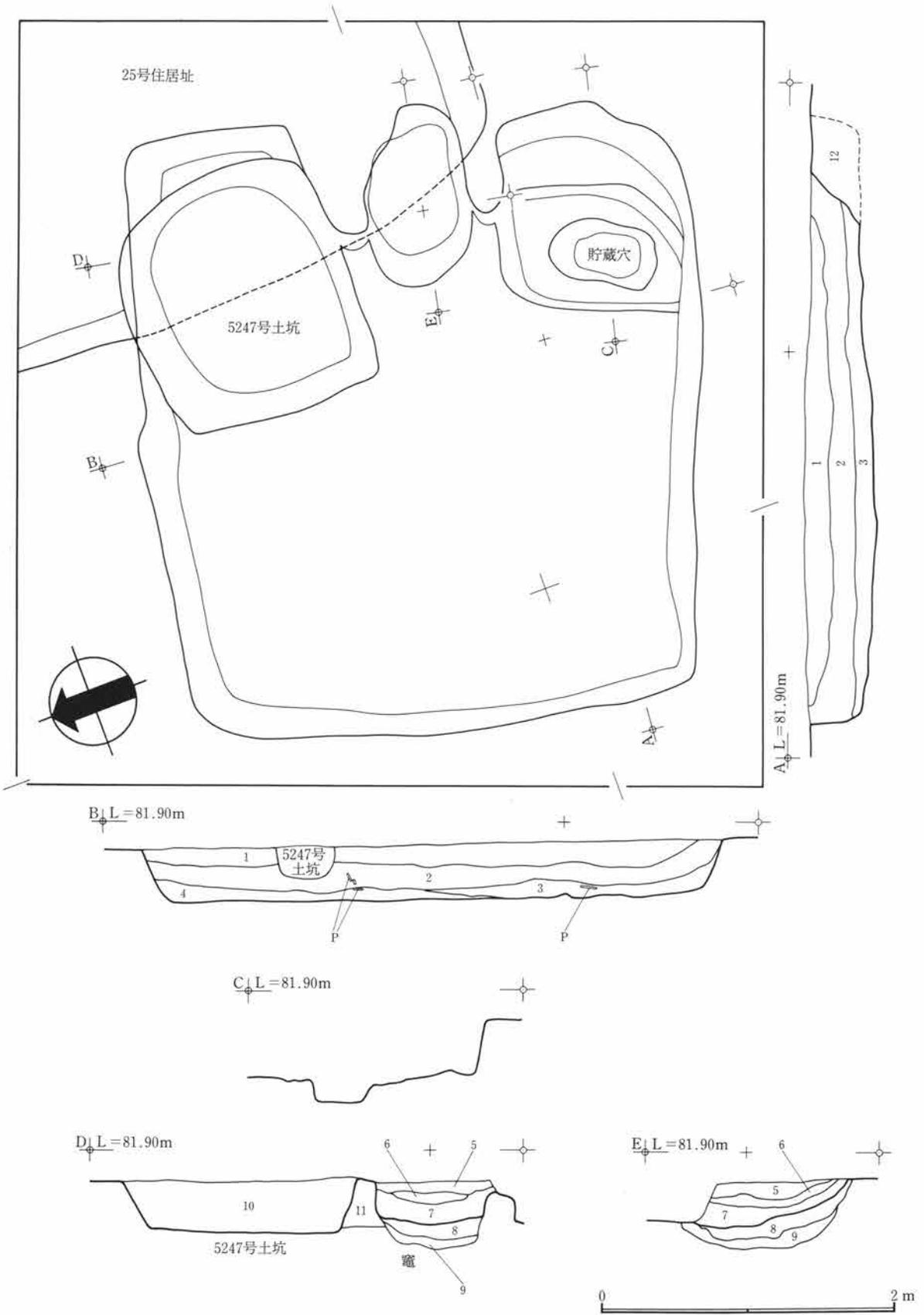
3区30号住居址

遺構 (挿図番号第37図 写真番号P L. 47)

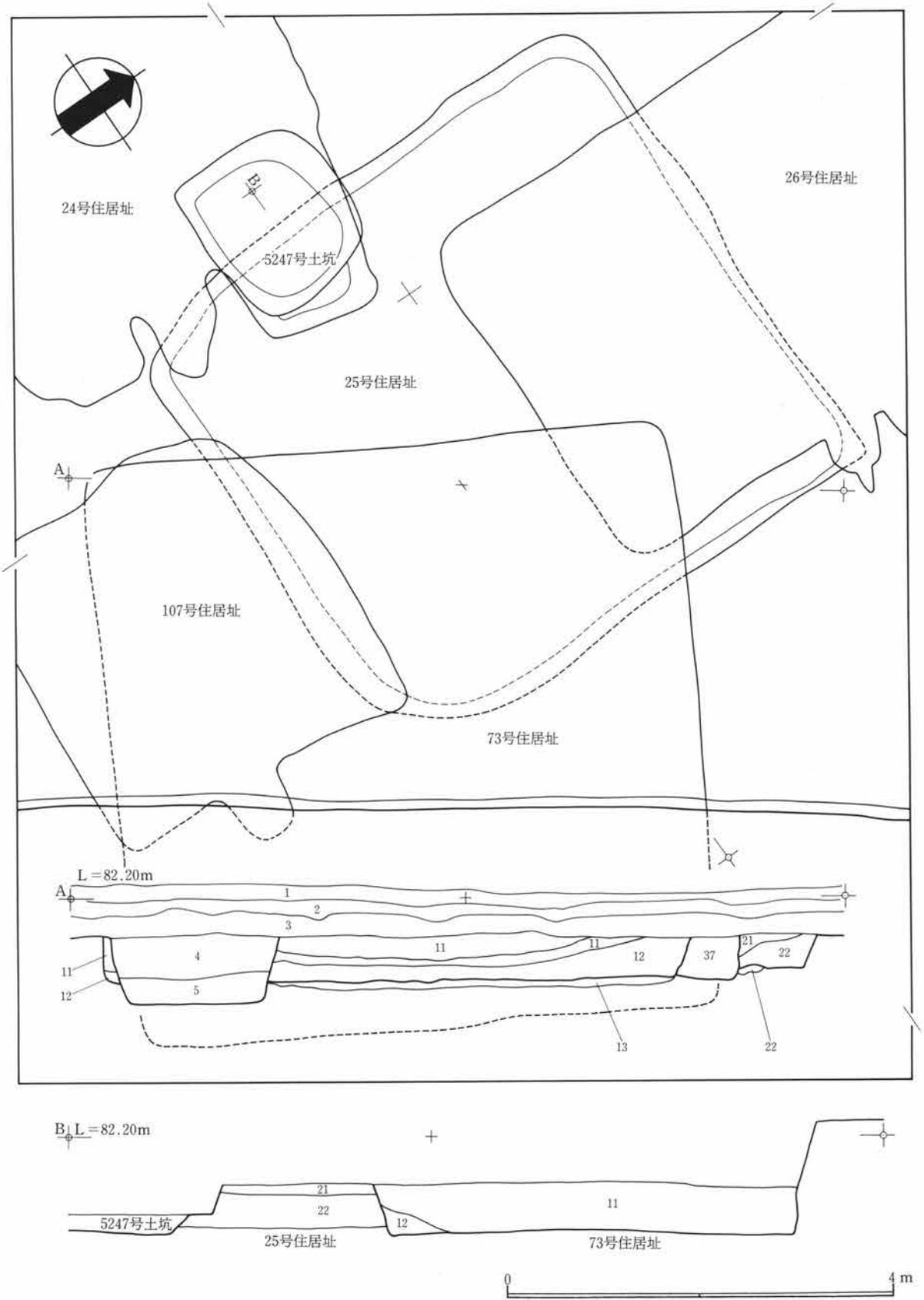
本住居址はL 10-50, 60グリッドで検出され、北4.0mに34号住居址、西6.0mに31号住居址が位置する。

規模は長軸3.90m・短軸3.25m、面積12.398m²である。主軸方向はN-11°-Eを示している。

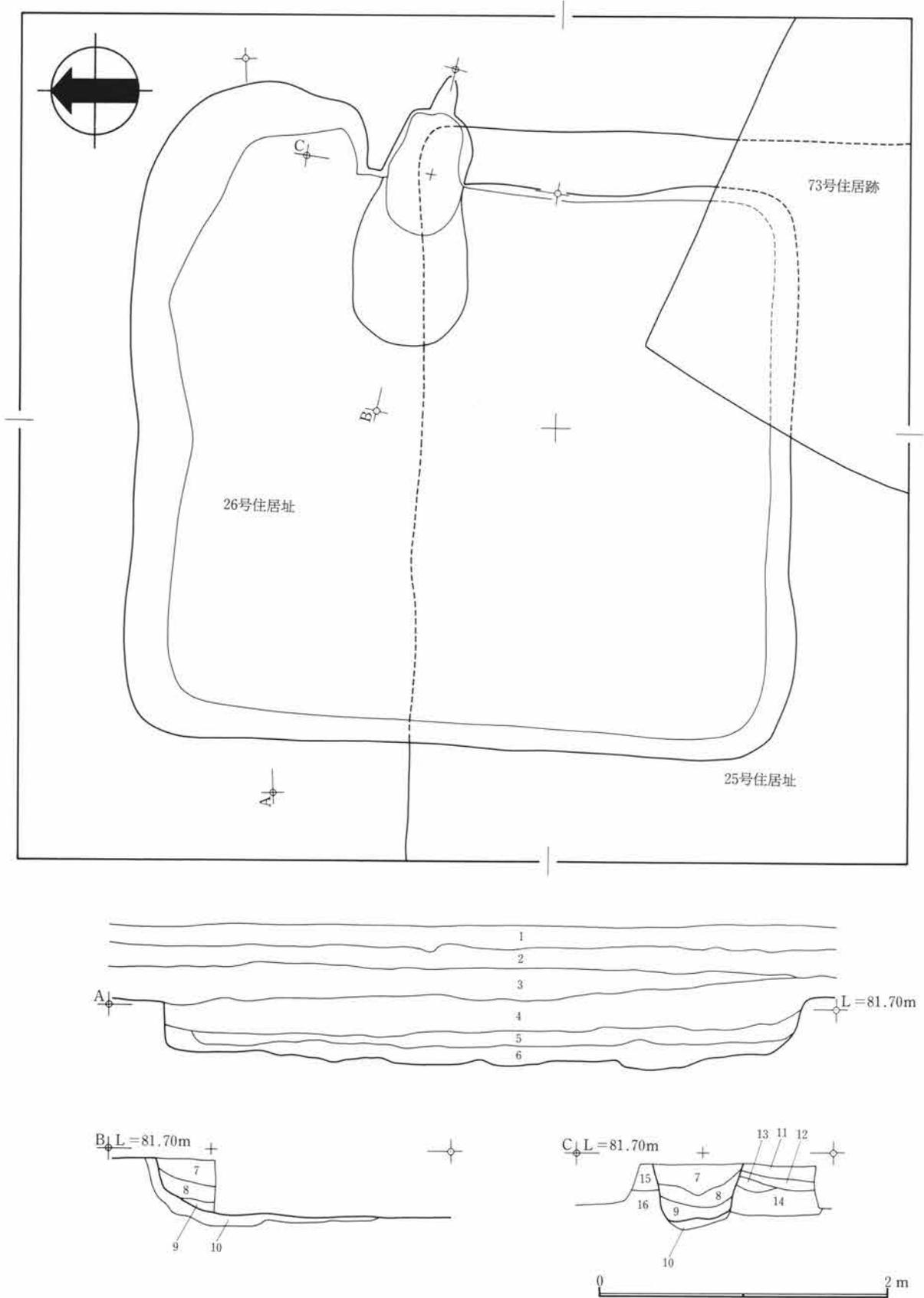
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は188cm、燃烧部長さは81cm、焚き口幅は47cm (推定)、煙道部長



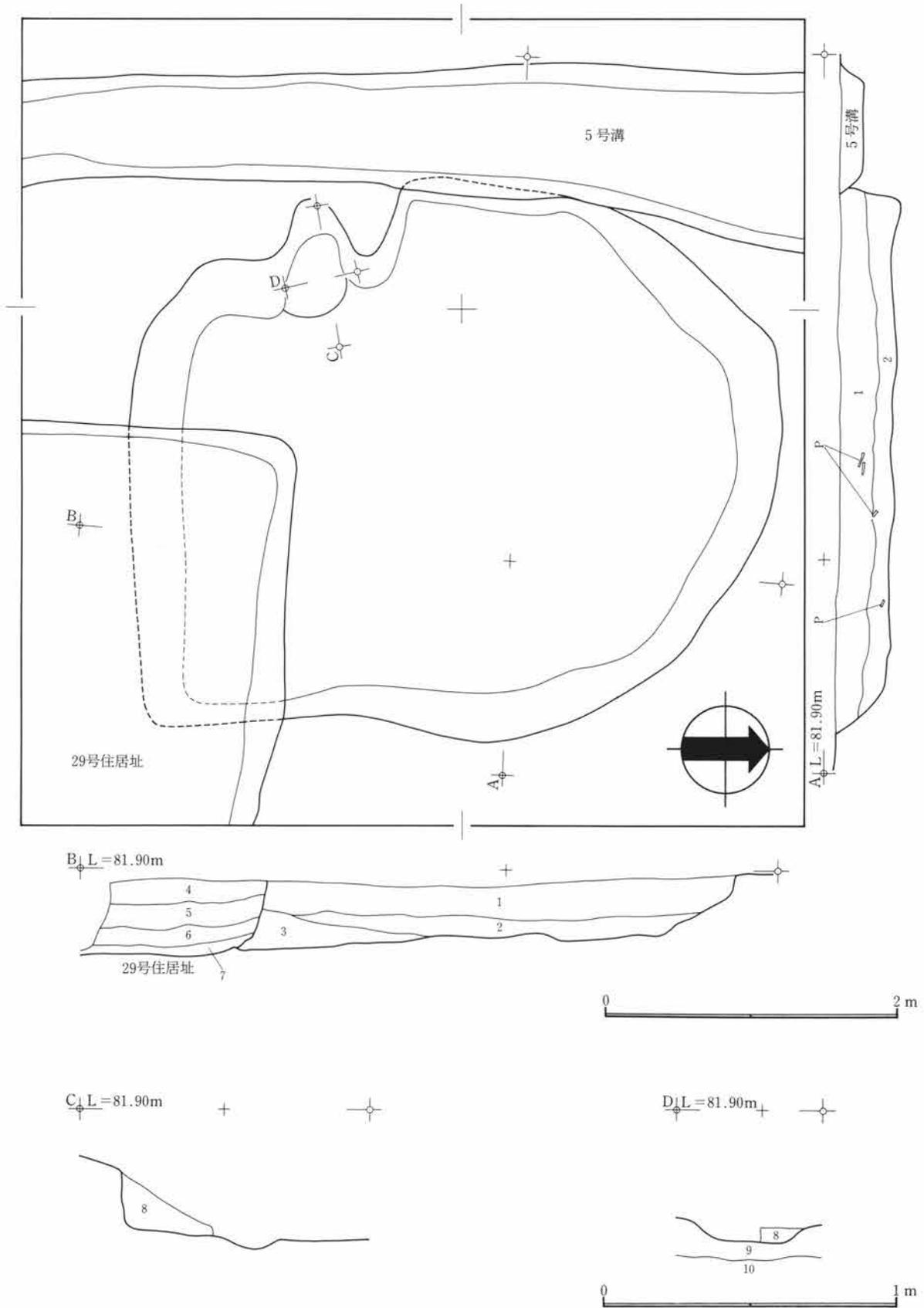
第32图 24号住居址



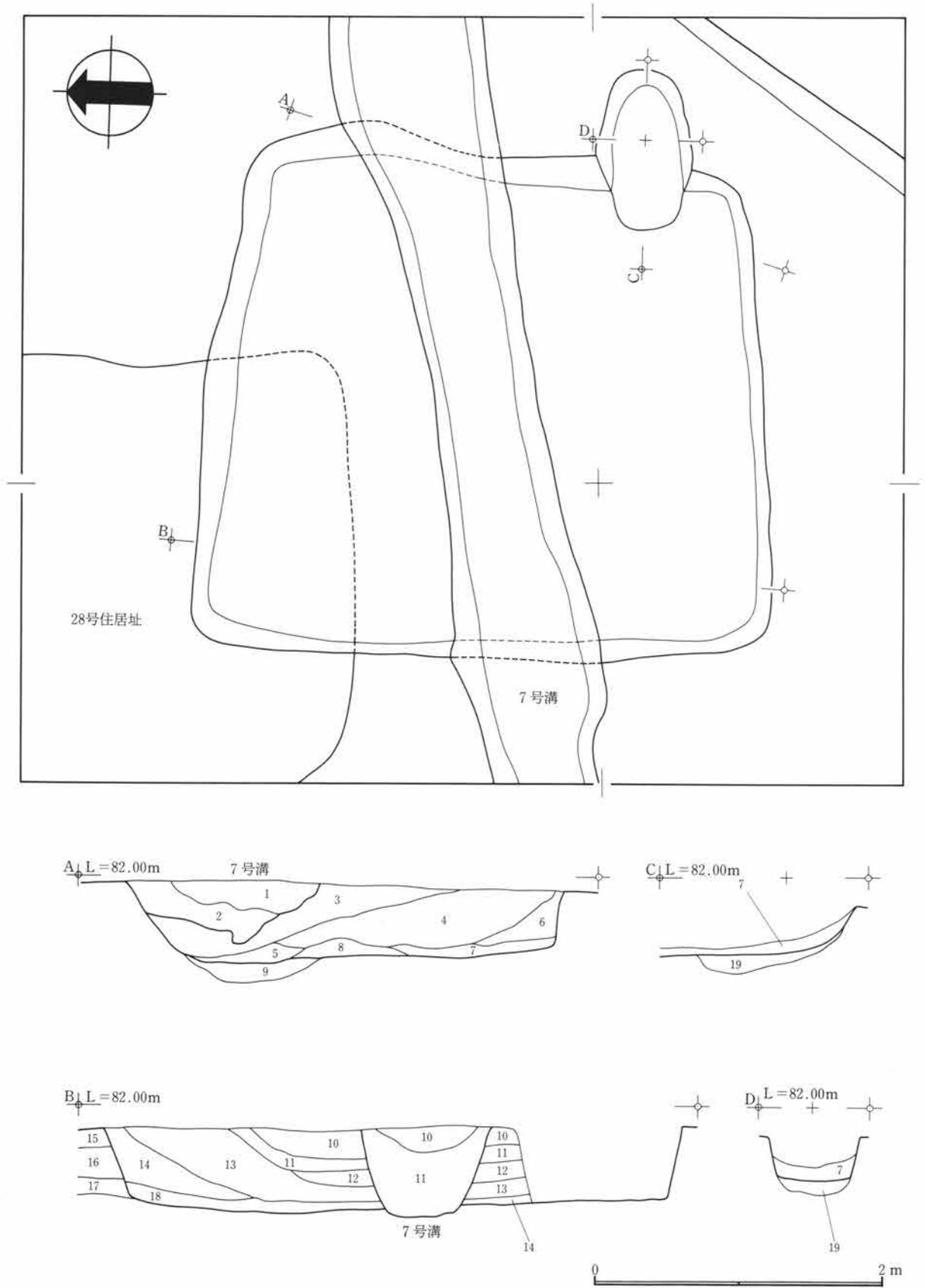
第33図 25・73号住居址



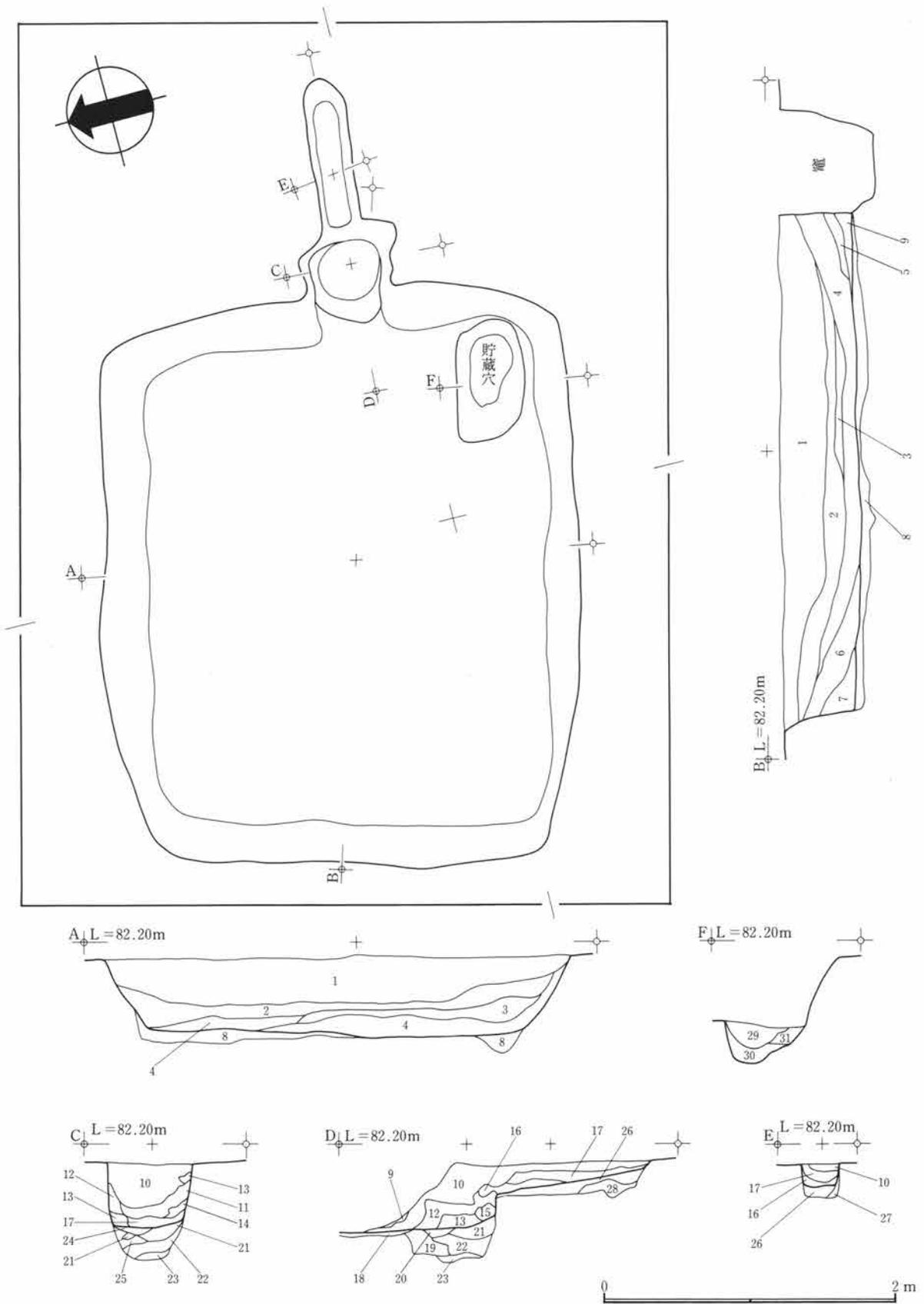
第34図 26号住居址



第35図 28号住居址



第36图 29号住居址



第37図 30号住居址

第II章 遺 跡

さは107cm、煙道部幅は28cmである。炉床ピットは長軸62cm・短軸42cm、深さ12cmである。

貯蔵穴は長軸80cm・短軸58cm、深さ31cmである。

遺物 (挿図番号第225図)

土師器の坏 (137)・須恵器の蓋 (138)・須恵器の坏 (139) を出土している。

その他に土師器1232g、須恵器670gが出土している。

3区31号住居址

遺構 (挿図番号第38図 写真番号P L. 47)

本住居址はK10-59, 69グリッドで検出され、東6.0mに30号住居址が位置する。本住居址の西壁は32号住居址によって切られている。

規模は長軸4.12m (推定)・短軸3.40m, 面積13.675m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は142cm, 燃焼部長さは84cm, 焚き口幅は64cm (推定), 煙道部長さは58cm, 煙道部幅は32cmである。炉床ピットは長軸120cm・短軸44cm, 深さ7cmである。

遺物 (挿図番号第225図)

土師器の甕 (140)・土師器の坏 (141・142)・須恵器の蓋 (143)・須恵器の坏 (144) を出土している。

その他に土師器1626g、須恵器720g、中世陶器45g、近世瓦が131g出土している。

3区32号住居址

遺構 (挿図番号第39図)

本住居址はK10-59, 69グリッドで検出され、南7.0mに36号住居址が位置する。本住居址は31号住居址、35号A住居址より新しい。

規模は長軸3.25m (推定)・短軸2.75m (推定), 面積8.244m²である。主軸方向はN-25°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は98cm (推定), 焚き口幅は45cm (推定)である。炉床ピットは長軸75cm・短軸40cm, 深さ7cmである。貯蔵穴は長軸80cm・短軸58cm, 深さ14cmである。

遺物 (挿図番号第226図)

土師器の甕 (145)・土師器の坏 (146)・須恵器の高台付埴 (147・148) を出土している。

その他に土師器810g、須恵器476gが出土している。本住居址では鉄製品が出土している。製品名は棒状、刀子である。又砥石が一点出している材質は砥沢石である。

3区35A号・35B号住居址

遺構 (挿図番号第40図 35B住写真番号P L. 48)

35A号住居址はK10-58, 59, 68, 69グリッドで検出され、南8.0mに36号住居址が位置する。(32、35B住と重複)

規模は長軸3.95m・短軸2.73m (推定), 面積10.295m²である。主軸方向はN-8°-Wを示している。

竈は確認されなかった。貯蔵穴は長軸83cm・短軸65cm, 深さ38cmである。

35B号住居址はK10-58, 59, 68, 69グリッドで検出され、南東9.0mに36号住居址が位置する。(35A住と重複)

規模は長軸4.32m (推定)・短軸2.80m (推定), 面積12.560m²である。主軸方向はN-8°-Wを示してい

る。竈は確認されなかった。

遺物 (挿図番号第226図)

35A号住居址からは土師器の甕(153)・土師器の坏(154)・須恵器の壺(155)・須恵器の蓋(156)を出土している。その他に土師器358g、須恵器337gが出土している。本住居址では座金具の鉄製品が出土した。

35B号住居址からは須恵器の高台付小壺(157)・須恵器の坏(158)を出土している。その他に土師器13g、須恵器182gが出土している。

3区34号住居址

遺構 (挿図番号第41図 写真番号P.L. 48)

本住居址はL10-50グリッドで検出され、南4.0mに30号住居址、南西7.0mに31号住居址が位置する。

規模は長軸5.30m・短軸4.40m(推定)、面積22.108㎡である。主軸方向はN-6°-Eを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は89cm、焚き口幅は130cm(推定)である。炉床ピットは長軸63cm・短軸60cm、深さ12cmである。竈付近から白色凝灰岩・牛伏砂岩の袖石材が出土している。P1は長軸125cm・短軸60cm、深さ6cm、P2は長軸55cm・短軸38cm、深さ8cm、P3は長軸77cm・短軸45cm、深さ52cm、P4は長軸43cm・短軸37cm、深さ33cm、P5は長軸43cm・短軸40cm、深さ2cm、P6は長軸52cm・短軸47cm、深さ45cm、P7は長軸27cm・短軸21cm、深さ13cmである。

遺物 (挿図番号第226図)

土師器の甕(149)・土師器の坏(150・151)・須恵器の蓋(152)を出土している。

その他に土師器2194g、須恵器80gが出土している。

3区36号住居址

遺構 (挿図番号第42図 写真番号P.L. 48)

本住居址はK10-79グリッドで検出され、南西4.0mに37号住居址が位置する。(38住と重複)

規模は長軸3.30m・短軸3.25m、面積10.136㎡である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は82cm、竈幅は150cm、焚き口幅は135cmである。炉床ピットは長軸80cm・短軸69cm、深さ5cmである。竈付近から白色凝灰岩が出土している。南側貯蔵穴は長軸103cm・短軸55cm、深さ20cm、北側貯蔵穴は長軸72cm・短軸65cm、深さ10cmである。P1は長軸103cm・短軸90cm、深さ26cm、P2は長軸30cm・短軸25cm、深さ5cm、P3は長軸26cm・短軸24cm、深さ3cm、P4は長軸35cm・短軸27cm、深さ7cmである。

遺物 (挿図番号第226図)

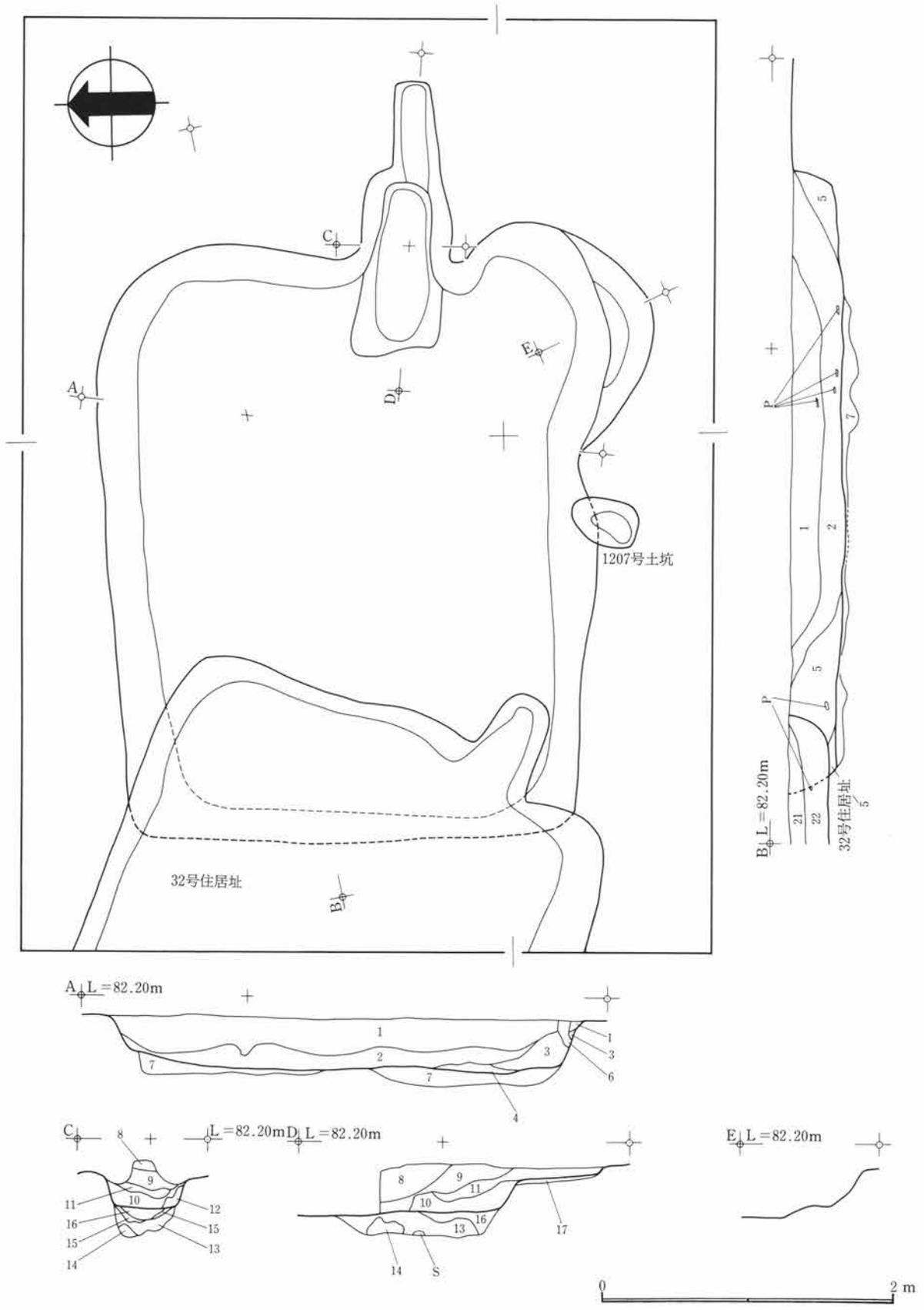
土師器の坏(159)・須恵器の直口壺(160)・須恵器の高台付塊(161)・須恵器の坏(162)・灰釉陶器の高台付塊(163)を出土している。

その他に土師器1120g、須恵器1150gが出土している。本住居址では、鉄製品が出土している。製品名は鎌である。又砥石が一点出している。材質は砥沢石である。

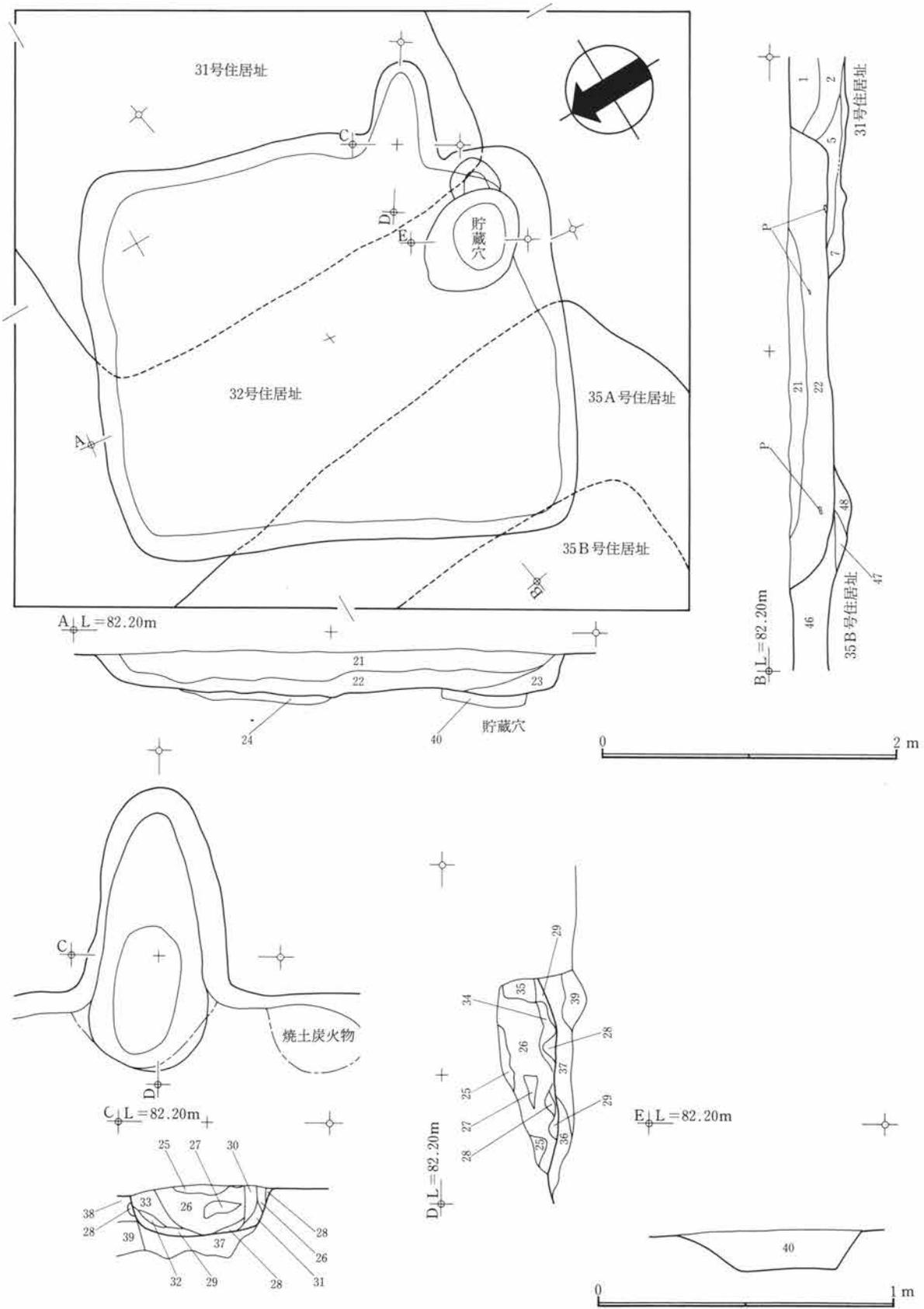
3区37号住居址

遺構 (挿図番号第43図)

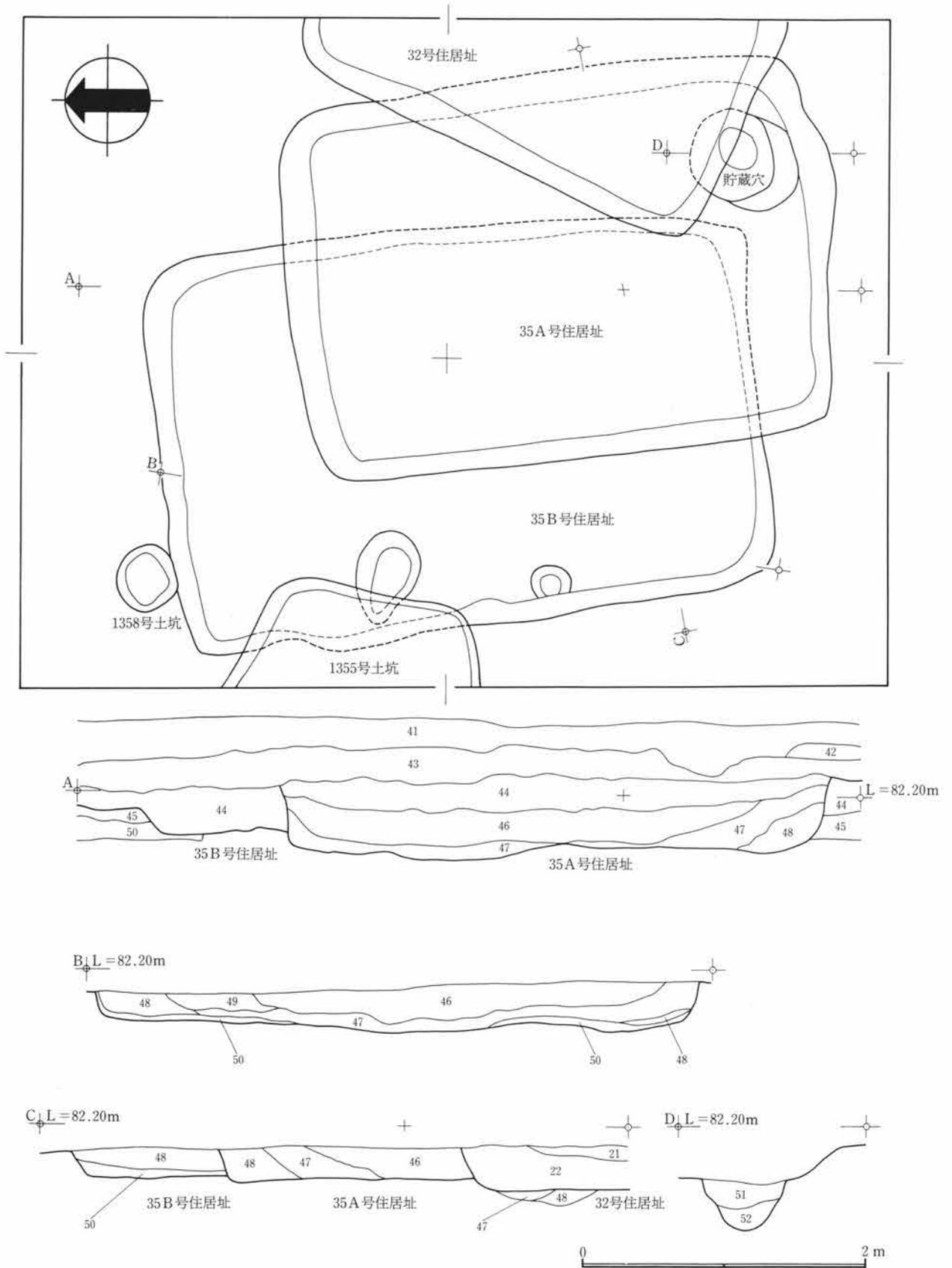
本住居址はK10-78, 79, 88, 89グリッドで検出され、北東4.0mに36号住居址が位置する。(38住と重複)



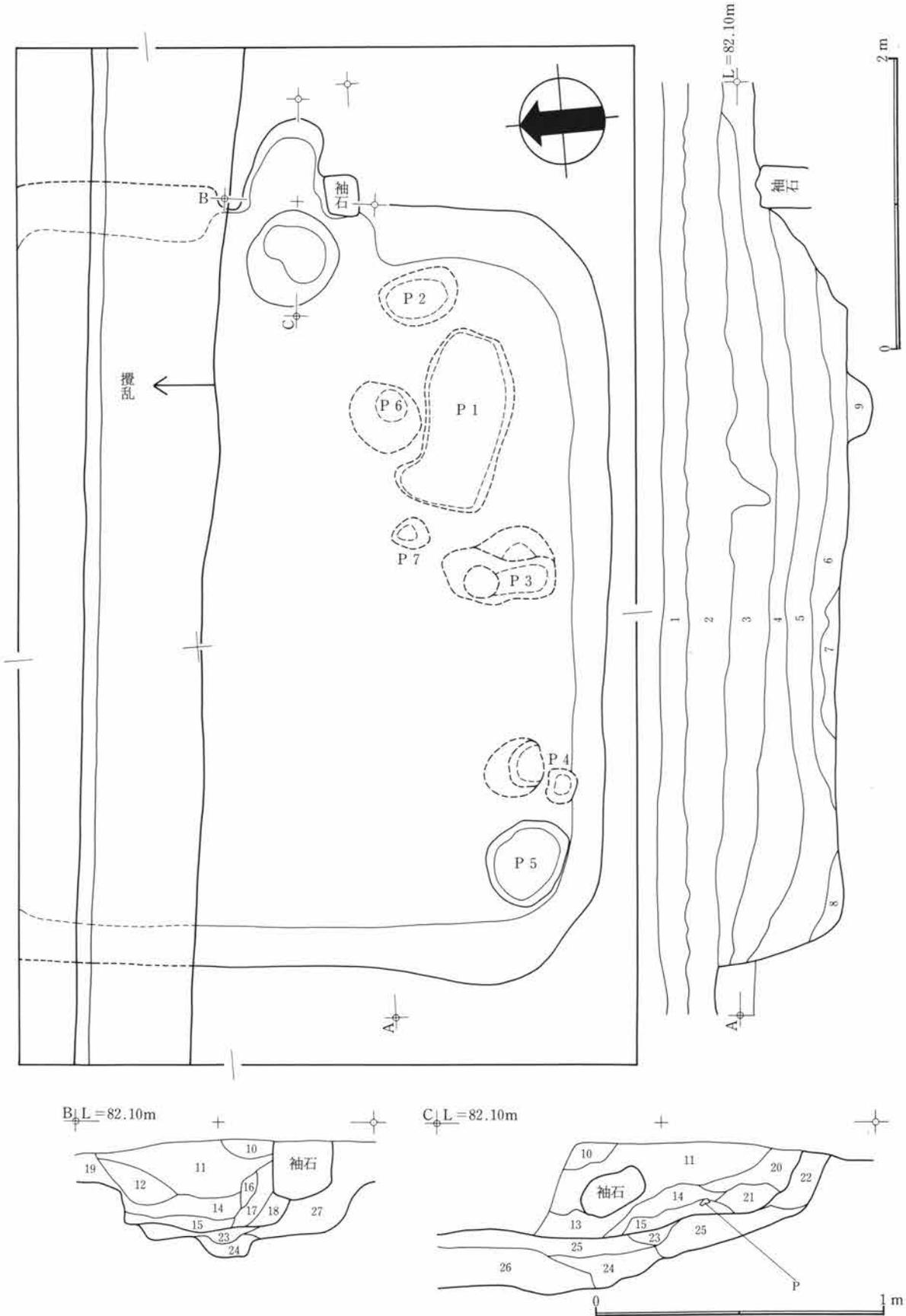
第38图 31号住居址



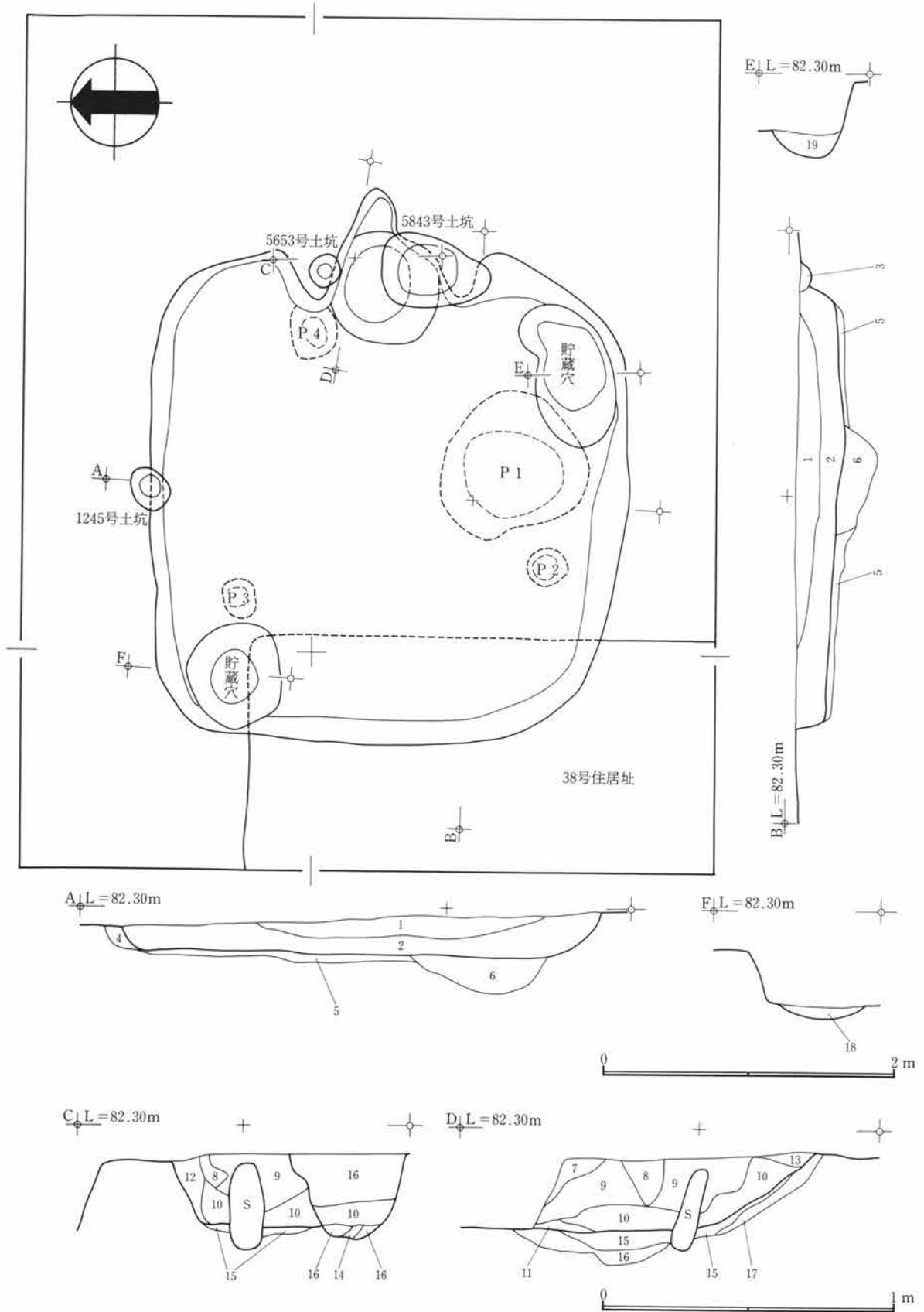
第39図 32号住居址



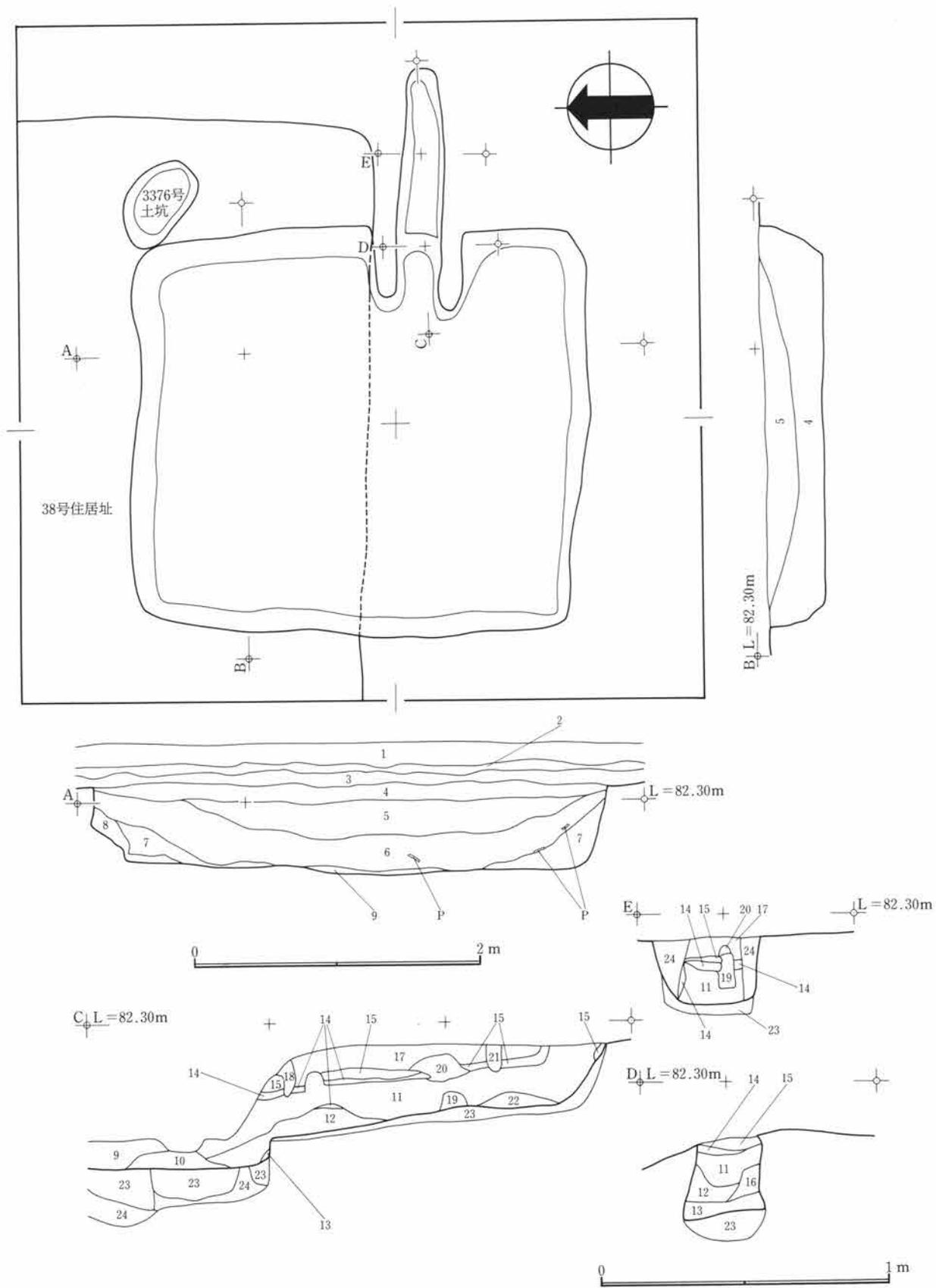
第40图 35A・35B号住居址



第41図 34号住居址



第42图 36号住居址



第43図 37号住居址

第II章 遺 跡

規模は長軸3.20m（推定）・短軸2.80m（推定）、面積8.832m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は140cm、竈幅は46cm（推定）、燃烧部長さは25cm、焚き口幅は26cm（推定）、煙道部長さは115cm、煙道部幅は46cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物（挿図番号第227図 写真番号P L. 48）

土師器の長甕（164）・坏（165）・須恵器の盤（166）・小壺（167）・甕（168）を出土している。

その他に土師器5284g、須恵器615gが出土している。本住居址は鉄製品が出土した。製品名は不明である。

3区38号住居址

遺構（挿図番号第44図）

本住居址はK10-78、79グリッドで検出され、北8.0mに35A号住居址が位置する。本住居址の南東隅は36号住居に切られている。また西壁は37号住居に切られている。又、住居の東寄りには3708号土坑が切っている。

規模は長軸4.22m・短軸4.20m、面積18.230m²である。主軸方向はNを示している。

竈は確認されなかった。掘り方は浅く、復元的な作業による面が多い。

遺物（挿図番号第227図）

土師器の坏（169）を出土している。

その他に土師器235g、須恵器54gが出土している。

3区40号住居址

遺構（挿図番号第45・46図 写真番号P L. 48）

本住居址はM8-20、21グリッドで検出され、東7.0mに16号住居址が位置する。本住居址の北東隅は41号住居を切っている。

規模は長軸4.30m・短軸3.10m、面積12.618m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は147cm（推定）、燃烧部長さは88cm、焚き口幅は68cm（推定）、煙道部長さは59cm、煙道部幅は21cmである。炉床ピットは長軸88cm・短軸66cm、深さ9cmである。竈の構造は燃烧部分が住居の外側に出る形態である。そのため、東壁を掘り抜いた壁の肩に長甕を連結させて構築したものと考えられる。

貯蔵穴は長軸73cm・短軸64cm、深さ12cmである。

遺物（挿図番号第227図 写真番号P L. 81）

土師器の甕（170・171）・土師器の小甕（172）・土師器の坏（173・174・175）を出土している。

その他に土師器7210g、須恵器167gが出土している。

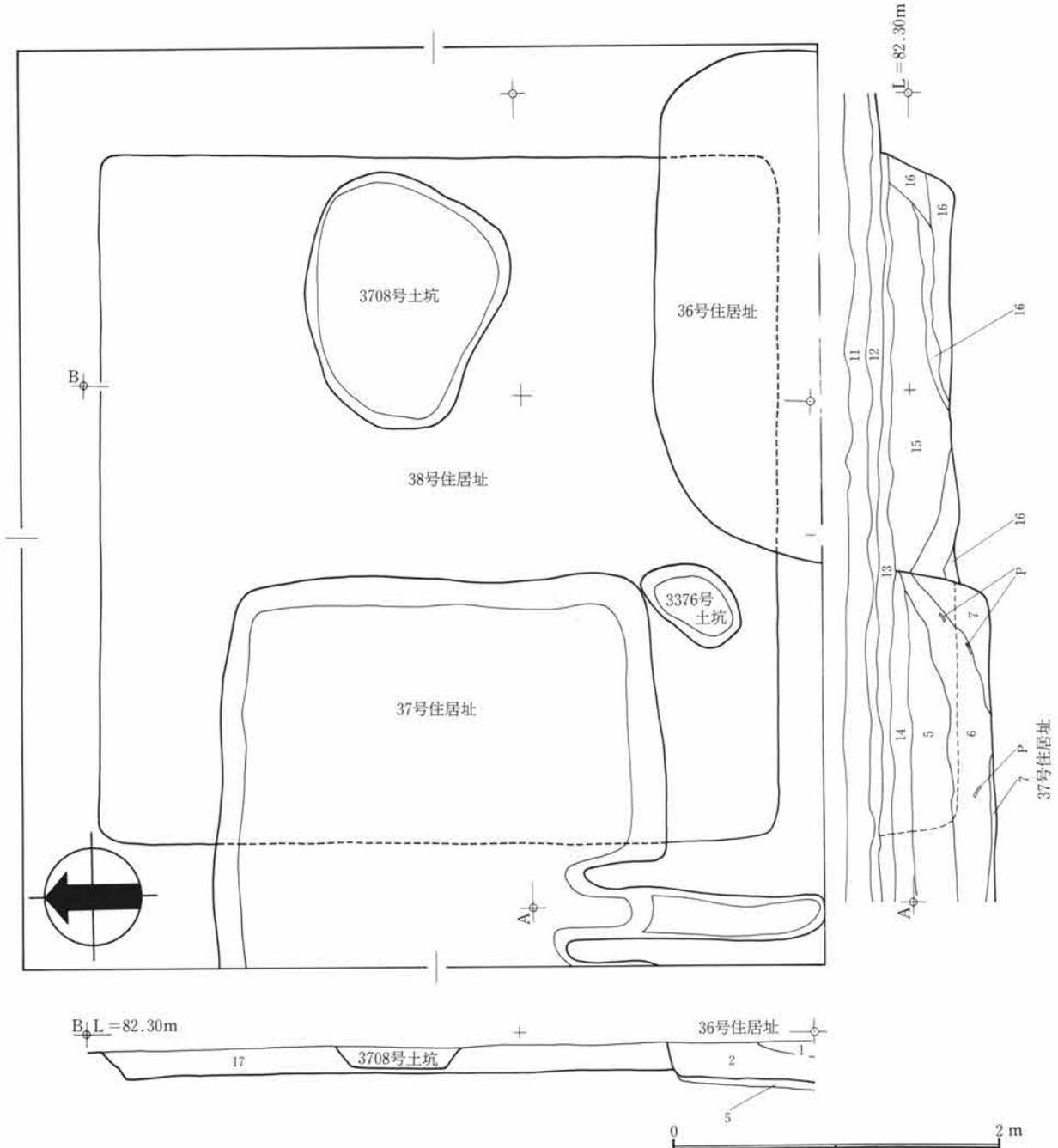
3区41号住居址

遺構（挿図番号第47図 写真番号P L. 48）

本住居址はM8-11、21グリッドで検出され、北5.0mに13号住居址が位置する。本住居址の南西隅は40号住居に切られている。

規模は長軸3.40m・短軸3.25m、面積10.718m²である。主軸方向はN-8°-Wを示している。

竈は東壁の南東寄りに付設される。竈全長は155cm、竈幅は85cm、燃烧部長さは50cm、焚き口幅は50cm、煙道部長さは105cm、煙道部幅は30cmである。炉床ピットは確認されなかった。竈の構造は燃烧部分が住居の内



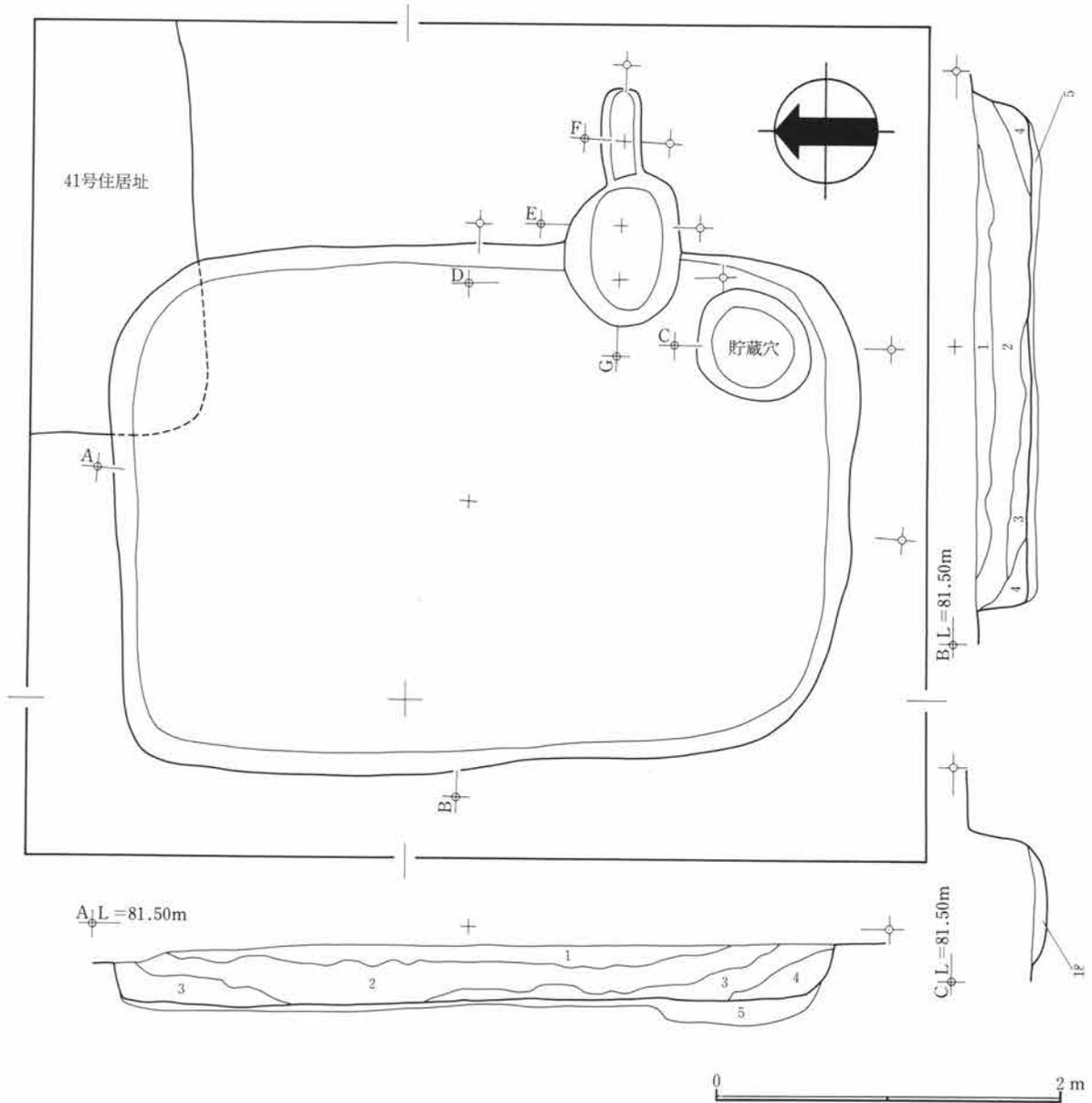
第44図 38号住居址

側にあるもので、両袖の遺存も良好である。

遺物 (挿図番号第228図)

土師器の坏 (176) を出土している。

その他に土師器154g、縄文土器1片を出土している。本住居では鉄製品が出土された。製品名は釘脱である。



第45図 40号住居址(1)

3区42号住居址

遺構 (挿図番号第48図 写真番号P L. 48)

本住居址はM 8-23, 33グリッドで検出され、北東8.0mに43号住居址、南西6.0mに11号住居址が位置する。調査時期が2回となり、B断面図中央縦線で接合してある。

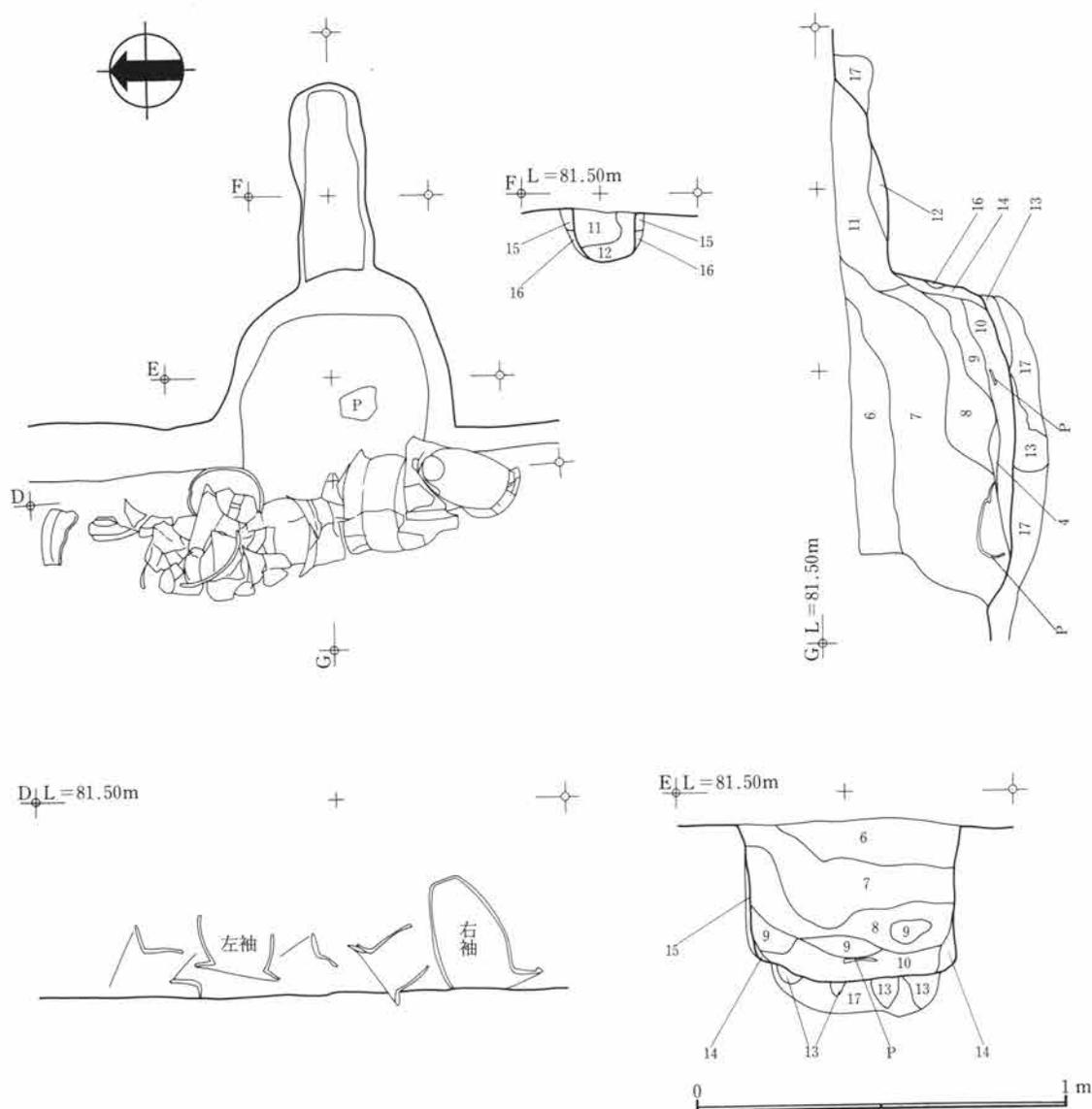
規模は長軸2.55m・短軸2.20m、面積5.250m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は96cm(推定)、焚き口幅は44cm(推定)である。炉床ピットは長軸98cm・短軸54cm、深さ8cmである。

遺物 (挿図番号第228図)

土師器の坏(177)を出土している。

その他に土師器276g、須恵器10gを出土している。



第46図 40号住居址(2)竈

3区46号住居址

遺構 (挿図番号第53図 写真番号P L. 49)

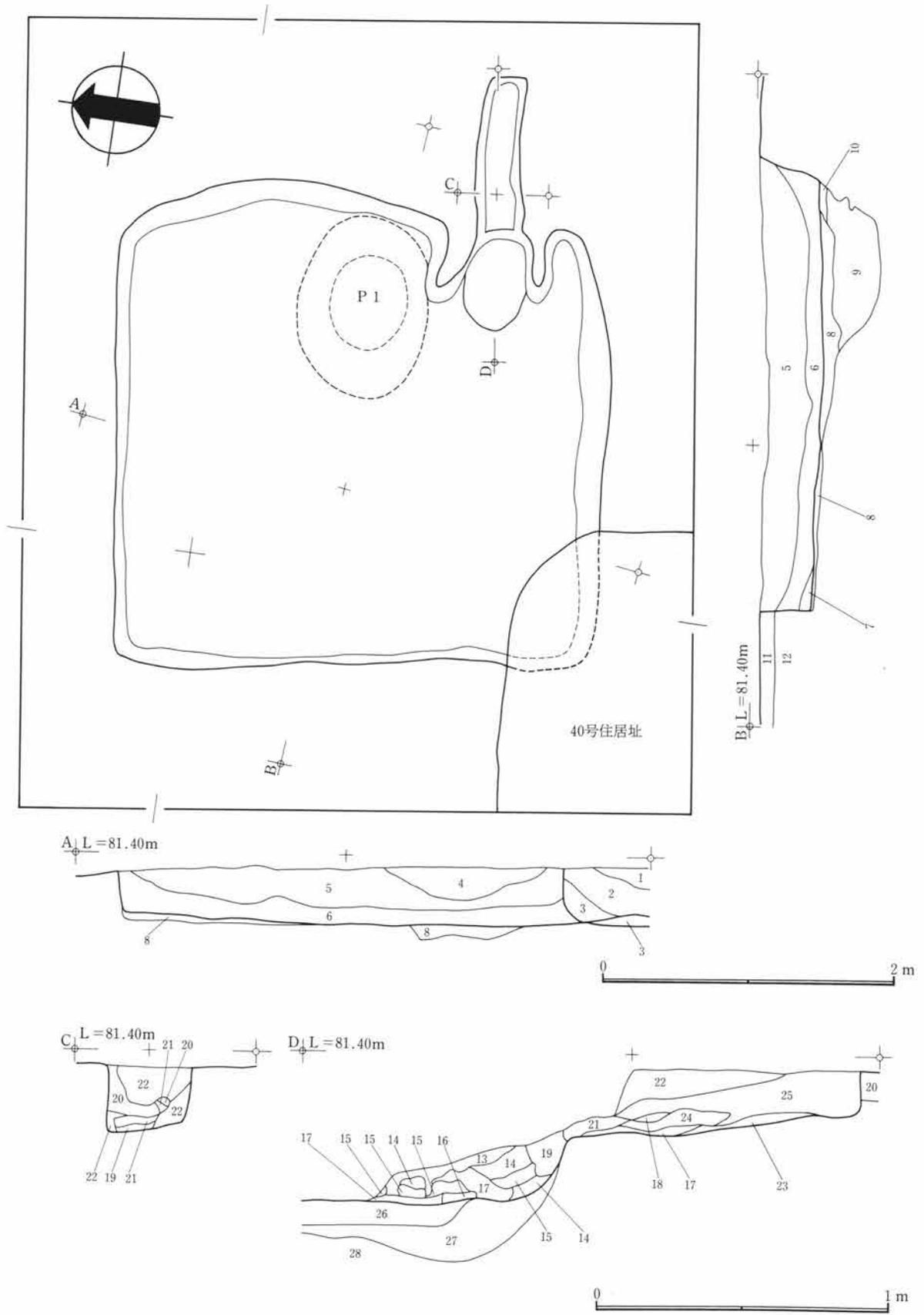
本住居址はK11-80, 90グリッドで検出され、北東5.0mに47号住居址、北西10.0mに44号住居址が位置する。

規模は長軸2.18m・短軸1.70m, 面積3.584㎡である。主軸方向はN-22°-Eを示している。

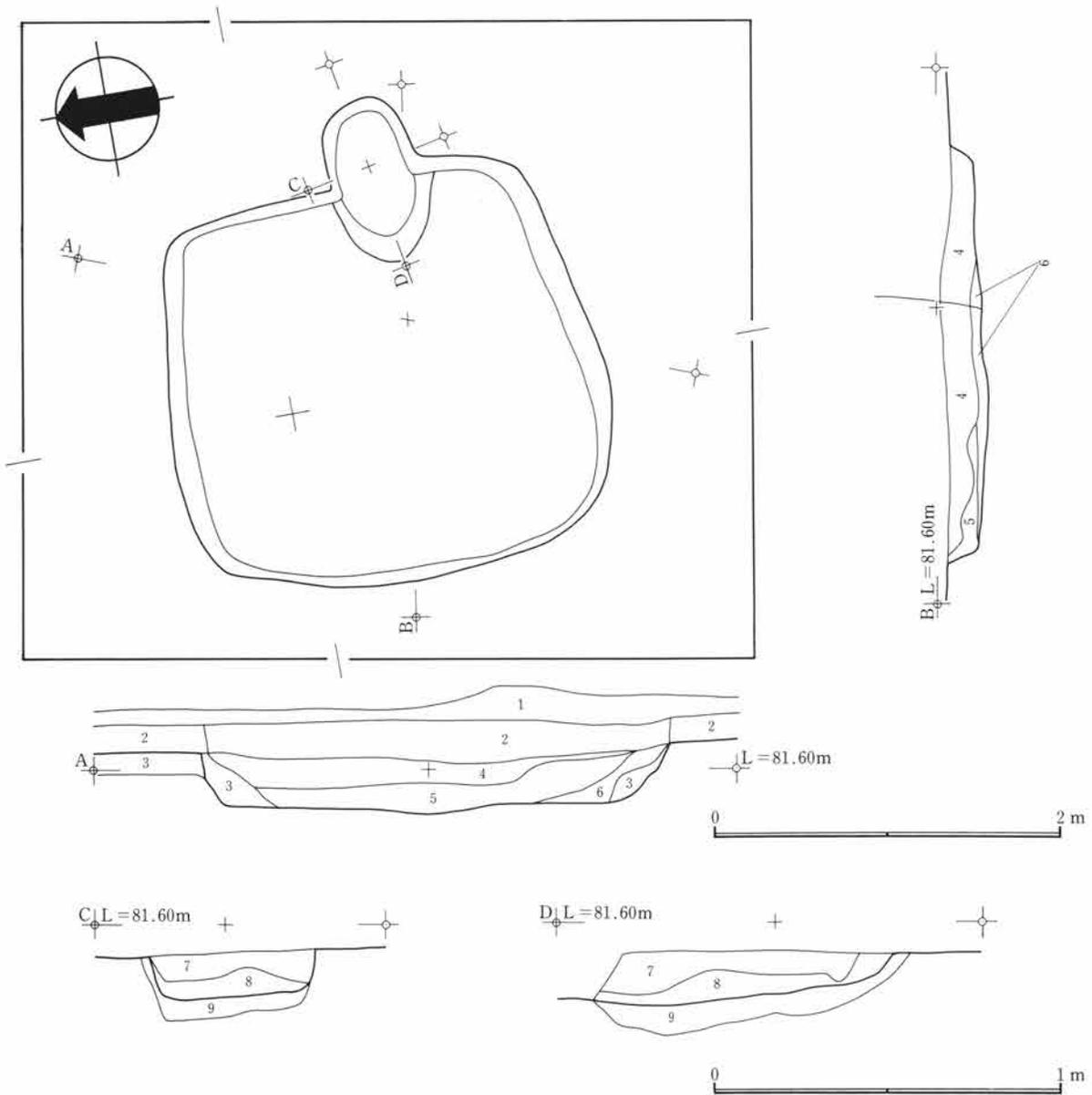
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は52cm, 焚き口幅は26cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。竈の構造は燃烧部分が、住居の外側に出るもので、袖は検出されなかった。貯蔵穴は長軸51cm・短軸50cm, 深さ31cmである。

遺物 (挿図番号第229図)

須恵器の坏 (195)・須恵器の高台付埴 (196) を出土している。



第47图 41号住居址



第48図 42号住居址

その他縄文土器1片、土師器920g、須恵器814gが出土している。

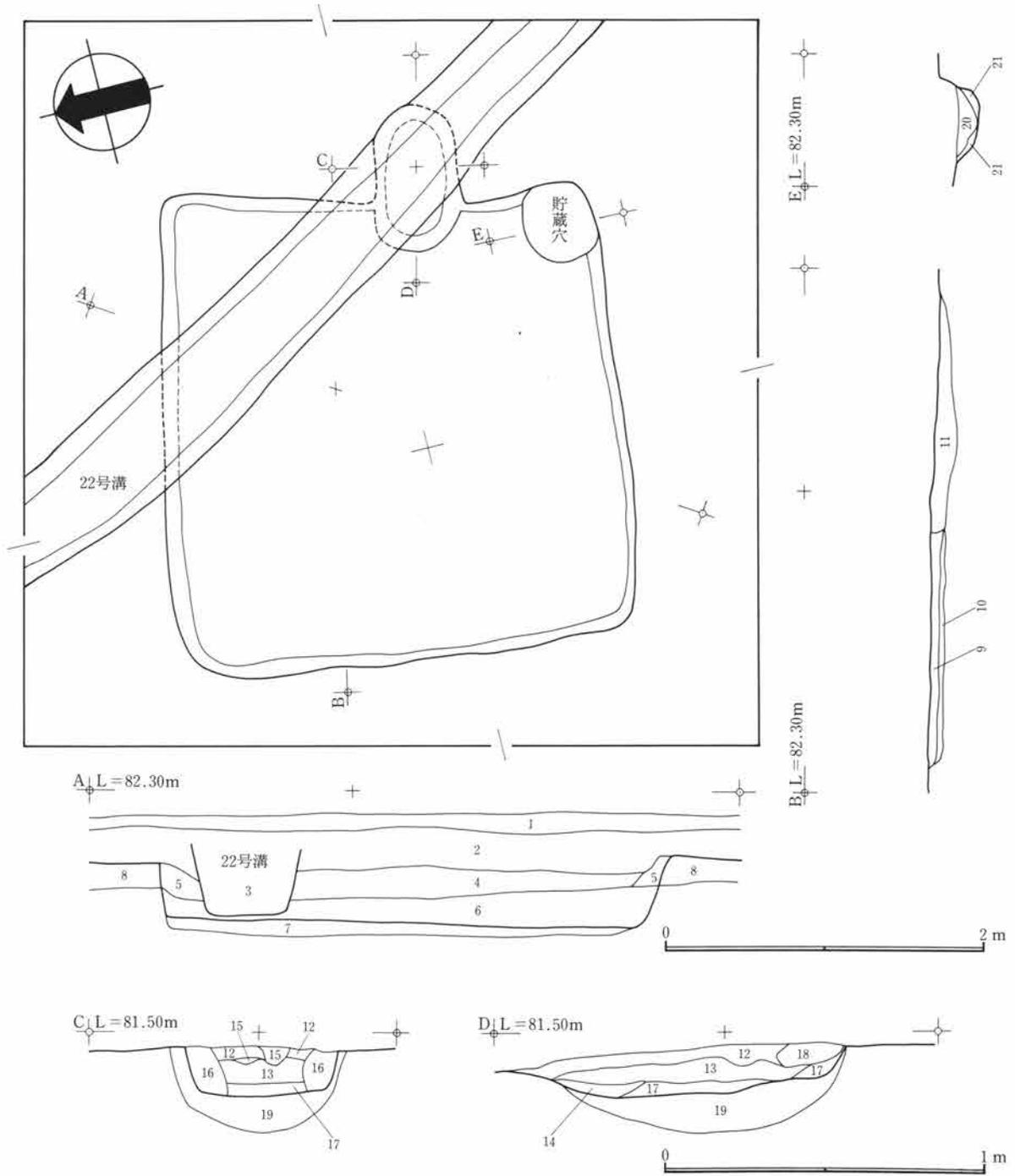
3区47号住居址

遺構 (挿図番号第54図 写真番号P L. 49)

本住居址はK11-71, 80, 81グリッドで検出され、南西5.0mに46号住居址、西11.0mに44号住居址が位置する。

規模は長軸3.30m・短軸3.05m、面積9.700m²である。主軸方向はN-10°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は92cm (推定)、焚き口幅は50cm (推定) である。炉床ピットは長軸80cm・短軸45cm、深さ11cmである。竈の構造は、燃焼部分が住居の内外の境目に掘り込んだもので、袖は検出されなかった。貯蔵穴は長軸61cm・短軸55cm、深さ16cmである。P1は長軸51cm・短軸46cm、深さ35cm、



第49図 43号住居址

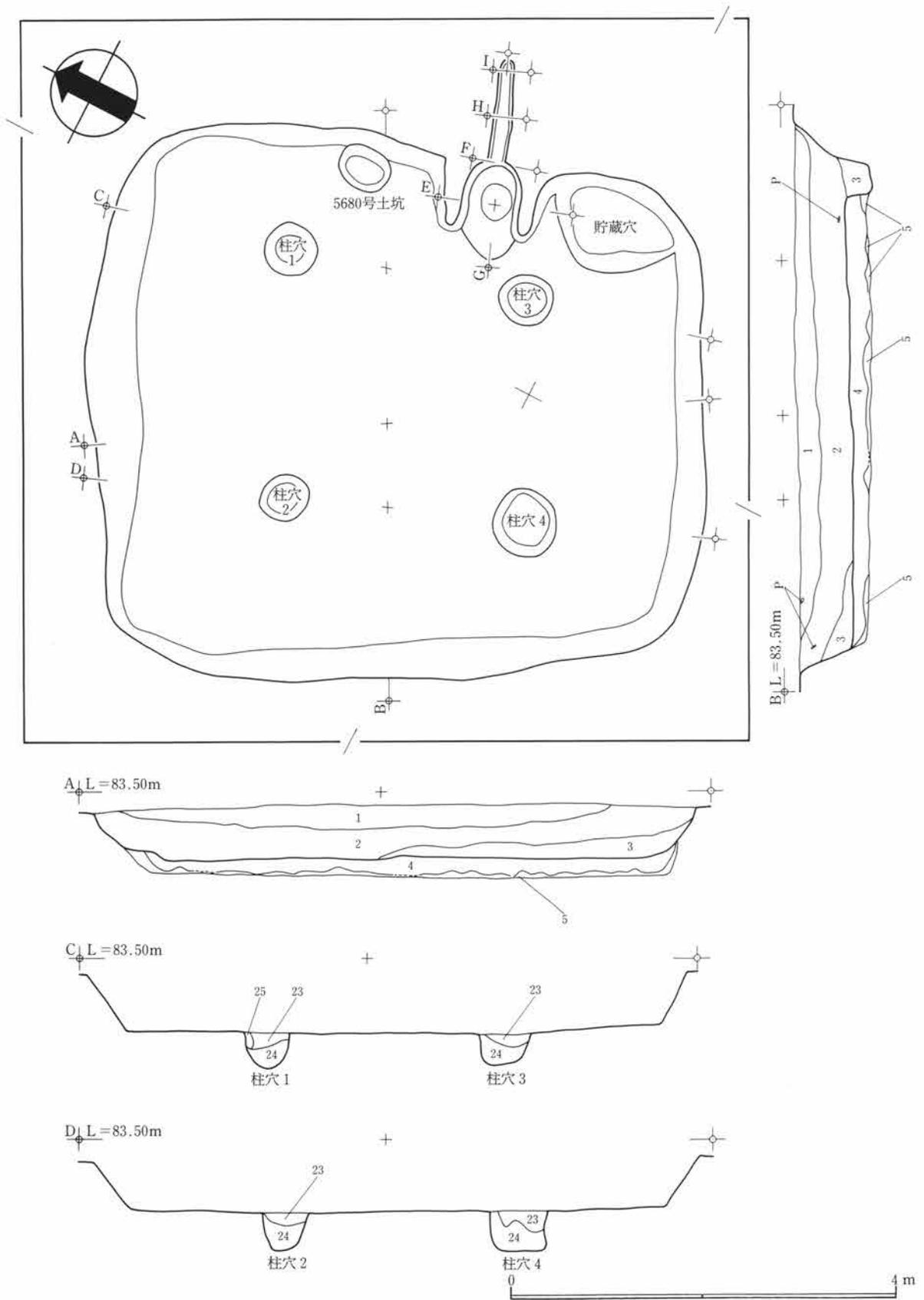
P 2 は長軸22cm・短軸21cm、深さ27cmである。

遺物 (挿図番号第229図)

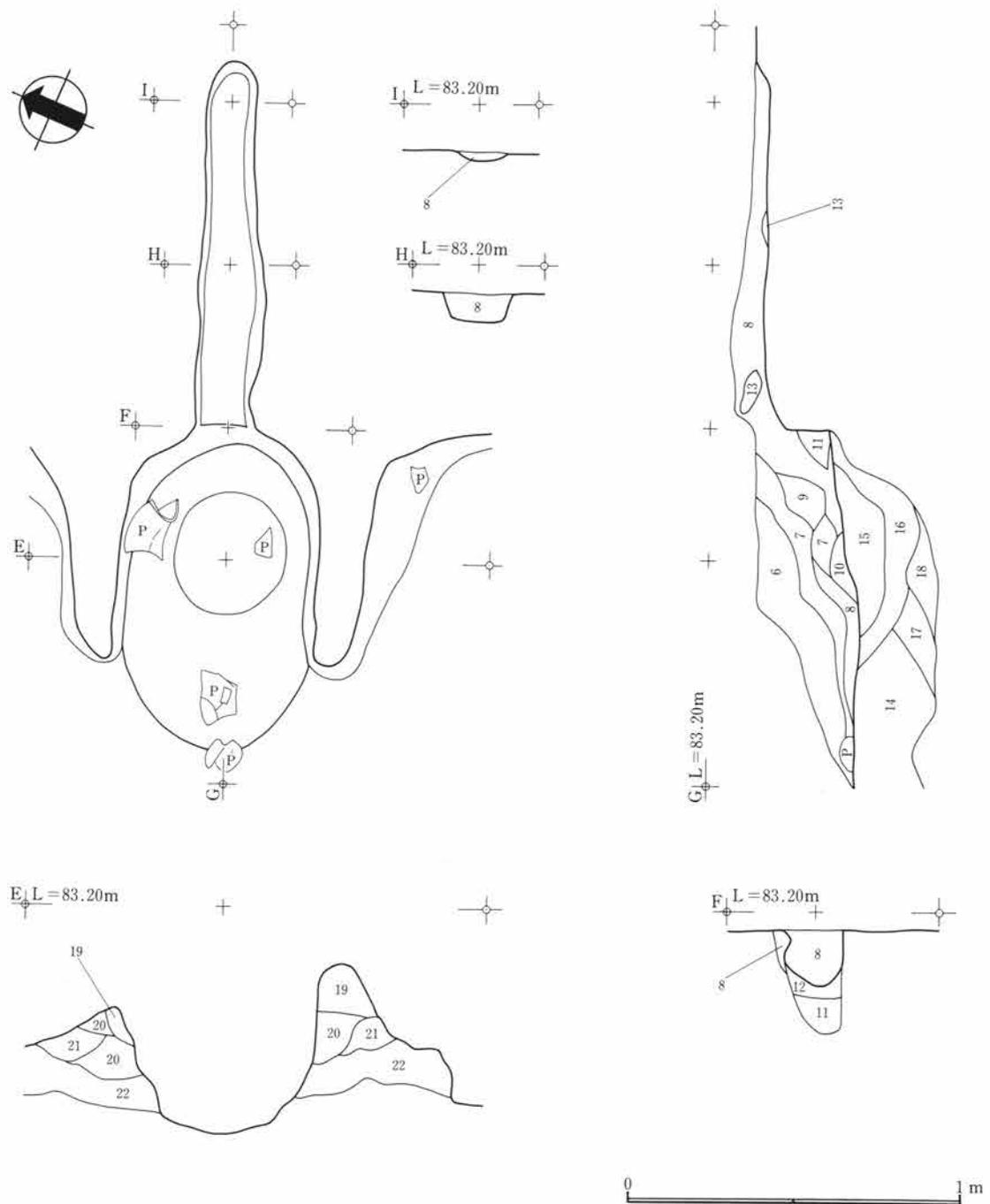
甑 (197)・土師器の甕 (198)・須恵器の高台付埴 (199)・須恵器の高台付坏 (200・201) を出土した。

その他は、土師器2429g、須恵器1738gが出土している。

本住居址からは鉄製品が出土している。製品名はスラグである。



第50図 44号住居址(1)



第51図 44号住居址(2)竈

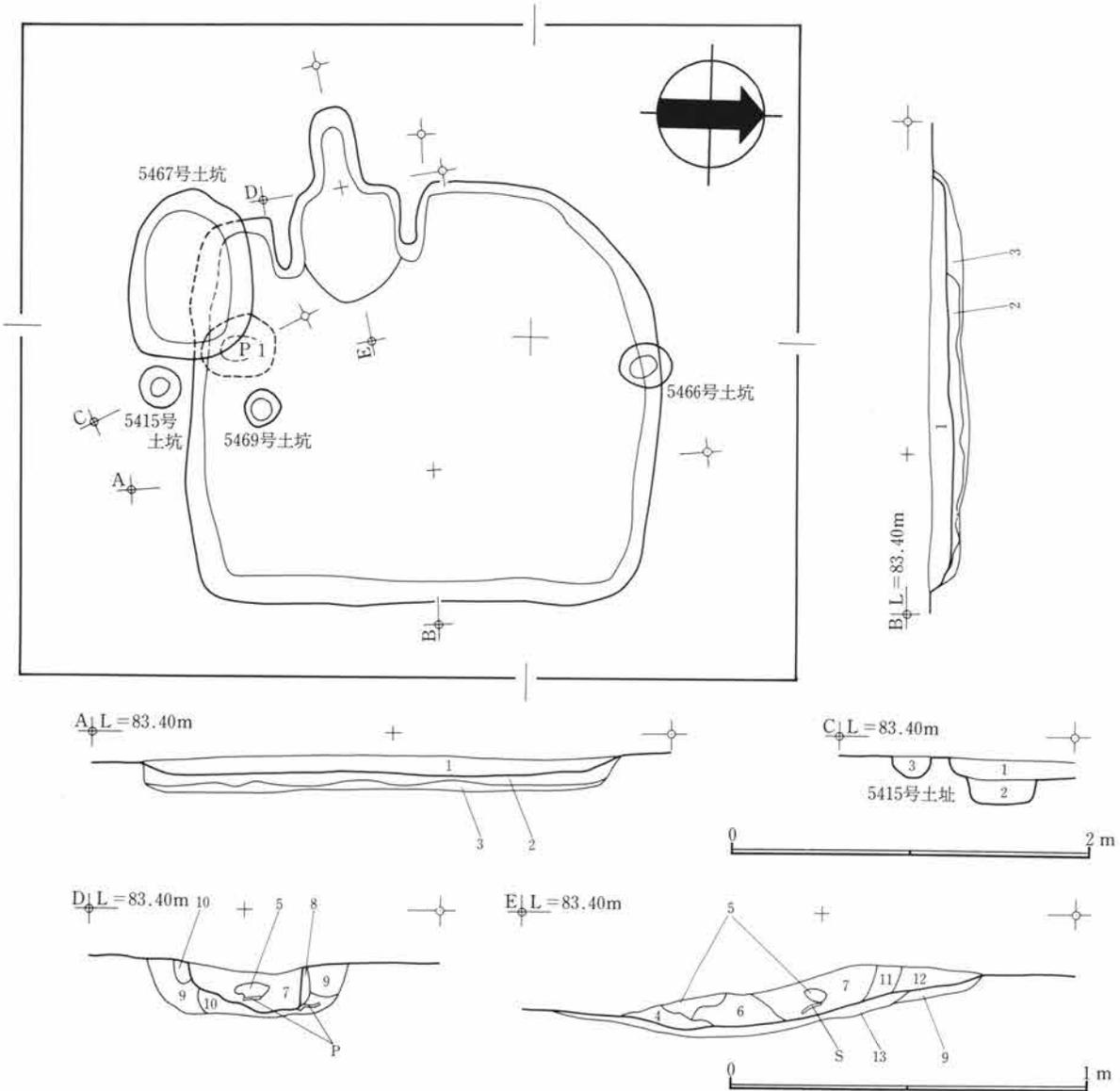
3区48号住居址

遺構 (挿図番号第55図 写真番号P L. 49)

本住居址はL 7-89グリッドで検出され、北5.0mに9号住居址、東18.0mに7号住居址が位置する。

規模は長軸3.20m・短軸3.05m、面積9.124m²である。主軸方向はN-16°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は127cm、竈幅は99cm、燃焼部長さは48cm、焚き口幅は40cm、煙道部長さは79cm、煙道部幅は23cmである。炉床ピットは長軸72cm・短軸68cm、深さ6cmである。竈の主軸は、



第52図 45号住居址

住居の軸と異なる。竈の構造は、燃焼部分が住居内にあるもので両袖の遺存も良い。

貯蔵穴は長軸37cm・短軸30cm、深さ10cmである。

遺物 (挿図番号第229図)

須恵器の鉢 (202)・須恵器の長頸壺 (203) を出土している。

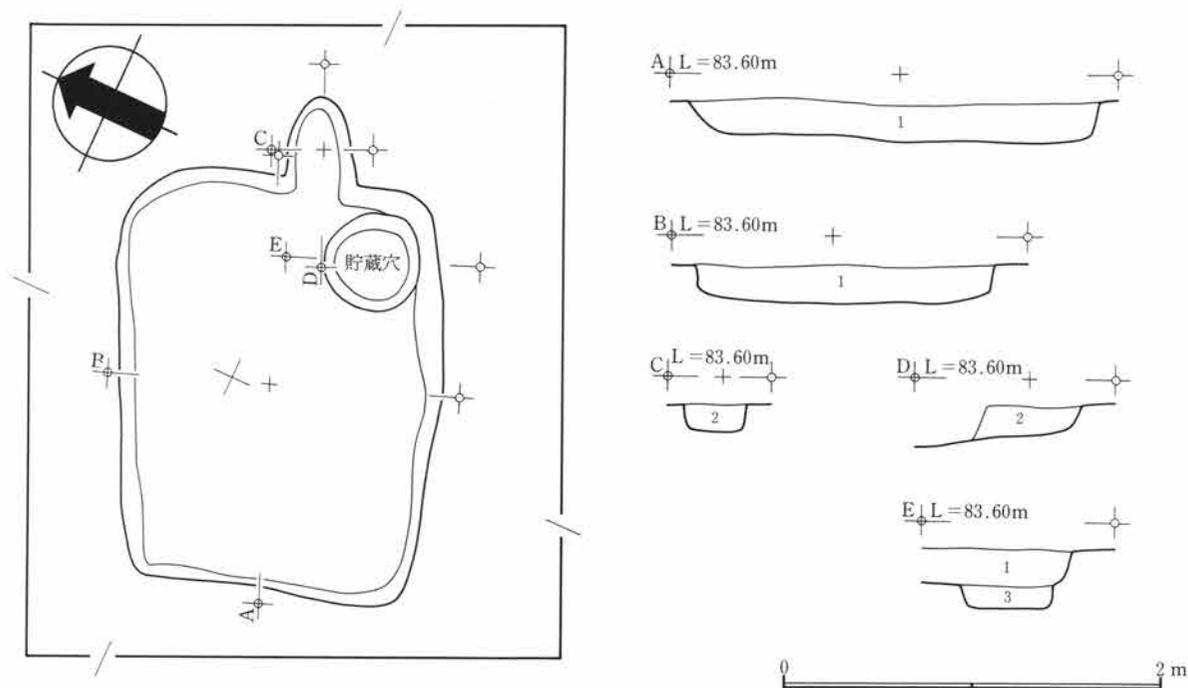
その他に土師器87g、須恵器146gが出土している。

3区43号住居址

遺構 (挿図番号第49図 写真番号P L. 48)

本住居址はM 8-13, 23グリッドで検出され、南西8.0mに42号住居址、北西11.0mに12号住居址が位置する。北壁中央から、東壁の竈部分に斜めに22号溝が横切る。

規模は長軸3.03m・短軸2.95m、面積8.356㎡である。主軸方向はN-10°-Eを示している。



第53図 46号住居址

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は92cm (推定)、焚き口幅は44cm (推定) である。炉床ピットは長軸92cm・短軸53cm、深さ15cmである。貯蔵穴は長軸52cm・短軸45cm、深さ14cmである。

遺物 (挿図番号第228図)

土師器の甕 (178・179)・須恵器の坏 (180・181)・須恵器の高台付埴 (182) を出土している。

その他に土師器243g、須恵器376gを出土している。また、砥石が1点出土している。材質は砥沢石である。

3区44号住居址

遺構 (挿図番号第50・51図)

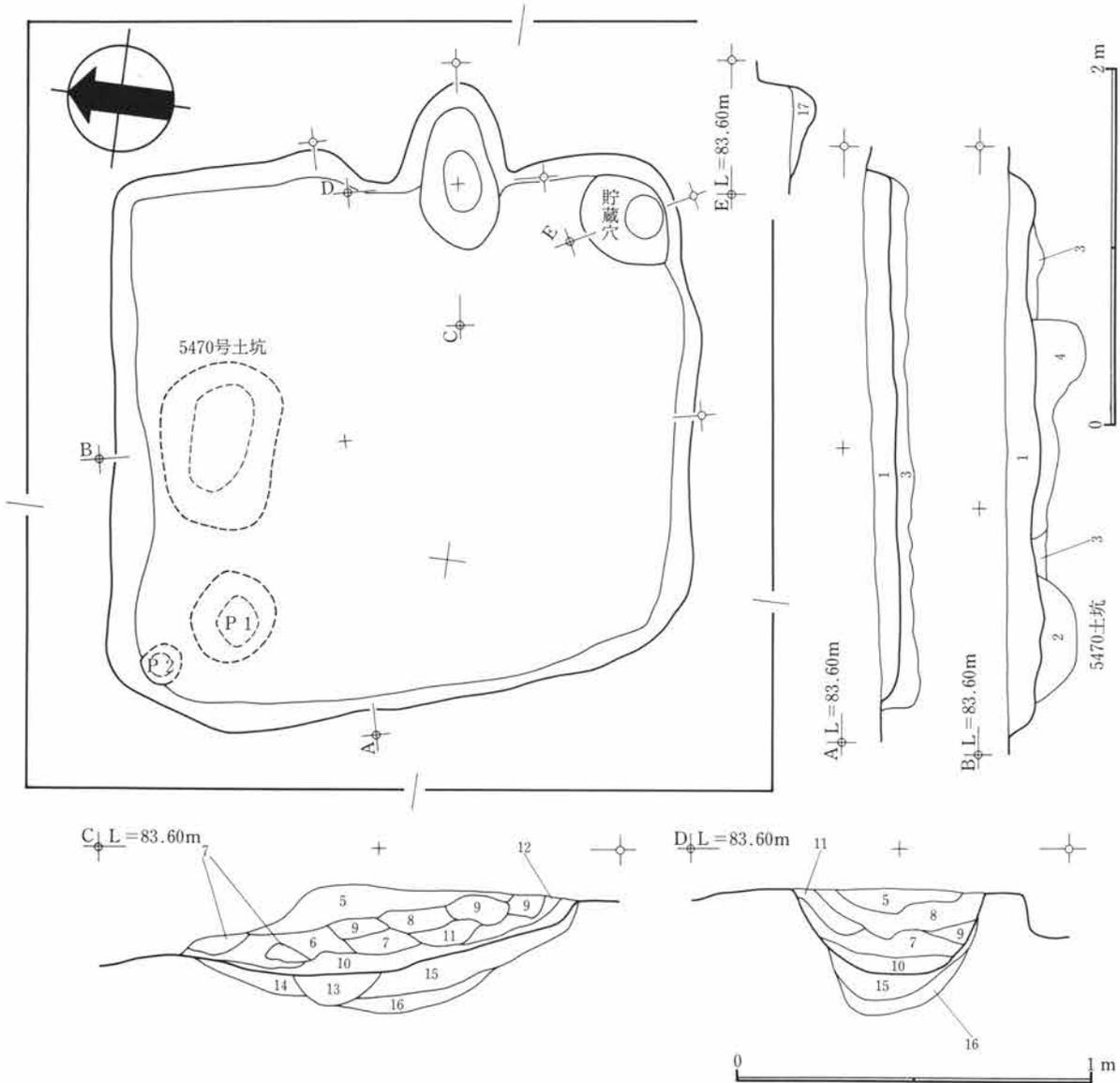
本住居址はJ11-79, 89・K11-80グリッドで検出され、東10.0mに47号住居址、北7.0mに45号住居址が位置する。支柱穴4本の残りも良好である。

規模は長軸6.35m・短軸5.65m、面積32.198㎡である。主軸方向はN-32°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は184cm、竈幅は130cm、燃焼部長さは75cm、焚き口幅は62cm、煙道部長さは109cm、煙道部幅は21cmである。炉床ピットは長軸92cm・短軸73cm、深さ9cmである。竈の構造は燃焼部分が住居内にあるもので、両袖の遺存も良い。貯蔵穴は長軸117cm・短軸100cm、深さ25cmである。柱穴1は長軸57cm・短軸54cm、深さ35cm、柱穴2は長軸54cm・短軸49cm、深さ37cm、柱穴3は長軸58cm・短軸52cm、深さ33cm、柱穴4は長軸72cm・短軸67cm、深さ39cmである。

遺物 (挿図番号第228図)

土師器の甕 (183・184)・須恵器の甕 (185)・土師器の埴 (186)・須恵器の坏 (187・188・189・190・191) を出土している。

その他に土師器14205g、須恵器6143gが出土している。



第54図 47号住居址

本住居址では鉄製品が出土した。製品名は不明である

3区45号住居址

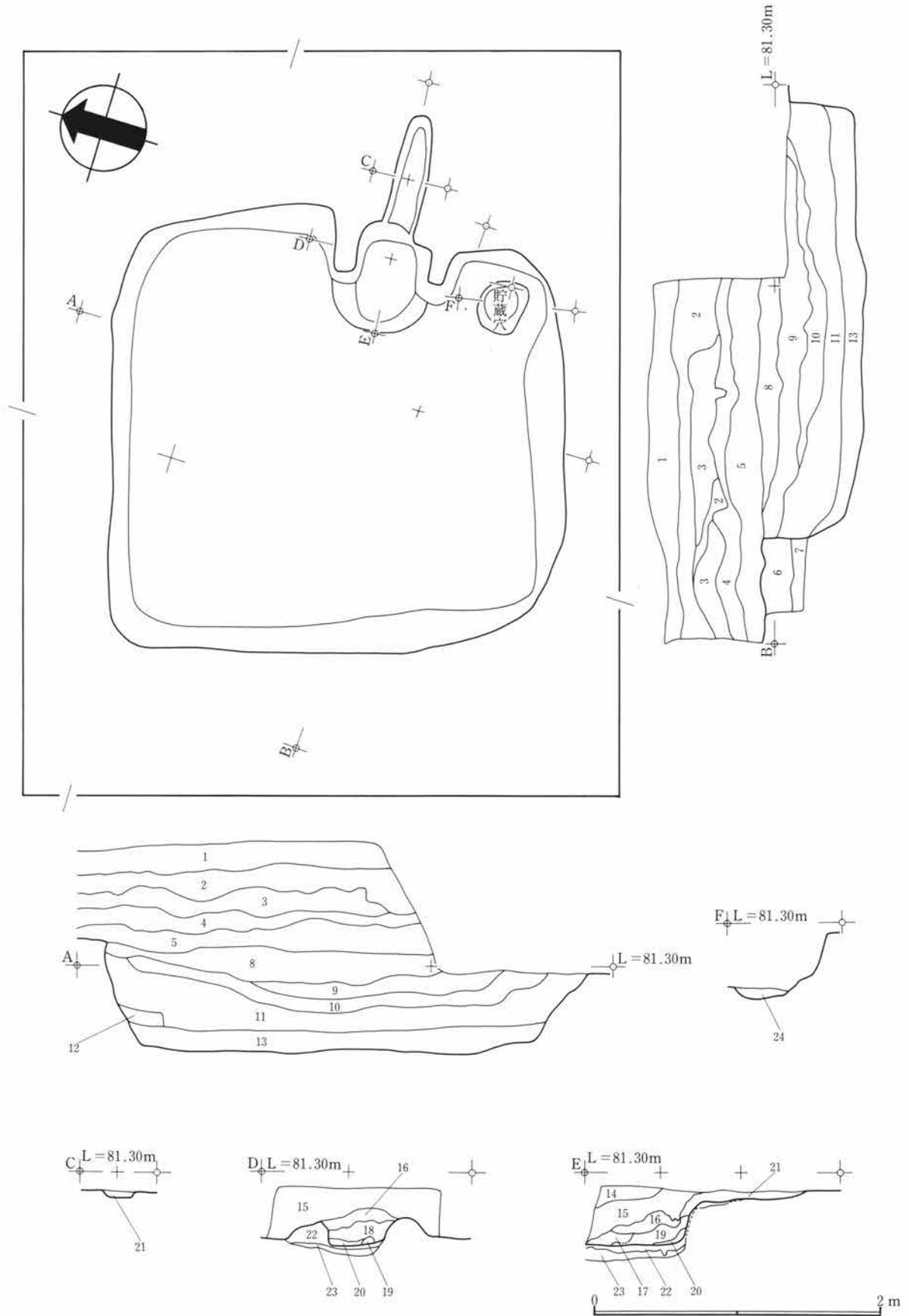
遺構 (挿図番号第52図)

本住居址はJ 11-69, 79グリッドで検出され、南7.0mに44号住居址、北東15.0mに56号住居址が位置する。南壁の西隅に5467土坑が大きく本住居を削る。

規模は長軸2.65m・短軸2.35m、面積5.840㎡である。主軸方向はN-3°-Wを示している。

竈は西壁の左寄りに付設される。竈全長は90cm、竈幅は93cm、燃焼部長さは46cm、焚き口幅は56cm、煙道部長さは44cm、煙道幅は28cmである。炉床ピットは長軸63cm・短軸60cm、深さ4cmである。住居の内側に竈の燃焼部を入れる構造で両袖の遺存も良く、煙道は突出する。

遺物 (挿図番号第229図)



第55図 48号住居址

土師器の甕 (192)・土師器の坏 (193)・須恵器の坏 (194) を出土している。
その他に、土師器426g、須恵器152gが出土している。

3区49号住居址

遺構 (挿図番号第56図 写真番号P.L. 49)

本住居址はL9-38, 39, 48グリッドで検出され、西5.0mに26号住居址、北東8.0mに100号住居址が位置する。

規模は長軸5.28m (推定)・短軸4.50m, 面積21.556m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は48cm, 竈幅は77cm, 焚き口幅は45cmである。炉床ピットは確認されなかった。貯蔵穴は長軸107cm・短軸100cm, 深さ20cmである。P1は長軸31cm・短軸27cm, 深さ4cm, P2は長軸60cm・短軸45cm, 深さ17cm, P3は長軸32cm・短軸27cm, 深さ9cm, P4は長軸28cm・短軸26cm, 深さ17cm, P5は長軸65cm・短軸55cm, 深さ10cm, P6は長軸42cm・短軸30cm, 深さ9cmである。

遺物 (挿図番号第230図 写真番号P.L. 81)

土師器の甕 (204・205)・土師器の坏 (206・207・208)・須恵器の蓋 (209)・須恵器高台付塊 (210・211) を出土している。

その他に土師器5086g、須恵器986gが出土している。本住居址では鉄製品が出土した。棒状の形態である。土錘が1点出土している。

3区52号住居址

遺構 (挿図番号第57図 写真番号P.L. 49)

本住居址はL8-17, 27グリッドで検出され、北9.0mに60号住居址、東7.5mに67号住居址が位置する。

規模は長軸4.90m・短軸4.65m, 面積19.652m²である。竈付近から未固結凝灰岩が出土している。主軸方向はN-3°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は64cm, 焚き口幅は75cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。貯蔵穴は長軸113cm・短軸100cm, 深さ17cmである。

遺物 (挿図番号第230図)

須恵器の高台付塊 (212・213・214)・灰釉陶器の高台付? (215) を出土している。

その他に土師器1630g、須恵器1580gが出土している。本住居址では鉄製品が出土した。製品名は釘である。

3区54号住居址

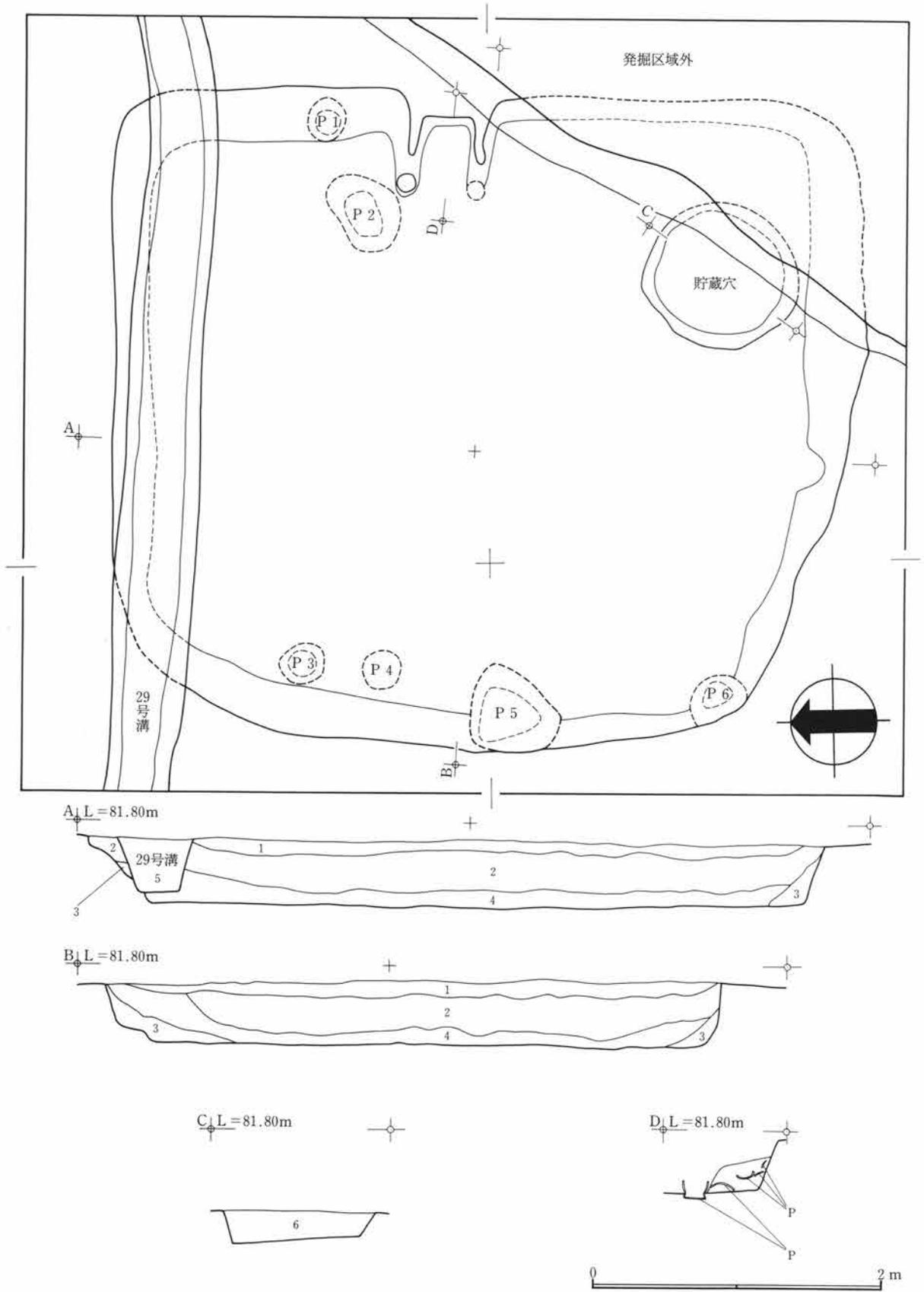
遺構 (挿図番号第58図 写真番号P.L. 49)

本住居址はK11-31, 41グリッドで検出され、西6.5mに55号住居址、東11.0mに59号住居址が位置する。

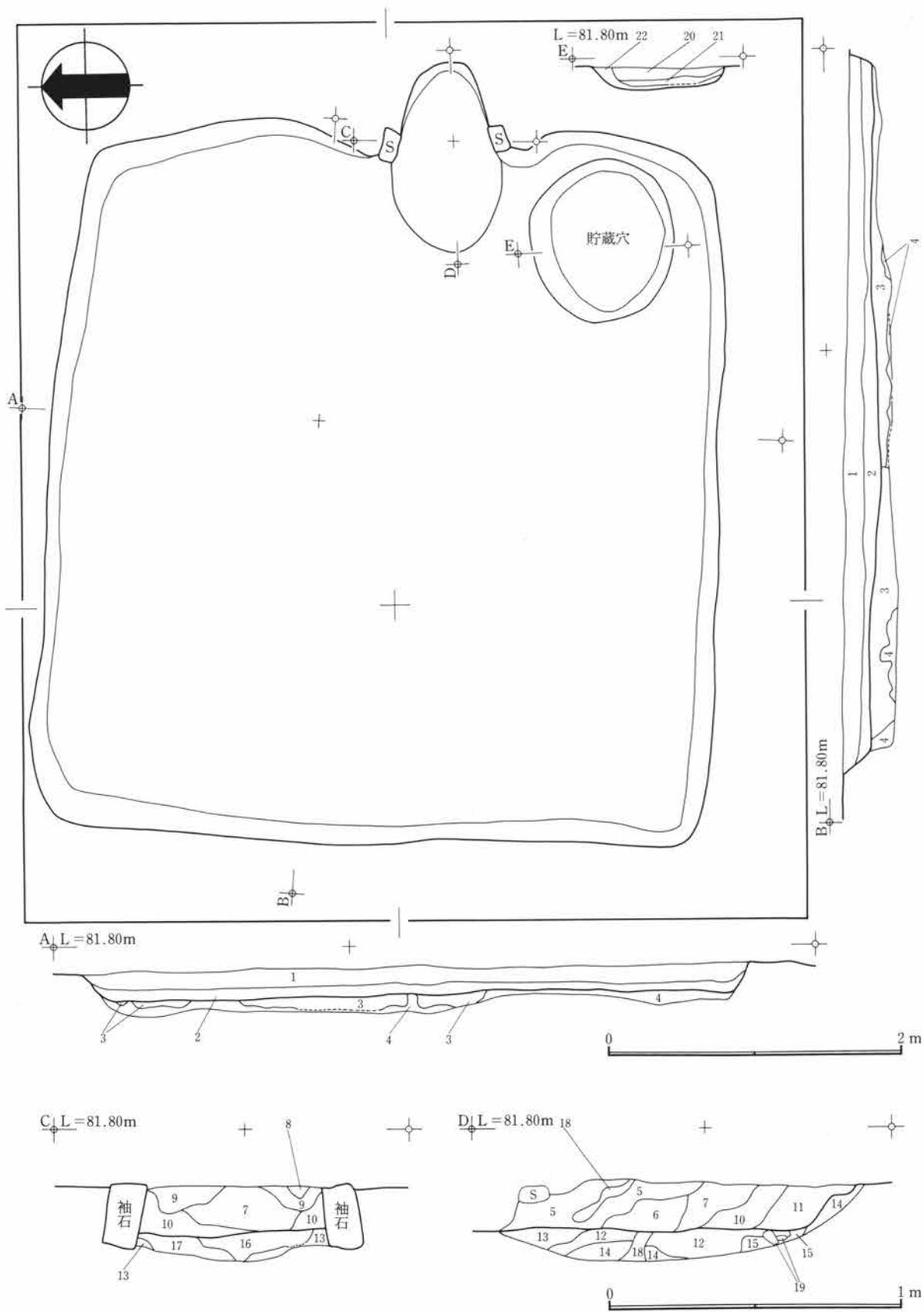
規模は長軸3.43m・短軸2.75m, 面積8.946m²である。竈付近から凝灰が出土している。主軸方向はN-3°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は90cm, 竈幅は87cm, 焚き口幅は60cmである。炉床ピットは長軸73cm・短軸62cm, 深さ7cmである。

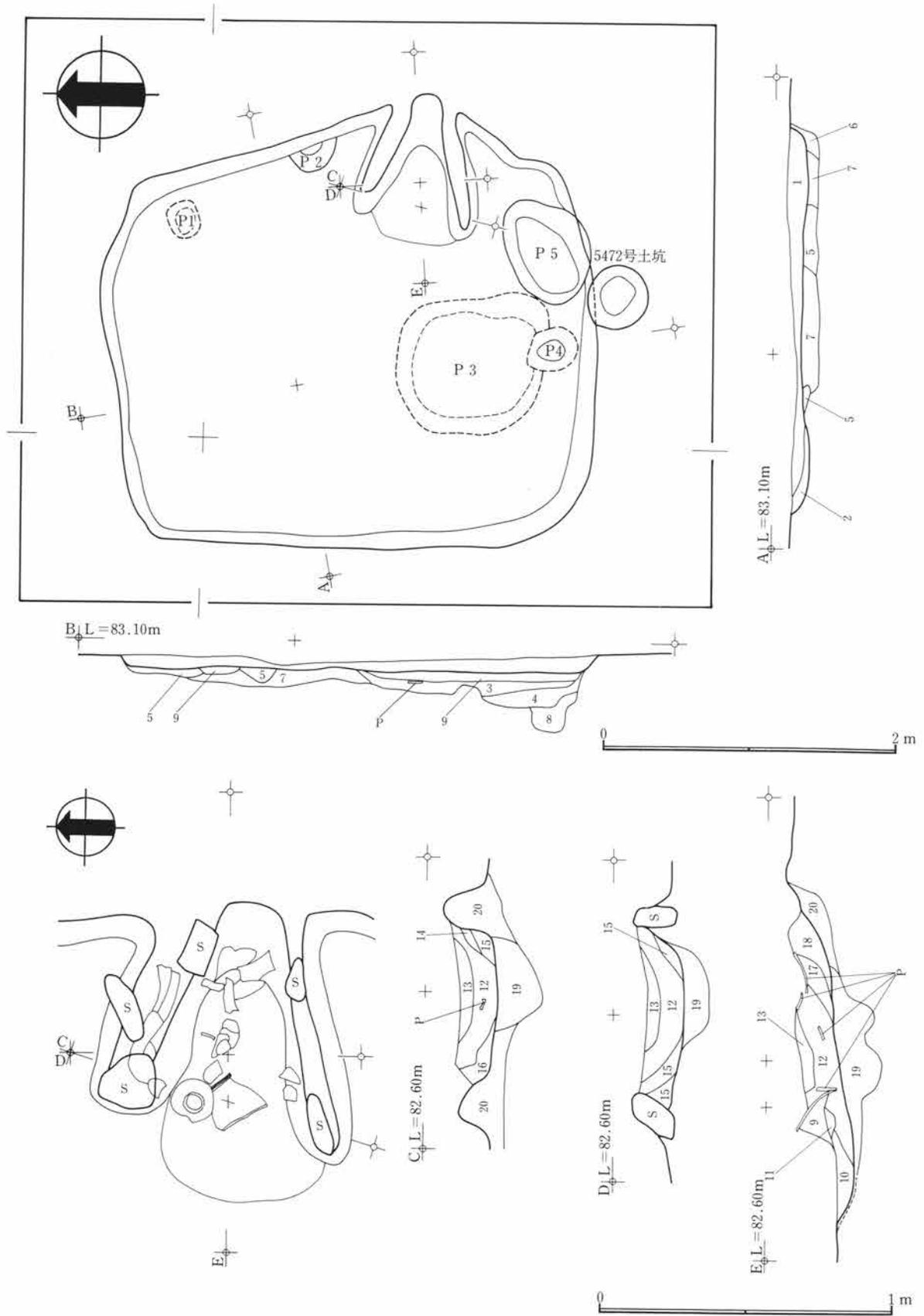
P1は長軸26cm・短軸20cm, 深さ16cm, P2は長軸35cm・短軸34cm (推定), 深さ15cm, P3は長軸100cm・短軸95cm, 深さ7cm, P4は長軸34cm・短軸30cm, 深さ20cm, P5は長軸80cm・短軸57cm, 深さ17cmである。



第56図 49号住居址



第57図 52号住居址



第58图 54号住居址

遺物 (挿図番号第231図 写真番号P L. 81)

甕 (216)・土師器の甕 (217)・須恵器の坏 (218)・須恵器の高台付皿 (219・220)・灰釉陶器 (223・224) を出土した。

本住居では鉄製品が出土している。製品名は鎌である。

3区55号住居址

遺構 (挿図番号第59図 写真番号P L. 49)

本住居址はK11-30, 31グリッドで検出され、北東4.0mに130号住居址、東6.0mに54号住居址が位置する。本住居址の竈左袖の部分は922号土坑によって切られている。

規模は長軸4.00m・短軸2.95m, 面積10.612m²である。主軸方向はN-15°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は96cm, 燃烧部長さは42cm, 焚き口幅は55cm(推定), 煙道部長さは54cm, 煙道部幅は32cmである。炉床ピットは確認されなかった。竈の本体が、住居の外側に出る形態。燃烧部は方形で大きく煙道も長い。貯蔵穴は長軸45cm・短軸37cm, 深さ11cmである。

遺物 (挿図番号第231図)

土師器の坏 (225)・須恵器の甕 (226) を出土している。特に須恵器の底は大形でD径は40cm以上を測り、胴径は1m以上のものと推測される。

その他に土師器738g、須恵器1686gが出土している。本住居址からは鉄製品が出土している。製品名は刀子である。

3区56号住居址

遺構 (挿図番号第60・61図 写真番号P L. 49・50)

本住居址はK11-40, 50グリッドで検出され、北7.0mに54号住居址、東16.0mに57号住居址が位置する。規模は長軸4.50m・短軸4.30m, 面積19.442m²である。主軸方向はN-2°-Eを示している。

竈(新)は東壁の右寄りに付設される。竈全長は145cm, 竈幅は98cm, 燃烧部長さは100cm, 焚き口幅は55cm, 煙道部長さは45cm, 煙道部幅は32cmである。炉床ピットは長軸68cm・短軸45cm, 深さ6cmである。竈(古)は東壁の右寄りに付設される。煙道部長さは88cm(推定), 煙道部幅は27cmである。炉床ピットは確認されなかった。両袖は短かく竈本体は住居址の外側へ出る形態。両袖を土師器の長甕を倒立させ固定し、天井部分前面を凝灰岩の切石で高架させた構造である。

柱穴1は長軸42cm・短軸35cm, 深さ32cm, 柱穴2は長軸37cm・短軸33cm, 深さ40cm, 柱穴3は長軸45cm・短軸37cm, 深さ33cm, 柱穴4は長軸43cm・短軸37cm, 深さ32cmである。P1は長軸50cm・短軸33cm, 深さ30cmである。本遺跡で、柱穴が検出された住居址は少ない。

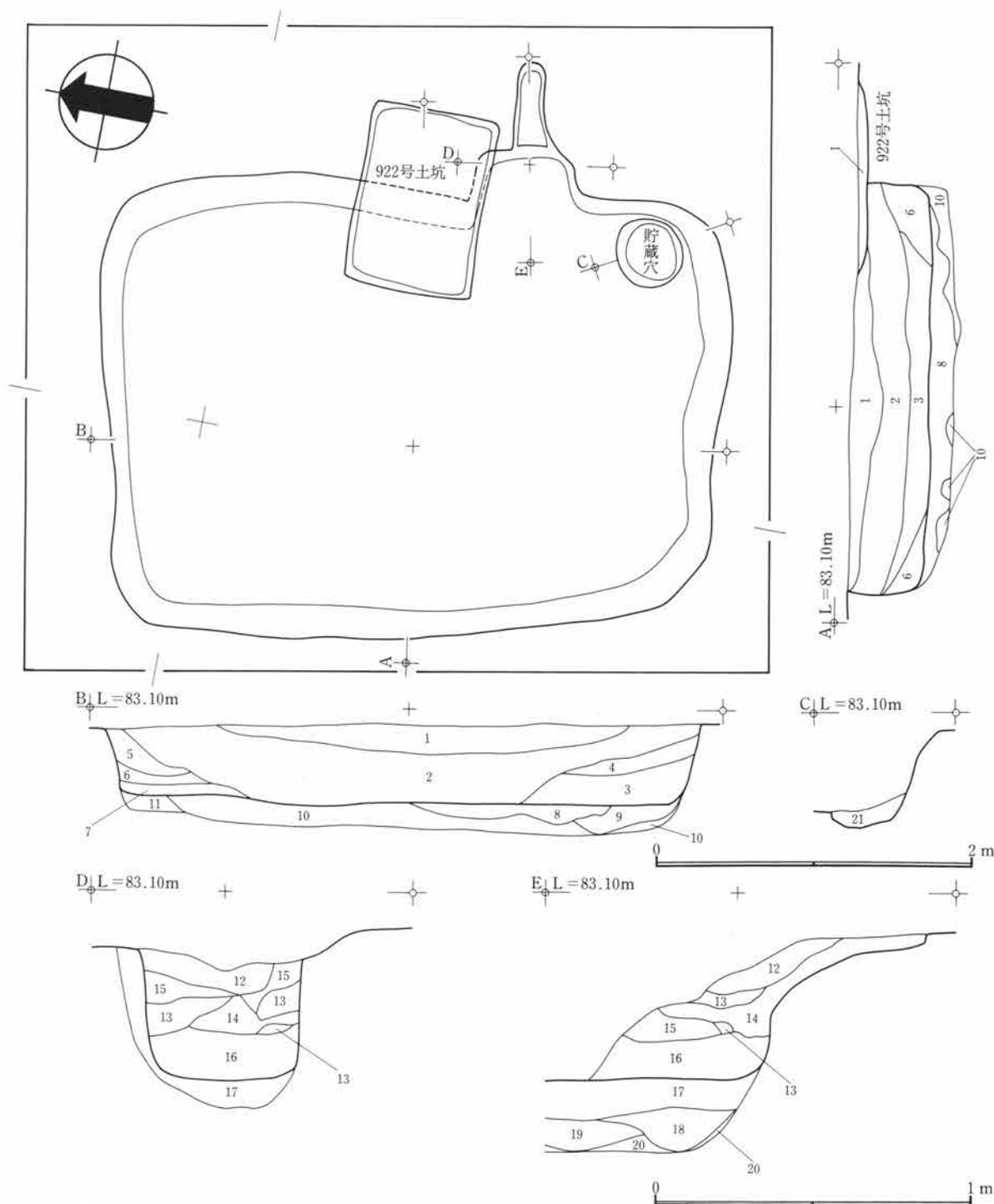
遺物 (挿図番号第232図 写真番号P L. 82)

土師器の甕 (227・228)・土師の鉢 (229・235)・土師の坏 (230~234) 須恵器の蓋 (236)・須恵器の坏 (237) を出土している。特に土師器の鉢の2点は浅鉢と深鉢に分けられ、出土の点数も少ない。

その他に土師器52g、須恵器976gが出土している。

3区57号住居址

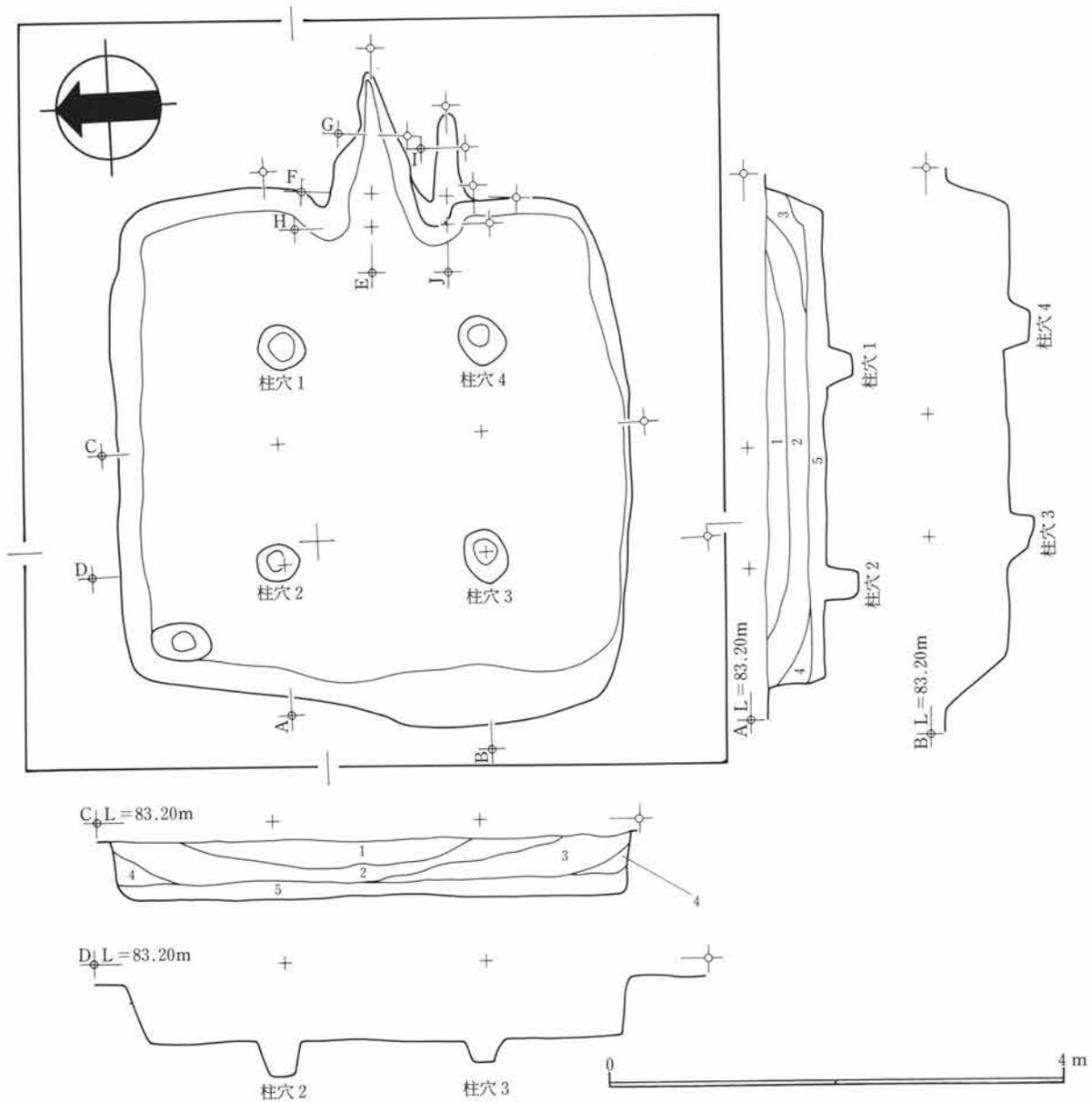
遺構 (挿図番号第62図)



第59図 55号住居址

本住居址はK11-52グリッドで検出され、北12.0mに59号住居址、北西12.0mに54号住居址が位置する。本住居址の北壁寄りの東西に37号溝が横切る。また竈煙道部には5458号土坑が、南壁寄りには988号土坑が、南東隅には968号土坑が本住居址を切っている。

規模は長軸2.45m・短軸2.38m、面積5.744m²である。竈付近から未固結凝灰岩が出土している。主軸方向はNを示している。



第60図 56号住居址(1)

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は79cm (推定)、焚き口幅は60cm (推定)である。炉床ピットは長軸78cm・短軸54cm、深さ6cmである。

遺物 (挿図番号第232図)

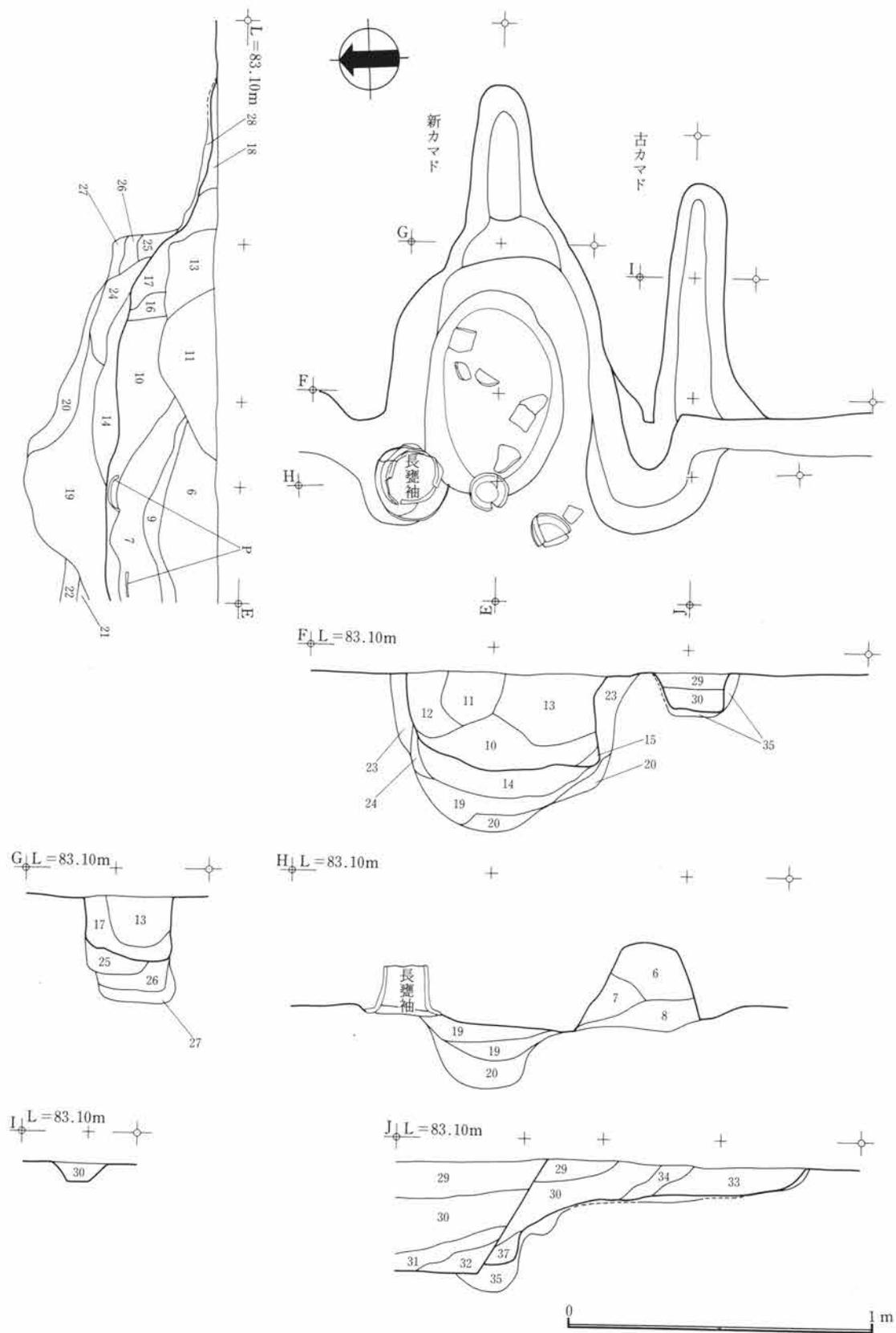
土師器の坏 (239)・須恵器の甕 (238) を出土している。

その他に土師器10g、須恵器22gが出土している。

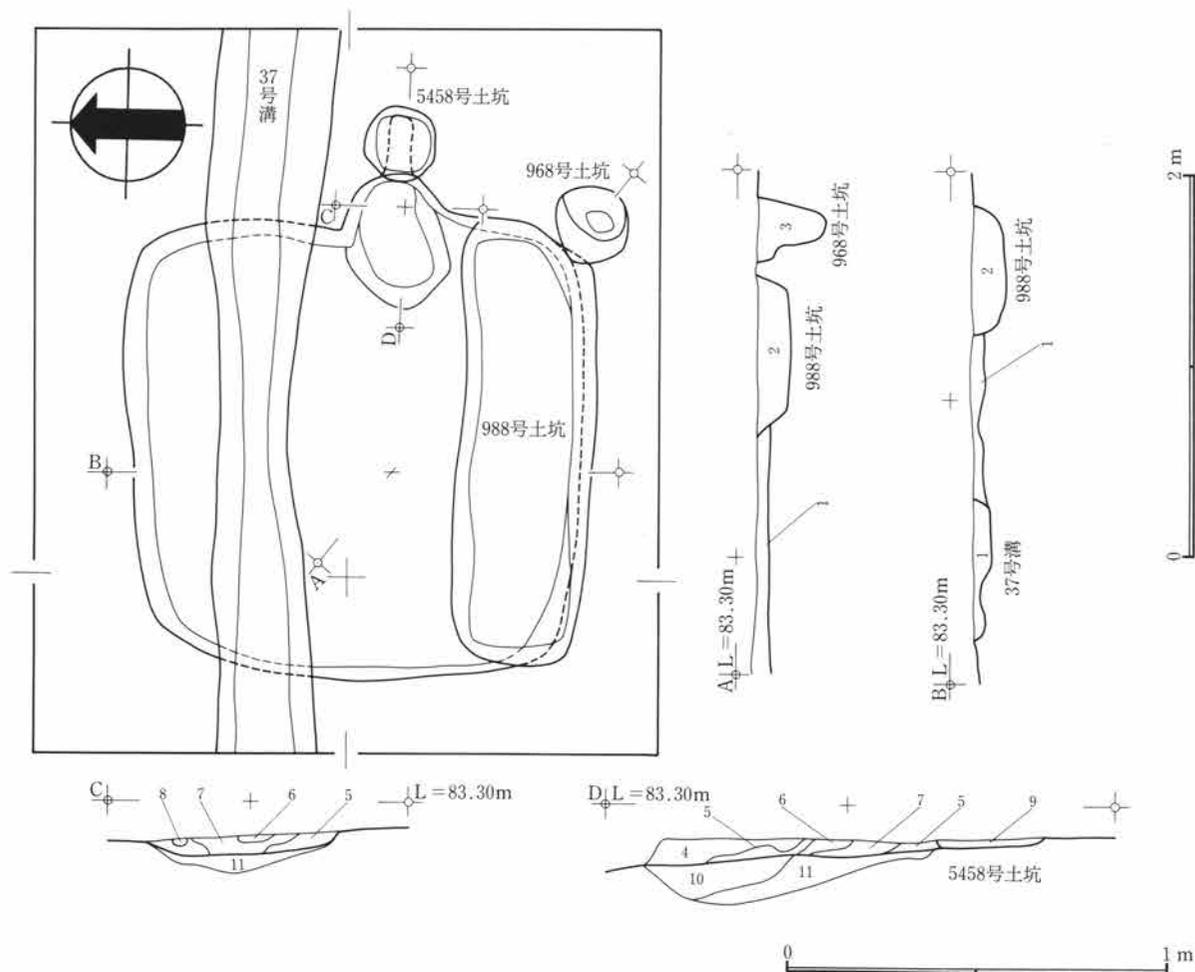
3区59号住居址

遺構 (挿図番号第63図 写真番号P L. 50)

本住居址はK11-32, 33グリッドで検出され、北7.0mに65号住居址、西11.0mに54号住居址が位置する。



第61図 56号住居址(2)竈



第62図 57号住居址

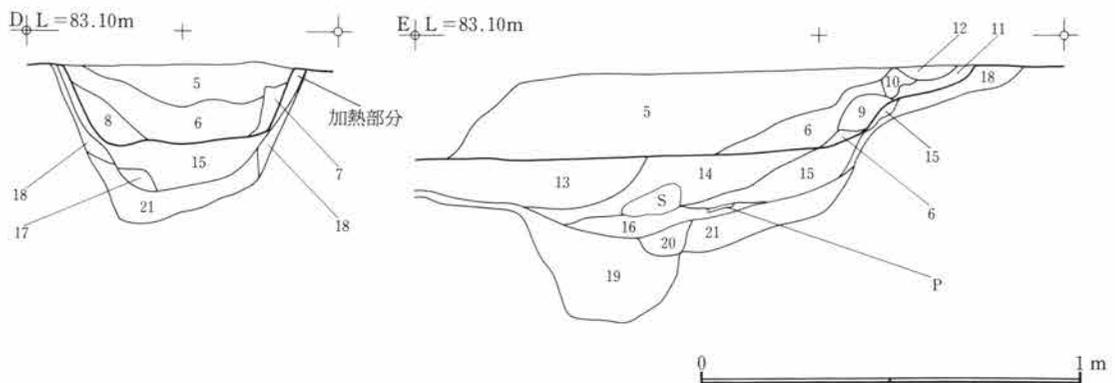
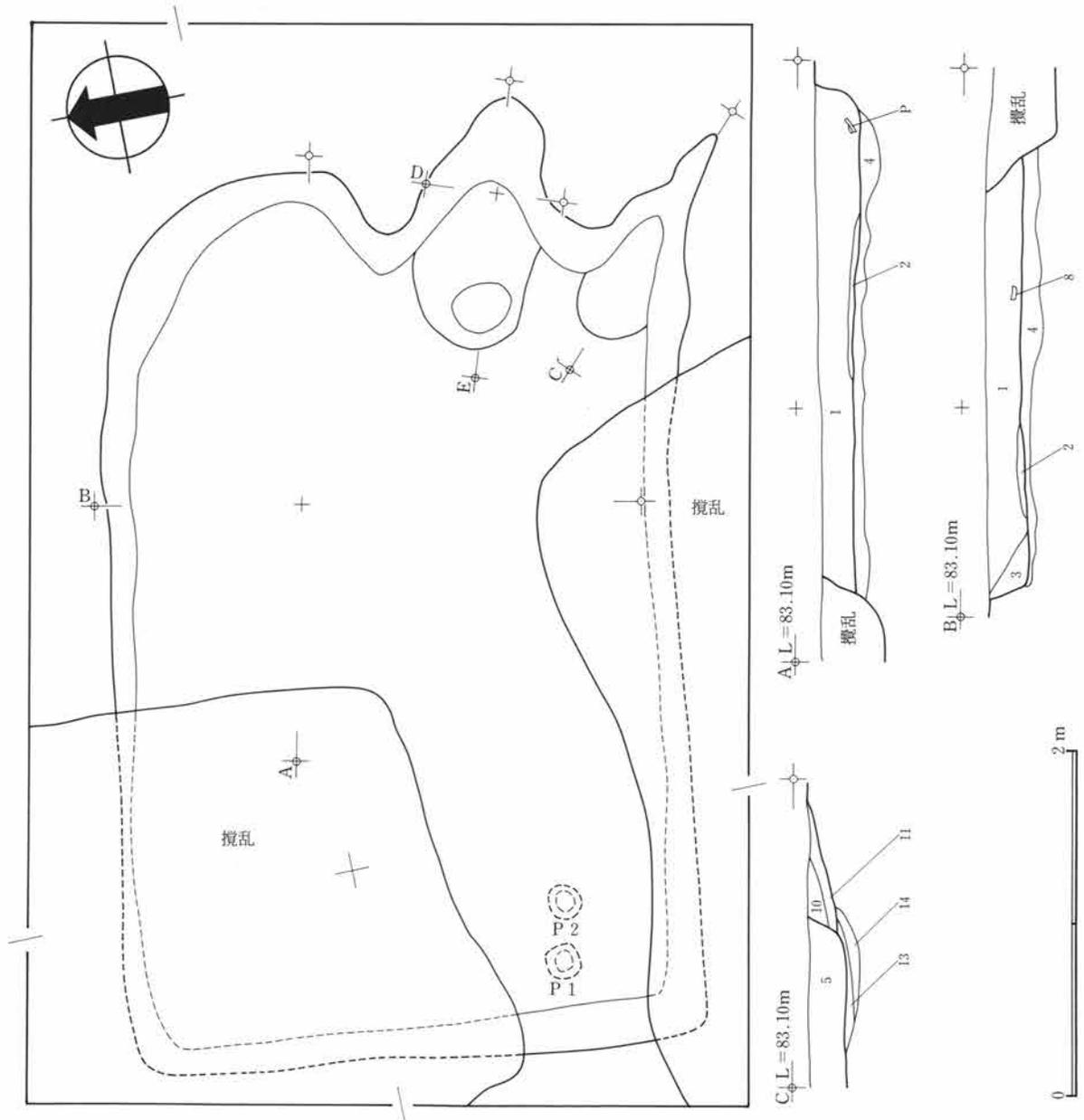
規模は長軸5.20m（推定）・短軸3.35m（推定）、面積17.548㎡である。竈付近から未固結凝灰岩が出土している。主軸方向はN-7°-Eを示している。竈（古）は東壁の中央寄りに付設される。竈全長は92cm、焚き口幅は65cm（推定）である。炉床ピットは長軸100cm・短軸70cm、深さ12cmである。竈（新）は東壁の南東隅に付設される。竈全長は92cm、焚き口幅は75cm（推定）である。炉床ピットは長軸78cm・短軸45cm、深さ11cmである。中央寄りの竈が住居隅に再構築するものが普通と考えていたが、調査の結果は逆となった。

床下ピットのP1は長軸20cm・短軸20cm、深さ15cm、P2は長軸21cm・短軸20cm、深さ5cmである。住居構造と直接関係するものではなさそうである。

遺物（挿図番号第233図 写真番号P L、81）

土師器の甕（240・241・242）・須恵器の高台付皿（243）・須恵器の耳皿（244）を出土している。特に須恵器の耳皿は本遺跡からの出土は珍しい。

その他に土師器4179g、須恵器2019g、灰袖陶器6g、近代瓦78gが出土している。また砥石が1点出土している。材質は粗粒安山岩である。



第63図 59号住居址

3区60号住居址

遺構（挿図番号第64図 写真番号P L. 50）

本住居址はL 7-97・L 8-07グリッドで検出され、南東6.5mに68号住居址、南9.0mに52号住居址が位置する。遺構検出面は全体に浅い。

本住居址の規模は長軸3.70m・短軸3.00m、面積10.592m²である。主軸方向はN-12°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は40cm、焚き口幅は68cm（推定）である。炉床ピットは竈正面に対して左右に横に長く、長軸55cm・短軸23cm、深さ3cmである。竈の遺存は悪い。袖、燃焼部分の構造も明らかでなかった。検出面が浅すぎたことも考えられる。

遺物（挿図番号第233図）

土師器の甕（245・246）・須恵器の高台付坏（247）・須恵器の大壺（248）を出土している。

その他土師器1985g、須恵器735g、中世内耳土器198gが出土している。石帯（巡方）が出土している。住居の埋土からの検出である。

3区61号住居址

遺構（挿図番号第65図 写真番号P L. 50）

本住居址はL 8-47、48グリッドで検出され、北4.0mに62号住居址、南西12.0mに169号住居址が位置する。床下の掘り方は、良好で4箇所に土坑状の掘り込みが検出された。

規模は長軸4.00m・短軸3.90m、面積12.626m²である。竈付近から砂岩が出土している。主軸方向はN-12°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は60cm、焚き口幅は48cm（推定）である。炉床ピットは確認されなかった。床面下の土坑は竈前面から3ヶ所検出された。いずれも不定形で住居構築に直接かかわるものではない。P 1は長軸40cm・短軸30cm、深さ6cm、P 2は長軸107cm・短軸60cm、深さ5cm、P 3は長軸135cm・短軸65cm、深さ6cm、P 4は長軸125cm・短軸70cm、深さ6cmである。

遺物（挿図番号第233図）

土師器の甕（249）・土師器の坏（250・251）・須恵器の蓋（252）・須恵器の坏（253）・須恵器の甕（254）を出土している。

その他に土師器5297g、須恵器1261g、陶器4gが出土している。

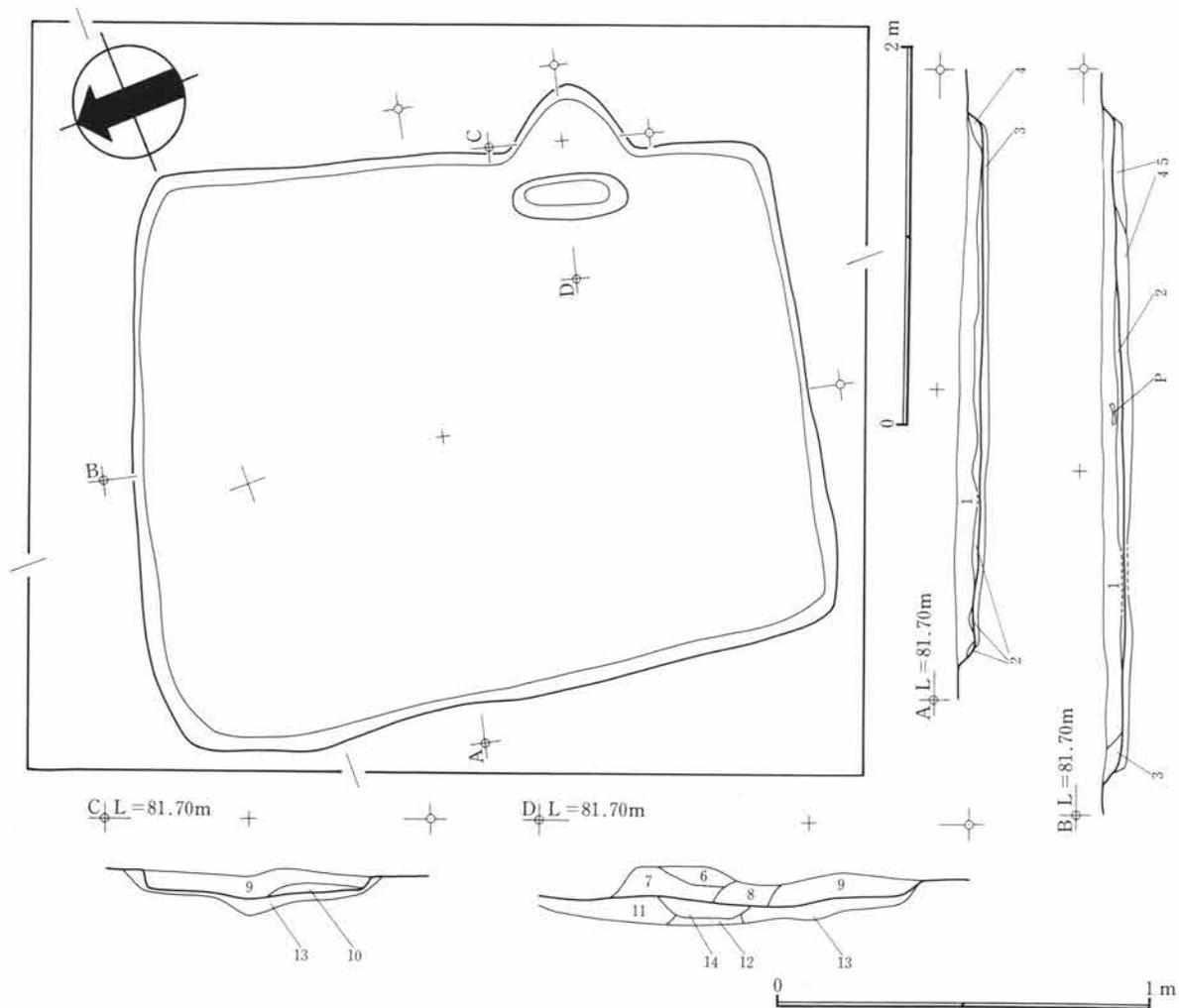
3区62号住居址

遺構（挿図番号第66・67図 写真番号P L. 50）

本住居址はL 8-37、38グリッドで検出され、南4.0mに61号住居址、西7.0mに63号住居址が位置する。主柱穴が4本検出されている。

本住居址の規模は長軸5.50m・短軸4.40m、面積18.576m²である。主軸方向はN-1°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は104cm（推定）、焚き口幅は75cm（推定）である。炉床ピットは長軸55cm・短軸48cm、深さ7cmである。貯蔵穴は長軸62cm・短軸55cm、深さ31cmである。柱穴1は長軸55cm・短軸53cm、深さ37cm、柱穴2は長軸72cm・短軸57cm、深さ44cm、柱穴3は長軸32cm・短軸26cm、深さ26cm、柱穴4は長軸40cm・短軸37cm、深さ22cmである。住居址の形態の良好さにもかかわらず、遺構検出面が浅かったのか、竈の形状は明らかにできなかった。炉床ピットも竈断面図作成時に検出したものである。



第64図 60号住居址

その他に柱穴3の北からと、柱穴4の西から土坑が検出された。P1は長軸50cm・短軸40cm、深さ27cm、P2は長軸87cm・短軸57cm、深さ16cmである。

遺物（挿図番号第234図 写真番号P.L. 89）

須恵器の坏（255）・須恵器の高台付埴（256・257）・須恵器の高坏（258）・灰釉陶器の皿（墨書1）・須恵器の高台付埴（墨書2）を出土している。

その他に土師器2224g、須恵器1508g、陶器133gが出地している。

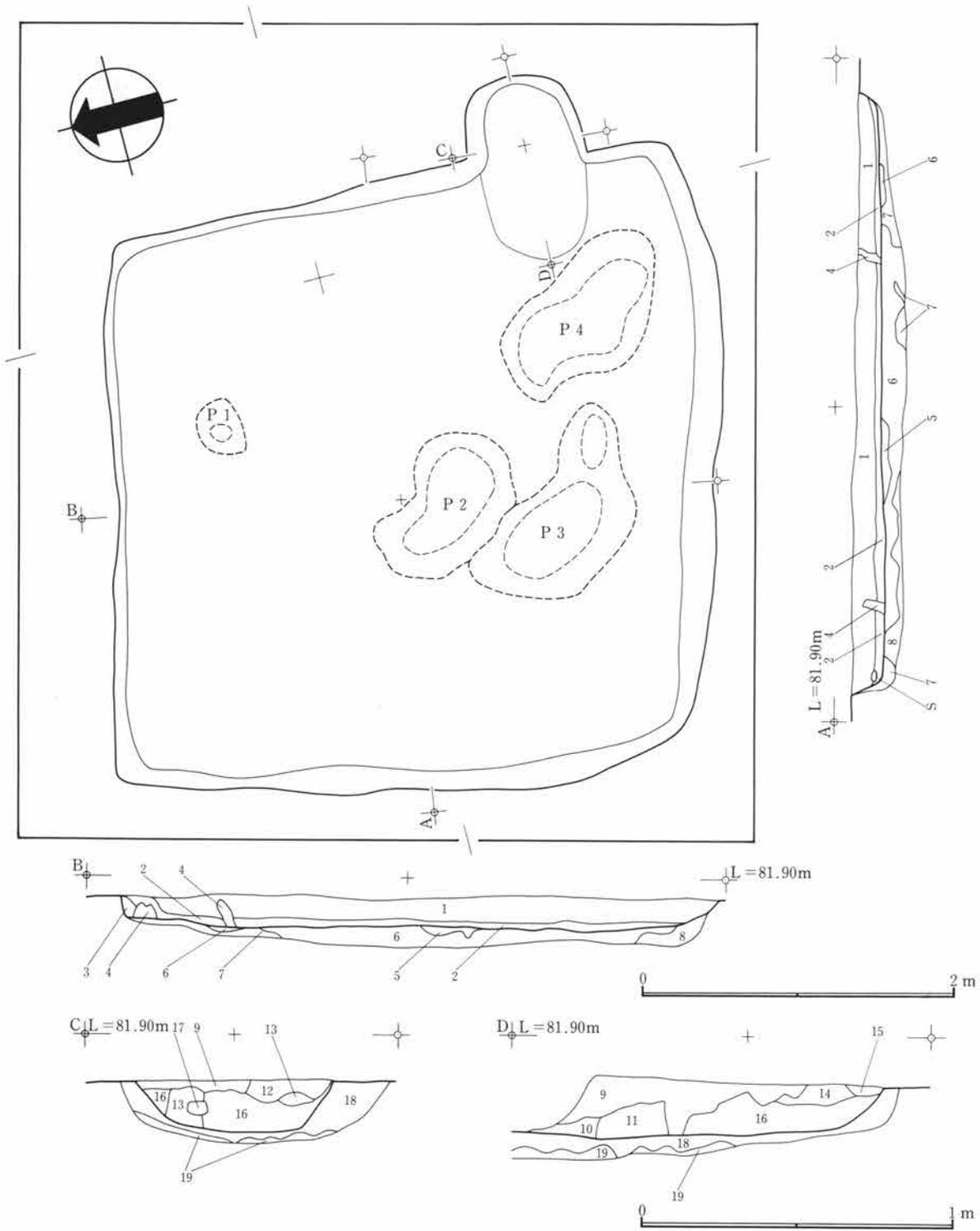
3区63号住居址

遺構（挿図番号第68図 写真番号P.L. 50）

本住居址はL8-36、37グリッドで検出され、東7.0mに62号住居址、西5.0mに76号住居址が位置する。遺構検出面は浅く、竈の構造も明らかにできなかった。竈の右袖側と、左袖側の壁の直線部の違いが気になるところである。

規模は長軸4.60m・短軸4.00m、面積15.528m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は106cm（推定）、焚き口幅は80cm（推定）である。炉床ピットは

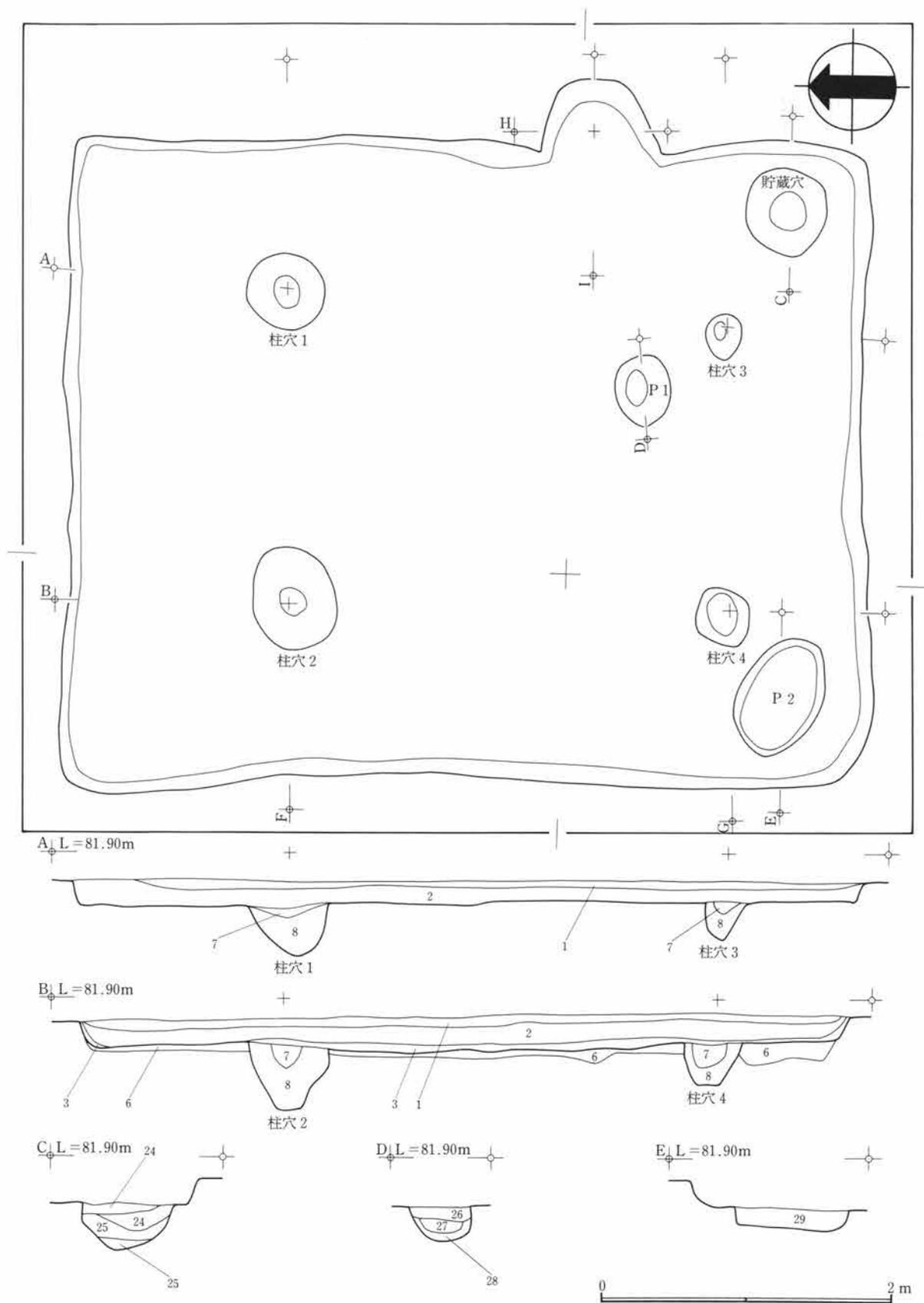


第65図 61号住居址

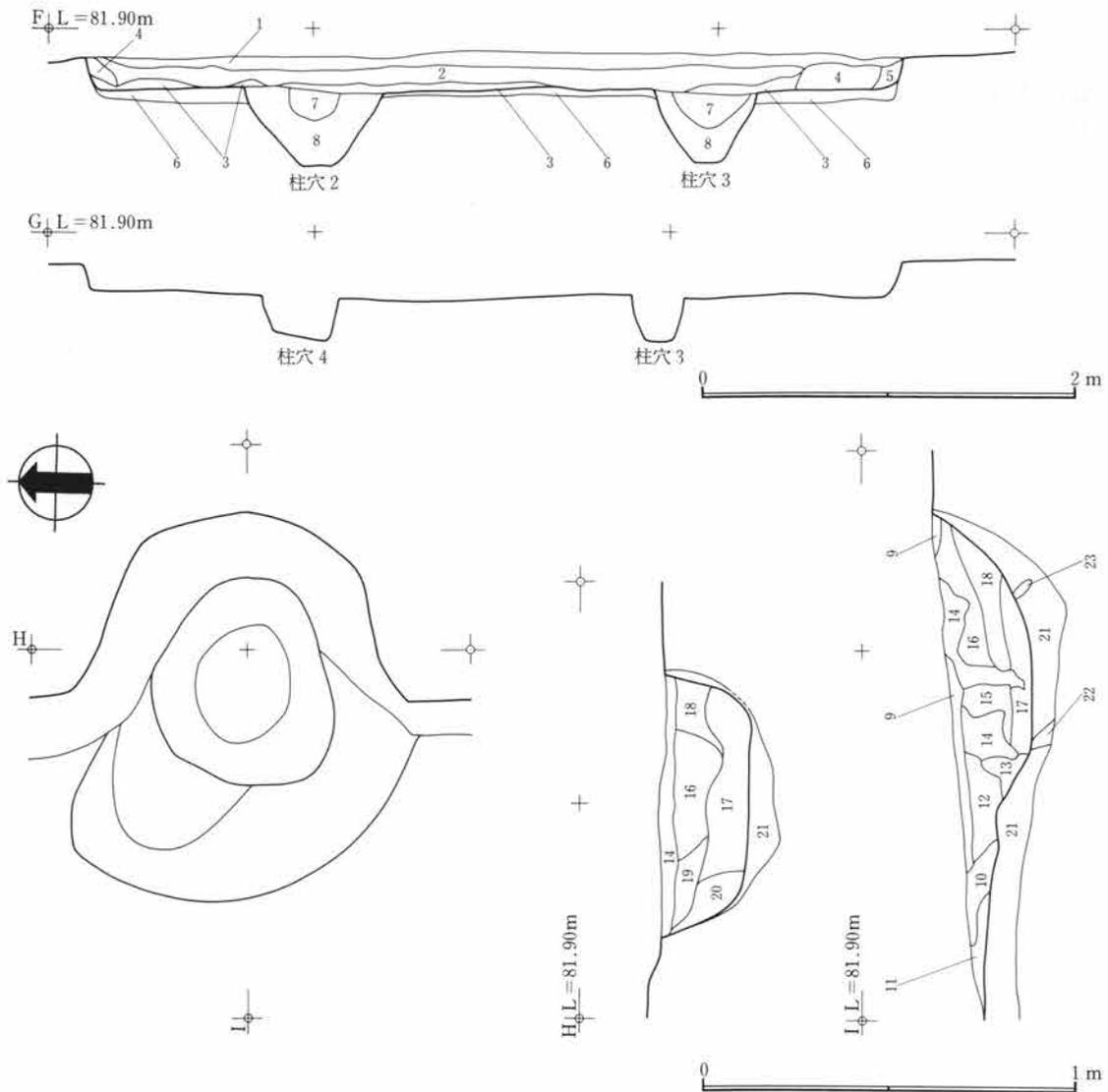
長軸119cm・短軸74cm，深さ12cmである。貯蔵穴は長軸65cm・短軸60cm，深さ22cmである。

遺物（挿図番号第234図）

土師器の甕（259）・土師器の坏（260・261・262・263）・須恵器の長頸壺（264・265）を出土している。特



第66图 62号住居址(1)



第67図 62号住居址(2)

に土師器の坏 (263) は、小形の盤皿状の作品で、類例は本遺跡では少ない。

その他に土師器3433g、須恵器936g、近世瓦1890gが出土している。又砥石が2点出土している。材質は砥沢石と凝灰質砂岩である。

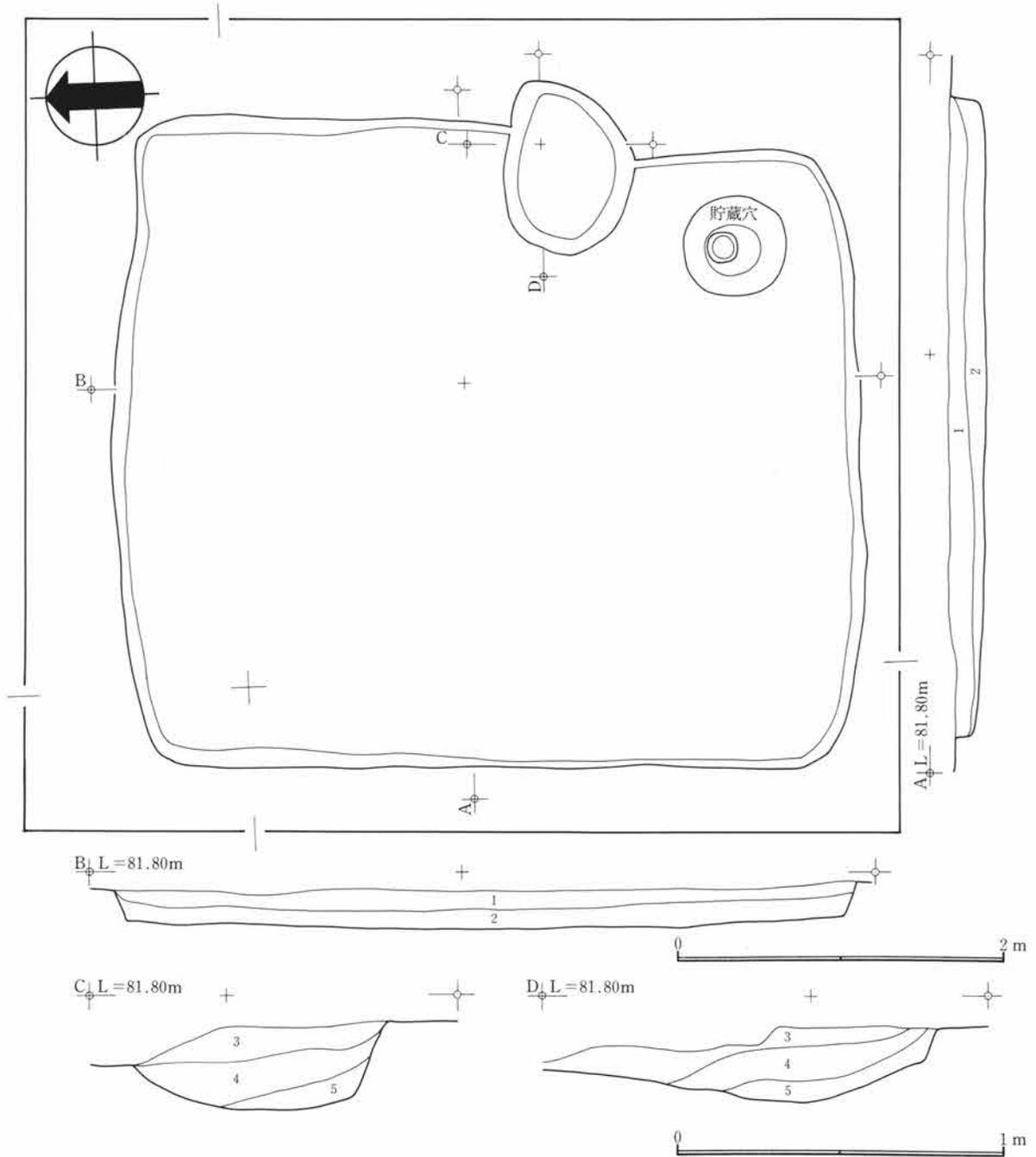
3区64号住居址

遺構 (挿図番号第69図 写真番号P L. 50)

本住居址はL 8-26, 36グリッドで検出され、南東6.0mに63号住居址が位置する。本住居址の南西隅の75号住居址を切っている。

規模は長軸2.90m・短軸2.60m, 面積7.328㎡である。主軸方向はをNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は53cm (推定), 焚き口幅は60cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。検出面が浅かったためか、竈構造を明確にすることができなかった。

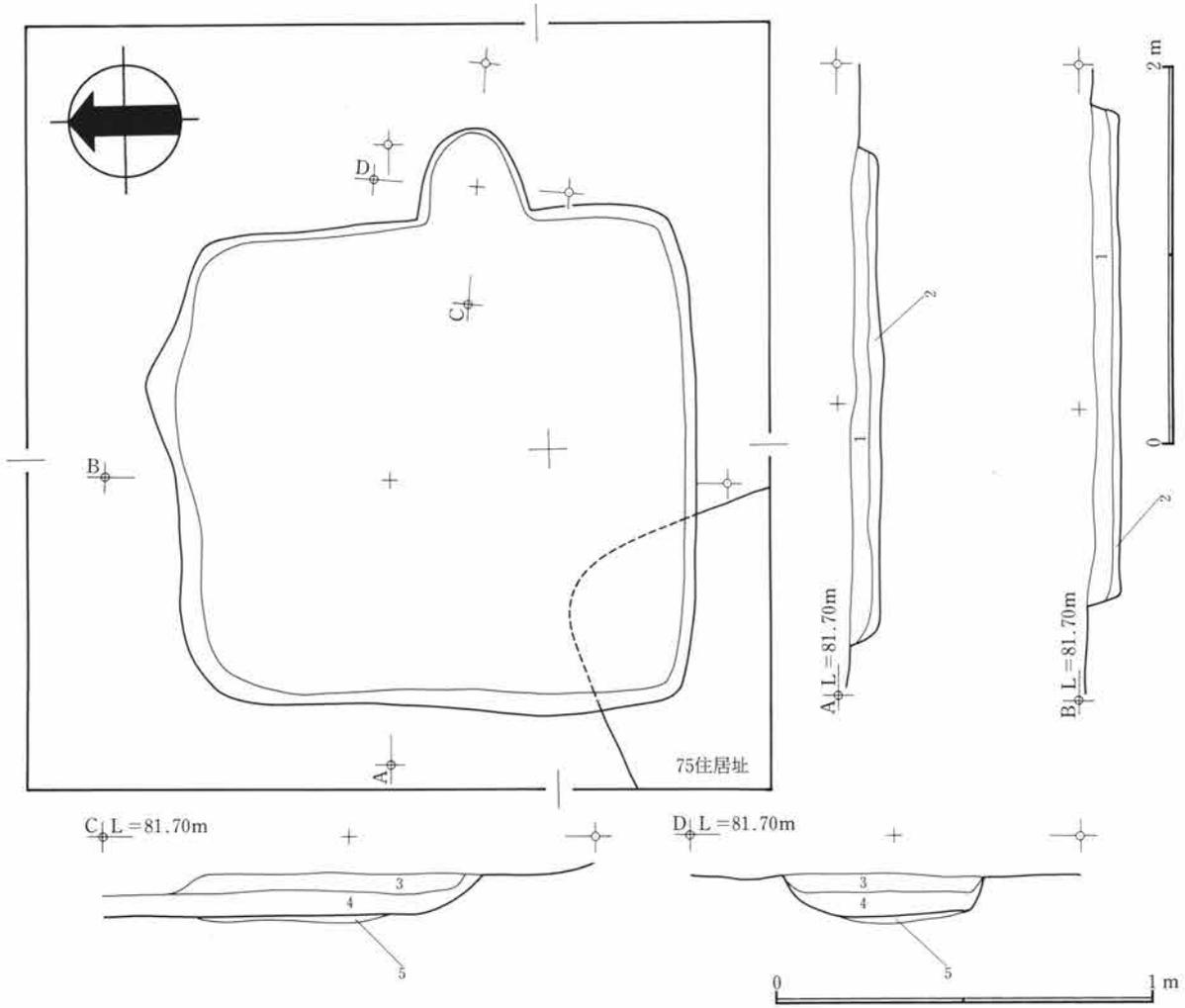


第68図 63号住居址

遺物 (挿図番号第234図 写真番号P L. 82)

土師器の甕 (266)・土師器の坏 (267)・須恵器の坏 (268) を出土している。特に土師器の坏の胎土は須恵質を思わせ、しまって重い。篋による磨きは荒く、稚拙である。

その他に土師器128g、須恵器15gが出土している。



第69図 64号住居址

第II章 遺 跡

3区65号住居址

遺構 (挿図番号第70図)

本住居址はK11-22, 23グリッドで検出され、西14.0mに98号住居址、南7.0mに59号住居址が位置する。規模は長軸3.60m・短軸3.00m, 面積10.136㎡である。竈付近から末国結凝灰岩が出土している。主軸方向はN-13°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は73cm(推定), 焚き口幅は70cm(推定)である。炉床ピットは長軸30cm・短軸27cm, 深さ7cmである。P1は長軸40cm・短軸35cm, 深さ7cm, P2は長軸75cm・短軸70cm, 深さ10cm, P3は長軸35cm・短軸30cm, 深さ20cm, P4は長軸43cm・短軸25cm, 深さ13cmである。

遺物 (挿図番号第235図)

羽釜(269)・土師器の坏(270)・須恵器(271・272・273)を出土している。

その他に土師器1656g、須恵器2369gが出土している。

3区66号住居址

遺構 (挿図番号第71・72図)

本住居址はK10-19, 29グリッドで検出され、北8.0mに167号住居址、南8.0mに168号住居址が位置する。規模は長軸4.70m・短軸4.60m, 面積18.228㎡である。主軸方向はN-8°-Eを示している。

竈(新)は東壁の右寄りに付設される。竈全長は146cm, 竈幅は109cm, 燃焼部長さは65cm, 焚き口幅は50cm, 煙道部長さは81cm, 煙道部幅は36cmである。炉床ピットは長軸30cm・短軸28cm, 深さ16cmである。

竈(古)は南壁の右寄りに付設される。竈全長は160cm(推定), 燃焼部長さは90cm(推定), 焚き口幅は40cm(推定), 煙道部長さは70cm, 煙道部幅は35cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第235・236・237図 写真番号P.L. 82・83)

土師器の甕(274・275・276・277)・土師器の甕の脚部(278・279)・土師器の坏(280・281・282・283・284・285・286・287・288・289・290・291・292・293)・土師器の鉢(294)・土師器のふいご(295)・須恵器の甕(296・297)・須恵器の蓋(298・299・300・301・302・303・304・305)・須恵器の高台付盤(306・307・308)を出土している。

その他に土師器3880g、須恵器18688gが出土している。本住居址からは鉄製品が出土した。製品名は刀子である。

3区67号住居址

遺構 (挿図番号第73図 写真番号P.L. 51)

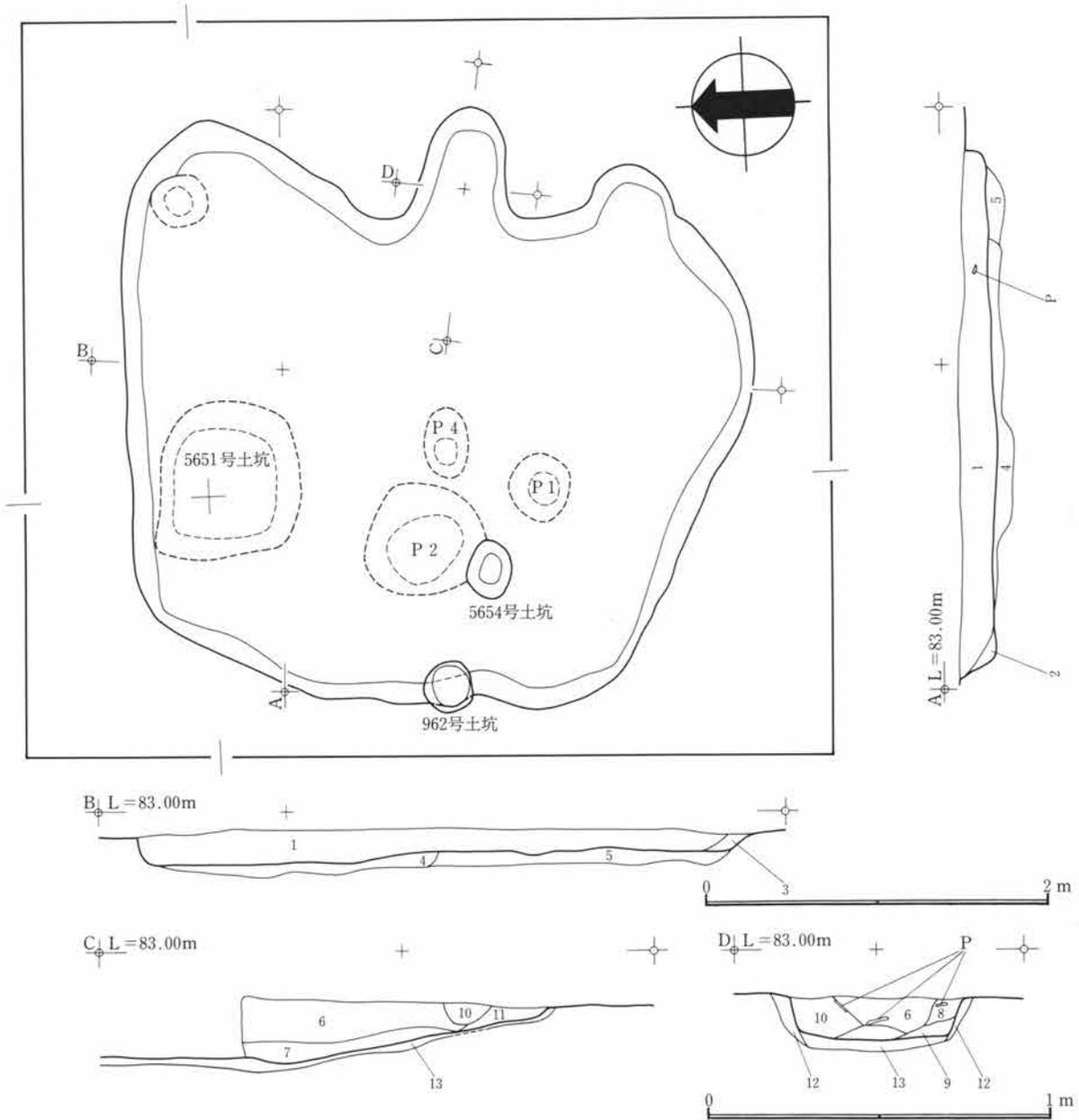
本住居址はL8-18, 28グリッドで検出され、西7.0mに52号住居址、北東7.0mに71号住居址が位置する。本住居址の竈左袖部分は565号土坑によって切られている。

規模は長軸3.70m・短軸2.85m, 面積10.242㎡である。主軸方向はN-2°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は135cm(推定), 燃焼部長さは105cm(推定), 焚き口幅は45cm, 煙道部長さは30cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第237図)

土師器の甕(319)・須恵器の坏(320)を出土している。その他に土師器289g、須恵器207gが出土している。



第70図 65号住居址

3区68号住居址

遺構 (挿図番号第74図 写真番号P L. 51)

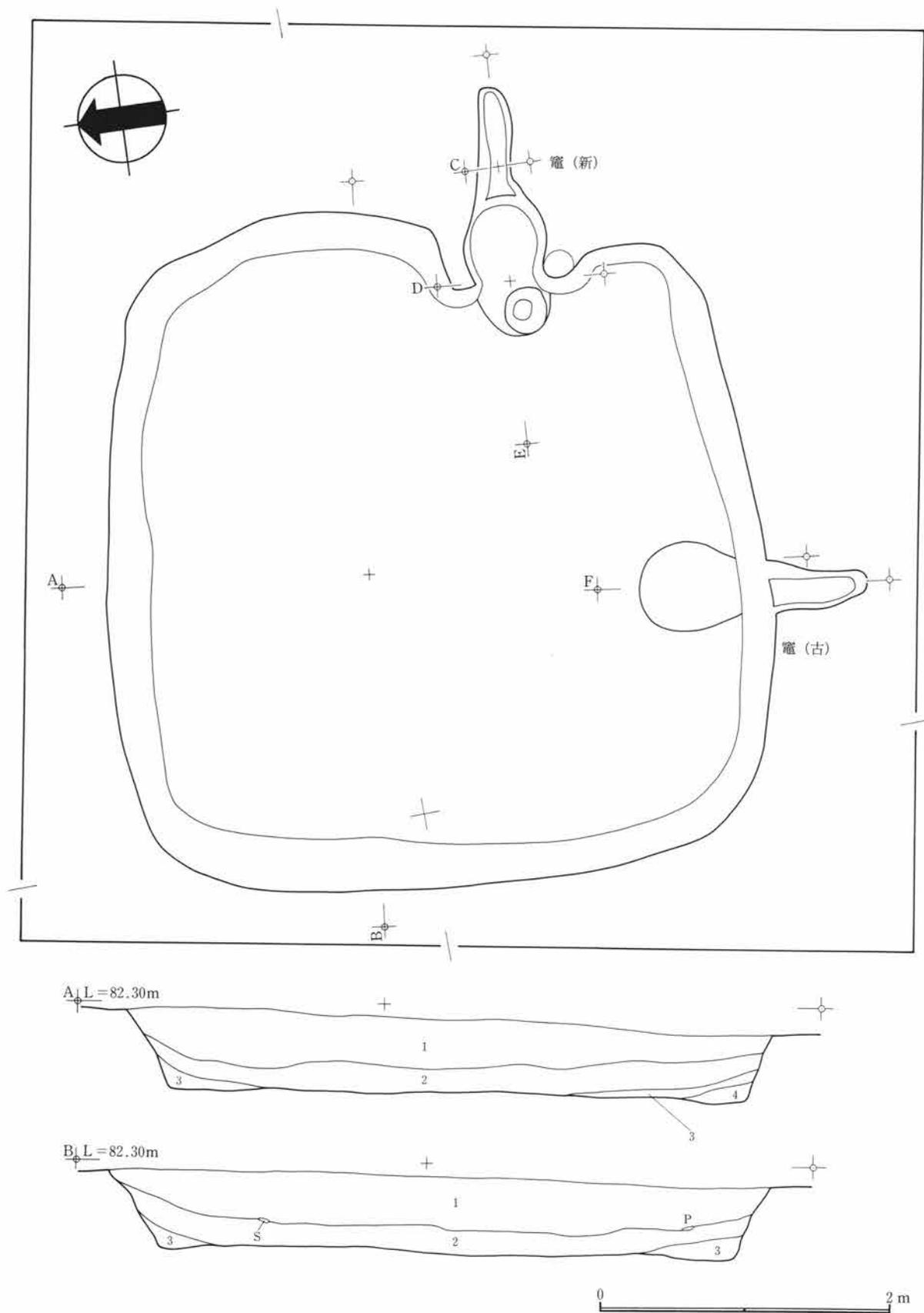
本住居址はL 8-08グリッドで検出され、西7.0mに60号住居址、南東5.0mに71号住居址が位置する。本住居址の東壁部竈があったと考えられる部分は14号溝によって切られている。

規模は長軸4.05m (推定)・短軸3.95m、面積15.520㎡である。竈付近から未固結凝灰岩が出土している。主軸方向はN-9°-Eを示している。

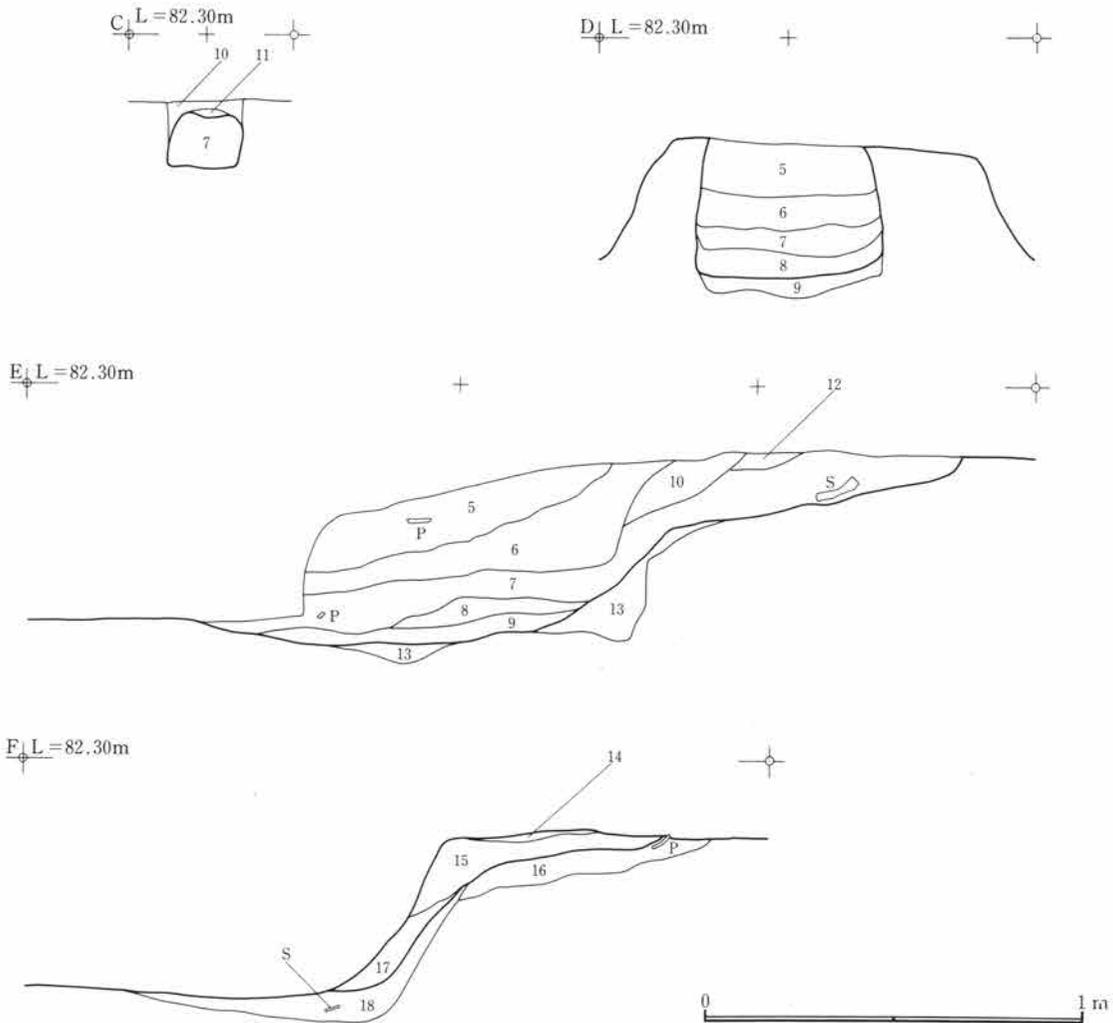
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は80cm (推定)、焚き口幅は90cm (推定) である。

遺物 (挿図番号第238図)

土師器の甕 (321)・須恵器の大壺 (322)・高台付埴 (323)・坏 (324・325) を出土している。



第71図 66号住居址(1)



第72図 66号住居址(2)竈

その他に土師器890g、須恵器1275gが出土している。

3区69号住居址

遺構 (挿図番号第75図)

本住居址はL 8-28, 38グリッドで検出され、北8.0mに67号住居址が位置する(70住と重複)。規模は長軸4.50m・短軸3.15m(推定)、面積9.952m²である。主軸方向はN-9°-Wを示す。竈は確認されない。

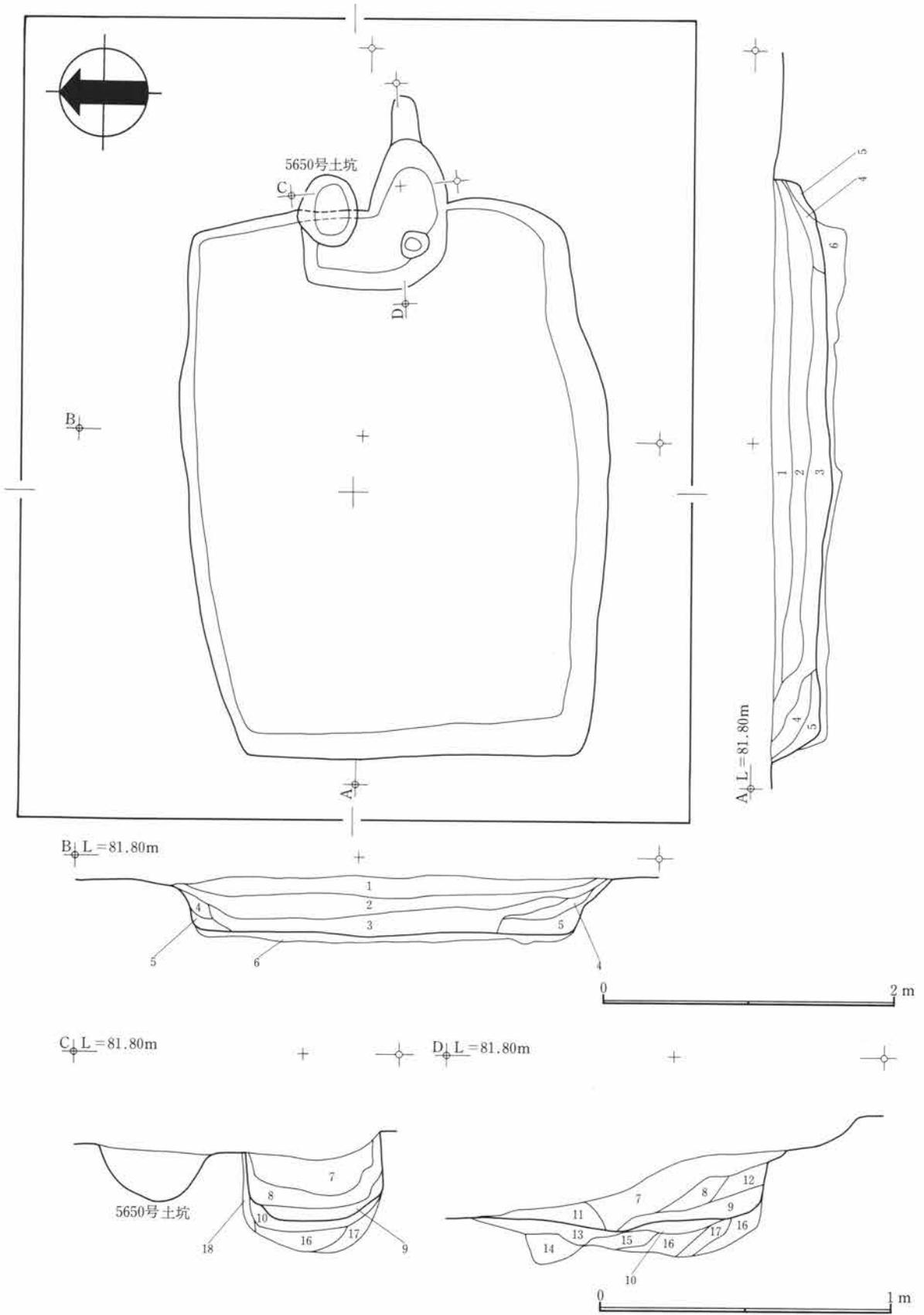
遺物 (挿図番号第238図 写真番号P L, 83)

土師器の甕(326・327)・土師の坏(328・329・330・331・332・333)・須恵器の甕(334)・須恵器の蓋(335)・須恵器の坏(336)・須恵器の盤(337)を出土している。

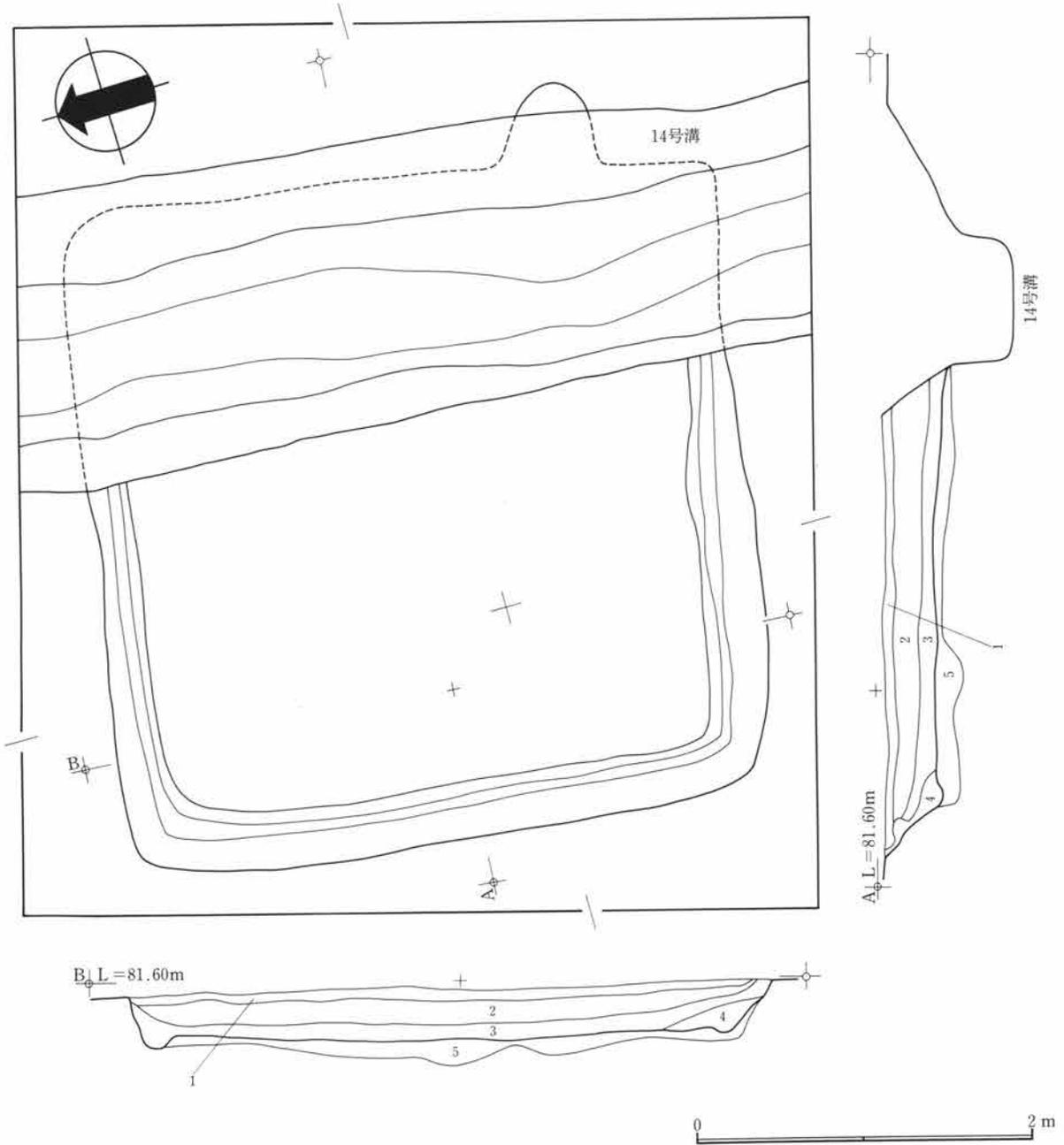
その他に土師器8705g、須恵器1677gが出土している。

3区70号住居址

遺構 (挿図番号第75図)



第73图 67号住居址



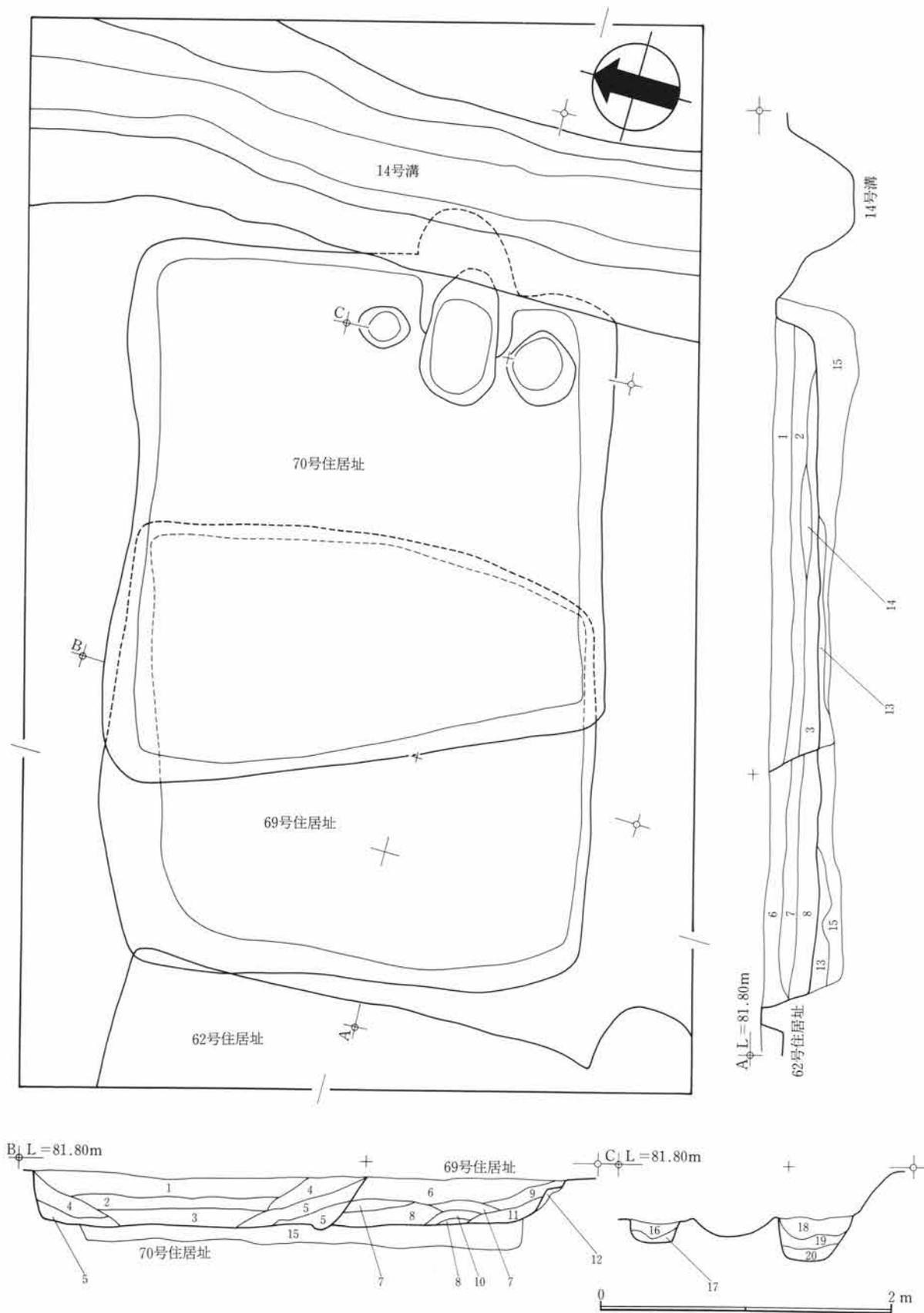
第74図 68号住居址

本住居址はL 8-28, 38グリッドで検出され、西5.0mに62号住居址が位置する。規模は長軸3.60m(推定)・短軸3.27m(推定)、面積11.666㎡である。主軸方向はN-15°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は95cm(推定)、焚き口幅は50cm(推定)である。炉床ピットは長軸95cm・短軸51cm、深さ15cmである。貯蔵穴は長軸52cm・短軸50cm、深さ26cmである。P 1は長軸35cm・短軸29cm、深さ13cmである。

遺物 (挿図番号第239図)

土師器の坏(338)を出土している。その他に土師器206g、須恵器208gが出土している。



第75图 69・70号住居址

3区71号住居址

遺構 (挿図番号第76図 写真番号P L. 51)

本住居址はL 8—08, 09, 18, 19グリッドで検出され、北西5.0mに68号住居址、南西7.5mに67号住居址が位置する。規模は長軸3.85m(推定)・短軸2.70m、面積10.126m²である。主軸方向はN—5°—Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は83cm、燃焼部長さは55cm、焚き口幅は50cm(推定)、煙道部長さは28cm、煙道部幅は18cmである。竈付近から未固結凝灰石が出土している。炉床ピットは長軸35cm・短軸29cm、深さ4cmである。貯蔵穴は長軸40cm・短軸35cm、深さ10cmである。柱穴1は長軸60cm・短軸50cm、深さ17cm、柱穴2は長軸43cm・短軸39cm、深さ16cm、柱穴3は長軸67cm・短軸50cm、深さ14cm、柱穴4は長軸35cm・短軸30cm、深さ15cmである。

遺物 (挿図番号第239図)

土師器の甕 (339)・須恵器の高台付埴 (340・341) を出土している。

その他に土師器1070g、須恵器210gが出土している。

3区72号住居址

遺構 (挿図番号第77図 写真番号P L. 51)

本住居址はM 8—60グリッドで検出され、北東12.0mに17号住居址、南西10.0mに177号住居址が位置する。規模は長軸3.28m・短軸2.83m、面積8.846m²である。主軸方向はN—9°—Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は136cm、竈幅は120cm、燃焼部長さは70cm、焚き口幅は50cm、煙道部長さは66cm、煙道部幅は32cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第239図 写真番号P L. 83)

土師器の甕 (342・343)・須恵器の坏 (344)・土師器の坏 (345・346・347) を出土している。

その他に土師器3200g、須恵器210g、縄文土器1片が出土している。

3区74号住居址

遺構 (挿図番号第78図)

本住居址はK 11—07, 08グリッドで検出され、北東5.0mに101号住居址、南西9.0mに108号住居址が位置する。規模は長軸4.20m(推定)・短軸4.10m(推定)、面積16.544m²である。主軸方向はN—15°—Eを示している。竈は確認されなかった。

遺物 (挿図番号第239図)

須恵器の壺 (349)・須恵器の坏 (350)・須恵器の高台付埴 (351・352) を出土している。

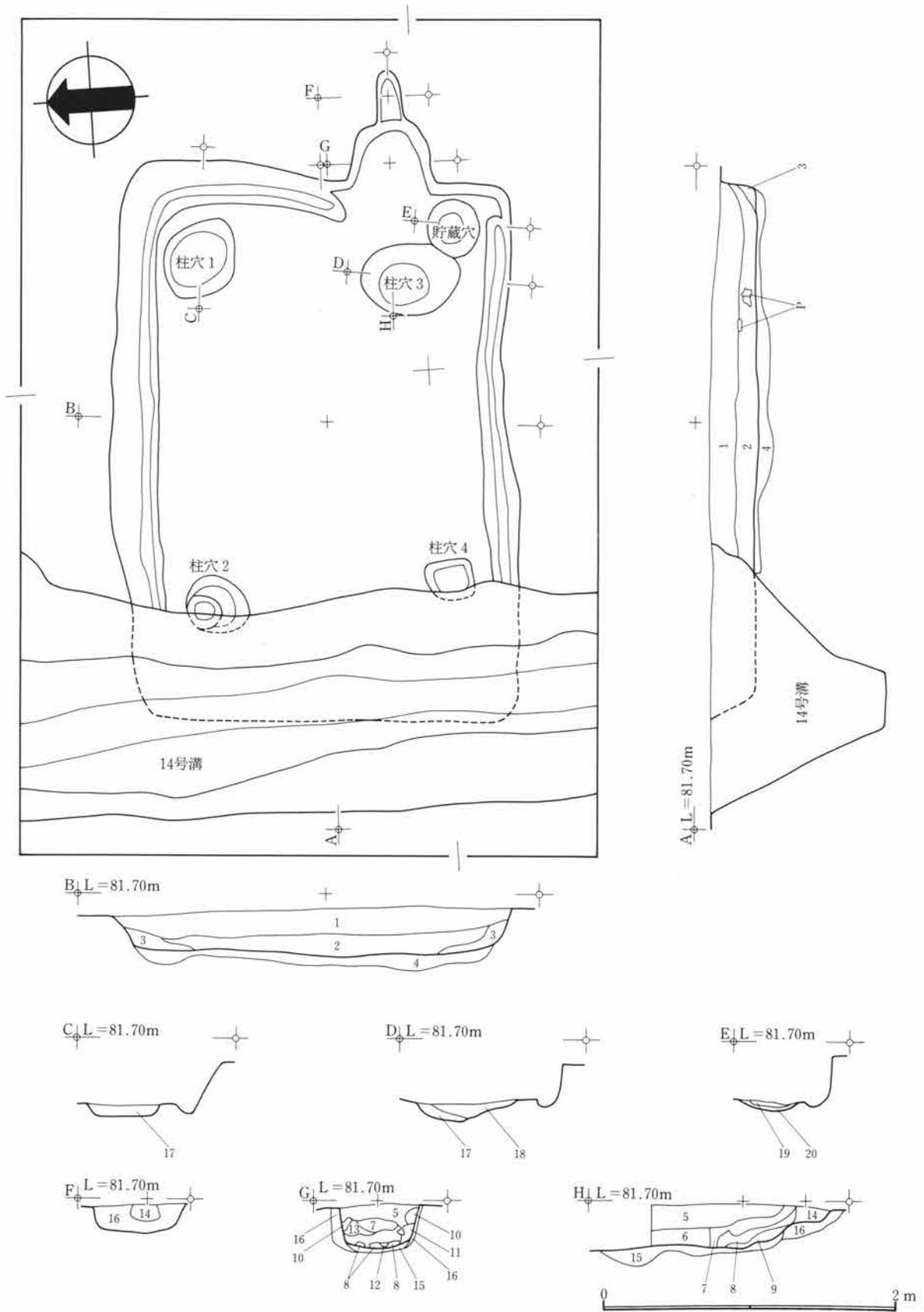
その他に縄文土器1片、土師器384g、須恵器962g、中世陶器が980gが出土している。

3区75号住居址

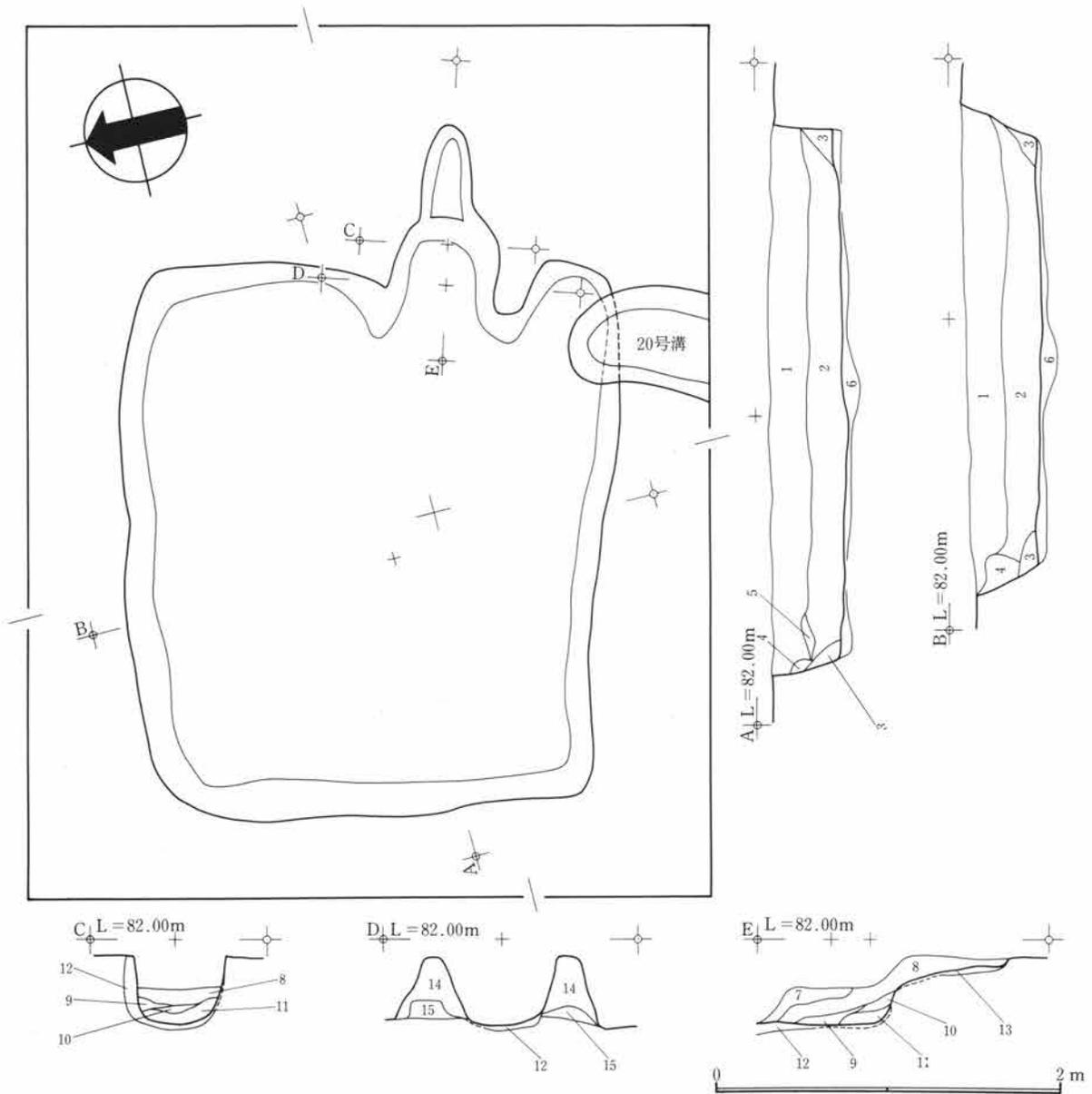
遺構 (挿図番号第79図 写真番号P L. 51)

本住居址はL 8—35, 36グリッドで検出され、東6.0mに63号住居址が位置する(64、76住と重複)。規模は長軸3.63m・短軸2.90m、面積10.380m²である。主軸方向はN—24°—Wを示す。竈は東壁の南東寄りに付設される。竈全長は32cm(推定)、焚き口幅は45cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第239図)



第76図 71号住居址



第77図 72号住居址

土師器の坏 (353・354)・須恵器の坏 (355) を出土している。

その他に土師器157g、須恵器10g、中世陶器36gが出土している。

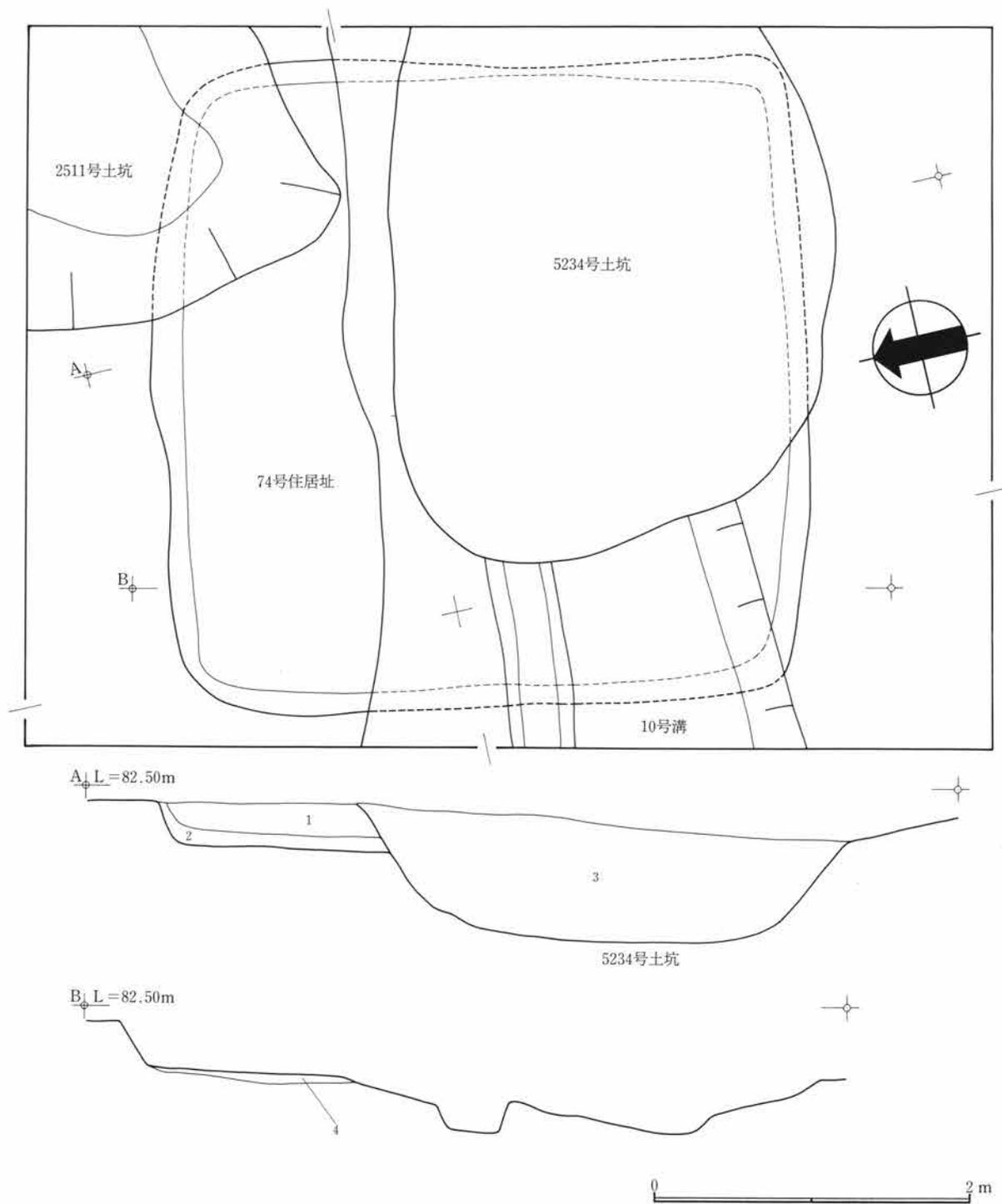
3区76号住居址

遺構 (挿図番号第79図)

本住居址はL 8-36グリッドで検出され、東5.0mに63号住居址が位置する(75住と重複)。規模は長軸3.50m(推定)・短軸2.95m(推定)、面積10.360 m^2 である。主軸方向はN-3°-Eを示す。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は140cm(推定)、焚き口幅は60cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第240図)

土師器の坏 (356・357) を出土している。

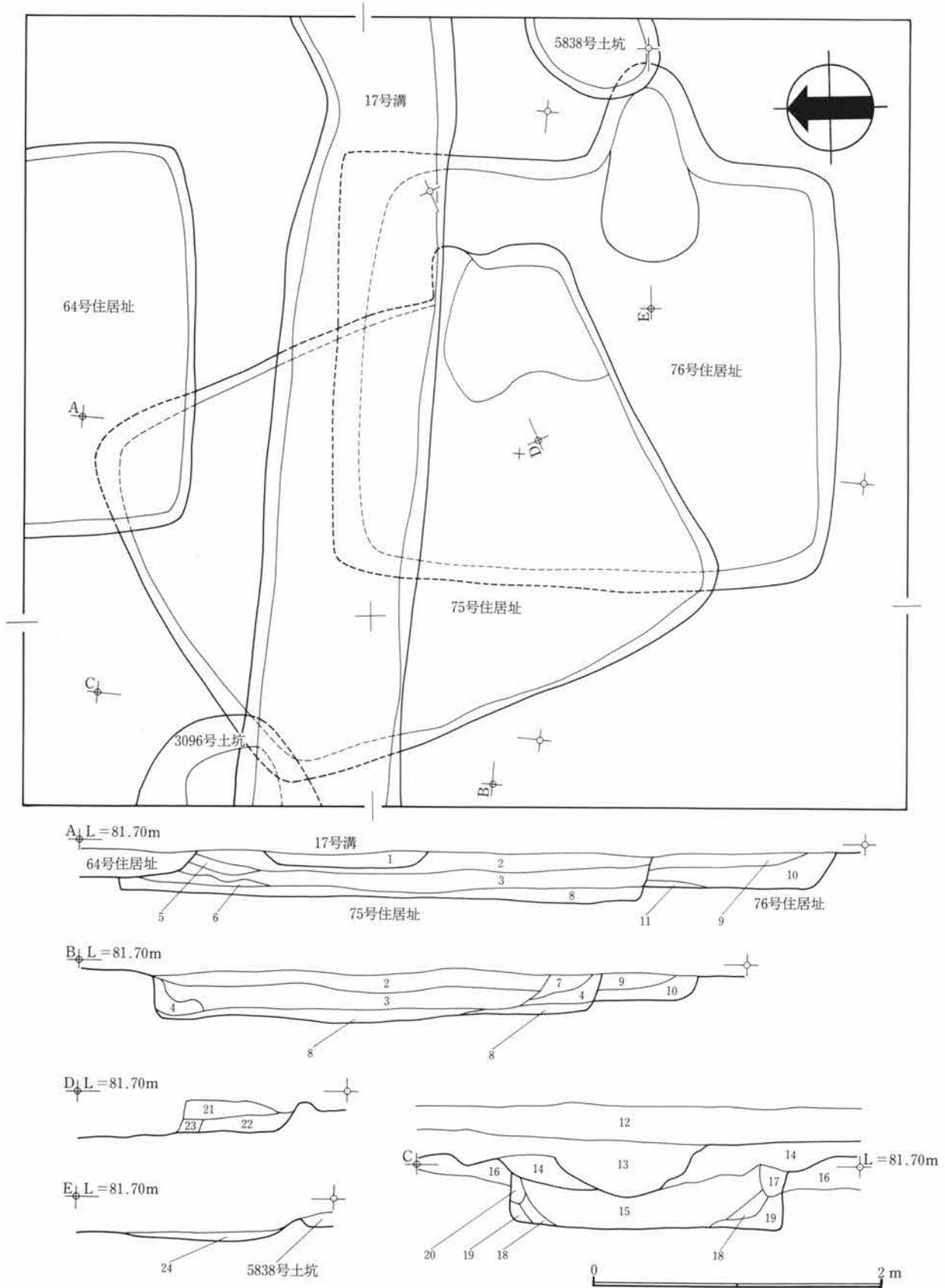


第78図 74号住居址

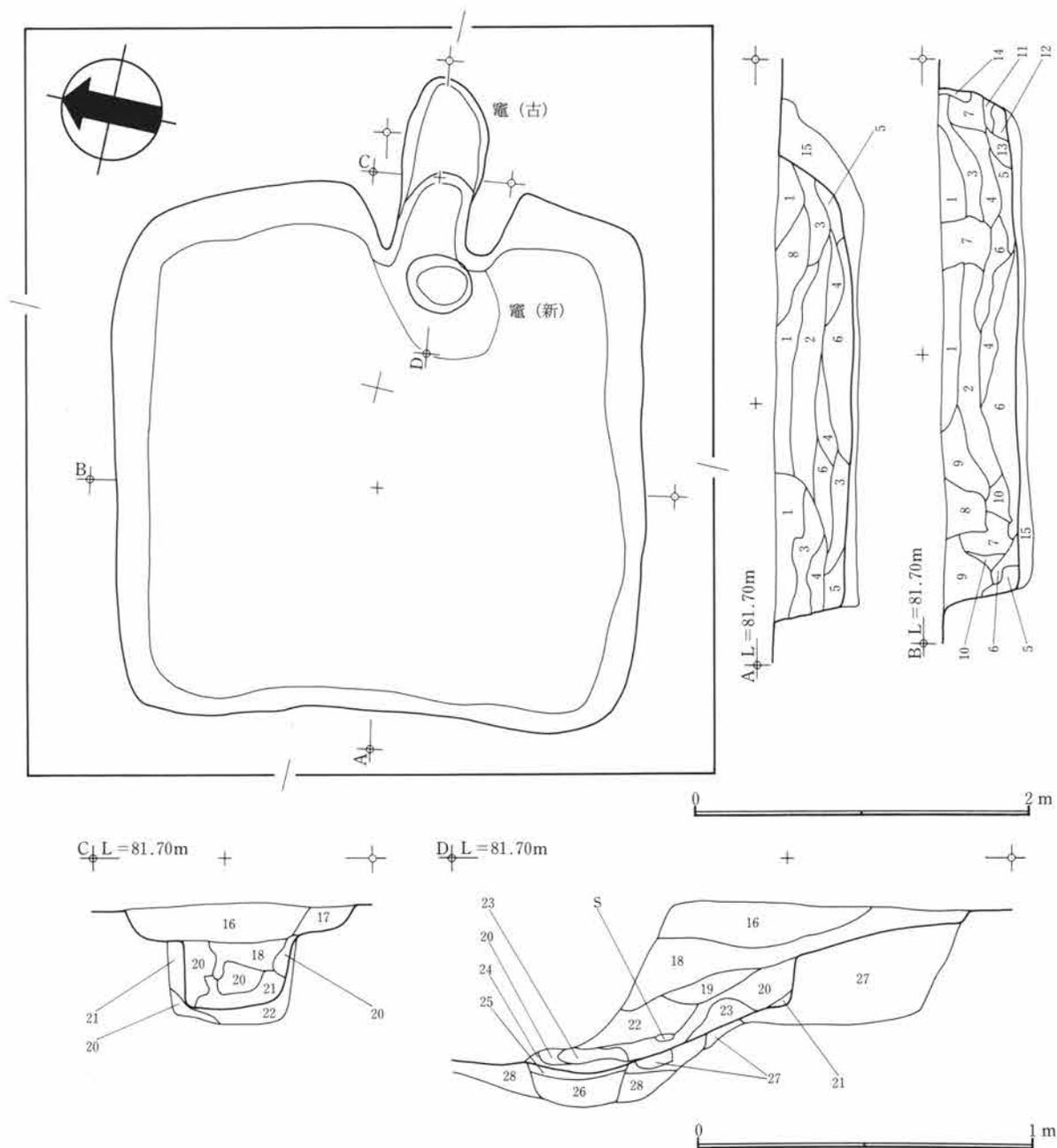
その他に土師器610g、須恵器56g、中世内耳土器670g、中世陶器225gが出土している。
本住居では鉄製品が出土している。形態は棒状である。

3区77号住居址

遺構 (挿図番号第80図 写真番号P L. 51)



第79図 75・76号住居址



第80図 77号住居址

本住居址はL 8-39, 49グリッドで検出され、南西13.0mに61号住居址、北9.0mに16号住居址が位置する。規模は長軸3.15m・短軸3.10m、面積9.776㎡である。主軸方向はN-11°-Wを示している。

竈が同一箇所为重掲している。

竈（新）は東壁の右寄りに付設される。竈全長は58cm、竈幅は80cm、焚き口幅は47cmである。炉床ピットは長軸38cm・短軸32cm、深さ19cmである。竈（古）は同じく東壁の右寄りに付設される。竈全長は90cm（推定）、焚き口幅は65cm（推定）である。炉床ピットは確認されなかった。

本住居址からは縄文時代に属すると考えられる石器のフレイク1片のみが出土した。土器の出土は全くなかった。

3区78号住居址

遺構 (挿図番号第81図)

本住居址はM7-36, 37, 46, 47グリッドで検出され、北西30.0mに1号住居址、南西37.0mに8号住居址が位置する。規模は長軸3.90m・短軸3.70m、面積13.460m²である。主軸方向はN-8°-Eを示している。

本住居址の西側は5253号土坑によって切られている。また、東壁に付設する竈の燃焼部から先は、発掘調査区域外であるため、住居形態は復元部分が多くなった。

竈は東壁の南東に付設される。竈全長は70cm (推定)、焚き口幅は100cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第240図 写真番号P.L. 89)

須恵器の甕 (358)・蓋 (359・561)・坏 (360・362・363)・高台付塊 (364)・須恵器の坏 (墨書3) を出土している。

その他に土師器485g、須恵器2164gが出土している。

3区79号住居址

遺構 (挿図番号第82・83図)

本住居址はJ12-05, 06, 15, 16, 25, 26グリッドで検出され、南29.0mに99号住居址、北西15.0mに84号住居址が位置する。本住居址は本遺跡でも古式の形態である。4本の支柱穴、四周の周溝を残す。本住居址の規模は長軸6.50m・短軸6.40m、面積40.930m²である。主軸方向はN-40°-Wを示している。竈 (新) は南西壁の左寄りに付設される。竈全長は185cm、竈幅は150cm、燃焼部長さは65cm、焚き口幅は53cm、煙道部長さは120cm、煙道部幅は35cmである。竈 (古) は北西壁の右寄りに付設される。竈全長は147cm、竈幅は103cm、燃焼部長さは36cm、焚き口幅は45cm、煙道部長さは110cm、煙道部幅は30cmである。両竈とも炉床ピットは確認されなかった。竈の本体が住居址内に入る形態である。貯蔵穴は長軸60cm・短軸53cm、深さ23cmである。

柱穴1は長軸62cm・短軸59cm、深さ29cm、柱穴2は長軸75cm・短軸68cm、深さ27cm、柱穴3は長軸55cm・短軸50cm、深さ33cm、柱穴4は長軸55cm・短軸50cm、深さ32cmである。貯蔵穴の貧弱さが目立つ。炭化物の出土からそう考えたが、違うのかもしれない。

遺物 (挿図番号第240図 写真番号P.L. 83)

土師器の甕 (365・366)・脚部 (367)・坏 (368~371)・甗 (372)・須恵器の甗 (373)・高坏 (375)・高台付塊 (376)・坏 (377) を出土している。特に土師器の甗は鉢形の器形を想定させ8箇の穴を穿つ。また、須恵器の甗は底部の抜けたもので、簧子を支える受木が、未貫通のまま、内面に残る。

その他に本住居址からは土師器12.818kg、須恵器3.522kgが出土している。

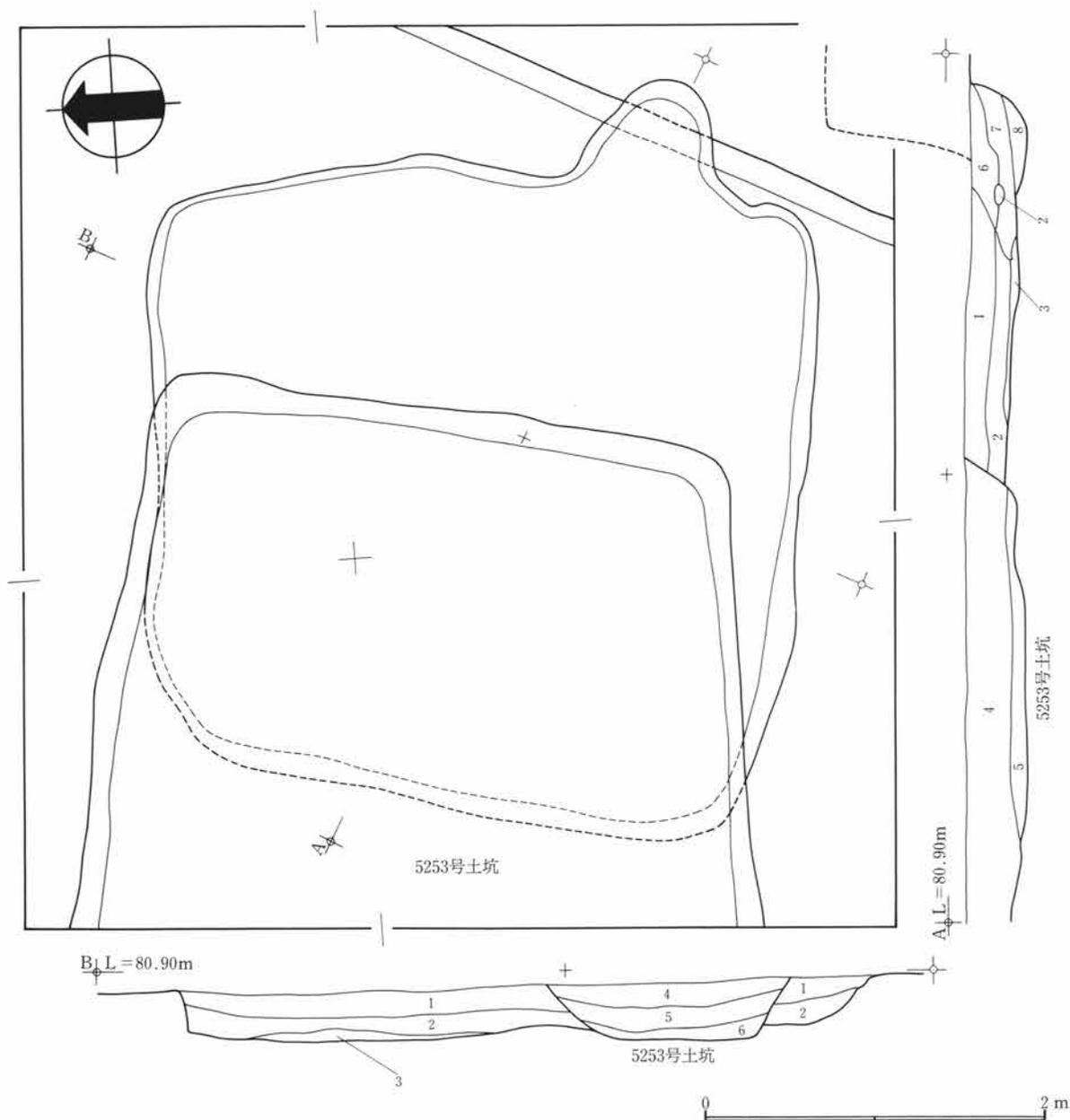
本住居では鉄製品が出土している。製品名は鏃である。

3区80号住居址

遺構 (挿図番号第84・85図 写真番号P.L. 51)

本住居址はJ12-03グリッドで検出され、北10.0mに81号住居が位置する。本住居址は84号住居址を切っている。

規模は長軸4.50m・短軸3.50m、面積15.652m²である。主軸方向はN-27°-Wを示している。



第81図 78号住居址

住居の壁際に同溝が巡る。完周せず北西隅の一部が切られている。

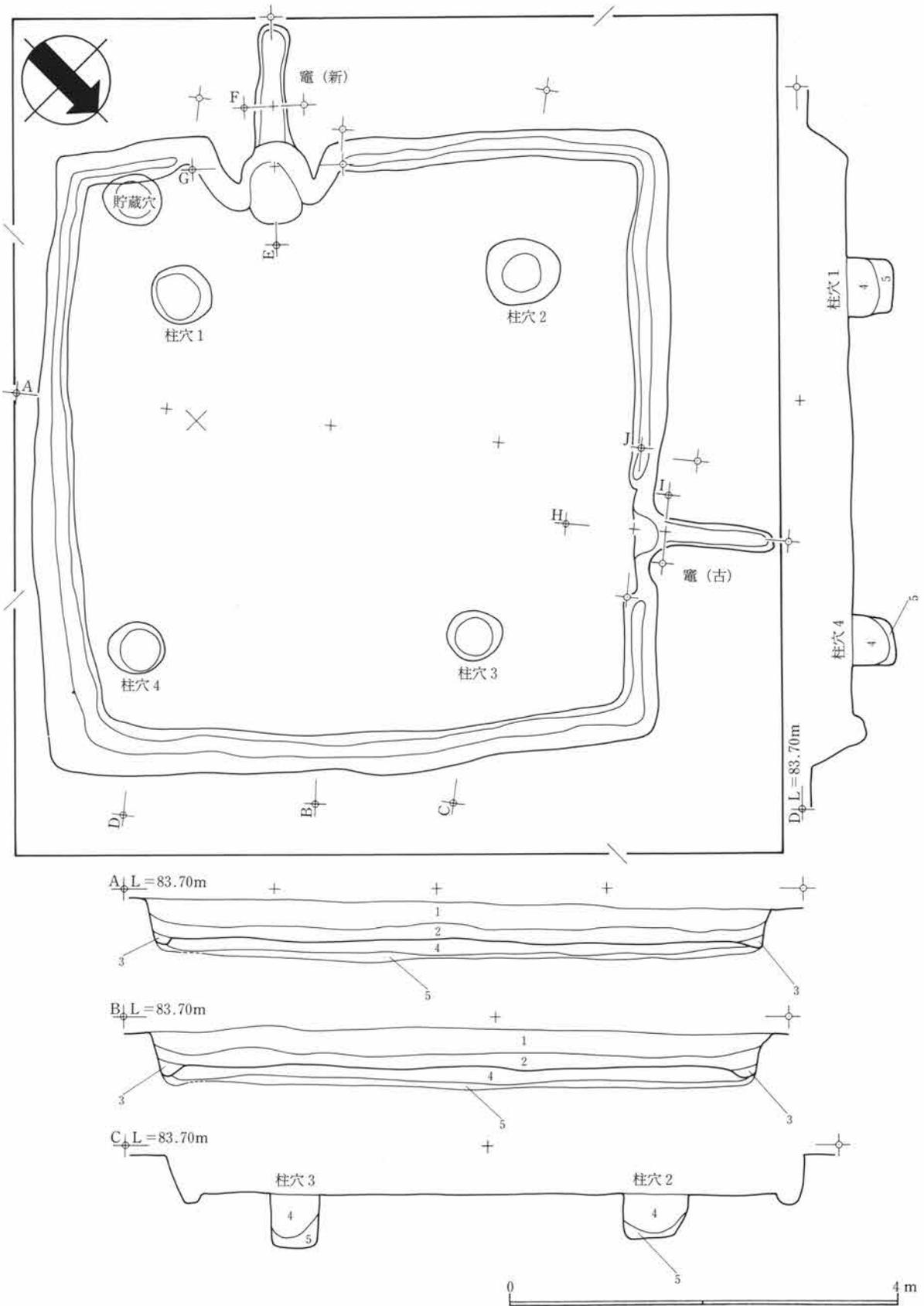
竈は東壁の北東寄りに付設される。竈全長は70cm、竈幅は80cm、焚き口幅は45cmである。炉床ピットは確認されなかった。本住居址では竈位置が左寄り珍しい。竈の燃焼部分は住居壁の内側に構築していて、両袖が残る。

遺物 (挿図番号第241図)

土師器の甕 (378)・須恵器の坏 (379) を出土している。

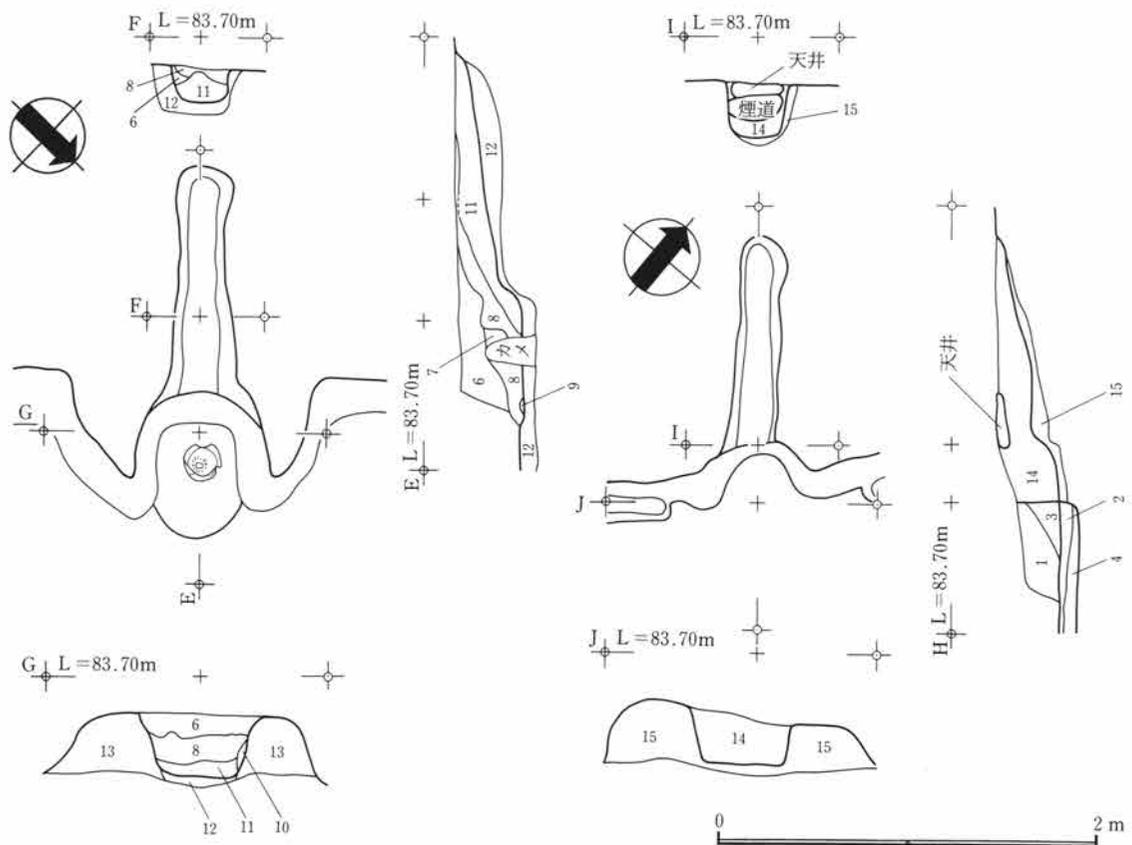
その他に本住居址からは土師器496g、須恵器1860gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。形態は棒状である。



第82図 79号住居址(1)

第II章 遺 跡



第83図 79号住居址(2)竈

3区84号住居址

遺構 (挿図番号第84・85図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ12-03, 04グリッドで検出され、北8.5mに81号住居址が位置する。本住居址は80号住居址に西半分を切られている。

規模は長軸4.10m (推定)・短軸3.75m, 面積15.322m²である。主軸方向はN-15°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は151cm, 竈幅は110cm, 燃焼部長さは78cm, 焚き口幅は58cm, 煙道部長さは73cm, 煙道部幅は25cmである。炉床ピットは長軸45cm・短軸23cm, 深さ3cmである。貯蔵穴は長軸112cm・短軸90cm, 深さ33cmである。竈の本体が住居址の外側に出る形態である。燃焼部分は奥に長い長方形で、煙道部も長い。

遺物 (挿図番号第242図)

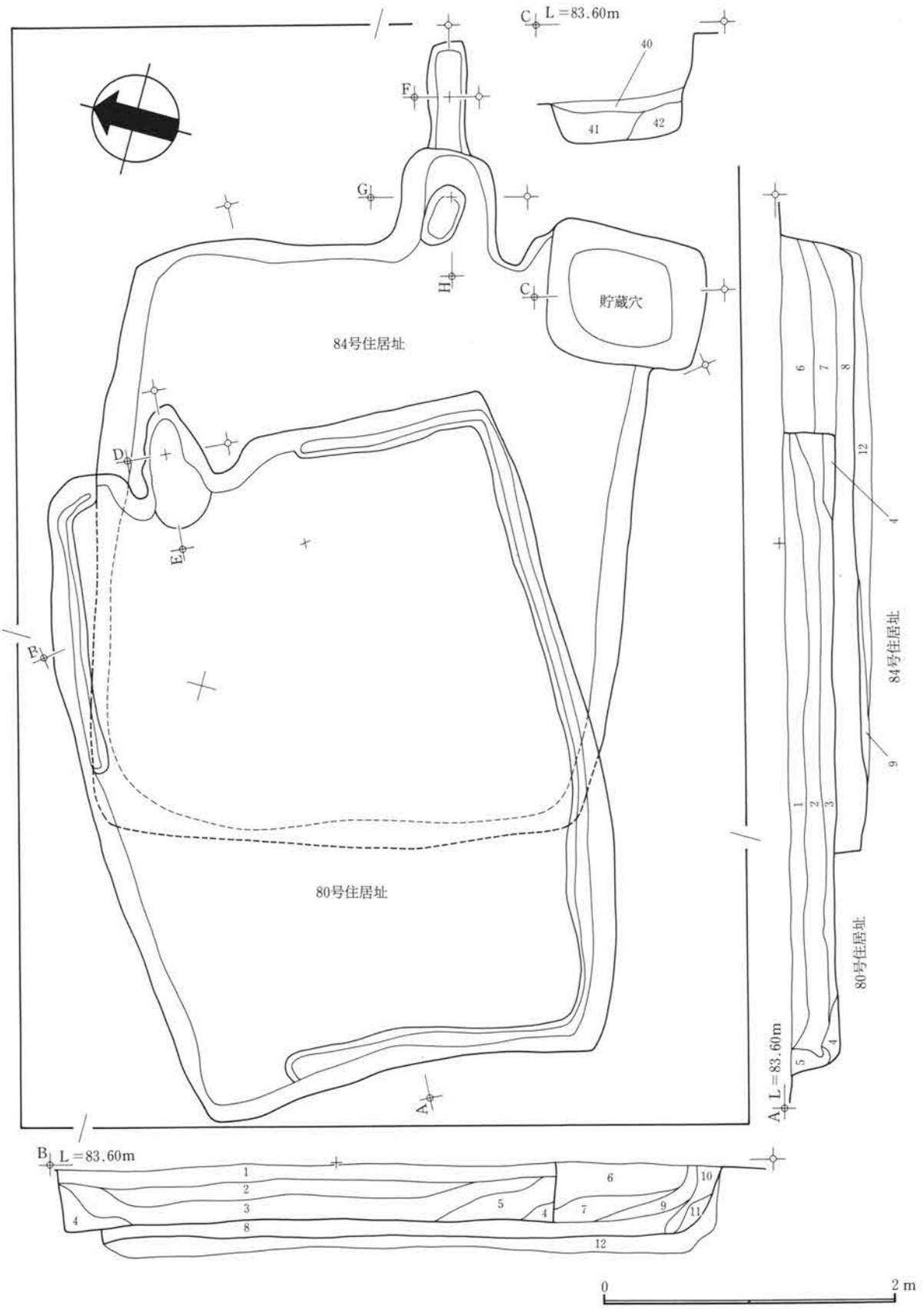
須恵器の高坏 (391)・土師器の坏 (392) を出土している。

その他に本住居址からは土師器1230g、須恵器326gが出土している。

3区81号住居址

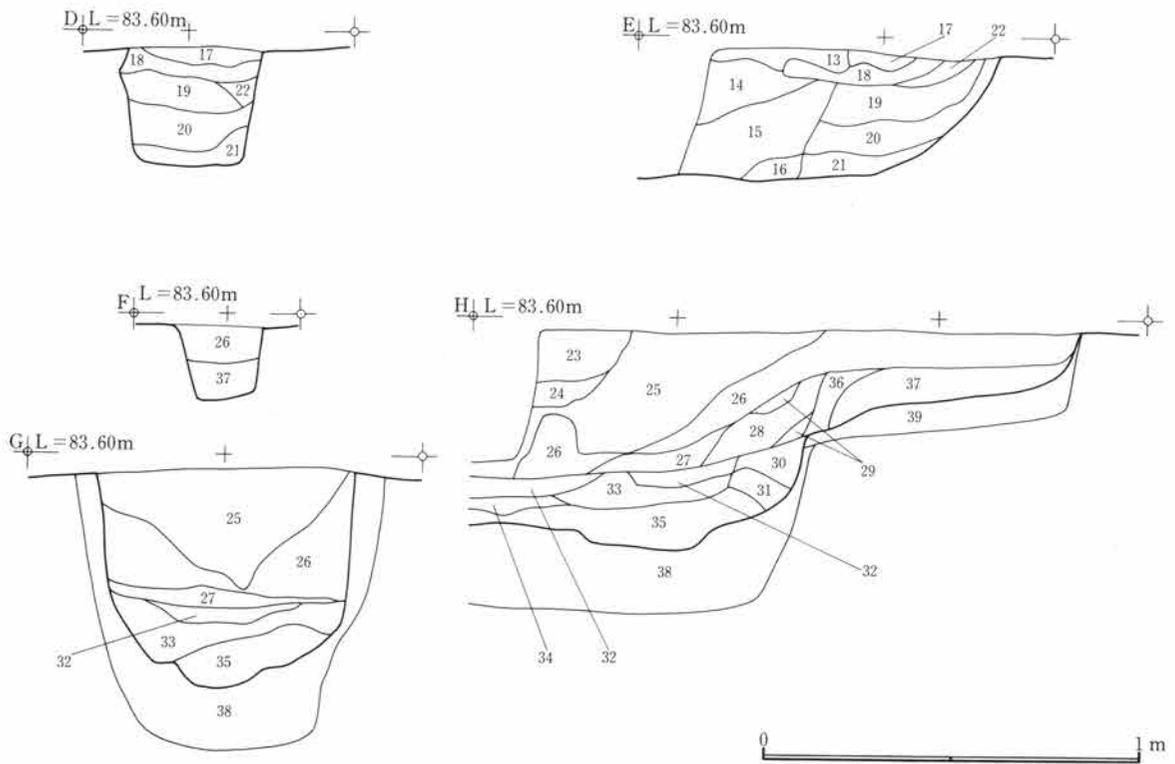
遺構 (挿図番号第86図 写真番号P L. 51)

本住居址はJ11-83, 84, 93, 94グリッドで検出され、東8.0mに83号住居址、北10.0mに92号住居址が位置する。検出面と住居床面の差は少ない。



第84図 80・84号住居址(1)

第II章 遺 跡



第85図 80・84号住居址(2)竈

本住居址の規模は長軸3.80m・短軸3.75m、面積14.256m²である。主軸方向はNを示している。

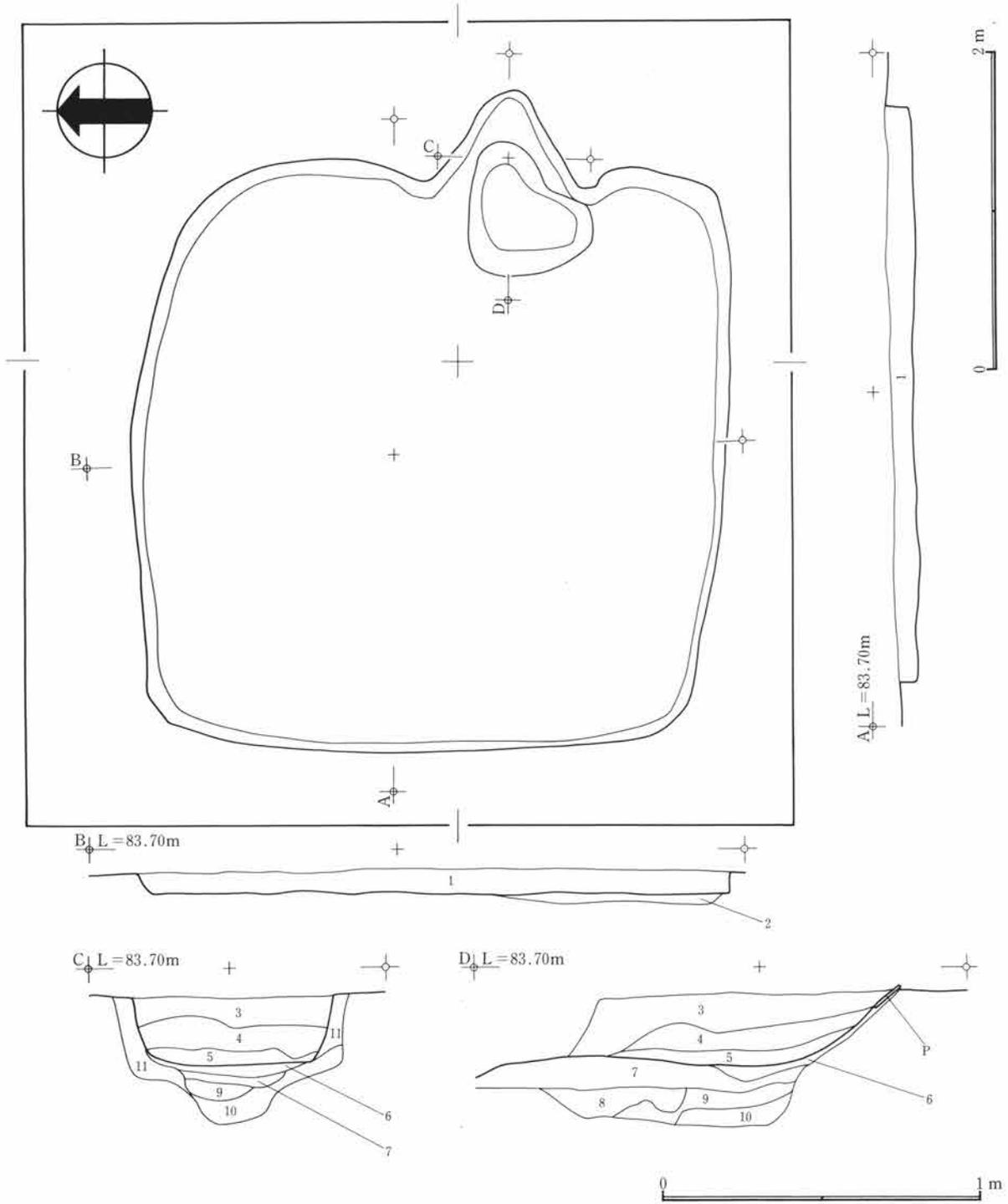
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は68cm、竈幅は68cm、焚き口幅は75cmである。炉床ピットは長軸86cm・短軸65cm、深さ15cmである。平面の形態は三角形を呈し、両袖の検出もなかった。

遺物 (挿図番号第241図)

土師器の甕 (380)・須恵器の高台付埴 (381・382)・須恵器の坏 (383・384) を出土している。

その他に本住居址からは土師器1199g、須恵器1980gが出土している。

又砥石が一点出土している。材質は砥沢石である。



第86図 81号住居址

第II章 遺 跡

3区82号住居址

遺構 (挿図番号第87図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ 11-94, 95・J 12-04, 05グリッドで検出され、北4.0mに83号住居址、南東11.0mに79号住居址が位置する。本住居址の南西隅は110号住居址を切っている。

規模は長軸2.78m・短軸2.50m, 面積6.748m²である。主軸方向はN-5°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は55cm, 焚き口幅は55cm(推定)である。炉床ピットは長軸36cm・短軸29cm, 深さ11cmである。

貯蔵穴は長軸75cm・短軸43cm, 深さ8cmである。

遺物 (挿図番号第241図)

土師器の甕(385)・土師器の坏(386)・須恵器の高台付碗(387)・須恵器の坏(388)を出土している。

その他に本住居址からは土師器582g、須恵器282gが出土している。

3区110号住居址

遺構 (挿図番号第87図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ 11-94・J 12-04グリッドで検出され、南西6.0mに84号住居址が位置する。本住居址の西壁は82号住居址に切られている。

規模は長軸2.60m・短軸1.60m, 面積4.166m²である。主軸方向はN-30°-Wを示している。

竈は北東壁の右寄りに付設される。竈全長は38cm, 竈幅は65cm, 焚き口幅は32cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第246図)

土師器の坏(468)・須恵器の鉢(469)を出土している。その他に、土師器122g、須恵器116g、が出土している。

3区83号住居址

遺構 (挿図番号第88・89図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ 11-84, 85, 94, 95グリッドで検出され、南4.0mに82号住居址、北5.0mに85号住居址が位置する。本住居址が東壁寄りの5460号土坑を切っている。

規模は長軸3.70m・短軸3.05m, 面積11.316m²である。主軸方向はN-22°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は120cm, 竈幅は112cm, 燃焼部長さは96cm, 焚き口幅は52cm, 煙道部長さは24cm, 煙道部幅は23cmである。炉床ピットは長軸97cm・短軸68cm, 深さ9cmである。

遺物 (挿図番号第242図)

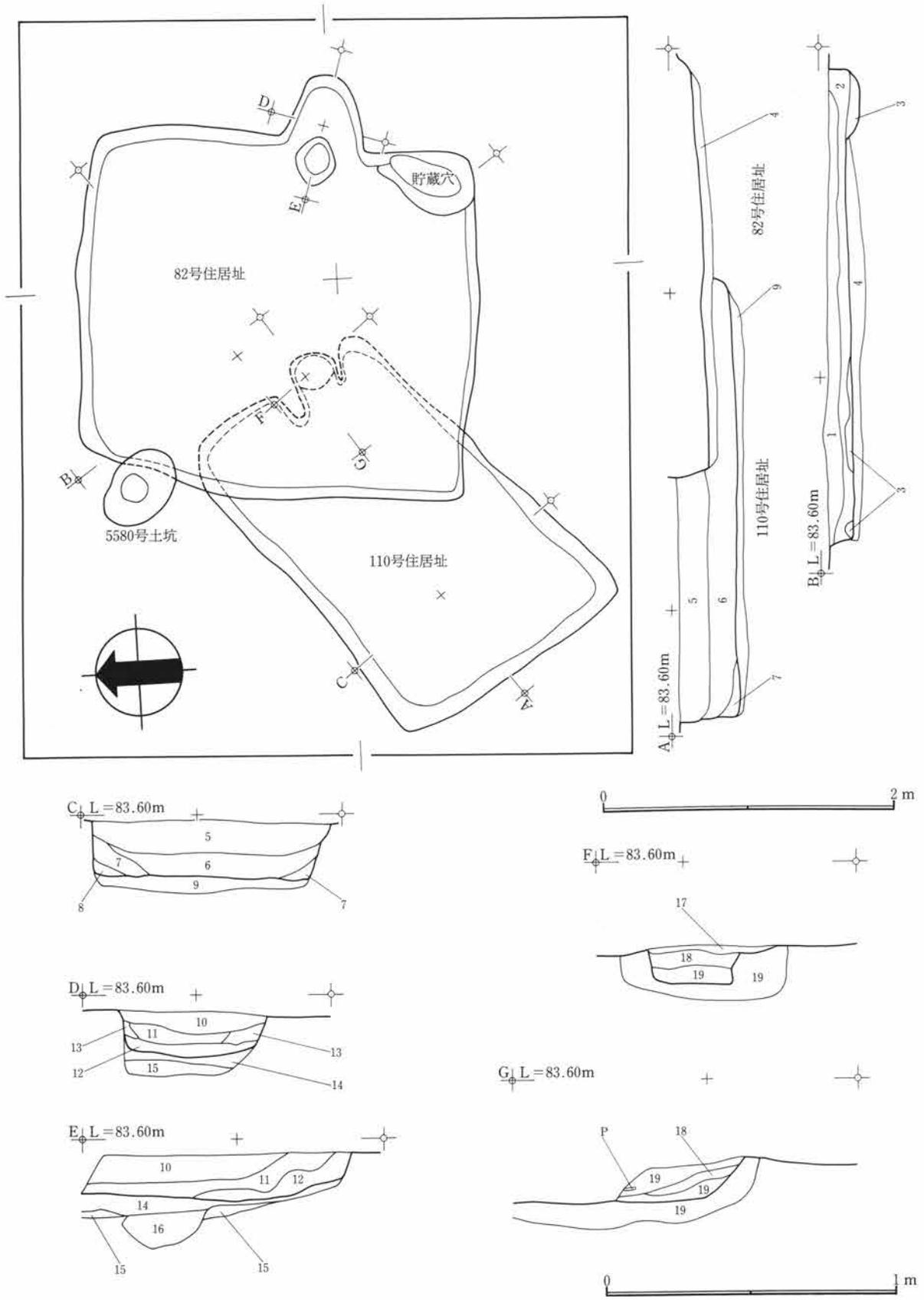
土師器の甕(389)・須恵器の坏(390)を出土。その他に土師器1610g、須恵器664gが出土。

3区85号住居址

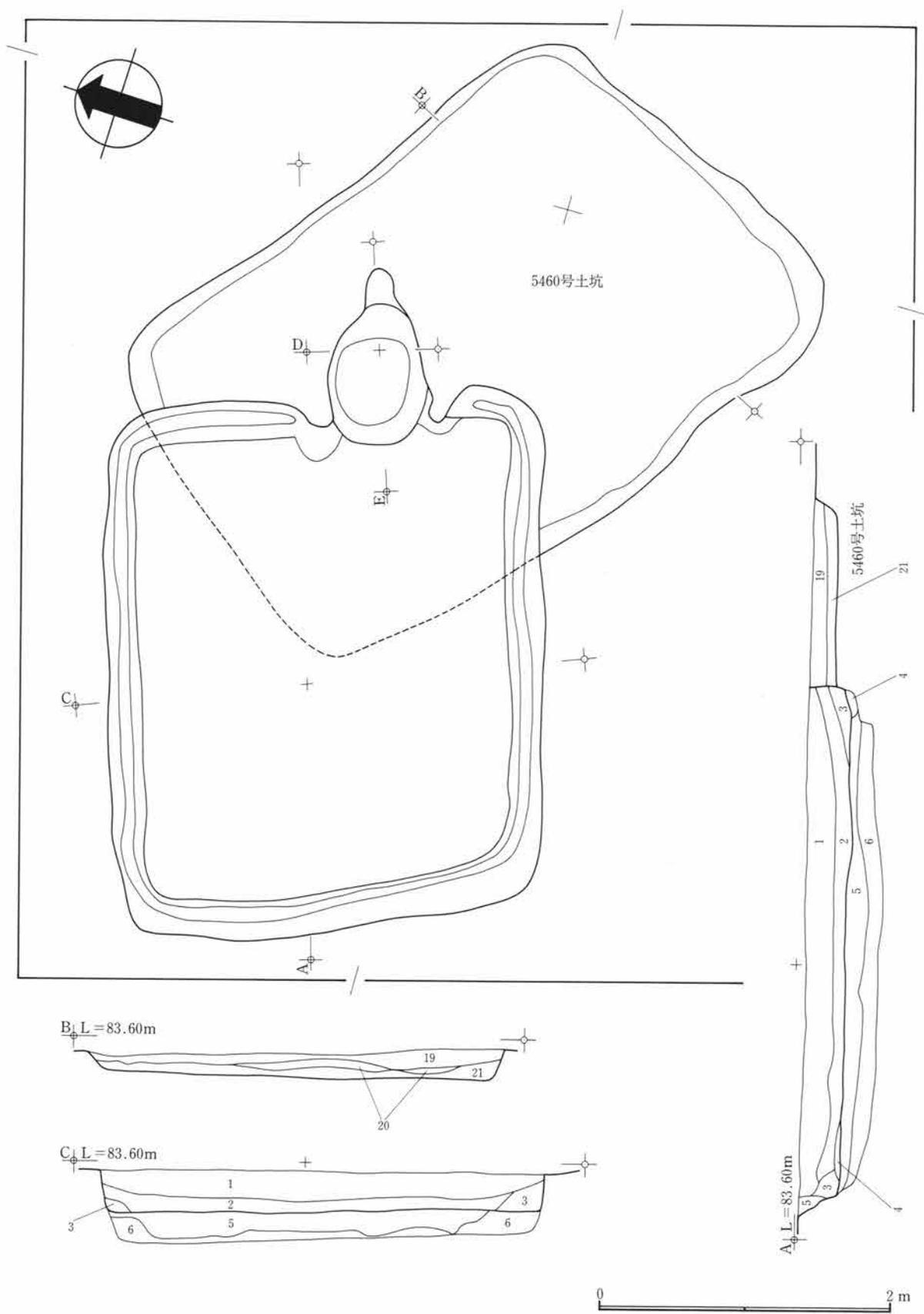
遺構 (挿図番号第90・91図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ 11-75, 85グリッドで検出され、北4.0mに90号住居址、南6.0mに83号住居址が位置する。本住居址が北東隅の5461号土坑を切っている。

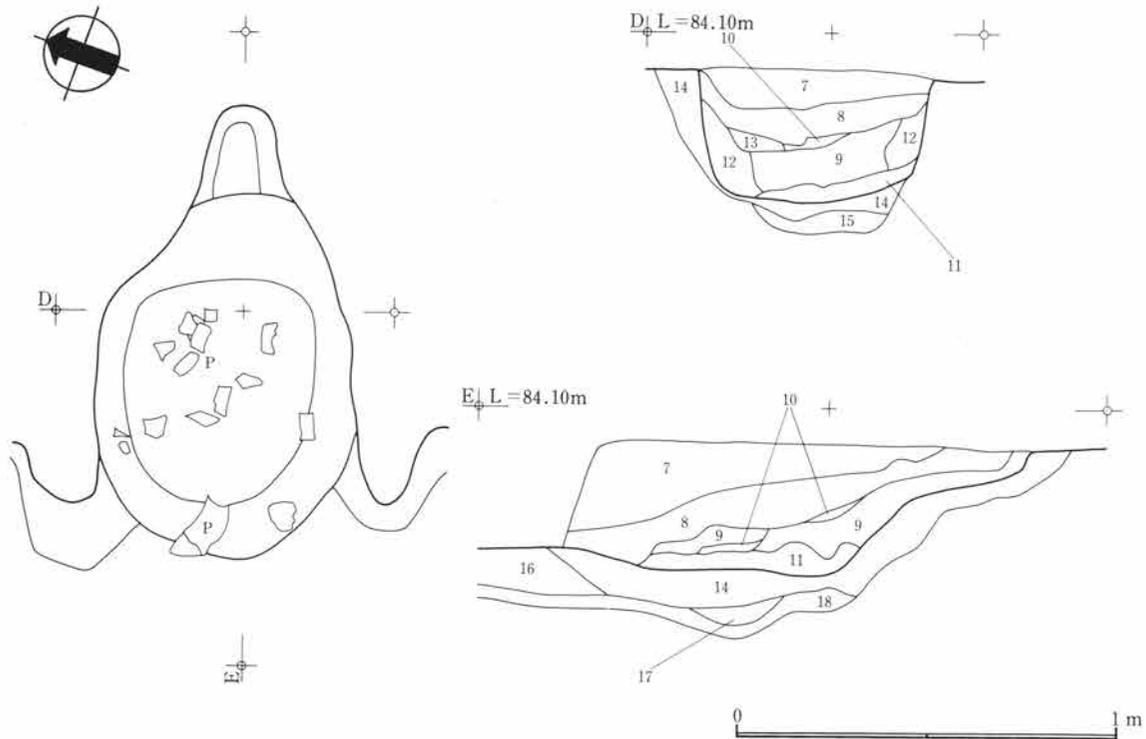
規模は長軸5.05m・短軸4.15m, 面積20.128m²である。主軸方向はN-25°-Wを示している。



第87図 82・110号住居址



第88图 83号住居址(1)



第89図 83号住居址(2)竈

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は90cm、焚き口幅は55cm(推定)である。炉床ピットは長軸39cm・短軸38cm、深さ17cmである。P 1は長軸83cm・短軸75cm、深さ33cmである。

遺物 (挿図番号第242図)

土師器の甕(393)・坏(394)・須恵器の坏(395)を出土。その他に土師器3258g、須恵器386gが出土。また、砥石が1点出土している。材質は砥沢石である。

3区86号住居址

遺構 (挿図番号第92図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ 11-66グリッドで検出され、北18.0mに117号住居址が位置する。本住居址の西壁は87号住居址に切られている。

規模は長軸4.55m・短軸3.55m、面積15.074m²である。主軸方向はN-9°-Wを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は125cm、竈幅は100cm、燃烧部長さは95cm、焚き口幅は50cm、煙道部長さは30cm、煙道部幅は25cmである。炉床ピットは長軸117cm・短軸57cm、深さ5cmである。

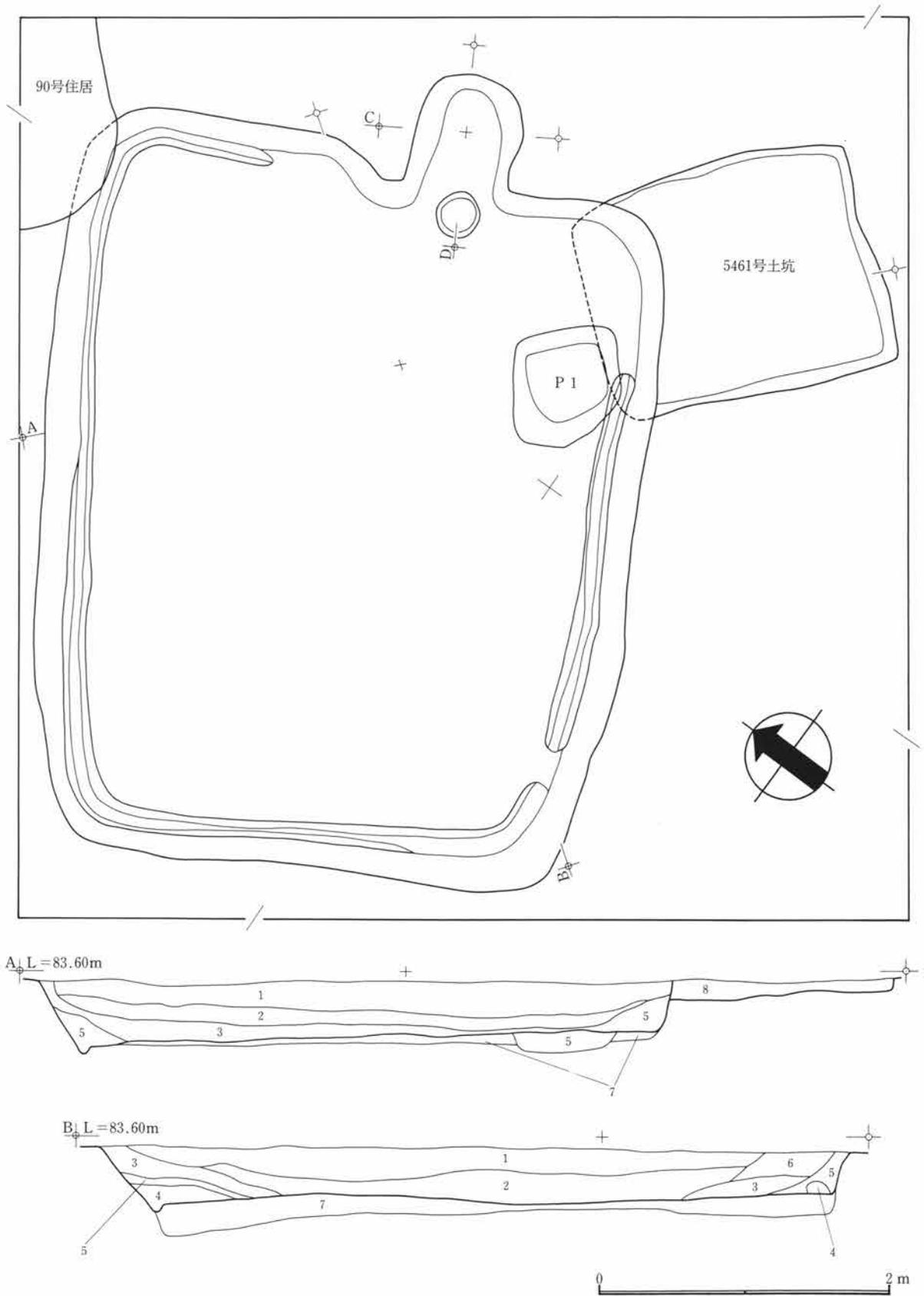
遺物 (挿図番号第242図)

須恵器の蓋(396)を出土している。その他に本住居址からは土師器136g、須恵器236gが出土している。

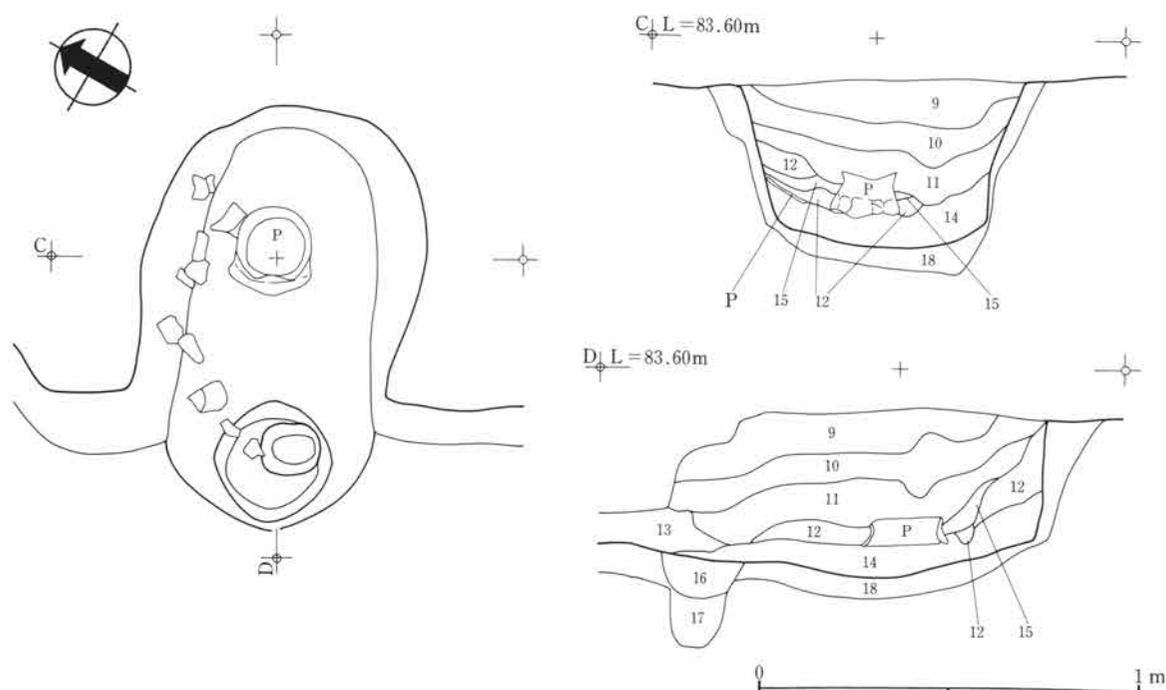
3区87号住居址

遺構 (挿図番号第93図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ 11-65, 66グリッドで検出され、北西4.0mに88号住居址が位置する。本住居址の南東隅は86



第90図 85号住居址(1)



第91図 85号住居址(2)竈

号住居址を切っている。

規模は長軸3.42m・短軸3.15m，面積9.952m²である。主軸方向はN-16°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は187cm，竈幅は105cm，燃烧部長さは77cm，焚き口幅は60cm，煙道部長さは110cm，煙道部幅は27cmである。炉床ピットは長軸73cm・短軸47cm，深さ8cmである。

遺物（挿図番号第242図）

土師器の坏（397）を出土している。その他に本住居址からは土師器1410g、須恵器210gが出土している。

3区88号住居址

遺構（挿図番号第94図 写真番号P L. 52）

本住居址はJ 11-55，65グリッドで検出され、南東4.0mに87号住居址、南西4.0mに89号住居址が位置する。

規模は長軸4.75m・短軸3.60m，面積15.158m²である。主軸方向はN-15°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は81cm，竈幅は70cm，焚き口幅は50cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物（挿図番号第242図）

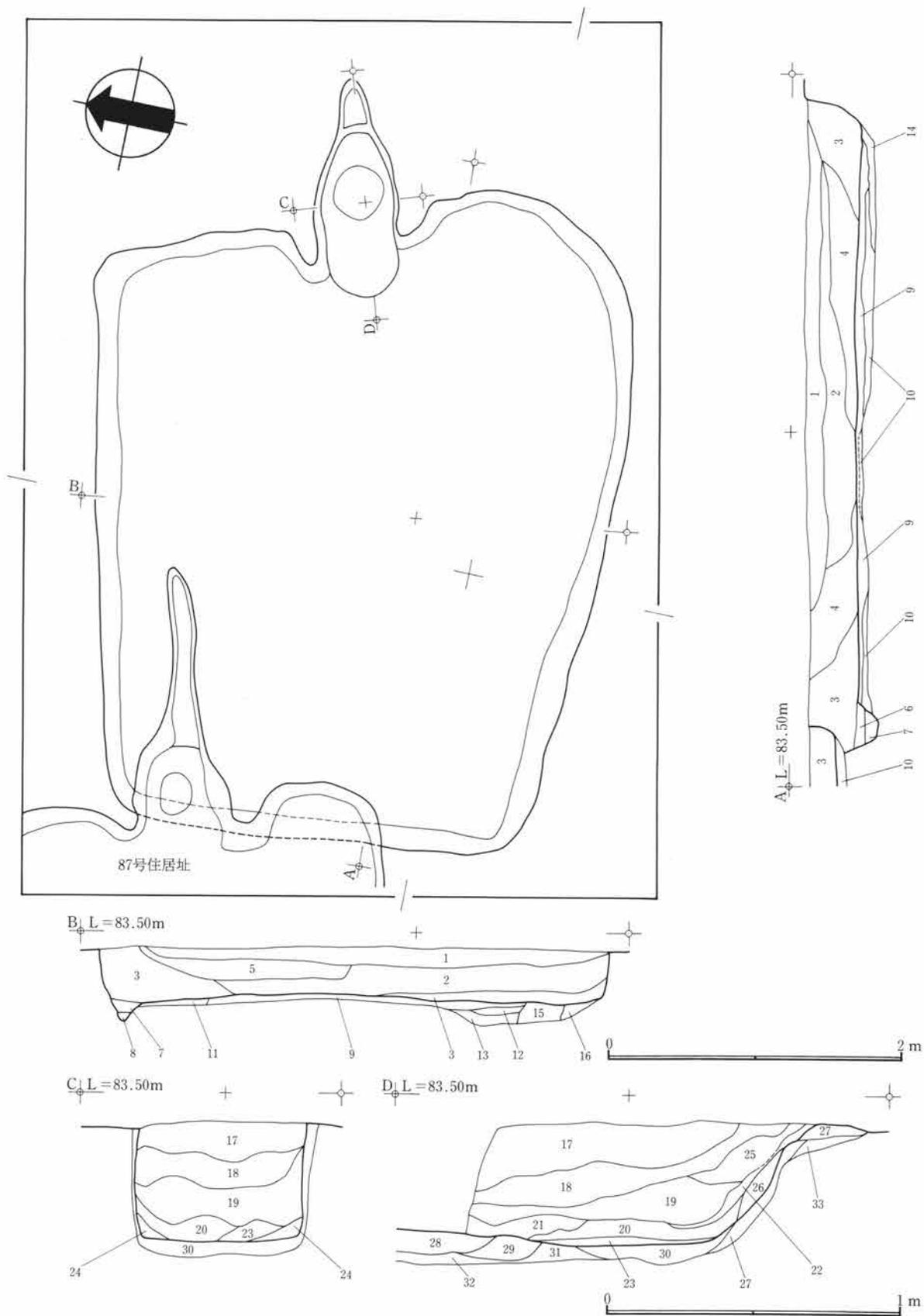
土師器の坏（398・399）・須恵器の甕（400）・須恵器の坏（401）を出土している。

その他、本住居址からは、土師器944g、須恵器582gが出土している。

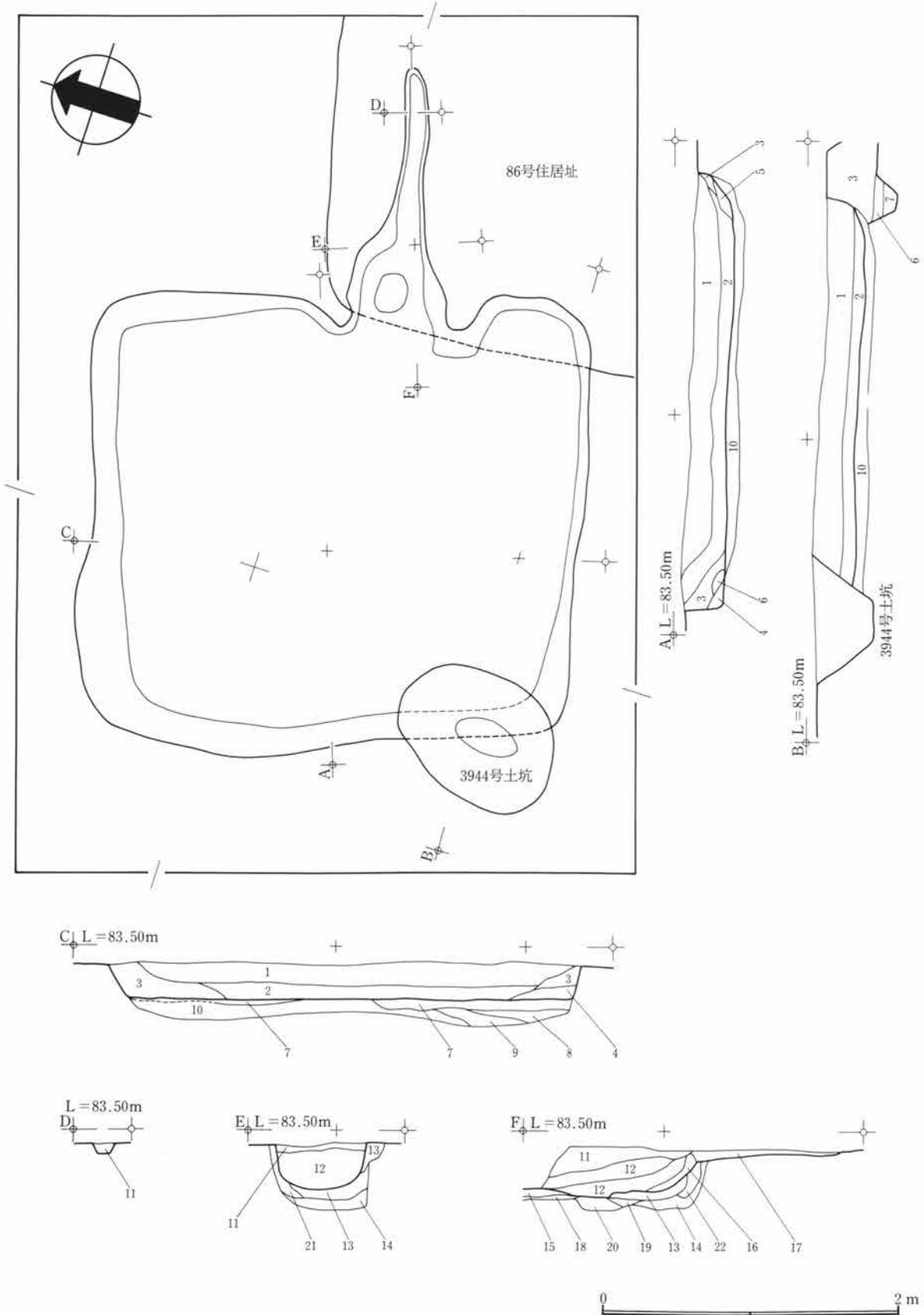
3区89号住居址

遺構（挿図番号第95図 写真番号P L. 52）

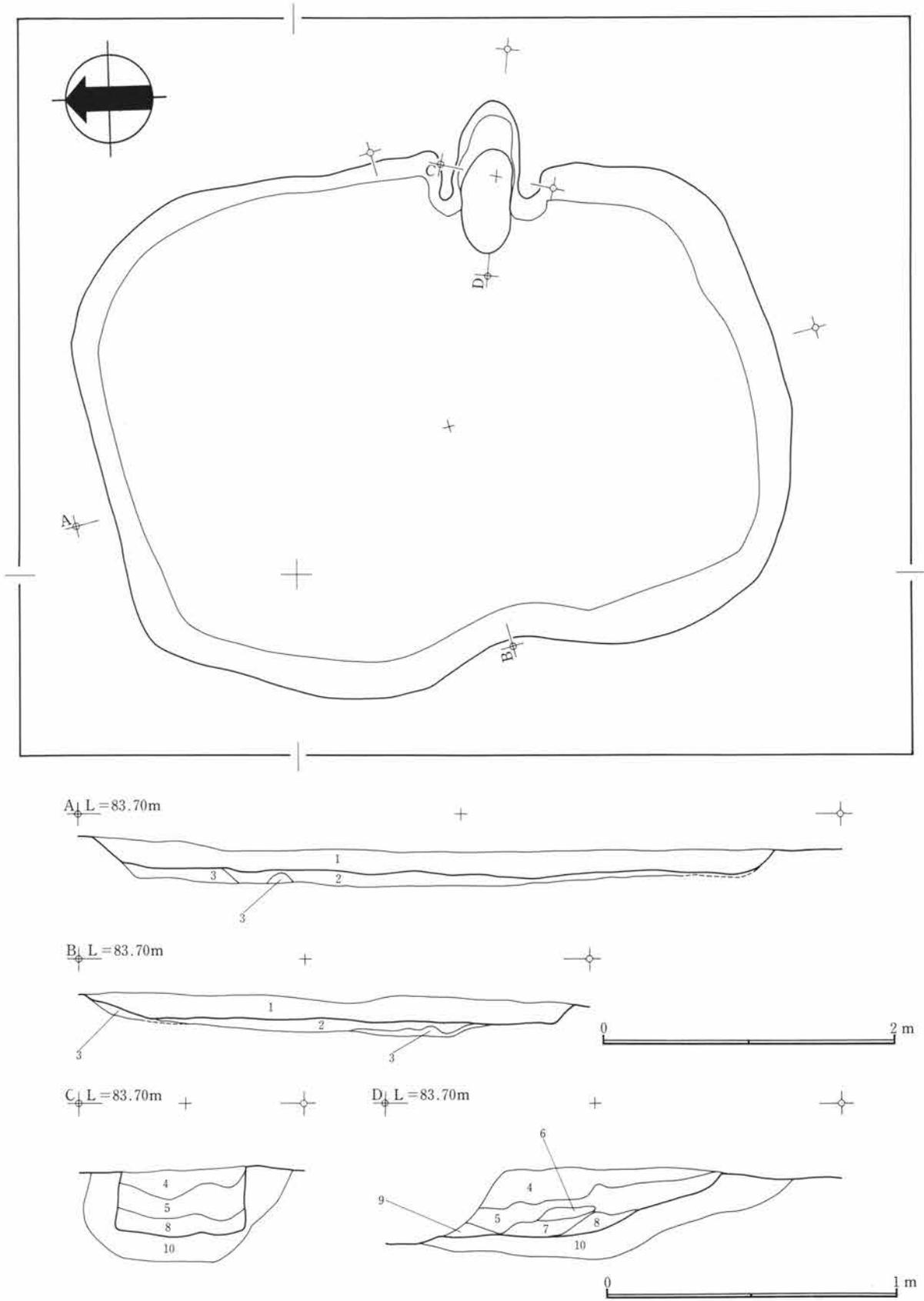
本住居址はJ 11-65グリッドで検出され、南5.0mに90号住居址が位置する。本住居址の北西隅は94号住居



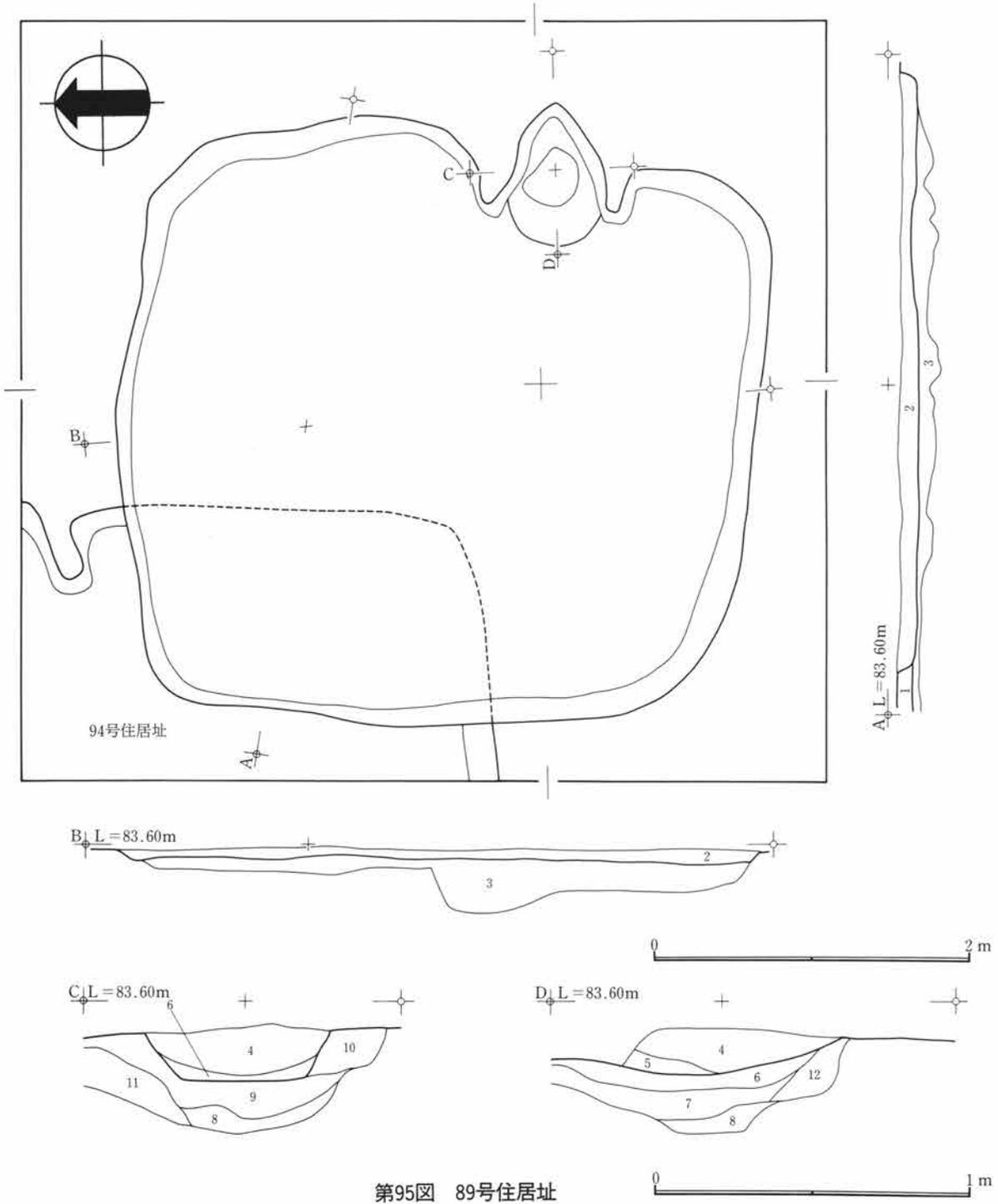
第92图 86号住居址



第93図 87号住居址



第94図 88号住居址



第95図 89号住居址

址を切っている。

規模は長軸4.10m・短軸3.80m、面積14.118㎡である。主軸方向はN-6°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は74cm、竈幅は94cm、焚き口幅は57cmである。炉床ピットは長軸93cm・短軸78cm、深さ10cmである。

遺物（挿図番号第242図）

土師器の甕（402）・坏（403）・須恵器の坏（404・405）を出土その他土師器1406g、須恵器1381gが出土。

第II章 遺 跡

3区90号住居址

遺構 (挿図番号第96図 写真番号P L. 52)

本住居址はJ11-65, 75グリッドで検出され、南5.0mに85号住居址、北5.0mに89号住居址が位置する。規模は長軸4.15m・短軸3.65m, 面積13.666m²である。主軸方向はN-40°-Wを示している。

竈は北東壁の右寄りに付設される。竈全長は177cm, 竈幅は107cm, 燃烧部長さは98cm, 焚き口幅は55cm, 煙道部長さは78cm, 煙道部幅は37cmである。炉床ピットは長軸114cm・短軸52cm, 深さ6cmである。

遺物 (挿図番号第243図 写真番号P L. 83)

土師器の甕(406)・坏(407)・須恵器の多形壺(408)・高台付埴(409)を出土。その他に土師器244g、須恵器142gが出土。

3区91号住居址

遺構 (挿図番号第97・98図 写真番号P L. 53)

本住居址はJ11-64, 74グリッドで検出され、東5.0mに90号住居址が位置する。(93住と重複)

規模は長軸4.20m・短軸2.95m, 面積11.566m²である。主軸方向はN-17°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は82cm, 竈幅は80cm, 焚き口幅は43cmである。炉床ピットは長軸67cm・短軸55cm, 深さ6cmである。

遺物 (挿図番号第243図)

土師器の甕(410)・坏(411)・須恵器の坏(412)を出土。その他に土師器736g、須恵器170gが出土。

3区93号住居址

遺構 (挿図番号第97・98図 写真番号P L. 53)

本住居址はJ11-64, 74グリッドで検出され、南西7.0mに92号住居址が位置する。(91住と重複)

規模は長軸4.15m・短軸4.05m, 面積14.194m²である。主軸方向はN-12°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設。竈全長45cm, 竈幅86cm, 焚き口幅63cmである。

住穴1は長軸42cm・短軸37cm, 深さ43cm, 住穴2は長軸43cm・短軸40cm, 深さ25cm, 住穴3は長軸46cm・短軸45cm, 深さ32cm, 住穴4は長軸45cm・短軸40cm, 深さ32cm。P1は長軸134cm・短軸70cm, 深さ17cmである。

遺物 (挿図番号第243図 写真番号P L. 89)

土師器の甕(414)・坏(415)・須恵器の高台付埴(416)・高台付坏(417)・坏(418)・墨書4)を出土。

その他に土師器3942g、須恵器2778gが出土。又砥石が一点出土している。材質は砥沢石である。

3区92号住居址

遺構 (挿図番号第99図 写真番号P L. 53)

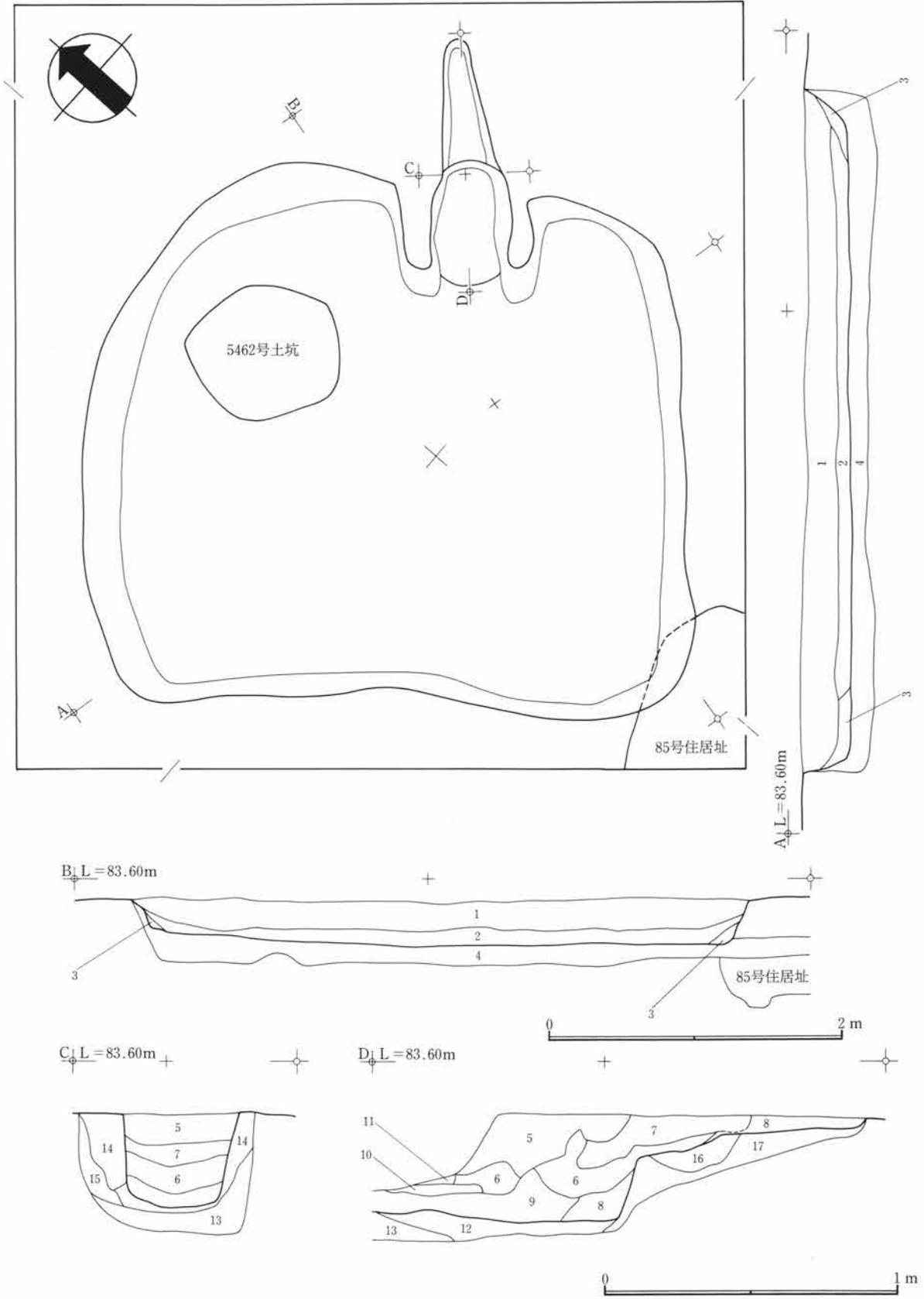
本住居址はJ11-73グリッドで検出され、南10.0mに81号住居址、北東6.0mに93号住居址が位置する。

規模は長軸2.60m・短軸2.45m, 面積6.368m²である。主軸方向はNを示している。

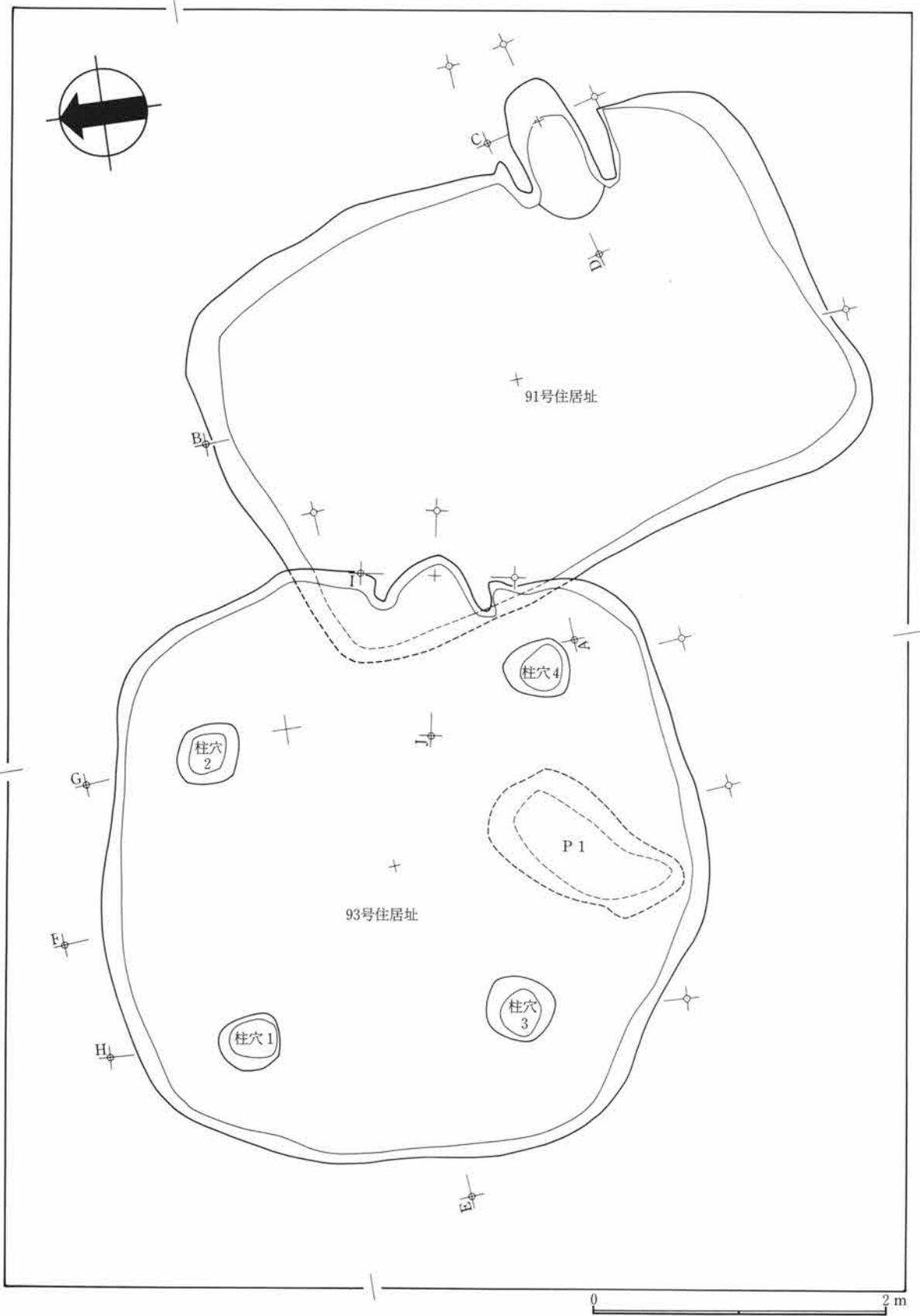
竈は東壁に付設される。竈全長は50cm, 焚き口幅は44cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第243図)

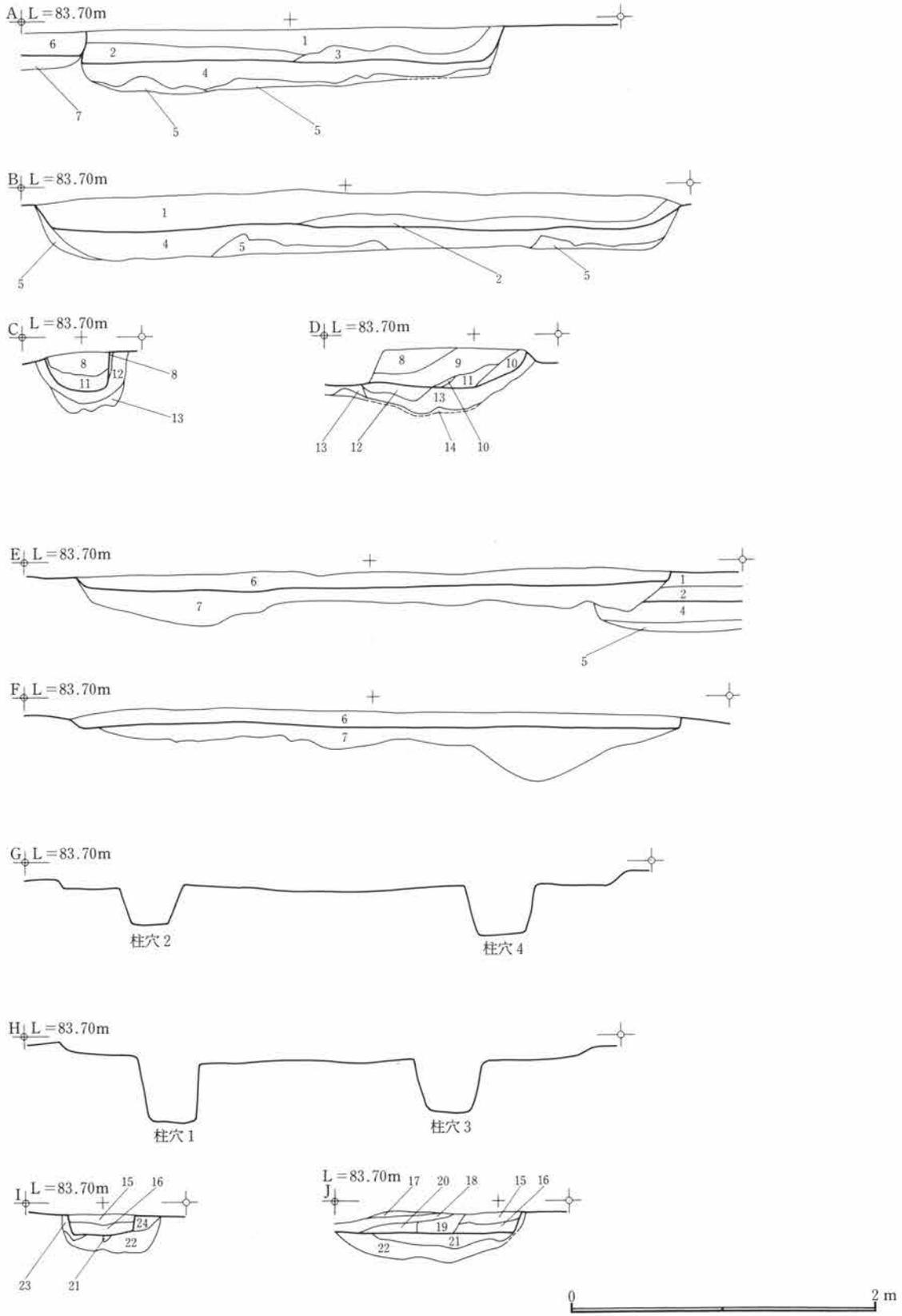
須恵器の高台付埴(413)を出土している。その他に土師器100g、須恵器190gが出土している。



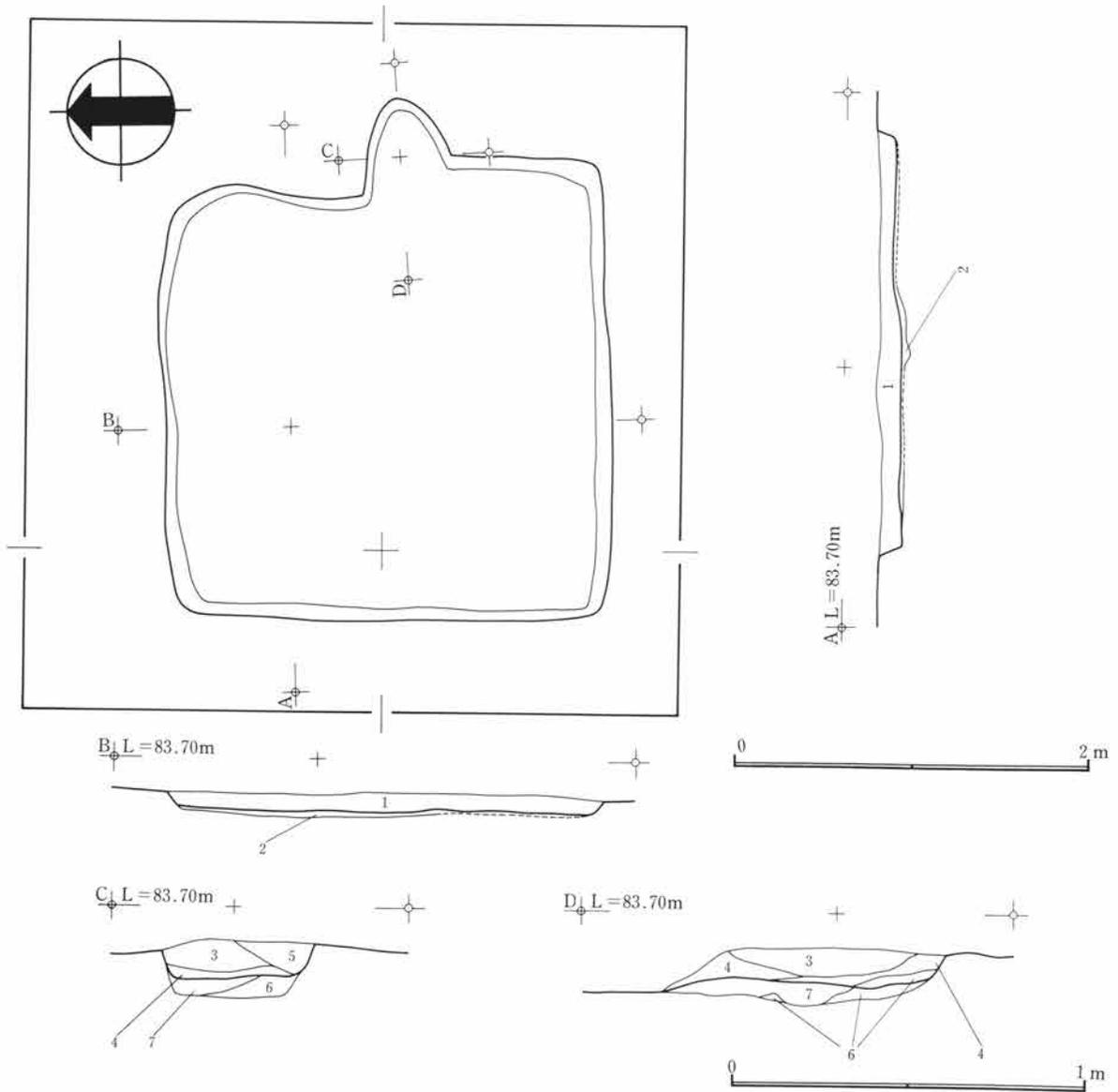
第96図 90号住居址



第97図 91・93号住居址(1)



第98図 91・93号住居址(2)



第99図 92号住居址

3区94号住居址

遺構 (挿図番号第100図 写真番号P L. 53)

本住居址はJ 11-55, 65グリッドで検出され、北東4.0mに88号住居址が位置する。(89住と重複)

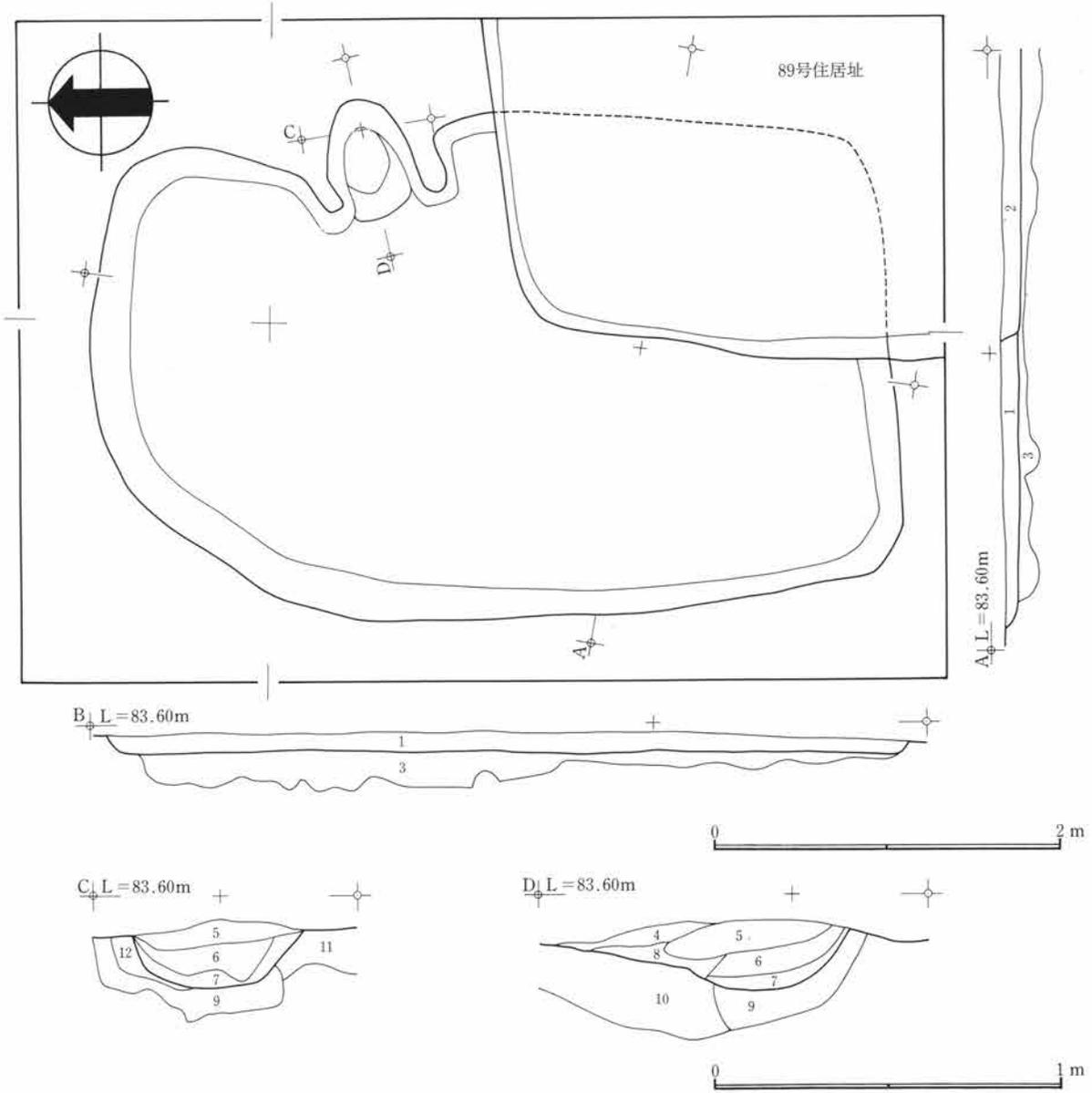
規模は長軸4.68m・短軸2.94m, 面積11.886㎡である。主軸方向はN-2°-Wを示している。

竈は東壁の左寄りに付設される。竈全長は66cm, 竈幅は95cm, 焚き口幅は45cmである。炉床ピットは長軸72cm・短軸71cm, 深さ3cmである。

遺物 (挿図番号第243図 写真番号P L. 83)

土師器の甕 (419)・土師器の坏 (420・421・422)・須恵器の高台付坏 (423) を出土している。

その他に本住居址からは土師器314g、須恵器124g、近世瓦156gが出土している。



第100図 94号住居址

3区96号住居址

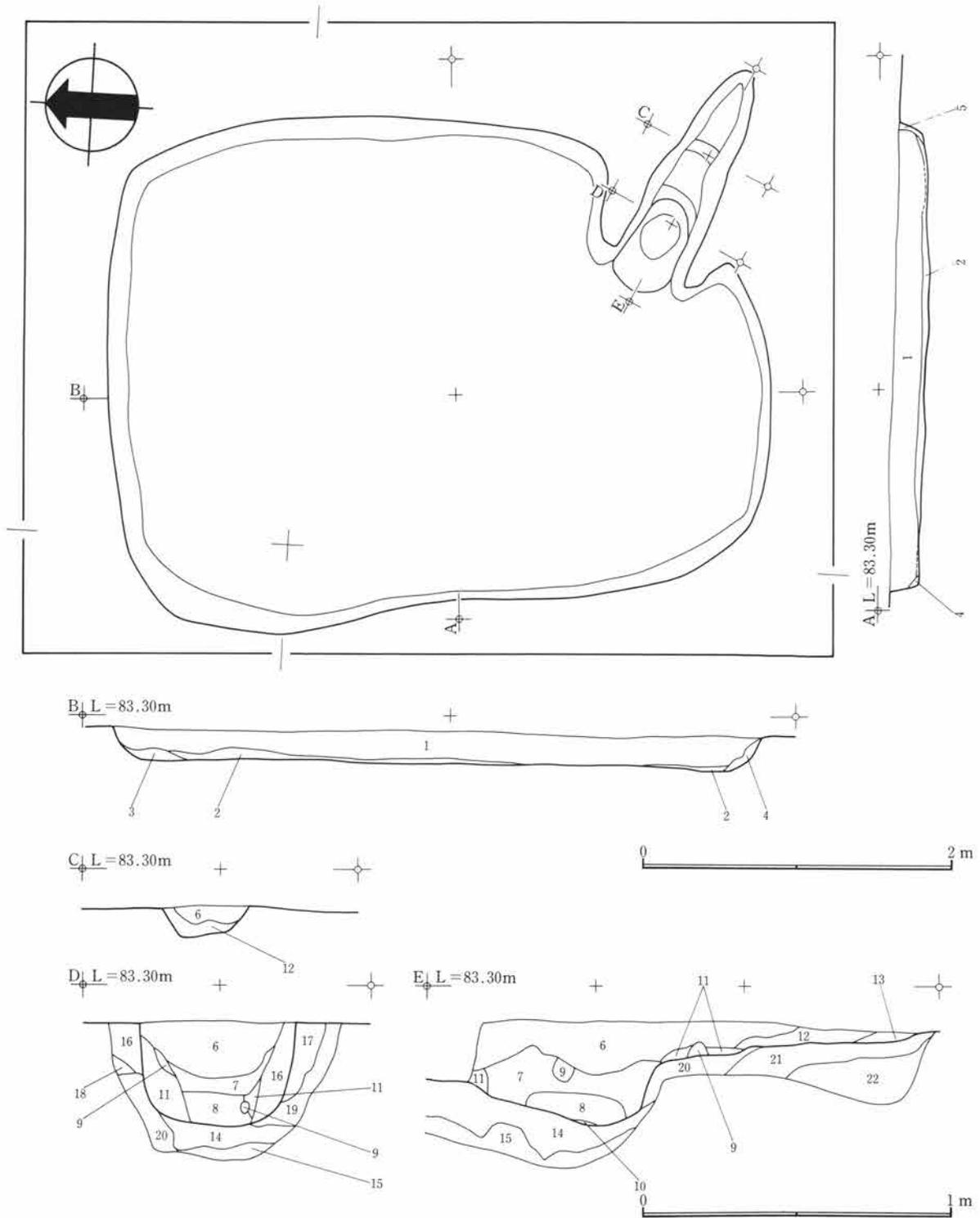
遺構 (挿図番号第101図 写真番号P L. 53)

本住居址はJ 11-28グリッドで検出され、東11.0mに97号住居址、北7.0mに157号住居址が位置する。規模は長軸4.35m・短軸3.25m、面積12.158 m^2 である。主軸方向はN-4°-Wを示している。

竈は東壁の右隅寄りに付設される。竈全長は147cm、竈幅は90cm、燃烧部長さは62cm、焚き口幅は55cm、煙道部長さは85cm、煙道部幅は45cmである。炉床ピットは長軸63cm・短軸41cm、深さ8cmである。

遺物 (挿図番号第244図 写真番号P L. 84)

土師器の甕 (424)・土師器の坏 (425・426・427)・須恵器の鉢 (428) を出土。その他に土師器1932g、須恵器528gが出土。

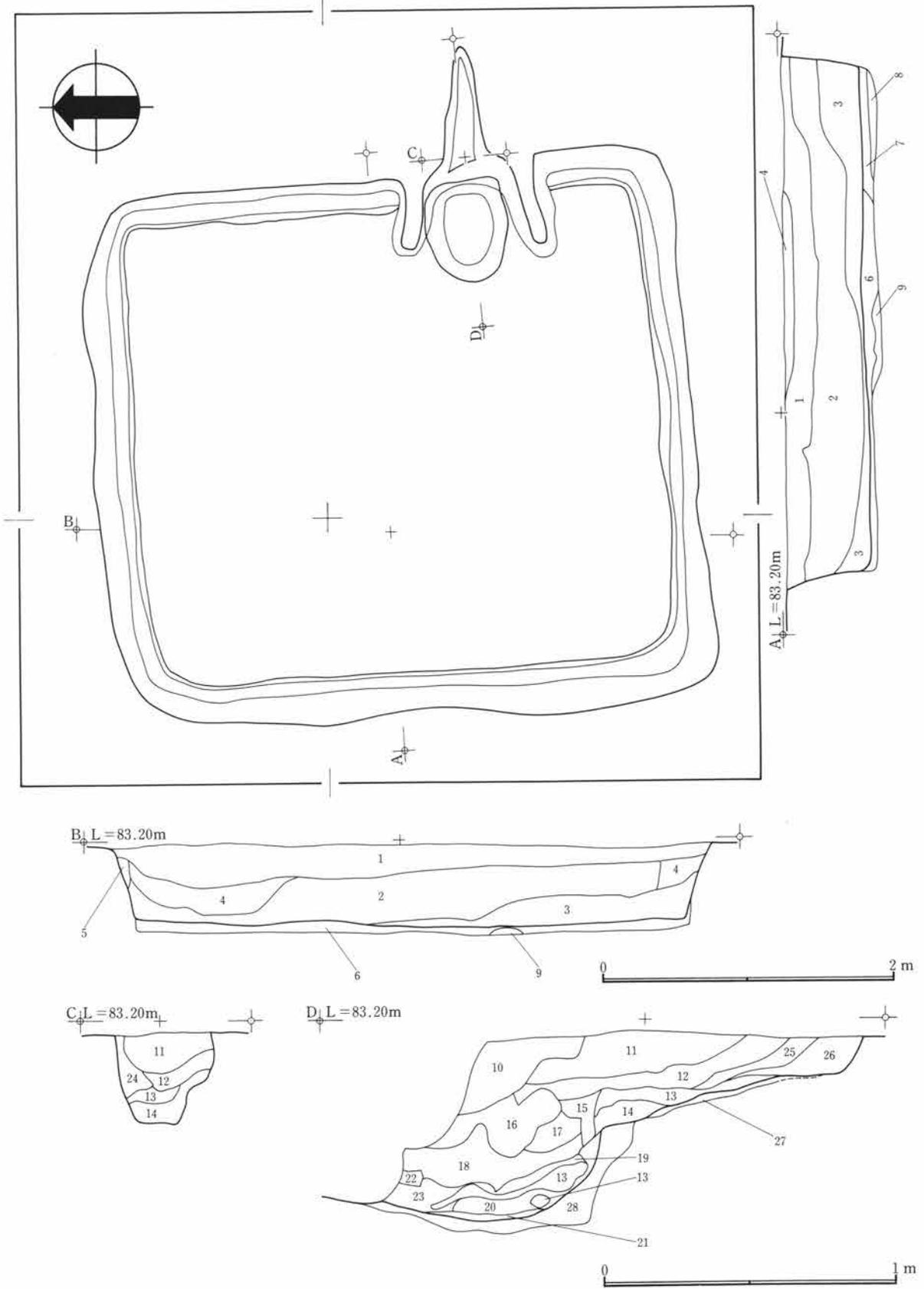


第101図 96号住居址

3区97号住居址

遺構 (挿図番号第102図)

本住居址はJ11-29・K11-20グリッドで検出。東7.5mに130号、西11.0mに96号住居址が位置する。規模は長軸4.20m・短軸3.52m、面積15.314㎡である。主軸方向はN-7°-Wを示している。



第102図 97号住居址

第II章 遺 跡

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は150cm、竈幅は105cm、燃焼部長さは68cm、焚き口幅は60cm、煙道部長さは82cm、煙道部幅は33cmである。炉床ピットは長軸65cm・短軸50cm、深さ6cmである。

遺物（挿図番号第244図）

土師器の甕（429）・坏（430）・須恵器の高台付盤（431）を出土。その他に土師器7573g、須恵器992gが出土。

3区98号住居址

遺構（挿図番号第103・104図 写真番号P L. 53）

本住居址はK11-10, 11, 20, 21グリッドで検出され、南5.0mに130号住居址、南西10.0mに97号住居址が位置する。住居中央から北寄りに大形の長円形の5463号土坑が乗る。

規模は長軸4.60m・短軸4.05m、面積17.536㎡である。主軸方向はN-5°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は118cm、燃焼部長さは40cm、焚き口幅は60cm（推定）、煙道部長さは78cm、煙道部幅は32cmである。炉床ピットは長軸33cm・短軸32cm、深さ4cmである。竈構造の遺存は良好である。

貯蔵穴は長軸50cm・短軸42cm、深さ25cmである。

P 1 は長軸145cm・短軸105cm、深さ11cm、P 2 は長軸163cm・短軸147cm、深さ16cmである。

遺物（挿図番号第244図）

土師器の甕（432）・土師器の台付甕（433）・土師器の坏（434・435・436）・須恵器の蓋（437）・須恵器の高坏（438）を出土している。

その他に本住居址からは土師器3605g、須恵器1195gが出土している。

3区99号住居址

遺構（挿図番号第105図）

本住居址はJ 12-55, 65グリッドで検出され、北23.0mに79号住居址、北西35.0mに84号住居址が位置する。発掘区域外に住居址の本体がある。遺構検出面も浅い。

規模は長軸4.00m（推定）・短軸3.10m（推定）、面積12.332㎡である。主軸方向はN-9°-Eを示している。

竈は確認されなかった。

遺物（挿図番号第244図）

土師器の台付甕（439）・須恵器の坏（440）を出土している。

その他に本住居址からは土師器516g、須恵器852gが出土している。

3区100号住居址

遺構（挿図番号第106図）

本住居址はL 9-28, 29グリッドで検出され、南8.0mに49号住居址、南西10.0mに111号住居址が位置する。本住居址の東壁寄りを南北方向に29号溝横切り、竈前面を壊す。また、北西隅も30号藩によって切られている。

規模は長軸4.70m・短軸3.60m、面積15.578㎡である。主軸方向はN-15°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は86cm（推定）、焚き口幅は60cm（推定）である。炉床ピットは長軸82cm（推定）・短軸56cm（推定）、深さ20cm（推定）である。

遺物（挿図番号第245図）

土師器の甕（441）・土師器の壺（442）・土師器の坏（443）・須恵器の坏（444）を出土している。

その他に土師器2930g、須恵器620g、中世陶器90gが出土している。

3区101号住居址

遺構（挿図番号第107図）

本住居址はK10-98グリッドで検出され、南西7.0mに74号住居址、北10.0mに37号住居址が位置する。東壁の南隅を3711号土坑が切る。

規模は長軸3.98m（推定）・短軸2.78m（推定）、面積10.380㎡である。主軸方向はN-26°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は105cm（推定）、焚き口幅は60cm（推定）である。炉床ピットは長軸94cm・短軸53cm、深さ14cmである。特に右袖の芯には凝灰岩の切石が残り、その周囲を長塵が包み込むように出土している。

貯蔵穴は長軸95cm・短軸92cm、深さ15cmである。竈の左側に貯蔵穴をもつものは珍しい。

遺物（挿図番号第245図）

土師器の甕（445）・須恵器の高台付壺（446）・須恵器の坏（447）を出土している。特に須恵器の坏は口径は12cmに復元され小形品で本遺跡のものとしては珍しい。

その他に土師器1323g、須恵器1460g、近世3160gが出土している。

3区102号住居址

遺構（挿図番号第108図）

本住居址はL10-04, 05グリッドで検出され、北東24.0mに29号住居址が位置する。本住居址は106号住居址に切られている。また南東部分が斜めに切られ未調査部分となっており、住居形態も復元である。

規模は長軸4.45m（推定）・短軸3.95m（推定）、面積16.826㎡である。主軸方向はNを示している。

竈は確認されなかった。

遺物（挿図番号第245図）

土師器の坏（448・449）・須恵器の小壺（450）・須恵器の大壺（451）・須恵器の坏（452）を出土している。

その他に土師器3236g、須恵器1425g、中世陶器667gが出土している。

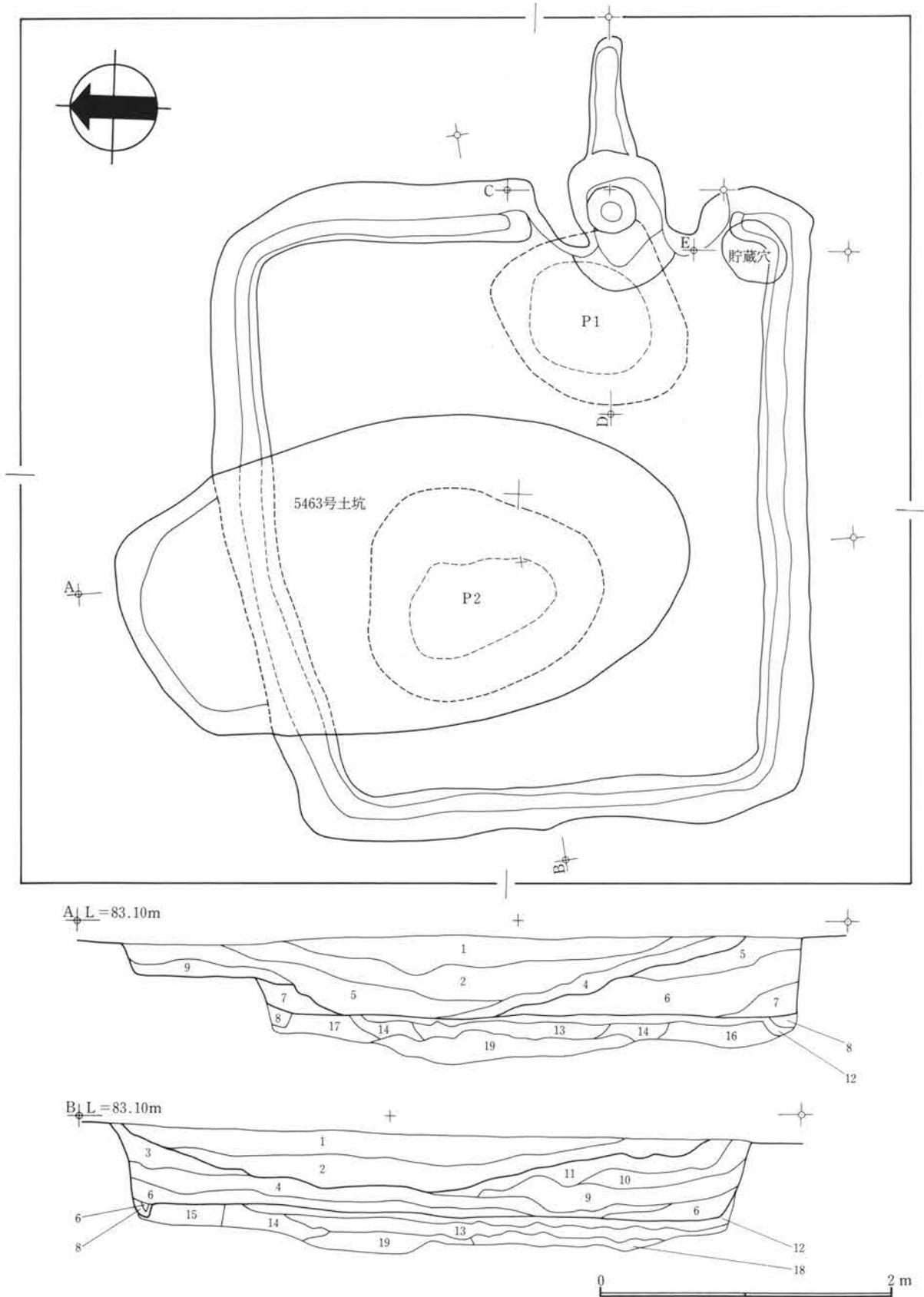
又本住居址では鉄製品が2点出土している。製品名は刀子である。

3区106号住居址

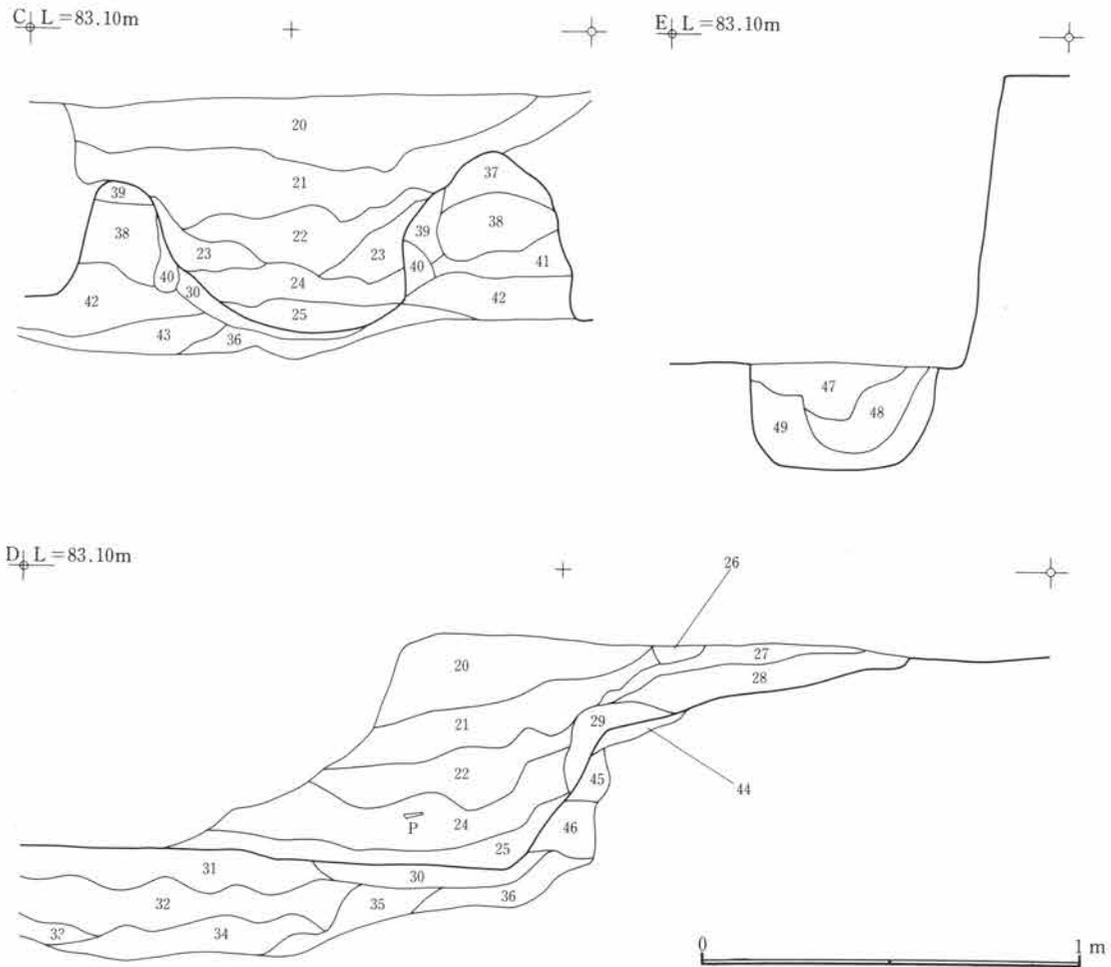
遺構（挿図番号第108図）

本住居址はL10-04, 05グリッドで検出され、北東25.0mに29号住居址が位置する。本住居址は102号住居址の上に乗る。また住居中央に土坑が残る。102号住居址、106号住居址ともに半分が発掘区域外になっている。そのため復元部分が多い。

規模は長軸3.90m（推定）・短軸3.15m（推定）、面積12.146㎡である。主軸方向はN-10°-Wを示してい



第103图 98号住居址(1)



第104図 98号住居址(2)竈

る。竈は確認されなかった。P 1は長軸55cm（推定）・短軸45cm（推定）、深さ20cmである。

遺物（挿図番号第246図）

須恵器の坏（458）を出土している。

その他に本住居址からは土師器183g、須恵器125gが出土している。

又本住居址からは鉄製品が出土している。製品名は不明である。

3区104号住居址

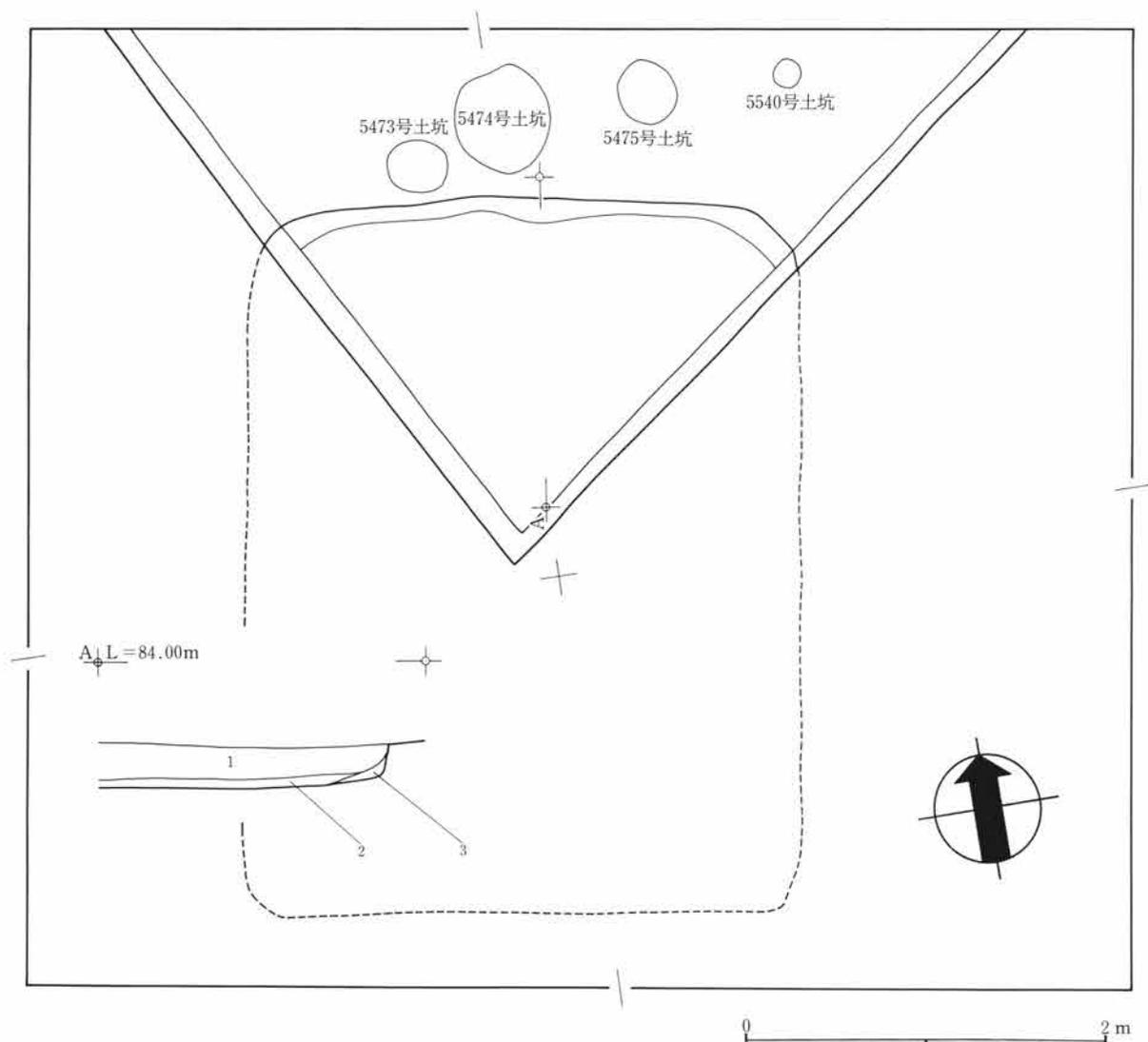
遺構（挿図番号第109図）

本住居址はL 9-47, 48, 57, 58グリッドで検出され、西9.0mに20号住居址が位置する。本住居址の南東半分は発掘区域外になっている。

規模は長軸6.20m（推定）・短軸5.95m（推定）、面積32.478㎡である。主軸方向はN-2°-Wを示している。竈は確認されなかった。

遺物（挿図番号第245図 写真番号P L. 84）

土師器の坏（453）・須恵器の甕（454）・須恵器の有蓋坏（455）・須恵器の坏（456）・須恵器の高台付杯（457）



第105図 99号住居址

を出土している。特に須恵器の有蓋坏の蓋部は口径を約19cmに復元されるのに対して器高は4cmと高く、この手の器種の中では同様のものは少ない。

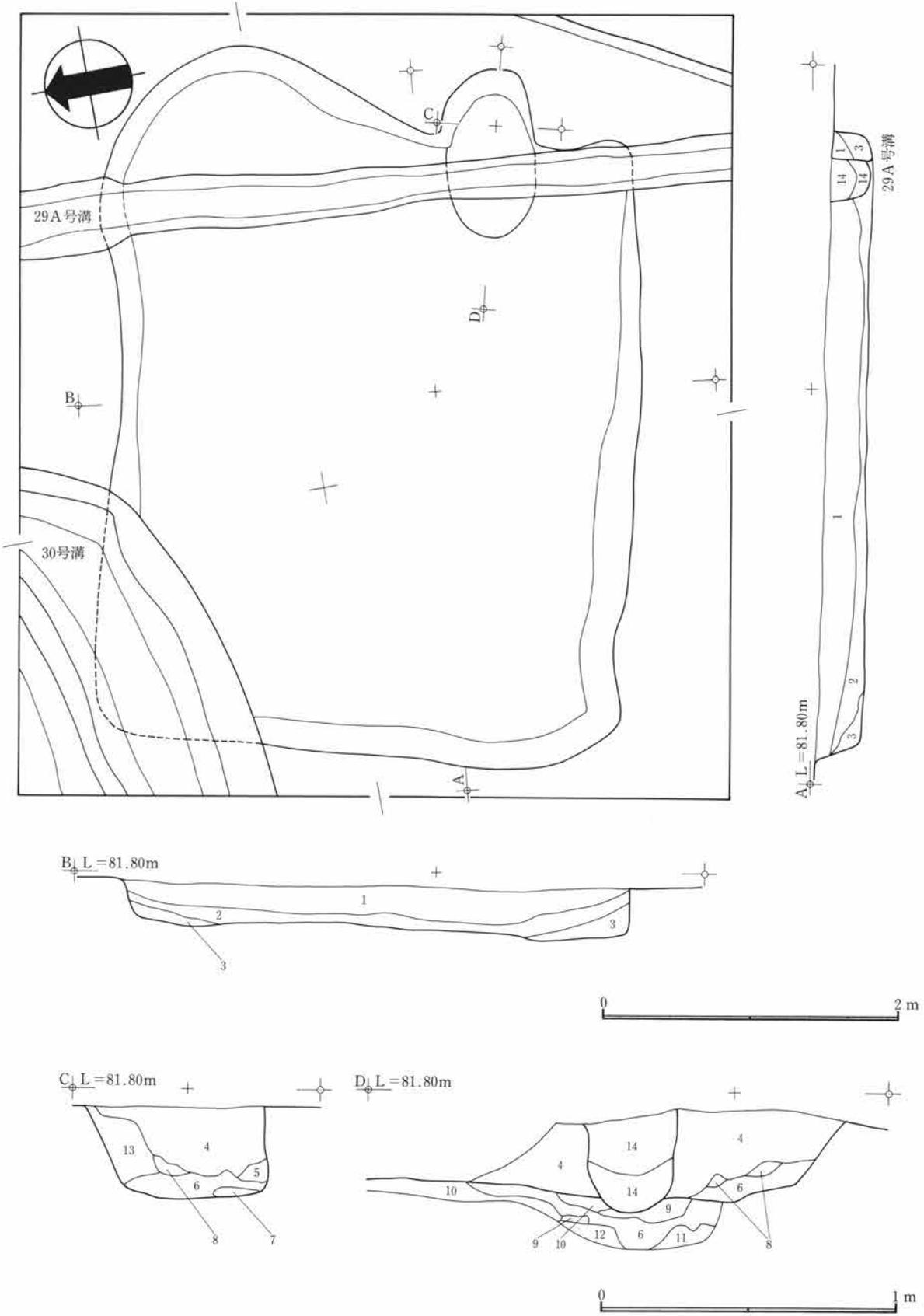
その他に土師器1710g、須恵器535gが出土している。

3区107号住居址

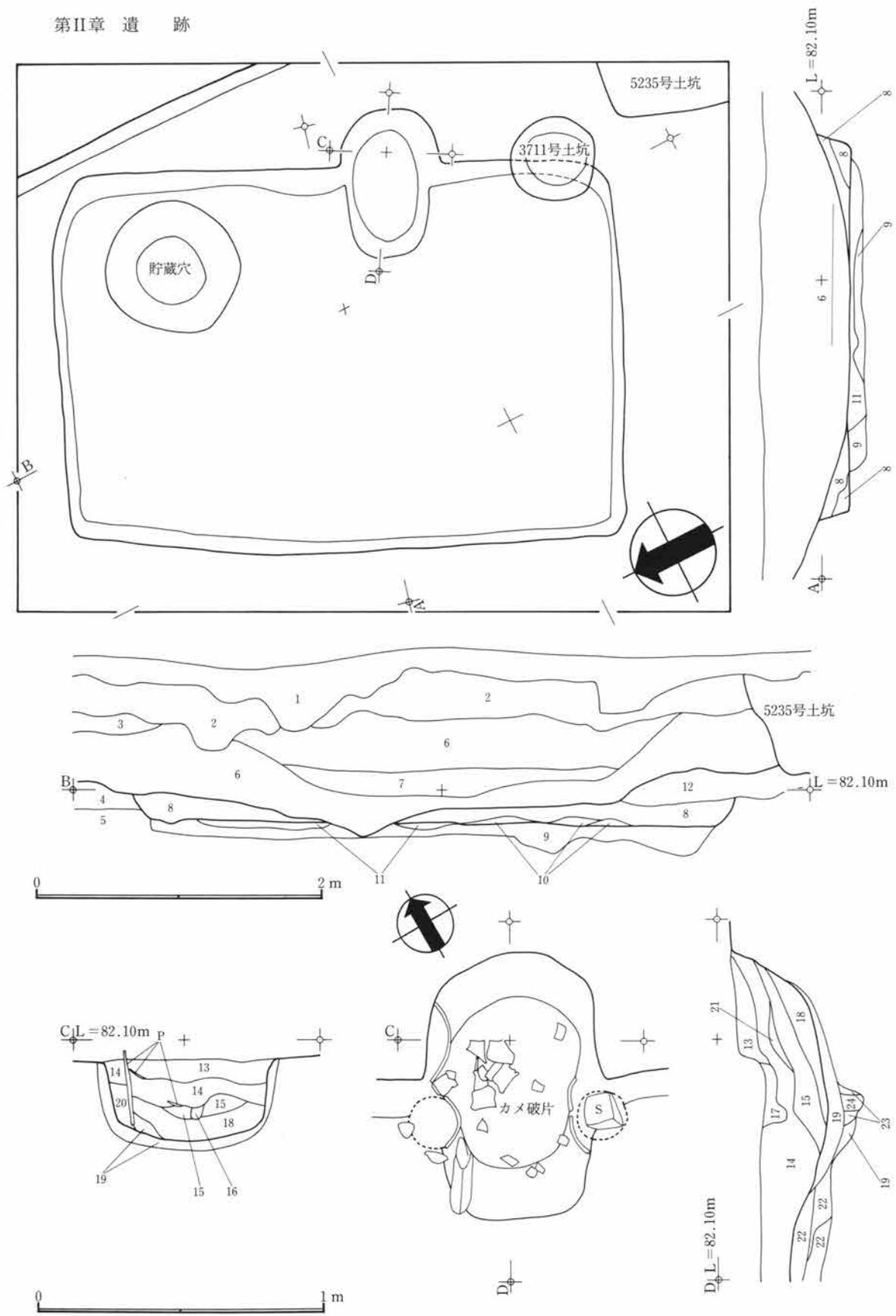
遺構（挿図番号第109図）

本住居址はL 9-47, 48, 57, 58グリッドで検出され、北西4.5mに24号住居址が位置する。本住居址は25号土坑、73号住居址、104号住居址より新しい。また、竈の燃焼部と、住居址の南東隅は発掘区域外となっている。

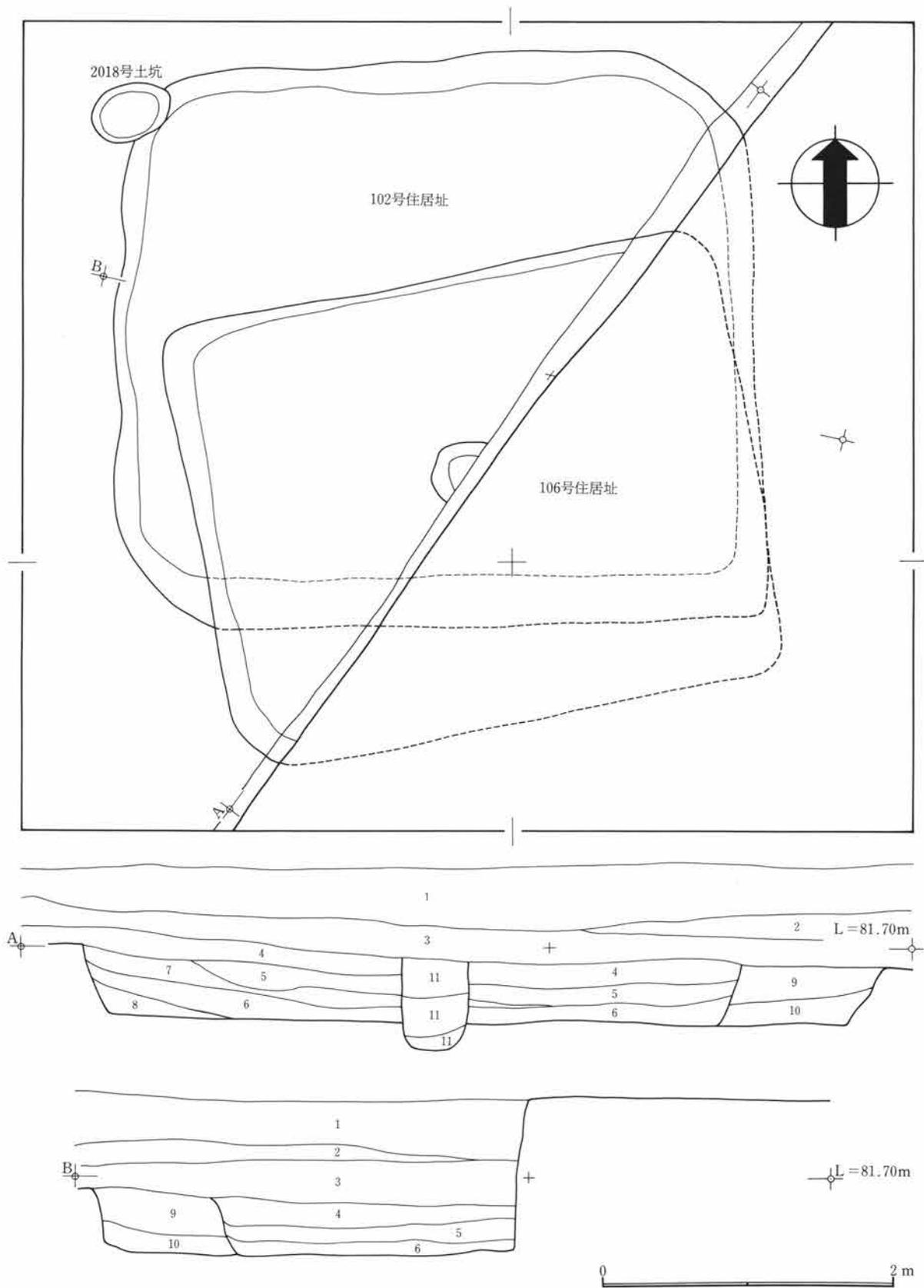
規模は長軸3.50m（推定）・短軸3.40m（推定）、面積11.256m²である。主軸方向はN-6°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は90cm、焚き口幅は40cm（推定）である。炉床ピットは確認されなかった。



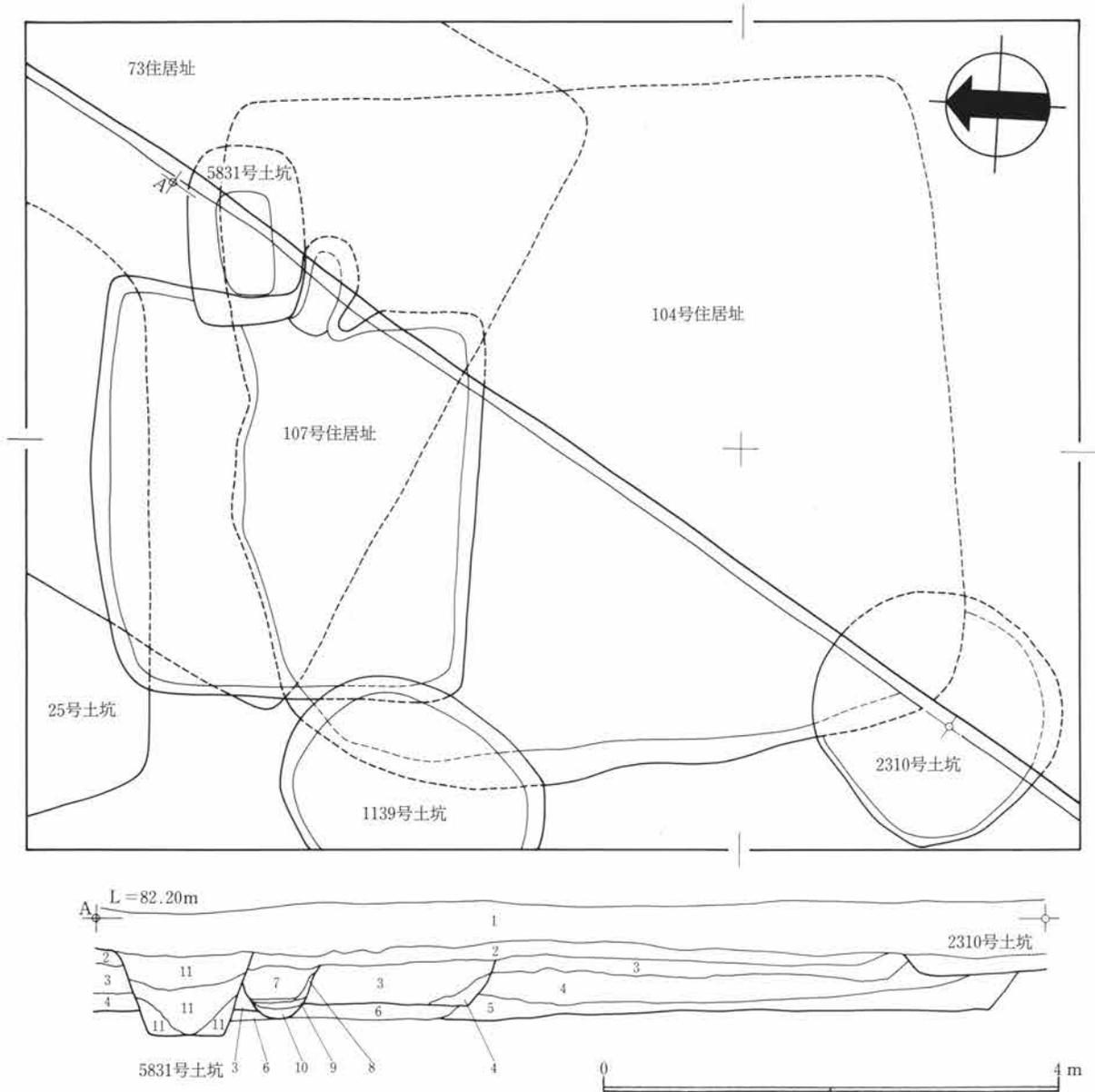
第106図 100号住居址



第107図 101号住居址



第108図 102・106住居址



第109図 104・107住居址

遺物 (挿図番号第246図)

土師器の甕 (459)・須恵器の甗 (460)・須恵器の皿 (461) を出土している。特に須恵器の甗は本遺跡では出土例は少ない。底部の抜けた側面に内面から、簀子の受け木が穿たれている。

その他に土師器687g、須恵器1137gが出土している。

又本住居では鉄製品 (146) が出土している。製品名は刀子である。

3区108号住居址

遺構（挿図番号第110・111図）

本住居址はK11-06, 07, 16, 17グリッドで検出され、北東9.0mに74号住居址、南西17.0mに109号住居址が位置する。本住居址の竈の煙道部分が南北方向の36号溝によって切られている。また、竈前面右寄りには、2881号土坑に北西隅は2880号土坑によって切られている。さらに西壁の一部は3000号土坑が切っている。

規模は長軸4.12m・短軸3.65m、面積14.030m²である。主軸方向はN-17°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は195cm、竈幅は130cm、燃烧部長さは82cm、焚き口幅は60cm、煙道部長さは113cm、煙道部幅は32cmである。炉床ピットは確認されなかった。燃烧部分を住居内に持ち、袖の両側に長甕を使用している。

貯蔵穴は長軸70cm・短軸55cm、深さ25cmである。

土坑は住居の床面から5個検出された。住居構造に直接かかっている土坑ではないと考えられた。P1は長軸32cm・短軸30cm、深さ17cm、P2は長軸42cm・短軸25cm、深さ9cm、P3は長軸23cm・短軸14cm、深さ7cm、P4は長軸25cm・短軸23cm、深さ15cm、P5は長軸67cm・短軸58cm、深さ11cmである。

遺物（挿図番号第246図）

土師器の甕（462・463）・土師器の坏（464・465）を出土している。土師器の坏は小形品で、思高期の系譜に連なるものである。

その他、本住居址からは土坑器4256g、須恵器20g、中世陶器66gが出土している。

3区109号住居址

遺構（挿図番号第112図 写真番号P.L. 53）

本住居址はK11-24, 25グリッドで検出され、西15.0mに65号住居址、北東17.0mに108号住居址が位置する。竈の燃烧部分を2944号土坑が壊している。規模は長軸3.25m・短軸2.85m、面積8.980m²である。主軸方向はN-6°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は85cm（推定）、燃烧部長さは71cm（推定）、焚き口幅は60cm（推定）、煙道部長さは14cm、煙道部幅は19cmである。炉床ピットは長軸70cm・短軸60cm、深さ9cmである。燃烧部分を住居址の外側に出す形態である。

貯蔵穴は長軸50cm・短軸45cm、深さ13cmである。住居の床面から5個の土坑が検出された。また、南壁際にも1ヶ所土坑状の落ち込みが検出された。いずれも住居構造に直接関連あるものとは考えられなかった。P1は長軸53cm・短軸30cm、深さ7cm、P2は長軸35cm・短軸25cm、深さ6cm、P3は長軸35cm・短軸32cm、深さ12cm、P4は長軸90cm・短軸40cm、深さ6cmである。

遺物（挿図番号第246図）

土師器の坏（466）・須恵器の坏（467）を出土している。特に土師器の坏は小形品で、復元部分が多いものの、この器種は珍しい。

その他に本住居址からは土師器242g、須恵器70gが出土している。

3区111号住居址

遺構（挿図番号第113・114図）

本住居址はL9-27, 28, 37, 38グリッドで検出され、南5.0mに26号住居址、北東10.0mに100号住居址

第II章 遺 跡

が位置する。本住居址の南壁に寄って、29号溝が走り、北壁は2386号土坑が切る。竈燃焼部を2240号土坑が切っている。規模は長軸4.70m・短軸3.95m、面積17.920m²である。主軸方向はN-13°-Eを示している。竈の全体は2240号土坑によって切られてはいたものの、煙道部分が、土坑より先に検出されなかったため、燃焼部分を中心に形態を復元した。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は82cm、竈幅は140cm、焚き口幅は55cmである。炉床ピットは長軸95cm・短軸48cm、深さ10cmである。左袖の下からしっかりとした土坑（P1）が竈断面作成時に検出された。袖下からの検出なので、貯蔵穴とはしなかったが、竈が再構築されていると考えるならば、貯蔵穴でもよいのかもしれない。P1は長軸48cm・短軸47cm、深さ22cmである。

遺物（挿図番号第247図）

土師器甕（470）・土師器（471・472）・須恵器の蓋（473）・灰釉陶器の段皿（474）・須恵器の短頸壺（475）・須恵器の坏（476・477・478）を出土している。灰釉陶器の段皿は本遺跡からの出土例は僅少である。また、須恵器の短頸壺も小破片からの復元であるが、本遺跡からの出土は珍しい。

その他に、本住居址からは土師器2609g、須恵器753gが出土している。又砥石が2点出土している。共に材質は砥沢石である。また、土錘が一点出土している。

3区116号住居址

遺構（挿図番号第115図 写真番号P.L. 53）

本住居址はJ11-26, 36グリッドで検出され、北西13.0mに118号住居址、南2.0mに117号住居址が位置する。発掘区域外に住居址の本体がある。竈右側と、南東壁の一部を調査したのみである。ほとんど住居平面が復元できる状態になかった。室の主軸を中心線として方形プランに復元した。規模は長軸2.80m（推定）・短軸2.75m（推定）、面積7.776m²である。主軸方向はN-17°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は60cm（推定）、竈幅は70cm（推定）、焚き口幅は32cm（推定）である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物（挿図番号第247図）

須恵器の蓋（479）を出土している。この破片からは有蓋坏の蓋で受け部にかえりのない器形であろう。その他に本住居址からは須恵器12gの出土で遺物は僅少であった。

3区117号住居址

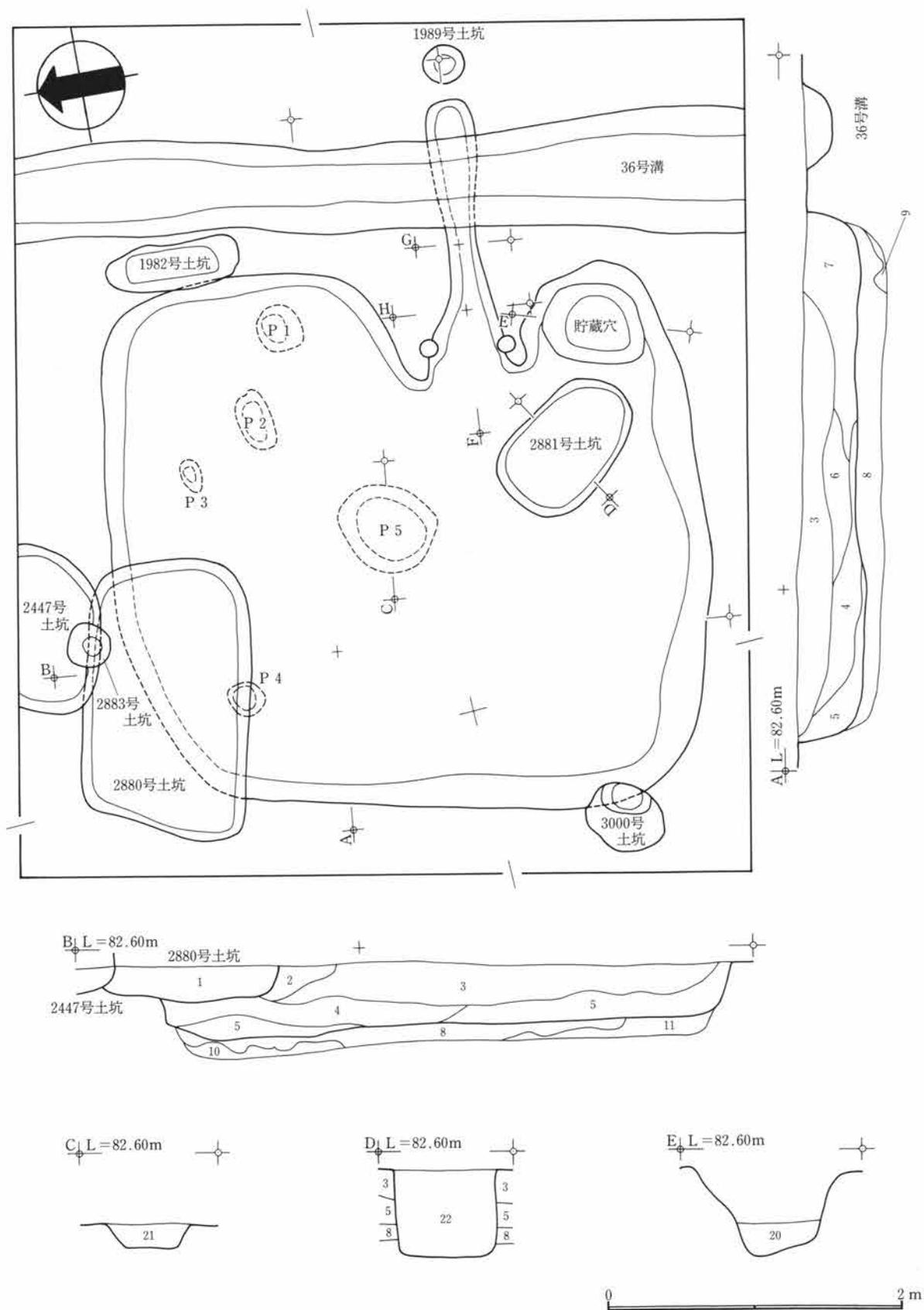
遺構（挿図番号第115図 写真番号P.L. 54）

本住居址はJ11-36グリッドで検出され、北2.0mに116号住居址、南西16.0mに88号住居址が位置する。本住居址の南半分は5869号土坑によって切られている。竈袖部の南隅が、検出されず、やや縦長の住居形態に復元した。

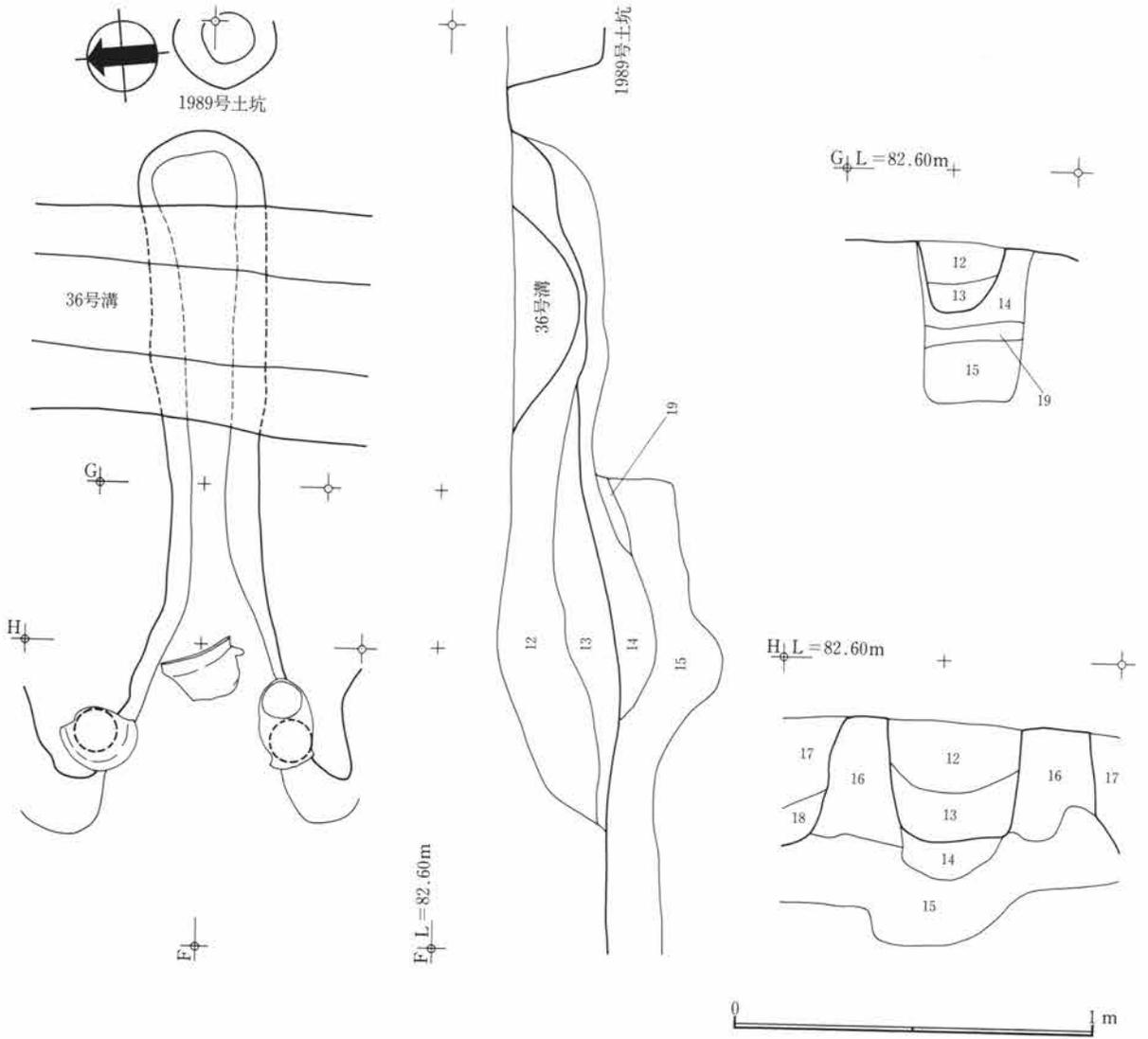
規模は長軸3.10m・短軸2.80m（推定）、面積8.234m²である。主軸方向はN-22°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は110cm（推定）、燃焼部長さは75cm（推定）、焚き口幅は35cm（推定）、煙道部長さは35cm、煙道部幅は25cmである。炉床ピットは長軸40cm・短軸35cm、深さ11cmである。また、竈断面図作成時に検出した土坑を太線で図示したが、竈最終使用時には、炉床面下にあった。

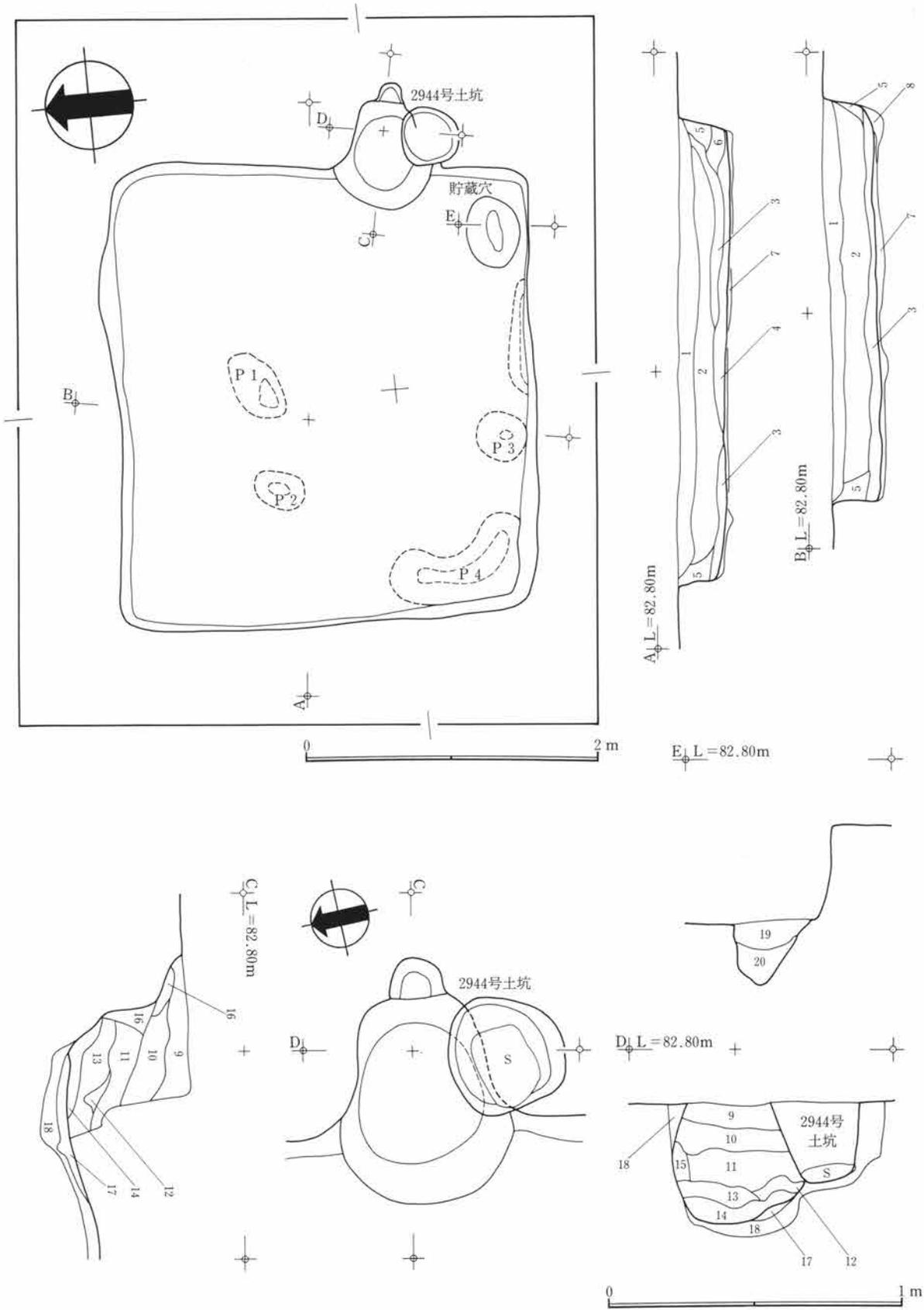
本住居址からの出土遺物はなかった。



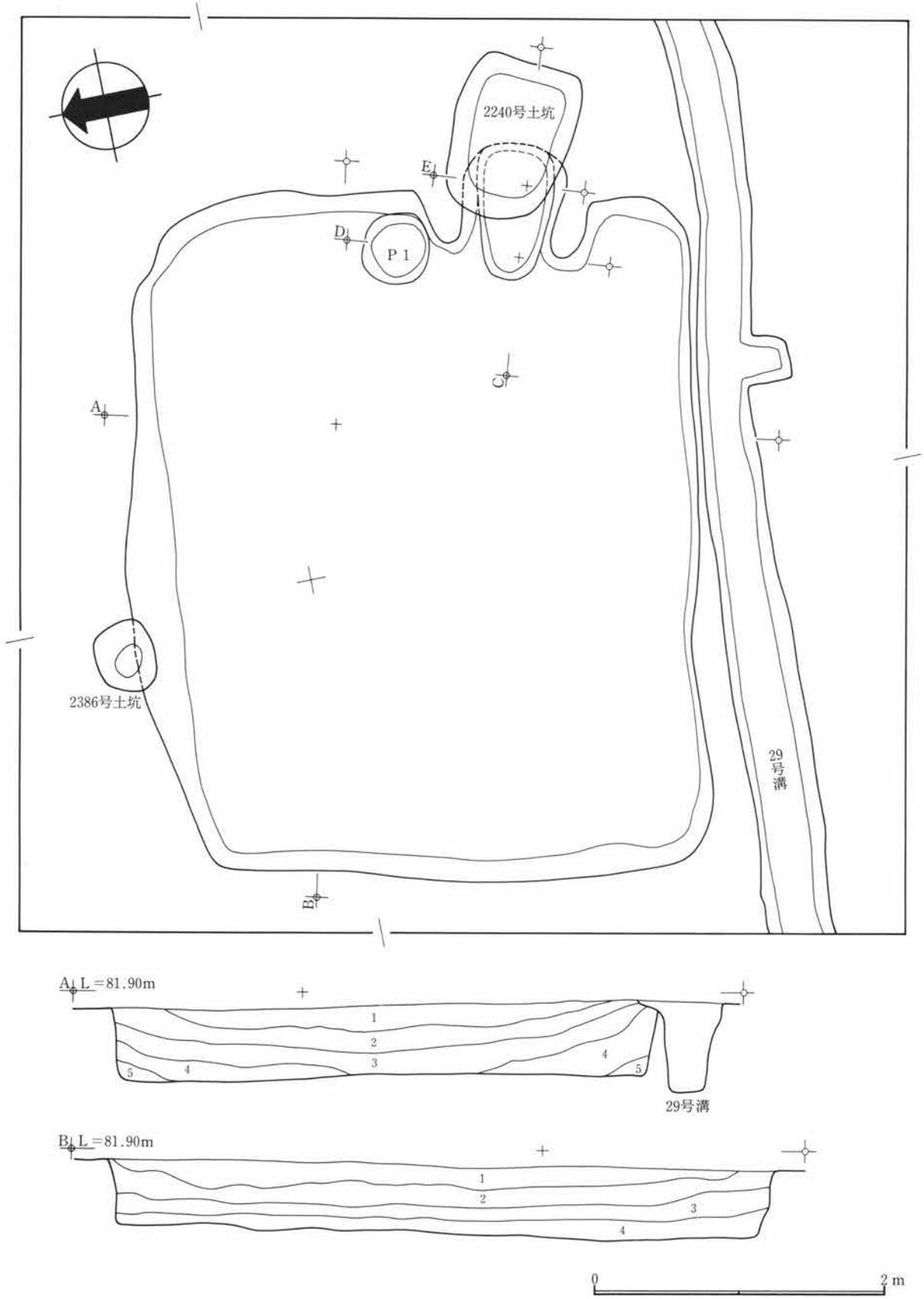
第110図 108号住居址(1)



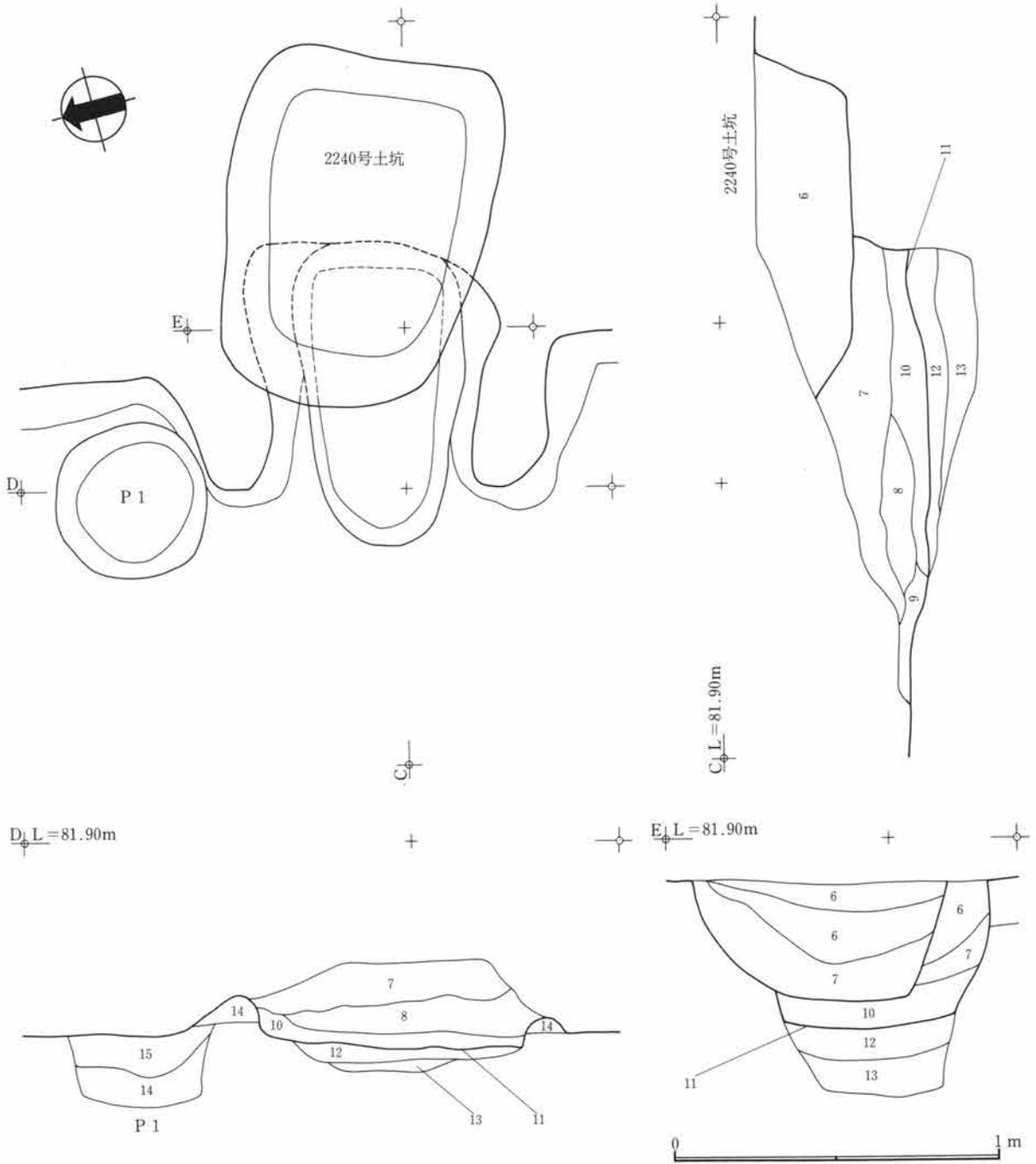
第111图 108号住居址(2)竈



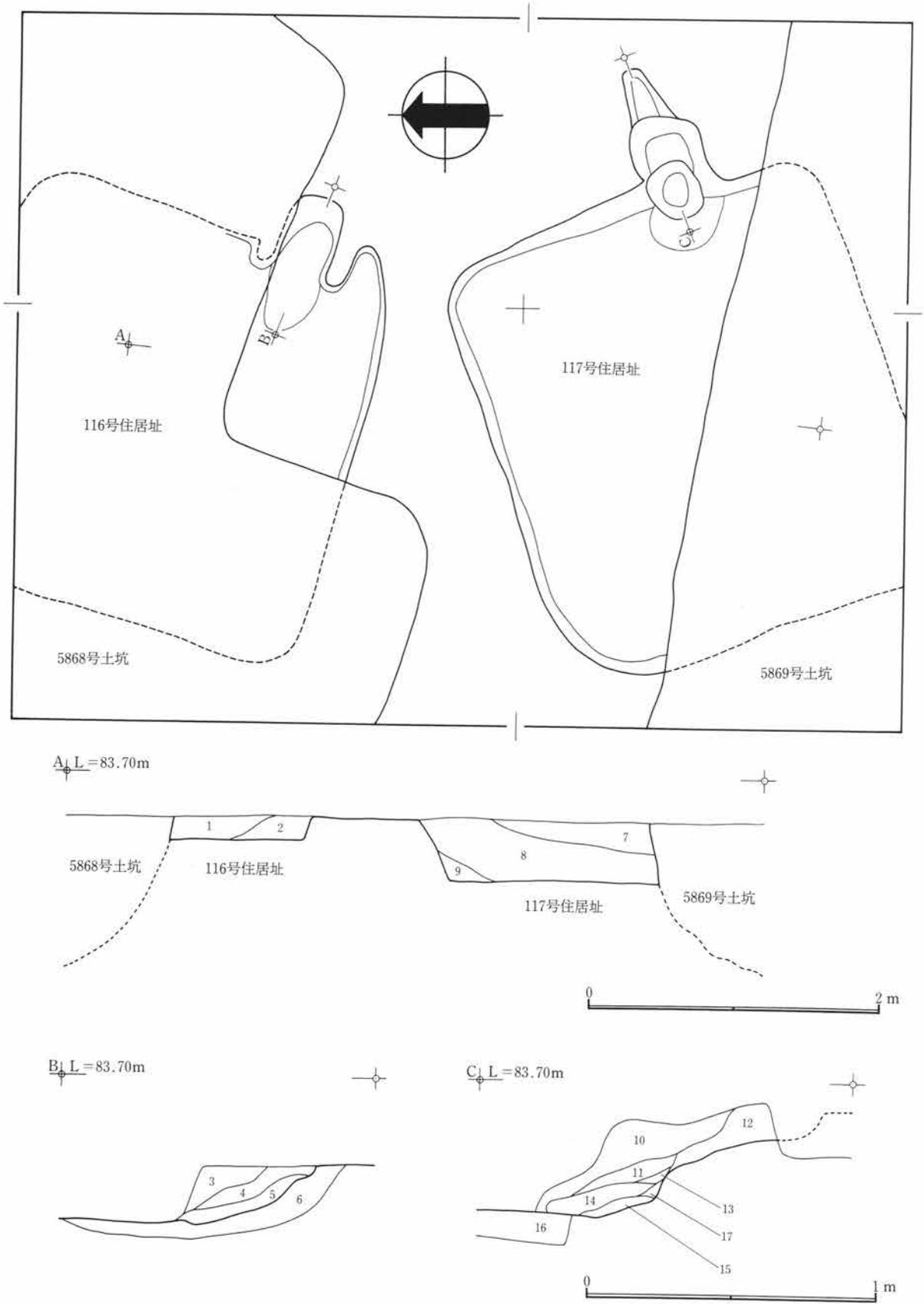
第112図 109号住居址



第113图 111号住居址(1)



第114図 111号住居址(2)竈



第115图 116·117号住居址

3区118号住居址

遺構 (挿図番号第116図)

本住居址はJ11-15, 16グリッドで検出され、北3.0mに119号住居址が位置する。住居の形態はやや縦長長方形で北西隅が張り出す。規模は長軸2.34m・短軸2.02m、面積4.550m²である。主軸方向はN-11°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。

竈全長は74cm(推定)、焚き口幅は50cm(推定)である。炉床ピットは長軸75cm・短軸60cm、深さ7cmである。

遺物 (挿図番号第247図 写真番号P.L. 89)

土師器の甕(480)・須恵器の坏(481・482・483)・須恵器の高台付埴(墨書5)を出土している。土師器の甕は所謂、「コ」の字甕である。

その他に本住居址からの出土遺物は土師器1125g、須恵器1280gである。

本住居址では鉄製品が出土している。製品名は鎌である。

3区119号住居址

遺構 (挿図番号第117図 写真番号P.L. 54)

本住居址はJ11-05, 06グリッドで検出され、南3.0mに118号住居址、南東14.0mに116号住居址が位置する。本住居址の北半分は5870号土坑によって切られていると考えられる(断面図残らず)。規模は長軸3.15m(推定)・短軸2.60m、面積7.746m²である。主軸方向はN-5°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は45cm(推定)、焚き口幅は50cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第247図)

土師器の甕(484)・須恵器の高台付埴(485)を出土している。土師器の甕は所謂「コ」の字甕である。

その他本住居址からは土師器532g、須恵器194gが出土している。

3区120号住居址

遺構 (挿図番号第118図)

本住居址はK10-71, 72, 81, 82グリッドで検出され、北14.0mに152号住居址、南西4.0mに153号住居址が位置する。縦長長方形の本住居址の東南寄り、竈付近を9号溝によって切られている。規模は長軸4.60m・短軸3.40m、面積13.314m²である。主軸方向はN-20°-Eを示している。竈は東壁の南東寄りに付設される。9号溝によって切られ、かろうじて、竈底面が残存していた。竈全長は69cm、竈幅は103cm、焚き口幅は60cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第247図)

土師器の坏(486)・土師器の坏(487)・須恵器の蓋(488)を出土している。

その他本住居址からは土陶器432g、須恵器188gが出土している。

3区121号住居址

遺構 (挿図番号第119・120図 写真番号P.L. 54)

本住居址はK10-73, 74, 83, 84グリッドで検出され、北6.0mに128号住居址が位置する。本住居址は122, 123号住居址よりも新らしい。規模は長軸3.10m・短軸3.00m、面積8.610m²である。竈付近から砂岩が出土している。主軸方向はN-10°-Eを示している。

第II章 遺 跡

竈は東壁に付設される。竈全長は99cm (推定)、焚き口幅は60cm (推定)である。炉床ピットは長軸105cm・短軸90cm、深さ16cmである。

遺物 (挿図番号第248図)

土師器の甕 (489・490)・土師器の坏 (491・492)・須恵器の蓋 (493) を出土している。須恵器の蓋のつまみの形態は、直立気味で珍しい。

その他に本住居址からは土師器3079g、須恵器358gが出土している。

3区122号住居址

遺構 (挿図番号第119・120図 写真番号P L. 54)

本住居址はK10-73, 74, 83, 84グリッドで検出され、北6.0mに128号住居址が位置する。本住居址は121号住居址、123号住居址よりも古い。また、南壁は9号溝によって切られ、残らず、図上による復元である。規模は長軸5.45m・短軸5.35m、面積28.774㎡である。主軸方向はN-8°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は60cm、竈幅は70cm、焚き口幅は40cm、煙道部幅は13cmである。

炉床ピットは長軸124cm・短軸113cm、深さ3cmである。P1は長軸20cm・短軸20cm、深さ6cm、P2は長軸57cm・短軸43cm、深さ31cm、P3は長軸28cm・短軸28cm、深さ12cmである。本住居址の竈の上に火葬土坑の3787土坑が乗っている。長方形の東側の長辺に煙出しが出る。

遺物 (挿図番号第248図)

土師器の坏 (494・495) を出土している。

その他に本住居址からは土師器1854g、須恵器136g、中世のほうろくが60gが出土している。

3区123号住居址

遺構 (挿図番号第119・120図)

本住居址はK10-73, 74, 83, 84グリッドで検出され、北6.0mに128号住居址が位置する。本住居址は121号住居址よりも古く122号住居址よりも新しい。規模は長軸4.95m (推定)・短軸4.65m (推定)、面積22.760㎡である。主軸方向はN-13°-Eを示している。竈は確認されなかった。貯蔵穴は長軸82cm・短軸57cm、深さ18cmである。P1は長軸45cm・短軸22cm、深さ8cm、P2は長軸30cm・短軸26cm、深さ28cm、P3は長軸32cm・短軸27cm、深さ14cm、P4は長軸32cm・短軸27cm、深さ17cm、P5は長軸24cm・短軸20cm、深さ35cm、P6は長軸25cm・短軸24cm、深さ33cm、P7は長軸30cm・短軸20cm、深さ33cm、P8は長軸43cm・短軸24cm、深さ18cmである。121号住居址、122号住居址、123号住居址の周辺には、多数の土坑が集中していた。床下、床上、住居埋没後と3段階に分類してみたが、土坑相互の関連は少ないと考えられた。

遺物 (挿図番号第248図)

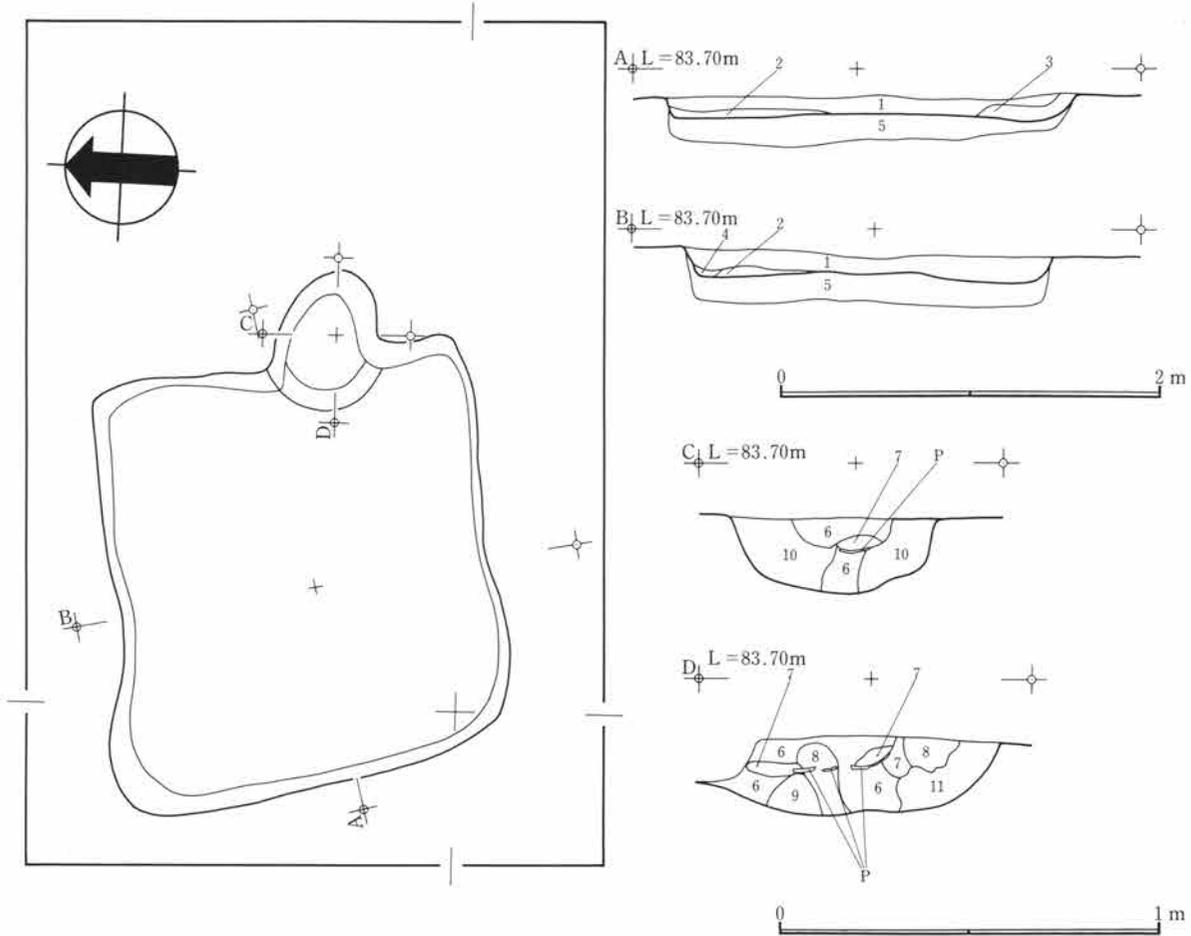
土師器の坏 (496)・須恵器の蓋 (497) を出土している。

その他に本住居址からは土師器722g、須恵器1118g、中世陶器240gが出土している。

3区124号住居址

遺構 (挿図番号第121・122図 写真番号P L. 54)

本住居址はK10-16, 17, 26, 27, 36, 37グリッドで検出され、西5.0mに142号住居址が位置する。4本の支柱穴を残し、方形の平面形は古式の住居址形態である。北西隅の壁は141号住居址によって切られている。



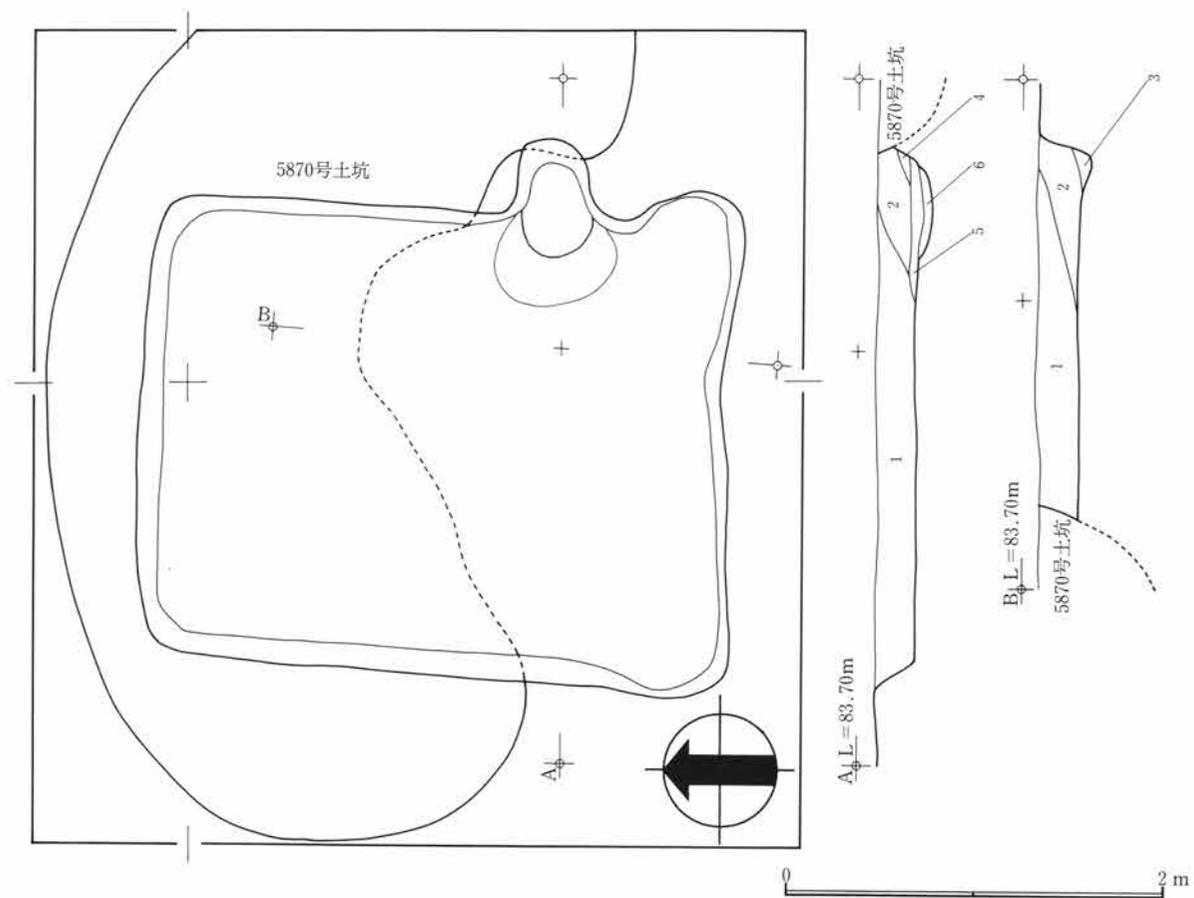
第116図 118号住居址

規模は長軸8.90m・短軸8.50m、面積74.460㎡である。主軸方向はNを示す。竈(古)は北壁に付設される。竈全長は70cm(推定)、焚き口幅は35cm(推定)である。炉床ピットは確認されない。竈(中)は東壁に付設される。竈全長は185cm(推定)、燃烧部長さは101cm(推定)、焚き口幅は30cm(推定)、煙道部長さは84cm、煙道部幅は35cmである。炉床ピットは確認されない。竈(新)は東壁の右寄りに付設される。竈全長は206cm、竈幅は85cm、燃烧部長さは86cm、焚き口幅は45cm、煙道部長さは120cm、煙道部幅は30cmである。炉床ピットは長軸70cm・短軸67cm、深さ2cmである。柱穴1は長軸182cm・短軸103cm、深さ46cm、柱穴2は長軸78cm・短軸76cm、深さ45cm、柱穴3は長軸190cm・短軸88cm、深さ45cm、柱穴4は長軸138cm・短軸90cm、深さ60cmである。P1は長軸37cm・短軸33cm、深さ43cm、P2は長軸133cm・短軸95cm、深さ25cm、P3は長軸42cm・短軸32cm、深さ34cm、P4は長軸63cm・短軸59cm、深さ43cm、P5は長軸60cm・短軸52cm、深さ43cm、P6は長軸104cm・短軸60cm、深さ38cm、P7は長軸63cm・短軸46cm、深さ19cmである。

遺物 (挿図番号第248図)

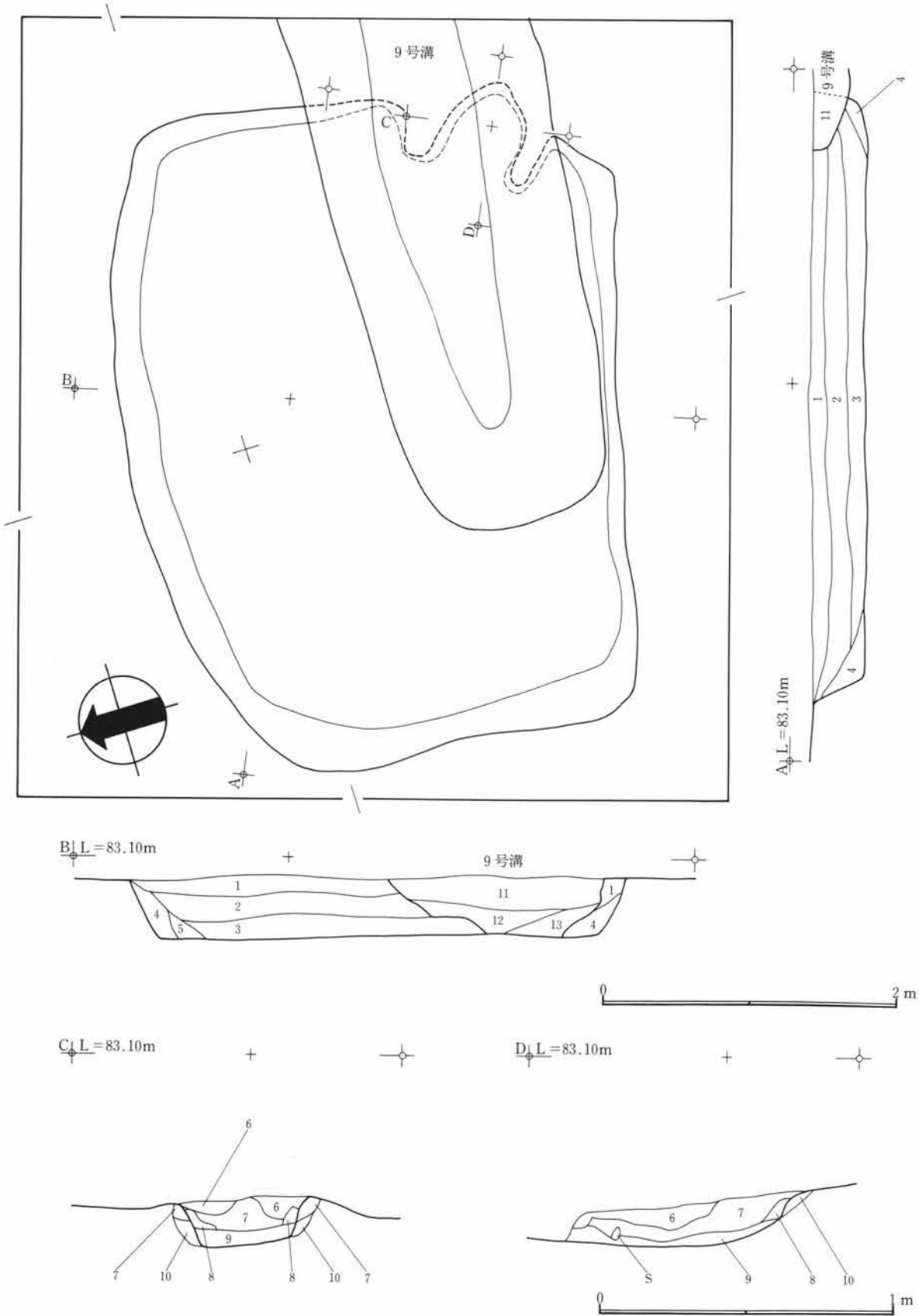
土師器の甕(498)・土師器の坏(499~502)・須恵器の甕(503)・須恵器の高台坏(504)・須恵器の坏(505)・須恵器の蓋(506・507・508)・須恵器の鉢(509・510)を出土している。特に須恵器の鉢(509)は擂鉢、須恵器の鉢(510)は鉄鉢である。

その他に本住居址からは土師器3807g、須恵器1364g、中世ほうろく32gが出土している。

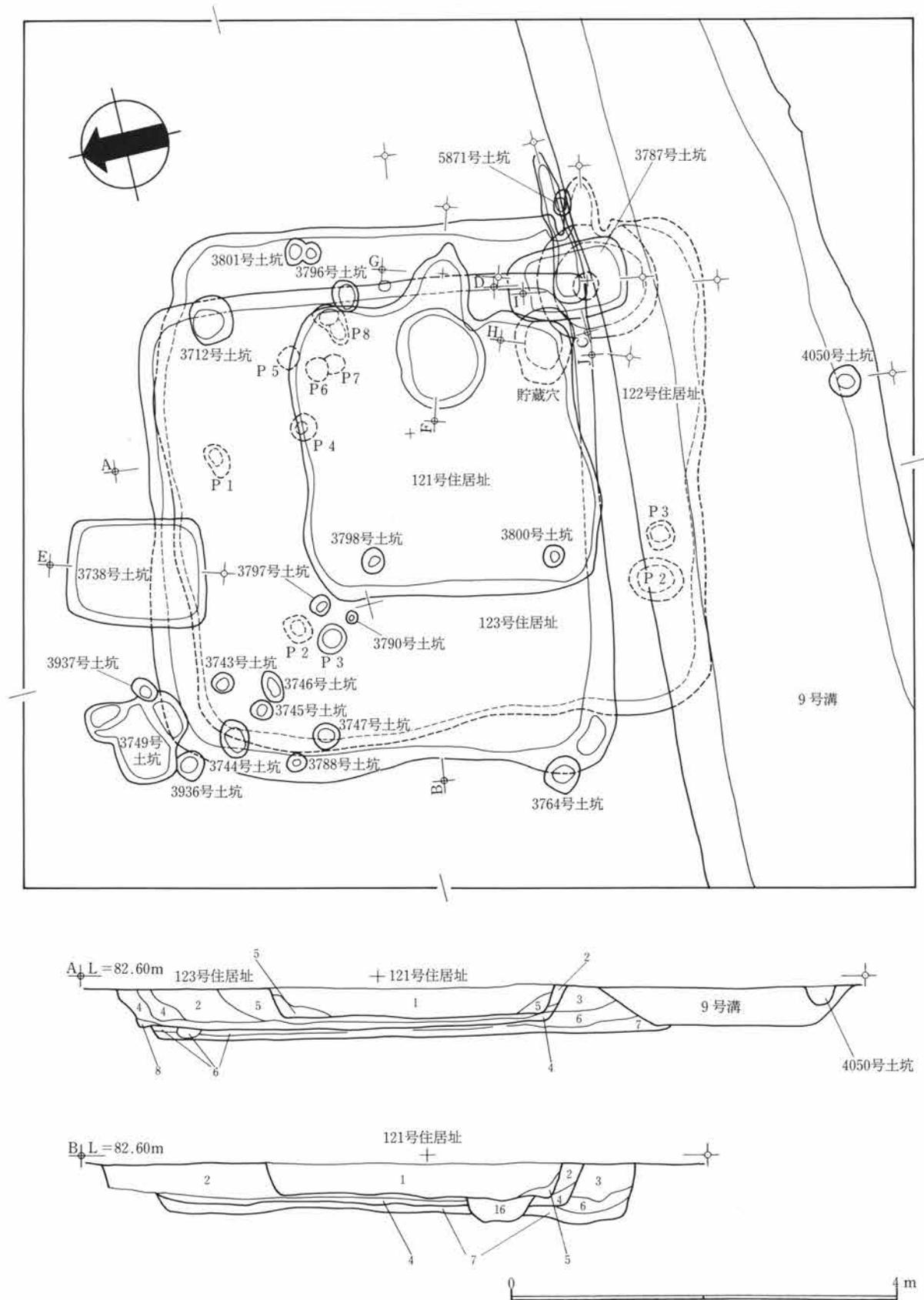


第117図 119号住居址

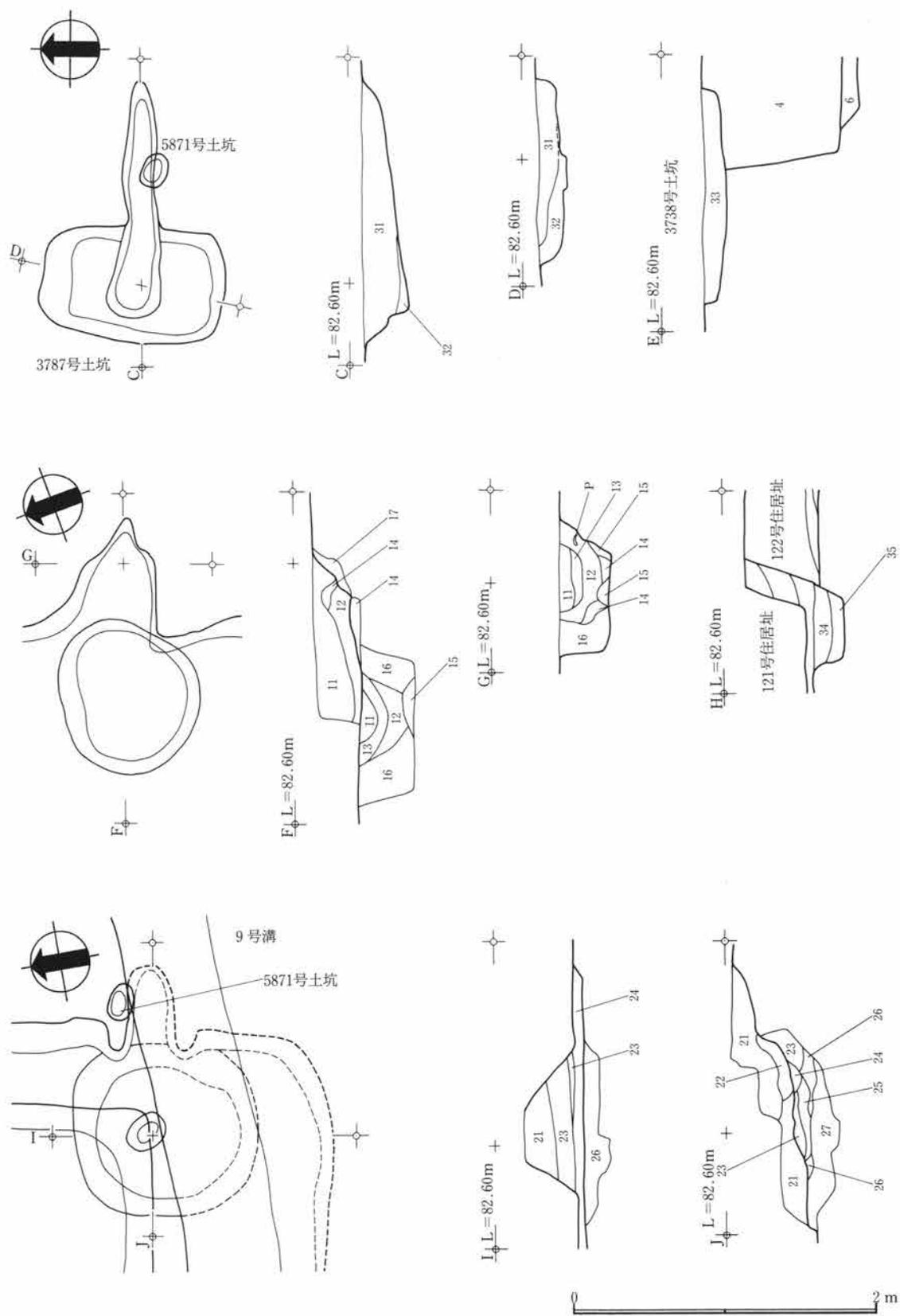
本住居では、鉄製品が2点出土している。製品名は不明である。



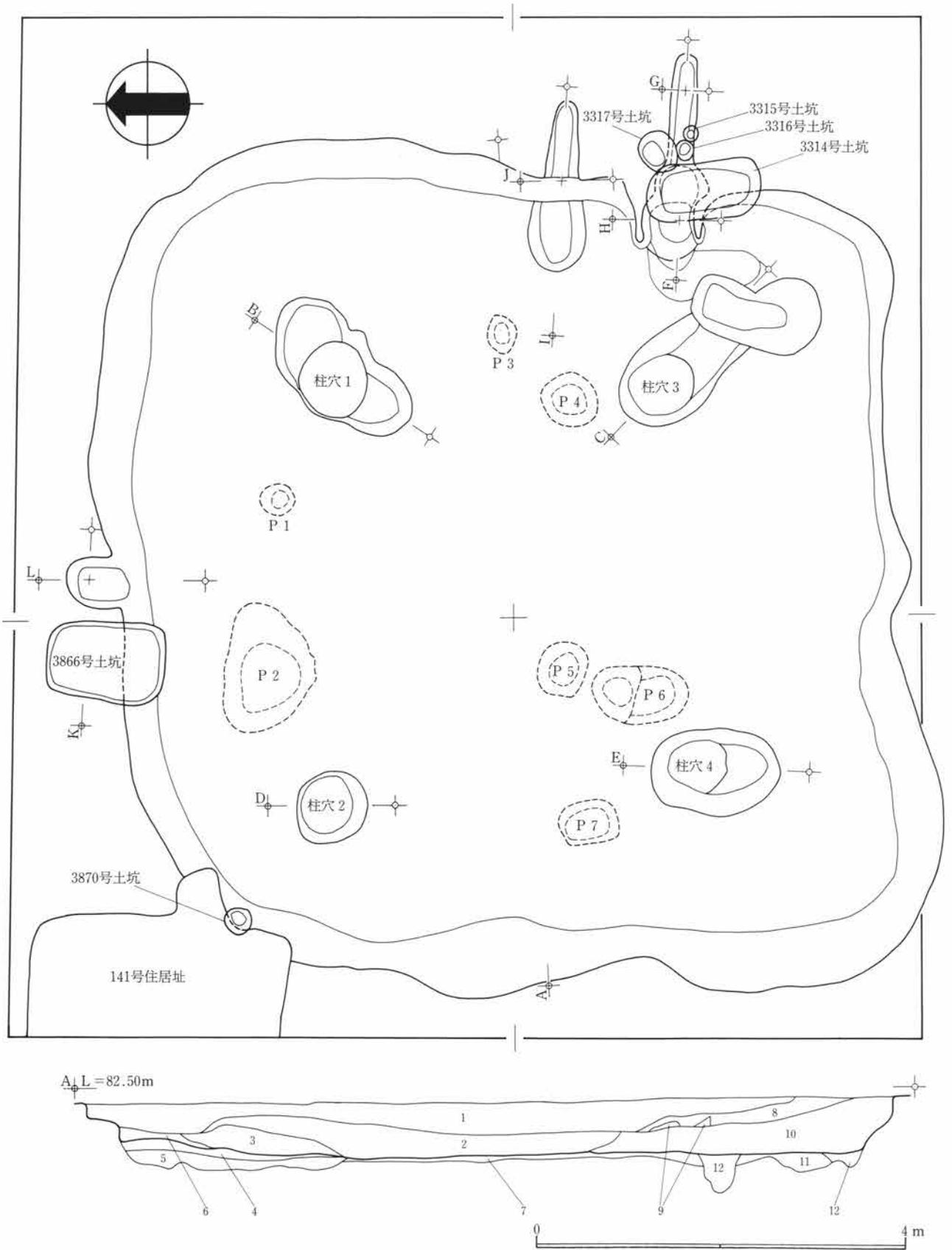
第118図 120号住居址



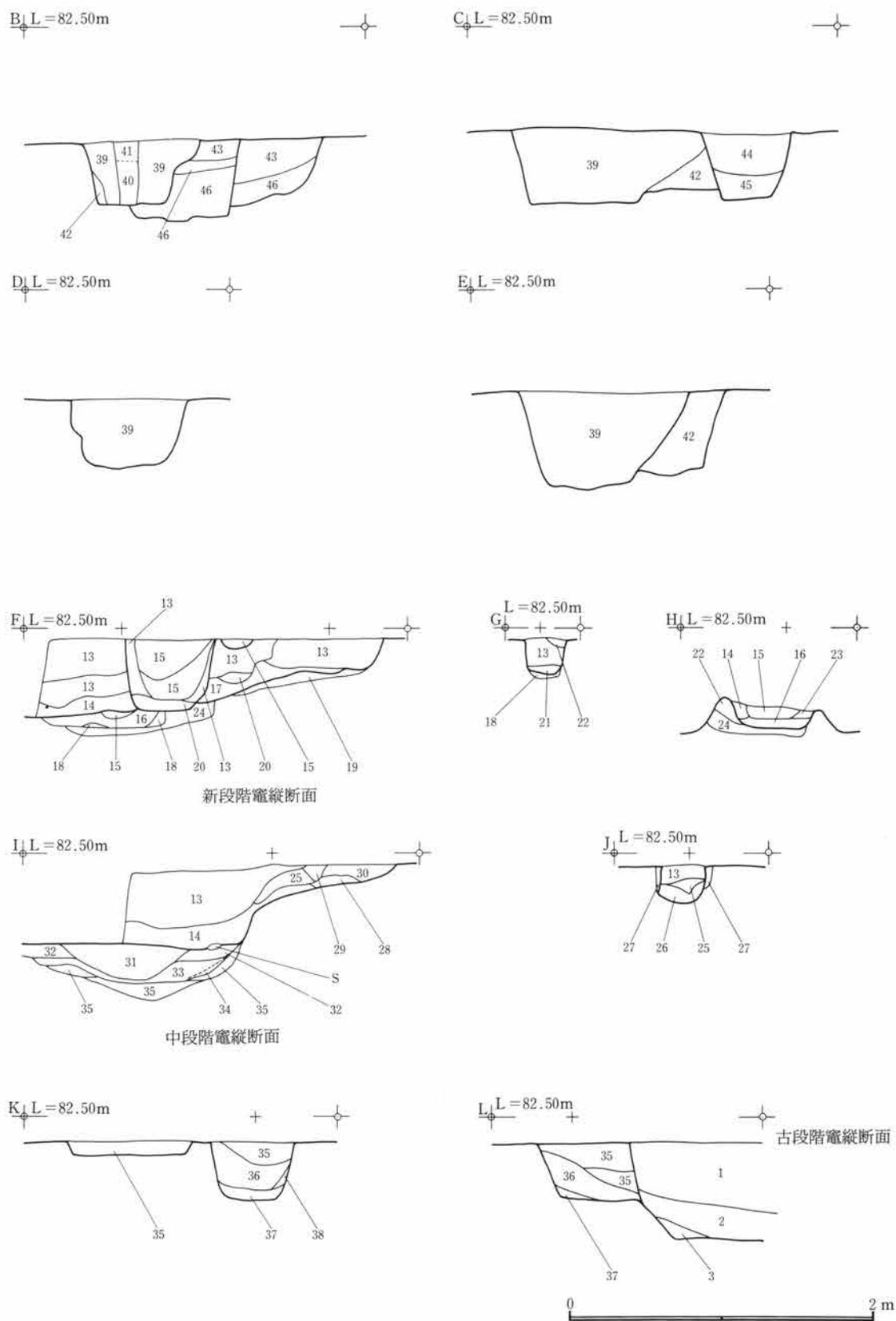
第119图 121·122·123号住居址(1)



第120図 121・122・123号住居址(2)竈



第121图 124号住居址(1)



第122図 124号住居址(2)

3区125号住居址

遺構（挿図番号第123・124図 写真番号P L. 54）

本住居址はJ11-32, 33グリッドで検出され、南西16.0mに126号住居址、東29.0mに117号住居址が位置する。

住居址の規模は長軸3.65m・短軸3.30m、面積11.646㎡である。主軸方向はN-21°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は137cm、竈幅は115cm、燃焼部長さは73cm、焚き口幅は38cm、煙道部長さは64cm、煙道部幅は45cmである。炉床ピットは長軸82cm・短軸62cm、深さ6cmである。本竈は住居内に燃焼部を持つ構造である。燃焼部は方形の平面形で両側に袖が残る。煙道は不安定であるが、長く細く残っている。住居の床下には掘り方が残っているが住居構築に関連する資料は少なかった。

遺物（挿図番号第249図）

土師器の甕（511）・土師器の坏（512）を出土している。

その他に本住居址からは土師器1275g、須恵器930gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。製品名は鎌である。

3区126号住居址

遺構（挿図番号第125・126図 写真番号P L. 54）

本住居址はJ11-40, 41, 50, 51グリッドで検出され、北東16.0mに125号住居址が位置する。本住居址は127号住居址に切られている。また、北壁側は発掘区域外で、平面形状の大半は図上復元である。規模は長軸4.80m（推定）・短軸3.54m（推定）、面積16.098㎡である。主軸方向はN-14°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は79cm、竈幅は88cm、焚き口幅は47cmである。炉床ピットは長軸88cm・短軸50cm、深さ24cmである。竈の左袖に切石（砂岩）が右袖には古瓦を使用している。

遺物（挿図番号第249図）

土師器の甕（513）・土師器の台付甕の脚部（514）・土師器の坏（515・516）・須恵器（517・518）を出土している。土師器の坏（515）は指オサエを残す薄手の器種である。また、土師器の坏（516）は鉄鉢形の模倣かもしれない。

その他に本住居址からは土師器934g、須恵器1703g、古代瓦1760gが出土している。

3区127号住居址

遺構（挿図番号第125・126図 写真番号P L. 54）

本住居址はJ11-40, 41, 50, 51グリッドで検出され、北東16.0mに125号住居址が位置する。本住居址は126号住居址を切って乗る。北東壁は発掘区域外で復元してある。規模は長軸4.35m（推定）・短軸3.80m（推定）、面積16.632㎡である。主軸方向はN-30°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は50cm、竈幅は55cm、焚き口幅は25cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物（挿図番号第249図）

土師器の甕（519）・須恵器の坏（520）を出土している。

その他に本住居址からは土師器238g、須恵器46gが出土している。

3区128号住居址

遺構 (挿図番号第127・128図 写真番号P L. 54)

本住居址はK10-63, 64, 73, 74グリッドで検出され、南5.0mに122号住居址、北西4.0mに149号住居址が位置する。東壁から北壁にかけて5つの土坑が本住居址を切っている。また南西隅の壁も5659土坑が切っている。本住居の東壁に土坑が集中している。本住居の規模は長軸3.60m・短軸3.30m、面積10.642m²である。主軸方向はN-13°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は139cm、燃焼部長さは62cm、焚き口幅は55cm(推定)、煙道部長さは77cm、煙道部幅は27cmである。炉床ピットは長軸93cm・短軸51cm、深さ7cmである。住居址の竈の燃焼部分は、住居の外側に出る形態である。煙道部も方形の燃焼部から斜めに張り出す。

貯蔵穴は長軸70cm・短軸56cm、深さ35cmである。

遺物 (挿図番号第249図)

土師器の甕 (521)・土師器の坏 (522・523)・須恵器の坏 (524)・須恵器の高坏 (525) を出土した。

その他に本住居址からは土師器1647g、須恵器182gが出土している。土師器の坏 (522) の胎土は須恵質である。内面に荒い棒状の篋工具による暗文が施されている。

3区130号住居址

遺構 (挿図番号第129・130図 写真番号P L. 55)

本住居址はK11-20, 21, 30, 31グリッドで検出され、北5.0mに98号住居址、南西5.0mに55号住居址が位置する。平面形態は変形気味の方角を呈している。壁直下の周囲に溝がめぐる。規模は長軸3.45m・短軸3.30m、面積11.336m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は121cm、竈幅は90cm、燃焼部長さは29cm、焚き口幅は40cm、煙道部長さは92cm、煙道部幅は25cmである。炉床ピットは長軸80cm・短軸56cm、深さ4cmである。竈の形態は住居内に燃焼部を持つ。両袖が短かく残る。煙道部の遺存状態は良好で天井を残す。

竈の右隅に土坑 (P1) が検出された。貯蔵穴とも考えられるが焼土、炭火物の混入はみられなかった。P1は長軸32cm・短軸30cm、深さ20cmである。

遺物 (挿図番号第249図 写真番号P L. 84)

土師器の甕 (526)・土師器の坏 (527)・須恵器の蓋 (528)・須恵器の高坏 (529) を出土している。

その他、本住居址からは土師器870g、須恵器382gが出土している。

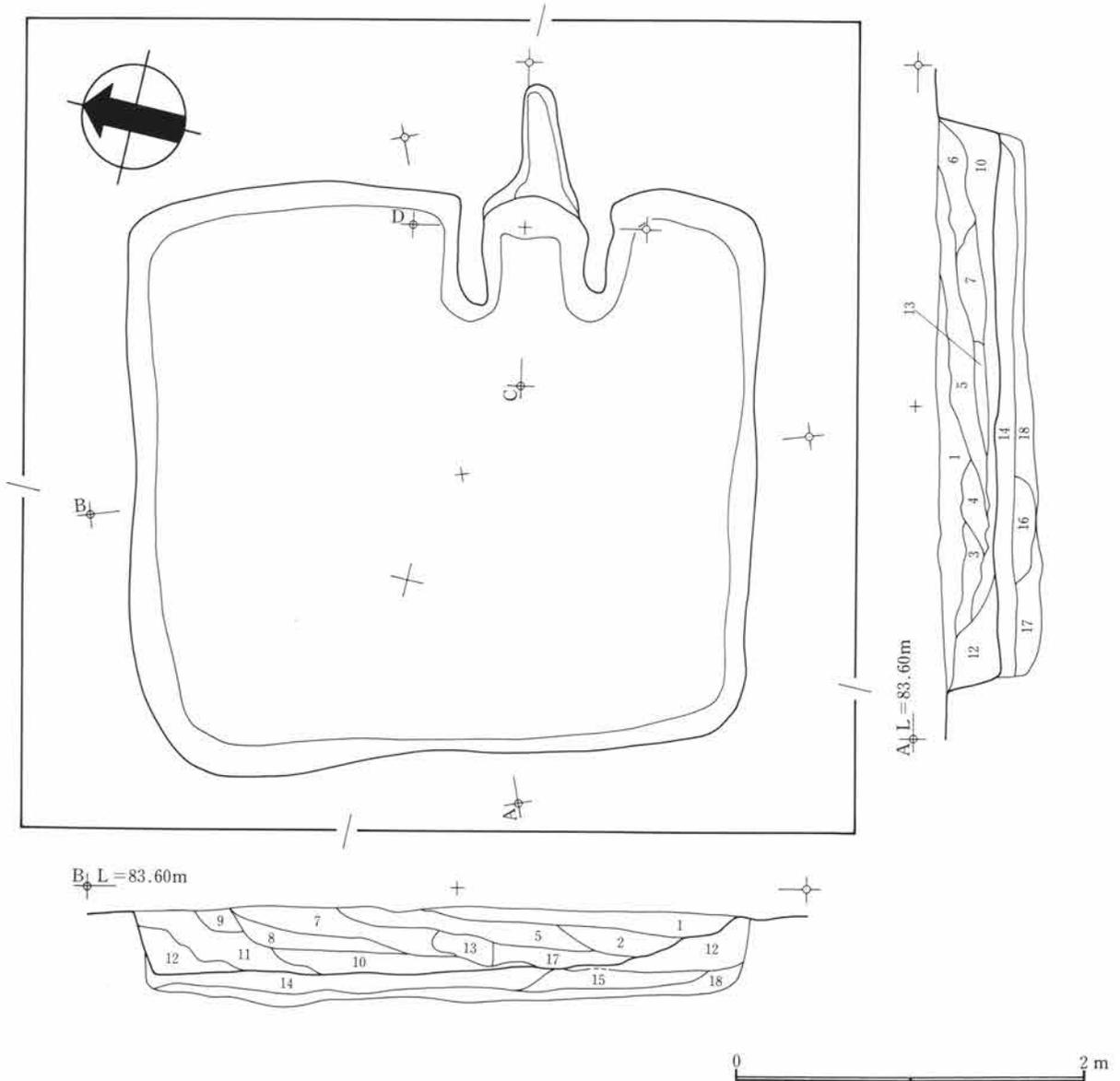
3区131号住居址

遺構 (挿図番号第131図 写真番号P L. 55)

本住居址はK9-87グリッドで検出され、西11.0mに136号住居址、南11.0mに146号住居址が位置する。本住居址中央を東西方向に50号溝が切る。また、北東隅は発掘区域外となっている。

本住居の規模は長軸2.95m (推定)・短軸2.40m、面積8.210m²である。主軸方向はN-2°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は65cm (推定)、焚き口幅は55cm (推定) である。炉床ピットは長軸30cm・短軸19cm、深さ7cmである。30号溝によって切られた竈の一部分、右袖側が残った。燃焼部内から土師器の長頸と須恵器の坏類が重って出土した。床面下から、4箇の土坑が検出された。P1は長軸33cm・



第123図 125号住居址(1)

短軸32cm, 深さ8cm, P2は長軸33cm・短軸30cm, 深さ5cm, P3は長軸25cm・短軸25cm, 深さ4cm, P4は長軸30cm・短軸29cm, 深さ9cmである。

遺物 (挿図番号第250図 写真番号P L. 84)

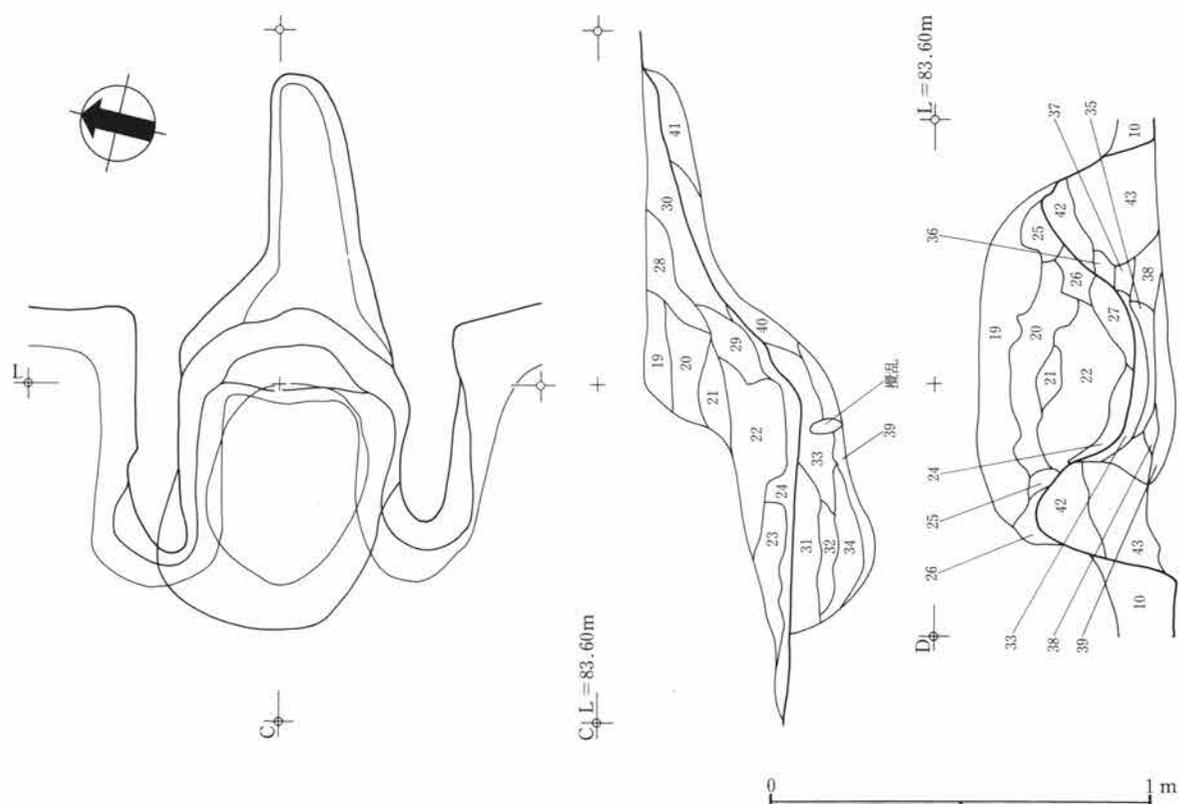
土師器の甕(530)・土師器の坏(531・532)・須恵器の蓋(533)・須恵器の高台付碗(534・535・538・539・541)・須恵器の皿(537・540・542)を出土している。土師器の坏は指オサエの薄い仕上がりで出土の数は少なかった。また、須恵器の皿(542)はD径に比して、器高の浅い本遺跡では珍しい器種である。

その他に本住居址からは土師器2710g、須恵器1713gが出土している。

本住居からは鉄製品が出土している。板状の鋳物鉄である。

3区132号住居址

遺構 (挿図番号第132図 写真番号P L. 55)



第124図 125号住居址(2)竈

本住居址はK 9-75, 85グリッドで検出され、南西9.0mに137号住居址が位置する。本住居址は189号住居を切っている。また北西隅は未発掘のため、平面形態は復元している。

規模は長軸2.85m(推定)・短軸2.32m(推定)、面積6.382㎡である。主軸方向はN-7°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は80cm、竈幅は86cm、焼き口幅は46cmである。炉床ピットは確認されなかった。本住居址の竈の燃焼部は住居の外側に出る形態である。左袖は襖石の抜き穴、右袖の河原石の袖材が立って残る。住居の床面下に土坑が検出された。位置的には189号住居址の中央に思える。P 1は長軸31cm・短軸20cm、深さ25cmである。

遺物 (挿図番号第250図)

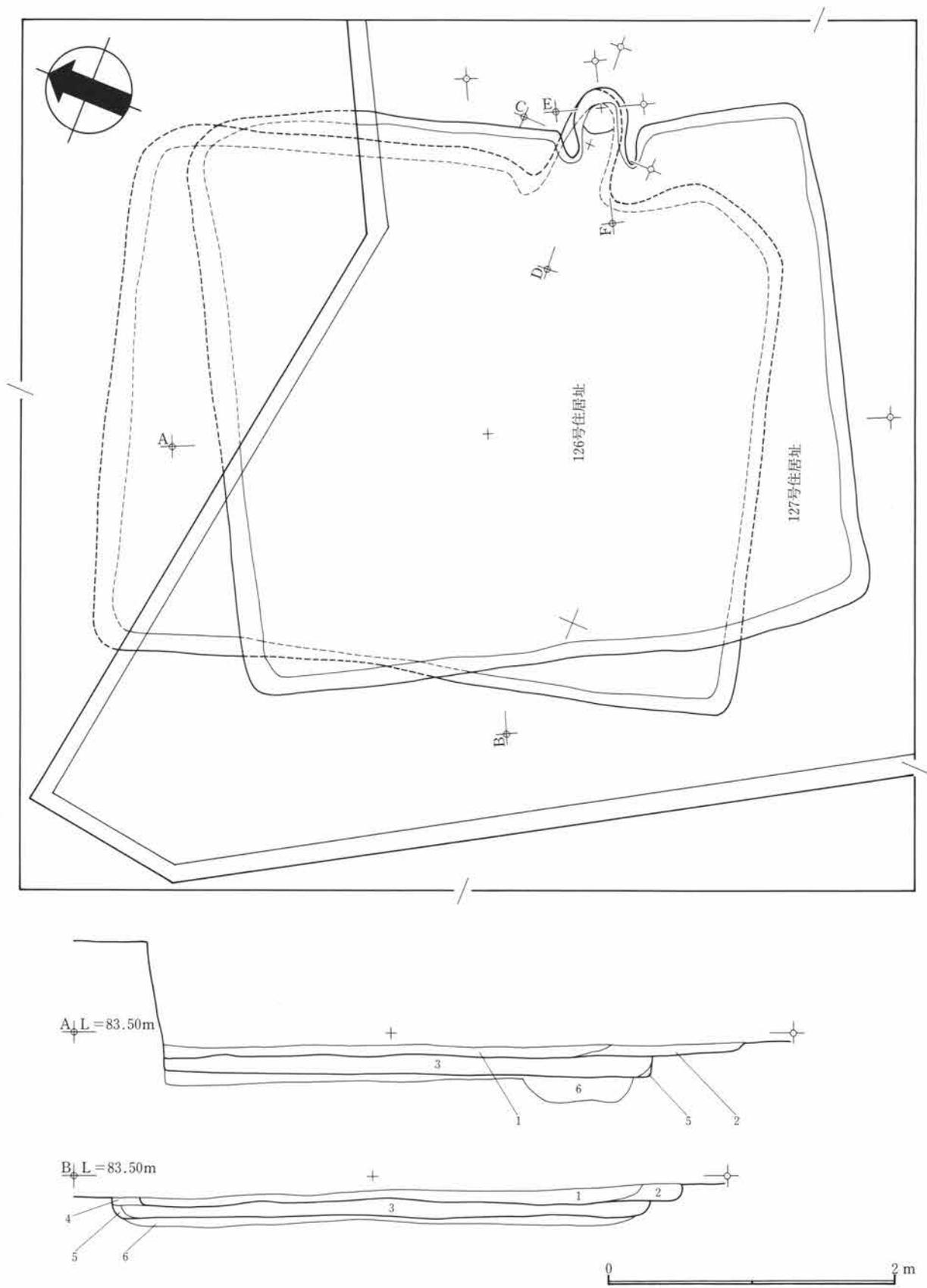
土師器の甕(543・544)・土師器の台付甕(545)・土師器の坏(546)・須恵器の坏(547・548)を出土している。土師器の甕は所謂、「コ」の字甕である。また、土師器の坏は器種は珍しく、小破片からの復元である。その他に土師器2286g、須恵器550gが出土している。

3区189号住居址

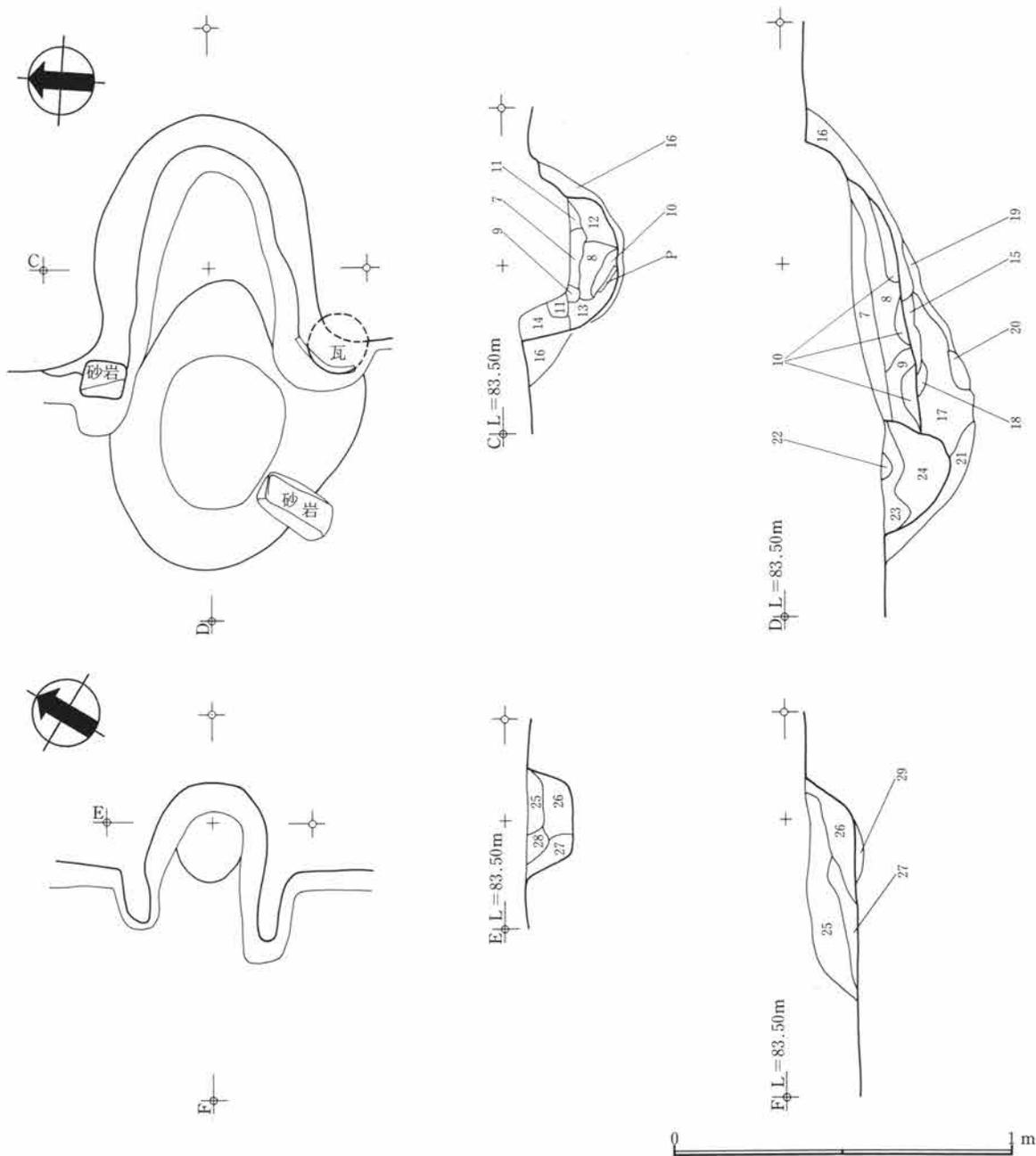
遺構 (挿図番号第132図)

本住居址はK 9-75, 85グリッドで検出され、南西7.0mに137号住居址が位置する。本住居址は132号住居址によって切られている。また住居の北西半分は未発掘のため、平面形態は図上復元してある。北東隅は132号住居址内に納まること、南西隅と考えられる曲線がみられることを理由にしてある。

規模は長軸2.85m(推定)・短軸2.42m(推定)、面積6.640㎡である。主軸方向はN-18°-Eを示している。



第125図 126・127号住居址(1)



第126図 126・127号住居址(2)

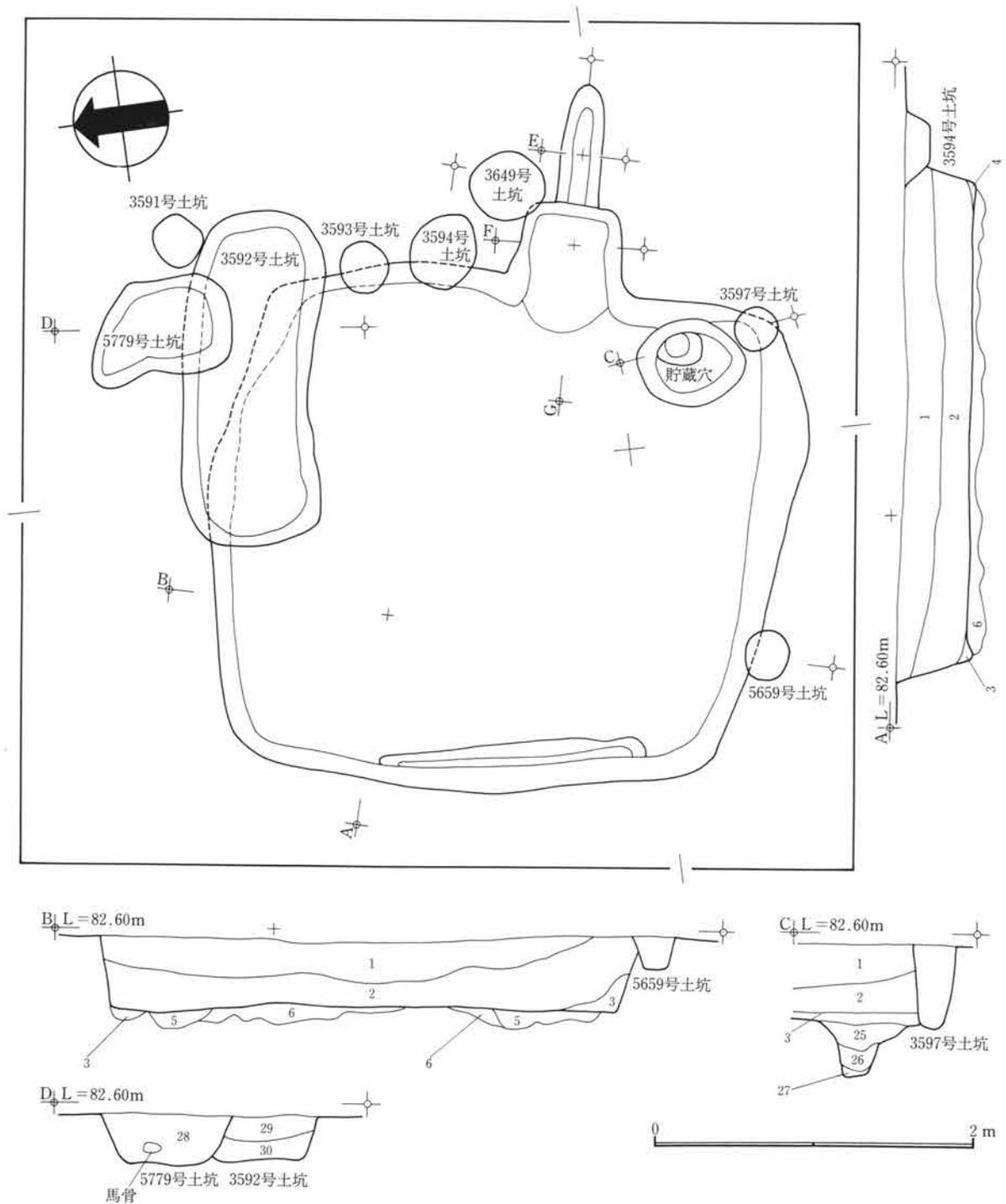
竈は確認されなかった。

本住居址からは出土遺物は検出されていない。

3区133号住居址

遺構 (挿図番号第133図 写真番号P L. 55)

本住居址はK 9—95, 96・K10—05, 06グリッドで検出され、南3.0mに136号住居址が位置する。本住居址の北西隅は139号住居址を切っている。また、北東部分は5663号土坑によって切られている。規模は長軸3.50m・短軸2.90m、面積9.342m²である。主軸方向はN—9°—Wを示す。竈は東壁に付設される。竈全長は112

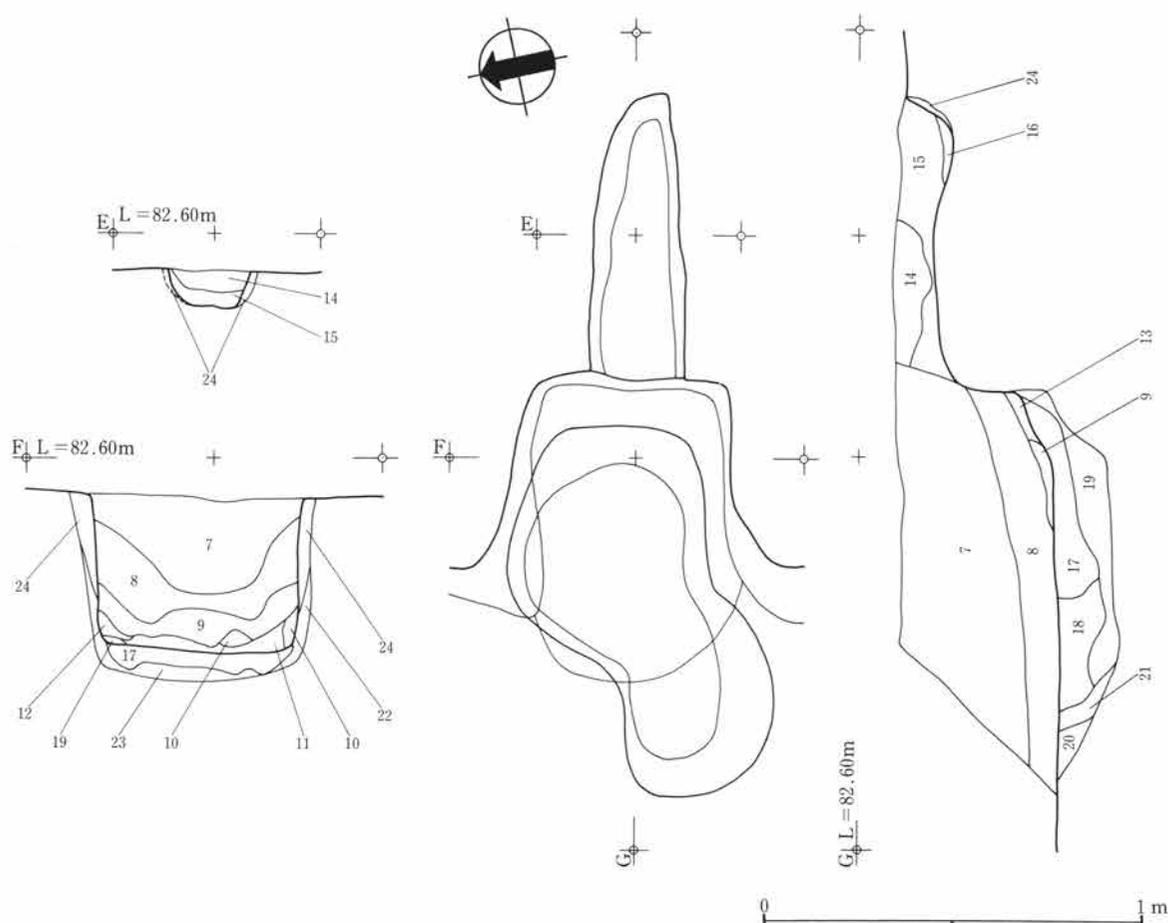


第127図 128号住居址(1)

cm(推定), 焚き口幅は40cm(推定)である。炉床ピットは長軸112cm・短軸55cm, 深さ12cmである。燃烧部分は住居の外側に出る形態で、両袖の構造は不明である。住居の床下に大量の土坑が検出された。掘立柱建物址として、土坑番号で処理したものもある。本住居址に属すると考えた土坑はP 1とP 2である。P 1は長軸103cm・短軸82cm, 深さ28cm, P 2は長軸120cm・短軸88cm, 深さ19cmである。

遺物 (挿図番号第251図)

土師器の甕 (549)・須恵器の高坏 (550)・須恵器の高台付埴 (551)・須恵器の坏 (552) を出土している。



第128図 128号住居址(2)竈

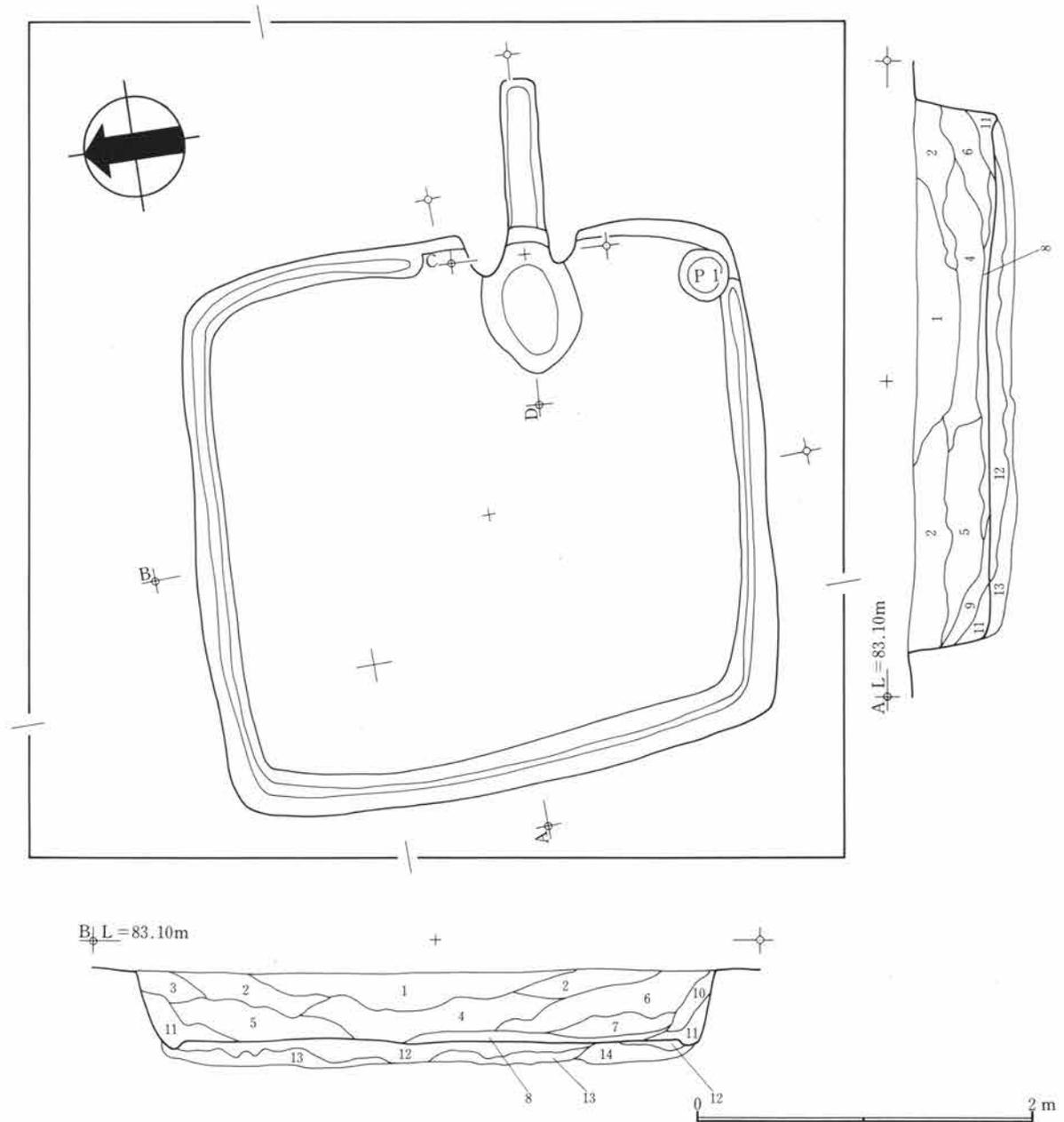
その他に本住居址からは土師器1130g、須恵器688gが出土している。須恵器の高坏は完存はしないが、皿の部分と脚の部分の接合部がみられることで、図示した。

3区134号住居址

遺構 (挿図番号第134・135図 写真番号P.L. 55)

本住居址はK9-94, 95・K10-04, 05グリッドで検出され、北3.0mに137号住居址が位置する。本住居址の東壁北寄りには139号住居址によって切られている。南東隅の壁は145号住居址によって切られている。長方形の住居址の平面は、しっかりとしており、壁の下に溝がめぐっている。4本の主柱穴も検出されている。規模は長軸5.55m・短軸4.85m、面積25.728㎡である。主軸方向はN-3°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。平面形の大きさにくらべると遺存状態にもよるが、竈は小さい。竈全長は55cm(推定)、焚き口幅は30cm(推定)である。炉床ピットは長軸104cm・短軸70cm、深さ15cmである。柱穴1は長軸50cm・短軸37cm、深さ33cm、柱穴2は長軸62cm・短軸60cm、深さ38cm、柱穴3は長軸48cm・短軸45cm、深さ41cm、柱穴4は長軸65cm・短軸60cm、深さ59cmである。その他に床面下に4箇の土坑を検出した。住居構造に直接関連する資料は少ないと考えられる。P1は長軸60cm・短軸53cm、深さ17cm、P2は長軸30cm・短軸26cm、深さ10cm、P3は長軸115cm・短軸90cm、深さ14cm、P4は長軸67cm・短軸57cm、深さ26cmで



第129図 130号住居址(1)

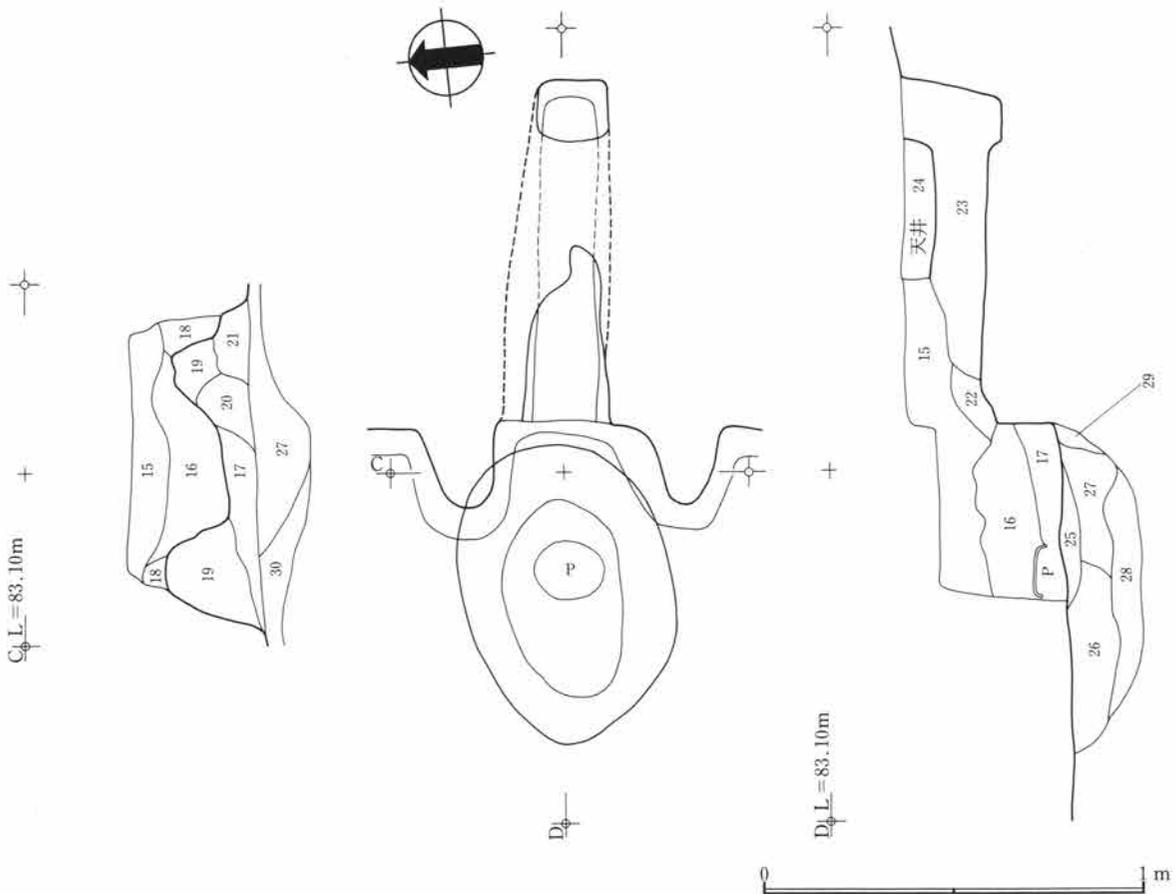
ある。

遺物 (挿図番号第251図 写真番号P L. 84)

土師器の甕(553)・土師器の坏(554・555・556)・須恵器の蓋(557・558)・須恵器の坏(559)を出土した。
 その他に、本住居址からは土師器7467g、須恵器1352gが出土している。
 本住居では鉄製品が3点出土している。製品名は棒状、不明2点である。

3区135号住居址

遺構 (挿図番号第136・137図 写真番号P L. 55)



第130図 130号住居址(2)竈

本住居址はK10-05, 06, 15, 16グリッドで検出され、南6.0mに144号住居址が位置する。本住居址は136号住居址を切って、新しい。また、145号住居址の東南隅も切っている。規模は長軸3.70m・短軸3.20m、面積11.736㎡である。主軸方向はN-10°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。燃烧部分を住居の外備に出す形である。竈全長は96cm(推定)、焚き口幅は55cm(推定)である。炉床ピットは長軸85cm・短軸56cm、深さ17cmである。貯蔵穴は長軸105cm・短軸70cm、深さ16cmで、やや楕円形を呈する。

遺物 (挿図番号第251図)

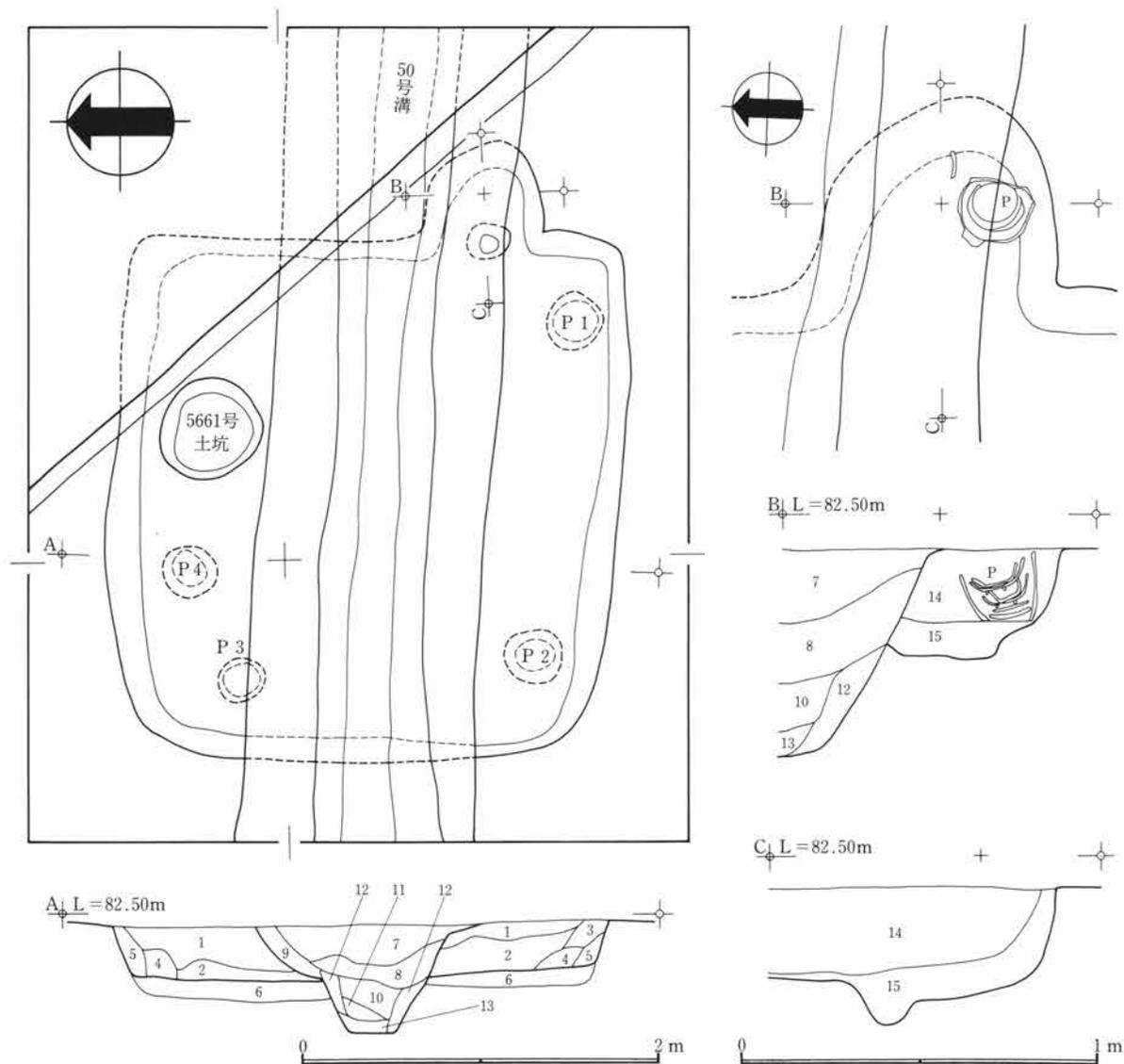
土師器の甕(560)・須恵器の広口壺(561)・土師器の坏(562)・須恵器の坏(563)を出土している。その他に、本住居址からは土師器1740g、須恵器842gが出土している。

3区136号住居址

遺構 (挿図番号第136・137図 写真番号P L. 55)

本住居址はK10-05, 06グリッドで検出され、東12.0mに146号住居址が位置する。本住居址は145号住居址の西壁を切って新しく、南東隅を135号住居址に切られて古い。

規模は長軸4.40m・短軸3.45m、面積14.476㎡である。主軸方向はNを示す。竈は東壁の右寄りに付設される。燃烧部分が縦方向に長く、住居の外側に出る形態である。また煙道も残って長い。竈全長は142cm、燃



第131図 131号住居址

焼部長さは82cm、焚き口幅は45cm、煙道部長さは60cm、煙道部幅は20cmである。

炉床ピットは長軸92cm・短軸60cm、深さ5cmである。貯蔵穴は長軸85cm・短軸83cm、深さ18cmである。

遺物 (挿図番号第251図)

土師器の甕 (564)・須恵器の坏 (565) を出土している。

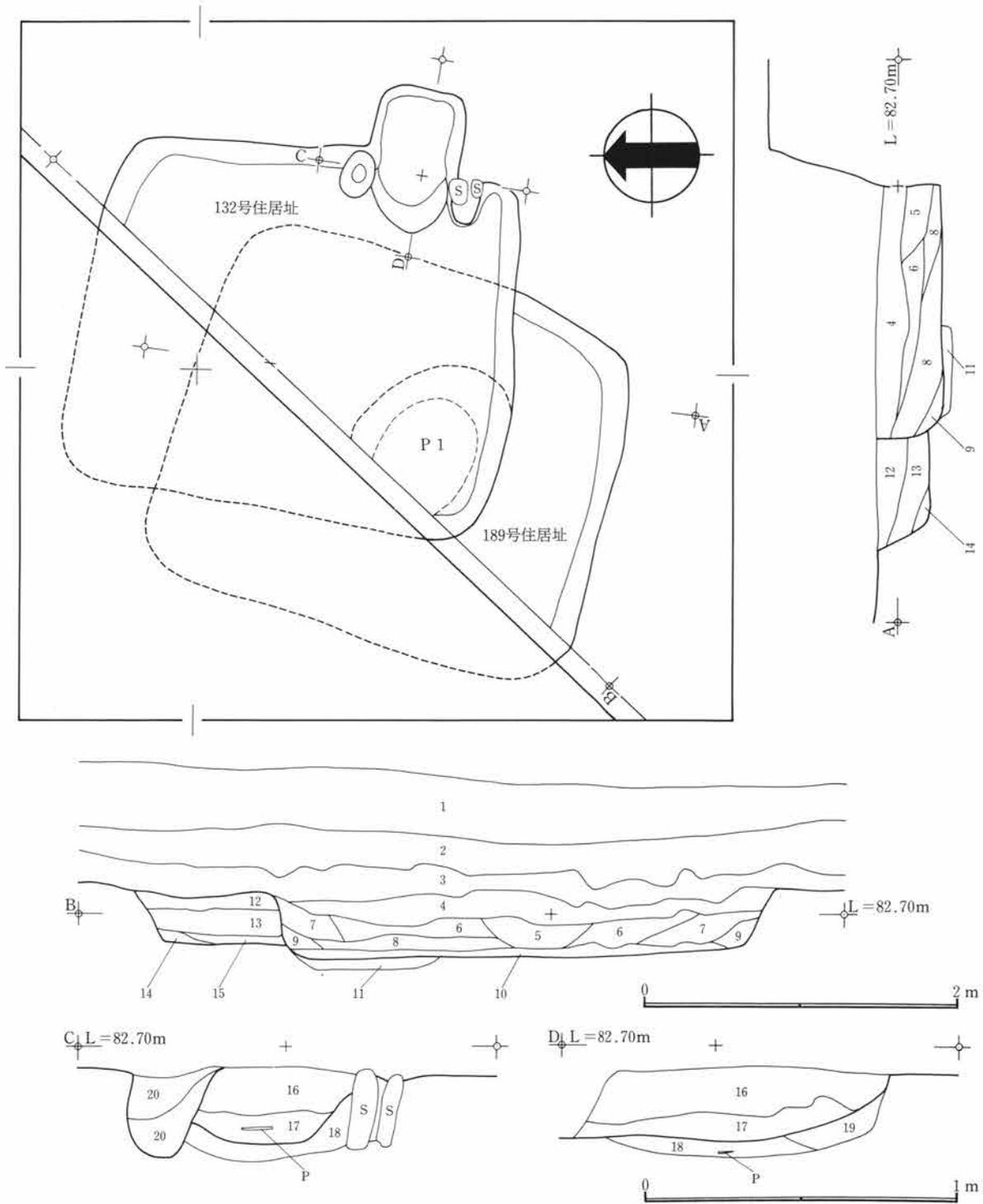
その他に、本住居址からは土師器474g、須恵器186gが出土している。

3区145号住居址

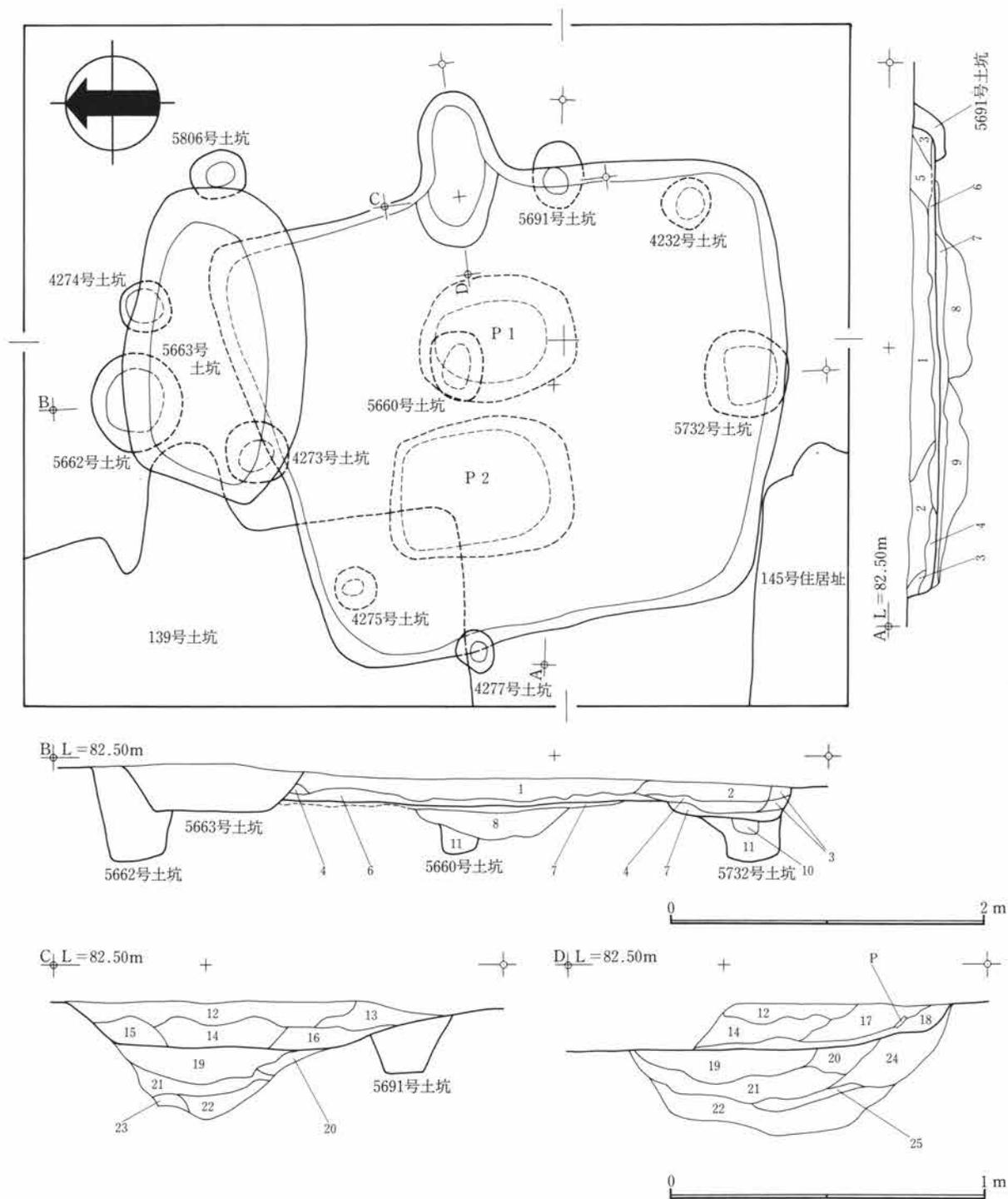
遺構 (挿図番号第136・137図 写真番号P L. 56)

本住居址はK10-05グリッドで検出され、北東3.0mに133号住居址が位置する。平面形は長方形に復元できた。本住居址は南東限を135、136号住居址によって切られている。竈の位置は切られてない。

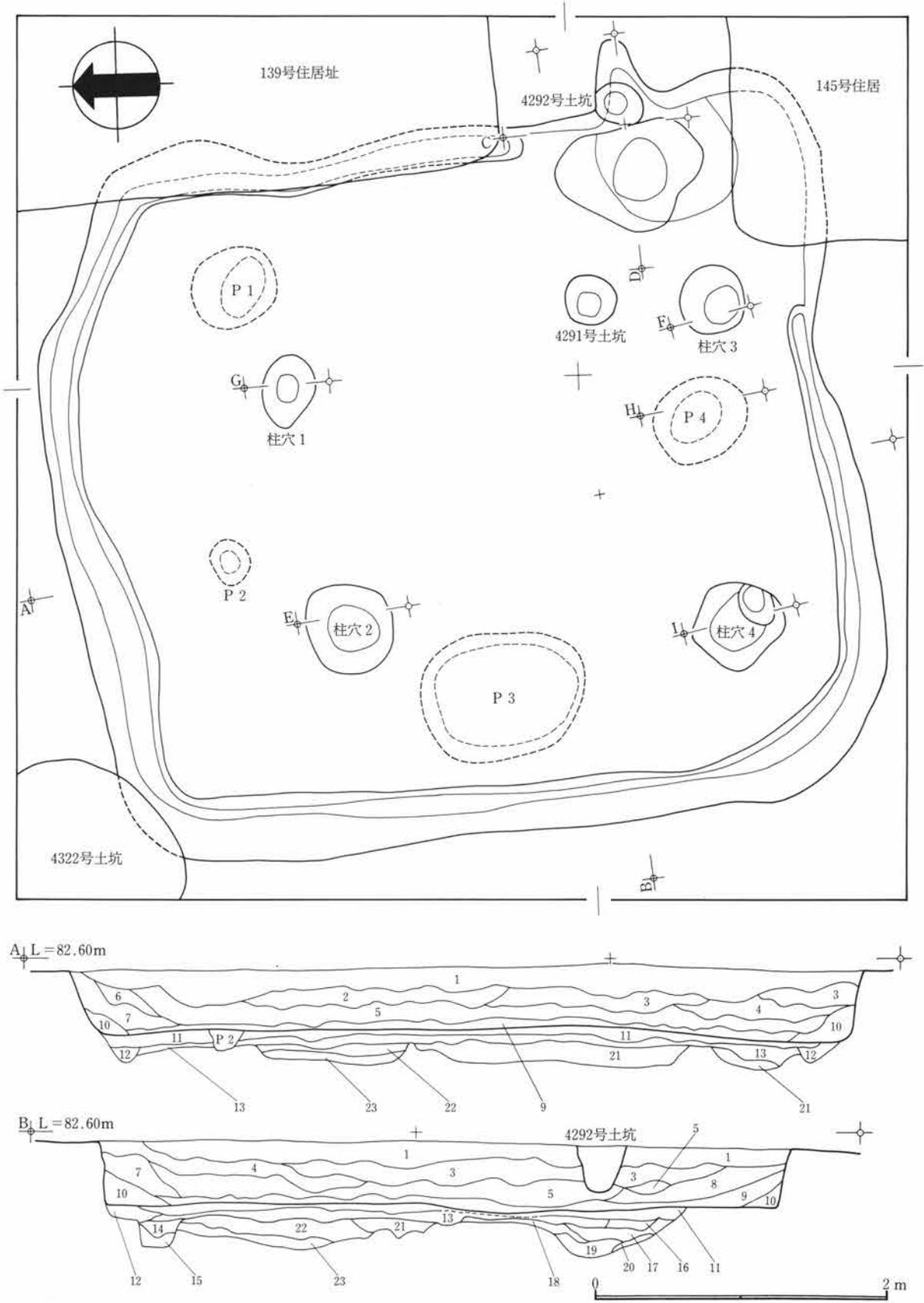
本住居の規模は長軸4.00m(推定)・短軸2.75m、面積11.136㎡である。主軸方向はN-1-Eを示す。竈は



第132図 132・189号住居址

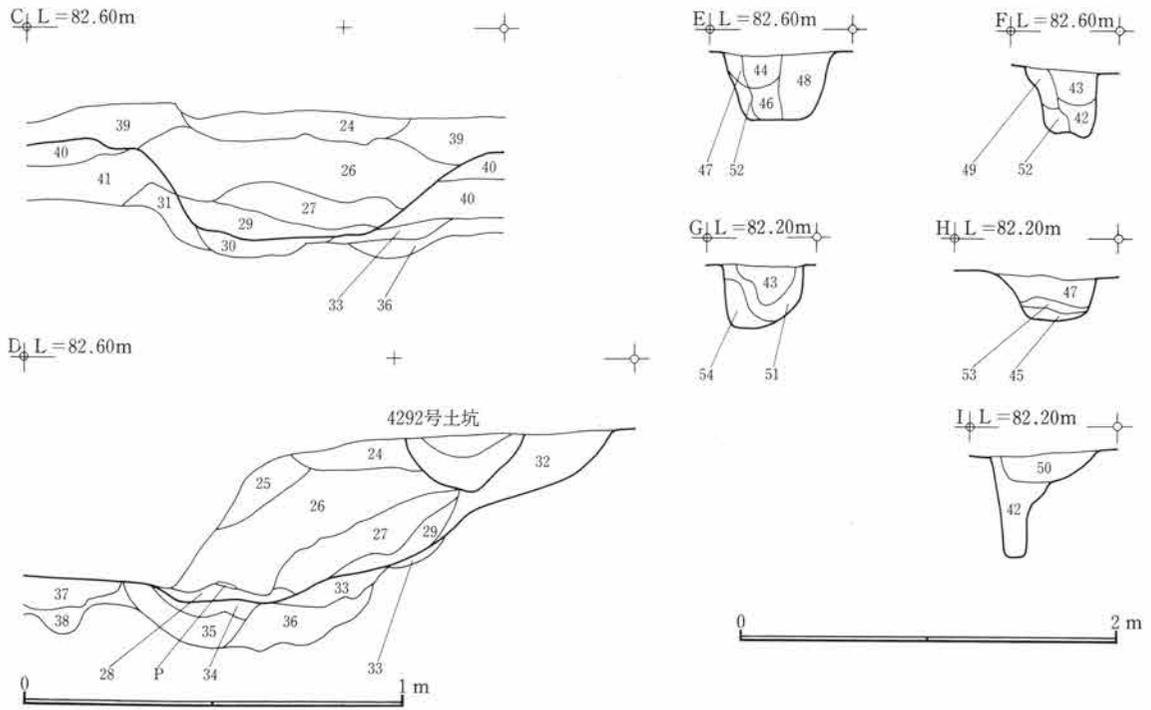


第133图 133号住居址



第134図 134号住居址(1)

第II章 遺 跡



第135図 134号住居址(2)竈

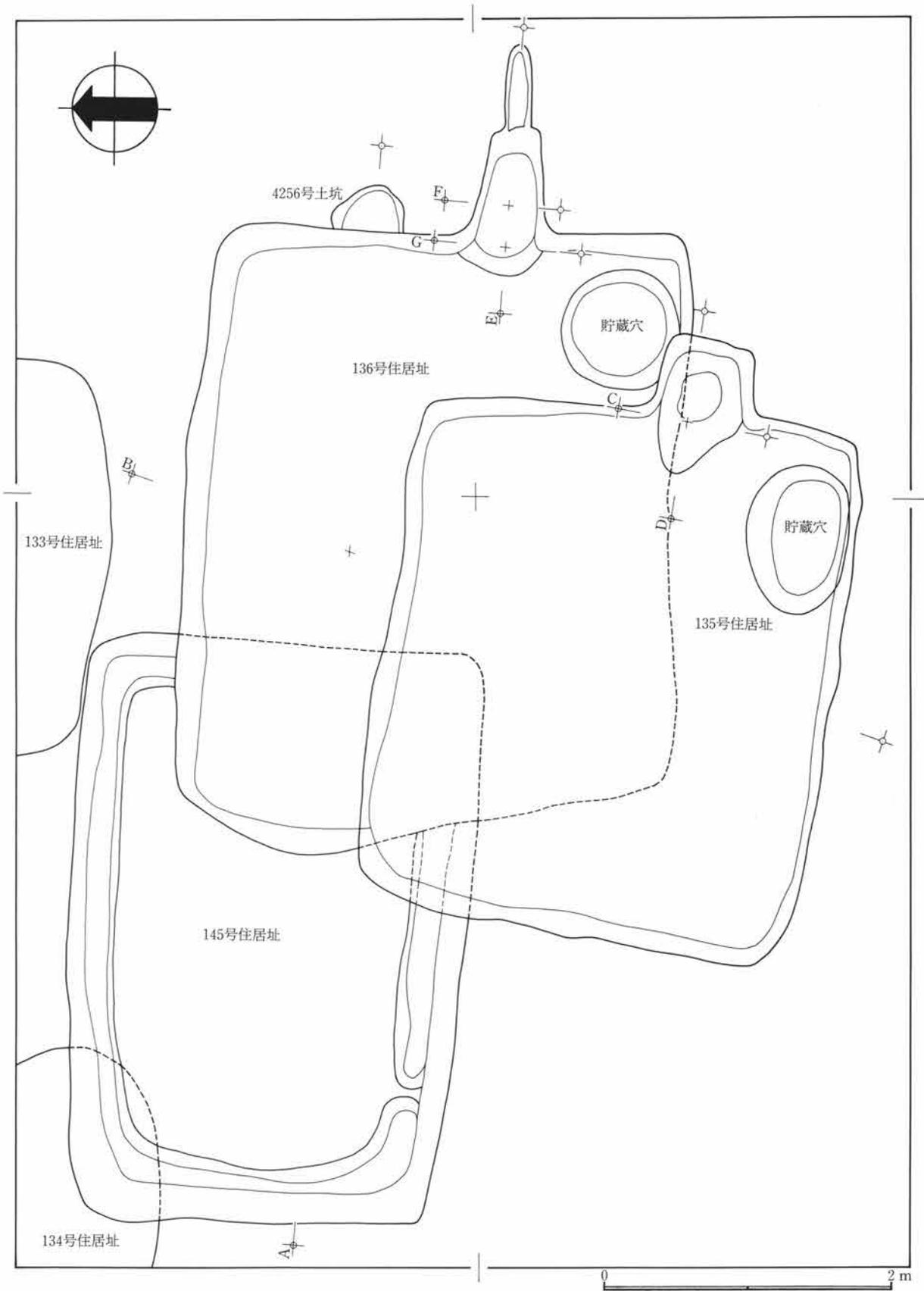
未確認。

壁の下に浅い溝がめぐる。

遺物 (挿図番号第252図)

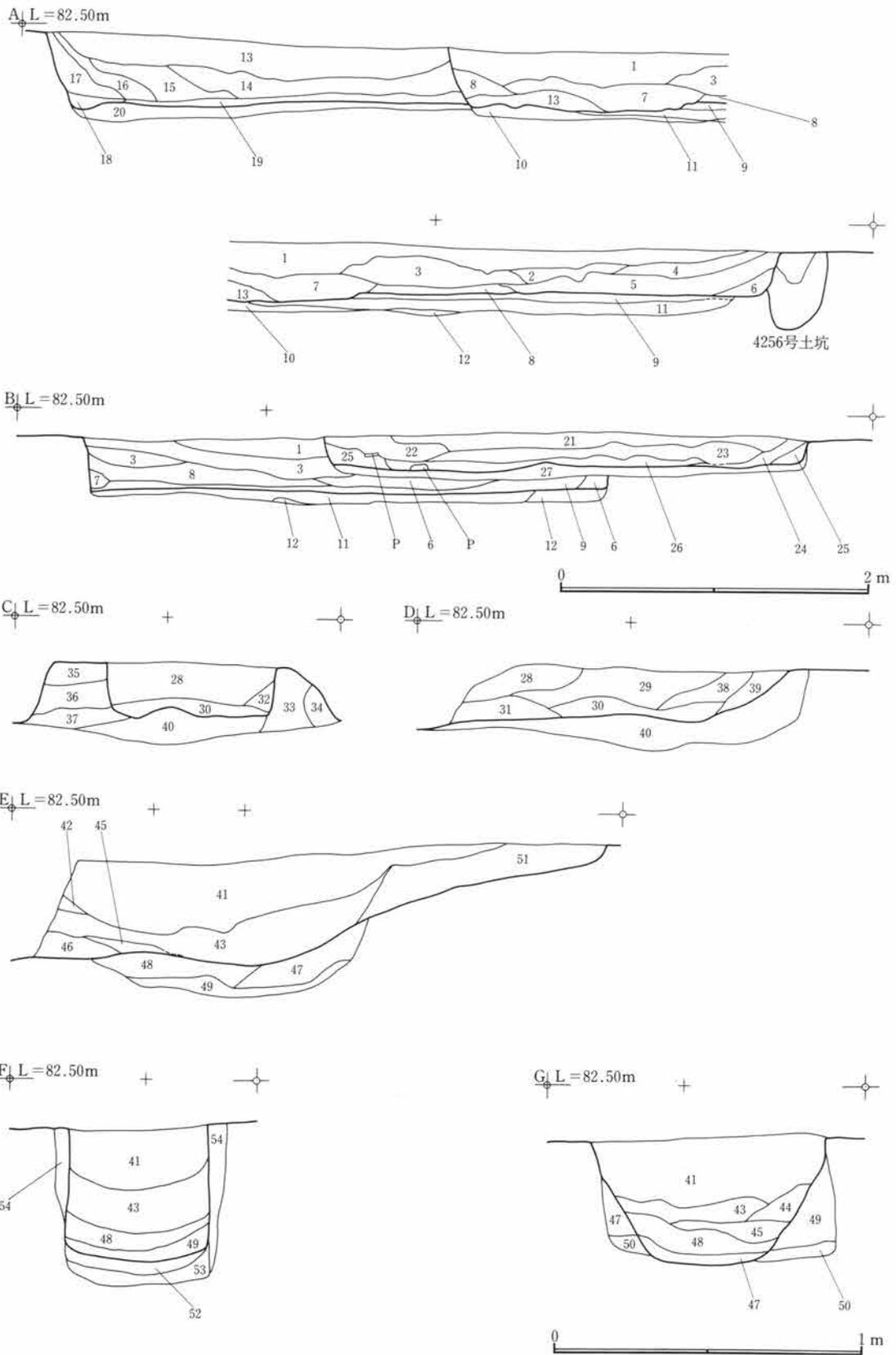
土師器の坏 (583・584)・須恵器の蓋 (585) を出土している。土師器の坏の口縁部の立ち上がりに特徴がある。また須恵器の坏蓋は体部は低く浅い。

その他に本住居址からは土師器1150g、須恵器182gが出土している。



第136図 135・136・145号住居址(1)

第II章 遺跡



第137图 135·136·145号住居址(2)

3区137号住居址

遺構 (挿図番号第138図 写真番号P L. 55)

本住居址はK 9—85, 95グリッドで検出され、南3.0mに134号住居址が位置する。本住居の南東隅で、139号住居址を切っている。また、床下からは、5729号土坑と5730号土坑が検出された。3号掘立柱建物の柱穴である。本住居址よりも古いことになる。規模は長軸2.90m・短軸2.55m、面積7.206m²である。主軸方向はN—3°—Wを示している。竈は東壁に付設される。竈全長は105cm (推定)、焚き口幅は55cm (推定) である。炉床ピットは長軸61cm・短軸50cm、深さ12cmである。P 1 は長軸40cm・短軸38cm、深さ26cm、P 2 は長軸46cm・短軸45cm、深さ29cmである。

本住居址からは遺物の出土はなかった。

3区138号住居址

遺構 (挿図番号第139図 写真番号P L. 56)

本住居址はK10—23, 24, 34グリッドで検出され、東6.0mに147号住居址、南東6.0mに148号住居址が位置する。本住居址の南壁は4729号土坑によって切られている。床下からは14号掘立柱建物の柱穴である5683号土坑が、15号掘立柱建物址の柱穴である5736号土坑と、5738号土坑が検出された。規模は長軸4.05m・短軸3.12m、面積11.912m²である。主軸方向はN—5°—Wを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は100cm (推定)、焚き口幅は55cm (推定) である。炉床ピットは長軸99cm・短軸80cm、深さ4cmである。貯蔵穴は長軸92cm・短軸79cm、深さ16cmである。

遺物 (挿図番号第251図 写真番号P L. 85)

須恵器の蓋 (566・567)・須恵器の高台付盤 (568) を出土している。

その他に土師器1365g、須恵器824gが出土している。又砥石が一点出土している材質は砥沢石である。

3区139号住居址

遺構 (挿図番号第140図 写真番号P L. 56)

本住居址はK 9—95グリッドで検出され、南5.0mに145号住居址が位置する (133、134住と重複)。規模は長軸4.00m・短軸3.20m、面積12.600m²である。主軸方向はN—8°—Wを示す。竈は東壁に付設される。

竈全長は80cm (推定)、竈幅は90cm (推定)、焚き口幅は50cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第252図)

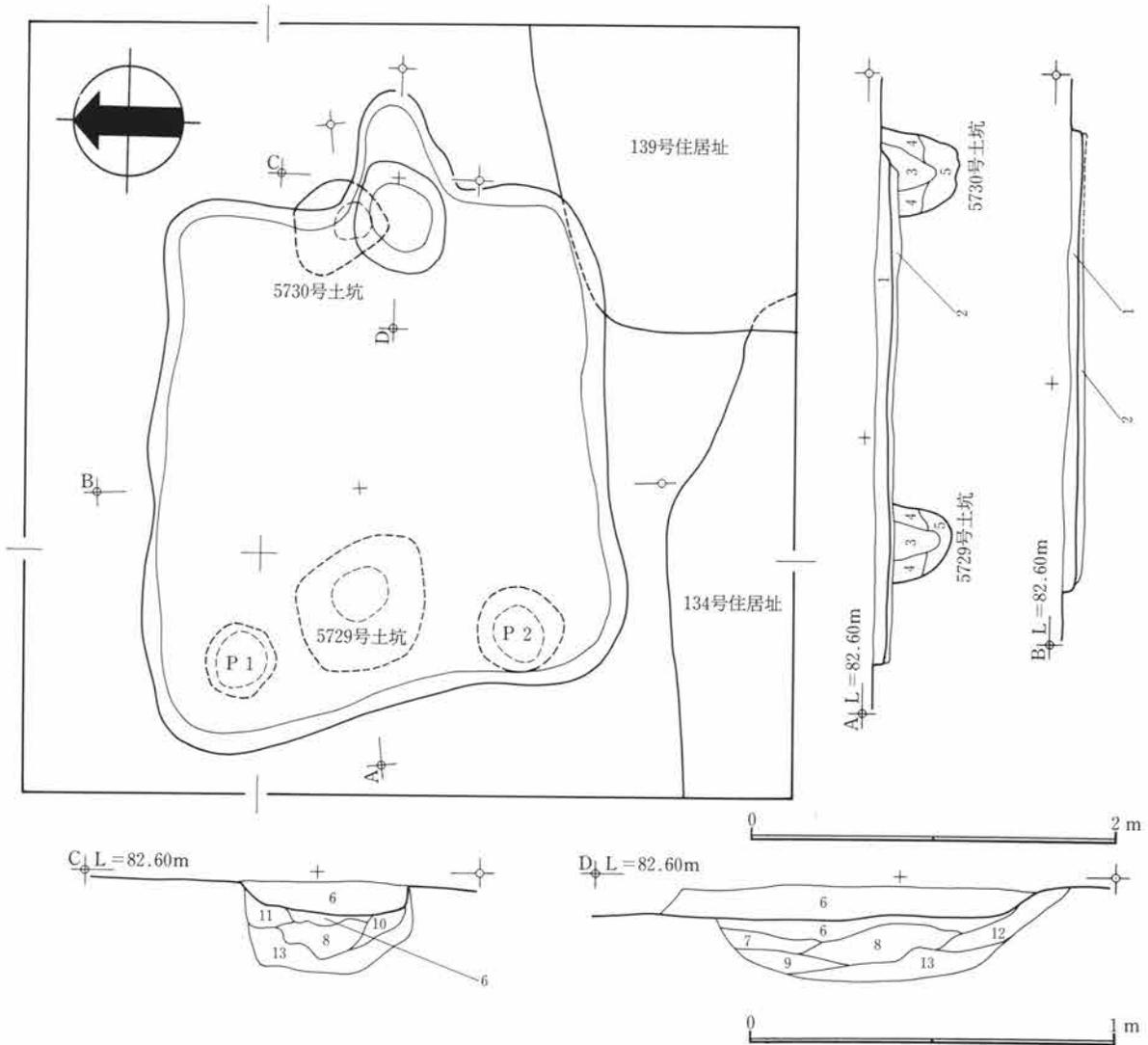
土師器の甕 (569) を出土している。その他に土師器300g、須恵器52gが出土している。

3区140号住居址

遺構 (挿図番号第141図 写真番号P L. 56)

本住居址はK10—22, 32グリッドで検出され、北東12.0mに138号住居址、南12.0mに150号住居址が位置する。規模は長軸4.95m (推定)・短軸4.75m (推定)、面積23.468m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は80cm (推定)、焚き口幅は65cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。P 1 は長軸120cm (推定)・短軸100cm (推定)、深さ21cm、P 2 は長軸98cm・短軸80cm、深さ19cm、P 3 は長軸90cm・短軸80cm、深さ14cm、P 4 は長軸120cm・短軸90cm、深さ28cm、P 5 は長軸124cm・短軸90cm、深さ21cm、P 6 は長軸162cm (推定)・短軸88cm、深さ6cmである。



第138図 137号住居址

本住居では鉄製品が出土された。製品名は刀子である。

遺物（挿図番号第252図）

土師器の甕（570）・土師器の坏（571）・土師器の鉢（572）・須恵器の杯（573）を出土している。

その他に、本住居址からは土師器1645g、須恵器700gが出土している。

3区141号住居址

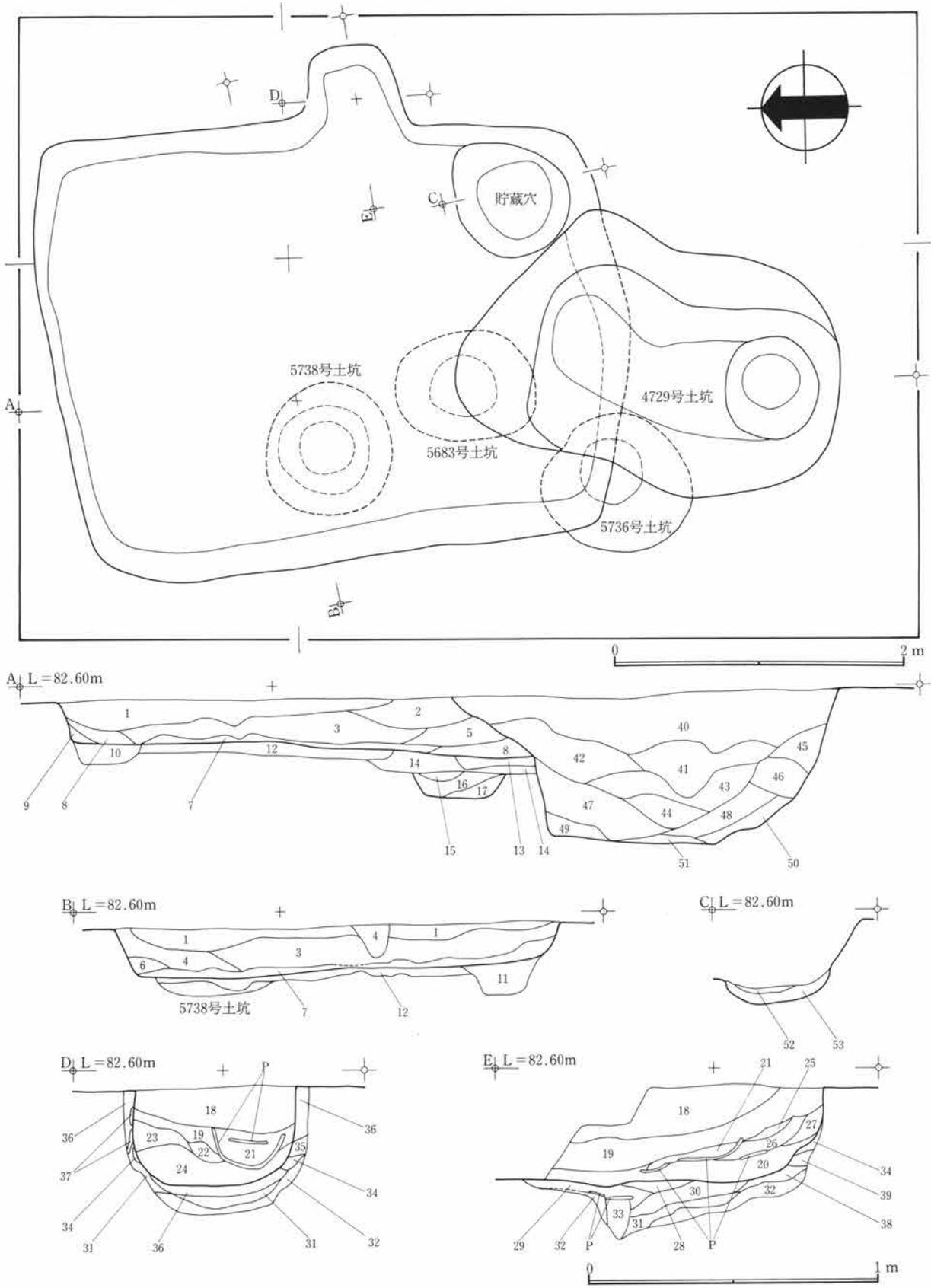
遺構（挿図番号第142図 写真番号P L. 56）

本住居址はK10-16グリッドで検出され、北西5.0mに135号住居址が位置する。（124、144住と重複）

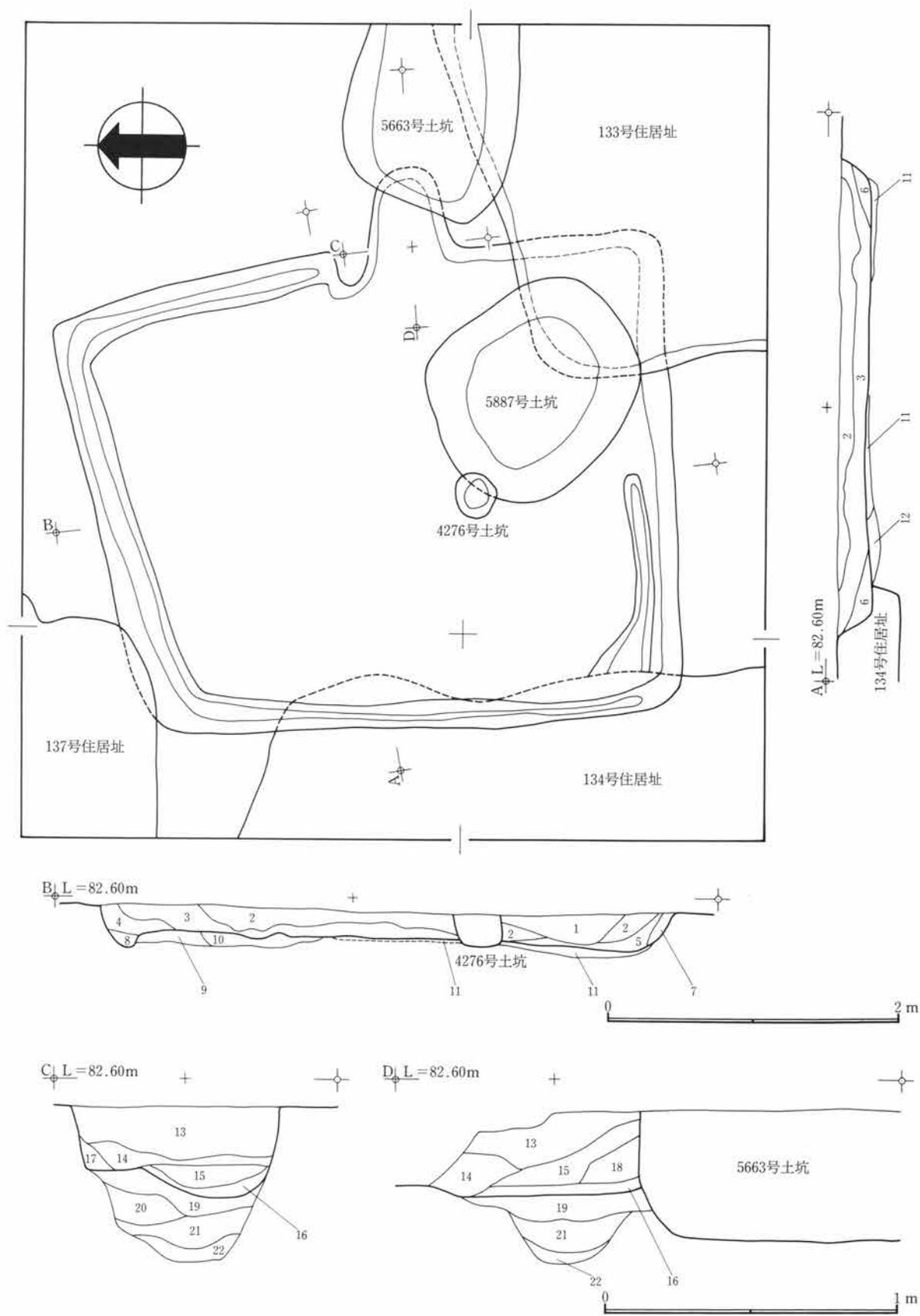
規模は長軸3.40m・短軸2.85m、面積9.224㎡である。主軸方向はN-3°-Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は87cm（推定）、焚き口幅は45cm（推定）である。炉床ピットは長軸54cm・短軸29cm、深さ10cmである。P1は長軸37cm・短軸28cm、深さ11cmである。

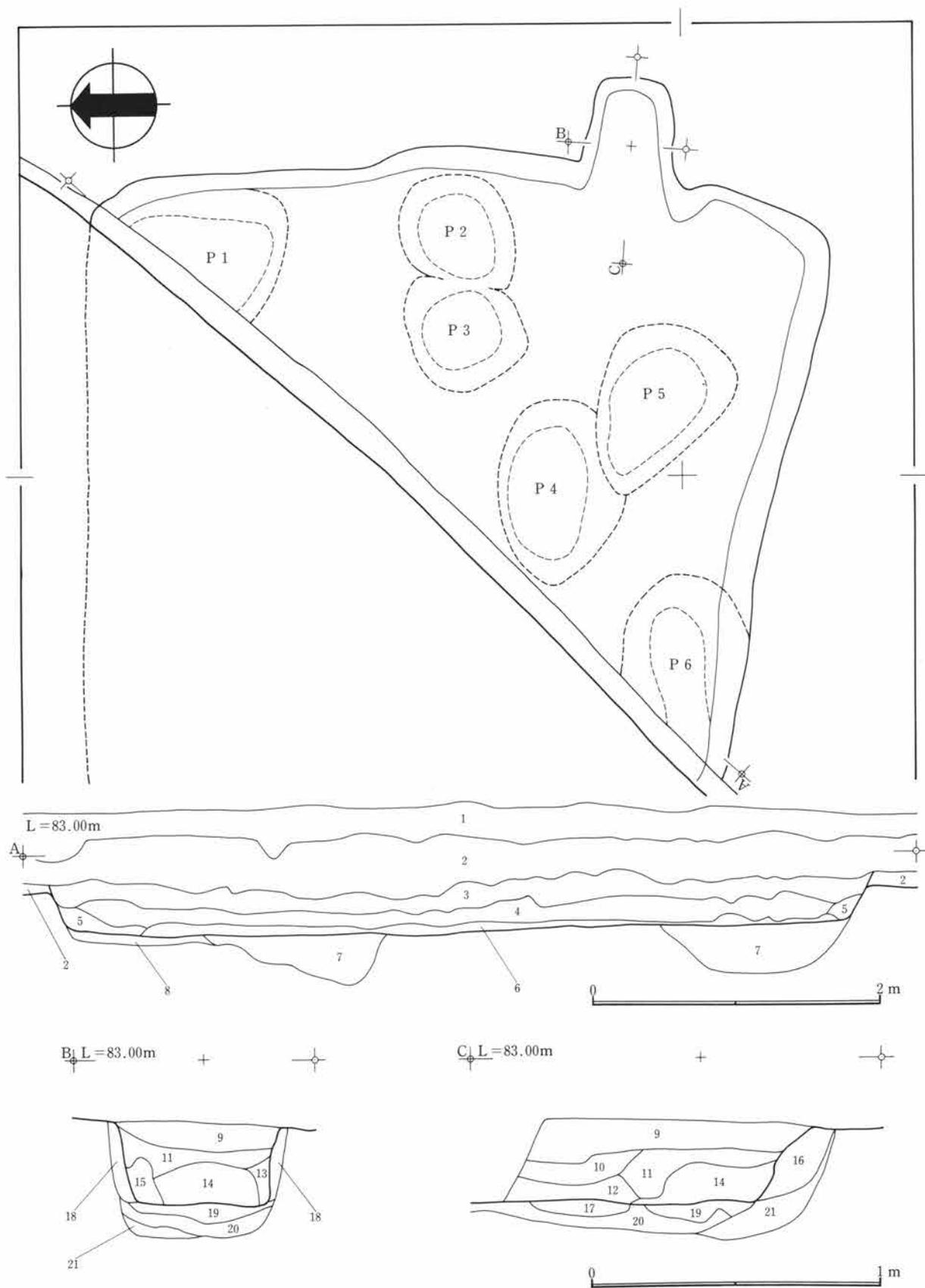
遺物（挿図番号第252図 写真番号P L. 85）



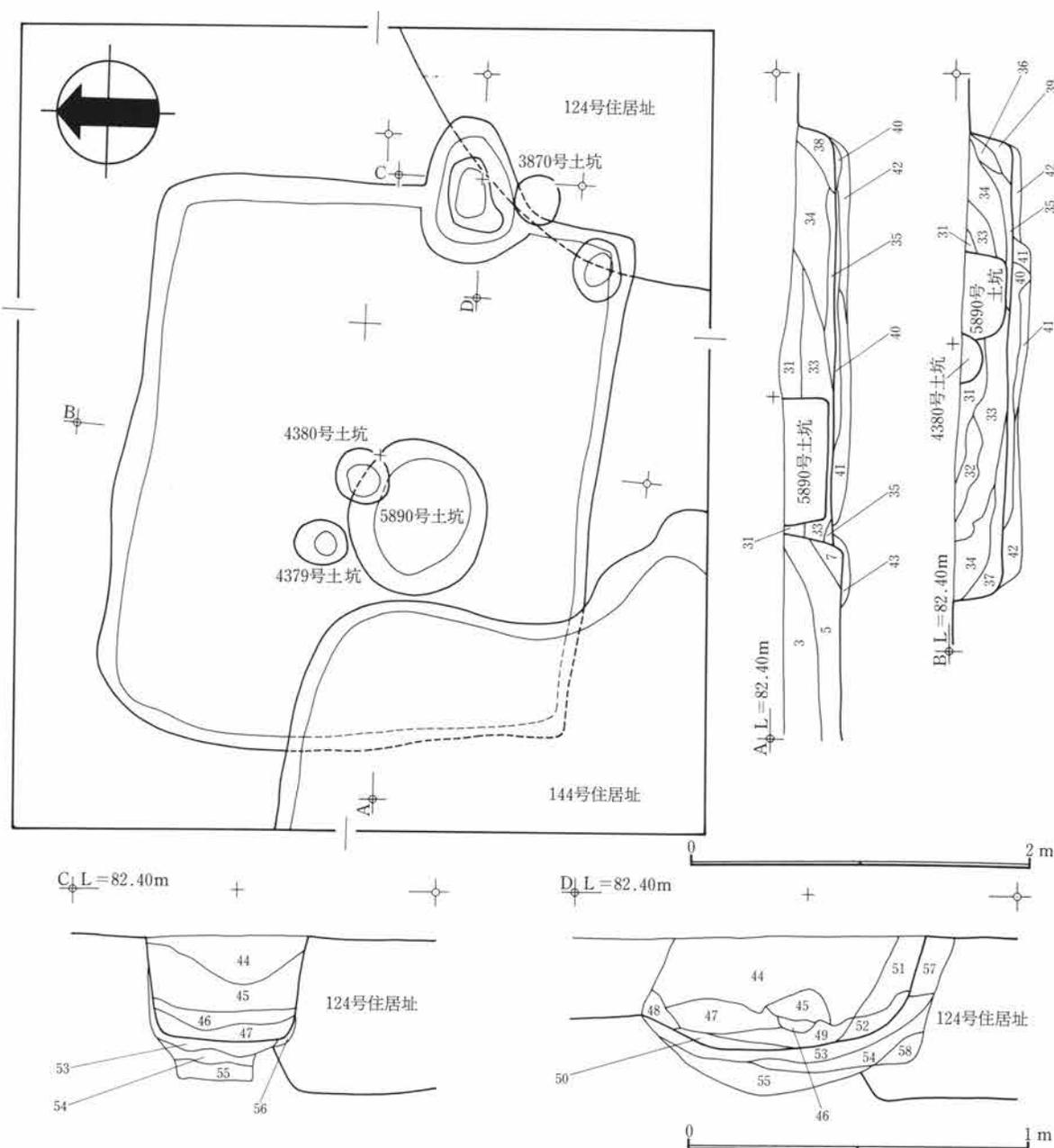
第139図 138号住居址



第140图 139号住居址



第141図 140号住居址



第142図 141号住居址

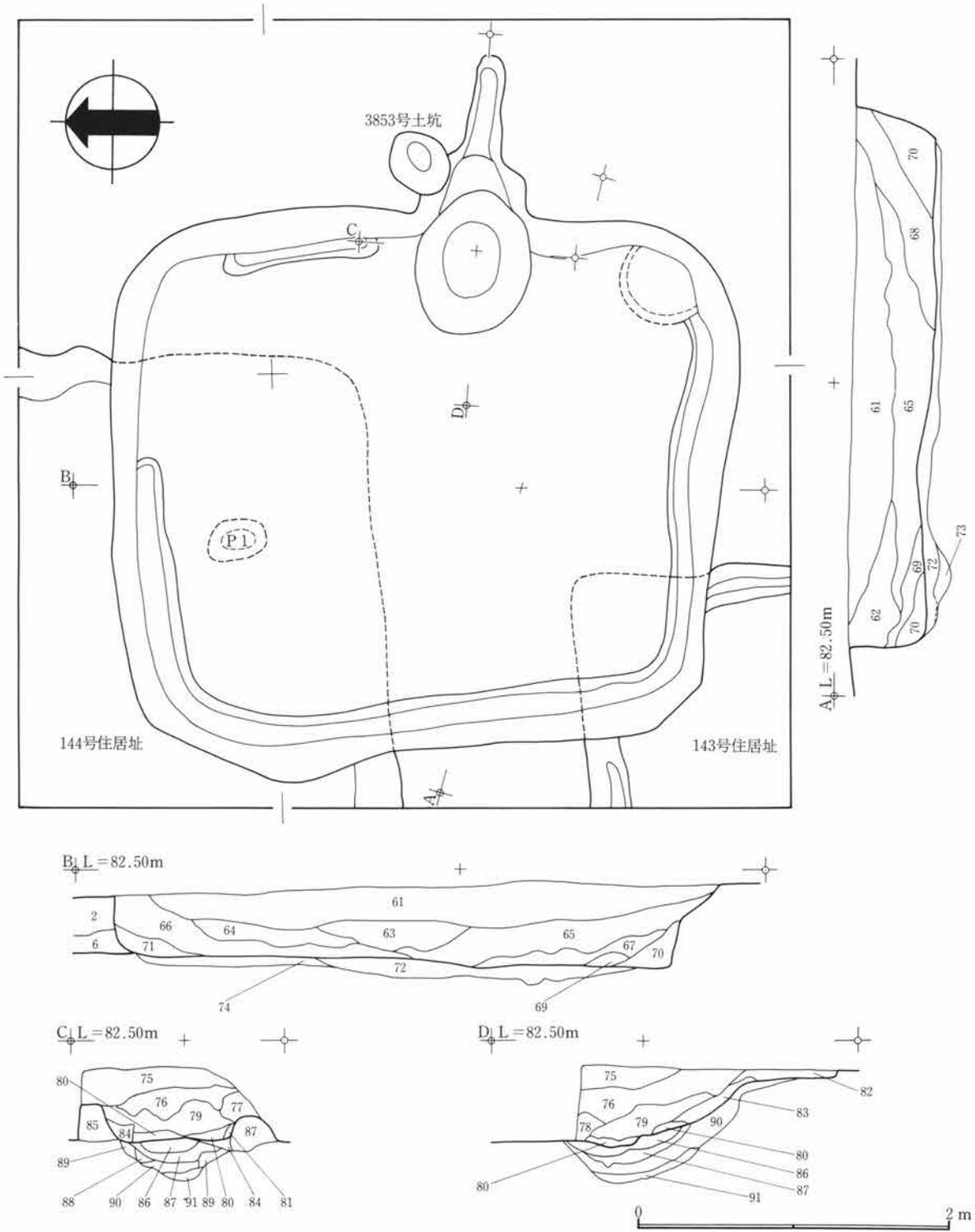
灰釉陶器の壺（574）を出土している。その他に土師器148g、須恵器486gが出土している。

3区142号住居址

遺構（挿図番号第143図 写真番号P.L. 56）

本住居址はK10-25, 26グリッドで検出され、東5.0mに124号住居址が位置する。(143、144住と重複) 規模は長軸3.95m・短軸3.70m、面積13.284㎡である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は123cm、燃焼部長さは58cm、焚き口幅は65cm(推定)、煙道部長さは65cm、煙道部幅は32cmである。炉床ピットは長軸95cm・短軸73cm、深さ15cmである。貯蔵穴は長軸60cm(推定)・短軸57cm(推定)、深さ13cmである。P1は長軸38cm・短軸28cm、深さ8cmである。



第143図 142号住居址

遺物 (挿図番号第252図)

土師器の甕 (575)・坏 (576・577) を出土している。その他に土師器3220g、須恵器422gが出土している。本住居では鉄製品が出土している。製品名は不明である。

第II章 遺 跡

3区143号住居址

遺構 (挿図番号第144図 写真番号P L. 56)

本住居址はK10-25, 26, 35, 36グリッドで検出され、北西7.0mに147号住居址が位置する。本住居址の北東隅を142号住居址が切っている。また、竈右袖を3897号土坑が左袖外側を4629号土坑が切っている。また床下には4619号土坑と5916号土坑が検出された。この2つの土坑は9号掘立柱建物址の柱穴である。ここでの土層の観察結果では、本住居址の年代は8世紀より以前ということになる。

規模は長軸3.85m・短軸3.35m、面積12.462m²である。主軸方向はN-3°-Wを示す。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は79cm(推定)、焚き口幅は58cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかった。

遺物 (挿図番号第252図)

土師器の坏 (578)・須恵器の高坏 (579) を出土している。

その他に本住居址からは土師器3205g、須恵器464gが出土している。

3区144号住居址

遺構 (挿図番号第145・146図 写真番号P L. 56)

本住居址はK10-15, 16, 25, 26グリッドで検出され、南5.0mに143号住居址が位置する (141、142住と重複)。規模は長軸5.60m・短軸5.35m、面積27.722m²である。主軸方向はN-10°-Eを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は99cm、竈幅は143cm、燃焼部長さは65cm、焚き口幅は75cm、煙道部長さは34cm、煙道部幅は23cmである。炉床ピットは長軸105cm・短軸90cm、深さ8cmである。P1は長軸38cm・短軸33cm、深さ23cm、P2は長軸38cm・短軸26cm、深さ8cm、P3は長軸45cm・短軸43cm、深さ25cmである。

遺物 (挿図番号第252図)

土師器の甕 (580)・土師器の坏 (581)・須恵器の高台付坏 (582) を出土している。

その他に本住居址からは土師器4463g、須恵器422gが出土している。

本住居では鉄製品が3点出土した。製品名は刀子2点、他に用途不明1点である。

3区146号住居址

遺構 (挿図番号第147図 写真番号P L. 57)

本住居址はK10-07, 08グリッドで検出され、南9.0mに124号住居址、北10.0mに131号住居址が位置する。本住居の南壁の一部は4869号土坑に、西壁は4865号土坑によって切られている。

規模は長軸3.75m・短軸3.50m、面積13.008m²である。主軸方向はN-7°-Wを示している。

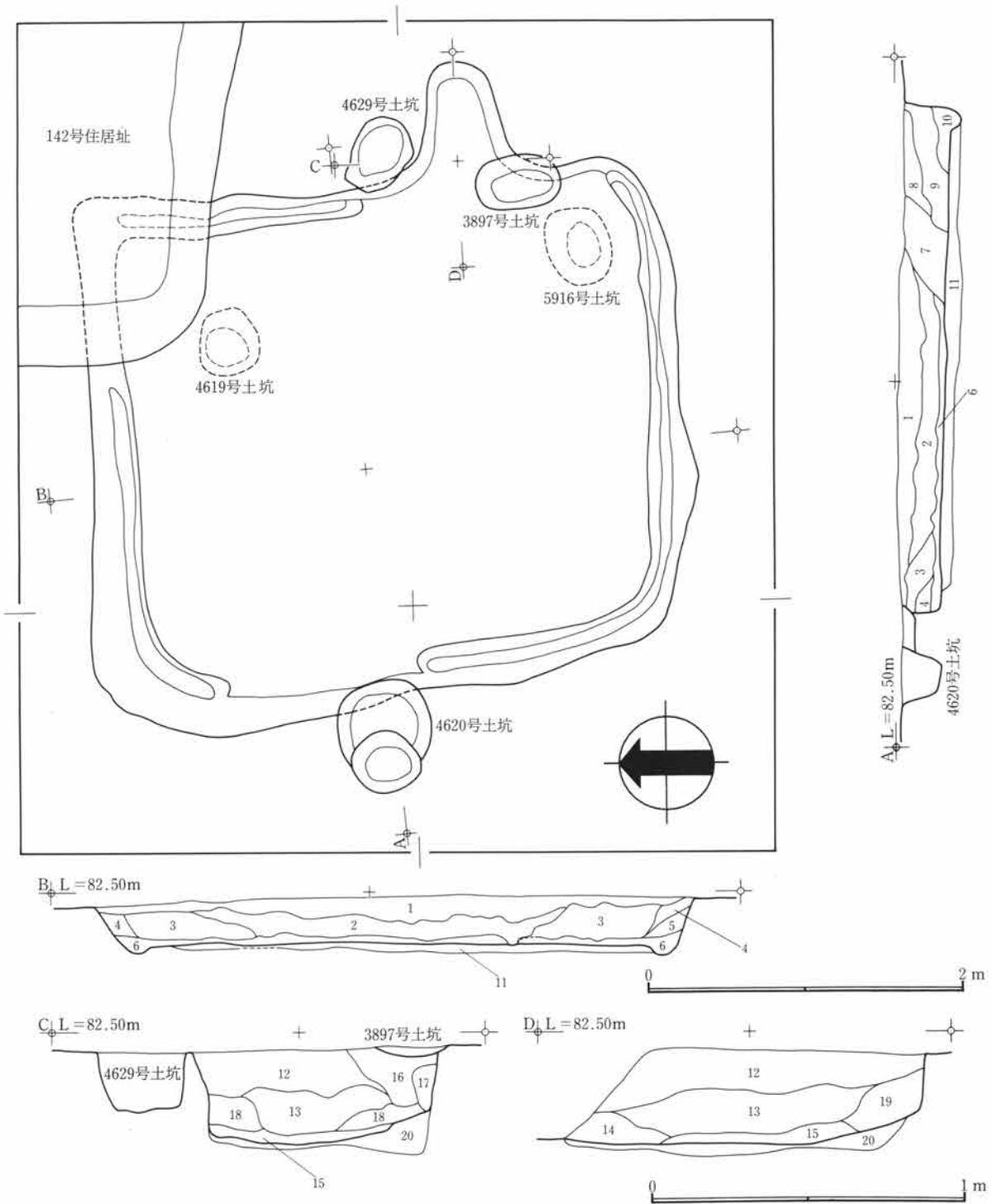
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は163cm、竈幅は120cm(推定)、燃焼部長さは60cm、焚き口幅は60cm、煙道部長さは103cm、煙道部幅は37cmである。炉床ピットは長軸77cm・短軸69cm、深さ9cmである。

遺物 (挿図番号第253図)

土師器の甕 (586) 土師器の坏 (587)・須恵器の坏 (588・590)・須恵器の高台付坏 (589)・灰釉陶器の壺 (591) を出土している。

その他に本住居址からは土師器3282g、須恵器1372gが出土している。

本住居では鉄製品が2点出土している。製品名はスラグ、不明である。



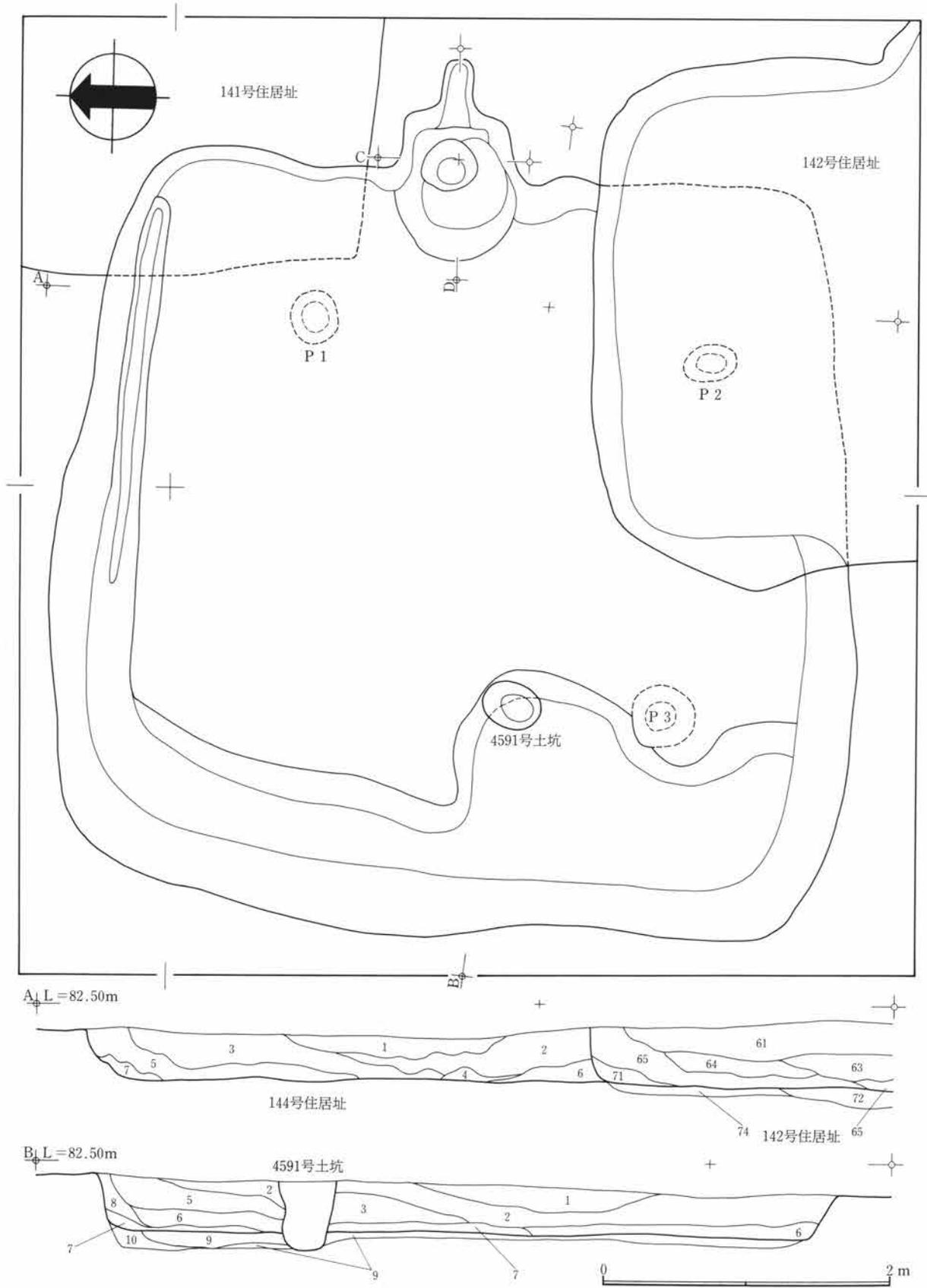
第144図 143号住居址

3区147号住居址

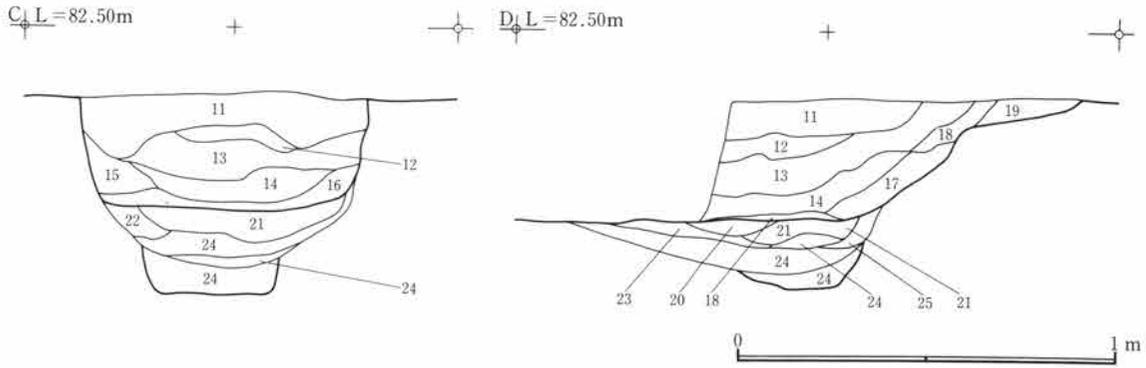
遺構 (挿図番号第148・149図 写真番号P L. 57)

本住居址はK10-24, 25グリッドで検出され、西6.0mに138号住居址、南5.0mに148号住居址が位置する。本住居址の竈部の煙道部は4608号土坑、左袖部分は4607号土坑が切っている。

規模は長軸3.85m・短軸3.00m, 面積11.270m²である。主軸方向はNを示している。



第145图 144号住居址(1)



第146図 144号住居址(2)竈

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は97cm、焚き口幅は65cm(推定)である。炉床ピットは長軸34cm・短軸28cm、深さ10cmである。P 1は長軸57cm・短軸37cm、深さ52cmである。

遺物 (挿図番号第253図)

土師器の甕 (592)・土師器の坏 (593)・須恵器の坏 (594) を出土している。

その他に本住居址からは土師器3100g、須恵器538gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。製品名はスラグである。

3区148号住居址

遺構 (挿図番号第150・151図 写真番号P L. 57)

本住居址はK10-34, 35グリッドで検出され、北5.0mに147号住居址、北東9.0mに143号住居址が位置する。本住居の竈燃焼部は4677号土坑が、左袖部は4668号土坑が新しく重複している。東壁の一部を4667号土坑が切っている。住居中央部には4744号土坑が、北壁寄りには4735土坑が本住居址より新しく重複している。また、西壁も51号溝が切っている。

規模は長軸4.70m・短軸4.25m、面積17.990m²である。主軸方向はN-3°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は130cm、燃焼部長さは72cm、焚き口幅は80cm(推定)、煙道部長さは58cm、煙道部幅は35cmである。炉床ピットは確認されなかった。

P 1は長軸82cm・短軸30cm、深さ6cm、P 2は長軸60cm・短軸57cm、深さ4cmである。

遺物 (挿図番号第253図)

須恵器の蓋 (595)・須恵器の高坏 (596)・須恵器の円面硯 (597) を出土している。

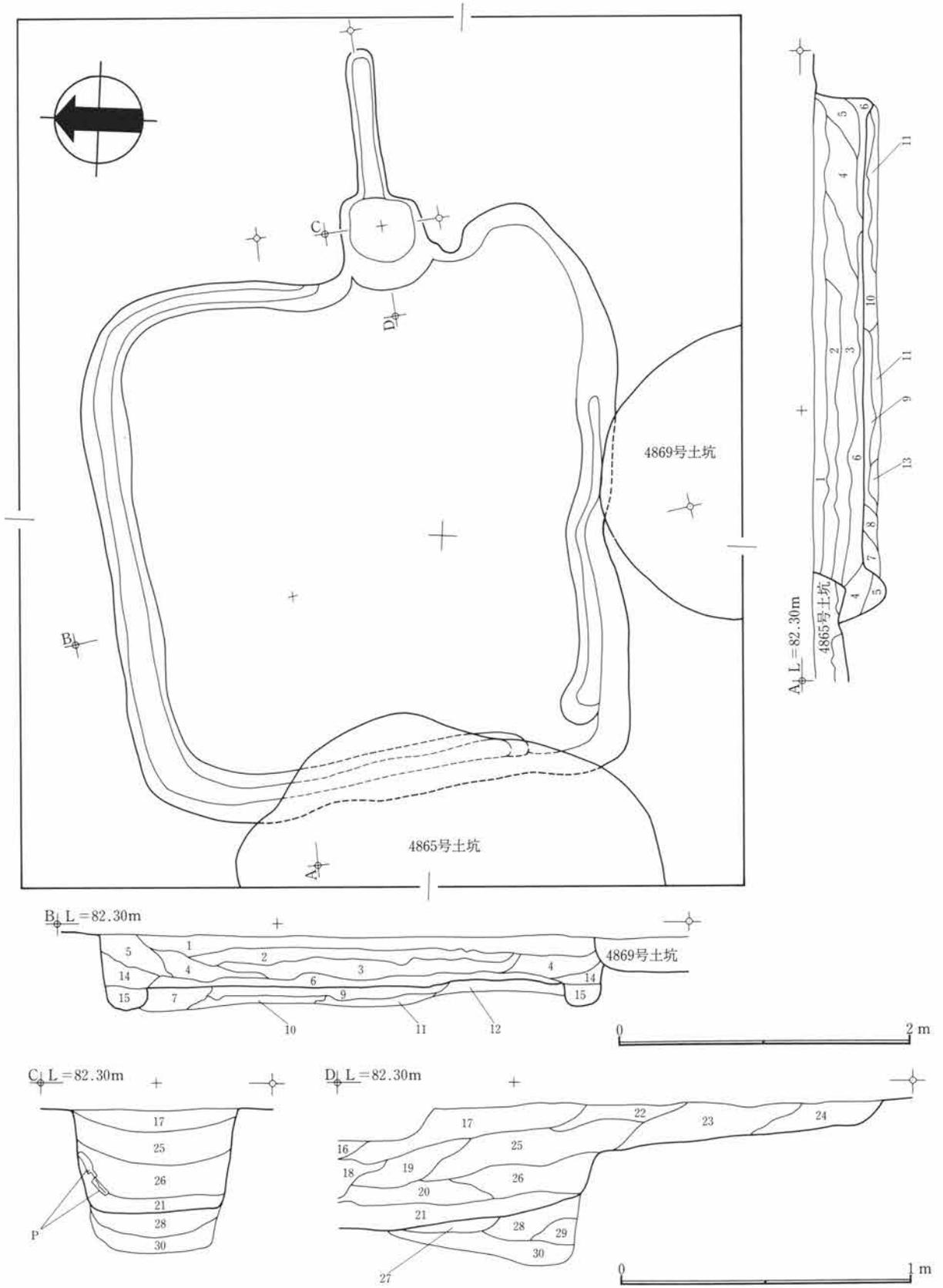
その他に、本住居址からは土師器1410g、須恵器552gが出土している。

3区149号住居址

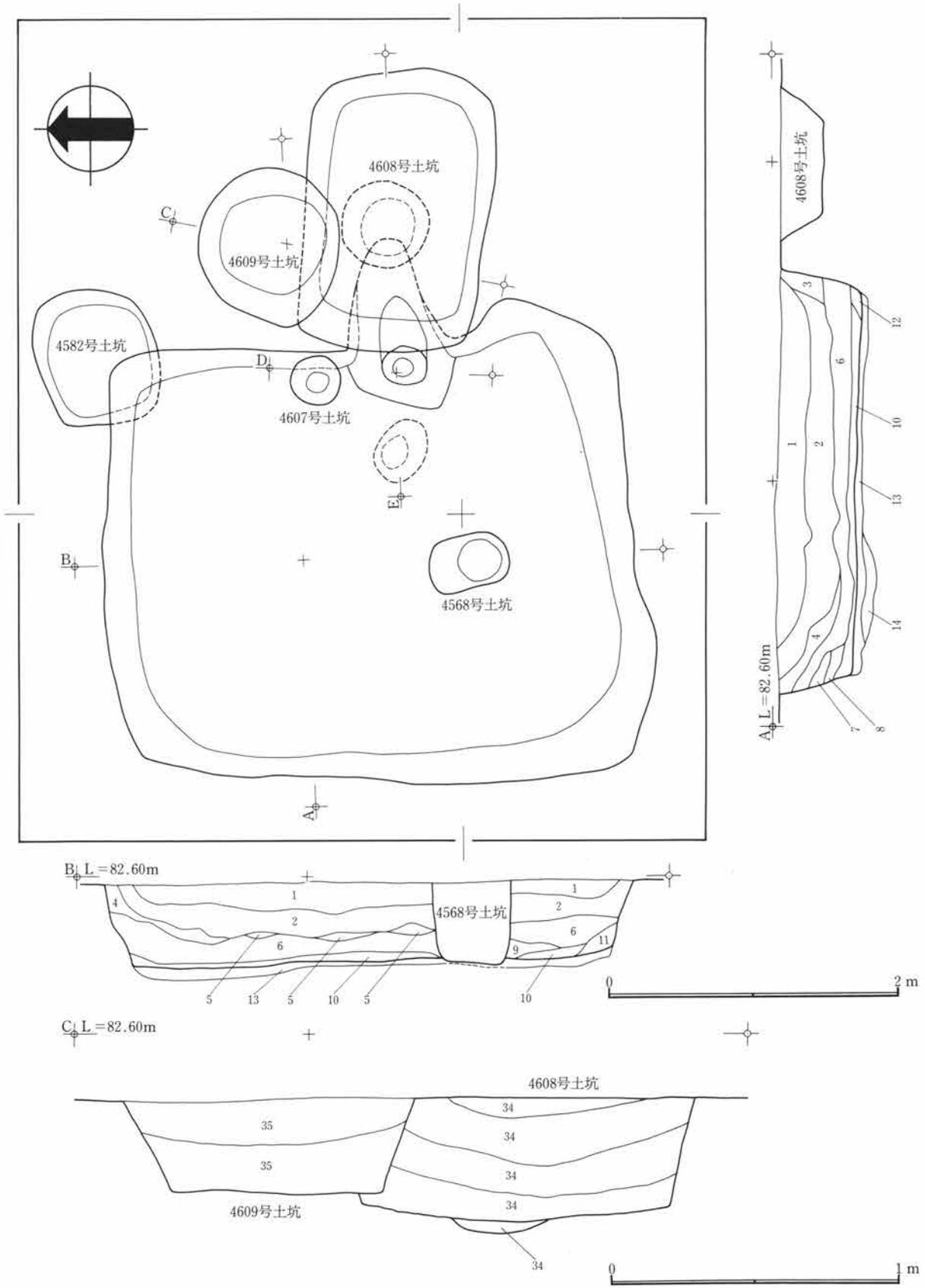
遺構 (挿図番号第152図 写真番号P L. 57)

本住居址はK10-53, 63グリッドで検出され、北西5.0mに151号住居址、南東3.0mに128号住居址が位置する。本住居址の東壁、竈煙道部付近を5758号土坑が切っている。規模は長軸4.13m・短軸2.90m、面積11.304m²である。主軸方向はN-9°-Eを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は107cm、焚き口幅は128cm(推定)である。炉床ピットは確認されなかつ

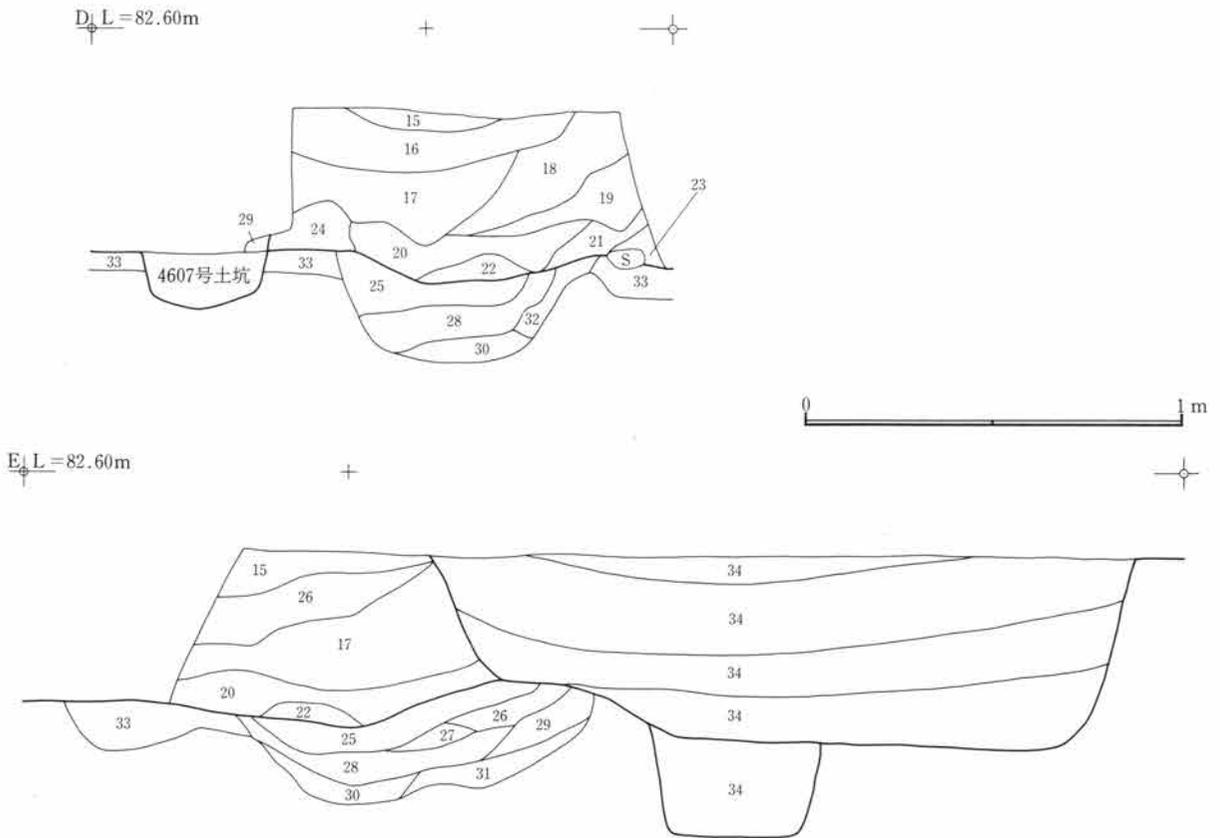


第147图 146号住居址



第148図 147号住居址(1)

第II章 遺 跡



第149図 147号住居址(2)竈

た。

遺物 (挿図番号第253図)

土師器の坏 (598) を出土している。

その他に本低居址からは土師器374g、須恵器120gが出土している。

3区150号住居址

遺構 (挿図番号第153・154図 写真番号P.L. 57)

本住居址はK10-52, 53グリッドで検出され、北12.0mに140号住居址が位置する。本住居址は151号を切っ
て新しい。また、西壁部分を5744号土坑、5745号土坑が切っている。

規模は長軸3.47m (推定)・短軸2.60m、面積8.834m²である。主軸方向はN-4°-Eを示している。

竈は確認されなかった。貯蔵穴は長軸60cm・短軸48cm、深さ11cmである。

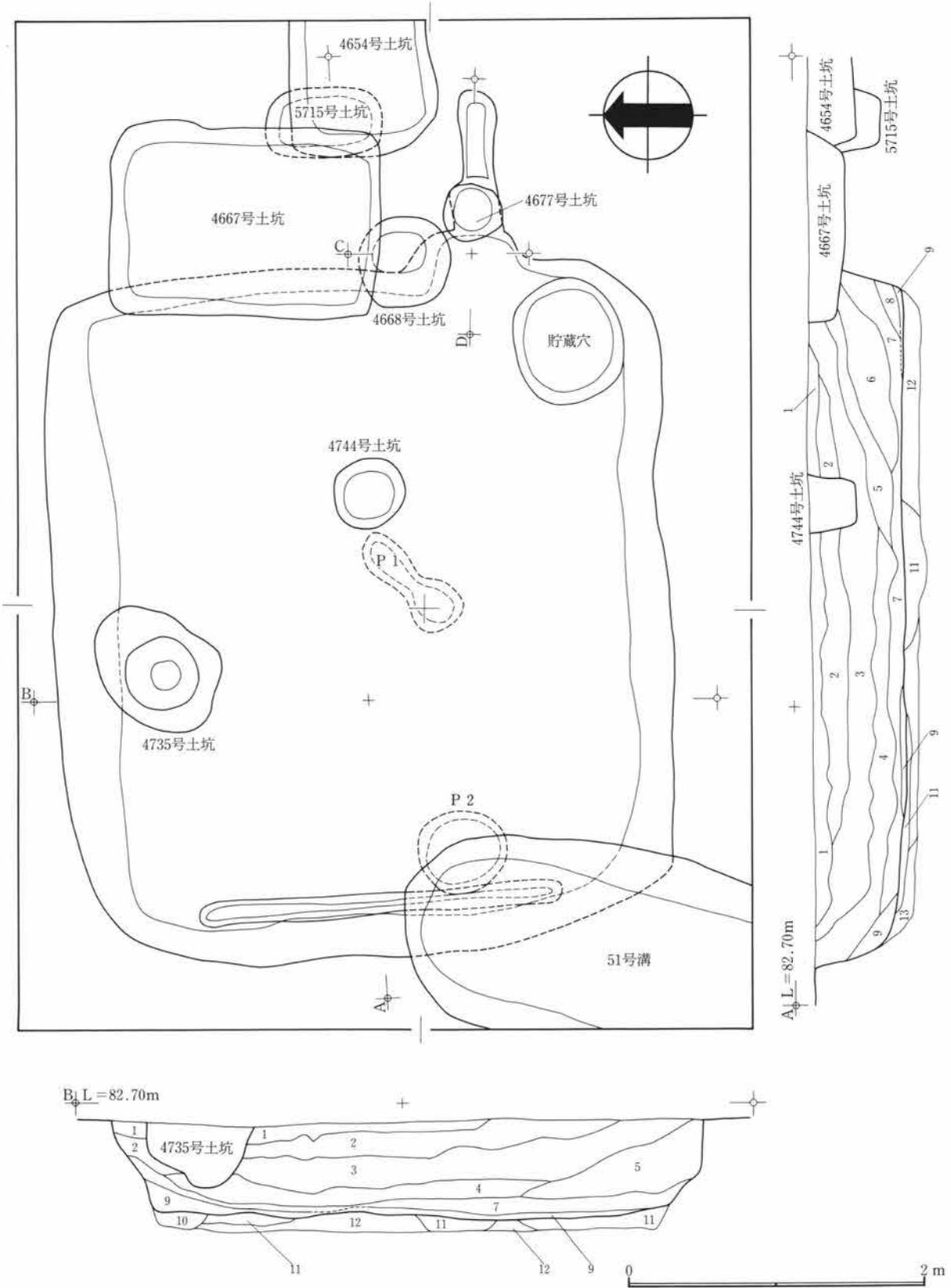
遺物 (挿図番号第253図)

土師器の広口小型壺 (599)・土師器の坏 (600・601)・須恵器の坏 (602・603・605)・須恵器の高台付埴 (604)
を出土している。

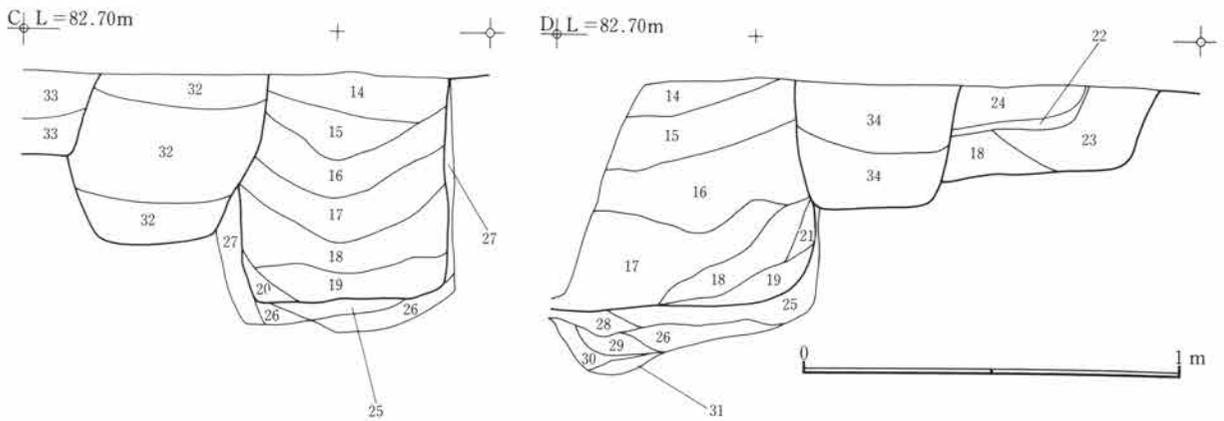
その他に、本住居址からは土師器1324g、須恵器1491gが出土している。

3区151号住居址

遺構 (挿図番号第153・154図 写真番号P.L. 57)



第150図 148号住居址(1)



第151図 148号住居址(2)竈

本住居址はK10-52, 53, 63グリッドで検出され、西12.0mに152号住居址が位置する。(150住と重複)
規模は長軸4.30m・短軸4.10m, 面積16.394m²である。主軸方向はN-4°-Eを示している。本住居址は150号住居址によって、切られている。また、竈前庭部分を4815号土坑が切っている。さらに、南壁の一部分を4819号土坑が切っている。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は153cm, 燃焼部長さは95cm, 焚き口幅は45cm (推定), 煙道部長さは58cm, 煙道部幅は28cmである。炉床ピットは長軸124cm・短軸62cm, 深さ9cmである。

P 1 は長軸143cm・短軸118cm, 深さ13cm, P 2 は長軸87cm・短軸80cm, 深さ4cm, P 3 は長軸40cm・短軸38cm, 深さ15cm, P 4 は長軸75cm・短軸48cm, 深さ17cm, P 5 は長軸133cm・短軸57cm, 深さ12cm, P 6 は長軸114cm・短軸84cm, 深さ15cm, P 7 は長軸113cm・短軸84cm, 深さ12cmである。

遺物 (挿図番号第254図 写真番号P L. 89)

土師器の坏 (606)・土師器の甕 (607)・須恵器の蓋 (墨書6) を出土している。

その他、本住居址からは土師器1042g、須恵器444gが出土している。

本住居では鉄製品が2点出土している。製品名は、刀子、鋤の耳片の再利用である。

3区152号住居址

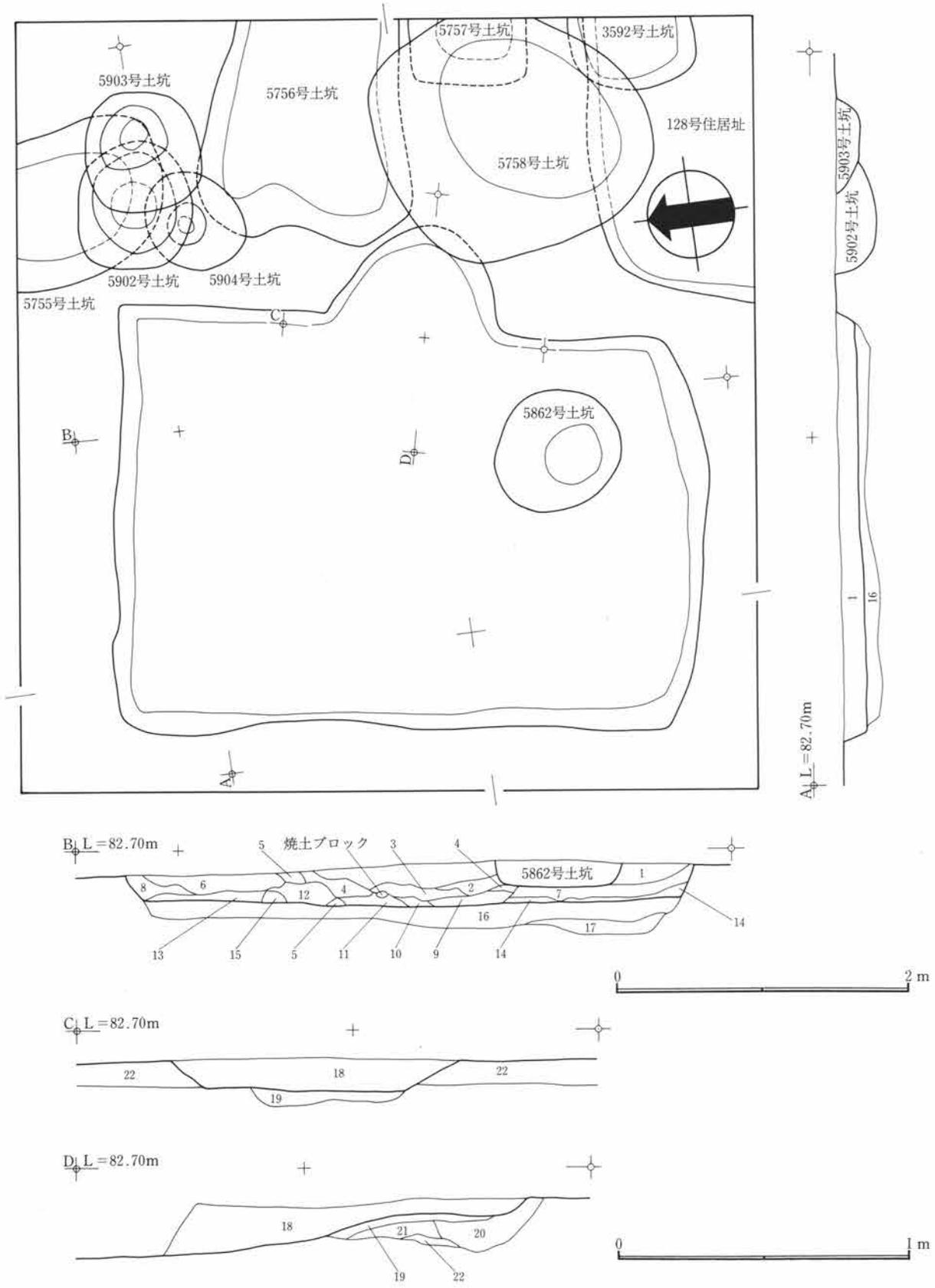
遺構 (挿図番号第155図 写真番号P L. 57)

本住居址はK10-51, 61グリッドで検出され、東12.0mに151号住居址、南14.0mに120号住居址が位置する。本住居の床面を切って、5923号土坑、5925号土坑、5942号土坑がある。また、東壁の竈の煙道部分を5741号土坑が切っている。

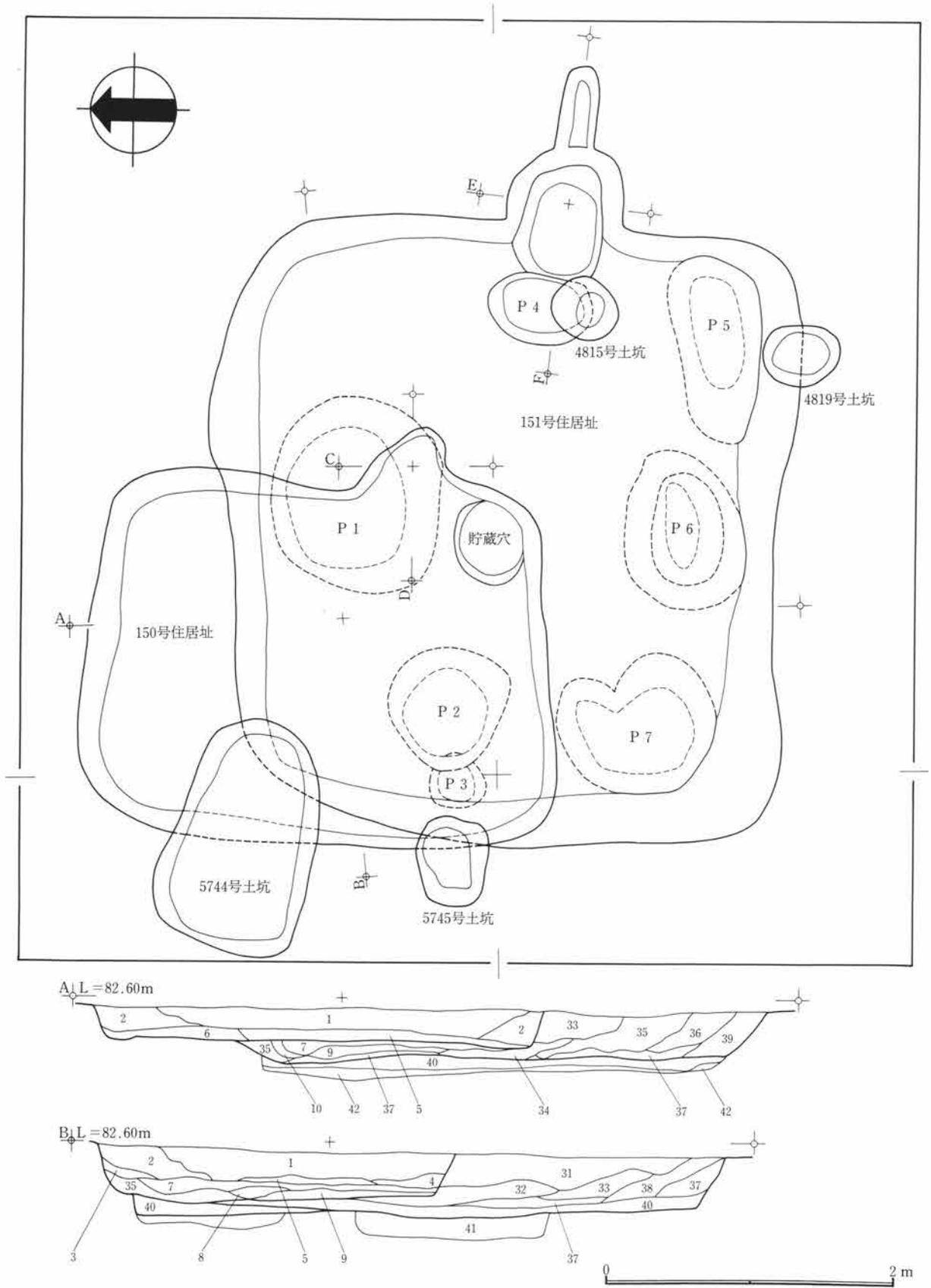
規模は長軸3.60m・短軸2.62m, 面積9.018m²である。竈付近から未固結凝灰岩が出土している。主軸方向はN-1°-Wを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は80cm (推定), 焚き口幅は60cm (推定) である。炉床ピットは長軸78cm・短軸50cm, 深さ5cmである。P 1 は長軸85cm・短軸54cm, 深さ17cm, P 2 は長軸27cm・短軸24cm, 深さ17cm, P 3 は長軸40cm・短軸25cm, 深さ13cmである。

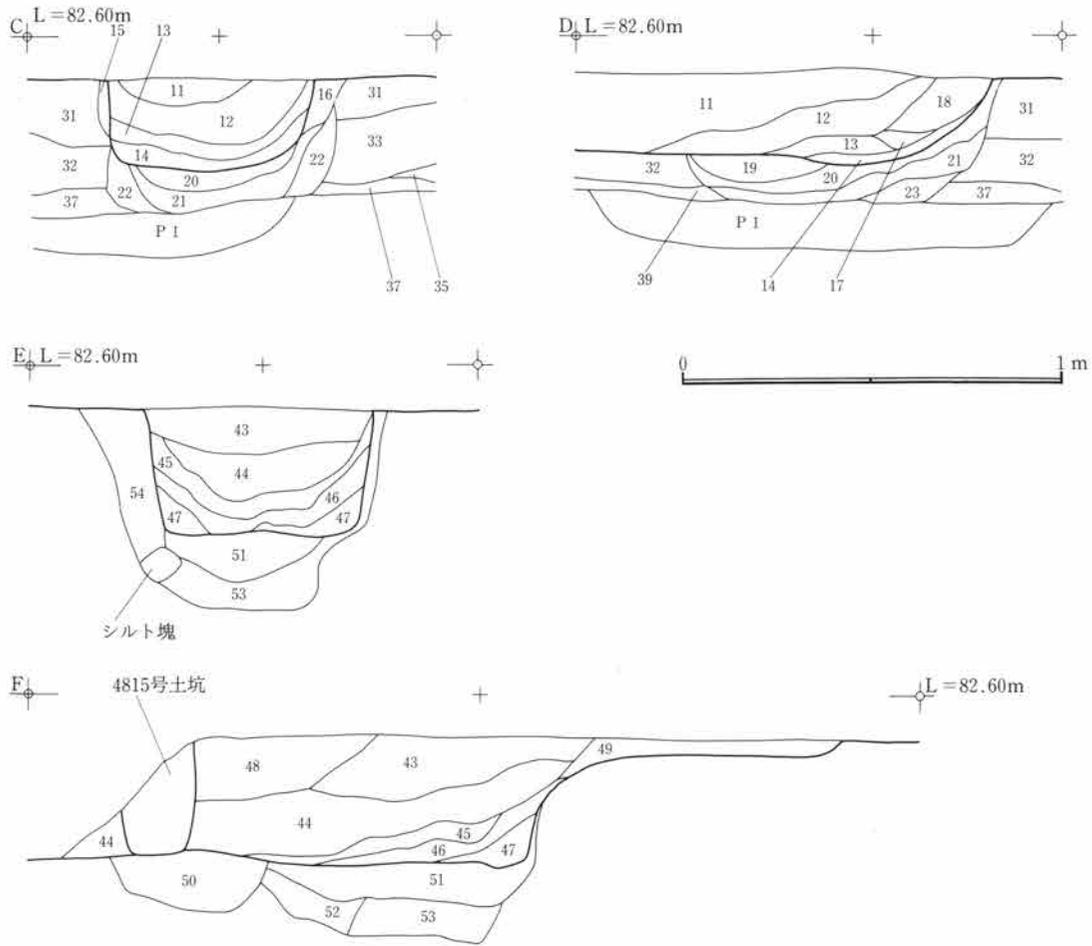
遺物 (挿図番号第254図)



第152図 149号住居址



第153图 150·151号住居址(1)



第154図 150・151号住居址(2)竈

土師器の坏 (608)・須恵器 (609・610・611・612) を出土している。
 その他、土師器1746g、須恵器2853gが出土。また、砥石が1点出土している。材質は砥岩である。

3区153号住居址

遺構 (挿図番号第156図)

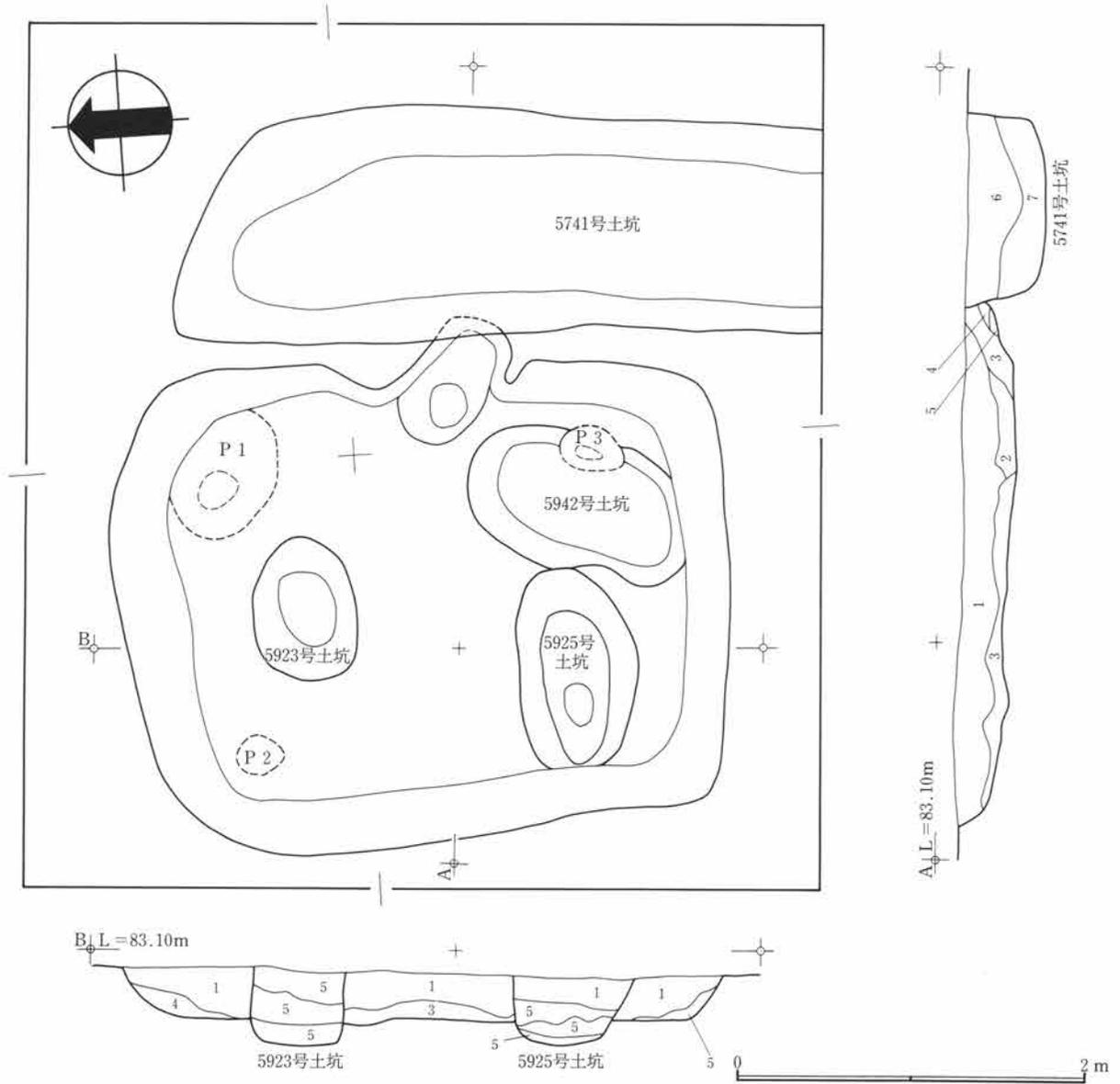
本住居址はK10-80, 81グリッドで検出され、北東3.0mに120号住居址、西21.0mに155号住居址が位置する。規模は長軸3.80m・短軸2.90m、面積10.852m²である。主軸方向はN-9°-Eを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は68cm (推定)、竈幅は110cm (推定)、焚き口幅は60cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。貯蔵穴は長軸73cm・短軸53cm、深さ8cmである。

遺物 (挿図番号第254図)

土師器の鉢 (613)・土師器の台付甕 (614)・須恵器の蓋 (615) を出土している。

その他、本住居址からは土師器1015g、須恵器88gが出土している。



第155図 152号住居址

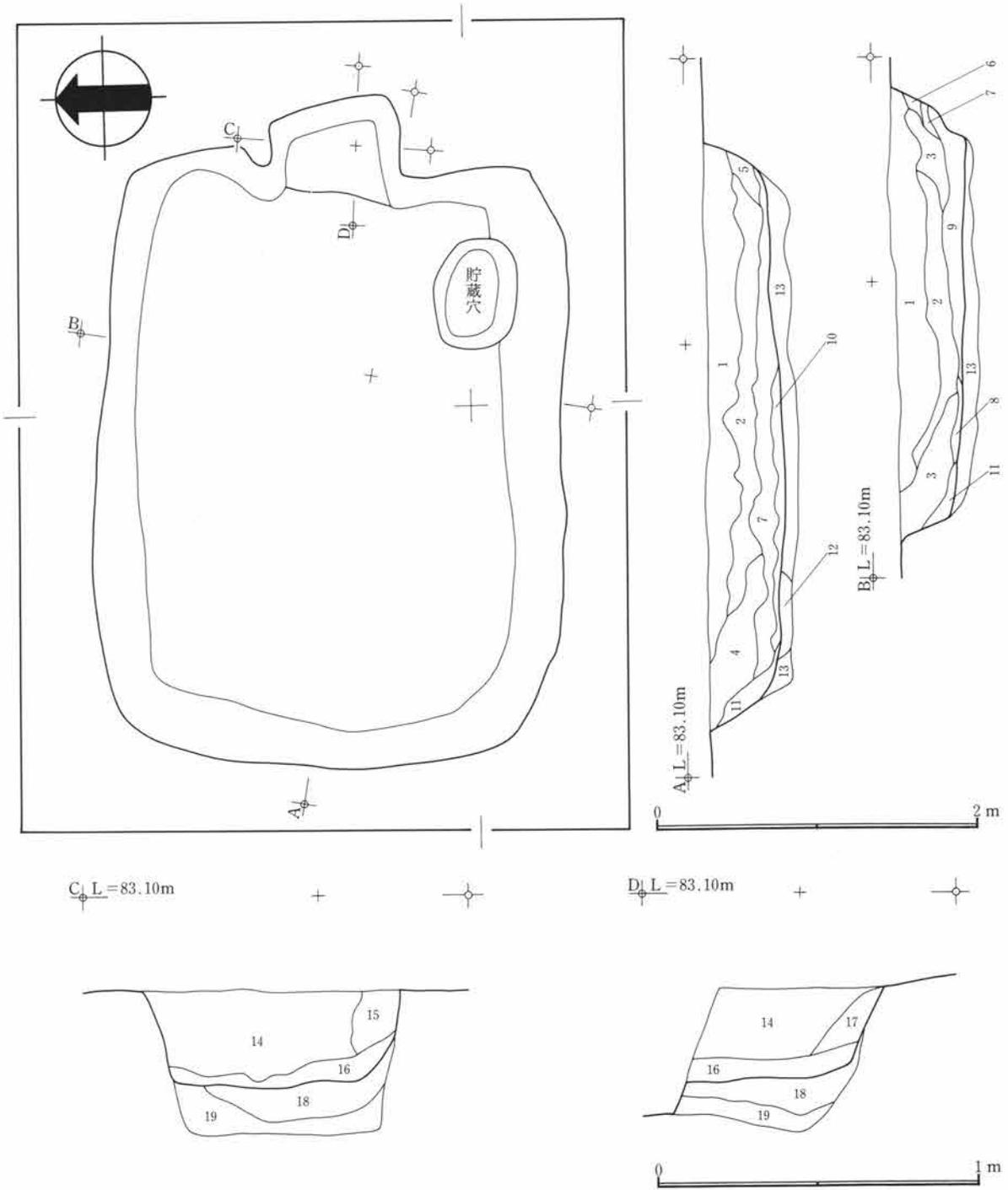
3区155号住居址

遺構 (挿図番号第157図 写真番号P.L. 57)

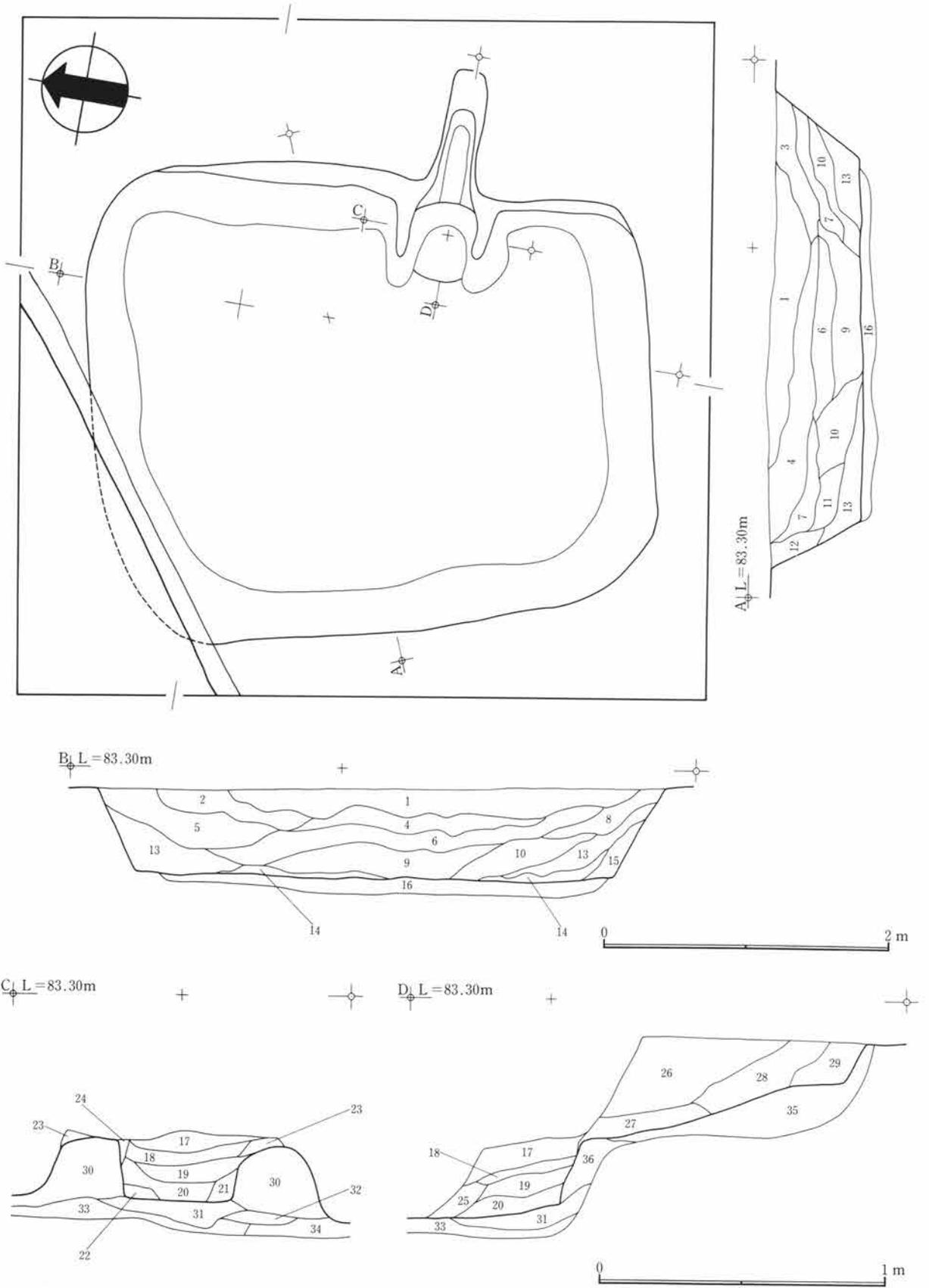
本住居址はJ10-78, 88グリッドで検出され、東22.0mに153号住居址、南西21.0mに156号住居址が位置する。本住居の北西隅は未発掘部分で、図面は復元してある。規模は長軸4.00m・短軸3.30m、面積11.952㎡である。主軸方向はN-6°-Wを示している。床下は丁寧な貼り床である。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は156cm、竈幅は90cm、燃烧部長さは63cm、焚き口幅は40cm、煙道部長さは93cm、煙道部幅は27cmである。炉床ピットは確認されなかった。

遺物は復元不可能の土師器片が少量検出されたのみである。



第156図 153号住居址



第157図 155号住居址

3区156号住居址

遺構 (挿図番号第158図 写真番号P L. 58)

本住居址はJ10-95, 96・J11-05, 06グリッドで検出され、南5.0mに119号住居址、南東25.0mに157号住居址が位置する。規模は長軸2.75m・短軸2.60m、面積6.816㎡である。主軸方向はN-18°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は95cm(推定)、焚き口幅は73cm(推定)である。炉床ピットは長軸67cm・短軸51cm、深さ9cmである。P1は長軸86cm・短軸70cm、深さ5cm、P2は長軸54cm・短軸48cm、深さ8cmである。

遺物 (挿図番号第254図)

土師器の坏(616)を出土している。その他、本住居址からは土師器260g、須恵器32gが出土している。

3区157号住居址

遺構 (挿図番号第159・160図 写真番号P L. 58)

本住居址はJ11-09, 18, 19グリッドで検出され、南7.0mに96号住居址、南東10.0mに97号住居址が位置する。規模は長軸4.20m・短軸4.05m、面積15.452㎡である。主軸方向はN-35°-Wを示している。

竈は北東壁に付設される。竈全長は195cm、竈幅は130cm、燃烧部長さは83cm、焚き口幅は54cm(推定)、煙道部長さは112cm、煙道部幅は60cmである。炉床ピットは長軸62cm・短軸42cm、深さ8cmである。

P1は長軸138cm・短軸62cm、深さ22cm、P2は長軸36cm・短軸28cm、深さ12cm、P3は長軸34cm・短軸26cm、深さ15cm、P4は長軸60cm・短軸50cm、深さ16cm、P5は長軸130cm・短軸116cm、深さ11cmである。

遺物 (挿図番号第255図 写真番号P L. 85)

土師器(617・618・619・620・621・622・623・624)・須恵器の坏(625)を出土している。

その他、本住居址からは土師器5600g、須恵器286gが出土している。

3区158号住居址

遺構 (挿図番号第161図 写真番号P L. 58)

本住居址はL9-50, 51, 60, 61グリッドで検出され、北4.0mに159号住居址、西6.0mに163号住居址が位置する。規模は長軸3.75m・短軸2.95m、面積10.268㎡である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は63cm(推定)、焚き口幅は50cm(推定)である。炉床ピットは長軸33cm・短軸32cm、深さ6cmである。

貯蔵穴は長軸68cm・短軸44cm、深さ11cmである。P1は長軸116cm・短軸86cm、深さ8cmである。

遺物 (挿図番号第255図)

土師器の甕(626)・須恵器の高台付埴(627)・灰釉陶器の壺(628)・須恵器の大壺(629)を出土している。

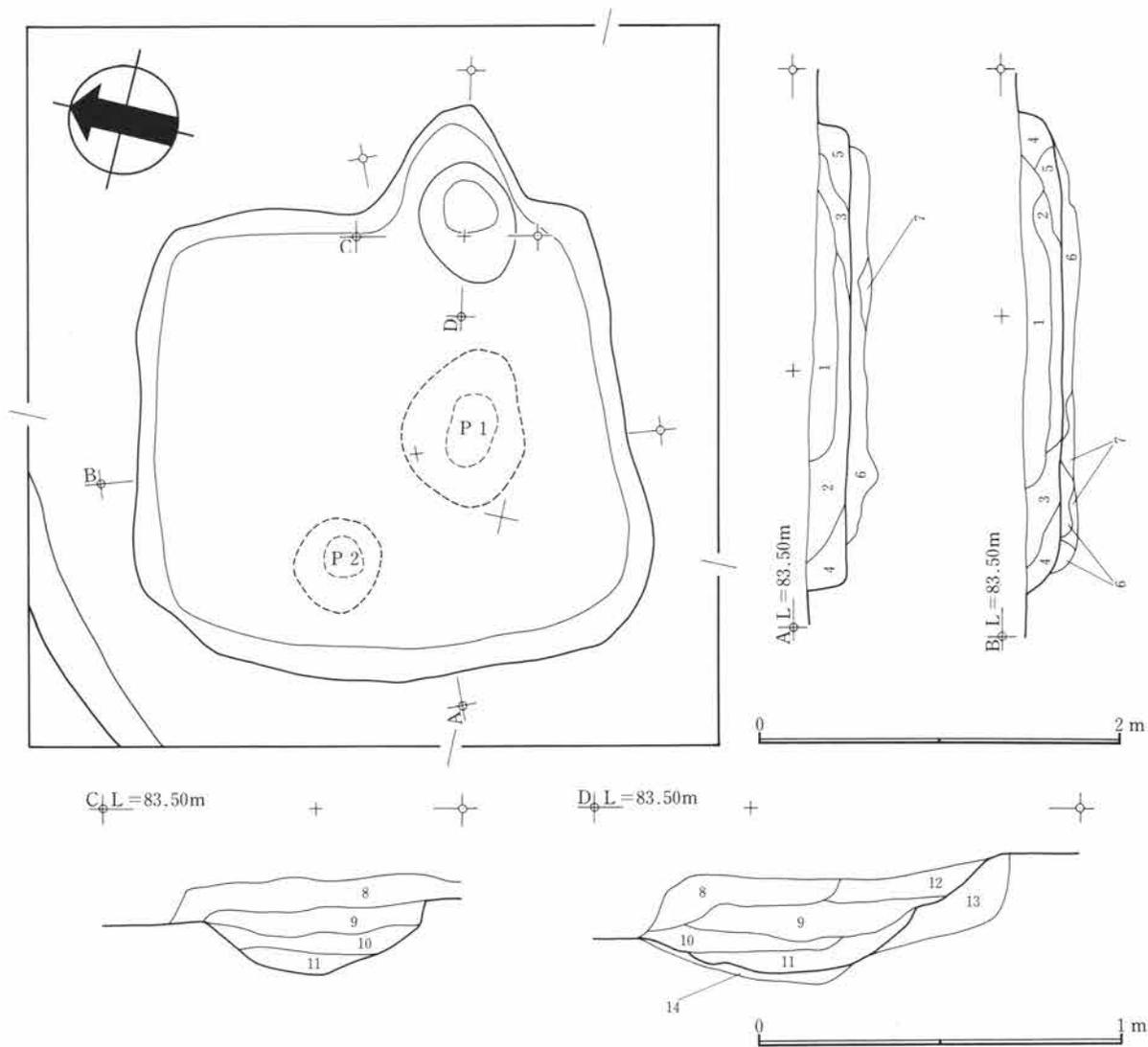
その他に土師器2840g、須恵器3080g、中世内耳土器49g、近世施釉陶器74gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。製品名は棒状である。

3区159号住居址

遺構 (挿図番号第162図 写真番号P L. 58)

本住居址はL9-50, 51グリッドで検出され、西6.0mに163号住居址、南4.0mに158号住居址が位置する。規模は長軸2.55m・短軸2.40m(推定)、面積5.780㎡である。主軸方向はNを示している。



第158図 156号住居址

竈は西壁の左寄りに付設される。竈全長は95cm（推定）、焚き口幅は50cm（推定）である。炉床ピットは長軸64cm・短軸57cm、深さ7cmである。P 1は長軸55cm・短軸24cm、深さ6cm、P 2は長軸65cm・短軸58cm、深さ7cm、P 3は長軸50cm・短軸37cm、深さ5cmである。

遺物（挿図番号第256図）

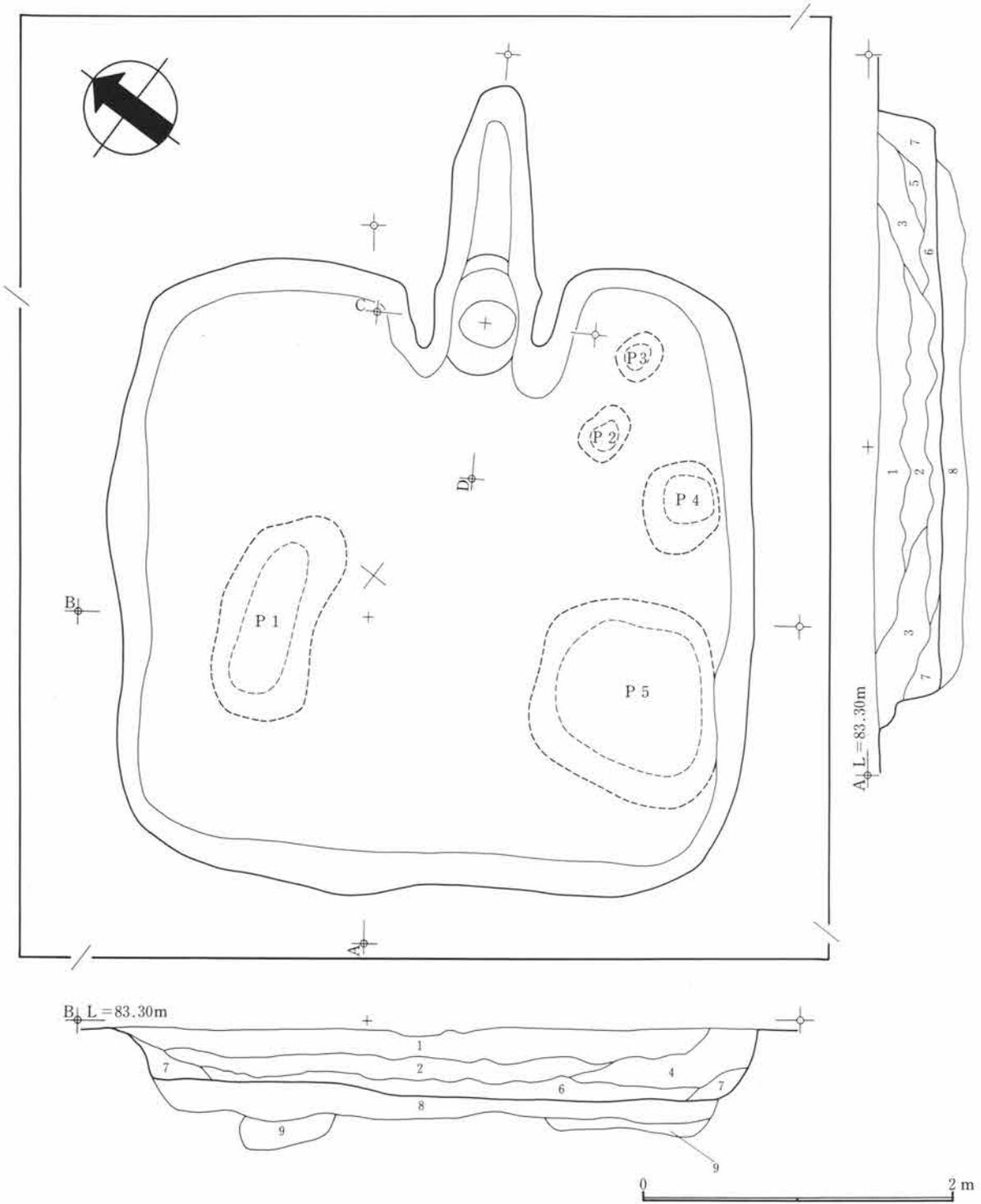
土師器の坏（630）・須恵器の甕（631）を出土している。その他に土師器123g、須恵器64gが出土している。

3区160号住居址

遺構（挿図番号第163図 写真番号P L. 58）

本住居址はK 9-39, 49・L 9-30, 40グリッドで検出され、北東5.0mに162号住居址が位置する（164住と重複）。規模は長軸4.70m・短軸3.50m、面積14.800㎡である。主軸方向はN-4°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は77cm（推定）、焚き口幅は60cm（推定）である。炉床ピットは確



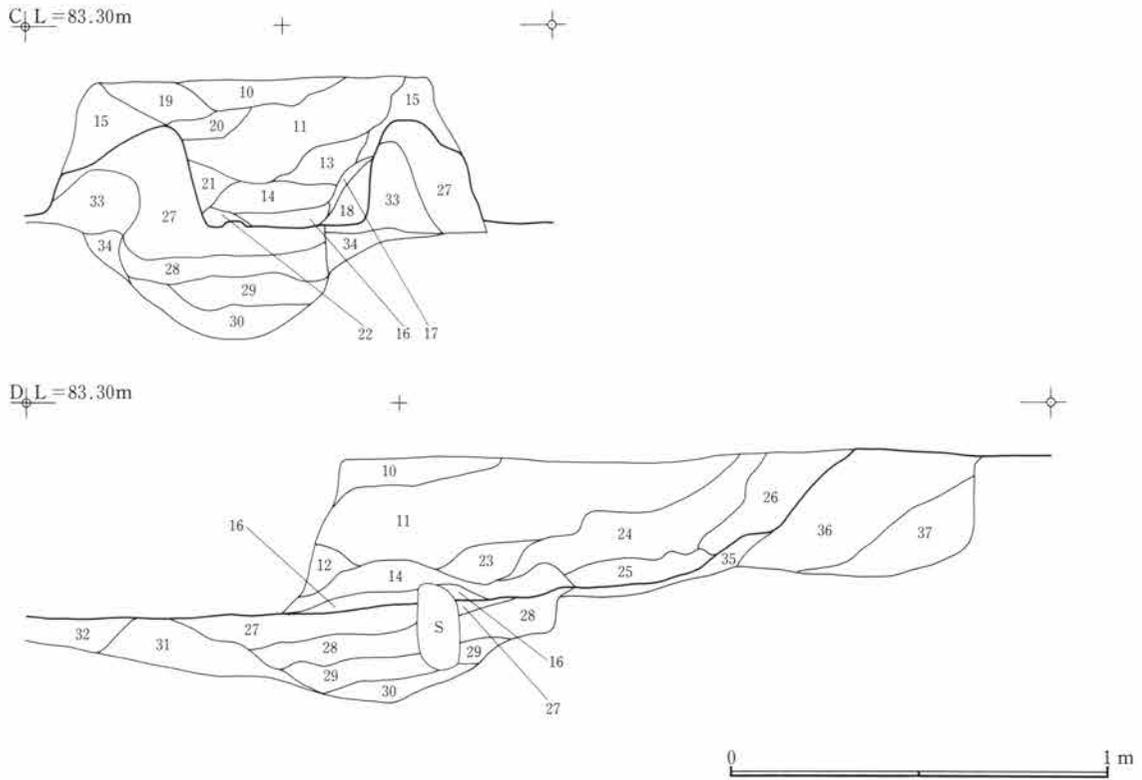
第159図 157号住居址(1)

認められなかった。貯蔵穴は長軸55cm・短軸50cm、深さ7cmである。P1は長軸63cm・短軸30cm、深さ8cm、P2は長軸148cm・短軸87cm、深さ7cm、P3は長軸110cm・短軸95cm、深さ13cmである。

遺物 (挿図番号第256図)

土師器 (632・633・634)・須恵器の小壺 (635)・蓋 (636) を出土。その他に土師器2800g、須恵器560g

第II章 遺 跡



第160図 157号住居址(2)竈

が出土。

3区161号住居址

遺構 (挿図番号第164・165図 写真番号P L. 58)

本住居址はL 9-20, 30グリッドで検出され、南西6.0mに160号住居址が位置する。(162住と重複)
規模は長軸3.40m (推定)・短軸2.50m, 面積8.140m²である。主軸方向はN-1°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は93cm (推定), 焚き口幅は45cm (推定)である。炉床ピットは長軸93cm・短軸60cm, 深さ11cmである。P 1は長軸38cm・短軸37cm, 深さ10cmである。

遺物 (挿図番号第256図)

土師器の甕 (637)・坏 (638)・須恵器の蓋 (639)・高台付壺 (640)・坏 (641) を出土している。

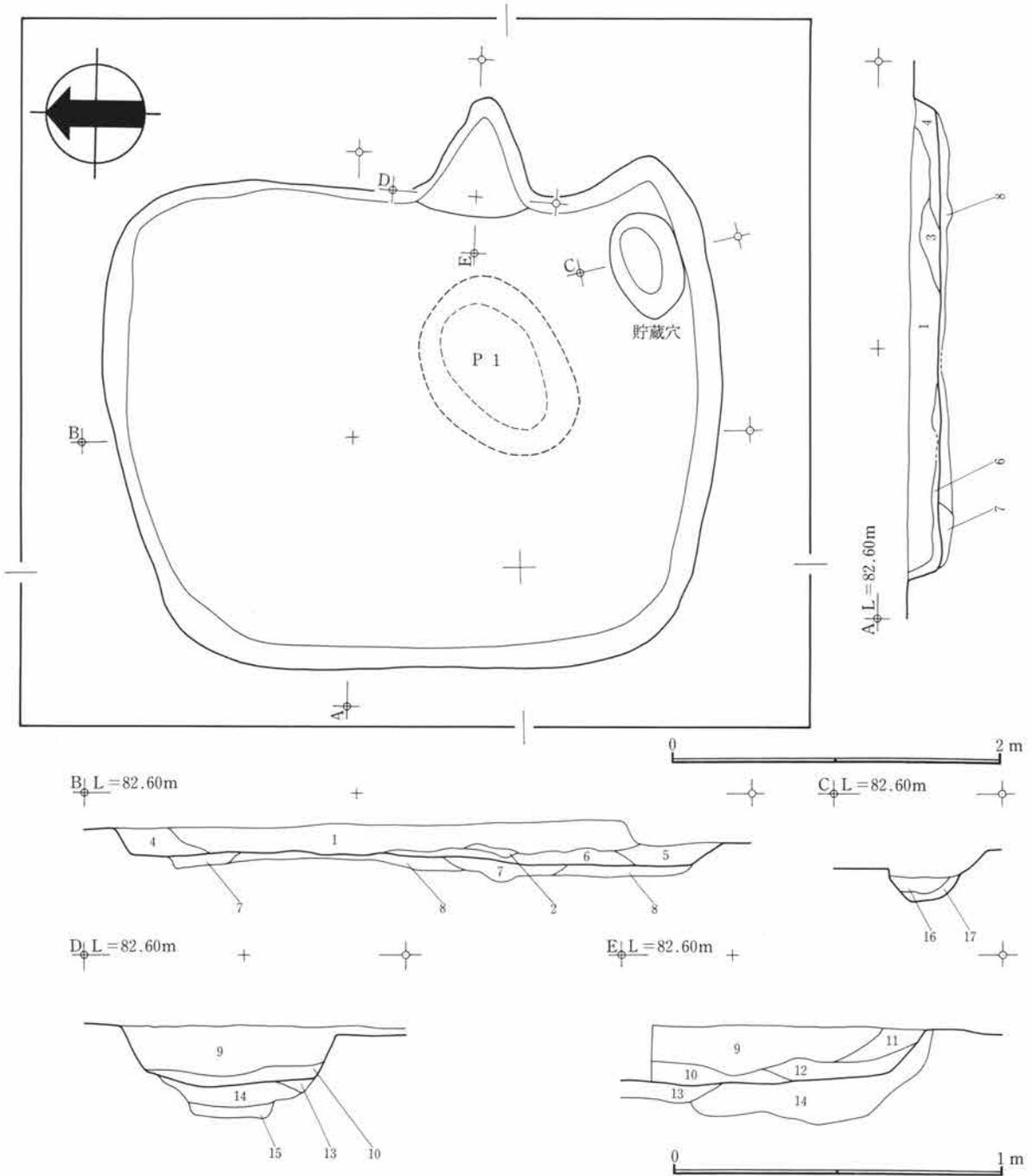
その他に土師器1370g、須恵器260gが出土している。本住居では鉄製品が出土している。製品名は釘である。

3区162号住居址

遺構 (挿図番号第164・165図 写真番号P L. 58)

本住居址はL 9-30, 31グリッドで検出され、南西5.0mに160号住居址が位置する。(161住と重複)
規模は長軸3.20m・短軸2.80m, 面積7.714m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は101cm (推定), 焚き口幅は57cm (推定)である。

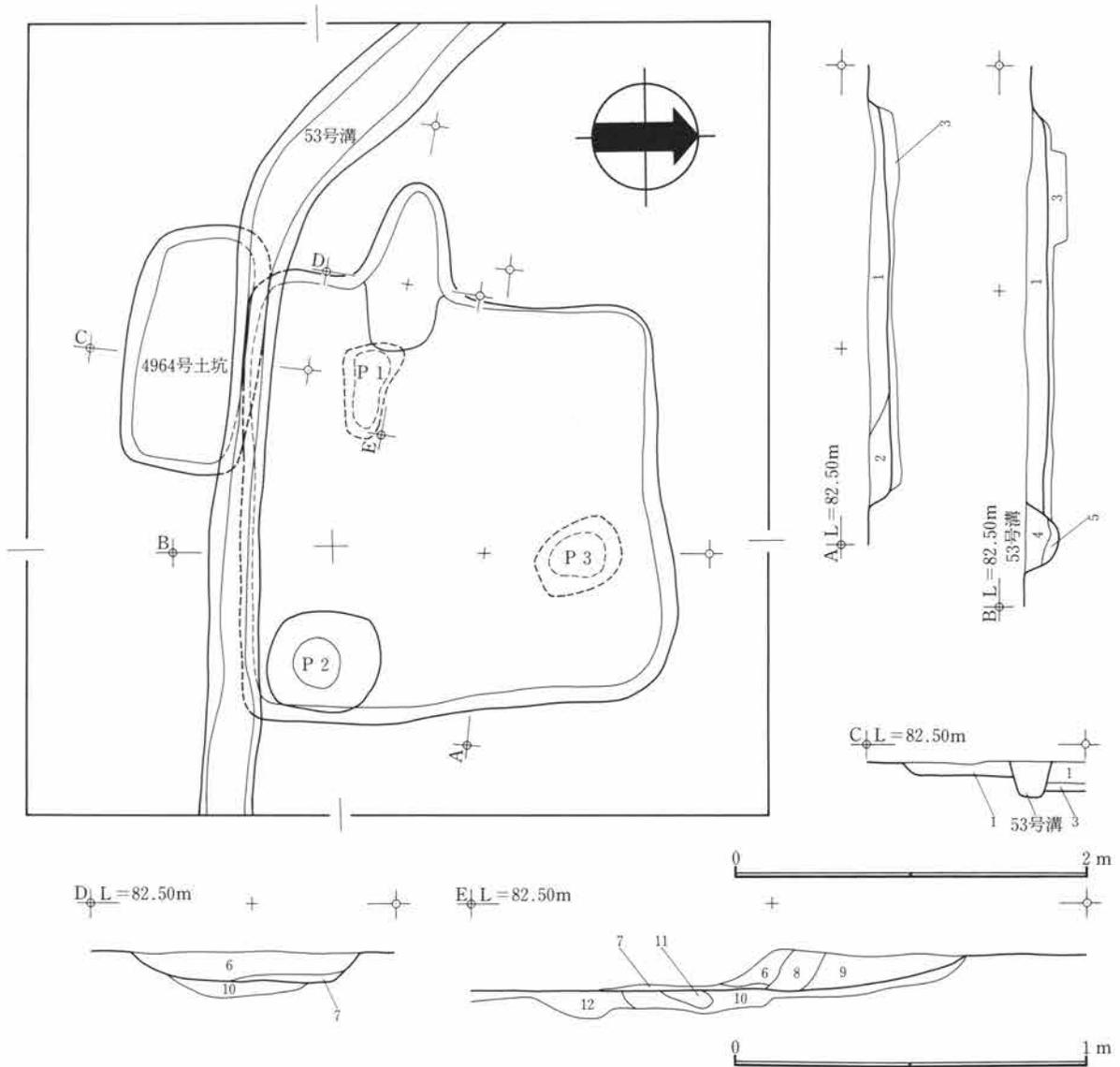


第161図 158号住居址

P 1 は長軸42cm・短軸40cm、深さ15cm、P 2 は長軸23cm・短軸22cm、深さ 8 cm、P 3 は長軸30cm・短軸25 cm、深さ10cmである。

遺物（挿図番号第256図）

土師器の甕（642）・須恵器の坏（643）を出土している。その他に土師器1497g、須恵器241gが出土している。



第162図 159号住居址

3区163号住居址

遺構 (挿図番号第166図 写真番号P L. 58)

本住居址はL 9-50グリッドで検出され、東6.0mに159号住居址が位置する。(166住と重複)

規模は長軸3.75m・短軸3.00m、面積10.534㎡である。主軸方向はNを示している。

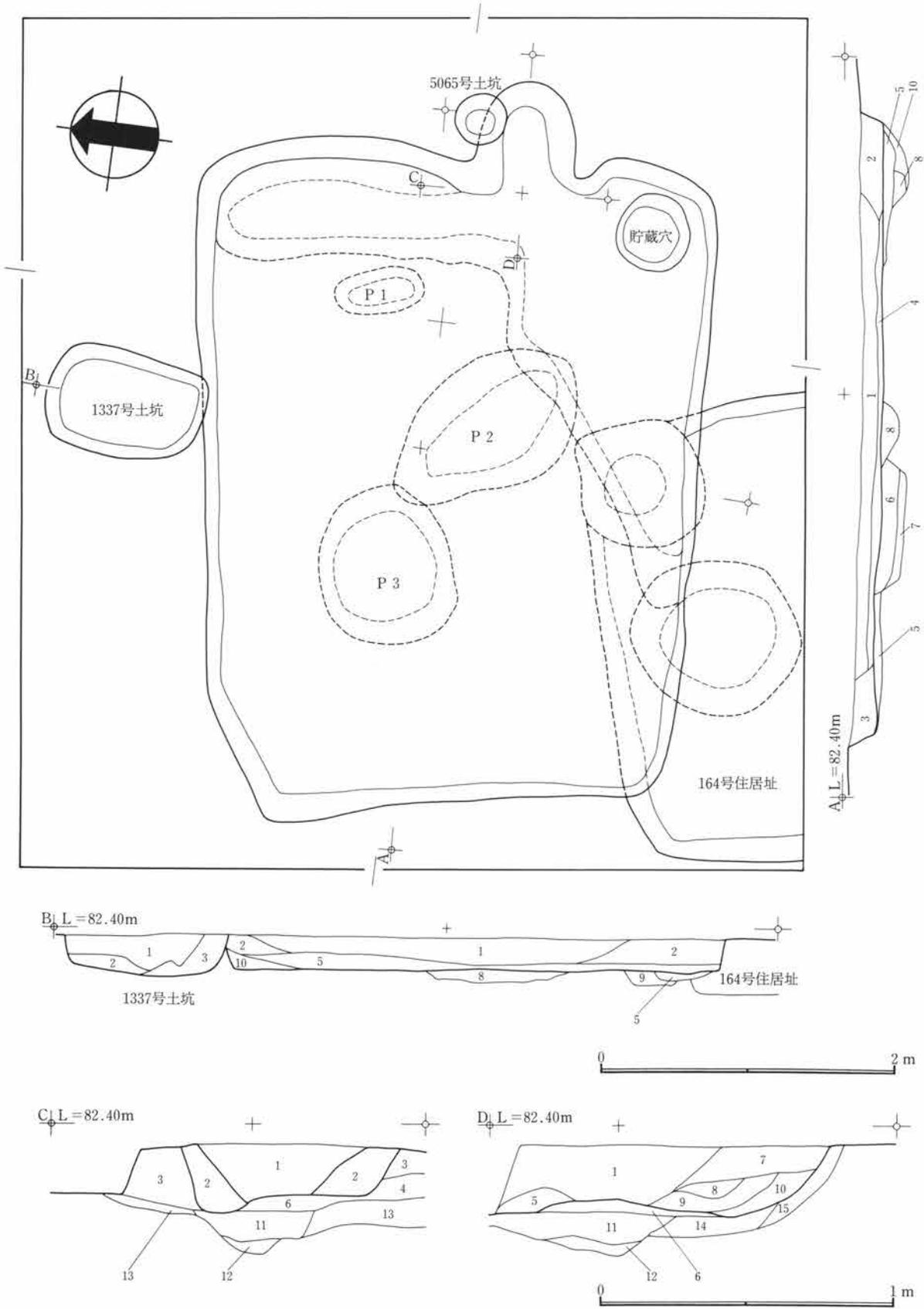
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は63cm (推定)、焚き口幅は58cm (推定) である。炉床ピットは長軸45cm・短軸38cm、深さ7cmである。

P 1 は長軸30cm・短軸28cm、深さ15cm、P 2 は長軸75cm・短軸70cm、深さ9cm、P 3 は長軸37cm・短軸35cm、深さ13cm、P 4 は長軸38cm・短軸34cm、深さ10cmである。

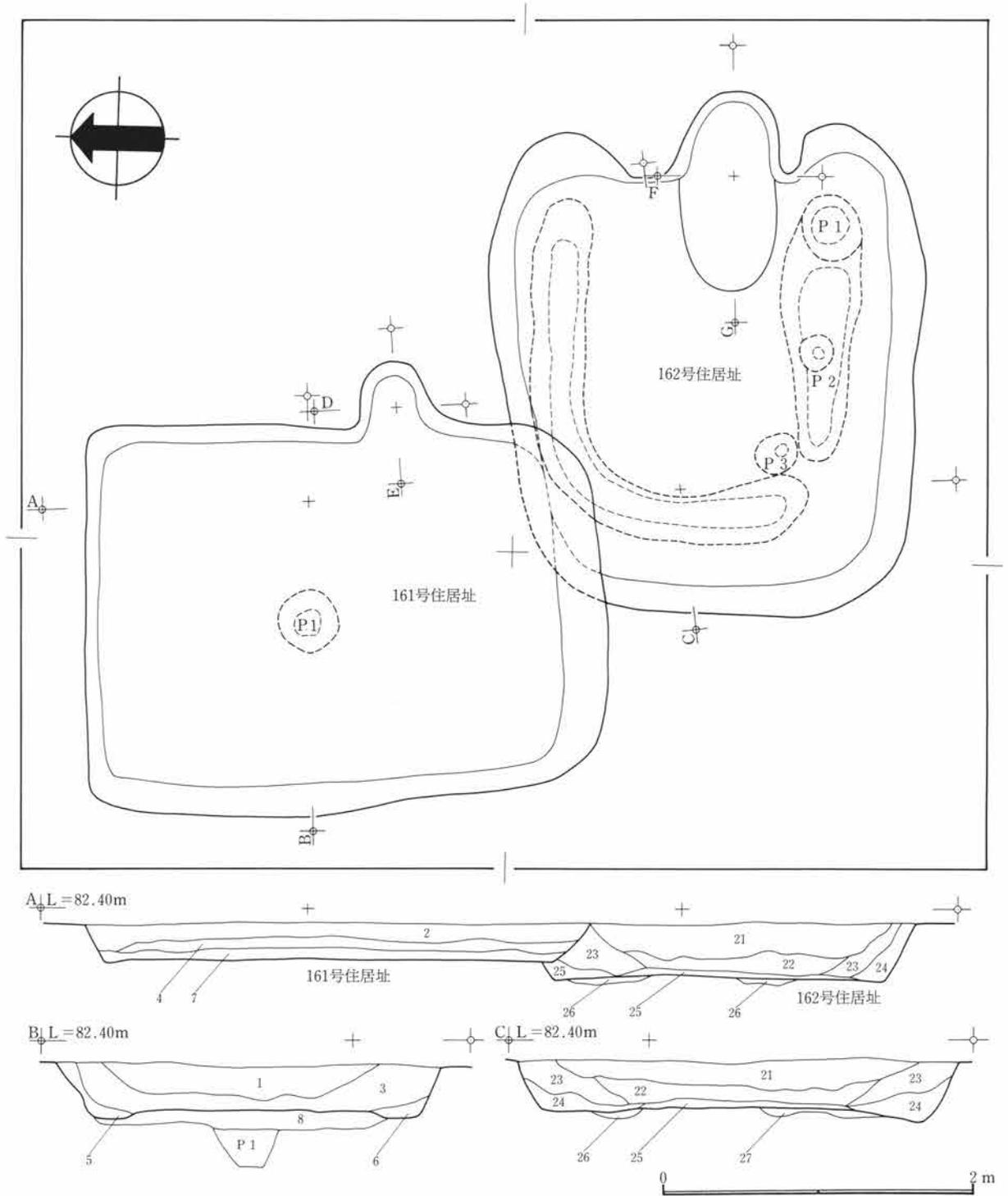
遺物 (挿図番号第256図 写真番号P L. 89)

土師器の甕 (644)・台付甕 (645)・坏 (646)・須恵器の高台付埴 (647・648)・坏 (墨書7) を出土。

その他に土師器1230g、須恵器1090gが出土。本住居では、鉄製品が2点出土している。製品名は刀子で



第163図 160号住居址

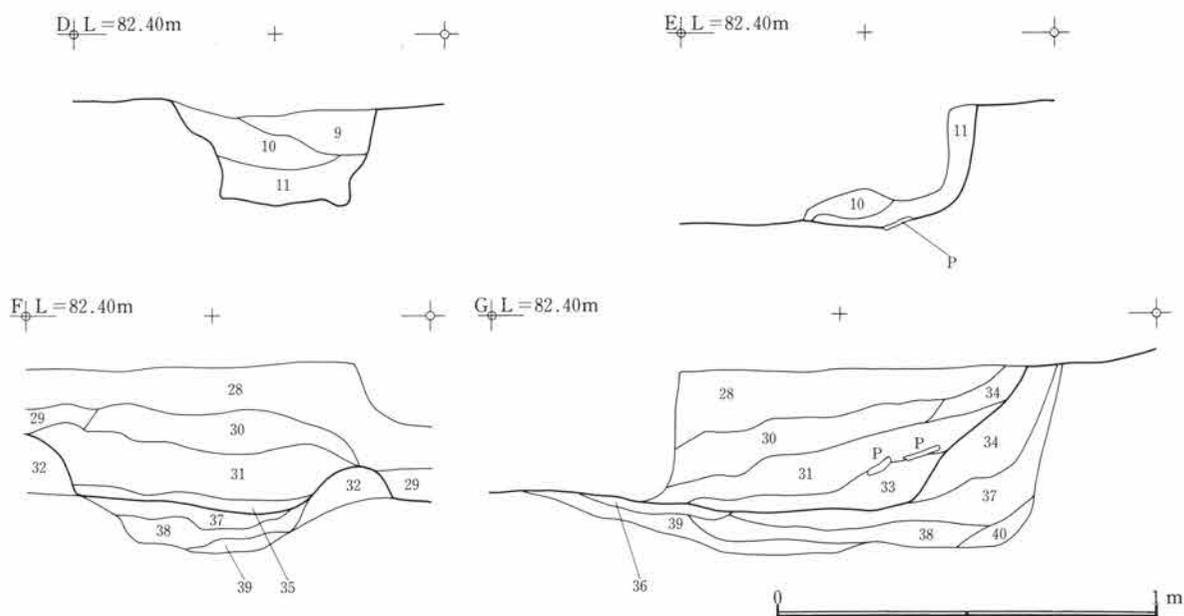


第164図 161・162号住居址(1)

ある。

3区164号住居址

遺構 (挿図番号第167図 写真番号P L. 59)



第165図 161・162号住居址(2)竈

本住居址はK 9-49・L 9-40グリッドで検出。西5.0mに185号住居址が位置する。(160・166住と重複)規模は長軸3.50m (推定)・短軸3.20m, 面積11.342m²である。主軸方向はN-8°-Wを示している。竈は東壁に付設される。竈全長は102cm (推定), 焚き口幅は67cm (推定)である。炉床ピットは長軸102cm・短軸67cm, 深さ10cmである。P 1は長軸107cm・短軸87cm, 深さ9cm, P 2は長軸115cm・短軸108cm, 深さ15cm, P 3は長軸62cm・短軸43cm, 深さ3cmである。

遺物 (挿図番号第257図)

土師器の甕 (649・650)・坏 (651)・甕 (652)・須恵器の多形壺 (653)・蓋 (654)・坏 (655・656) を出土。その他に土師器3056g、須恵器602gが出土。本住居からは鉄製品が出土している。製品名は不明である。

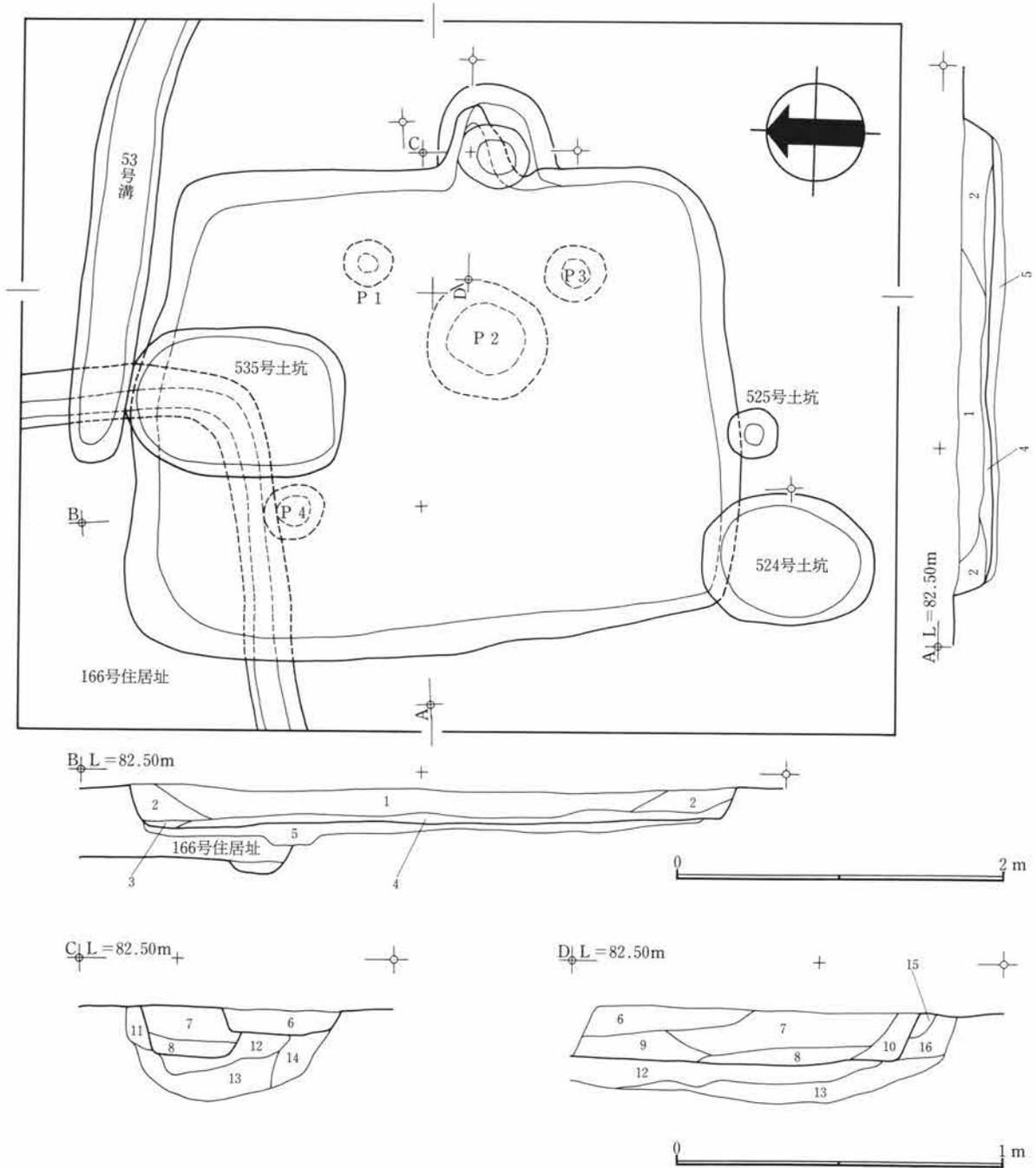
3区165号住居址

遺構 (挿図番号第168図 写真番号P L. 59)

本住居址はK 9-99グリッドで検出され、北西16.0mに131号住居址、南西6.0mに167号住居址が位置する。規模は長軸3.45m・短軸3.30m, 面積11.460m²である。主軸方向はN-9°-Wを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は102cm (推定), 焚き口幅は60cm (推定)である。炉床ピットは長軸83cm・短軸57cm, 深さ16cmである。P 1は長軸45cm・短軸40cm, 深さ23cm, P 2は長軸120cm・短軸70cm, 深さ17cm, P 3は長軸65cm・短軸44cm, 深さ18cm, P 4は長軸90cm・短軸80cm, 深さ23cm, P 5は長軸30cm・短軸22cm, 深さ17cm, P 6は長軸60cm・短軸40cm, 深さ20cm, P 7は長軸40cm・短軸37cm, 深さ14cm, P 8は長軸35cm・短軸25cm, 深さ10cmである。本住居からは鉄製品が出土している。製品名は不明である。

遺物 (挿図番号第257・258図 写真番号P L. 86)

土師器の甕 (657・658)・台付甕 (659・660)・須恵器の高台付坏 (661・663)・坏 (662・664・665)・高台付埴 (666)・壺 (667) を出土。その他に土師器5088g、須恵器3800gが出土。



第166図 163号住居址

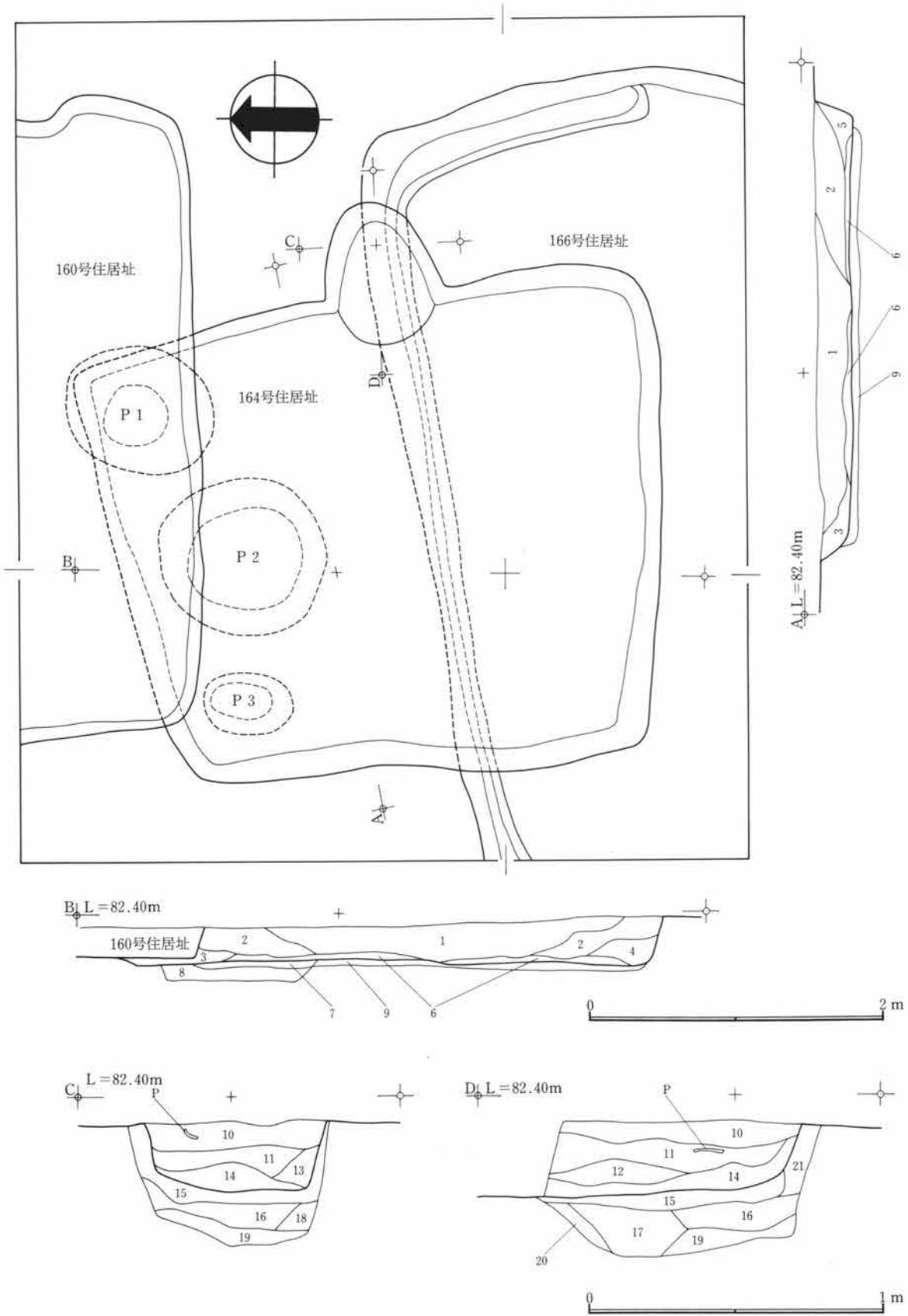
3区166号住居址

遺構 (挿図番号第169・170図 写真番号P L. 59)

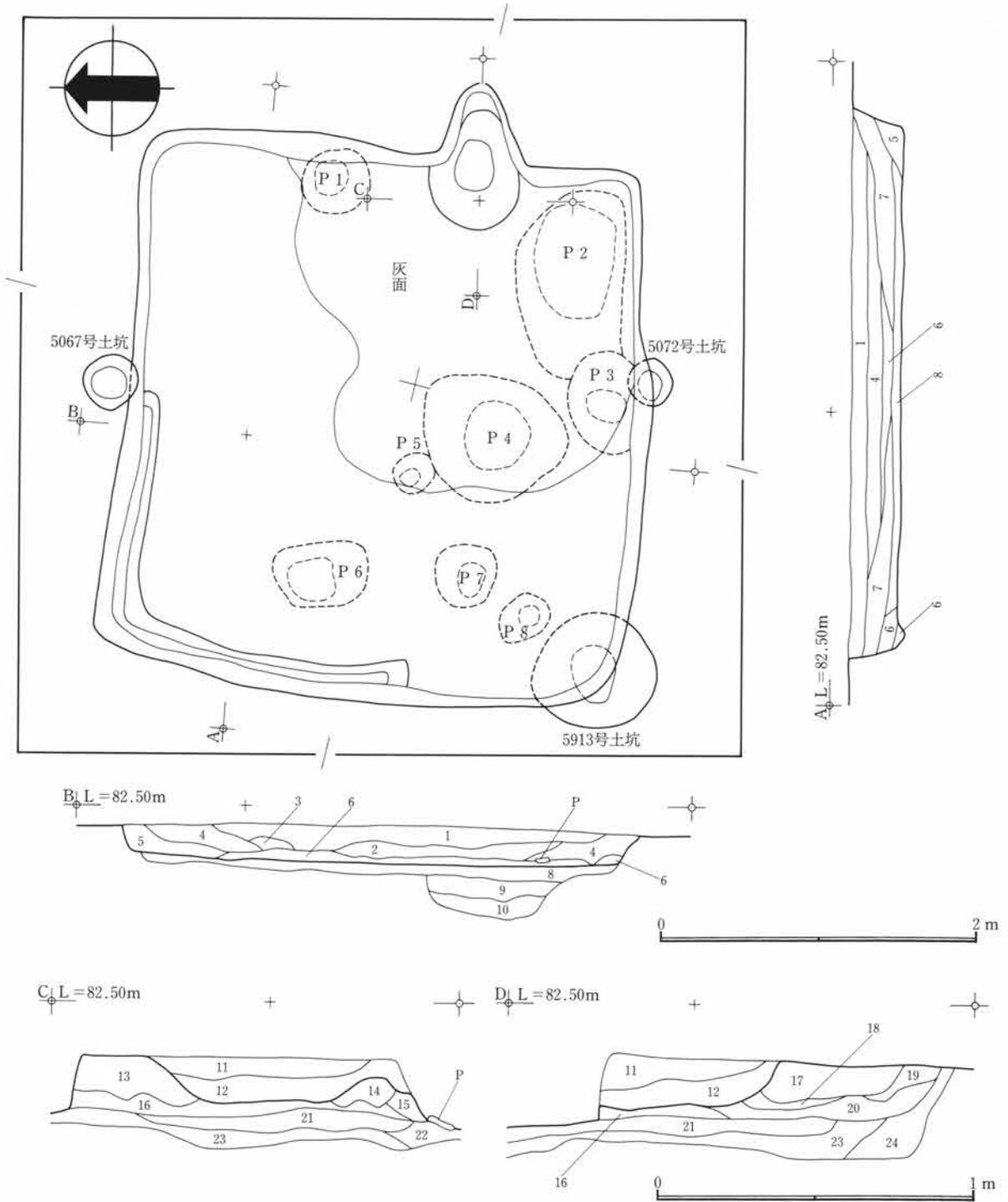
本住居址はK 9-49, 59・L 9-40, 50グリッドで検出され東7.0mに159号住居址が位置する (163・164住と重複)。規模は長軸6.20m・短軸6.00m, 面積32.756㎡である。主軸方向はN-13°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は173cm, 竈幅は100cm, 燃焼部長さは65cm, 焚き口幅は40cm, 煙道部長さは108cm, 煙道部幅は23cmである。炉床ピットは長軸102cm・短軸70cm, 深さ20cmである。

柱穴1は長軸73cm・短軸68cm, 深さ76cm, 柱穴2は長軸95cm・短軸65cm, 深さ79cm, 柱穴3は長軸85cm・



第167図 164号住居址



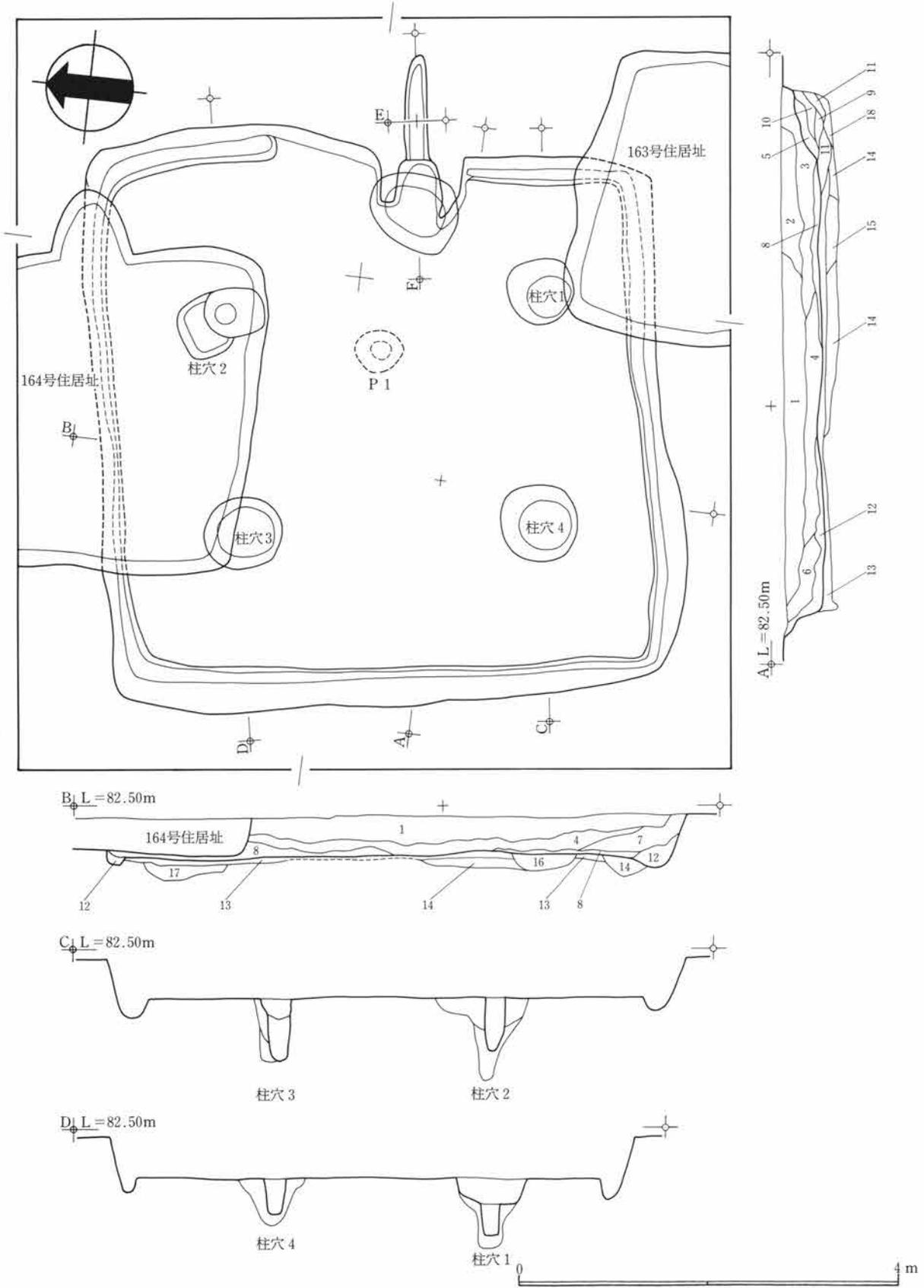
第168図 165号住居址

短軸75cm, 深さ74cm, 柱穴4は長軸82cm・短軸80cm, 深さ71cmである。4本の柱穴の掘方埋土の土壌は黄灰色壤土(2.5Y4/1)、柱痕にはオリブ褐色シルト(2.5Y4/3)が埋まる。

P1は床下ピットで長軸50cm・短軸43cm, 深さ22cmを測る。

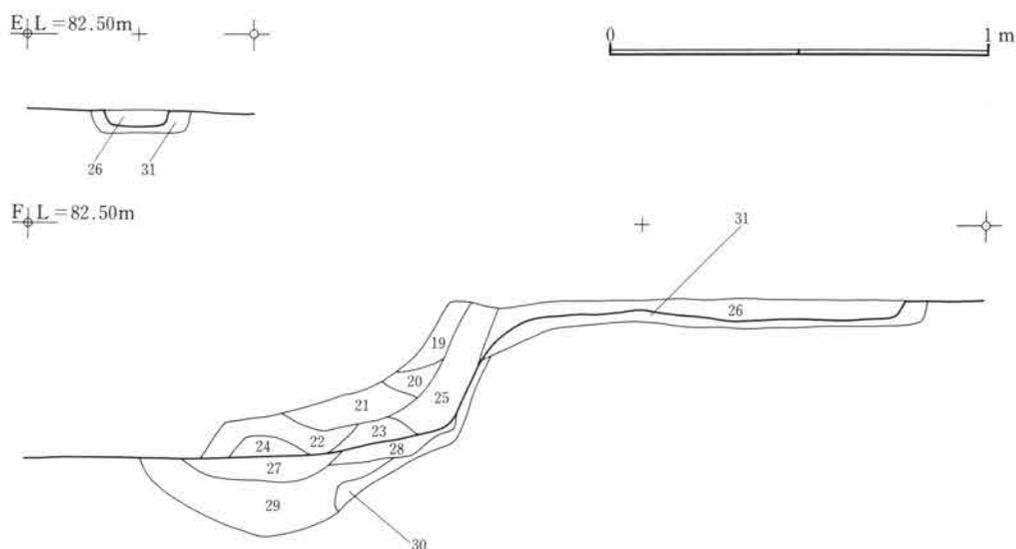
遺物(挿図番号第258図 写真番号P.L. 85)

土師器の甕(668)・土師器の坏(669・670)・須恵器の坏(671・672・673・674)・須恵器の高台付埴(675)・



第169図 166号住居址(1)

第II章 遺 跡



第170図 166号住居址(2)竈

かわらけ (676) を出土している。

その他に土師器5255g、須恵器810gが出土。本住居では鉄製品が出土している。製品名は不明である。

3区167号住居址

遺構 (挿図番号第171図 写真番号P L. 59)

本住居址はK9-99・K10-09グリッドで検出され、北東6.0mに165号住居址、南8.0mに66号住居址が位置する。

規模は長軸3.65m・短軸3.25m、面積11.128m²である。竈付近から白色凝灰岩が出土している。主軸方向はN-6°-Eを示している。

167A号竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は63cm(推定)、焚き口幅は62cm(推定)である。炉床ピットは長軸63cm・短軸41cm、深さ15cmである。167B号竈は西壁の左寄りに付設される。竈全長は57cm(推定)、焚き口幅は45cm(推定)である。炉床ピットは長軸73cm・短軸56cm、深さ8cmである。

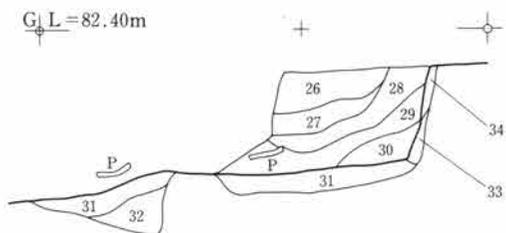
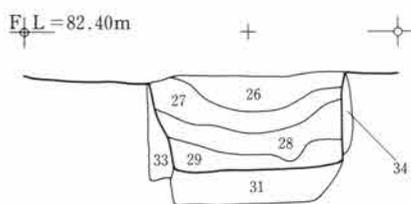
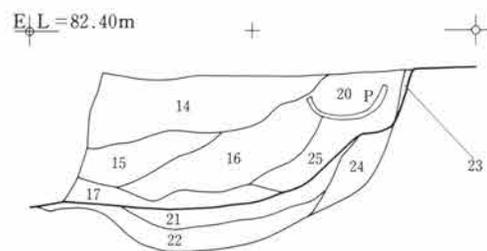
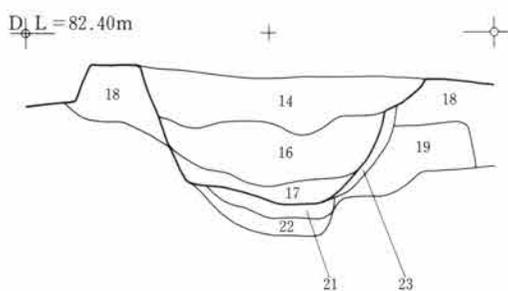
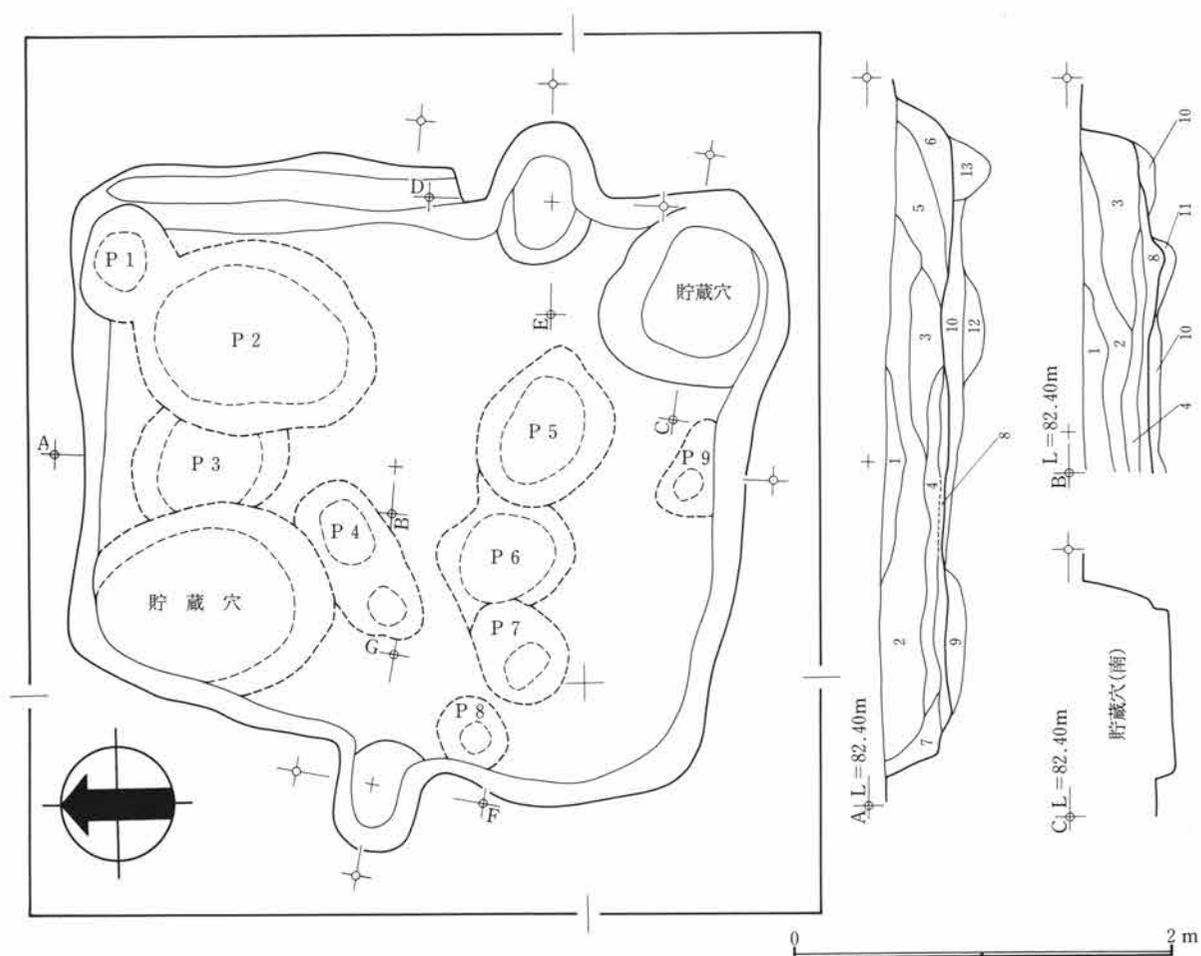
貯蔵穴は東南側が長軸95cm・短軸90cm、深さ14cm、北西側が長軸126cm・短軸105cm、深さ8cmである。

P1は長軸63cm・短軸53cm、深さ22cm、P2は長軸125cm・短軸103cm、深さ23cm、P3は長軸83cm・短軸60cm(推定)、深さ14cm、P4は長軸93cm・短軸43cm、深さ15cm、P5は長軸88cm・短軸66cm、深さ13cm、P6は長軸74cm・短軸55cm(推定)、深さ12cm、P7は長軸60cm・短軸47cm、深さ15cm、P8は長軸42cm・短軸35cm、深さ8cm、P9は長軸55cm(推定)・短軸48cm(推定)、深さ23cmである。

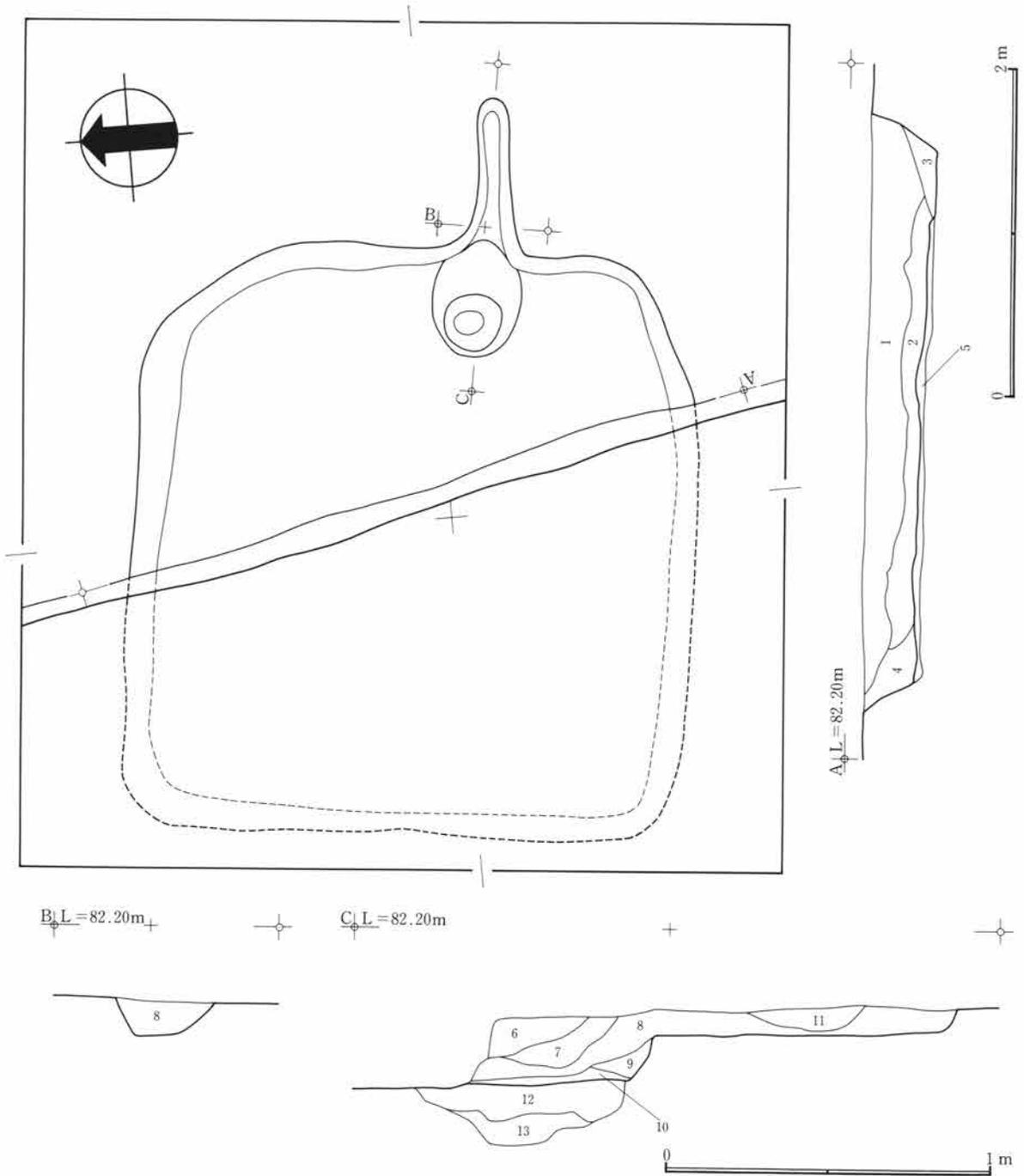
遺物 (挿図番号第259図 写真番号P L. 86)

土師器の甕 (677・678・679・680)・土師器の台付甕 (681)・土師器の坏 (682)・須恵器の大壺 (683)・須恵器の高台付坏 (684・687・688)・須恵器の坏 (685)・須恵器の高台付壺 (686)・須恵器の坏 (689・690・691・693)・灰釉陶器の高台付壺 (692) を出土している。その他に土師器7530g、須恵器3950gが出土している。

本住居では鉄製品が出土。製品は刃器である。また砥石が2点出土している。材質は流紋岩と粗粒安山岩



第171図 167号住居址



第172図 168号住居址

である。

3区168号住居址

遺構 (挿図番号第172図 写真番号P L. 59)

本住居址はK10-29, 39グリッドで検出され、西15.0mに124号住居址、北8.0mに66号住居址が位置する。西半分は発掘区域外である。

規模は長軸3.62m（推定）・短軸3.52m（推定），面積12.042㎡。主軸方向はN-8°-Eを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は160cm（推定），燃焼部長さは73cm，焚き口幅は45cm（推定），煙道部長さは87cm，煙道部幅は21cmである。炉床ピットは長軸45cm・短軸36cm，深さ6cmである。

遺物（挿図番号第260図）

土師器の坏（694）・須恵器の甕（695）を出土。その他に土師器2910g、須志器1091gが出土。

3区169号住居址

遺構（挿図番号第173、174図 写真番号P L. 59）

本住居址はL 8-56, 57, 66, 67グリッドで検出、西7.0mに171号住居址、北東12.0mに61号住居址が位置する。規模は長軸6.35m・短軸3.60m，面積22.554㎡である。主軸方向はN-4°-Wを示している。

169A号竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は116cm，竈幅は97cm，焚き口幅は50cmである。炉床ピットは長軸116cm・短軸55cm，深さ4cmである。169B号竈は東壁の左寄りに付設される。竈全長は73cm，竈幅は80cm，焚き口幅は43cmである。炉床ピットは長軸97cm・短軸48cm，深さ3cmである。

遺物（挿図番号第260図）

土師器の甕（696）・台付甕（697）・須恵器の高台付坏（698）・灰釉陶器の高台付？（699）を出土。

その他に土師器2781g、須恵器724gが出土している。本住居では鉄製品が出土。製品名は鎌である。

3区170号住居址

遺構（挿図番号第175図 写真番号P L. 59）

本住居址はL 8-72, 82, 83グリッドで検出され、北東20.0mに173号住居址、南西17.0mに179号住居址が位置する。規模は長軸4.50m・短軸3.30m（推定），面積13.938㎡である。主軸方向はN-10°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は120cm（推定），焚き口幅は52cm（推定）である。

遺物（挿図番号第260・261図 写真番号P L. 86・87）

土師器の甕（700・701・702）・坏（703・704・705・706・707）・黒色土器の蓋（708）・須恵器の長頸壺（709）・大壺（710）・小壺（711）・多形壺（712）・坏（713・714・715・716・717）・鉢（718）を出土。

その他に土師器10587g、須恵器9714g、中世陶器60gが出土している。

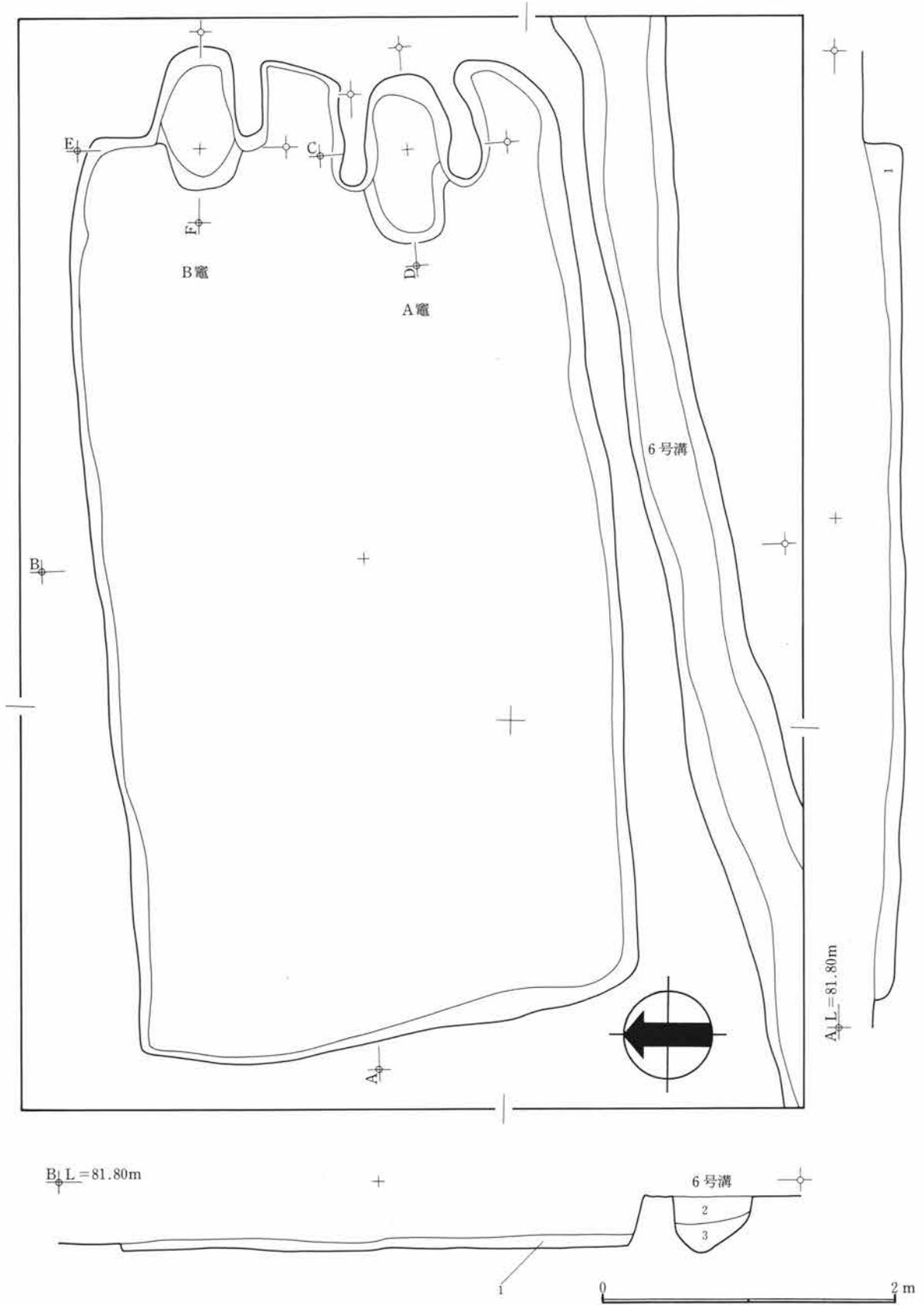
3区171号住居址

遺構（挿図番号第176・177図 写真番号P L. 59）

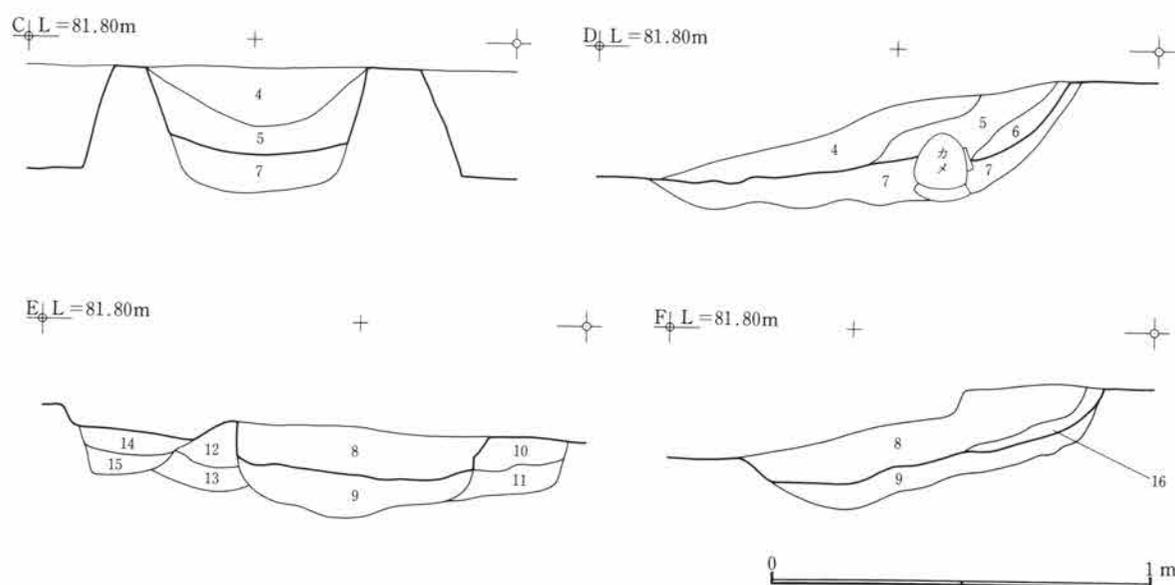
本住居址はL 8-55, 56, 65, 66グリッドで検出され、東7.0mに169号住居址が位置する。規模は長軸7.25m（推定）・短軸6.50m（推定），面積42.182㎡である。主軸方向はN-5°-Eを示している。竈は東壁に付設される。竈全長は107cm（推定），焚き口幅は25cm（推定）である。炉床ピットは長軸50cm・短軸42cm，深さ4cmである。

遺物（挿図番号第262図）

土師器の坏（719・720）・須恵器の蓋（721）を出土。その他に土師器1657g、須恵器205gが出土。



第173图 169号住居址(1)



第174図 169号住居址(2)竈

3区172号住居址

遺構 (挿図番号第176・177図 写真番号P.L. 59)

本住居址はL 8—55, 56, 65, 66グリッドで検出され、東9.0mに169号住居址が位置する(171、174住と重複)。規模は長軸7.23m(推定)・短軸4.15m(推定)、面積27.116㎡である。主軸方向はNを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は105cm、竈幅は145cm、焚き口幅は64cmである。炉床ピットは長軸158cm・短軸83cm、深さ7cmである。貯蔵穴は長軸105cm・短軸98cm、深さ32cmである。

本住居北西壁に3009号土坑が重なる。土層は第353図を参照した。

遺物 (挿図番号第262図)

土師器の甕(722)・坏(723・724・725)・須恵器の多形壺(726)・瓶(727)・蓋(728・729)・坏(730・732・733)・坏(731)・高台付坏(734)を出土している。

その他に土師器22862g、須恵器4424g、中世陶器54g、近世陶器1968g、近世瓦440gが出土している。

3区174号住居址

遺構 (挿図番号第176・177図 写真番号P.L. 60)

本住居址はL 8—55, 65グリッドで検出され、西6.0mに173号住居址が位置する。(171、172住と重複) 規模は長軸5.30m・短軸4.75m(推定)、面積24.628㎡である。主軸方向はNを示している。

本住居の西壁は56号溝によって切られている。土層は付図2のNo.9セクションを参照した。

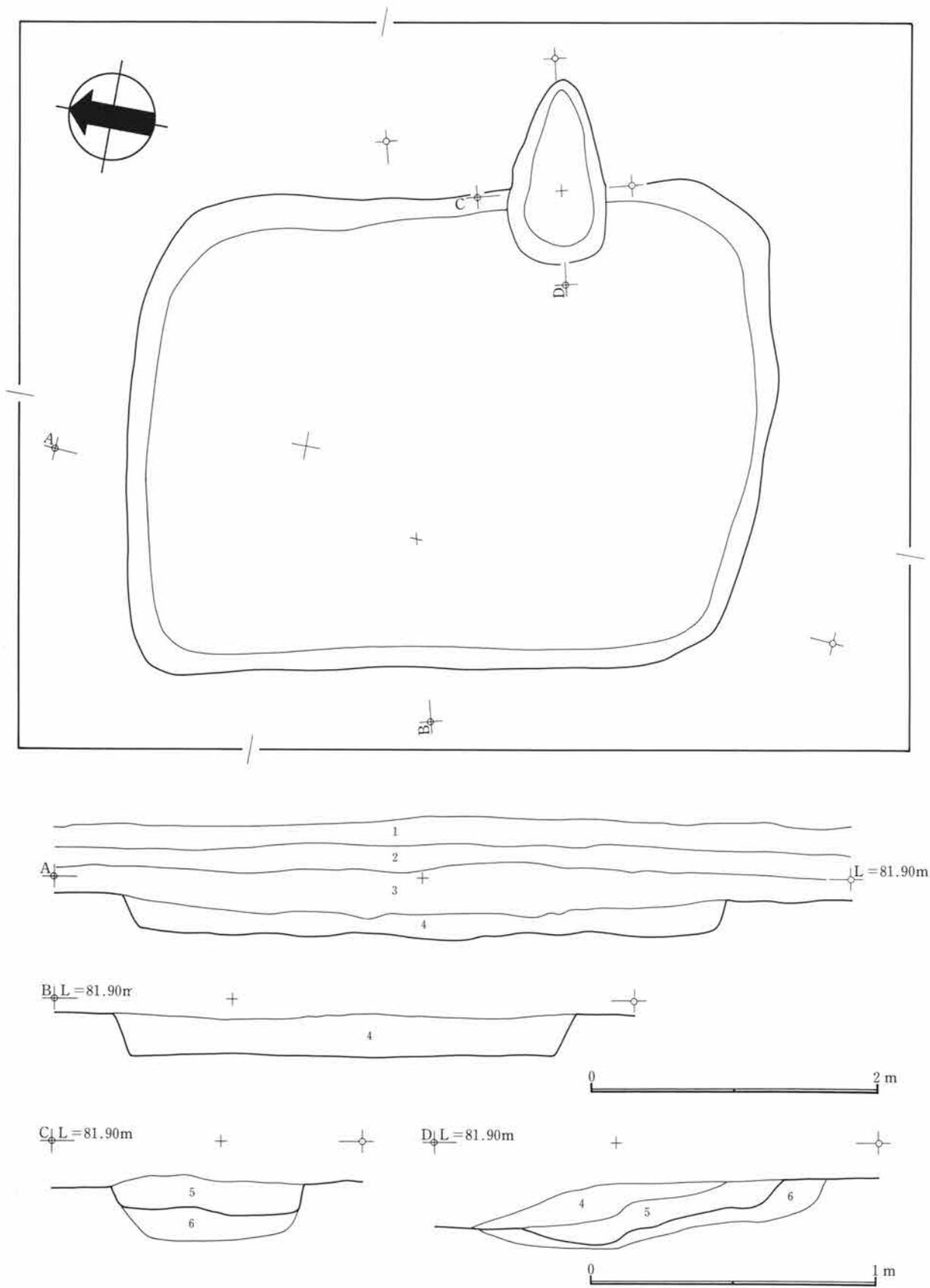
遺物 (挿図番号第263図)

土師器の坏(740・741)を出土。

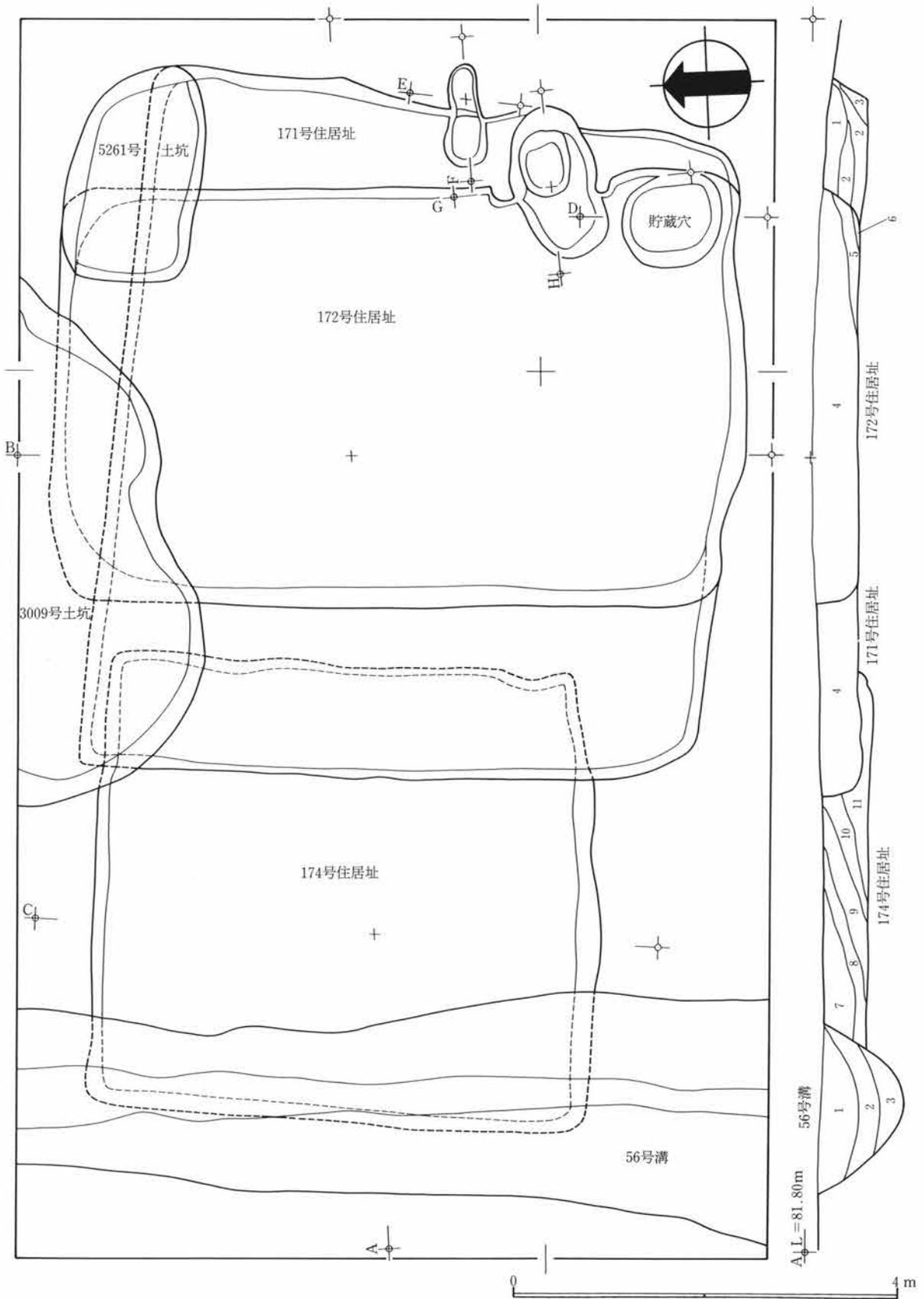
その他に土師器1125g、須恵器18g、縄文土器破片82gが出土。

3区173号住居址

遺構 (挿図番号第178図 写真番号P.L. 60)

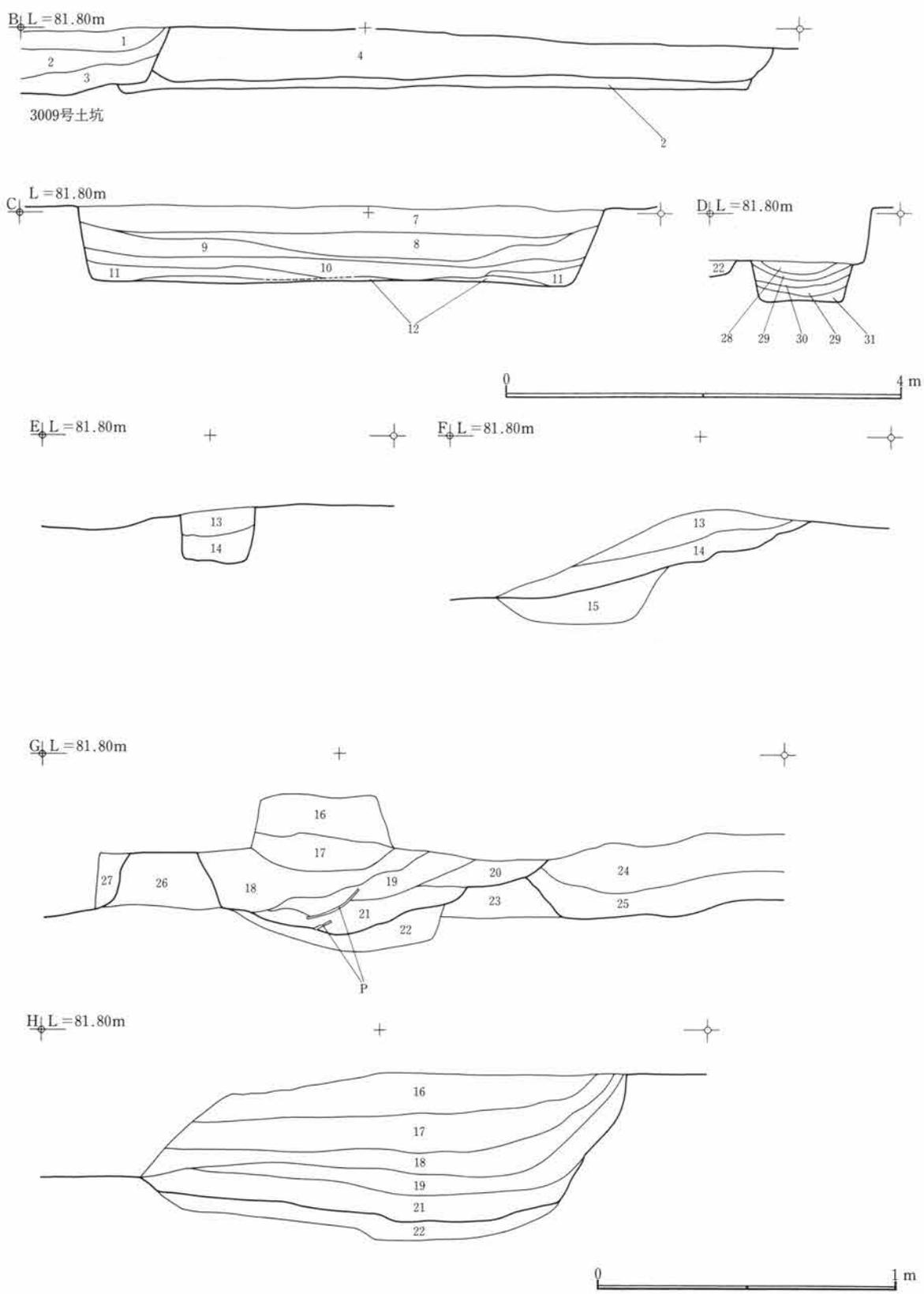


第175図 170号住居址

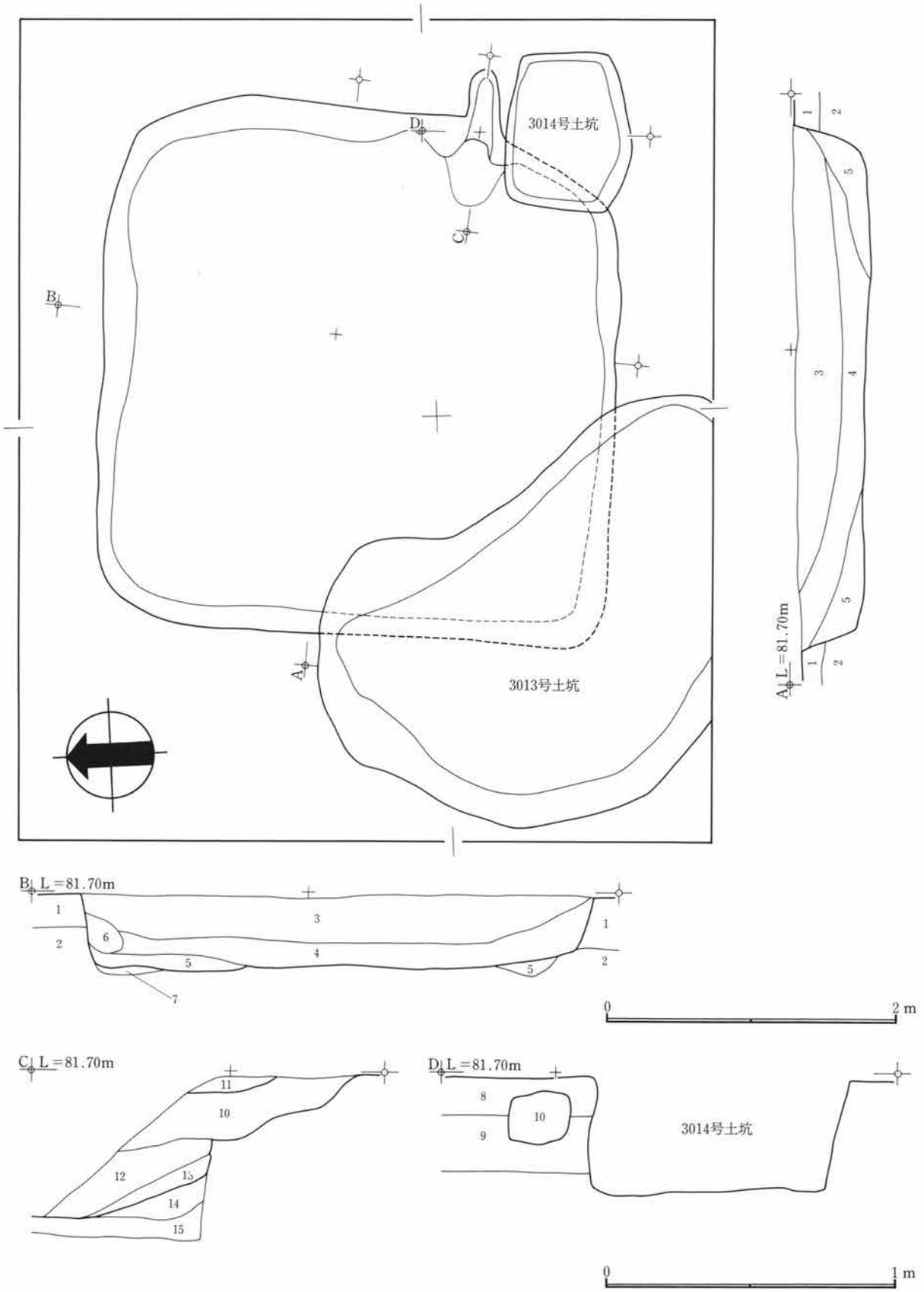


第176図 171・172・174号住居址(1)

第II章 遺 跡



第177图 171·172·174号住居址(2)



第178図 173号住居址

第II章 遺 跡

本住居址はL 8—54, 55, 64, 65グリッドで検出され、北4.0mに182号住居址、東5.0mに174号住居址が位置する。規模は長軸3.73m・短軸3.60m、面積12.922m²である。主軸方向はN—8°—Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は66cm、竈幅は70cm(推定)、燃焼部長さは14cm、焚き口幅は19cm(推定)、煙道部長さは52cm、煙道部幅は23cmである。

遺物 (挿図番号第262図)

土師器の甕 (735)・坏 (736・737)・須恵器の甕 (738)・蓋 (739) を出土している。

その他に土師器2096 g、須恵器856 g が出土している。

3区175号住居址

遺構 (挿図番号第179図)

本住居址はL 8—53, 54グリッドで検出され、南東6.0mに173号住居址が位置する。(182住と重複)

規模は長軸4.70m・短軸4.35m、面積18.564m²である。主軸方向はN—8°—Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は132cm(推定)、焚き口幅は60cm(推定)である。炉床ピットは長軸133cm・短軸75cm、深さ10cmである。

遺物 (挿図番号第263図)

土師器の甕 (742)・土師器の甕 (743)・土師器の広口小型壺 (744)・土師器の台付甕 (745)・土師器の坏 (746・747・748・749)・須恵器の高台付坏 (750)・土師器の高台付塊 (751)・灰釉陶器の高台付塊 (752) を出土している。その他に土師器3075 g、須恵器1740 g、近世陶器19 g が出土している。

3区177号住居址

遺構 (挿図番号第180図 写真番号P L. 60)

本住居址はL 8—68, 69, 78, 79グリッドで検出され、北東10.0mに72号住居址、北西14.0mに169号住居址が位置する。

規模は長軸3.65m・短軸2.60m、面積8.906m²である。主軸方向はN—17°—Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は63cm(推定)、竈幅は105cm、焚き口幅は48cmである。

遺物 (挿図番号第263図)

土師器の甕 (754)・甕 (755)・坏 (756・757・758) を出土。その他に土師器2604 g、須恵器28 g が出土。

3区178号住居址

遺構 (挿図番号第181図)

本住居址はL 9—07, 17, 18グリッドで検出され、南10.0mに111号住居址が、南東12.0mに100号住居址が位置する。

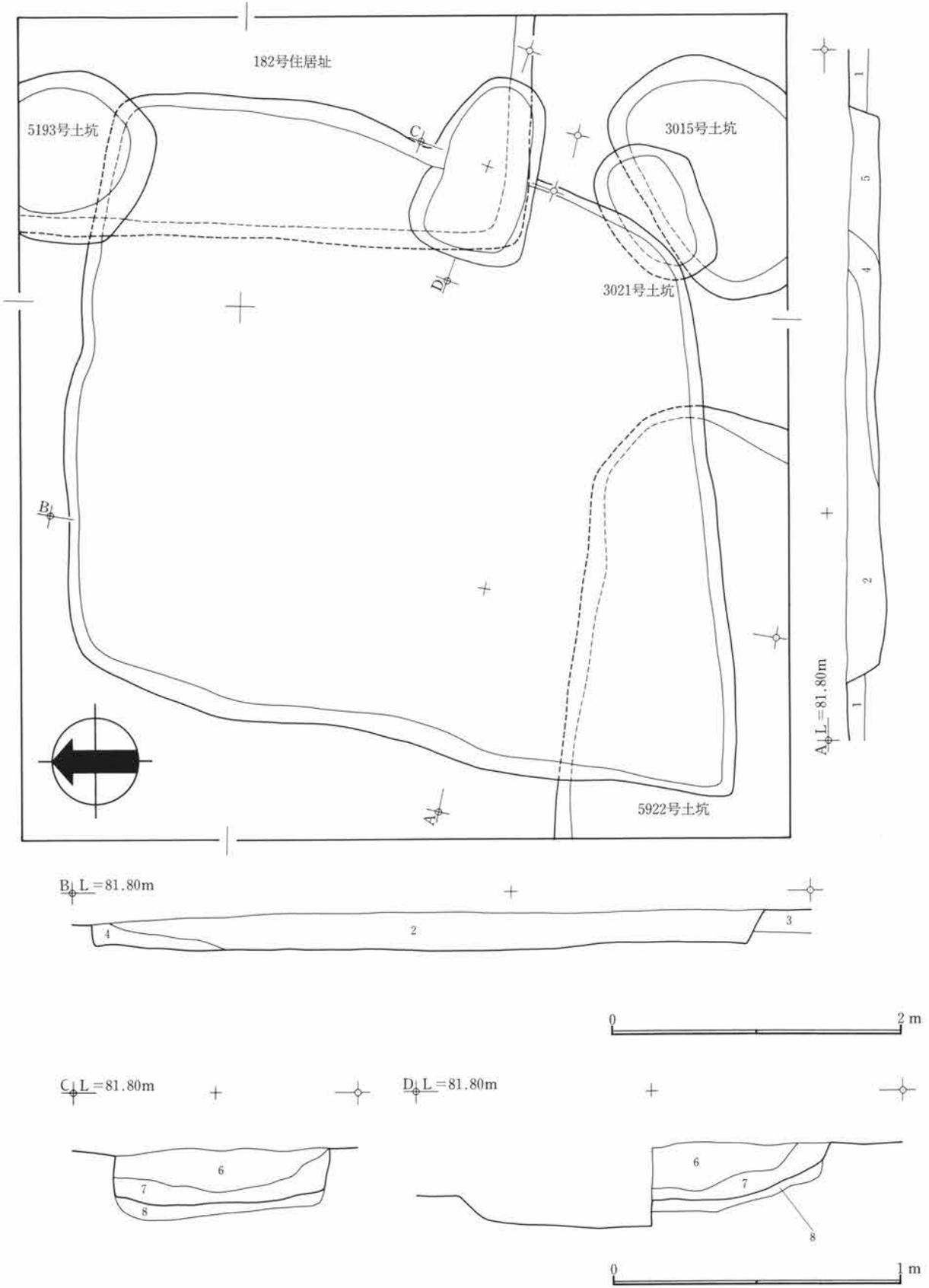
規模は長軸2.72m・短軸2.35m、面積6.294m²である。主軸方向はN—10°—Eを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は103cm(推定)、焚き口幅は70cm(推定)である。炉床ピットは長軸45cm・短軸30cm、深さ14cmである。

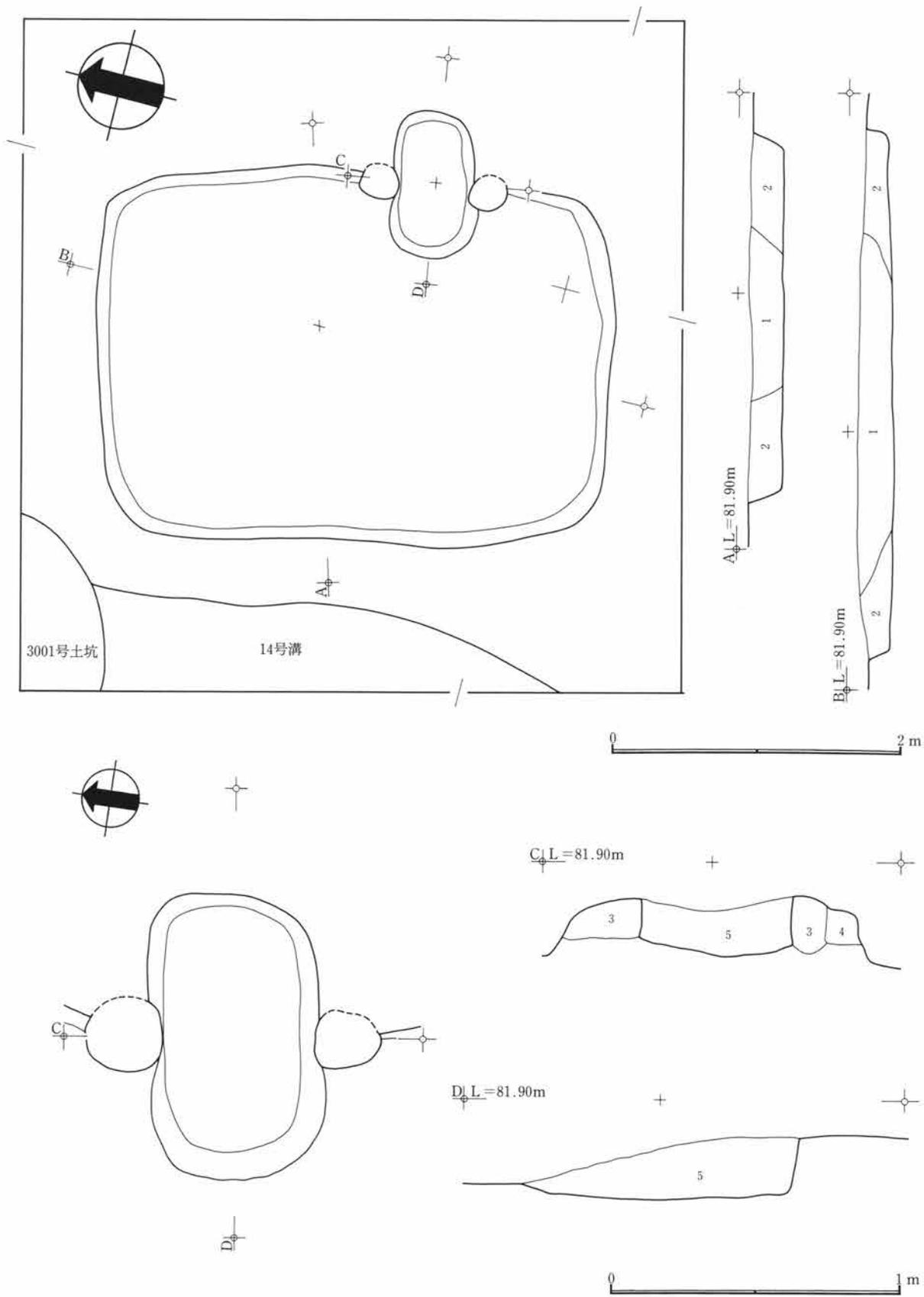
遺物 (挿図番号第264図 写真番号P L. 89)

土師器の甕 (759)・須恵器の壺 (760・761)・高台付坏 (762)・坏 (墨書 8) を出土している。

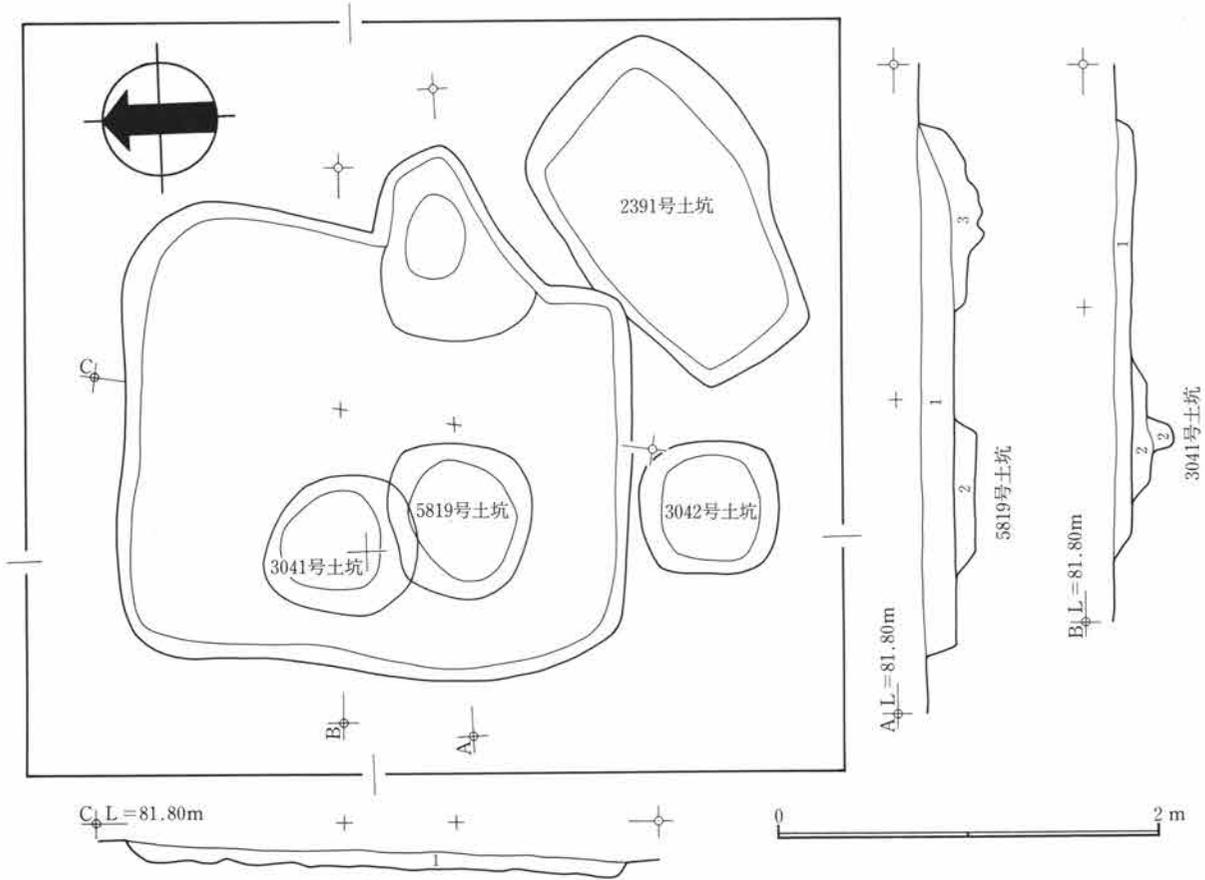
その他に土師器500 g、須恵器1300 g、近世陶器 4 g が出土している。



第179図 175号住居址



第180图 177号住居址



第181図 178号住居址

3区179号住居址

遺構 (挿図番号第182図)

本住居址はL 8-90, 91・L 9-00, 01グリッドで検出され、北東17.0mに170号住居址、南18.0mに161号住居址が位置する。

規模は長軸7.00m・短軸5.20m、面積36.488㎡である。主軸方向はN-14°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は80cm、竈幅は111cm、焚き口幅は50cmである。炉床ピットは長軸120cm・短軸60cm、深さ15cmである。貯蔵穴は長軸100cm・短軸93cm、深さ22cmである。

遺物 (挿図番号第264図)

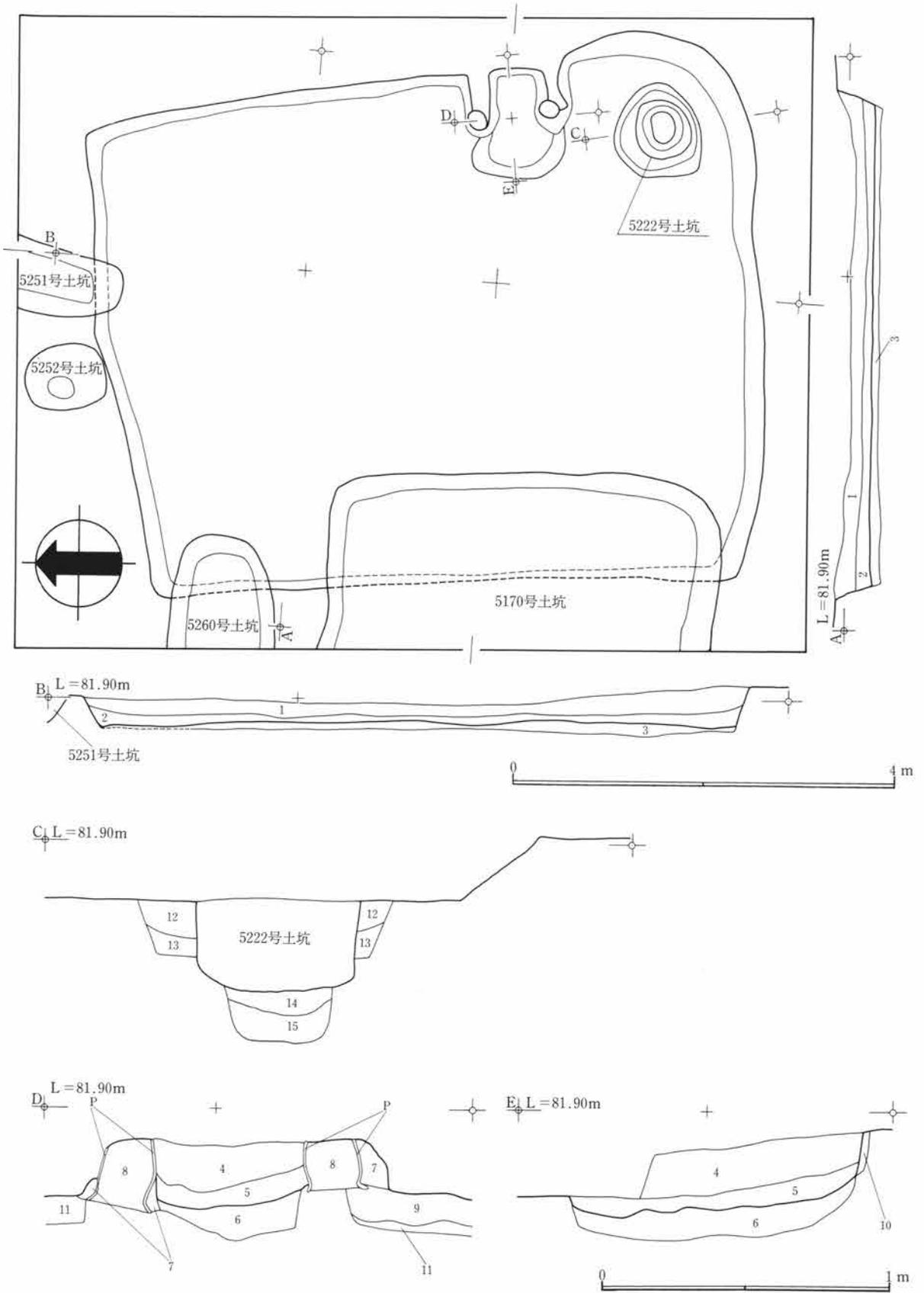
土師器の甕 (763)・土師器の坏 (764)・須恵器の坏 (765・766) を出土している。

その他に土師器6470g、須恵器2470g、円筒埴輪75g、中世陶器1005g、近世陶磁器3769gが出土している。本住居址では鉄製品4点が出土した。釘・棒状・鎌状・板状である。また砥石が1点出土している。砥沢石である。

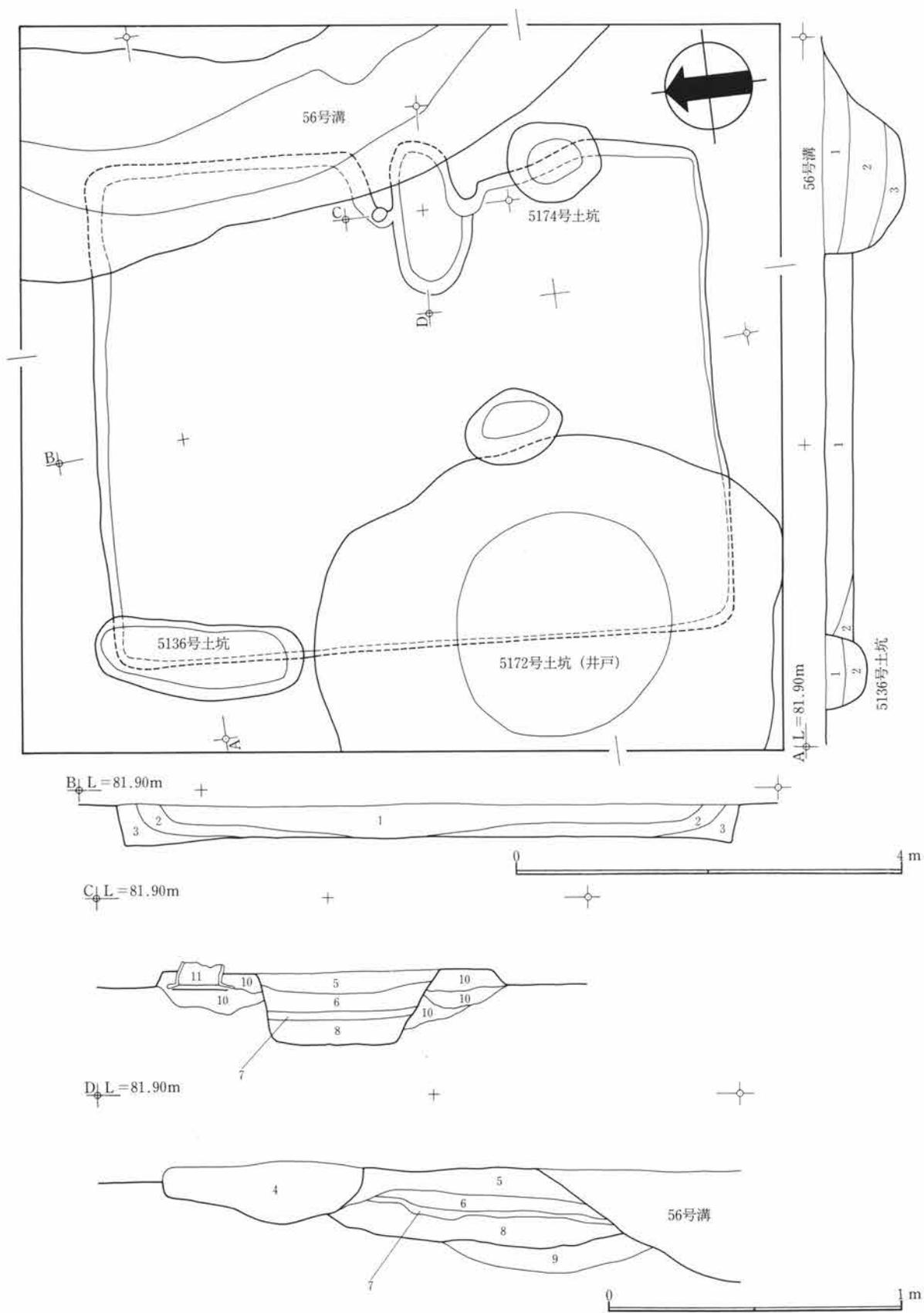
3区180号住居址

遺構 (挿図番号第183図)

本住居址はL 8-34, 44グリッドで検出され、東6.0mに181号住居址、南西5.0mに175号住居址が位置する。東北壁に56号溝が重なる。土層は付図2のNa 9セクションを参照した。また西壁の北隅に5136号土坑が



第182图 179号住居址



第183図 180号住居址

第II章 遺 跡

重なる。埋土の第1層は2.5Y5/3黄褐色土の砂質土層、第2層は2.5Y5/2暗灰茶色で砂質土層である。

規模は長軸6.50m・短軸4.80m（推定）、面積32.402m²である。主軸方向はN-4°-Eを示している。

竈は東壁に付設される。竈全長は82cm、竈幅は112cm、焚き口幅は45cmである。炉床ピットは長軸162cm・短軸80cm、深さ10cmである。

遺物（挿図番号第264図）

土師器の甕（767）・土師器の甕（768・769）・土師器の坏（770・771・772）・須恵器の多形壺（773）・須恵器の高台付坏（774）・須恵器の坏（775）を出土している。

その他に土師器9589g、須恵器1433g、中世陶磁器694g、近世陶磁器107g、土錘が一点出土している。

3区181号住居址

遺構（挿図番号第184・185図）

本住居址はL 8-45、55グリッドで検出され、西6.0mに180号住居址、南西5.0mに182号住居址が位置する。本住居址の西壁の南隅は56号溝によって切られている。また東壁の竈の燃焼部分から煙造部分は5189号土坑に切られている。

規模は長軸5.12m・短軸3.95m、面積20.188m²である。主軸方向はN-2°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は105cm（推定）、竈幅は143cm、焚き口幅は50cmである。炉床ピットは確認されなかった。

本住居の床下に3つの土坑が検出され、2つの土坑と1つのピットとして取り扱った。P 1は長軸48cm・短軸40cm、深さ7cmである。

遺物（挿図番号第265図）

土師器の甕（776・777）・土師器の小型甕（778）・土師器の坏（779）・須恵器の蓋（780）・須恵器の高台付坏（781・782）を出土している。

その他に土師器4245g、須恵器5284g、中世250gが出土している。

3区182号住居址

遺構（挿図番号第186図）

本住居址はL 8-44、54、55グリッドで検出され、北4.0mに180号住居址が位置する。中央に南北方向に走る5194土坑があることで、東西にある住居址の重複が不明となり、床面が同じ高さ、覆土も同じことから変則的な住居にしてある。さらに東壁は56号溝によって切られている。また西壁も175号住居によって切られている。

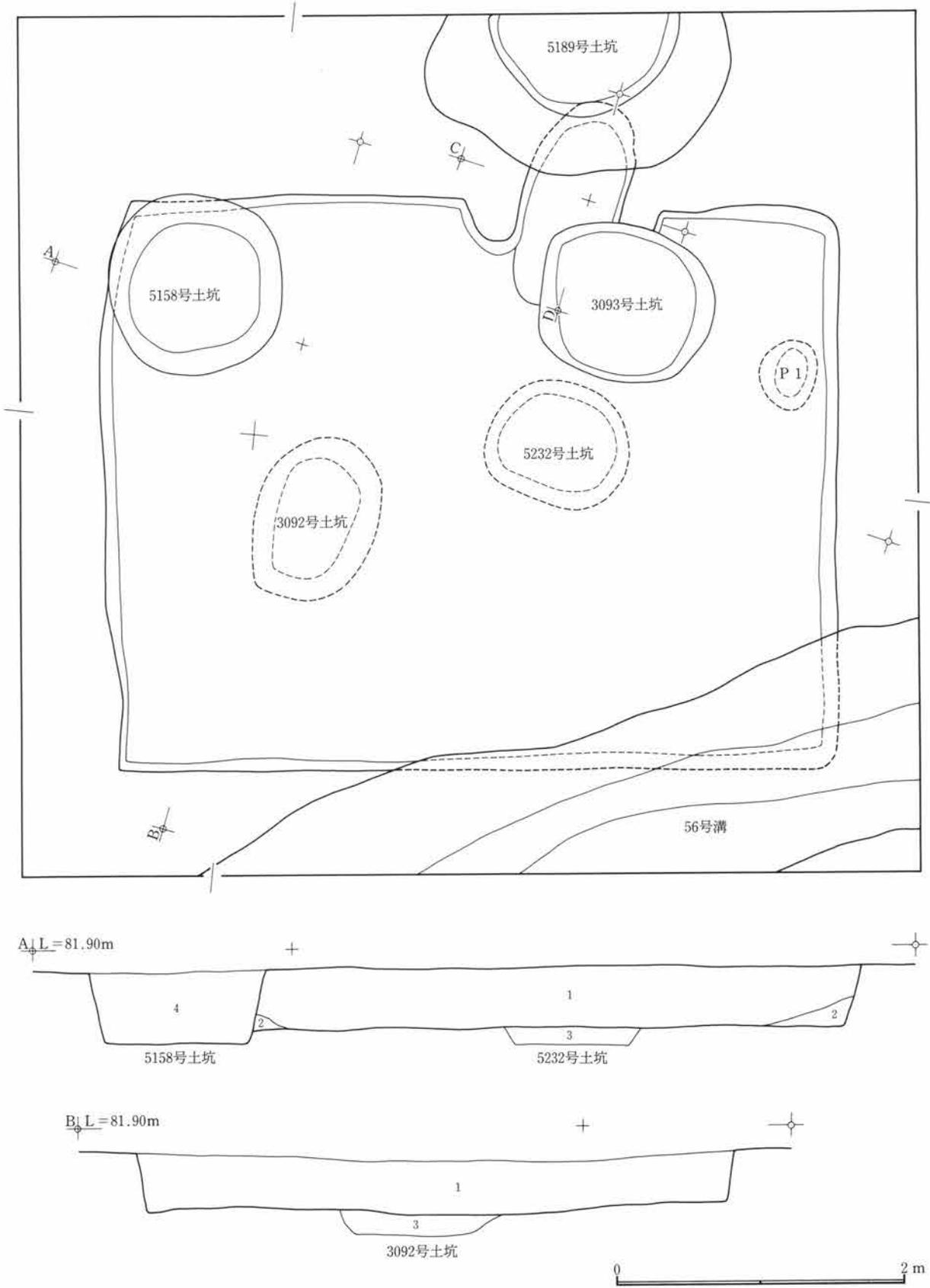
住居の規模は長軸7.50m（推定）・短軸4.45m（推定）、面積32.408m²である。主軸方向はN-2°-Eを示している。検出面も浅く、平面形も推定の域を出ない。

竈は確認されなかった。

遺物（挿図番号第265図）

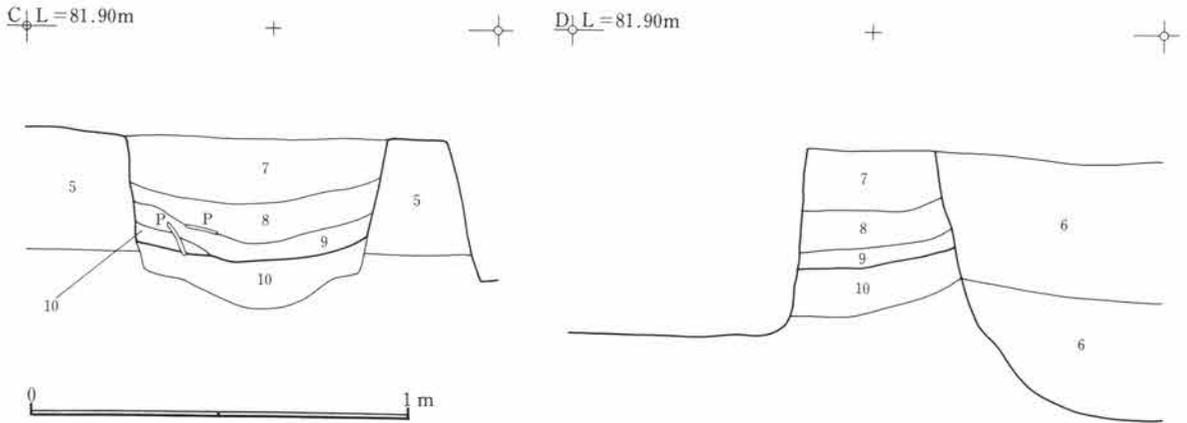
土師器の甕（783）・土師器の坏（784）・須恵器の蓋（785）を出土している。特に須恵器の蓋としたものは、盤皿の大形品を縮小したような形で、本遺跡では珍しい。

その他に土師器1650g、須恵器243gが出土している。



第184図 181号住居址(1)

第II章 遺 跡



第185図 181号住居址(2)竈

3区184号住居址

遺構 (挿図番号第187図 写真番号P.L. 60)

本住居址はK 9-27, 37グリッドで検出され、東25.0mに161号住居址、南14.0mに186号住居址が位置する。本住居址の南半分は5195号土坑によって削られている。

規模は長軸3.60m・短軸2.75m, 面積9.432m²である。主軸方向はNを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は160cm(推定), 竈幅は100cm(推定), 燃焼部長さは100cm(推定), 焚き口幅は35cm(推定), 煙道部長さは60cm(推定), 煙道部幅は30cm(推定)である。炉床ピットは長軸35cm・短軸25cm, 深さは不明である。竈の燃焼部分は住居の外側に出る形態である。煙道は短かく、しっかりと確認できなかった。焼土と炭化物のひろがり細線で示す範囲で広い。

床面下に2つの土坑が検出された。P1を貯蔵穴とも考えたが炭化物、焼土の混入もなかった。P1は長軸53cm・短軸50cm, 深さ9cm, P2は長軸76cm・短軸68cm, 深さ13cmである。

遺物 (挿図番号第265図)

土師器の甕(786・787)・土師器の坏(788)・須恵器甕(789)・須恵器の高台付坏(790)を出土している。特に須恵器の甕としたものは、器形は小形品の口縁部と考えられ下端部は丸い腰部と考えられるところで折れている。

その他に土師器1565g、須恵器1154gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。製品名は不明である。

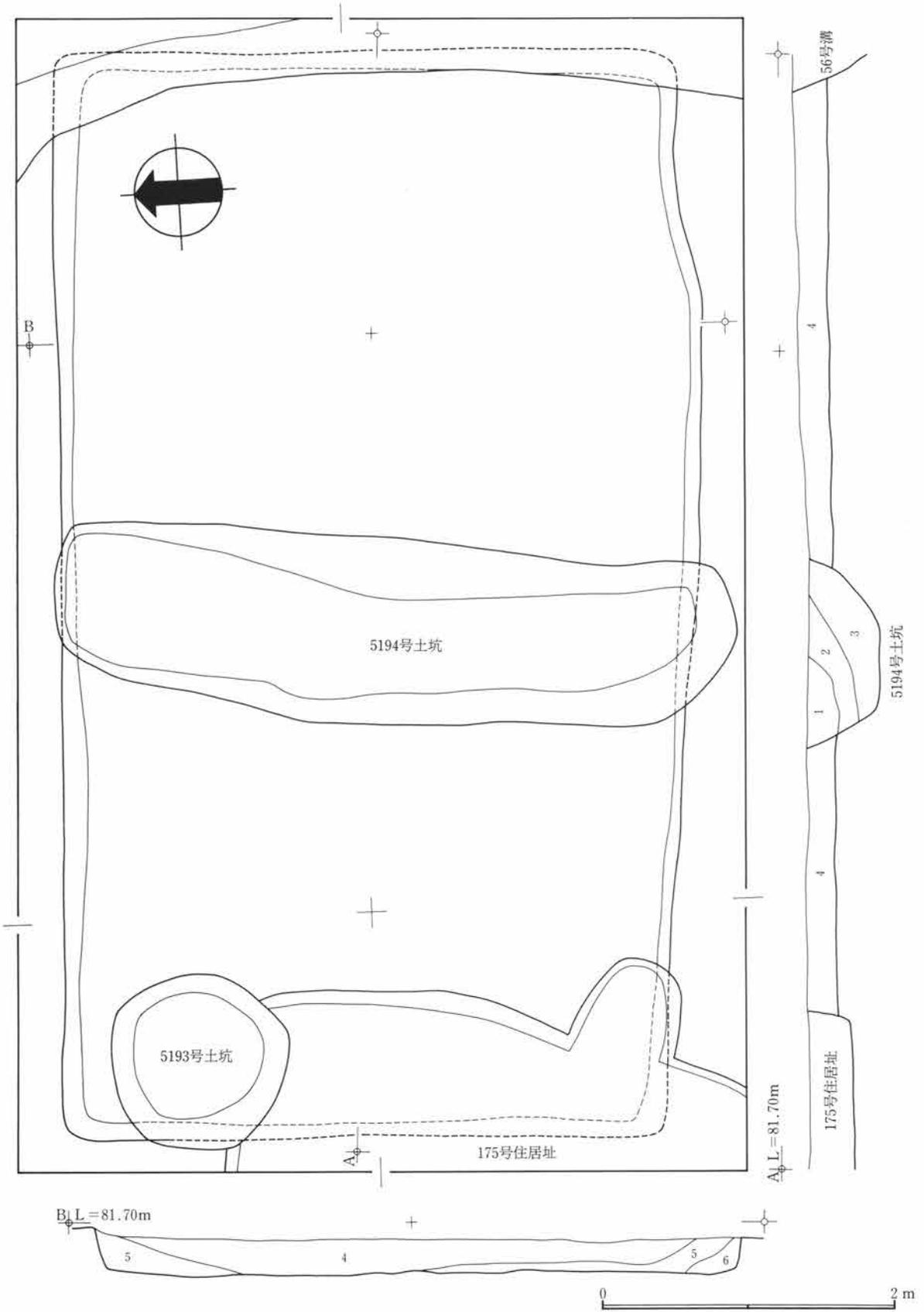
3区185号住居址

遺構 (挿図番号第188・189図 写真番号P.L. 60)

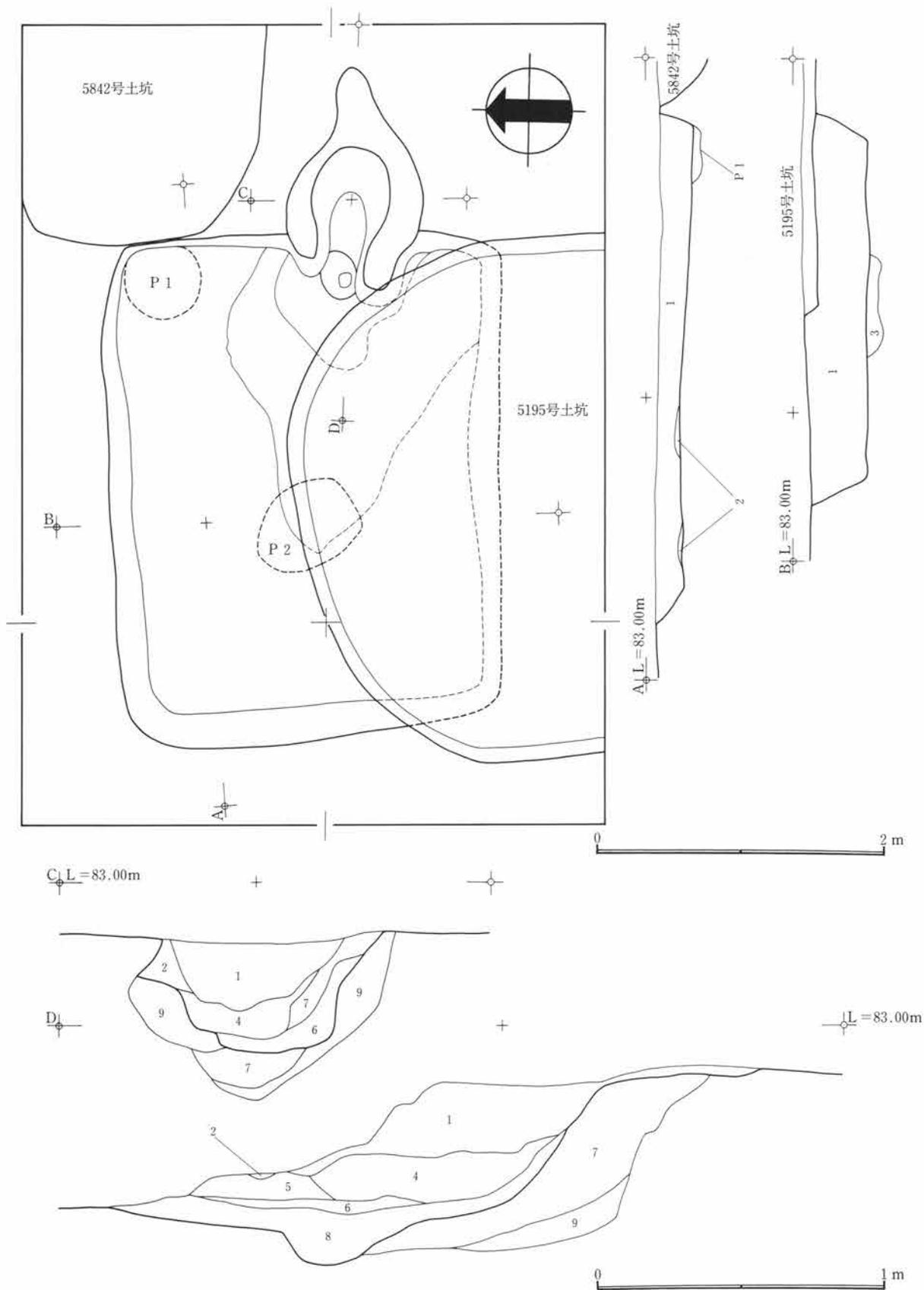
本住居址はK 9-49, 59グリッドで検出され、東6.0mに164号住居址、南西11.0mに186号住居址が位置する。横長の平面形態で北西隅は張り出し変形する。

住居の規模は長軸5.30m・短軸4.25m(推定), 面積21.838m²である。主軸方向はN-13°-Eを示している。

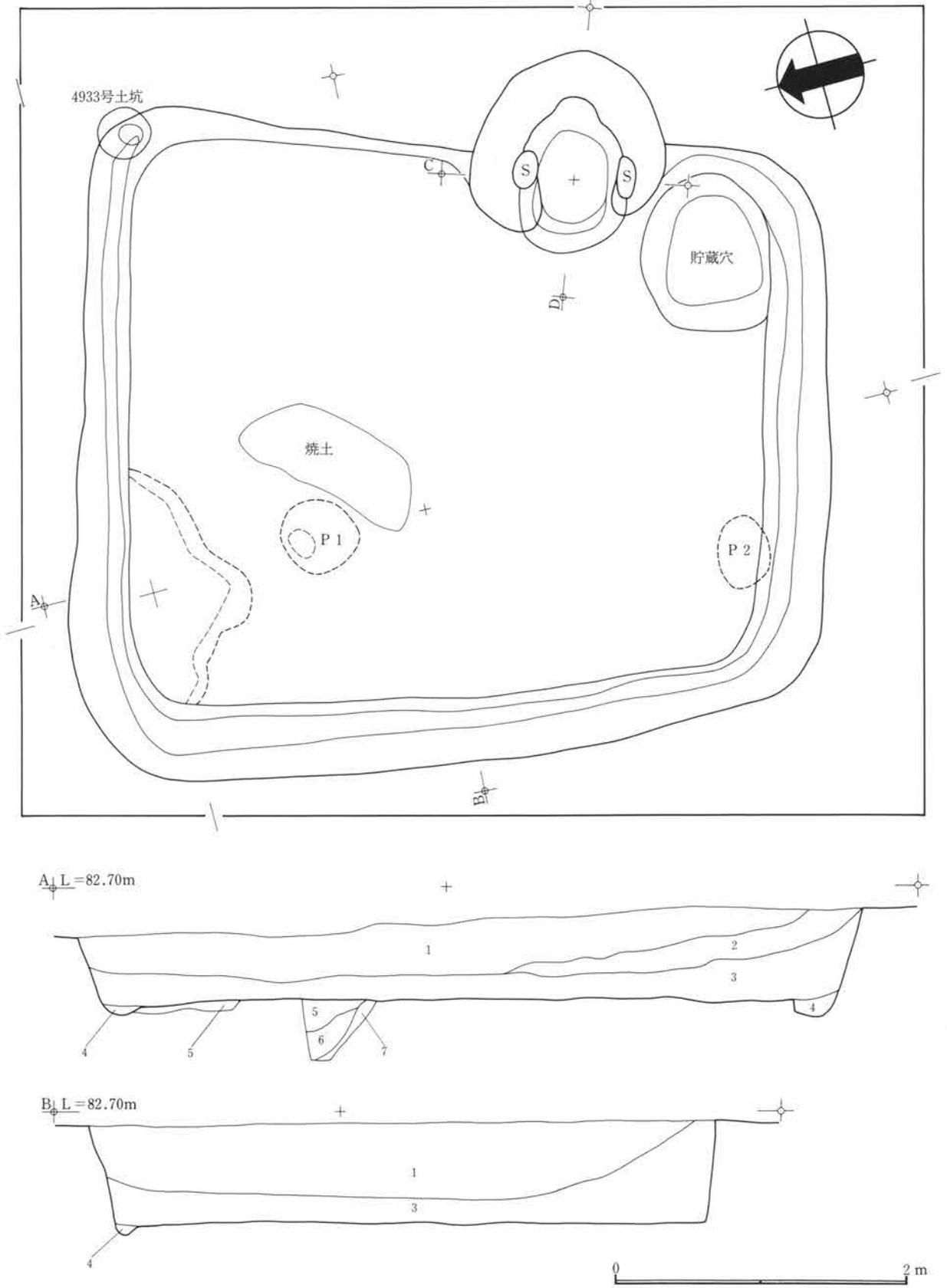
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は105cm, 竈幅は135cm, 焚き口幅は55cmである。炉床ピットは長軸107cm・短軸80cm, 深さ30cmである。竈の燃焼部分は壁の内外中央に掘り込まれ、壁沿いに河原石の袖石が左右に立って残る。



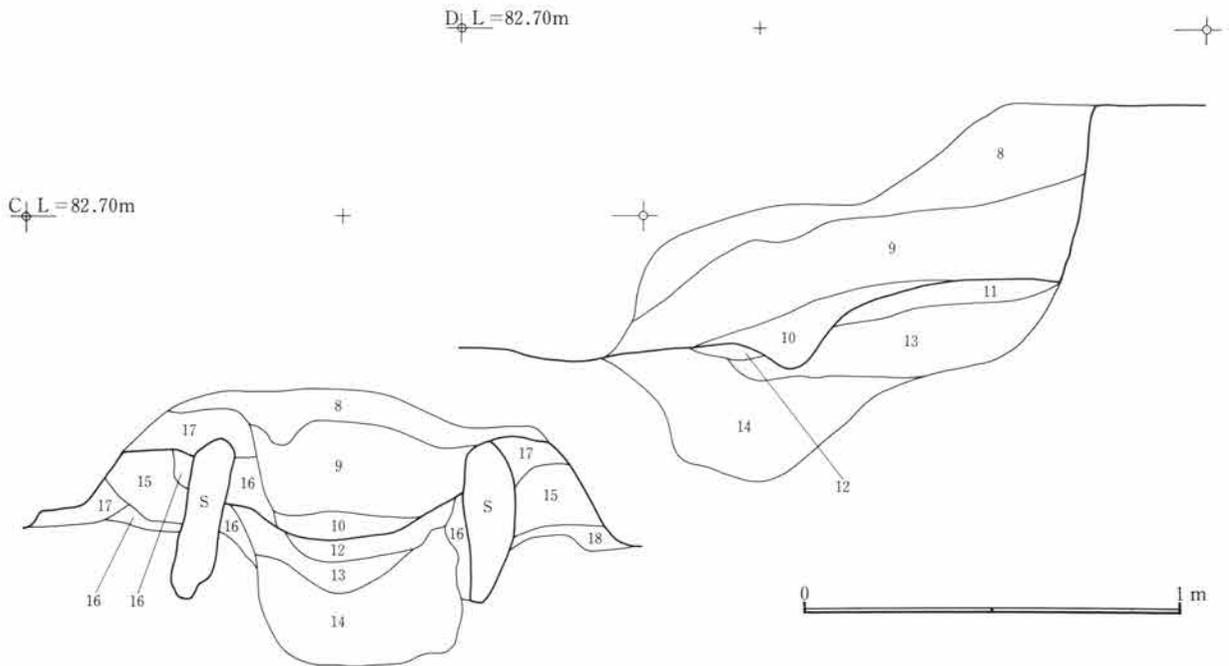
第186図 182号住居址



第187图 184住居址



第188図 185号住居址(1)



第189図 185号住居址(2)竈

貯蔵穴は長軸110cm・短軸92cm、深さ30cmである。

住居の床面下に2つの土坑が検出された。P 1は長軸55cm・短軸50cm、深さ46cm、P 2は長軸50cm・短軸37cm、深さ9cmである。

遺物 (挿図番号第266図)

土師器の甕 (791)・土師器の坏 (792・793)・須恵器の甕 (794)・須恵器の蓋 (795)・須恵器の坏 (796・797)・須恵器の高台付坏 (798・799) を出土している。特に土師器の坏 (792) は小破片であるが、体部は浅く、珍しい。

その他に土師器6870g、須恵器2292g、中世陶器4gが出土している。

本住居では鉄製品が5点出土している。製品名は斧、釘、手斧、刀子、刃器である。

3区186号住居址

遺構 (挿図番号第190図 写真番号P L. 60)

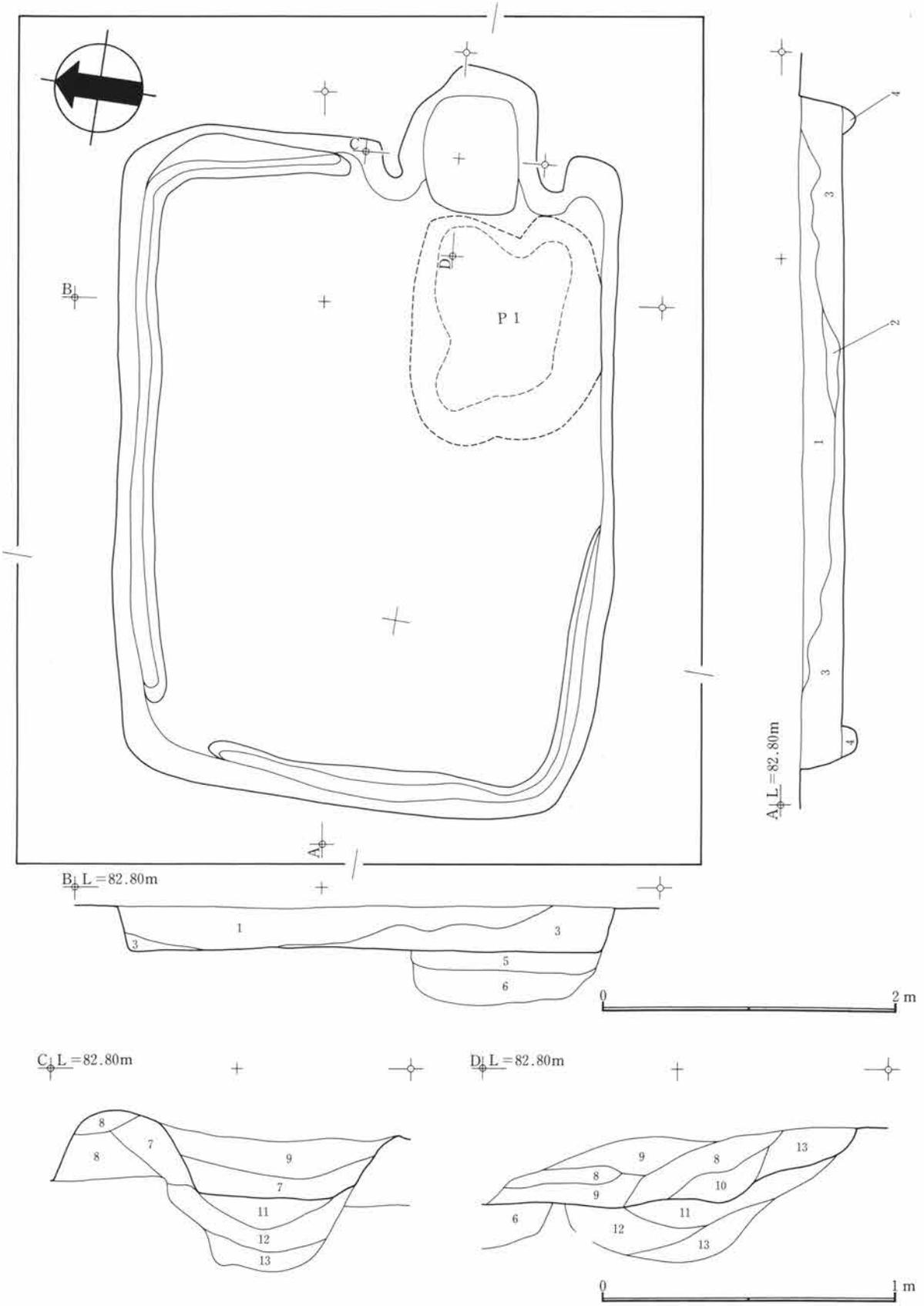
本住居址はK 9-47, 48, 57, 58グリッドで検出され、北東11.0mに186号住居址、南西5.0mに188号住居址が位置する。縦長の平面形で、壁の直下に浅い溝が残る。

規模は長軸4.60m・短軸3.50m、面積14.706m²である。主軸方向はN-5°-Wを示している。

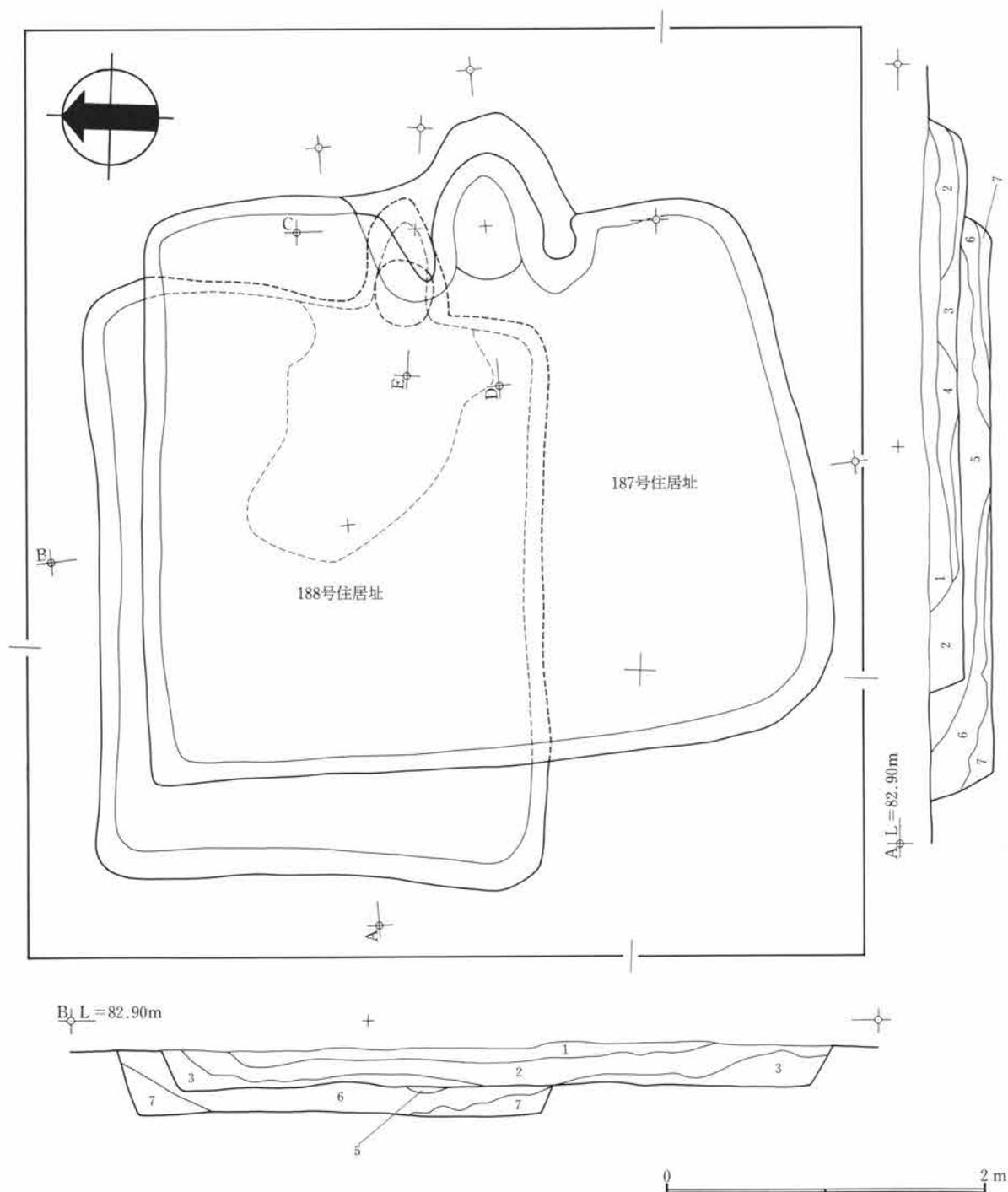
竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は100cm、竈幅は150cm、焚き口幅は65cmである。炉床ピットは長軸80cm・短軸57cm、深さ25cmである。竈の燃焼部分は方形を呈する。煙道部分は確認できなかった。

床面下、竈の前面で大きな土坑 (P 1) を検出した。灰のかき出し穴と考えたが炭化物・焼土は少なかった。P 1は長軸160cm・短軸130cm、深さ18cmである。

遺物 (挿図番号第266図 写真番号P L. 87)



第190图 186号住居址

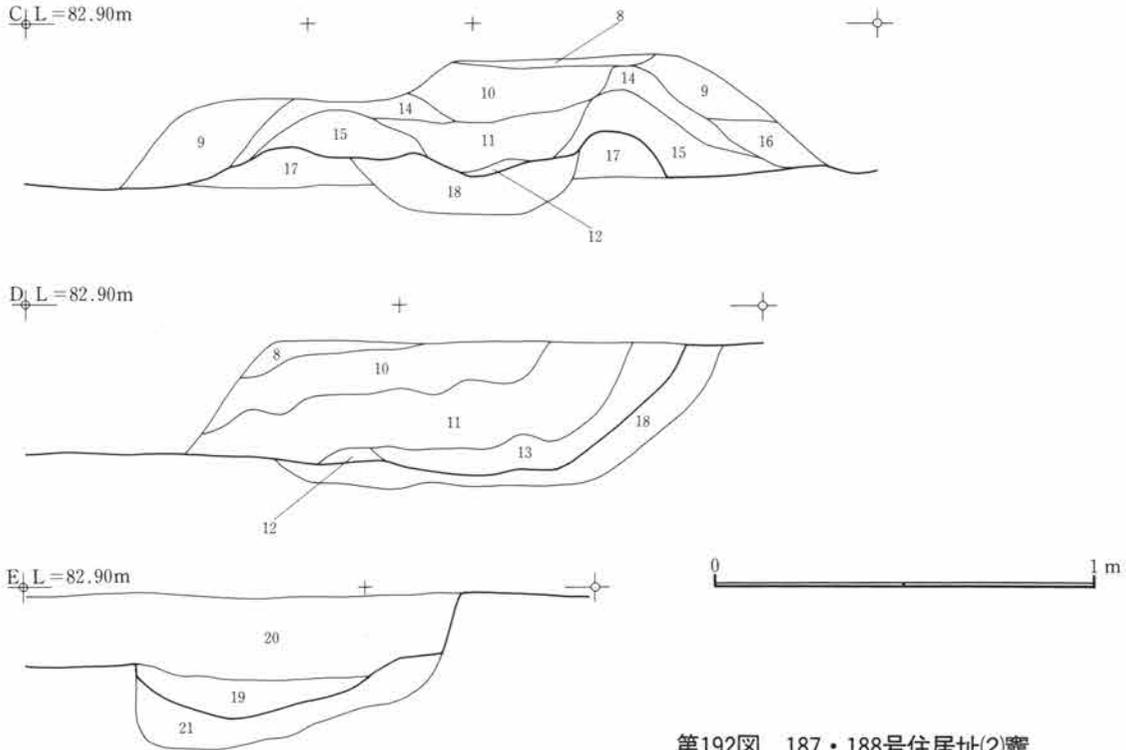


第191図 187・188号住居址(1)

土師器の甕(800)・土師器の坏(801・802)・須恵器の坏(803・804)を出土している。特に土師器の坏は
ていねいな作りで、胎土も良好である。

その他に土師器2230gが須恵器681gが出土している。

本住居では鉄製品が出土している。製品名は刃器である。



第192図 187・188号住居址(2)竈

3区187号住居址

遺構 (挿図番号第191・192図 写真番号P L. 60)

本住居址はK 9-57, 67グリッドで検出され、北東5.0mに186号住居址が位置する。

本住居址の北西寄りに188号住居址が重複する。本住居址が新しい。

規模は長軸3.90m・短軸3.65m, 面積14.730²である。主軸方向はN-8°-Wを示している。

竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は115cm, 竈幅は145cm, 焚き口幅は60cmである。炉床ピットは確認されなかった。

竈の燃焼部分は住居内側に入り、両袖も残る。

遺物 (挿図番号第266図 写真番号P L. 87・89)

土師器の甕 (805)・土師器の坏 (806)・須恵器の蓋 (807)・須恵器の坏 (808・809)・土師器の坏 (墨書9・10) を出土している。特に土師器の坏 (806) は胎土、焼土も良好で、仕上がりも良い。

その他に土師器1383g、須恵器722g及び、砥石2点出土している。材質は共に砥沢石である。

3区188号住居址

遺構 (挿図番号第191・192図 写真番号P L. 60)

本住居址はK 9-57, 67グリッドで検出され、北東5.0mに186号住居址が位置する。本住居址の南東隅に187号住居址が重複している。本住居址が古い。

住居の規模は長軸3.75m・短軸2.80m, 面積10.430²である。主軸方向はN-1°-Eを示している。竈は東壁の右寄りに付設される。竈全長は77cm, 焚き口幅は45cm (推定) である。炉床ピットは確認されなかった。竈の燃焼部分が住居址の外側に出る形態である。

遺物 (挿図番号第266図)

土師器の坏 (810)・須恵器の坏 (811) を出土している。その他に土師器246g、須恵器274gが出土している。

B 掘立柱建物・柵列

本発掘区から検出された掘立柱建物は18棟である。

1号掘立柱建物はM7グリットの中央部に位置している。帰属時期は不明である。南西側に5号住居址を初め5軒の住居址が存在する。1間×1間の小規模な建物である。

2号掘立柱建物はM8グリットの西側中央部に位置している。2間×2間の小規模な建物である。周辺には10数軒の竪穴住居址が取り巻くように位置している。

18号掘立柱建物はL9グリットの北東隅に位置している。東西3間×南北6間の大規模な建物である。南側に集中して竪穴住居址が分布している。東側の未調査部分に同様の掘立柱建物が広がる可能性がある。

K9グリットの中央南からK10グリットの中央縦列、K11グリットの中央北側にかけて15棟の掘立柱建物が集中している。分布の範囲は東西40m、南北85mである。北側から縦方向の南側にかけて3つのグループに集中するようにみえる。

3号掘立柱建物は西側に未発掘区を残すが、東西3間×南北4間のやや大規模な建物に復元した。東西と南北の柱間のピッチが異なる。12号掘立柱建物は3号掘立柱建物の東側に位置する。東西3間×南北2間の建物である。12号掘立柱建物の南西の位置に接するように10号掘立柱建物が位置する。東西3間×南北5間の大型の建物である。3号掘立柱建物の南側に11号掘立柱建物、さらに南に13号掘立柱建物が位置する。この11号、13号掘立柱建物は柱が重複している。11号掘立柱建物は東西2間×南北2間のやや南北に長い建物である。13号掘立柱建物もやや南北に長い建物で東西北面は2間(南面3間)×南北2間である。この5棟の建物は互いに近接、重複しており、2時期以上の間隔がある。

9号掘立柱建物は東西2間×南北2間の方形の建物である。この建物の南西方向に7号掘立柱建物と8号掘立柱建物が重複して位置する。7号掘立柱建物は東西3間×南北2間、8号掘立柱建物も東西3間×南北2間と考えた。しかし柱番号4、5、6が南北方向にやや斜めに横切り、7号と、8号掘立柱建物が同位置に同じ間取りで立て替えたと言いきる資料は持っていない。7号、8号掘立柱建物の北西の位置に14号掘立柱建物と15号掘立柱建物が重複して位置する。14号掘立柱建物は東西3間×南北4間の大型の建物である。15号掘立柱建物は東西2間×南北3間の建物で重複する14号掘立柱建物とは柱の軸線が異なる。7号、8号掘立柱建物の南西方向に、6号掘立柱建物が位置する。東西北面は2間(南面3間)×南北2間で中央に束柱が存在することから倉庫状の建物を想定する。6号掘立柱建物の西側に平行して5号掘立柱建物が位置する。東西2間×南北3間の建物である。5号掘立柱建物の南西側に4号掘立柱建物が位置する。東西2間×南北3間の建物である。これら8棟の建物は占地のスペースや軸線が異なる建物、重複があることから2時期以上の時間幅を考えたい。なおこの周辺は大量の土坑が集中する地域である。また、20数軒の竪穴住居址が重複し散在している。また最大面積の竪穴住居址もここに位置している。

16号掘立柱建物と17号掘立柱建物はK11グリットの中央北寄りに位置している。16号掘立柱建物は17号掘立柱建物の東南東の方向に位置する。東西2間×南北2間の建物である。南北方向の並列する柱は長方形を呈しており、底面に自然石の礎石を据えている。小規模な建物の割りには堅牢な建物の存在を推定できる。17号掘立柱建物は東西4間×南43間の大型の建物である。個々の柱穴は小さいが束柱が全面に検出され高床状の建物の存在も考えられる。2棟の掘立柱建物の南から西にかけて10数軒の竪穴住居址が散在している。

3区1号掘立柱建物 (挿図第193・198図 写真番号P L. 61)

3区1号掘立柱建物はM7—63, 64に位置する。南南西へ56.0mの距離に2号掘立柱建物址がある。

柱穴は4本確認され、P1は5423土坑、P2は5424土坑、P3は5426土坑、P4は5425土坑である。それぞれの距離はP1—P2は180cm、P2—P3は174cm、P3—P4は184cm、P4—P1は180cmを測る。主軸はN—7°30′—Eである。床面積は3.2m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 81.20m)

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1. 灰褐色 (7.5Y R6/2) | 灰褐色軟質壤土である。 |
| 2. 褐灰色 (7.5Y R5/1) | 褐灰色ローム質土層である。 |

3区2号掘立柱建物 (挿図第193・198図 写真番号P L. 61)

3区2号掘立柱建物はM8—30, 40に位置する。南南西へ43.0mの距離に18号掘立柱建物址がある。

柱穴は8本確認され、P1は5393土坑、P2は5397土坑、P3は5392土坑、P4は5408土坑、P5は5409土坑、P6は5394土坑・5866土坑、P7は40土坑・5400土坑、P8は5398土坑である。それぞれの距離はP1—P3は398cm、P3—P5は442cm、P5—P7は400cm、P7—P1は412cmを測る。主軸はN—2°—Eである。床面積は17.0m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 81.90m)

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 褐灰色 (10Y R6/1) | 褐灰色軟質土層である。 |
| 2. 灰黄褐色 (10Y R5/2) | 灰黄褐色ローム質土層である。 |
| 3. にぶい黄橙色 (10Y R6/3) | にぶい黄橙色ローム質土層である。 |

3区3号掘立柱建物 (挿図第193・198図)

3区3号掘立柱建物はK9—84, 85, 94, 95に位置する。南方向へ10.0mの距離に11号掘立柱建物址がある。

柱穴は6本確認され、P1は4263土坑、P2は5731土坑、P3は4266土坑、P4は5730土坑、P5は5729土坑、P6は4287土坑である。それぞれの距離はP1—P4は488cm、P4—P6は360cmを測る。主軸はN—30°—Eである。床面積は29.2m² (推定) を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 82.80m)

- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| 1. 黒褐色 (7.5Y R3/1) | 黒褐色軟質土層である。 |
| 2. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色で、硬くしまっている。 |
| 3. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色で、ローム質ブロックを混土して硬くしまっている。 |
| 4. 褐灰色 (7.5Y R5/1) | 褐灰色の軟質土を、叩き締めた層である。 |

3区4号掘立柱建物 (挿図第193・198図 写真番号P L. 61)

3区4号掘立柱建物はK10—52, 62に位置する。南南東へ31.3mの距離に17号掘立柱建物址がある。

柱穴は10本確認され、P1は5717土坑、P2は4874土坑、P3は4882土坑、P4は4881土坑、P5は4880土坑、P6は4878土坑、P7は4886土坑、P8は5722土坑、P9は5721土坑、P10は5719土坑である。それぞれの距離はP1—P3は440cm、P3—P6は532cm、P6—P8は440cm、P8—P1は528cmを測る。主軸はN—7°30′—Wである。床面積は23.3m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 83.00m)

- | | |
|----------------------|---------------------------------|
| 1. 褐灰色 (10Y R4/1) | 褐灰色軟質土である。 |
| 2. 褐灰色 (10Y R5/1) | 褐灰色ローム質土層である。 |
| 3. 灰黄褐色 (10Y R5/2) | 灰黄褐色軟質土で、しまっている。 |
| 4. 灰黄褐色 (10Y R5/2) | 灰黄褐色軟質土に砂質土を混土し、硬くしまっている。 |
| 5. にぶい黄褐色 (10Y R5/3) | にぶい黄褐色ローム質土である。軟質であるが、硬くしまっている。 |

第II章 遺 跡

3区5号掘立柱建物 (挿図第193・198図 写真番号P L. 61)

3区5号掘立柱建物はK10-43, 53に位置する。南西へ10.0mの距離に4号掘立柱建物址がある。

柱穴は8本確認され、P1は4896土坑、P2は4801土坑、P3は4799土坑、P4は4805土坑、P5は4808土坑、P6は4809土坑、P7は4813土坑、P8は4815土坑である。それぞれの距離はP1-P3は430cm、P3-P6は532cmを測る。主軸はN-1°-Wである。床面積は23.1m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 83.00m)

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 灰褐色 (7.5Y R6/2) | 灰褐色軟質土層である。 |
| 2. 褐灰色 (7.5Y R6/1) | 褐灰色軟質土層である。 |
| 3. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土層で、硬くしまっている。 |

3区6号掘立柱建物 (挿図第194・198図 写真番号P L. 61)

3区6号掘立柱建物はK10-53, 54に位置する。西へ7.6mの距離に5号掘立柱建物址がある。

柱穴は10本確認され、P1は4900土坑、P2は4775土坑、P3は4769土坑、P4は4841土坑、P5は4849土坑、P6は4851土坑、P7は4853土坑、P8は5724土坑、P9は4826土坑、P10は4832土坑である。それぞれの距離はP1-P3は414cm、P3-P5は450cm、P5-P8は414cm、P8-P1は444cmを測る。主軸はN-7°-Wである。床面積は18.5m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 82.90m)

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10Y R4/2) | 灰黄褐色軟質土である。 |
| 2. 褐灰色 (10Y R4/1) | 褐灰色軟質土層である。 |
| 3. にぶい黄褐色 (10Y R4/3) | にぶい黄褐色軟質土で、つきかためられ硬い。 |
| 4. 灰黄褐色 (10Y R4/2) | 灰黄褐色ローム質土である。 |
| 5. にぶい黄褐色 (10Y R4/3) | にぶい黄褐色軟質土で、ロームブロックを少量混土する。 |
| 6. にぶい黄褐色 (10Y R4/3) | にぶい黄褐色土に、多量のロームブロックを混土する。 |

3区7号・8号掘立柱建物 (挿図第194・199図 写真番号P L. 61)

3区7号・8号掘立柱建物はK10-34, 35, 44, 45, 46に位置する。南南西へ9.5mの距離に6号掘立柱建物址がある。柱穴は15本確認され、P1は4757土坑、P2は4681土坑、P3は4670土坑、P4は3905土坑、P5は3913土坑、P6は3474土坑、P7は3477土坑、P8は4723土坑、P9は4768土坑、P10は5725土坑、P11は4721土坑、P12は3914土坑、P13は3904土坑、P14は3439土坑、P15は3470土坑である。それぞれの距離はP1-P13は1.050cm、P13-P15は456cm、P15-P9は1.088cm、P9-P1は430cmを測る。主軸はN-3°-Wである。床面積は47.4m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 82.90m)

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10Y R6/2) | 灰黄褐色軟質土である。攪乱土である。 |
| 2. 黒褐色 (10Y R3/1) | 黒褐色土である。柱穴痕軟質土である。 |
| 3. 灰黄褐色 (10Y R4/2) | 灰黄褐色軟質土であるが、つきかためられている。 |
| 4. 灰黄褐色 (10Y R4/2) | 灰黄褐色軟質土に、ロームブロックを含む。 |
| 5. にぶい黄褐色 (10Y R4/3) | にぶい黄褐色ローム質土である。 |

3区9号掘立柱建物 (挿図第194・199図 写真番号P L. 61)

3区4号掘立柱建物はK10-25, 35, 36に位置する。西方向へ16.0mの距離に15号掘立柱建物址がある。

柱穴は8本確認され、P1は4604土坑、P2は4614土坑、P3は4619土坑、P4は5916土坑、P5は3462土坑、P6は3890土坑・3960土坑、P7は4651土坑・4652土坑、P8は4676土坑である。それぞれの距離はP1-P3は492cm、P3-P5は480cm、P5-P7は516cm、P7-P1は480cmを測る。主軸はN-6°30'

一Wである。床面積は24.2m²を測る。

柱穴埋土土層表記（基準高さ 82.80m）

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10Y R4/2) | 灰黄褐色粘質土層である。 |
| 2. 褐灰色 (10Y R4/1) | 褐灰色軟質土層で、柱痕である。 |
| 3. におい黄褐色 (10Y R4/3) | におい黄褐色土で軟質であるが、叩き締められている。 |
| 4. 暗褐色 (10Y R3/3) | 暗褐色軟質土で、叩き締められている。 |

3区10号掘立柱建物（挿図第195・199図 写真番号P L. 62）

3区10号掘立柱建物はK 9—85, 86, 95, 96・K10—05, 06に位置する。西北方向へ11.5mの距離に3号掘立柱建物址がある。柱穴は16本確認され、P 1は4270土坑、P 2は4713土坑、P 3は4178土坑、P 4は4177土坑、P 5は4180土坑、P 6は4710土坑、P 7は4192土坑、P 8は4231土坑、P 9は4223土坑・4224土坑、P 10は5914土坑、P 11は4256土坑、P 12は5733土坑、P 13は5732土坑、P 14は5660土坑、P 15は5662土坑で、P 16は4272である。それぞれの距離はP 1—P 4は592cm, P 4—P 9は988cm, P 9—P 12は620cm, P 12—P 1は996cmを測る。主軸はN—2°30′—Wである。床面積は60.1m²を測る。

柱穴埋土土層表記（基準高さ 82.80m）

- | | |
|----------------------|-----------------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10Y R6/2) | 灰黄褐色軟質土である。 |
| 2. 黒褐色 (10Y R3/1) | 黒褐色軟質土で、柱痕である。 |
| 3. 灰黄褐色 (10Y R5/2) | 灰黄褐色軟質土で、つきかためられ硬い。 |
| 4. 灰黄褐色 (10Y R5/2) | 灰黄褐色軟質土で、つきかためられ硬い。やや砂層を含む。 |
| 5. におい黄褐色 (10Y R5/3) | におい黄褐色土ローム質土層に、砂を含む。 |

3区11号掘立柱建物（挿図第195・199図 写真番号P L. 62）

3区11号掘立柱建物はK 9—94, 95・K10—04, 05に位置する。南南西方向へ4.5mの距離に13号掘立柱建物址がある。柱穴は10本確認され、P 1は4326土坑、P 2は4712土坑、P 3は4291土坑、P 4は4332土坑、P 5は4320土坑、P 6は4297土坑、P 7は5911土坑、P 8は4341土坑、P 9は4319土坑、P 10は4316土坑である。

それぞれの距離はP 1—P 3は374cm, P 3—P 10は444cm, P 10—P 8は356cm, P 8—P 1は450cmを測る。主軸はN—2°—Eである。床面積は16.3m²を測る。

柱穴埋土土層表記（基準高さ 82.80m）

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1. 褐灰色 (7.5Y R6/1) | 褐灰色軟質土層で、攪乱層に近い。 |
| 2. 黒褐色 (7.5Y R3/1) | 黒褐色軟質土層で、柱痕である。 |
| 3. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土であるが、叩き締められ硬い。(砂質分が弱い) |
| 4. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土であるが、叩き締められ硬い。(砂質分が強い) |

3区12号掘立柱建物（挿図第194・200図 写真番号P L. 62）

3区12号掘立柱建物はK 9—76, 77, 86, 87に位置する。南西方向へ9.6mの距離に10号掘立柱建物址がある。柱穴は9本確認され、P 1は4155土坑、P 2は4154土坑、P 3は4153土坑、P 4は4146土坑、P 5は4684土坑、P 6は4683土坑、P 7は4708土坑、P 8は5734土坑、P 9は4716土坑である。それぞれの距離はP 1—P 3は374cm, P 3—P 10は444cm, それぞれの距離はP 1—P 3は394cm, P 5—P 8は616cm, P 8—P 1は450cmを測る。主軸はN—3°—Wである。床面積は27.5m²を測る。

柱穴埋土土層表記（基準高さ 82.80m）

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10Y R5/2) | 灰黄褐色軟質土で、攪乱層である。 |
| 2. 黒褐色 (10Y R3/1) | 黒褐色軟質土で、柱痕である。 |

第II章 遺 跡

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 3. 灰黄褐色 (10Y R4/2) | 灰黄褐色硬質土である。 |
| 4. 褐灰色 (10Y R4/1) | 褐灰色硬質土で、ロームブロックを混土する。 |
| 5. にぶい黄褐色 (10Y R5/3) | にぶい黄褐色土ローム質土で、砂質分が強い。 |

3区13号掘立柱建物 (挿図第195・199図 写真番号P L. 62)

3区13号掘立柱建物はK10-04, 05, 14, 15に位置する。南南東方向へ14.8mの距離に9号掘立柱建物址がある。柱穴は9本確認され、P7は5911土坑、P8は4341土坑、P9は4319土坑、P11は4442土坑、P12は4397土坑、P13は4470土坑、P14は4480土坑、P15は4482土坑、P16は4408土坑である。それぞれの距離はP7-P9は310cm, P9-P16は424cm, P16-P13は360cm, P13-P7は434cmを測る。主軸はN-4°30'-Eである。床面積は14.4m²を測る。

穴埋土土層表記 (基準高さ 82.80m)

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1. 褐灰色 (7.5Y R6/1) | 褐灰色軟質土層で、攪乱層に近い。 |
| 2. 黒褐色 (7.5Y R3/1) | 黒褐色軟質土層で、柱痕である。 |
| 3. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土であるが、叩き締められ硬い。(砂質分が弱い) |
| 4. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土であるが、叩き締められ硬い。(砂質分が強い) |

3区14号掘立柱建物 (挿図第196・200図 写真番号P L. 62)

3区14号掘立柱建物はK10-23, 24, 33, 34, 43, 44に位置する。南東方向へ12.4mの距離に7号・8号掘立柱建物址がある。柱穴は14本確認され、P1は4859土坑、P2は4857土坑・4858土坑、P3は4856土坑、P4は5683土坑、P5は5917土坑、P6は4749土坑、P7は4862土坑、P8は5687土坑、P9は4795土坑、P10は4796土坑・4797土坑、P11は4873土坑、P12は5685土坑、P13は4788土坑、P14は5684土坑である。それぞれの距離はP1-P4は486cm, P4-P8は940cm, P8-P11は484cm, P11-P1は850cmを測る。主軸はN-30°-Eである。床面積は43.4m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 82.80m)

- | | |
|----------------------|------------------------------------|
| 1. 灰褐色 (7.5Y R6/2) | 灰褐色軟質土である。 |
| 2. 暗褐色 (7.5Y R3/3) | 暗褐色軟質土で、柱痕と考えられる。 |
| 3. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土で、叩き締めている。ロームブロックを含まない。 |
| 3' 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土で、叩き締めている。ロームブロックを少量含む。 |
| 3'' 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土で、叩き締めている。ロームブロックを含まず、砂層を含む。 |
| 3''' 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色ロームブロック土を多量に含み、叩き締められている。 |
| 4. 黒褐色 (7.5Y R3/1) | 黒褐色軟質土をつきかためている。 |
| 5. 黒褐色 (7.5Y R3/1) | 黒褐色軟質土をつきかためているが、砂層を含む。 |
| 6. 灰褐色 (7.5Y R4/2) | 灰褐色軟質土を叩き締めている。 |
| 6' 灰褐色 (7.5Y R4/2) | 灰褐色軟質土層で、叩き締めている。砂質分が強い。 |

3区15号掘立柱建物 (挿図第196・200図)

3区15号掘立柱建物はK10-23, 24, 33, 34に位置する。南東へ14.3mの距離に7号・8号掘立柱建物址がある。柱穴は10本確認され、P1は4544土坑、P2は4542土坑、P3は5738土坑、P4は5736土坑、P5は5737土坑、P6は5686土坑、P7は4785土坑、P8は4787土坑、P9は5684土坑、P10は4859土坑である。それぞれの距離はP1-P3は400cm, P3-P6は526cm, P6-P8は407cm, P8-P1は496cmを測る。主軸はN-8°-Eである。床面積は20.6m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 82.80m)

- | | |
|--------------------|-------------------------------|
| 1. 灰褐色 (7.5Y R6/2) | 灰褐色軟質土である。 |
| 2. 暗褐色 (7.5Y R3/3) | 暗褐色軟質土で、柱痕と考えられる。 |
| 3. 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土で、叩き締めている。ロームブロックを含まない。 |
| 3' 褐灰色 (7.5Y R4/1) | 褐灰色軟質土で、叩き締めている。ロームブロックを少量含む。 |

3” 褐灰色 (7.5Y R4/1)	褐灰色軟質土で、叩き締めている。ロームブロックを含まず、砂層を含む。
3” 褐灰色 (7.5Y R4/1)	褐灰色ロームブロック土を多量に含み、叩き締められている。
4. 黒褐色 (7.5Y R3/1)	黒褐色軟質土をつきかためている。
5. 黒褐色 (7.5Y R3/1)	黒褐色軟質土をつきかためているが、砂層を含む。
6. 灰褐色 (7.5Y R4/2)	灰褐色軟質土を叩き締めている。
6’ 灰褐色 (7.5Y R4/2)	灰褐色軟質土層で、叩き締めている。砂質分が強い。

3区16号掘立柱建物 (挿図第196図)

3区16号掘立柱建物はK11-14, 15, 24, 25に位置する。北北西へ39.5mの距離に4号掘立柱建物址がある。柱穴は8本確認され、P1は2719土坑・2720土坑・2721土坑、P2は2552土坑、P3は2589土坑、P4は2591土坑、P5は17土坑、19土坑、P6は2735土坑、P7は2726土坑、P8は892土坑である。それぞれの距離はP1-P2は452cm, P2-P4は460cm, P4-P5は444cm, P5-P1は458cmを測る。主軸はN-7°30'-Wである。床面積は20.6m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 83.10m)

1. にぶい黄褐色 (10Y R4/3)	にぶい黄褐色の砂質土で、しまっている。
2. にぶい黄褐色 (10Y R4/3)	にぶい黄褐色の砂質土で、シルト質が強い。
3. にぶい黄褐色 (10Y R5/4)	にぶい黄褐色の砂質土であるが、しまっている。

3区17号掘立柱建物 (挿図第196・200図 写真番号P L. 62)

3区17号掘立柱建物はK11-02, 03, 12, 13に位置する。南東へ12.8mの距離に16号掘立柱建物址がある。柱穴は18本確認され、P1は2739土坑、P2は2745土坑、P3は2753土坑、P4は2764土坑、P5は2718土坑、P6は2777土坑、P7は5431土坑、P8は2802土坑、P9は2772土坑、P10は2779土坑・2780土坑、P11は2790土坑、P12は2811土坑、P13は2813土坑、P14は2776土坑、P15は2783土坑・2784土坑、P16は2792土坑、P17は2799土坑、P18は2814土坑である。それぞれの距離はP1-P4は562cm, P17-P14は540cm, P14-P1は506cmを測る。主軸はN-2°30'-Eである。床面積は36.0m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 83.30m)

1. 明褐灰色 (7.5Y R7/2)	明褐灰色軟質土である。
2. 黒褐色 (7.5Y R3/1)	黒褐色軟質土で、柱痕である。
3. 褐灰色 (7.5Y R4/1)	褐灰色軟質土で、叩き締められている。
4. 灰褐色 (7.5Y R4/2)	灰褐色軟質土で、叩き締められている。
5. にぶい褐色 (7.5Y R5/3)	にぶい褐色のローム質土層で、砂を多量に含んでいる。

3区18号掘立柱建物 (挿図第197図 写真番号P L. 62)

3区18号掘立柱建物はL9-07, 08, 17, 18に位置する。南西へ99.5mの距離に12号掘立柱建物址がある。柱穴は17本確認され、P1は3037土坑、P2は3038土坑、P3は3051土坑、P4は3052土坑、P5は2373土坑、P6は2374土坑、P7は2382土坑、P8は2383土坑、P9は5444土坑、P10は2381土坑、P11は2379土坑、P12は2389土坑、P13は3044土坑、P14は3042土坑、P15は3041土坑、P16は3040土坑、P17は3039土坑である。それぞれの距離はP1-P4は544cm, P4-P10は1.092cm, P10-P12は566cm, P12-P1は1.124cmを測る。主軸はN-3°30'-Wである。床面積は61.0m²を測る。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 81.90m)

1. 褐灰色 (10Y R5/1)	褐灰色軟質土層である。
2. 黒褐色 (10Y R3/1)	黒褐色軟質土で、柱痕である。
3. 黒褐色 (10Y R3/2)	黒褐色壤土で、叩き締められ、しまっている。
4. 灰黄褐色 (10Y R4/2)	灰黄褐色軟質土で、しまっている。

第II章 遺 跡

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 5. にぶい黄褐色 (10Y R5/4) | にぶい黄褐色シルト質土で、しまっている。 |
| 6. にぶい黄橙色 (10Y R6/4) | にぶい黄橙色土で、ロームを多量に含み、しまっている。 |

3区1号柵列 (挿図第201図)

3区1号掘立柱建物・柵列はK9-38, 48に位置する。南南西へ32mの距離に12号掘立の柱がある。柱穴は5本確認され、P1は5211土坑、P2は5199土坑・5798土坑、P3は5200土坑、P4は5201土坑、P5は5202土坑である。P1-P5までの距離は6.48mを測る。主軸はN-9°-Wである。

柱穴埋土土層表記 (基準高さ 82.80m)

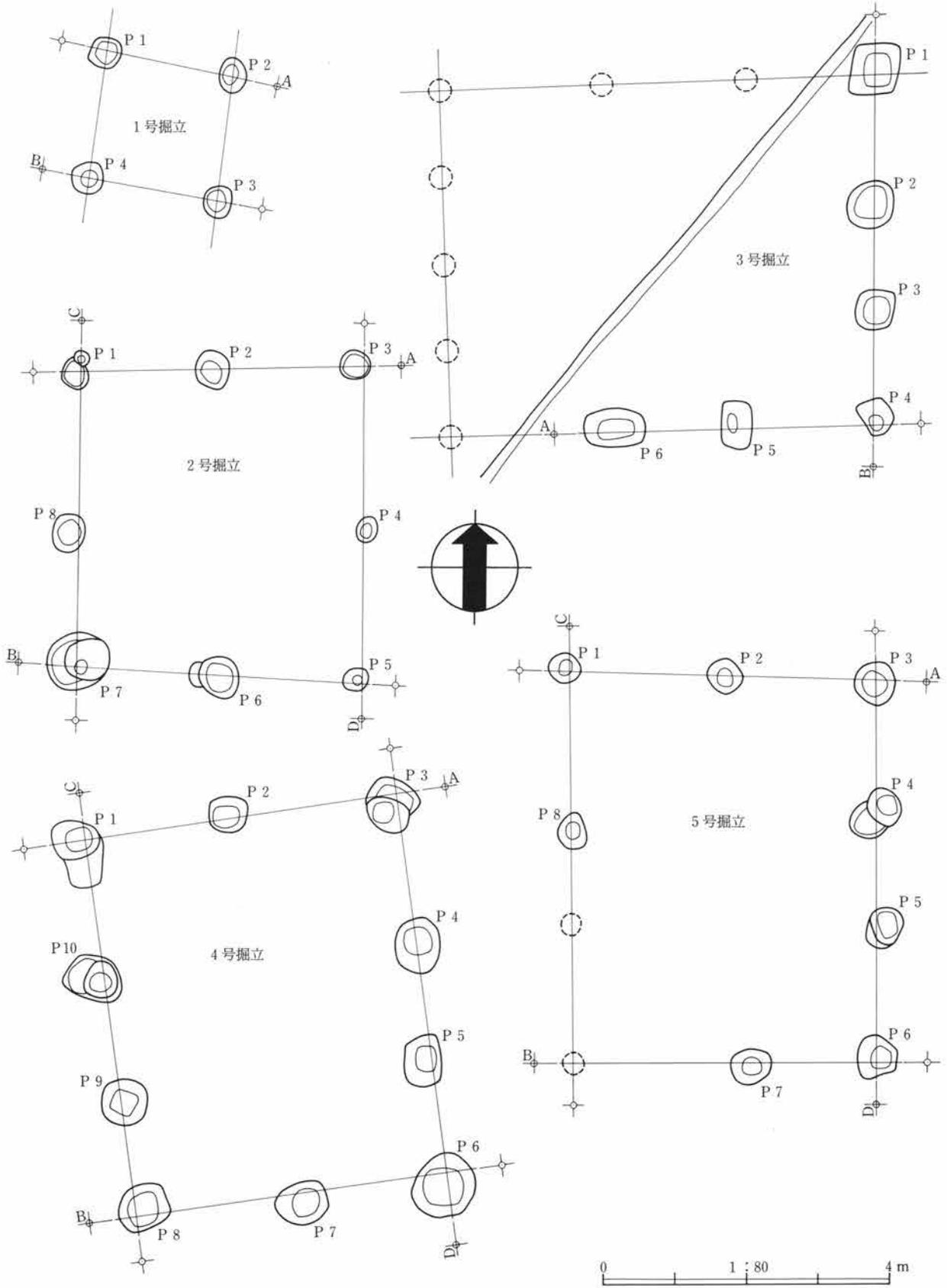
- | | |
|-------------------|--------------------------------|
| 1. 褐灰色 (10Y R4/1) | 褐灰色軟質土層である。 |
| 2. 黒褐色 (10Y R3/1) | 黒褐色軟質土で、叩き締められている。 |
| 3. 黒褐色 (10Y R3/1) | 黒褐色軟質土で、ロームブロックを混土した、しまった層である。 |

3区2号柵列 (挿図第201図)

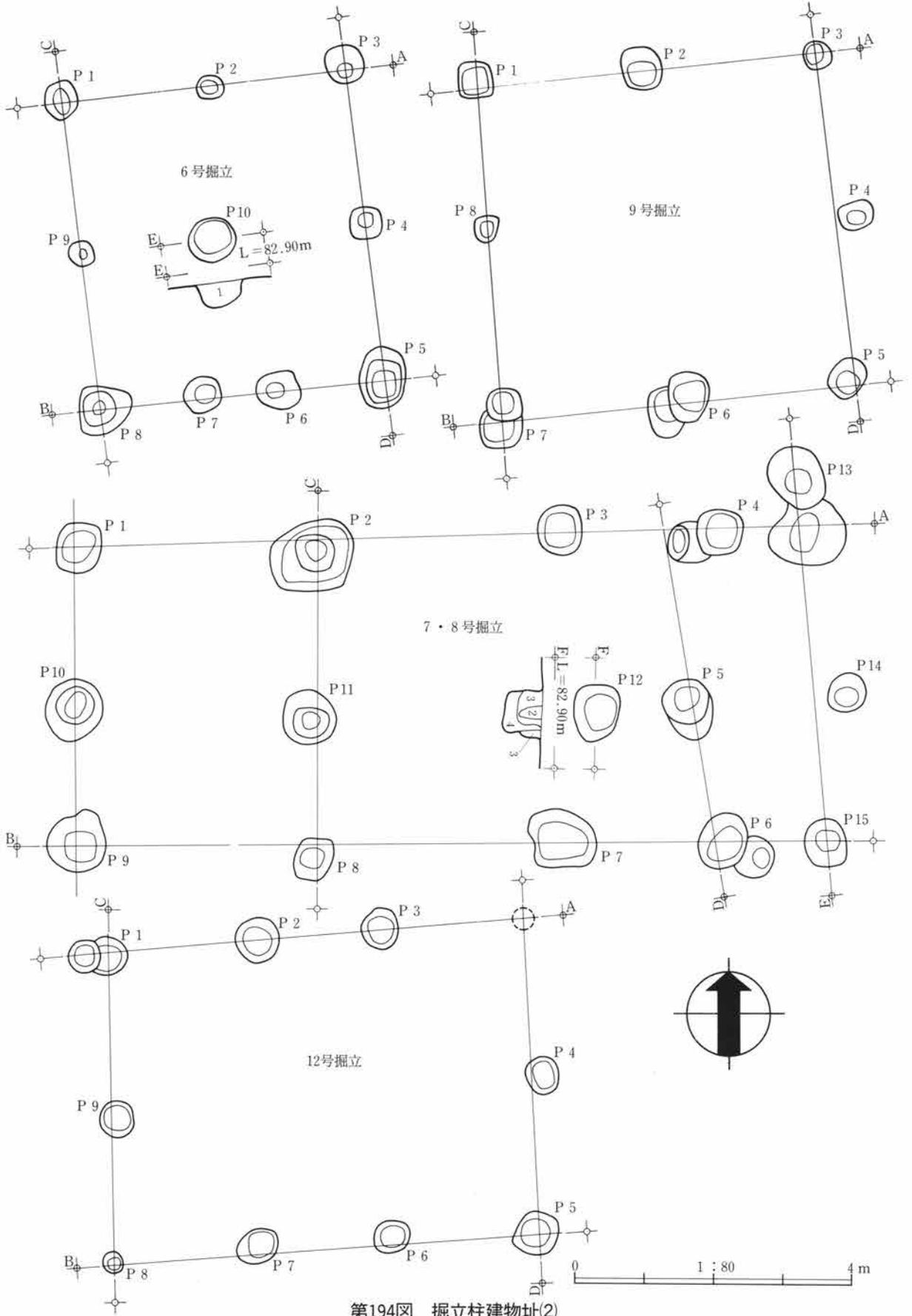
3区2号掘立柱建物・柵列はL9-63, 64, 33, 43, 53に位置する。北東へ46mの距離に18号掘立の柱がある。柱穴は14本確認され、P1は2065土坑、P2は1565土坑、P3は2064土坑、P4は2022土坑、P5は2104土坑、P6は5248土坑、P7は5919土坑、P8は5830土坑、P9は1511土坑、P10は606土坑、P11は1562土坑、P12は1563土坑、P13は300土坑、P14は1566土坑・1564B土坑である。P1-P7までの距離は19.50m・P8-P14までの距離は14.40mを測る。主軸はN-6°30'-Wである。

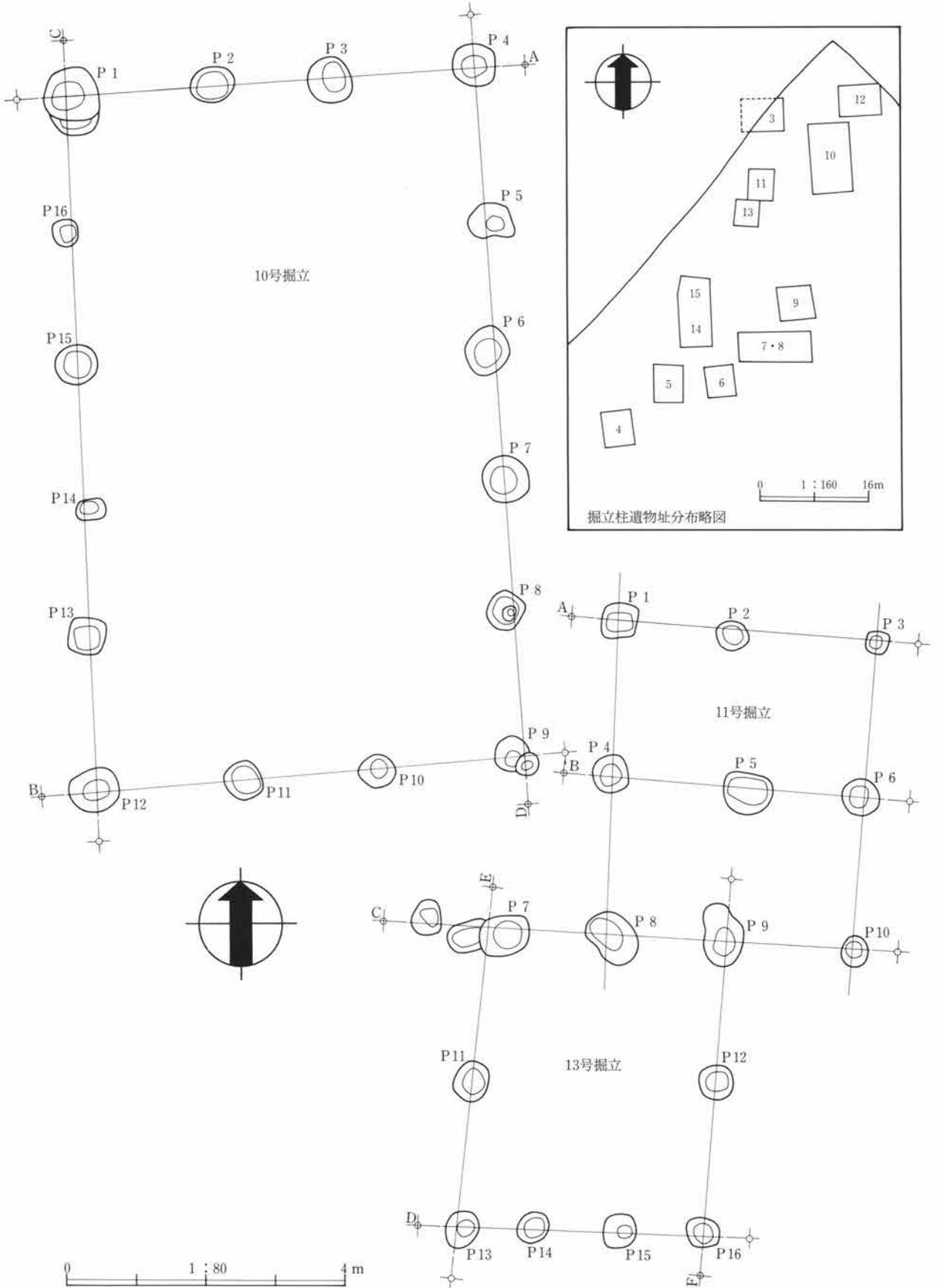
柱穴埋土土層表記 (基準高さ 82.10m)

- | | |
|----------------------|------------------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色 (10Y R5/4) | にぶい黄褐色ロームシルトと、暗褐色 (10Y R3/4) 粘質土との混土である。 |
| 2. 暗褐色 (10Y R3/4) | 暗褐色粘質土に、焼土を多量に含む。 |
| 3. 暗褐色 (10Y R3/3) | 暗褐色粘質土に、多量の焼土・炭化物・土器小片を含む。 |
| 4. 暗褐色 (10Y R3/3) | 暗褐色粘質土に、焼土を含む。 |
| 5. にぶい黄褐色 (10Y R5/4) | にぶい黄褐色シルト質で、硬くしまっている。 |
| 6. 灰黄褐色 (10Y R5/2) | 灰黄褐色ロームシルトで、硬くしまっている。 |

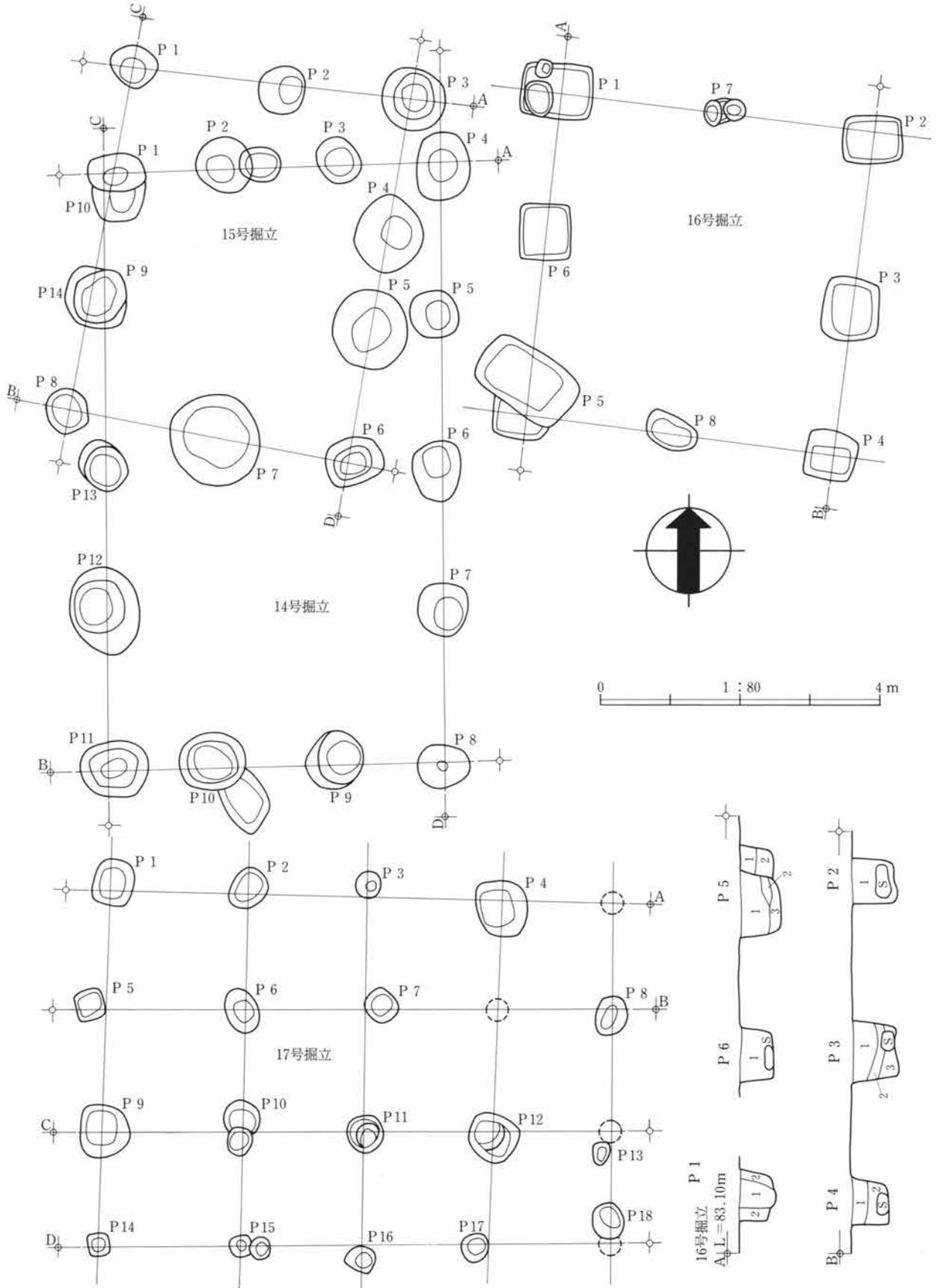


第193図 掘立柱建物址(1)

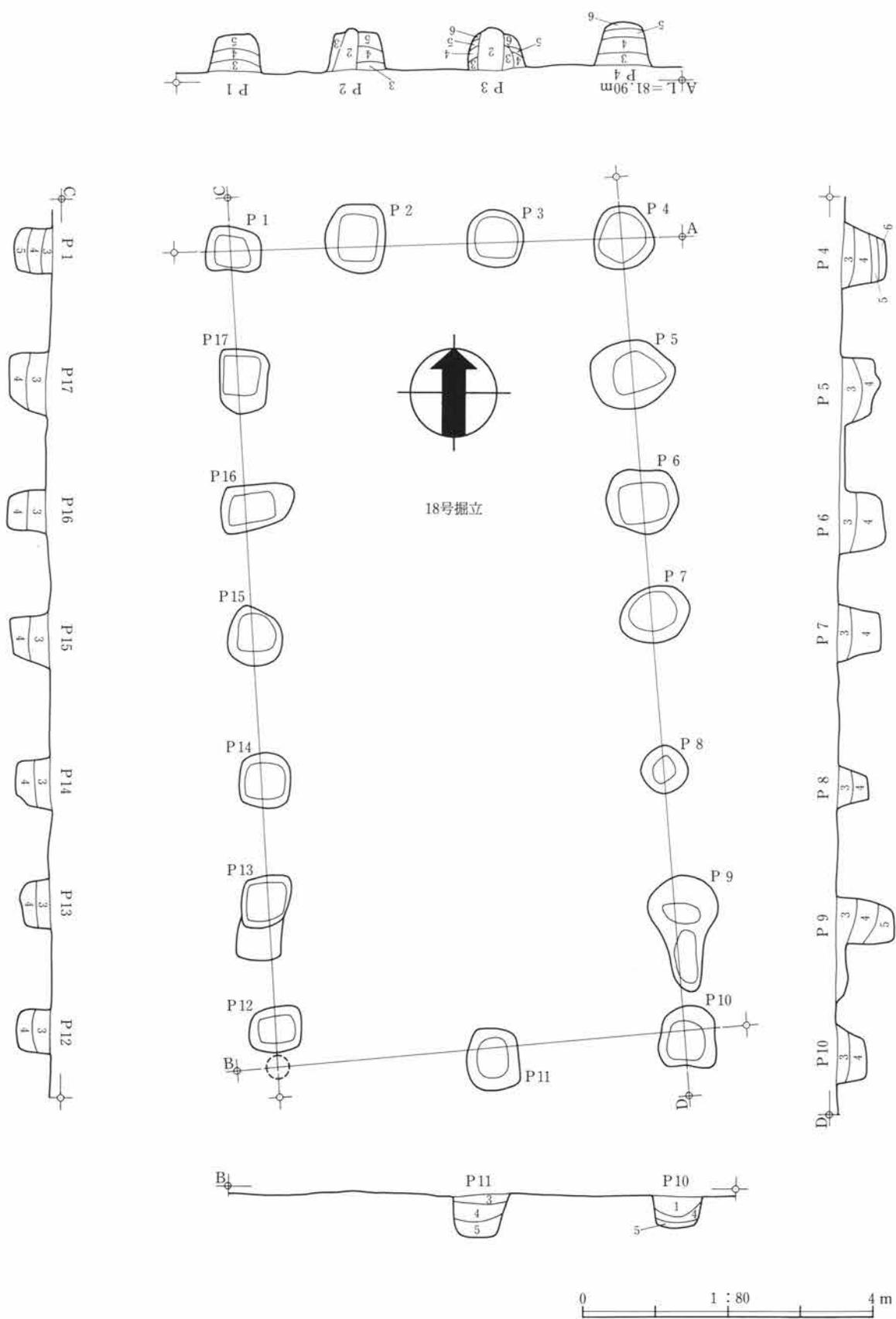




第195図 掘立柱建物址(3)

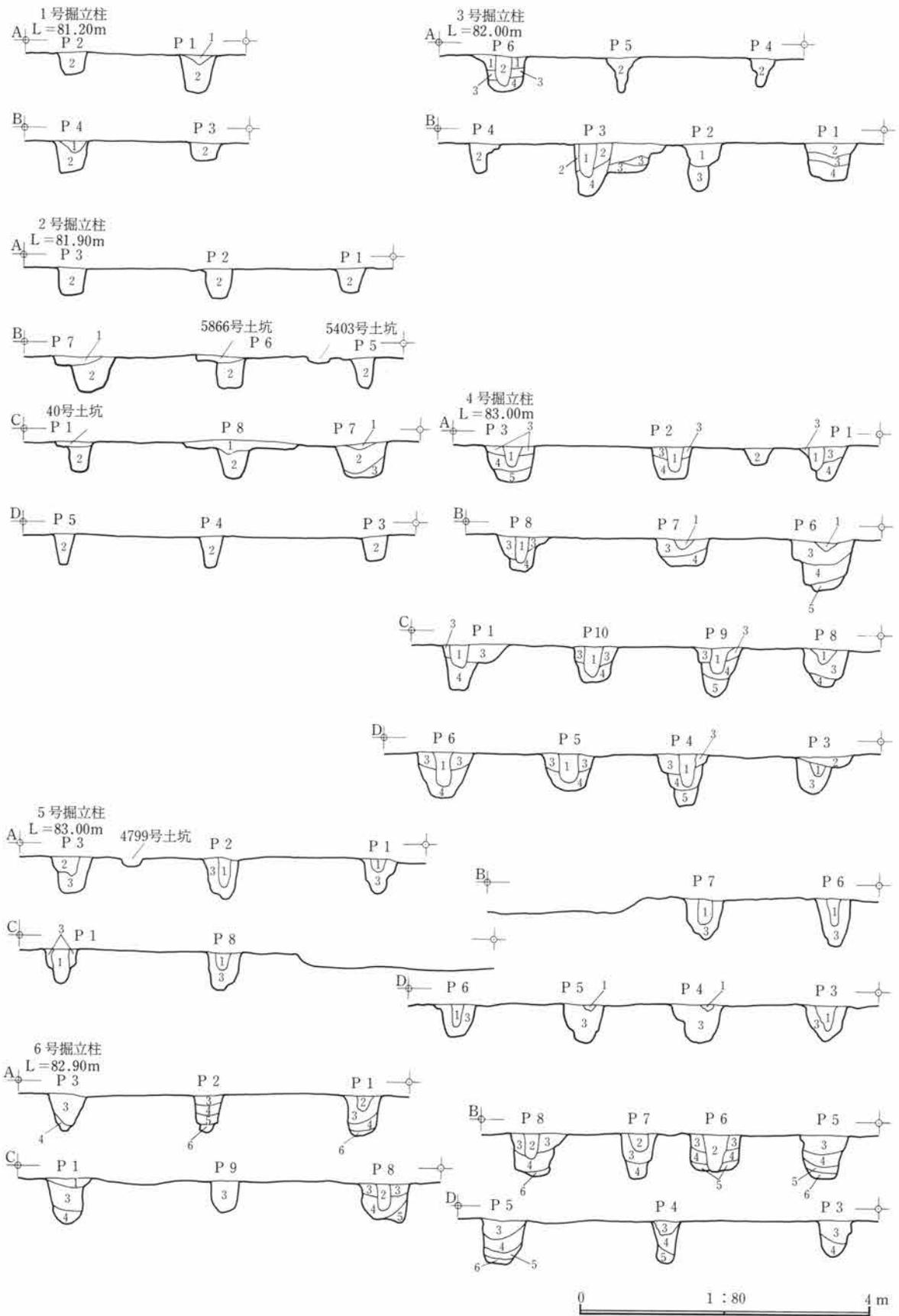


第196图 掘立柱建物址(4)

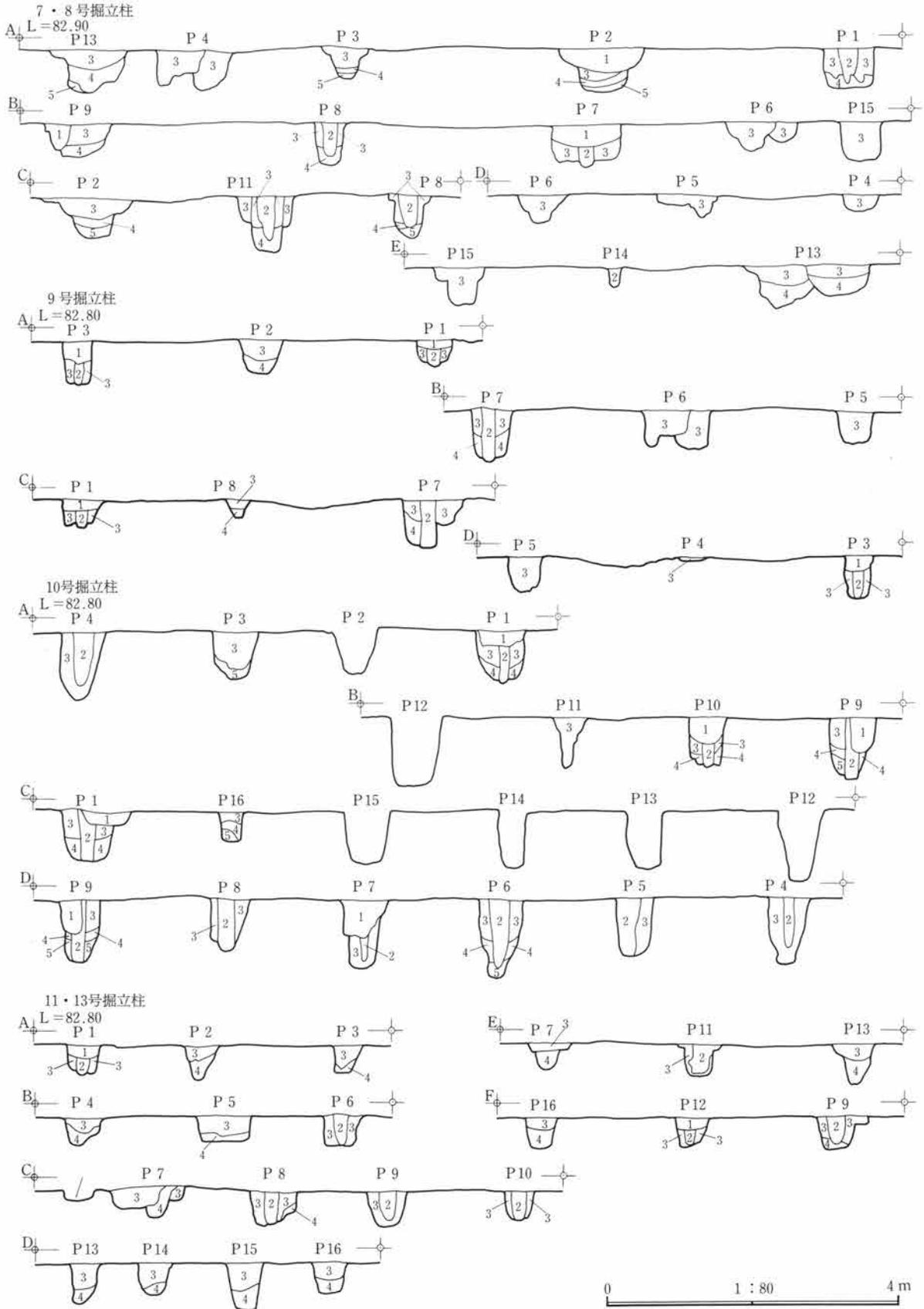


第197図 掘立柱建物址(5)

第II章 遺 跡

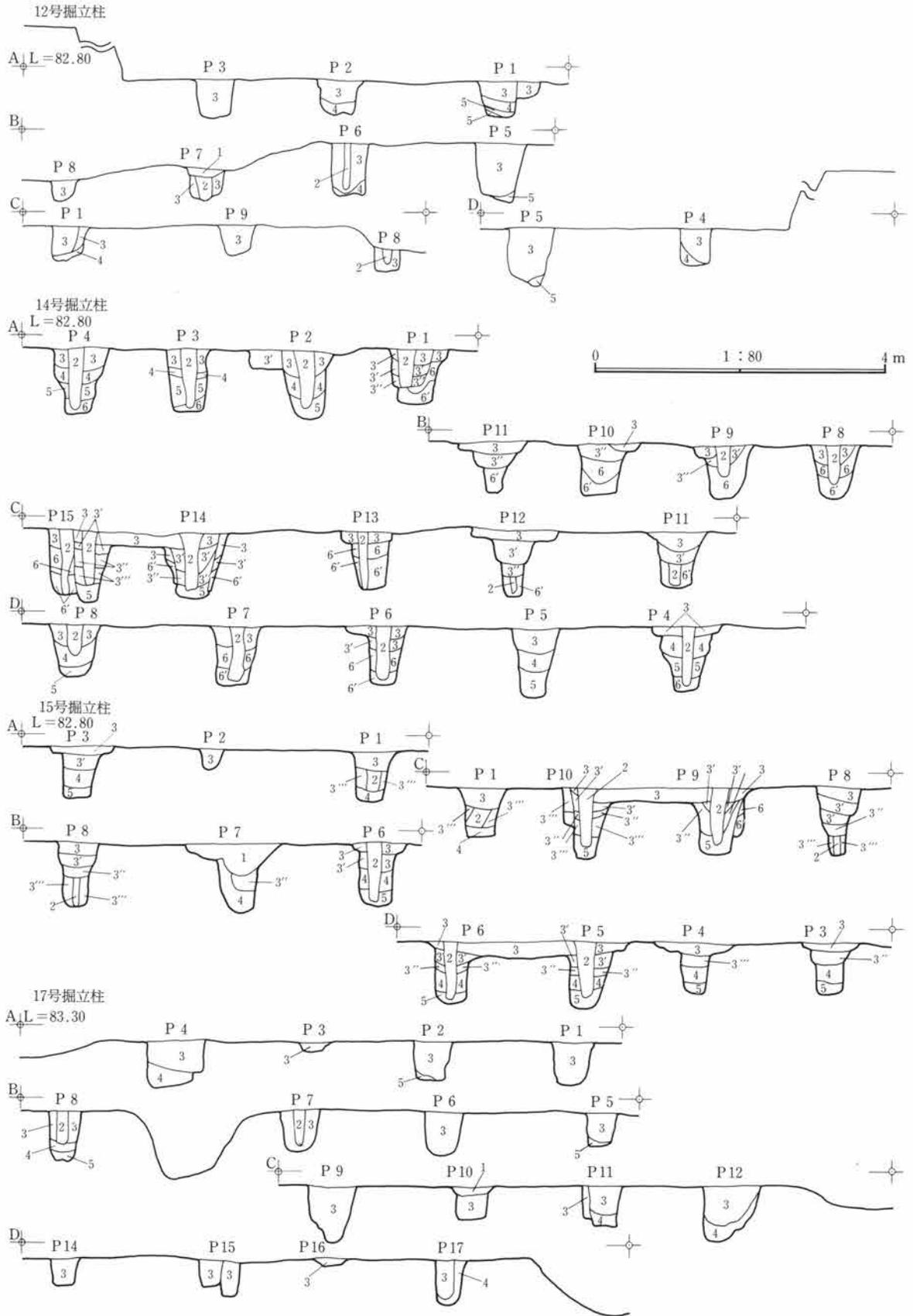


第198图 掘立柱建物址土層断面图(1)

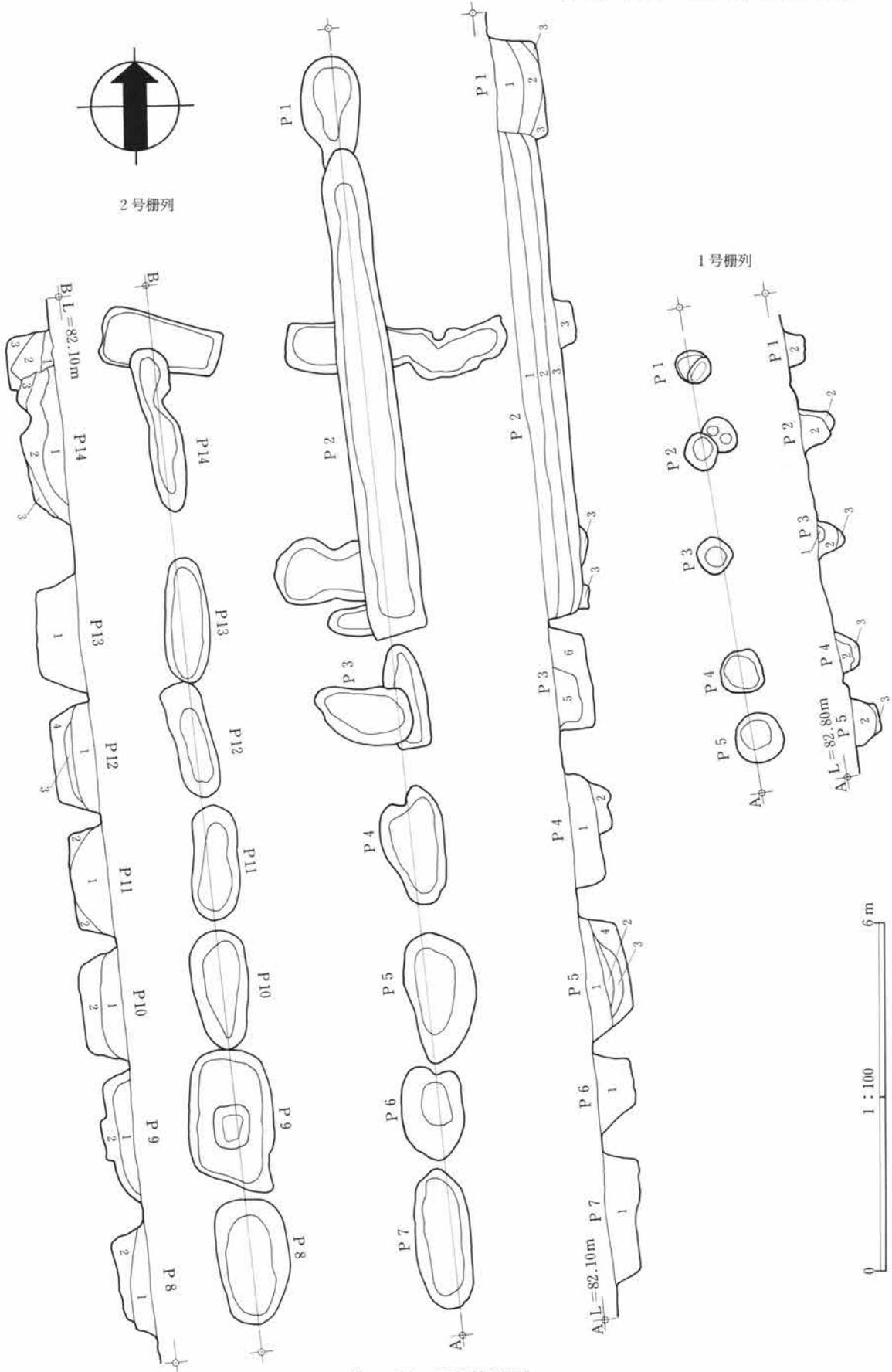


第199図 掘立柱建物址土層断面図(2)

第II章 遺 跡



第200图 掘立柱建物址土层断面图(3)



第201図 棚列実測図

C 溝

浄雲寺の地割に倣う方形区画に関連する溝は58溝(調査時には、東辺の橋の部分と考えられる北側を69溝、南側を58溝と区分した)を主体に、その外側に南北に走る2号溝と14号溝の2本の大溝がある。この2号溝は2区の発掘調査時点で確認された6号溝(2区の発掘調査時の呼称で2区6号溝)に連続している。この溝は2区2号溝と「T」字に結ばれる。明らかに2区2号溝の存在を意識した溝で2号溝より先行していると考えられる。2区の発掘調査報告書でもふれたが、この2区2号溝は2区1号溝と平行同時期のもので、さらに北に約60mの間隔を持つ2区4号溝と2区5号溝の平行する2本組の溝とも関連してくる。その他、2号溝に平行する14号溝は2区の溝とどの様に関連するのか未確認のままである。また2区3号溝は3区ではなぜ検出できなかったのか、3A区の北隅に東西に走る8号溝との関連で興味深い。

また14号溝は17号溝を介して56号溝と連結する。18号溝も17号溝と56号溝を繋ぐ。

この14号溝は南で30号溝に接続してさらに南に走り「L」字状に西に折れ、さらに進んで再び南に曲がる。この30号溝に近似した29A号溝は浄雲寺の方形区画の南の大溝、56号溝の外側を平行して走る小さな溝群に走行を同じくする。西から72号溝、73号溝、71号溝、57号溝、58号溝、29B号溝、59号溝である。

30号溝の西側は南北に走る大きな4号溝、小さな33号溝、5号溝、23号溝の一群に因って画されている。この溝の西側に2号冊柵列が同方向に走り両者の関連も考えられる。

またK11区の中央に長方形の区画が検出されている。東辺は34号溝、35号溝、36号溝である。西辺は主たる12A号溝、そして11号溝、27号溝である。南辺は37号溝、北辺は西辺から連続する12A号溝と12B号溝である。この長方形の区画はさらに38号溝、39号溝の縦区画線が走る。この長方形区画はさらに北に9号溝が東に10号溝が走り大きく囲んでいるかのように見える。南北に走る10号の大溝は北に延びる42号溝に連続して、西に延びる50号溝、東に延びる54号溝、北に延びる77号溝の交叉点に到達する。東に延びる54号溝は途中とぎれて進むと7号溝、24号溝に走行がのってくる。溝のとぎれた辺りに、区画線のような15号溝が南北方向に走っている。

坂井論文で中世以降の遺構と遺物を検討し、年代を推定できた溝は以下ようになった。

4号溝は13世紀から20世紀初頭まで長期間、継続して利用されている。9号溝は14世紀から20世紀初頭まで長期間、継続して利用されている。12A号溝は18世紀中頃から20世紀初頭まで継続して利用されている。14号溝は17世紀後半から20世紀初頭まで継続して利用されている。15号溝は13世紀のみでその使用時期は短い。18号溝は18世紀中頃から19世紀前半までの短期間を利用している。24号溝は16世紀から17世紀前半までで使用期間は短い。30号溝は13世紀から19世紀前半まで長期間、継続し、利用している。37号溝は18世紀中頃から19世紀前半まで短期間利用されている。39号溝は18世紀中頃から20世紀初頭まで継続して利用されている。42号溝は14世紀から20世紀初頭まで長期間、継続して利用されている。50号溝も14世紀から20世紀初頭まで長期間、継続して利用されている。55号溝は13世紀から15世紀まで継続して利用されている。56号溝は13世紀から18世紀前半まで長期間、継続して利用されている。58号溝は14世紀から18世紀前半まで継続して利用されている。72号溝は17世紀後半から20世紀初頭まで継続して利用されている。

3区2号溝

遺構（付図第2図）

本溝はM7グリッドで検出された。長さは49.5mで、方向はN-2°-Eである。

遺物 須恵器甕 (1.7kg)・土師器甕・坏 (1.5kg)・須恵器坏皿 (1.0kg)・須恵器壺 (0.1kg) を出土している。

3区3号溝

遺構（付図第2図）

本溝はM7グリッドで検出された。長さは14mで、方向はN-12°-Wである。

遺物 須恵器坏 (0.1kg) を出土している。

3区4号溝（旧66号溝を含む）

遺構（付図第3図）

本溝はL9グリッドで検出された。長さは53mで、方向はN-4°-Eである。

遺物（挿図第297図）

須恵器甕 (3.2kg)・須恵器坏 (1.9kg)・土師器甕・坏 (2.0kg)・近世瓦 (1.0kg)・近世陶磁器 (0.9kg)・中世播り鉢 (0.73kg)・中世焙烙 (0.6kg)・埴輪 (0.2kg)・近世土管 (0.04kg) を出土している。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から13世紀頃と考えられる。

3区5号溝

遺構（付図第3図）

本溝はL9グリッドで検出された。長さは21.9mで、方向はN-1°-Eである。

遺物 須恵器甕 (0.3kg)・中世焙烙 (0.08kg) を出土している。

3区6号溝

遺構（付図第2, 3図 写真番号PL, 75）

本溝はL8, M8グリッドで検出された。長さは47mで、方向はN-79°-Eである。

遺物 須恵器甕 (1.3kg)・須恵器坏 (1.4kg)・土師器甕・坏 (3.5kg)・中世焙烙 (0.03kg) を出土してゐる。

3区7号溝

遺構（付図第3図）

本溝はL9グリッドで検出された。長さは26.5mで、方向はN-85°-Eである。

遺物 須恵器坏 (2.0kg)・土師器甕・坏 (2.6kg)・中世播り鉢 (0.4kg)・灰釉坏 (0.3kg) を出土している。

3区8号溝

遺構（付図第2図）

本溝はM7グリッドで検出された。長さは5.5mで、方向はN-85°-Eである。

第II章 遺 跡

3区9号溝

遺構 (付図第4図 写真番号P L. 63)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは53.5mで、方向はN-74°-Wである。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から14世紀頃と考えられる。

遺物 (挿図第297図)

3区10号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK10・11グリッドで検出された。長さは19.7mで、方向はN-10°-Eである。

遺物 須恵器甕 (4.3kg)・須恵器坏 (1.4kg)・土師器甕・坏 (1.6kg)・中世播り鉢 (1.9kg)・中世焙烙 (1.9kg)・近世陶器 (0.05kg)・古代布目瓦 (0.2kg) を出土している。

3区12号溝 (旧11号溝、旧13号溝を含む)

遺構 (12A号溝付図第4図 写真番号P L. 64) (12B号溝付図第4図)

12A号溝はK11グリッドで検出された。長さは63m (東西に28m、南北に35m) である。方向は東西がN-86°-W、南北がN-4°-Eである。

12B号溝はK10・11グリッドで検出された。長さは13mで、方向はN-79°-Wである。

12A号溝遺物 (挿図第297図)

3区14号溝

遺構 (付図第2, 3図 写真番号P L. 64)

本溝はL7・8グリッドで検出された。長さは110.3mで、方向はN-4°-Eである。

遺物 (挿図第297, 298, 299, 300, 301, 302図)

須恵器甕 (1.8kg)・須恵器坏 (0.9kg)・近世陶磁器 (4.9kg)・泥人形 (0.03kg)・近世竈鏝 (0.3kg)・近世火鉢 (0.2kg)・土師器坏 (0.9kg)・近世播り鉢 (2.1kg)・近世水甕 (0.1kg)・近世焙烙 (3.2kg)・土師器甕 (1.2kg) を出土している。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から17世紀後半～18世紀前半頃と考えられる。

3区15号溝

遺構 (付図第3, 4図 写真番号P L. 64)

本溝はL9, 10グリッドで検出された。長さは32.8m (南北に29.3m、南東に3.5m) で、方向はN-5°-Wである。

遺物 (挿図第302図) 近世陶磁器 (0.2kg)・中世播り鉢 (1.9kg)・中世焙烙 (6.2kg)・近世陶器短脚 (0.09kg)・古代布目瓦 (0.1kg)・中世陶器常滑 (0.6kg)・土師器甕 (1.1kg)・須恵器甕・坏 (1.5kg) を出土している。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から13世紀頃と考えられる。

3区16号溝

遺構 (付図第4図 写真番号P.L. 64)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは6.5mで、方向はN-10°-Eである。

3区17号溝

遺構 (付図第2図)

本溝はL7・8グリッドで検出された。長さは46m(東に16.5m、北に18.5m、西へ11m)である。方向は東がN-65°-E、北がN-7°-E、西がN-86°-Wである。

遺物 土師器坏 (0.02kg) を出土している。

3区18号溝

遺構 (付図第2図)

本溝はL8グリッドで検出された。長さは10.5mで、方向はN-84°-Wである。

遺物 (挿図第302図) 須恵器甕 (0.02kg)・土師器甕 (0.01kg)・近世磁器 (0.4kg) を出土している。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から18世紀中頃～19世紀前半頃と考えられる。

3区19号溝

遺構 (付図第2図)

本溝はM8グリッドで検出された。長さは7mで、方向は不定型である。

3区20号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL8, M8グリッドで検出された。長さは7.8mで、方向はN-25°-Wである。

3区22号溝

遺構 (付図第2図 写真番号P.L. 64)

本溝はM8グリッドで検出された。長さは14mである。方向はN-29°-Wである。

遺物 土師器甕・坏 (0.3kg) を出土している。

3区23号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは29.8mで、方向はN-2°-Eである。

遺物 須恵器甕 (0.9kg)・須恵器坏 (0.5kg)・土師器甕・坏 (1.2kg)・須恵器壺 (0.1kg)・中世播り鉢 (1.1kg)・中世焙烙 (0.7kg)・埴輪 (0.1kg)・中世陶磁器 (0.1kg)・灰釉長頸壺 (0.01kg) を出土している。

3区24号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは23mで、方向はN-86°-Eである。

第II章 遺 跡

遺物 土師器甕 (0.01kg) を出土している。

3区25号溝

遺構 (付図第1図)

本溝はJ12グリッドで検出された。長さは7mで、方向はN-22°-Wである。

3区26号溝

遺構 (付図第1図)

本溝はJ12グリッドで検出された。長さは7.5mである。方向はN-89°-Eである。

3区27号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK11グリッドで検出された。長さは15.8mである。方向はN-10°-Eである。

3区29号溝

遺構 (付図第3図)

29A号溝はL9グリッドで検出された。長さは38m (南北に18.5m、南西に19.5m) である。方向は南北がN-4°-E、南西がN-86°-Wである。

遺物 29A号溝から土師器甕・坏 (1.0kg)・近世瓦 (0.3kg)・近世陶磁器 (0.03kg)・中世播り鉢 (0.2kg)・中世焙烙 (0.2kg)・須恵器甕盤 (0.4kg) を出土している。

29B号溝はL9グリッドで検出された。長さは23.5mで、方向は不定型である。

3区30号溝 (旧32号溝を含む)

遺構 (付図第3図)

本溝はL8・9グリッドで検出された。長さは49.3m (南北に23m、南西に17m、南北に9.3m) である。方向は南北がN-3°-W、南西がN-85°-E、南北がN-11°-Eである。

遺物 (挿図第302図)

須恵器甕 (3.1kg)・須恵器坏 (0.08kg)・土師器甕・坏 (0.7kg)・中世播り鉢 (1.4kg)・近世陶器 (0.8kg)・古代布目瓦 (0.6kg)・近世焙烙 (0.4kg)・近世磁器 (0.4kg)・須恵器坏蓋 (0.3kg)・近世瓦 (0.1kg) を出土している。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から13世紀頃と考えられる。

3区31号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは5mで、方向はN-2°-Eである。

遺物 須恵器土師器 (0.08kg) を出土している。

3区33号溝

遺構 (付図第3図 写真番号P L. 64)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは18.5mで、方向はN-5°-Eである。

遺物 羽口 (0.1kg) を出土している。

3区34号溝

遺構 (付図第4図 写真番号P L. 64)

本溝はK11グリッドで検出された。長さは19.7mで方向は不定型である。

3区35号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK11グリッドで検出された。長さは12.2mで、方向は不定型である。

3区36号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK11グリッドで検出された。長さは11.8mで、方向はN-7°-Eである。

3区37号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK11グリッドで検出された。長さは24mで、方向はN-89°-Wである。

3区38号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK11グリッドで検出された。長さは9.1mで、方向はN-11°-Eである。

3区39号溝 (旧40号溝を含む)

遺構 (付図第4図 写真番号P L. 65)

本溝はK11グリッドで検出された。長さは27.5m (南北に21m、東西に6.5m) である。方向は南北がN-6°-E、東西がN-85°-Wである。

3区42号溝 (旧46号溝、旧80号溝を含む)

遺構 (付図第3, 4図 写真番号P L. 65)

本溝はK9・10グリッドで検出された。長さは59.2m、方向はN-3°-Eである。

遺物 中世播り鉢 (0.2kg)・須恵器甕 (0.2kg)・土師器甕・坏 (1.02kg) を出土している。

3区43号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは2.3mで、方向はN-1°-Eである。

3区44号溝

遺構 (付図第4図 写真番号P L. 65)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは12.5mで、方向はN-5°-Eである。

3区45号溝

遺構 (付図第1図)

本溝はJ11グリッドで検出された。長さは2mで、方向はN-82°-Wである。

3区47号溝

遺構 (付図第1図) (写真番号P L. 65)

本溝はJ11グリッドで検出された。長さは4.5mで、方向は東はN-13°-Wである。

3区48号溝

遺構 (付図第4図 写真番号P L. 65)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは10.7mで、方向はN-89°-Wである。

3区49号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは3mで、方向はN-7°-Eである。

3区50号溝 (旧79号溝を含む)

遺構 (付図第3図)

本溝はK9グリッドで検出された。長さは27.5mで、方向はN-87°-Wである。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から14世紀頃と考えられる。

遺物 (挿図第303図)

土師器甕・坏 (0.04kg)・中世播り鉢 (0.3kg)・古代瓦布目 (0.2kg)・須恵器甕・坏 (0.2kg) を出土している。

3区51号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは10.5mである。方向はN-15°-Eである。

3区53号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは16.8mで、方向はN-75°-Wである。

3区54号溝 (旧81号溝を含む)

遺構 (付図第3図)

本溝はL 9, K 9グリッドで検出された。長さは25.8m(東西に18m、南北に7.8m)である。方向は東西、南北とも不定型である。

3区55号溝

遺構(付図第4図)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは7mで、方向はN-1°-Eである。

遺物(挿図第303図)

須恵器甕(0.1kg)・中世焙烙(0.2kg)・古代瓦布目(0.1kg)・土師器坏(0.05kg)・近世磁器(0.01kg)を出土している。本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から13世紀頃と考えられる。

3区56号溝(旧69号溝を含む)

遺構(付図第2, 3図 写真番号P L. 65, 66)

本溝はL 8・L 9, K 9グリッドで検出された。長さは114.4m(南北に51.9m、南西に62.5m)である。方向は南北がN-5°-E、南西がN-10°-E・N-85°-Wである。出土遺物から13世紀頃と考えられる。

遺物(挿図第303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310図)

須恵器甕(1.9kg)・須恵器坏(0.7kg)・近世瓦(6.2kg)・近世陶磁器(3.2kg)・中世焙烙(0.7kg)・近世播り鉢(1.1kg)・土師器甕(2.7kg)・中世土器甕(0.2kg)・近世かまど(5.4kg)を出土している。

3区57号溝

遺構(付図第3図)

本溝はL 9グリッドで検出された。長さは27mである。方向は不定型である。

遺物 土師器甕・坏(0.1kg)・須恵器甕・坏(0.5kg)を出土している。

3区58号溝

遺構(付図第3図)

本溝はL 9グリッドで検出された。長さは28.5mで、方向は不定型である。

遺物(挿図第310図)

須恵器甕(0.6kg)・須恵器坏(0.1kg)・近世瓦(0.05kg)・近世陶器(0.2kg)・土師器坏(0.1kg)・近世焙烙(0.2kg)・土師器甕(0.1kg)・中世陶器播り鉢(0.2kg)を出土している。

本溝の掘削年代は、土層・出土遺物から15世紀頃と考えられる。

3区59号溝

遺構(付図第3図)

本溝はL 9グリッドで検出された。長さは15mで、方向はN-82°-Wである。

3区60号溝

遺構(付図第3図)

本溝はL 8グリッドで検出された。長さは5.5mで、方向はN-20°-Eである。

第II章 遺 跡

遺物 土師器甕・坏 (0.02kg)・中世須恵器甕・坏 (0.04kg) を出土している。

3区61号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL8グリッドで検出された。長さは4.5mで、方向はN-20°-Eである。

遺物 近世瓦 (0.09kg)・近世陶磁器 (0.06kg)・土師器坏 (0.03kg)・須恵器甕・坏 (0.05kg) を出土している。

3区62号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL8・L9グリッドで検出された。長さは7.8mで、方向はN-12°-Eである。

遺物 中世焙烙 (0.9kg)・須恵器甕・坏 (0.3kg)・中世土器坏 (0.4kg)・中世土器甕 (0.1kg) を出土している。

3区63号溝

遺構 (付図第3図 写真番号PL, 66)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは13mで、方向はN-89°-Wである。

遺物 須恵器甕 (0.1kg)・中世播り鉢 (0.1kg)・焙烙 (0.2kg)・土器坏 (0.1kg)・近世播り鉢 (0.1kg) を出土。

3区64号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは5.6mで、方向はN-88°-Wである。

3区65号溝

遺構 (付図第2図)

本溝はL8グリッドで検出された。長さは4.8mで、方向はN-85°-Wである。

3区67号溝

遺構 (付図第3図)

67A号溝はL8グリッドで検出された。長さは5mで、方向はN-80°-Wである。

67B号溝はL8グリッドで検出された。長さは4.9mで、方向はN-85°-Wである。

67C号溝はL8・L9グリッドで検出された。長さは4.7mで、方向はN-80°-Wである。

67D号溝はL9グリッドで検出された。長さは5.3mで、方向はN-85°-Wである。

3区68号溝

遺構 (付図第2, 3図 写真番号PL, 66)

本溝はL8・L9グリッドで検出された。長さは29.5mで、方向はN-1°-Wである。

遺物 須恵器甕 (0.05kg)・近世陶磁器 (0.1kg)・土師器坏 (0.1kg)・古代焙烙 (0.1kg) を出土している。

3区70号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは7mで、方向はN-89°-Eである。

遺物 須恵器甕 (0.1kg)・近世瓦 (0.05kg)・中世焙烙 (0.01kg)・近世陶器 (0.02kg)・土師器坏 (0.02kg)・内耳 (0.01kg) を出土している。

3区71号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9グリッドで検出された。長さは4.5mで、方向はN-87°-Wである。

遺物 須恵器甕 (0.4kg)・中世播り鉢 (0.02kg)・近世陶器 (0.1kg)・土師器甕 (0.01kg)・縄文土器 (1片) を出土している。

3区72号溝

遺構 (付図第3図 写真番号P L. 66)

本溝はK9, L9グリッドで検出された。長さは44.8mで、方向はN-87°-Wである。

遺物 須恵器甕 (0.06kg)・古代布目瓦 (0.1kg)・土師器坏 (0.02kg)・中世播り鉢焙烙 (0.02kg) を出土している。

3区73号溝

遺構 (付図第3図 写真番号P L. 66)

本溝はK9, L9グリッドで検出された。長さは34.5mで、方向はN-83°-Wである。

3区74号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はL9, K9グリッドで検出された。長さは14mで、方向はN-89°-Wである。

3区77号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はK9グリッドで検出された。長さは14mで、方向はN-5°-Wである。

遺物 須恵器甕 (0.8kg)・須恵器坏 (0.07kg)・土師器甕・坏 (0.8kg)・中世播り鉢 (0.1kg) を出土している。

3区91号溝

遺構 (付図第4図)

本溝はK10グリッドで検出された。長さは6mで、方向はN-5°-Eである。

3区92号溝

遺構 (付図第1図)

第II章 遺 跡

本溝はJ11グリッドで検出された。長さは5.5mで、方向はN-28°-Wである。

3区93号溝

遺構 (付図第3図)

本溝はK9グリッドで検出された。長さは39mである。方向はN-87°-Wである。

D 土坑

第3区の発掘区の特徴は大量な土坑の検出にある。調査時点では連続番号を5926番まで振った。これらの土坑のうち、明らかに現代の攪乱を除いたすべての土坑の数は5629基であった。

発掘調査時になるべく平面、断面での切り合い、土坑埋土の類似点など纏まりのある土坑群としての把握に努めた。けれども藤岡台地の土壌の特性から、現耕作土層以下の遺構検出面はいわゆる藤岡粘土と砂層部の互層を呈しているために、個々の土坑の平面図と断面土層図の記録、さらに墓墳と考えられる骨類の出土状態図を記録にとどめることとし、写真でその欠を補った。土坑出土の遺物は一括処理せざるを得なかった。

発掘作業の後に整理作業がある。整理作業には出土遺物、図面類の将来の活用に向けた資料の基礎的な整理作業と報告書の刊行に向けた整理作業がある。当然、資料の量と報告書の量、そして期間の量があり、その3つのバランスが取れたときに「良い」整理作業ができたといえる。整理期間に合わせて報告書の量がきまり、資料も掲載量に限定されると、担当者の理解できる資料のみを掲載する傾向は避けられない。

今回の整理作業でも、土坑のすべての情報を掲載することは無理であった。特に重要な遺物を出土した土坑と井戸、そして墓墳を資料化し、その他は一覧表に纏めるために土坑の形態、規模、出土遺物の時期区分を記載した。なお時期別の遺物量の計測は掲載できなかった。

観察資料編・第I章・第2節の土坑計測表は以下の順になっている。

土坑番号の次に検出された発掘区(東西8m×南北6m)を記入した。これで付図5、6、7の土坑分布図の土坑位置を検出してもらうためである。

次に土坑の規模を長軸、短軸、そして深さであらわした。深さはもちろん検出面からである。

形状は a. 円形 b. 長方形 c. 楕円形 d. 不定形 (凡例に表現)

その他の欄には土坑出土の土器類を時期分類した。

- A. 近世瓦 B. 土師器(古墳時代～中世まで含む) C. 須恵器(古墳時代～中世まで含む)
D. 炮烙(中世～近世を含む) E. その他(時期不明のもの、判定不明のものを含む)
F. 中世陶磁器 G. 近世陶磁器 H. かわらけ(中世～近世)
I. 近代陶磁器

また、その他の土器分類の後ろに骨類、古銭、鉄器、特殊な土器、瓦類を記入した。

そのほか、掘立柱建物や柵列を構成する個々の土坑の番号を記入した。

5629基の土坑は今まで調査した北側の2区や南西側の4区に比べると圧倒的にその数は多い。発掘区域だけの感想であるが、それらの土坑は15か所にある纏まりを見せている。

北から1番目のグループはM7グリッドの西寄りに土坑が纏まっている。土坑の規模は全体に小さく遺物

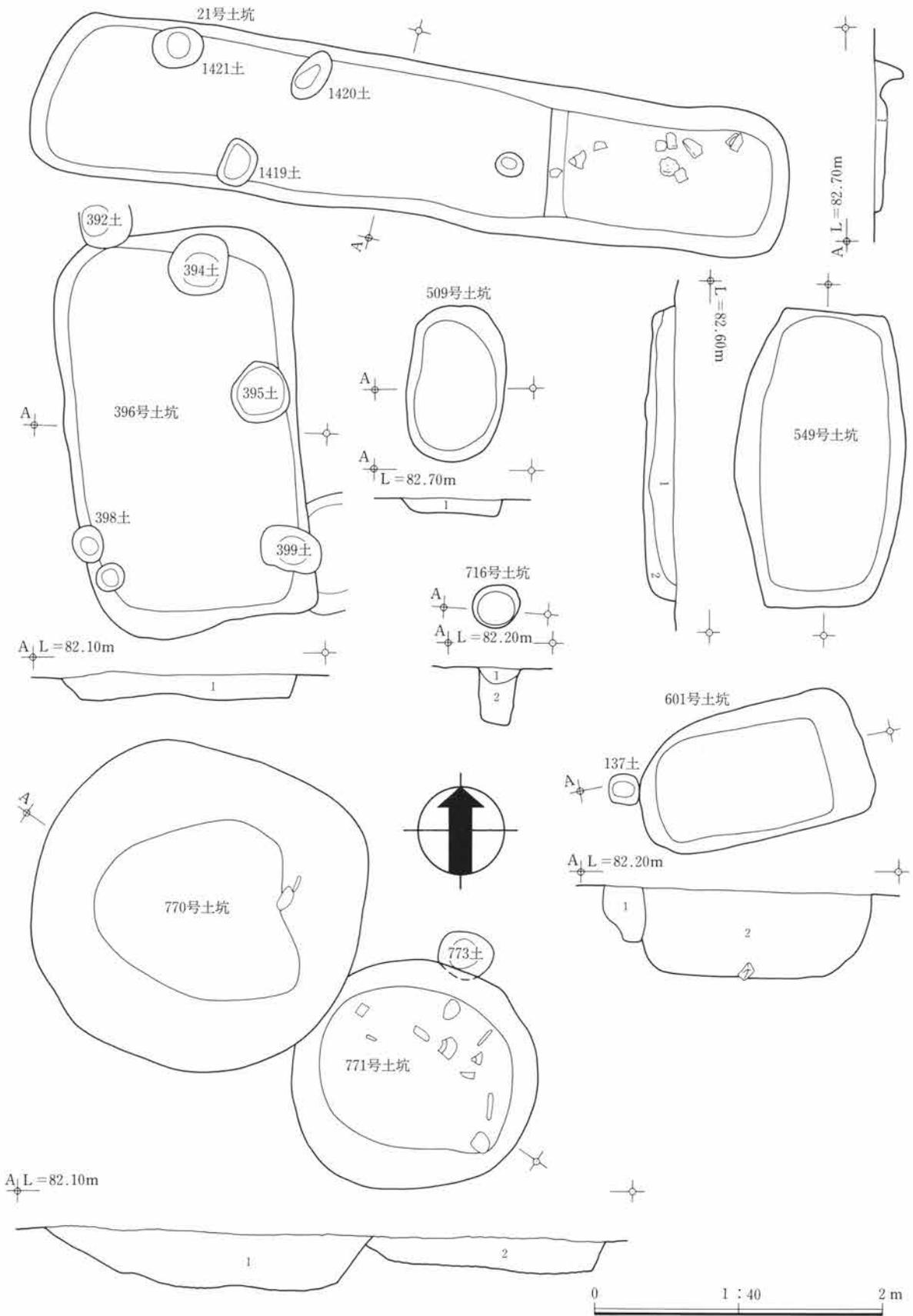
の出土は少量である。東側に1号掘立柱建物が接している。2番目のグループはL7グリットの東に土坑が纏まっている。埋没した溝に穿たれた馬の墓坑とその西側の一群である。3番目のグループはM8グリットの西寄りに土坑が纏まる一群である。2号掘立柱建物をふくむ一群で西側に近世の溝が南北に走る。4番目のグループはL8グリットの中央部に土坑が纏まっている。方形区画の内側の一群で大型の土坑が中心で、ある時期に墓域を形成していたと考えられる。5番目のグループはL9グリット区の北東隅に土坑が纏まっている。18号掘立柱建物を含む一群で土坑群はさらに東に広がると考えられる。6番目のグループはL9グリットの中央南寄りとL10グリットの中央北寄りに土坑が纏まっている。2号柵列を含み、南北に長く広がり、土坑が密集した一群。7番目のグループはK9グリットの東寄り、L9グリットの西寄りに土坑が纏まっている。北西隅に1号柵列がある。墓坑を含み土坑群は集中するが密度は低い。8番目のグループはL10グリットの北西寄りに土坑が纏まる。一部に墓域を形成、土坑群が方形に集中し群在するように見える。9番目のグループはK10グリットの南東隅と、L10グリットの南西隅に土坑が纏まっている。発掘区の南東方向に土坑群は広がって行く。方形に集中、群在している。ある時期に墓域を形成していたと考えられる。10番目のグループはK10グリットの中央北寄りに土坑が纏まっている。10軒の掘立柱建物が集中している。ある時期に墓域を形成していたと考えられる。11番目のグループはK10グリットの中央南寄りに土坑が纏まっている。3軒の掘立柱建物が北西隅に集中している。中央部に墓域が形成されていたと考えられる。12番目のグループはK11グリットの中央北寄りに土坑が纏まっている。2軒の掘立柱建物を含んでいる。ある時期に墓域を形成していたと考えられる。発掘区域外の南東方向に土坑群が広がると考えられる。13番目のグループはJ11グリットの南東隅とK11グリット区の南西隅に土坑が纏まっている。土坑の規模は全体に小さく、遺物の出土は少量である。14番目のグループはJ11グリットの中央部に土坑が纏まっている。土坑の規模は大小入り混じっており、遺物の出土は少量である。15番目のグループはJ12グリットの中央部に土坑が纏まっている。周辺の土坑分布の傾向から見ると、その集中の度合いは高い。未発掘区の南側に土坑の広がり予想される。

特に6番目、8番目、9番目、10番目、11番目、12番目の6つのグループに土坑が集中する傾向にある。いずれも方形状に集中しており、何等かの区画のようなものの存在が考えられる。

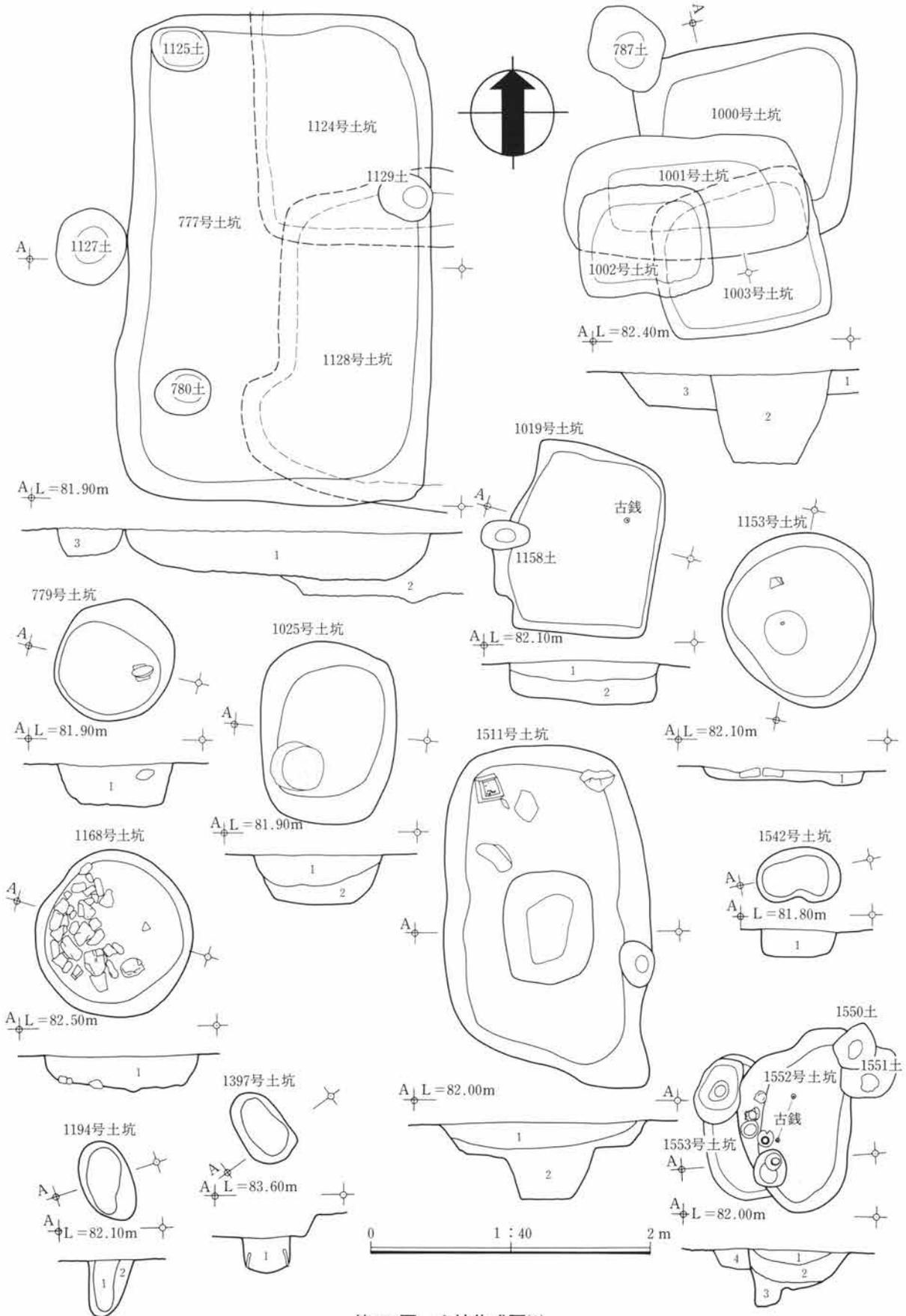
18軒の掘立柱建物は4つのグループに分布が広がる。1つは1号掘立柱建物は単独でM7グリットの中央部に位置する。2つ目は3号掘立柱建物単独でM8グリットの西隅中央部に位置する。規模も小さい建物である。3つ目はL9グリットの北東隅に位置する。18号掘立柱建物で規模の大きな建物である。東側の未発掘区に掘立柱建物群が存在する可能性も捨てきれない。18軒の掘立柱建物の内の15軒がK9グリット、K10グリット、K11グリットの縦列に集中している。東西40m、南北85mの範囲に集中しており、未発掘の北側、そして南側にこの掘立柱建物群は連続すると考えられる。これらの掘立柱建物群はさらに3つのグループに細分されるように見える。北からK9グリットの中央南寄り、K10グリット中央東寄りに、12号掘立柱建物、3号掘立柱建物、10号掘立柱建物、11号掘立柱建物、13号掘立柱建物の5棟が纏まっている。その南にはK10グリット中央寄りに、9号掘立柱建物、7号掘立柱建物、8号掘立柱建物、14号掘立柱建物、15号掘立柱建物、6号掘立柱建物、5号掘立柱建物、4号掘立柱建物の8棟が纏まっている。一番南のグループはK11グリット中央北寄りに、16号掘立柱建物、17号掘立柱建物の2棟が纏まっている。

また2条の柵列は相関関係は薄いと考えられる。

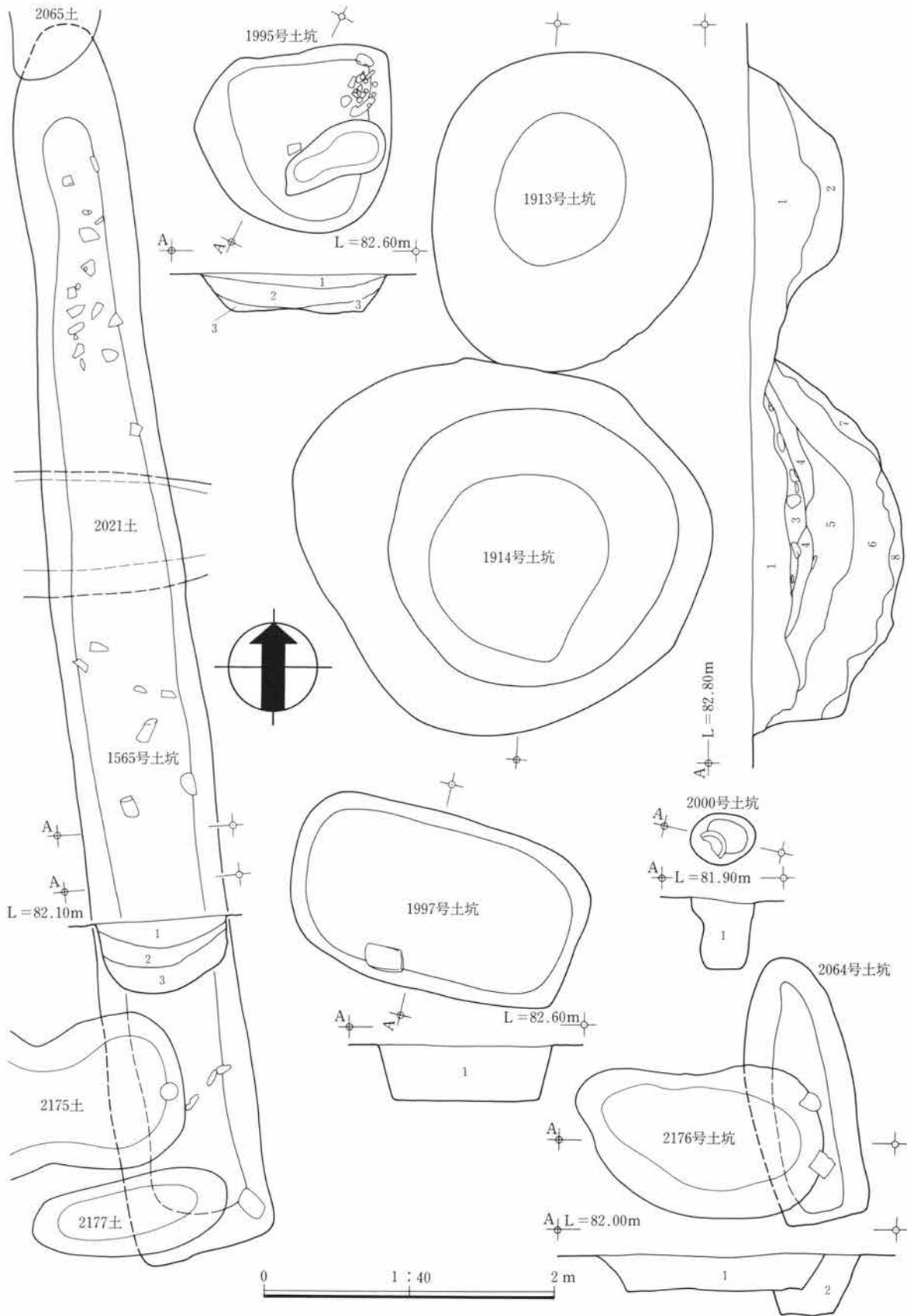
馬を埋葬した墓坑は方形区画の溝の東に分布している。埋没した方形区画の溝を利用したものである。人骨が出土した墓坑は方形区画の溝の南に分布している。墓坑は広域に分布している。



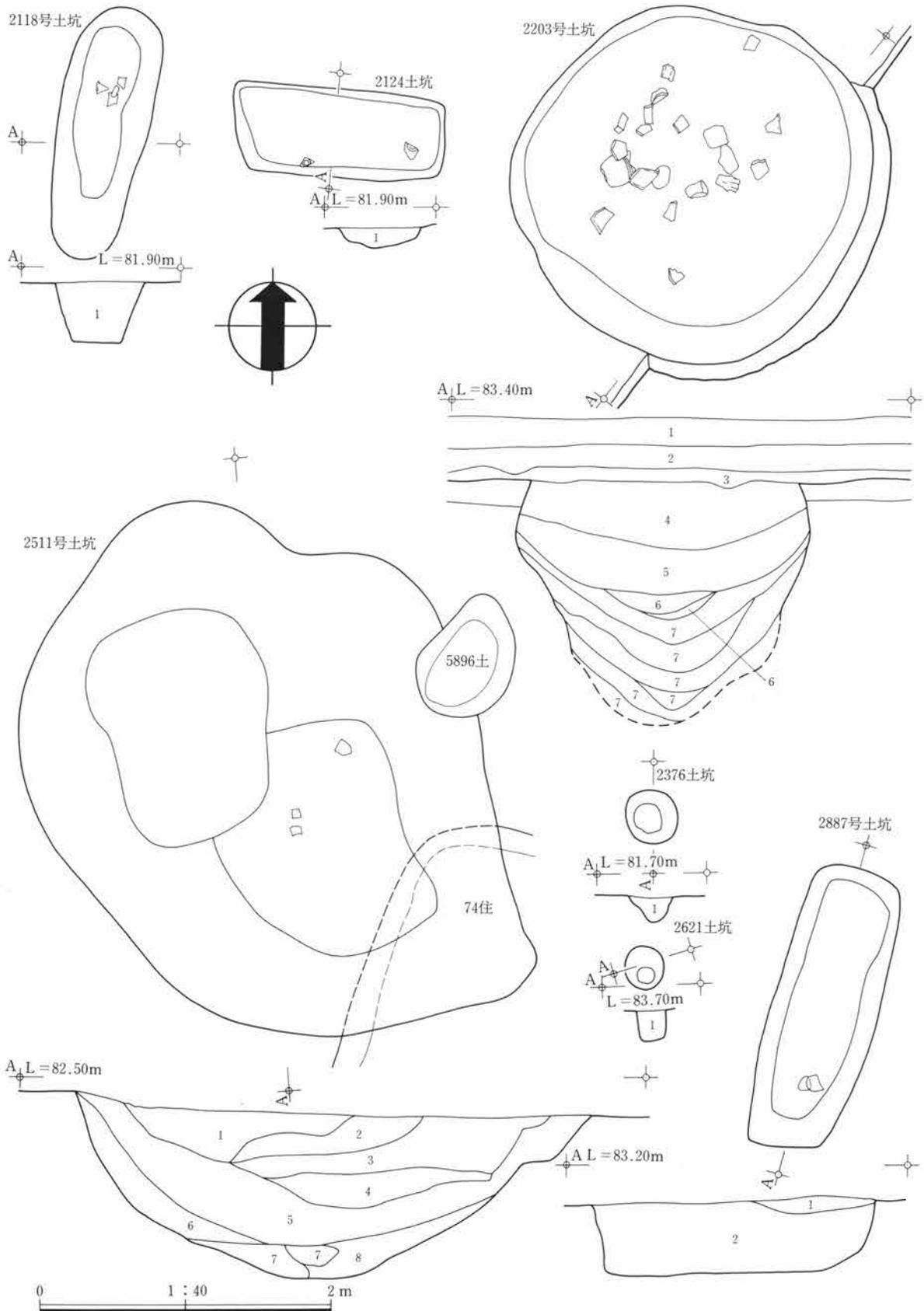
第202图 土坑集成图(1)



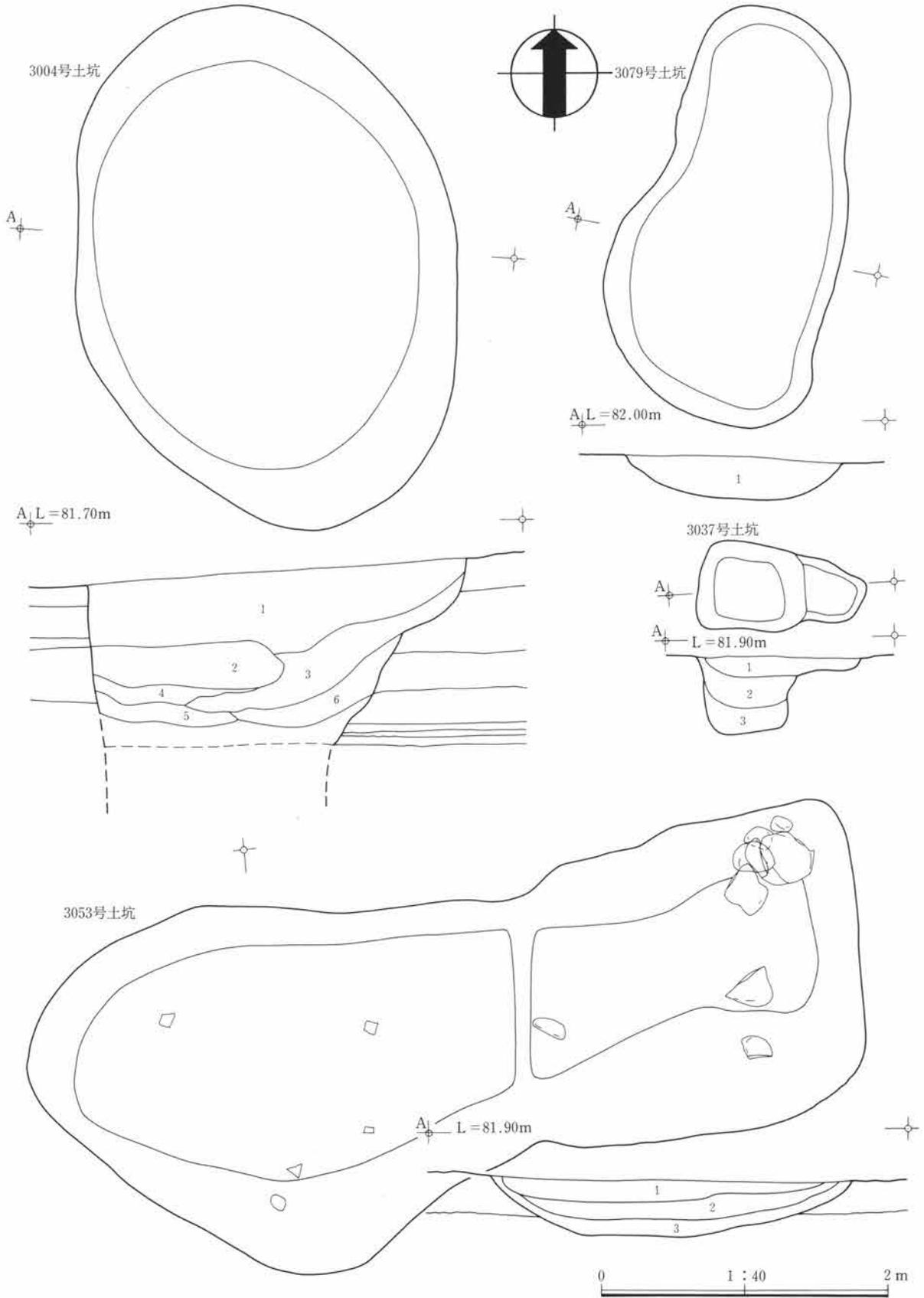
第203図 土坑集成図(2)



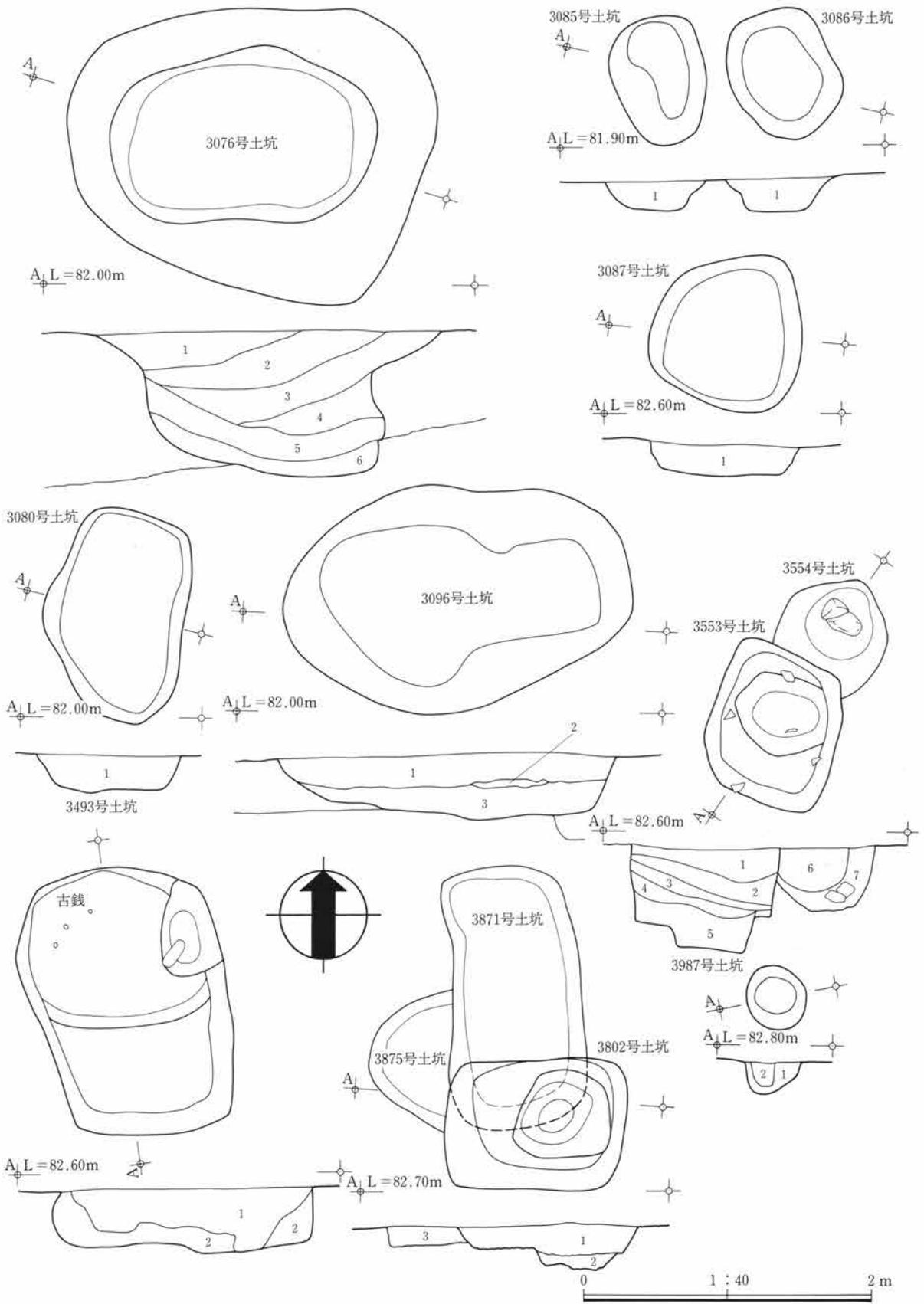
第204图 土坑集成图(3)



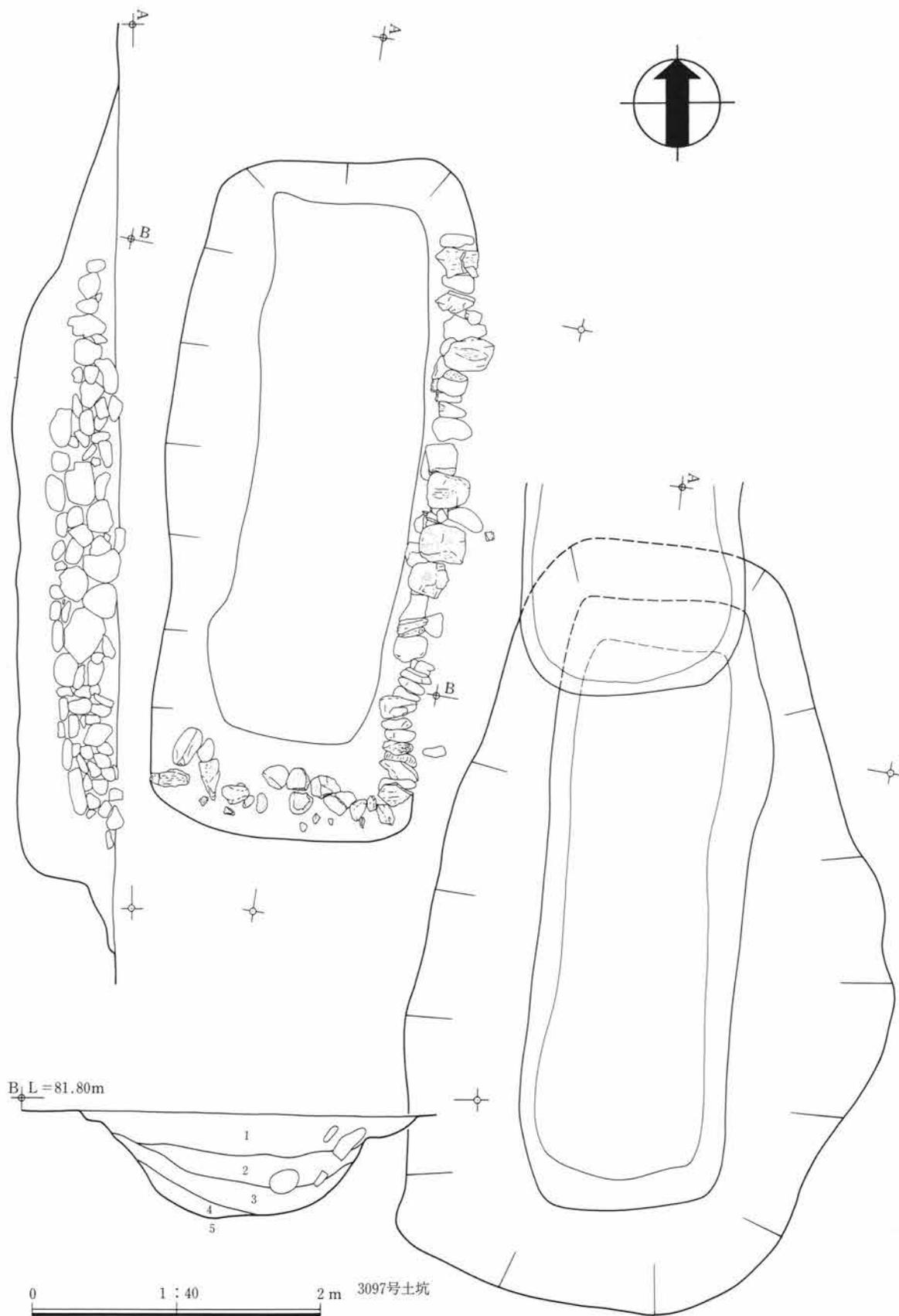
第205図 土坑集成図(4)



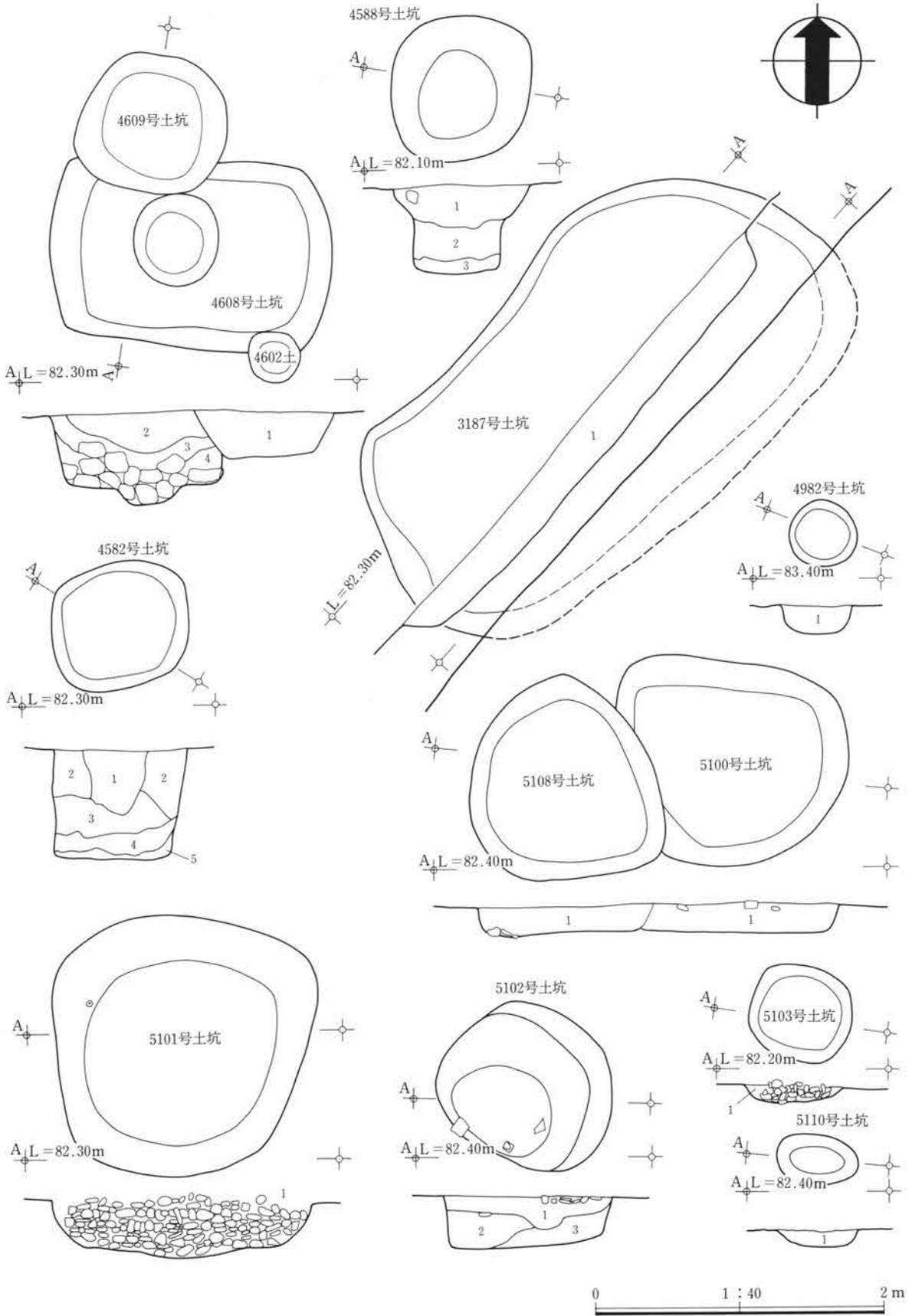
第206图 土坑集成图(5)



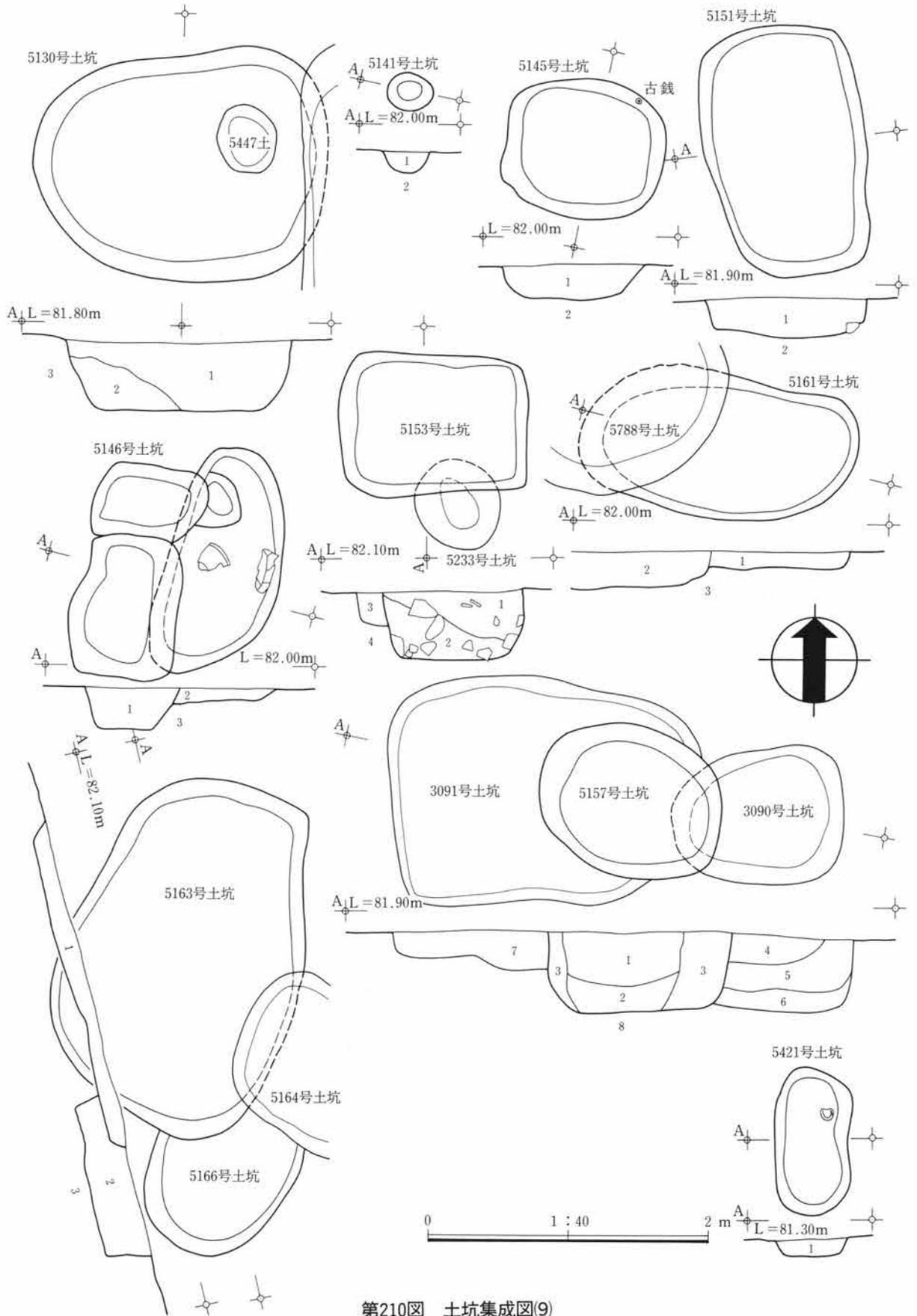
第207図 土坑集成図(6)



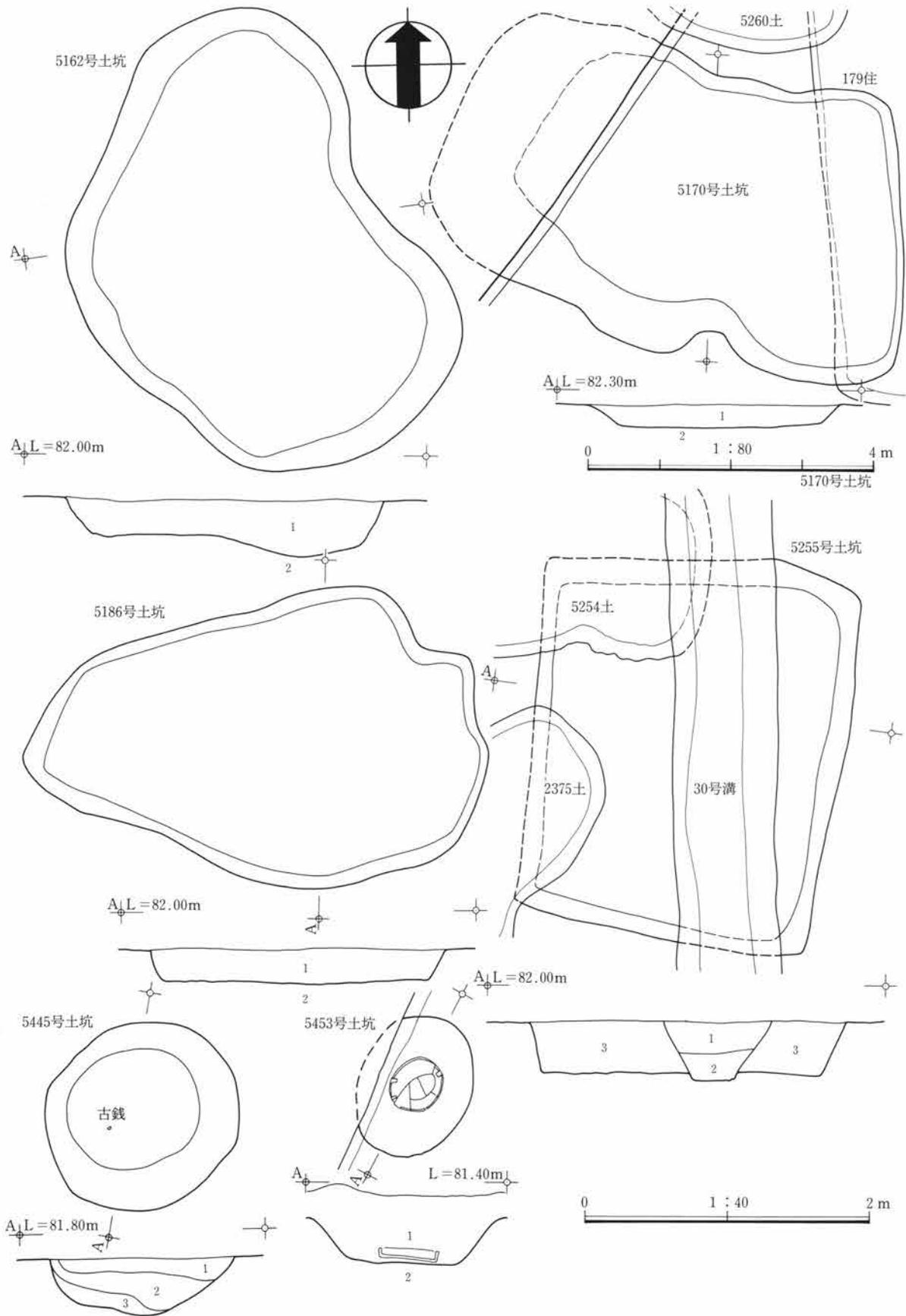
第208图 土坑集成图(7)



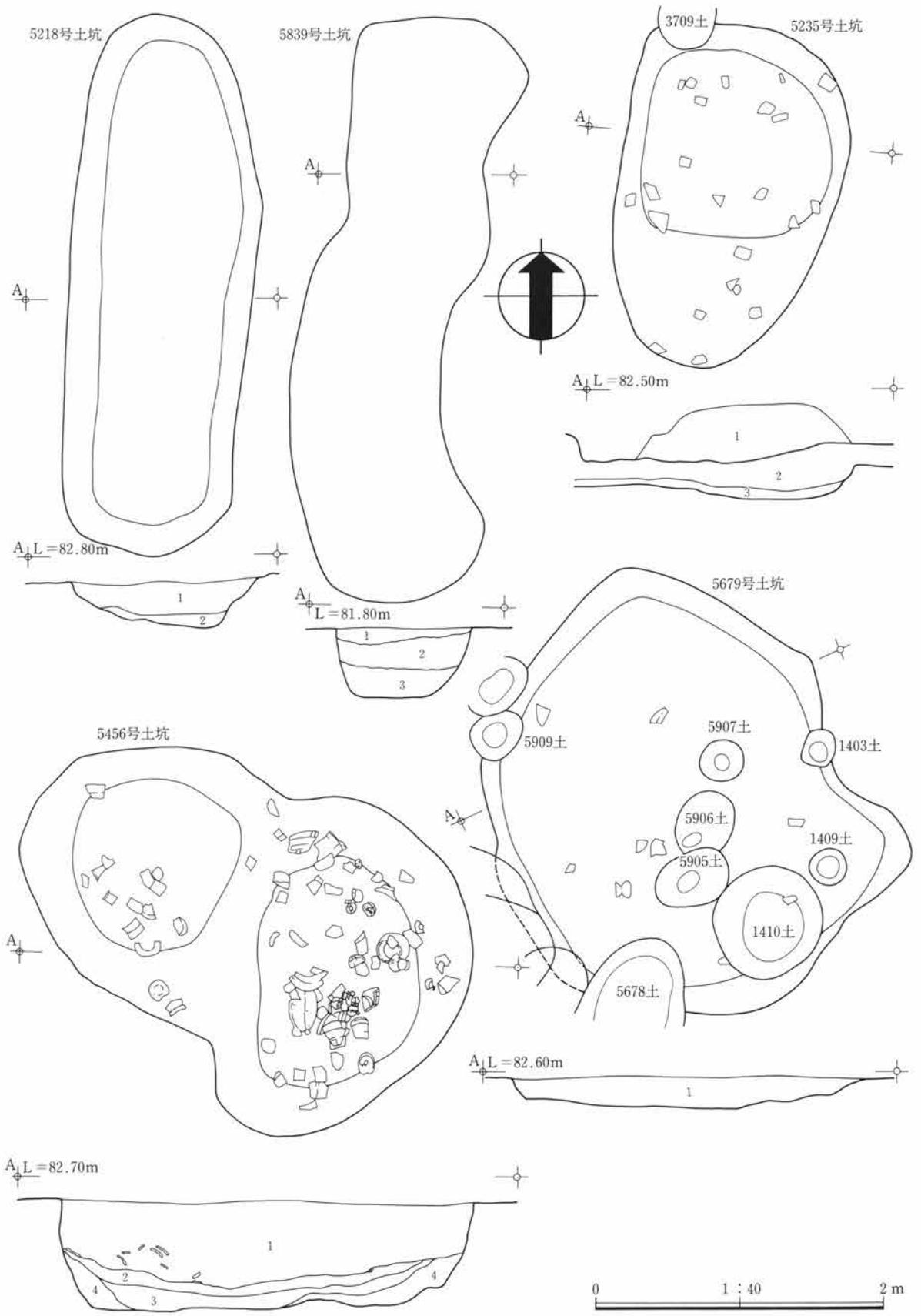
第209図 土坑集成図(8)



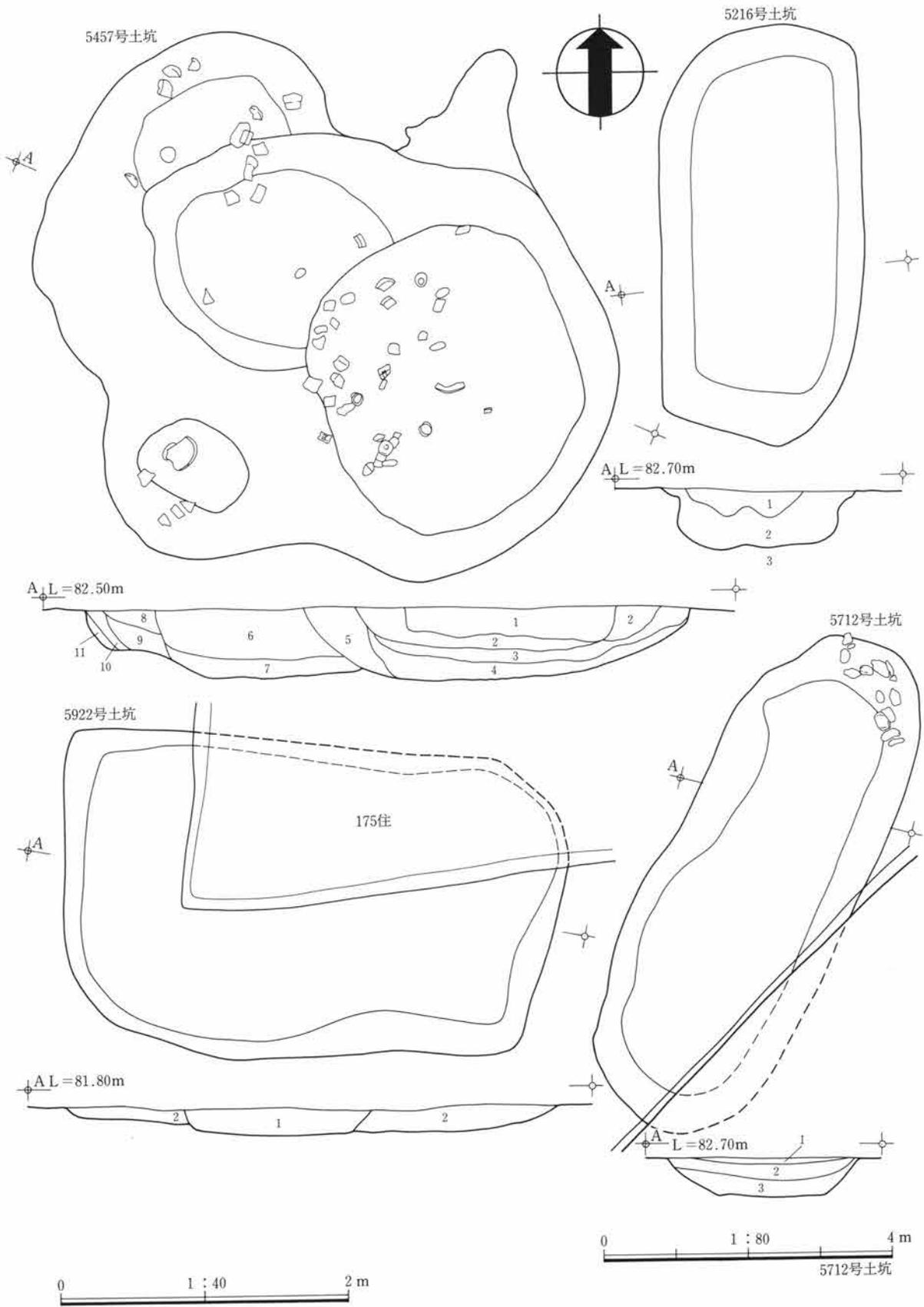
第210图 土坑集成图(9)



第211図 土坑集成図(10)



第212图 土坑集成图(11)



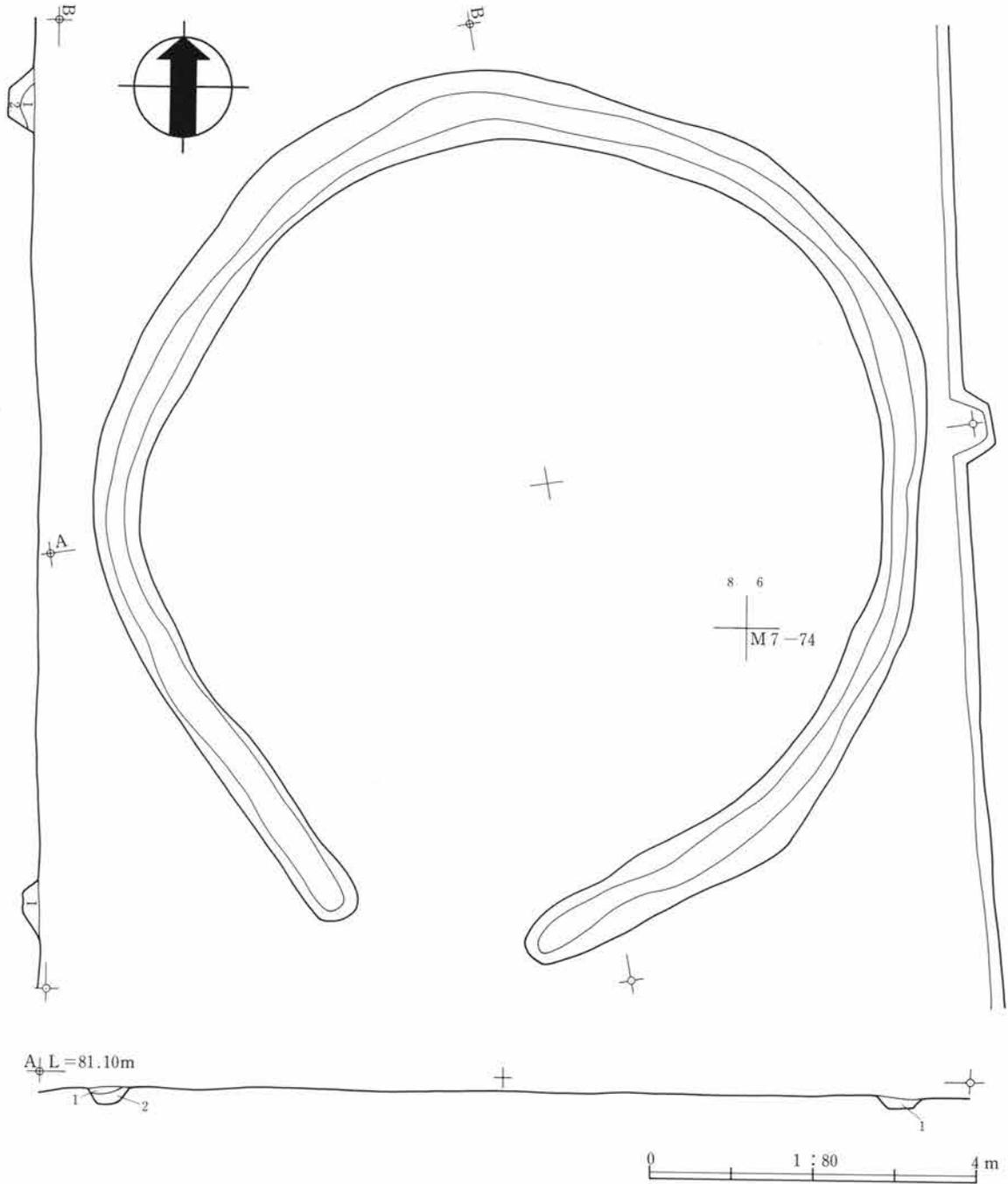
第213図 土坑集成図(12)

E 円型周溝

M7-74グリットに座標南から西へ7度の方向に開放した溝がめぐる。溝外側の径約10m、内側で約8.5mを測る。土層は古層で、古墳時代と考えてもよい。

- 1号墓 (挿図第214図)
土層表記 (基準高さ 81.10m)
1. 黒褐色 (2.5Y3/42)
2. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)

しまりがなく、砂を多く含む。
きめが細かく、ややしまりがある。



第214図 円型周溝墓

2 遺物

A 土器

遺構の調査所見と土器の遺構出土状態、および土器の特性の相互の検証が同レベルで成されない限り、考古学的調査と言えない。当然、特徴的な土器や復元可能な土器を出土遺構に安易に結び付けて考察することは論外(害)である。本遺跡の調査は出土の土器は全点、記録したものの今回の報告書に掲載することはできなかった。ここでは遺構出土の遺物を平均的に掲載することに努めた。もちろん一遺構から数個の収納箱分の土器の出土があったが普遍化できる遺物に限った。本遺跡から出土の土器のすべての器種を第215図に纏めた。これらの器種別の出土個数の総体を表示できないが、本報告書に掲載土器にその傾向を見たい。

報告書掲載土器総数883個体内、土師器440個体、須恵器423個体、灰釉陶器20個体である。

土師器は先ず、長甕系がある(A11~A15)。125個体で土器総数の14%を占める。A11(代表例365)とA15(代表例617)は粗製であり近似する。A13(代表例228)とA14(代表例170)は「く」の字に外反する口縁部の角度が近似する。A12(代表例657)はいわゆる「コ」の字口縁甕である。「く」の字口縁部甕系は73%、「コ」の字口縁部甕系は27%である。

丸甕系(A1~A3、A7、A10)が59個体あり、土器総数の7%を占める。A10(代表例5259土坑)は底部を持つ丸甕で大中小にさらに分けられ、27個体登載している。A2(代表例343)は器高15cm程度の台付甕で、26個体である。ほかに小型丸底甕A1(代表例172)や、大型の鉢状甕A3(代表例634)、内斜短頸小型甕A7(代表例20)がある。

椀類(A17、A18)としたものは153個体で、土器総数の17%を占める。杯類としたものより、底部は丸く、口縁部と体部との境目が不明瞭のものである。A17(代表例267)は器壁は厚く鈍く、篋ミガキを施す。A18(代表例622)は大型(代表例229)、中型(代表例5456土坑)、小型(代表例747)に分けられ、中型品は81個体と占める個数は多い。

杯類(A19、A20)は95個体を数え、土器総数の11%を占める。A19(代表例427)は丸底で底部から外反する口縁部をもつもの、A20(代表例707)は平底気味で直立する短い口縁部をもつものに分けられる。A19はさらに丸い底部と直立し口唇部が内湾する口縁部(代表例251)、浅く丸い底部と短く外反する口縁部(代表例370)、浅く丸い底部と大きく外湾する口縁部(代表例175)などに器形が微妙に細分される。A20はさらに平底の底部に内湾する口縁部(代表例142)、平坦の底部に外反する口縁部がさらに段をもち外反するもの(代表例682)、やや丸い底部に直線的に外反する口縁部をもつもの(代表例137)に区分される。

鉢(A4~A6)は3種類ある。A4(代表例235)は丸底で口縁部が短く外反するもの。A5(代表例572)は平らの底部に直線的に開く口縁部をもつもの。A6(代表例293)は底部が丸く、大きく開く口縁部となるもので、甕としての用途をもち、単孔を穿つ。この他の鉢にも甕としての用途をもつものがある。A5の形で底部に8孔を穿つもの(代表例372)である。

他の器種としてはA8(代表例246)の高杯の杯と考えられるものがある。この時期には土師器の高杯は少ないと考えられ、台付甕の台部かもしれない。A9(代表例295)は埴製の鞆口と考えた。口の部分は強く焼けている。基は一部欠損するが磨滅ではない。A16(代表例5456土坑)は盤皿で、須恵器の盤皿を模したものである。

須恵器は先ず甕(B10)がある。35個体で土器総数の4%を占める。口縁部が短く外反し肩の張った球胴

を呈するものを指す。口縁端部の造りは変化に富んでいる。口径が25cmもある大型のB10（代表例710）や口径が12cmの小型のもの（代表例5456土坑）まで大きさも一様にならない。

広口甕は尖り気味の底部に短い口縁部をもつB7（代表例609）がある。

羽釜と呼ばれる甕B2（代表例269）が1点とそれに組み合う甕B1（代表例216）3点がある。

長胴壺としたものはB11～B13まで3種類がありいずれも焼成甘く柔らかで、底部は大きく平底である。B11（代表例629）は口縁部の長い、肩の緩やかな壺である。B12（代表例709）は口縁部の長いB11に近似した肩の緩やかな壺であるが胴部は寸詰りである。B13（代表例334）は口縁部の外反する肩の張った胴の短い壺である。

短頸球形壺はB6（代表例711）の口縁部の短くて直立気味のもの、B9（代表例408）の体部上半から内傾するものに別れる。B8（代表例90）は葉壺と呼ばれる短頸壺に組み合わせられる蓋である。

長頸壺はB28（代表例653）で完存するものは無い。台部の有る（代表例203）、無いがある。

有蓋高杯のB22（代表例3）は高杯部分で受け口形状に特徴がある。無蓋高杯のB21（代表例77）は受口形状は素口縁で終わるが、盤皿の特徴から同時期の器種である。この盤皿グループに属さない小型の無蓋高杯のB20（代表例309）がある。脚部の特徴はこの時期の長頸壺の口縁部と同巧のもの。

盤皿の受口形状で蓋B26（代表例306）と考えるもの、身B27（代表例5456土坑）と考えるもの、または有蓋高杯とその蓋になるものかこの遺跡の土器だけでは判然としなかった。盤皿グループに分類した土器は26個体を数え、土器総数の3%を占める。

有蓋杯は69個体を数え、土器総数の8%を占める。蓋は2種類に区分されB18（代表例302）はつまみが宝珠状で蓋内側にカエリのあるもので66%を占める。B19（代表例566）はつまみが輪台状で蓋内側にカエリの無いもので34%を占める。

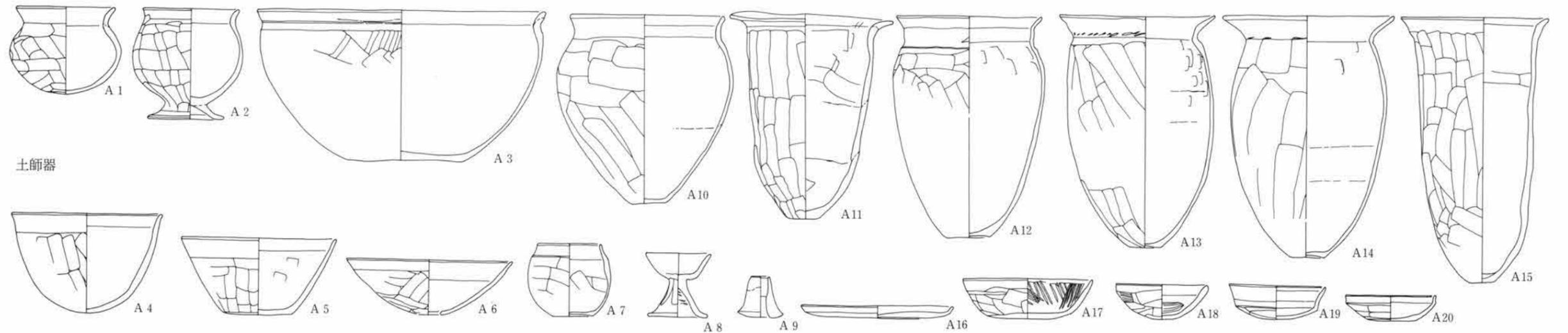
杯は高台の有るものが100個体を数え土器総数の11%を占める。B15（代表例566）のように底部切り離し技法の「糸切り」のものがその内の90%、B17（代表例568）のように底部切り離し技法の「篋切り・篋ケズリ」のものが10%と少ない。

無高台杯は143個体を数え土器総数の16%を占める。B14（代表例662）のように底部切り離し技法の「糸切り」のものがその内の68%、底部切り離し技法の「篋ケズリ」（代表例714）のものは28%を占める。その他に「篋切り後、周縁篋ケズリ」のものB16（代表例714）は4%と少ない。

その他の器種には鉢で植木鉢状のものB7（代表例609）、鉄鉢（代表例510）、大型の杯状の鉢B32（代表例718）、そして播鉢B30（代表例5456土坑）の4種類がある。

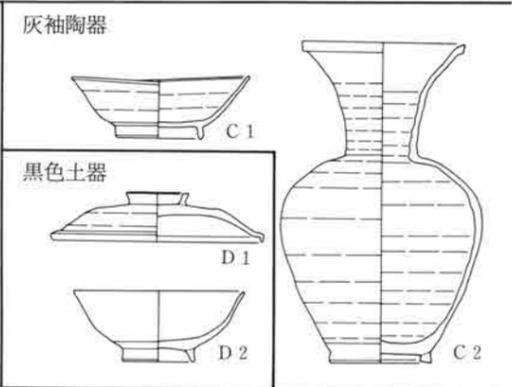
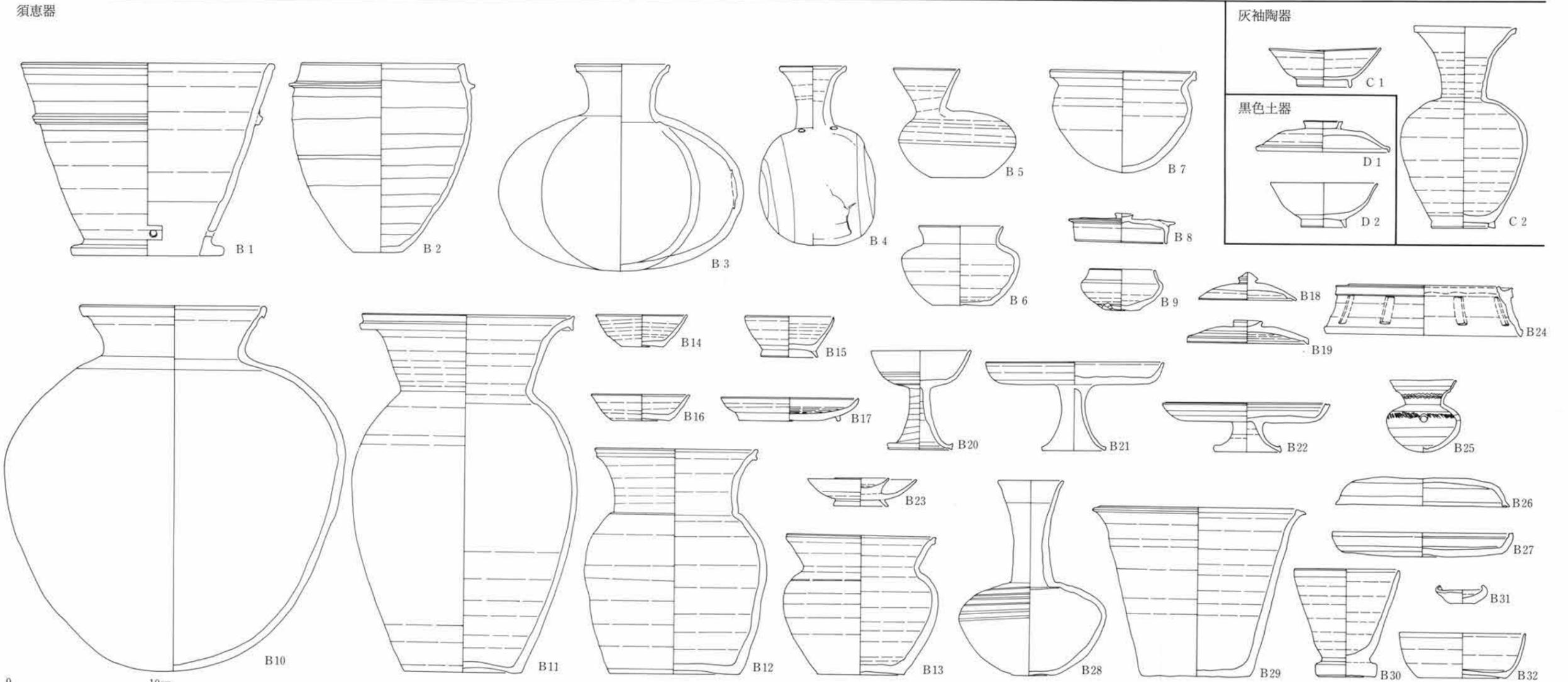
瓶類の横瓶は俵形の形態のB3（代表例5456土坑）、提瓶はボタン状浮文のB4（代表例14）、平瓶は口縁部素縁の形態のB5（代表例4）である。他にB23（代表例24溝）の托状土器、B24（代表例597）の円面硯、B31（代表例244）の耳皿がある。なお、B25の瓦泉は2区で出土している。

灰釉陶器は20点出土している。C1（代表例692）などの杯、皿、段皿は14点と多い。C2（代表例574）などは長頸瓶で多種少量。黒色土器は赤色硬質の須恵器の内面を燻したものでD1（代表例708）の輪台つまみ杯蓋、D1（代表例751）の椀形の土器である。



土師器

須恵器

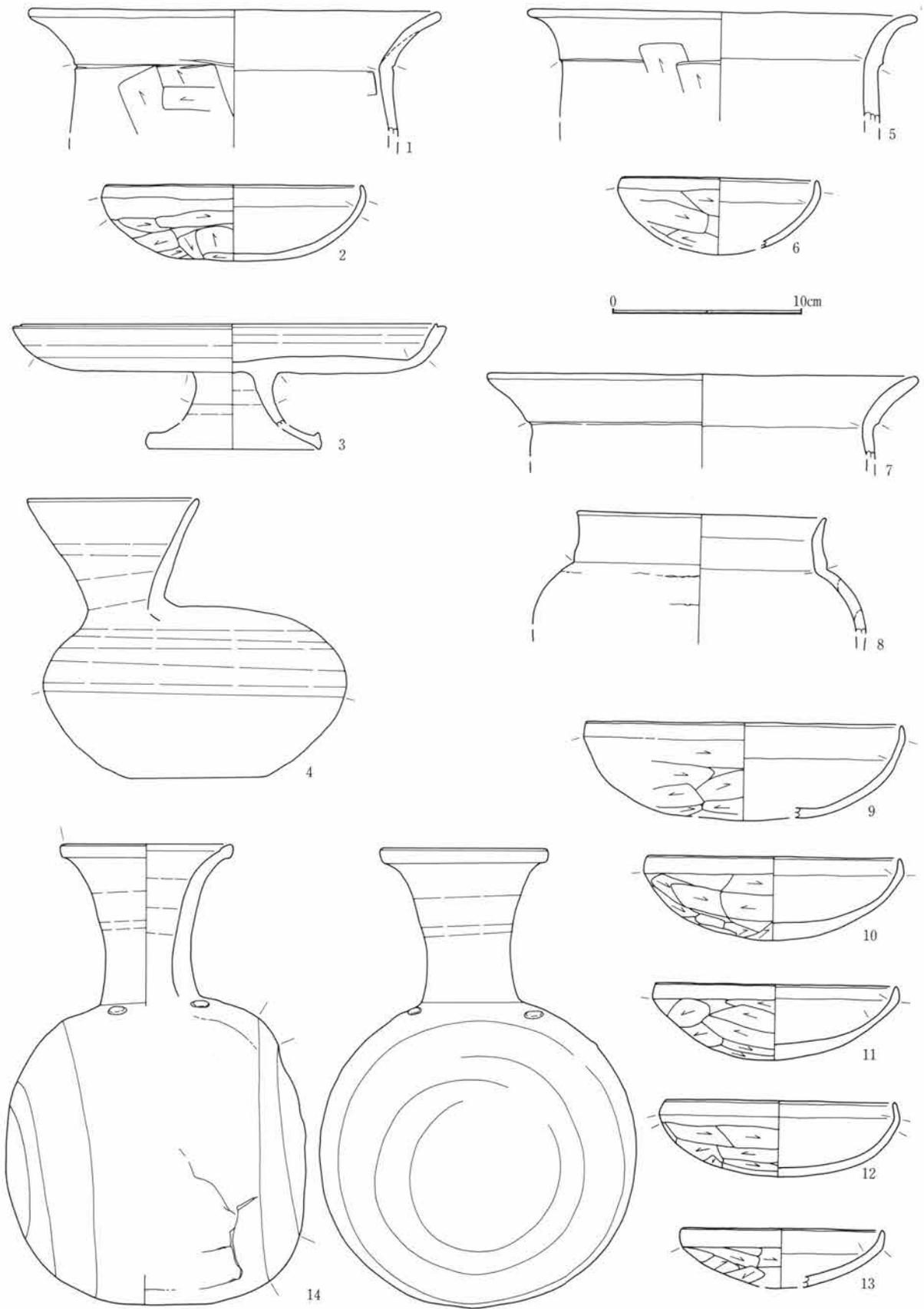


灰袖陶器

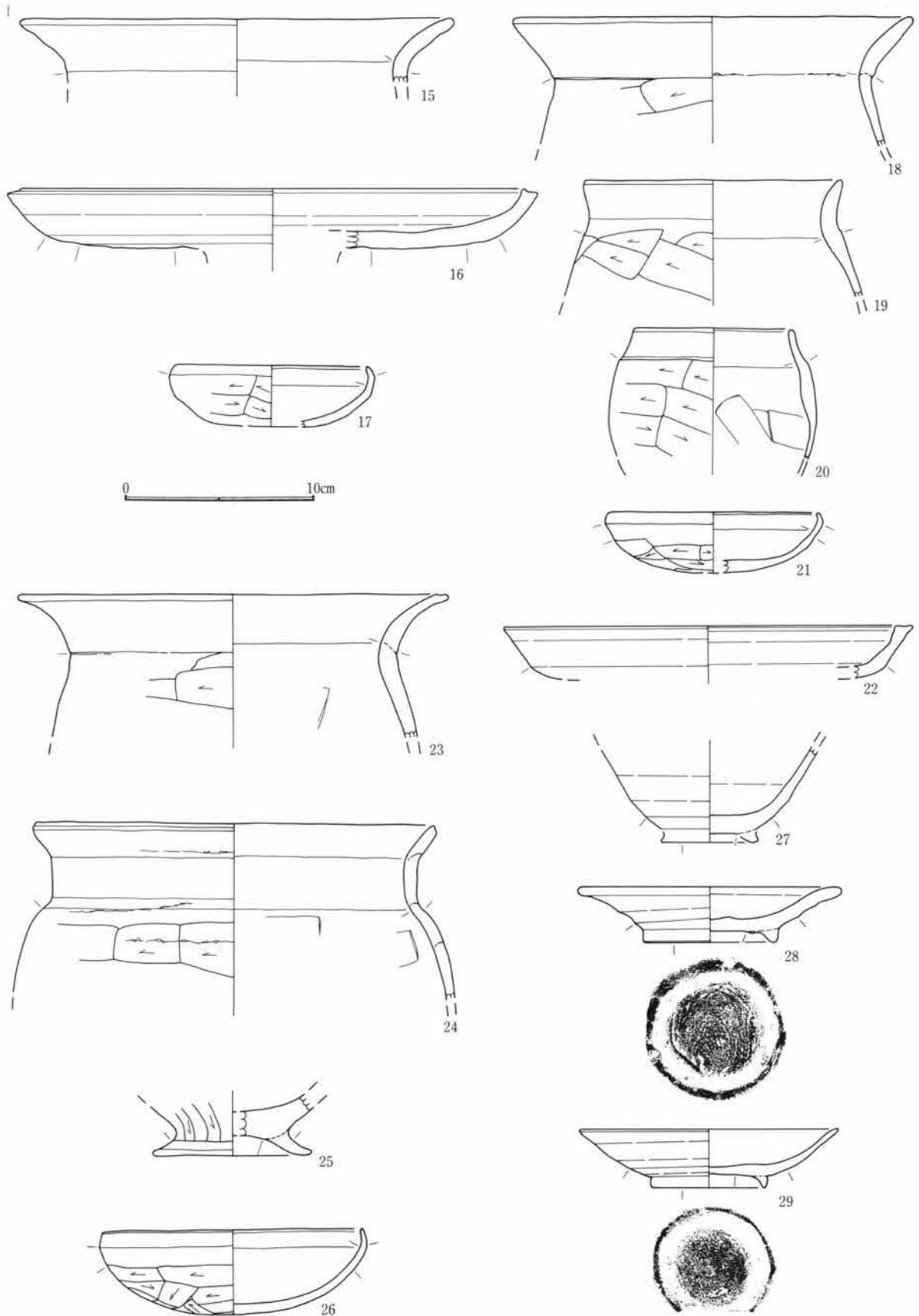
黒色土器

第215図 出土土器器種一覽表

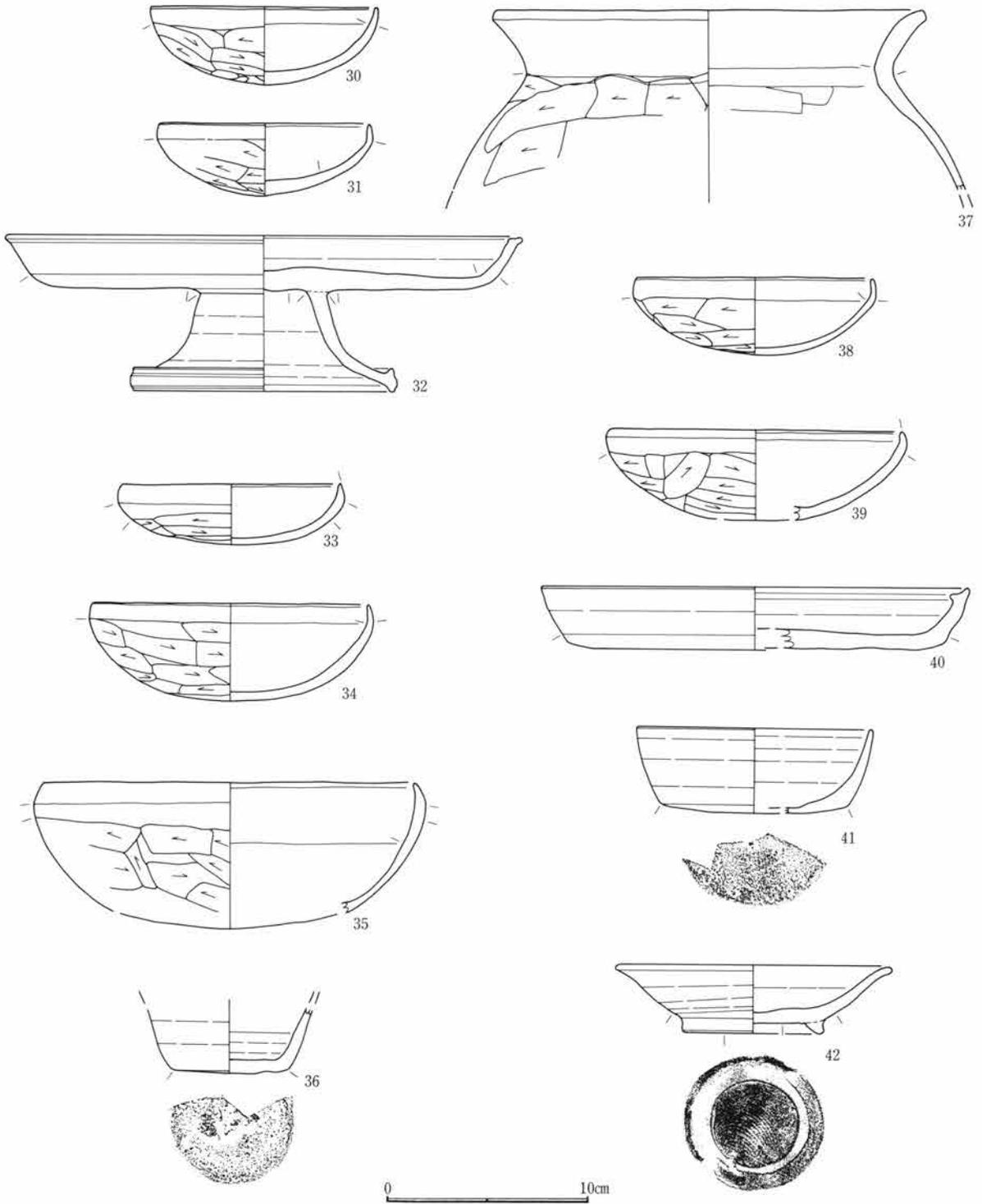
第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物



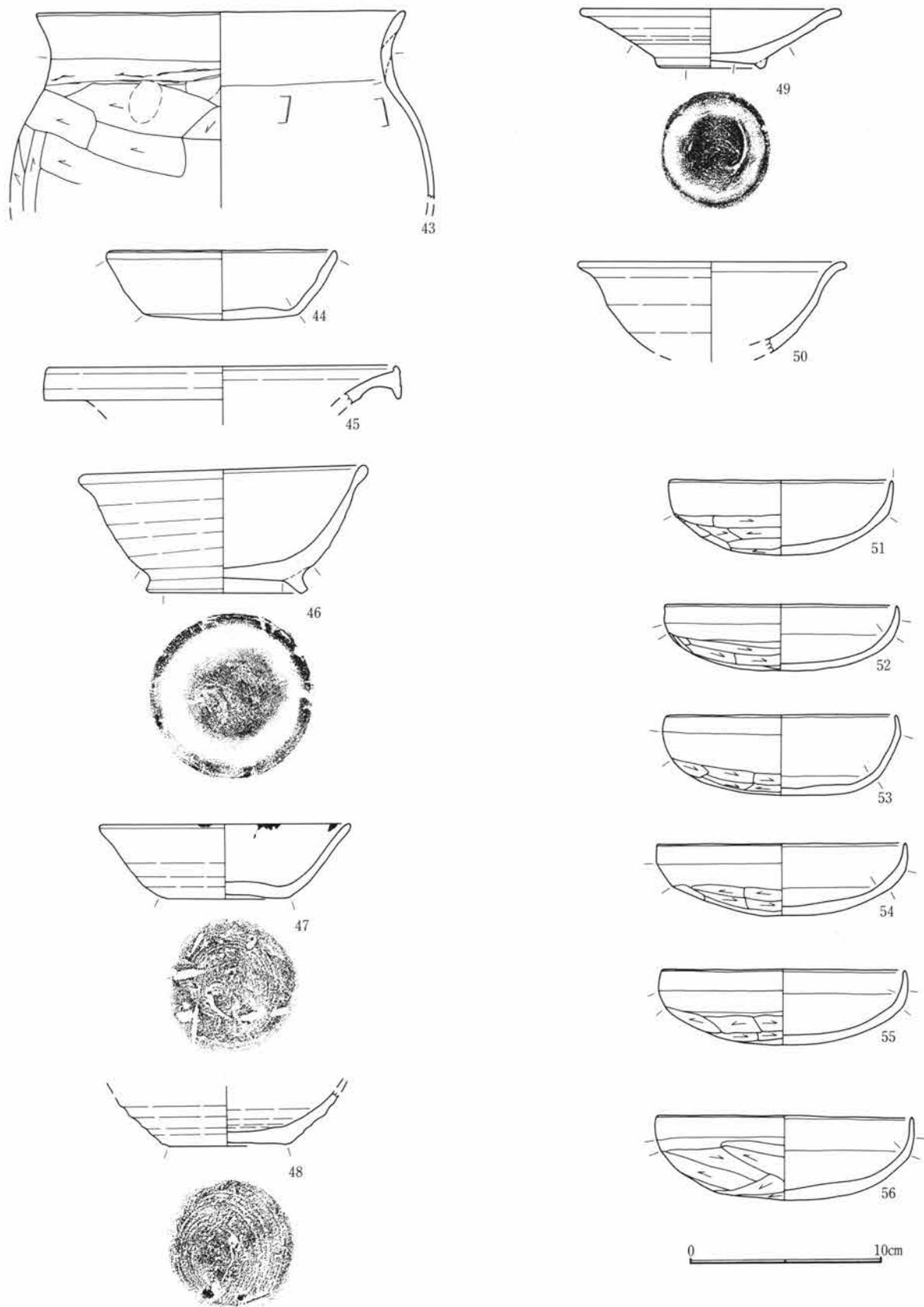
第216図 住居址出土遺物 土器(1)



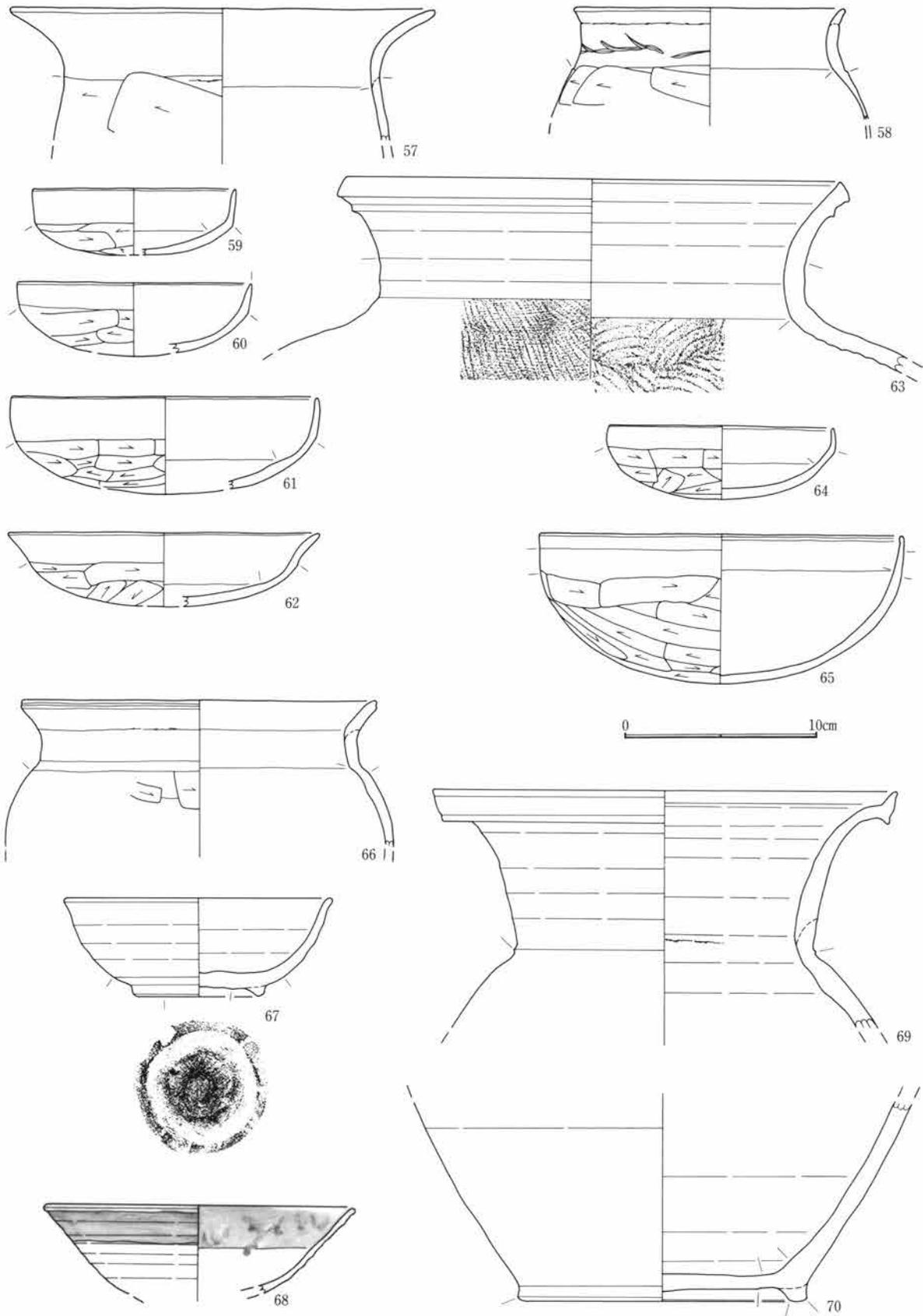
第217図 住居址出土遺物 土器(2)



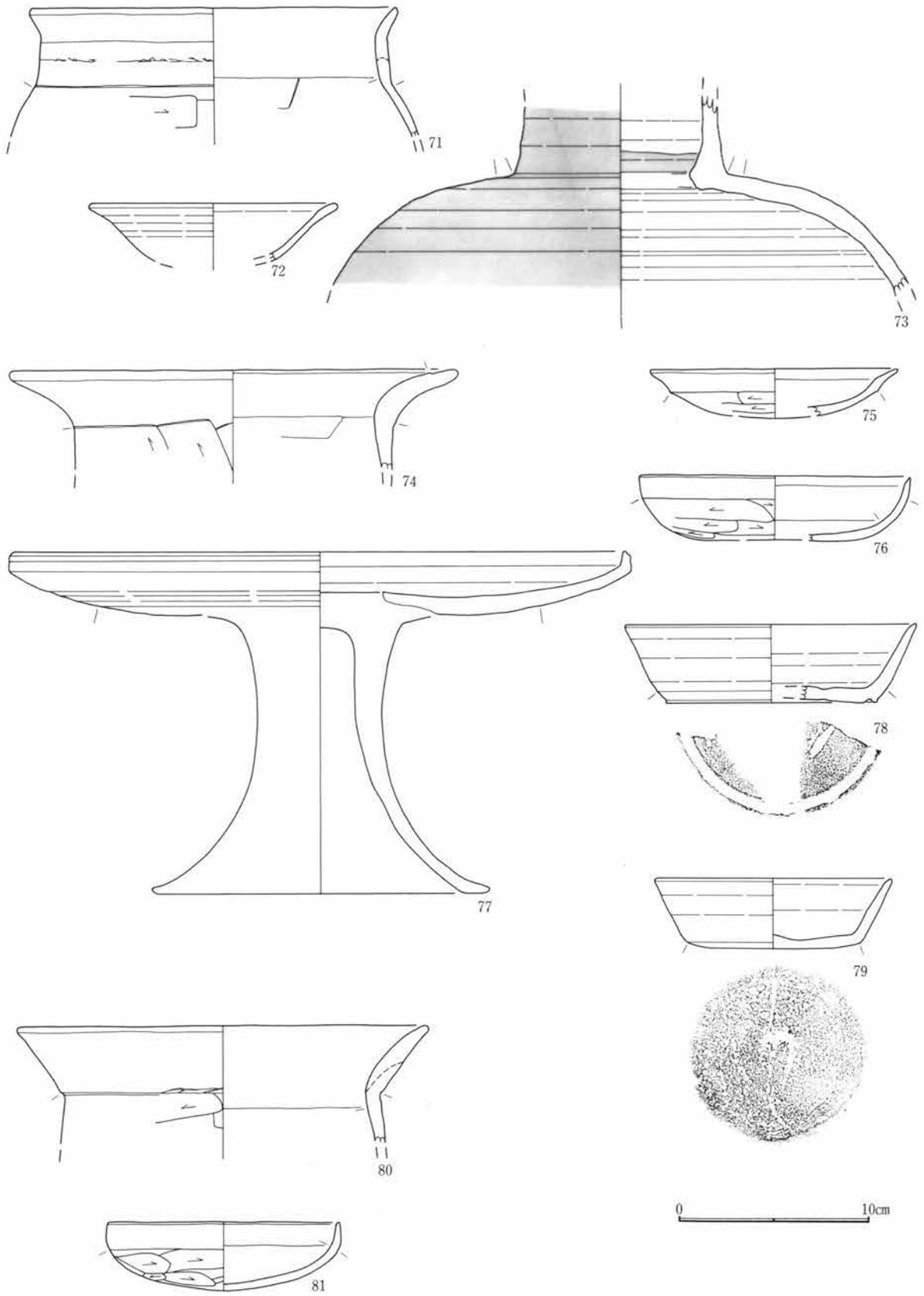
第218図 住居址出土遺物 土器(3)



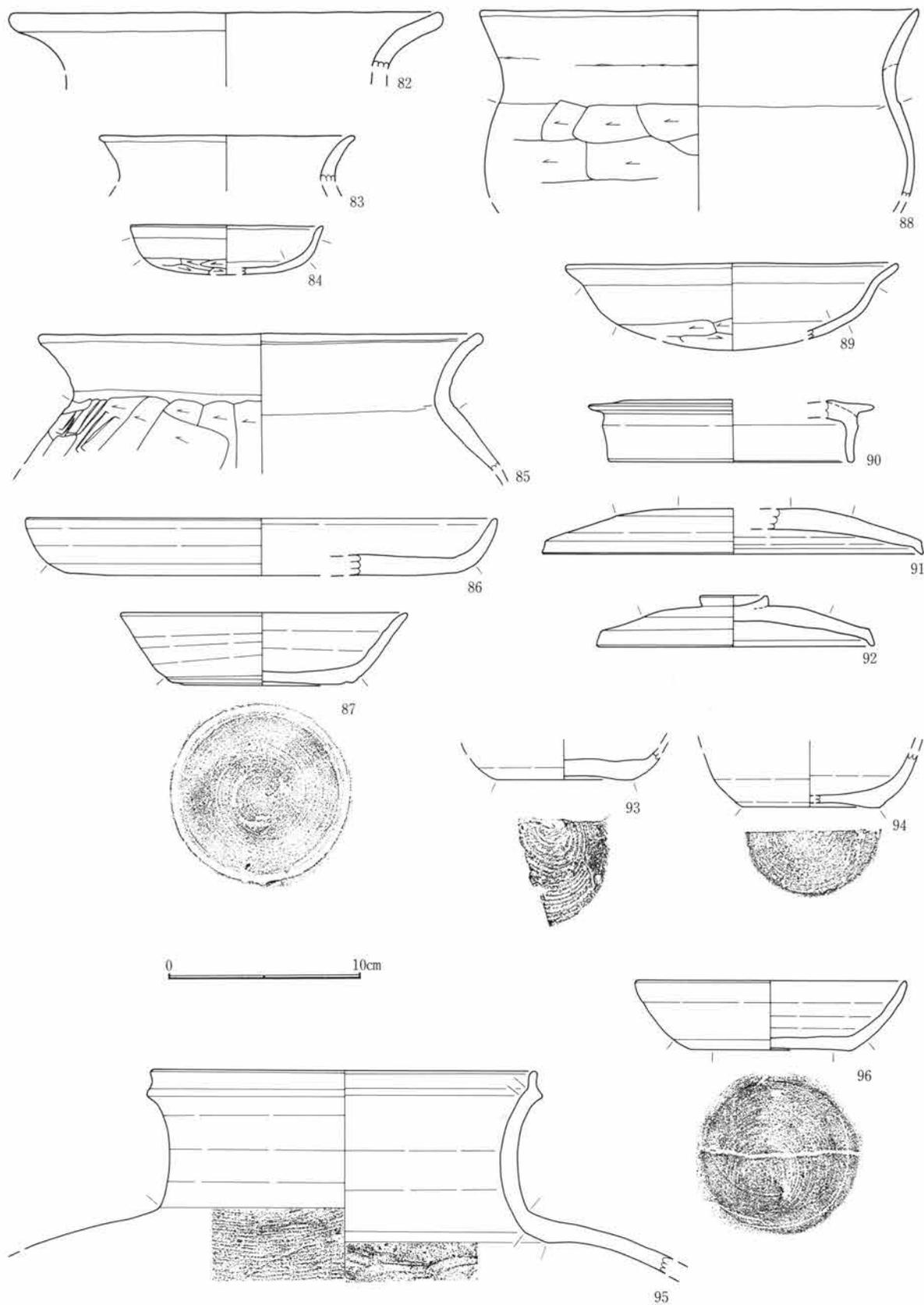
第219図 住居址出土遺物 土器(4)



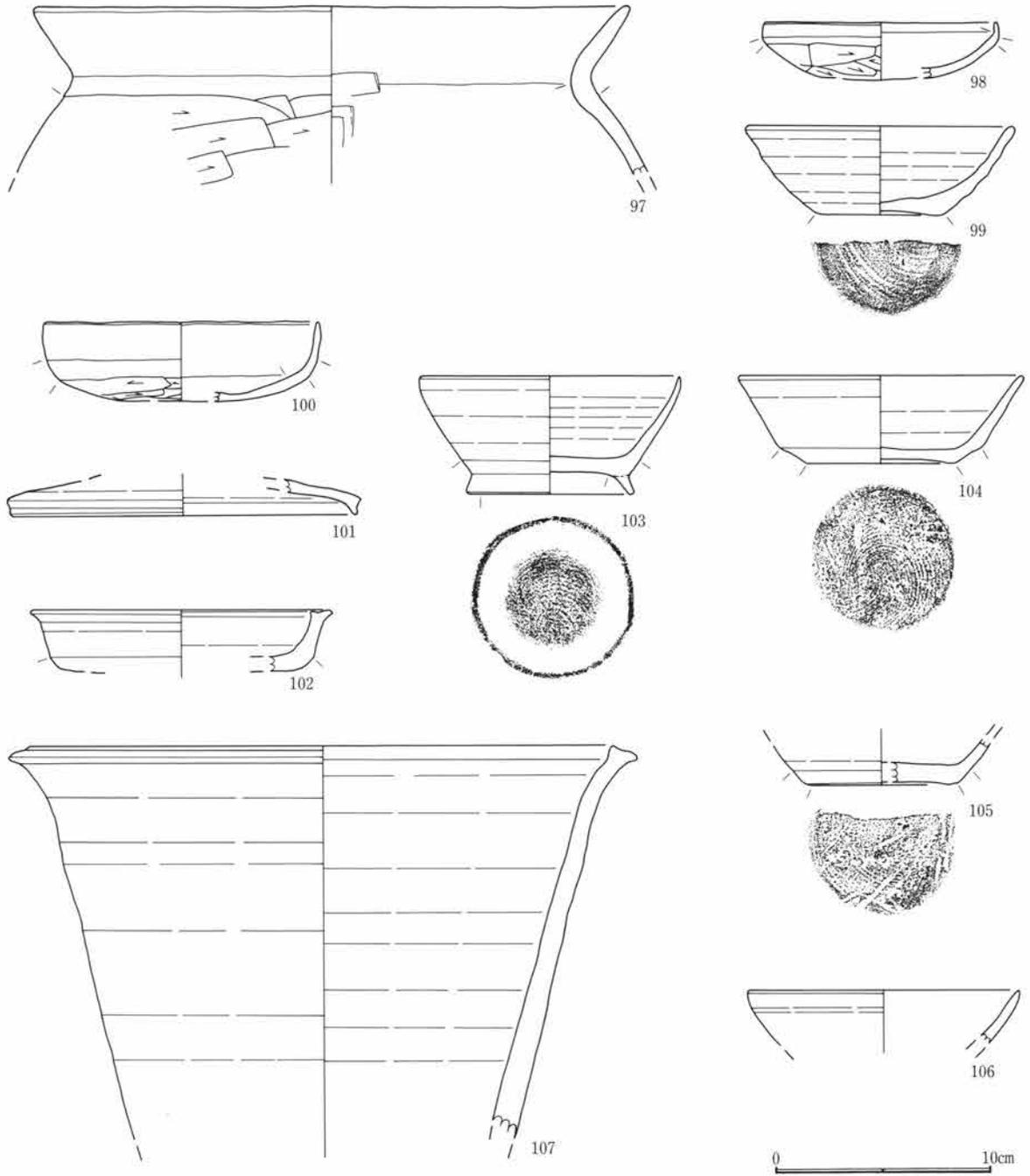
第220図 住居址出土遺物 土器(5)



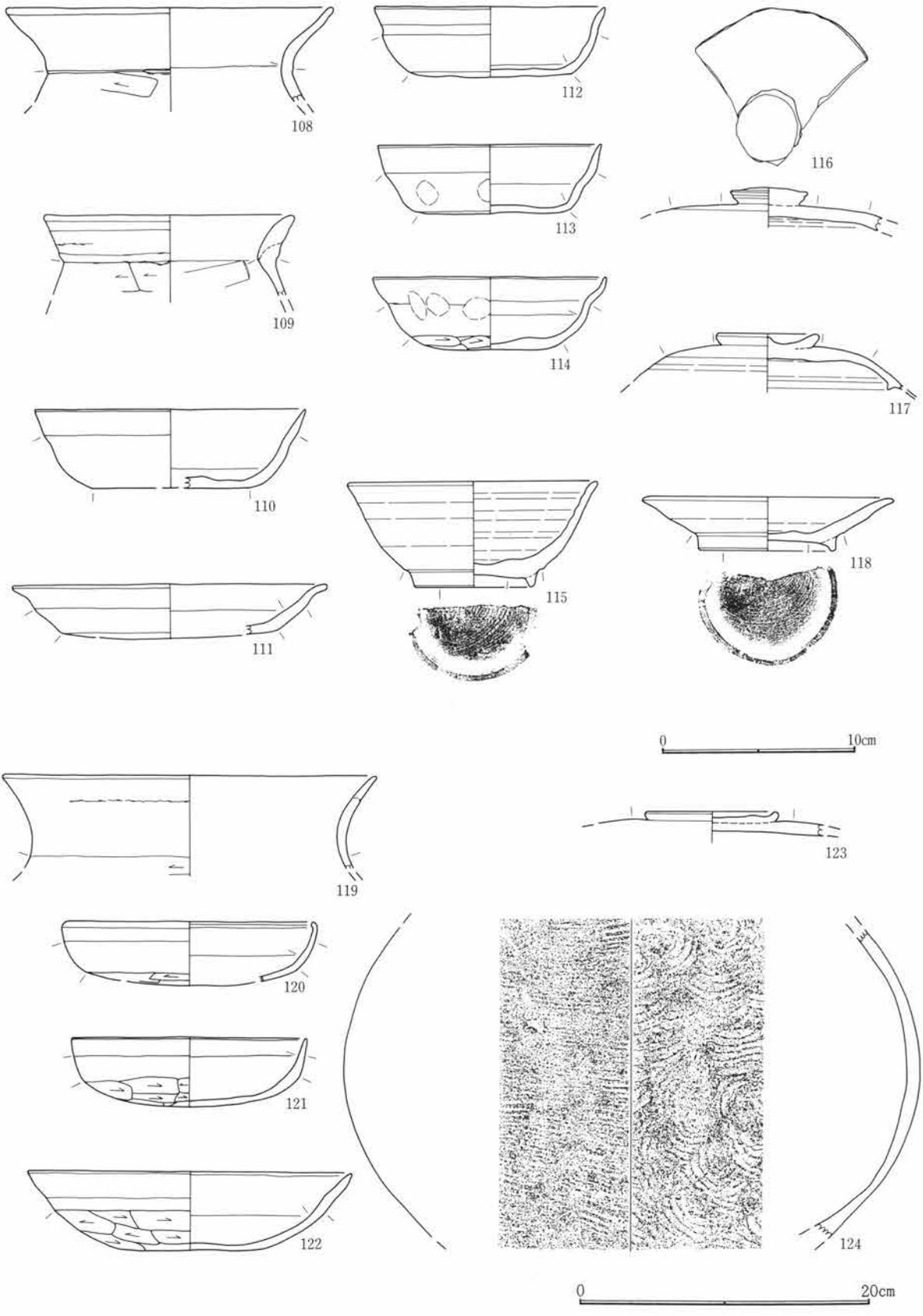
第221図 住居址出土遺物 土器(6)



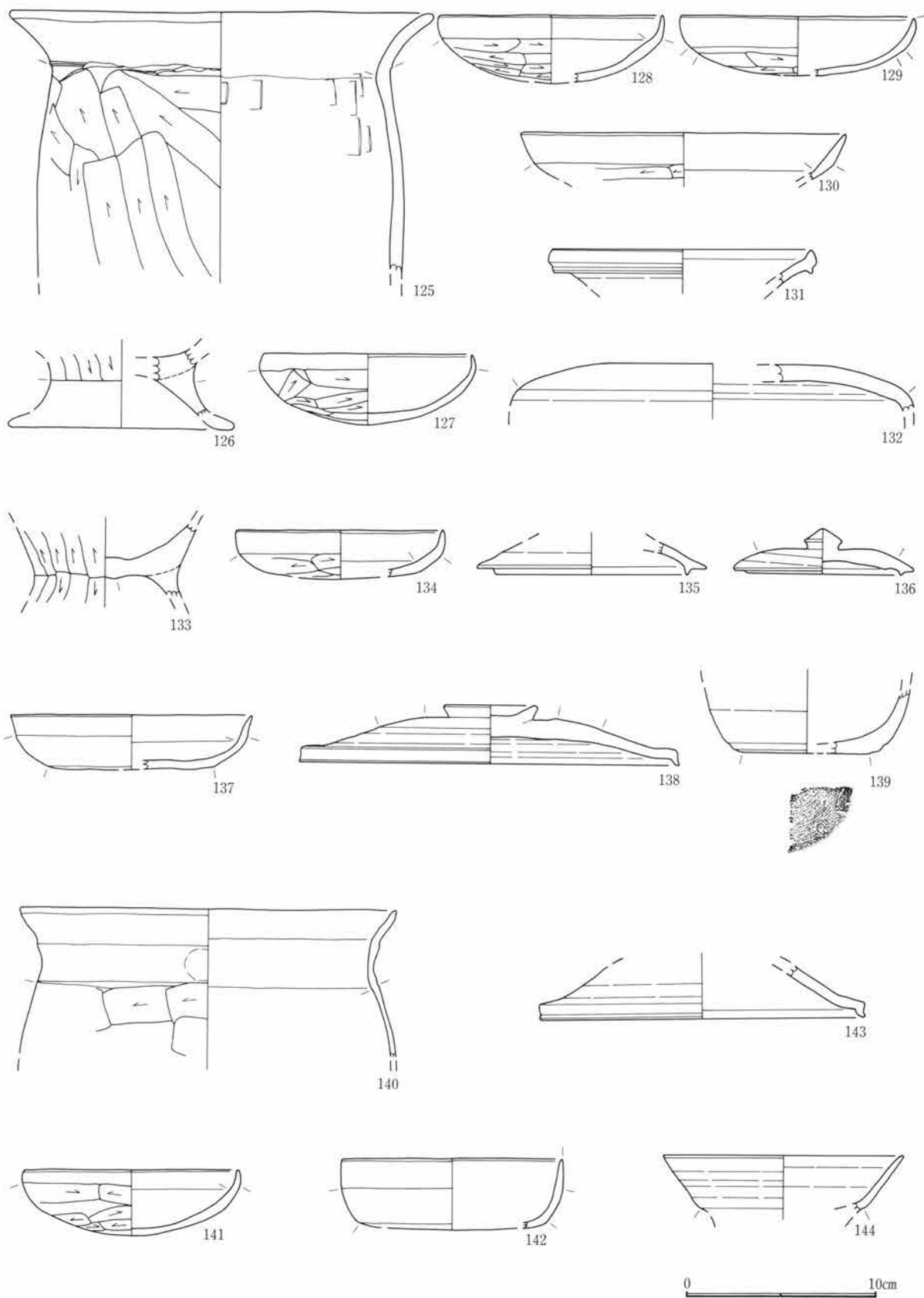
第222図 住居址出土遺物 土器(7)



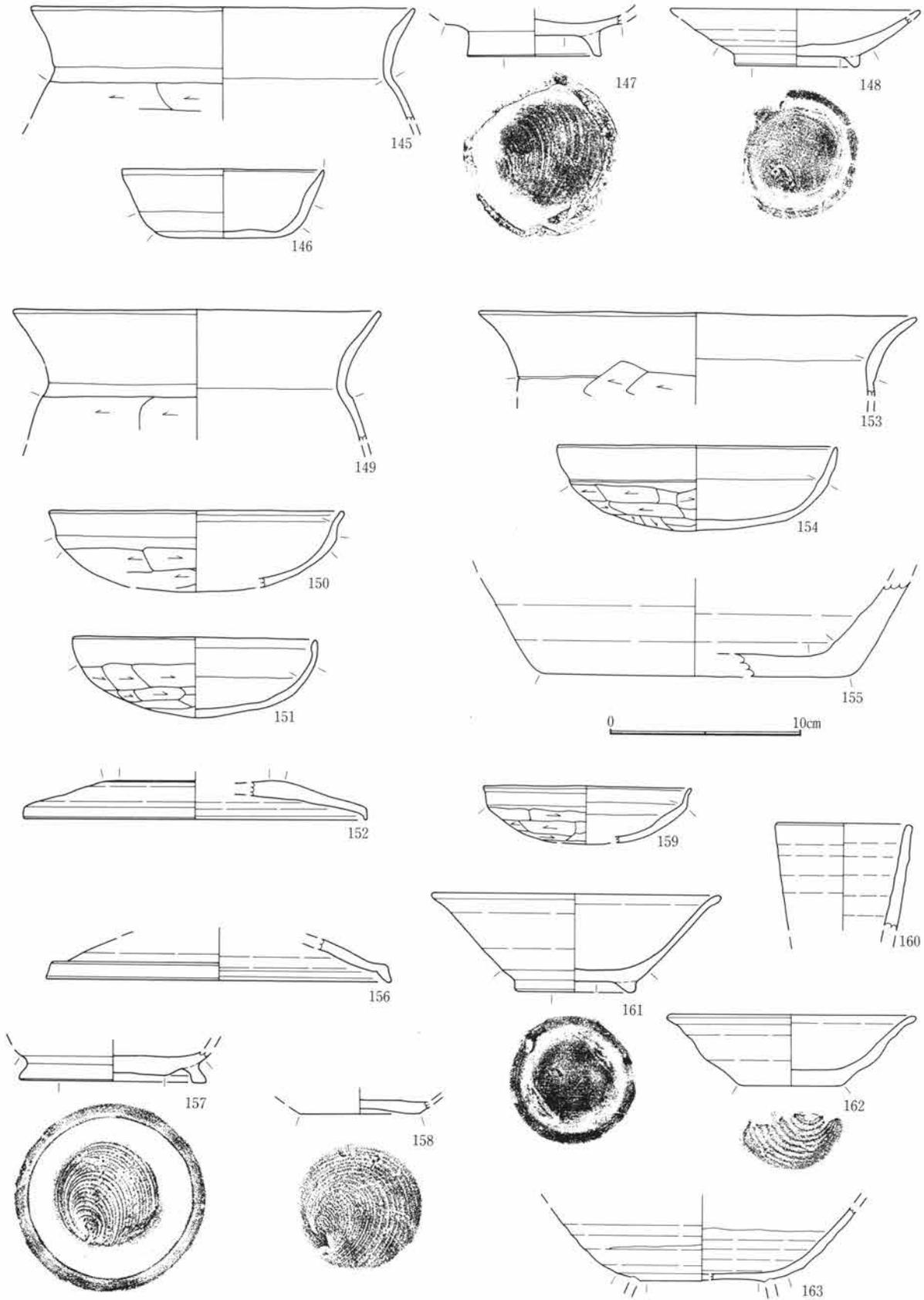
第223図 住居址出土遺物 土器(8)



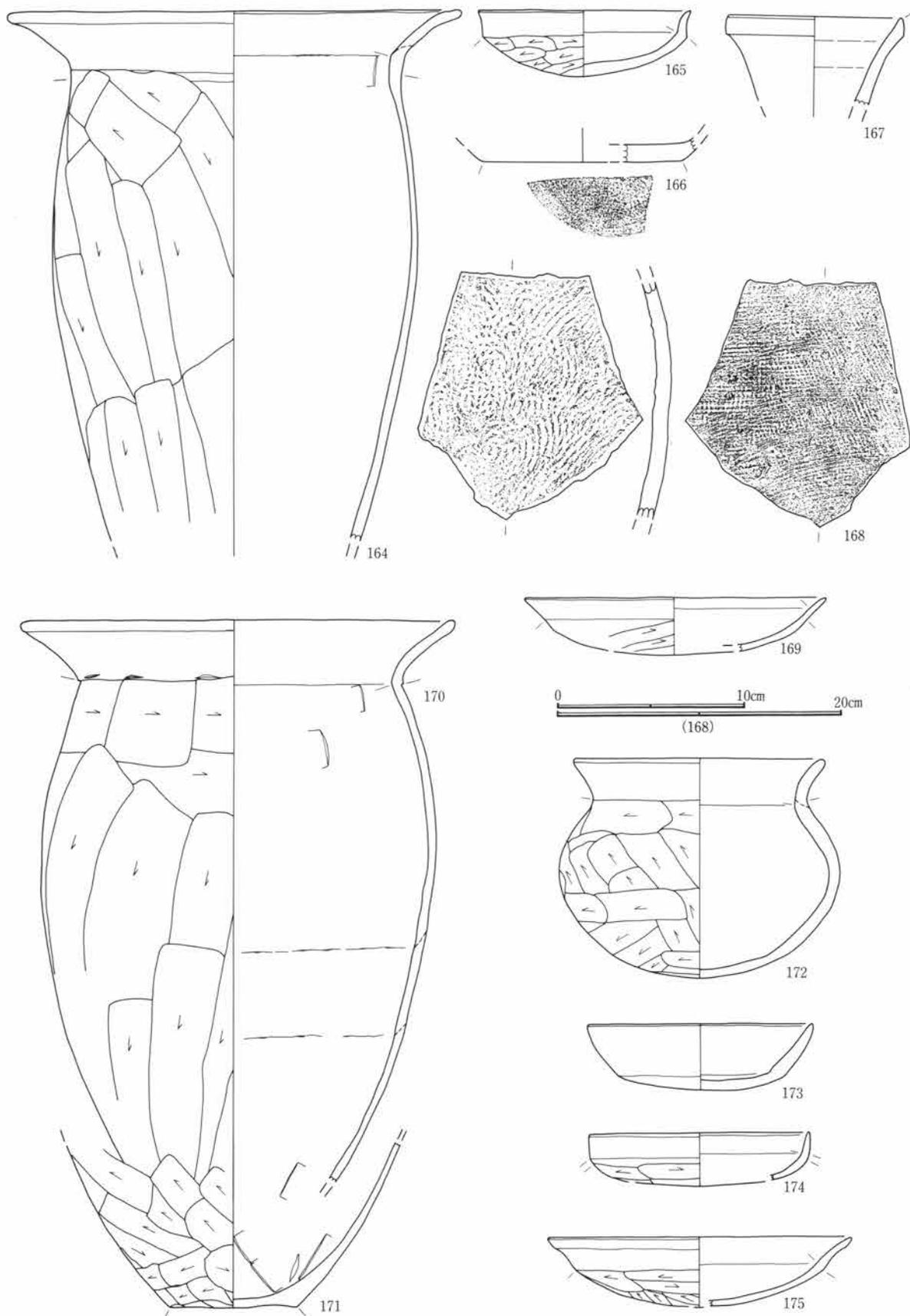
第224図 住居址出土遺物 土器(9)



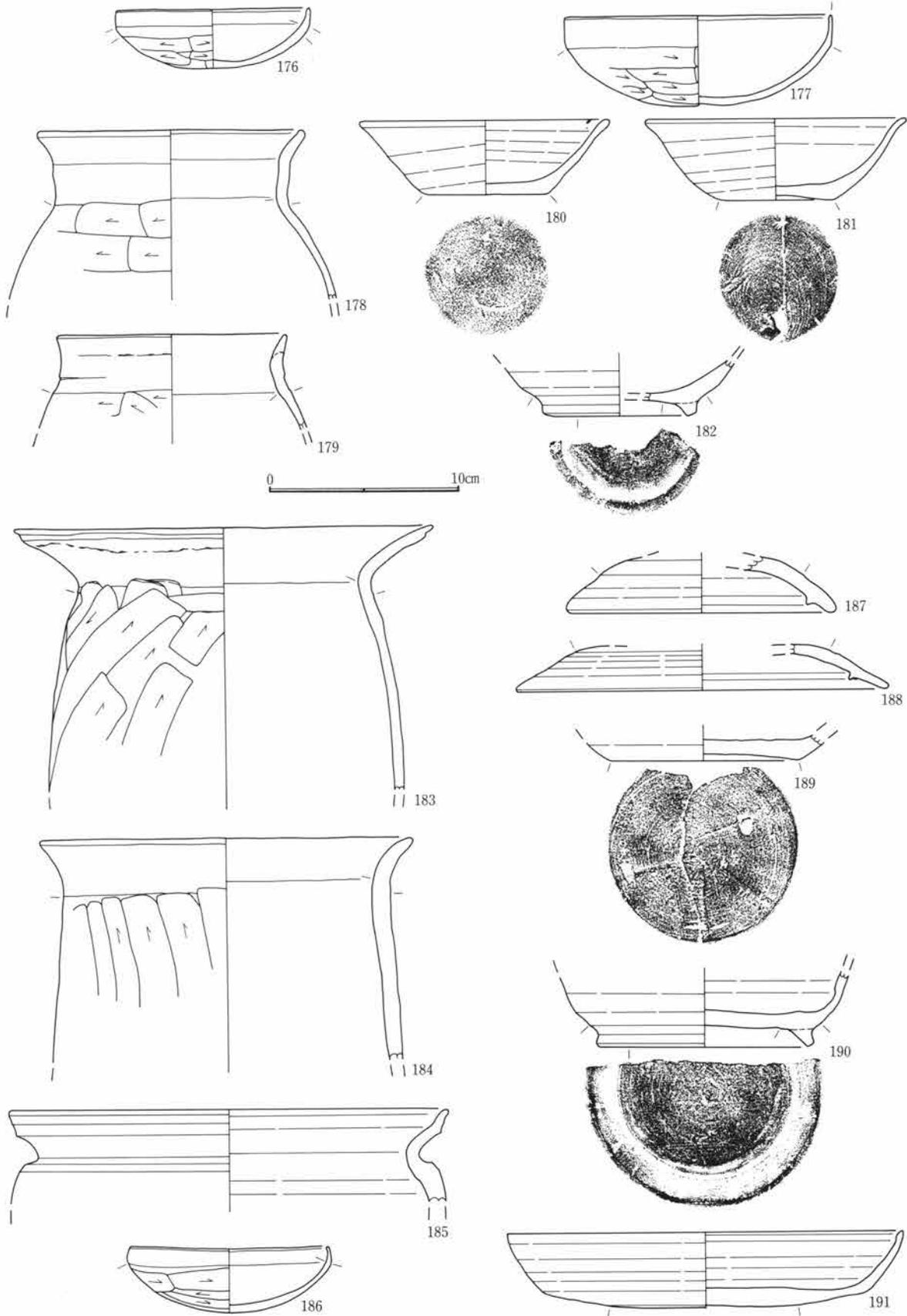
第225図 住居址出土遺物 土器(10)



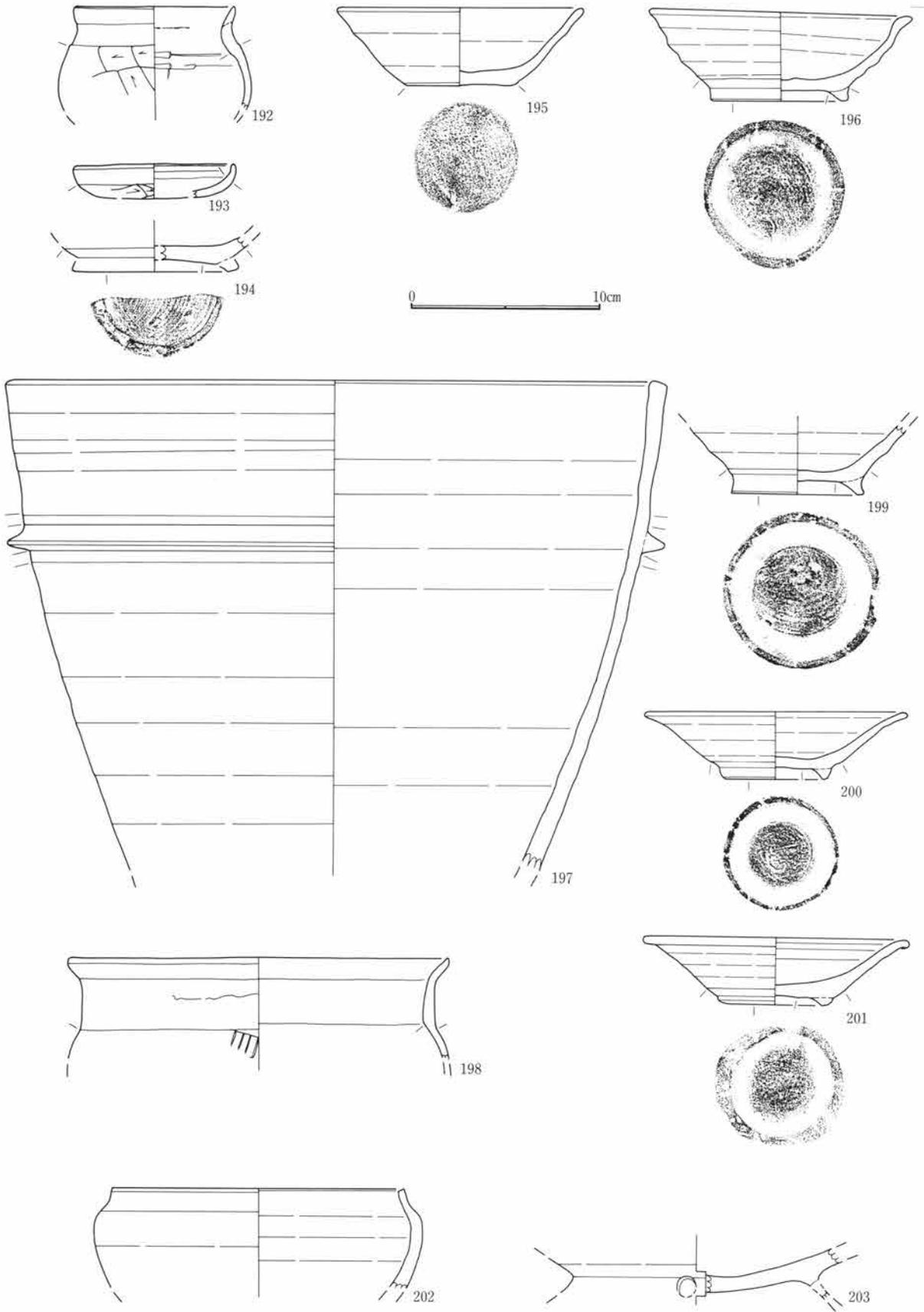
第226図 住居址出土遺物 土器(11)



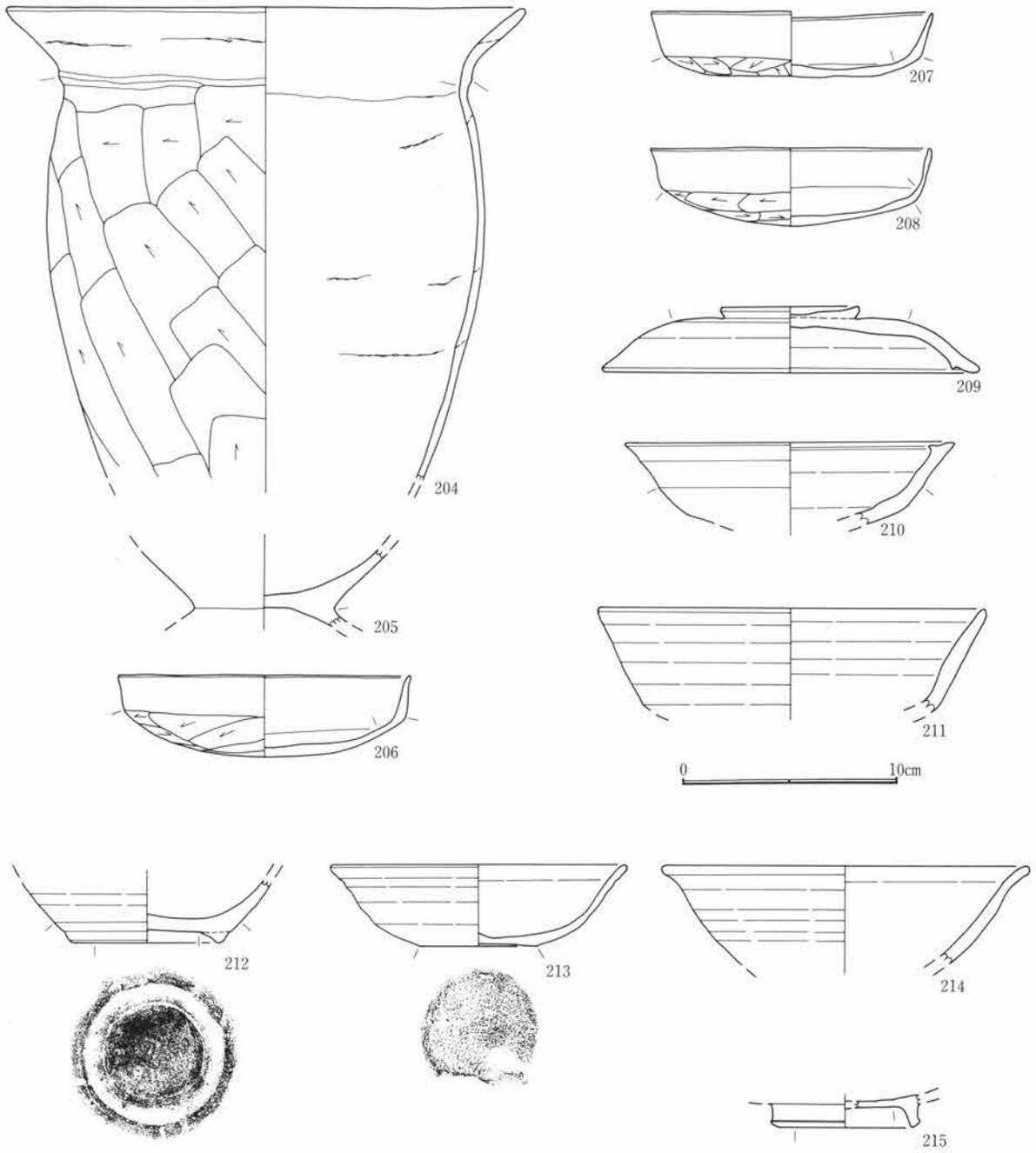
第227図 住居址出土遺物 土器(12)



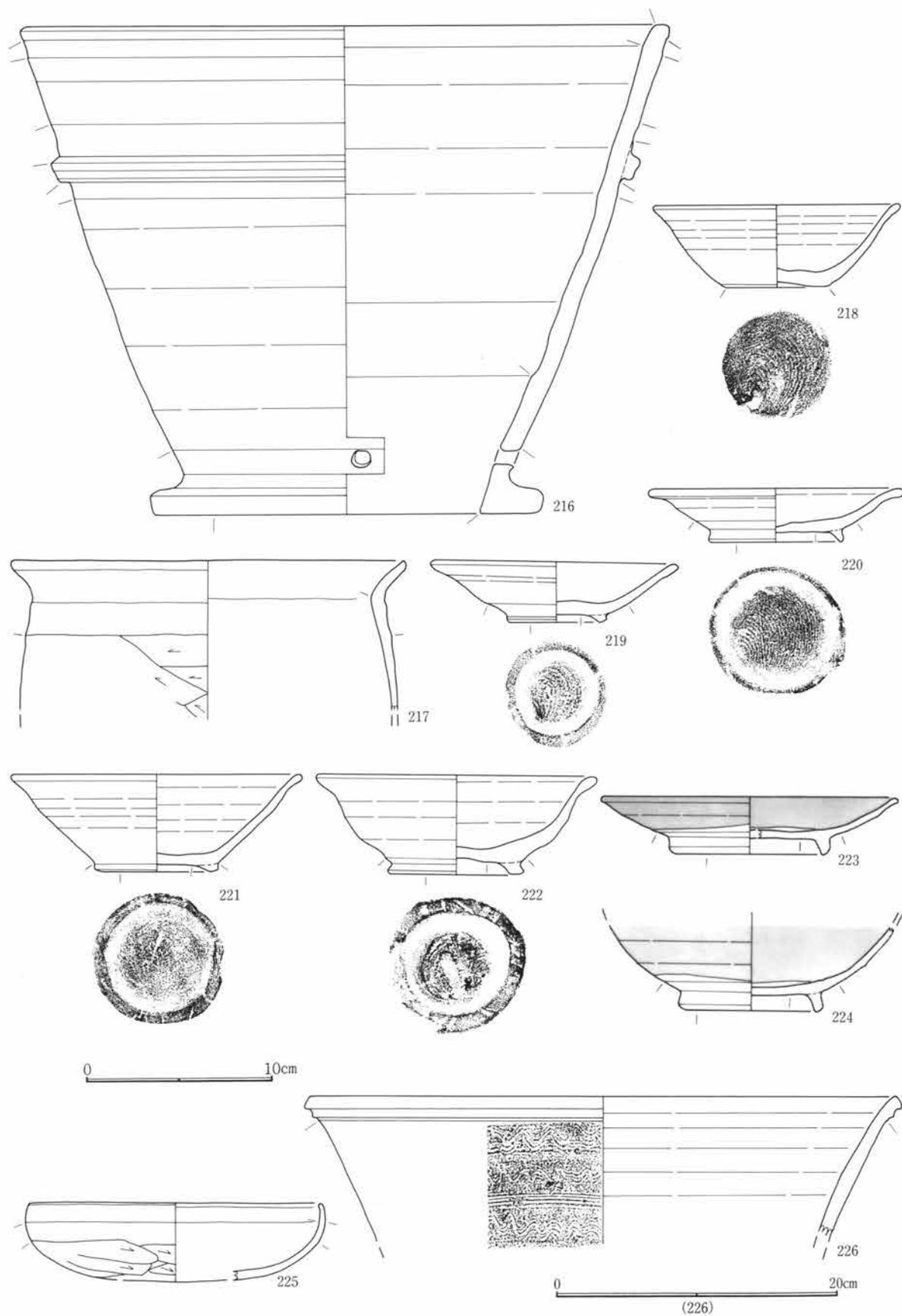
第228図 住居址出土遺物 土器(13)



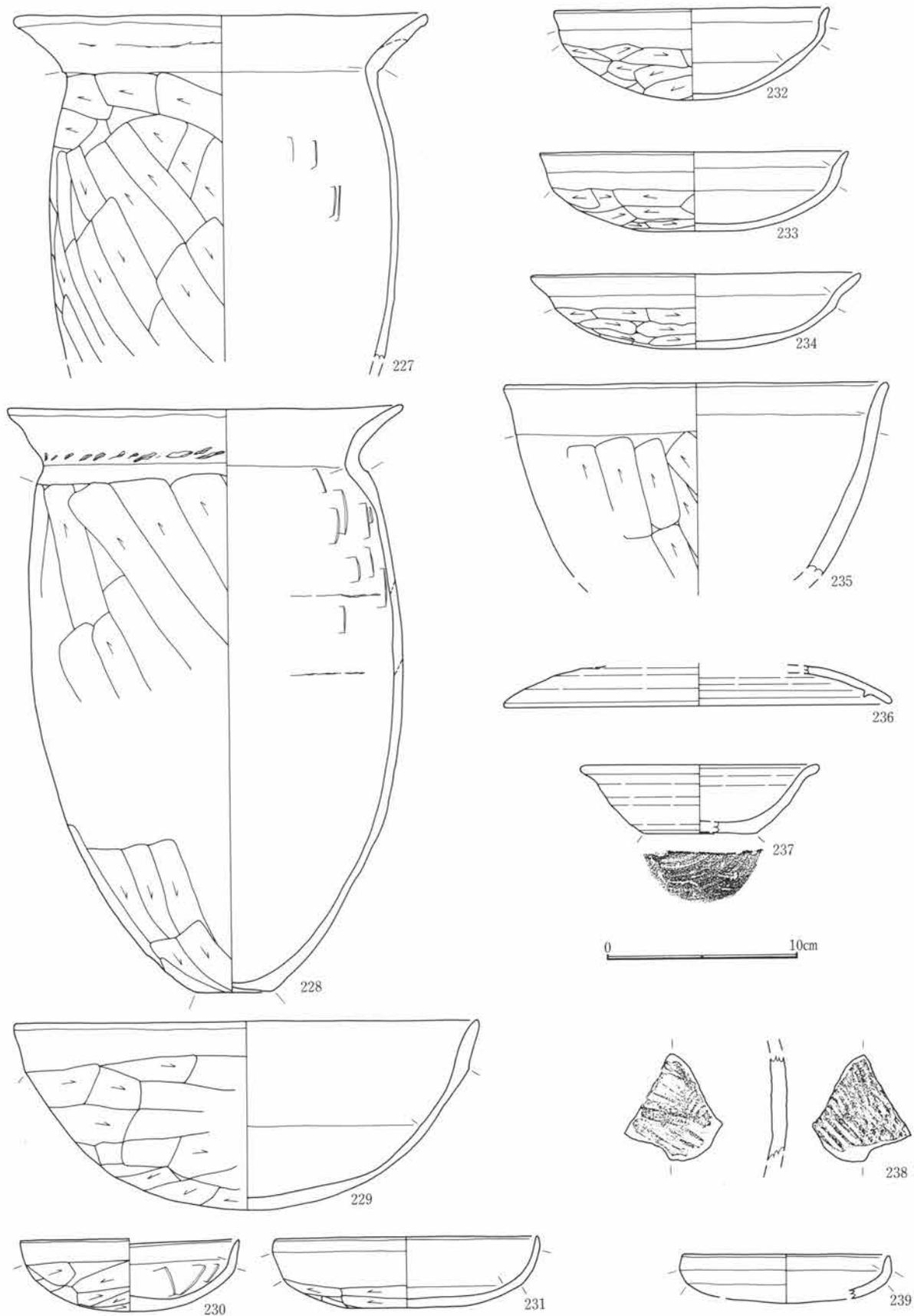
第229図 住居址出土遺物 土器(14)



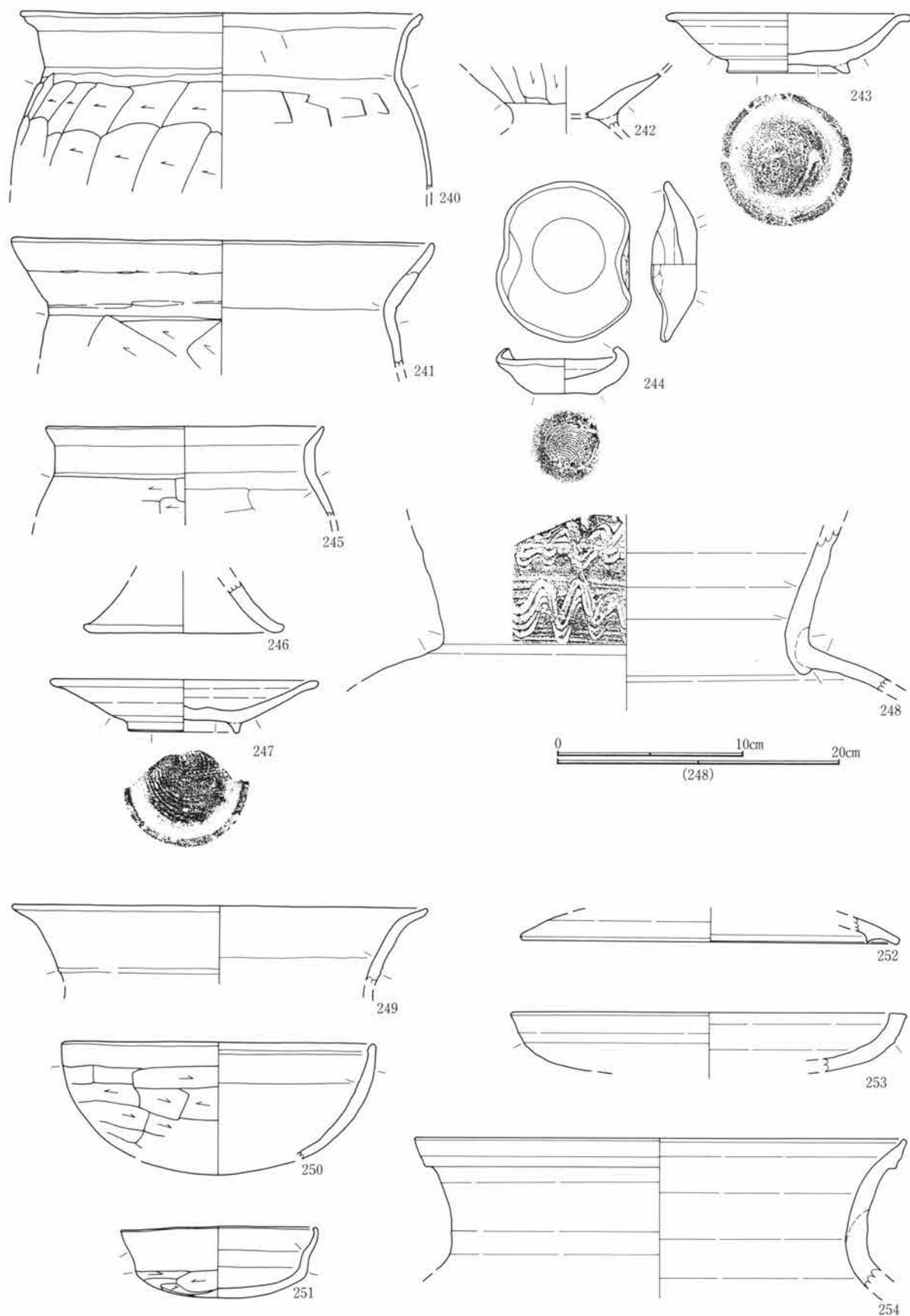
第230図 住居址出土遺物 土器(15)



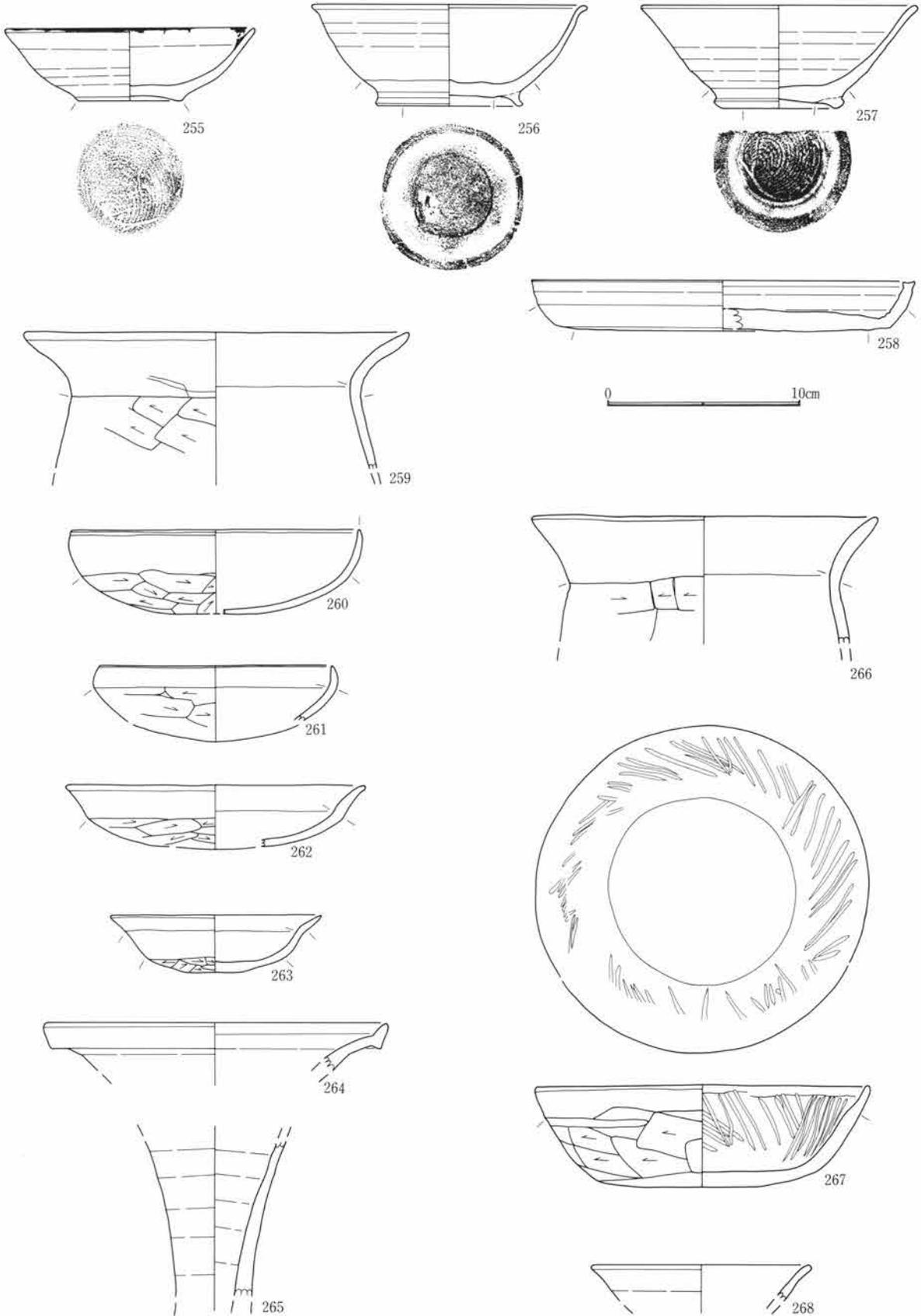
第231図 住居址出土遺物 土器(16)



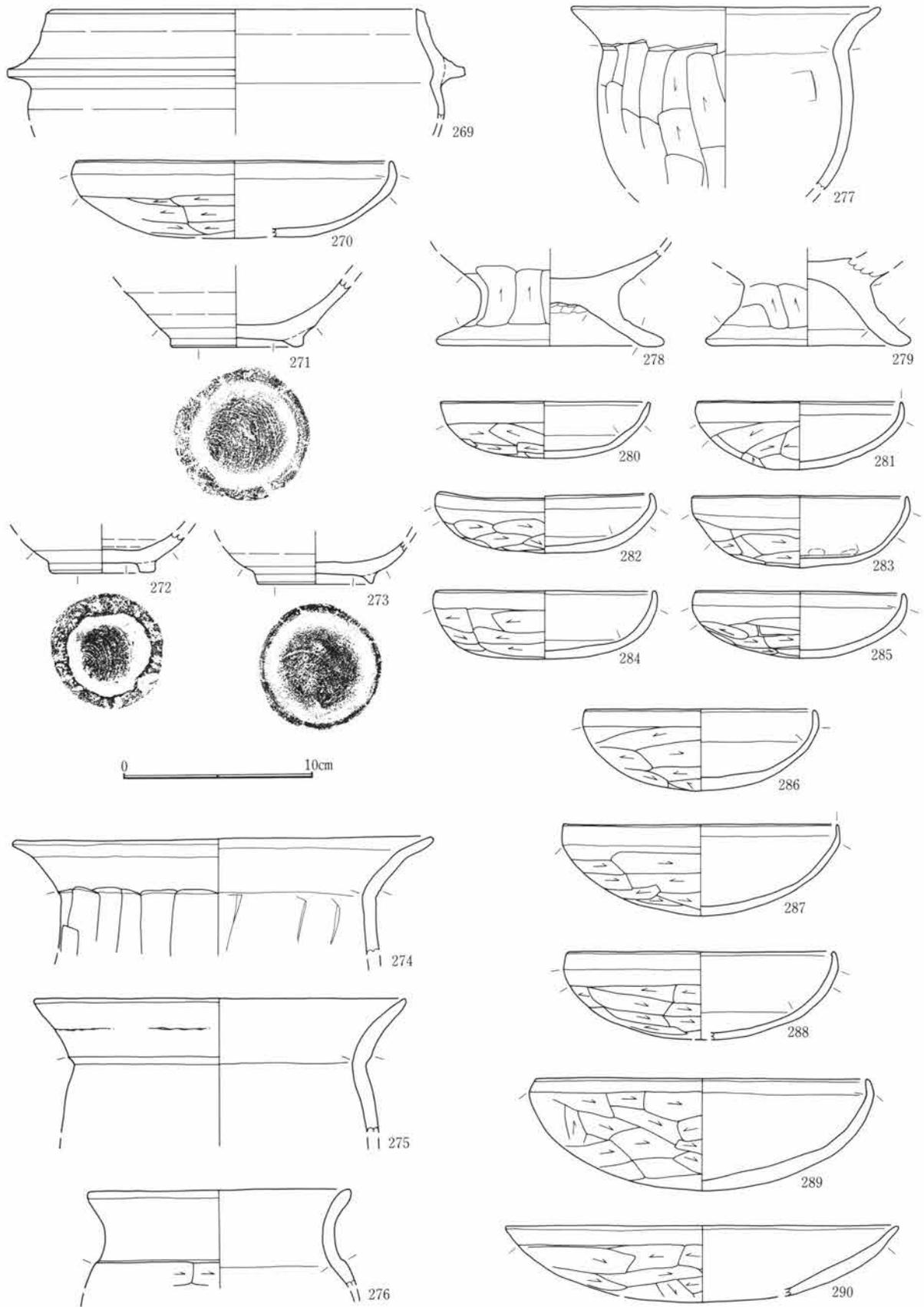
第232図 住居址出土遺物 土器(17)



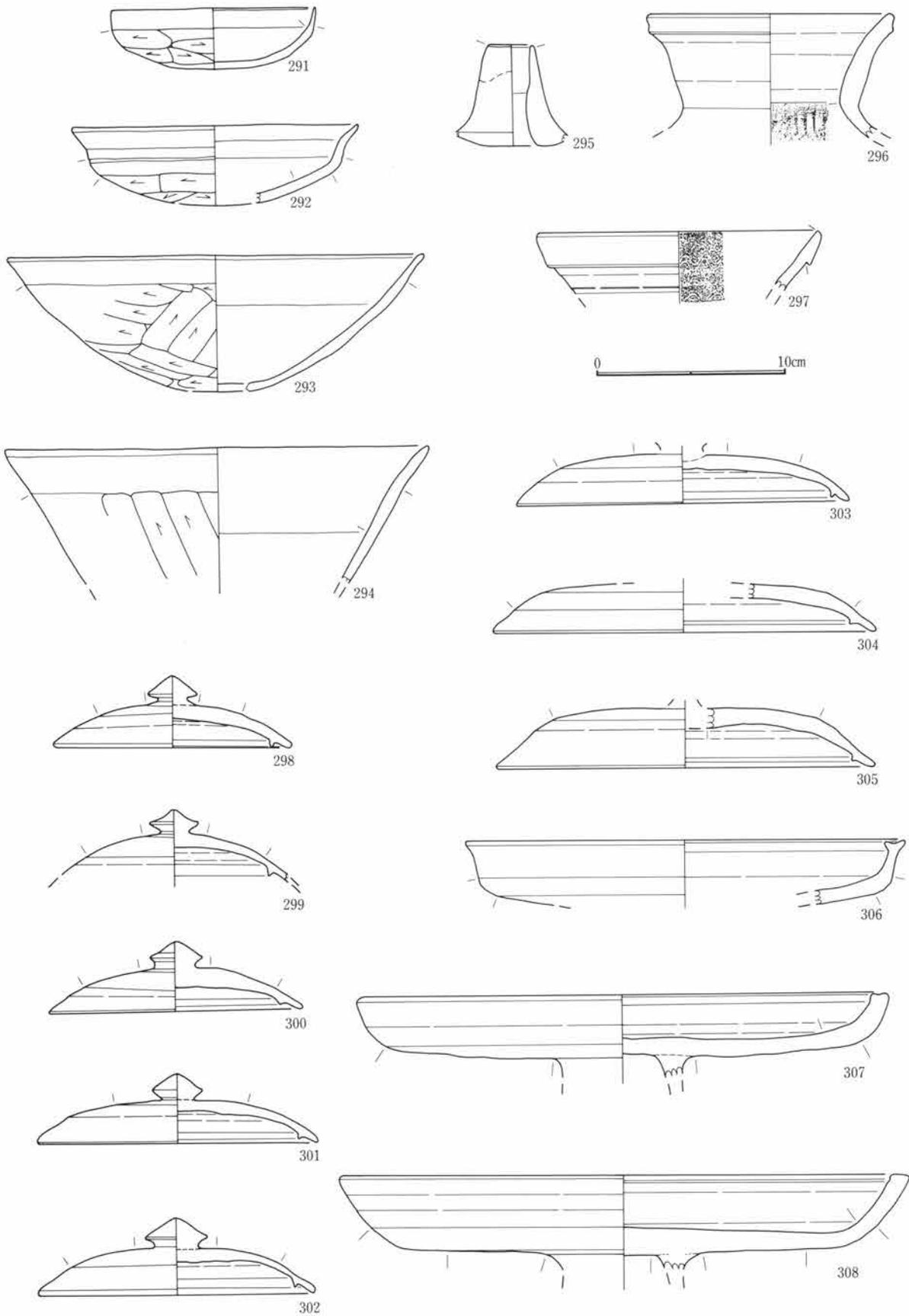
第233図 住居址出土遺物 土器(18)



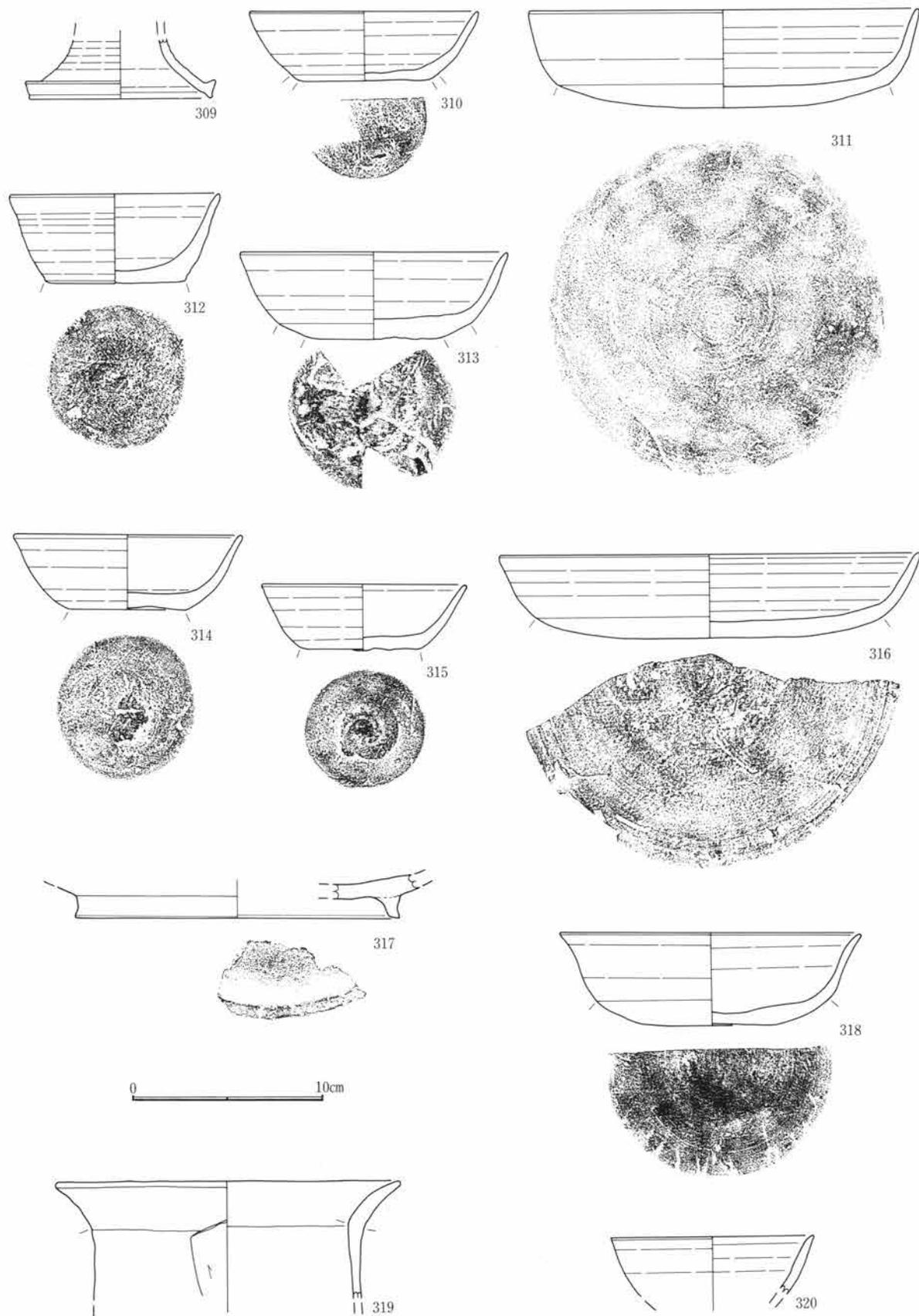
第234図 住居址出土遺物 土器(19)



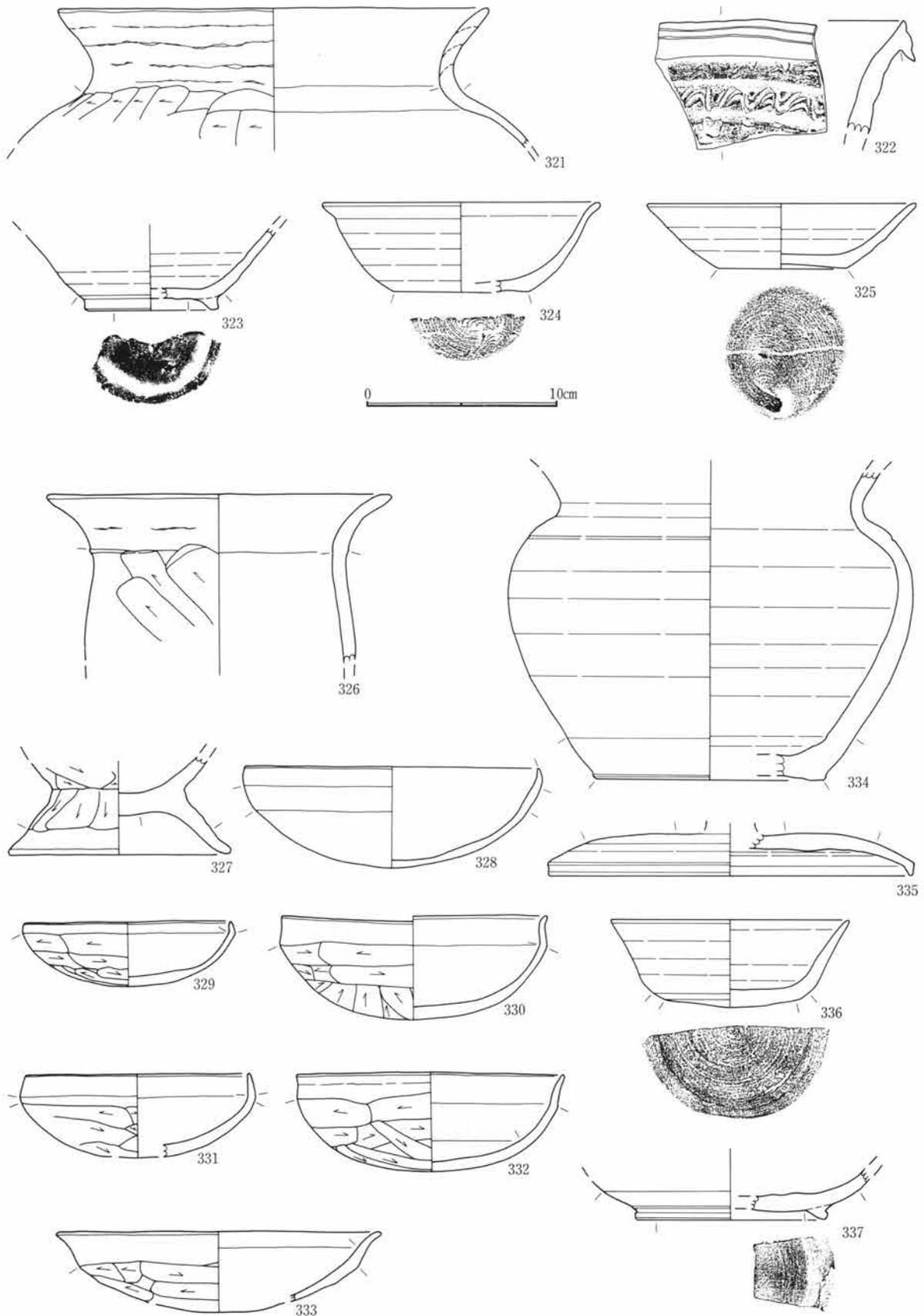
第235図 住居址出土遺物 土器(20)



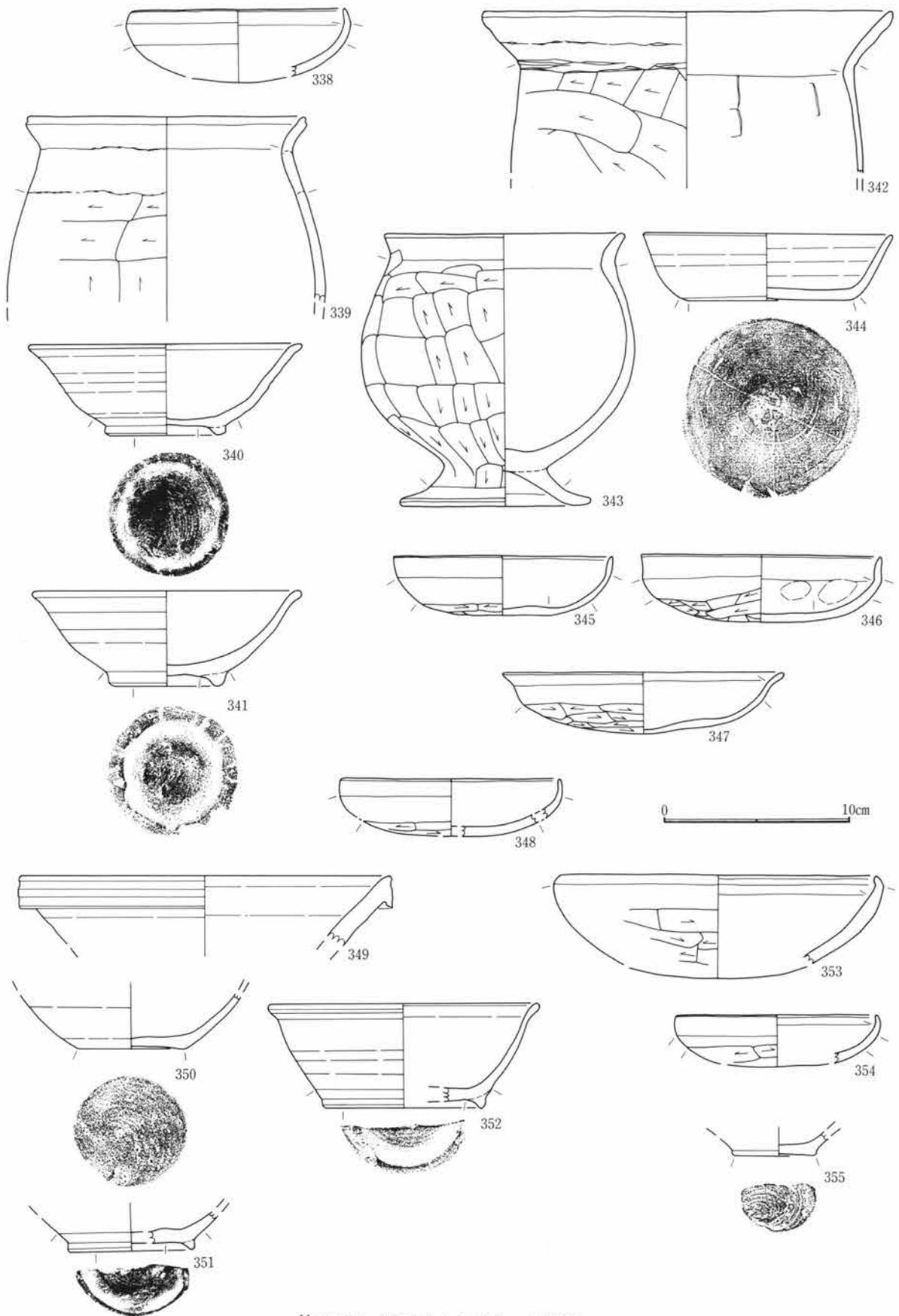
第236図 住居址出土遺物 土器(21)



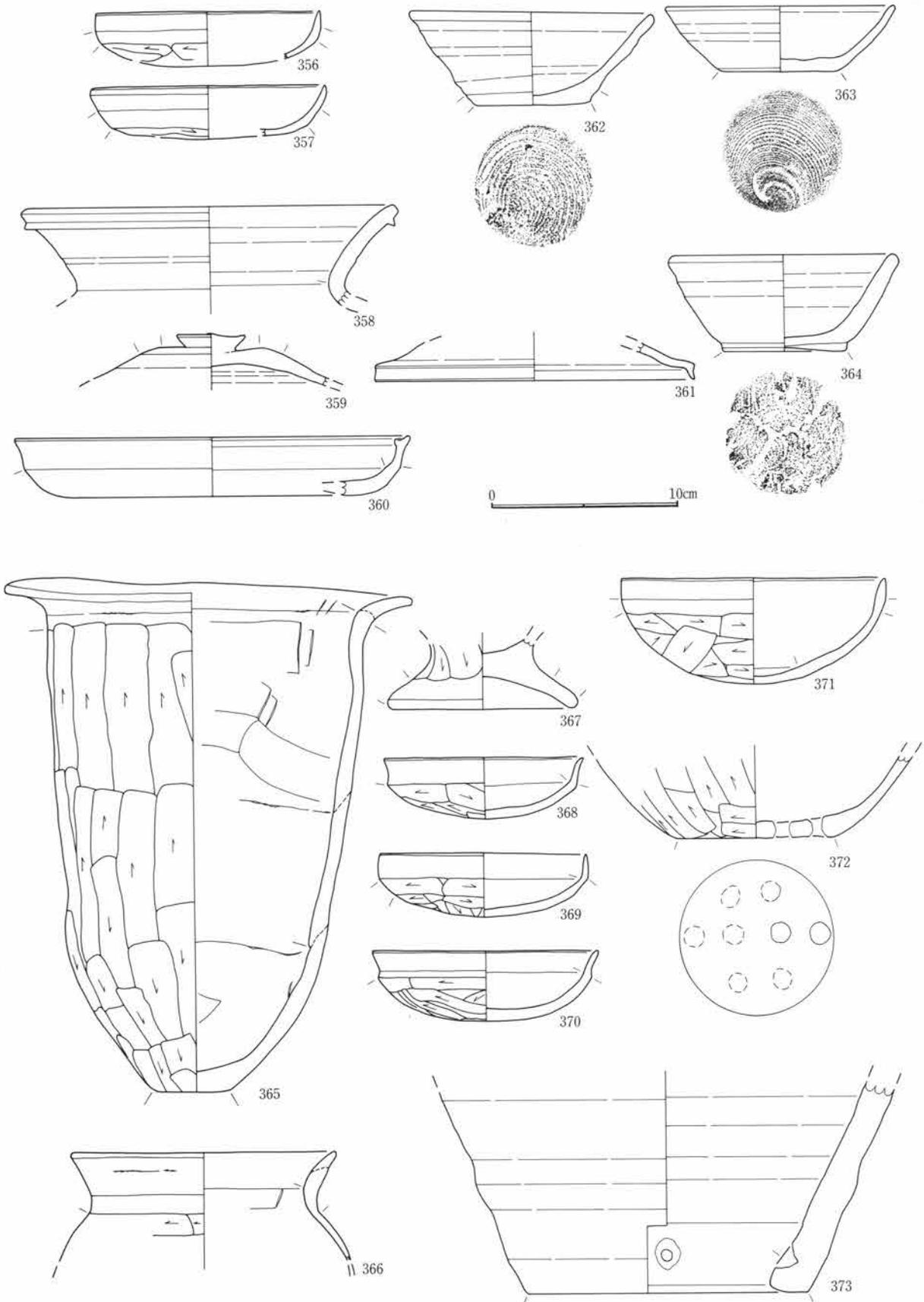
第237図 住居址出土遺物 土器(2)



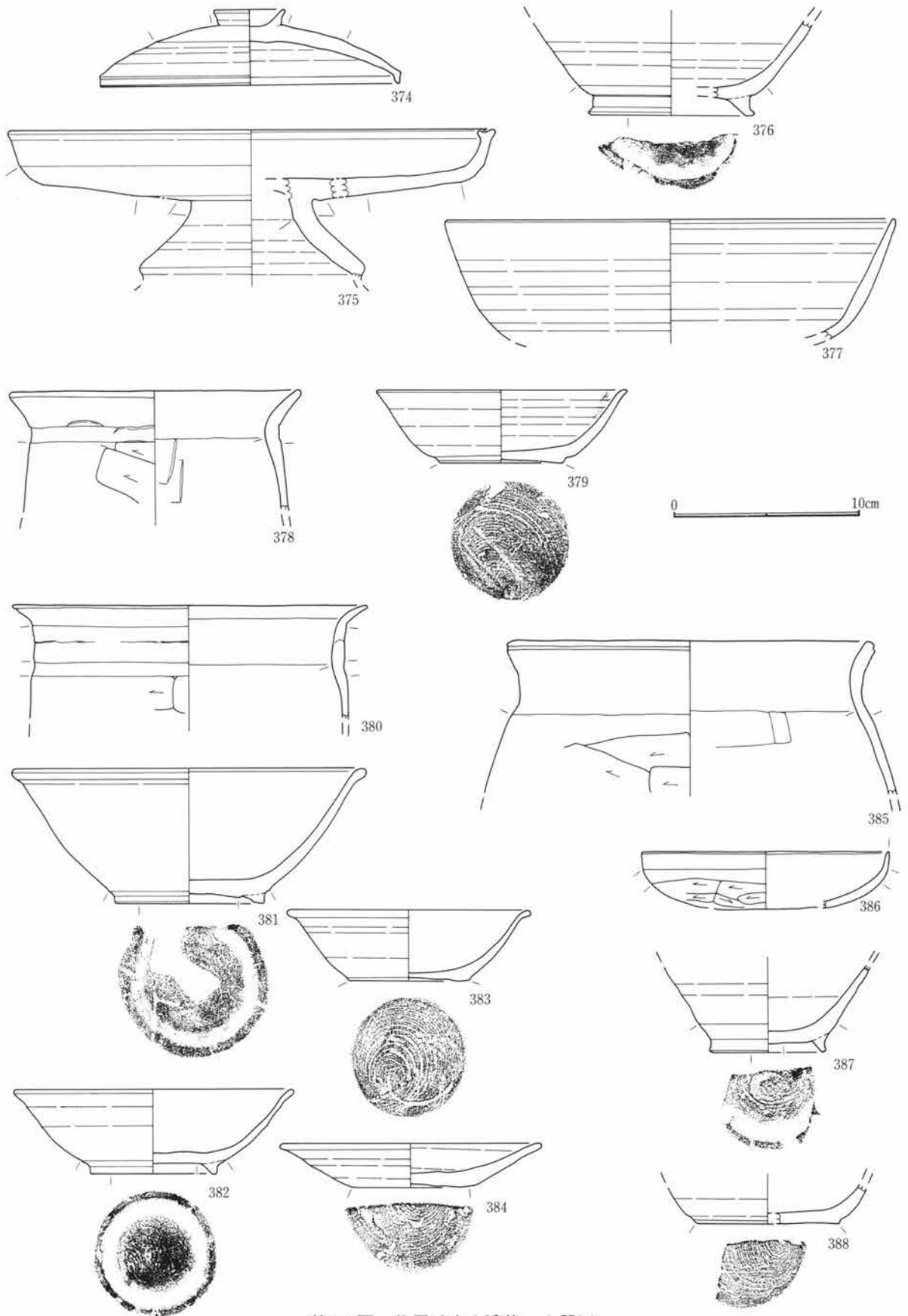
第238図 住居址出土遺物 土器(23)



第239図 住居址出土遺物 土器(24)

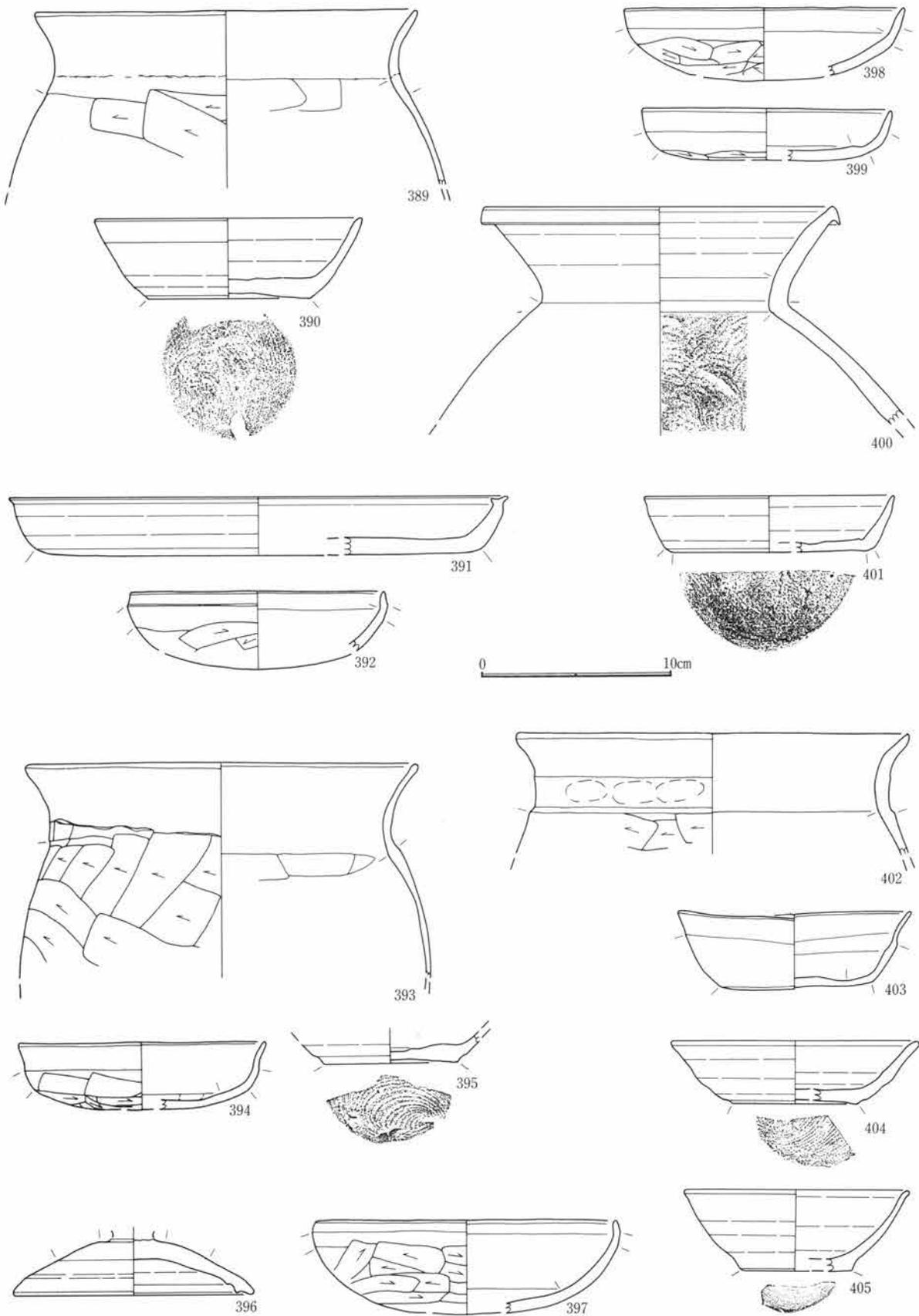


第240図 住居址出土遺物 土器(25)

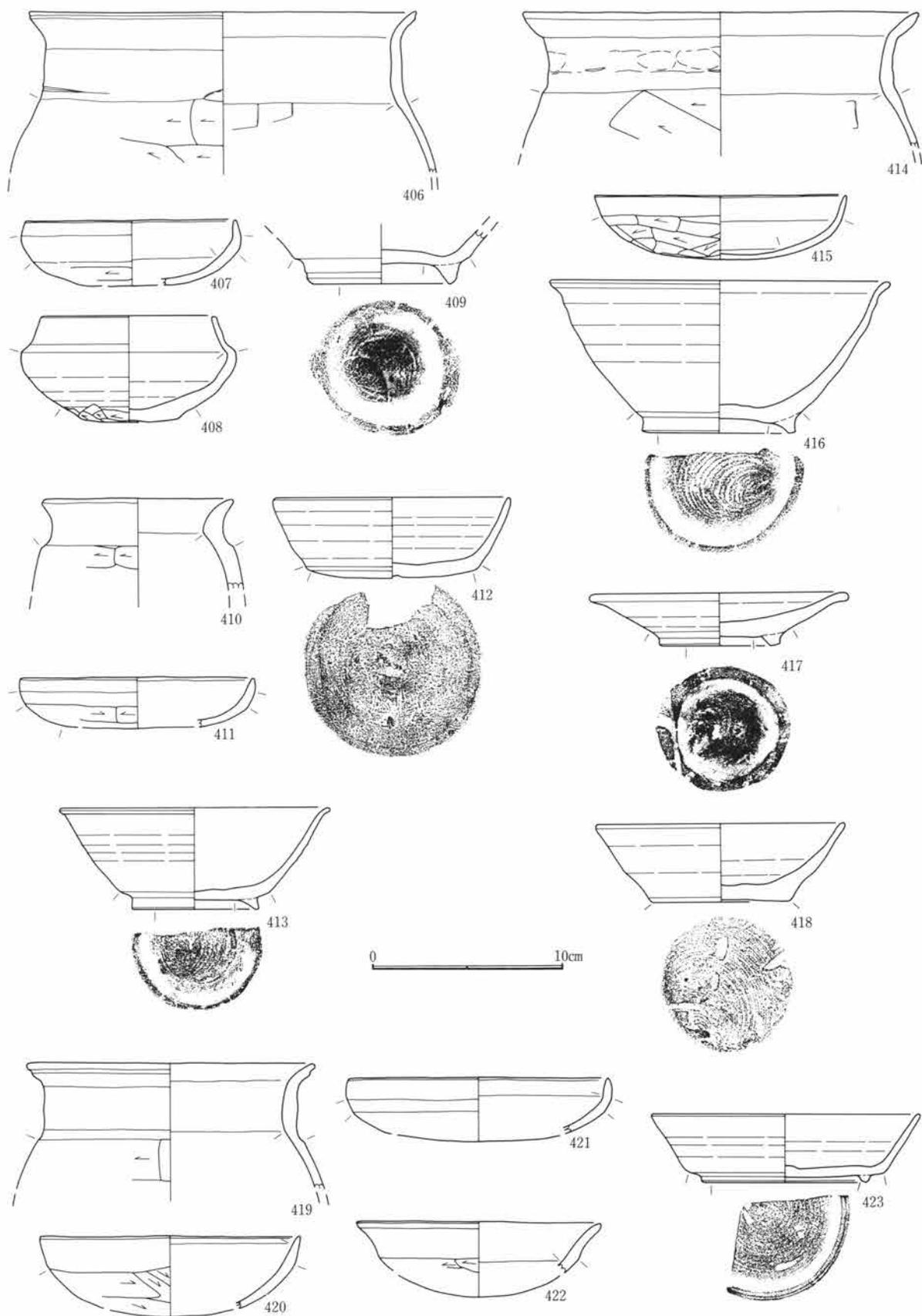


第241図 住居址出土遺物 土器(26)

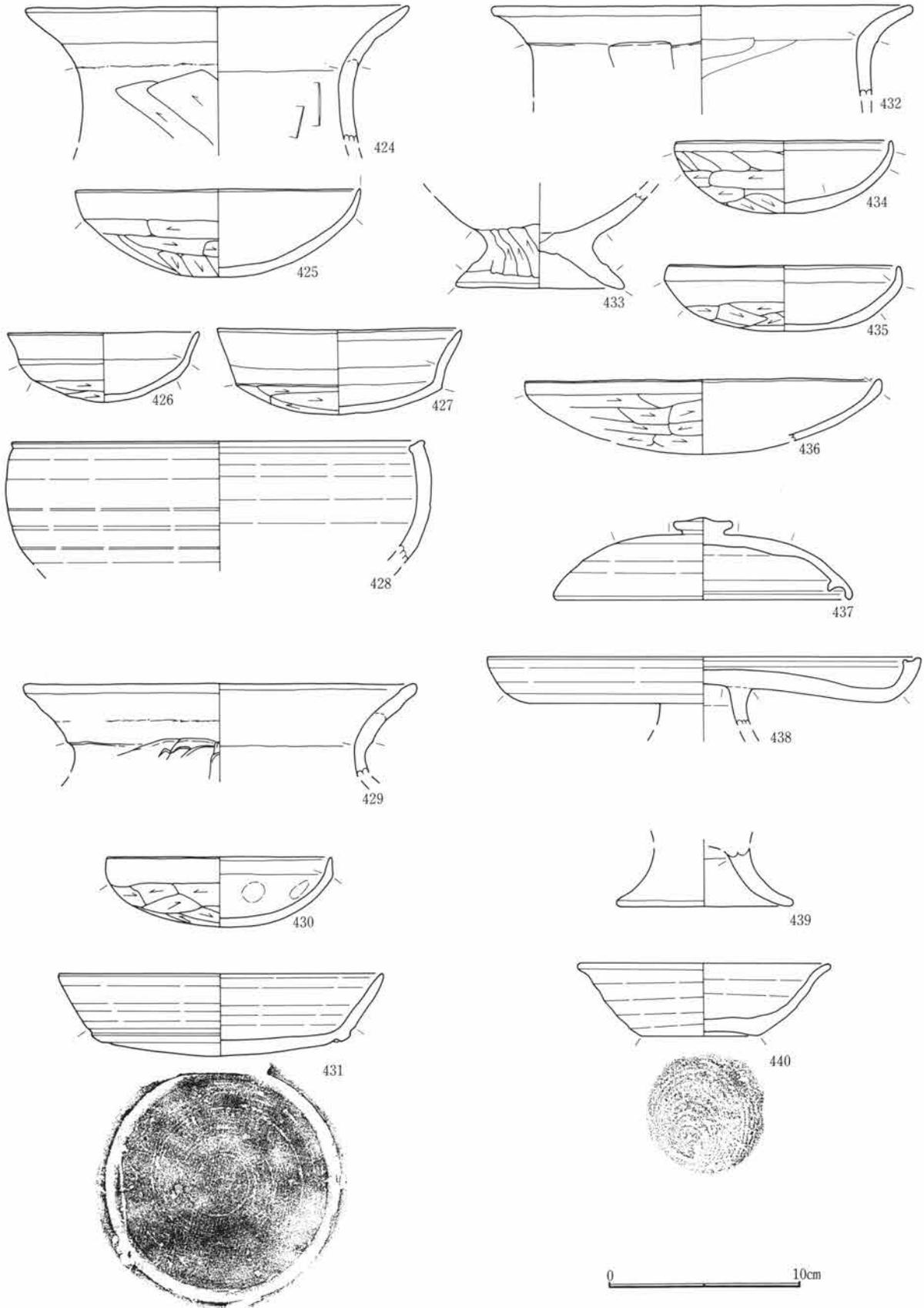
第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物



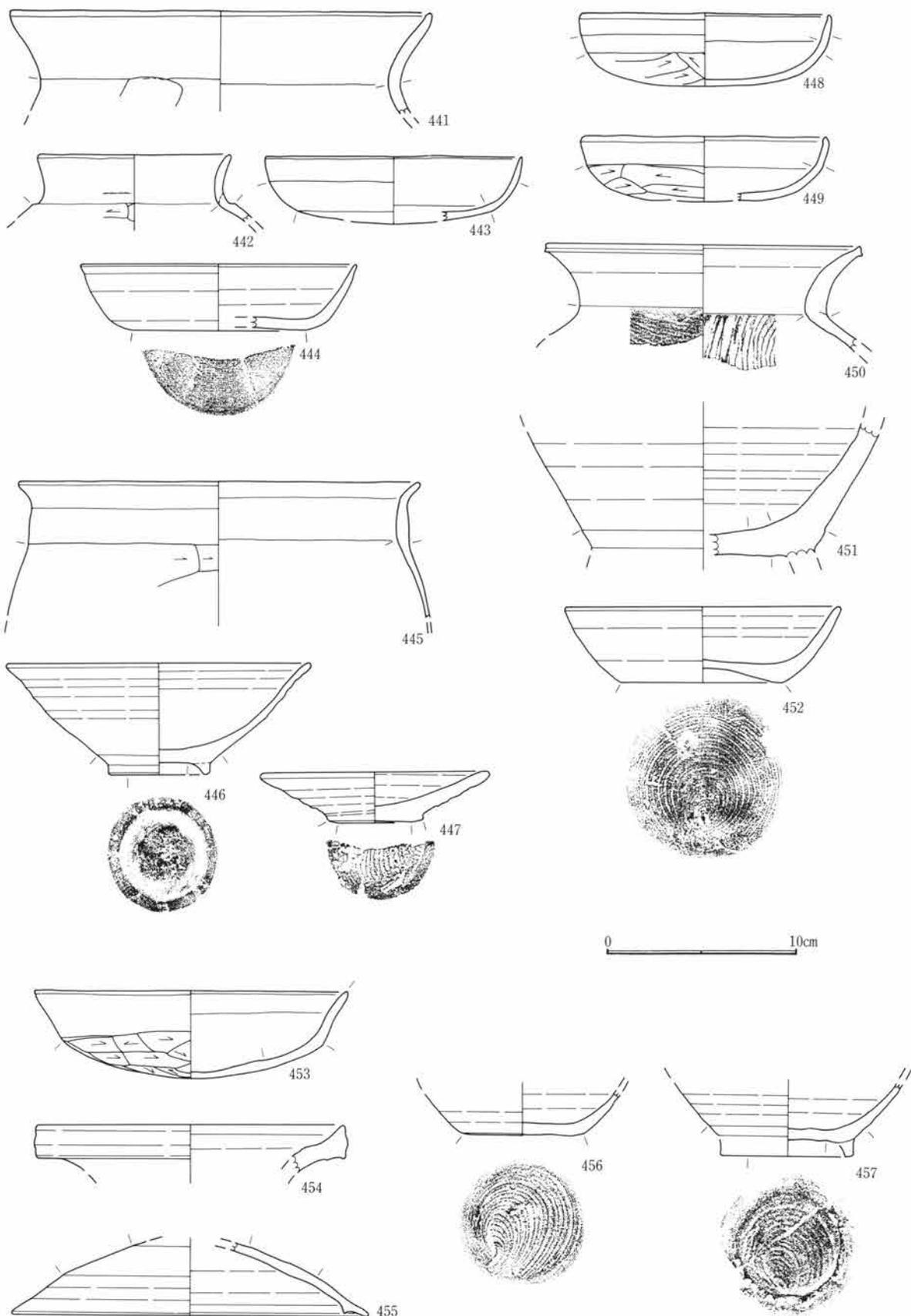
第242図 住居址出土遺物 土器(27)



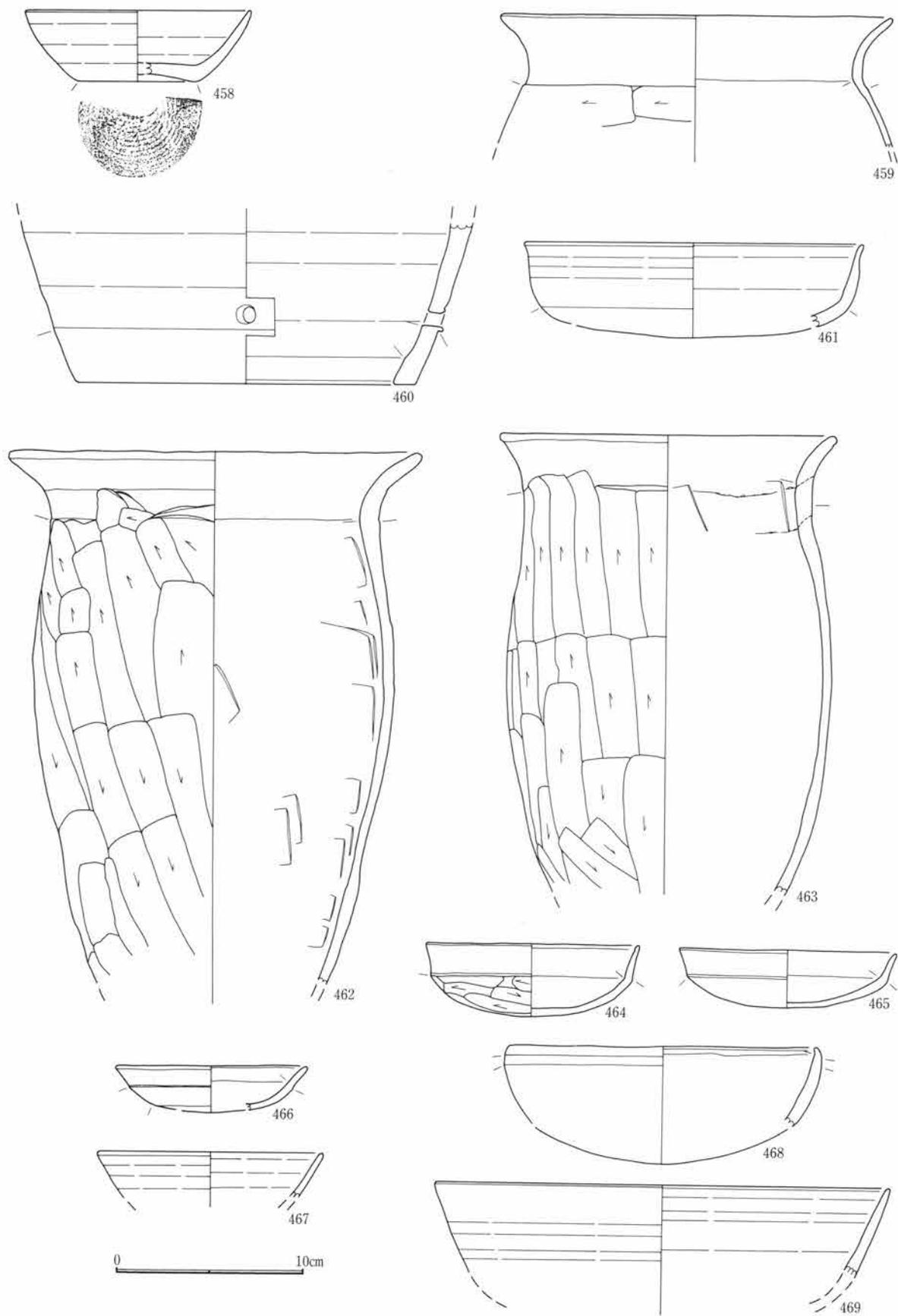
第243図 住居址出土遺物 土器(28)



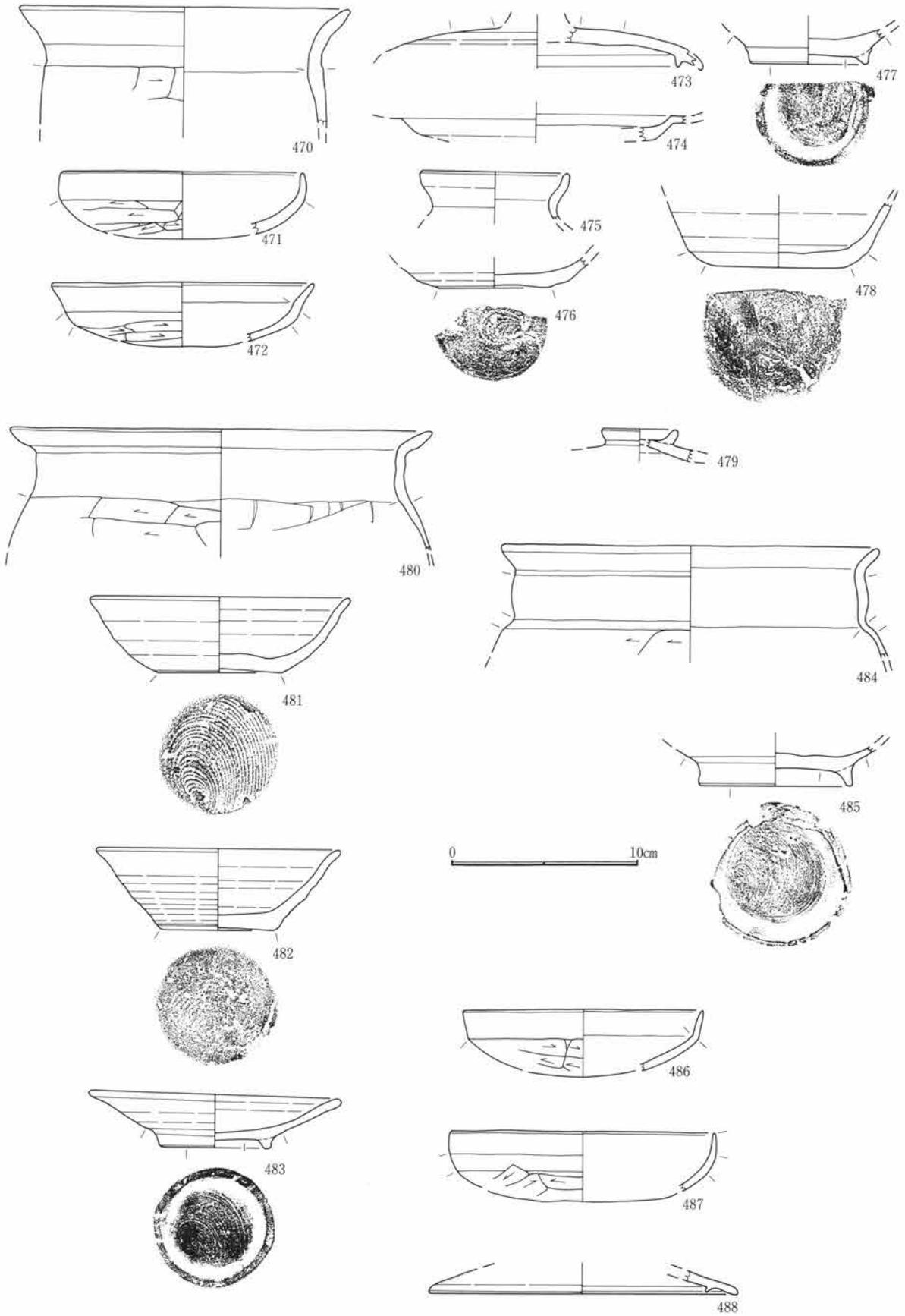
第244図 住居址出土遺物 土器(29)



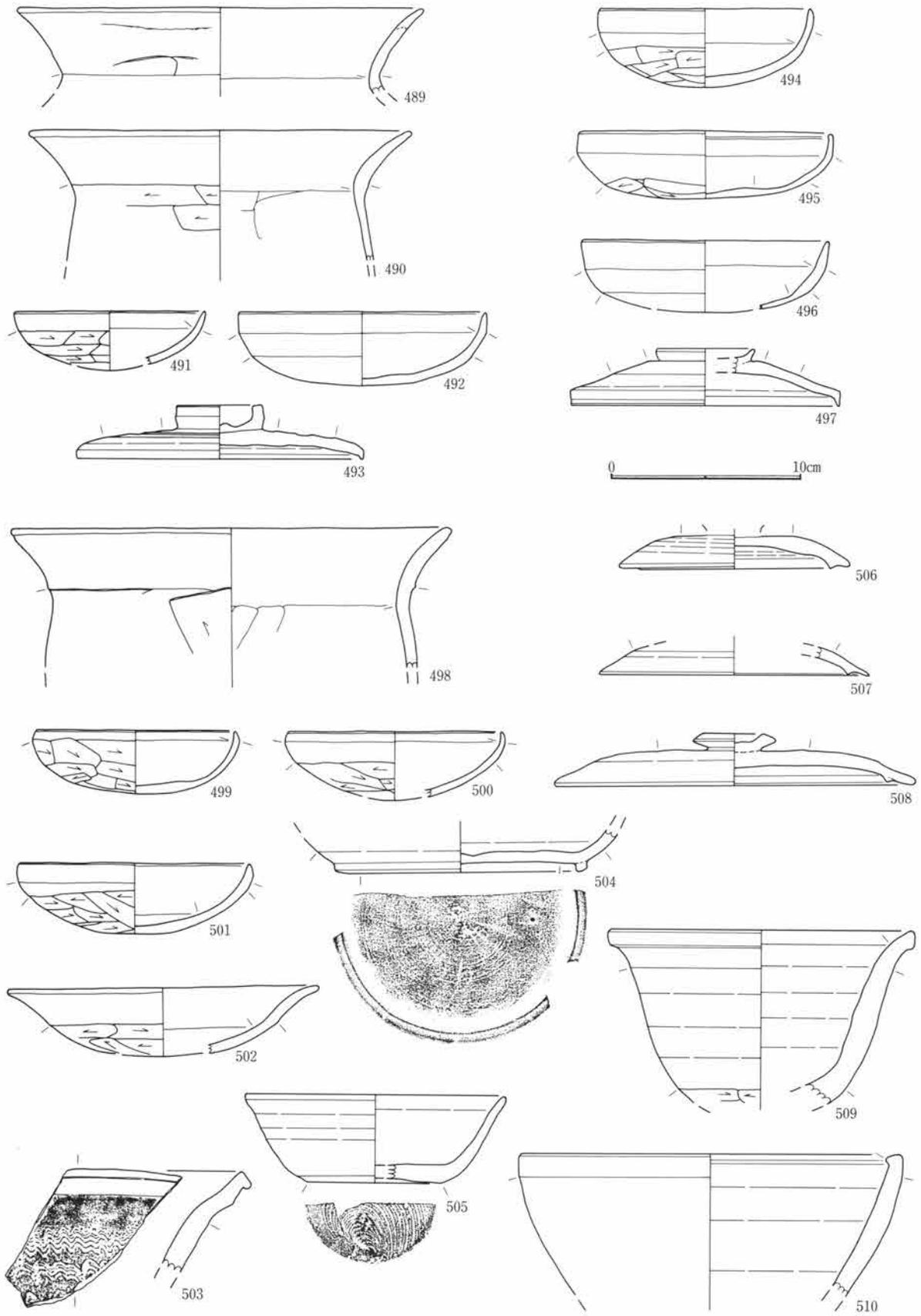
第245図 住居址出土遺物 土器(30)



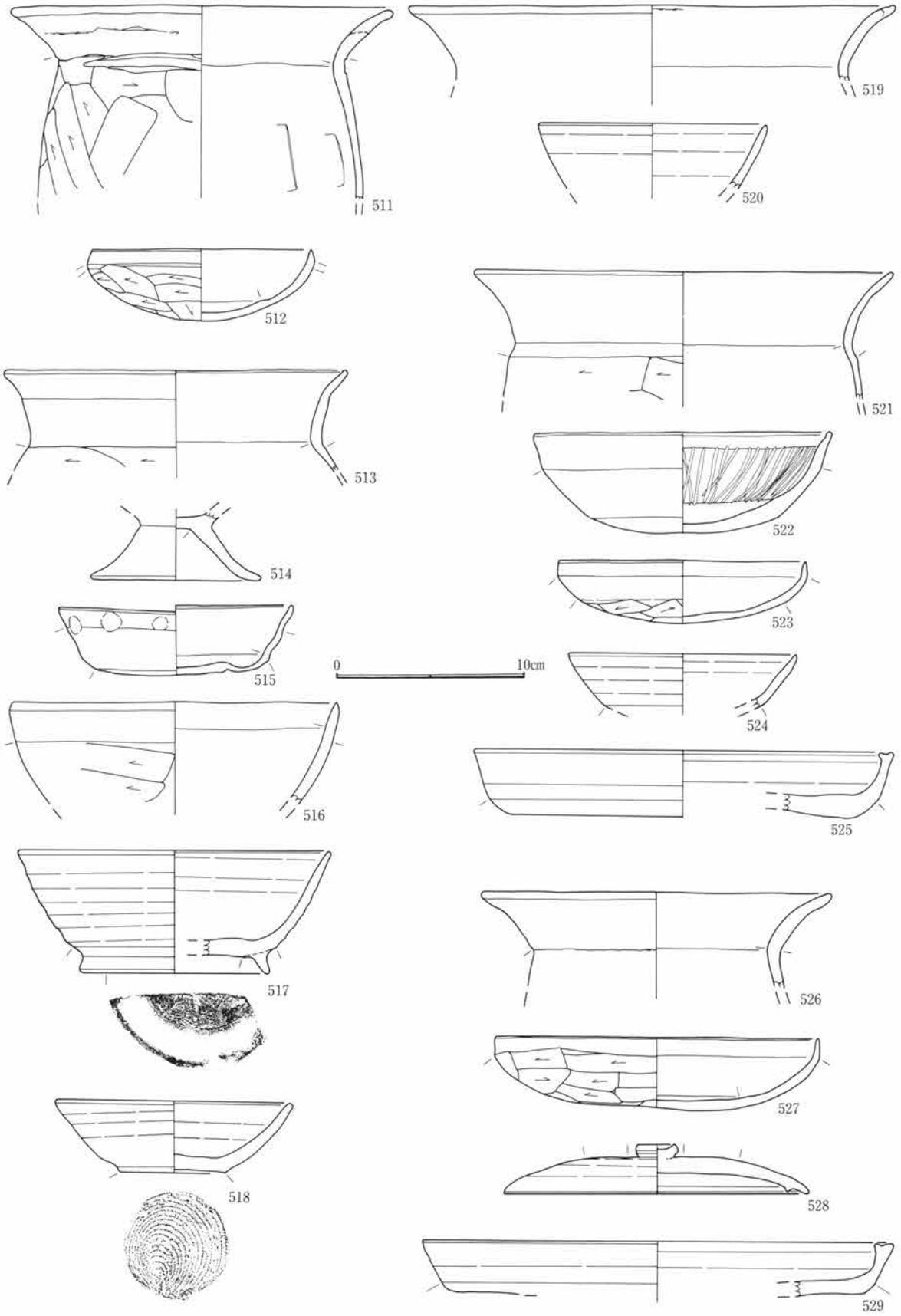
第246図 住居址出土遺物 土器(31)



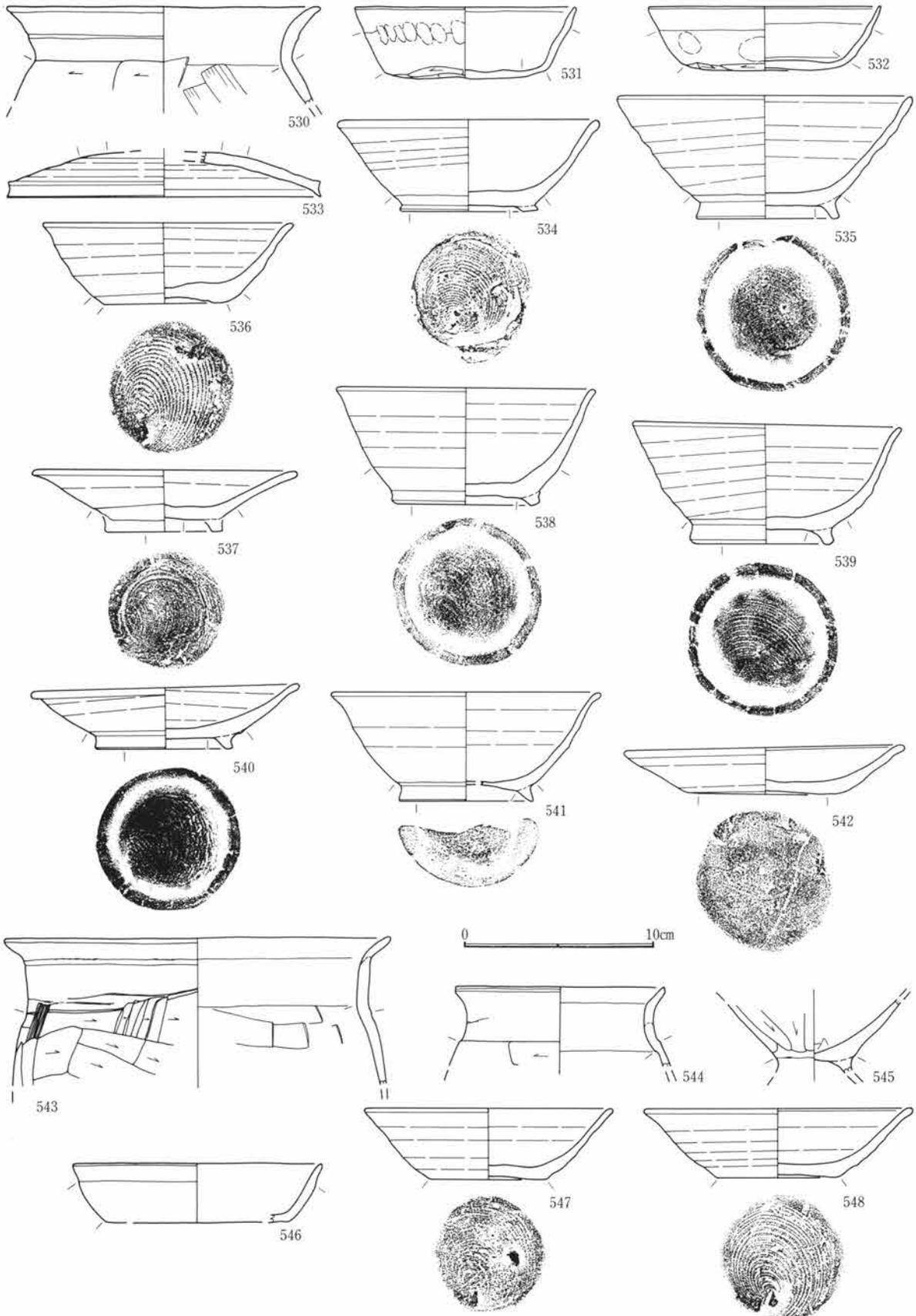
第247図 住居址出土遺物 土器(32)



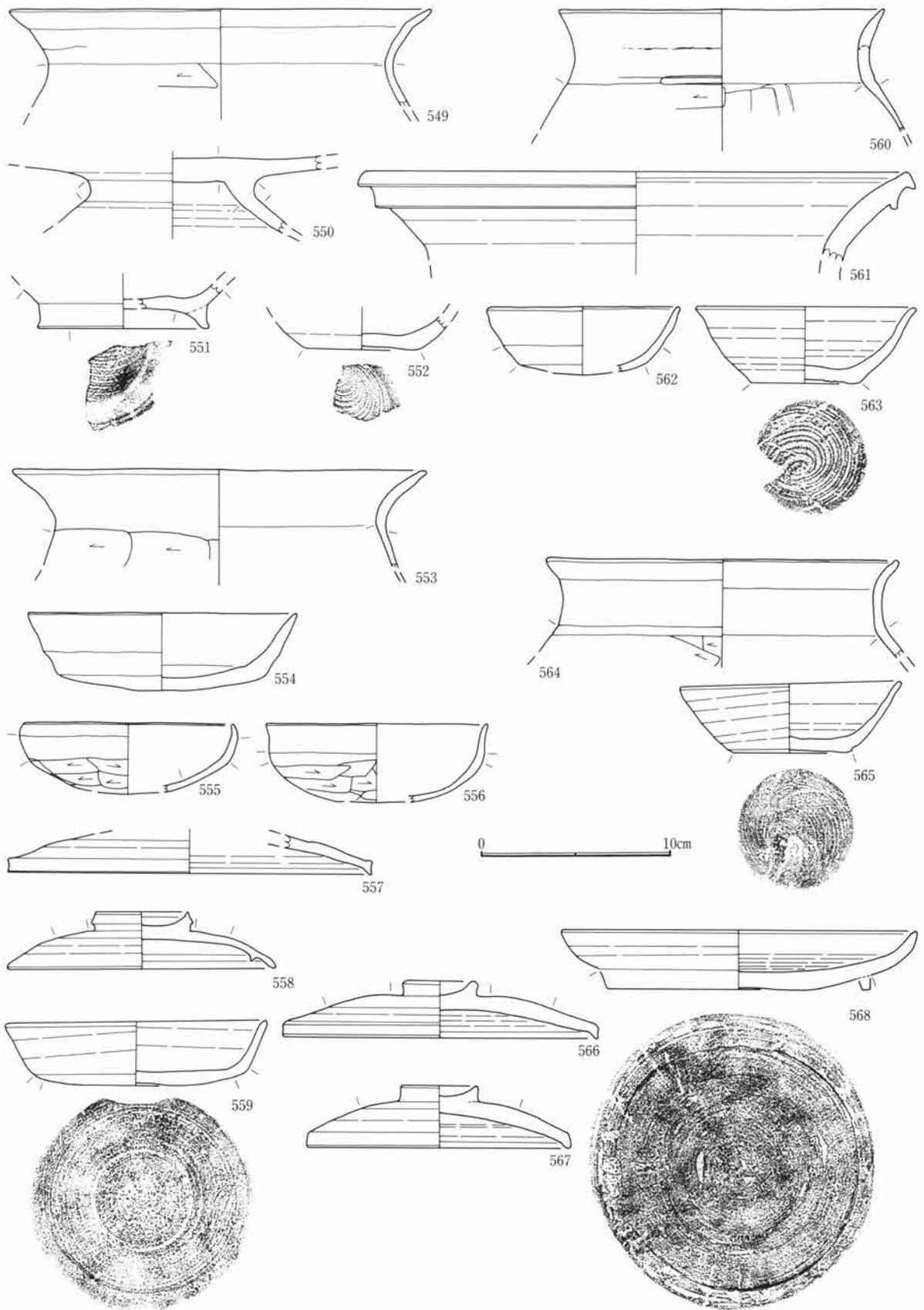
第248図 住居址出土遺物 土器(33)



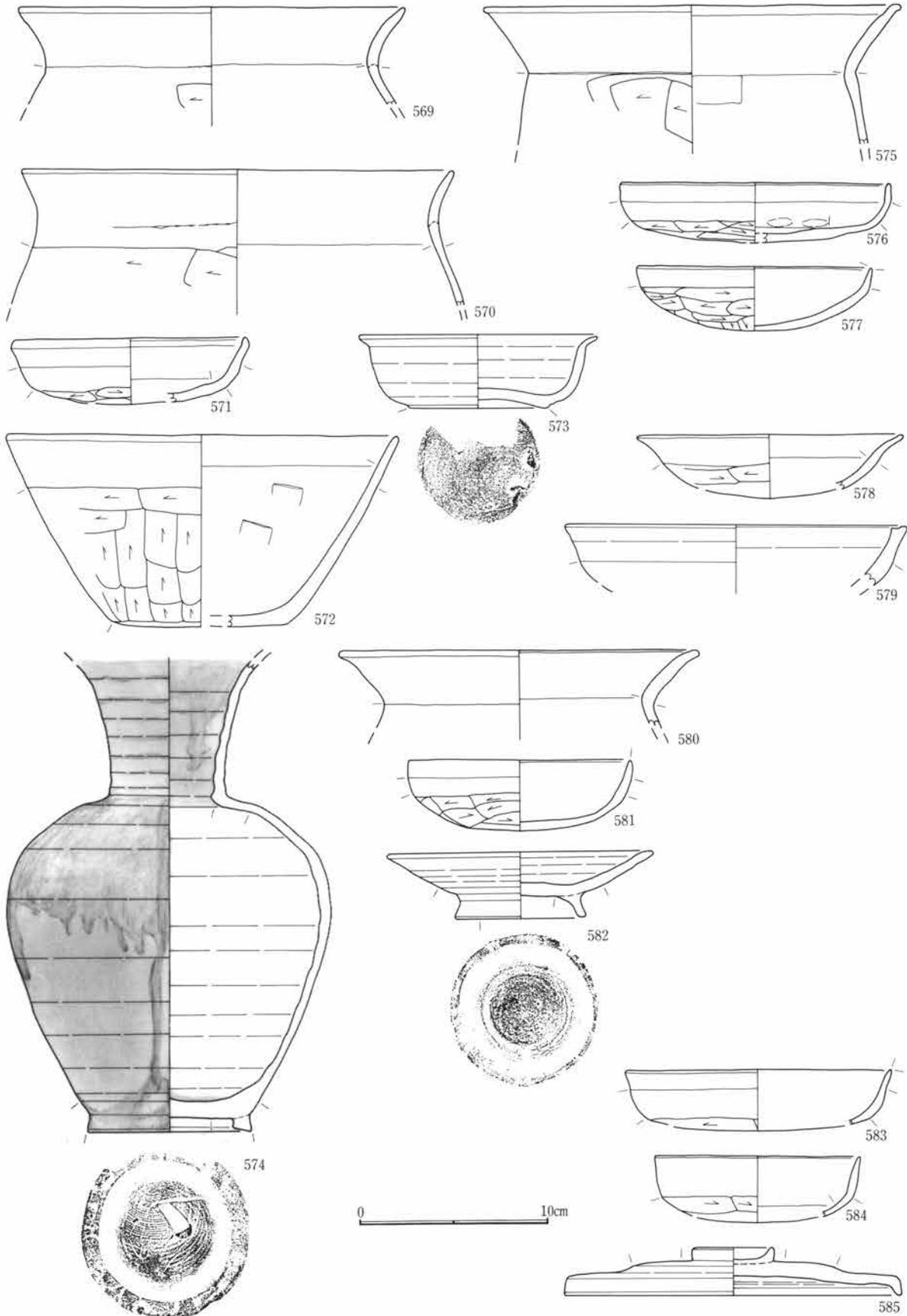
第249図 住居址出土遺物 土器(34)



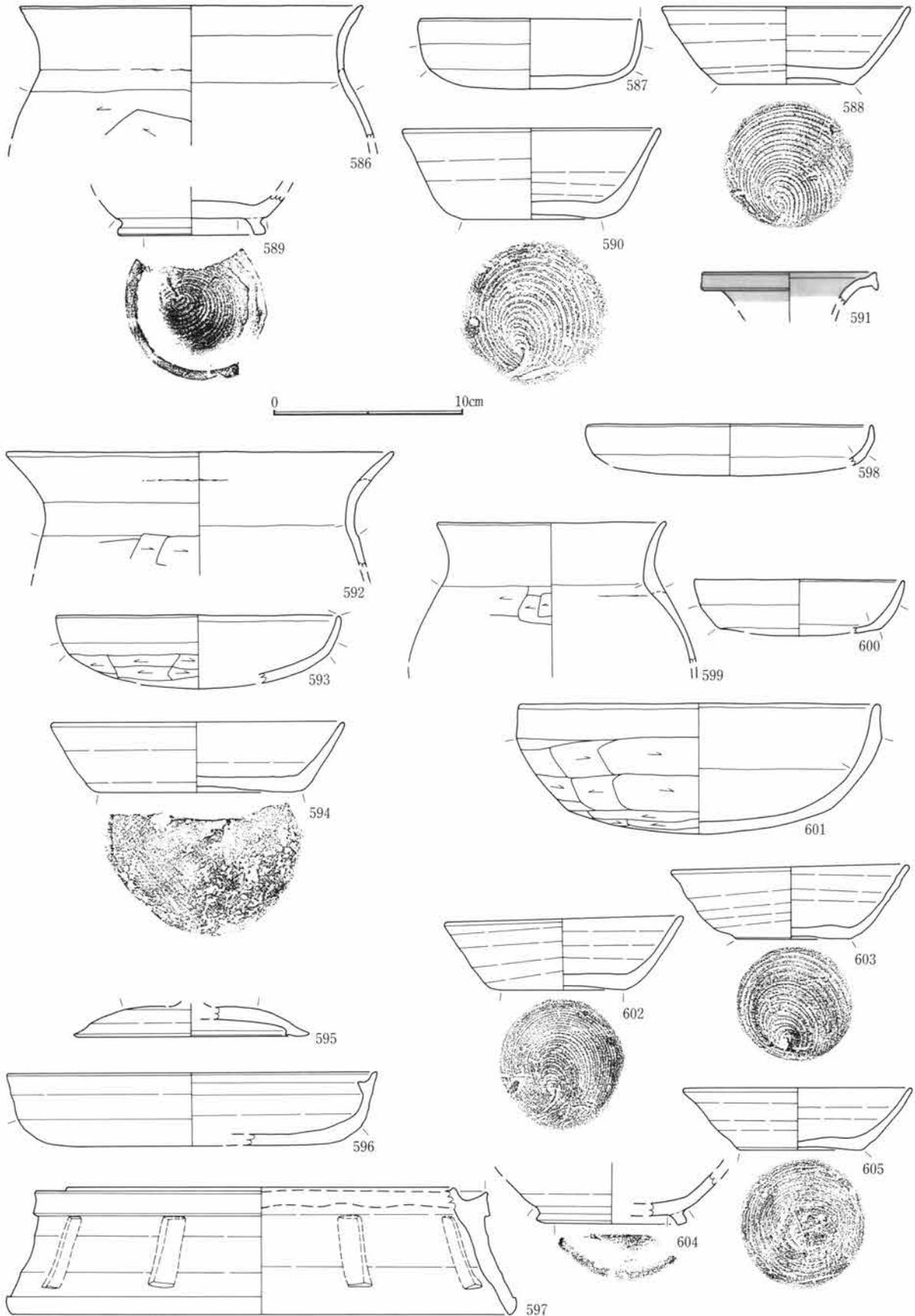
第250図 住居址出土遺物 土器(35)



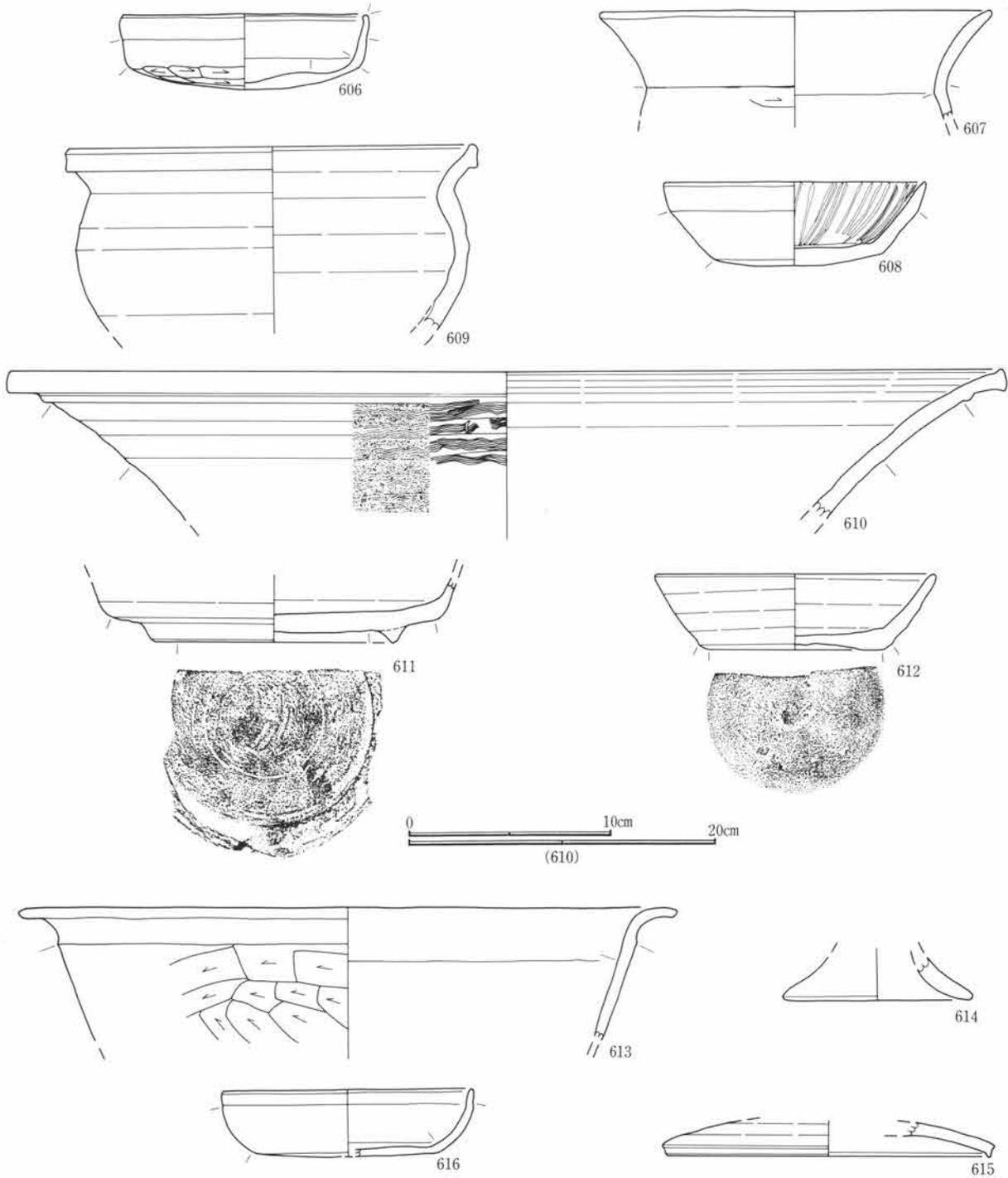
第251図 住居址出土遺物 土器(36)



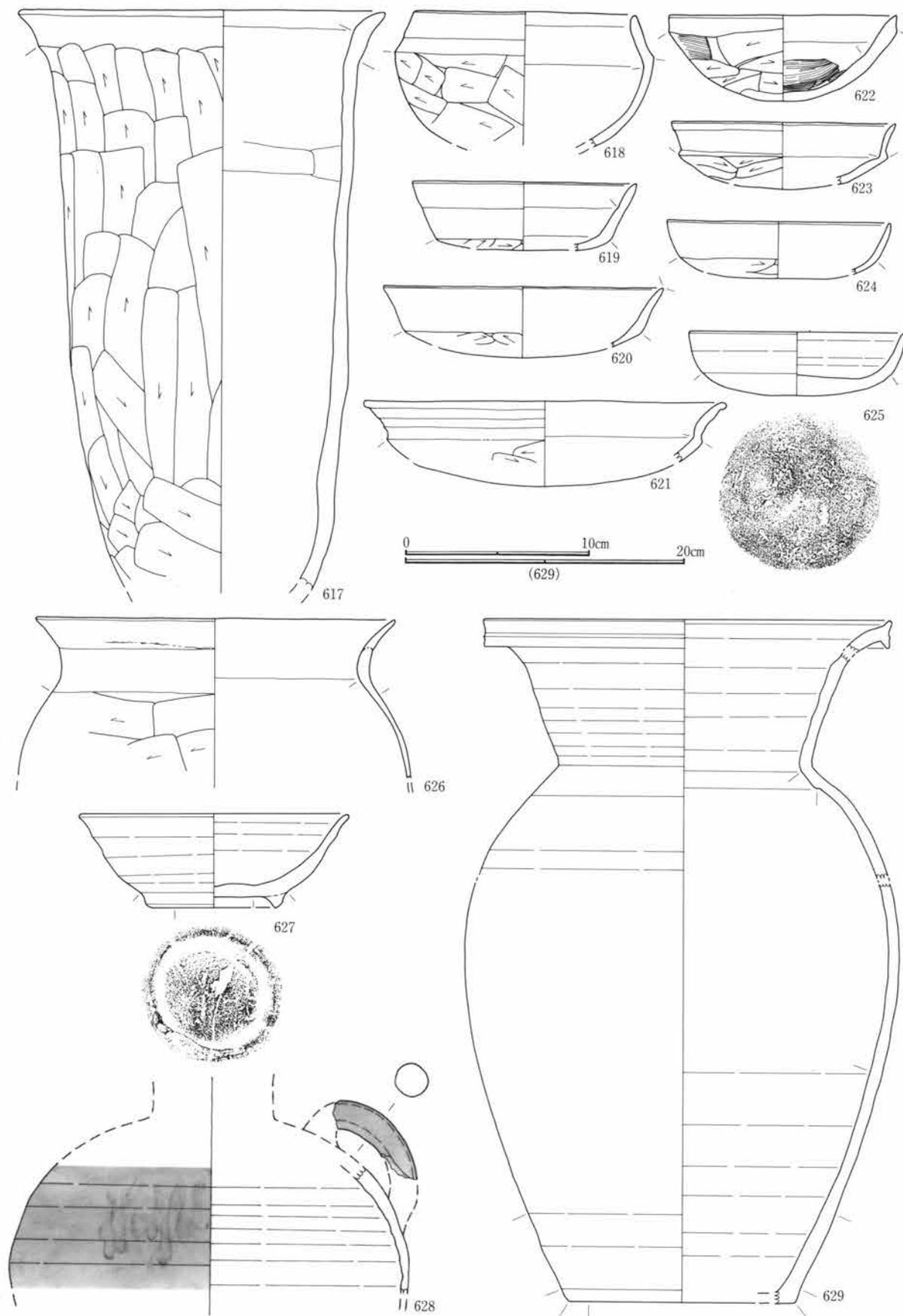
第252図 住居址出土遺物 土器(37)



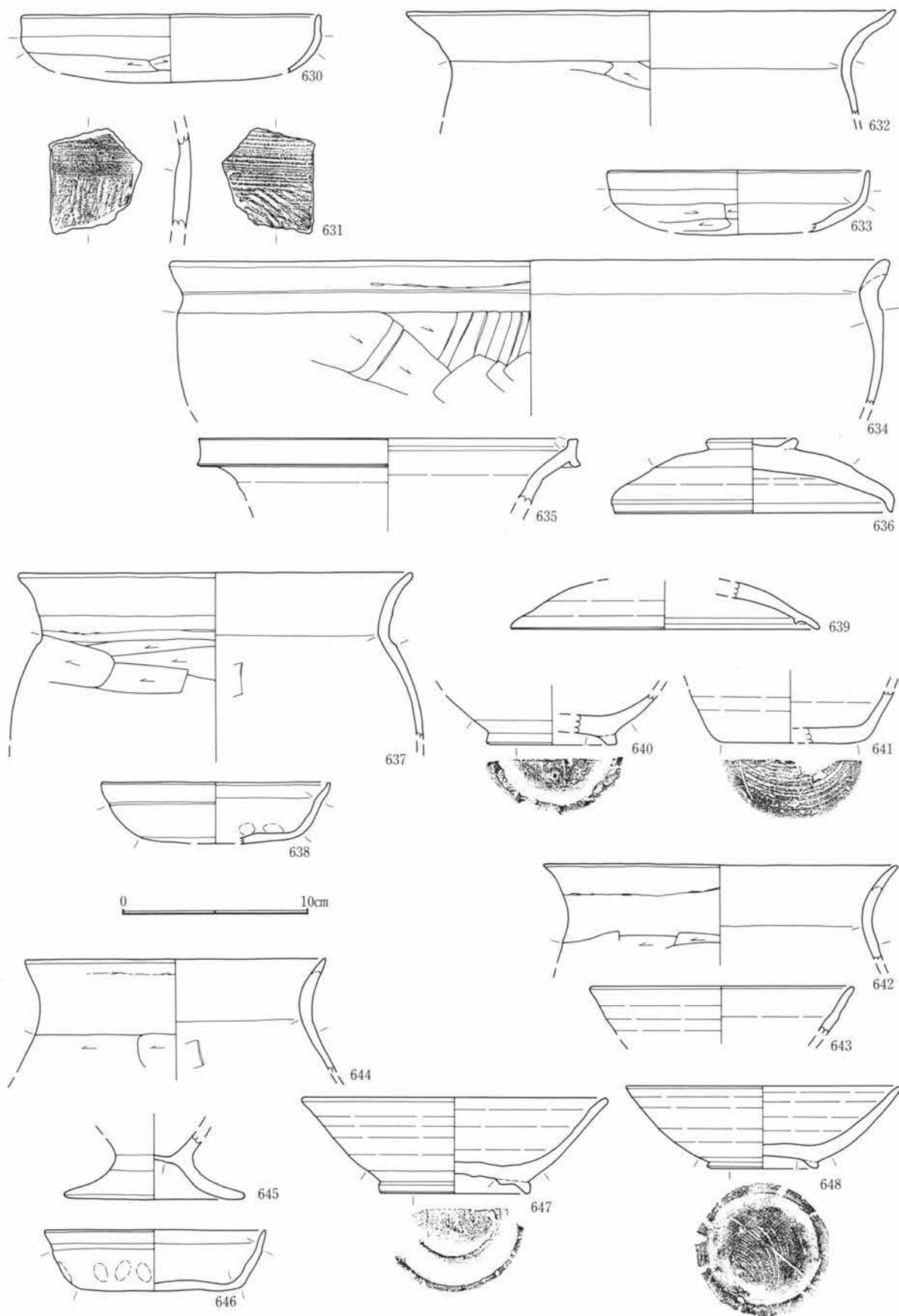
第253図 住居址出土遺物 土器(38)



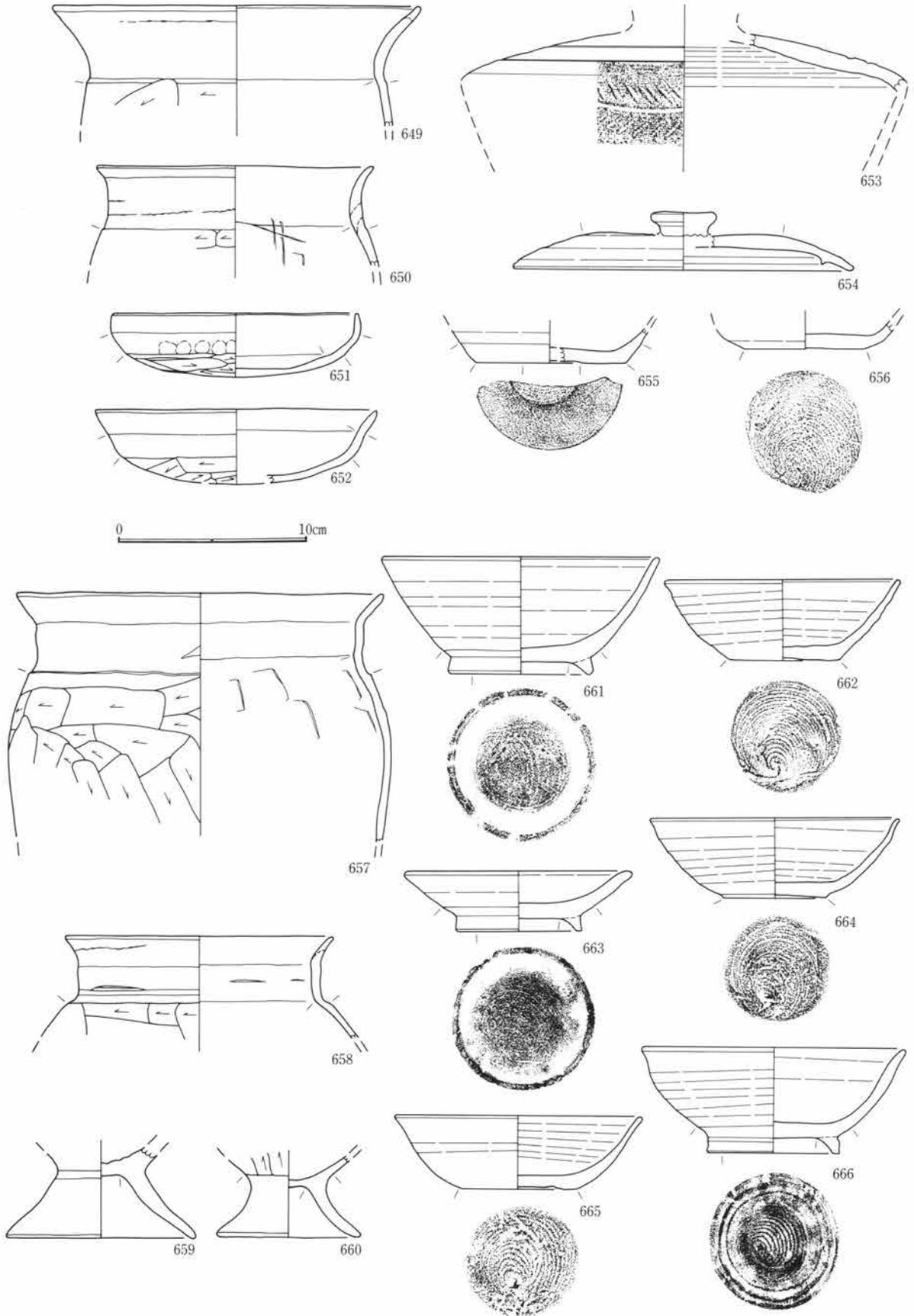
第254図 住居址出土遺物 土器(39)



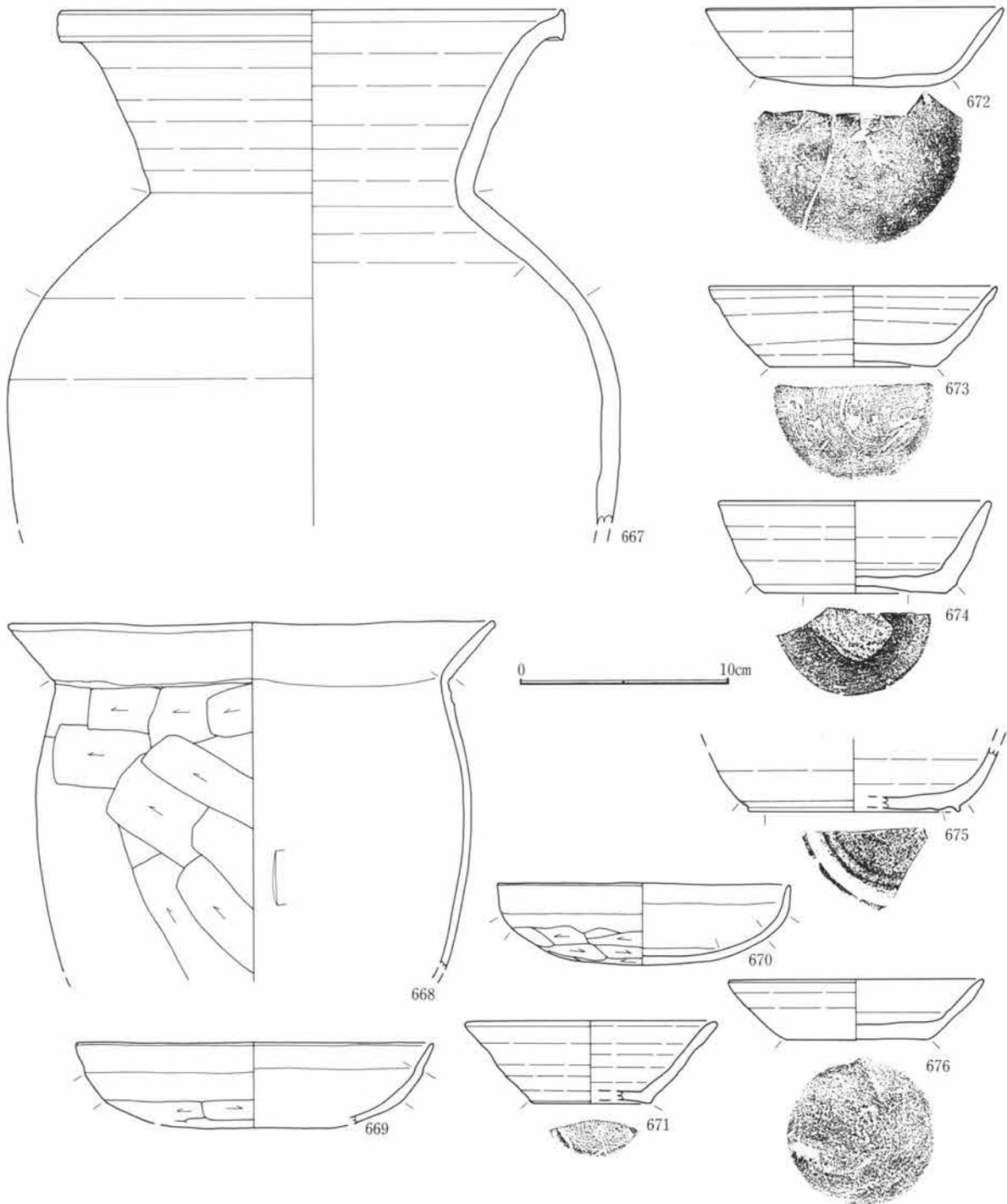
第255図 住居址出土遺物 土器(40)



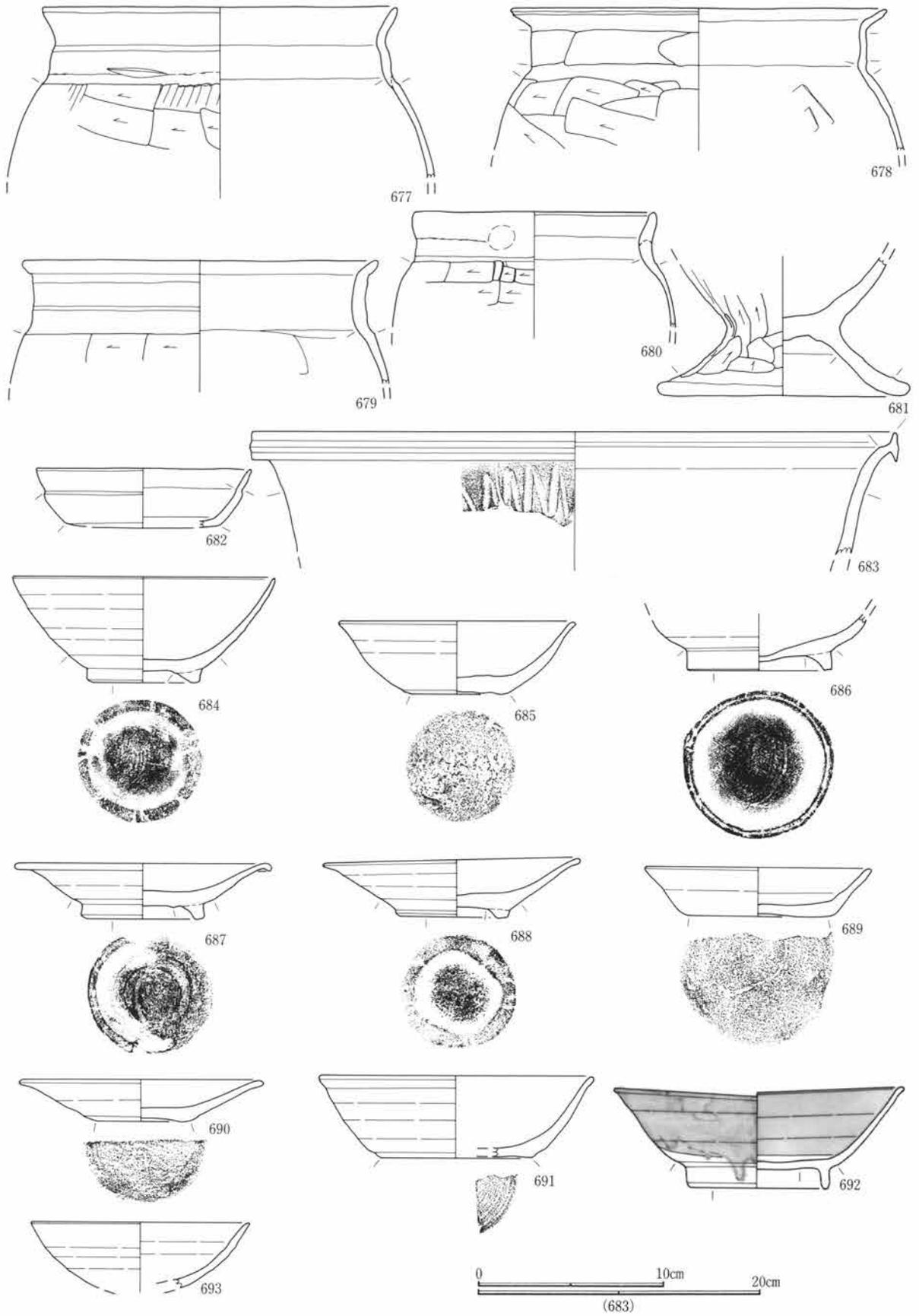
第256図 住居址出土遺物 土器(41)



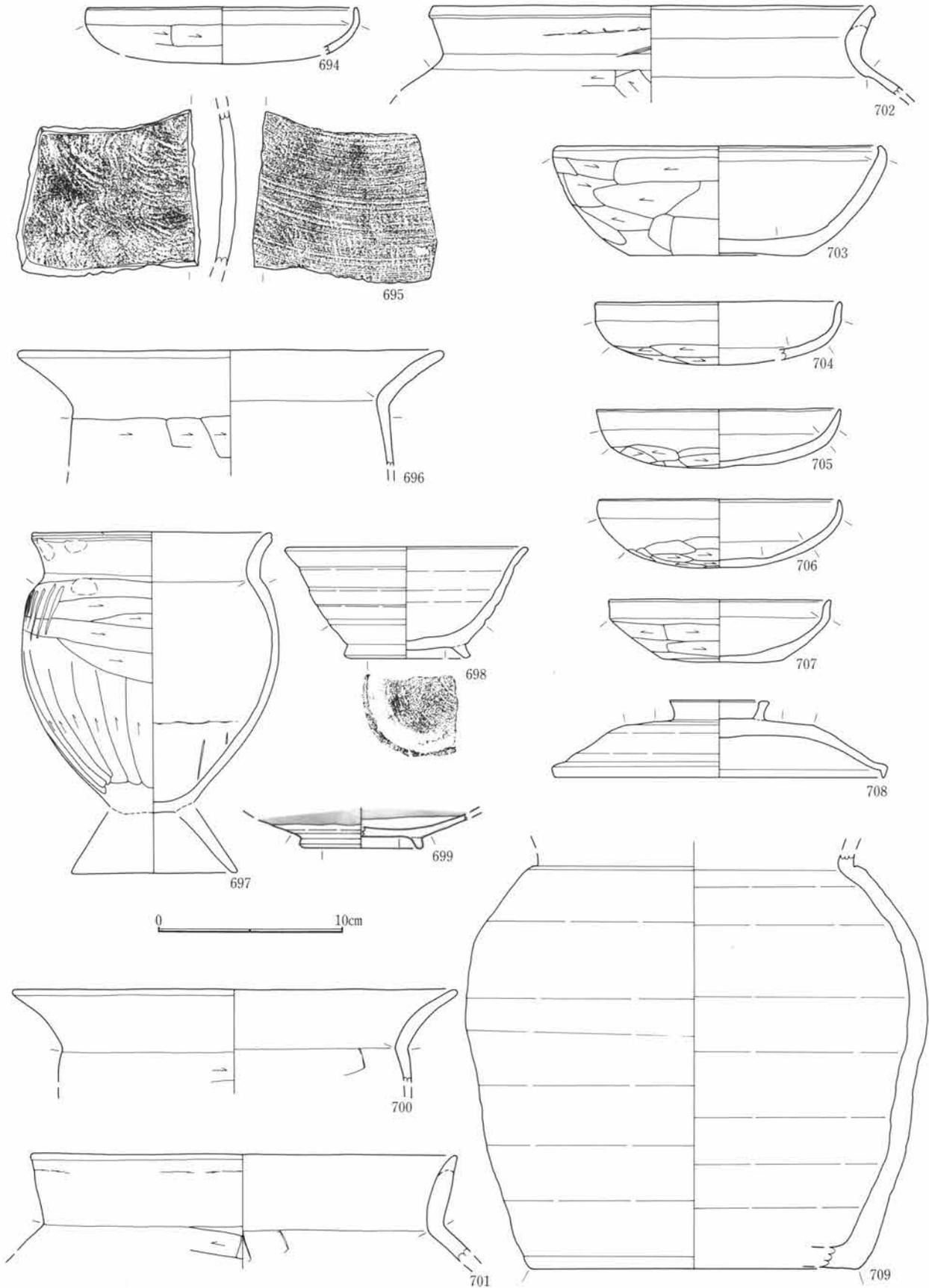
第257図 住居址出土遺物 土器(42)



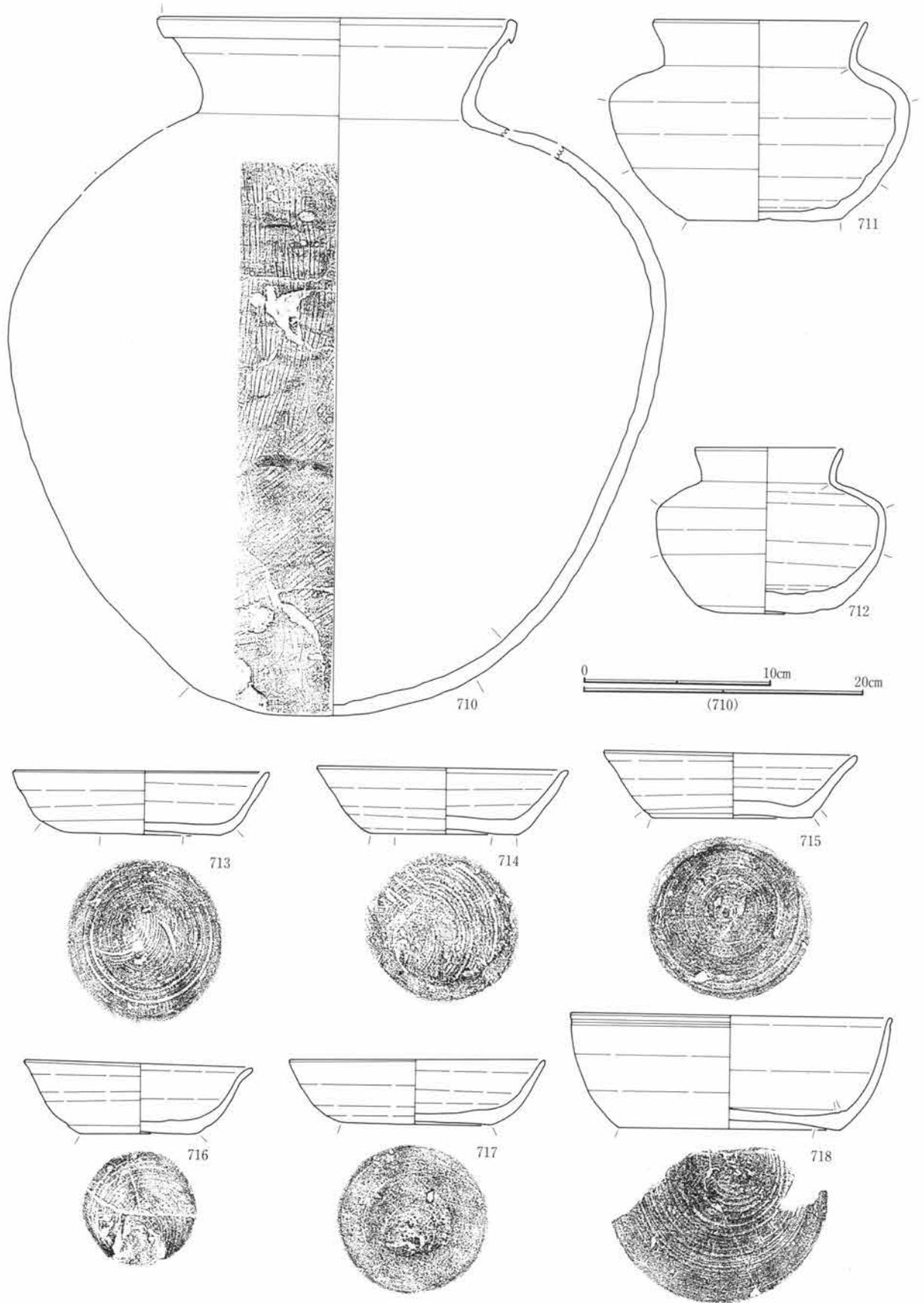
第258図 住居址出土遺物 土器(43)



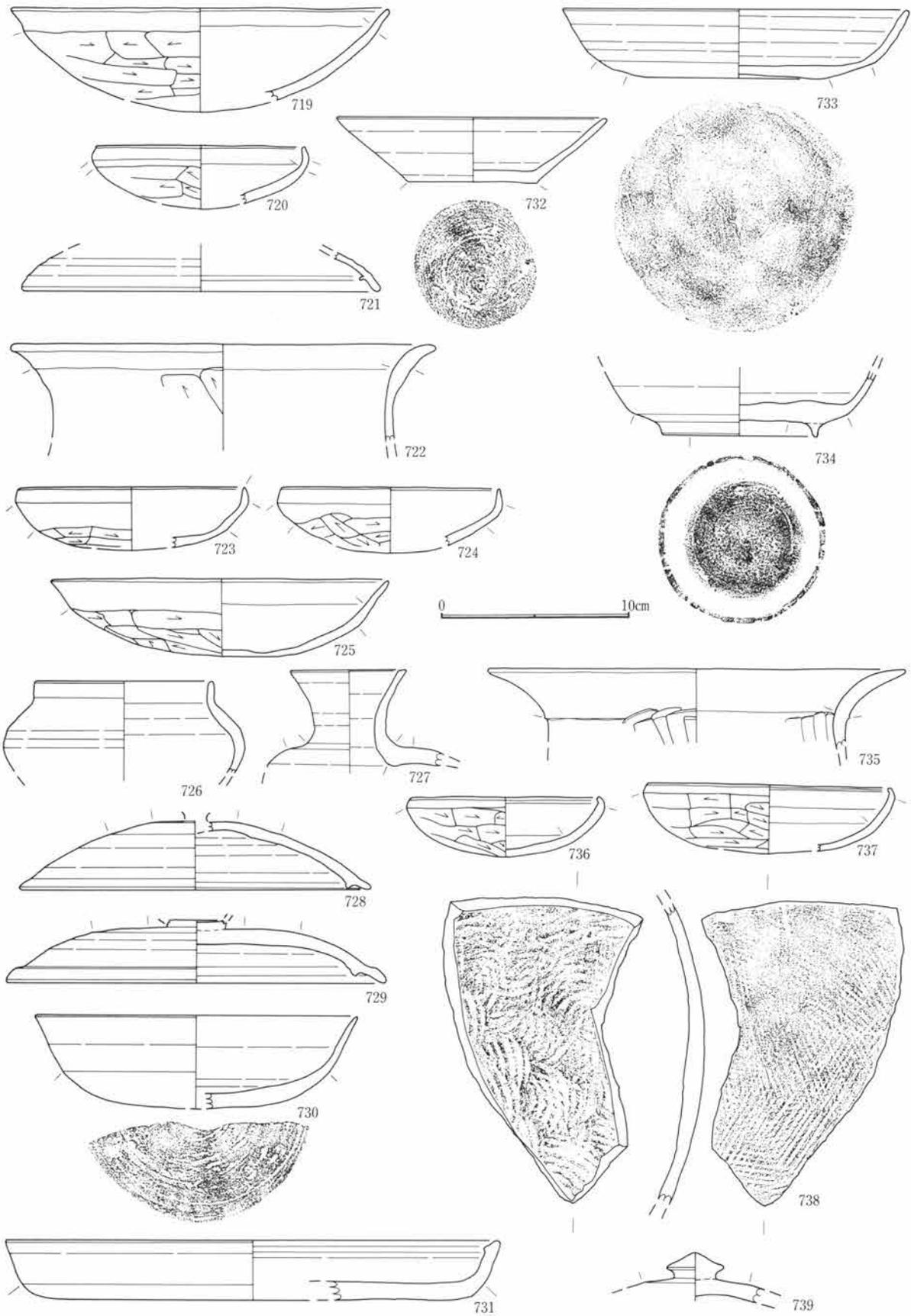
第259図 住居址出土遺物 土器(44)



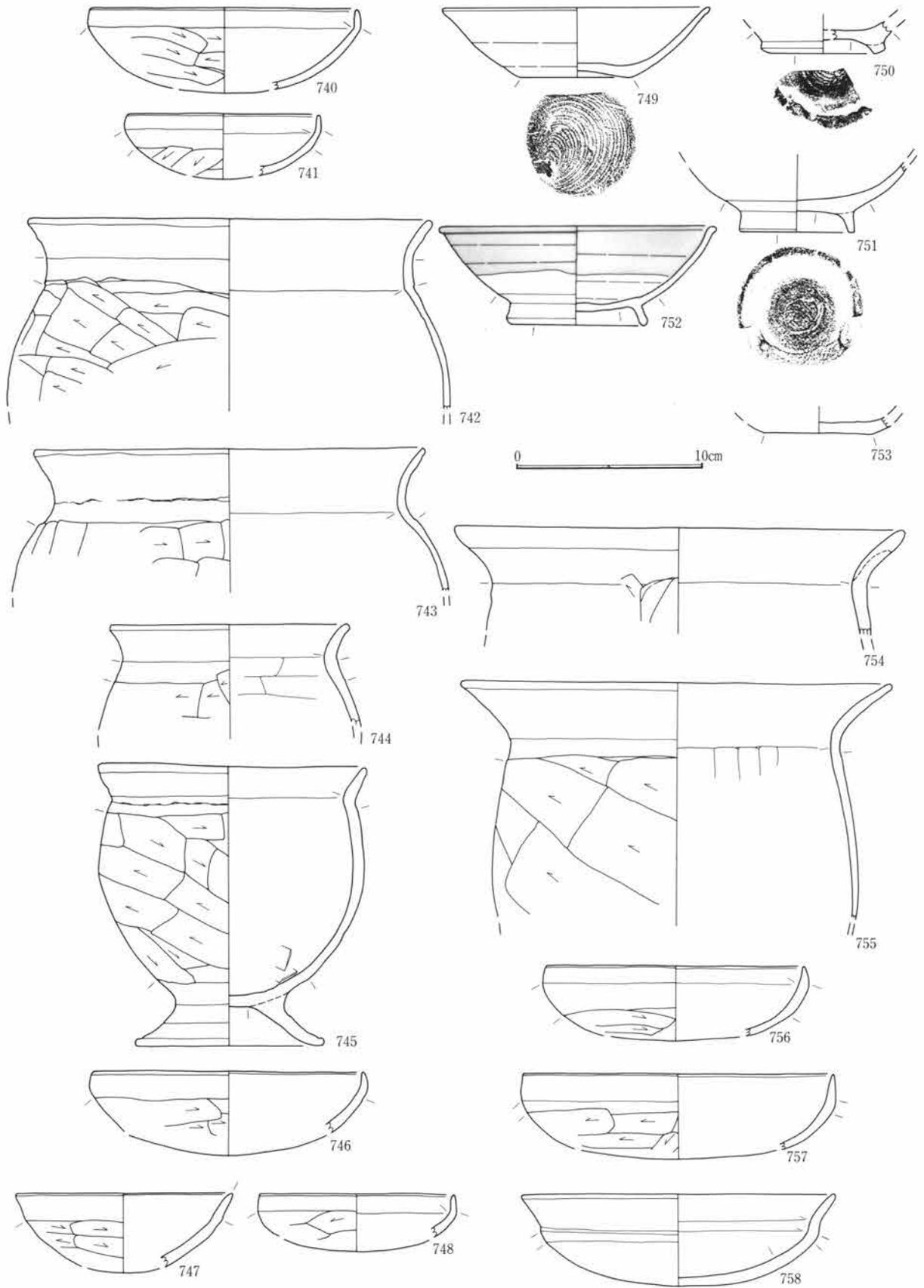
第260図 住居址出土遺物 土器(45)



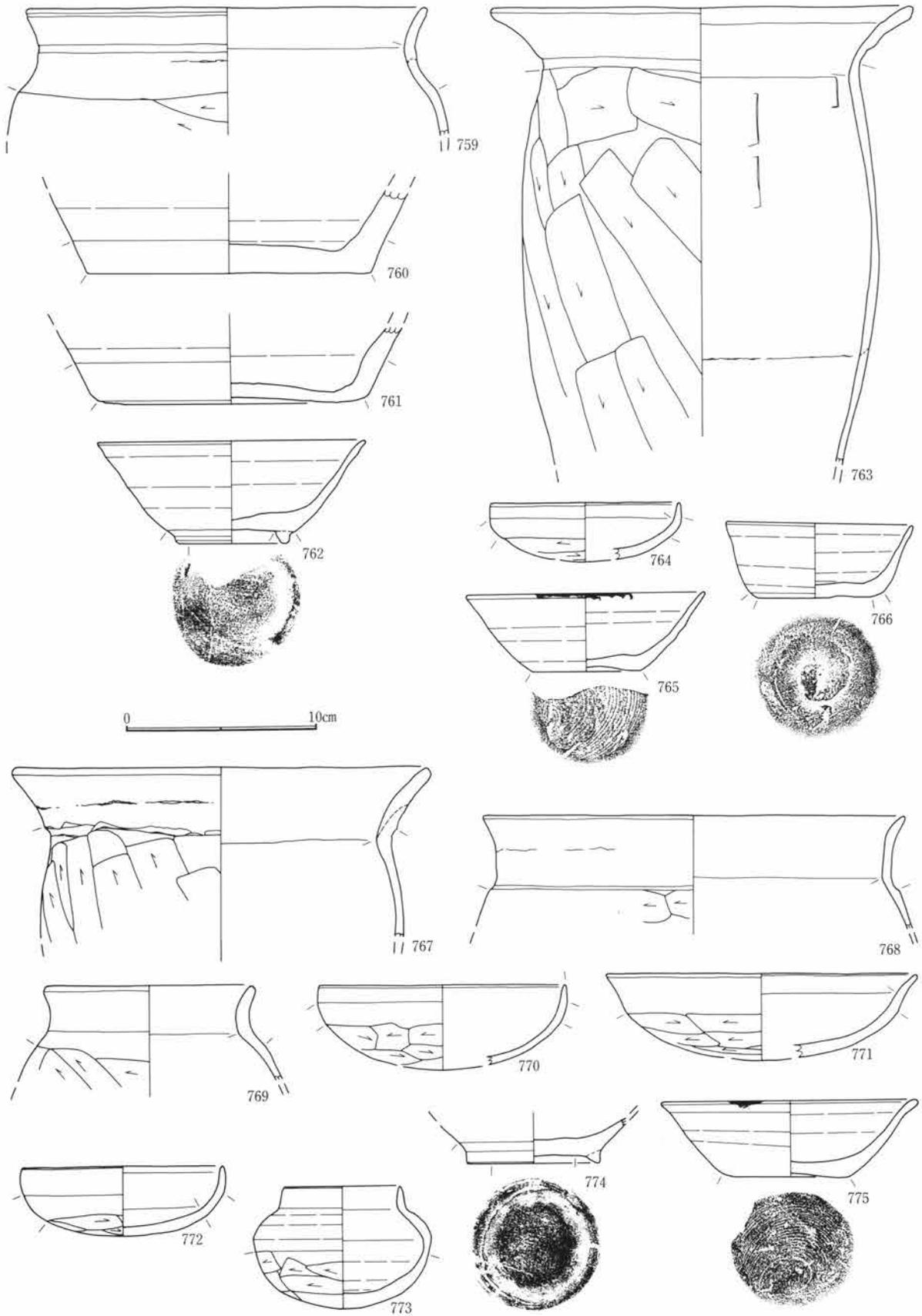
第261図 住居址出土遺物 土器(46)



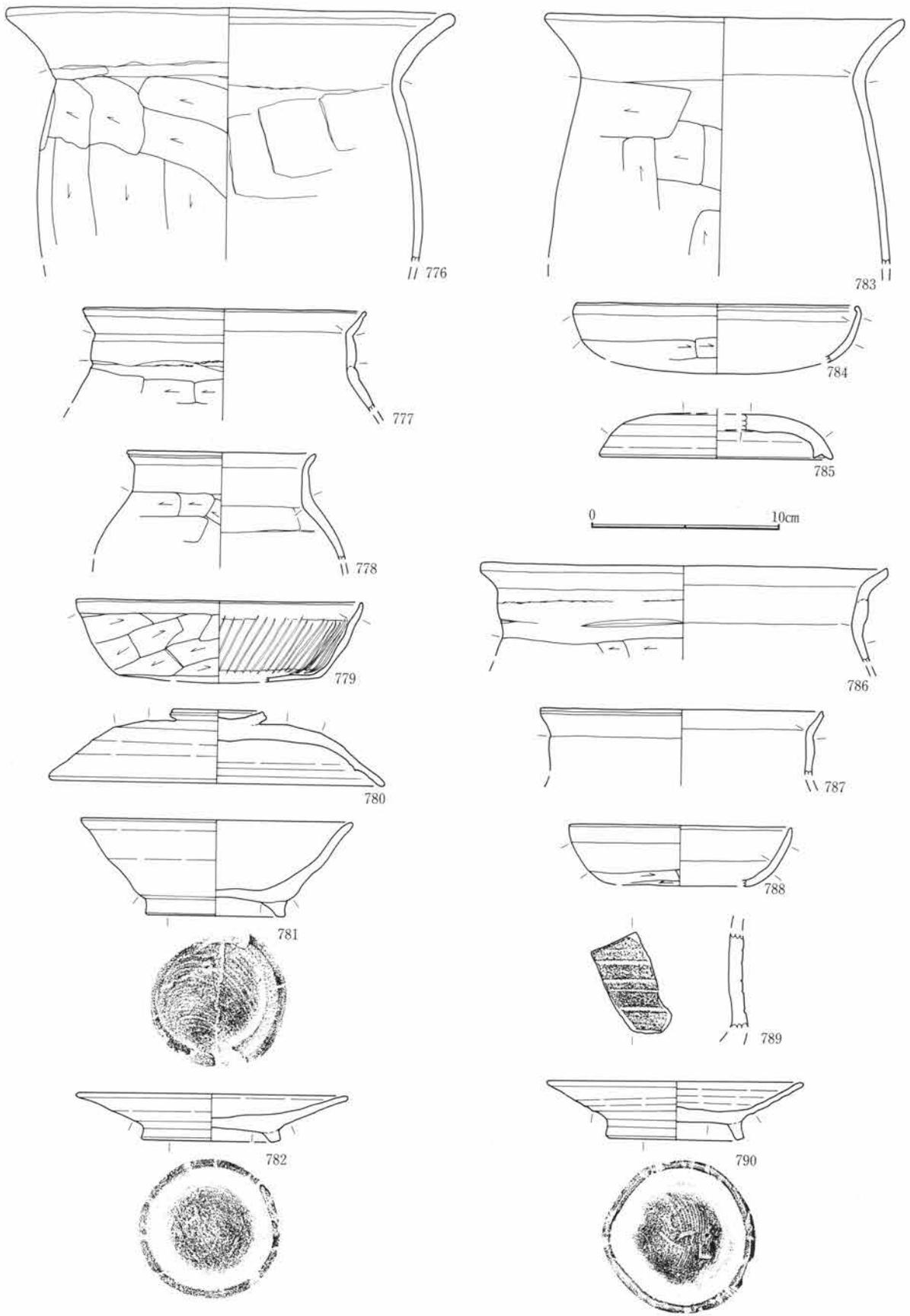
第262図 住居址出土遺物 土器(47)



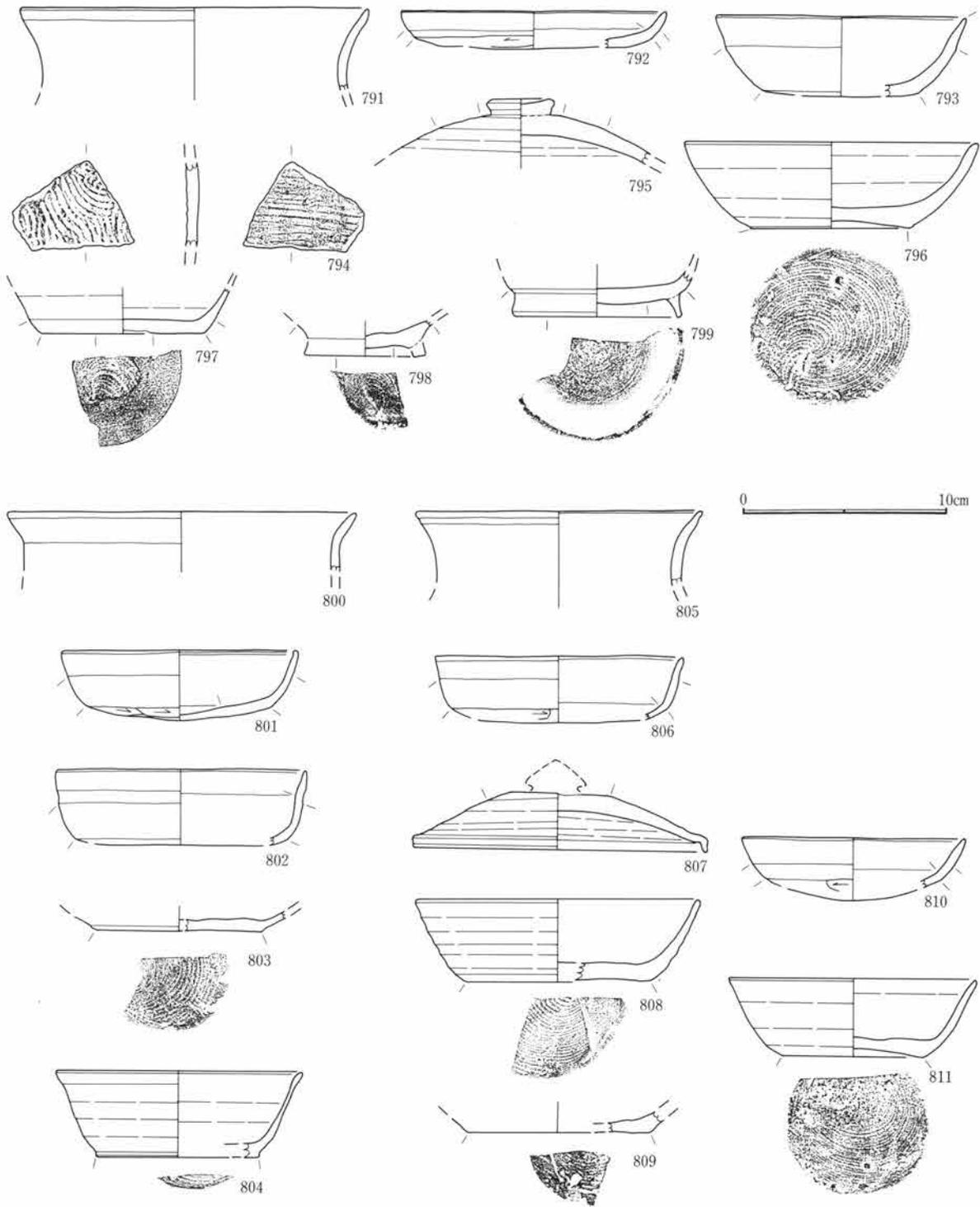
第263図 住居址出土遺物 土器(48)



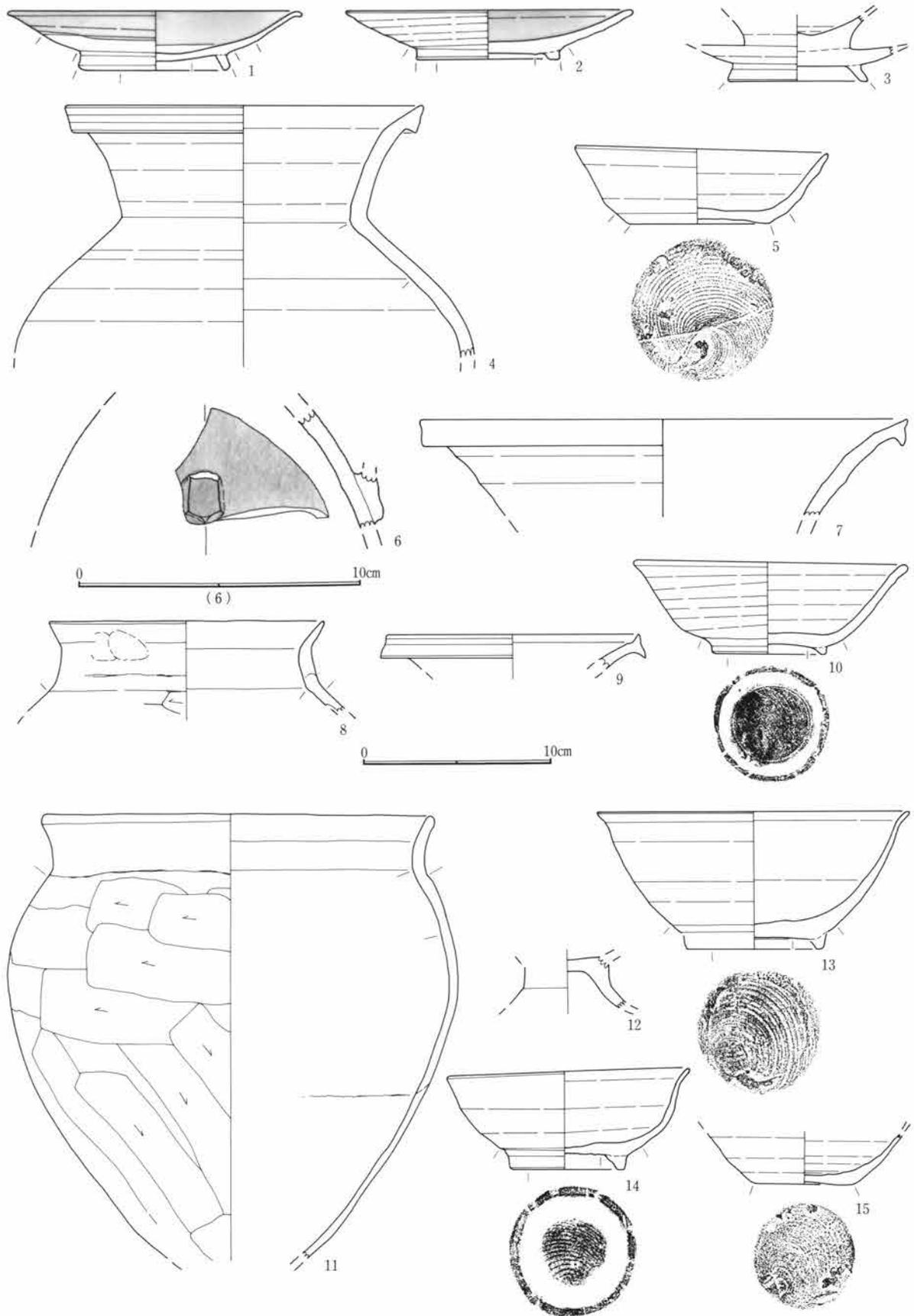
第264図 住居址出土遺物 土器(49)



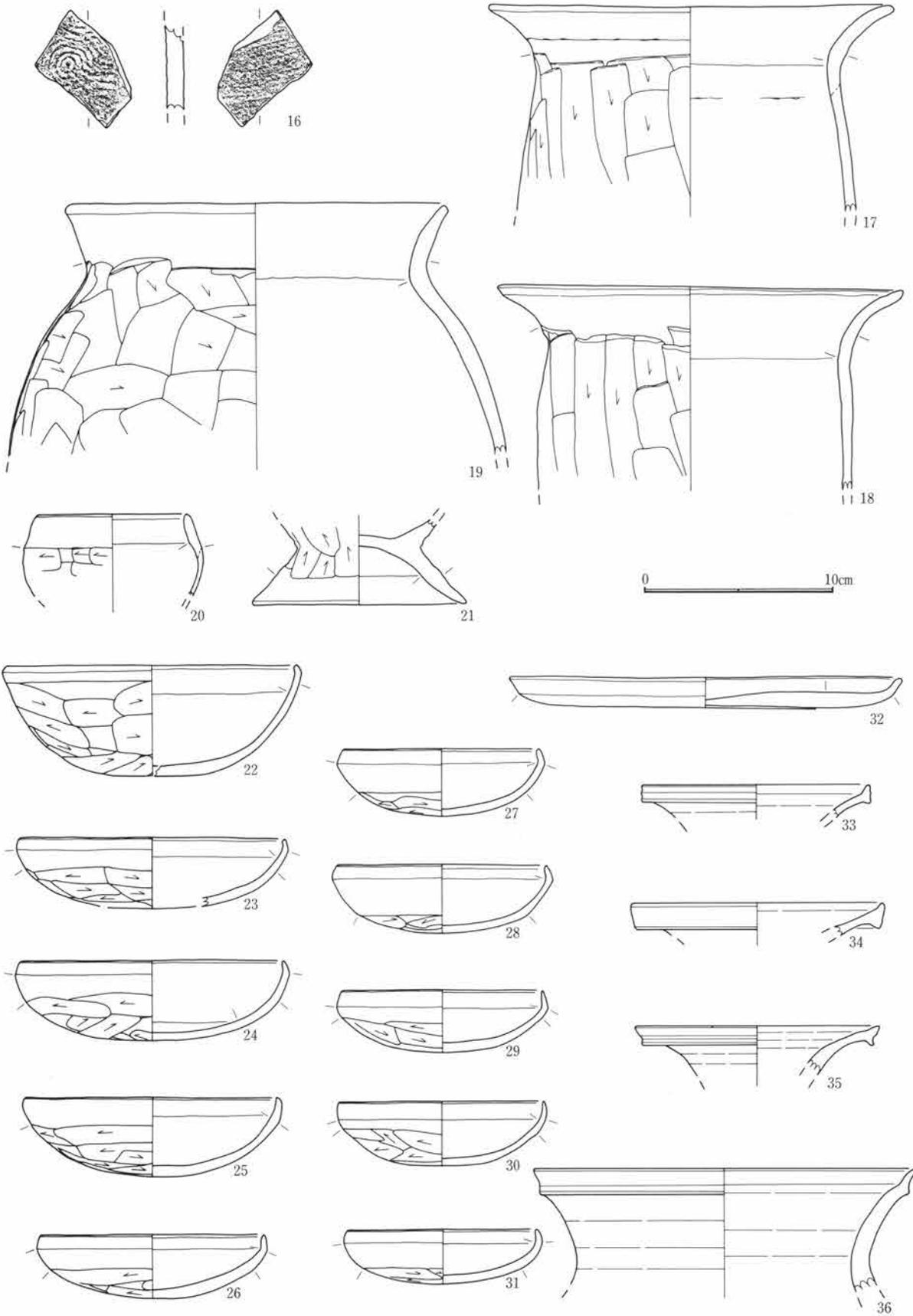
第265図 住居址出土遺物 土器(50)



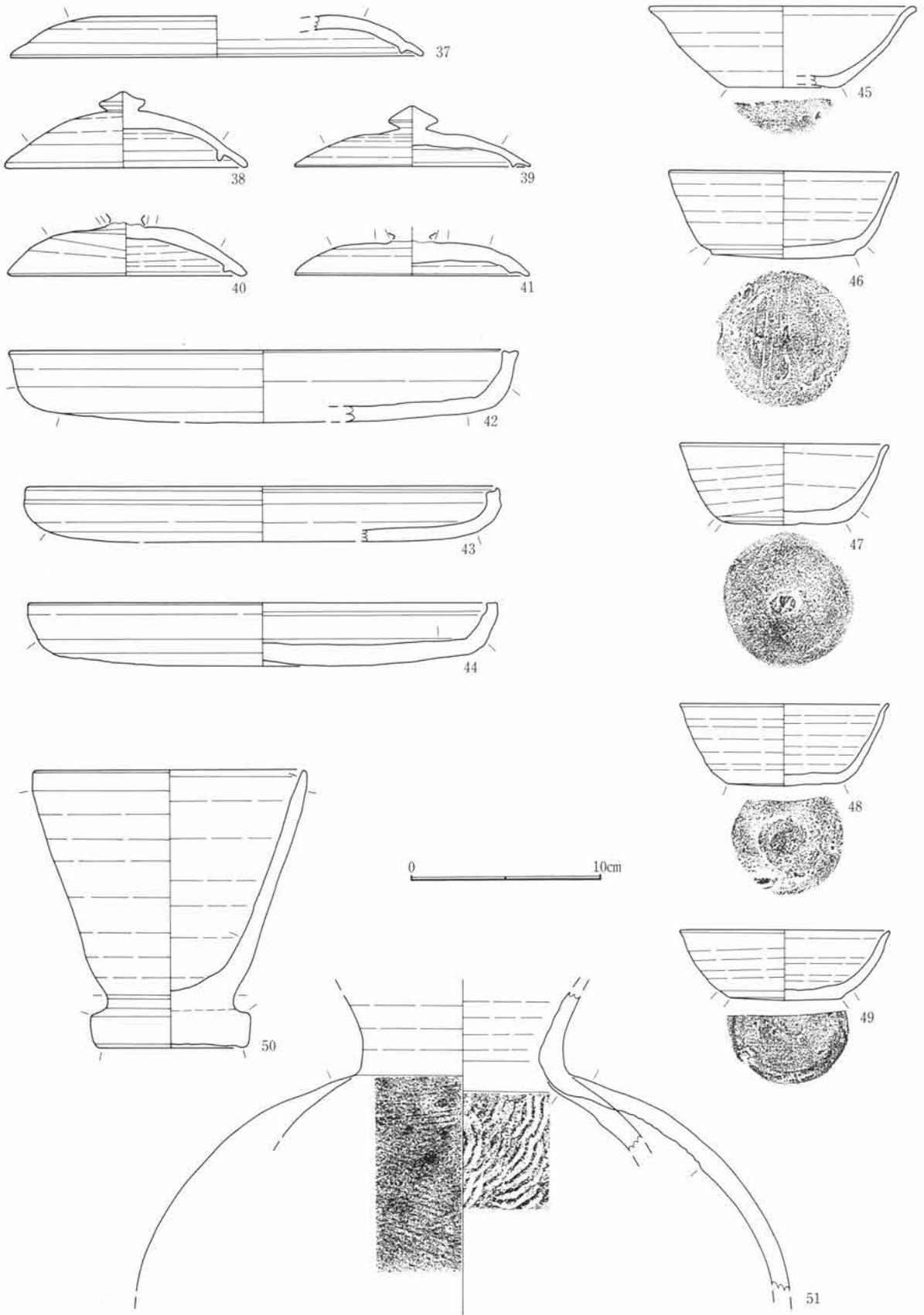
第266図 住居址出土遺物 土器(51)



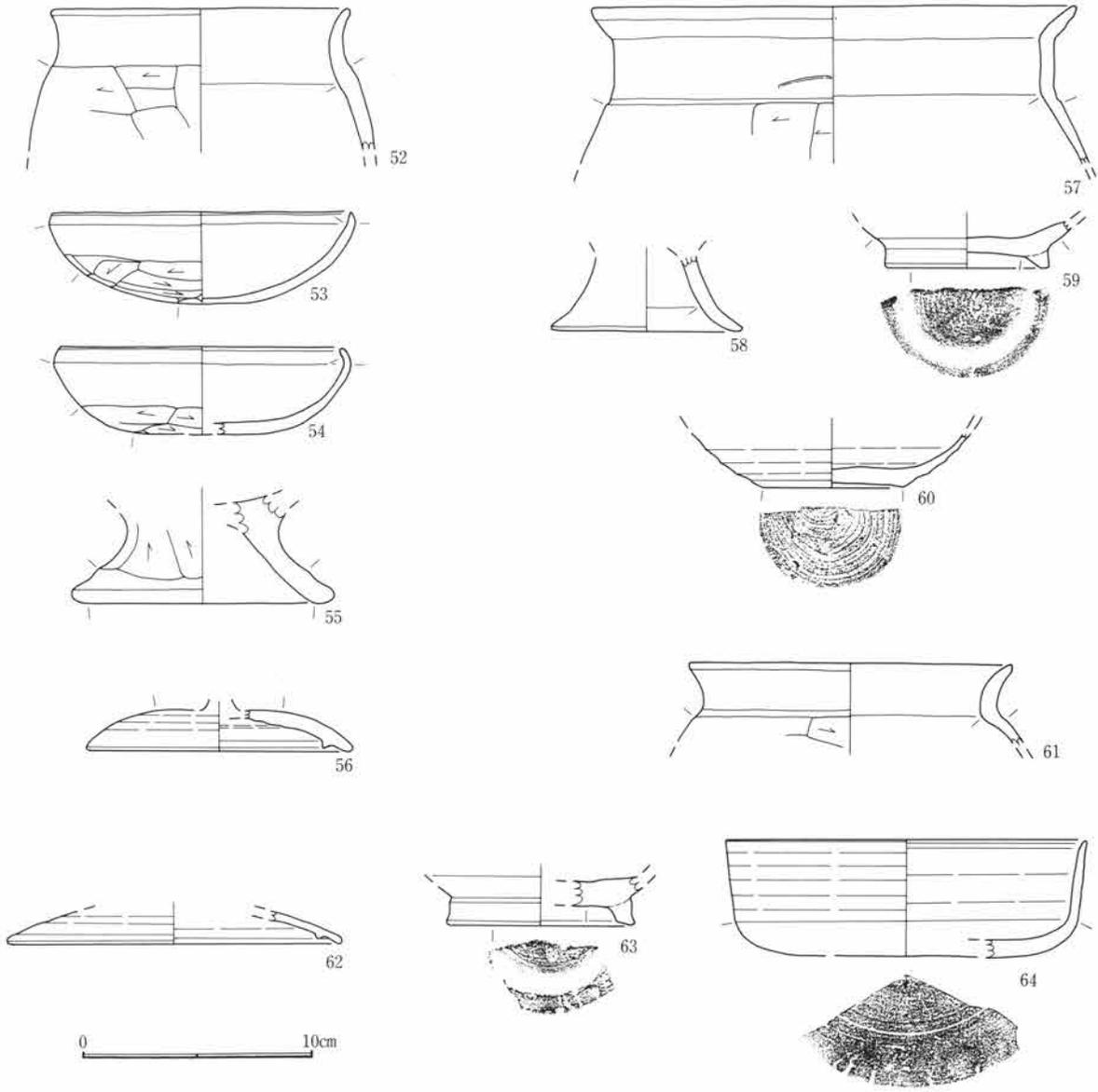
第267图 溝・土坑出土遺物 土器(1)



第268図 溝・土坑出土遺物 土器(2)



第269図 溝・土坑出土遺物 土器(3)



第270図 溝・土坑出土遺物 土器(4)

B 墨書土器

上栗須寺前遺跡からは、14点の墨書土器が出土している。そのうち13点までが1文字である。これだけの規模を有する大集落遺跡にしては際立って少量と言えよう。全体的に、この上信越自動車道関連の遺跡から出土した墨書土器は、集落の規模に比して非常に僅少である。例えば、最も多くの墨書土器が出土した吉井町矢田遺跡でも、奈良・平安時代の竪穴住居跡が約250棟検出されているような大集落遺跡であるにもかかわらず、出土した墨書土器は42点にすぎず、これが地域的特色とすることが出来る。

墨書土器の出土状況は、特定の遺構に集中すると言うわけではない。また、墨書の部位・位置・方向を見ても、かなりばらつきがあり、特段の傾向は見られないようである。記載してある文字の中では、「多」が8点と最も多い。同じ「多」の文字であっても、極めて達筆のもの（1・13）から、字形が崩れてとても単独では判読できず、他の類例との兼ね合いから辛うじて「多」と判読できるもの（5）まで、字形はまちまちである。字形が崩れたものは、文字を文字として認識できていない人物が、見よう見まねで草書体の字形に近い「多」を書いたものと思われるが、このことは、近年盛んに言われているように、村落の中では文字が文字本来のものとして受容されたものではなく、あくまで標識・記号的なものに過ぎなかったということを示していよう。「多」の意味するところについては、隣接する地名である「多胡郡」を意味すると想定したいところであろうが、1に「多得」とあるので、吉祥句と考えるべきであろう。さらに、12にも「神饒」と吉祥句的な用語があるので、本遺跡出土の墨書土器14点については、すべて吉祥句的な語句を記したものと解釈してよいであろう。

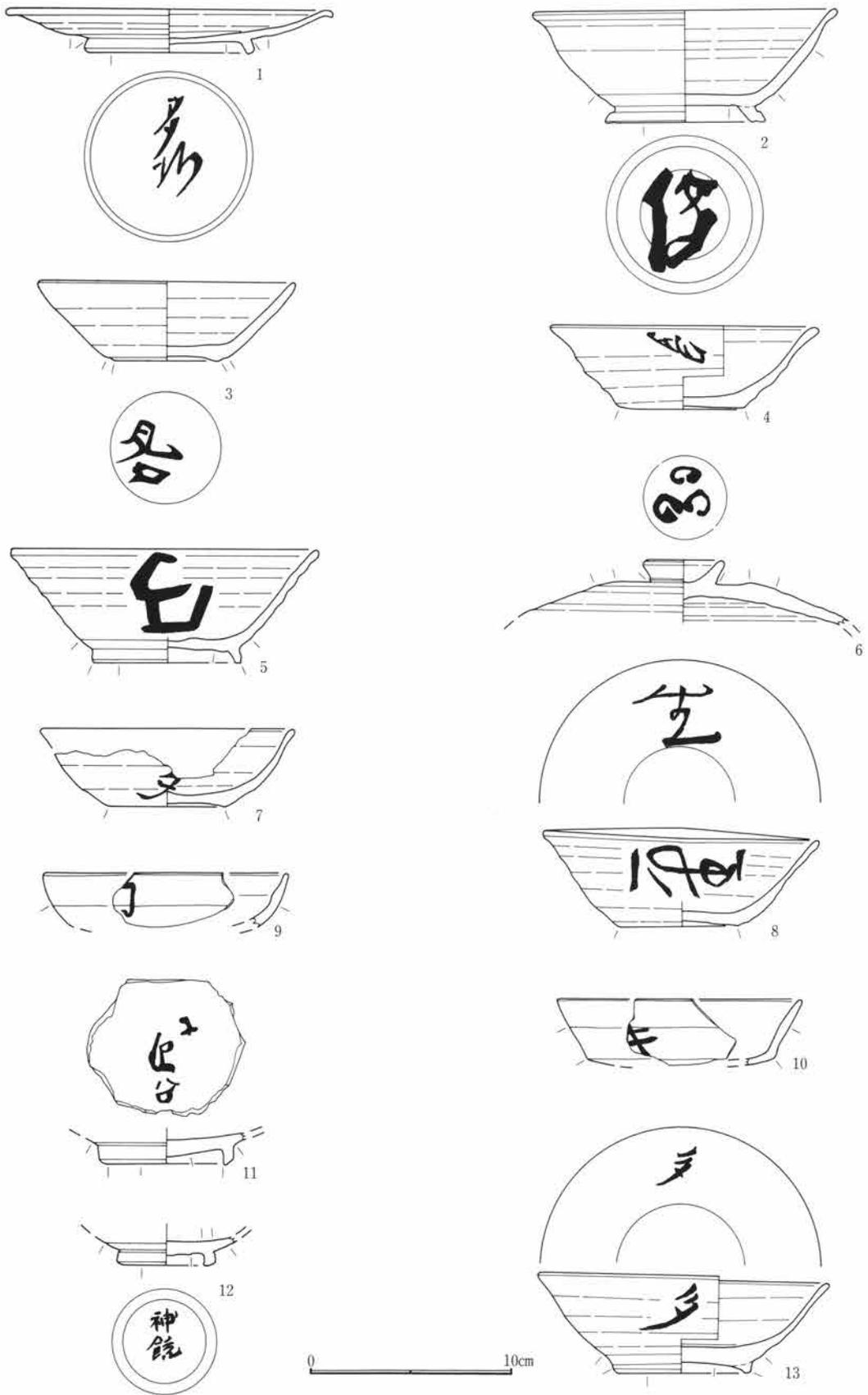
近年の諸研究の成果に依れば、集落遺跡出土の墨書土器の殆どのものは、集落全体、もしくは一単位集団内、或いはより狭く一住居単位内といった非常に限定された空間・人的関係の中における祭祀や儀礼等の行為に伴って使用されたものであり、墨書された文字の有する意味は、おそらくはそれぞれの限定されたエリアや集団内においてのみ通用する祭儀様式の中でのみ通用するものであったと考えられる。だからこそ後世の我々には全く意味の取りにくい文字となるのである。すなわち、一定の祭祀・儀礼等の行為に伴って、行為の主体者たちがそれぞれの集団で共通する文字が記されるわけである。墨書土器は、日常的な什器が、ある時に文字が記されることによって非日常的な祭祀・儀礼等の行為に際して用いられる容器に変身し、他の日常的な什器とは区別され、特殊な用途と機能が付加されるのだと考えられる。

墨書土器が大量に出土した大規模な集落遺跡を素材として、墨書土器を集落形態および時間的変遷の中で検討した場合、それぞれの土器に記された文字から、集落内の単位集団の消長関係や集落構造の一端を解明することが出来るが、こうした一方で、大規模な集落遺跡であっても墨書土器が非常に少量しか出土していないところや、墨書土器の点数自体は多くとも、共通する文字を記した物が非常に少なく、記載文字がそれぞれにまちまちで、集団の標識的文字と捉えることが難しいような事例も存在している。集落間の墨書土器の多寡が何を意味しているのかについては、現時点では判明しない部分も多いが、墨書土器が大量に出土した遺跡が目目される中で、本遺跡のように非常に少量しか出土しない遺跡についても、それとの対比で注目して行くべきであり、用途・機能・使用形態など墨書土器全般のあり方を考えていく上で、出土遺跡毎の墨書土器の粗密の問題も考慮に入れていく必要がある。また、集落内の単位集団の動向といった細部を重視することと同様、一郡内とか一国内といった相当広い領域内での墨書土器出土遺跡の趨勢にも着目し、地域全体もしくは各地域間など、巨視的な観点で墨書土器の動向を検討することも、墨書土器論の構築に向けて不可欠であろう。

	出土遺構	器種	墨書の部位・方向	積文
1	62号住居跡	灰釉・高台付皿	底部外面	「多得」
2	62号住居跡	須恵器・高台付坏	底部外面	「得」
3	78号住居跡	須恵器・坏	底部外面	「多」か？
4	93号住居跡	須恵器・坏	体部外面・横位	「多」
5	118号住居跡	須恵器・高台付坏	体部外面・逆位	「多」
6	151号住居跡	須恵器・蓋	摘み部外面	「品」
7	163号住居跡	須恵器・坏	体部外面・正位	「多」
8	178号住居跡	須恵器・坏	体部外面・横位、内面・正位	「東一」・「生」
9	187号住居跡	土師器・碗	体部外面	判読不能
10	187号住居跡	土師器・坏	体部外面・横位	「++」
11	3009号土坑跡	灰釉・高台付坏	底部内面	「多」
12	3096号土坑跡	灰釉・高台付坏	底部外面	「神饒」
13	5255号土坑跡	須恵器・高台付坏	体部内外面・正位	「多」
14	163号住居跡	須恵器・高台付坏	体部外面・正位	「多」か？

参考文献

- 1、平川 南「墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』35、1991）
- 2、平川 南「土器に記された文字」（『月刊文化財』362、1993）
- 3、松村 恵司「特集・墨書土器の世界から」（『月刊文化財』363、1993）
- 4、高島 英之「古代東国の村落と文字」（関和彦編『古代王権と交流 2 古代東国の民衆と社会』名著出版 1994）
- 5、高島 英之「矢田遺跡出土の平安期における文字資料について」（勸群馬県埋蔵文化財調査事業団『矢田遺跡』3 1992）
- 6、高島 英之「多胡蛇黒遺跡出土の墨書土器と漆紙」（勸群馬県埋蔵文化財調査事業団『多胡蛇黒遺跡』1993）



第271図 墨書土器

C 古代瓦と中世瓦

瓦類は、男・女・軒瓦などを用いた、古代・中世では数少ない工業的なシステム製品であった。また瓦使用建物に対して製作地であった瓦屋は見込生産を行ない得る、いわば一貫生産の背景に基づいて製作されていた。そのため瓦観察に当っては量産物と見なし、共通項目を作成して観察表とした。

一覧化の凡例・例言は次のとおりである。瓦種は、男・女・鏡・宇瓦である。出土位置は、遺構名称以下の床面・埋土などの記述を一覧表中の文字量の関係から省略した。住居跡例2点のうち126住居例はカマド、31住居例はカマド材である。瓦製作法は、桶巻作の項目立を必要とした理由として、古代の上野地域には男瓦の場合においても寄木状の圧痕が時々認められるので、その項目を設けた。桶巻作の方法は佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌第58巻2号』1972による。女瓦については、上野国における8世紀以前の主体技法であり、男瓦は上野地域の地域的技法である。一枚作の可能性は、桶巻作に対する一枚作で、上野地域では主として9世紀以降、男瓦の一部にも認められ、女瓦については8世紀中頃より見られる。粘土板剥取りは、粘土塊からのタタラ板を製作するための糸切痕を指す。桶巻作の際に生ずるその粘土板の接合についての有・無を○となして記入した。布の圧痕は、桶巻作の際の布の合せ目の有・無をとらえ、○となして記入し、布の圧痕の擦り消しについても、布の合せ目が残ることが当時において嫌われていたらしく擦り消される場合も多くあり、さらに布目そのものの擦り消しも8世紀中頃以前の上野地域の女瓦に多く認められる技法でもある。轆轤の使用痕は、回転傷の条痕を認めた場合に記入してある。△は疑似である。型式名は、1～3類まで分類した。叩技法は、叩目の状態について記入したが、素文の場合の、撫や削りについても加えた。側面取りは瓦側部の篋削の面取回数を捉えた。面取りは、男・女瓦の広端側部に多いのが常である。胎土は焼き上りの状態を記入してあり、爪で傷の付く個体が軟、付かない個体を硬とし、その中間的な質を並とした。備考は、胎土から見た推定の製作地名を記入してある。吉井とは、多野郡吉井町の地質でいう吉井層を意識し、藤岡は、藤岡市西方の丘陵地帯の板鼻層を、乗附は、高崎市西部の観音山丘陵・乗附古窯跡群製を意識し、地質上は板鼻層である。秋間は、安中市秋間古窯跡群で、板鼻層を意識している。

分類は厚手であり、女瓦では桶巻作を推定しうる個体を、男瓦では、その女瓦に対応し、組瓦となりうる個体を捉え、細目は、撫をAとし女瓦に番号1・2・3・5・6があり、全女瓦11点の45%を占める。Bは平行叩の9で、全女瓦中の9%、Cは細叩擦り消しの7・8で18%を占める。1類は全16個体中の69%を占め古代の瓦の主をなす。時期は、7世紀終末から8世紀前半と推定される。2類は、女瓦では桶巻作ではなく、一枚作と推定される個体、男瓦ではやや薄手になった個体を捉えた。撫のAが12・13・15に、削のBが14にある。全4点で25%を占める。時期は8世紀後半から9世紀前半におよぶと推定される。3類は、撫のAが16にあり、1点のみで全体の6%を占める。製作は9世紀中頃から後半頃と考えられる。

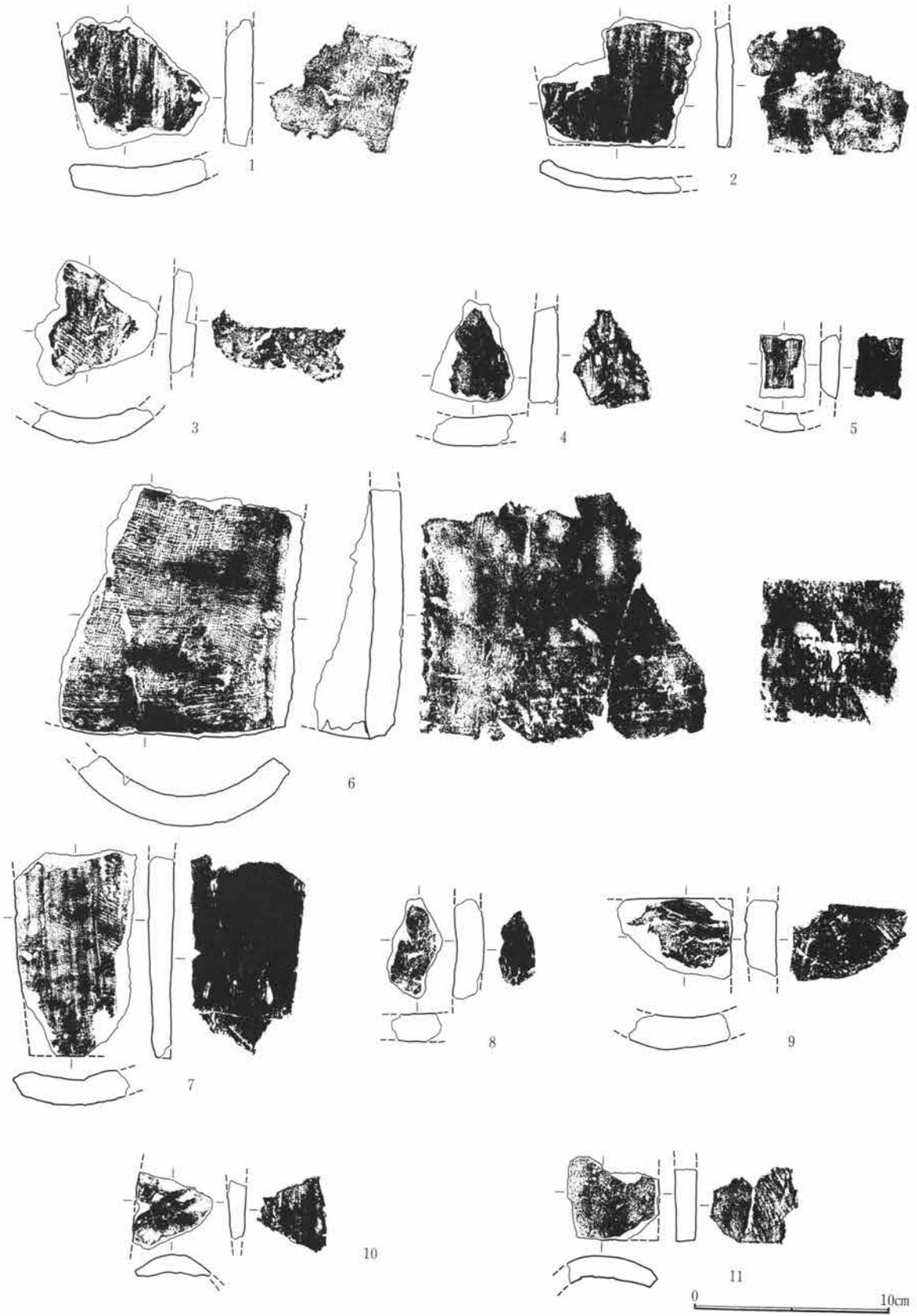
考察として、先ず、これらの瓦類がどこで使用されたものかと言う点を考えたい。出土瓦の割れ口は、カマド出土の個体を除くと、旧時の割れ口は消耗しているため、それらの破片が地上や、人々の生活の中で風化消耗したと考えられる。そのため、主体製作地か使用地は調査場所より離れた地区と推測される。また製作の窯跡関連でないことは、多数の生産地瓦が混在していることから否定される。隣接の既出古瓦出土地は、1995に木津博明「群馬県下の官衙とその周辺」『地方官衙とその周辺、シンポジウム3』（日本考古学協会茨城大会実行委員会）が示した推定緑野郡衙・郡寺、藤岡市下大塚三之久保古瓦既出地（推定郡寺）や下大塚、上栗須遺跡に近接し、本遺跡の性格とも係わると推考される。そのことは、少ない瓦個体中、押印銘（文字不明）が13に、「+」篋書銘が6に、文字瓦が2点（全体の13%）含まれる点も、示唆的である。よってこれらの一群の瓦は、緑野郡寺の所用瓦であったこともありうると考えたい。また出土石材中には基壇化粧と思える部材が含まれており、その意味は深い。なお、中世瓦については、付近の寺院所用と考えたい。

古代瓦一覧 (挿図第272・273図 写真第90・91図)

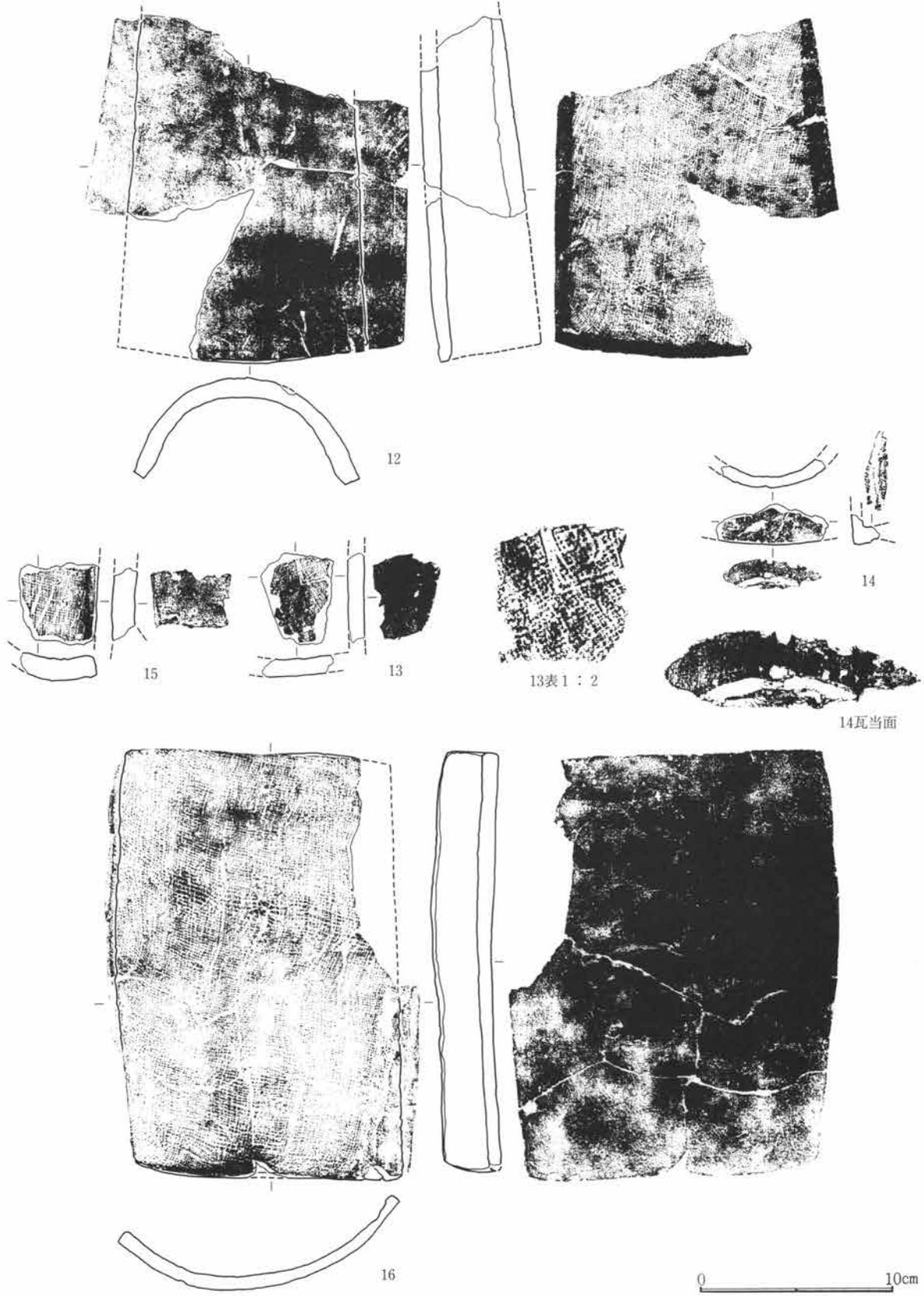
No.	出土位置	瓦種	製作法 桶痕	一枚作 可能性	粘土板		布圧痕		轆轤の 使用痕	型式名称・ 叩技法	瓦乾燥 時圧痕	側面 面取	胎土	色調	備考
					剥取	接合	合目	擦消							
1	56溝	女	○	なし	なし	○	○	全面	○	1類A撫	なし	3	並	灰	吉井
2	1168土坑	女	○	なし	紐か?	なし	なし	部分	△	1類A撫	なし	2	締	褐	吉井
3	30溝	女	○	なし	○	○	なし	なし	○	1類A撫	なし	—	軟	淡灰	藤岡・乗附
4	5235土坑	女	○	なし	表○	なし	なし	なし	?	1類	なし	—	硬	灰	乗附か秋間
5	5218土坑	女	○	なし	なし	なし	○	なし	○	1類A撫	なし	—	並	淡褐	吉井
6	2203土坑	女	なし	○	なし	なし	なし	なし	なし	1類A撫	なし	2	硬	暗灰	吉井、文字
7	2203土坑	女	○	なし	表○	なし	?	なし	○	1類C細消	なし	3	並	淡黄	吉井
8	55溝	女	?	?	なし	なし	なし	?	なし	1類C細消	なし	—	軟	淡褐	藤岡・乗附
9	2511土坑	女	なし	なし	なし	なし	なし	なし	?	1類B平行	なし	3	軟	橙	乗附
10	56溝	男	○	なし	なし	なし	○	なし	—	1類不明	—	—	軟	淡褐	藤岡
11	50溝	男	○	なし	○	△	なし	なし	○	1類不明	なし	3	締	灰	吉井
12	126住居	男	なし	○	裏○	なし	二重	なし	なし	2類A撫	なし	2	締	暗灰	吉井
13	4溝	女	なし	?	表○	なし	なし	なし	?	2類A撫	なし	1	硬	灰	藤岡、文字
14	30溝	鏡	なし	—	—	—	—	—	?	2類B削	なし	—	締	灰	吉井
15	31住居	宇	なし	?	表○	なし	なし	なし	なし	2類A撫	なし	2	並	暗褐	藤岡・乗附
16	5235土坑	女	なし	○	なし	なし	二重	なし	なし	3類A	なし	2	軟	淡灰	藤岡

中世瓦 (挿図第376図 写真第106図)

No.	出土位置	瓦種	製作法 桶痕	一枚作 可能性	粘土板		布圧痕		轆轤の 使用痕	型式名称・ 叩技法	瓦乾燥 時圧痕	側面 面取	胎土	色調	備考
					剥取	接合	合目	擦消							
1	3009土坑	男	型木痕	なし	なし	なし	なし	△	?	不明	なし	—	並	黒灰	型抜取痕あり
2	3066土坑	男	型木痕	なし	○	なし	なし	なし	○	撫で	なし	2	並	灰	被熱



第272図 古代瓦(1)



第273図 古代瓦(2)

第II章 遺 跡

D 鉄製・金属生産関連遺物

住居跡出土の金属製品は、奈良時代以降の住居跡数170からすると30%以下の存在量であるため、出土率は高くない。しかし鎌・紡錘車など質量のある個体は11点以上あり、住居廃棄に係わる鉄製品の納置行為は高いと推測される。金属生産関連は鉄滓を主とし、表採ではあるが、鉄生産に関連する可能性のある炉壁が採集されている。ほかに鉄滓18kg、チップース・スケール少々がある。

鉄 器

平成8年3月5日

No	遺 構	器 種	長 さ	幅	厚 さ	重さ(g)	備 考
1	15号住居	紡錘車	26.6			22.14	径4.6×4.6
2	35号住居	座金具			0.4	22.47	径8.0
3	125号住居	鎌	(12.0)		0.4	32.38	基部幅(3.8)
4	54号住居	鎌	22.2		0.6	103.44	基部幅4.3
5	36号住居	鎌	18.5		0.4	48.79	基部幅3.8
6	118号住居	鎌	14.0		0.6	39.86	基部幅3.8
7	20号住居	鎌	19.8		0.3	38.20	基部幅2.8
8	3号住居	鎌	7.9		0.5	16.10	基部幅3.2
9	179号住居	鎌状?	5.3	2.9	0.4	7.68	
10	169号住居	鎌	16.4		0.5	35.26	基部幅3.0
11	55号住居	刀子	13.0	1.9	0.6	18.54	
12	102号住居	刀子	11.6	1.4	0.5	12.50	
13	66号住居	刀子	(8.6)	1.7	1.4	14.29	
14	102号住居	刀子	(9.1)	1.2	0.4	4.89	
15	6号住居	刀子	16.7	1.4	0.4	8.95	
16	50溝	刀子	12.3	1.6	1.1	18.51	
17	151号住居	刀子	11.2	1.6	0.5	8.64	
18	32号住居	刀子	11.9	1.4	0.7	9.94	
19	144号住居	刀子	6.2	1.4	0.4	7.14	
20	107号住居	刀子	12.2	1.4	0.6	14.99	
21	163号住居	刀子	12.3	1.5	0.5	10.72	
22	163号住居	刀子	8.6	1.5	0.6	9.85	
23	186号住居	刀子	8.3	1.0	0.4	5.75	
24	185号住居	刀子	(12.1)	1.4	0.5	7.80	
25	144号住居	刀子	11.9	2.2	1.4	21.69	
26	140号住居	刀子	11.2	1.3	0.5	8.57	
27	34溝	刃器	5.7	1.9	0.2	3.24	
28	1号住居	刃器	8.0	1.4	0.3	6.29	
29	5号住居	刃器	8.2	1.6	0.5	8.21	
30	167号住居	刃器	(16.6)	2.7	0.6	24.58	
31	185号住居	刃器	6.2	1.5	0.4	5.09	
32	1750土坑	鎌	5.1	0.9	0.7	5.57	
33	79号住居	鎌	12.4	0.7	0.4	6.27	
34	5922土坑	鎌	7.1	1.0	0.5	9.78	
35	表採	鎌	4.2	3.0	0.5	9.19	
36	185号住居	斧	9.9		0.5	193.11	刃部4.6・袋径40×29
37	185号住居	手斧	8.4		0.7	70.44	刃部2.8・袋径2.5×1.5
38	151号住居	鋤の耳片の再利用	8.4	2.3	1.4	35.73	
39	52号住居	釘	6.5	0.9	0.6	6.43	
40	41号住居	釘	5.6	1.2	0.9	釘+鋸	
40	41号住居	鋸	8.7	0.8	0.5	15.27	
41	179号住居	釘	2.6	0.8	0.3	0.69	
42	161号住居	釘	4.1	0.5	0.8	2.61	
43	185号住居	釘	7.6	1.4	0.5	10.11	
44	131号住居	板状の鋳物鉄			0.8	40.65	たて5.5・よこ8.7
45	179号住居	板状			0.5	3.88	たて1.7・よこ3.1
46	2908土坑	棒状	9.7	0.6	0.4	4.66	
47	2908土坑	棒状	4.9	0.6	0.5	2.98	
48	5456土坑	棒状	3.6	0.8	0.6	2.26	
49	49号住居	棒状	3.8	0.6	0.4	1.64	
50	32号住居	棒状	9.3	0.8	0.5	7.84	
51	134号住居	棒状	6.2	0.8	0.5	5.57	
52	80号住居	棒状	2.7	0.6	0.5	1.59	
53	174号住居	棒状	7.5	0.6	0.5	4.35	
54	158号住居	棒状	8.4	0.9	0.5	10.03	

55	179号住居	棒状	1.9	0.5	0.5	0.98	
56	76号住居	棒状	5.3	1.0	0.5	5.13	
57	21土坑	椀形鉄滓			4.9	740.0	たて12.1・よこ11.4
58	3802土坑	椀形鉄滓			3.4	335.0	たて10.5・よこ8.5
59	表探	炉の壁 壁の硅化			1.3	13.5	たて3.0・よこ2.8
60	147号住居	硅化物			1.6	10.7	たて3.7・よこ2.8
61	146号住居	扁平小形鉄滓			1.4	19.2	たて3.9・よこ3.2
62	3802土坑	床面硬化物			4.0	199.4	たて8.7・よこ7.7・土主体
63	3802土坑	床面硬化物			3.3	250.0	たて11.5・よこ8.8・土主体
64	3802土坑	椀形鉄滓			3.5	290.0	たて8.9・よこ8.6
65	47号住居	椀形鉄滓			4.6	335.0	たて9.7・よこ8.7
66	3802土坑	椀形鉄滓			2.5	44.2	たて5.7・よこ4.7
67	3802土坑	鉄滓硅化物・土器			1.8	13.0	たて4.2・よこ2.8
68	3802土坑	硅化物			2.0	11.1	たて3.7・よこ3.2
69	3802土坑	羽口			2.5	29.9	たて3.5・よこ4.1

E 砥石

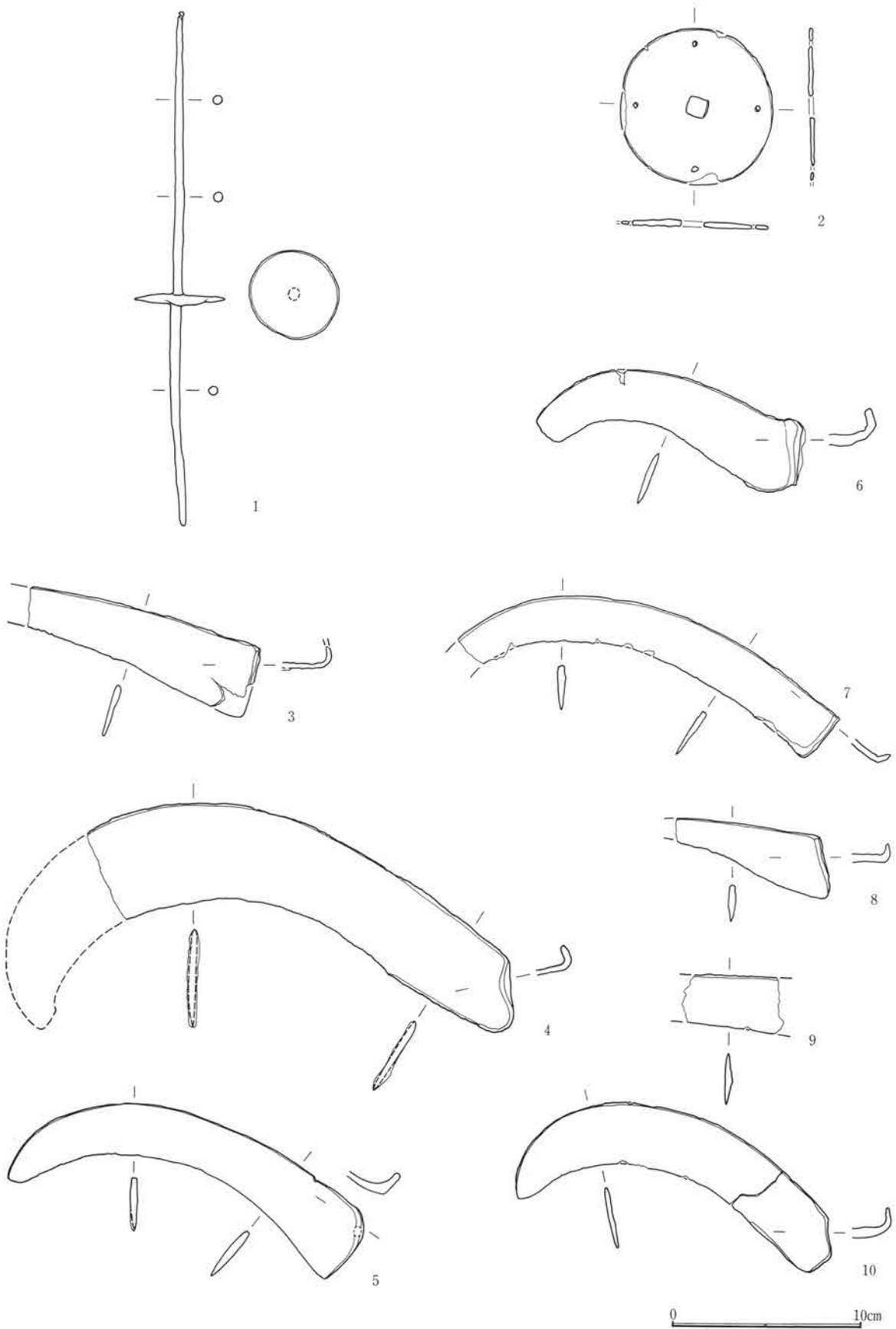
出土の特色として、流紋岩産出地に近いためか、住居跡から流紋岩製砥石の出土が目立つ。飯島静男氏による鑑定中に砥沢石とあるのは多野郡上野村砥沢産の流紋岩を指し、単に流紋岩と記入されている例は、別の産出地も含まれている。流紋岩は、中砥級に属し、砥沢石は研磨時のヒケ傷の程度が浅く生じる斑晶であるところに名品たる所以があり、早くも中世には上野砥との名称もあり、後には江戸幕府の管理下に置かれた。荒砥級もしくは、中砥との間の級には、粗粒安山岩・砂岩が大村砥以上の硬さと荒い粒状があり、中間の級には、雲母石英片岩、デイサイトがある。また溶結凝灰岩は、硬さはあるものの粗粒安山岩・砂岩よりき目細かい。研磨上の工程は、荒砥→中砥→仕上げという一般的な作業性からすると、仕上げに関連する県内産出の粘板岩や頁岩が認められて良いはずであるが、図示された個体中には、それがなく、精仕上げを必要とする場合が少なかったためではないだろうか。鉄製遺物との関連からは、鉄製遺物の研磨消耗に極端な変形消耗が少なく、砥石の扱いにおいても、糸巻き状がバチ状に変形した個体も目立たないため、道具の扱いや研磨法は優れていると推考される。

砥石

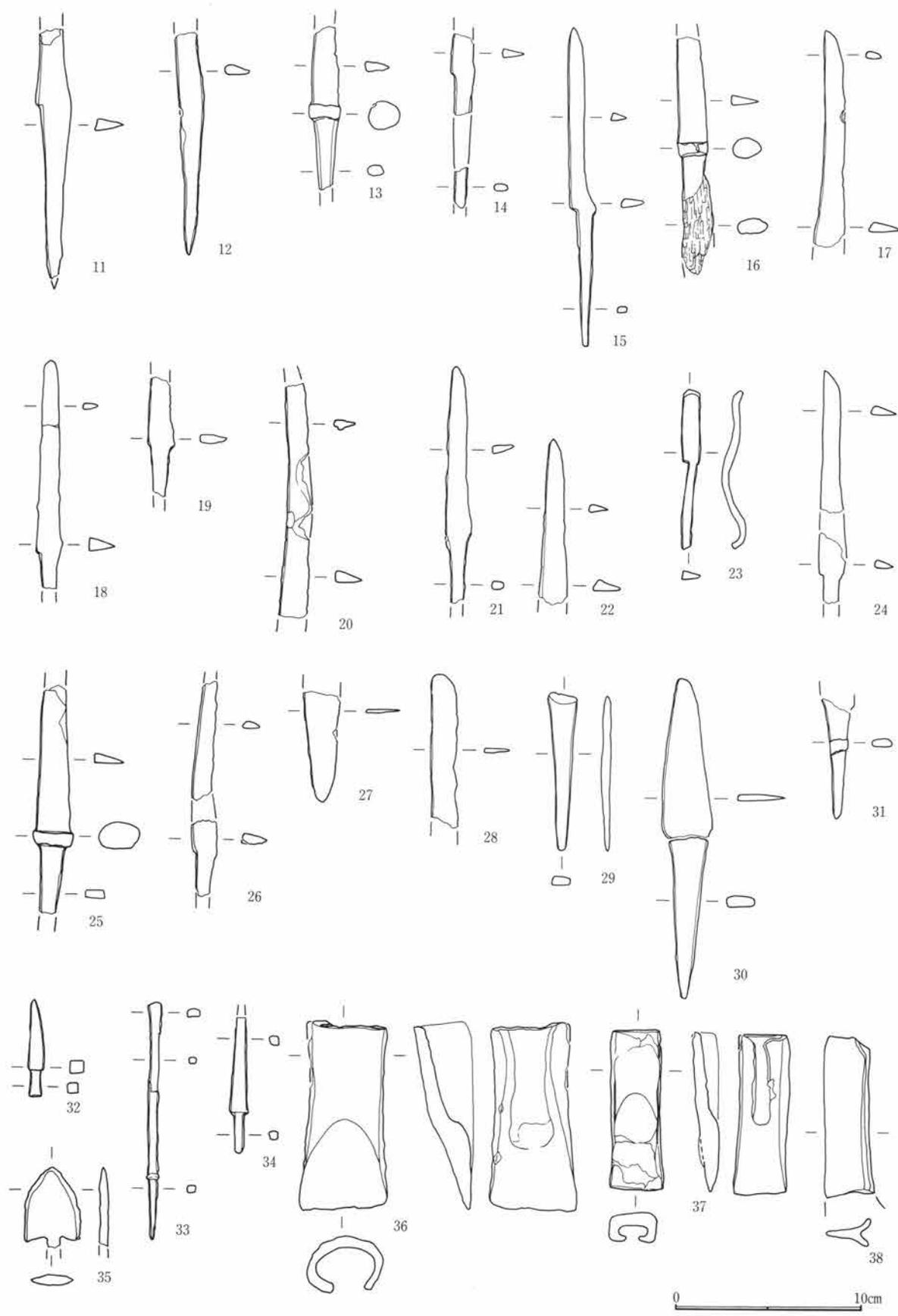
No	グリッド	石材	たて	よこ	高さ	重さ(g)
1	3 B M 8 -12Na25 12住	砥沢石	4.5	5.7	2.6	92
2	3 C L 9 -56Na259 20住居	砥沢石	8.3	4.1	4.4	215
3	3 C L 9 -46 Na146 22住居	砥沢石	11.1	4.8	3.4	179
4	3 C L 9 -47 Na53 24住居	砥沢石	9.6	5.2	4.3	144
5	3 E K10-67Na73 32住居	砥沢石	8.2	3.7	3.4	96
6	3 E K10-79Na13 36住居	砥沢石	5.2	4.1	1.4	20
7	3 B M 8 -13Na 7 43住	砥沢石	10.0	8.0	3.8	355
8	3 E K11-32Na37 59住	粗粒安山岩	14.0	9.2	4.1	358
9	3 B L 8 -37 63住	凝灰質砂岩	6.3	6.0	1.7	92
10	3 B L 8 -37 63住覆土	砥沢石	2.6	4.0	2.3	38
11	3 F J11-93Na10 81住居	砥沢石	11.7	5.4	3.6	317
12	3 F J11-95Na25 85住居	砥沢石	9.3	4.6	3.4	161
13	3 F J11-64Na66 93住居	砥沢石	9.8	3.9	5.2	233
14	3 C L 9 -27Na63 111住居	砥沢石	12.2	6.5	4.3	438
15	3 C L 9 -37Na31 111住居	砥沢石	8.0	5.5	4.1	223
16	3 C L 9 -18Na39 113住居	砥沢石	11.8	7.8	7.6	450
17	3 E K10-24Na12 138住居	砥沢石	8.1	8.6	4.0	418
18	3 E K10-51Na53 152住居	砂岩	15.3	6.6	5.5	431
19	3 C K10-09Na48 167住居	流紋岩	3.2	4.2	2.9	32
20	3 E K 9 -67Na75 187住居	砥沢石	5.2	4.8	3.5	104
21	3 C K10-09Na48 167住居	粗粒安山岩	13.3	8.5	7.0	576
22	3 C L 9 -00Na241 179住居	砥沢石	9.5	4.0	2.5	80
23	3 E K 9 -57Na189 187住居	砥沢石	7.9	4.6	4.0	114
24	3 B L 8 -66Na28 6溝	砥沢石	8.3	4.3	3.2	162
25	3 E K10-83Na318 9溝	黒色片岩	9.0	4.8	3.3	107
26	3 E K11-08Na44 10溝	雲母石英片岩	9.0	5.5	3.5	191
27	3 B L 7 -68Na34 14溝	砥沢石	8.5	3.9	2.5	151
28	3 B L 8 -47Na165 14溝	デイサイト	10.5	6.2	2.7	201
29	3 C L 9 -82Na15 15溝	砥沢石	6.2	4.9	2.7	97
30	3 C L 9 -18 30溝	砥沢石	6.0	3.6	2.9	92
31	3 C L 9 -18 30溝	砥沢石	9.9	4.3	3.7	152
32	3 C L 9 -18 30溝	砥沢石	3.4	5.0	2.6	63
33	3 C L 9 -12Na23 56溝	砥沢石	7.8	4.2	3.5	129
34	3 C L 9 -11Na864 56溝	砥沢石	6.5	3.5	2.1	60

第II章 遺 跡

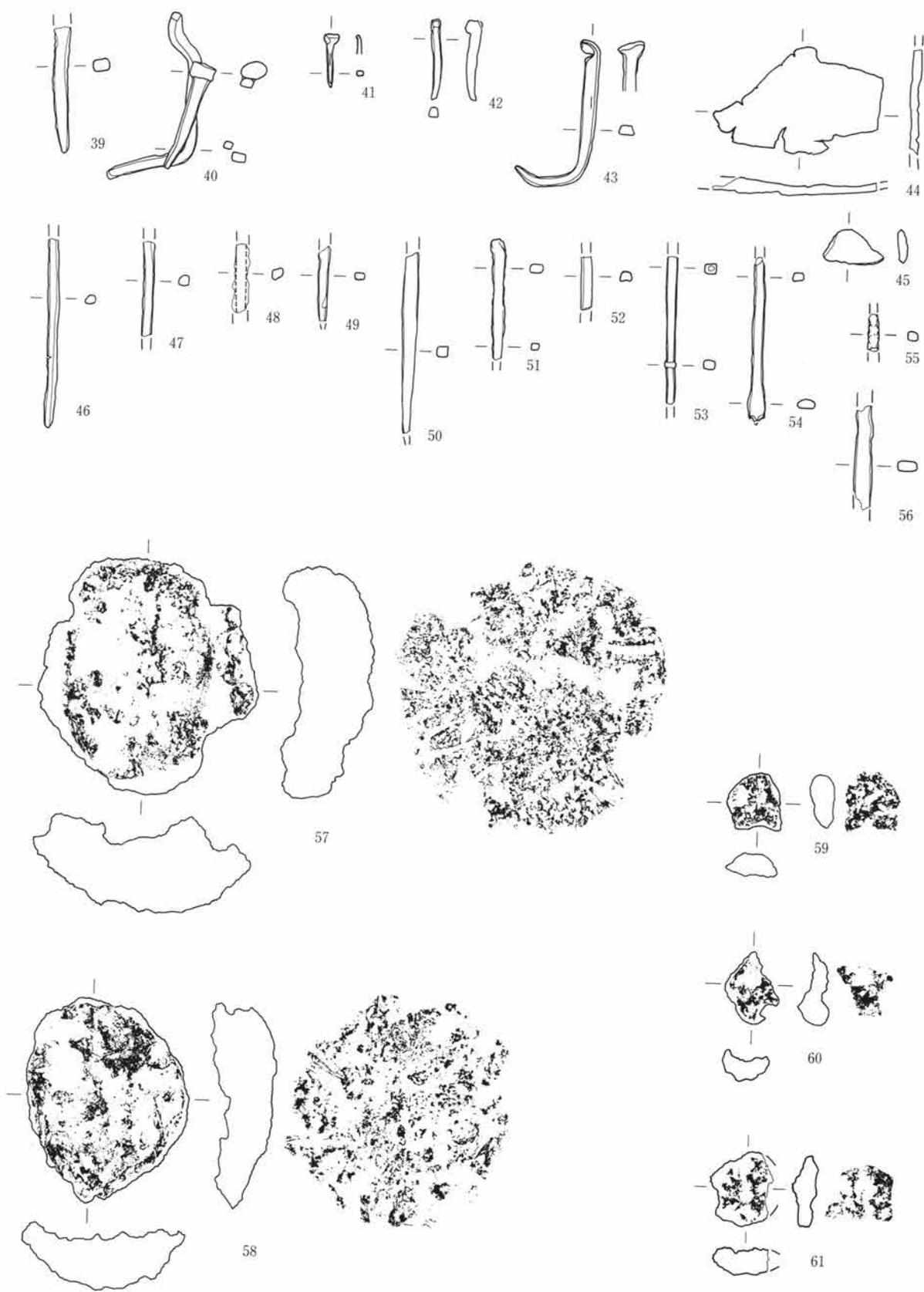
35	3 C L 9-12No.761 56溝	砥沢石	9.5	4.1	2.5	127
36	3 C L 9-11No.1020 56溝	砥沢石	9.6	4.0	3.0	134
37	3 C L 9-14 56溝	砥沢石	8.2	4.7	3.3	156
38	3 C L 9-12No.472 56溝	砥沢石	8.2	3.7	2.4	77
39	3 C L 9-10覆土 56溝	砥沢石	8.6	4.4	2.2	100
40	3 C K 9-19No.58 56溝	砥沢石	8.2	4.5	4.2	159
41	3 C L 9-14 56溝	砥沢石	10.3	3.7	3.0	112
42	3 C L 9-14 56溝	デイサイト	12.0	16.2	9.0	3349
43	3 C L 9-13 56溝	砂岩	19.5	12.5	13.0	1844
44	3 B L 8-25 56溝覆土	砂岩	28.6	10.5	11.5	4381
45	3 B L 8-76 56溝覆土	砥沢石	7.0	4.3	2.9	141
46	3 C L 9-10 56溝No.333	砥沢石	9.0	5.6	3.6	129
47	3 C L 9-10 56溝No.111	砥沢石	4.9	3.5	1.5	37
48	3 C L 9-11 56溝No.892	砥沢石	11.0	1.6	2.2	48
49	3 B L 8-94No.7 62溝	砥沢石	8.6	3.3	2.8	73
50	3 B L 8-84No.24 62溝	砥沢石	5.5	3.5	3.3	96
51	3 E K11-34No.4 489坑	砥沢石	8.4	2.8	2.8	69
52	3 C L 9-03No.51 63溝	砂岩	7.4	10.5	2.8	229
53	3 E K 9-98 80溝	砥沢石	9.5	4.9	4.0	259
54	3 E K 9-98 516坑	砥沢石	9.9	5.3	3.6	260
55	3 C L 9-83No.1 1179坑	流紋岩	5.4	2.5	6.7	34
56	3 C L10-04No.2 1587坑	砥沢石	9.8	3.9	3.7	212
57	3 C L 9-53 2118坑	砥沢石	6.6	3.5	1.5	52
58	3 C L 9-85覆土 2145坑	砥沢石	10.8	4.9	1.6	99
59	3 B L 8-75 3004坑	砥沢石	8.7	3.1	3.8	129
60	3 B L 8-56No.365 3007坑	砥沢石	7.7	3.6	3.0	156
61	3 B L 8-56No.466 3007坑	砥沢石	11.2	4.4	2.7	177
62	3 B L 8-55・56覆土 3009坑	砂岩	5.7	3.7	2.7	99
63	3 B L 8-56No.322-1 3009坑	デイサイト	7.9	3.1	2.9	109
64	3 B L 8-56No.322-2 3009坑	流紋岩	7.6	3.3	2.8	90
65	3 B L 8-56No.322-3 3009坑	流紋岩	4.0	2.8	2.1	29
66	3 B L 8-56 3009坑	砥沢石	5.4	3.4	2.8	61
67	3 B L 8-56No.540 3009坑	砥沢石	8.2	4.5	2.8	147
68	3 B L 8-56No.593 3009坑	砥沢石	6.5	3.2	2.5	107
69	3 B L 8-73No.68 3032坑	砥沢石	2.7	2.8	1.5	15
70	3 B L 8-94No.66 3053坑	砥沢石	12.0	5.0	3.8	236
71	3 C L 8-94 3066坑	砥沢石	9.0	2.9	1.9	60
72	3 B L 8-93 3067坑	砥沢石	6.5	4.1	3.7	140
73	3 C L 9-12 3084坑	砥沢石	12.5	4.8	3.4	170
74	3 C L 9-12 3084坑	デイサイト	15.2	9.8	4.0	720
75	3 E K10-46No.4 3431坑	砥沢石	8.6	3.0	4.8	176
76	3 E K 9-86No.16 4707坑	砥沢石	8.8	4.2	2.5	127
77	3 B L 8-24No.63 5157坑	溶結凝灰岩	8.0	3.8	2.6	133
78	3 B L 8-33No.54 5162坑	砥沢石	6.6	2.3	1.5	30
79	3 B L 8-56No.501 5839坑	砥沢石	6.2	4.2	2.9	123
80	3 B L 8-34No.112 5167坑	砥沢石	8.0	3.5	2.5	98
81	3 E K10-85 表採	砥沢石	10.0	3.9	3.8	178
82	3 B L 8-90 表採	砥沢石	9.1	4.6	3.5	209
83	3 E K10-44 表採	砥沢石	8.3	4.9	4.0	156
84	3 C L 9-19 表採	砥沢石	7.3	5.4	3.3	158
85	3 C L 9-63 表採	砥沢石	10.5	3.3	1.5	72
86	3 B L 8-34 表採	砥沢石	4.3	4.8	3.4	77
87	3 B L 8-63 表採	砂岩	7.4	4.8	1.9	85
88	3 B L 8-56 表採	デイサイト	11.1	7.5	2.5	272



第274図 鉄製品実測図(1)

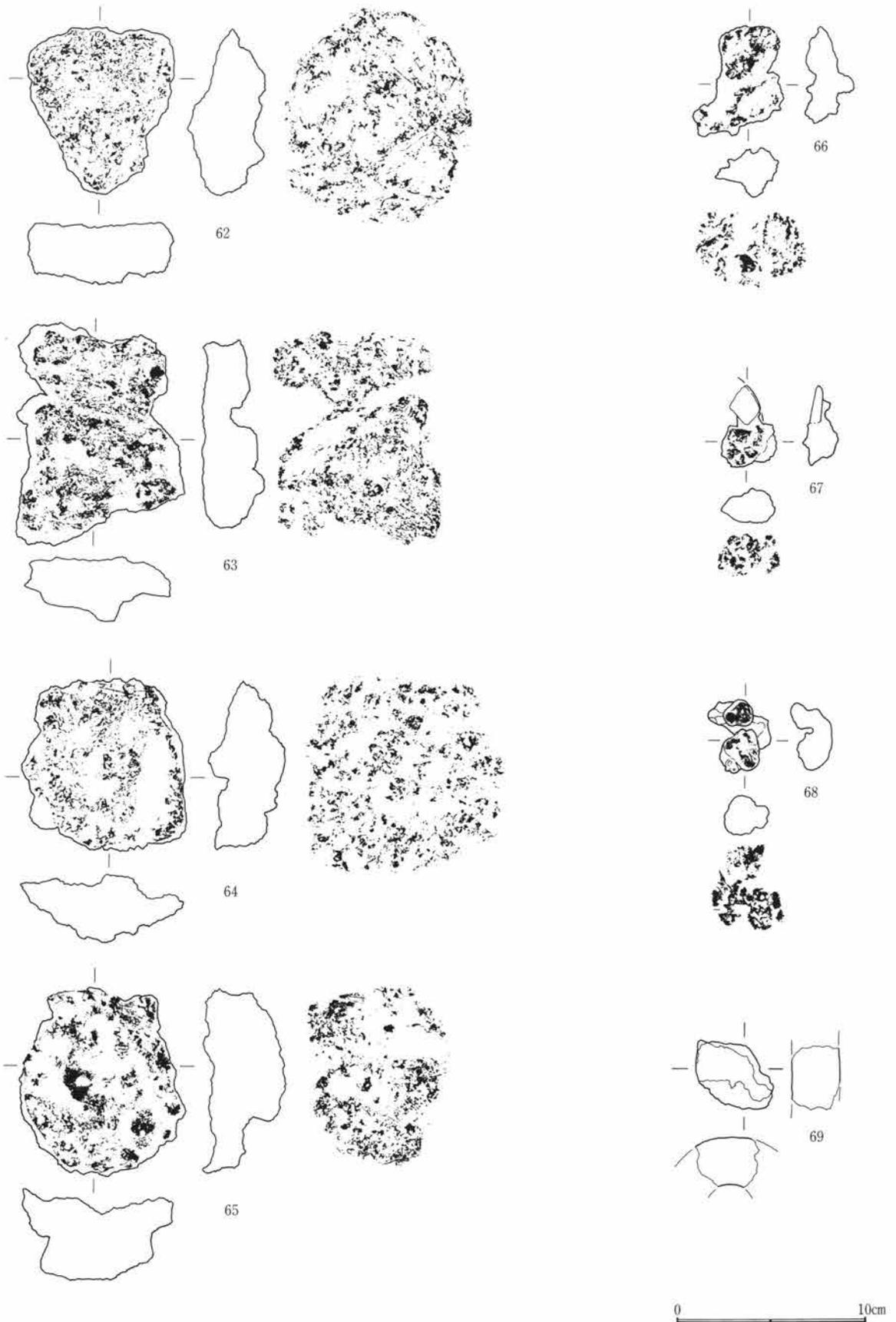


第275図 鉄製品実測図(2)

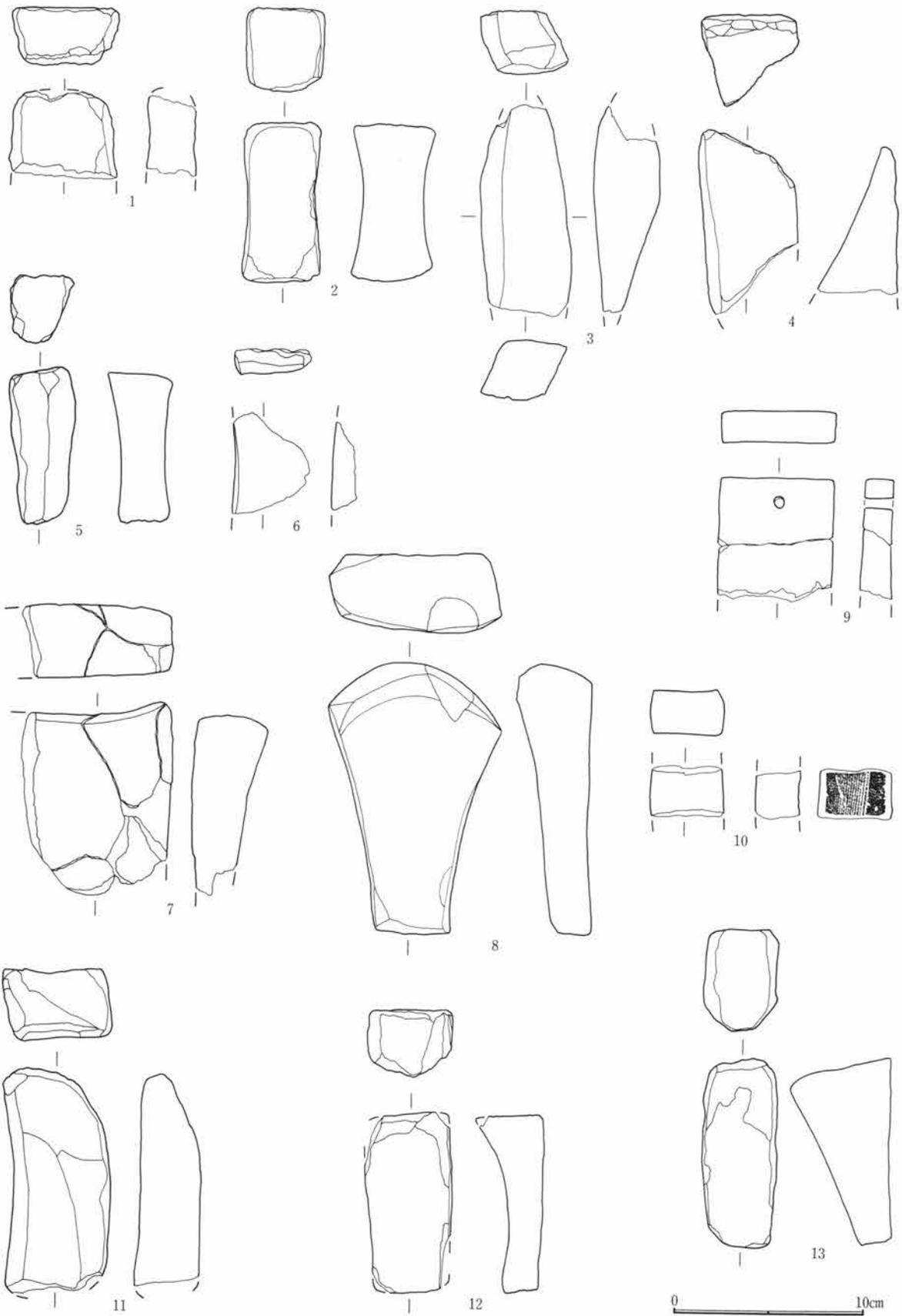


第276図 鉄製品実測図(3)

0 10cm



第277図 鉄製品実測図(4)



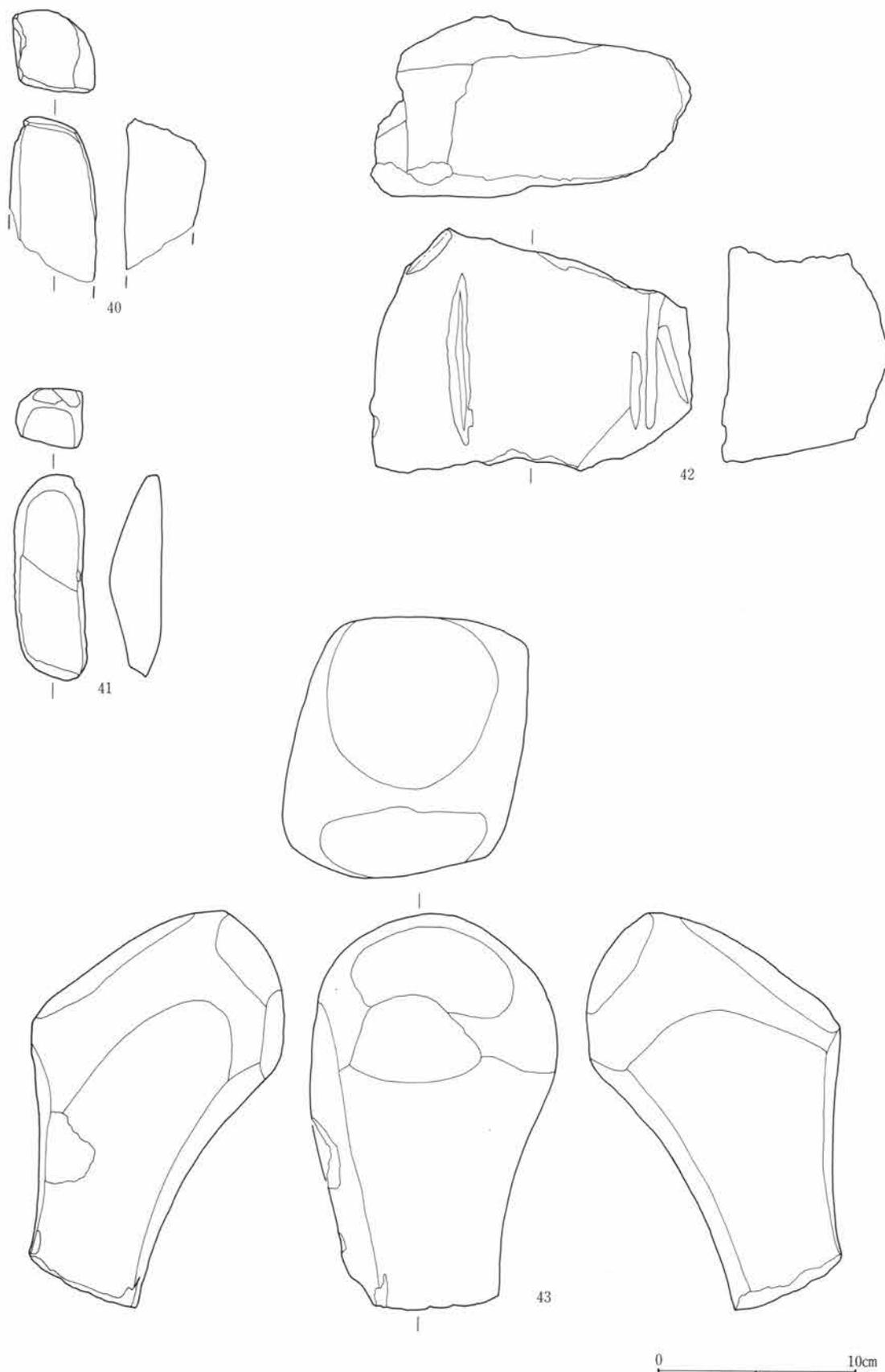
第278図 石製品実測図(1)



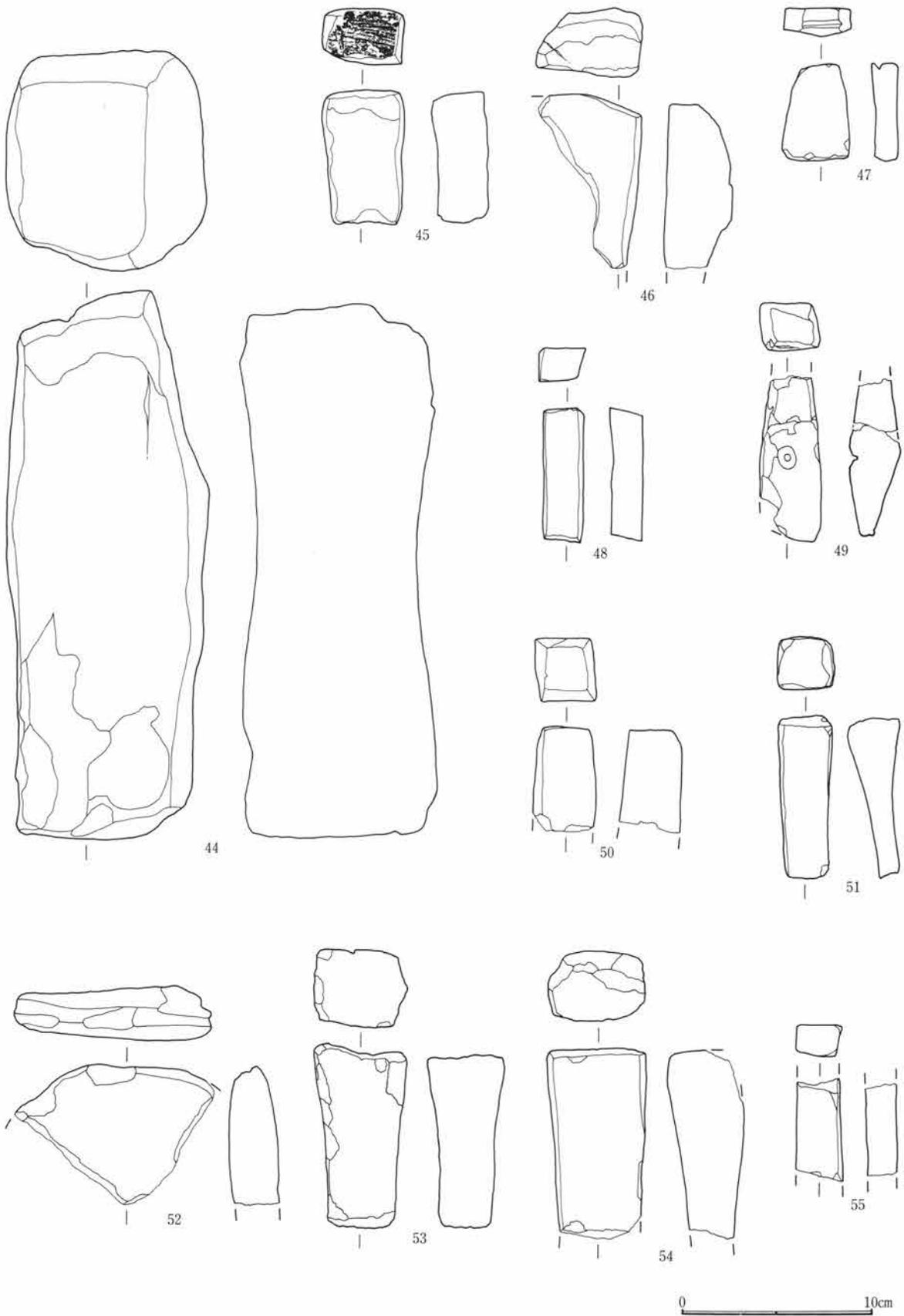
第279図 石製品実測図(2)



第280図 石製品実測図(3)



第281図 石製品実測図(4)



第282図 石製品実測図(5)



第283図 石製品実測図(6)

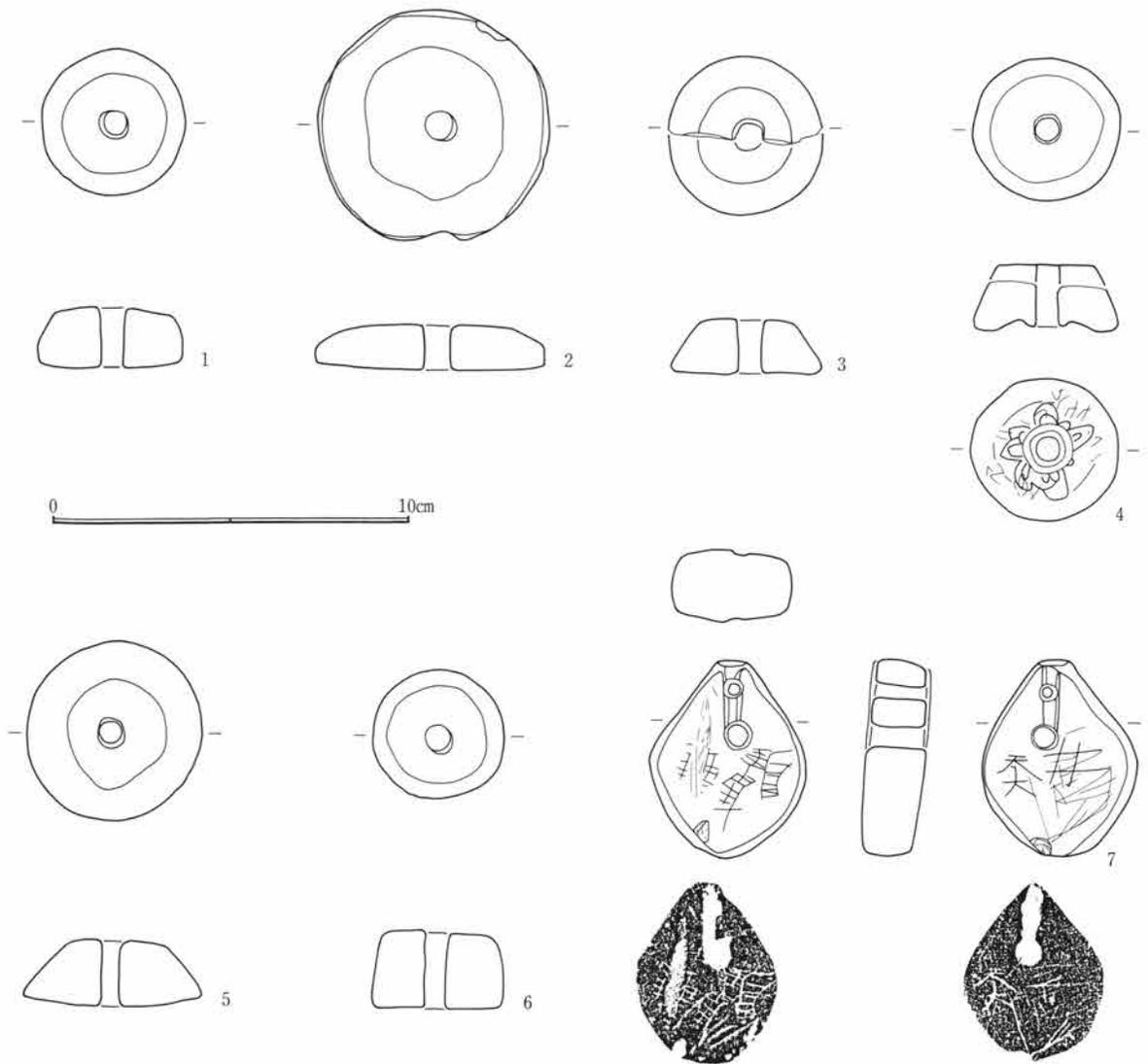


第284図 石製品実測図(7)

F その他の遺物

a. 紡錘車

紡錘車が6点出土している。石材はNo.1とNo.3は滑石質蛇紋岩、No.2は滑石、No.4、No.5、No.6の3点は蛇紋岩である。形はすべて古墳時代からの形態を踏襲していて、截頭円錐形が基本形であるが3つの形に細分される。Aタイプは截頭円錐形で厚さは厚手、側面の稜線は丸いもので、No.1とNo.6がある。Bタイプは截頭円錐形で径は大きく、厚さは扁平で薄くNo.2が該当する。Cタイプは截頭円錐形で側面は鋭く、厚さ13mmから18mmである。No.3、No.4、No.5がこの形に属する。

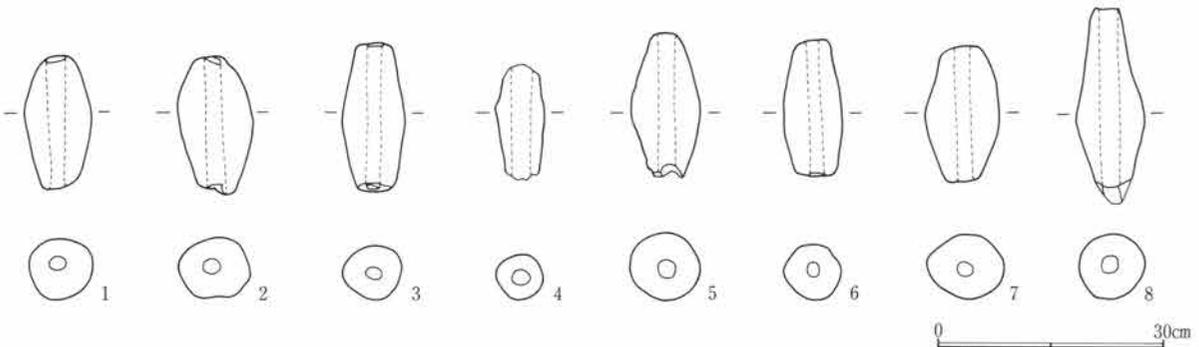


第285図 紡錘車実測図

No	遺 構	石 材	上面径	底面径	高 さ	重 さ	上口径	下口径
1	43号住居	滑石質蛇紋岩	3.0	4.0	1.7	41.52	0.8	0.7
2	118号住居	滑石	なし	6.4	1.3	86.42	0.8	0.8
3	133号住居	滑石質蛇紋岩	(2.5)	(4.2)	1.4	17.84	0.7	かけ
4	185号住居	蛇紋岩	3.0	4.0	(1.3)	27.43	0.7	0.7
5	5170号土坑	蛇紋岩	3.0	5.0	1.8	56.93	0.8	0.7
6	表採	蛇紋岩	2.7	3.6	2.1	49.61	0.7	0.7
7	102号住居	滑石質蛇紋岩	5.4	4.3	2.0	69.98	0.5	0.5
							0.7	0.8

b. 土錘

土製の網の錘である。重量は3つに分かれる。Aタイプは5gのもので、No.4が該当する。Bタイプは8g～9gのものでNo.1、No.3、No.5、No.6の4個が該当する。Cタイプは11gのもので、No.2、No.7、No.8が該当する。長さも3種類に分けられる。Aタイプは30mmである。Bタイプは36mm～39mmでNo.1、No.2、No.3、No.5、No.6、No.7の6個を数える。Cタイプは52mmでNo.8が該当する。

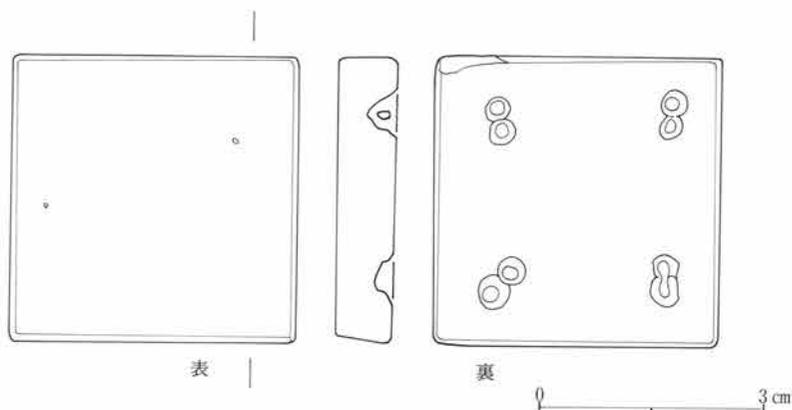


第286図 土錘実測図

No.	遺 構	長 さ	最大径	孔 径	重 さ	色 調
1	49住居	3.5	1.6	0.5	8.43	10Y R 7 / 4 に近い黄橙
2	111住居	(3.7)	1.7	0.5	10.03	7.5 Y R 7 / 6 橙
3	180住居	3.9	1.4	0.4	8.86	7.5 Y R 7 / 6 橙
4	56住居	(1.2)	1.2	0.5	3.86	10 Y R 7 / 3 に近い黄橙
5	56溝	(3.8)	1.8	0.5	9.24	10 Y R 7 / 3 に近い黄橙
6	56溝	3.6	1.5	0.4	8.30	7.5 Y R 6 / 6 橙
7	1565土坑	3.6	1.8	0.5	11.40	10 Y R 7 / 3 に近い黄橙
8	表土	(5.2)	1.8	0.5	10.53	10 Y 7 / 2 灰黄

c. 銚帯

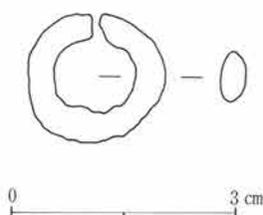
石製の巡方で垂孔は無い。縦横の長さとも約38mmの方形で、厚さは8mmを測る。材質は頁石で色調は黒色を呈し、裏面以外の全ては研磨され光沢を持つ。裏面の仕上げは荒く、周囲を面取りして仕上げる。かがり穴を四隅に穿つ。60号住居址の埋土からの出土で共伴の遺物は9世紀である。



第287図 銚帯実測図

d. 金環

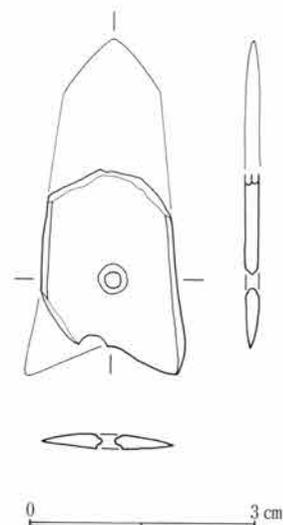
金環が1点、4号住居址から出土している。遺存状態は良好で銅地金に金銅が一部残る。切り口を上にした場合、左右18mm、天地17mmを測る。断面計は楕円形を呈し、長辺6、5mm、短辺3、5mmを測り、中実で重量は6gである。金環の帰属時期は共伴の遺物から8世紀である。



第288図 金環実測図

e. 磨製石鏃

磨製石鏃が1点、表面採集されている。石材は頁石で黒色である。形式は無茎鏃で先端部と茎部片方が欠損している。復元長45mm、復元茎幅22mm、厚さ2mm、平滑面の隅を研磨して刃部としている。中央部に径2mmの単孔を穿つ。東に近接する上栗須遺跡I区の4号古墳の周堀からも磨製石鏃の先端部が出土している。

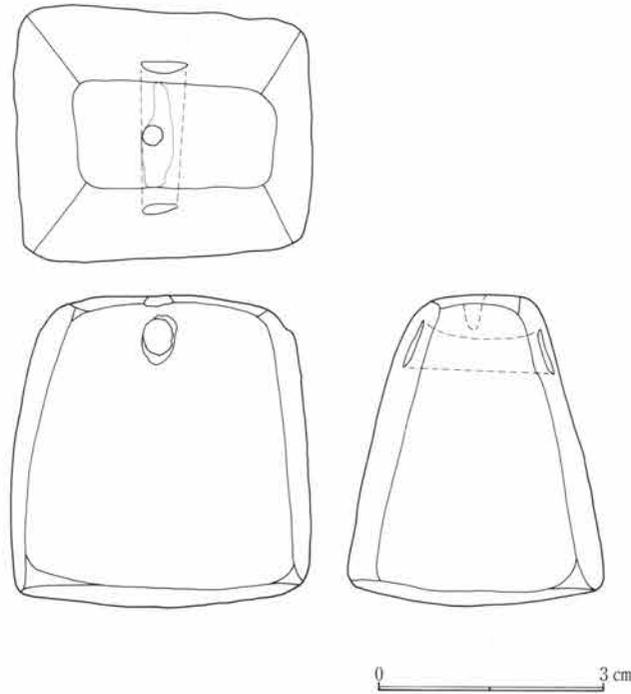


第289図 磨製石鏃実測図

f. 石錘

石錘が2点出土している。1点は倒卵形を呈していて、長軸の長さは54mm、短軸の長さは43mm、厚みは20mm、重さは約70gを測る。石材は滑石質蛇紋岩で周縁は面を取り、全面は磨滅している。長軸の一方の尖り気味平の面に先端寄りに5mm、奥寄りに8mmの丸い穴を貫通させている。この表裏面はこの2つのあなを連続して頂部に抜ける1mm程の浅い溝を掘る。平の片面は「縦横」井桁の罫書きが描かれている。平のもう片面は「井」の字の罫書きと「天大」連続の文字が描かれている。「縦横」井桁の罫書きは道教に関する「九字」と考えられ、裏面の「井」の字の罫書きと「天大」連続の文字が描かれている。「縦横」井桁の罫書きも道教に関する「九字」と考えられ、裏面の「井」の字の罫書きと「天大」連続の文字の罫書きも道教の祭祀に関する記号と考えられている。102号住居址からの出土で伴出の遺物は9世紀である。

2点目はM6-40グリッドからの表面採集品である。石材は凝灰岩製の錘である。截頭四角錐形で全体に張り出して丸い。重量は83.28gを計る。天井部未貫通の単孔が深さ5mmに穿たれる。また長辺の天井寄りに3、5mmの穴が貫通する。この形態は従来「下砥」と呼ばれて来たものであるが、宮本佐知子氏の論考（1994「国内出土の権衡資料」『大阪市文化財論集』）のE類97に極めて類似している事から称（はかり）の錘（ふんどう）、権状製品としておく。



第290図 石錘実測図

第3節 中近世・近代の遺物と遺構

1 出土陶磁器類

本遺跡出土の陶磁器類は、一部古代を含みながら中世初頭から近代まで基本的に連綿と続いている。ここではそのような長期間の多様な全体像の把握を主な目的として、報告する。そのため、産地や年代同定が必ずしも詳細ではなかったり、多少の誤りを含む可能性も残しつつ、あえて顕著な遺物を紹介する（肥前陶磁の鑑定は大橋康二氏の指導による）。

A 舶載陶磁（全点図示）

中国製の白磁と青磁が大部分である。

白磁は、いずれも陶胎を主とする14世紀後半の粗製の角杯と小皿が量的に中心を占める。5921号土坑に一括埋納されていたもの以外にも同種のもので出ており、まとまった個数がこの時期に搬入されていたことが分かる。「泉」字墨書と3点朱書がそれぞれ3例ある点は、興味深い。この種のもは、例えば京都相国寺出土例など他遺跡出土のものにも墨書・朱点が見られる。他に磁胎の碗類破片も3点見られた。

青磁は、12世紀後半から13世紀前半と考えられる同安窯系碗片(1334)及び14世紀代の福建系の碗片(1325, 1327, 1328)が見られる他は、いずれも竜泉窯系製品である。主体をなすのは5921号土坑埋納品も含めた碗鉢皿類で、13世紀代から15世紀までの鎬蓮弁文系の碗が中心である。皿は13世紀のものがやや多いが、碗は出土点数の割合が少なく13世紀のものは不明。その他に香炉・瓶・水注類などの調度品小片も、14世紀初頭の韓国新安沖沈没船積み荷に似たものが、やや多く見られる。特に有脚の香炉(1333)や注子(1321)などは、新安タイプと同質と考えられる。

他に、17世紀前半の福建漳州窯系の青花皿片(1338)が1点見られた。

以上の中で特筆される出土状態のものは、銅製法具と共に11点の青磁白磁を一括埋納した5921号土坑である。詳細は後述するが、この中で白磁が全て14世紀後半のものであるのに対し、青磁の小皿2点(1001, 1002)は14世紀前半とやや時期差が見られることを指摘したい。

B 国産陶磁

ア 中世陶器

瀬戸美濃・渥美・常滑の東海地方製品である。

瀬戸美濃製品は、13, 14世紀頃の灰釉鉢類(1298, 1303)と16世紀代と考えられる灰釉小皿(1294)・天目碗(1292)を除けば、全て調度具である。中でも13, 14世紀代の灰釉梅瓶及び瓶子の数が多くことに特徴がある。特にほぼ完存の新安タイプの三筋梅瓶(1397)は、5926号土坑から松樹双雀波濤文鏡及び元符通宝と共に出土しており、蔵骨器として転用されたと考えられる。

他には15世紀代の茶器と推定する天目釉四耳壺(1299)・同肩衝(1301)片も見られた。

渥美製品は、56号溝より蓮弁文・草花文を陰刻した壺(1398)が出土した。1/2程度の破片が残存しており、考古資料はもとより伝世品も多くない渥美製品としては、重要な出土資料である（小野田勝一氏のご教示によれば、坪沢10号窯・鳴森窯製品に類例がある）。この溝からは、別の個体と思われる甕片(1360)も見られ、

複数もたらされていた可能性は高い。

常滑製品は、甕片がかなり多く出土したが、口縁形状の分かる6点のみを図示した。56号溝出土の14世紀代のもの(1361)を除いて、大半が13世紀代と考えられる。甕以外の器種の存在は確認できなかった。

焼締甕片は焼成状態や混入物の種類などが異なったものがいくつかあり、常滑以外の東海地域の製品も混じっていると思われる。

他に産地不明の須恵質のものでは、甕(1309)とコネ鉢(1314)の破片が見られたが、図示していない小片は僅かしかない。

イ 近世磁器

1 肥前

肥前製品は、17世紀後半から大量にもたらされる。18世紀代は他遺跡に比べやや減少するが、19世紀前半まで高いシェアを占める。17世紀後半に入ったものは、青磁花瓶(1316)と染付では寿字文小碗(1086)・折枝花文皿(1173)・鳥雲文皿(1023)・花文皿(1024)であり、皿類が顕著である。

ところが、17世紀末以降18世紀代にかけては、次のように供膳具と調度具に多種多量の品がもたらされた。供膳具では皿(染付・青磁・白磁)・手塩皿(染付)・猪口(染付)・徳利(染付)・碗(染付)、調度具では青磁火入れ(1073)・青磁瓶(1108)・花瓶(染付)・染付仏飯器(1107)・蓋物(染付)である。特に、染付の碗皿の搬入量が多い。その中でも矢羽文手描五弁花皿(1018)・板敷文皿(1035)・菖蒲波溝文皿(1019)・蛇籠文碗(1021)・楼閣山水文碗(1044)など17世紀末から18世紀前半のものには、やや目立つものがある。同様に菊唐草文蓋物蓋(1339)・雲文大花瓶(1034)などの調度具も、同時期の当地の一般遺跡では見られない。

しかし、18世紀後半に一般遺跡で大量に出土する「くらわんか手」の粗製染付供膳具は、逆にあまり目立たない。雪輪梅文碗(1071)・二重網目文碗(1052, 1080)・コンニャク版五弁花折枝梅文皿(1063, 1064)などは図示した以外にも破片の出土はあるが、決して大量ではない。

19世紀前半では供膳具が主体となり、特に碗類が大半をしめている。やや特異なものとしては染付竹下人物図文鉢(1220)があるが、色絵キセル吸口(1317)もこの時期の可能性はある。

2 瀬戸美濃

19世紀前半において、瀬戸美濃での磁器生産が本格化し、関東各地にも肥前に替わってもたらされてくる。しかし、本遺跡では肥前同様に絶対量は多くなく、染付端碗(1074, 1075)などの供膳具が少量ある以外は、染付菊花文水滴(1068)・染付吹墨火入れ(1287)が目立つ程度である。

ウ 近世陶器

1 瀬戸美濃

17世紀代には、それ以前に比べやや搬入量が増える。特に供膳具の皿では、志野釉と灰釉を中心とする小型のもの出土が目立ってくる。碗類では加えて天目釉のものがある。ただ全体としては供膳具以外の種類は少ない。

続く18世紀代の顕著な特徴は、調度具の種類が増えることである。飴釉香炉(1178)・二彩仏花瓶(1191)・飴釉油壺(1177)そして灯明皿(1184, 1186)、また灯火具としてたんころ(1188~1190)などがある。一方、供膳具は、前半に他遺跡では多く見られる飴釉尾呂碗類(1144, 1145)は少なく、むしろ中葉から後半での二彩掛分け腰鉢碗や腰折碗に分布の中心がある。一般に多く見られる錆釉の播り鉢(1171)は、個体数が少ない。19世紀代になると、霊芝文広東型碗(1136)がある程度で、さらに減少する。

2 肥前

第II章 遺 跡

17世紀後半では京焼風陶器の灰釉鉄絵皿碗が大量にもたらされ、14号溝を中心に廃棄されている。破片も含めて量的には、この時期の供膳具の大半を占めるばかりでなく、本遺跡の中世以降の陶磁器の中では単一の種類のものとしては最も多い。特に興味深いのは、高台内に「方」(3点)・「司」・「首」などと墨書されたものが6点も見られることである。一括納入され、何らかの使い分けがされていた感じがある。その他に二彩刷毛目の片口雪平(1167)と碗(1149)が771号土坑から出土している。続けて18世紀前半まで同じ京焼風皿碗類が入っている。

この京焼風の皿碗の量の多さに比べると、青緑釉皿(1151)など他の種類は極めて少ない。特に中葉に他の遺跡ではかなり出土する陶胎染付は、碗(1154)と火入れ(1163)が見られる程度である。

3 その他

京焼系では、松葉文を描いた灰釉鉄絵の碗が14号溝よりまとまって出土している。18世紀代のものだろうか。他に焼締の丹波播り鉢(1019, 1173)と堺播り鉢(1169, 70, 75)が14号溝などから出ている。また志戸呂の錆釉灯明皿が3096号土坑などで見られた。3009号土坑で出土した東北系と考えられる染付磁器蓋類(1096, 97)は、19世紀前半のものだろう。

エ 近代陶磁

1 瀬戸美濃

膨大な遺物が出土したゴミ穴である3009号土坑の陶磁片の多くが、瀬戸美濃産の磁器である。染付の碗・盃・湯呑みが器種としては中心をなす。技法から見れば、手描・型紙摺り・銅版転写といずれも見られ、少なくとも明治初年と大正との2回の大規模な廃棄の状態を示している。

2 肥 前

量は極めて少ないが、3009号土坑よりやや上手のもので手描染付の窓絵人物双魚文角鉢(1226)や楼閣山水文皿(1219)が出土している。

3 その他

東北系(会津諸窯など)の磁器、北関東系(常陸笠間・下野益子・上野自性寺など)の陶器、万古(地方万古を含むか)の陶器に大別され、基本的に3009号土坑から出土している。

東北系の磁器では、まず光沢のある手描染付の藤文状の碗(1193)がある。そして型紙摺りの皿(1218, 22, 23, 25)・碗類(1195, 1194, 1212)・蓋物類(1214~17)など存在感のある器形のものが見られる。型紙摺りの湯呑み(1230)には「天下泰平明治政府」の字句が見られ、興味深い。

北関東系の陶器は、二彩白釉呉須絵の蒸し器(1254, 57)や鉄釉雪平(1253, 56)そして灰釉加彩の山水文土瓶(1250, 51)など調理具に目立っている。また灰釉の徳利(1164)には「新□」、二彩掛分けの徳利(1247)には「上栗□□・」の墨書が見られた。いわゆる貧乏徳利としての利用を示しているのだろう。

万古は手捻りの潤徳利(1246)を除いて、いずれも急須である。焼締及びそれに一部加彩したものと、灰釉加彩に分けられる。前者は全体に狸茶釜形に造形したもの(1238, 40, 44)が興味深い。また竹雀文を墨絵したもの(1239)も丁寧な作行である。後者は、全体を瓜型に造形している(1241)。

その他に産地不明の鉄釉播り鉢(1260)には「十廿・」の墨書があった。

C 土 器

ア 中世土器

瓦質土器・土師質土器そして瓦器に分けられるが、前2者は区分し難いものもあり、また瓦器は1点のみ

であるため、併せて述べる。

中世土器の年代についての研究は少なからずなされてはいるが、ここでは陶磁器と器形的類似関係のあるもの及び本遺跡での共伴関係のはっきりするものを中心に考えてみたい。

1 年代想定できる資料

15世紀後半の一括資料として箱形の5250号土坑出土のものがある。ここからは後述するように畿内産と推定される瓦質の釣り鐘型瓦灯(1387)が出ており、土師質の焙烙(1409)と灯明皿4枚(1412~14, 18)・皿3枚(1417, 20, 21)・小皿3枚(1415, 16, 19)を伴出している。

近世の器形にやや似た焙烙は底に板痕があり、土底になる近世のものとは大きく異なる。皿類は灯明皿としての使用が最初からなされたかどうか、特に口径の大きいもの(1412)の場合、判断しにくい。

10枚の皿類を検討してみると、左回転成形底無調整・焼成軟質・見込指押さえ調整(A群1414~17, 20, 21)、底調整・焼成軟質・見込指押さえ調整(B群1418, 19)、左回転成形底無調整・焼成良好・見込指ナデ調整(C群1412, 13)に分けることができる。器形的にはB群の小皿(1413)の底が突出していることと、C群の皿(1418)の歪みが大きいことが目立つ程度で、全体にあまり形にこだわっていない感じが強い。

A群は灯明皿としての使用痕は少なく、反対にB・C群は痕跡が多い。

また56号溝から出土した瓦質の瓶子(1372)・花瓶(1370)は、いずれも陶器を模倣した器形で、14世紀代のものと考えられる。

2 供膳具・灯火具

56号溝から土師質の皿類がややまとまって出土している。これを上記5250号土坑出土資料と比較すると、次のように見ることができる。

A群に類似したものでは、口縁下に沈線がある皿(1353, 54)、稜がある小皿(1349)、稜のない小皿(1350)に別れる。稜のない小皿は5250号土坑資料に類似しており、同時代と考えたい。その他は時期不明。小皿はいずれも灯明皿である。

C群類似は灯明皿が2点(1348)そして灯明小皿が2点(1351, 52)あるが、前者は口縁が厚く、後者は器高が低く、いずれも器形は5250号土坑資料とは全く異なる。

その他に底調整・焼成良好・見込指ナデの皿(1355)がある。これは5250号土坑資料より口縁が厚い。

以上の中でC群類似の1348は、後述の17世紀代と考えられる5421号土坑出土の厚手の灯明皿(1422)に焼成以外は類似しており、それと同時期と考える。

その他のものについては年代を想定する根拠に乏しいが、見込指ナデの皿(1355)と灯明小皿(1351, 52)は5250号土坑との関連で15世紀頃、A群類似の沈線皿(1353, 54)・稜小皿(1349)は56号溝の初期的な埋没年代である14世紀と想定したい。

3 調度・調理具

調度具としては、56号溝から出土した雷文風印花のある火鉢あるいは風炉片(1358)は、胎土が花瓶(1370)とほとんど同一であり、14世紀のものと考えられる。その他に3009号土坑出土の火鉢類(1383~85)は、14, 15世紀代のものと推定したいが、明確な根拠はない。

調理具では、前述の5250号土坑出土の焙烙以外には、基本的には年代を推定する材料に乏しい。ただ、56号溝から出土した焙烙(1373)は、1409と同様に板底痕があり、また1409と異なって内稜があるため、この溝の初期的な埋没年代から14世紀としたい。

同様にこの溝からかなり多く出土している塀・掘り鉢についても、同時期と考えて見る。塀には十字型に

第II章 遺 跡

窺彫りした窯記号が見られるものもある(1374)。この溝から出土したそれらの埴はいづれも大きめの内耳を持ち口縁が外反する形状だが、不整形の1995号土坑から出土した埴(1381)は内耳・口縁の外反とも小さく丸底であり、前段階の13世紀代のものと想定する。

播り鉢(1379, 89)は粗く櫛目をつけたものだが、焼成や底調整に差があるため、同時期かは不明。不整形の5712号土坑から出土したコネ鉢(1380)も一応、同じ頃と想定したい。なおグリッドから出た菊花状印花と蓋孔のある土師質のコネ鉢片(1406)も、同時期だろうか。

15世紀代と明確に推定できるものはほとんどないが、一応、埴では完全な平底で大きく口縁が外反する小ピット1397号土坑出土例(1404)を、播り鉢では摺り目幅が厚くなったグリッド出土のもの(1386)を充てておく。

不整形の5186号土坑からは硬質ロクロ成形の瓦器鉢(1363)が出ている。畿内産と思われる、管見では年代比定根拠に乏しいが、舶載製品が多く搬入された14世紀のものと考えたい。

イ 近世近代土器

1 年代想定できる資料

前述のように不定形の5421号土坑からは、古寛永通宝と共に厚手指ナデの土師質灯明皿(1422)が出土しており、17世紀代のものと考えられる。

18世紀代を中心とした陶磁器が廃棄されている14号溝からは、瓦質の釜輪状のもの(1364)そして土師質の人形(1425, 26)が出土している。18世紀末の箱形の5153号土坑からは、瓦質の高台付火鉢(1392)・鉢(1405)そして土師質丸底の焙烙(1396)が出ている。

上野小泉で焼かれた瓦質土器は19世紀後半以降のものだが、把手付埴(1390)と養蚕用火鉢(1399)が3009号土坑より見られる。

土器の出土は決して少なくないが、直接年代を想定できる出土状態のものは、以上である。

2 調度・調理具

調度具は、火鉢類が中心である。18世紀末には高台と把手が付いた縦長の火鉢(1392)がある。中世の火鉢と異なりかなり薄手になり、また焼成状態も比較的硬くなっている。この傾向は、底に大きな孔のあいた近代の小泉焼養蚕用火鉢(1399)でさらに顕著になり、外面の研磨が強くなると共に大型ながら薄手である。小さな3脚の付いた56号溝出土の小型火入れ(1356, 57)は、18世紀頃のものとして推定される。

18世紀末のものでは、小型の鉢(1405)がある。小さな半球形の脚が付いており、外面は上記縦長火鉢の同様の研磨がなされている。また不整形の5186号土坑から薄手ロクロ成形硬質の鉢(1363)が出土している。明確な時期想定はしがたいが、仕上がり状態より近世後期のものと思われる。

18世紀代には、土師質の型作りでやや大型の人形(1425, 26)もある。

調理具では、主な種類として焙烙が盛行し、18世紀末のものとして土師質丸底のもの(1396)がまずあげられる。楕円形の5453号土坑から出土した瓦質砂平底の焙烙(1410)は、18世紀代のものと思われ、恐らく中世の焙烙の直接の系譜を引くものだろう。18世紀末には、釜輪と思われる瓦質大型の器物(1364)も見られる。

近代では小泉焼の把手付埴(1390)が出ている。これは従来の中世の埴や焙烙の形態とは全く異なった逆台形の鉢型をしており、口縁上に二つの把手がのびている。

当地方最後の土器である小泉焼が、養蚕用火鉢とこの把手付鍋として残っていた点は、興味深い。

3 その他

中世とは異なり、調度・調理具以外のものは激減している。僅かに確実なものでは、17世紀代のものと言える5421号土坑出土の土師質灯明皿（1422）があるだけである。陶器の甕に併用されたと思われる3009号土坑出土の土師質の甕蓋（1382）は、近代の可能性が推定される。

D 時期区分と器種変化

以上、見てきた陶磁器・土器のうち、約400点強について実測図及び写真で報告した。これらは本遺跡出土の中世以降の遺物の中で顕著なものとして取り上げたが、同一遺構から出土した同種のものについては、省略している。実際には、56号溝では瓦質塼の破片が大量にあり、また3009号土坑からは型紙摺りの染付碗片はかなり多かった。

残念ながら、今回の報告では全破片を検討しての量的な分布を調べる余裕がなかったが、その前段階の作業として、報告遺物を中心に概略的な時期区分を試みた。そして、各時期の器種構成を次のように検討した（425～429頁図）。

I 期（13世紀頃）

生活の中心である調理具に瓦質土器塼があり、貯蔵具には常滑甕が少なからず存在する。それに加えて、供膳具に舶載青磁碗皿、調度具に古瀬戸瓶子類、また特殊な貯蔵具として渥美壺が見られる。

後者はいづれも高級な非日常的な器物だが、日常調理・貯蔵具があることから、他で伝世されて後に搬入されたものではない。II期に埋納された銅製火舎香炉も、同様にこの時期にすでにもたらされていたはずである。

II 期（14世紀頃）

この時期を最も特徴づけるのは、多彩かつ上野地方では量の多さが目立つ舶載陶磁類と古瀬戸の供膳・調度具である。「泉」字墨書品がいくつか見られる。特に、韓国新安沖沈没船引き揚げ品と同様か類似した調度具が金属製品も含めて見られる点は、興味深い。

調理具は瓦質土器、灯火具と一部供膳具は土師質土器、そして調理具と貯蔵具は無釉の陶器が使われている。

III 期（15世紀頃）

供膳・調度具に引き続いて舶載陶磁と古瀬戸が見られるが、II期ほどの華やかさはない。ただ特殊な灯火具としての移入品である瓦質瓦灯のようなものが見られる。

調理具は瓦質の鍋・焙烙・播り鉢があり、供膳・灯火具には土師質皿類が多い。貯蔵具は明確なものが認められないが、無釉焼締陶器が使われていた可能性が高い。

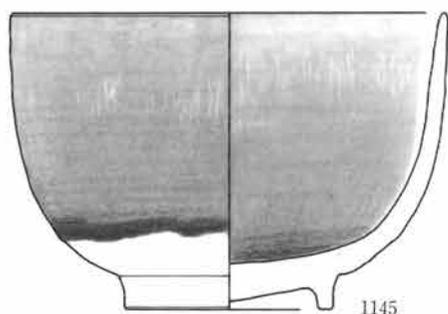
IV 期（16世紀～17世紀前半頃）

この時期は極めて衰微し、基本的には生活が存在した痕跡に乏しい。17世紀になると僅かに供膳具に瀬戸美濃陶器皿類そして最後の舶載品である青花皿1点が見られるが、これは次のV期の前段階のものとして考えられる。

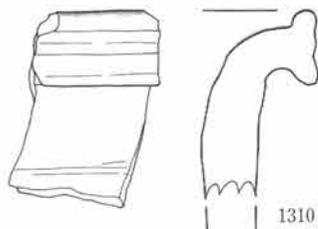
V 期（17世紀後半～18世紀前半頃）

供膳具は、大量に瀬戸美濃・肥前など国産主要産地の多様な碗皿類が入っている。特に前半が中心で「方」字などの墨書も多い。調度具も同様の傾向があり、中でも肥前の大花瓶など一般使用とは異なったものが見られる。調理具の肥前片口・丹波播り鉢や灯火具の志戸呂皿など陶器製品が、それまでの土器と置き換わっている。ただし、調理具の中で直接火を受けるものは、土器が使われていた可能性が高いが、はっきりしな

4 溝



1145



1310



2130(1/1)

9 溝

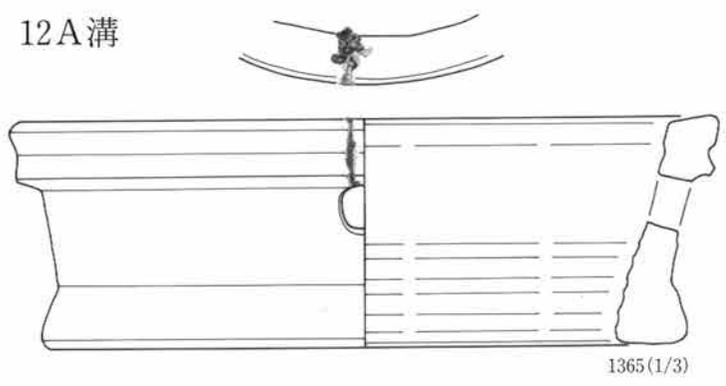


2092(1/1)



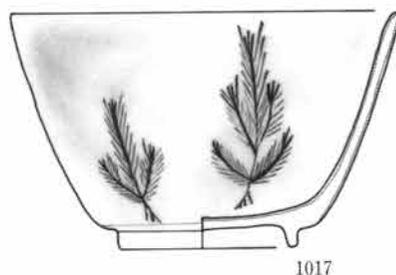
2114(1/1)

12A 溝

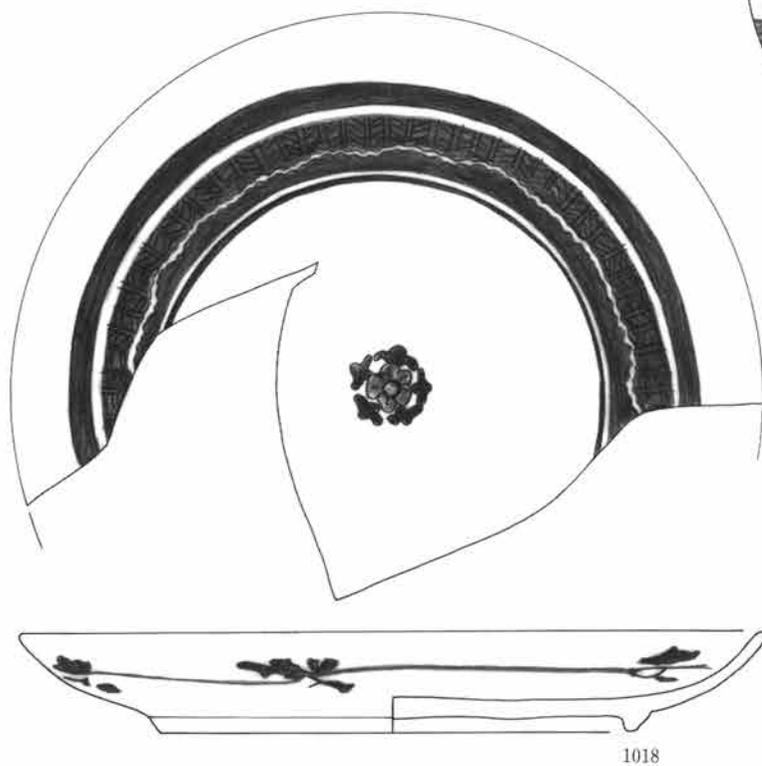


1365(1/3)

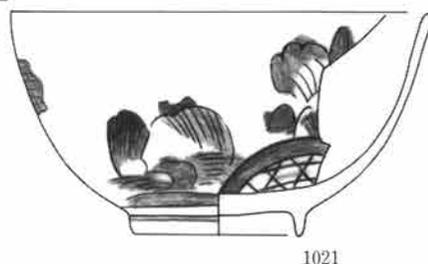
14 溝



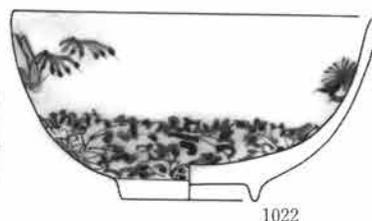
1017



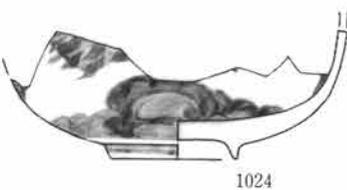
1018



1021



1022

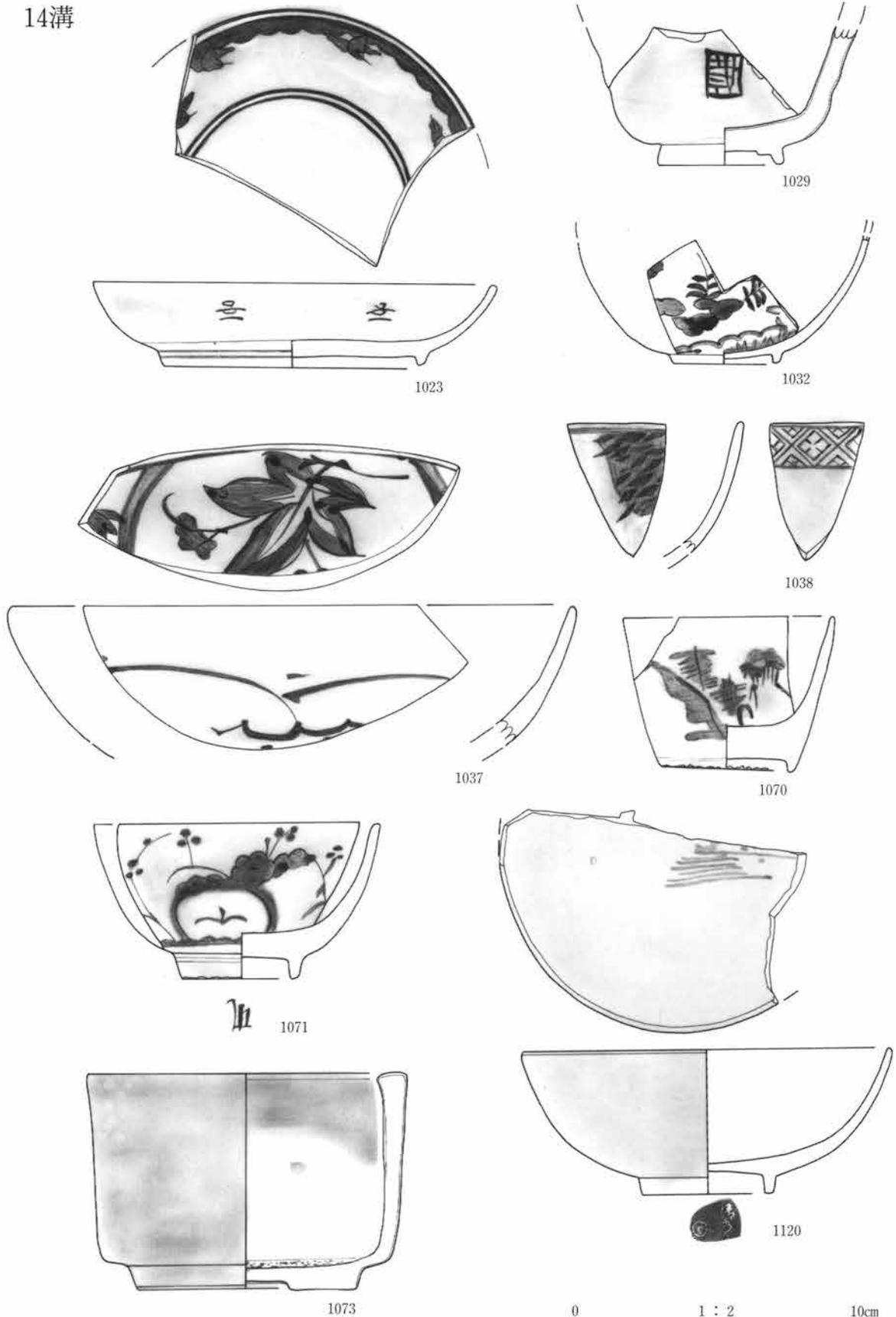


1024

0 1 : 2 10cm

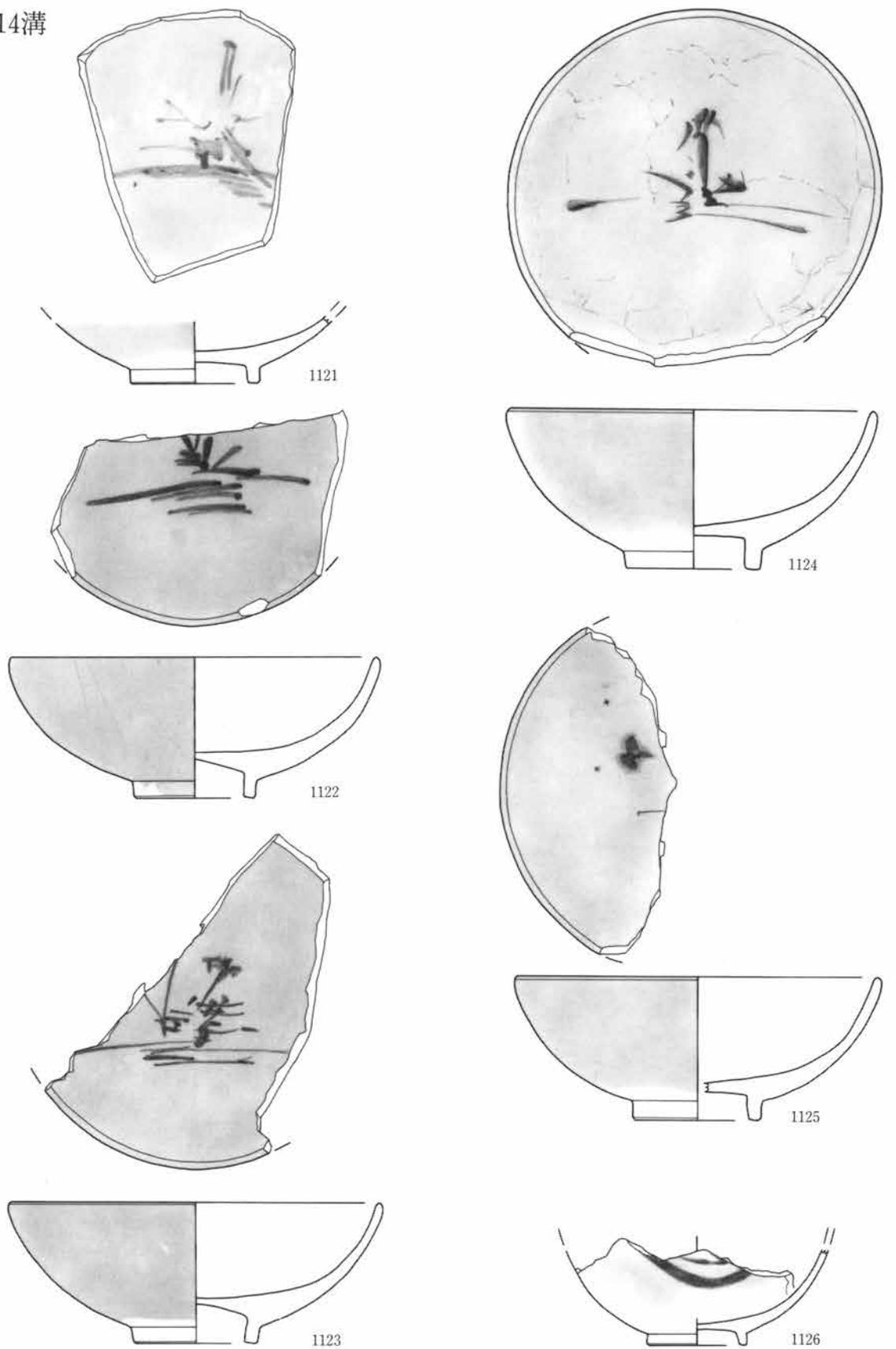
第291図 遺構出土の中世以降遺物(1)

14溝



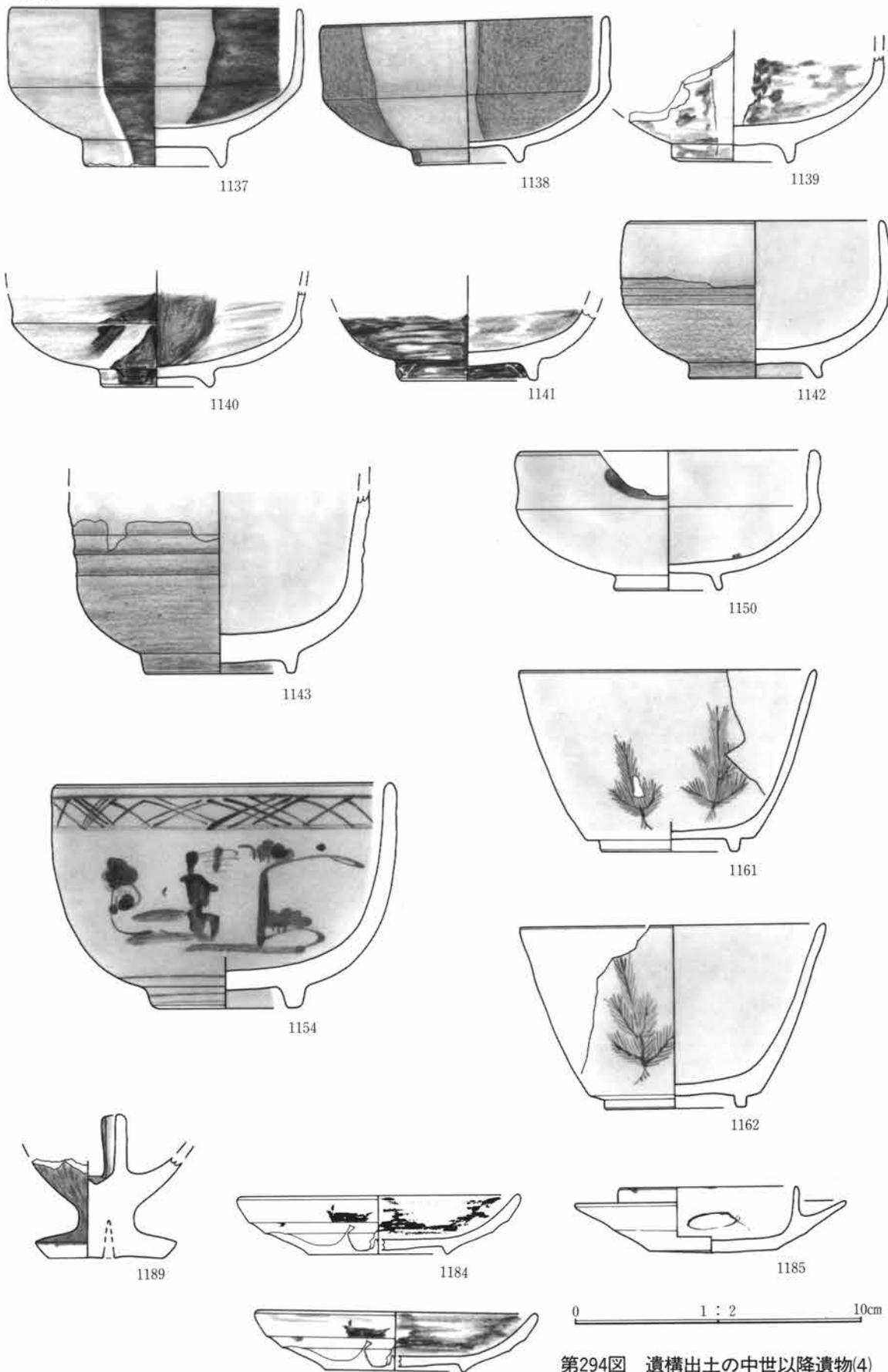
第292図 遺構出土の中世以降遺物(2)

14溝



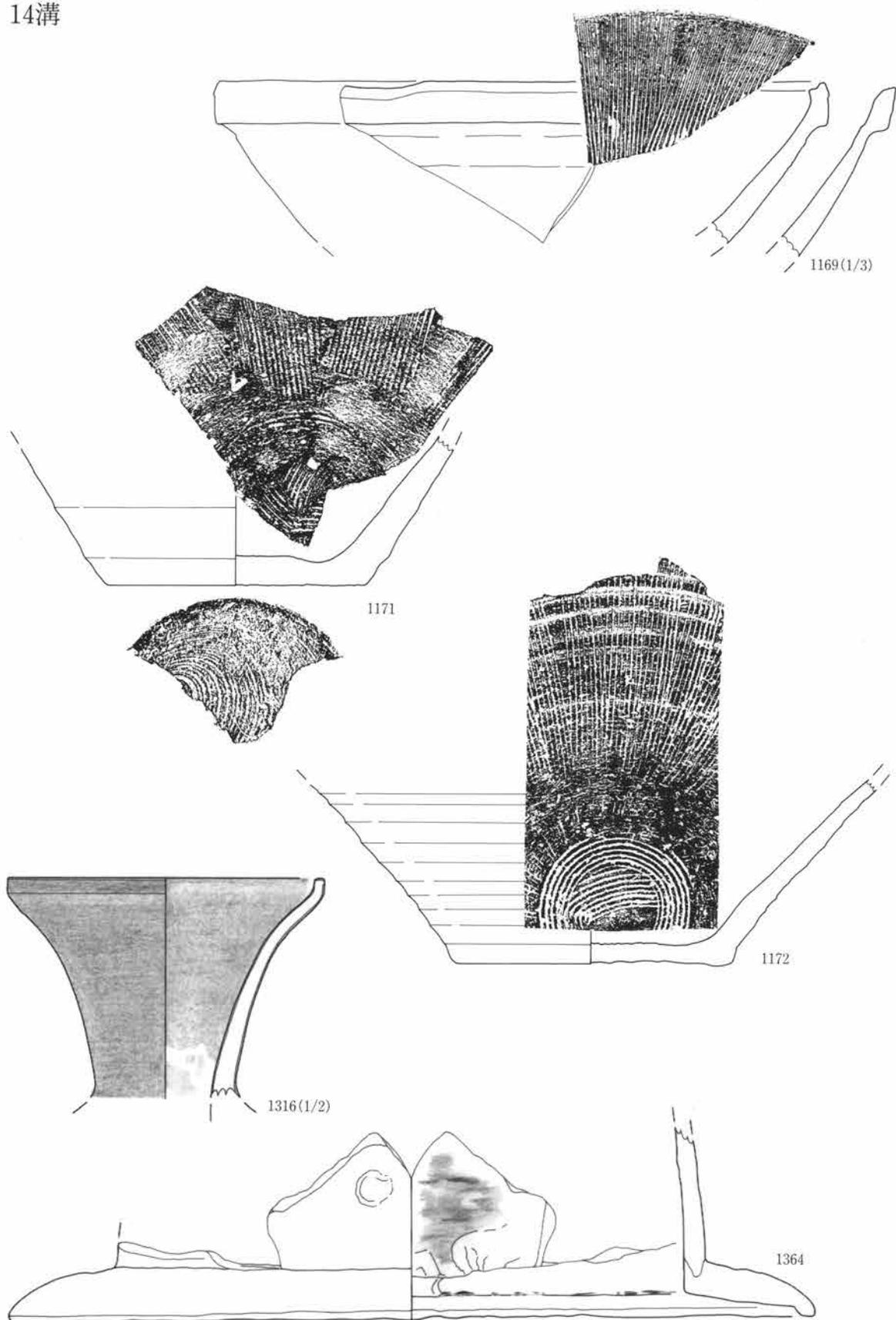
第293図 遺構出土の中世以降遺物(3)

14溝



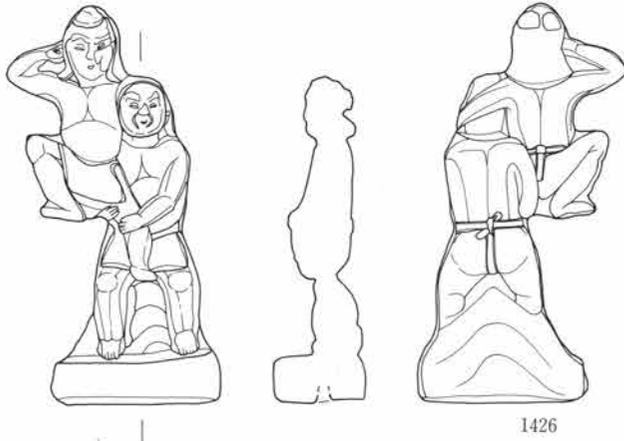
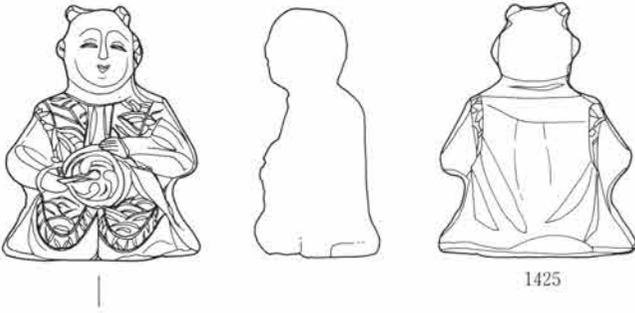
第294図 遺構出土の中世以降遺物(4)

14溝

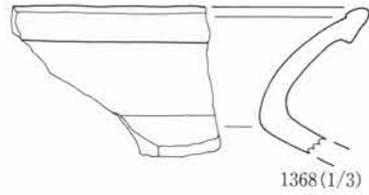
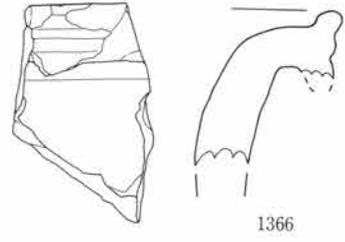
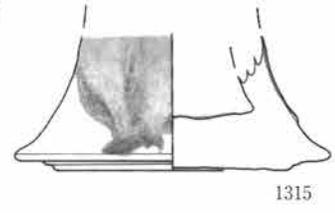


第295図 遺構出土の中世以降遺物(5)

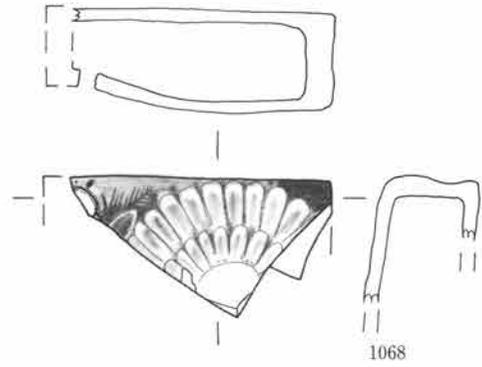
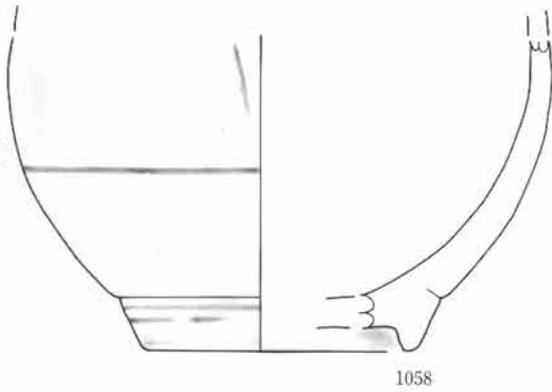
14溝



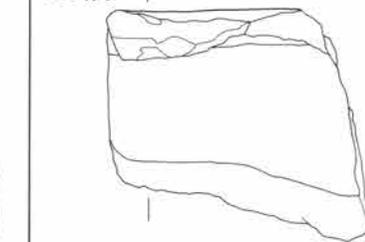
15溝



18溝



30溝

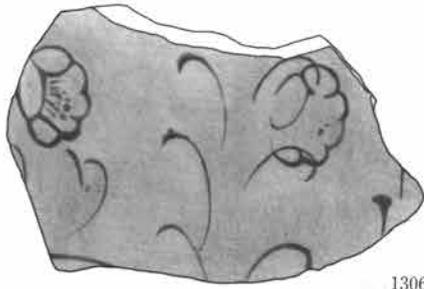


0 1 : 2 10cm

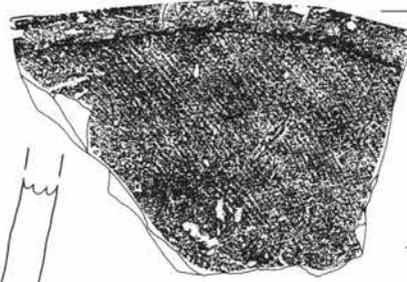


第296図 遺構出土の中世以降遺物(6)

50溝

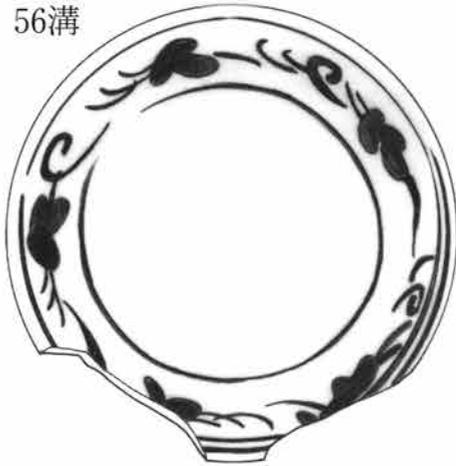


1306



1314(1/3)

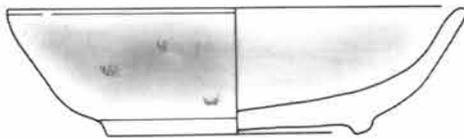
56溝



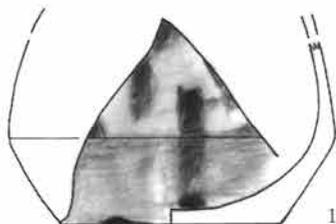
1042



1043



1045

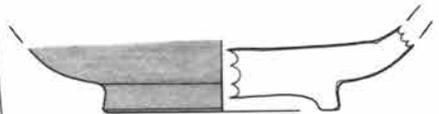


1047

55溝



1334



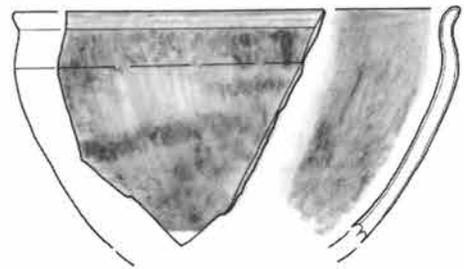
1333



1044



1046

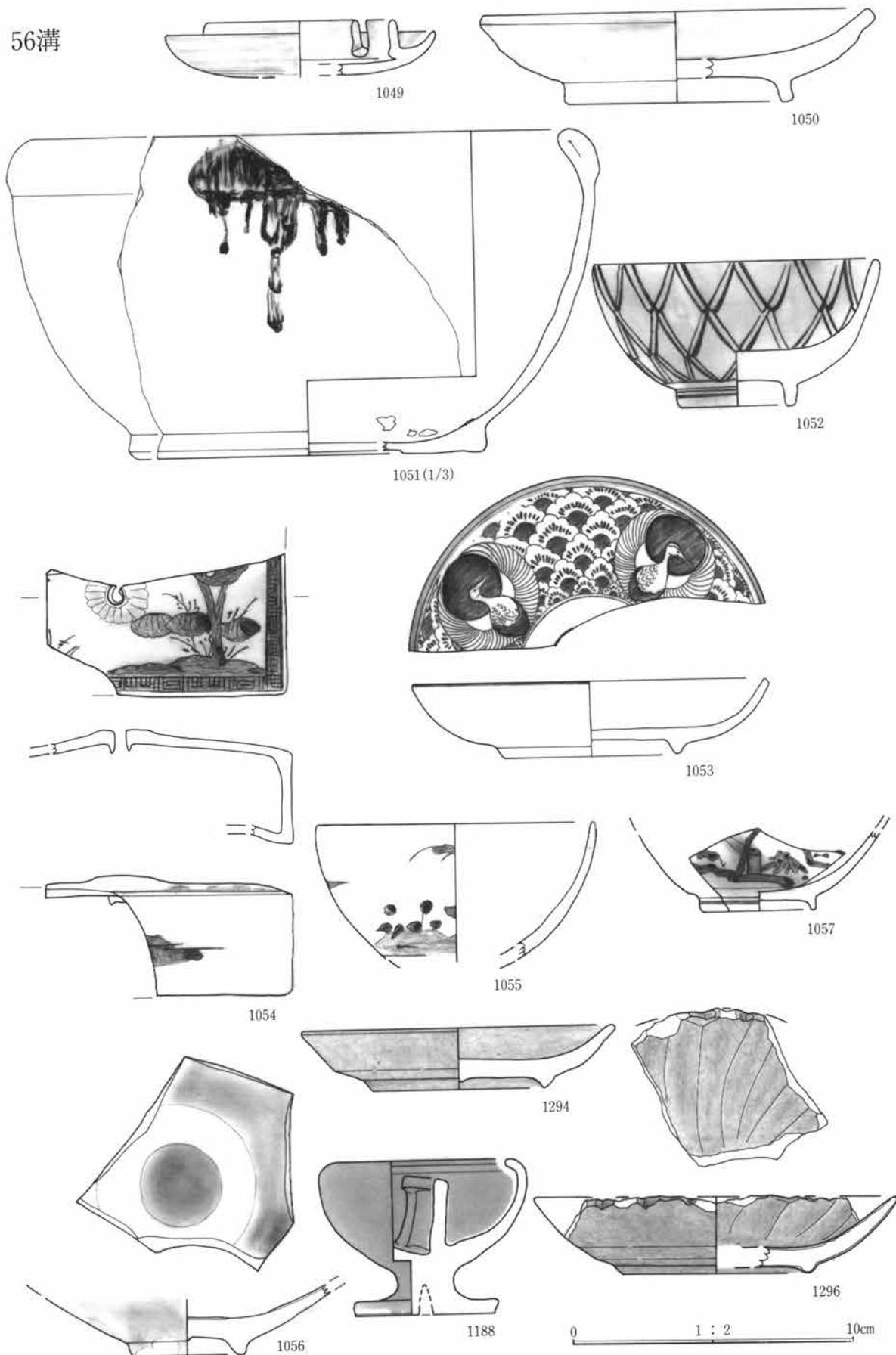


1048

0 1 : 2 10cm

第297図 遺構出土の中世以降遺物(7)

56溝



第298図 遺構出土の中世以降遺物(8)

56溝



1254



1257



1326



1328



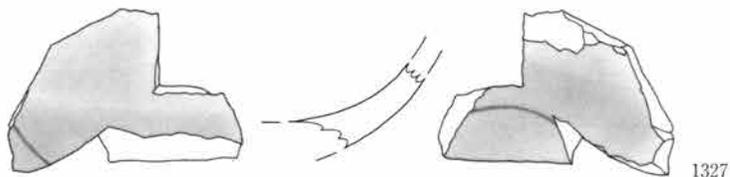
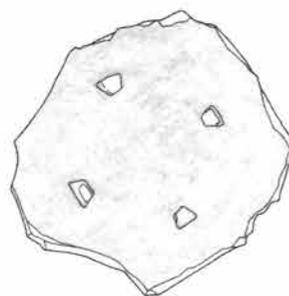
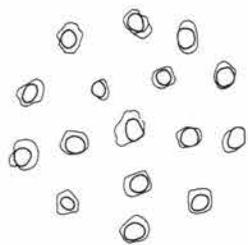
1330



1339



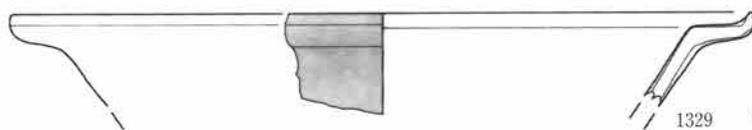
1332



1327



1340

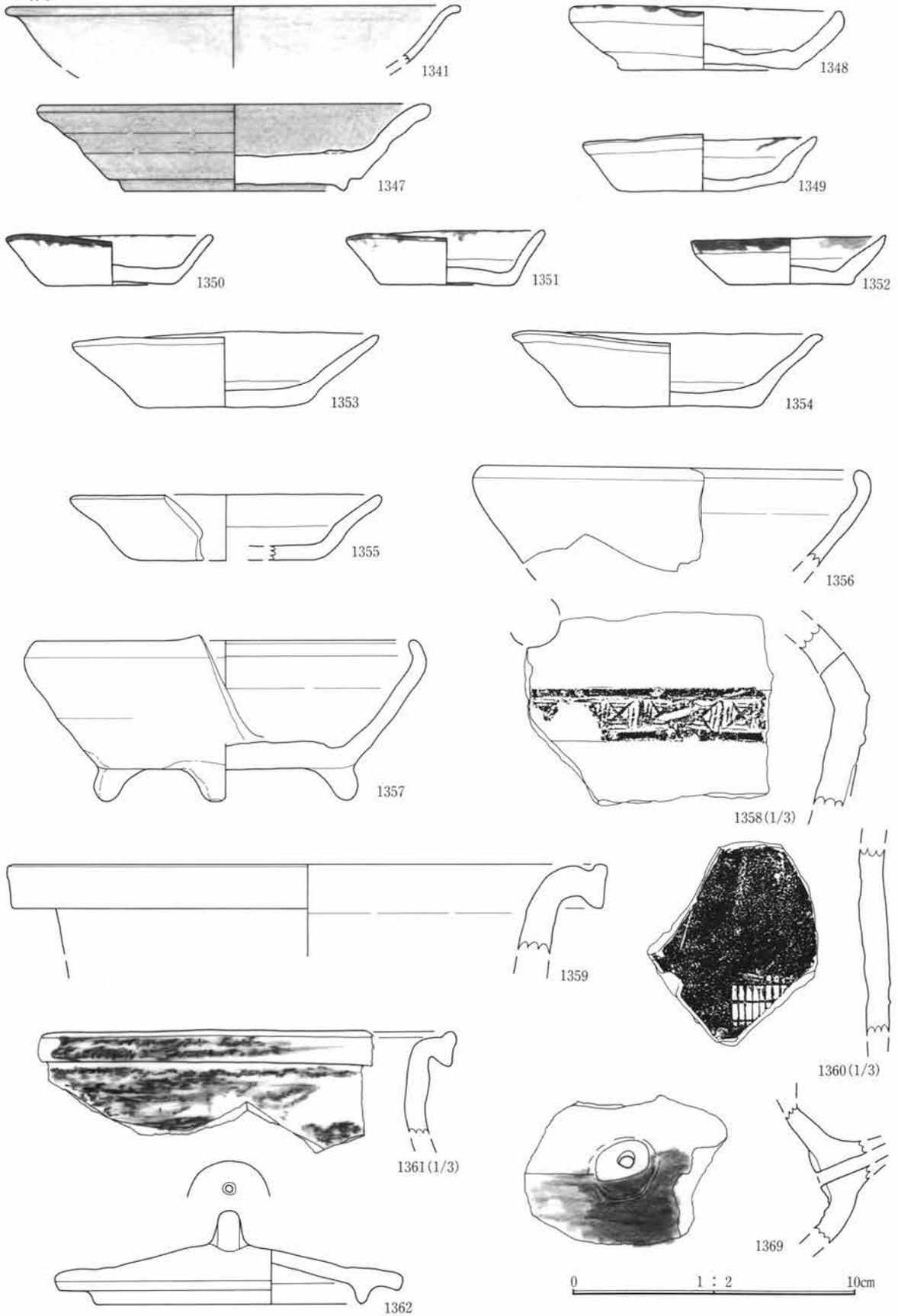


1329

0 1 : 2 10cm

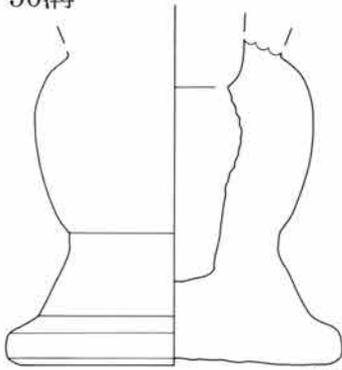
第299図 遺構出土の中世以降遺物(9)

56溝

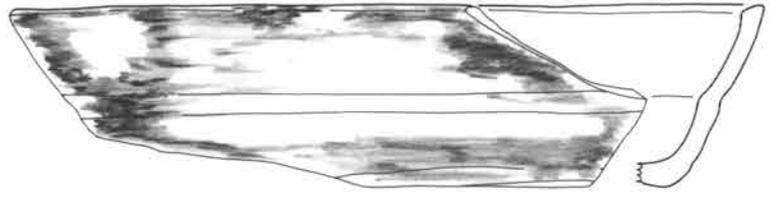


第300図 遺構出土の中世以降遺物(10)

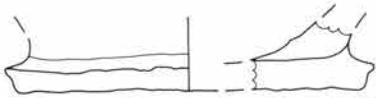
56溝



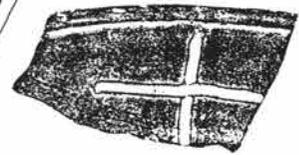
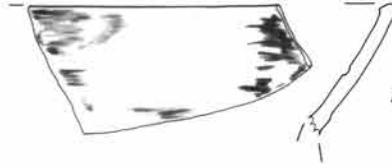
1370(1/2)



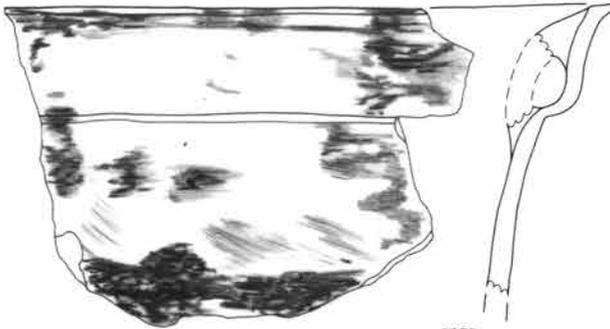
1373



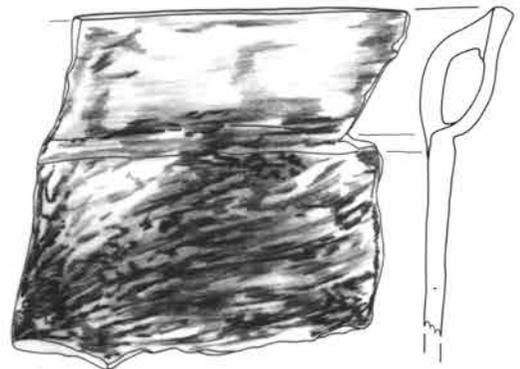
1372



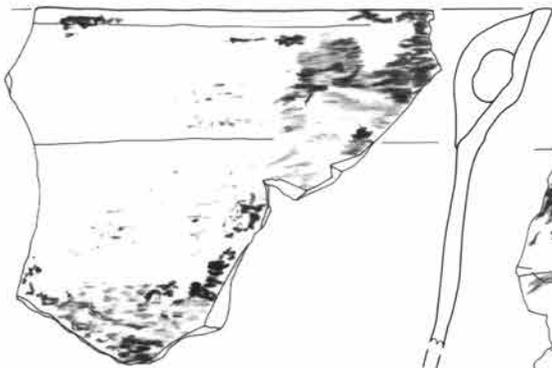
1374



1375



1376



1377

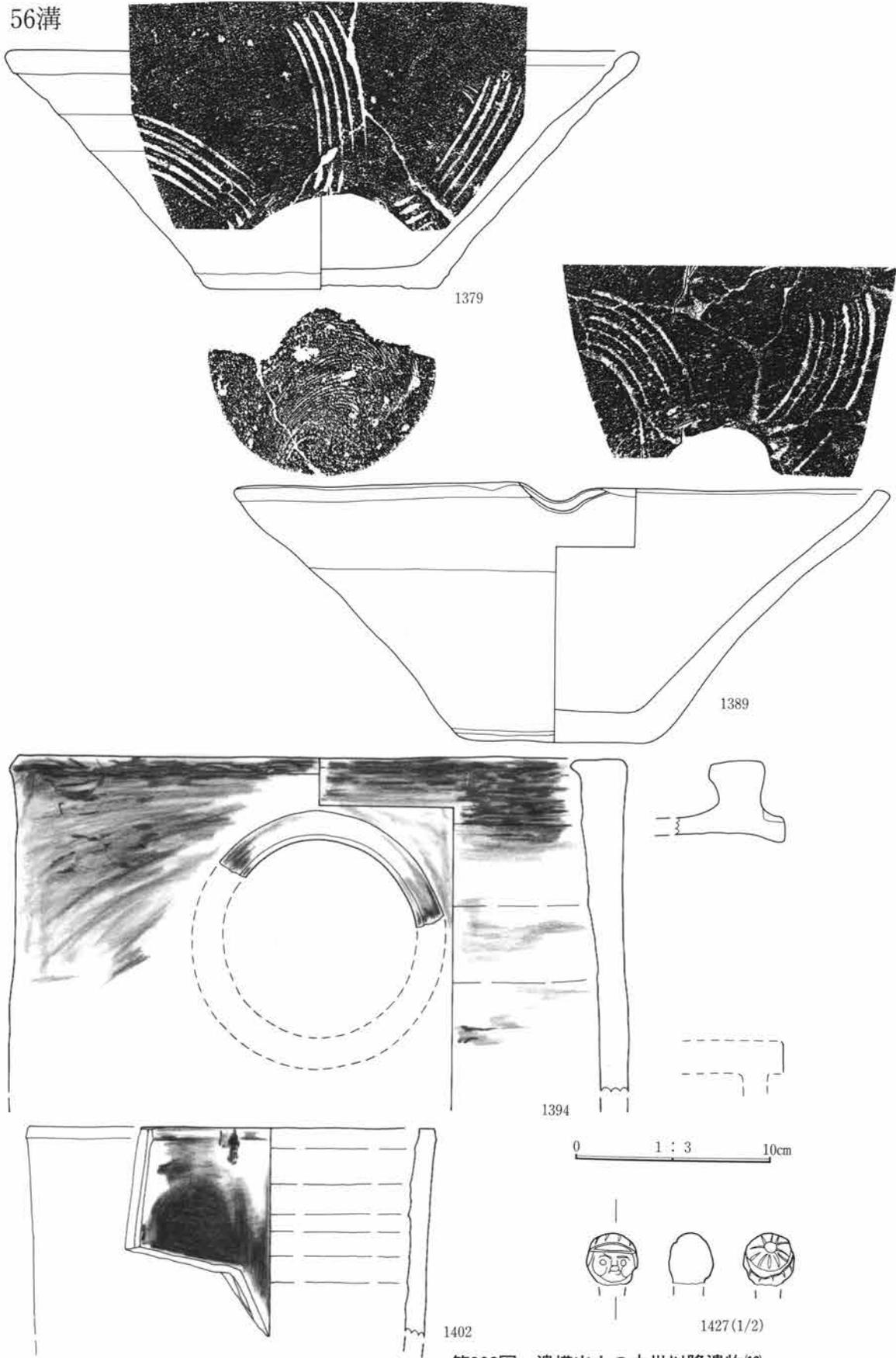


1378

第301図 遺構出土の中世以降遺物(1)

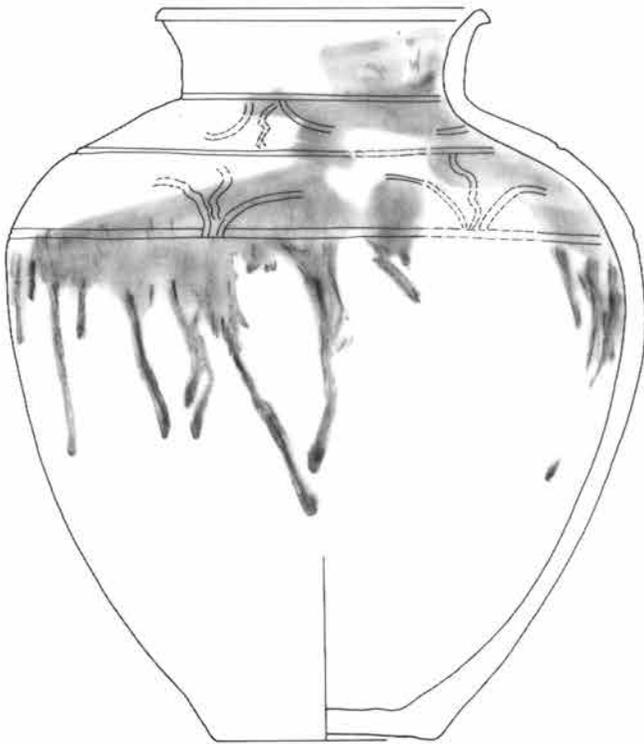
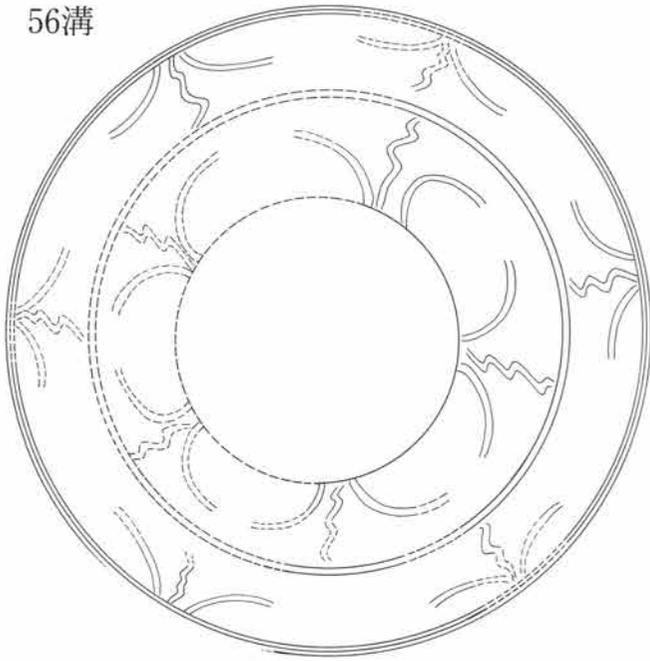
0 1 : 3 10cm

56溝



第302図 遺構出土の中世以降遺物(12)

56溝



1398(1/4)



2023



2029



2046



2055



2072



2078



2116



2124



2119



2125



2126

0 1 : 1 5 cm



2127



2129



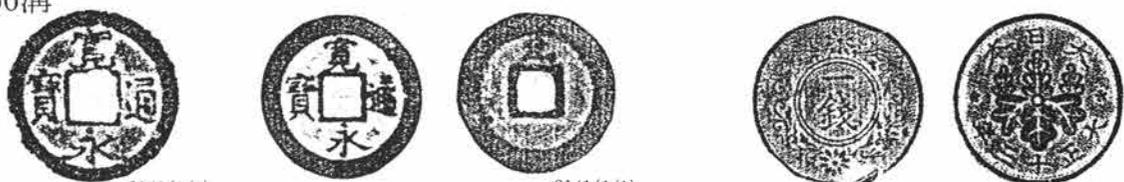
2135



2139

第303図 遺構出土の中世以降遺物(13)

56溝

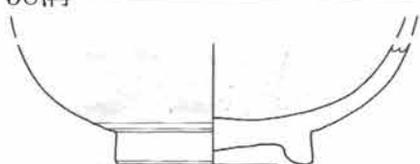


2140(1/1)

2141(1/1)

2143(1/1)

58溝



1148

23土坑



2061(1/1)

2102(1/1)

2109(1/1)

509土坑



2079(1/1)

2115(1/1)



2112(1/1)

2118(1/1)

2158(1/1)

535土坑



2004(1/1)

2097(1/1)

2098(1/1)

2099(1/1)

2156(1/1)

536土坑



2057(1/1)

611土坑

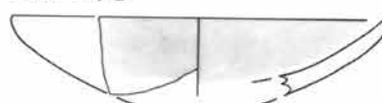


2012(1/1)



2100(1/1)

716土坑

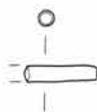


1342

770土坑

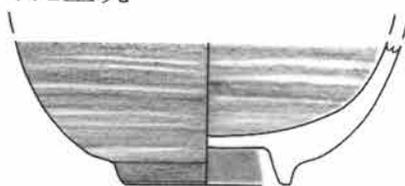


2157(1/1)

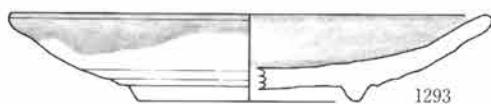


2207

771土坑



1149



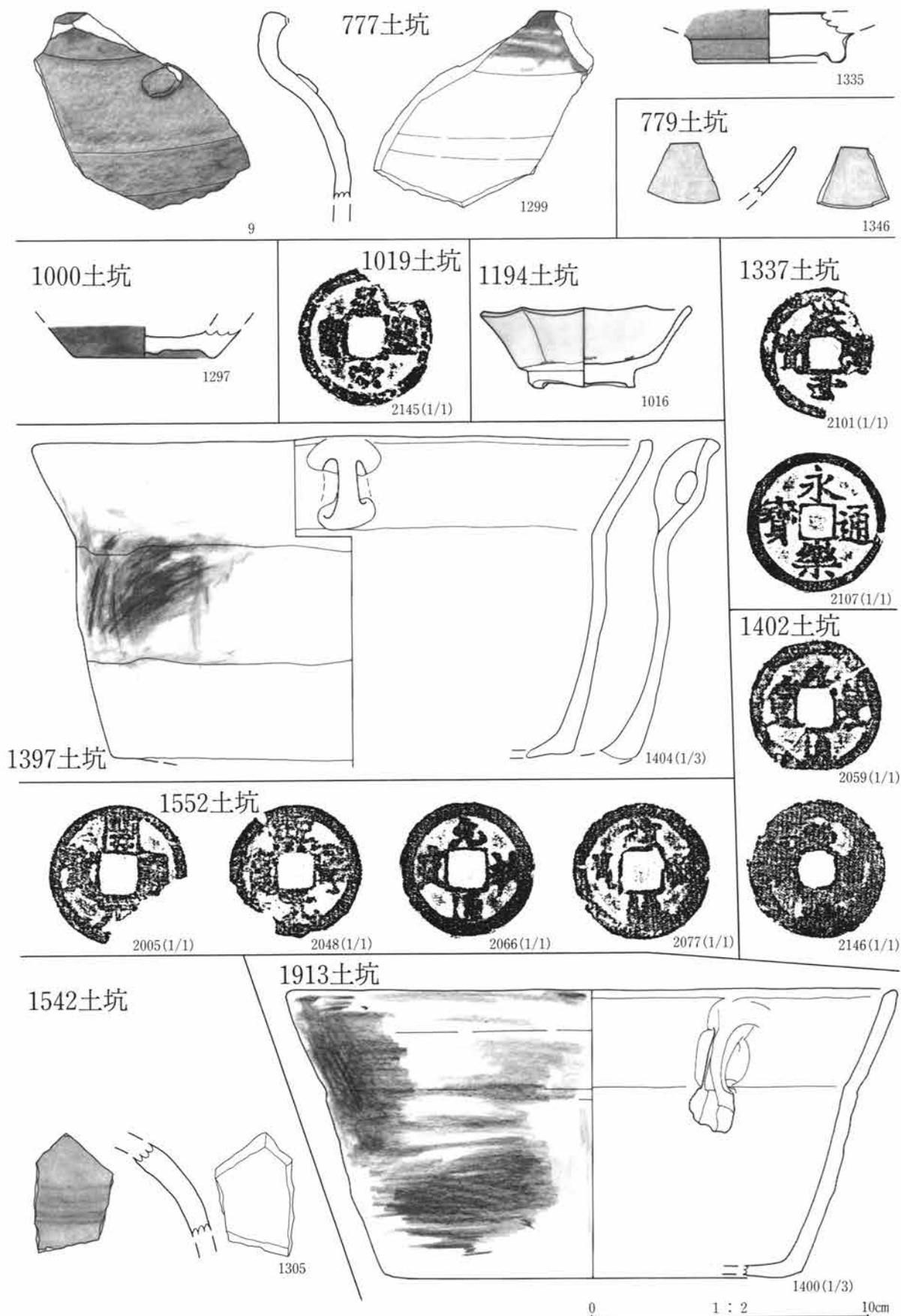
1293

0 1 : 2 10cm



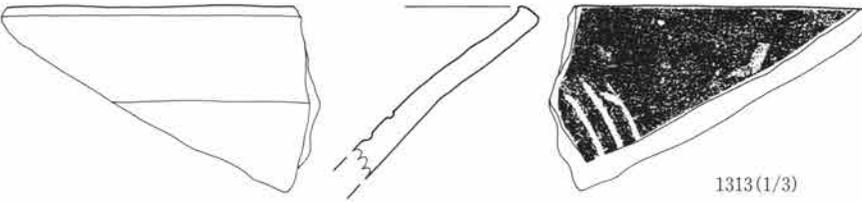
1167

第304図 遺構出土の中世以降遺物(14)



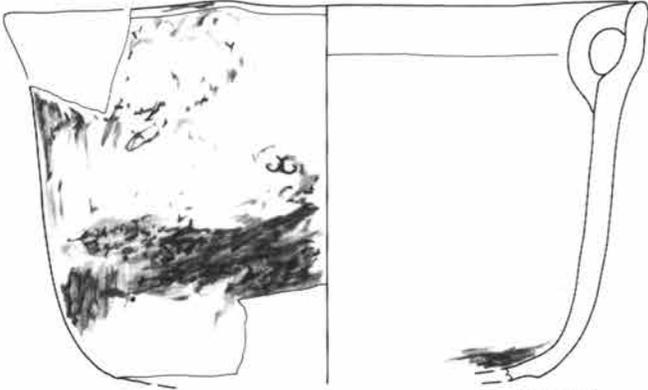
第305図 遺構出土の中世以降遺物(15)

1914土坑

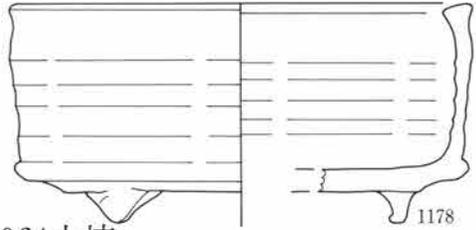


1313(1/3)

1995土坑



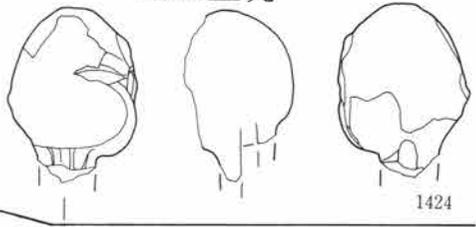
1381(1/3)



1178

2064土坑

2065土坑



1424

2118土坑



1151

2202土坑

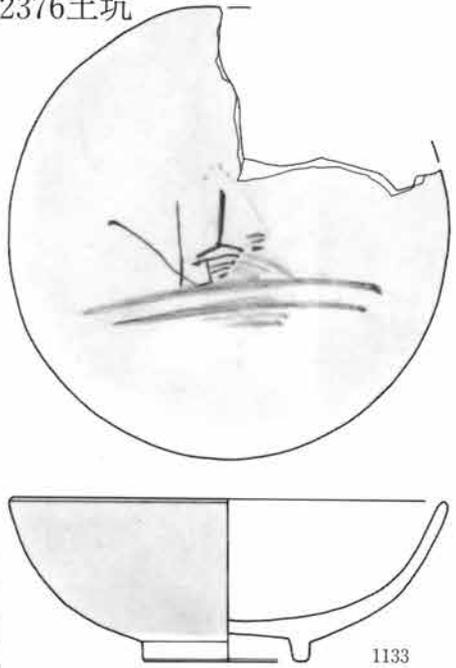


2034(1/1)

2044(1/1)

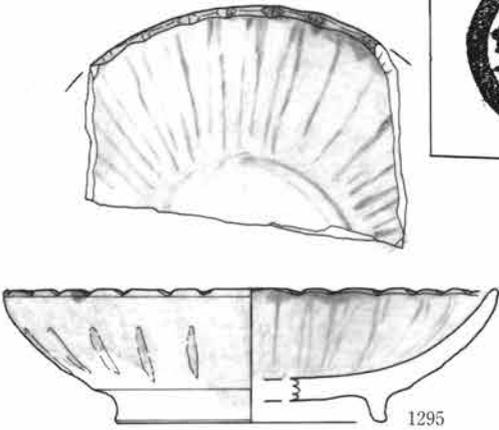
2086(1/1)

2376土坑



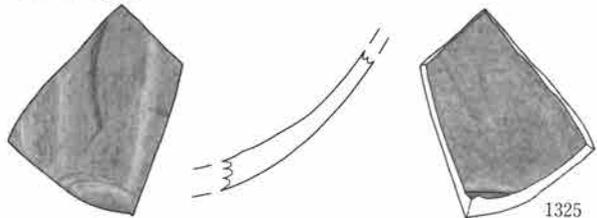
1133

2124土坑



1295

2621土坑



1325

第306図 遺構出土の中世以降遺物(16)

0 1 : 2 10cm

2677土坑



2032(1/1)



2074(1/1)



2103(1/1)

2908土坑

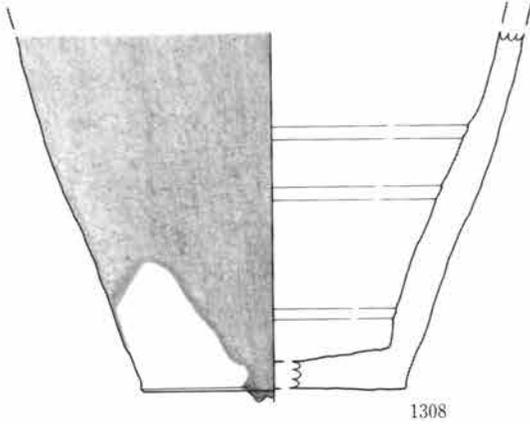


2047(1/1)



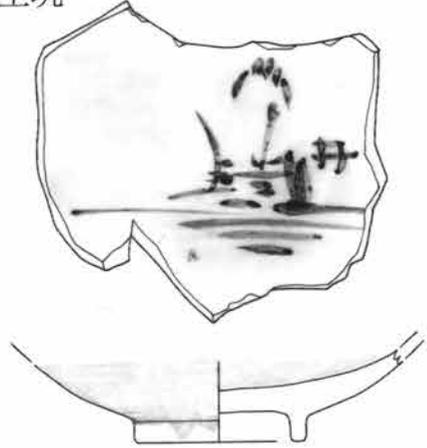
2108(1/1)

2887土坑

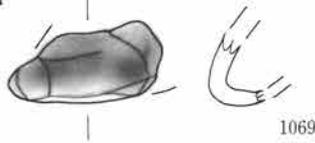


1308

3004土坑



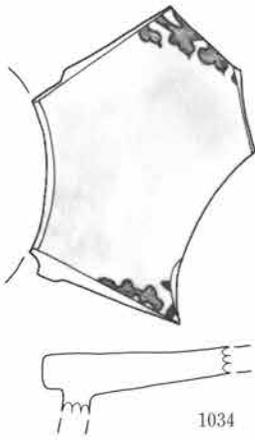
3007土坑



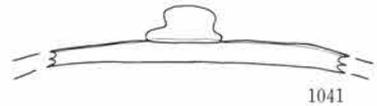
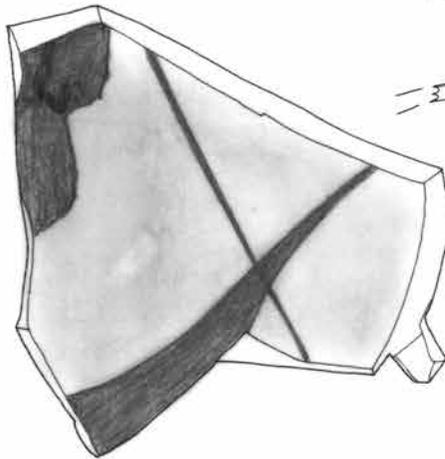
1069



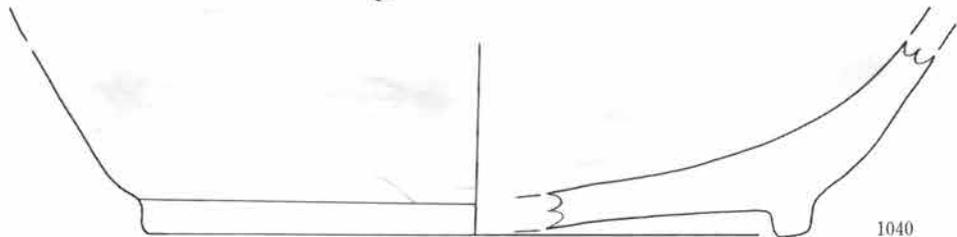
1020



1034



1041

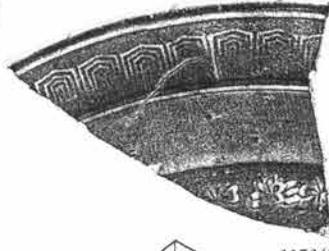
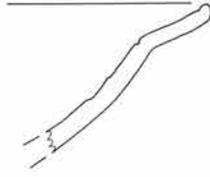


1040

0 1 : 2 10cm

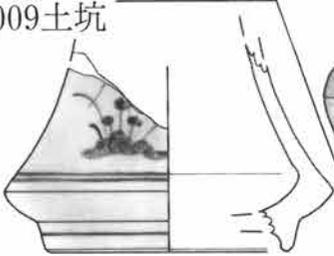
第307図 遺構出土の中世以降遺物(17)

3007土坑

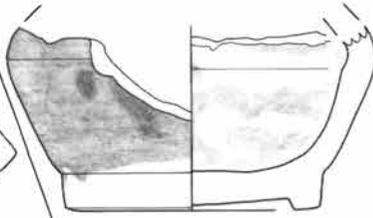


1176(1/3)

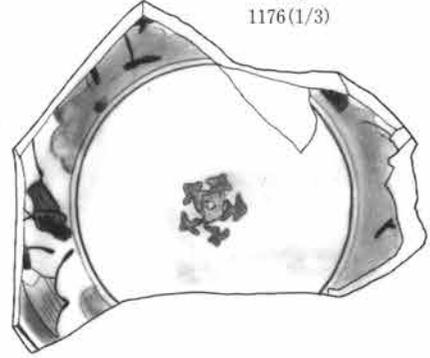
3009土坑



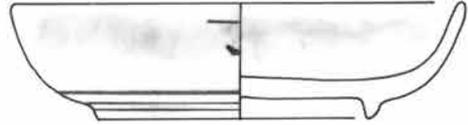
1072



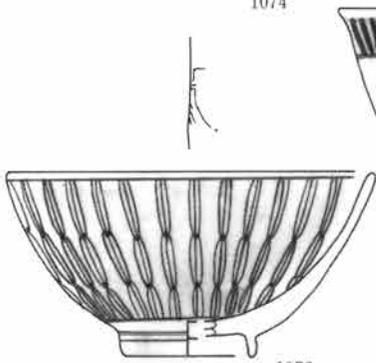
1165



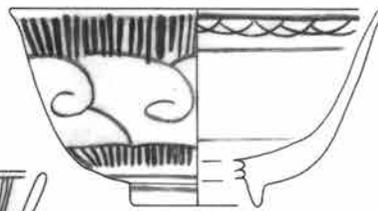
1074



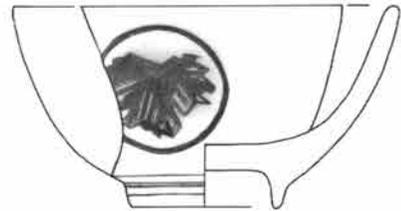
1063



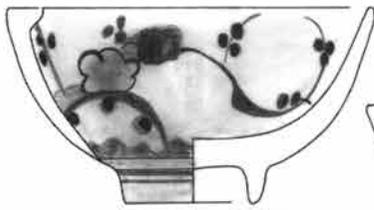
1076



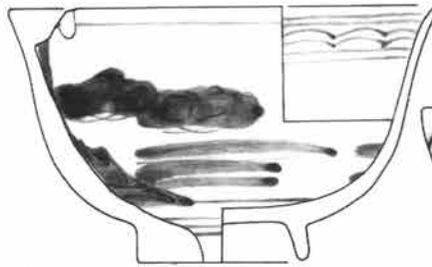
1075



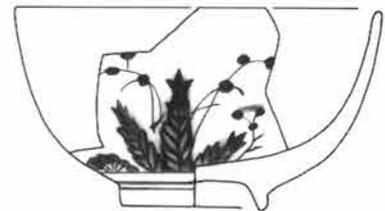
1077



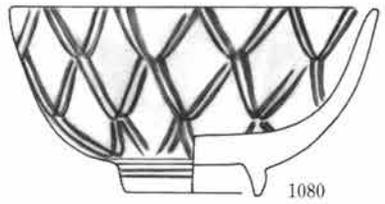
1078



1081



1079

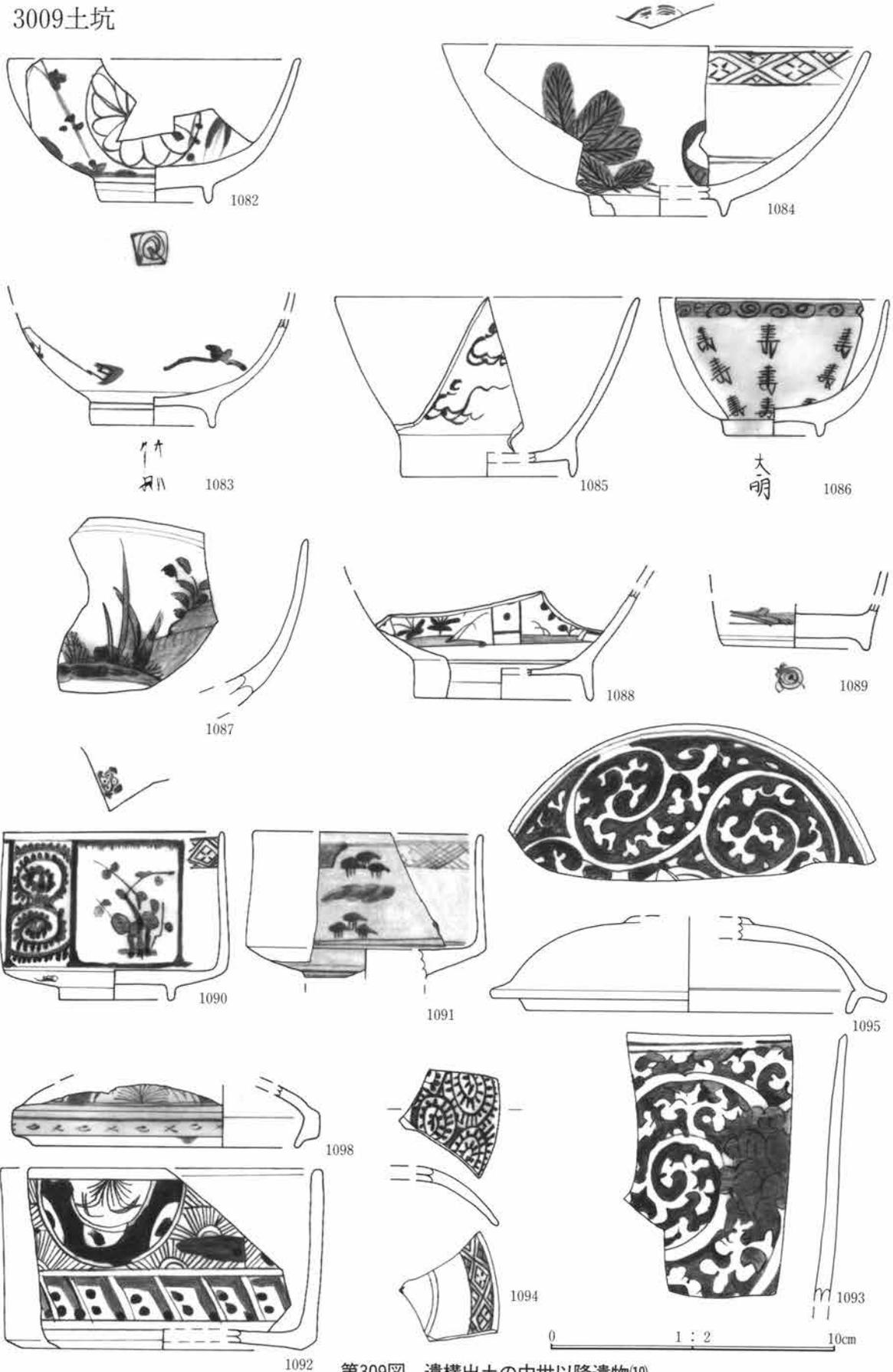


1080

0 1 : 2 10cm

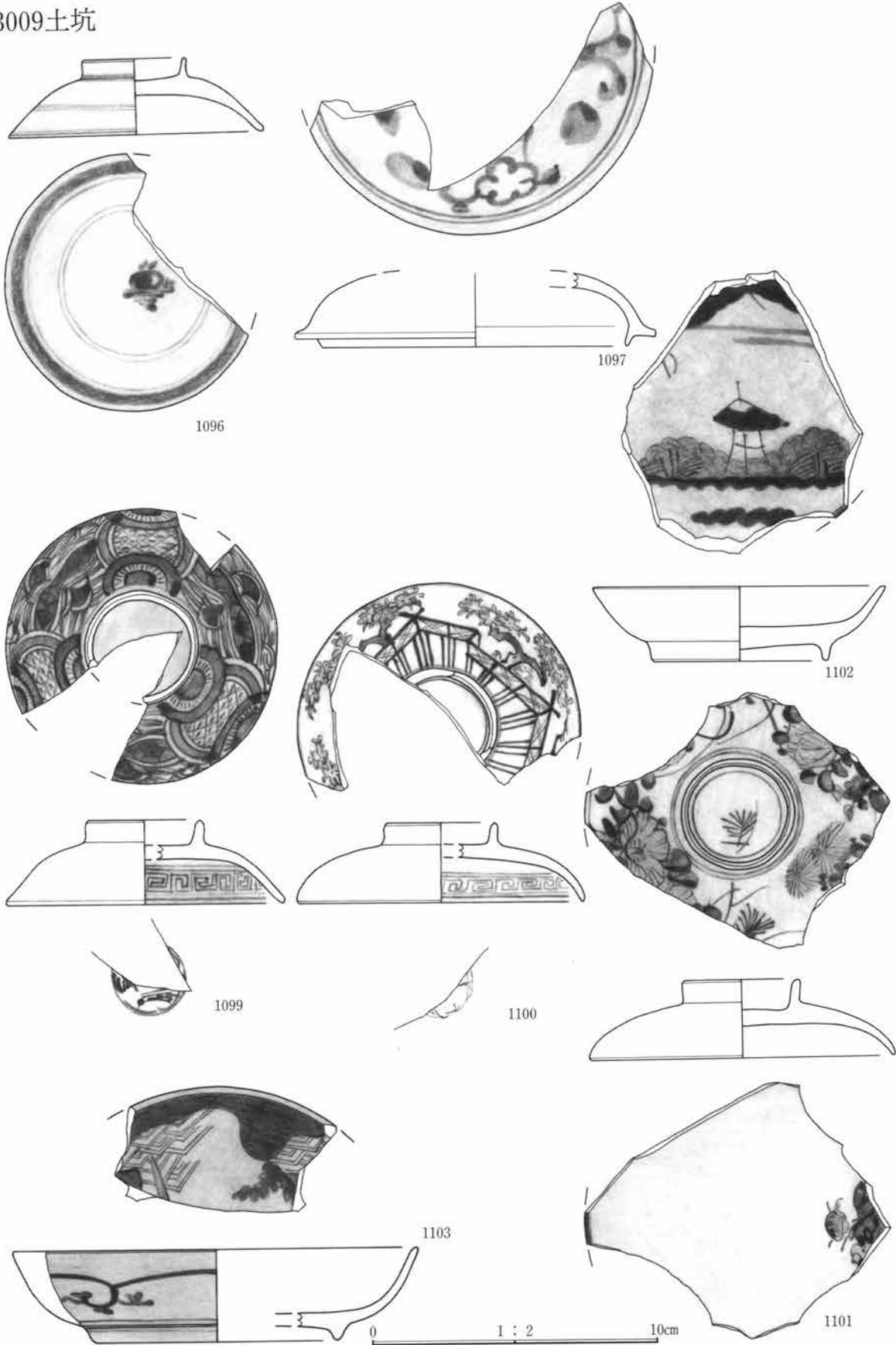
第308図 遺構出土の中世以降遺物(18)

3009土坑



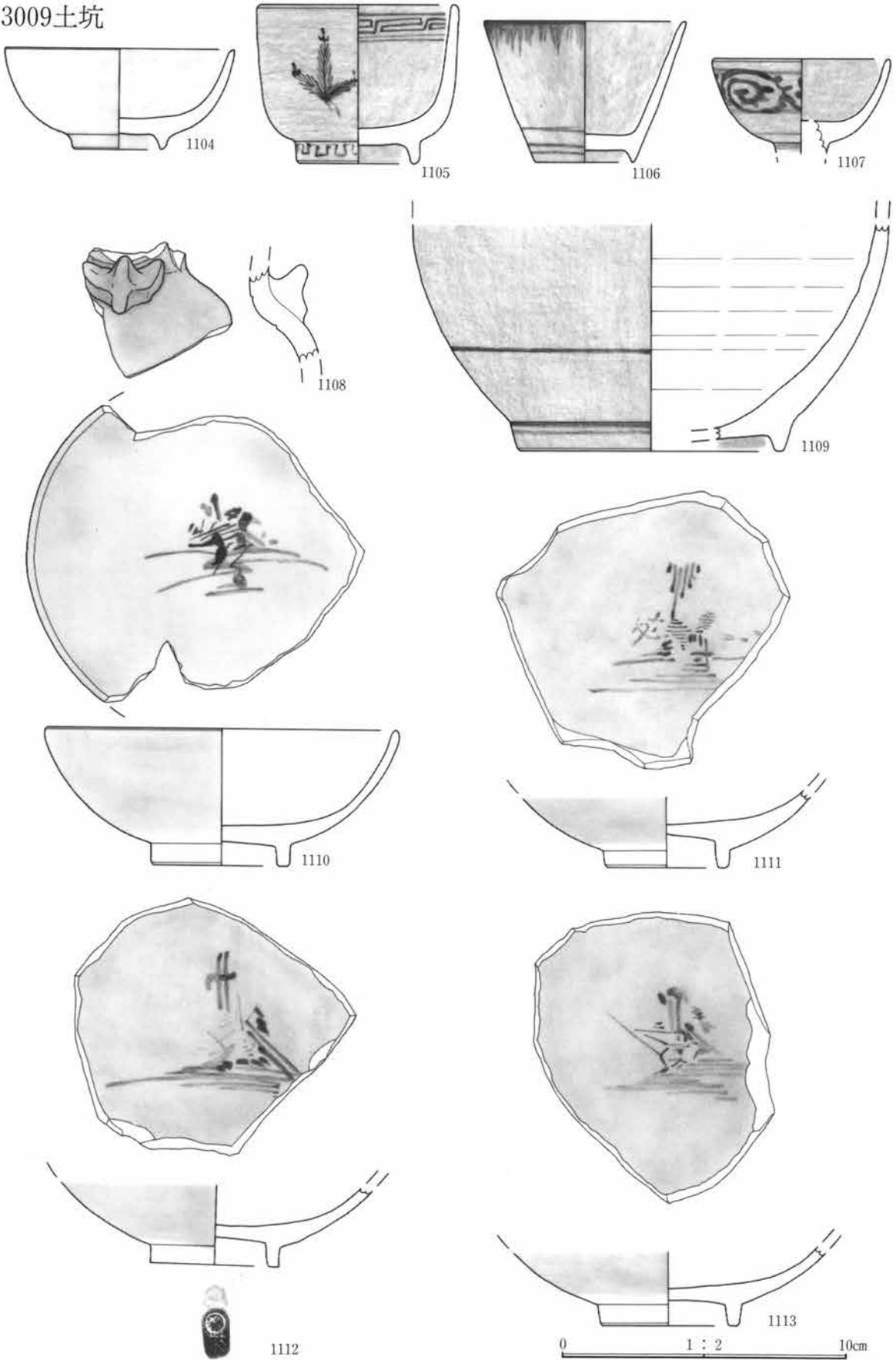
第309図 遺構出土の中世以降遺物(19)

3009土坑



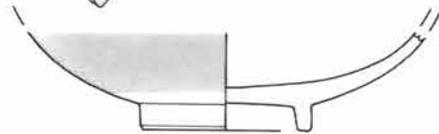
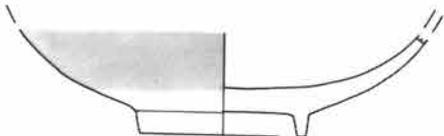
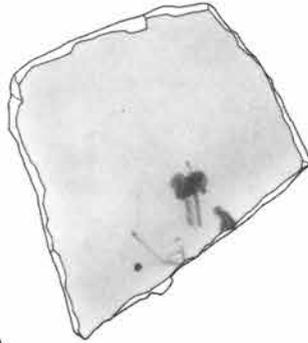
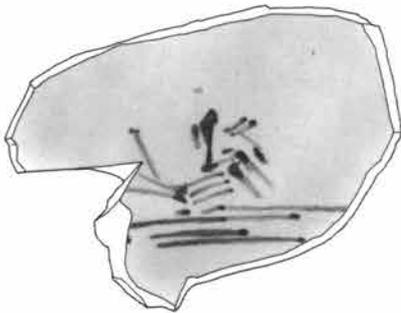
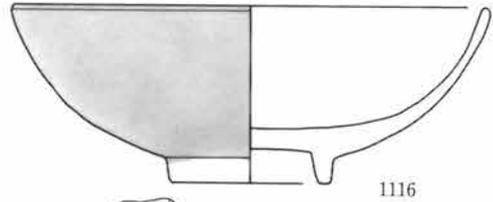
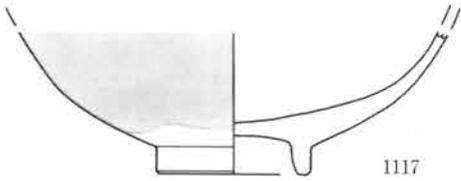
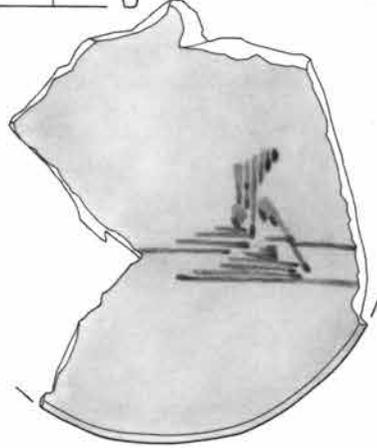
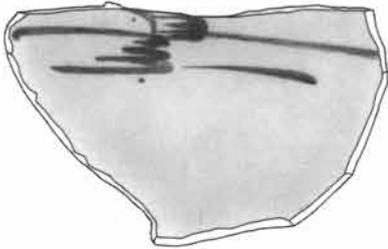
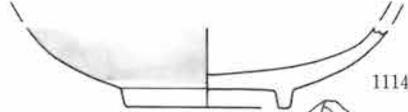
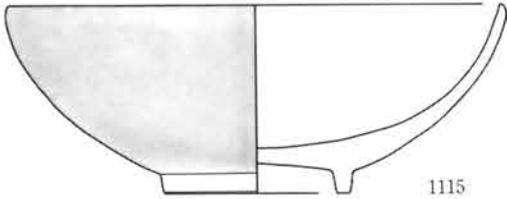
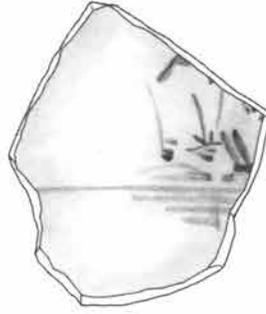
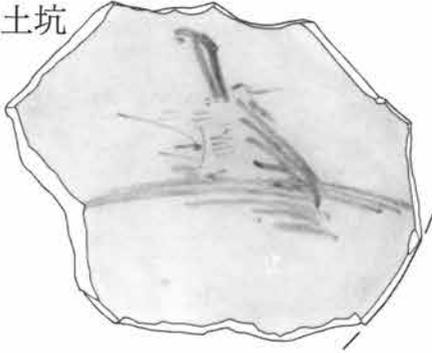
第310図 遺構出土の中世以降遺物(20)

3009土坑



第311図 遺構出土の中世以降遺物(2)

3009土坑



方

1118

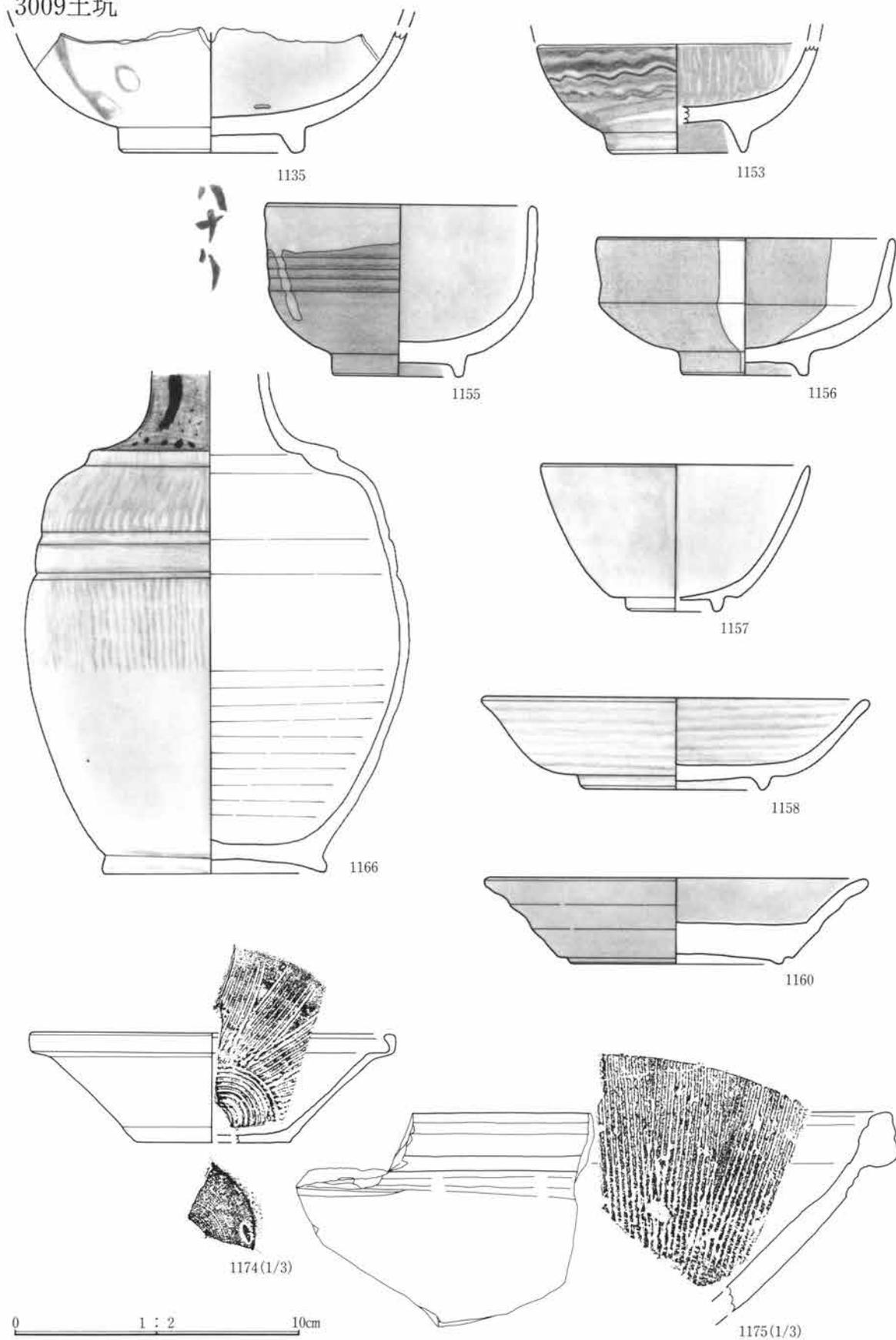
0 1 : 2 10cm

首

1119

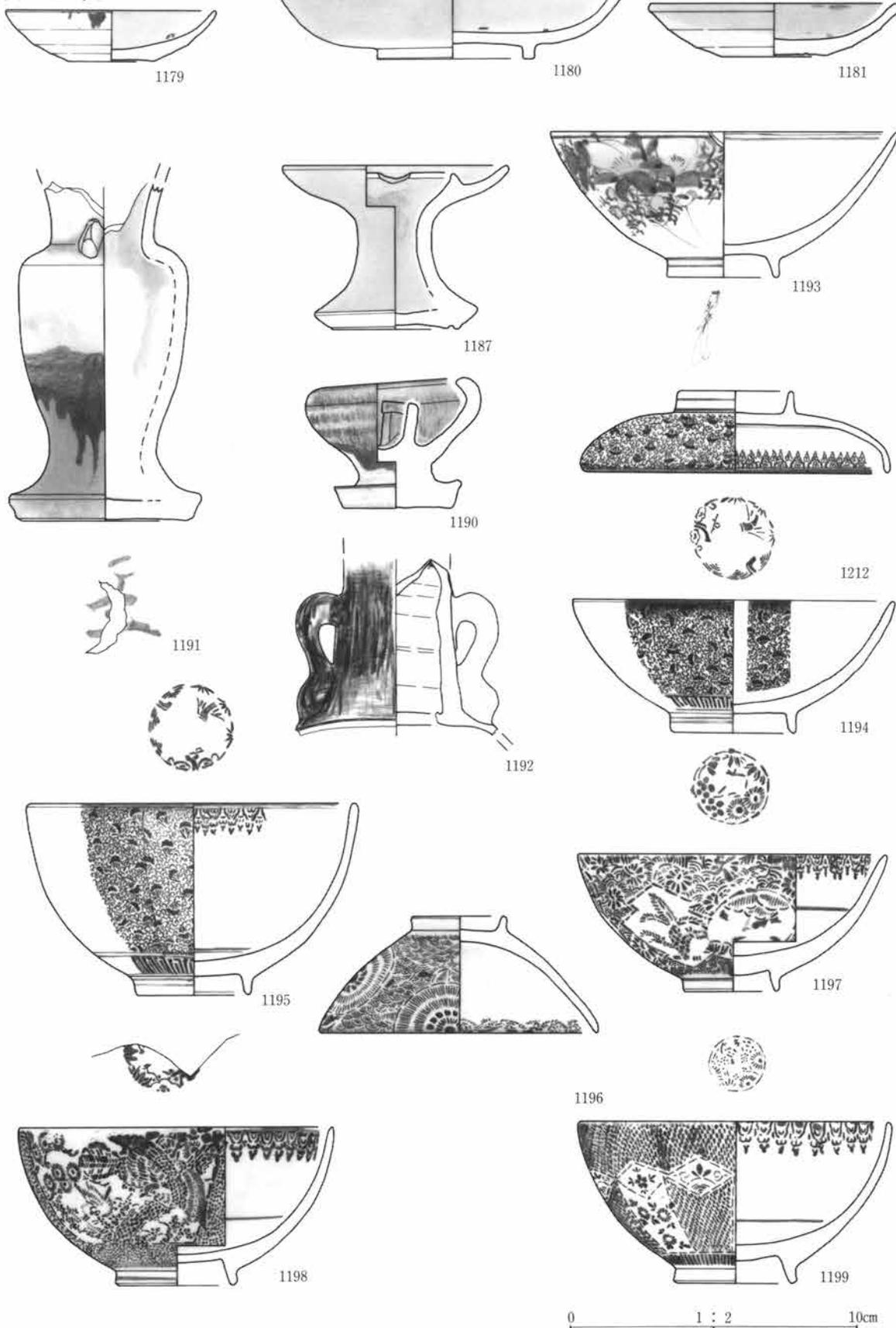
第312図 遺構出土の中世以降遺物(22)

3009土坑



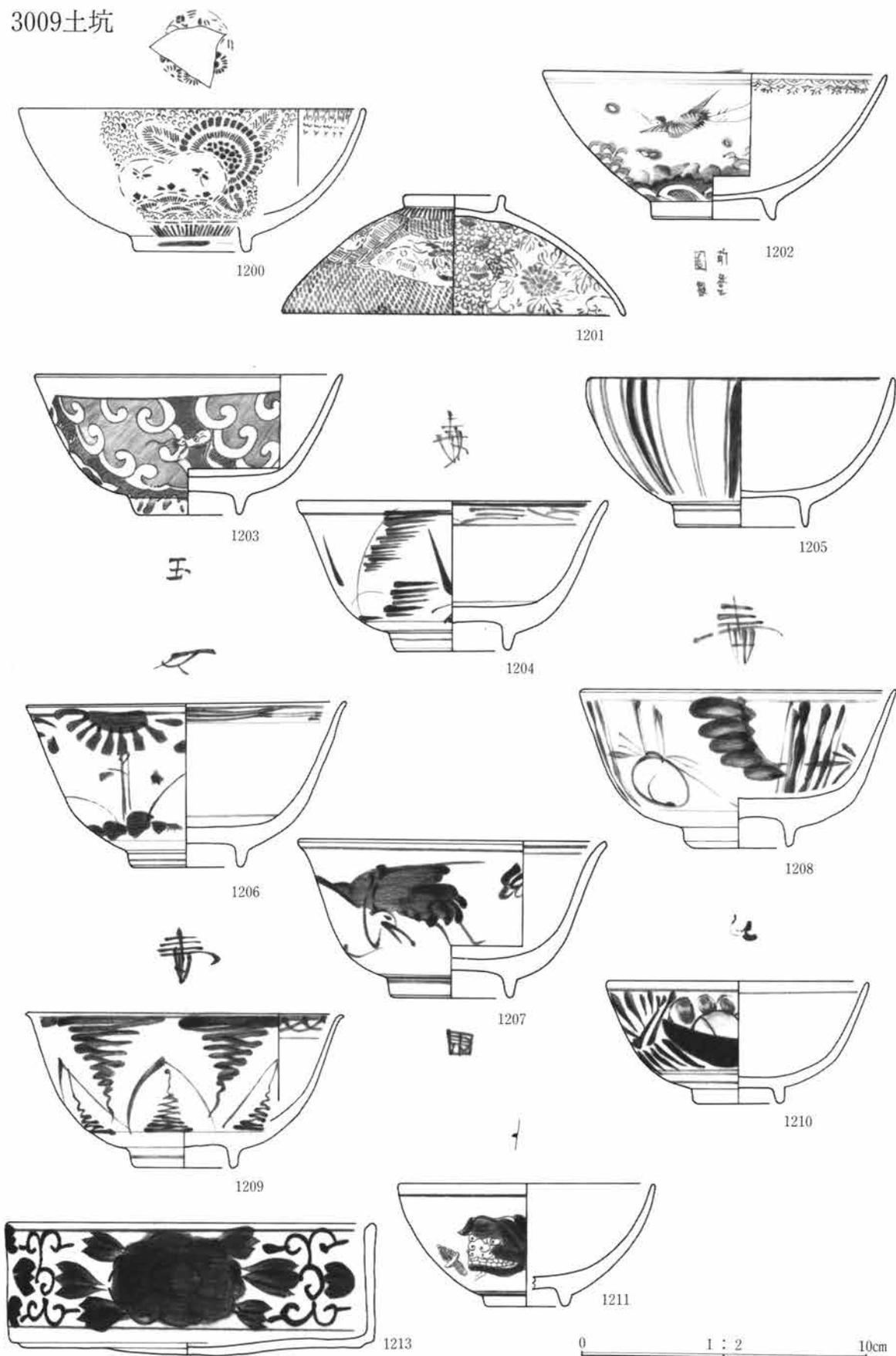
第313図 遺構出土の中世以降遺物(23)

3009土坑



第314図 遺構出土の中世以降遺物(24)

3009土坑



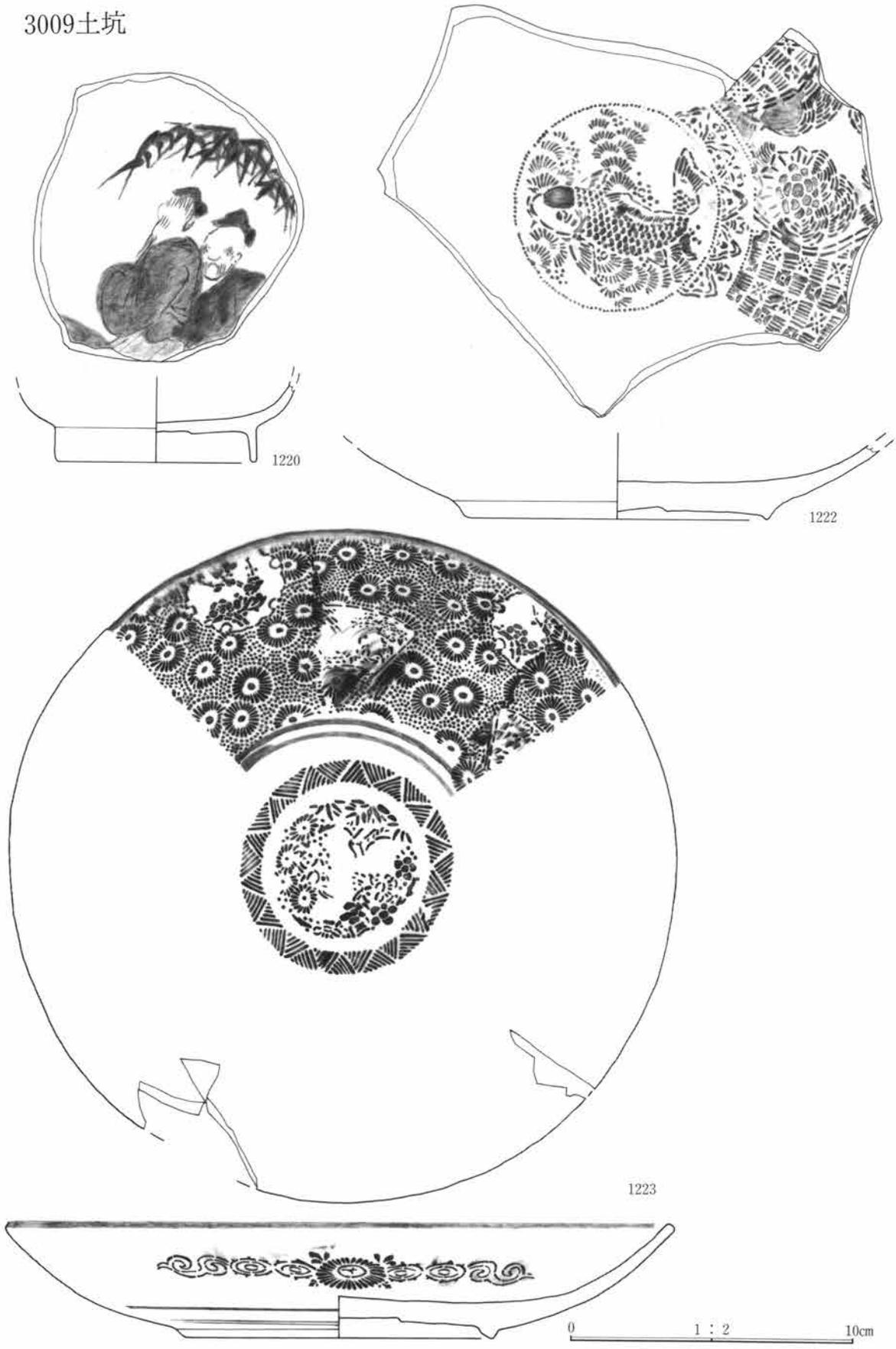
第315図 遺構出土の中世以降遺物(25)

3009土坑



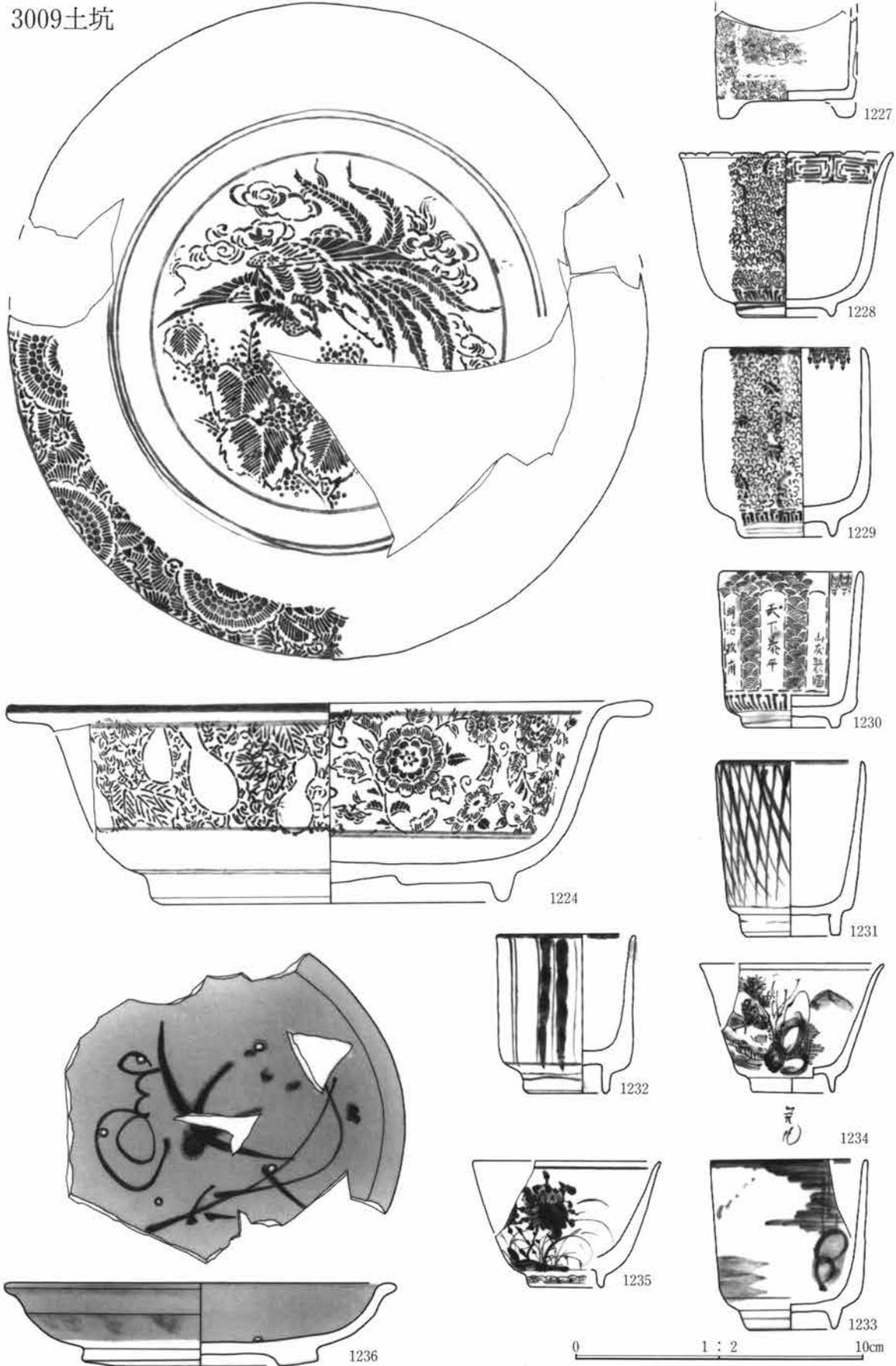
第316図 遺構出土の中世以降遺物(26)

3009土坑



第317図 遺構出土の中世以降遺物(27)

3009土坑



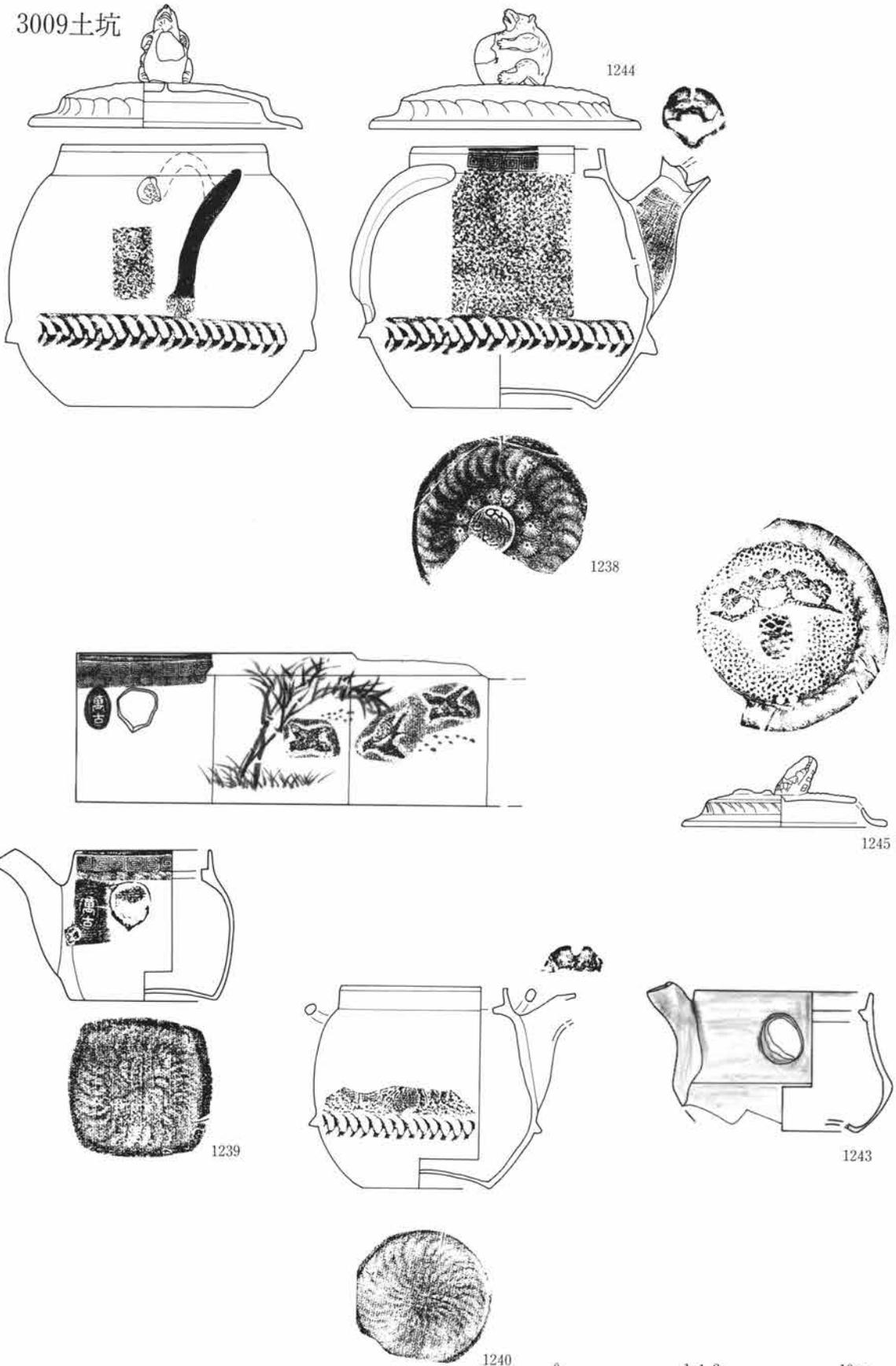
第318図 遺構出土の中世以降遺物(28)

3009土坑



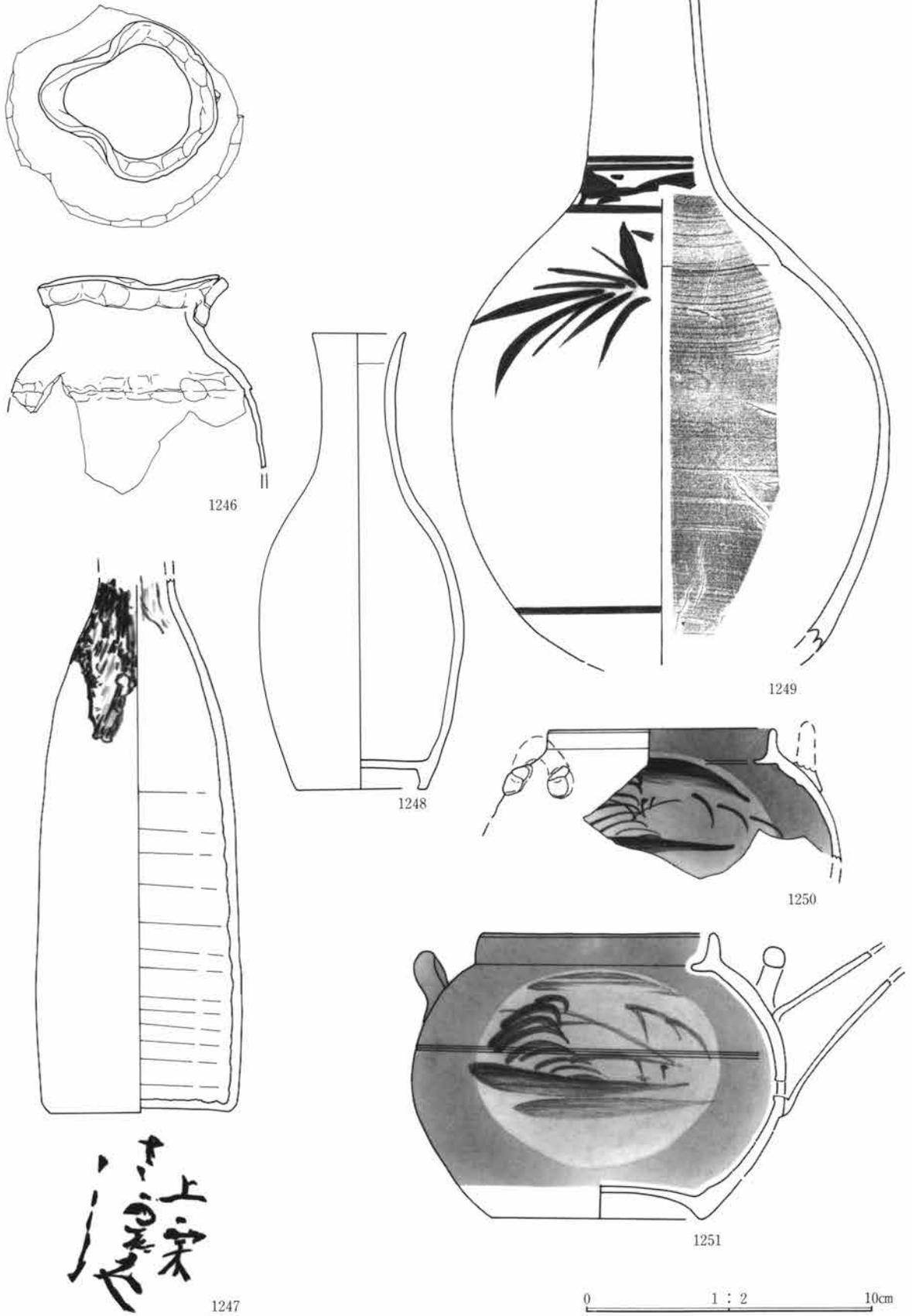
第319図 遺構出土の中世以降遺物(29)

3009土坑



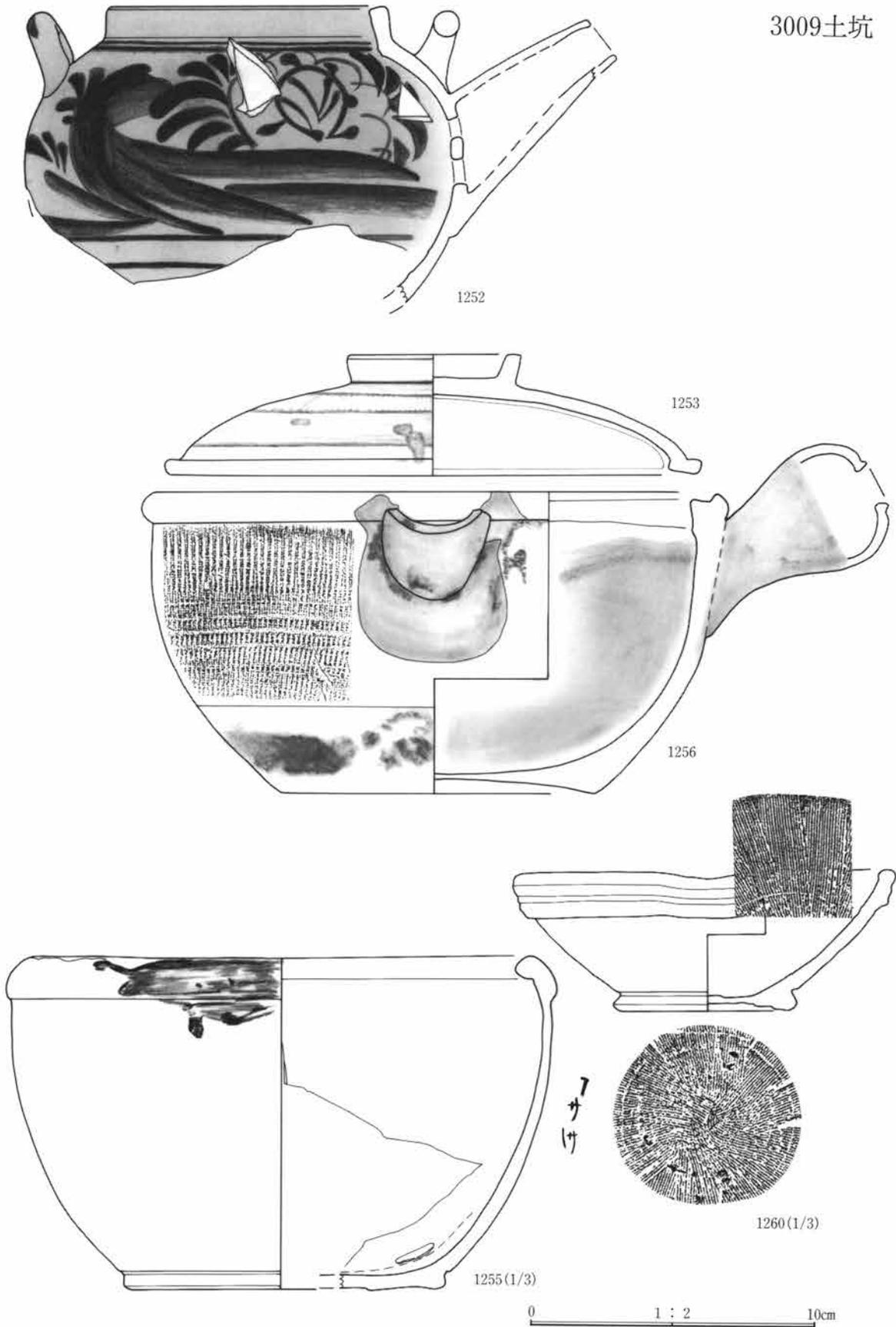
第320図 遺構出土の中世以降遺物(30)

3009土坑



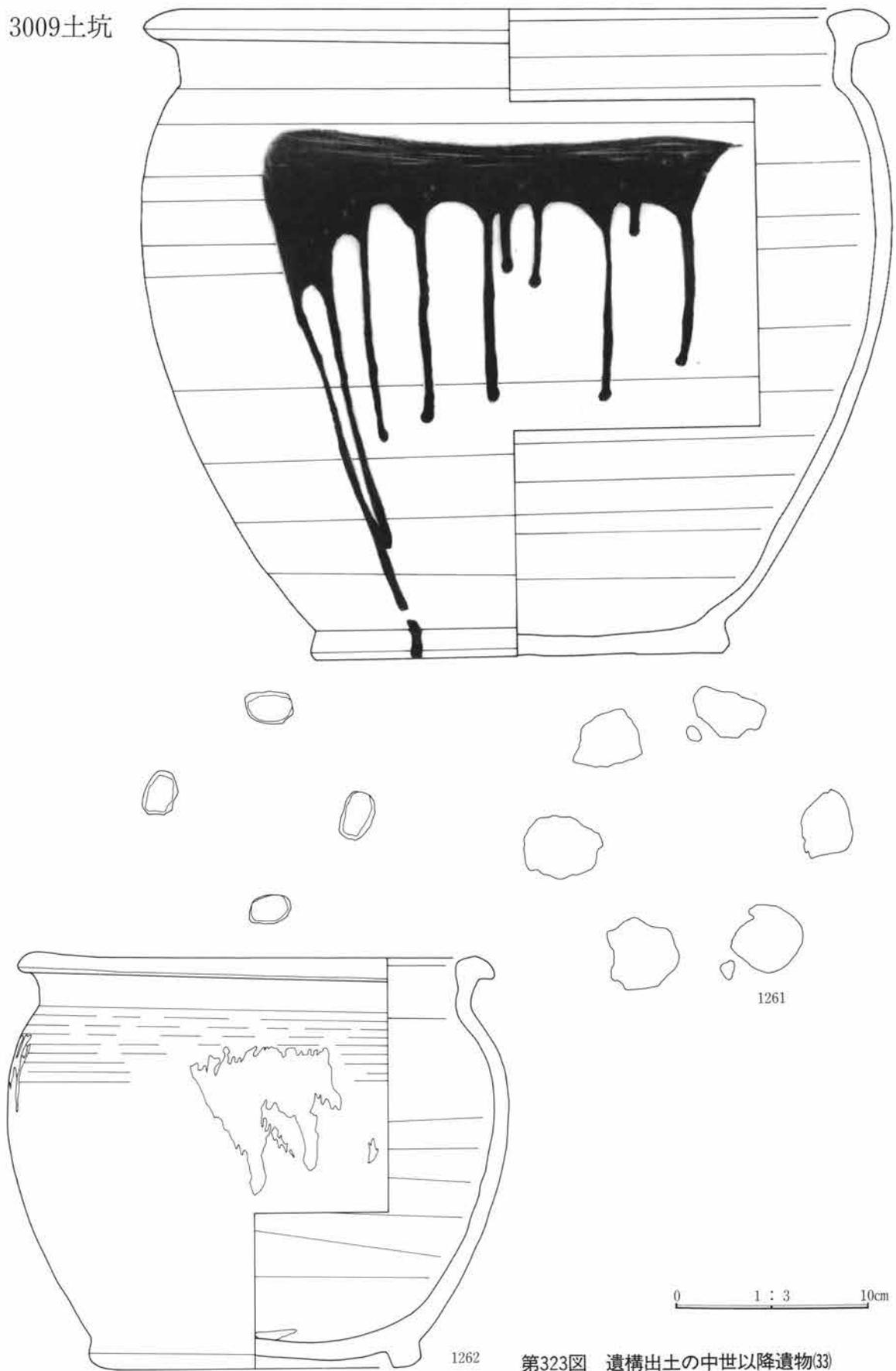
第321図 遺構出土の中世以降遺物(31)

3009土坑



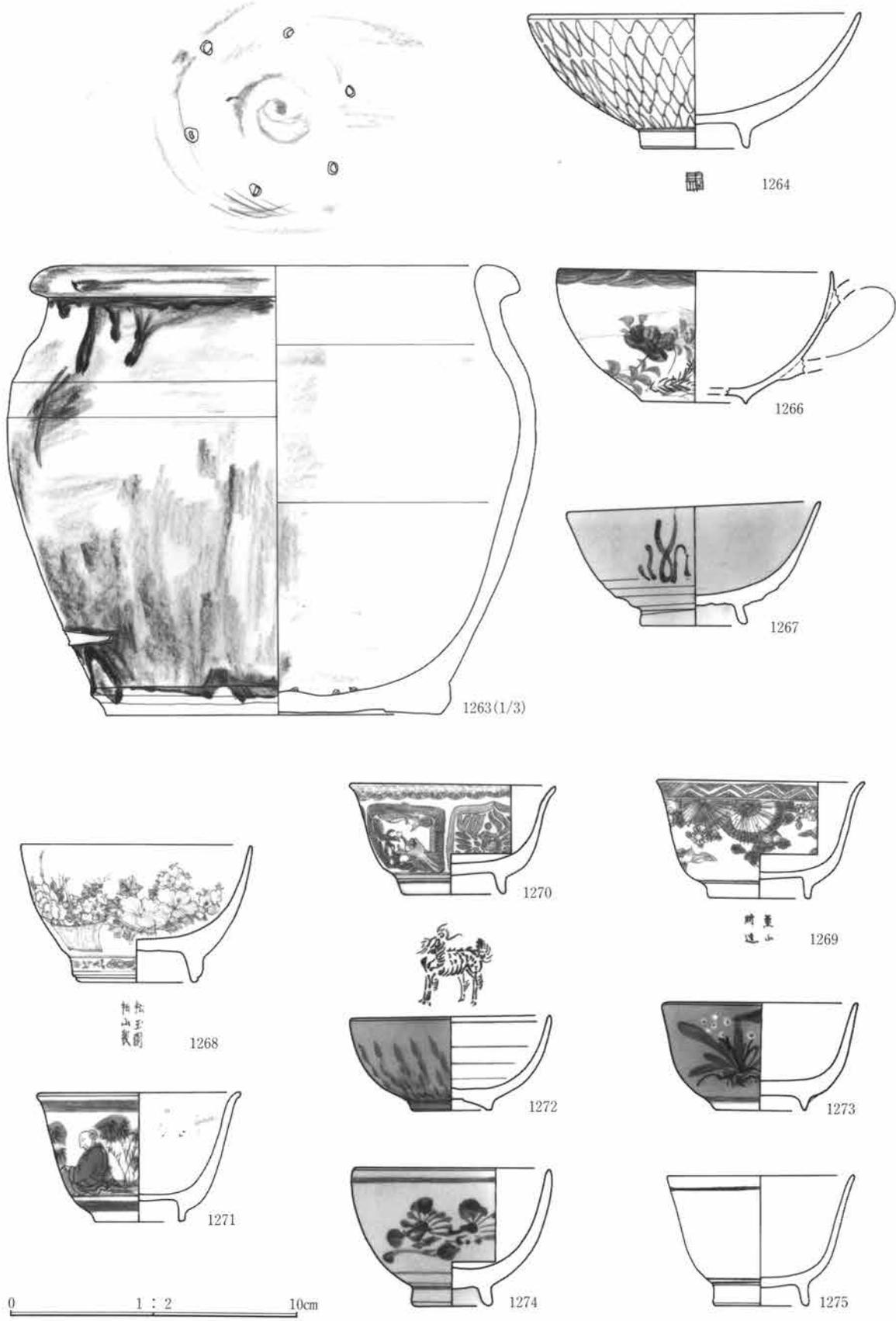
第322図 遺構出土の中世以降遺物(32)

3009土坑



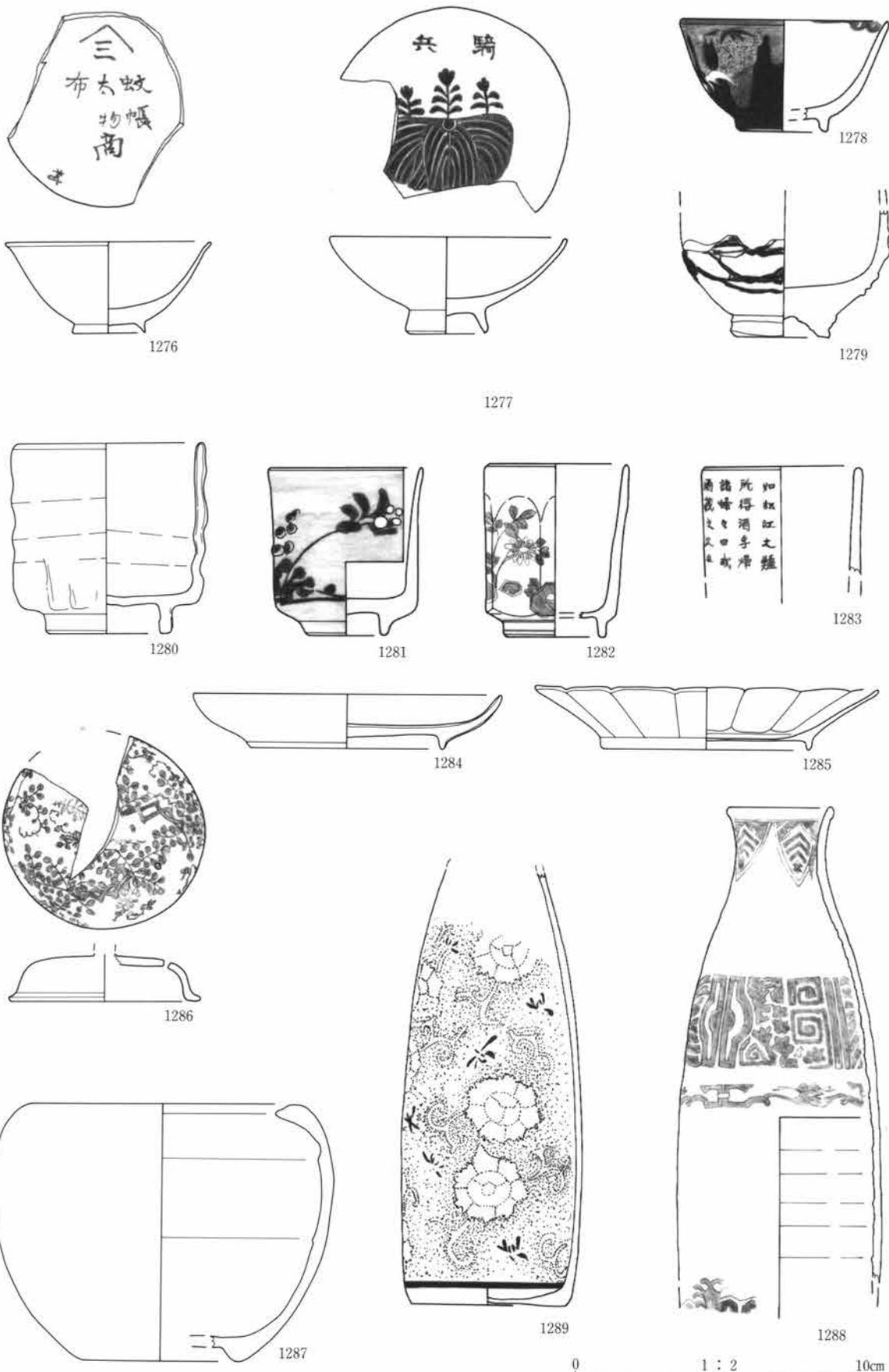
第323図 遺構出土の中世以降遺物(33)

3009土坑

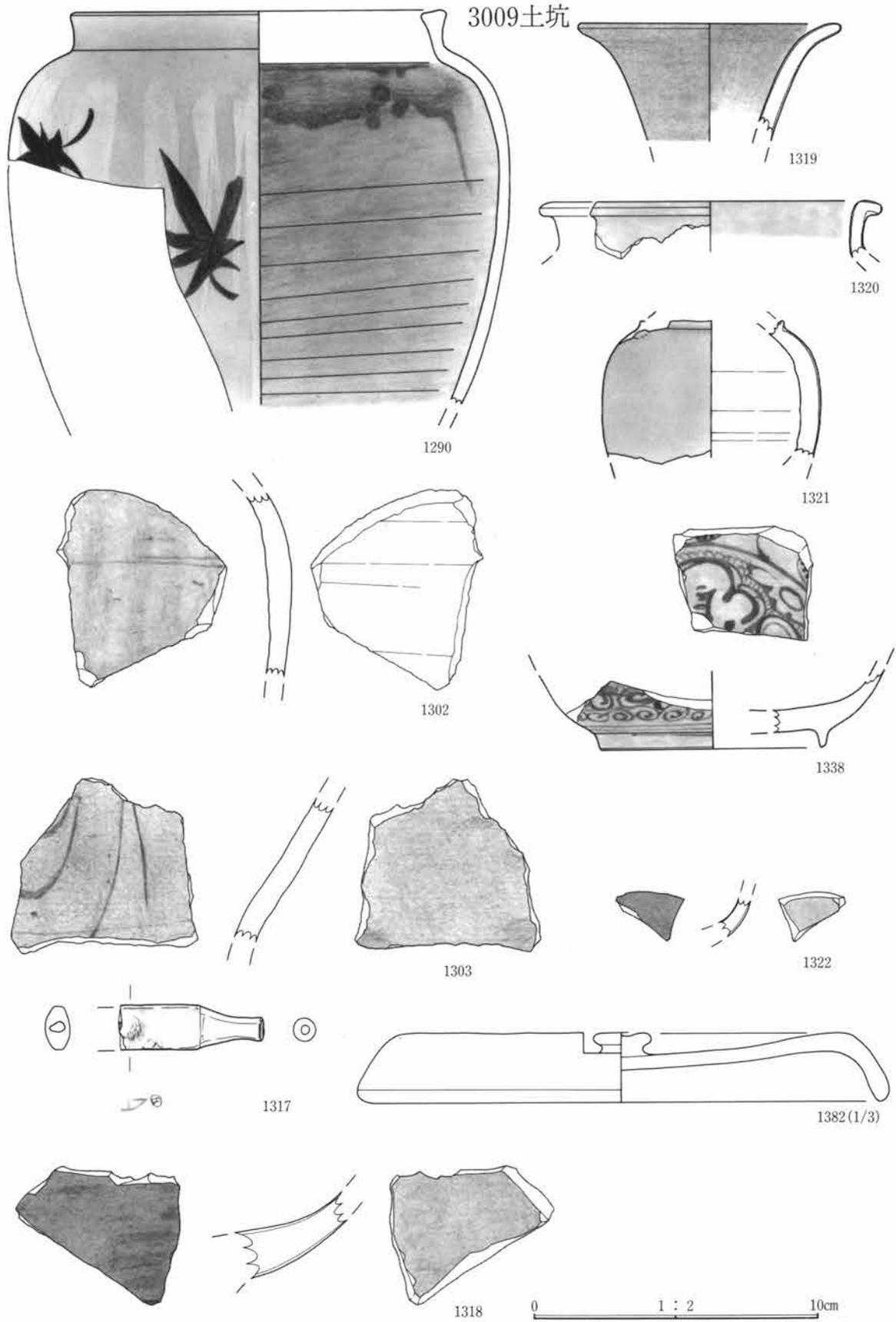


第324図 遺構出土の中世以降遺物(34)

第II章 遺跡
3009土坑

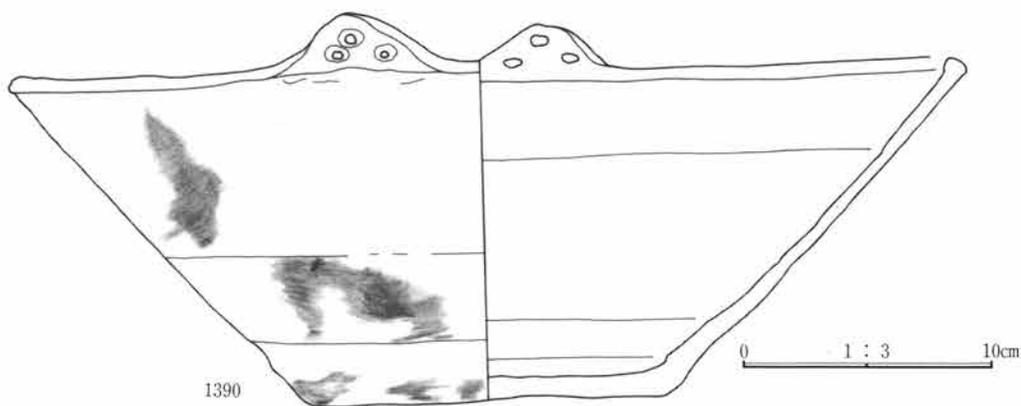
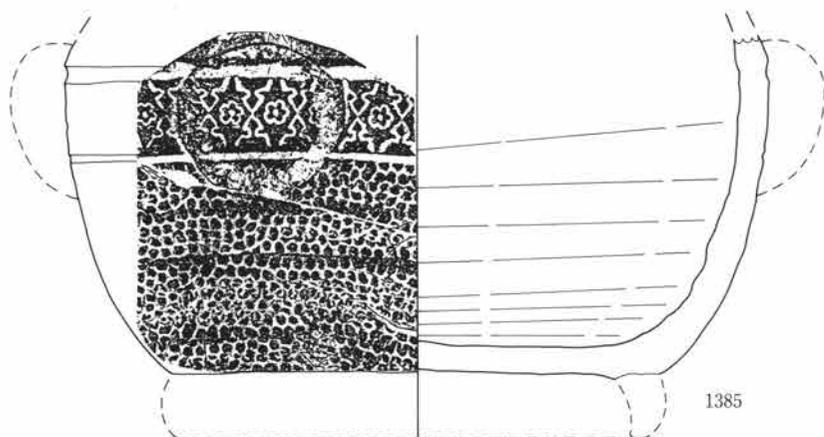
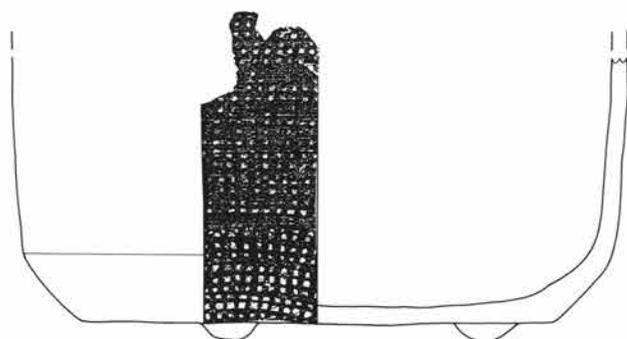
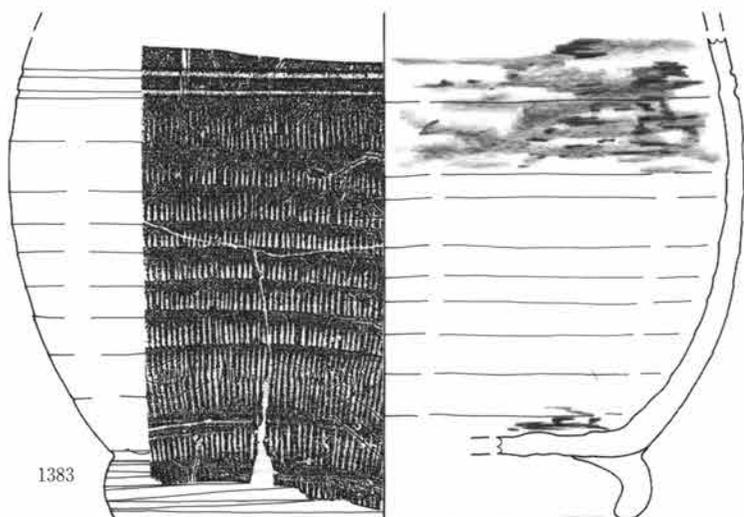


第325図 遺構出土の中世以降遺物(35)



第326図 遺構出土の中世以降遺物(36)

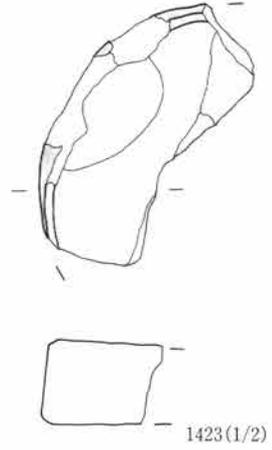
3009土坑



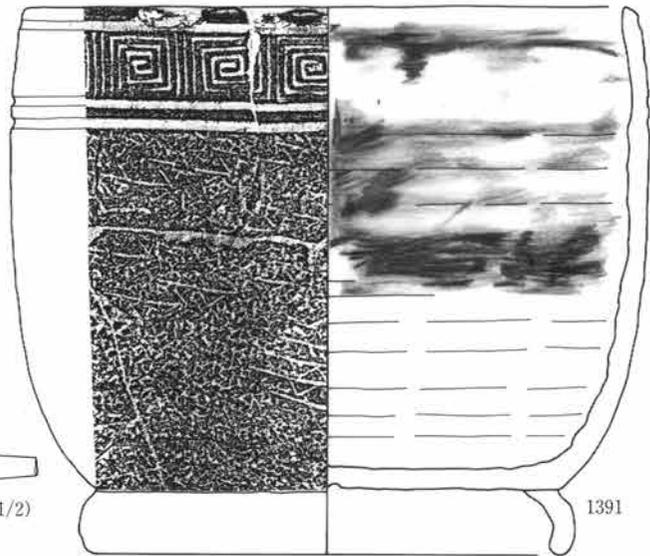
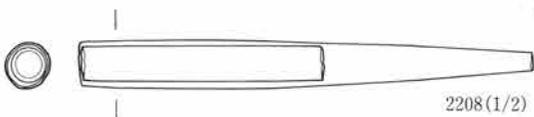
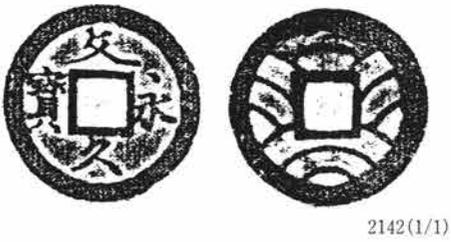
0 1 : 3 10cm

第327図 遺構出土の中世以降遺物(37)

3009土坑

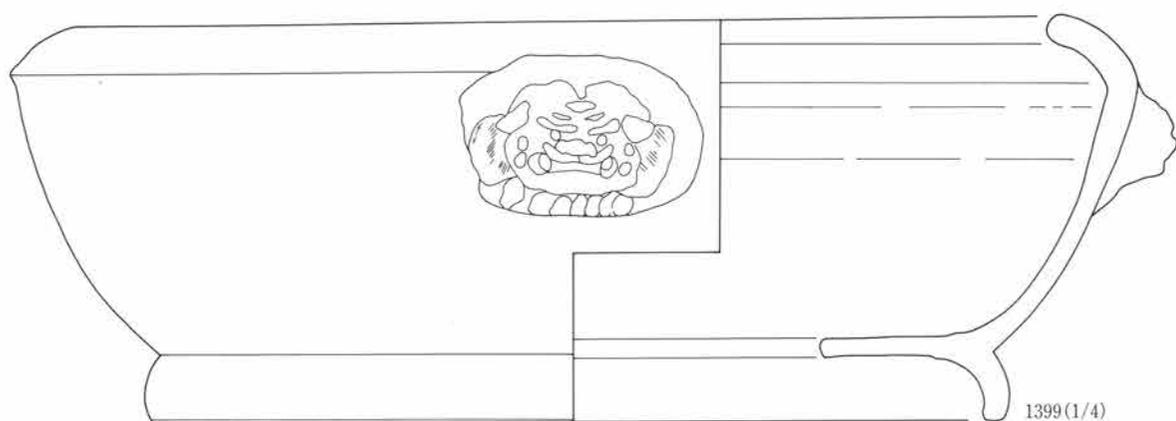
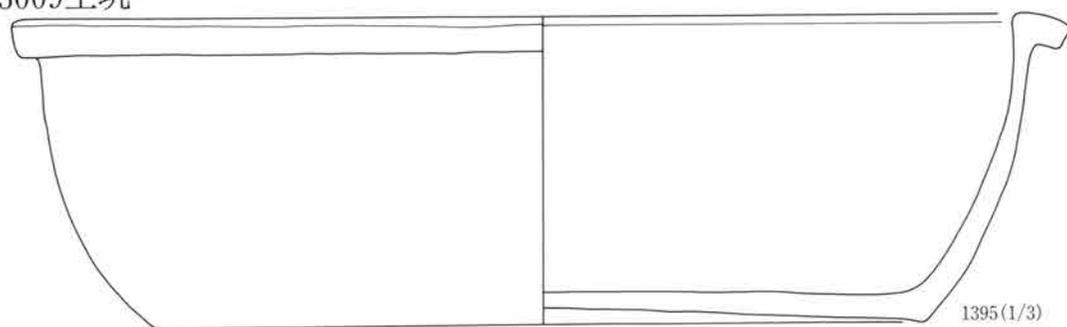


0 1 : 3 10cm



第328図 遺構出土の中世以降遺物(38)

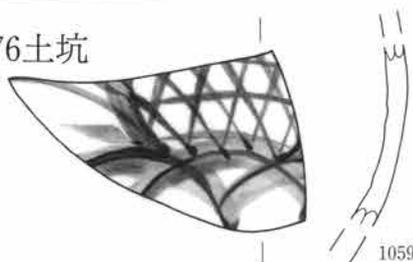
3009土坑



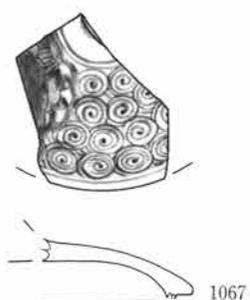
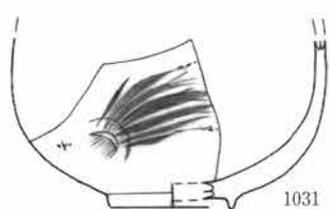
3037土坑



3076土坑



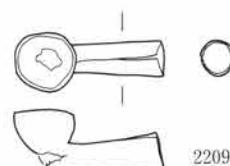
3079土坑



3087土坑

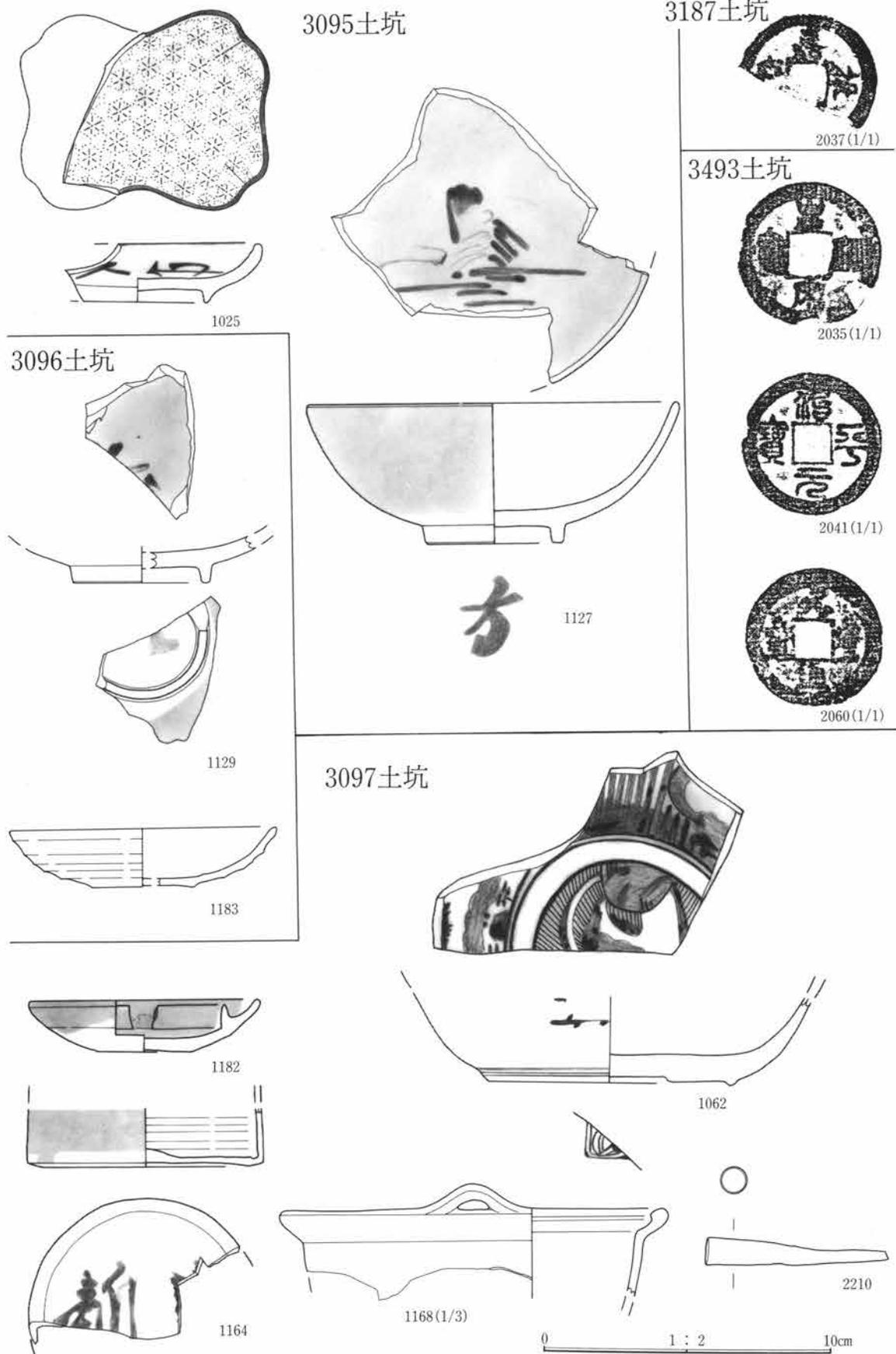


3080土坑



0 1 : 2 10cm

第329図 遺構出土の中世以降遺物(39)



第330図 遺構出土の中世以降遺物(40)

3537土坑



2009



2013



2039



2104



2113

3553土坑



2144



2149



2166



2177



2199



2031



2033



2036



2040



2042



2043



2049



2050



2052



2053



2058



2067



2070



2081



2082



2087



2088



2093



2094



2096



2151



2150



2159



2160



2161

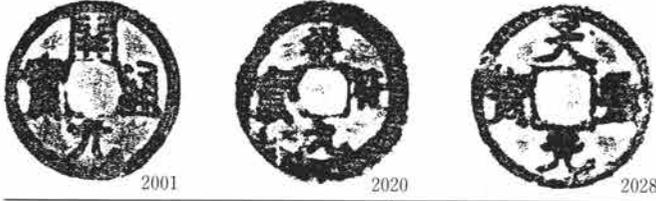


2162

0 1 : 1 5 cm

第331図 遺構出土の中世以降遺物(41)

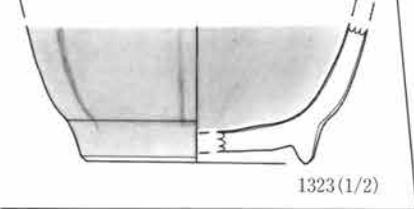
3738土坑



3787土坑



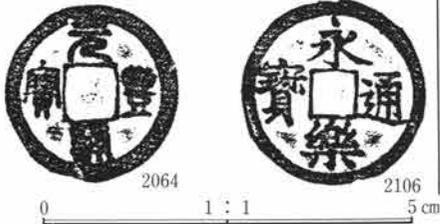
3987土坑



4582土坑



4633土坑



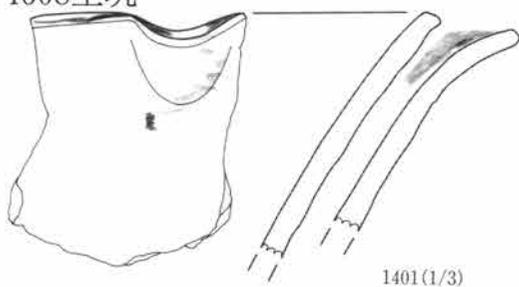
4588土坑



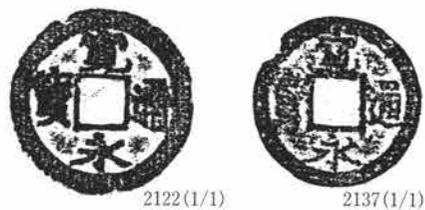
0 1 : 1 5 cm

第332図 遺構出土の中世以降遺物(42)

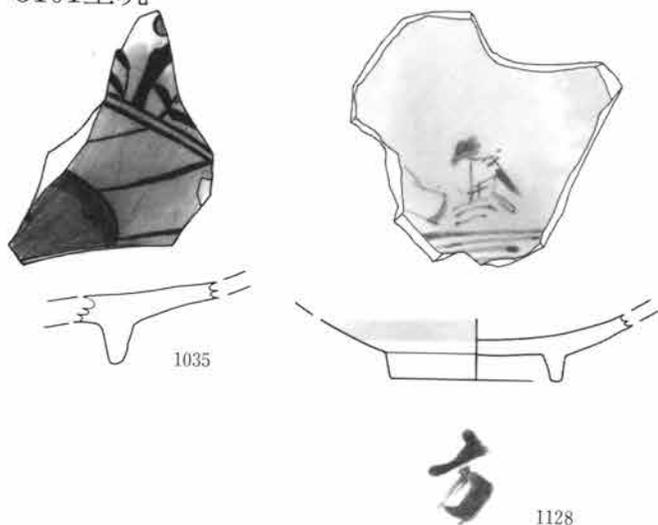
4608土坑



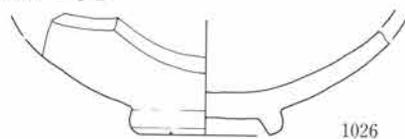
5100土坑



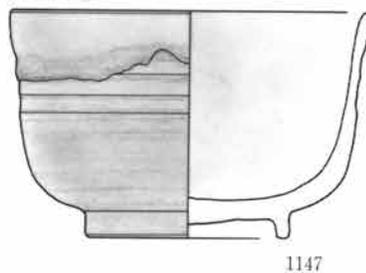
5101土坑



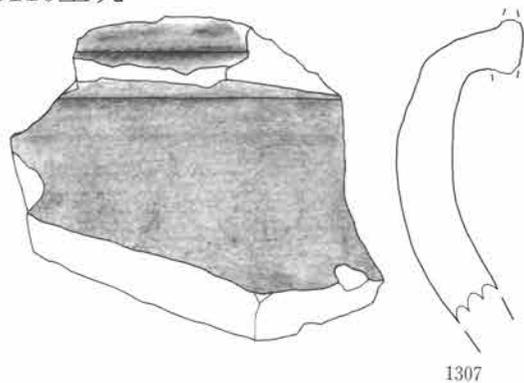
5102土坑



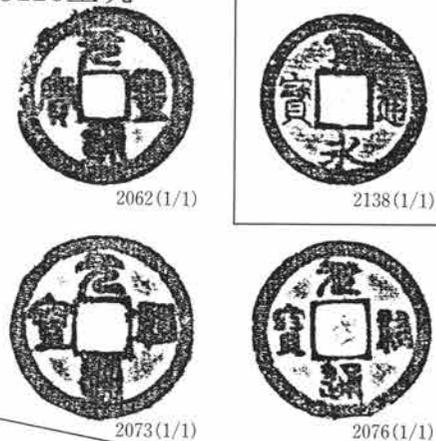
5108土坑



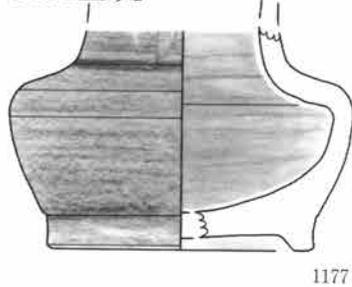
5110土坑



5128土坑



5130土坑

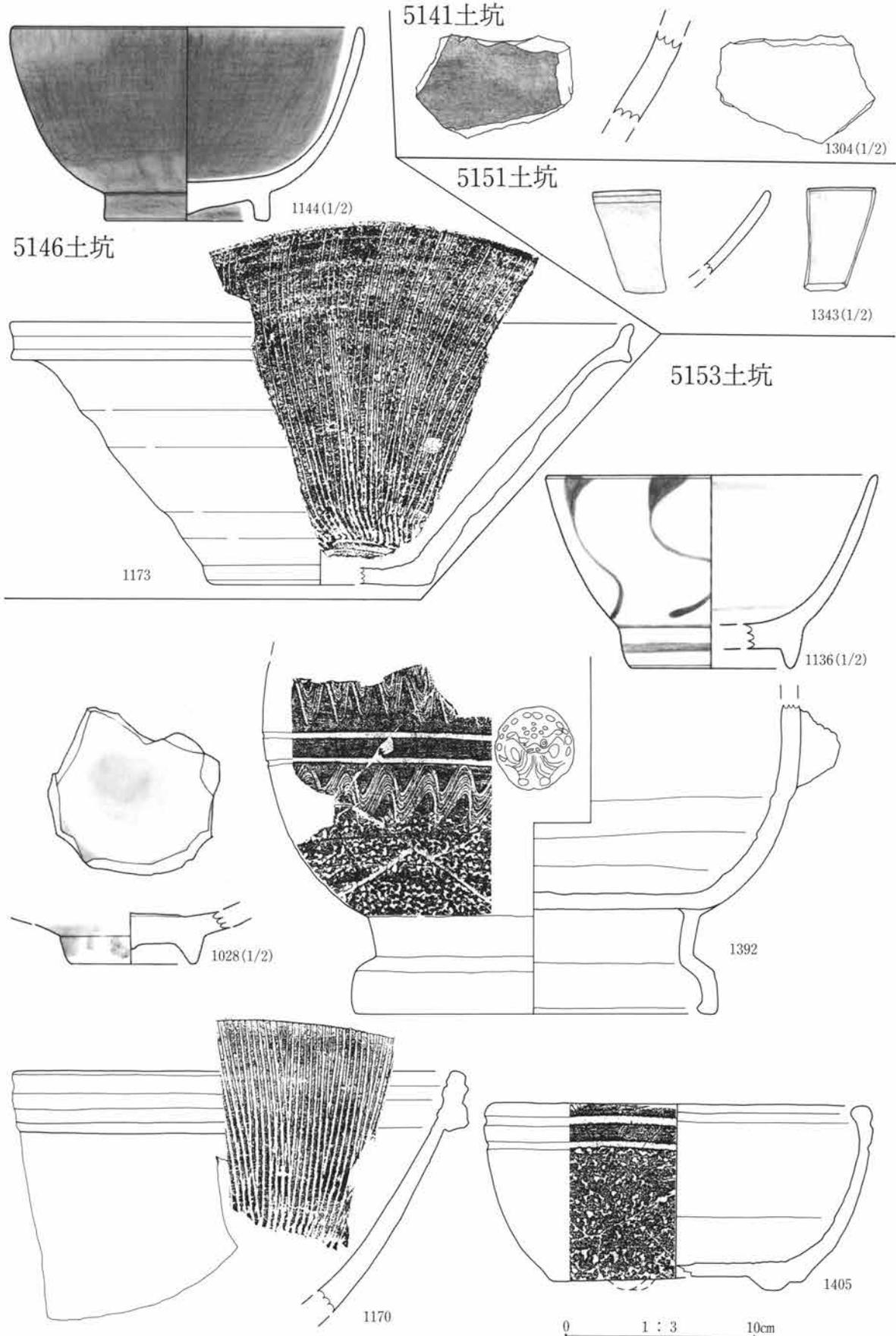


5145土坑

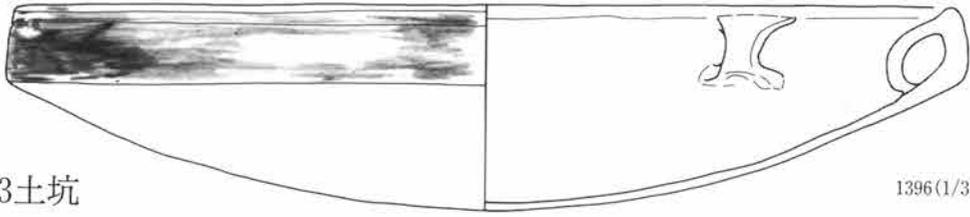


0 1 : 2 10cm

第333図 遺構出土の中世以降遺物(43)



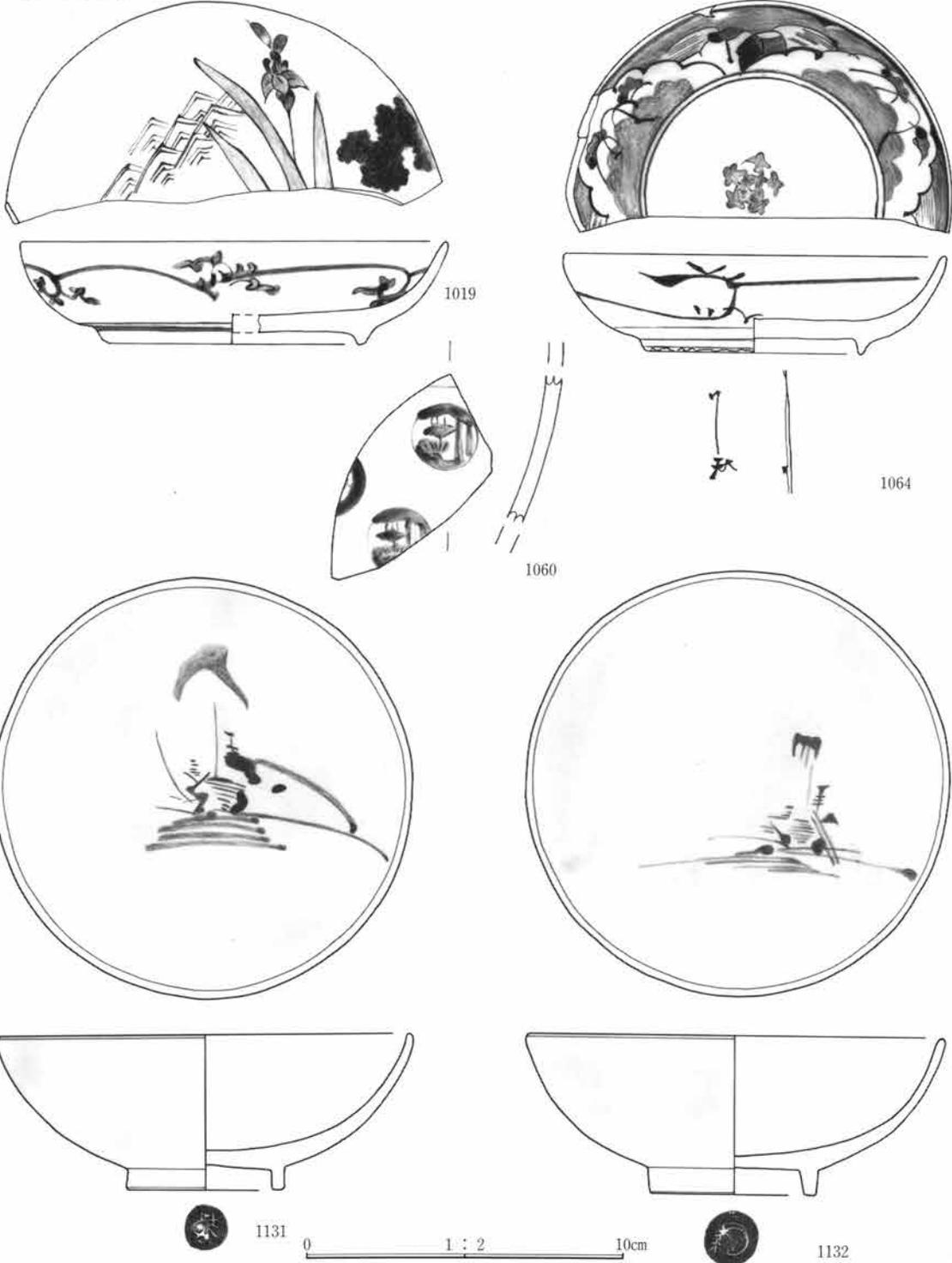
第334図 遺構出土の中世以降遺物(44)



5153土坑

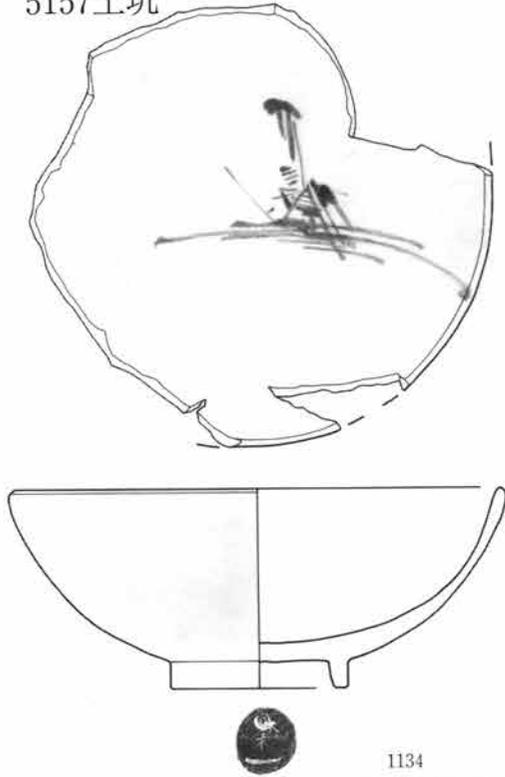
1396(1/3)

5157土坑



第335図 遺構出土の中世以降遺物(45)

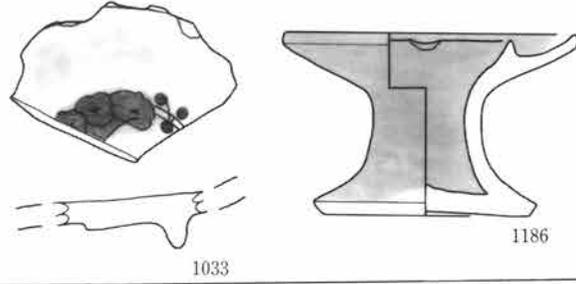
5157土坑



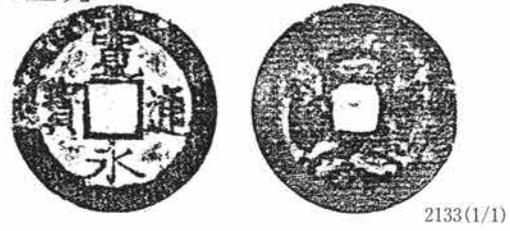
5161土坑



5162土坑



5166土坑



5163土坑



5215土坑



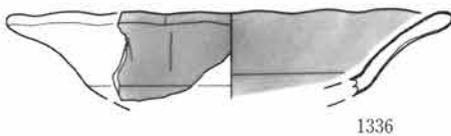
5216土坑



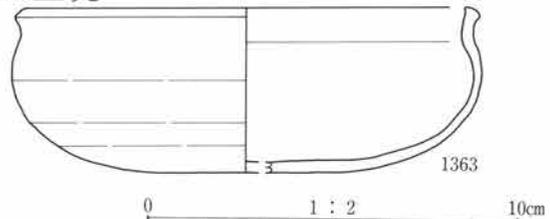
5237土坑



5170土坑

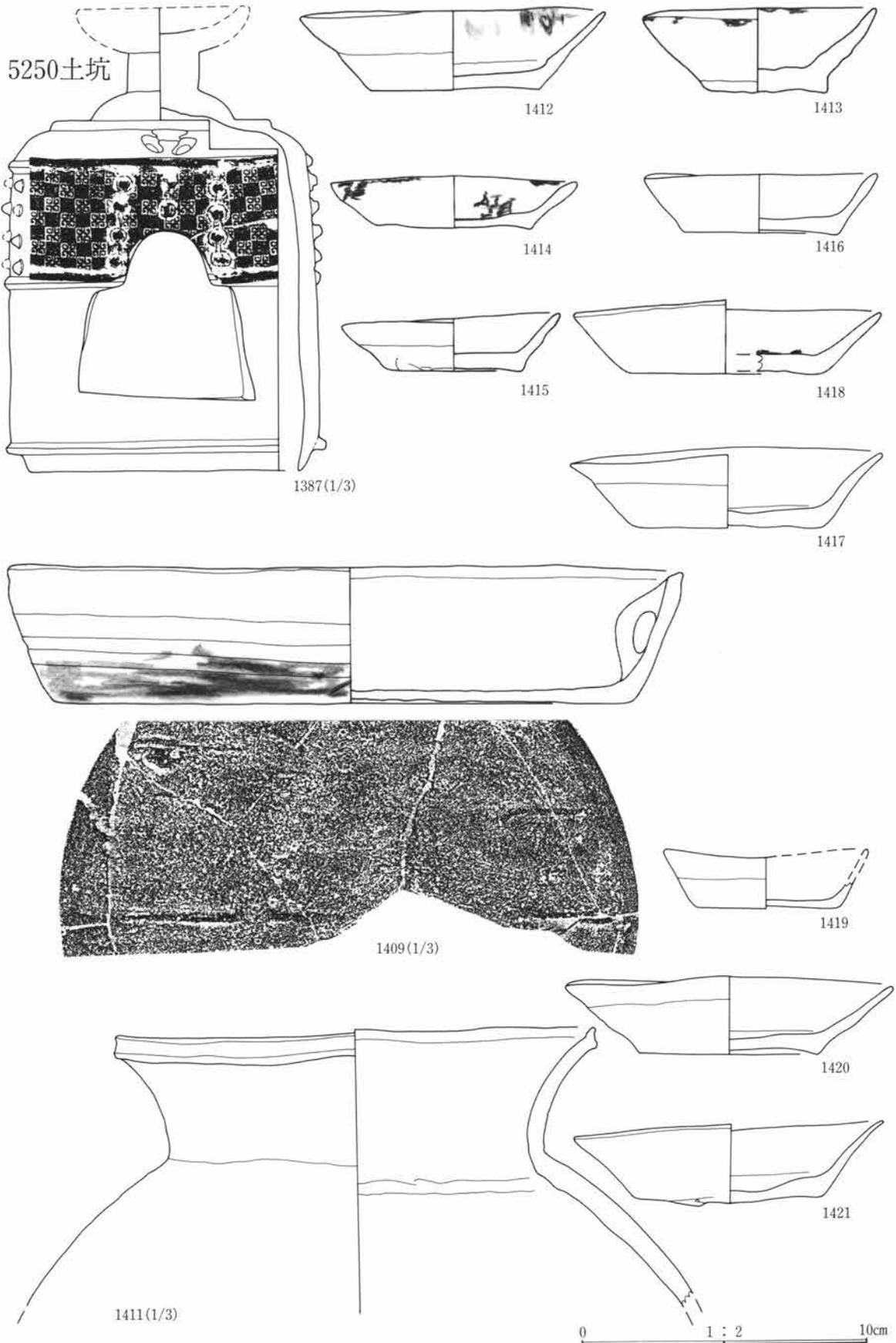


5186土坑



0 1 : 2 10cm

第336図 遺構出土の中世以降遺物(46)



第337図 遺構出土の中世以降遺物(47)

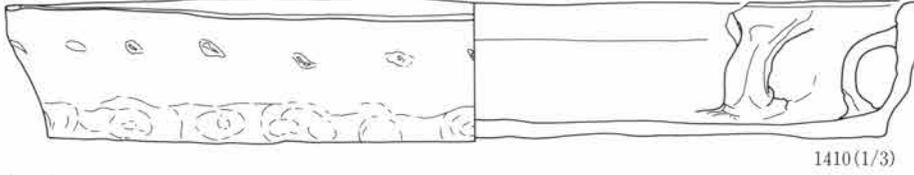
5421土坑



5445土坑



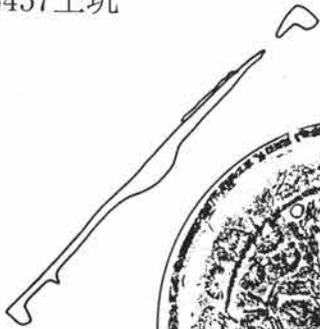
5453土坑



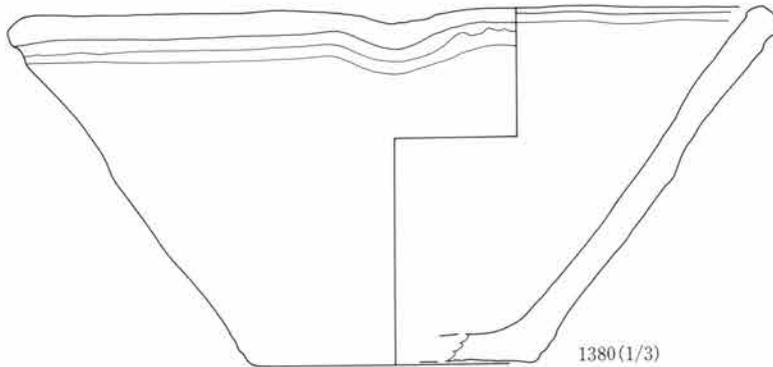
5679土坑



5457土坑



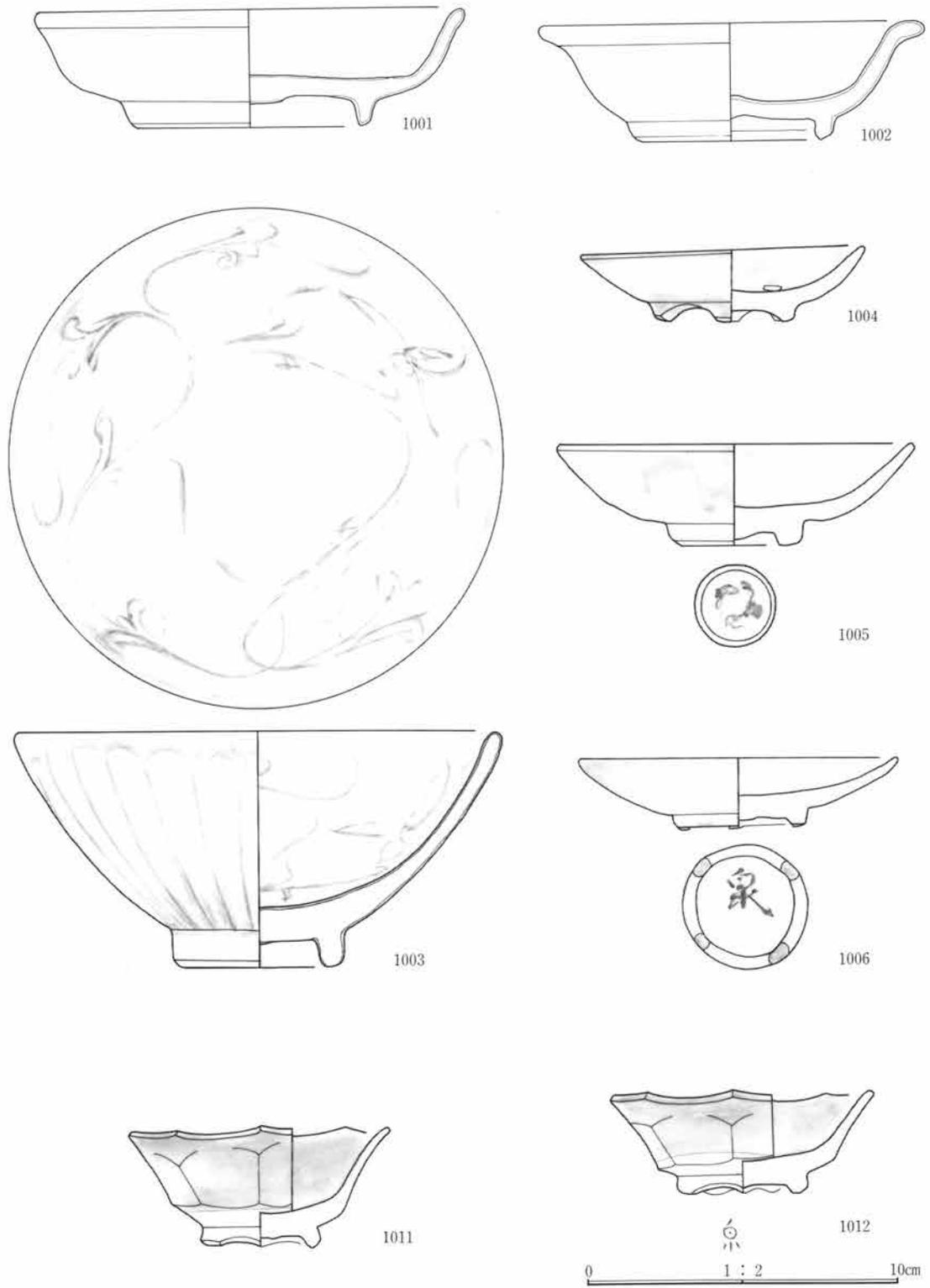
5712土坑



0 1 : 2 10cm

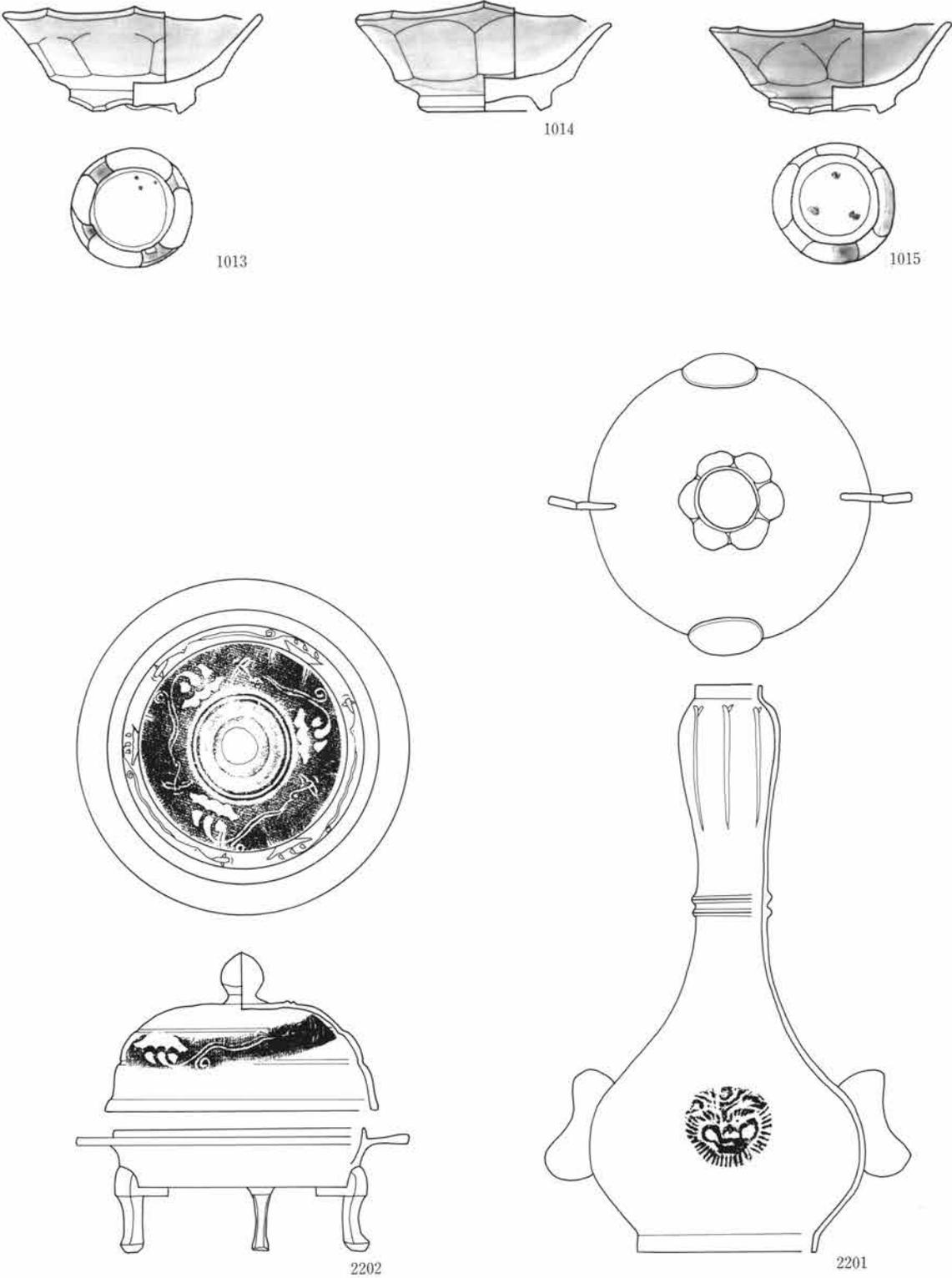
第338図 遺構出土の中世以降遺物(48)

5921土坑



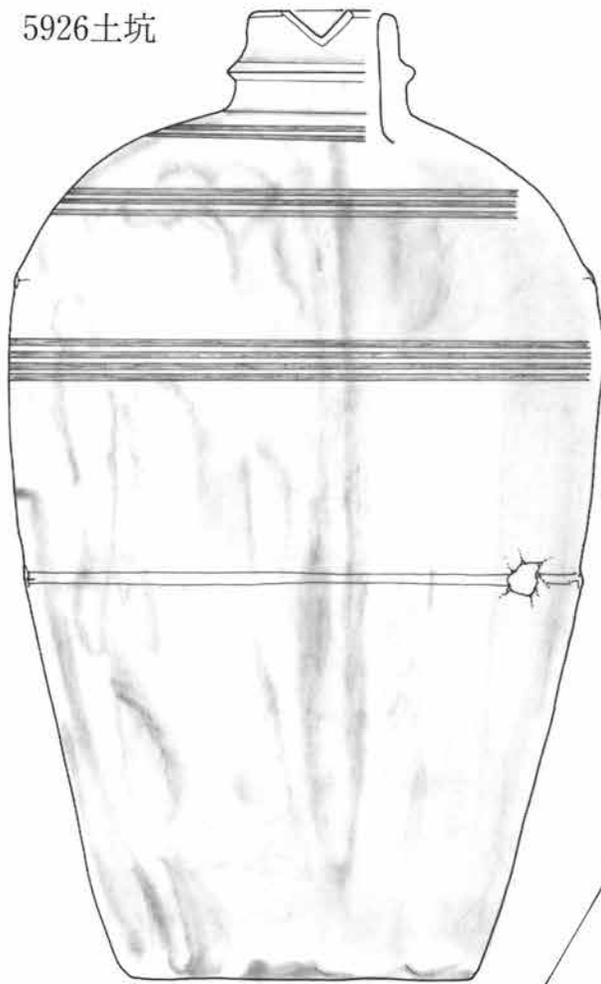
第339図 遺構出土の中世以降遺物(49)

5921土坑



第340図 遺構出土の中世以降遺物(50)

5926土坑



1397(1/3)

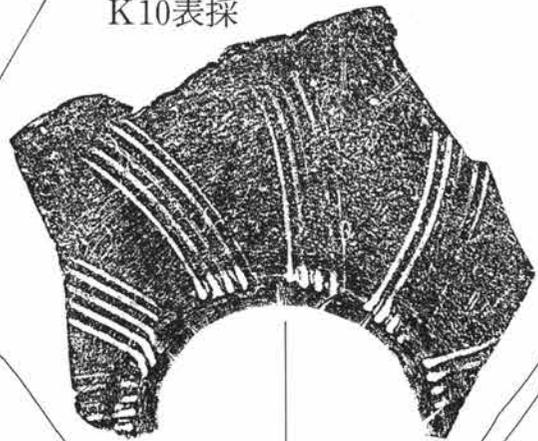


2085(1/1)

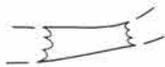
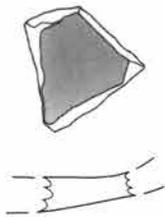


2203(2/3)

K10表採



K09表採



1152

K11表採



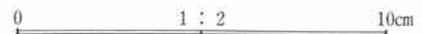
2024



2007

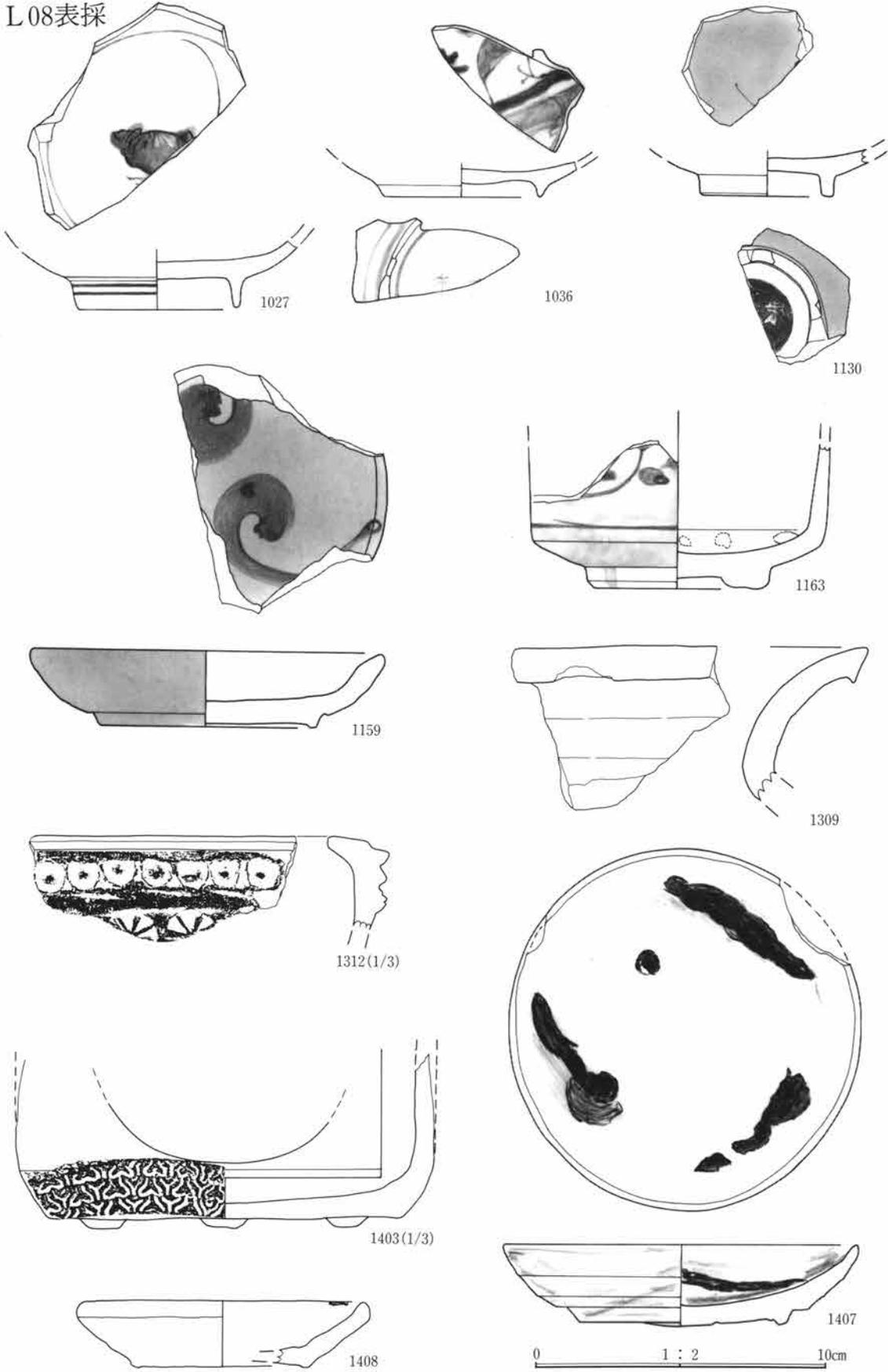


1393(1/3)



第341図 遺構出土の中世以降遺物(51)

L08表採



第342図 グリッド出土の中世以降遺物(1)

L08表採



2006(1/1)



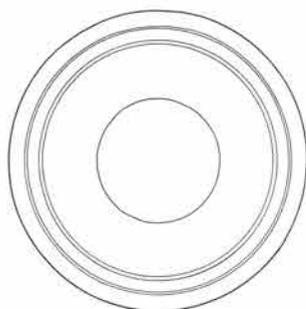
2071(1/1)



2134(1/1)



2083(1/1)



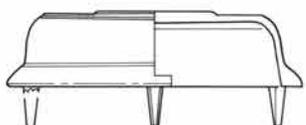
L09表採



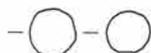
1292



2117(1/1)



2206



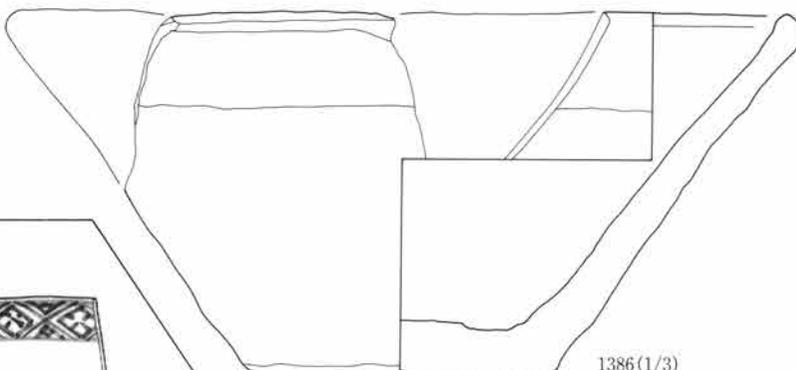
2205



L10表採



1301



1386(1/3)

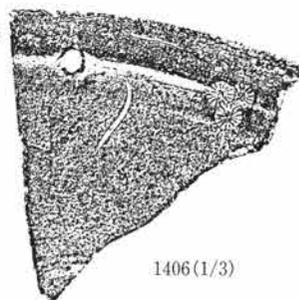
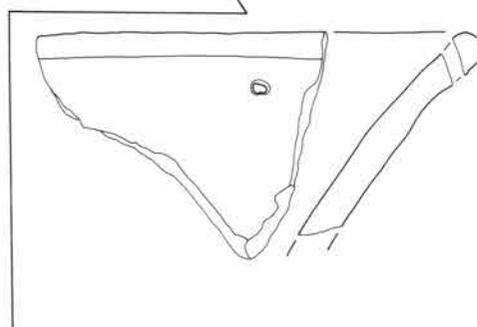
出土地不明



1039



1291



1406(1/3)



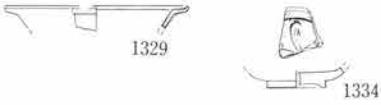
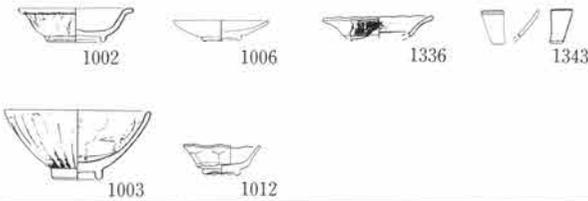
1331



1344

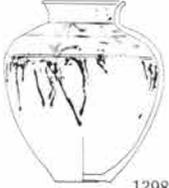
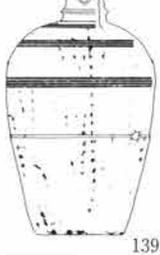
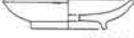
0 1 : 2 10cm

第343図 グリッド出土の中世以降遺物(2)

時期	供 膳	調 度
I	 <p>1329 1334</p>	
II	 <p>1002 1006 1003 1012 1336 1343</p>	 <p>1319 1323 1333</p>
III	 <p>1331 1344</p>	
IV	 <p>1338</p>	

第344図 中国陶磁の時期区分と器種変化

第II章 遺 跡

時期	供 膳	調 度	調 理	貯 蔵
I	 1298	 1308  1315		 1307  1309  1398
II		 1306  1397	 1314	 1361
III		 1299  1301		
IV	 1042  1050  1294  1296  1292			

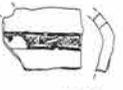
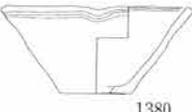
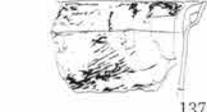
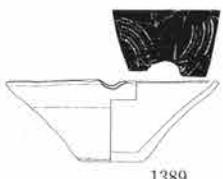
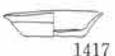
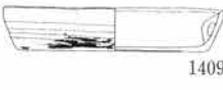
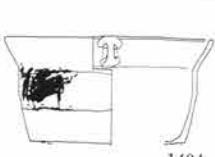
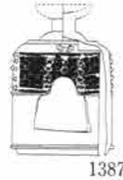
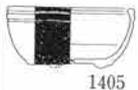
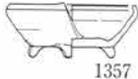
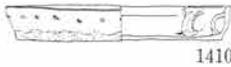
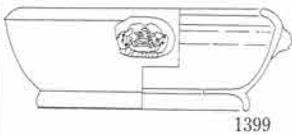
第345図 国産陶磁の時期区分と器種変化(1)

時期	供 膳	調 度	調 理	灯 火
V	<p>1018 1019 1020 1040 1025 1119 1017 1027 1082 1123 1144 1150 1149 1046 1148</p>	<p>1034 1072 1316 1047 1048 1177 1178</p>	<p>1167 1173</p>	<p>1049 1182 1183</p>
VI	<p>1062 1102 1026 1055 1065 1071 1074 1081 1088 1091 1136 1153 1154 1155 1105 1106 1109 1220 1090 1099 1100</p>	<p>1068 1095 1093 1097 1098 1191 1192 1107 1073 1163 1287 1069 1317</p>	<p>1168 1170 1171 1051</p>	<p>1184 1186 1187 1189</p>

第346図 国産陶磁の時期区分と器種変化(2)

時期	供 膳	調 度	調 理
VII			

第347図 国産陶磁の時期区分と器種変化(3)

時期	供 膳	調 度	調 理	灯 火
I			 1381	
II	 1353	 1372  1358  1370	 1373  1374  1380  1406  1378  1389	 1349
III	 1415  1417		 1409  1386  1404	 1387  1413  1412
IV				 1422
V・VI		 1392  1425  1405  1357	 1410  1396  1364	
VII		 1399	 1390	

第348図 国産土器の時期区分と器種変化

い。

VI期（18世紀中頃～19世紀前半頃）

供膳・調度具は、前期同様国内各地のものが入るが、質的には一般的なものになり、量も多くはない。後半には東北産の磁器も見られる。ただ、瀬戸美濃染付水滴や肥前色絵キセルなど、調度具にはやや非日常的なものが混じっている。

他の調理・灯火具も堺播り鉢など陶器が多くをしめるようになるが、直接火を受ける火鉢や焙烙類は依然として土器が使われている。ただ土器は、前期との区分が難しい。

VII期（19世紀後半～20世紀初頭頃）

供膳・調度・調理具はいづれも、国産陶磁器が主となり種類・量共に多い。産地では北関東・東北産が瀬戸美濃に続いて急速に増加し、反対に肥前は全く減少する。多様な種類の中では、供膳具の急須や調理具の雪平・土瓶など注口のあるものが目立つ。

この時期にあっても量は減るものの、調理・調度具に土器が存在している。

【参考文献】

- 韓国文化公報部文化財管理局.1988『新安海底遺物（総合編）』
中央公論社.1976『日本陶磁全集8 常滑・渥美』
.1976『日本陶磁全集9 瀬戸・美濃』
根津美術館.1995『北山・東山文化の華 相国寺金閣銀閣名宝展』
平凡社.1980『日本やきもの集成3 瀬戸・美濃・飛騨』
.1982『日本やきもの集成2 東海・甲信越』

2 時代別遺構の分布

A 遺構種別

ア 溝・堀

年代を想定できるのものは、大小合計10条ある。掘削時期から見れば、次のように分けることができる（可能性のあるものも含む）。

I期 4, 15, 30, 55, 56各号溝

II期 9, 50各号溝

III期 58各号溝

V期 14号溝

VI期 18号溝

ただし、以上の中で、掘削時より完全埋没時まで2時期以上の大きな時間幅があるものは次の通りである。

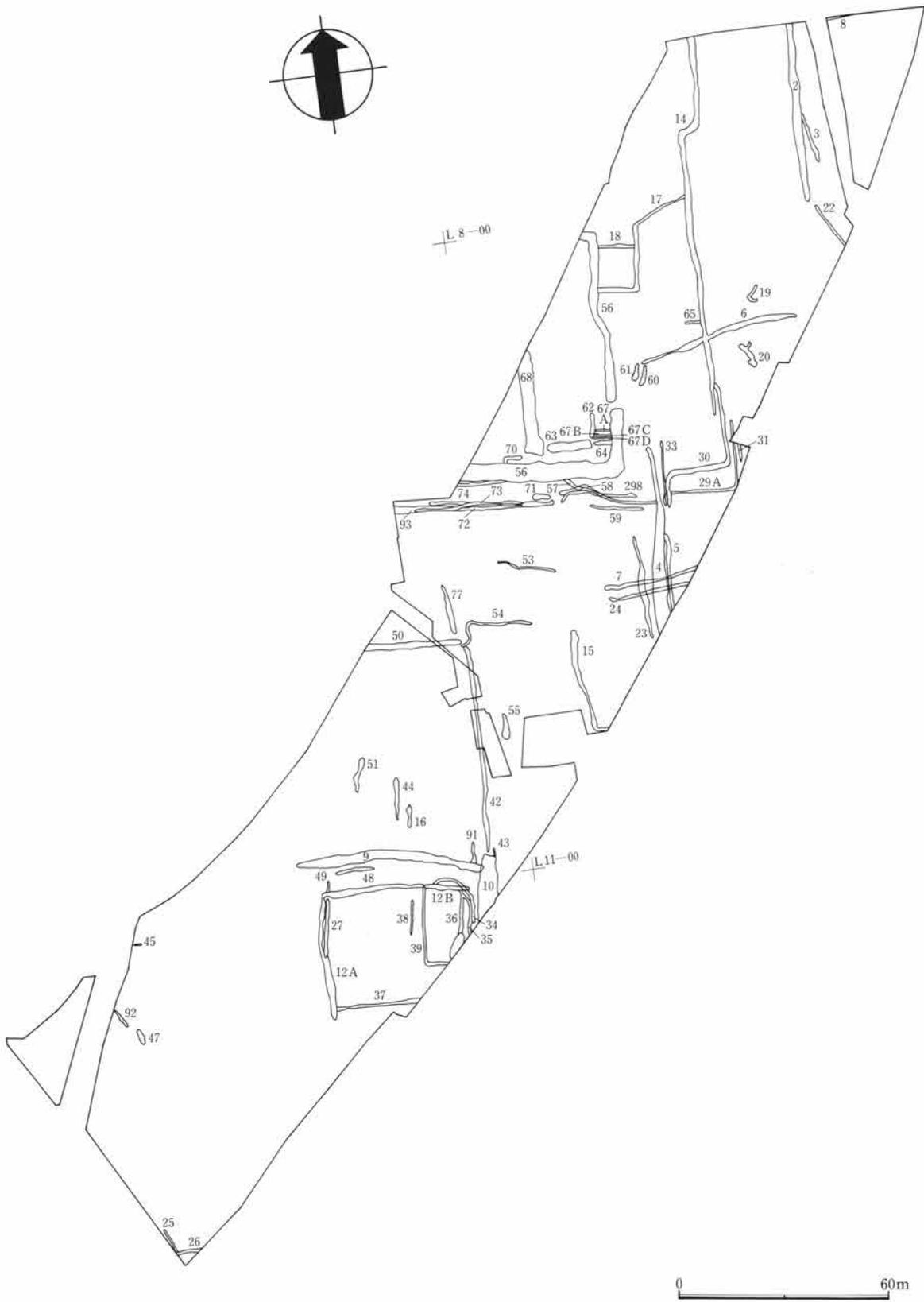
4, 56号溝 I～V期

30号溝 I～VI期

9号溝 II～VII期

58号溝 III～V期

これらの分布を見ると、すでにI・II期の段階で本遺跡の主要な区画を示す堀・溝は掘削されていたことは間違いない。特に56号溝を中心とする北側の方形区画とその周辺の溝の多くは、少なくともV期までは完全に何らかの形で存続していたことが分かる。



第349図 中近世の溝・堀

第II章 遺 跡

それに対し、南側の方形区画とすることができる12A号溝の成立がVI期より古い段階になるかは良く分からないが、その北側の9, 50, 42号溝で囲まれる中央の方形区画はII期まで遡れる可能性は高い。そして、その東側の15, 55号溝は、この区画との関係が考えられる。北側区画に対し、この中央区画は早く廃絶して痕跡を残さないが、9号溝のみ道路として残った可能性があり、その道路に接する形で南側区画が形成されたとするのが妥当である。

なお、以上のうち14, 30, 58, 4, 9, 42各号溝は、少なくとも昭和初期の道路・地境に一致している。また上記三区画は、調査開始前に残っていた住宅屋敷地とは重なっていない。

イ 墓

人骨及び馬骨などを出土した土坑は、以下の通りである。

人骨	35基
馬骨	27基
人骨または馬骨	2基
犬骨	4基
牛骨	1基
不明骨	1基

人骨埋葬土坑と同数近くの獣骨検出土坑があることが分かる。獣骨の大多数は馬骨である。それらの土坑は、形態的には次のように分類できる（数字は土坑番号・斜体は銅銭共伴例）。

円筒形	22
小型楕円形	37(馬), 38(馬), 535, 536, 611, 1170, 1337, 2335, 4990, 4934, 5128, 5213, 5845(馬), 5848(馬),
長楕円形	23(骨)
大型楕円形	5243(馬), 5244(犬), 5245(馬), 5863(馬)
小型長方形	1242, 1337, 1388, 2202, 2677, 2908, 3129, 3130, 3414, 3537, 3559(骨), 3738, 4633, 5215, 5846(馬), 5847(馬), 5861(犬)
大型長方形	5239(馬), 5241(馬), 5242(馬), 5852(馬または人)
有礫小型長方形	3787
有煙道小型長方形	1467, 5135
方形竪穴状	1402
井戸	3003(馬), 5459(牛)
大型不整形	1510(馬), 3066(人), 3009(馬), 3095(馬), 4793(馬), 5237(犬), 5238(馬), 5246(馬または人)
小型不整形	1430, 1750, 3006(馬), 3007(馬), 4237, 5229(馬), 5834(馬), 5849(馬), 5850(馬), 5851(馬), 5855, 5857, 5858, 5860(犬), 5862

以上の中で、共伴陶磁器類より確実な埋没年代が想定できるものは次の通りである。

3095号土坑	馬骨	17世紀後半
3007号土坑	馬骨	17世紀末～18世紀前半 砥石2点共伴
3009号土坑	馬骨	19世紀後半

また銅銭を共伴したものは、次の通りである（最新初鑄年銭を付した）。

23号土坑	不明骨	6枚	北宋・明・朝鮮・不明（朝鮮通宝）
535号土坑	人骨	5枚	唐・南宋・明・不明（洪武通宝）
536号土坑	人骨	1枚	北宋（熙寧元宝）
611号土坑	人骨	2枚	北宋・明（洪武通宝）
1337号土坑	人骨	2枚	明（永楽通宝）
1402号土坑	人骨	2枚	北宋・不明（元豊通宝）
2202号土坑	人骨	3枚	北宋（聖宋通宝）
2677号土坑	人骨	3枚	北宋・明（洪武通宝）
2908号土坑	人骨	2枚	北宋・明（永楽通宝）
3537号土坑	人骨	7枚	北宋・明・不明（永楽通宝）
3738号土坑	人骨	3枚	唐・北宋（天聖元宝）
3787号土坑	人骨	2枚	北宋・明（永楽通宝）
4633号土坑	人骨	2枚	北宋・明（永楽通宝）
5128号土坑	人骨	4枚	北宋・明（永楽通宝）
5215号土坑	人骨	2枚	北宋（政和通宝）
5237号土坑	馬骨	1枚	古寛永通宝

これらの最新初鑄銭をまとめると、次のようになる。

北宋銭	5例
洪武通宝	3例
永楽通宝	6例
朝鮮通宝	1例
古寛永通宝	1例

その他の遺物の共伴は、次の通りである。

2335号土坑	人骨	銃弾
3003号土坑	馬骨	陶磁小片
3006号土坑	馬骨	近世陶磁小片
3066号土坑	人骨	砥石・瓦

次に重複遺構との関係を下に記す。

22号土坑	人骨	12A号溝	関係不明
23号土坑	人骨	9号溝	関係不明
1388号土坑	人骨	53号溝	関係不明
2202号土坑	人骨	24号溝	関係不明
3066号土坑	人骨	56号溝・67A号溝	関係不明
5237号土坑	犬骨	14号溝より新	
5242号土坑	馬骨	14号溝より新	
5243号土坑	馬骨	14号溝より新	
5244号土坑	犬骨	14号溝より新	
5245号土坑	馬骨	14号溝より新	

第II章 遺 跡

5246号土坑	馬骨または人骨	56号溝より新	
5459号土坑	牛骨	37号溝	関係不明
5834号土坑	馬骨	62号溝	関係不明
5845号土坑	馬骨	14号溝より新	
5846号土坑	馬骨	14号溝より新	
5847号土坑	馬骨	14号溝より新	
5848号土坑	馬骨	14号溝より新	
5849号土坑	馬骨	14号溝より新	
5850号土坑	馬骨	56号溝より新	
5851号土坑	馬骨	9号溝より新	
5852号土坑	馬骨または人骨	56号溝より新	
5855号土坑	人骨	56号溝より新	
5857号土坑	人骨	56号溝より新	
5858号土坑	人骨	9号溝	関係不明
5860号土坑	犬骨	14号溝より新	
5861号土坑	犬骨	14号溝より新	
5863号土坑	馬骨	14号溝より新	

以上より見れば、銅銭を副葬した人骨検出土坑は下限を古寛永通宝出現以前とし、上限は北宋銭を最新初鑄とするものの出土枚数が少ないため、明銭の流通時期及び重複遺構との関係から15世紀前半頃と考えたい。小型不整形で副葬品のない5855号土坑と5857号土坑は、共に18世紀前半まで残っていた56号溝より新しいため、それ以後のものとなる。これらは、基本的に中央方形区画に集中している。

形状的には小型楕円形と小型長方形のものが最も多く、この形状のものが銅銭副葬例の大部分である。なお、小型楕円形の2335号土坑では鉛銃弾を伴出している。この銃弾（2205）は後述のように顕著な変形痕が見られないが、このような出土状態を考えると、銃撃された遺体を埋葬した可能性がある。年代的には16世紀後半から17世紀初頭とするのが妥当だろう。

長楕円形の23号土坑は、重複する土坑があり、小型楕円形であった可能性が考えられる。また方形竪穴状の1402号土坑は人骨出土部分は隅で突出しており、これも重複する小型楕円形かもしれない。有磔小型長方形の3787号土坑と有煙道小型長方形の1467・5135号土坑については、後述するように白石大御堂遺跡で類例がある。以上は基本的に同一の時期と考えたい。

小型不整形については上記の重複関係のあるものと似た時期のものだろう。また円筒形とした深めの22号土坑も同様の可能性を考えたい。

馬骨検出土坑の中で陶磁片・銅銭などその他の遺物を伴出した土坑は、年代的には17世紀後半～19世紀後半とすることができる。位置は北側方形区画の東側にまとまっている。井戸・大型不整形・小型不整形の形状の14基は、他の廃棄物も投じた遺体処理のための簡素な施設と言える。これに対して、大小楕円形や大小長方形の13基は、遺体の形状にあわせてきちんと掘られており、丁寧な遺体処理と見ることができる。この種類は、18世紀後半には埋没した14号溝を壊して、犬の埋葬も含めて集中的に作られている。井戸に投げられた牛は前者の処理で、小型の犬の場合は両者に分かれるかどうかははっきりしない。

なお、17世紀初頭までの人骨出土土坑の基本的な構造は、西の鮎川対岸の白石大御堂遺跡で発見された埋

葬遺構と類似したものがある。同遺跡では、埋葬関係遺構を次のように区分している。

配石墓・火葬跡・火葬墓・土坑墓・土坑・石造物・その他

この中で、凸字形で焼けて遺物のないものが火葬跡、長方形で焼骨と副葬品のあるものが火葬墓、円形または隅丸長方形で副葬品の出たものが土坑墓である。いずれも15世紀後半から16世紀の造営と考えられている。土坑墓は、円礫群が出土する例が多く、木棺を埋置した際の基礎部として考えられている。

本遺跡の例では、有礫小型長方形が土坑墓に、有煙道小型長方形が火葬跡に類似している。また本遺跡で最も多い小型楕円形と小型長方形のものは、同遺跡の火葬墓と形態的に似たものも含まれるが、同じではない。なお明確な焼骨は、有煙道小型長方形の1467号土坑でしか確認されていない。そのため、同遺跡での指摘のように全て火葬墓と断定することには躊躇を覚える。

その他に後述のように、銅鏡・古瀬戸梅瓶・北宋銭が埋納された5926号土坑（K10-17G）は、14世紀後半の特殊な火葬墓である可能性が考えられる。

なお、馬の埋葬で注意すべきは、東側300メートルに近接する県道前橋長瀬線上栗須遺跡に宝暦1（1751）年銘馬頭観音石塔を配した集団馬墓が存在することである。同遺跡では、18世紀後半代の22基の馬埋葬土坑墓が検出されている。古墳の頂部に形成されたこの墓群での馬の埋葬は明治初年頃には終了していたが、今世紀まで「白山（馬捨場）」として記憶されていた。

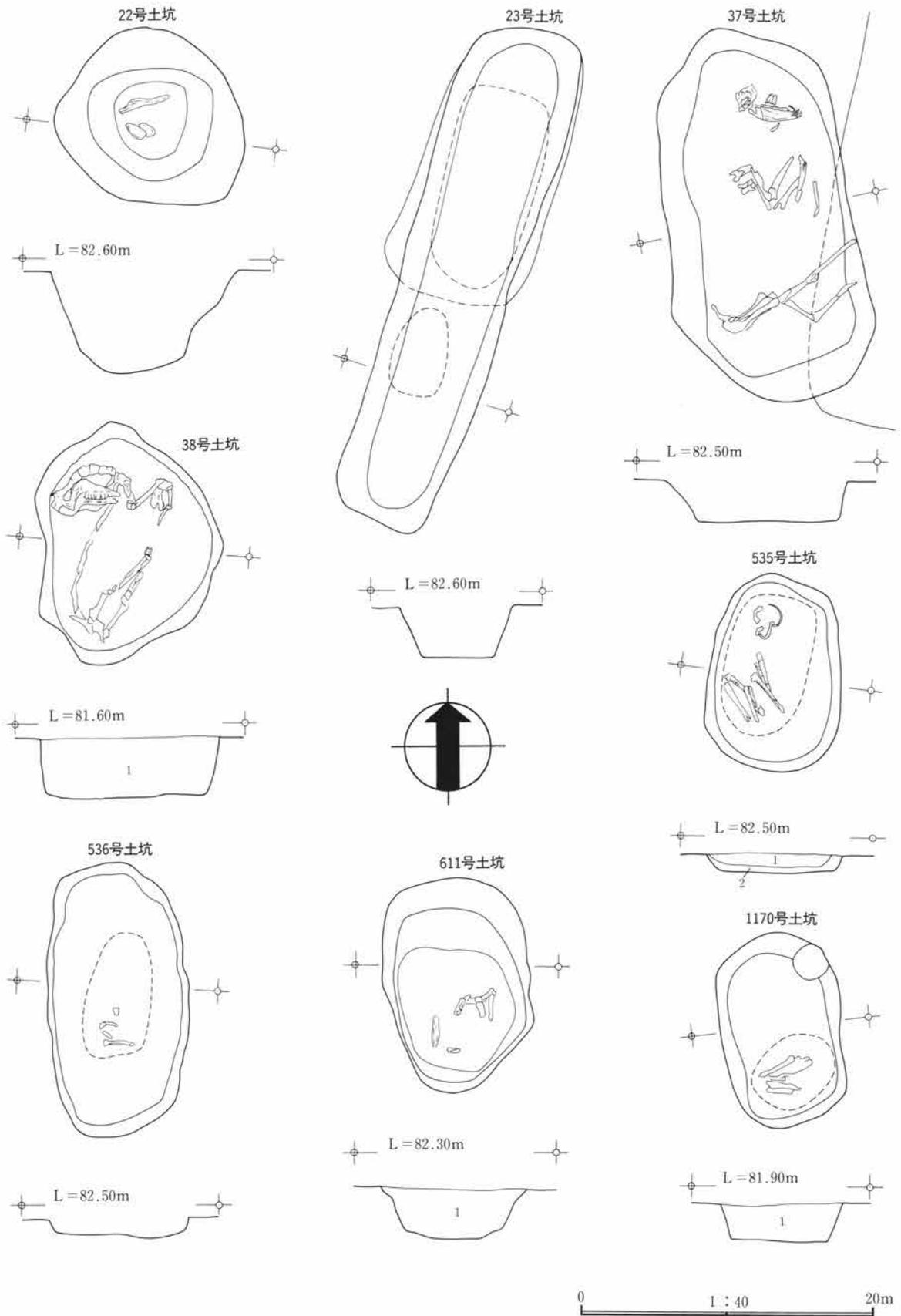
極めて興味深いことに、この馬頭観音塔の紀年銘には造立者として浄雲寺8世住職隼林の名が記されている。これらの状況から考えると、少なくとも本遺跡の北側方形区画に重なる寺院の浄雲寺は特に18世紀中葉から後半にかけて馬の埋葬に積極的になっており、恐らく14号溝跡に最初の馬墓地が形成された後に、死馬は上栗須村の東境界の場所に葬られるようになったと考えられる。

ウ 掘立柱建物

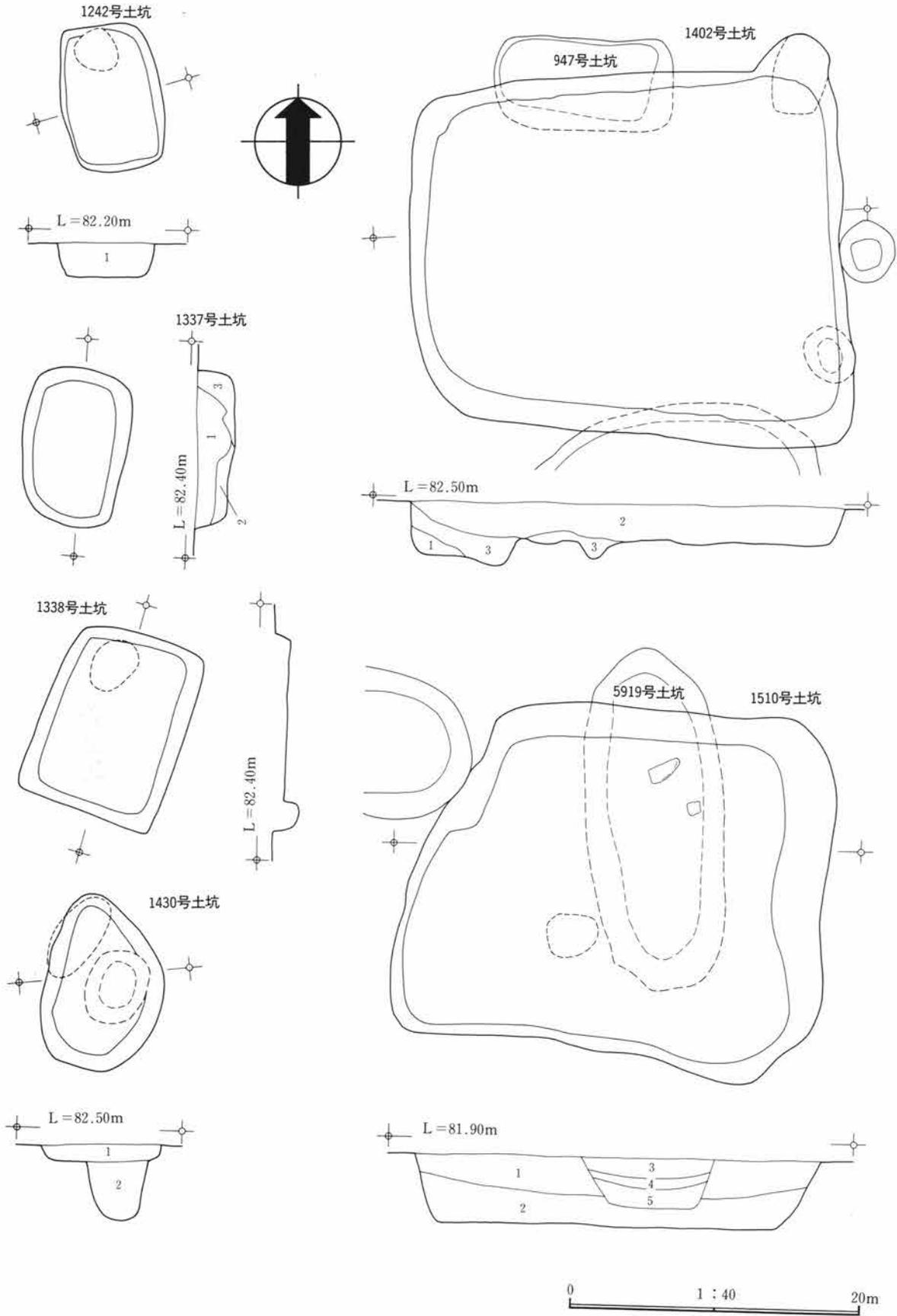
中央方形区画では、多数のピットが検出されており、それらの中には別項で報告したように掘立柱建物として組めたものもかなりある。だが、残念ながら、それらについては明確な時期判定をする材料が乏しい。

この区画には全体の遺物出土状況から見て、少なくともⅠ～Ⅲ期に建物が複数存在した可能性は高い。掘立柱建物の柱穴と見ることのできる小ピットも6個検出している（次項参照）。ただし、それらの小ピットを直接柱穴とした建物は、不明である。

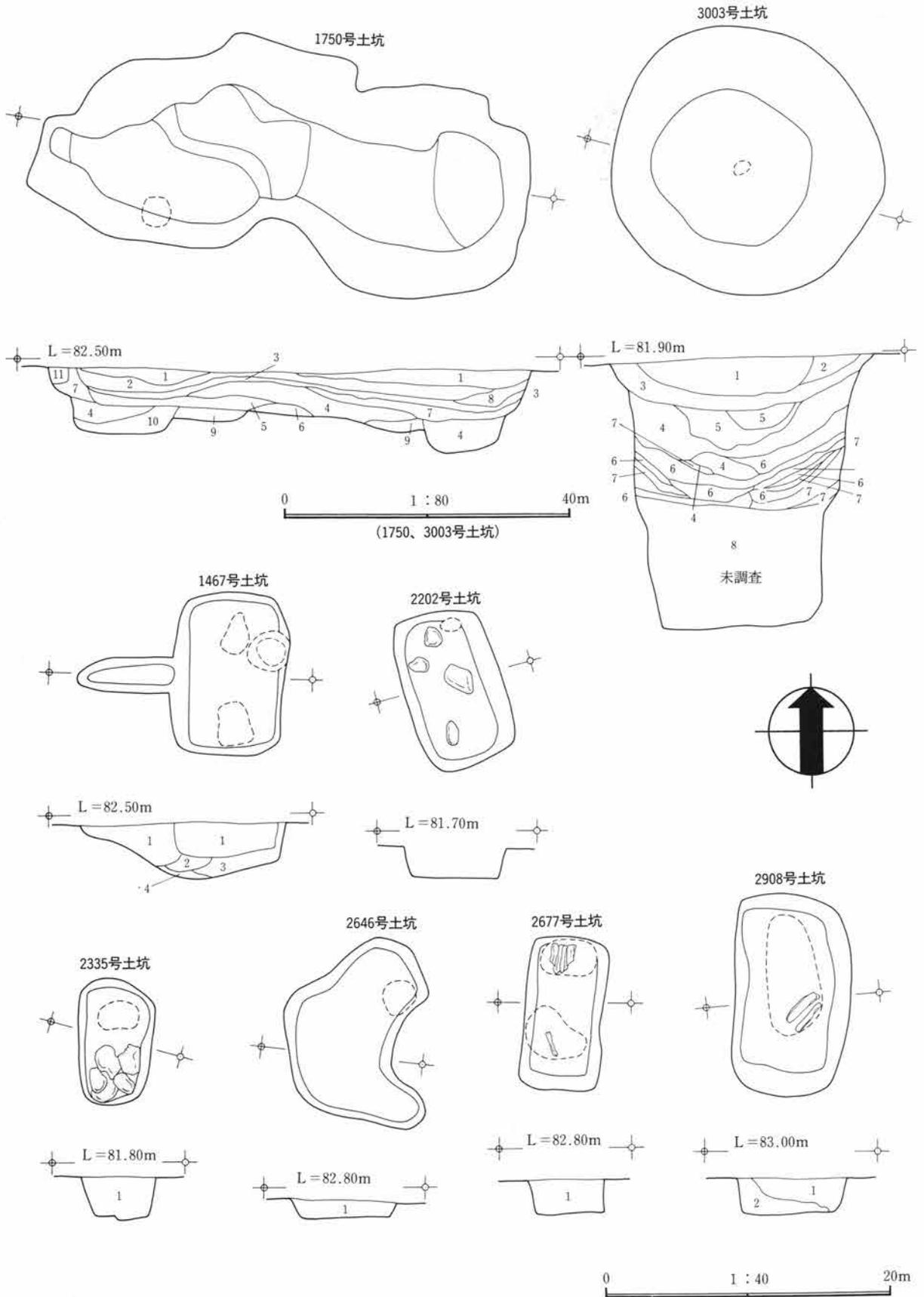
以上により、形状・配置は不明だがこの部分に掘立柱建物群が存在した可能性のみを指摘しておく。



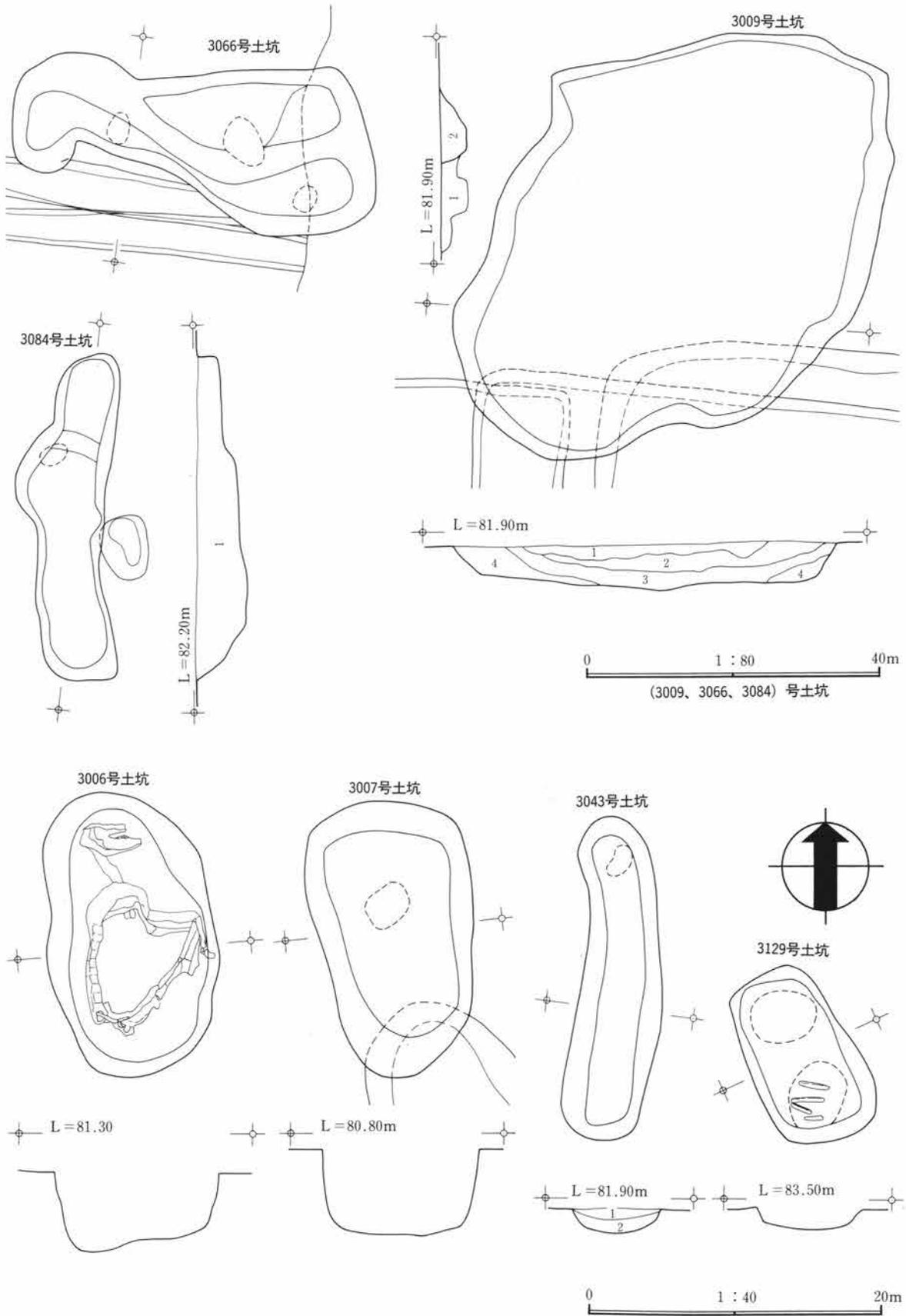
第350图 墓坑图(1)



第351図 墓坑図(2)

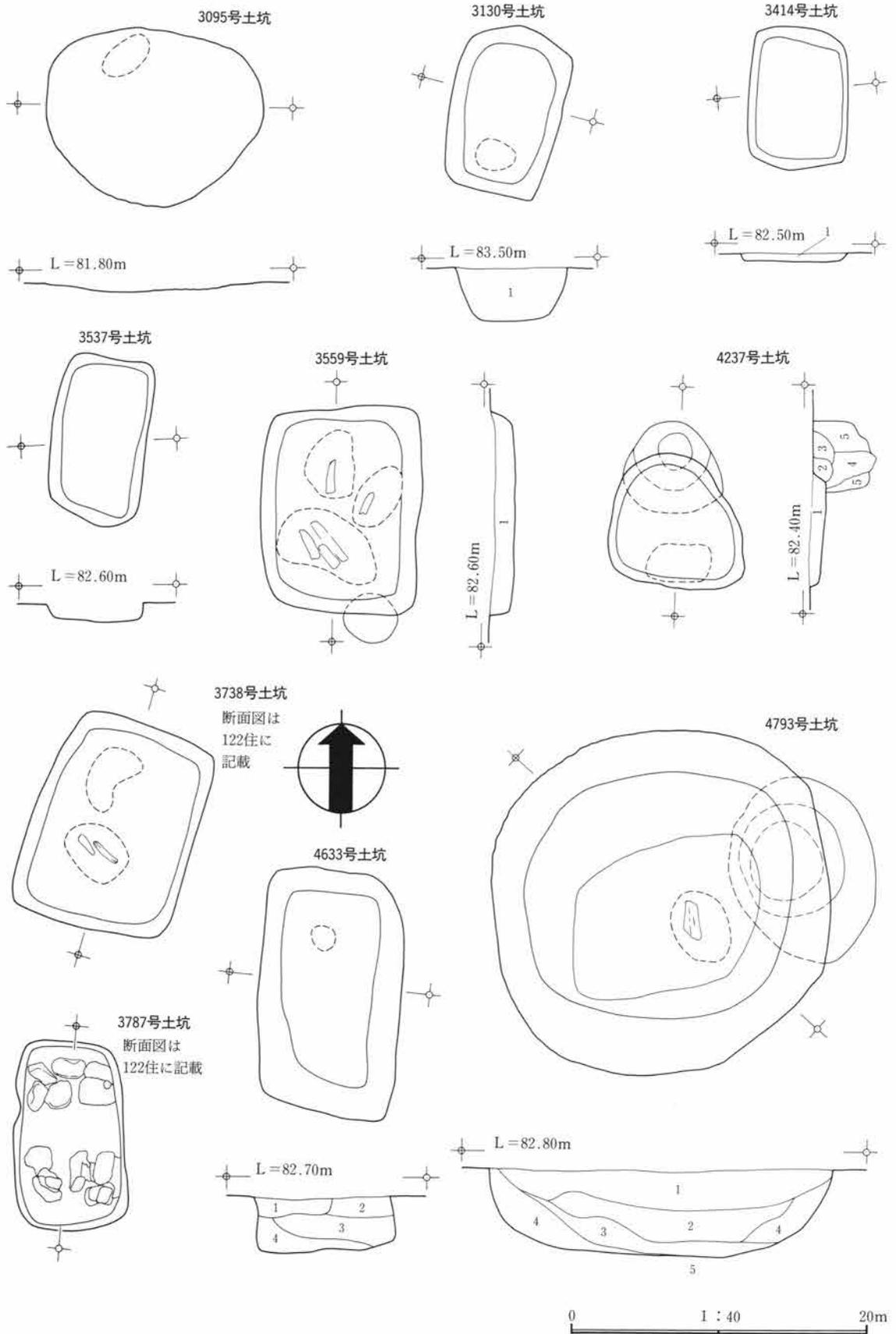


第352図 墓坑図(3)

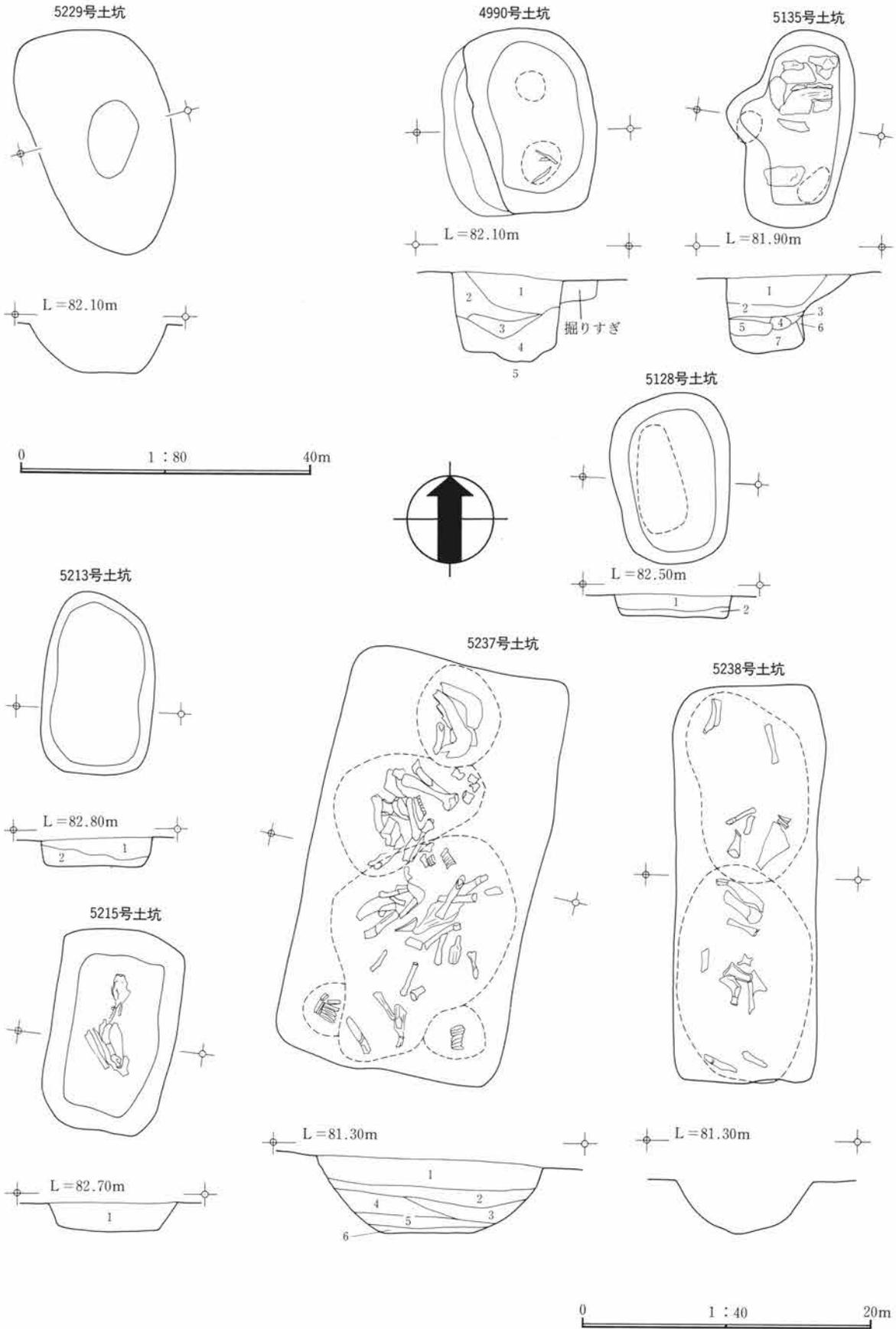


第353図 墓坑図(4)

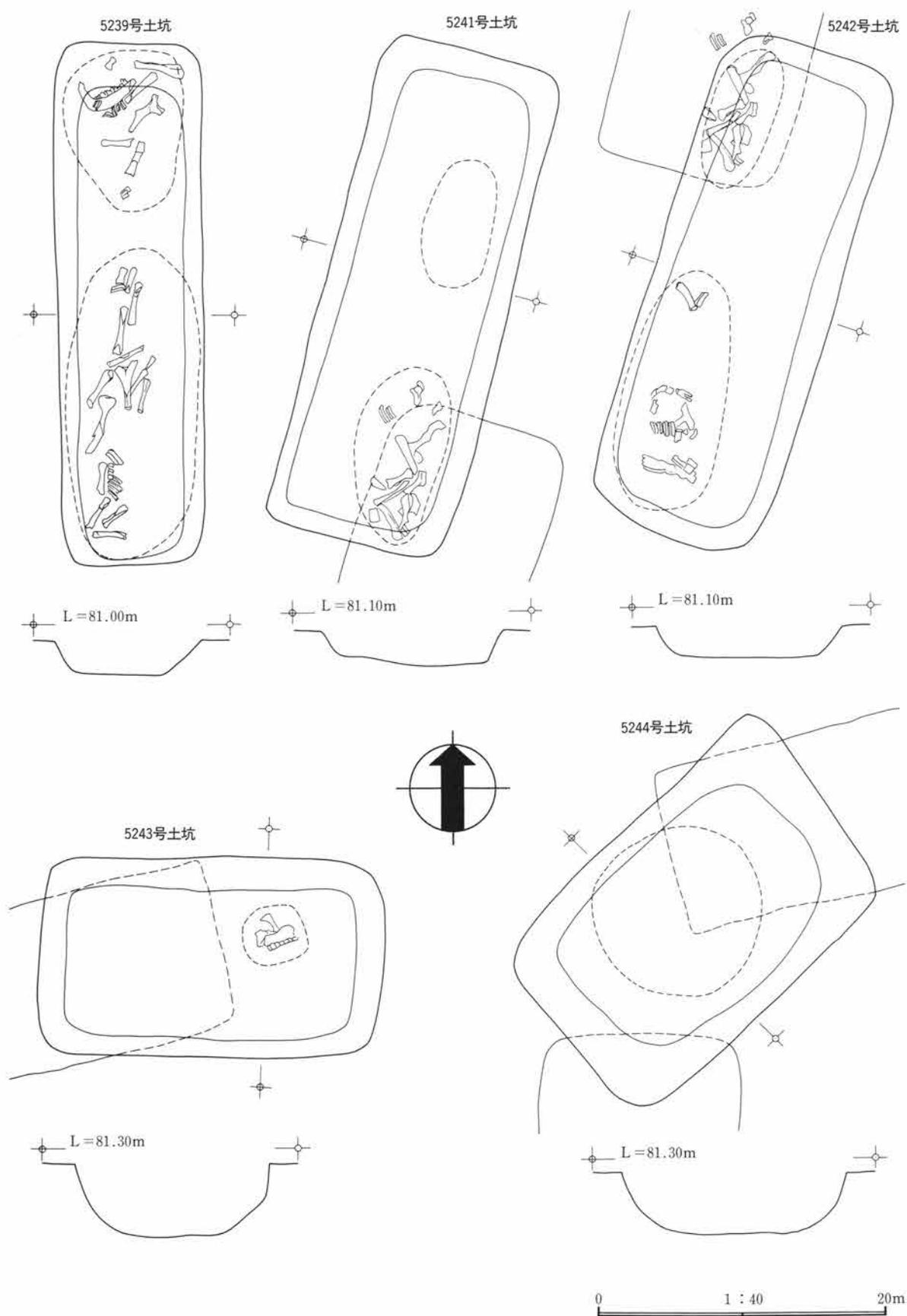
第II章 遺 跡



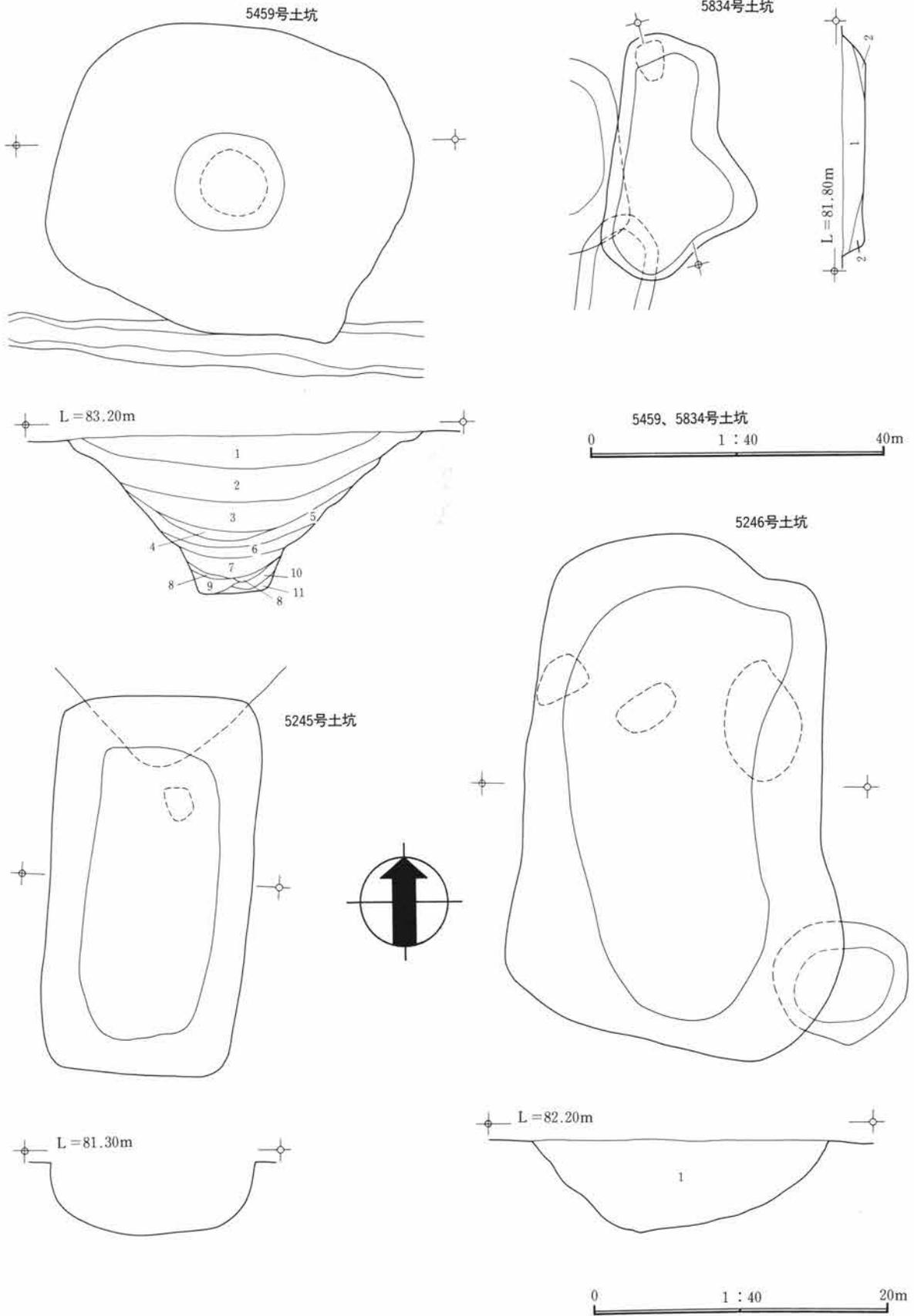
第354図 墓坑図(5)



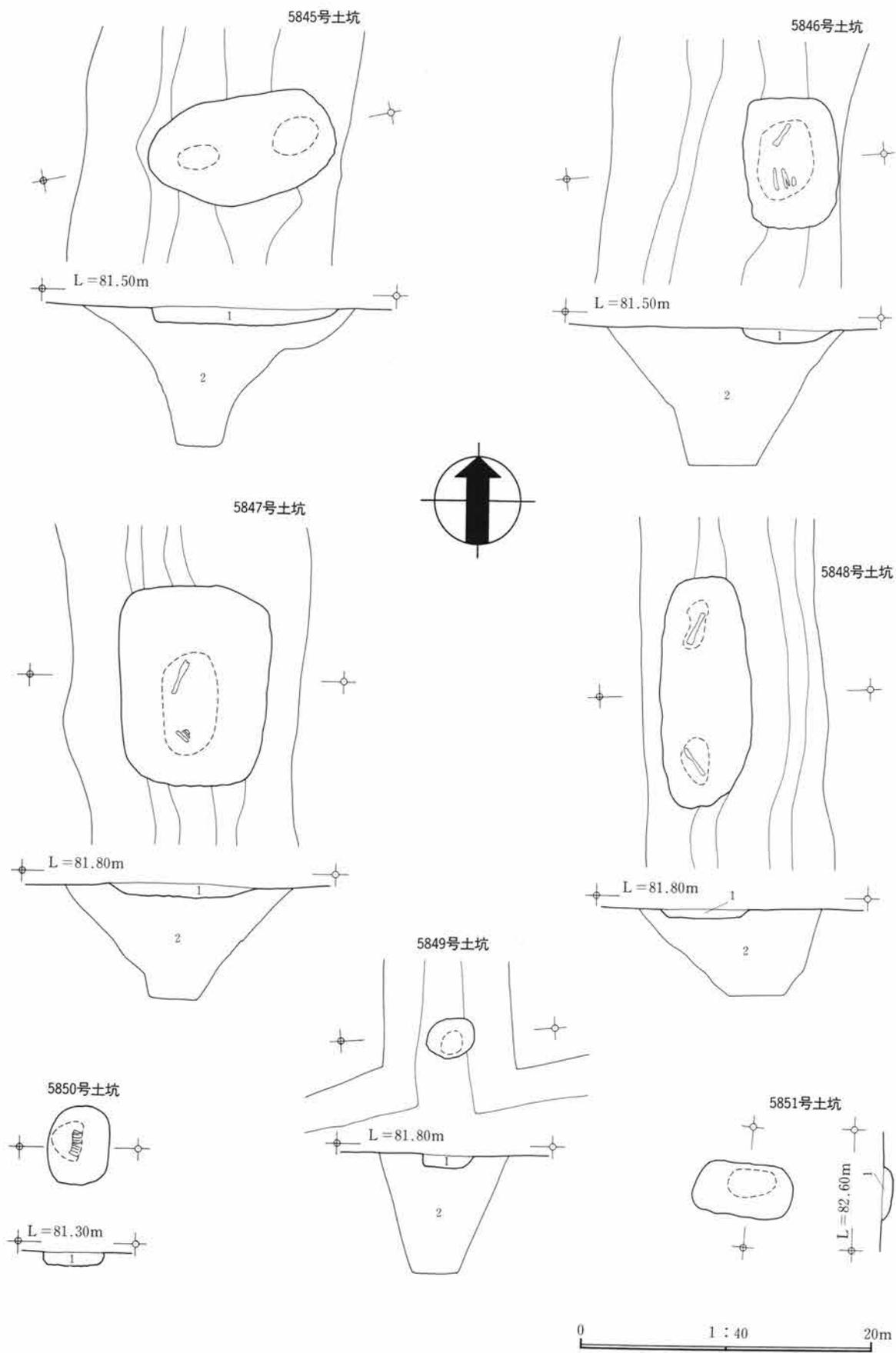
第355図 墓坑図(6)



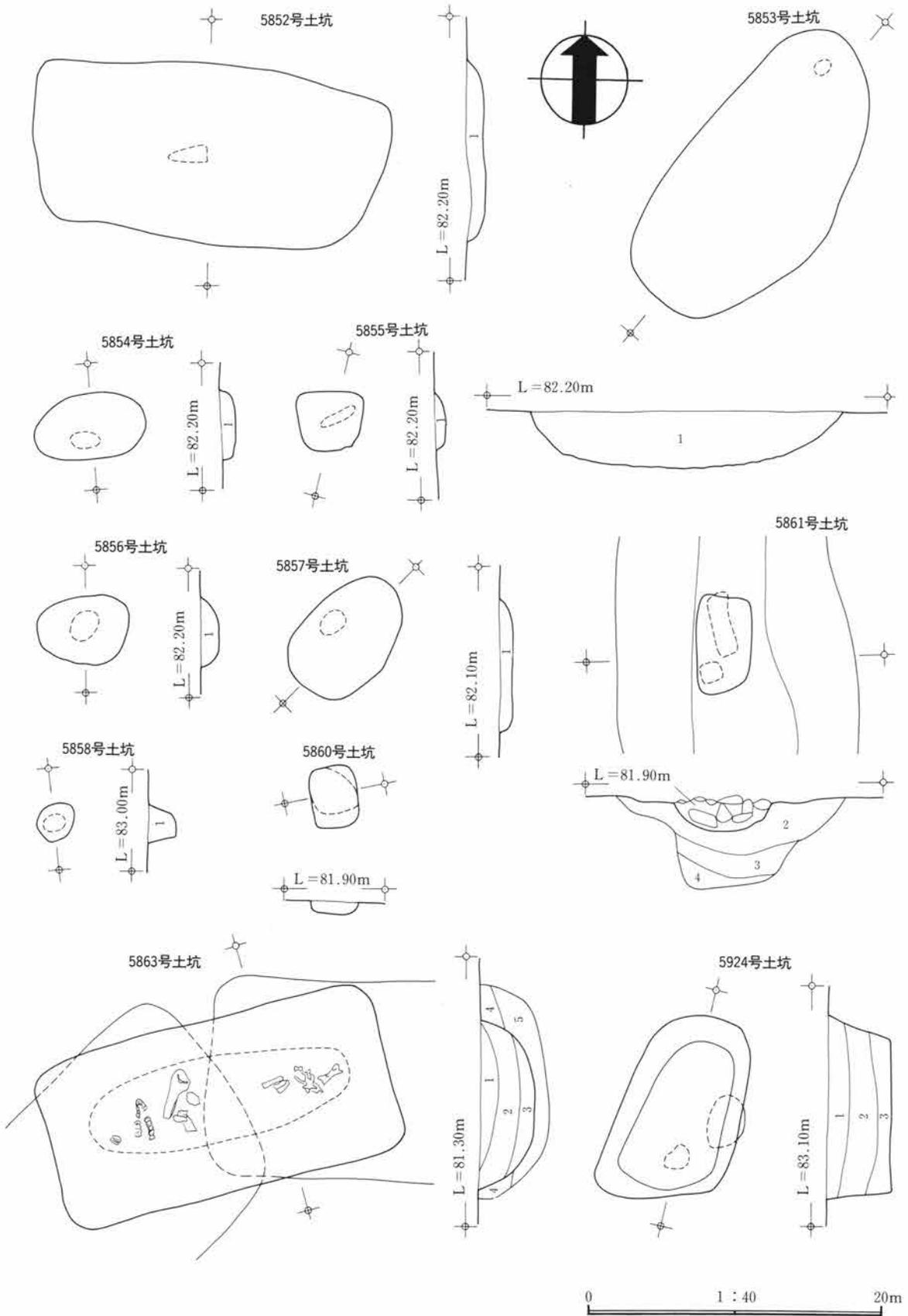
第356图 墓坑图(7)



第357図 墓坑図(8)



第358图 墓坑图(9)



第359図 墓坑図(10)

第II章 遺 跡

エ 土 坑

数多くの土坑を検出したが、上記の骨の出た以外のものは、大部分が不整形ではっきりした特徴が見いだせないものが多い。ただ、陶磁器類を出土した以下の例（上記墓を除く）については、形状を意識して掘削した可能性は高い（？は時期推定のもの）。

	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期
短冊型		2887			2124		3097
楕円形			1913	779（？） 4588（？錢） 5445（？）	5100（錢） 5108（錢） 5166（錢）	5102 5453	3004 5101 5145（錢）
円形		716					
方形			1000				
箱形		4608（？）	5250	3553（？錢） 5216（錢）		5153 （石塔仏）	5151
小ピット	5110	1194 2621 3987 5921（密壇供「泉」） 5926（瓶子・鏡）	1397 5141（？）		2376		
井戸						3003（馬骨）	
竪穴状						771	
方形竪穴			777（？）				
不整形		5457（鏡）					3009（馬）

以上の中で、形状区分は厳密なものではないが、概ね次のような傾向が認められる。

- 1 遺物の見られる小ピットはII期を中心とし、意図的な埋納坑もこの形状である。
- 2 その他の形状のものは、典型的な方形竪穴である777号土坑も含めて、あまりはっきりした時期・遺物との対応関係が認められない。

【参考文献】

群馬県埋蔵文化財調査事業団.1991『白石大御堂遺跡』
 〃 .1989『上栗須遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡』

B 時代ごとの遺構

I期

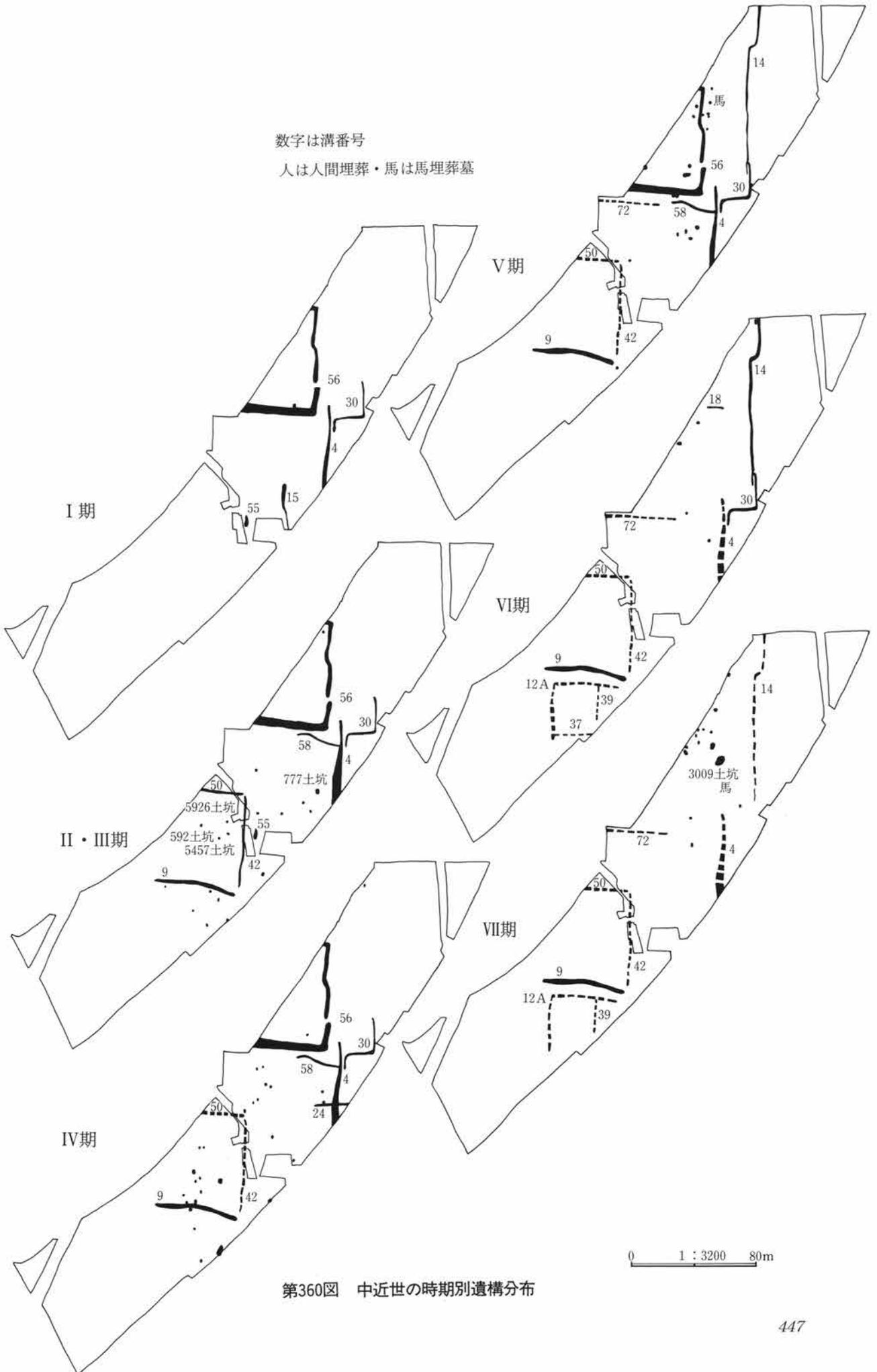
北側に堀56号溝で囲まれた方形区画（堀内南北約60メートル）が誕生する。寺院的な性格が強いこの区画の東辺南側には入り口が見られる。そしてその南東外側に、境界溝（4・15・30・55号溝）がいくつか形成される。このうち、東辺に平行する4号溝は南北走向の道路側溝の可能性もある。15号溝には、宝篋印塔などが埋まっていた。

II・III期

区画の南辺から40メートルの距離をおいて、東西走向の境界溝50号溝が掘られる。この溝の東端から直角に60メートル南下する42号溝は同時期の可能性があり、西側は不明瞭だが、これにより中央方形区画（南北

数字は溝番号

人は人間埋葬・馬は馬埋葬



第360図 中近世の時期別遺構分布

第II章 遺 跡

約60メートル)が構成されたと考えられる。南側の境界は後にやや形状を変えた感じがあるが、9号溝がその役割を担っているだろう。

この中央方形区画内は、特殊な埋納土壌である5921号土壌や5926号土坑があり、また舶載陶磁・古瀬戸を中心とする遺物も集中しているため、主要な生活空間である掘立柱建物群(構造は不明)が存在しただろう。「泉」字墨書陶磁が目立つ。

北側方形区画の堀は最初の埋没が始まり、56号溝には応永年間(1394~1427)あるいは康永3(1344)年銘の板碑や石塔類が埋まっている。

北側区画の東外側には、方形竪穴777号土壌が見られる。

IV期

中央方形区画での生活は無くなり、溝は埋没して区画意識だけが残る。この部分も含めて北側方形区画の南側は広く火葬墓が展開する。だが、この時期全期間継続したのではなく、後半には墓地形成もなくなり、僅かに北側方形区画の堀が埋まり切らずに残っていた以外には積極的な生活は見られなかったと思われる。

V期

北側方形区画の東外側境界として14号溝が新たに掘られる。北側方形区画を中心に、再び活発な生活がよみがえる。「方」「司」「首」の墨書陶磁が区画北・東外側で見られ、この時期の活動と関係あるだろう。区画南辺外側は道路(側溝72号溝)が東西に走る。区画東辺と14号溝との間の部分は、死んだ馬の遺体処理場所としても利用された。

VI期

長く残っていた北側方形区画の堀が完全に埋まり、前期に比べこの周辺での生活は継続するものの低調になる。天明3年の浅間山噴火降灰の処理として、68号溝がこの区画の中央に掘られる。

中央方形区画南辺の名残り部分が道路となり、その南側には屋敷区画と思われる南側方形区画(東西約40メートル南北約30メートル)が形成される。

VII期

かつての北側方形区画東側で集中した居住生活が短期間見られる。そして、そこで大規模に石宮なども含めた廃棄物処理がなされる(3009号土坑)。

北側方形区画の堀跡を除いて、以前の中央と南側方形区画などの生活の痕は地境として残る。

3 特殊遺物

A 5921号土坑一括埋納遺物

ア 埋納遺物

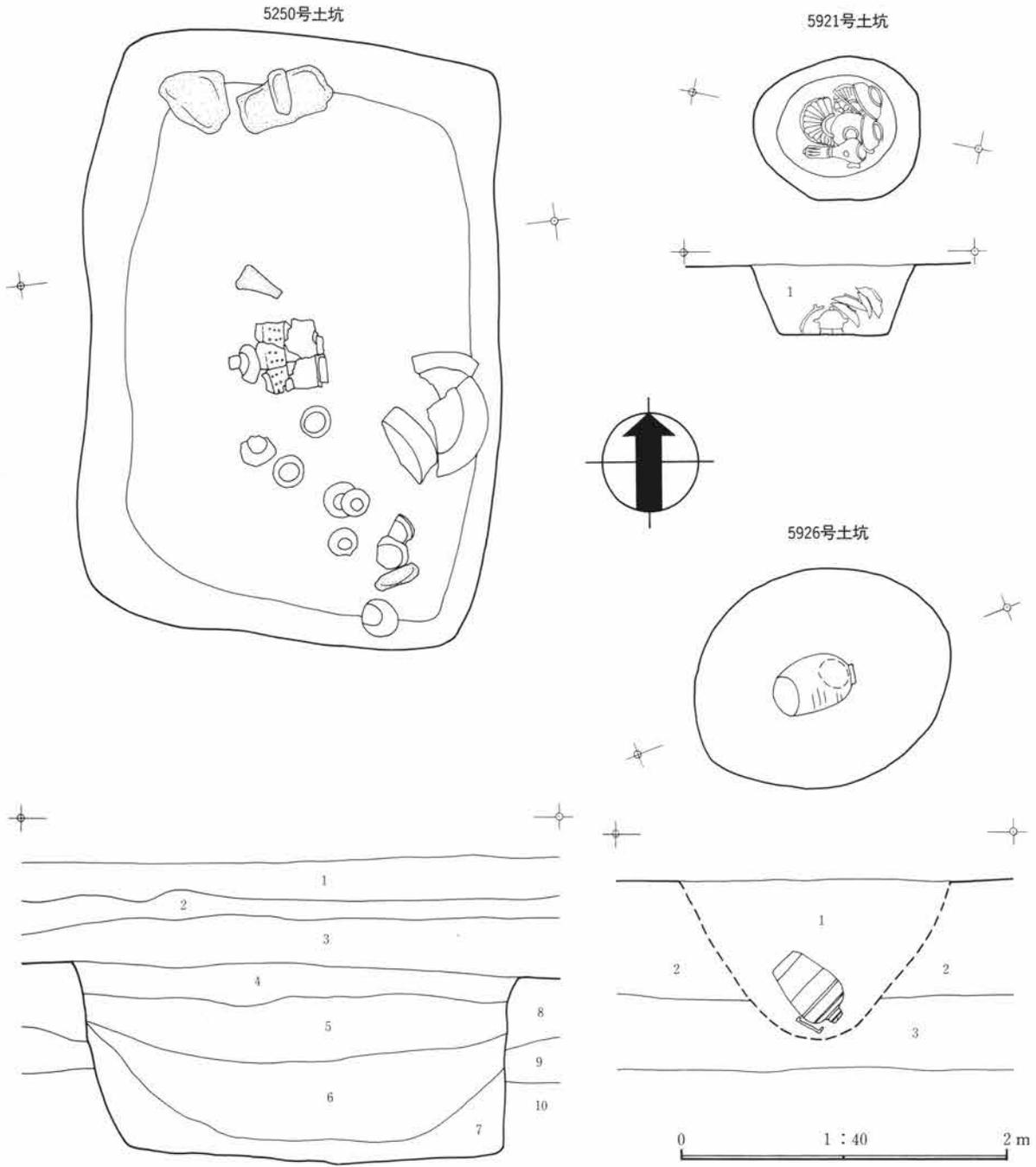
小ピットの5921号土坑(K10-36G)には、次のような遺物が埋納されていた。

1 銅製火舎香炉(2202) 直径10.7センチ

鋳銅製。宝珠型紐のついた蓋と3本の脚を持つ身が組み合わされる。蓋は2条の横線により3段に区画され、そのうち上2段には飛雲型の透かし孔が3箇所ずつ開けられる。各透かし孔の間には、飛鳥文が毛彫りされている。身は、上端が水平に大きく張り出して蓋を受け、簡素な脚はやや小さく作られる。

密教法具の香炉で、遺跡出土のものは和歌山県那智経塚例など極めて少ない。身の部分が2段になってい

第3節 中近世・近代の遺物と遺構



第361図 5250・5921・5926号土坑遺物出土状態

第II章 遺 跡

る貞治5（1366）年銘の法隆寺伝世品に比べ、透かし孔の形態は異なるものの全体に12世紀代的那智経塚例により近いと見られ、鎌倉時代に製作されたと考えられる。日本製。

2 銅製柑子口花瓶（2201） 高さ18.0センチ

銅製。口部は縦に六分割された瓜型に近い柑子口状で、頸部に2条の突帯がある。体部には対称位置に獣面と雲型突起が2箇所づつ見られる。高台内の底部は欠落している。

密教の垂字型花瓶とは大きく異なった形状で、一般には鎌倉新仏教の三具足に使用される形態である。韓国新安沖沈没船引き揚げ品の中に突起部を除いてほぼ似た形状・規模の中国製花瓶が見られるため、14世紀前半のものと考えられる。日本製。

3 青磁蓮弁文唐草文丸碗（1003） 口径15.2センチ

やや深めの篋丸彫りで外面に菊花状に近い短冊型の蓮弁文、内面には流麗な唐草文の画花がなされる。釉は淡緑色で、厚く全面施釉後に高台内のみ輪状に剥ぎ取る。一部釉割れがある。

同様のものは紀淡海峽友が島沖や博多遺跡群など多くの遺跡出土遺物に見られ、明前期15世紀前後と考えられている。中国竜泉窯製品。

4 青磁鎬蓮弁文小皿（1002） 口径11.8センチ

浅めの篋片切彫りで外面に剣先型の鎬蓮弁文の画花がなされ、見込には小さな印花状のものが見られる。釉は僅かに青みがある淡緑色で高台外面まで施釉、全体に貫入がある。高台畳付は斜めに削られ、口縁は水平に張り出す。一部釉割れがある。

同様のものは韓国新安沖沈没船引き揚げ品や博多遺跡群などの出土遺物に見られ、14世紀前半と考えられる。中国竜泉窯製品。

5 青磁見込蓮唐草文印花小皿（1001） 口径13.4センチ

見込の円形突帯内に蓮唐草文の印花がなされるが、浅いためやや不明瞭。釉は淡緑色で厚く全面施釉後、高台内を輪状に剥ぎ取る。口唇は玉縁状に外反。ほぼ完存だが、口縁の一部破片が火舎香炉内より出土。

見込に印花した似た形状の青磁小皿は韓国新安沖沈没船引き揚げ品に見られるが、玉縁口唇ではない。他に類例が多くなく、釉調や作行が同伴した青磁碗に似ているため、元末から明前期の14世紀中葉～後半と考えられる。中国竜泉窯製品。

6 白磁小皿3点（1004, 5, 6） 大口径11.4センチ 中口径10.2センチ 小口径9.0センチ

大中小それぞれ作行が異なる。大は、陶質胎土に失透質で淡黄白色の釉が、体部外面中位までかけられる。細かい貫入があり、畳付の2/3ほどには重ね焼きの釉が付着している。高台内には不明の朱書がある。中は、陶質胎土に白灰色の釉が体部外面中位までかけられる。畳付には4箇所釉が付着しており、直接重ね焼きした最上位のものだろう。高台内に「泉」字の墨書がある。小は、陶質胎土に失透質で淡黄白色の釉が、畳付以外全面に施釉される。高台は施釉以前に4箇所が抉られており、見込には直接重ねた跡が残る。大と小は漆継ぎされている。

いずれも粗製であり、形・大きさととらわれずに大量生産されたもの。博多遺跡群・京都相国寺境内遺跡など多数の遺跡で出土している。14世紀後半～末頃と考えられる。中国製。なお高台を4箇所抉り高台内にやはり「泉」字墨書のある白磁小皿（1340）が56号溝から出土している。

7 白磁角杯5点（1011～15） 最大口径8.4センチ 最小口径7.6センチ

いずれも平面八角形で体部外面が面取りされ、体部下位に稜がある。基本的には陶質胎土だが、作行はかなり異なる。釉は失透質の淡黄灰色と光沢のある淡灰白色に分かれるが、施釉範囲は外面稜までと共通する。

焼成方法は、高台畳付4箇所を抉ったものと、全く抉らないものがあるが、共に直接重ねている。後者にはカンナ削り痕がある。高台内に「泉」字墨書あるもの1点、三朱点あるもの2点が見られる。

白磁小皿同様の粗製品である。出土遺跡も小皿とほぼ同様と思われ、やはり14世紀後半～末頃だろう。他遺跡出土品にも墨書される例が多い。中国製。高台を抉った同型の角杯(1016)が1194号土壌から出土している。

イ 出土状態の特徴

銅製火舎香炉が穴の底に正位置で置かれて、その上に白磁角杯・小皿が下向きに重ねられ、最も外側は青磁碗小皿と銅製花瓶で覆われていた。錆で蓋が溶着していた火舎香炉の中には、青磁小皿の口縁片が入っていた。この出土状態は廃棄と考えることは不可能であり、これらの品を埋納した時点での位置とそれほど大きな変化は考えにくい。

密教儀式「密壇供」^{みつだんぐ}では、火舎香炉・六器そして飲食器^{おんじき}・花瓶・灯明各一对が使われる。ここで発見された陶磁器が六器にあたるのであれば、全体としては飲食器と灯明一对・花瓶一個・皿一個が足りない。

火舎香炉を除いて、いずれも本来の密教法具ではない。同じ白磁角杯そして「泉」字墨書小皿は他でも発見されており、一般使用の各種調度具・供膳具を用いて、臨時的に「密壇供」的に品を揃えたのだろう。

「泉」字墨書は本来の使用場所を示唆している。火舎香炉は長く法具として使われ、銅花瓶や青磁鎚蓮弁文小皿は調度品として伝わっていたようだ。それらに新しくもたらされた白磁類や青磁丸碗を併せて埋納された。14世紀後半から末頃の出来事と考えられる。

「密壇供」はもともと埋めるものではない。しかも、いろいろな品を揃えたにもかかわらず、抜けたものがある。また青磁小皿の口縁片は、意図的に火舎香炉内に入れた可能性がある。何らかの宗教的目的があっただろうが、このように埋めた詳しい理由は分からない。

ウ 他の出土例

管見では、本例と似た状態での「密壇供」の埋納例はない。完全な密教法具の埋納例は、12世紀の那智経塚などに僅かに見られる。密教法具一般の埋納については、次の例がある。

1 大竹遺跡(静岡県掛川市)

- 香炉 : なし
- 花瓶 : 銅製垂字型 2
- 飲食 : 銅製 2
- 二器 : 銅製 碗 1 欠
- 他法具類 : 銅製金剛盤・水瓶・独鈷杵・三鈷杵・五鈷鈴など
- その他 : 古瀬戸祖母懷壺(銅銭約3千枚が入る)・青磁碗 6・青磁小皿・天目碗 2
- 遺構 : 完全に一括埋納かは不明
- 報告年代 : 16世紀後半

2 木崎山遺跡(新潟県柿崎町)

- 香炉 : なし
- 花瓶 : 銅製 1
- 飲食 : 銅製 3
- 六器 : 銅製 鉢 1 皿 5
- 他法具類 : 銅製・五鈷鈴

第II章 遺 跡

その他 : 古瀬戸四耳壺 (法具の容器)

遺構 : 方形土坑

報告年代: 15世紀頃?

また1の大竹遺跡の遺物を分析した足立順司他によれば、次の各遺跡でも密教法具類が出土している。

3 三山口遺跡 (鳥取県八頭郡八東町)

香炉 : 銅製火舎

花瓶 : あり 壺字形か 他に三具足花瓶

飲食器 : あり

六器 : あり

二器 : あり

他法具類: 銅製金剛盤・五鈷杵・五鈷鈴

報告年代: 室町前期

4 新畑遺跡 (岡山県英田郡大原町)

香炉 : 銅製火舎

花瓶 : なし

飲食器 : あり

六器 : あり

二器 : あり

他法具類: 銅製五鈷杵・五鈷鈴・打鳴器

報告年代: 室町前期

5 くつがた遺跡 (新潟県新井市)

香炉 : 銅製火舎

花瓶 : 銅製壺字形2

飲食器 : 銅製大小2組

六器 : 真鍮製大小2組

他法具類: 銅製五鈷鈴・独鈷杵・提子・曲物・青磁皿

報告年代: 14世紀前後

6 糸谷遺跡 (鳥取県岩美郡国府町)

香炉 : 銅製火舎

花瓶 : あり

飲食器 : あり

六器 : あり

他法具類: 銅製五鈷杵・独鈷杵・宝珠杵・羯磨

報告年代: 鎌倉期

7 波佐谷遺跡 (石川県小松市)

香炉 : 銅製火舎・青磁2

花瓶 : 銅製

飲食器 : 不明

六器 : 不明
他法具類: 磁器 (青磁碗1・白磁皿4・瀬戸王目碗1)
報告年代: 戦国期

8 宇刈 (静岡県袋井市)

香炉 : なし
花瓶 : なし
飲食器 : なし
六器 : 銅製鉢8
他法具類: 銅製五鈷杵・五鈷鈴・常滑壺2
報告年代: 16世紀

9 上竹 (岡山県浅口郡金光町)

香炉 : なし
花瓶 : なし
飲食器 : 銅製2
六器 : 銅製鉢8皿7
他法具類: 銅製三鈷杵・五鈷杵
報告年代: 室町時代

10 上徳良 (広島県賀茂郡大和町)

香炉 : 銅製火舎
花瓶 : 銅製瓢型2
飲食器 : 銅製3
六器 : なし
他法具類: なし
報告年代: 室町時代

11 宮森廃寺跡 (富山県砺波市)

香炉 : なし
花瓶 : なし
飲食器 : なし
六器 : 銅製二器
他法具類: 独鈷杵・金剛盤・闍伽桶・銚子
報告年代: 不明

足立は、以上の1・3～7遺跡(3, 4, 6, 7を筆者は図未見)について、次のように三時期に区分している。

鎌倉期段階 : 羯磨が中心
室町前期段階 : 火舎・六器・飲食器・金剛鈴・金剛杵で構成
戦国期段階 : 陶磁器が加わる

木崎山は、構成からはその室町前期段階に近い。本遺跡例も同様の様相を見せるが、陶磁器による六器代用という重要な要素が異なるものの、三具足花瓶が入っている点で三山口例に似ている。

第II章 遺 跡

一方、三具足の埋納例には、次の8遺跡がある。

1 白山橋遺跡34号配石（石川県穴水町）

- 香炉 : 青銅製把手付無脚型
花瓶 : 青銅製德利型・觚型
燭台 : 青銅製觚型2
その他 : 青銅製引盤（燭台燭立てに転用）・土師質小皿2
遺構 : 配石墓群の一面で隅丸方形石囲い（1.26×1.15m）
報告年代： 15世紀中頃～16世紀前半

2 大光寺裏遺跡（埼玉県神里町）

- 香炉 : 青銅製把手付鼎型・竜泉窯青磁脚付
花瓶 : なし
燭台 : なし
その他 : 青銅製軸尻・分銅？・座金？ 古瀬戸梅瓶
遺構 : 不明 5m離れて竜泉窯青磁碗・古瀬戸天目碗を重ねて埋納したピットがある。伝13世紀創建の大光寺の境内内。
報告年代： 16世紀

3 栄町遺跡L区28号土壇（東京都日野市）

- 香炉 : 青銅製把手付鼎型
花瓶 : 青銅製觚型
燭台 : 青銅製觚型
その他 : なし
遺構 : 楕円形土壇（0.61×0.53×0.28m）
報告年代： 16世紀中頃

4 吉松遺跡火葬土壇墓（大分県宇佐市）

- 香炉 : 瓦質土器無脚型
花瓶 : 瓦質土器觚型
燭台 : 瓦質土器觚型（？）
その他 : 瓦質土器鍋片・瓦器碗片
遺構 : 火葬墓群の一つ（1.1×0.7×0.3m）
報告年代： 15世紀中頃～16世紀前半

5 伊達八幡館跡（新潟県十日町市）

- 香炉 : なし
花瓶 : 銅製德利型2
燭台 : 銅製觚型2
その他 : 銅製錫杖頭
遺構 : 不明
報告年代： 15世紀～16世紀

6 上山田ウクナイヤチ遺跡（石川県宇ノ気町）

香炉 : 青銅製無脚型
 花瓶 : 青銅製觚型
 燭台 : 青銅製觚型
 その他 : なし
 遺構 : 不明
 報告年代 : 不明

7 北一地内遺跡（富山県小矢部市）

香炉 : 青銅製
 花瓶 : 青銅製
 燭台 : 青銅製
 その他 : 珠玉州甕（容器）
 遺構 : 不明
 報告年代 : 不明

8 武蔵国府関連遺跡（東京都府中市）

香炉 : 銅製鼎型
 花瓶 : 銅製王子型水瓶？2
 燭台 : なし
 その他 : 五銚鈴・埋納銭
 遺構 : 地下式横穴他
 報告年代 : 不明

興味深いことにこの8遺跡の出土遺物には、共通点がある。即ち、香炉では大光寺裏と栄町そして武蔵国府が似た鼎型であり、白山橋と吉松も器形が似ている。花瓶と燭台は白山橋と栄町そして吉松また伊達八幡と上山田ウクナイヤチがいずれも觚型で同型かつ大きさも似ていることである。そのため、伝世を考慮しても、これらの遺跡での埋納はそれほど大きな時間差がないと思われる。

大光寺裏で共伴した古瀬戸梅瓶は14世紀代のものであるが、隣接ピットの青磁碗・古瀬戸天目碗の年代観よりいずれも伝世されたとされ上記の報告年代になっている。しかし、浅い菊花状丸彫り蓮弁文の碗と玉縁状口縁の天目碗は最近の研究からは、15世紀代のもので考えた方が妥当と思われる。そのため、白山橋の上限による15世紀中頃をもって共通する年代をすべきだろう。

なお觚型燭台は、14世紀中頃の『慕婦絵詞』の三具足例の中にもすでにいくつか描かれている。そのため、上記修正年代はそれほど無理がないと考えられる。

以上の三具足埋納例は、本遺跡の「密壇供」埋納と比べると次の点が指摘できる。

白山橋と栄町そして吉松例は、前者の燭立を除いて転用ではない三具足の埋納である。埋納に際して、三具足セットの意識があったことは確かである。

これに対して大光寺裏は花瓶・燭台がなく、代わりに梅瓶と軸尻などの小型青銅製品が残る。報告者は他遺構で出土した土師質の花瓶をもって三具足に充てている。しかし、それでは梅瓶そして小型青銅製品の意味が説明できない。また香炉が2個入っているのも不自然である。むしろ骨蔵器あるいは経の埋納にかかわるものとするのが自然だろう。また香炉がなく錫杖頭が入っている伊達八幡は、組み合わせとしては緊急避難的な埋納の感じがある。

第II章 遺 跡

いづれも「密壇供」セットを臨時にあつらえた本遺跡例とは、異なっている。しかし、大光寺裏は本遺跡の東僅か5キロ弱の地点に位置しており、近接した時期では同一の宗教的思考を共有していた可能性は高い。

足立は、大竹遺跡の分析の中で、室町前期段階に安定した密教法具の埋納について、「組合わせをみると壮大な大壇供養をおこなったとも思われず一種の旅壇具を用い、野外にて修法をおこなった」と考え、それは「密教系の小寺院」や「成立寺院」の法具ではありえないとした。そして三貝足など非密教仏具が加わっている点から、「呪術的色彩が強く、一種の地鎮めとみることができる」とした。

本遺跡の場合、上述のように火舎香炉以外はいづれも密壇供ではなく、三貝足も含めた転用である。このような密教法具と三貝足の混用や陶磁器の転用例は他では見られない。陶磁器を含む大竹は隠匿物的な様相が強いが、本例は青磁小皿の口縁を割って火舎内に入れていることから、それとは全く異なる。密教法具出土他遺跡の多くは、鈴杵と飲食器がほぼ共通している。そのため上述の組成にもかかわらず、本遺跡例は完全な「密壇供」とは言い難い。しかし、他の三貝足出土例と比べれば、埋納状況は明らかに宗教儀礼要素が濃い。そのためむしろ、本来のものとは少し異質である密教的な何らかの儀礼に伴う埋納と本遺跡例は考えられる。足立の結論に似た状況である。また、そこに集められた器物は、京都の浄土真宗寺院内の生活を描いた『慕婦絵詞』の状況に似た日常具と考えられる。

なお、密教法具及び三貝足の埋納遺跡は、日本海側に分布がより密であり、都市部では少ない。本遺跡例は大光寺裏側も含めて北陸分布図の延長と考えることが可能であろう。また火舎香炉自体については、南に約8キロ離れた浄法寺（鬼石町）と関係があるかも知れない。同寺は、最澄の東国布教に際して拠点となった「^{みどの}緑野寺」と考えられ、中世においても上野地方の天台宗の拠点であったからである。また本遺跡地から北西3キロの距離の高崎市山名町より、江戸時代とされる銅鑄製鏡2個が出土している。時代は異なるが、近隣の山名地区の出土である点は注意を要する。

また銅製香炉の単品出土は、関東では次の例がある。

大山遺跡	埼玉県伊奈町	鼎形雷文		
村上城跡	千葉県市原市	鼎型円文	堀遺構出土	中世寺院跡
飛山城跡	栃木県宇都宮市	火舎身部	方形竪穴床近く	宇都宮氏重臣芳賀氏居城

以上の中で、村上城跡例は、大光寺裏・栄町例から把手を除くとほとんど同型である。それに対し、飛山城跡例は、明らかな密教法具の火舎（径7.2センチ高2.5センチ）であり、大きさははるかに小さいものの本遺跡例とかなり似た形状で13世紀代のものと考えられる。しかし、15世紀前半の瀬戸卸皿と共に方形竪穴から蓋を欠いた状態で出土した。従って、本遺構のような特定の儀礼の下での埋納とは考えにくい。

【参考文献】

- 足立順司.1981「掛川市大竹遺跡の研究 中世埋納遺物の分析」『森町考古』16、森町考古学研究会
穴水町教委.1987『西川島 能登における中世村落の発掘調査』
石田茂作.1977『仏教考古学論攷 五 仏具編』思文閣出版
監修.1976『新版仏教考古学講座 五 仏具』雄山閣
市原市文化財センター.1986『村上城跡』
金子拓男・宮腰公健.1977「くつがた遺跡出土の密教法具」『月刊文化財』77-7
小林和男.1990「日野市栄町遺跡出土の三貝足」『東京考古』8
埼玉県埋蔵文化財調査事業団.1985『大光寺裏』
阪田宗彦.1989『日本の美術282密教法具』至文堂
渋谷忠章・佐藤良二郎.1989「中世墳墓の地域的様相 九州」『月刊考古学ジャーナル』304
東京国立博物館.1985『那智経塚遺宝』東京美術
.1990『東京国立博物館図録仏具篇』東京美術
日本貿易陶磁研究会.1995『越後の出土陶磁器』
1996『第17回研究会発表資料集』
ミュージアム氏家.1996『しおやの仏教美術』

B 5926号土坑一括埋納遺物及び5457号土坑出土銅鏡

ア 5926号土坑埋納遺物

楕円形の小土壙である5926号土壙（K10-17G）から、次の遺物が一括出土した。

1 松樹双雀波濤文鏡（2203） 径8.7センチ 厚さ0.8センチ

残存状態の良好な銅鏡。縁は明瞭な直角高縁（幅0.2センチ）で、背文は断面三角形の圏線により、内外区に別れる。内区の主文は、亀鈕の周りに双雀・松樹・波濤を肉厚に配している。鈕・各文様とも鑄上りの状態は良好で、細部まで表現されている。外区は、珠点群を5箇所以上配した断面方形の圏線が中央にあり、その両側に地文の櫛歯文が施文されている。右下側部分は鑄上りが悪く、圏線もかすれている。

内外区を分割して内区に双鳥・樹木・波濤を描き、外区に漢式鏡風の幾何学文を配する施文法は、法隆寺蔵元徳3（1331）年銘蓬萊鏡に始まり、鈕が亀鈕になるのは香取神社蔵延文5（1360）年銘梅樹双雀鏡からとされる。そして法隆寺蔵応永20（1413）年銘松樹双雀鏡になると、すでに文様全体が様式化して退潮するとされる。そのような流れを見ると、本鏡は香取神社鏡の様相に近いと、14世紀中葉から後半の製作と考えられる。

2 古瀬戸灰釉梅瓶（1397） 高さ25.5センチ 底径9.0センチ

口縁一部を欠くが、それ以外は完存。口縁部と頸部は突帯をもって区分され、口縁部は頸部より小さい。体部は無で肩の肩部に最大径があり、底部は平底。肩部の上下にそれぞれ2から4回回転された3条の画花線がある。口縁部を除いて全面に淡緑褐色の灰釉が掛けられ、一部窯変している。全体に細かい貫入が見られる。胎土には石が混入されており、少なくとも径1センチのものが一個器表に現れている。

全体の形状は、14世紀と考えられている城狭間窯（瀬戸市）出土の灰釉画花文梅瓶（高さ26.2センチ底径9.6センチ）に似ている。一方、韓国新安沖沈没船引き揚げ品内の灰釉牡丹文画花梅瓶（高さ26.0センチ底径9.9センチ）にも形態的な類似が認められる。そのため、この梅瓶は、14世紀前半のものとする事ができる。

3 元符通宝（2085） 径2.4センチ

行書で時計回りに銭名が記される。初鑄1098年の北宋銭である。本遺跡での出土銭の中では他にこの元符通宝は認められない。

イ 出土状態の意味

元符通宝は、古瀬戸梅瓶内より出土している。また銅鏡の残存状態が良好なことを見ると、これらの遺物はこの土壙に埋納されたと考えて良い。

鏡の埋納は、経塚になされる場合が多い。経塚からの銅鏡の出土は、福井県敦賀市深山寺経塚などで見られる。しかし、本土壙の場合、梅瓶を経容器とするには、器形的に難しい。また梅瓶内部には、経の入っていた痕跡は乏しい。

銅鏡を内部に入れ、また銅鏡をいっしょに埋めた状態を考えると、この梅瓶の内部には火葬骨か灰のような、かなり精神的な価値の大きいものが入れられていたと想定するのが妥当である。

ウ 5457号土坑出土鏡

また10mほどしか離れていない不整形の5457号土壙（K10-37G）からは、亀甲地菊花双雀鏡（2204 径8.4センチ 厚さ0.5センチ）が出土している。

残存状態は悪く、全体に歪みが見られ、錆化も多い。縁は内傾中縁（幅0.1センチ）で、鈕は花芯型。断面半円形の低い圏線がめぐる。内区上側に双雀が、右下には菊花があり、その間を亀甲地が埋める。亀甲内に

第II章 遺 跡

も菊花状のものが一部見られるが、明瞭ではない。外区は錆化が著しいため文様は判然としないが、少なくとも双雀の外側には菊花が認められる。

外区上側に4.2センチの間隔で2孔が開けられている。これは、孔周囲の鏡面側に窪みが見られ、両孔を結ぶ線と鈕の孔の線が平行でないため、使用時の穿孔と考えられる。鏡面側が錆化した布が多く付着していることもあり、線刻などの存在は不明である。少なくとも懸けて使用されたことは間違いない。そして布に包まれた状態で廃棄されている。

本鏡の文様に一致する他例は管見では不明だが、諏訪大社蔵文永10（1273）年銘花芯型鈕菊双雀鏡と個人蔵嘉暦3（1328）年銘亀鈕亀甲地双雀鏡との関連が考えられ、13世紀後半から14世紀前半のものとしたい。

エ 小 結

両土壙の距離的な近さと、5457号土壙鏡が神鏡的な使い方をされていたことを見ると、この周辺に埋納・廃棄前に鏡を安置していた建物があった可能性が高い。その場合、5926号土壙の一括埋納については、火葬骨を中心としたものだったとしても、単に一般的な墓ではなく、鏡安置建物と深いつながりのある埋葬と考えた方が妥当である。

【参考文献】

- 広瀬都巽.1974『和鏡の研究』角川書店
福井県立博物館.1986『古鏡の美—出土鏡を中心に—』

C 銭 貨

本遺跡では、総数164枚の銅銭が出土している。銭種別の内訳は次の通りである。（ ）内は模倣銭の可能性のある枚数。

中国銭

唐銭	8	開元通宝	8				
北宋銭	88(16)	宋通元宝	1	淳化元宝	1	至道元宝	2
		咸平元宝	2	景德元宝	3	祥符元宝	6(1)
		祥符通宝	2(1)	天禧通宝	1	天聖元宝	3
		皇宋通宝	7(1)	嘉祐元宝	1(1)	嘉祐通宝	2
		治平元宝	2	熙寧元宝	15(3)	元豊通宝	7(2)
		元祐通宝	13(3)	紹聖元宝	7(3)	元符通宝	1
		聖宋通宝	1	聖宋元宝	5	大觀通宝	3
		政和通宝	2(1)				
南宋銭	1	建炎通宝	1				
明銭	20(10)	洪武通宝	7(6)	永楽通宝	13(4)		
韓国銭	1	朝鮮通宝	1				
日本銭	24	古寛永通宝	13	新寛永通宝	9		
		文久永宝	1	一銭	1		
不明	22						

以上のように全体の半数ほどが北宋銭であり、銭種不明を除くとさらに割合は高い。他遺跡とも共通することだが、特に熙寧元宝・元豊通宝・元祐通宝・紹聖元宝だけで42枚に達しており、最も量が多い。またこ

これらの銭種には、模倣銭と思われるものの混在が目立つ。

次に複数出土した場合の遺構ごとの組み合わせは、次の通りである。

銭種	組み合わせ	溝	土壌
開元通宝	+北宋		3
	+南宋+洪武		1
北宋銭	単独		5
	+洪武		2
	+永楽		5
	+洪武+永楽		1
	+洪武+永楽+朝鮮		1
	+永楽+古寛永+新寛永	1	
洪武通宝	+永楽		1
永楽通宝	単独		2
	+古寛永	1	
	+新寛永		1
古寛永通宝	単独		1
	+新寛永		1

以上のように同一時代埋納あるいは遺棄の可能性の高い土壌の場合、最も多い組み合わせは北宋銭単独と北宋銭+永楽通宝である。続いて開元通宝+北宋銭のセットがある。明銭をまとめた場合、北宋銭+明銭が9例となり最大の組み合わせになる。そして北宋銭単独と北宋銭+開元通宝が8例となってこれに続く。

上記のように単純な枚数では、北宋銭が圧倒的に多いが、その次には新古寛永通宝と明銭がほぼ同数で、その半分以下が開元通宝である。にもかかわらず、北宋銭+寛永通宝の組み合わせは土壌では見られない。明銭+寛永通宝も土壌では1例しかない。寛永通宝のみの複数出土がかなり少ないことになる。

これらを考えると、複数出土の場合は、明銭輸入前後頃即ち13~15世紀がピークだと見ることができる。遺構ごとの出土数分布は、次の通りである。

枚数	1	2	3	4	5	6	7~10	11~20	21以上
溝	2	1						1	
土壌	12	11	5	2	1	2	1		2

以上のように単独の出土が最も多く、土壌の場合、3枚以下が28例と8割近くになる。その中で30枚出土したのが3553号土壌、22枚出土したのが4582号土壌である。前者は不明の8枚を除いて全て北宋銭である。後者も不明の4枚と開元通宝2枚を除くと北宋銭ばかりである。この人骨を伴わない二者は例外的な出土状態と考えることができ、時期的には古い段階のものだろう。

D その他金属器など

ア 銅製伏錠 (2206)

北側方形堀区画内側のL 9-45Gで出土した。小型の浅鉢型のものを上下逆にして3脚(1脚は欠損)を付けた器形(最大径8.9センチ高さ3.5センチ)。

上面中央には打面として円形(直径3.7センチ)の僅かな突出面があり、側面裾部は内稜をもって大きく外に広がる。外面のみは研磨され、脚は細い。

第II章 遺 跡

吊り下げて使われる鉦鼓に3脚を付けて置いて使用されるようになったものと言われる。一般には浄土宗の梵音具で、鎌倉中期以降に成立したとされる。

イ 鉛銃弾 (2205)

2335号土壙(L9-36G)から出土し、ここでは成人の頭蓋骨が共伴している。やや立方体に近い球形(径1.2×1.1センチ重量9.7グラム)で、歪みなどはない。未使用の状態のようにも見えるが、出土状態を考えると銃撃された遺体中に入っていた可能性が高い。

ウ キセル・ガラス瓶

キセルは、いずれも銅製で雁首1点(2209)、吸口3点(2207, 8, 10)が出土している。雁首は19世紀前半のもので、長い吸口(2208)も同時期と思われる。他の2点の吸口は時期不明。2207は、不整形の770号土壙出土で不明銅銭(2157)のみが伴出、2208は大量の遺物が廃棄された3009号土壙で出土し、2209は不整形の3080号土壙から新寛永通宝(2136)と模鑄銭の永(楽通)宝(2110)が共伴し、2210は19世紀後半を最新の遺物とする短冊形の3097号土壙で検出した。

この他に19世紀前半と推定される肥前の色絵キセル吸口(1317)がある。

明治頃の製作と考えられるガラス器が4点(2211~14 非実測)出土している。透明ガラスでは3009号土壙出土の薬瓶(2211)と5162号土壙出土の皿(2213)があり、青色ガラスでは3009号土壙出土の盃(2212)と3009号土壙近くで出た薬瓶(2214)がある。なお、5162号土壙での伴出した陶磁器類は、19世紀前半を最新遺物としている。

E 渥美蓮弁文壺 (1398)

56号溝より出土した。全体に半分以上の破片が残っており、図のような復元が可能になった(高38.7センチ胴径34.0センチ)。

地肌は暗褐色に硬く焼き締まり、強く張った肩から上は、白灰色の自然釉が濃く垂れている。頸部から肩部まで3条の沈線が水平に走り、2段に区画する。区画内にはそれぞれ上下より2条の沈線で草花状の簡素な蓮弁文が描かれている。上段5箇所、下段6箇所だが、上下の関係は揃っていない。

器形と文様は、加治坪沢10号窯・鳴森窯(愛知県田原町)出土のものに類似している。同窯系統とされる12世紀前半の那智経塚出土例(高42.2センチ)に比べると、口縁が半分以下に縮まり、頸部の突帯が消滅している。また施文方法は似るが、文様帯は上位に寄っている。本例と全く同じ施文例はまだ生産地では確認されていない(小野田勝一氏ご教示)。

消費地を見ると、関東で渥美の文様が彫られた壺は、国宝になっている川崎出土の秋草文壺以外は、多くは知られていない。

日常具として東日本の太平洋側で広く使われた常滑に比べ、渥美の流通はかなり限られている。特に壺の場合、各地の経塚以外の場所では出てくる例は少ない。経典を入れて地中に埋納する容器として特注されたものが、大部分と思われる。平泉や那智・伊勢の経塚がその代表であり、また「三河守顕長」など注文者の名を製作段階で彫ったものも見られる。

本例の場合、堀に廃棄されていたもので、経塚の経理納容器とは考えにくい。何らかの容器として埋納しない形で伝世されていたものが、他の日常具と共に廃棄されたと考えられる。

F 釣り鐘型瓦灯 (1387)

箱形の5250号土坑 (L10-70G) から土師質皿類10点・瓦質焙烙と共に出土した (高24.0センチ胴径16.7センチ)。

筒型をして底がなく片側に山形の窓が開き、上には皿型突起の軸がある。窓部上段には、市松状小正方形分割文の印花がめぐり、その上に4列3行を基本とする乳突起が4箇所貼付されている。窓部の上には、3個の扇型を組み合わせた小孔が見られる。水平の突帯がまわる下位の末端は、内傾する。軟質の還元焼成で灰色を呈する。内面には煤が付着している。

本来、組で使われていたはずの受け部は、確認できなかった。

瓦灯の中で、本例とほぼ同型の釣り鐘型のものは、管見では新潟県上越市の伝至徳寺跡遺跡で見られるだけである。この遺跡は、越後守護の居館と賓客館としての寺院が共にあった場所と考えられている。15世紀後半の火災廃棄土壌で、元染付などを含む上質の中国陶磁片が大量に共伴している。

本例と伝至徳寺跡遺跡出土例は極めて類似した器形で、共に丁寧に仕上げられている。15世紀後半を下限とする時期に、畿内周辺で製作されたと考えられる。

越後守護上杉氏は、京都から管領細川氏などを良く招き、府中としての直江津には京都方面から「唐物」がたくさん持ち込まれていた。越後守護上杉氏は、上野守護を兼ねる関東管領山内上杉氏と同族で、両者は互いに何回も養子を取り合っている。

山内上杉氏は、15世紀中頃に本遺跡から6キロしか離れていない藤岡の平井城に移る。本遺跡と上越市の伝至徳寺跡から類例の少ないほとんど同じ器形の瓦灯が出土したことは、両上杉氏の交流の深さを裏付ける資料と言える。

なお、共伴した土器のうち、内面に煤痕の残る土師質土器の小皿5個は灯明皿であることは間違いない。ただ少し大きく煤痕が明瞭でない皿については、前述のように灯火具とは断定できない。もちろん底部に板痕の残る瓦質土器の焙烙が灯火具でないことは明らかであり、この土壌の出土遺物は灯火具のみを埋納したものではなく、一般的な廃棄土壌として考えた方が妥当である。須恵器甕 (1411) は上層からの出土で、他の遺物とは異なる古代のものである。

【参考文献】

小島幸雄.1995「越後府中とその周辺遺跡出土の陶磁器」『越後の出土陶磁器』日本貿易陶磁研究会
上越市立総合博物館.1994『掘り起こされた中世のまちとむらのくらし』

G 石製品瓦類概観

これまで見てきた以外に、多数の石製品と瓦類が出土している。その状況は、次の通りである (溝出土のものは紀年銘がない場合、最終埋没時期とした)。

第II章 遺 跡

		I 期	II 期	III 期	IV 期	V 期	VI 期	VII 期
信 仰 物 関 係	石 塔 類						5153土	
	宝 篋 印 塔	15溝				56溝		
	五 輪 塔					56溝		9 溝
	板 碑		56溝 23溝			(3053土)		
	墓 石							3009土
	石 仏					56溝	5153土	
	石 宮					56溝		3009土
調 度 具 関 係	石 臼					4 溝 56溝 58溝		3009土
	茶 臼	15溝			1914			
	石 鉢					56溝	30溝	3009土
	切 石						14溝	3009土
室 内 具 関 係	砥 石	15溝				10溝 56溝 3053土 2118土 3007土 5157土	30溝 14溝 3066土	9 溝 3004土 3009土 5167土 5162土
	硯					56溝 5157土	5153土	3009土 5163土 5164土
建 具 関 係	棧 瓦					4 溝 56溝 5166土 5235土		3009土 5162土 5174土
	中 世 瓦						3066土	3009土

このように見ると、石造物類の出土状況はかなり時期と遺構に偏りがあることが分かる。まず時期では、長期間使われていた溝から出土した遺物の帰属の問題があるが、IV期以前は種類が乏しい。特にIII期と特定できるものが皆無である。それに対し、V期以降の遺構からの出土種類は急激に増加している。石像物類の使用頻度と無関係とは思えない。

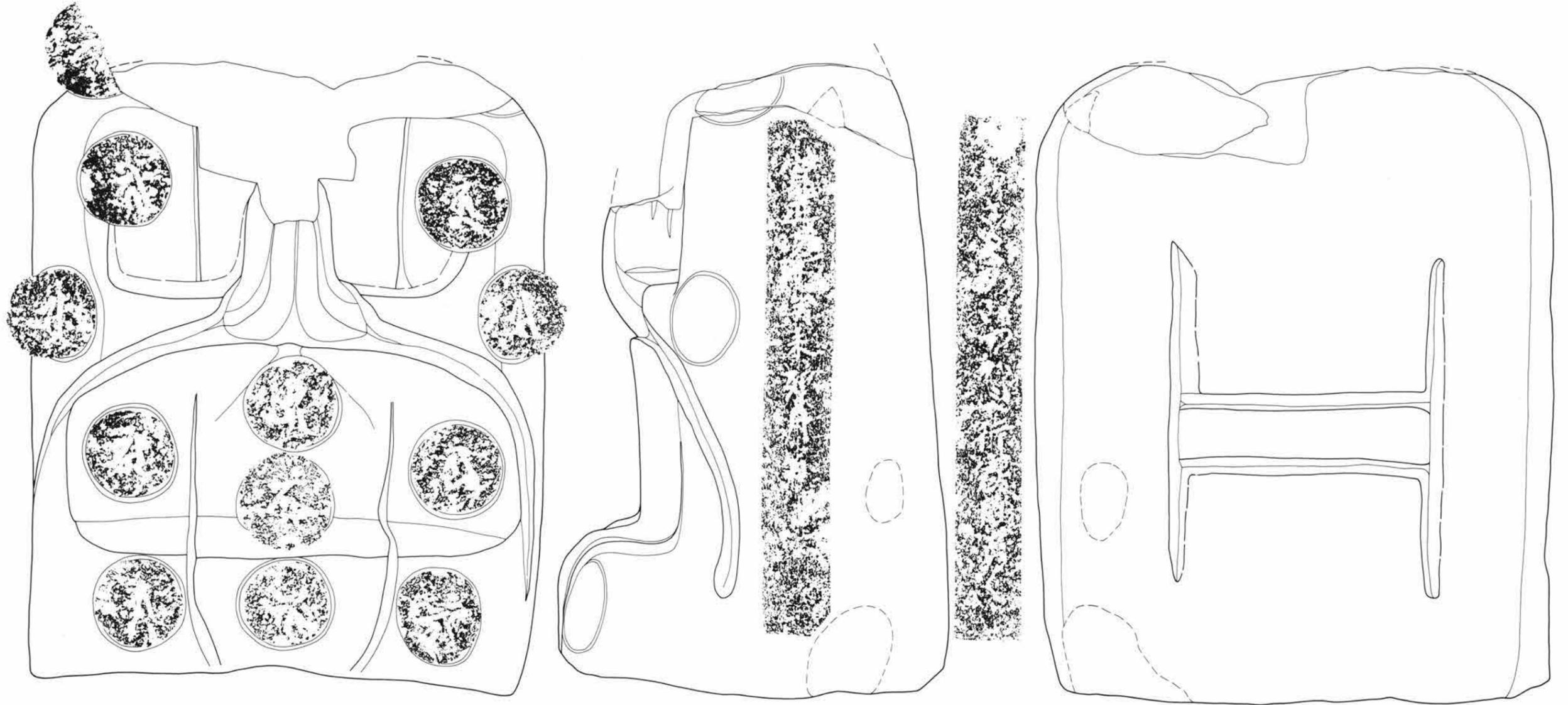
遺構別では、56号溝や3009号土壌を中心とした大型の遺構で廃棄物としての発見がほとんど全てである。基本的に使用位置を保った状態で出土したものは、ないと考えられる。

なお種類としては、石塔や石仏など信仰関係物が多いこと、茶臼・硯がやや目立つことに特徴がある。また少量ながら中世瓦の存在は、部分的に瓦葺きされた建物があったことを示している。

以上の他に時期不明の遺構から、次のような石製品類が出土している。

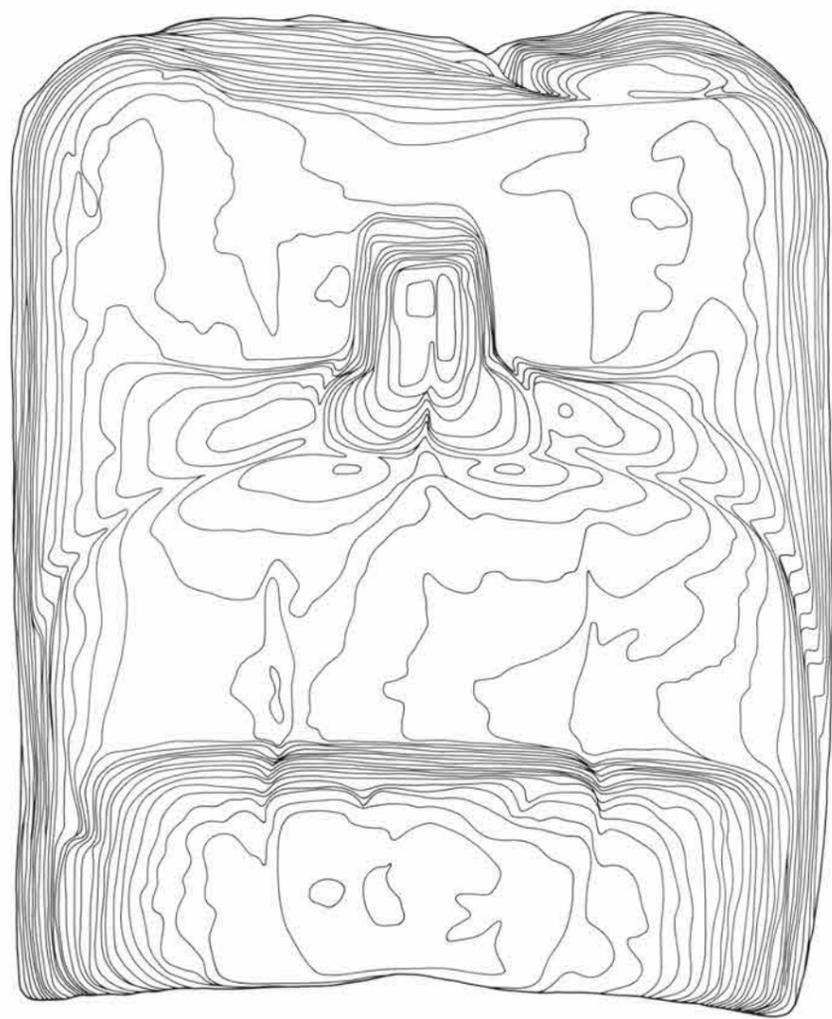
宝篋印塔 1511土

板碑 549土, 1997土, 3085土



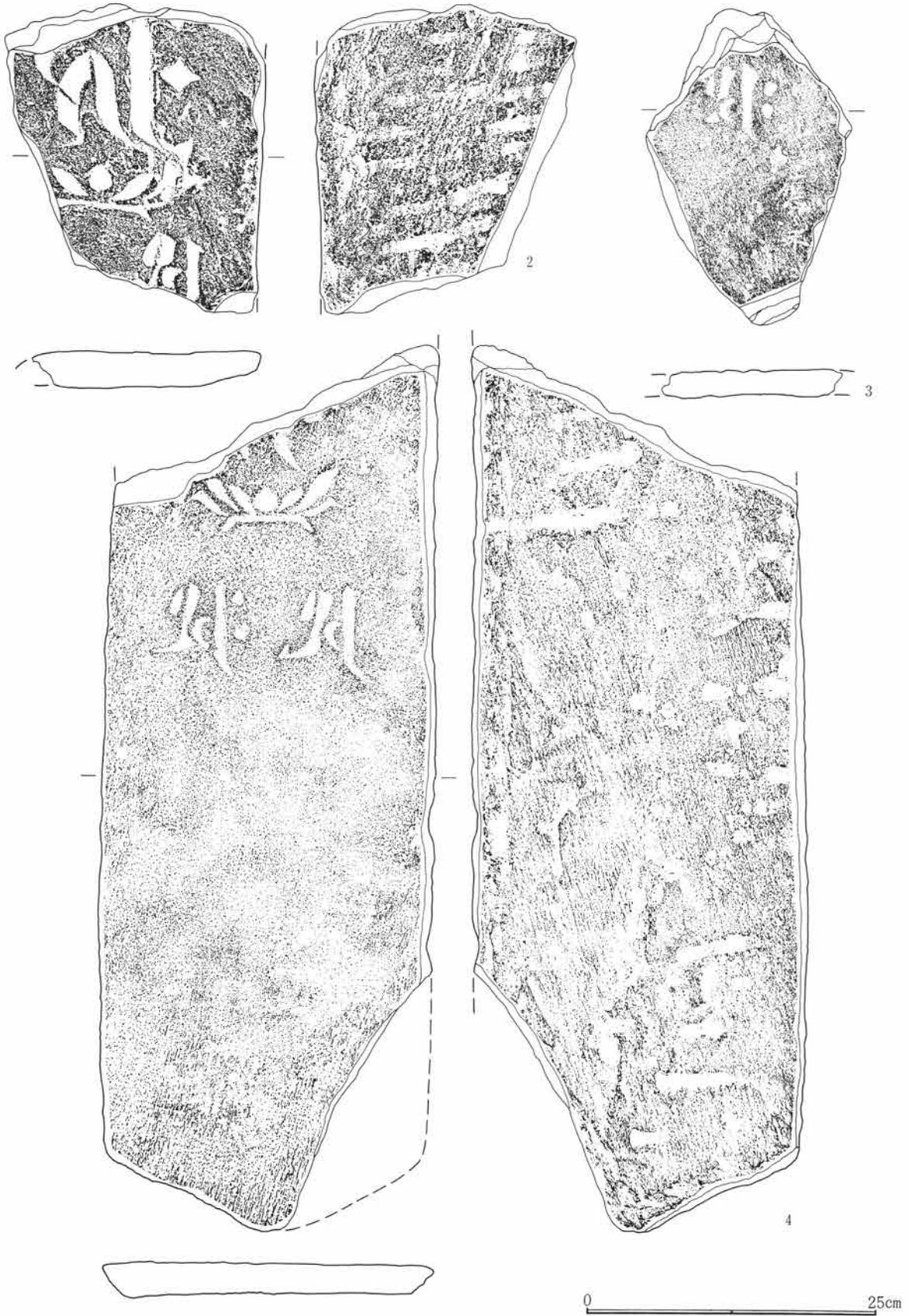
第362図 石仏実測図

0 20m

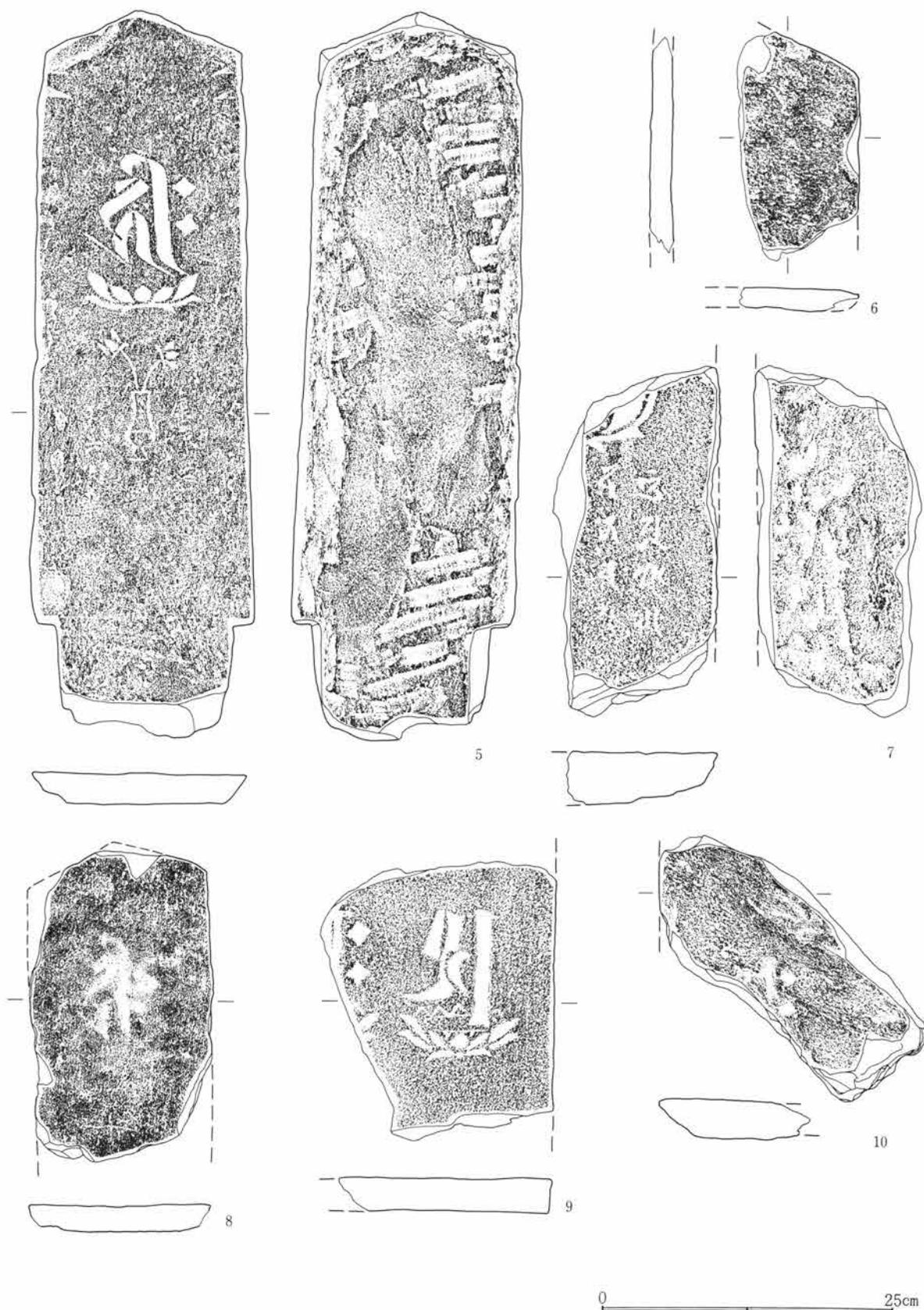


第363図 石仏コンタ図

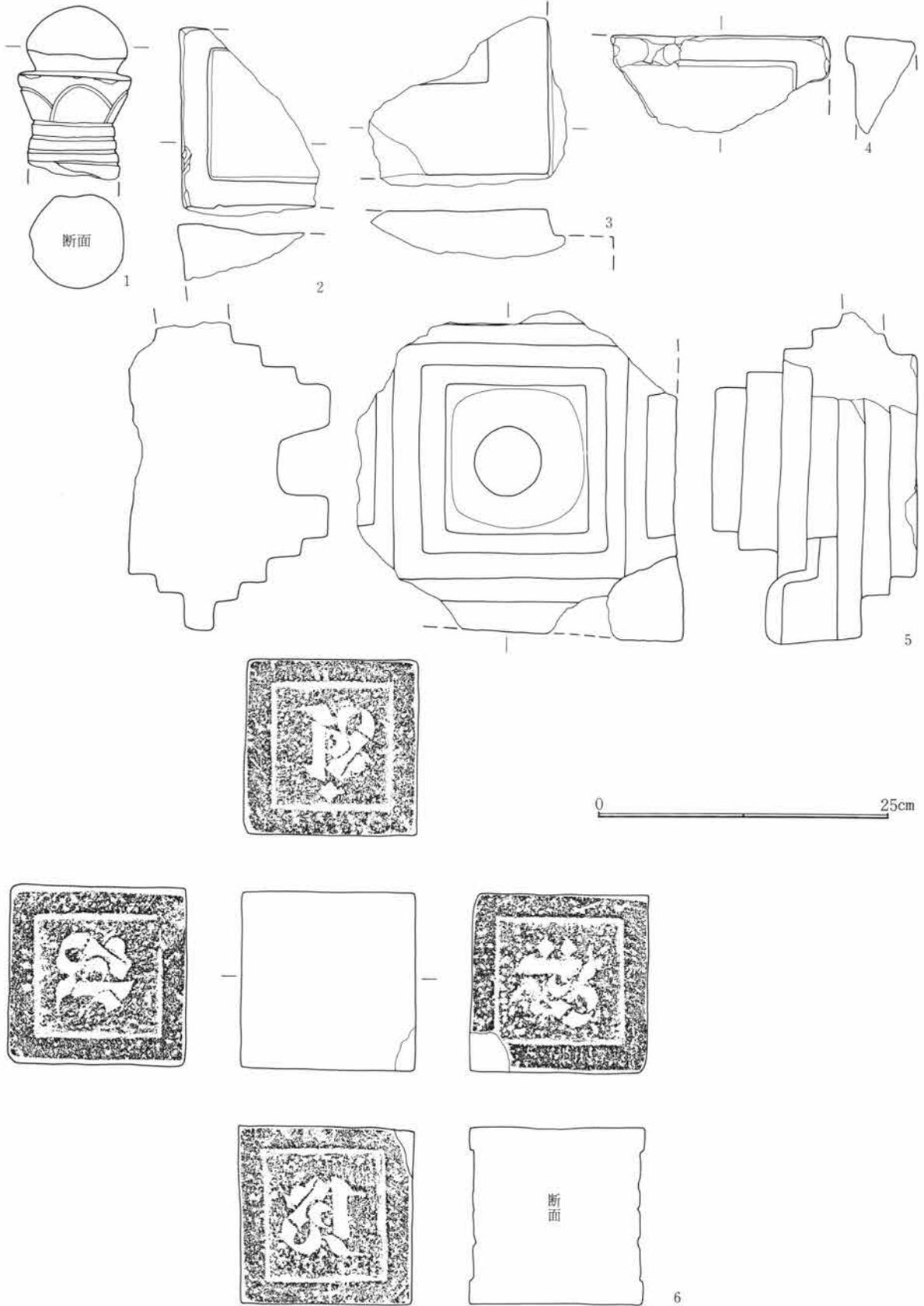




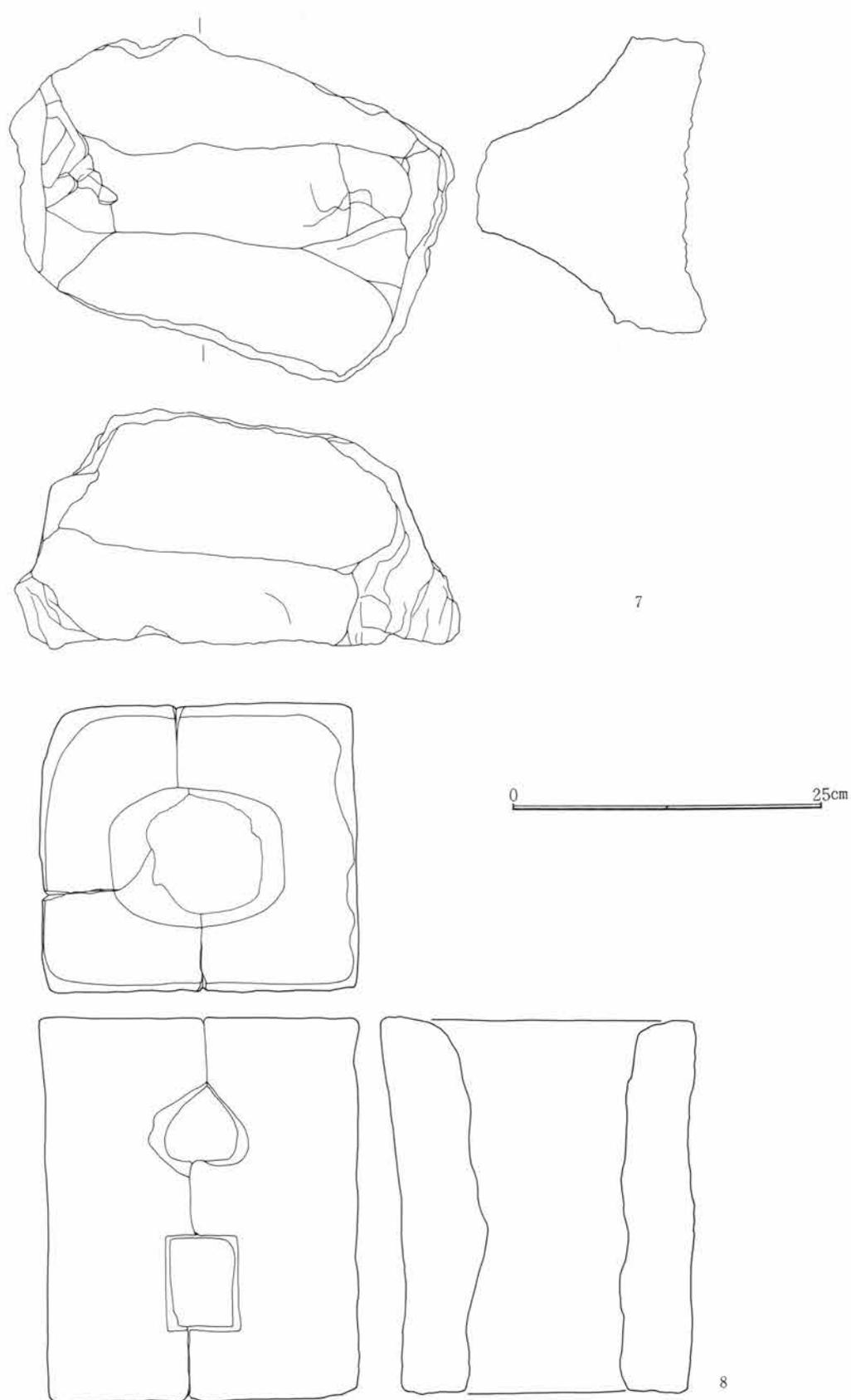
第364図 板碑実測図(1)



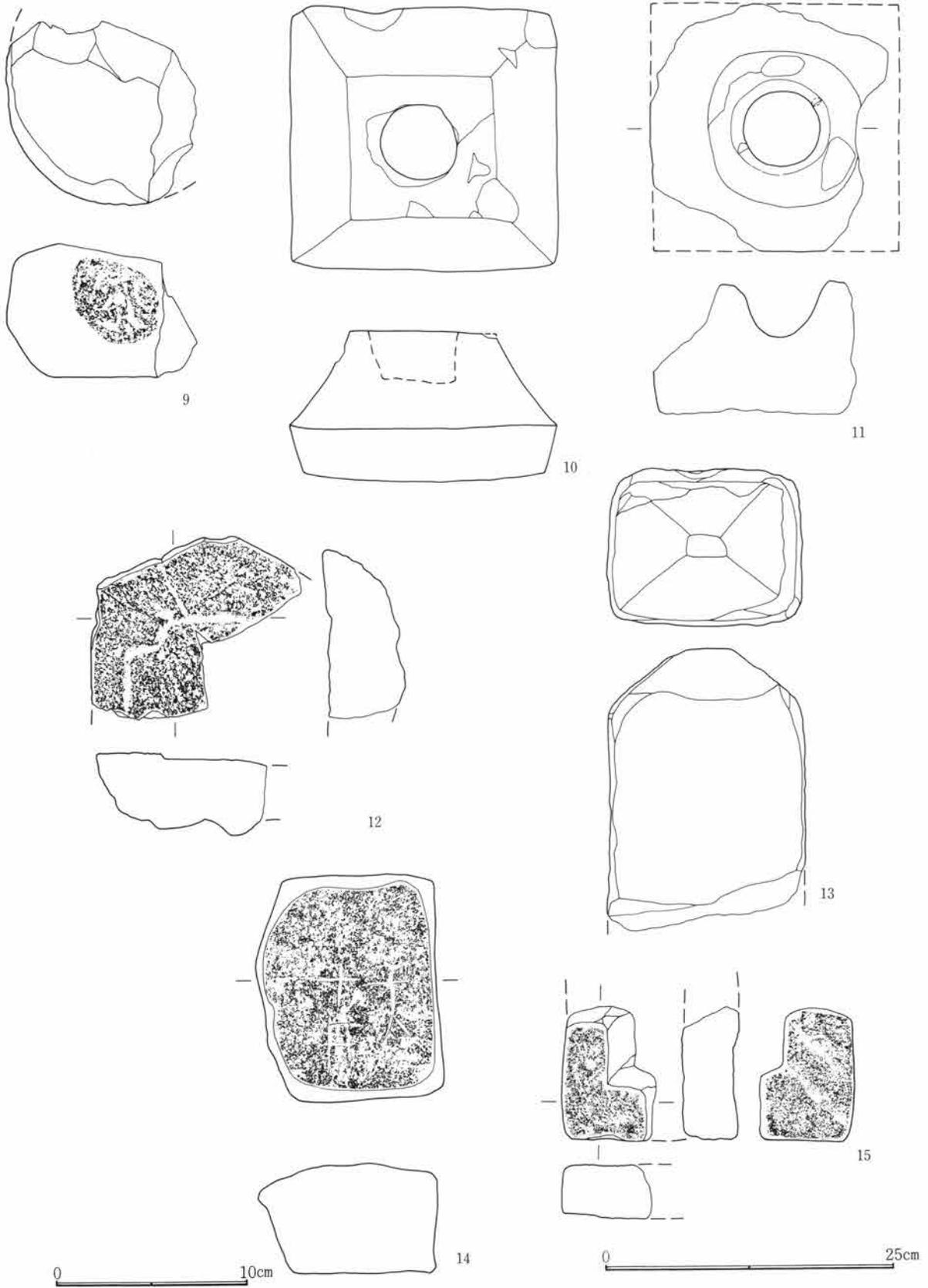
第365図 板碑実測図(2)



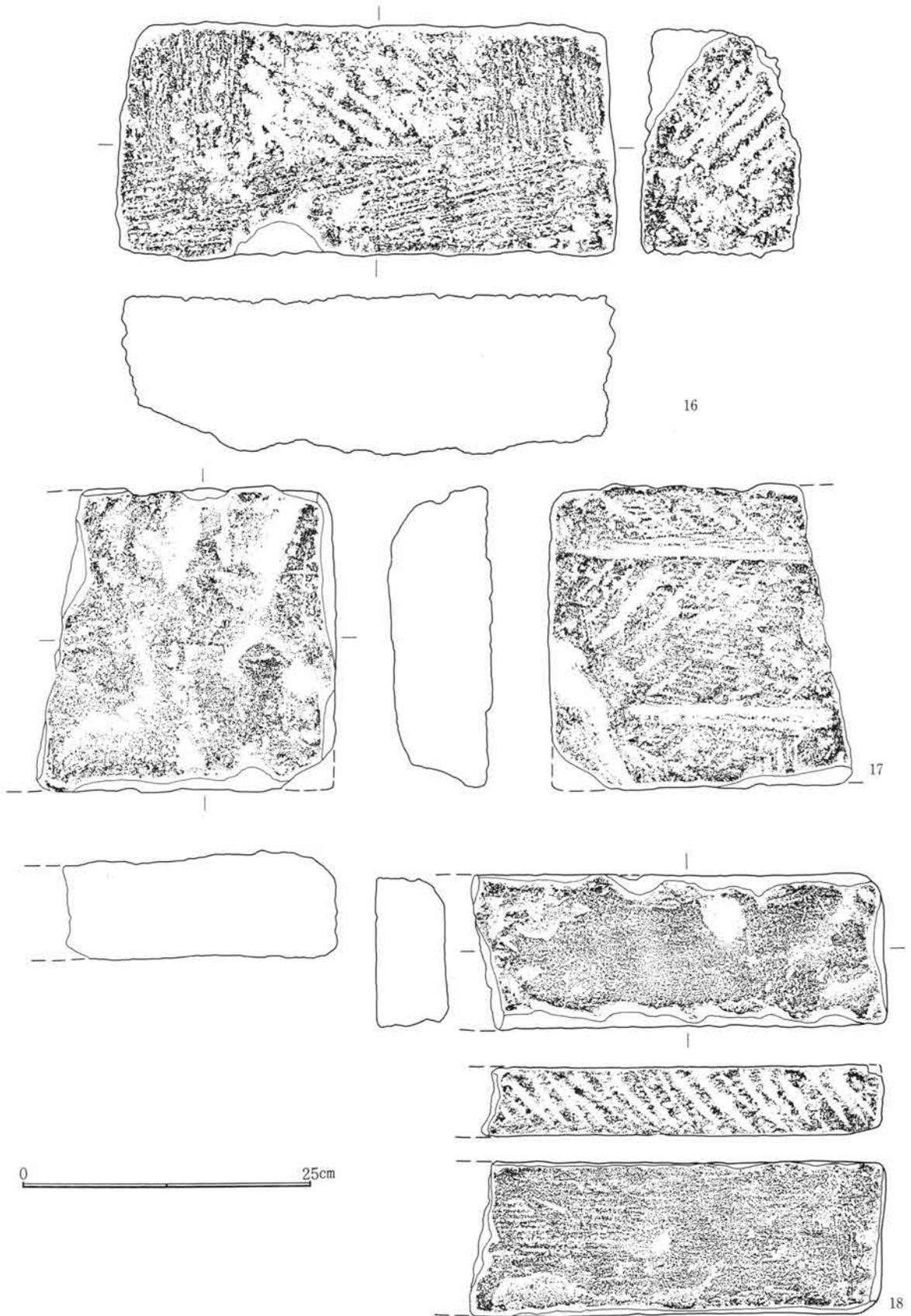
第366図 石造物実測図(1)



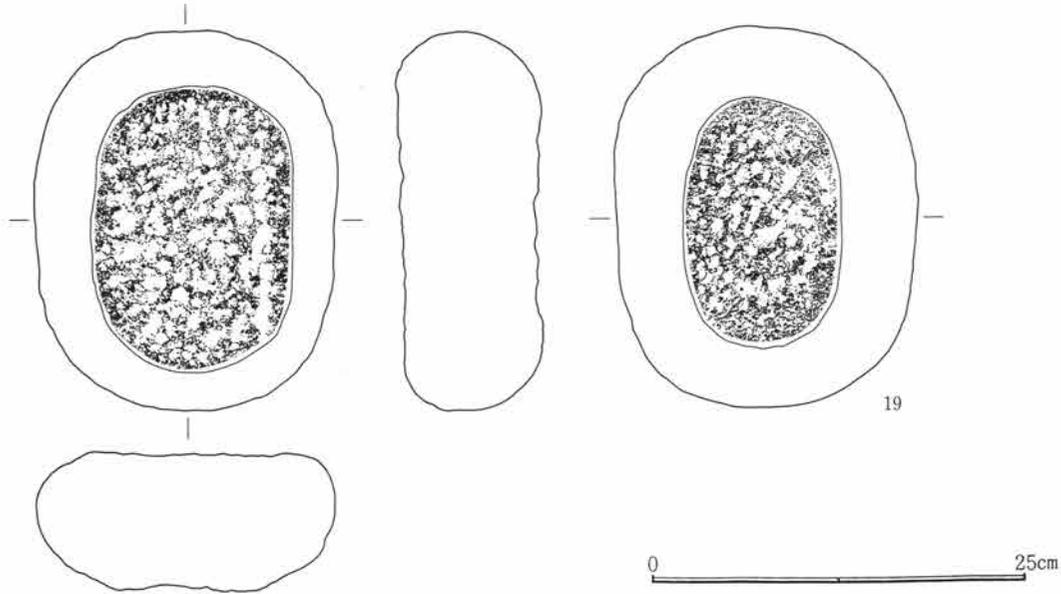
第367図 石造物実測図(2)



第368図 石造物実測図(3)



第369図 石造物実測図(4)



第370図 石造物実測図(5)

石造物

石仏 (第362・363図)

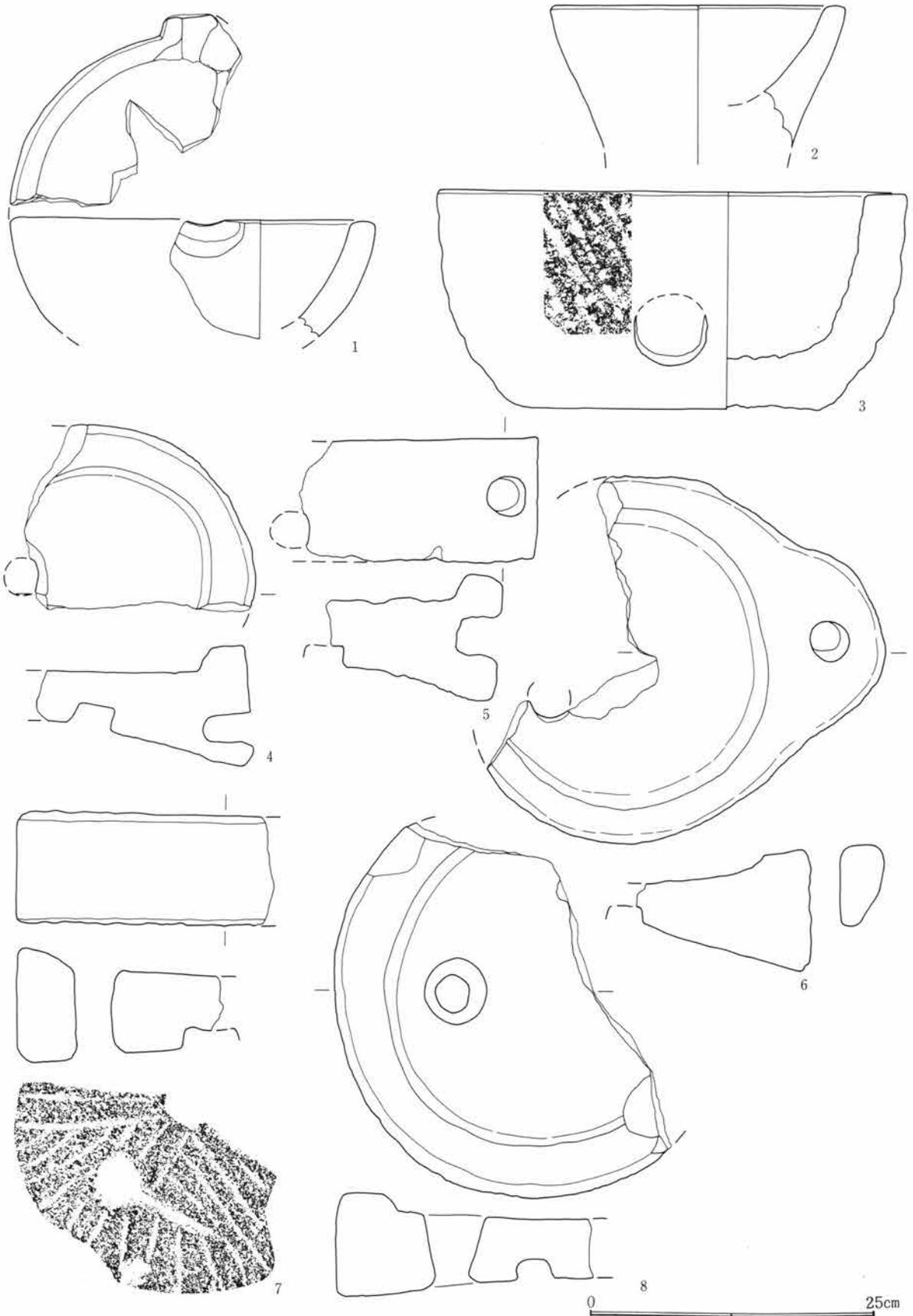
56号溝および135号土坑より出地の石仏は、角閃石安山岩（榛名山二ツ岳軽石）を石材とし、頭部は欠失、両手を胸部で合掌、肩部から脚部にかけて円に囲まれた十三仏種子を配する。左右側面に「寛正□□□未卯月日」「□ 行家□□□」と紀年銘を刻む。室町期の寛正四（1463）癸未年か。

板碑 (第364・365図)

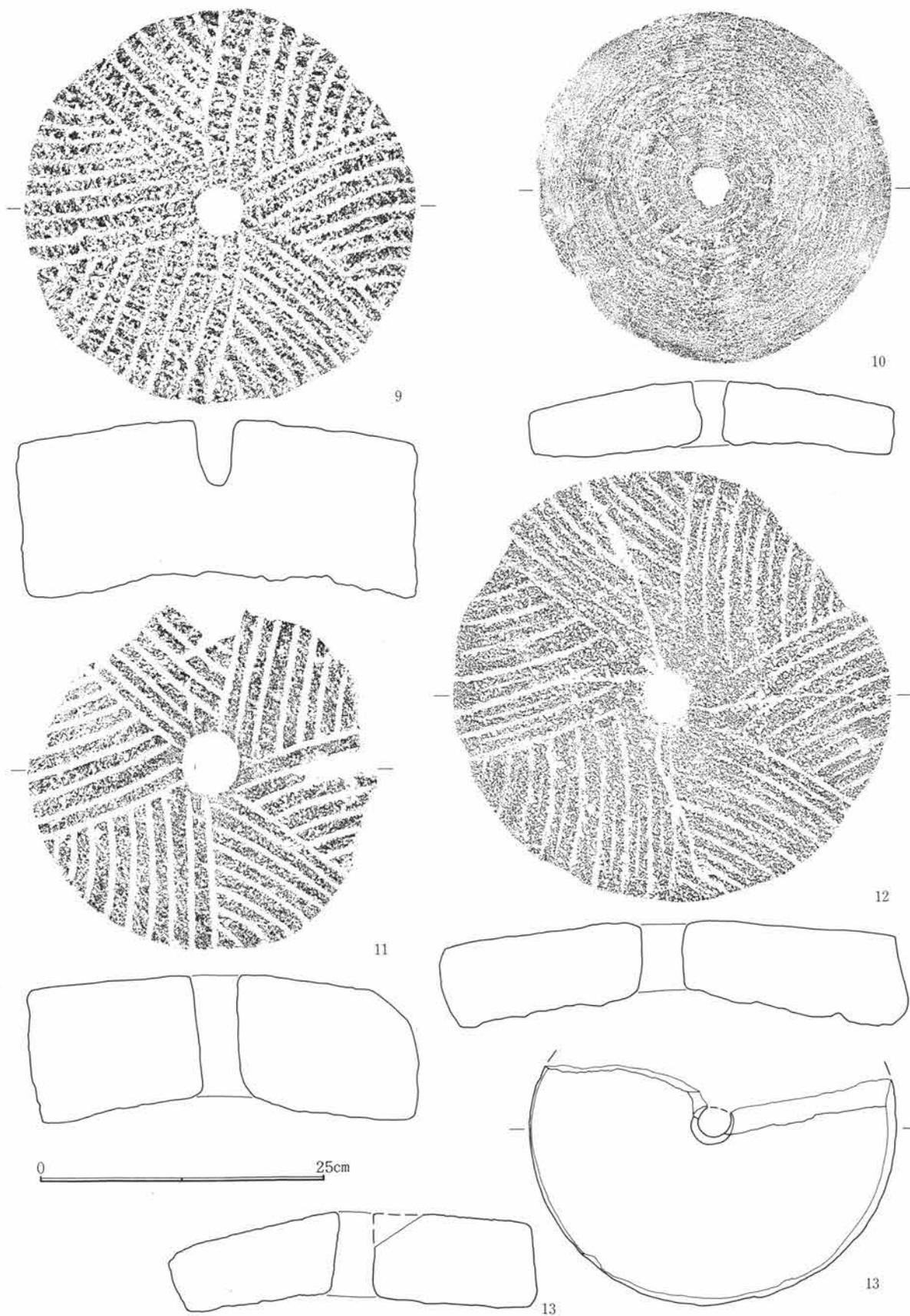
No.2は10号溝出土の阿弥陀三尊種子板碑の主尊部破片。主尊・脇侍・蓮座は共に薬研彫りで、キリークはイーがアク点の間を抜けない書体。蓮座の形態がNo.4と酷似する。裏面には横方向の工具痕を残す。No.3は56号溝出土の阿弥陀三尊種子板碑の主尊部破片。蓮座を持たない脇侍のサクのみが残る。No.4は56号溝出土の阿弥陀三尊板碑。蓮座より上を欠失する。主尊・脇侍・蓮座は薬研彫りで、脇侍には蓮座を持たない。裏面には横方向の工具痕を残す。No.5は56号溝出土の阿弥陀一尊種子板碑完形。二条線は左右に切り込みを入れるのみ、基部は台座差し込み型の突出部を持つ。主尊キリークは薬研彫りで、イーがアク点の間を抜けない書体。蓮座下の中央部に線刻の2茎の華瓶を1個有する。華瓶脇の紀年銘は磨滅のため判読不可。粗雑な阿弥陀種子のみが残る。No.9は阿弥陀三尊種子板碑の破片で、蓮座付きの薬研彫り脇侍が残る。No.10は粗雑な阿弥陀種子の一部が残る粗製板碑。

宝篋印塔 (第366図)・石殿 (第367図)・五輪塔他 (第368～370図)

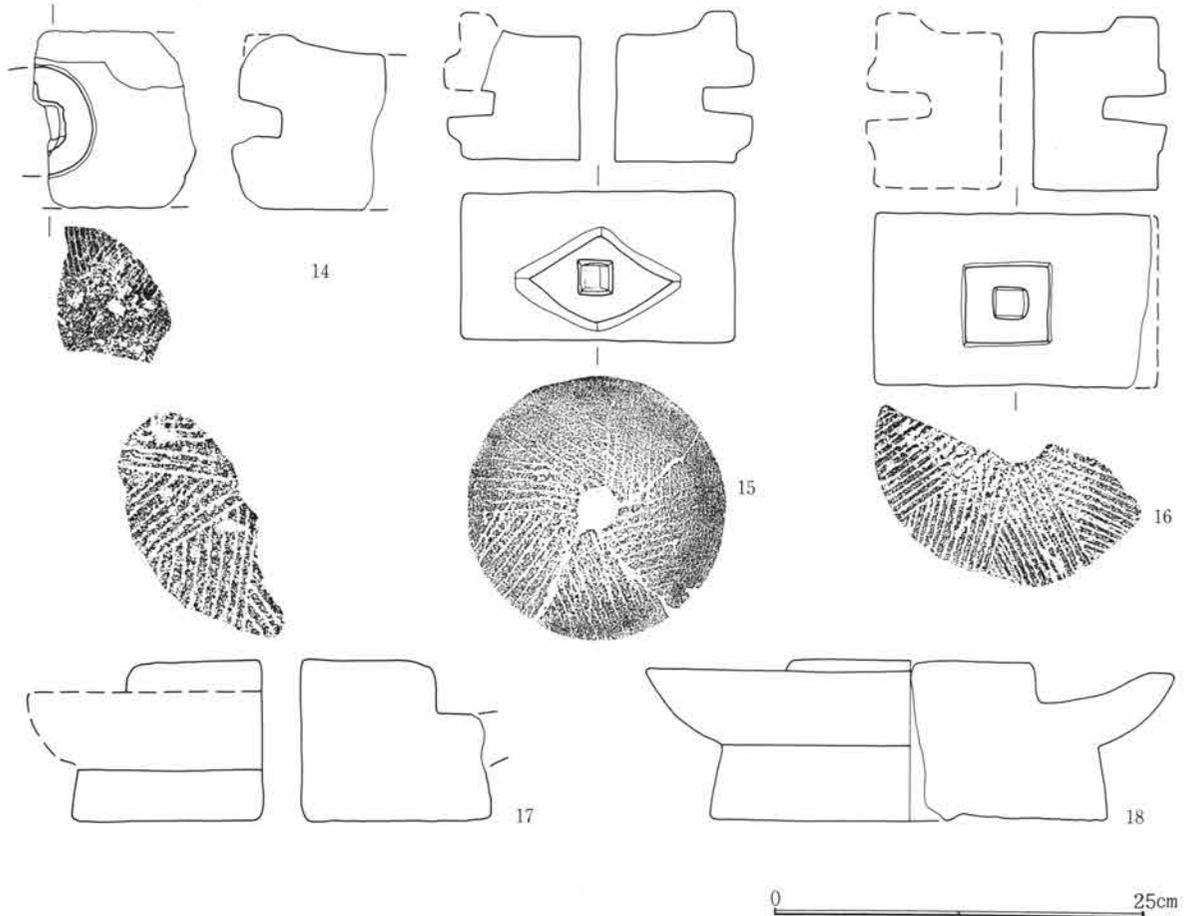
No.11は宝篋印塔もしくは宝塔の相輪部破片。宝珠・請花と九輪の一部のみ残る。No.2・3・4は共に56号溝出土の宝篋印塔笠部破片。No.15は56号溝出土の宝篋印塔笠部。隅創りを3箇所欠失する。No.16は宝篋印塔塔身部完形。四側面の額内に「我・我・我・我」の4字の薬研彫り種子を刻む。No.17・18は共に3099号土坑出土の石殿（石宮）であり、対になるものと思われる。屋根部等の装飾はなく、粗製である。No.19・20は共に榛名山二ツ岳軽石を石材とした五輪塔火輪。No.21も損傷が著しいが牛伏砂岩製五輪塔火輪。No.22は同石材の舟形墓標頂部、No.23も同石材の角柱石塔（墓標）である。



第371図 石臼類実測図(1)



第372図 石臼類実測図(2)



第373図 石臼類実測図(3)

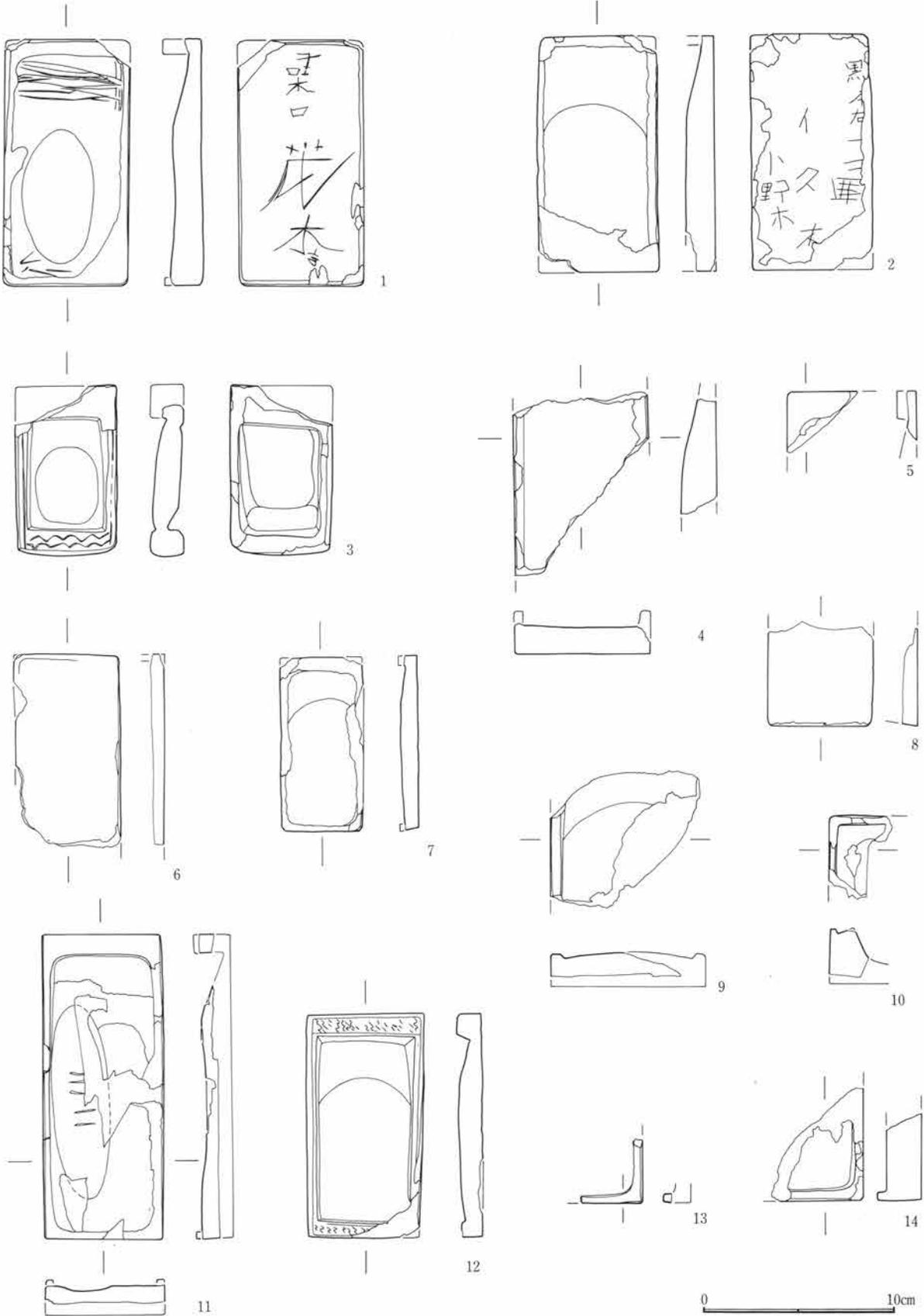
石臼・石鉢

石鉢 (第371図- 1、2、3)

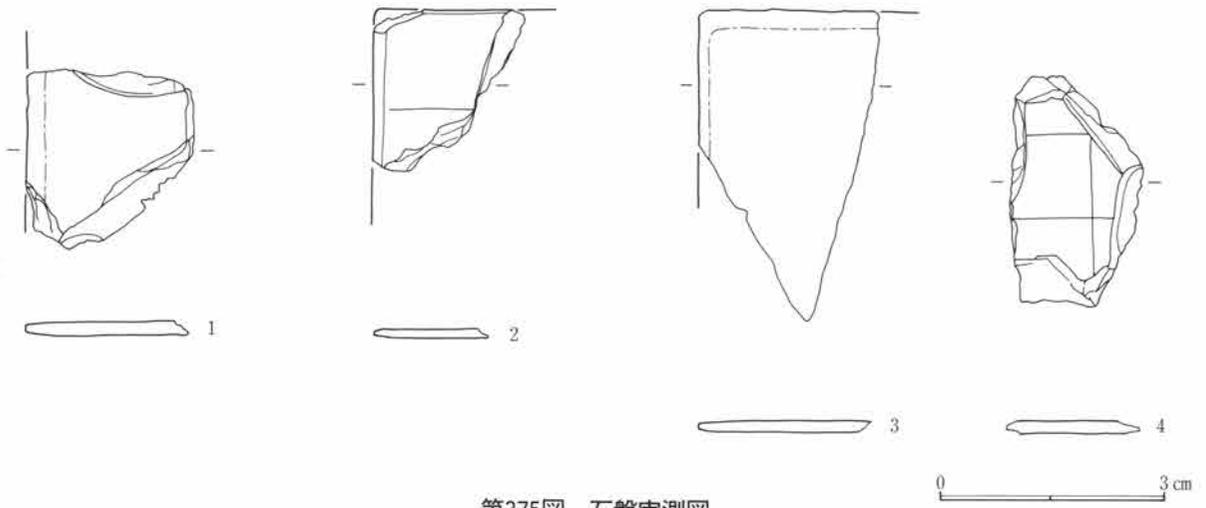
No. 1 は30号溝より出土の推定最大径31cmを測る片口をもつ石鉢の破片であり、内外面共に比較的丁寧な水研ぎ整形を施す。No. 2 は56号溝出土の推定最大径25cm程の小振りの石鉢破片であり、同じく整形は内外面共に丁寧な水研ぎを施す。No. 3 は3009号土坑出土の最大径42cm程を測る大型の石鉢で、体部側面下方に径6mm程の穴が貫通する。内外面の整形は粗雑で、外面には斜方向の成形時工具痕を明瞭に残す。

石臼 (第371図- 4～8、第372図- 9～13、第373図- 14～18)

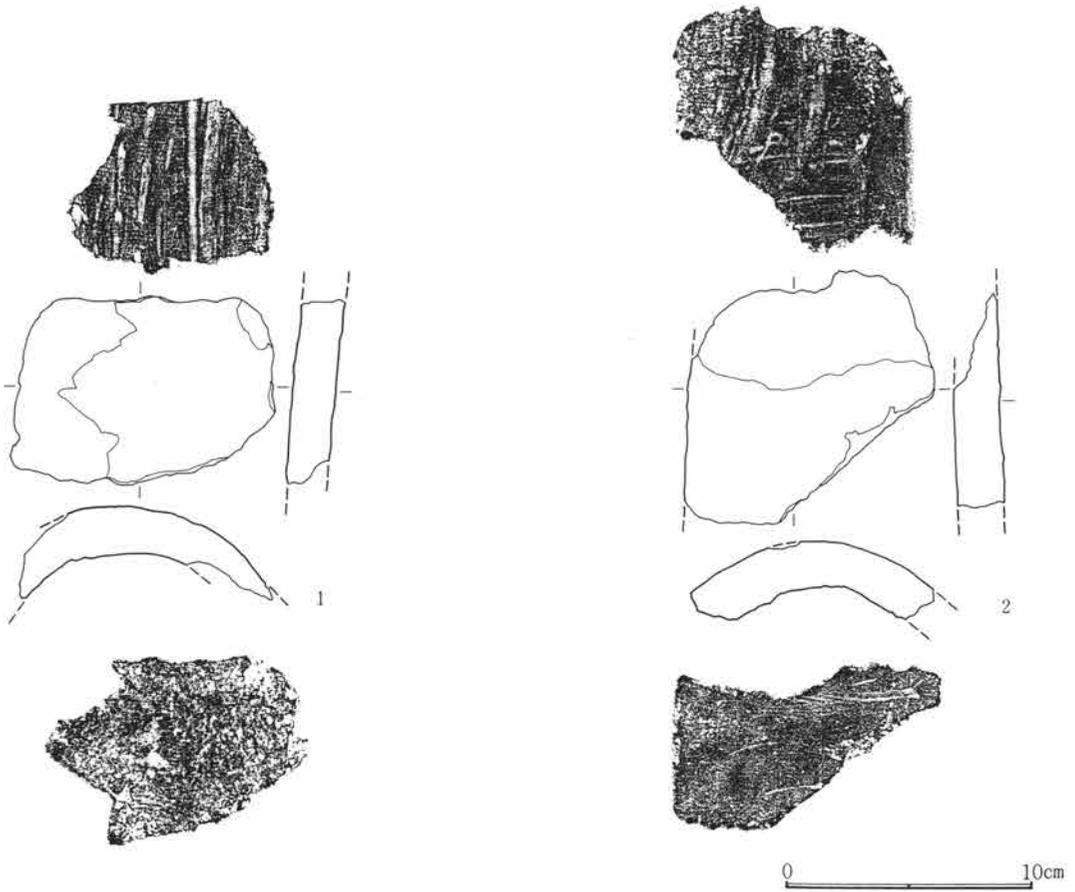
No. 4・5 は共に56号溝出土の上臼破片。下面に軸受け穴、側面に引き手穴を有する。摺り面の磨耗が著しい。No. 6 は58号溝出土の引き手を側面上部に有する武蔵形臼の上臼。4分の1程を欠失し、摺り面の磨耗は中央部が著しい。No. 7 は表採、No. 8 は3009号土坑出土の上臼破片。No. 9 は1025号土坑出土の径35mm程を測る下臼完形。軸穴は貫通せず、磨耗は少なく、目も残る。No. 10 は1153号土坑出土の下臼完形。磨耗が著しく、目も残らない。No. 11、12 は共に3009号土坑出土の下臼完形。共に石目はやや粗雑な刻みである。No. 13 は表採の下臼で、やや片減りし、2分の1程を欠失する。No. 14 は4号溝出土の茶臼上臼の破片で、側面引き手部の周囲は円形の額をもつ。No. 15 は601号土坑出土の茶臼上臼完形。成・整形は丁寧で、摺り面はやや磨耗するものの、目を残す。側面引き手穴の周囲は菱形の額をもつ。No. 16 は2000号土坑出土の茶臼上臼で、2分の1程を欠失する。側面引き手穴の周囲は方形の額をもつ。No. 17 は1914号土坑出土の茶臼下臼で、受け皿を欠失し、



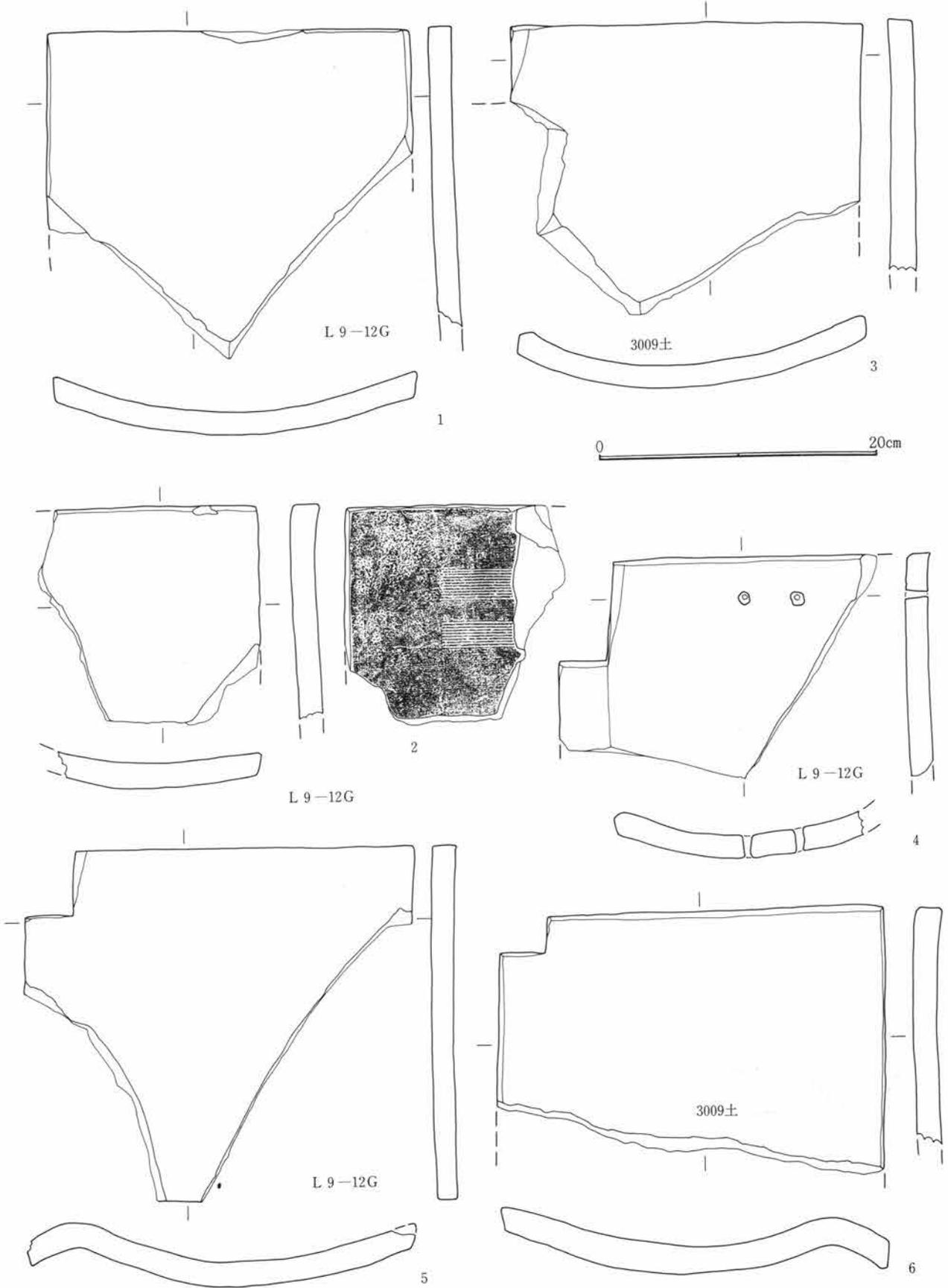
第374図 硯実測図



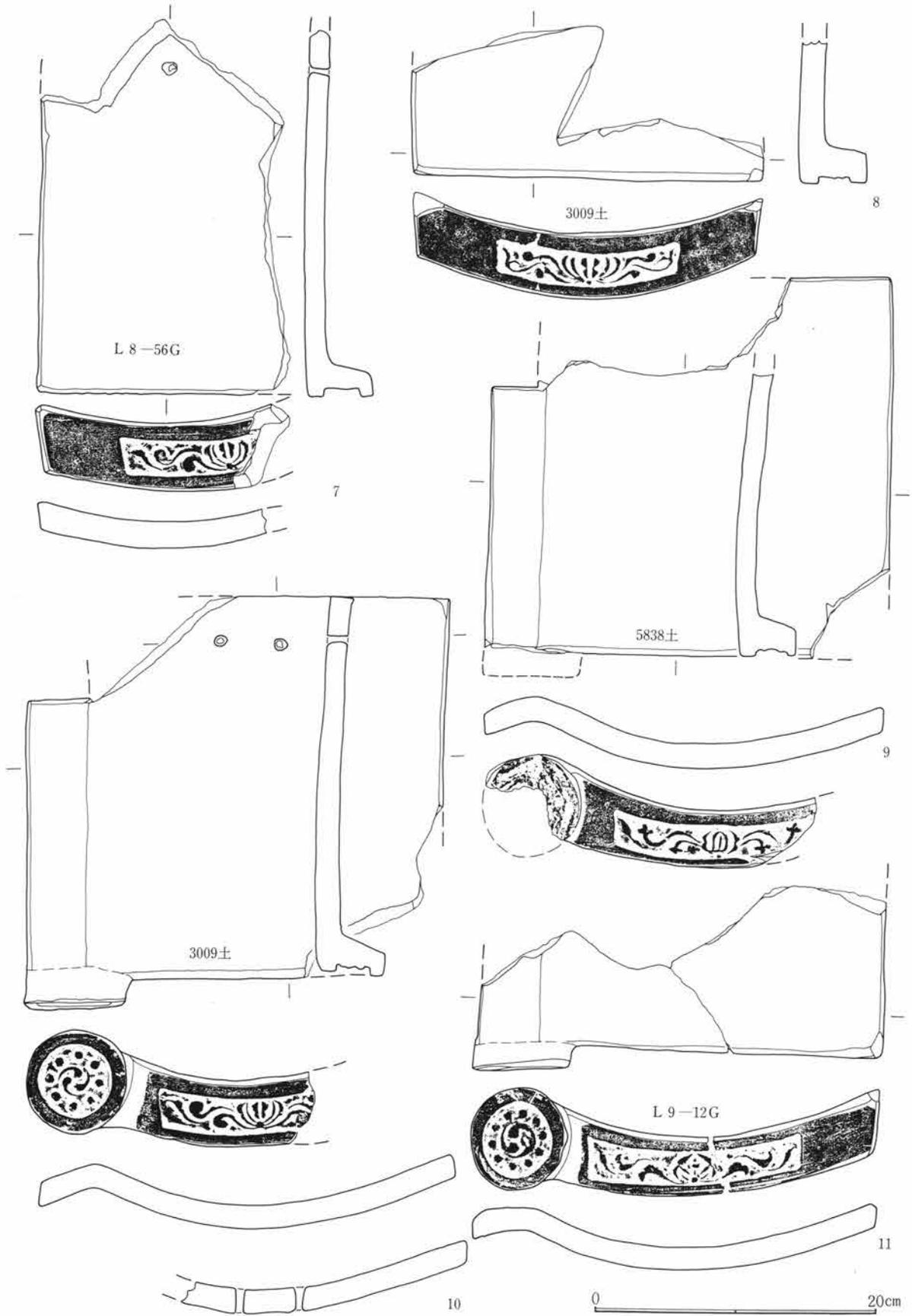
第375図 石盤実測図



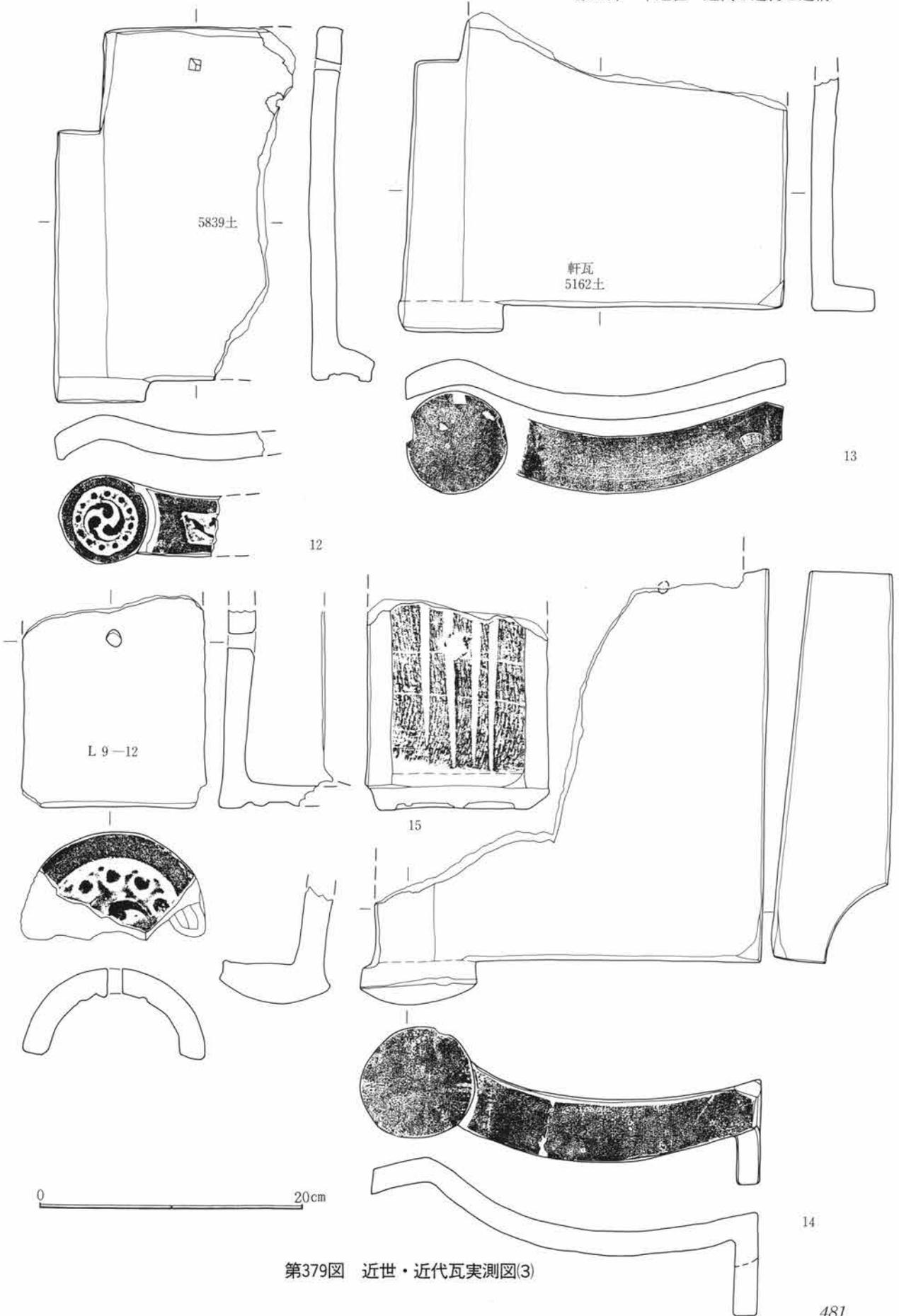
第376図 中世瓦実測図



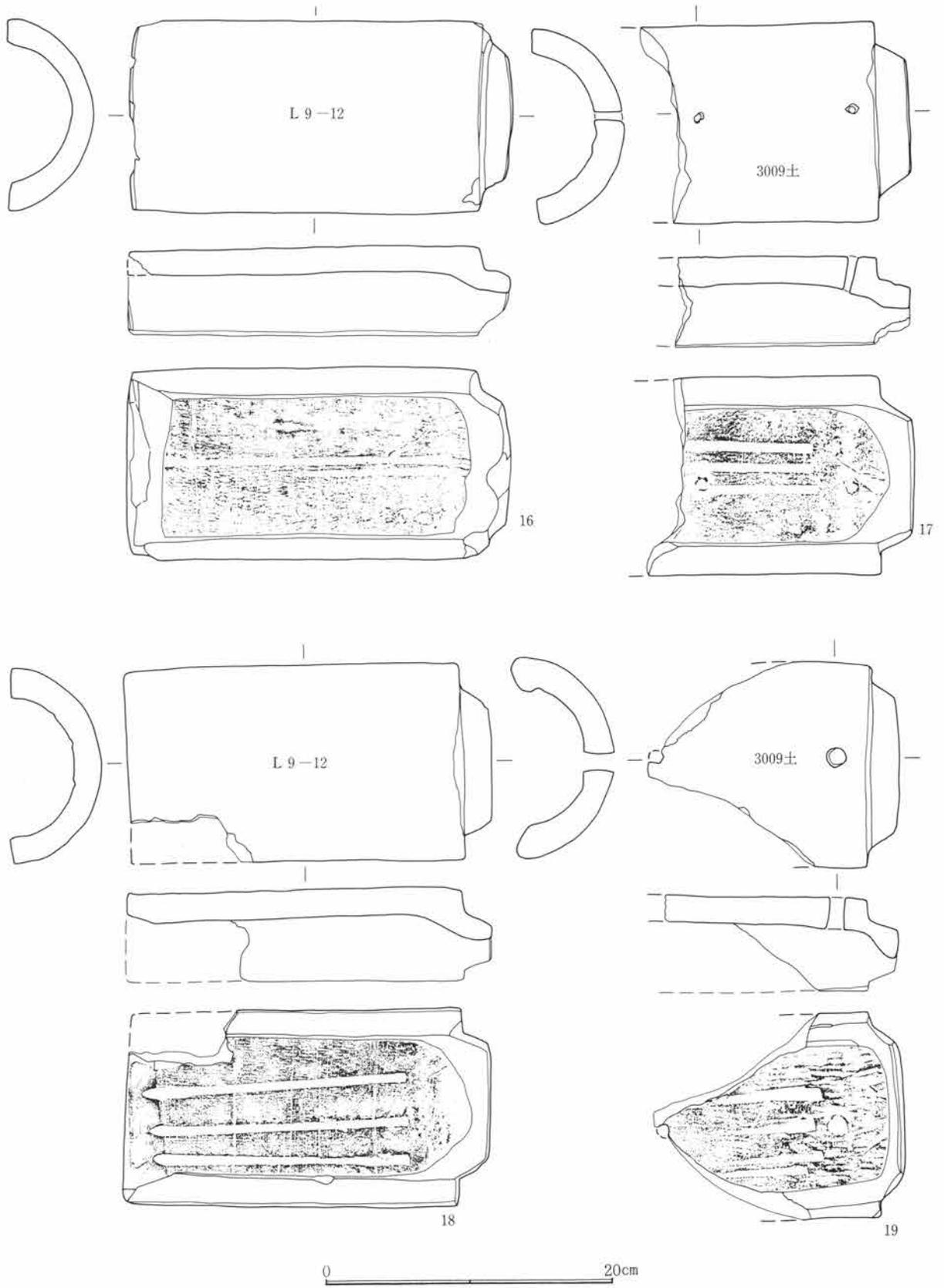
第377図 近世・近代瓦実測図(1)



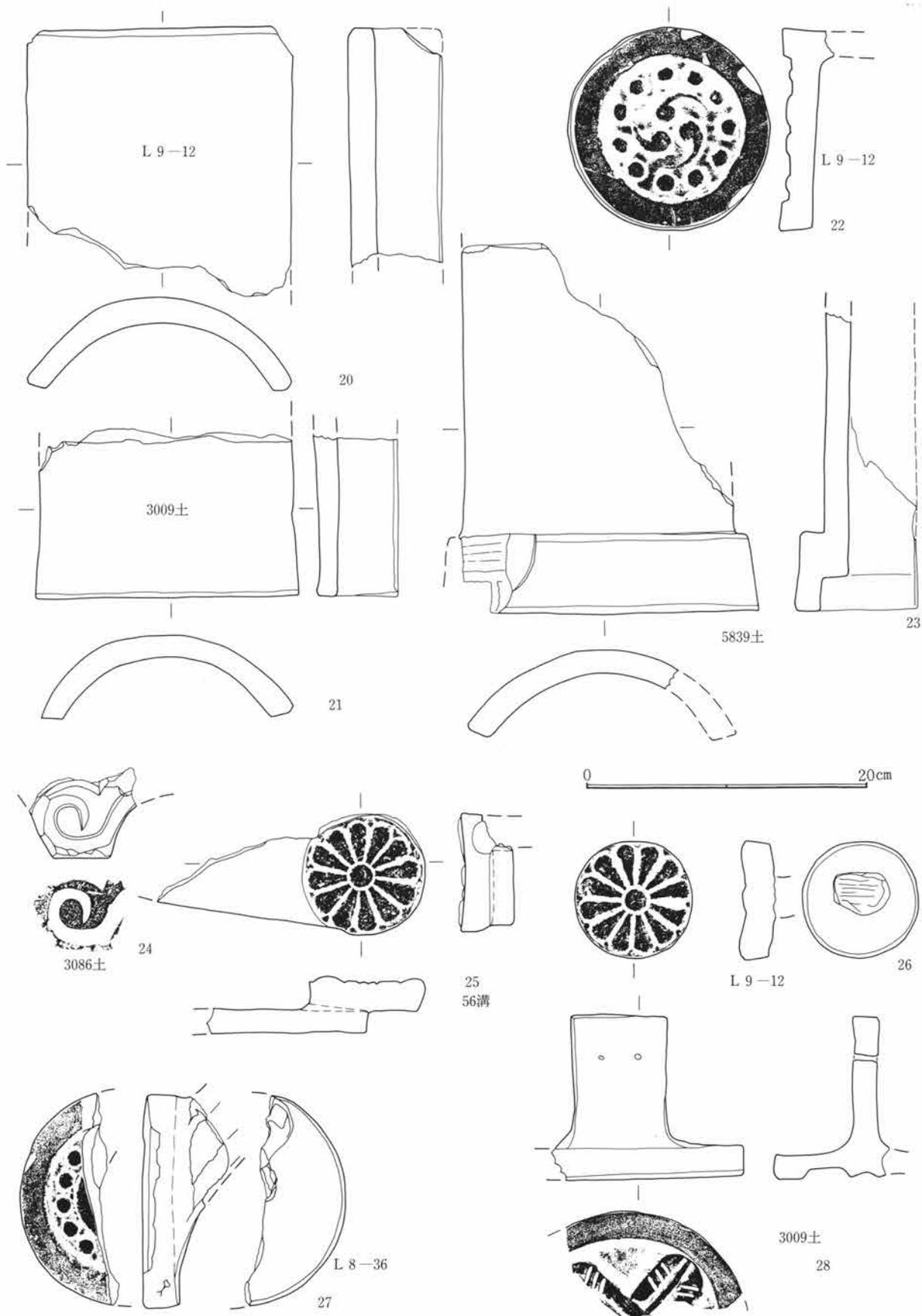
第378图 近世・近代瓦実測図(2)



第379図 近世・近代瓦実測図(3)



第380図 近世・近代瓦実測図(4)



第381図 近世・近代瓦実測図(5)

第II章 遺 跡

全体に磨耗する。No.18は15・57号溝出土の推定36cm程の茶臼下臼。

本遺跡出土石臼の石材は粗粒安山岩が大半であるが、牛伏砂岩製のものも3点ほど含まれる。

石臼	57溝, 1025土, 1153土
茶臼	601土, 2000土
砥石	6溝, 62溝, 63溝, 80溝, 489土, 516土, 1179土, 1587土, 2145土, 3032土, 3067土, 3084土, 3431土, 4707土, 5839土
硯	396土, 5847土
棧瓦	3086土, 5218土, 5234土, 5839土

4 まとめ

A 地理的特徴

ア 上栗須村

本遺跡は、旧緑野郡上栗須村のほぼ中央に位置する。調査範囲は491頁図（地境は昭和初期のものを復元）に見られるように村の中央を北東から南西に貫いた形である。小字では北から薬師前・上ノ台・寺東・寺前・広海道に渡っているが、中世以降の遺構は、主に寺前と広海道分で検出した。

小字名の寺が、調査範囲北西側に隣接する曹洞宗浄雲寺に由来することは明らかである。

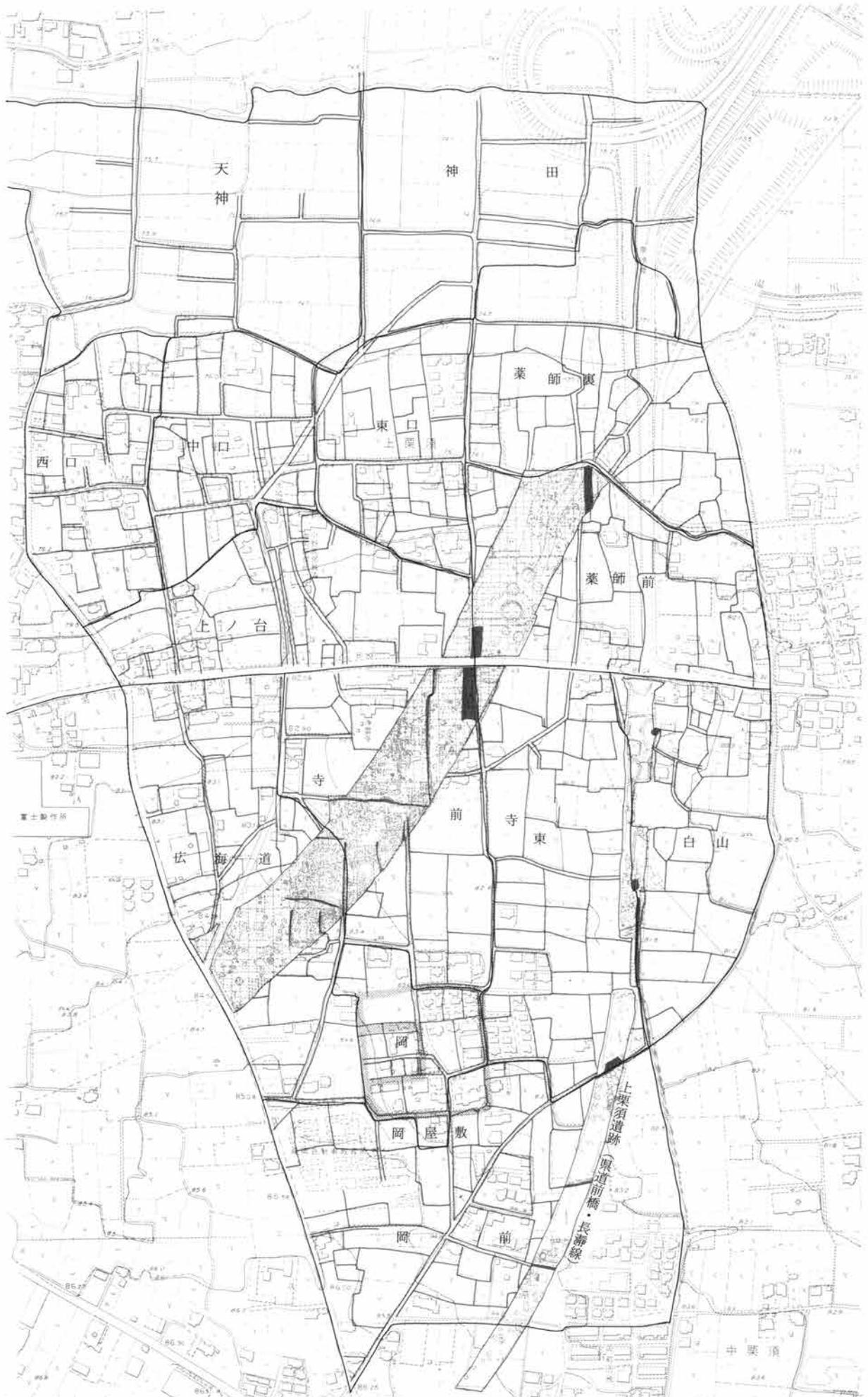
調査範囲のすぐ南に隣接して字岡がある。東西南北それぞれ120メートルほどの正方形に近い範囲となっている。本調査で検出した北側方形区画からは200メートル南に離れたこの区画は、別名「岡屋敷」とも呼ばれている。かつて土塁が残り、図にしたような二重の濠の痕跡も残っていたと言われる。伝承では戦国期の浅見定広なる人物の居館跡とされるが、確証はない。

だが注意すべきは、北側方形区画東辺から南に下る道が、この「岡屋敷」の北側を東西に分けて走り、そのまま推定内郭の東辺となっている点である。少なくとも「岡屋敷」と北側方形区画は、同一の基準で設計された可能性は高い。それは、北端の字神田や天神などに残存する一辺110メートル前後の方形区画線（条里制の残存と考えられる）から形成されたとするのが妥当である。特に「岡屋敷」の東辺が、本調査でも溝として検出した上栗須全体を南北に貫く道の一部をなしている点は、重要である。それから見れば、むしろ「岡屋敷」が先に築かれたとも感じられる。

いづれにしても北側方形区画と「岡屋敷」の間の200メートルほどの間には、本調査でさまざまな遺物を確認し居住的要素の強い中央方形区画があり、単なる空閑地ではない。とするなら、この性格不明な「岡屋敷」は中世においては、本調査地と同一の遺跡と考える必要がある。ただ、本調査での北側方形区画や中央方形区画は少なくとも南北の長さは60～70メートルほどで、「岡屋敷」の区画ほど大きくはない。

491頁図の地境が近世の状況を強く残しているとするなら、字寺前の北西側の方形部分（東西140南北130メートル）が浄雲寺の範囲と見ることができる。これは、上栗須村全体の中のほぼ中央にあたり、北側の字神田や天神などの水田低地を除いた部分では、かなり広い面積を占める。浄雲寺が村の中で果たした役割の大きさをそれは示している。

その浄雲寺の東境から僅か220メートル東の字白山に県道調査で検出した「馬捨場」がある。すでに前述したようにこの「馬捨場」の形成には浄雲寺住職が関係していたが、事実その位置は本調査でも馬の埋葬遺構



第382図 旧上栗須村の小字境と調査範囲

0 1 : 5000 200m



を確認した浄雲寺東辺中央からほぼ真東にあたっている。これは、当然意識的になされたことだろう。

イ 緑野郡

上栗須村の属する旧緑野郡は、493頁図に記したように利根川支流の鳥・^{からすかぶら}・^{かん}・^な・神流の三川合流地域にあたる。これら三川はいづれも上信国境の関東山地に源を発しており、それぞれ関東平野と中部山地そして畿内を結ぶ交通路を形成している。逆にこれらの各川沿いの交通路の結節点が、緑野郡地方と考えることができる。

この地域の特徴は、図にも現れているように、大きな河川の合流点でありながら、山地から出た扇状地形であるため、明治初年においても水田の割合が極めて低いことにある。僅かに本遺跡北側の鑄川旧河道の低地にややまとまった水田地帯が見られるだけである。

近世には鳥川・碓氷川沿いに中山道、鑄川沿いに下仁田街道、そして神流川沿いに十石峠街道（山 中 道）となった。しかし、中世の重要な交通路とされる「鎌倉街道」伝承地は、この緑野郡地域には複数見られる。中でも武蔵児玉郡から北西に向かって走るルートが代表的なものである。

このルート沿いには、児玉郡の^{あほ}・^ぼ・安保氏館、神流川を渡った緑野郡に入ると小林館、そして「岡屋敷」の南側を北西に走って、鮎川と鑄川を渡った地点に山名館が見られる。これらの中世居館跡の実態は不明の点が多いが、数ある「鎌倉街道」伝承地の中でも、有力なルートであったことは間違いのないだろう。鑄川を渡った多胡郡山名あたりから本道は、鑄川を遡って信濃・畿内へ向かう道筋となる。またここから北に向かって鳥川を渡ると、後の三国街道と重なる越後への道となる。すでに古代から生まれていた二つの重要な道筋の合流点が、このあたりである。

山名館は、南北朝以降、大大名に発展した山名氏の本貫地と推定されている。その背景には、この交通の要衝を押さえていたことにあるのではないか。またこの児玉から山名を目指す道の重要性は、ほぼこの線に平行して両側溝を持つ石敷き道路跡が、中大塚遺跡で検出されたことに実際現れている。

一方、山名館のすぐ南は鑄川と鮎川の合流点であるが、この鮎川の左岸に白石大御堂遺跡そして平井城がある。白石大御堂遺跡は、13、14世紀に栄えた浄土式庭園を持つ大規模な寺院跡であり、また平井城は15世紀後半に上野守護を兼ねる関東管領山内上杉氏が鎌倉より移ったところである。

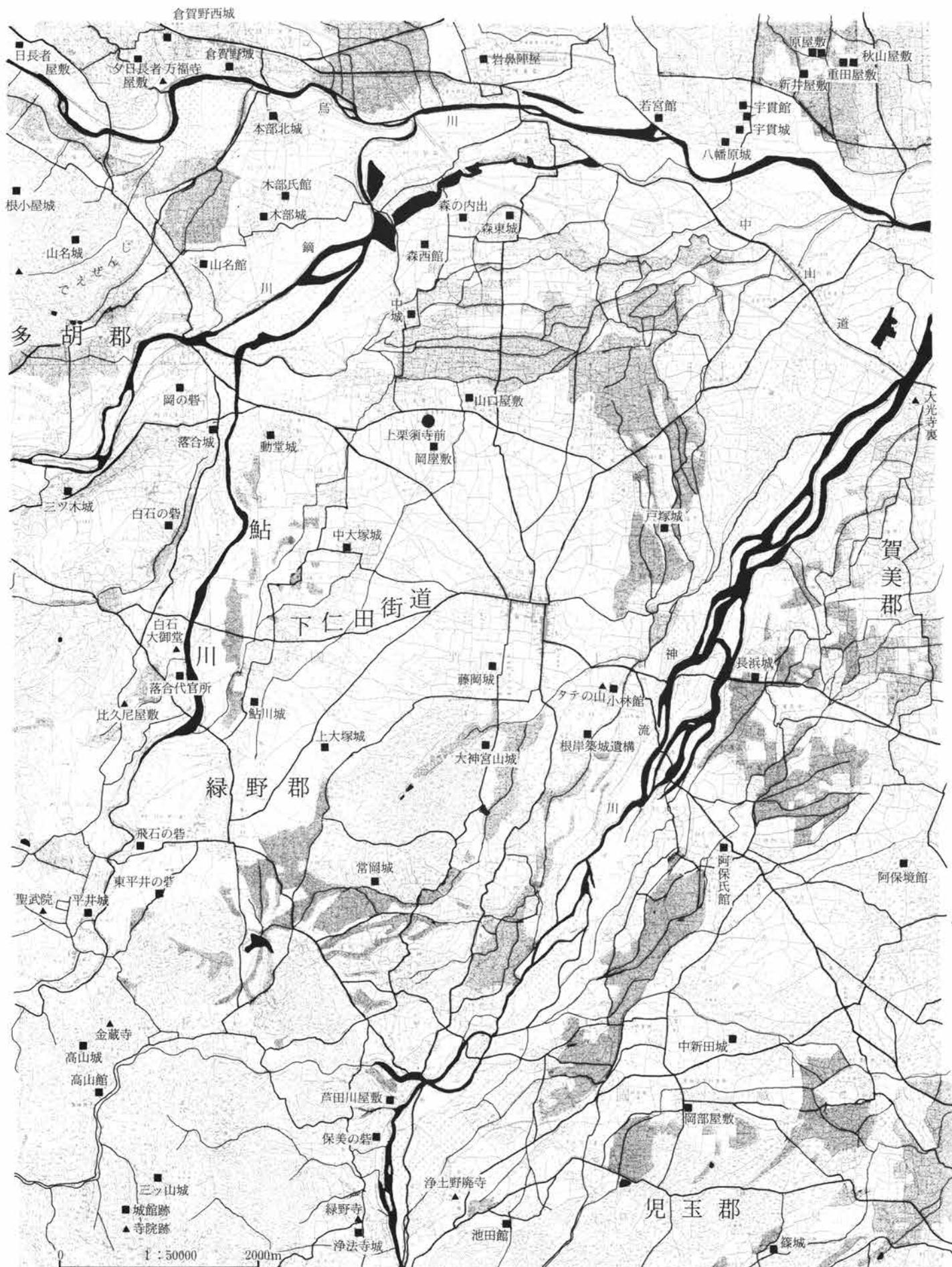
これらが、先ほどのルートからややはずれた地点にあることは、西側に山地そして東側に鮎川を控えた防衛的な意味も考えられるが、それと共に鑄川沿いに信濃へ向かうルートの分岐点に近いことも大きな理由とすることができる。避難地とは言え、関東管領の居所がこの地に移ったことは、信濃・越後・武蔵への3方向への動きが、ここで容易に掌握できたことが最大の要因だろう。

すでに述べたように、本遺跡地からは山名館まで3キロ、平井城まで6キロであり、有力寺院跡白石大御堂遺跡まで3.2キロ、浄法寺まで8キロ、さらに武蔵賀美郡大光寺裏遺跡まで4.8キロの距離になる。中世において本遺跡地が、極めて重要な地域であったことは、それらからも明らかである。

だが、16世紀中葉に後北条氏の圧迫により平井城が落城して以後、この地方の要衝としての意義は、相対的に低下する。越後からの上杉、そして信濃からの武田の勢力拮抗の中で、山名あるいは平井の持っていた戦略的価値は鳥川北側の高崎に移る。近世になるとそれは決定的になり、中山道はかつての「鎌倉街道」の北東側で平行して走り、緑野郡地域の端をかすめる形で、一路高崎に向かった。

高崎には譜代・親藩が常に配置されただけでなく、中山道の鳥川渡河点左岸には、関東の天領全てを支配する岩鼻陣屋が設置された。また岩鼻と高崎の中間にあたる倉賀野には、最上流の河岸が設けられ、水運と陸運の結び目となった。

緑野郡は、近世初期の一時期に藤岡に藩がおかれるものの、全体を通じて天領・旗本領そして他藩領が入



第383図 周辺の古道と城館・寺院跡 明治18年第2管区軍迅速測図による

第II章 遺 跡

り乱れる。つまり、独自の政治拠点はもてなかった。そのこととの関係は不明だが、近世後期にはこの地域の畠地と緩傾斜の山林は、桑畑としての開墾が急速に深まり、一大養蚕地帯に変わっていく。特に幕末の横浜開港以降、かつての「鎌倉街道」は、横浜へ生糸・蚕種を運ぶ「シルクロード」に変貌した。明治前半まで最大の輸出商品であった養蚕製品の大産地としての役割が、この地域にあらたな活気を呼ぶ背景となった。

B 文献資料

ア 中 世

中世前期において緑野郡地方は、伊勢神宮領の高山御厨となっている。そして在地の支配者として高山・小林氏の名が多く文献に残っている。

御厨の成立は、天承1(1131)年のこととされるが、鎌倉幕府の誕生時から高山・小林氏は御家人として活躍している。以後、両氏の動向は各種文書の中に散見し、15世紀には上州一揆に加わったりして山内上杉氏の被官に組み込まれている。戦国期では越後上杉・武田・後北条の抗争時まで、在地勢力として存続している。この間の彼らの動きで本遺跡と関係すると考えられる文書からの資料は、次の通りである。

- 嘉元3(1305)年 「秩父一門内上野国高山・小林一門」熊野御師の檀那となる
- 貞和5(1349)年 足利尊氏、「栗須郷内瓜生右衛門六郎跡」を小林中村弥次郎実達に安堵
- 建徳2(1371)年 熊野本宮大社に「上野国高山庄しらしをのくろさわ」住人願文
- 応安5(1372)年 熊野那智大社に高山重行願文
- 永徳2(1382)年 大般若経巻98(上野村泉竜寺蔵)「高山庄栗須南殿」で書写
- 永徳4(1384)年 熊野那智大社に小林重次等願文
- 康応1(1389)年 熊野那智大社に高山儀重願文
- 応永22(1415)年 高山・小林一族、熊野那智六角堂の檀那となる
- 永禄2(1559)年 後北条氏御馬廻衆金山図書助の所領「下栗須」
- 永禄6(1563)年 後北条氏と武田氏、安保氏に「栗須村内同岡分」を付与
- 天正10(1582)年 滝川一益、小林松隣齋に栗須・篠塚郷内五拾貫文を付与
- 天正14(1586)年 中栗須神明宮造営勸進帳に「中栗須村・中栗須郷・上ノ郷」

まず、14世紀代から15世紀初頭の資料では、両氏が熊野信仰に熱心であったことが知られる。熊野信仰を広める御師の檀那となったり、直接熊野各社に願文を奉じたりしている。その信仰が他の同程度の在地武士と比べて特別に顕著なものであるとは断言できないが、この時期に熊野と深い関係があったことは、興味深い。

また1382年に大般若経が書写されたという「栗須南殿」なるものの実態は不明だが、写経をするにたる施設が栗須郷にあったことは間違いない。しかも同様の施設が複数存在したことも推定しうる。

16世紀代の資料では、栗須郷が上中下に分かれて記されたものが多い。ここで注目すべきは、1563年に神流川の対岸、武蔵賀美郡の在地武士安保氏が緑野郡内の多くを後北条氏より付与された際、栗須村内の「同岡分」が入っていることである。この資料の前段には「上大塚郷小林右京亮分」とあり、「同」は小林右京亮と考えられ、そこに属する「岡」部分と読める。これが何かは詳細には不明だが、「岡屋敷」との関連を想定することができる。

次に山名氏と山内上杉氏に関連する事項を探してみたい。

新田一族の有力な分家である山名氏は、鎌倉時代初期より多胡郡山名郷を本貫とした御家人であった。13

世紀には幕府の引付衆や問注所に勤める官僚を出している。南北朝期に山名時氏は、最初新田義貞に属して鎌倉攻撃に参加するものの、建武政権の崩壊直後に足利尊氏についてこれを支えることになる。そして、まもなく西国に移住し後の大発展に繋がるが、15世紀代まで山名郷の山名八幡宮の支配権は保持していた。次の資料が興味深い。

貞治3（1364）年、丹波守護山名時氏、小林民部大夫を守護代とする

多胡郡と緑野郡と郡が異なる山名氏と小林氏の関係は、一般には疎遠と考えがちだが、このように西国移住後も小林一族の一人は山名氏に従って有力な配下となっている。山名氏と小林氏の関係は、当然それより古くから深かったはずである。

また熊野には、時氏を最後の名とする山名氏系図そして貞和2（1346）年の小林氏系図が奉納されている。小林氏同様に山名氏も熊野信仰に厚かったことになる。

山内上杉氏は、南北朝期に上野守護に任ぜられ、また関東管領も兼ねて鎌倉の関東府にいた。だが、関東公方との複雑な対立の中で、享徳3（1454）年に関東公方足利成氏により鎌倉で憲忠が殺害される。遅くともこの争いの直後までには、平井に移った可能性が高い。この時点で高山・小林両氏は、山内上杉氏の被官化している。

以後、同族の越後守護上杉氏との関係も深めながら、古河公方・扇谷上杉氏との対立状況の中で後北条氏により天文21（1552）年に陥落されるまで約1世紀間、平井城を本拠とした。特に家宰の長尾景春が反乱を起こして関東全体の混乱が拡大する文明8（1476）年頃まで、最も平井は栄えたとされる。この頃の当主の顕定は、越後守護上杉氏の出身だった。だが、顕定が永正7（1510）年に越後守護代の長尾為景との争いで敗死すると、後北条氏の台頭もあって急速に山内上杉氏の勢威は低下した。

山内上杉氏と栗須地域の直接の関係は不明だが、当然被官である高山・小林氏とは、山名氏以上に関係が深かったはずである。また山内上杉氏の関東管領としての権威は平井移住以後しだいに衰えたが、単なる守護以上の名分が存続したことは間違いない。ただ、平井陥落後、高山・小林氏は越後に亡命した上杉憲政に従ってはいない。以後の越後上杉（越後長尾）・武田・後北条の三大勢力のそれぞれの盛時に従属した。

イ 近世

近世、緑野郡は複雑な支配変遷をたどるが、基本的には天領と前橋藩領など近隣諸藩の支配地への組み込みを繰り返す。

上栗須村の支配と石高は、次のように変化している。

寛文郷帳（1668）	幕府領・旗本加藤領	石高 308石
元禄郷帳（1703）	前橋藩領	316石
天保郷帳（1834）	旗本赤松領	323石

特に浄雲寺については、次の元文3（1738）年の「開基論争吟味願」文書が興味深い。

「浄雲寺は、慶長年間に願ひ者の曾祖父小泉又右衛門が白翁雲清居士と号して、領主旗本高木筑後守の許しを得てを開基した。だが享保10（1725）年、隣村篠塚村の伝右衛門一族が自分には無断で院号をもらい墓石を建てた。そのため、自分は浄雲寺の檀家を離れたい。」

この文書の願ひ人は曾祖父と同名の又右衛門であり、宛先は浄法寺村（現多野郡鬼石町）の曹洞宗永源寺になっている。浄雲寺の本寺は群馬郡白川村（現箕郷町）の滝沢寺だが、同寺は井伊直政が箕輪城に入って以後、永源寺の住職を招いて再興されたとされる。つまり、本寺の本寺にあたるのが永源寺である。

また年次不明の「浄雲寺開基記」文書には、次のように記されている。

第II章 遺 跡

「徳川家康の小姓だった高木筑後守が、上栗須村を加増分として与えられた。高木筑後守が佐渡所司代として赴任する際に、上栗須の浅見利衛門の家に逗留したが、その時に後の浄雲寺の境内に柴庵を作って住んでいた的重禪師に1丁2反12歩を寄進した。これにより浄雲寺が開山され、山号を高木山と称するようになった。」

この中で確認できるのは、寺地寄進以前にすでにそこに的重が住んでいたことである。荒蕪地として残っていただけかも知れないが、的重なる僧が庵を作りうる何らかの理由があったはずである。また高木筑後守の逗留先が、浅見利衛門となっている。これが前述の「岡屋敷」の居住伝説者である浅見定広と関係するならば、「岡屋敷」は浄雲寺開山の時点で機能しており、その範囲の一面に的重を住まわせていたことも考えられる。なお、「岡屋敷」の南側は小字岡前だが、その南側は中栗須村に属する小字浅見前である。「岡屋敷」と浅見氏との関係がそこに見える。

なお、明治後期以降に収録された『上野国寺院明細帳』には、浄雲寺は慶安3（1650）年創建とのみ記されている。

現在、浄雲寺の境内には宝永から宝暦頃の銘を持つ立派な宝篋印塔などの墓石が少なからず見られる。また上記文書との関係が考えられる次の銘を台座に持つ宝篋印塔が残っている。

「施主当邑小泉又右衛門

時 元文五庚申十月吉祥日」

元文5（1740）年は、上記小泉又右衛門の願い書提出の2年後である。両者は当然同一人物なはずだが、なぜか文書での言明とは異なって、宝篋印塔を寄贈したことになる。あるいは最後の記念として残していったものか。なお、この年は庚申年にあたっており、それまで散発していた庚申塔造立が爆発的に増加している。

ウ 近代

前記『上野国寺院明細帳』によれば、浄雲寺の本堂・庫裡は明治22（1889）年に焼失し24年に再建されたが、庫裡は暴風のため同29（1896）年に破壊されたと追記されている。庫裡は7年間に2回、廃棄されたことになる。

一方、明治10年代の上栗須村の状況は、『上野国郡村誌』に詳しい。今、近隣の村の状況とも併せて、いくつかの興味深いデータを紹介したい。

	人口	戸数	就学児童数	馬数	米税	金税	繭生産	生糸	その他特産
藤岡町	3358	1077	<u>344(10.2)</u>	40	35	1586	972	400	製茶3125斤
上戸塚村	293	67	8(2.7)	25	59	92	0	80	真綿3
下戸塚村	289	59	12(4.2)	23	67	83	0	58	
下栗須村	412	84	35(8.5)	14	114	78	105	36	絹72匹
中栗須村	318	70	<u>34(10.7)</u>	14	59	260	130	45	生絹150匹蚕種3200枚
上栗須村	894	190	13(1.4)	9	43	85	0	0	蚕卵紙2000枚生繭9貫
中村	406	99	30(7.3)	16	109	237	109	7	
森村	257	60	<u>24(9.3)</u>	13	50	145	2720	6	
立石村	533	133	<u>85(15.9)</u>	18	146	266	83	16	絹25匹太織15匹蚕種2500枚
篠塚村	378	92	36(9.5)	20	0	152	9	29	実綿75斤煙草1000斤藍7500斤
本動堂村	337	82	39(11.6)	12	11	174	16	59	実綿62斤栗20石甘芋4750斤
上大塚村	506	130	<u>160(31.6)</u>	37	76	162	0	12	絹40匹太織15反
中大塚村	437	98	68(15.6)	29	98	161	15	60	生絹298匹太織3匹
下大塚村	249	64	22(8.8)	8	22	172	80	0	実綿31斤製茶8斤

就学児童数は明治11年、()内は人口に対する児童数割合%、下線は学校所在村。単位はそれぞれ米税は石、金税は円、繭は石、生糸は貫。

周辺の14町村の中で、上栗須村の人口は藤岡町に次いで多い。ただ、1戸当たりの人口は4.7人で、藤岡町よりはるかに多い。ここで最も注目すべきは、上栗須村の就学児童数が異常に少なく、周辺では最低の比率になっていることである。この当時、就学は税金的要素もあったから、就学率の低さは平均所得と関係がある可能性がある。それに関係する税金総額は、米税・金税共に周辺町村の中では最低に近い。

ただ、生産物に大きな特徴がある。他の町村と異なって繭や生糸は全く作っていないが、他ではない蚕卵紙そして生繭の特産がある。蚕卵紙は横浜へ出荷しており、生繭は高崎・富岡などの遠距離の町を販路としている。蚕卵紙は、この頃重要な輸出品であった。有力商品である生糸の生産は行わず、唯一直接横浜と取引する蚕卵紙を作っていた。この生産形態が、就学児童の少ない大きな人口（未婚就労人口の多さか）の意味であったと考えられる。

馬の数が少ない点、また米税・金税が少ない点からも、この大きな人口が農耕のためではなく、蚕卵紙生産と繋がっていたことをうかがわせる。

【参考文献】

- 群馬県教育委員会.1988『群馬県の中世城館跡』
 群馬県文化事業振興会.1981『上野国郡村誌7 多野郡』
 .1995『上野国寺院明細帳3』
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団.19 『上栗須遺跡・中大塚遺跡・上大塚遺跡』
 埼玉県教育委員会.1988『埼玉県の中世城館跡』
 高崎市史編さん委員会.1995『新編高崎市史 資料編4 中世II』
 藤岡市史編さん委員会.1989『藤岡市史資料編 民俗』
 .1990『藤岡市史資料編 近世』
 .1993『藤岡市史資料編 原始・古代・中世』
 峰岸純夫.1983『東国における十五世紀後半の内乱の意義』『戦国大名論集3 東国大名の研究』吉川弘文館

C 各時代の概観

ア 中世

本遺跡で検出した北と中央の方形区画遺構群は、14世紀後半に記録された「栗須南殿」である可能性が高い。「岡屋敷」と併せて構成される大規模な方形居館群である。

この居館群には、鎌倉幕府官僚から足利政権の有力守護大名に発展した山名氏が大きな影響力を持っていたと思われる。そして直接の管理は、山名氏の被官的な存在である在地の小林氏が行っていた。山名氏と共に小林氏は、熊野信仰に熱心だった。

「栗須南殿」は少なくとも大般若経を写経をするのにふさわしい雰囲気を持った施設である。この施設の詳しい内容は不明だが、浄土教的要素が感じられ、同時代の『慕婦絵詞』に描かれた高級寺院的な雰囲気も一部含んでいたであろう。近隣の白石大御堂遺跡も同じ時期の山名氏傘下の寺院である。

ここで行われた14世紀後半の特異な埋納行為は、この施設の何らかの役割変化と関係しているはずであり、それは山名氏の西国への移転と繋がっているかも知れない。

山内上杉氏の影響が濃くなる15世紀、ここには同氏と直接繋がる越後経由の文物が将来されている。

だが、同氏の政治力が急速に低下した15世紀末以後、「栗須南殿」も衰え、墓地に変わってしまった。同様の状況は、白石大御堂遺跡でも見られる。

イ 近世

近世初頭、かつての「栗須南殿」はその一部である「岡屋敷」のみが残っていた。17世紀中葉以後、以前の北側方形区画に浄雲寺が創建されるが、それには村の庄屋クラスと思われる小泉氏が関与していた。檀家代表としての小泉氏の関わりは18世紀中葉まで続く。

第II章 遺 跡

この時期に浄雲寺は、村落寺院としてはやや大きな発展を遂げている。詳細な状況は不明だが、複数の建物を持っていた可能性がある。また、死馬の埋葬にも、積極的にこの寺は関与している。

小泉氏との関係が途絶えた18世紀後半以後、経済的には寺は下降していく。南側方形区画は、この時期の寺と関係のある屋敷跡であろう。

ウ 近代

横浜開港以後、輸出産業としての養蚕が、緑野郡全体で大きく発展する。その中で上栗須村は、周辺の村々と異なり蚕卵紙という輸出商品の生産に特化し、横浜と直接経済的に結びつく。その状況の中で、浄雲寺は明治20年代に連続して2回の惨事に遭遇する。その際の大規模な廃棄物処理が、境内でなされている。

第Ⅲ章 考 察

第1節 上栗須寺前遺跡3区出土の馬歯・馬骨

宮崎重雄

I. はじめに

寺前遺跡は群馬県藤岡市大字上栗須に所在し、発掘調査は昭和63年5月から平成3年10月の4次に渡って行われた。この調査で30基の土坑から少なくとも18頭分の馬歯・馬骨が発掘された。このウマは天明年代のものである。

II. ウマの埋存状況

ウマの埋存姿勢が分かる状況で出土したのは、37号土坑、38号土坑、3006号土坑、5246土坑のものである。

37号土坑は、隅丸方形をなし、北側に頭をおいて南北に体を横たえ、右を上に行っている。右後肢は東側前方にまっすぐ伸び、左後肢は膝と足根骨の2カ所で少し折れ曲がっている。首をうなだれた感じで頭は体肢側にある。前肢は左右とも強く屈曲させている。

このウマは老齡馬で、犬歯をもつ牡馬である。各歯では過度の咬耗によりエナメル質が消失している。前臼歯列長は144.0mmで、齒槽による全臼歯列長は150.6mmである。中足骨全長から林田・山内(1958)の方法により推定される体高は121.2cmであり、小型在来馬の大きめの個体に相当する。特に疾患は見あたらない。

38号土坑は、西洋梨型をし、ウマの埋存姿勢は37号土坑とほぼ同じで、南北に横たわり、頭を北にし前肢・後肢とも東側に置いている。後肢は股関節で強く前側に曲げられているが、左右の脚は平行にまっすぐに伸びている。前肢は強く屈曲し、首は背側に強く折れ曲がり肩のあたりに載っている。このように各部が強く折れ曲がっているのは、狭い土坑のためである。このウマは全臼歯列長が156.0mm、中手骨全長が212.0mmあり、推定される体高は129.5cmで、中型在来馬相当である。壮令期後半から、老齡期前半と推定される。性別は不明である。

3006土坑は、変形隅丸形である。上記2土坑の埋存姿勢と基本的には同じである。頭を北にし、南北に体を横たえて肢を東側に置いている。後肢は股関節のところで、強く曲げられて、前側にまっすぐに伸び、軽く屈曲した左右の前肢の中手骨間に入っている。前肢・後肢を中手骨あたりで交叉させ、ここで縛って棒を通し、運び込んだのであろう。下顎全臼歯列長は141.0mmで、橈骨長、中手骨長、大腿骨長、脛骨長、中足長はそれぞれ298mm、195.8mm、316.0mm、234.6mmである。これより推定される体高は117.7cmであり、小型在来馬相当である。本馬は異状咬耗しており、後述するように咬耗面が波状を呈している老齡馬である。

5246土坑の馬も単独で埋葬されたことは確かであるが、土坑の形状も不明確であるし、埋存姿勢も保存不良で知ることができない。異状咬耗が目立ち咬耗面は波状を呈する老齡馬であり、犬歯が存在しないことで、牝馬と判断される。後臼歯列長は74.5mmと計測され小型在来馬(西中川・松元、1989)より小さいが、異状咬耗していて、後臼歯列長だけでは馬格を推定することはできない。

このように本遺跡では、①土坑に1個体だけ埋葬し、その埋存姿勢もはっきりわかる場合、②5237土坑、5238土坑、5239土坑、5241土坑、5242土坑、5243土坑、5244土坑のように連続した溝状の凹地に複数個体が乱雑に埋存している場合、③土坑の形状も不明瞭で馬歯・馬骨が部分的に散在している場合とがある。

第三章 考 察

III. 出土頭数

本遺跡では馬歯・馬骨又はそのいずれかの埋存していた土坑は30を数える。複数個体埋存していた土坑もいくつかあり、遺跡全体としては30を超える個体が埋存していたと考えられるが、実際に取り上げた馬骨に限ってみると、最も数の多いのは橈骨で、左右合わせて23本である。左が10本、右12本、左右不明1本の計23本である。10本の左橈骨のうち右橈骨と同一個体とするには無理のあるものが少なくとも6本はある。すなわち、本遺跡における馬の最小個体数は馬骨でみると18ということである。しかし、歯の数からみると、20頭前後と推定され、やや多くなる。

IV. 性別

犬歯を持った雄の個体は3体だけ確認されている。これより多くの雄がいたことは確実であるが、正確な性比を知ることはできない。

V. 年齢

老齡馬は9～11頭を数える。これは最小個体数の半数を超える数で、かなりの高比率である。また壯齡馬は6～7頭を数え、幼齡馬は1～3頭である。

VI. 体高

全長の計測できる部位でもっとも多いのは中足骨であり、8本ある。それぞれの全長から林田・山内(1957)の方法で求めた体高は馬類記録表(観察資料編208頁)のようである。最小が3006土坑の116.8cm、最大が5237土坑の126.2cm、平均が122.1cmである。一方、出土した部位でもっとも多いのは橈骨の24本である。ところが、全長の計測できるのは1本のみで、残り23本は破損したものであり、骨体中央幅であれば計測できる。西中川・松元(1989)の橈骨中央幅から体高を求める式を用いて、得た体高は馬類記録表(観察資料編208頁)のようである。

実際には、橈骨は左右のものがあり、対になるものも5組前後あると思われるが、ここではそれにとらわれず、すべての橈骨について全長を算出し、平均体高を求めてみた。この方法でも、本遺跡のウマ体高を知るのに大きな不都合はないからである。得られた値は平均が120.4cm、最小が38号土坑の112.1cm、最大が5244号土坑の129.4cmである。

VII. 異状咬耗

3006号土坑の臼歯列は波状に異状咬耗がすすみ、下顎臼歯で見ると、咬耗面は第2前臼歯近心端と第1後臼歯遠心端間および第2後臼歯近心端と第3後臼歯端間がそれぞれ大きく凹湾している。波高の最も高い下顎の第1後臼歯遠心端・第2後臼歯近心端部に対応する上顎臼歯は逆に大きく凹み、歯根部まで咬耗が至っている。5863土坑の1個体にも第1後臼歯遠心端・第2後臼歯近心端が最も波高の高くなっている波状の異状咬耗が見られる。5243土坑の馬の歯にも異状咬耗が進み、咬合面のエナメル質は磨滅し尽くされている。さらに、5244土坑の1個体、5246土坑の2個体、5863土坑の上記とは別の1個体に異状咬耗が見られ、咬合面が波打っている。このほかの老齡馬にも多かれ少なかれ異状咬耗は認められる。

すなわち、この遺跡では最小個体数とされる18個体の半分に近い7個体に顕著な咬耗の異状があり、きわめて高頻度を示している。

Ⅷ. 上栗須遺跡の馬歯・馬骨との比較

本遺跡に隣接する藤岡市上栗須遺跡には天明年代の27頭以上の馬骨が埋葬されていた(宮崎、1989)。このうち約70%が老齢馬であり、体高は最小が116.1cm、最大が135.1cm、平均が126.4cmである。当遺跡ではそれに比べると老齢馬の割合が幾分少ない傾向にあり、体高も最大体高でかなり下回り、平均体高も劣っている。ほぼ同時代の遺跡で地理的に近接していながら、特に体高にこのような違いが認められるのは単に標本数が少ないための統計上の問題なのかもしれないが、上栗須遺跡には馬頭観世音が建立されており、一部近代までウマが埋葬されていた可能性もあるところで、体高のやや高くなった後世のウマの混入した恐れもある。本遺跡の場合は、遺構の状況からして近付以降のものが混入したことは考えられず、すべて当時のものと見て差し支えない。両遺跡の体高差はこのへんに原因があるのかもしれない。

Ⅸ. 伴出動物

馬骨に伴出した動物はイヌで、5237土坑から3頭分、5244土坑から1頭分、5860土坑から1頭分、5861土坑から2頭分の計7頭分が検出されている。

5237土坑からは下顎骨2片、上腕骨3片、尺骨1片、大腿骨2片、脛骨1片が出土している。下顎第1後臼歯およびその歯槽の大きさ、肢骨の大きさから判断して、この土坑に埋存していたイヌは、醍醐(1957)の示す秋田犬ほどの大きさの個体1頭と、甲斐柴犬ほどの大きさの個体2頭である。咬耗により永久歯の咬頭に象牙質が露出していることで、いずれの個体も成獣であることが分かる。

5244土坑からは上腕骨の遠位半が1個体分出土しているのみである。その大きさは秋田犬相当と思われる。遠位骨端が癒合していることにより、成獣に至っていると判断される。

5860土坑から出土しているのは左尺骨2片と左大腿骨2片である。その大きさは甲斐柴犬ほどの大きさを思わせる。成獣であろう。

5861土坑からは上腕骨3片、尺骨3片、橈骨2片、大腿骨3片、脛骨2片、踵骨2片の出土をみる。この土坑のイヌは2個体からなり、いずれも関東柴犬より小さい個体で、骨端の癒合状況、歯の咬耗度からして成獣である。

本遺跡出土のイヌ骨は保存状況が不良で、陰茎骨の出土も確認できず性別の判定はできない。

上記の上栗須遺跡でもイヌ骨の伴出があり、当地方では天明年代には馬とともに犬も同じ場所に埋葬する習慣があったようである。なお、ネコの遺骸は本遺跡でも、上栗須遺跡でも1例も発見されていない。

いずれの犬骨にも解体痕のようなものは見あたらなかった。

前橋市元総社明神遺跡の古墳時代から平安時代前期にあたる土層から3個体分の犬が出土している(宮崎、1990)。1頭は甲斐柴犬ほどで、他の2頭はそれより小さい。江戸時代後期の本遺跡では秋田犬相当2頭、甲斐柴犬相当3頭、関東柴犬以下2頭である。

茂原(1989)によれば、大型犬は江戸時代になって初めて出現し、江戸時代の犬には大型犬の割合が多い。このように本県の遺跡の場合もその例外でなく、江戸時代には大型犬の割合が多くなっている。

引用文献

- 醍醐正之(1957) 犬の骨格に関する比較解剖学的考察 II. 下顎骨について、日本獣医学畜産大学紀要、6、70-79。
 Duerst, J. U., 1926 Vergleichende Untersuchungsmethoden am Skelett bei Saugern. Handbuch der biologischen Arbeitsmethoden der vergleichenden morphologischen Forschung. Heft. 2, 125-530. Urban und Schwarzenberg. Berlin.
 林田重幸・山内忠平(1957) 馬における骨長より体高の推定法。鹿児島大学農学部研究報告、6、146-156。
 宮崎重雄(1989) 上栗須遺跡の馬骨「上栗須遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、655-673。
 宮崎重雄(1990) 元総社明神遺跡第8次調査出土の獣骨類について「元総社明神遺跡Ⅶ」、前橋市埋蔵文化財発掘調査団、23-33。
 斎藤弘吉(1963) 犬科動物骨格計測法、私家版、138P。
 茂原信生(1989) 古代日本犬の形態変化、考古学ジャーナル、303、22-27。

第2節 上栗須寺前遺跡3区出土の人骨・人歯

宮崎重雄

I. はじめに

寺前遺跡は群馬県藤岡市大字上栗須に所在し、発掘は昭和63年5月から平成3年10月の4次に渡って行われた。この調査で25の土坑から人骨又は人歯が出土した。概要は以下の通りである。

II. 人骨・人歯の記録

22号土坑 保存きわめて不良で、人骨であることは分かるが、部位については橈骨・尺骨片が認められるのみである。

23号土坑 保存きわめて不良の人骨片が数片出土したのみである。

535土坑 頭蓋片、大腿骨折、脛骨片はあるが、保存不良の上に、歯の検出もなく詳細は不明である。

536土坑

上顎骨・下顎骨・上腕骨片（骨体中央部幅；14.0mm、同中央部径；15.5mm）・大腿骨片（骨体中央部幅；27.0mm）・手根骨片などが出土する。齢は15本ほど検出されており、そのうちの4本が齶歯である。切歯の咬耗の様子は鉗子咬合を思わせる。上腕骨は細く華奢で乳様突起は小さく、女性であろう。歯の咬耗度は壮年期を示す。手根骨が顎の近くにあり、手を顔の近くに置いていたと思われる。

1170土坑

頭蓋片、数本の歯、上腕骨片、脛骨片などが検出されている。乳様突起の大きさは男性的である。眉上隆起も発達している方である。右上顎犬歯の歯冠近遠心径は7.2mm、歯冠頬舌径は8.4mmである。尖頭部に象牙質が面状に露出し、熟年期以上の年齢である。大腿骨骨体幅は栄養孔上で27.4mmである。

1337土坑

頭蓋片と数本の歯、大腿骨片が同定された。すべての歯の咬合面に象牙質の露出が認められ、熟年期以上の年齢が考えられる。女性の可能性がある。齶歯はない。

1402土坑

歯種鑑定のできない保存不良な歯が1本、骨体中央幅28.1mmの大腿骨片がある。

1430土坑

人骨の部位は不明。歯は5本が検出されており、右下顎犬歯は尖頭部が象牙質が露出し、咬耗面が遠心へ大きく傾斜している。左上顎第2大臼歯もあり、遠心舌側咬頭にエナメル質のみの咬耗あり。多少歯石も付着している。歯頸部から4.8mm咬合面よりエナメル形成不全症と思われる帯状の溝が歯冠の周囲をめぐる。青年期後半から壮年期前半の年齢が考えられる。性別は不明である。

1467土坑

上腕骨などの体肢骨片数10片の焼人骨で、最大片は53mmである。亀裂・歪みが顕著で、焼骨の特徴を良く示している。

1750土坑

大腿骨片が確認されるのみである。

2202土坑

7本の歯が確認される。犬歯は乳歯と思われるが、他は永久歯である。永久歯はいずれも未咬耗で10才程度

と推定される。齶歯はない。

2335土坑

頭蓋片のみが知られる。

2677土坑

歯種不明の歯数本分と上腕骨・橈骨・尺骨片が残存する。

2908土坑

頭蓋片と左右不明の大腿骨片2片が残存する成人骨である。

3066土坑

大腿骨小片で、その保存最大長は40.5mmである。

3414土坑

歯が4本ほど検出されている。歯の大きさと咬耗度は熟年男性を思わせる。

3537土坑

頭蓋、上腕骨片(骨体中央最小幅18.7mm)、大腿骨片(骨体中央最小幅28.5mm)が存在する。歯は16本ほど確認でき、大白歯の多くは歯頸部に歯石が付着している。骨や歯のようすは熟年男性を思わせる。

3559土坑

部位不明の骨片で、人骨である確証もない。

3738土坑

顔面を西方に向けていることはわかるが、保存きわめて不良で、計測その他の調査は不可能である。

3787土坑

脛骨(?)片など数10片の焼人骨である。

4237土坑

体肢骨片であるが、詳細は不明である。

4633土坑

歯が5本ほど検出されている。大白歯には歯石が付着している。壮年期の男性の可能性はある。

5128土坑

大腿骨片が確認されるのみである。

5213土坑

頭蓋と大腿骨片が残存する。切歯縫合、正中口蓋縫合は外側部に至るまで癒合してない。上条(1985)によれば年齢は30~49歳程度であろう。歯は9本が検出されているが、その他に歯冠部が齶蝕されて歯根部だけ残っているものもある。切歯・犬歯・小白歯の咬耗は年齢の割に進んでいて、大白歯の咬耗は少ない。切歯の咬耗のようすは鉗子咬合を伺わせる。性別は不明である。

5215土坑

右上顎には大白歯がなく、右下顎には第1大白歯・第2大白歯がなく、これらは生前に脱落したものと考えられる。第3大白歯は歯槽のみ残存するが、浅いので生前に脱落した可能性もある。性別は不明である。

5853土坑、5854土坑、5856土坑からは巻き貝のサザエ(?)の破片が出土している。

参考文献

- 上条雅彦(1994)「日本人永久歯解剖学」、アナトーム社、272p。
(1985)「図説口腔解剖学」、アナトーム社、348p。
馬場悠雄(1991)人体計測法—II人骨計測法「人類学講座別巻1」、雄山閣、359p。

第3節 群馬県内出土土器類の胎土特性について

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

群馬県内では数多くの古代窯址があり、現在のところ大きく11窯址群が知られている(例えば木津博明、1986)。近年、埋蔵文化財調査が数多く行われ、これに伴ってこうした窯址群で生産されたと思われる土器類が各遺跡で出土している。また、こうした土器類を対象として、その生産地を特定する目的で、機器を用いた地球化学的分析も数多く行われている(1996年現在で刊行されている報告書例で50件以上に及ぶ)。これらの分析例は、後述するように須恵器を中心に、土師器・陶器および陶磁器・瓦・埴輪などに及ぶ。

これら県内の窯址群は、その基盤として粘土質堆積物を産することから(あるいは風化により生成した粘土)、こうした粘土を利用して土器類を製作している。一般的に、窯業は土器類の材料となる良質な粘土を産出することが必要条件であり、かつ燃料としての木材が十分供給できることで窯業として条件が整うものと思われる。

ここでは、これまで行われていた土器類胎土の化学分析について概観し、土器類の胎土材料としての粘土について若干の検討を行いたい。

なお、高太郎 I 4号窯出土須恵器・駒形神社埴輪窯址出土埴輪は太田市教育委員会の宮田 毅氏、竹沼窯址群切通シ窯址出土須恵器・本郷埴輪窯址出土埴輪・高峰古墳円筒列埴輪は藤岡市教育委員会の志村 哲氏、ヌカリ沢A窯址出土須恵器は吉井町教育委員会の茂木由行氏、下高瀬上之原遺跡1号埴輪窯址出土埴輪は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の新井 仁氏からそれぞれ提供を受けました。また、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の石塚久則氏・大江正行氏からは数々の御助言を頂きました。ここに心から感謝の意を表します。

2. これまでの胎土分析

先にも述べたように、県内から出土する土器類については、50編以上に上る分析報告例がある(表1)。これらの一連の分析結果は、例えば小沢・大江(1990)にその概要を知ることができる。昭和64年度までの分析試料に基づいたSr/Rb-Ca/Kの関係図によれば、中之条古窯址群・月夜野古窯址群・笠懸古窯址群・太田金山古窯址群・藤岡古窯址群・吉井古窯址群・乗附古窯址群はほぼ重複してプロットされている。また、多くの窯址群とは独立傾向をもつ秋間古窯址群についても乗附古窯址群と重複している。しかしながら、吉井古窯址群では、Ca/K比が大きな値をもち広い組成域を示すのに対し、藤岡古窯址群あるいは秋間古窯址群あるいは太田金山古窯址群などでは狭い組成域を示している。例えば、吉井古窯址群と藤岡古窯址群を比較した場合、両者の基盤岩は同じ新第三系の下～中部中新統の富岡層群であるにもかかわらず、土器類の化学組成の分布域は大きな違いを見せている。富岡層群は、北傾斜の単斜構造をもち、最下位層の牛伏層をはじめ、海成の井戸沢層から淡水成の板鼻層(上位層)へと移行する層厚1,000～3,500mに達する泥質～砂質堆積物(凝灰岩層を挟む)からなる(松丸、1977)。先の胎土の化学組成分布域の相違は、原材料となる粘土層の起源や混和剤の違いなど、何等かの原因があるものと考えられる。このように、巨視的に見た場合には同一分布域にプロットされても、個々の窯址群の示す化学組成域は胎土の特徴を反映していると思われる。これは、土器類の肉眼的観察(考古学的)において、胎土の質観や砂粒組成などの特徴の違いとして識別されることもある。

このことは、これまでの化学組成値と考古学的記載の再検討により、今後の胎土分析の方向性が見えるの

ではないかと考える。

3. 焼成の甘い須恵器と埴輪胎土の粘土材料

ここでは、できる限り原材料となる粘土の特徴を記載するために、厚さ20~30 μm 前後の土器薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察を行った。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数する。同定・計数は、100 μm 格子目盛を用いて任意の位置における約50 μm (0.05mm)以上の鉱物や岩石片あるいは微化石類(50 μm 前後)を対象とし、微化石類以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、土器薄片全面について、微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、孢子化石)の観察も行った。試料は、下高瀬上之原1号埴輪窯址出土埴輪2点、竹沼窯址群切通シ窯址出土須恵器2点、本郷埴輪窯址出土埴輪2点、高峰古墳円筒列埴輪1点、ヌカリ沢A窯址出土須恵器2点、高太郎I窯址4号窯出土須恵器2点、駒形神社埴輪窯址出土埴輪5点の合計16点である。なお、ここで扱った須恵器は、焼成の甘い試料に限定した。ここで設定した各分類群については、藤根ほか(1996)と同じである。また、粘土の分類は、土器薄片全面の観察結果に基づいた(図1の試料番号の左記号)。胎土材料となる粘土の特徴は、以下の通りである。

下高瀬上之原1号埴輪窯址出土埴輪では、沼沢湿地などで見られる *Pinnularia* 属や *Eunotia* 属が含まれる。これは、基盤の富岡層群の粘土ではなく淡水域に堆積した沖積層などの粘土を利用しているものと考えられる。竹沼窯址群切通シ窯址出土須恵器や本郷埴輪窯址出土埴輪あるいは高峰古墳円筒列埴輪胎土中には、海水種珪藻化石の *Coscinosiscus* 属/*Thalassiosira* 属が含まれ、本郷埴輪窯址埴輪No.4の胎土中は、外洋浮遊生の放散虫化石が含まれる。これは、基盤の富岡層群海成層粘土を反映するものと考えられる。ヌカリ沢A窯址出土須恵器では、No.7では *Eunotia* 属など淡水種珪藻化石が含まれるものの、No.8では検出されない。高太郎I窯址4号窯出土須恵器では、No.9においては淡水種珪藻化石の *Diploneis ovalis* が含まれるものの、No.10では不明種珪藻化石が検出された。駒形神社埴輪窯址出土埴輪では、No.12やNo.13あるいはNo.15やNo.16の胎土では、淡水種珪藻化石の *Pinnularia* 属あるいは *Eunotia* 属などが含まれ、No.14では不明種珪藻化石が、No.11では骨針化石が検出された(骨針は海綿動物の骨格をなす珪質の針状物である。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産も23種ほど知られている)。また、多くの胎土において、イネ科植物の葉身に形成される植物珪酸体の化石が高率で検出されている。佐原(1970)は、アフリカにおける土器製作の民族学事例を引用し、上部エジプトのロクロ陶工がナイルの泥に除粘剤として灰を混ぜている例を紹介している(ケネーでは粘土1に対して1/4の灰を混ぜている)。この民俗学例がそのまま適用されるものではないが、植物珪酸体化石は一般的な堆積物中では多くないことから、意図的に灰質を混入している可能性が高い。ただし、土器製作場に灰質が多いなどの理由により、偶発的に混入する可能性もある。

4. 今後の課題

このように、比較的焼成の甘い須恵器や埴輪胎土中には、胎土の原材料としての粘土の起源を指標する微化石類が含まれていることが理解される。上之原遺跡のように基盤堆積物を直接利用していない胎土もある。また、植物珪酸体化石が高率で検出されることから、灰質を意図的に混入している可能性も示された。

一般的に須恵器胎土では、高温で焼成されているため、ここで示した微化石類は大半が溶融し、石英粒子のみが残存するのが普通である。そのため、胎土の特徴あるいは生産地の推定において、蛍光X線分析法による元素分析が行われる。ただし、蛍光X線分析による分析法は、上述のような直接的な情報は乏しく、あ

第三章 考 察

くまでも対象とした胎土の化学特性の把握に主点が置かれ、周辺データとの比較において評価がなされる。先の胎土の化学組成の違いは、材料の違いあるいは混和剤の種類の違いなどを反映しているように思われる。蛍光X線分析を行うとしても、考古学的記載を考慮し、分析値の総合的な評価が必要であると考え。例えば、1)砂粒の多い胎土と少ない胎土では異なった処理法を行う、2)主成分元素組成の解析を行う(佐藤(1993)は多変量解析を用いて胎土の分類を検討している)、3)他の微量元素の定量分析を行う、4)ここで検討した薄片法と蛍光X線分析法を併用し、蛍光X線分析法のための基礎データを得るなど、基礎的な調査・検討の余地があるものと思われる。

引用文献

- 藤根 久・菱田 量・車崎正彦 (1996) 第2節 弥生土器の胎土分析。「下戸塚の調査—第2部 弥生時代から古墳時代前期—」、648-692.早稲田大学
- 木津博明 (1986) 在地系土器と瓦の胎土について。『上野国分僧寺・尼寺中間地域』。—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集—本文編。群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、639-642.
- 松丸国照 (1977) 関東山地北縁～北東縁の新第三系の層序。地質学雑誌、83(4)、213-225.
- 小沢達樹・大江正行 (1990) 第6篇 本郷的場古墳群出土土器の胎土分析。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第108集。群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、77-82.
- 佐原 真 (1970) 土器の話(1)。考古学研究。16-4,107-124.
- 佐藤元彦 (1993) 「胎土分析による土器の分類について」。『研究紀要』11。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、89-110.

第384図 県内出土土器類の胎土分析

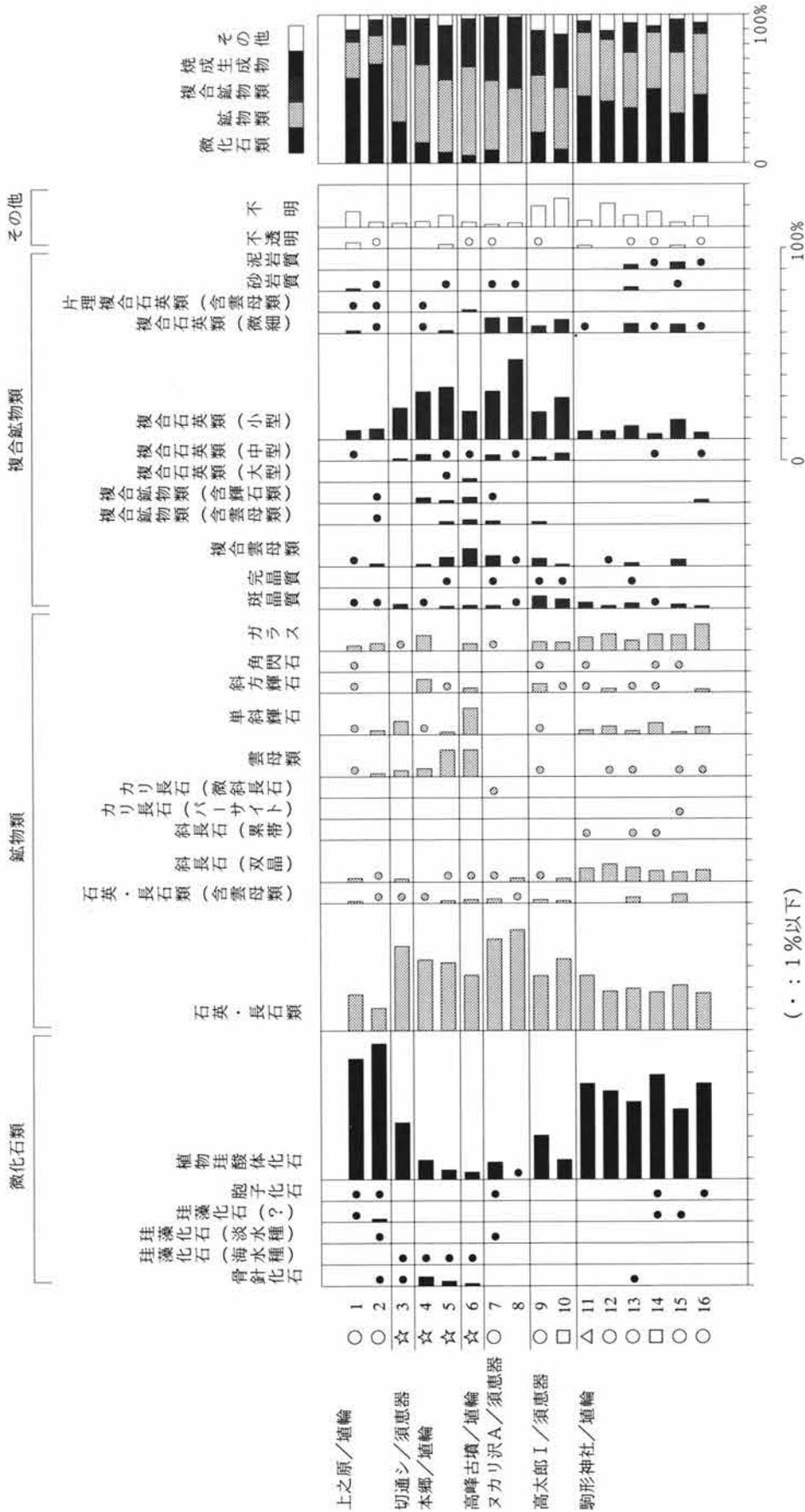
報告書(発行年)	所在地	対象土器類										備考				
		縄文土器	弥生土器	須恵器	埴輪	土師器	土師質	瓦	陶磁器	陶器	粘土		その他			
6	温井遺跡(1981)	藤岡市			9		1								花岡紘一	XRF・XRD
10	日高遺跡(1982)	高崎市			8					7					花岡紘一	XRF
14	清里・陣場遺跡(1981)	前橋市・吉岡町			3		2	3				2			花岡紘一	XRF・XRD
22	奥原古墳群(1983)	榛名町			10										花岡紘一	XRF
25	大釜遺跡・金山古墳群(1983)	月夜野町			7	3									花岡紘一	XRF
35	三ッ木遺跡(1984)	藤岡市			21										花岡紘一	XRF
40	糸井宮前遺跡I(1985)	昭和村			9										花岡紘一	XRF
45	中畦遺跡・諏訪西遺跡(1986)	赤城村	30												花岡紘一	XRF
50	三後沢遺跡 十二原II遺跡(1986)	月夜野町	28									1			花岡紘一	XRF
51	下触牛伏遺跡(1986)	赤堀町			5										花岡紘一	XRF
52	大原II遺跡・村主遺跡(1986)	月夜野町			33										花岡紘一	XRF
56	上野国分僧寺 尼寺中間地域(1986)	前橋市													花岡紘一	XRF
58	下東西遺跡(1987)	前橋市			20		8	6	9						花岡紘一	XRF
67	三ッ寺I遺跡(1988)	群馬町			32	2									三辻利一	XRF
84	田篠上平遺跡(1988)	富岡市			9	1									花岡紘一ほか	XRF
88	上栗須遺跡・下大塚遺跡 中大塚遺跡(1989)	藤岡市			16										花岡紘一	XRF
95	房谷戸遺跡I(1989)	北橋村	22												井上巖	XRD・SEM
96	師遺跡・鎌倉遺跡(1989)	月夜野町・沼田町		3	8		1		3						花岡紘一	XRF
98	戸神諏訪遺跡(1990)	沼田市			47		9					1	4		花岡紘一	XRF
99	長根羽田倉遺跡(1990)	吉井町			30										花岡紘一	XRF
100	熊野堂遺跡(2)(1991)	高崎市			19		3	2							花岡紘一ほか	XRF
104	国分境遺跡(1990)	群馬町			9		3		8						小沢達樹	XRF
105	太田市八幡遺跡(1990)	太田市			4										小沢達樹	XRF
108	本郷の場古墳群(1990)	榛名町			3										小沢達樹	XRF
109	仁田遺跡・暮井遺跡(1990)	松井田町	1		2										小沢達樹	XRF
110	荒砥北三木堂遺跡I(1991)	前橋市			36										井上 巖	XRD・SEM
112	田篠中原遺跡(1990)	富岡市	12									2			井上 巖	XRD・SEM
114	下淵名塚遺跡(1991)	境町		9			1								小山修司ほか	THIN
115	矢田遺跡II(1991)	吉井町			14		3		2						井上 巖	XRD・SEM
122	白石大御堂遺跡(1991)	藤岡市	2	3			7		14						井上 巖	XRD・SEM
125	二之宮千足遺跡(1992)	前橋市	8				18					3			井上 巖	XRD・SEM
132-2	上野国分僧寺 尼寺中間地域(8)(1992)	前橋市・群馬町			47	6	130	3	32		22	49	5		花岡紘一ほか	XRF
132-2	上野国分僧寺 尼寺中間地域(8)(1992)	前橋市・群馬町			18		19		10		5	38			井上 巖	XRD・SEM・XR
132-3	上野国分僧寺 尼寺中間地域(8)(1992)	前橋市・群馬町			2										三辻利一	XRF
134	史跡十三宝塚遺跡(1992)	境町			9		3		9				1		小沢達樹	XRF
136	荒砥北三木堂遺跡II(1992)	前橋市	25												井上 巖	XRD・SEM
137	神保下條遺跡(1992)	吉井町					4								吉川和男	THIN・XRD
139	五目牛南組遺跡(1992)	赤堀町							23				1		花岡紘一ほか	XRF
140	書上本山遺跡 波志江六反田遺跡 波志江天神山遺跡(1992)	伊勢崎市					4								井上 巖	XRD・SEM
144	五目牛清水田遺跡(1993)	赤堀町	30									8			井上 巖	XRD・SEM
153	小林山台遺跡(1993)	高崎市				106									井上 巖	XRD・SEM・XR
162	二之宮谷地遺跡(1994)	高崎市	1	2			2		2				5		井上 巖	XRD・SEM
162	二之宮谷地遺跡(1994)	高崎市		2			2		2			2	2		小沢達樹	XRF
164	二之宮宮東遺跡(1994)	高崎市								57					井上巖XRF	
174	飛石の磐跡・東平井塚間遺跡 東平井官正前遺跡 東平井土井下遺跡 西平井久保代遺跡(1994)	藤岡市			10										井上 巖	XRD・SEM・XR
	株木B遺跡(1991)	藤岡市					20								井上 巖	XRD・SEM
	株木B遺跡(1991)	藤岡市			16										小沢達樹	XRF
	藤岡東部地区遺跡群(1991)	藤岡市				15	2					3			小沢達樹	XRF
	F ₁ ・藤岡平地区遺跡群(1994)	藤岡市	4	5			5				1		5		井上 巖	XRD・SEM
	スカリ沢A窯址(1995)	吉井町			22										小沢達樹	XRF・XRD
	芝宮古墳群(1992)	富岡市				20									井上 巖	XRD・SEM
	松井田工業団地遺跡(1990)	松井田町			12										井上 巖	XRD・SEM
	五料山岸遺跡(1991)	松井田町			7								2		井上 巖	XRD・SEM・XRF
	杣瀬I遺跡・杣瀬II遺跡 杣瀬III遺跡(1994)	下仁田町	21	1											バリノ・サーヴェィ(株)	HM

[分析方法]

XRF : 蛍光X線分析(胎土の化学組成) XRD X線回折分析(胎土中の鉱物同定)

SEM : 走査型電子顕微鏡観察(胎土の焼成などの観察) THIN : 薄片作製・偏光顕微鏡観察(胎土中の岩片・鉱物同定)

HM : 重鉱物分析(胎土中の重鉱物同定)



第385図 焼成の甘い須恵器および埴輪胎土中の粒子組成図(全分類群を基数とした百分率で表示)

粘土の区分(試料番号左)
 ☆: 海水成粘土(海水種珪藻化石などの出現)
 □: 水成粘土(不明種珪藻化石などの出現)
 ○: 淡水成粘土(淡水種珪藻化石の出現)
 △: その他水成粘土(骨針化石のみ出現)
 無記号: 粘土の起源を指標する微化石類が検出されない

第4節 上栗須寺前遺跡の岩石

飯島静男

上栗須寺前遺跡から出土した岩石は、後背地の地質を反映して、多くの種類にわたっている。その多くは遺跡付近の川原などから採取したと考えても差しつかえないのであるが、種類によっては露頭またはその付近にしか産しない岩石もあるので、そのようなものは遠くから運んできたと考えねばならない。以下、鐮川ならびに神流川流域の地質と岩石の分布を概観して、岩石採取地について推定する。

1 周辺山地の地質と岩石

下仁田一牛伏山付近を通る東西の線を境におおむね2分され、北側には新第三紀中新世以降の岩層が、南側にはそれ以前の古期岩類が分布する。古期岩類は秩父帯の中・古生層、みかぶ緑色岩類、三波川結晶片岩類、山中地溝帯中生層および下仁田構造帯関連岩類などからなる。

秩父帯は山中地溝帯を境に南帯と北帯とに分けられる。南帯は神流川源流部一帯がこれにあたる。南帯はチャート、砂岩、粘板岩(頁岩)、輝緑凝灰岩類、石灰岩などの層からなる。北帯は万場町および中里村から、南牧村にかけて広がり、岩石では南帯を構成する諸岩類に加えて、準片岩類がみられる。秩父帯の砂岩には、泥岩偽礫を含むいわゆる硬砂岩が多い。岩層としての輝緑凝灰岩類の中には、狭義の輝緑凝灰岩(玄武岩質変質凝灰岩)のほか、玄武岩質の水中溶岩類すなわち変玄武岩も含まれる。

みかぶ緑色岩類は三波川帯の変成岩類のうち、比較的塊状の緑色岩類がまとまって分布する部分のものをそう呼んでいる。すなわち下仁田南東部から西御荷鉾(みかほ)山をへて、神流湖にいたる帯域である。おもに変玄武岩、変輝緑岩、変はんれい岩からなり、かんらん岩、角閃石岩、蛇紋岩などをともなう。

三波川帯主部は雄川、鮎川の上流域から三波川の流域に広がる。おもに各種の結晶片岩類すなわち緑色片岩、黒色片岩、雲母石英片岩などからなり、少量の塊状緑色岩類(おもに変玄武岩、蛇紋岩)をともなう。結晶片岩類の中には、やや変成度の高い点紋片岩もあるが、分布域の詳細については明らかにされていない。

山中地溝帯は十石峠から志賀坂峠にかけてのびる巾2~4kmの帯域である。この地帯には砂岩、頁岩、礫岩などが分布し、少量の石灰岩および石灰質岩をともなう。砂岩は長石質ワッケや長石質アレナイトが多い。

下仁田周辺には新第三紀層のほか、古生代から新生代古第三紀にわたる各種の岩石から分布する。古期岩類は衝上断層を含む複雑な構造を呈して産しており、これらの岩石の分布する地域が下仁田構造帯と呼ばれている。地層では跡倉層、叶屋層、中ノ萱層、南蛇井層、神農原礫岩層、骨立山凝灰岩などが、火成岩では川井山石英閃緑岩、四ツ又山石英閃緑岩、平滑かこう岩、千平かこう閃緑岩、かこう斑岩(石英斑岩)などが分布している。岩石としては砂岩、頁岩、礫岩、チャート、石灰岩、珪質頁岩、ホルンフェルス、溶結凝灰岩、各種かこう岩類およびかこう斑岩(石英斑岩)などである。

新第三紀の岩層は富岡層群、板鼻層、内山層、本宿層およびその他の新第三紀末火山岩類などがある。

富岡層群は中新世に堆積した海成層で、富岡一吉井地域の丘陵地に広く分布するほか、西側県境山地の基底層を成している。固結度の低い砂岩・泥岩を主とし、凝灰岩を何枚もはさんでいる。凝灰岩は流紋岩質かはデイサイト質まであり、塊状で不均質のものと、層状で淘汰良好のものなどがある。最下部の牛伏層には比較的固いアルコース質の砂岩が含まれる。この砂岩は古来石材として用いられており、天引石、多胡石などと呼ばれ、今でも採掘されている。地質研究者の間では牛伏砂岩と呼んでいる。

板鼻層は富岡層群の北東側、すなわち岩野谷丘陵から藤岡南部にかけて分希する。さらに固結度の低い砂

第三章 考察

岩・礫岩などからなり、凝灰岩をはさむ。凝灰岩は流紋岩質～安山岩質で、塊状で軟かいものが多い。礫層にはチャート、砂岩、珪質頁岩、流紋岩（石英斑岩）などの円礫が含まれる。これらが再食され、現在の川床礫などに混じっていることがある。

内山層は西側県境山地の内山峠付近および余地峠付近に小規模に分布する。おもに黒色の泥岩と少量の砂岩などからなるが、河床礫となるような固いものは少ない。

本宿層は下仁田西方から南牧村にかけて分布する。中新世末あるいは鮮新世の火山岩類で、貫入岩体をともなう。岩石としては安山岩、安山岩凝灰岩、同凝灰角礫岩、デイサイト凝灰岩、溶結凝灰岩およびその他の火山碎屑岩類、中性～塩基性深成岩、半深成岩などがある。これらの中にはさまざまな程度に変質した岩石もあり、変質安山岩などはふつうにみられる。

本宿層以外にも火山岩類が妙義山塊はじめ地域西北部に分布している。大小の貫入岩体をともなう。構成する岩石は安山岩、流紋岩、デイサイト、ひん岩、および各種火山碎屑岩類である。

南牧川上流および神流川上流の秩父帯や山中地溝帯において、石英閃緑岩、ひん岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの小規模な火成岩体が貫入している。

2 遺跡近傍の川床礫

鑄川の鮎川合流点と烏川合流点との中間点付近の中州において、筆者の観察結果（1988年1月17日）は次の通りである。人頭大からこぶしよりやや大きめの礫200個のうち、安山岩類78個、チャート30個、砂岩22個、結晶片岩20個である。4～6個あったものに、溶結凝灰岩、珪質準片岩、珪質変質岩、流紋岩、デイサイト、変玄武岩がある。ほかに輝緑凝灰岩、頁岩、礫岩、珪質頁岩、ひん岩、閃緑岩、かこう岩、変輝緑岩、はんれい岩、かんらん岩が少数ある。安山岩類では変質安山岩と粗粒安山岩が多く、細粒安山岩、黒色安山岩、角閃石安山岩も少数みられる。結晶片岩類では雲母石英片岩と黒色片岩が多く、緑色片岩は少ない。砂岩はすべて硬質で、軟質のものはない。同じ地点で、こぶし大以下の礫について調べた結果も、種類によって多少増減があるが、大径のものと大差ない。

神流川最下流部での概査結果（1987年）は、こぶし大～その倍くらいの大きさの礫90個のうち、砂岩35、チャート31、結晶片岩15、ほかに準片岩、塊状緑色岩類、輝緑凝灰岩などである。結晶片岩では雲母石英片岩が多く、緑色片岩、黒色片岩は少ない。計数とは別に、300～400mの範囲を探したところ、少量ながら蛇紋岩、石灰岩がみられた。

鑄川、神流川ともに流域の地質と矛盾しない礫種構成である。

3 遺跡から出土した岩石

遺跡から出土したおもな岩石は結晶片岩類、安山岩類、チャート、砂岩、変玄武岩、硬質泥岩、ひん岩、デイサイト、珪質準片岩などである。量的には結晶片岩および安山岩類がとくに多く、次いで砂岩、チャート、変玄武岩が比較的多い（P. 16の第7図参照）。砂岩は硬質のものと軟質のものがあるが、分けていない。安山岩類のうち変質安山岩が少なく、粗粒安山岩が圧倒的に多いのは弱変質の安山岩は粗粒安山岩としたためである。

その他の岩石では泥岩、凝灰質砂岩、凝灰岩類（白色凝灰岩、流紋岩凝灰岩、デイサイト凝灰岩、安山岩凝灰岩）、牛伏砂岩、溶結凝灰岩、輝緑凝灰岩、頁岩類（頁岩、砂質頁岩）、礫岩、珪質頁岩類（黒色頁岩、珪質頁岩、チャート質頁岩）、緑色岩類（輝緑岩、変輝緑岩、変はんれい岩）、超塩基性岩類（かんらん岩、

蛇紋岩、変質蛇紋岩)、石灰岩、ホルンフェルス、かこう岩類(かこう岩、石英閃緑岩、閃緑岩)、流紋岩、砥沢石、二ツ岳軽石、赤色珪質岩、黄褐色珪質岩、玉ずい、黒曜石、鉱物類(石英、滑石)などが出土している。珪質頁岩の多くは塊状、無光沢であり、東北地方産のいわゆる硬質頁岩のような光沢を有するものはほとんどない。珪質頁岩とすべき岩石のうち、ラミナの発達したものは、上述のものとの混同を避けるため、チャート質頁岩とした。

4 考 状

遺跡から出土した岩石のうち、量的に多い岩石類は硬質泥岩を除いて、すべて鑄川の川床礫にみる種類である。量的に少ない岩石類も約3分の1は川床礫に同種のものがある。大多数の岩石は至近の鑄川および神流川等と同種であり、それらの場所(川原)から採取されたとみて、差支えない。

共通してみられる岩石種でも、全体の中での量比にはやや違いがある。たとえば結晶片岩類は鑄川ではそれほど多くないが、遺跡では目立って増えている。遺跡内の岩石は大小雑多なものを数えており、いわば測定方法が多少異なるので、単純な比較はできないが、岩石の持ち込みに際して、少なくとも一部は種類を選択していると考えられる。

出土した岩石類のうち、近傍の川床礫にない種類が他所から運んできたものとみなせる。

(1) 鑄川および神流川流域内に産する岩石

軟質の堆積岩類および牛伏砂岩は富岡層群または板鼻層のものである。露頭もしくはその付近から採取したと考えられる。牛伏砂岩は同層分布域内の山中や沢等に、大小の岩塊ないし多少丹磨された礫などが多数みられる。

チャート質頁岩は硯や砥に用いられる程度の硬さで、剝離性もあるので、下流域の礫にはない。秩父帯中の露頭またはその近くで採取したものであろう。

ぎょくずいは鉱床や変質岩中等に生ずる岩石で、産出は多くはないが、必ずしも珍しいものではない。鑄川上流地域等から採取された可能性がある。

赤色珪質岩および黄褐色珪質岩は酸化鉄質の不純物に富む、緻密な珪質岩である。いわゆる碧玉にほぼ相当する。変質岩中等にまれに産する岩石で、県内では吾妻川上流その他にある。鑄川流域では最近赤色珪質岩が露頭付近より採取された(桜井美枝氏談、1996)。当遺跡出土のものも、流域内で採取した可能性が大きい。

滑石は三波川帯中の蛇紋岩に伴って産する。鮎川上流では採掘されており、まとまった量が採取可能である。

砥沢石は変質流紋岩ないし変質デイサイトで、淡黄灰色、軟質、径1mm内外の骸晶状の孔を有するなどの特徴がある。同質の岩石が県内遺跡から多数出土しているので、砥沢石と呼び、他の流紋岩類と区別している(飯島1993)。この岩石は鑄川上流の南牧村砥沢に貫入する岩体等に由来し、付近の南牧川には礫としてもあるが、下流域にはない。出土品は砥沢付近から持ってきたと考えられる。

硬質泥岩は一般的な名称を用いるとすれば、珪質頁岩である。この岩石の特徴はまず風化面にある。淡青灰色～淡褐灰色、泥岩のような質感がある。新鮮な破断面は淡灰～灰～青灰色等を呈し、やや半透明、塊状緻密である。実体鏡下では、透明で微細な結晶質の粒子と、同質の填間物からなり、流紋岩様である。人によっては、これを流紋岩としているが、多数の試料の中には、まれに貝やウニ等の化石を含むものがあり、堆積岩であることは疑いない。原岩はおそらく凝灰質の砂岩、泥岩ないし凝灰岩などで、珪化作用によって

第三章 考 察

硬質の岩石に変化したものと思われる。ふつうにみる珪質頁岩は著しく緻密堅硬で、大型化石の印象を残すものはないので、それに比べると特異である。同種の岩石が鍋川流域の遺跡から出土する打製石器に多用されている。筆者はこの地域独特の岩石と認め、硬質泥岩と称している。

硬質泥岩の原産地はおそらく富岡層群分布域の西部にあるものと思われるが、露頭等における確認はされていない。磯貝・大工原（1993）は下仁田付近の露頭および川床礫に類似の岩石があることを報告している。桜井ほか（1993）や桜井（1995）は南牧川および鍋川の下流までの川床礫の中に、青灰色珪質頁岩をみつけている。その珪質頁岩がここでいう硬質泥岩と一致する岩石であるかどうかは、今後検討を進めねばならないが、原産地ならびに採取可能地域を考えるうえで、示唆に富むものである。当遺跡至近の鍋川にみる珪質頁岩は、硬質泥岩とするにはやや硬すぎるきらいがあると思われるが、確証はない。

二ツ岳軽石は榛名火山二ツ岳の活動によって生成した岩石であるが、火砕流の一部は烏川の支流にも流入している。近くの烏川から採取可能である。

(2) 流域外に原産地がある岩石

黒曜石は石器に用いられる品質のものは県内には産出しない。和田峠産が有名であるが、ほかにもいくつかある。詳しい産地同定はその方面の専門家の研究をまちたい。

黒色安山岩に関しては、当遺跡では地理的にみて、武尊山産と八風山産のものが検討対象になろう。武尊山産は利根川の礫にあるが、前橋～伊勢崎周辺に良質のものは少ないので、上流域が候補にあがる。八風山産はおもに長野県側に多い（桜井ほか1993）。荒船山にも黒色安山岩を産するが、鍋川下流までであるのは、斑晶の多い低質のものであり、石器製作にむく良質なものはほとんどない。より上流に採取地を求めねばなるまい。出土遺物がいつれの産地であるかは今後の課題である。

黒色頁岩は鍋川流域では実際は確実な自然礫等は見つかっていない。飯島（1993）は材質の点で前橋付近の利根川の礫ではないとし、県北にも確認された産地は少ないと述べた。その後三国峠北の新潟県塩沢町内の遺跡に、黒色頁岩製石器が多量に出土していることがわかった。黒色頁岩の主産地は赤谷層分布地ではなく、新潟側（魚野川流域）にあると予想している。その考えは地質的には矛盾しない。当遺跡出土の黒色頁岩は数が少なく、典型的なものとの比較は難しいが、主産地方面からの持ち込みも考えられる。

参考文献

- 飯島静男（1993） 今井白山遺跡の岩石について、『今井白山遺跡』、(財)群埋文調査報告No145。
磯貝基一・大工原豊（1993） 石器石材の分析、『大下原遺跡・吉田原遺跡』、安中市教委。
桜井美枝・井上昌美・関口博幸（1993） 群馬県における石器石材の研究(1)、(財)群埋文研究紀要11、p.1-14
桜井美枝（1995） 河川における石器石材のあり方、第3回岩宿フォーラムシンポジウム予稿集、p.13-16



第386図 鏡川および神流川流域地質図

第5節 上栗須寺前遺跡の考古学

本遺跡の位置する小野地区は行政界では藤岡市で一番北に位置している。東方には多野郡新町、神流地区が、西には美土里地区、南方には藤岡地区、北には東から高崎市岩鼻町、木部町、山名町が鑄川、烏川を挟んで接する。地形は平坦地で南の市役所付近が標高81m、北の国鉄北藤岡駅付近は標高68mと南高、北低である。東から西へ中栗須、上栗須、美土里地区篠塚の北側は沖積地、南側は洪積地である。沖積地帯は鑄川、烏川の河床である。一帯は河川堆積物が多く桑畑として利用されている。洪積地は「藤岡台地」と呼ばれ、その北端は崖線を形成し、堆積中の粘土は「藤岡粘土」として瓦の原料に利用されている。

1984年から主要地方前橋・長瀨線がそして1988年から上信越道に関連する遺跡の発掘調査が開始された。調査の対象地域はこの藤岡台地の北縁辺から扇央部にかけて小野地区と美土里地区の範囲、幅1750m、長さ3000mで525%の範囲でその内の約3%、17.2%を発掘している。(第387図)

さて、この膨大な資料は報告されつつあるがとりあえず、発掘調査された遺跡を含むこの地域の主要な24の遺跡を掲げて古代の地域の概要をまとめて見たい。(第385図)

- | | | |
|------------------|-------------------|----------------|
| 1. 上栗須寺前遺跡1区 | 2. 上栗須寺前遺跡2区 | 3. 上栗須寺前遺跡3区 |
| 4. 上栗須寺前遺跡4区 | 5. 上栗須寺前遺跡5区 | 6. 上栗須寺前遺跡6区 |
| 7. 上栗須寺前遺跡7区 | 8. 本動堂稲荷屋敷遺跡 | 9. 中大塚滝前C遺跡 |
| 10. 上栗須遺跡(白山・寺東) | 11. 下大塚遺跡(篠塚・下大塚) | 12. 中大塚遺跡 |
| 13. 上栗須A遺跡(中栗須) | 14. 小野地区水田址遺跡 | 15. 谷地遺跡(中栗須) |
| 16. 神明北遺跡(中栗須) | 17. 中I遺跡(中) | 18. 藤岡境遺跡(中栗須) |
| 19. 小野地区No11遺跡 | 20. 西原遺跡(篠塚) | 21. 大明神遺跡(篠塚) |
| 22. 北原遺跡(下大塚) | 23. 滝下遺跡(中大塚) | 24. 滝前遺跡(中大塚) |

この地域に居住をはじめたのは縄文時代からである。旧鑄川ぞいには上栗須寺前遺跡1区、谷地遺跡、神時北遺跡、小野地区No11遺跡などが中期～晩期にかけて集落を営む。鮎川ぞいにも滝下遺跡や滝前遺跡、そして県指定史跡である敷石住居を含む中大塚遺跡など中期～後期にかけて集落を営む。

続く、弥生時代には縄文晩期の谷地遺跡の対岸に沖II遺跡が営まれる。中期前半の80基以上の土坑から成る再葬墓である。後期になるとこの地域では集落の調査例は無い。けれども上栗須寺前遺跡で表面採集された、磨製石鏃などから当該期の遺構の存在を予測させる。

古墳時代では本地域は古墳群として利用されている。上栗須遺跡(白山・寺東)では前期の方形周溝墓が築造されている。中期から後期にかけては上栗須寺前遺跡2区では円墳11基や上栗須遺跡(白山・寺東)では円墳9基が築造されている。これらの墳墓の築造考の生活地域の検出が今後の課題となる。

本地域の奈良時代から平安時代の集落の検出量は膨大である。竪穴住居址の合計軒数は792軒で上栗須の281軒が最高である。掘立柱建物は中栗須の138棟を最高に、合計333棟も検出されている。

また古代から中世、近世までの時間的幅があるが、土坑が11449基、溝が344条検出されている。

この地域は奈良時代になって大規模な発展を遂げていることが解る。その理由に「藤岡粘土」を利用した瓦須恵器の生産への関与などが考えられる。竪穴住居址から瓦の出土がある事などの生活範囲に入手が容易であることを裏付けている。

上信越自動車道周辺の古代遺跡

大字	住居	掘立柱建物	土坑	溝	調査面積
上栗須	281軒	48棟	6,208基	118条	56,000m ²
中栗須	157	138	140	20	18,000
篠塚	110	60	3,486	43	15,000
本動堂	114	15	829	112	26,000
下大塚	28	22	433	23	13,000
中大塚	39	50	353	28	44,000
	729	333	11,449	344	172,000

古代、文献には『和名抄』の上野国緑野郡に「山高郷」がみえる。土師郷などと並記されていることから美九里村のいずれかの地域が比定されよう。

中世、十一、十二世紀に『神鳳抄』『玉葉』に登場する高山御厨は前記の「山高郷」の比定地の最有力地と考えられている。十三、十四世紀に武蔵七党系図の児玉党の所領中に「上野国高山御庄」とあのも広大に拡がっている「栗須」を含むこの地域を指していると考えられている。

今回は本遺跡からの発掘調査で出土した中世の遺構の成果を基に坂井 隆氏に中世の寺前遺跡とその周辺世界を新しい視点で描いてもらった。(本報告書 第II章 第3節)

近世、上栗須村は慶長年間から旗本、高木筑後守の知行であったが元和五年(1619年)、酒井雅楽頭、寛延二年(1749年)、松平大和守の所領となり明和七年(1770年)から代官支配所、文化八年(1811年)から旗本赤松左衛門尉の知行となった。

さて本遺跡の中央に浄雲寺がある。地番は藤岡市大字上栗須字前261番地、宗派は曹洞宗、山号は高樹山、本尊は釈迦如来である。慶安三年(1650年)の創立である。現住職は堀江雅光である。

この寺院の庫裏の前に「高樹山浄雲寺再建の辞」という石碑が建てられている。全文を掲載しておく。

高樹山浄雲寺再建の辞

当山は寛永年間に陽室的重大和尚が此の地に堂宇を建立し曹洞の禅風を草創されてより三百五拾余年を経たり。その間二十世の時明治二十二年五月十二日祝融の災にかり御本尊と過去帳及び山門を残して総て焼失す。その後古屋を求めて仮本堂となし再興を願いつつ九十年昭和五十四年春二十六世の時因縁熟して菩提寺を礼仏修行の道場先亡後滅の精霊安住の殿堂として再建することを寺檀一致して議決す此の大業は仏祖の御加護を得て昭和五十五年二月四日起工式工事安穩を祈り同年四月二十六日上棟式諸災消除を願う。同年十月二十六日優美にして荘嚴なる本堂四十二坪庫裡三十五坪の落慶大法要が盛大に厳修さる。正に是れ今時の奇跡中興の功業なり。年来の素志満足を得て人天共に歡喜す。さらに文珠普賢の脇侍菩薩等を新彫し往時を再現す。又境内の第三番如意珠観音堂を改築し洗心鉢東司を整備す斯の如き大業の成就是檀信徒心を一にして此の勝縁に随喜せねばやまれぬという仏心の賜ものと深く感謝し浄財の寄進運営に参画努力せる施主の尊名を碑裏に刻してその功德を讃え永く後世に伝え一偈を添えて家門繁栄子孫長

第三章 考 察

久を祈るものなり。

宿願竣工禅院新 檀従協助勝因

上合月洗心淨水 仏徳増光照淨真

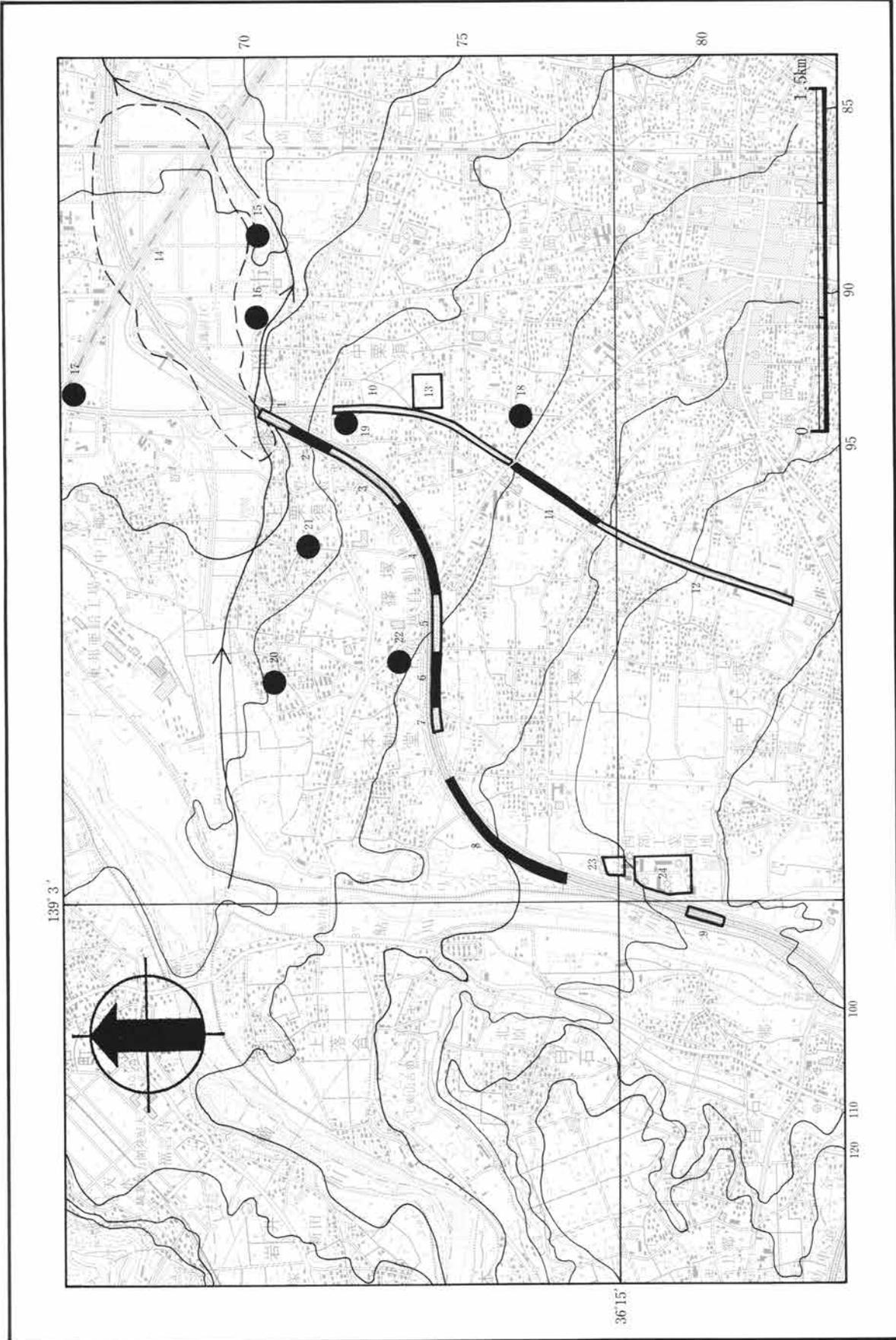
昭和五十七年九月吉日 淨雲東堂大川大穎謹記之

慶安三年（1650年）の創立とある淨雲寺の山号は慶長年間から上栗須村を知行していた旗本、高木筑後守の「かたぎ」をとったといわれる。高木筑後守が去ってから31年後の事である。

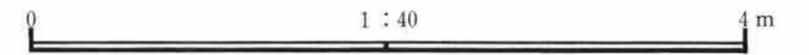
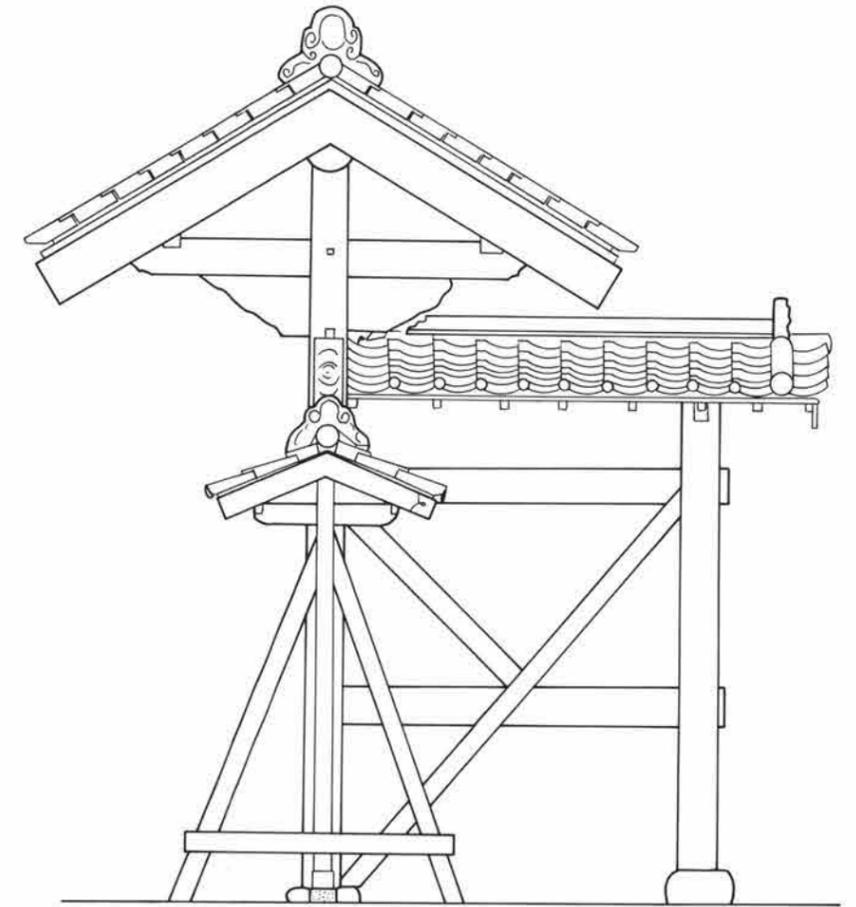
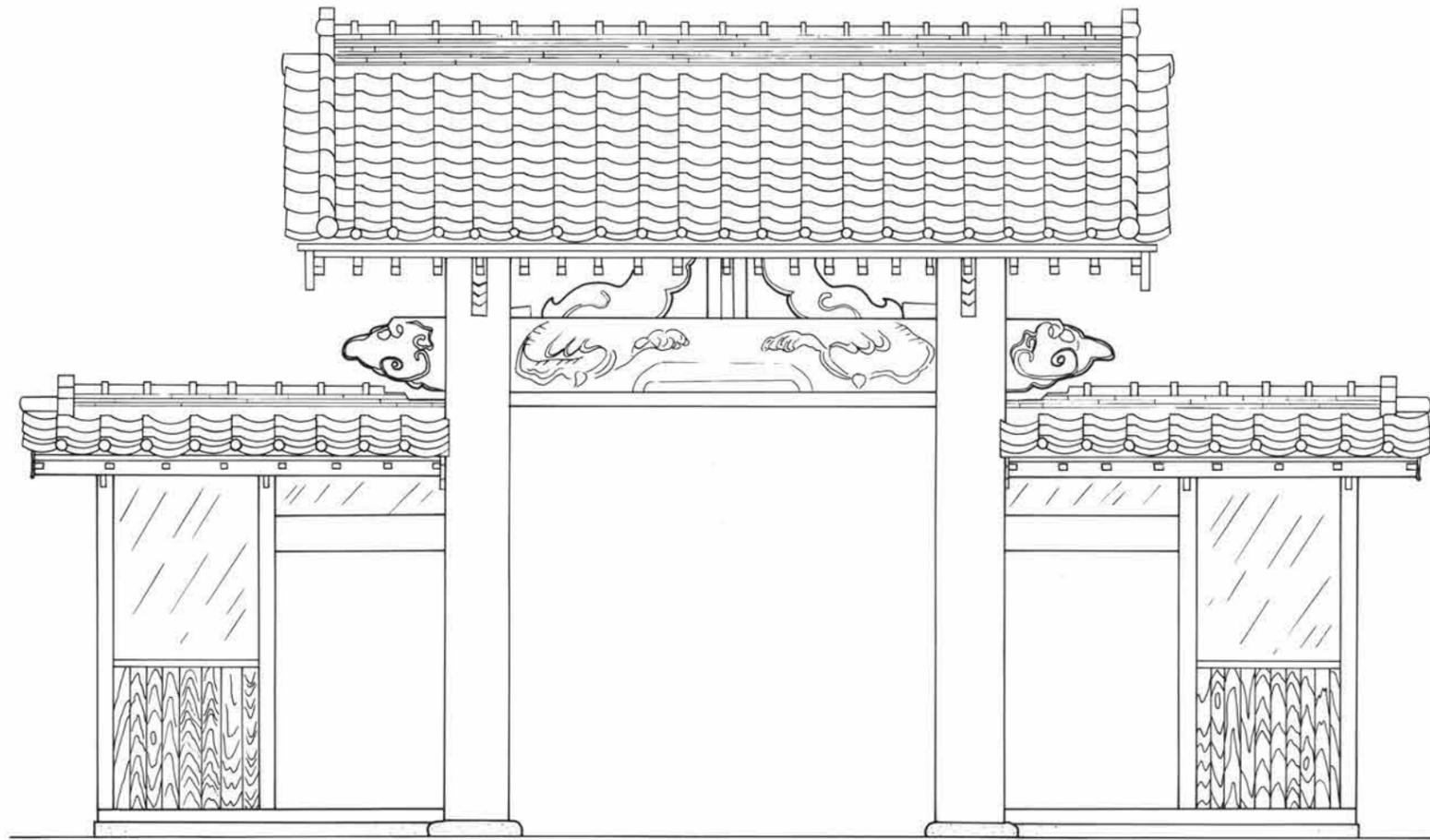
明治二十二年（1889年）の火災でこの寺は「本尊」と「過去帳」及び「山門」を残して総て焼失した。焼け残った「本尊」は被災しているため補修の彩色の跡が強調され当時を考えることはできなかった。当然ながら、「過去帳」の閲覧は許されなかった。

「山門」は創立から約240年経過している事から創建時の建造物とは考えられなかった。けれども今回の発掘調査前に解体されてしまうことから実測図を残す事にした。これは以下の理由による。

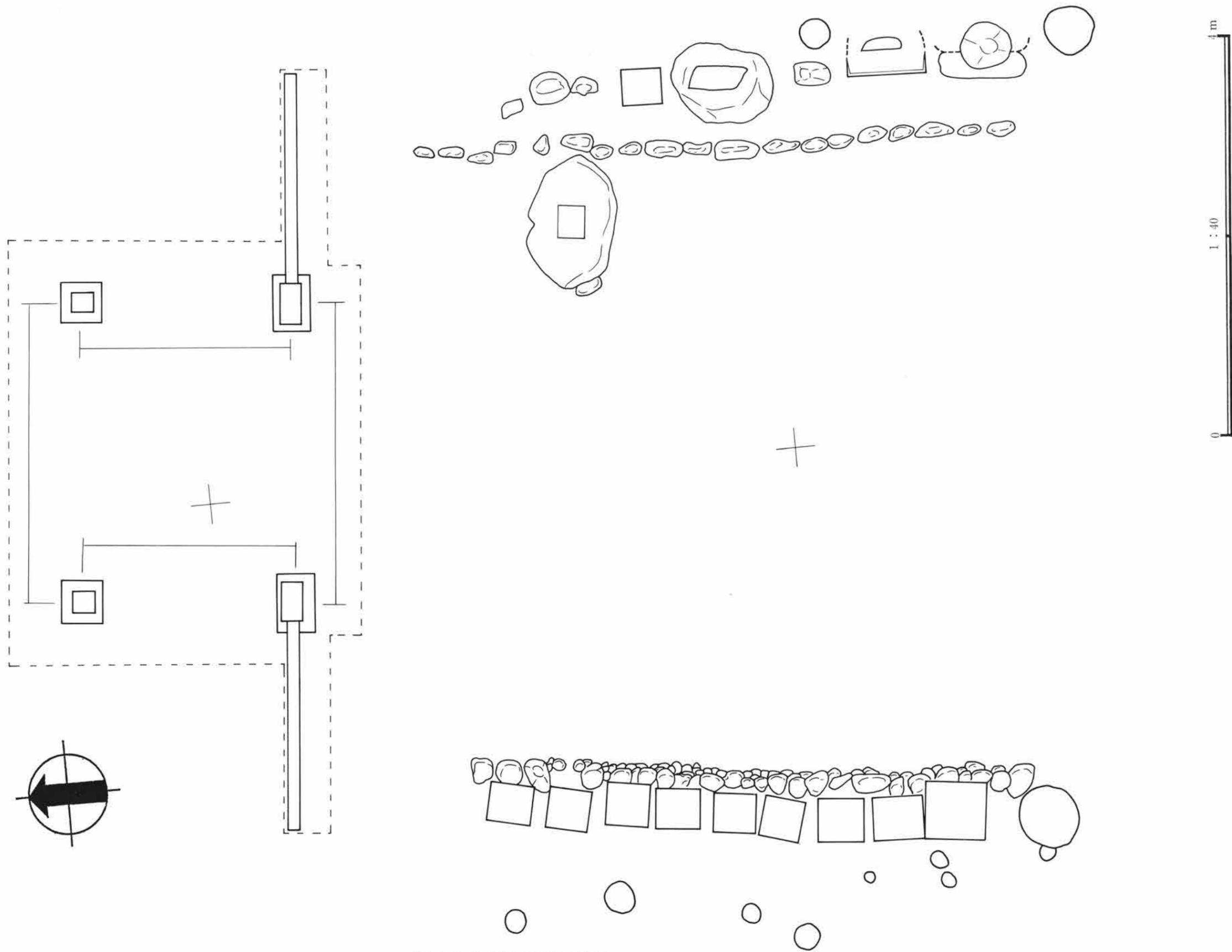
- 1、昭和五十二年から文化庁が「近世社寺建築緊急調査」を都道府県に依頼し、平成三年等全国一巡し報告書を基に重要文化財の指定が進み始めた事。
- 2、古建築の学会でも中世までは学問的興味があるものの近世社寺建築までは研究者が少なく、文化財としての市民権を得るまで至っておらず、安易にその時代の建築部材（例えばコンクリート）で改築が進んでしまった例などがある。
- 3、建築は当然、その地域の歴史、文化を反映しており、地域的には江戸時代の社寺の様式が中世の地方色を色濃く残している例もみられる場合や、ある地域出身の建築集団の建築技法の分布追跡できることなど地域研究の基礎資料を提供し、村おこしや町おこしの運動に連動することも考えられる。
- 4、今回の「山門」記録調査にも残念ながら古建築の研究者や文化行政のなかに近世建築の専門家があらず一般の測量事務所に実測を依頼しただけであるが、本図が将来役立つことを期待している。



第387図 上栗須寺前遺跡と発掘調査された周辺の遺跡



第388図 浄雲寺山門正面図・側面図（東側）実測図



第389図 浄雲寺山門平面図実測図

発掘調査報告書抄録

フリガナ	カミクリステラマエイセキグン
書名	上栗須寺前遺跡群III
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第36集
シリーズ名	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第205集
編著者名	石塚久則
編集機関	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦 1996年3月29日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カミクリス 上栗須 テラマエ 寺前	フジノカシオオアザ 藤岡市大字 カミクリスアザ 上栗須字 テラマエ 寺前	102091	10005- 00284	361545	1390420	19881114- 19911025	24,993	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上栗須寺前	集落	縄文時代		石器	5921土坑より鎌倉～南北朝時代に埋納された密教法具が一括出土し、重要文化財級の質の高さと保存の良さが注目された。
	墳墓	古墳時代	円形周溝		
	集落	奈良・平安時代	住居170軒 掘立柱建物 15棟 棚列12条	土師器 須恵器	
	集落	中世	方形居館	陶磁器	
	集落	近世・近世	寺院	陶磁器	

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第205集

上栗須寺前遺跡群Ⅲ

第1分冊《本文編》
関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第36集

平成8年3月18日 印刷

平成8年3月25日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社